東方の天使　西方の旅人

あしなが犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方の天使　西方の旅人

【Ｎコード】
Ｎ３６０３Ｃ

【作者名】
あしなが犬

【あらすじ】
遥か昔、神の怒りにより死の世界となった東方の楽園＜サフィラ・アイリス＞。しかし、人間とはどれほどに厳しい世界であろうとも生きる力を持っていた。そんな世界で、死なない程度に生きてきた流離人・ヒロはひょんなことから神・天使・人間が織りなす陰謀と運命に巻き込まれてゆくこととなる。

第1話　いと高き豚の声

昔々、どれくらい昔のことかも分からなくなるほど遠い昔、恐ろしい魔物が支配する地獄のような世界に二人の神が降り立った。

二人の神の名前は生命を司る白き神イヌア・ニルヴァーナと、死を司る黒き神ウ・ダイ。

二神はこの地獄のような場所を自分たちの世界にすることを決めると、黒き神はその死の力を使って全ての魔物たちを死の世界へと追いやり、白き神は魔物たちの代わりに神様を13人と3種の種族を誕生させ、広大なる世界の大地を東西南北の4つに分けてそれぞれの種族を住まわせた。

東方の楽園（サフィラ・アイリス）には二神を頂点とした神族
西方の魔境（シエストリア）には獣人
南方の樹海（アパス）には妖精族
北方の氷壁（ラーラ・ウリオ）には巨人族

4つの大地と4つの種族。

二人の神が創造した世界には調和が成り立ち永い永い平和な時間が、ただただ穏やかに流れていった。

しかし、5つ目の種族・人間が世界に生まれ落ちたことにより、世界は大きくその均衡を崩していくことになる。

種族の領域ともいえる大地を持たぬ人間たちは、それを持つ全ての種族を妬み、他の種族の大地を奪おうという欲望を持ちその手に武器を取ったのだ。

――――そうして争いの火種が安穏たる平和に終わりを告げ、混沌と悲しみに支配される世界が産声を上げたのである

【いと高き豚の声】

「ブヒィィィンッ！！」

遮るものが何もない果てしない荒地に、その日怪物豚（かいぶつぶた）の雄叫びが響いていた。

学名・怪物豚（かいぶつぶた）。

姿かたちは豚そのものなのだが、その体長は１０メートルはあろうかという巨体、口は人を丸呑みしてしまいそうに大きく、牙は人を一突きで串刺しにしてしまいそうな鋭さを持つ。

しかして、その生態は肉食だが草なども食し、大人しい気性で人を襲うことはほとんどないという、不浄の大地（ディス・エンガッド）に少数だけ生息するといわれる希少種。

ちなみに人間が好物であるという俗説もあるのだが、それは未だ証明には至っていない単なる噂にすぎない。

そして、普段は岩のように動かず大人しいこの怪物豚が雄叫びを上げて猛スピードで爆走している理由はただ一つ。

すなわち好物であるご馳走を目の前にしているから。

――ちなみに、そのご馳走とは・・・『私』

有難くないことに私は非常に物騒なこの俗説を身をもって証明してしまったわけである。

「来るなぁぁぁっ！！！！」

しかして、私は怪物豚に追われながら、死に物狂いで走りながら叫んでいるのだ。

何せ怪物豚は、正に人参を目の前に吊るされた馬のごとき様相で唾液を垂れ流し鼻息も荒く、刻一刻と私との距離を縮めているのだ。

現在、私と豚の鼻先の距離、おおよそ５メートル。

正に万事休す。
私としては無論、怪物豚の胃袋なんかには納まりたくないが、如何せん豚如きにスピードで負けているのだ。しかも、体力的にも私は限界に近づいている。
更に、逃げ切れないのであればどこかに隠れる場所はないかと周辺に視線をはしらせるが、見渡しの良い荒地には隠れられそうな場所もない。
高いところに逃れることも考えたが、生憎と怪物豚が上ることができなさそうな高所は見当たらない。
「だあぁーっ！こんの馬鹿豚がぁ！」
おかげで私はこの八方塞がりとしか言いようのない状況に、悪態を腹の底から吐き出すことくらいしかできない。
果たしてこのまま体力が尽き怪物豚に私は食べられてしまうのか。
正直自分はまだ若いのにこんな形で人生を終えるとは信じたくない。
しかし、私が信じなくても現在の状況に変化があるわけでもなく、怪物豚はもう一息で好物にありつけるとばかりに更に走るスピードを上げたのだ。
「！！！！」
そうしてその牙が私の背中に僅かに当たる感触がして、私には混乱する思考の中でその胃袋に収まる自分がありありと想像できた。
ギュッと、最悪の未来を思い瞼をつむった。

ガウンッ

しかして、私の耳に届いたのは好物を口にして喜ぶ豚の声ではなくて、銃声が一つ。
「ぐふっ」
銃声の後、更に何かが背後から覆いかぶさってきて、私はその何かに押しつぶされる。

何が起こったか分からなくて、私はうつ伏せの状態のまま首だけ背後に向けた。
「っ！？」
――――そこにあったのは、驚くことなかれ怪物豚の恐ろしき超迫力の顔面ドアップ！
思わず身動きできないのに逃げ出そうとしてしまったくらいだ。
だが、よくよくその顔を落ち着いて見てみると、その豚が死んでいるのは一目瞭然で頭を一撃で撃ち抜かれていた。
どうも私は怪物豚に倒れこまれ下敷きになったらしい。幸い顔だけは下敷きにならなかったので窒息せずにすんだ。
怪物豚は重かったが、とりあえず助かったとばかりに安堵の息をつく。
「ヒロちゃぁん、大丈夫？」
そうして、いつまでもその下敷きになっているわけにもいかず、のそのそと死体から這い出ていると男の癖に妙に甘ったるい声が聞えた。（ちなみに、申し遅れたがヒロというは私の名前。）
男・・・というよりはまだ少年である彼は私のすぐそばまで来ると、満面の笑みを浮かべる。
「良かった！怪我はなさそうだね！」
「良かったじゃない！」
しかして、私の無事を喜ぶその少年・エヴァの頭を私は思いっきり叩(はた)いた。
「痛いっ！助けてあげたのに何するのさぁ？」
さほど強い力ではなかったはずだが、大げさに顔を歪めるエヴァの手にはライフルがあった。
それを見れば怪物豚を一撃で仕留め、私を助けたのがこの少年であることはすぐに分かる。本来ならば、感謝こそすれ暴力をはたらくことなど罰当たりであることも十二分に分かっているさ。

――しかし！しかしである

「お前、私が誰のせいでこの豚に追いかけられたと思っているんだ？」

死んだ怪物豚を指差して憮然として私が言えば、エヴァはへらりと笑った。

「あれ？」

「そもそも、エヴァが怪物豚が珍しいから近くで見たいとかいって、一人で近づいて勝手に追いかけられてたんだろうが！どうしてお前じゃなくて、私のほうが追い駆けられないといかんのだっ。」

そう、私は止めたのだ。

確かに怪物豚に出会うことは稀だ。

しかし、奴は野生の、しかも人間が好物であるという物騒な噂を持つ動物なのである。見つかったら食べられるかもしれないという想像はできないものだろうか。

それなのにこのエヴァという子供（ガキ）はへらへら笑って、大丈夫だと怪物豚に一人で近寄っていったのだ。

結果は現在の状況を見てもらえば説明するまでもないと思う。

離れて様子を窺っていた私は程なくしてエヴァの悲鳴を聞いた。

案の定、怪物豚に見つかり、先の私と同様に馬の鼻先に吊るされた人参と同じ状況になったエヴァが逃げていた。

なのにどうして私が追いかけられる羽目になったかといえば、遠目にそれを見ていた私に向ってエヴァが怪物豚を連れて走ってきたのだ。

「ヒーローちゃぁぁん！！！」

「こっちに来るなっ！」

・・・結局、私も一緒に逃げる羽目になっていた。

しかも、気がつくと怪物豚に追いかけられていたのは私だけで、エヴァはいなくなっていたのだ。

――――何かがおかしい

私が思い出してふつふつと静かに怒っていたところで、エヴァはまたあっけらかんと言いやがるのだ。

「まあ、日頃の行いじゃない？ヒロちゃん、悪いことばかっりしてるから。」

ちなみに僕は良い事しかしないからと、エヴァの言葉を最後まで聞くより先に私は再びエヴァの頭を叩(はた)いていた。今度は本気である。

「何が日頃の行いだ！！それなら寧(むし)ろ逆だろ。逆っ。」

「～～～っ」

さっきとは違いエヴァは言葉なく頭を抱えた。（余程痛いらしい。いい気味である）

大体いつもそうなのだ。

エヴァは厄介な問題ばかり起こす　くせに、結局いつもその尻拭(しりぬぐ)いをさせられ苦労ばかり背負わされるのは私。正直、ぶん殴るだけでは気分が晴れない。

「ヒロちゃん！今本気で叩いたでしょう？！」

「黙れ。誰のせいで死にそうになったと思ってるんだ。これぐらいですんで良かったと思え。大体、ちゃん付けで名前を呼ぶなといつも言ってるだろうが！」

「だって、ちゃん付けの方が可愛いじゃん！」

「男の私に可愛さはいらん！大体、お前はいっつも――――」

そして、その後怪物豚の屍を挟んで、私とエヴァは殴り合いのケンカをはじめた。

ケンカは決着が付くことなく熾烈(しれつ)を極め、気がつくと夕日をバックに私たちは共に精も根も尽き果てるところまでやり合っていた。

そして、私もエヴァも限界を感じ次の一撃で決着が付くことを予感していた。

「エヴァ・・・。」

「・・・ヒロちゃん。」
互いに一歩も譲らず緊迫した空気が流れ、夕日が荒地に二人の長い影をつくり、二人の間を風が流れた。
相手の間合いをはかり、息を呑み呼吸を殺す。
『今だっ！』
しかして、互いに勝負を仕掛けようとしたその瞬間であった。

――――ぐるきゅ～

妙に間延びした音が私とエヴァの体の動きを止めた。
言わずもがな、腹の虫というやつである。
『・・・・。』
相手に殴りかかろうとしたまま、二人とも固まってしまった。
「・・・・お腹すいたね。」
「飯にするか・・・。」
エヴァが先ほどまでの険悪な雰囲気を打ち切って力なく笑い、私もそれに頷いた。
どうして今まで気が付かなかったのか、両者ともに腹が死ぬほど減っていたのだ。
しかして、私たちの喧嘩はあっさりと幕を閉じた。（意地で腹は膨らまないのだ）

「そういえば、結局僕たち何で喧嘩してたんだっけ？」
「・・・・忘れた。」

第1話　いと高き豚の声（後書き）

「東方の天使　西方の旅人」第一話を最後まで見てくださってありがとうございました！これから長く続くヒロの物語を楽しんでいただければ幸いです。

また、現在、鋭利加筆修正をしている最中で若干話の内容が繋がらない部分もあるかもしれません。（詳しくは第８２話の後書きにあります◆お知らせ◆をお読みください）なるべく、その辺りは少なくするよう努めたいと思っていますが加筆修正が終わっていない時点で読み始めて頂いた読者様にはご不便をおかけするかもしれません。できるだけ、早く終わらせたいとは思っていますのでよろしくお願いします。

ちなみに加筆修正しているものはサブタイトルに英数字を使っており、そうでないものは漢数字を使用しております。

加筆・修正　０８．４．１２

第2話　永遠なる牢獄　1

逃げて、逃げて、その先に貴方はいたの
許されることのない罪人同士が出会ったのは
永遠に出ることのかなわない牢獄
貴方は、今度こそ私を助けてくれる？

【永遠なる牢獄】

自己紹介が遅れたが、私とヒロと相棒のエヴァはこの世界・東方（サフィラ・アイリス）の楽園を旅する流離人（さすらいびと）というやつだ。
どうして、そんな風に呼ばれるようになったかは知らないが、特に目的地を決めているわけでもなくただ当てもなくフラフラしている私には流離（さすら）うという言葉が本当にぴったりと当てはまる。
そして、私たちがそんな風にブラブラしている世界の名が、東方（サフィラ・アイリス）の楽園。その大部分が生命の息吹くことのない荒地・不浄（ディス・エンガッド）の大地に覆われた死の世界という訳だ。
故に人々が暮している街や集落（しゅうらく）などはあまり多いとはいえず、私たちが世界を流離（さすら）うにおいても宿屋に泊まることは殆（ほとん）どなく、野宿が大半を占める。
今夜も無論、野宿である。
しかし、今夜は少しだけ特別だ。
死の大地たる不浄（ディス・エンガッド）の大地では、植物は殆（ほとん）ど育たないし動物もあまり生息していない。幸い雨は降るので飲み水には困らないのだが、故にこの大地で食料を得ることは非常に難しいと言える。

なので、普段は集落などで得ることができる不味い保存食を、大事に大事に食べるしかないのだが、今夜はご馳走なのだ。

――――そして、そのご馳走が何かと言えば・・・

「ほんっと！久しぶりの新鮮な肉は美味しいねぇ！！」

「ああ！」

「仕留めた僕に感謝してよね？！」

そう、それは私たちは喧嘩していたときは、その存在すら忘れていた怪物豚。

特に肉に何か手を加えることなく、塩胡椒をして火で焼いただけであるが、保存食に比べれば、ひたすら美味しい。

死ぬ思いをして逃げていたことが報われた思いがした。

現金なものでこうして腹が膨れてしまうと、殴り合いの喧嘩をしていた私とエヴァであるが、食事は終止和やかに終了してしまうから不思議である。

そして、食後は二人で手分けをして怪物豚を解体した。保存食用に切り分けたり、毛皮や丈夫そうな骨も取り出すのだ。（動物の骨や毛皮も貴重品で集落などでは重宝され、食料などと物々交換ができる）

しかして、二人で作業に集中しているていたところ、焚き火の影に私とエヴァ以外の人影がうつるのが私の目にはいる。

「！」

私たちからは見えないように岩陰に隠れているつもりらしいが、こちらを窺っている人影が丸見えである。

「エヴァ。」

私は骨を取り分けていて下を向いている彼に声をかけて影を見ろとジェスチャーした。

エヴァも一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに私の言わんとすることに気が付いて小さく頷く。

私は相手に気が付かれないように、傍(かたわ)らにある自分の剣を手探りで探してその柄(つか)を握る。
相手が何者だか知らないが、隠れてこちらの様子を伺うとは、夜盗などの悪党か、もしくは何かしら私たちに疚(やま)しい気持ちがあるに違いない。
そうなれば、こちらとしてもそんな相手に大人しくやられてやるわけにもいかないだろう。
そして、私は何気なく立ち上がろうと見せかけて、岩陰に隠れている人物まで一気にその間合いを走って詰め寄り、その首元に剣の切っ先を突きつけた。

「きゃあっ！」

『・・・きゃあ？』
男だけのむさ苦しい旅では聞きなれない、女性の高い叫び声に私とエヴァは思わず間の抜けた声を出した。
しかして、私の剣の先には白いワンピースに身を包まれた顔は汚れていたが一見して美しいと分かる女性。
彼女が私をただ驚いた表情で見返していた。
「あなたは一体・・・。」
私が彼女から剣先を引き、問いかけようとしたときだった。

ぐるぐるぎゅ～

何処かで聞いたことのあるような音が夜の不浄(ディス・エンガッド)の大地に響いた。

はぐはぐはぐはぐはぐ。
そうして、どうやら怪物豚(かいぶつぶた)を焼く匂いに釣られてやって来た腹す

き女は、私たちの食べ残しを分けてやると食べること以外、一切の行動をしなくなった。

綺麗な姿形とは裏腹に豪快に肉に食らいつく女に、私とエヴァも呆気に取られる。

「・・・・美味しい？」

エヴァが鬼気迫る女の様子に恐る恐るという感じで聞くと、女は頷いた。

しかし、肉から口を離すことない。

「ちょっと、何なのあの女は？」

彼女と焚き火をはさんで向かい合わせていたエヴァは、視線は彼女に向けたまま隣にいる私に小さく呟いた。

「私が知るわけなかろう？・・・夜盗の類には見えないが。」

「でも、普通に考えて女が一人で不浄の大地を旅してるわけないでしょ？」

「まあ、確かに。」

そう、エヴァの言うとおり、私も生まれてから二十数年、そのほとんどをこの不浄の大地の旅に費やしている人生を送っているが、女性の一人旅というのはお目にかかったことはない。

しかし、こちらが飯を差し出してから、女はひたすらに無言で食べ続けているので、正直女が一体何者なのかさっぱり分からないのだ。

ただ女が何者であれ、現在の彼女に声をかけることは互いに戸惑われて、私たちは女性が落ち着くのをしばし待つことにした。

そして、数十分後。

『・・・・。』

私は無言で目の前の状況を分析していた。

私とエヴァは怪物豚を保存食にしたり、骨や皮を必要分だけとって後は　色々世話になったこの怪物豚を、明日埋葬してやろうと思っていた。

いくら私たちが色々なもの怪物豚から取ってしまったとはいえ、二人で持ち歩くには限界がある。
大して非常にでかかった怪物豚。
勿体ないが、そのほとんどは埋葬してやる他なかったのだ。

・・・なのに、女はそれを一人でぺろりと食べたきりやがった

今は怪物豚であった名残りすらない。
骨と皮の一部分しか残っていない怪物豚は、なんとも哀れだ。
「ごちそうさまでした。」
そして、そんな現状を目の当たりにして私たちがものすごく女に不審そうな視線を送っているにもかかわらず、女のほうは全く気にした風でもなく笑顔で食事を終えた。
女はやっと人心地ついたのか、言葉を話す気になったらしい。
そして、怪物豚の衝撃からまだ立ち直れていない、私とエヴァに追い打ちをかけるような女の攻撃が続く。

「私の名前はハクアリティス。まあ、所謂『天使の花嫁』ってやつよ。」

美しい笑顔でさらりと自己紹介されたが、二人して曖昧に笑うしかなかった。
なにせ、私たちは彼女のことをご存じではない訳で、この自己紹介では何が何だかさっぱり意味不明なのだ。
だが、そんな私たちの心情など知ったことではないのか、『天使の花嫁』様は自分の話を勝手に打ち切ると、次の話題に移っていた。
「不味くはなかったけど、肉だけじゃなくて他の物もあるとよかったわ。あ、デザートは別にあるの？後、ベッドはどこかしら？今日はもう歩き疲れちゃって。」
『デザート』に『ベッド』

聞きなれない単語に私は頭が付いていかなかったが、エヴァのほうはその意味をすぐに理解したらしい。
「だぁーっ！何様なの、あんた！！！」
「え？」
「食べ物を恵んでやったっていうのに礼の一つ言わずに、更にデザート？ベッドォ！？そんな贅沢なもんが、この荒地の真ん中にあるとでも思ってるの？！バッカじゃない！」
エヴァが切れた。
まだまだ、子供で華奢で男っぽくないエヴァだが切れると中々の迫力である。
「ちょっと、子供だからって私に向ってそんな口を聞いて、ただですむと思っているの！？私は『天使の花嫁』なのよ！！」
しかし、ハクアリティスも負けてはおらず、エヴァの怒声に怒声で返す。
見た目とは違い、かなり気の強い女性のようだ。
『はぁ？』
だが、それよりも問題は、その『天使の花嫁』という言葉の意味だ。
ハクアリティスにとっては、その意味は誰でも知っている常識のようだが、こちらとしては、その言葉の意味など字面どおりにしか受け取れない。
おかげで、私たちは同じ世界に住み、同じ言葉を話しているにもかかわらず、互いに意志の疎通ができていないのだ。

その後、色々話し合ってはみたものの、結局私たちは相互理解に至らず、エヴァが怒り狂い、ハクアリティスとは会話が成立しないままに、夜も更けてきたので、とりあえず話は明日ということで一端の終息となった。
まあ、どうして彼女が不浄の大地に突如として現れたかは置いておくとして（あんまり初対面の訳のありそうな女性の話を突っ込ん

で聞くのも不躾だろう）、次の街まで連れて行ってやればいいか、くらいにこの時の私は考えていたのだ。

結果、エヴァはこんな女の面倒を見たくないと怒りのあまり不貞寝をするし、ハクアリティスはそれでいいとしながらも、ベッドがないと寝れないと駄々を捏ねるし、私は一人で苦労を背負って二人を宥め続けて夜は更けていく。

しかして、この怪しいことこの上ない、超我儘な『天使の花嫁』・ハクアリティスとの出会いが全ての始まりになろうとは、二人の機嫌を取ることに疲れ果てた私には思いつきもしないことであった。

第2話　永遠なる牢獄　1（後書き）

加筆・修正　08．4．12

第3話　永遠なる牢獄　2

私の生きる東方の楽園（サフィラ・アイリス）は死の世界だ・・・という話はしたと思う。
その理由としては、食べ物はあまりとれないし怪物豚（かいぶつぶた）を始めとした凶暴な生物が幅を利かせている弱肉強食の世界故（ゆえ）だからというわけだが、それでも、それで人類すべてが絶滅するほどに厳しい世界というわけでもない。
この世界は決して人間を全て殺す訳じゃないが、決して人間を幸せにはしないただただ苦しめるだけの牢獄・・・私はそんな印象を持っている。
どうしてそんな中途半端に世界が人間に厳しいか？その理由は簡単だ。

――それはこの世界に生きることそのものが、人間たちの贖罪（しょくざい）だから

しかして、その贖罪（しょくざい）の意味を辿ると人類誕生までに話を戻さないとならない。
二人の神が降り立ち世界には四つの大地に四つの種族が生まれた。
そして、そんな世界の均衡（きんこう）を崩すように誕生した第五の種族である人間たち。
まあ、別に生きている分には問題なかったのだ。
神や他の種族だって、人間の生きる権利までは奪おうとはしなかった。
人間たちは他の種族の大地で肩身は狭かったかも知れないが、それはそれで恐らく今よりは幸福な生活を送っていたに違いない。

――だが、人間たちはそれ以上の幸福を願ってしまった

そう、自分たちにも大地が欲しいと他の種族に戦いをしかけ、力づくで大地を奪おうとしたのだ。

しかし、五つの種族の中で唯一魔力も持たぬ、他の種族に比べ数が多いだけの非力な人間が神を始めとする四つの種族に敵うはずもない。

ただ、数が多いために人間すべてを粛清するのには時間と労力がかかるため、神は忠実なる僕として第六の種族・天使を生み出して人間たちと戦わせることにした。

そして、神の思惑どおり天使たちの活躍で人間たちは弱体化をしながら東方の楽園に追い詰められ、最後に神に逆らった罰として粛清を下されることとなる。

――――粛清の名は、終焉の宣告

神の名代たる天使の長・万象の天使によって発動されたそれは、美しかった東方の楽園を死の大地の覆う人間たちの牢獄へと変え、人間たちに未来永劫この生きているだけで苦しくて辛い、幸せになることのできない世界で生きることを強いられることとなった。

故に、ここで生きることは人間たちの神々への贖罪なのだ。

人間はいつ許されるとも知らず、この不浄の大地で苦しむことで永遠に神々に許しを請い続けている。

眩しい月が夜空の天辺に昇るのを、固い荒地の上で寝っ転がりながら私は何をするともなしに見ていた。

エヴァが怒りながら不貞寝をするのを宥め、野宿をするのを頑なに拒否するハクアリティスを説得しなければならなかった私は酷く疲れているはずなのだが、どうにも眠る気にならない。

そして、することもなくぼんやりと私は夜空を眺めていたのだが、

野宿を説得したはずのハクアリティスが起き出した気配がしたので面倒だと思いながらも声をかけた。
「ハクアリティス。」
「何？」
「何って・・・、いや、急に起き出したから、どうしたかと思って。」
高圧的というか、明らかに私よりも上目線でいるハクアリティスと話すことに、私が違和感を感じるのは可笑しいことだろうか？
「別にどうもしないわ。野宿なんかしたことないから寝れないだけよ。エヴァはよくこんな固い地面の上で寝れるわね。私だったら、ありえない。」
そう言ってエヴァを見下ろす彼女の容姿は綺麗（きれい）だと思うが、好感を持てそうもないと私は思った。
「それは申し訳なかったな。だが、こんな不浄の大地（ディス・エンガッド）のど真ん中でベッドがあると思っている方が、私には『ありえない』けどな。」
女性相手だと思って彼女に対しては下手に出ていたつもりだったが、だからって彼女にこんな風に蔑（さげす）まれる覚えもない。私は言葉に、明らかな皮肉を交えた。
「まあ、そうよね。そんなことは、言われなくても分かっているつもり。あれはわざとよ。わざと。」
「はあっ！？」
返ってきた悪びれない言葉に思わず、声が上がる。
「ほら、何？私の我儘相手にあなた達がどんな反応をするかで、この人たちに付いていくべきか、どうか決めようと思って。私って、綺麗じゃない？変な人に付いて行って、変なことでもされたら困るもの。」
「・・・。」
では、何か？この女は自分がいかに無茶なことを言っているか自覚したうえで、私たちが彼女に変なことをしない相手かどうか見極（みきわ）めるために、私たちの神経を逆なでするようなことを言ったと？

「・・・それで、君が今ここにいるってことは、私たちは君のお眼鏡に適ったということか？」

心底うんざりした声を出したと思ったが、ハクアリティスの方は気にした風でもなく、にこにこと私に笑いかける。

「ええ！私がどんなに無理難題言っても怒ってたみたいだけど、私を放りだしたり、暴力をふるったりはしなさそうだったもの。ヒロたちなら、きっと私を安全な場所まで連れてってくれるだろうなって思ったの。」

こんなことなら、女性一人で危ないからと怒りまくるエヴァを宥めて、彼女を次の街までは連れ行ってやろうなどと言わなければ良かった・・・、いや、まあ、そう思った所で、結局気の小さな私にはそんなことできやしないか。

しかして、妙な疲れた私の心を無視してハクアリティスは、何故だか私たちのことを聞きたがった。

「それより貴方達はずっと不浄の大地を旅しているっていってたけど、流離人ってやつなの？」

私と言えば声を出すにも何となく面倒で適当に頷いたのだが、それにたいしてテンションの高い声が上がる。

「嘘っ？本当に？こんな危ない場所を旅している人がいるなんて聞いてはいたけど、本当にいるのねぇ！！」

実際、私も既に亡くなっている私の家族しか同じ流離人を知らないが、だからってこんな珍獣みたいに言われるのは嬉しくない。

・・・無神経な女。彼女に対する認識が一つ追加された。

「私を珍しがっているみたいだが、私から見れば君の方がよほど珍しいと思うがな。」

私が流離人だというのに、異様に興奮している彼女を訝しみながら、私はそれに居心地の悪さを感じて話題を逸らせるために、億劫だが彼女に話しかけた。

そんな私をキョトンとした瞳で見返すハクアリティス。

「ベッドやデザートなんて言葉が出るくらいだ。君は『エンディミアン』だろ?」

私の言葉にぴくりと肩が動くのが分かった。

・・・やはりな

「ならば、むしろ色々聞きたいのは私の方だな。どうして、楽園の中で生きる権利を持つエンディミアンである君が、私たちアーシアンの世界である不浄の大地にいるんだ?」

私の言葉にハクアリティスは沈黙。しばし火が燃える音だけが静寂に響いた。

バレていなかったとでも、まさか思っていた訳ではあるまい。少なくとも私は、彼女を一目見た時から気が付いていたさ。

何せ、彼女はこの不浄の大地に生きるものにしては美しすぎた。

彼女は手入れの行き届いた亜麻色の長い髪に、澄んだ青い瞳は、伸びっぱなしの髪、荒れ果てた肌、生きるだけで精一杯の瞳という私とは同じ生き物とは思えなかった。(まあ、女性の彼女と男の私を比べるのもおかしな話だが)

何にしろ、不浄の大地に生きる人間の苦しさも、辛さも、悲しみも彼女からは感じられないのだ。

それに、彼女は『天使』という単語を口にしたのだ。『天使』と関わり合いのある人間は、この世界でエンディミアンだけ。

これで彼女がエンディミアンであると分からないのは、呑気で子供なエヴァくらいだろう。

そして、どれくらい、私と彼女は沈黙していたのだろう。それを破ったのは、彼女の微笑だった。

「やっぱり、ばれちゃうわよね。」

彼女が認めた瞬間に、私の心労は更にかさんだ。

理由はない。何となく、この事実を知ってしまったことで、色々と巻き込まれていくような予感がしたのだ。

そもそも、私が先ほどから何度も言っている『エンディミアン』とは何かと言えば、

――それは神に許された人間

天使の粛清から逃れ得た人間の種類の呼称とでも言えば簡単だろうか？

過去に人間たちに下された神の怒り・終焉の宣告、それは楽園を不浄の大地へと変えた。

そして、同時にそれだけでなく神の意に従わなかった人間にも神は直接、罰を与えたのだ。

人間の内、半数は地獄の業火に焼かれて断末魔の叫びを上げて死に、残りの半数は地獄の苦しみを生涯その身に受け続け、生き続けた。　彼らは死にそうなほどの苦しみを受けながらも、自ら死ぬことも許されなかったという。

そして、そののちはこの不浄の大地という永遠の牢獄で、その子孫たちは今も神に贖罪をし続けている。

すなわち、そんな罪人である私たちのことを神は、永遠の罪人という意味のある『アーシアン』と呼んだ。

一方、実は人間全てが四つの種族に反旗を翻したわけではなく、たくさんの人間の中には神々に恐れをなして、すぐにその足元にひれ伏した人間たちもいた。

そして、無益な殺生を好まない神はそんな人間たちだけはアーシアンと同じようにはせず、　その人間たちを自分たちの配下とし、彼らには罪を問うことはしなかった。

更に彼らだけは神の僕（しもべ）たる天使とともに、この東方の楽園（サフィラ・アイリス）で唯一、終焉の宣告（ディルト・ヴェネス）による不浄に犯されず、生命が息吹き続ける神が住まう都・天使の領域（フィリアラディアス）に暮らすことを許されたのだ。

アーシアンの私がその都のこと、そこに住まう人々のことを無論詳しく知るわけではないのだが、噂というか神話に近い話によると、都で人間たちは神の定めた法に従い神に懺悔（ざんげ）と祈りを捧げ続けているという。

一度あることは二度あると、人間とは神を裏切るものだと思った神が、もう二度と過ち（あやま）を犯さないために、人間たちに贖罪（しょくざい）し続けることを強いたというのだ。

そして、彼らが贖罪（しょくざい）をし続ける限り、神は彼らを許し続けるという。

なんだ、結局、神に従おうが従うまいが、人間とは神に許しを乞い続けなければならないのだと、私はそれを知って思ったことを今でも覚えている。

だが、死と隣り合わせの不浄（ディス・エンガッド）の大地と、神の威光輝く、最後の楽園である天使の領域（フィリアラディアス）とでは、きっと地獄と天国ほどに違うに違いない。

そして、その楽園に暮らすのが、神に許された人間という意味の言葉である『エンディミアン』という名の、人間の種類という訳だ。

だが、お気づきだろうか、故に普通に考えて、二種類の人間は合間見えるはずがないのだ。

何せ、どう考えてみても、そんな楽園に住まう資格を与えられた人間が、わざわざこんな死の世界に足を踏み入れるわけがない。（ちなみに、その逆は色々あって不可能。それについては、また後ほど）

私も長いこと不浄（ディス・エンガッド）の大地を旅してきたが、かつてエンディミアンという人種には出会ったことはないし、会ったことがあるというア

ーシアンに会ったこともない。
むしろ、ハクアリティスにこうして会うまでは、そんな楽園の住人なんて存在はあまりに現実味がなく、想像上の生き物と変わりなかった。
だって、私たちアーシアンから見れば、神に許されている人間なんて、どんな人間なんだろうと想像もつかないんだ。
だが、出会ってみれば、自分たちとは同じ姿形をしているのに、やはり一目で自分とは違うと感じることができるその存在。

ああ、やはりエンディミアンというのは、私たちアーシアンとは違うんだ。

そんな前から分かり切ったことを、このハクアリティスと向き合ってみて改めて感じてみたりして、だが、そこまで考えてやっぱり彼女がここにいる理由が私には全く分からない。
考えれば考えるほど、目の前のハクアリティスという存在に疑問と違和感ばかりが浮かんでいくのだ。
アーシアンは一生不浄（ディス・エンガッド）の大地から出ることは叶わないし、エンディミアンもまた天使（フィリアディアス）の領域で神に許され続けるために、祈りと懺悔をささげ続けなければならないのに、・・・どうして？
同じ人間なのにアーシアンの悲壮さも醜（みにく）さも持たずして曖昧（あいまい）に微笑むこの別の生き物を前にして、私はただただ混乱の中にあった。

第3話　永遠なる牢獄　2（後書き）

加筆・修正　08．4．12

第4話　永遠なる牢獄　3

「別に理由を言いたくなければ、それでもいい。しかし、エンディミアンが不浄の大地（ディス・エンガッド）に足を踏み入れるなど、ただ事とは思えないからな。偶然とはいえ私とエヴァは君を助けたのも、何かの縁だ。話を聞けば役に立てることもあるかと思っただけだ。」

あれだけ言いたい放題に訳の分からないことを言われて振り回されたのだ。私にもハクアリティスに対する憤り（いきどお）や不信感はある。

だが、それを忘れたように酷くいい人になってそう提案した私の心は、混乱をしつつもそれでも彼女、いや、エンディミアンという存在に対する純粋な好奇心に支配されていた。

『助けてあげるよ』なんて甘い言葉を言いながら本当はただの野次馬根性で、彼女がどうして不浄の大地（ディス・エンガッド）に来たのか、そんな後から考えればどうしてそんな下らないことを聞きたいがために、このエンディミアンの事情に首を突っ込んだというような愚かなる私。

「あははっ！そんな真剣な顔で見つめられちゃうと、つい惚れちゃいそう！あんた、美男子ってわけじゃないけど、味がある顔してるわね。」

「・・・興味ない。茶化すな。」

しかして、そんな私の心を見透かすように今度は曖昧な微笑みから一転して、ハクアリティスは大きな口をあけて笑った。（女が大口をあけるなよ）

建前上は彼女のためにと思って申し出たのに、こう笑われてはこちらもどうしていいか分からない。

私は急に気恥ずかしくなって、彼女から視線をはずした。

「ごめん。ごめん。でも、なんか・・・嬉しくって。」

「？」

笑いが止まったかと思って、彼女に視線を戻すと彼女はもう笑顔

ではなかった。
その表情はさっきまでの彼女からは想像もつかない程、切なくて、悲しいものだった。実際は一滴の涙もでていないのに、泣き叫んでいるように私には見えて驚いた。
どうして、急にそんな表情をするか分からなかった。
「こんな風に誰かに心配してもらうことなんて、だいぶなかったから。」
「どういう意味だ?」
いまいち意味が分からなかった。誰かを心配するということが、特別珍しいこととは思えない。他に意味があるのだろうか。
「そのままの意味よ。誰も私のことなんて心配してないのよ。」
それは、ひどく自虐的な言葉。

――似合わない

そう思った。それでも吐き捨てるようにそう言った彼女は、先ほどまでの彼女とは全く違っていた。
傲慢や我儘って言うのも、正直勘弁して欲しいが今の彼女よりは我慢できる気がした。(基本的に、私はか弱い女性というのに弱い)
「心配が嬉しいか・・・、エヴァだったら同情するより食い物くれって喚きそうだがな。」
だから、少しでも明るくなって欲しくて軽口をたたく。
「それはエヴァには、ヒロがいるから。自分を思ってくれる、誰かがいるからよ。」
だが、返ってくるのは、なおもそんな弱気な言葉。
「ハクアリティスには、それがいないっていうのか?」
誰だって一人で生きていけるはずがないのだから、心配してくれる相手くらい一人はいるだろうと思ったが、それはどうやら違ったらしい。
そして、私の言葉は彼女を傷つけたようだった。

瞬間に変化した彼女の表情を見て、すぐ自分の失敗に気がつく。
それにしても、自分で先に同じようなことを言っておいて他人に同じことを言われると傷つくのだ。女性と言うものは難しいものである。

さて、どうしたものかと途方にくれると、今度はハクアリティスが謝ってきた。
「・・・ごめん。ヒロが悪いわけじゃないのに。そう、貴方の言うとおり私にはどんな我儘も何も言わずに聞いてくれる人はたくさんいたけど、心配をしてくれる人はだーれもいないのよ。」
苦笑する彼女。明るく言っているが言葉には覇気がない。空元気なのがすぐ分かった。
私にはやはり掛ける言葉も思いつかず、彼女の言葉を待つことしかできない。
ハクアリティスの言葉が途切れて、沈黙がおちる。痛いくらいの静寂だった。
そして、彼女は笑って言う。

「だから、逃げ出したの。」

彼女の表情はころころ変わった。その時の彼女の表情は悲しいとも、自信に満ち溢れたものでもなかった。
嬉しそうなのに悲しそうで。笑っているのに泣いている。その表情に何と名をつけていいか、私はその言葉を持たなかった。
ただ、無性に彼女が可哀想だと思った。そう、これは紛れもなく同情だったと思う。
罪を償い続けるアーシアンである私に、神に許されたエンディミアンであるハクアリティスが同情する・・・。
真面目に考えるとおかしな話のような気もするが、それでもやはり口にはできなかったが私が彼女に感じたのは、共鳴でも愛情でも

なく同情に似た憐憫に違いなかった。

「逃げ出したって・・・。天使の領域から脱走したってことか？どうして？」

自分でも驚くくらい、不思議そうな声が出た。

「どうしてって、いったでしょう？辛かったのよ、誰にも何の関心ももたれない自分が・・・。」

アーシアンが聞いたら殺されそうな言葉であるが、妙に気落ちしている彼女は冗談で言っているわけでもないらしい。

「じゃあ、そういう人間を作ればいいじゃないか。」

「それができないから！」

「どうしてだよ？不浄の大地に来る度胸があれば、不可能なことはないと思うが・・・。」

エンディミアンが不浄の大地に来る。

この世界の成り立ちと、現在の状況を鑑みれば、それはあまりに愚かな決断であり、普通に考えてありえない話だろう。

だから、その気持ちがあればやってやれないことはないだろう・・・と思うのだ。

心配してくれる人を見つける。

ハクアリティスは我儘だし、性格は良いとは言えないだろうが、それとて私の主観であり、他人にはそれが良いという人もいるだろう。それに、加え彼女の美しさは私だけではなく万人に好かれるようなものだと思う。

そんな彼女ならば、その気になればすぐにそんな存在を見つけることは容易だろうと私でなくても思いつく。

まあ、もう脱走してしまった今となっては遅いだろうが、どうしてもっと他の方法を探そうとしなかったのだろう。

漠然とそう思ったが、彼女の心は私の想像より複雑らしい。

見返す彼女の頬は高潮し、私を睨みつけていた。

「簡単に言わないで！私が言ってるのはそういうことじゃないのよ！だって、心配してくれる人間がいないんじゃなくて、人間がいないのよ！！」
「は？」
それは、エンディミアンが絶滅したと言う意味であろうか。
「どういう意味だ？天使の領域（フィリアラディアス）には人間がいないのか？」
「違う！」
だんだん、ハクアリティスが興奮してきている。
声が大きくなる。エヴァは微動だにしないが、起きないかが心配だった。
「じゃあ、なんだよ？」
なるべくエヴァが起きないように私は音を抑えたが、ハクアリティスは気もとめていないようだった。
「私は天使の花嫁なの！」
さっき聞いた意味の分からない言葉だった。
でも、先までに聞いた事のない悲痛（ひつう）な叫びだった。
「私は天使の妻になるために、同じエンディミアンからも隔離（かくり）された籠（かご）の中の鳥なのよっ！」
声と言うよりは叫び。エヴァもさすがに気がついたのか、視界の端にエヴァが動くのが見えた。
「ちょ・・・、落ち着けっ！」
ヒステリックに叫ぶハクアリティスは、明らかに冷静さを欠いていた。私は彼女を黙らせたい一心で彼女に抱きついた。
笑ったり、悲しんだり、怒ったりと、女性と言うのは本当に本当に扱いにこまる。私の対処する許容範囲を超えている。
「あ・・・、ヒロ。私・・・。」
しばらく抱きしめていると彼女が戸惑いながら声をあげた。
エヴァを慰めてやるときにとる方法だったが、どうやらハクアリティスにも有効だったらしい。

内心ほっとしながら、私は未だ呆然としている彼女を放した。
エヴァも寝返りをうっただけで、起きはしなかったようだ。正直、今起きられても説明に困るのが目に見えていたので助かった。
私は安堵の息をつく。
「・・・ごめん。会ったばかりのヒロにこんな、みっともないとこばっかり見せて・・・。馬鹿な女だと思ってるでしょ？」
「え、いや。別に。」
歯切れの悪い言葉である。ここで気の利いた台詞(せりふ)一ついえないのだ私は。
「ふふ。ありがとう。ヒロには何だかいつも意地ばっかり張ってる私が、素直になれる気がする。あのね、聞いてくれる？」
何が始まるか分からないが、彼女の話を黙って聞くことに了承の意を示して一つ頷いた。
私にはそれぐらいしか、彼女にしてやれることもないだろう。
私が頷くのと見ると、ハクアリティスは静かに話し始めた

「私はさして裕福でもない普通のエンディミアンの家庭で育った。アーシアンの人たちから見れば幸せすぎる境遇(きょうぐう)かもしれないけど、エンディミアンにとっての普通って言うのは、家族がいて、親がいて、友達がいて、ただ、神と天使の言うことさえ守れば、何の苦労をすることなく一生を終えられる。そのかわり、それを守らないと楽園を追放される。人々は、それに対して何の不満も不審も抱かないけど、それはね、たった一つの形しかない、決められた幸せでしかないの。」

幸せの形が一つしかない。
幸せを一つも持たないアーシアンにはうらやましいことなのかもしれないが、それはそれで辛いのかもしれない。

「でも、私はそれに対して何の疑問も抱いていなかったし、それが

幸せだと思っていた。私も両親みたいに平凡だけど、そのたった一つしかない幸せな一生を送るものだと思ってたの、あの日、あの天使が私を迎えに来るまでは・・・。」

そう言った彼女の瞳は暗かった。

「私がね。さる天使の花嫁に選ばれたっていうのよ、その迎えは。どうして選ばれたか、なんて教えてもらえなかった。私の意思なんて関係ない。天使が嫁に来いといえば、私が嫌がろうが何だろうが、私は嫁に行かなきゃならなかった。そのとき初めて私は、自分が天使の人形だって思いしったの。」

「人形？」

「そう。逆らうことも、逃げ出すことも叶わない。天使の意のままに動く人形よ。花嫁になったところで違う幸せなんてどこにもなかった。天使の領域（フィリアラディアス）内は、天使と人間の住む場所は全く分けられているの。天使に嫁いだ私の周りは天使しかいなくなった。それでも表面上は天使も私に優しかったわ。でも所詮（しょせん）、天使なんてみんな心の中では人間を見下しているのよ。私はずっと見下されてきた。誰に頼ることもできなくて、もう気が狂いそうだった。それだけじゃない、あいつは私から全部奪った。夢も希望もたった一つの愛すらも・・・もう耐えられなかった。」

そう言って、ひどく重い息を吐いた彼女は、私とそう年頃は違わない若者であるはずだ。しかし、ひどく老成して見えた。

ハクアリティスは続けた。

「だから、私は逃げ出したのよ。ううん。あいつから奪われた全てを取り戻すために、私は何かしようと思いたったの。そのために、

彼に言われたとおり不浄の大地（ディス・エンガッド）に飛び出たところを・・・、あんたたちに助けられちゃって、結局、私一人じゃ何もできないってことかも知れないけど、それでも何かしたかった。自分幸せのために何かをしたかったの。」

だから逃げ出したのだと、彼女はもう一度言った。

そういった彼女はもう先ほどまでの激昂（げっこう）などなかったかのように、自信に満ち溢れた女に戻っていた。

先ほどまでの彼女が幻だったのか、それとも今の彼女が仮面をかぶっているのか。どちらかの判断は私にはつかなかったが、彼女の今の状況だけは理解できた。

「じゃあ、君は天使から逃げてきたってことなのか？大丈夫なのか？追いかけてくるんじゃないのか？」

「まさか！私の存在なんてゴマほども気にしなかった連中よ？きっといないことにも気がついてないわ。だいたい、天使たちが不浄の大地（ディス・エンガッド）に来ること自体がありえないわ。彼らにとって、不浄の大地（ディス・エンガッド）は神に禁じられた場所だもの。ここまでこれれば、もう私は自由なの！そう決まってるの！」

そうして、彼女は根拠もなく断言した。

エヴァと喧嘩していた彼女が戻ってきていた。私もたじたじである。

「な、なら、いいんだが。」

「ん、もう！ほんっとにヒロって喋りがかたいわよ？だいたいアーシアンっていったら、ならず者なんでしょ？もっと、男っぽく喋らないと雰囲気でないわよ？」

「これが地なんだ。ワザと男っぽくする必要はないだろう。多分、父親がこんなしゃべり方だったからな、移ったんだろ。大体ならず者って何だよ。」

エヴァにもよく言われる。私の一人称は「私」だし、言葉遣いも些細(ささい)かかたい、おっさん臭いと常々言われ、エヴァも矯正(きょうせい)を試みたこともあったのだが、結局上手くいかなかったのだ。

その時のことを話すと、ハクアリティスは笑い出した。

「あはは！なんかその様子が思い浮かぶわね！」

ひとしきり彼女が笑った後、私は彼女の話を聞いて思ったことを、そのままに伝えた。

「私には君が何を抱えているかは知らないし、君の話を多分そんなに理解してはいない。」

「・・・そうよね。」

苦笑するハクアリティス。

「だが、君が自分の幸せのために何かをしようというのは、別にいいんじゃないかと思う。君の人生だ。思い通りに生きて何が悪い？」

ハクアリティスの顔が虚をつかれたようなものになる。

だが、彼女の自分の幸せを願うことにどうにも後ろめたさを感じているような、それにひどく気負っているような様子を見て、どうにも納得がいかないのだ。

アーシアンであれエンディミアンであれ、どんな人生を運命づけられているかは知らないが、例えそれが神や天使のための人生であってもたった一つの自分の生を生きているんだと私は思う。

だったら、それを少しでも自分の思うとおりに生きて、何が悪いというのだ？

現に私は神という存在こそ微塵(みじん)も傍に感じていないが、それでも神に贖罪とされる生を全うしながらも、それでも自分が思うままに旅をして生きている。

なら神に許されたエンディミアンであるハクアリティスが、それをしていけない法はない。

だから、そう言った。

「・・・本当にそう思う？」

だから、その頼りなげなハクアリティスに頷いてやった。
ハクアリティスはとても嬉しそうに微笑んだ。私もその微笑みに、ぎこちなく笑い返した。
だけれど、私はそうした自分を後にひどく罵(ののし)ることとなる。
ああ、彼女の望みを、その後の未来を知っていれば、私は死んだってこの言葉に頷きはしなかったのにと、未来の私はただただこの時の自分を罵(ののし)り悔いることとなる。

――まあ、それは大分先の話になるのだが・・・

第４話　永遠なる牢獄　３（後書き）

とりあえず一段落。
自称「天使の花嫁」となのる謎の美女の登場が今後ヒロ達をどんな事件に巻き込んでいくか・・・次回からまた話が大きく動いていく予定です！

加筆・修正　０８．４．１２

第5話　天使は悪魔の如く笑う　1

幼い頃、一生見ることも叶わない天使の姿を思い描いたことがあった。
天使とは不老不死にして、人智を超えた力で人間を殲滅（せんめつ）するために創られた神の僕（しもべ）。
その背中には大空を羽ばたく翼があるという。

――ああ、空を飛ぶとはどんな気持ちなのだろう？

地べたを這いずり回り、毎日生きることで精一杯な私は想像した。
翼は大きいのだろうか？
それとも小さいのだろうか？
色は何色だろう？
翼は鳥と同じように左右一対なのだろうか？
そんな風に天使の持つ翼のことを思い描いては、自分にも翼があれば良いと思った。
この不浄の大地（ディス・エンガッド）から飛び立つ自分を幾度となく想像していた。
天使に憧（あこが）れるというよりは、翼に憧（あこが）れたんだろう。
翼さえあれば、贖罪という名の永遠なる牢獄から逃げれるような、まだ見ぬ空の先に楽園があるような気がしていたのだ。

――そんなもの世界のどこにもあるはずもないのに・・・

ふとそんな幼い頃のことを思い出して苦笑いをした私の耳に聞こえてくる耳障りな音。
「？」
何の音だろうと思って振り返った先に翼を羽ばたかせた天使がいた。

――ヴァサヴァサッ

しかして、突如の天使が現れたことへの疑問などは私の中にはなく、ただその翼が激しく羽ばたく音が酷く耳触りで私は顔を顰(しか)める。

そして、気がつく。

――ああこれは夢なのだ。繰り返し見る翼に憧れをもつ愚かな幼い私の夢なのだ・・・と

だけれど、いつも見る夢のように天使は優しさを湛(たた)えた表情を私には向けてくれず、私に向って歯をむき出しにして笑う。

――これじゃ、まるで悪魔みたいだな

夢の中で私はそう思った。

【天使は悪魔の如く笑う】

「ええ～！？」

エヴァの非難の叫びが不浄の大地(ディス・エンガッド)の早朝の空気に響く。

ハクアリティスは疲れていたのか、私との話がひと段落つくとすぐに眠りに落ちた。しかし、私は結局一睡もすることなくエヴァが起きるのを待った。

眠りにつくには中途半端な時間だったし、エヴァに彼女との会話を話す前に色々考えを整理しておきたかった。

エンディミアンとのはじめての遭遇(そうぐう)に、話を聞いてもどうにも要領を得ないハクアリティスの事情。

それらは自分で考えるよりも私を混乱させていて、どうにも考えが上手くまとまらないのだ。

とりあえず話さなくてはいけないことは、ハクアリティスの身の上話。

女性の事情をあれこれ話すのは良くないことだとわかっていても、天使から逃げてきたという彼女の事情はあまりに大きすぎる気がする。

ハクアリティス自身は天使が追ってくることなどないと言っているが、それはあくまで彼女の勝手な思い込みであってそれが確かとは言い難い。

もし、彼女を連れていくことによって私やエヴァまでそれに巻き込まれる可能性というのは必ずしもゼロとは言えないのだ。

そうである以上、エヴァにもそれを伝えないのはアンフェアであるし、それを伝えた後に想像できるエヴァの不満げな顔が脳裏(のうり)に浮かんだ。（あいつは元々ハクアリティスを同行させるのを嫌がっていたしな）

それでも、同行者としてエヴァに確認と了承は得なくてはならない。それが共に旅をする仲間に対する礼儀というものだろう。

だから、ハクアリティスが寝ているのを横目に私はエヴァが起きだしてすぐ、彼が不貞寝(ふてね)をしてしまった後のことを掻(か)い摘んで話したのだ。

それを受けての冒頭の叫びな訳で・・・やはり、そう簡単には了承してくれないらしい。

「なんだ。不満があるのか？」

「別に、そんなんじゃないけどさ。」

という顔には到底見えない。明らかに不満ですと声高に叫んでいる表情だ。（エヴァと長い付き合いの私が見間違うはずもない）

しかし、普段から自分の感情については我慢というものをしない

エヴァであるが、理由なく困っている人を助けないような人間ではない。
なのに、ことハクアリティスに関してはどうもこの煮え切らない態度が不思議だった。
「何かあるなら、はっきり言え。」
そうは思いつつも昨晩一睡もしておらず、私も段々とイライラしてくる。
「・・・」
エヴァはそんな私を前にだんまりを決め込む。
私の機嫌が悪いのを分かっているはずなのに、いい度胸である。
実を言うとこの『だんまり』は気に入らないことがある時の彼の常套手段で、これでいつも私が折れると思っている。
確かに大抵のことならエヴァに甘いという自覚が私にもあるが、今回は人命に関わる事だ。エヴァの我儘を聞く気はなかった。
なので私はこうなったエヴァを相手にするのも正直億劫だし、話をさっさと進めることにした。
たまには、大人の威厳を見せてやらなければならない。
「黙ってるなら、了承したことにするからな。後での文句は聞き入れんぞ。」
すぐに言葉が返ってきた。
「じゃあ、言わせてもらうけど。」
――――文句があるなら、さっさと言えよ
そう悪態をついた私であったが、睨むように見るエヴァの瞳はひどく真剣で、私は少しだけ及び腰になる。
「僕はあの女と一緒にいるのはやだ。」
何をまくしたてられるかと思ったが、それはあまりに短い言葉。
だが、強い拒否の言葉だった。
いつも我儘ではあるが、優しい気性のエヴァがこんなに誰かを拒

否するなど本当に珍しい。
　初めは単にハクアリティスと気が合わないから意固地になっているからだと思っていたのだが、そこで私はエヴァのそんな態度に違和感を感じた。
「エヴァ、どうかしたのか？昨日も言ったが私の考えとしては、不浄の大地（デイス・エンガッド）の真ん中で女性一人を放り出すのは目覚めが悪い。助けた以上、人がいる場所に連れていくくらいしないと、助けた意味がないと思っている。」
　エヴァは何も言ってこない。
「別に私は彼女とずっと旅をするといっているわけじゃない。この不浄の大地を流離（さすら）うことが大変なのはお前も分かってるだろ？男のお前はともかく、エンディミアンで女性のハクアリティスにはこの大地はあまりに厳しい。正直、私たちを会うまで五体満足だったのが奇跡だ。」
　腹は死ぬほどに空いていたようだが、怪我ひとつもなかったハクアリティスは本当に奇跡だと思う。
「ただ、不浄の大地（ディス・エンガッド）について右も左を分からない彼女だ。このまま放り出せば遅かれ早かれ、彼女は死ぬ。それじゃ、楽園に住む権利を捨ててまで逃げて来た彼女の心意気も無駄になる。」
「・・・うん。」
　そこでやっと、エヴァが反応らしいものを示す。
「天使の領域（フィリアラディアス）から自分で馬まで奪って脱出してきた。ただ、その馬も途中で倒れ、後はずっと飲まず食わずで歩いていたらしい。街にもたどり着けず、私たちが不浄の大地（ディス・エンガッド）で初めての人間だそうだ。それが、どれだけの覚悟かお前も想像がつくだろう？」
　死を覚悟していたかまでは分からないが、何にしろそんな無謀ともいえる脱出劇を聞かされれば、ハクアリティスの覚悟というものが誰だって分かる。
「天使の領域（フィリアラディアス）から離れることしか頭になかったらしい。それだけ追い詰められていたということだろう。ともかく、不浄の大地（ディス・エンガッド）につい

て、なんの知識もない彼女をこのまま見捨てるってことは、彼女を見殺しにするってことだ。お前にもそれはわかるだろう？」

エヴァは頷いた。

「でも・・・っ。」

それでもと、彼は何かを私に訴えようとする。

「エヴァ？」

やはり、どうもおかしい。私はエヴァの心の内を覗こうとした。

「・・・なんでもない。ヒロちゃんの言いたいことは分かったよ。我儘言ってごめん。次の街までって話でしょ？それなら、今日一日歩けば着くもんね。我慢するよ。」

なのにエヴァは何かを飲み込んで代わりに妙に聞き分けのいい返事をして、視線を逸らすと私から何かを隠した。

その隠したものが気にならないわけはない。無理やりにそれを聞き出そうとする方法もあったかもしれない。

・・・だが、色々と疲れた私はそれをする気力もなく、おかしいと思いながらもそのエヴァの言葉を信じた。

いや、信じようとしてエヴァが隠した何をかを知ろうとしなかった。

「ああ・・・。勝手に決めて悪かったな。」

「ううん。気にしてないよ。・・・あのね、一つだけ聞いてもいい？」

そして、エヴァは急に話を変えた。

「ずっと、ずっと側にいてくれるよね？」

それは、唐突で脈絡（りゃくらく）のない言葉。急にそんなことを言われて私も一瞬呆気にとられた。

エヴァは私より背が低い。

私をわずかに見上げる形で、エヴァは確かめるようにそう言った。

いつもは私を振り回してばかりだが、まだ幼いエヴァは私に依存するところが本当は多いのかもしれない。

そう思って、私はエヴァを安心させてやろうと言葉を発した。

「当たり前だろ。」
だけれど、疲れた私から出たのはそんな心情とは裏腹に酷く冷めた言葉で、すぐにまずいと感じた。
それでも、エヴァは少しだけほっとしたように表情を緩(ゆる)めたので、私はそれでとりあえずはいいだろうと判断してしまった。
とりあえずエヴァのことは後で解決すればいいと楽観視して、全てを後回しにしてしまったのだ。

――この時、エヴァのことをもっと気にかけてやれば、その後の悲劇を迎えることはなかったかもしれないのにっ！

しかし、この時の私がそんなことを知るはずもなくエヴァの了承も得られたことで、私とエヴァはハクアリティスを加えた臨時パーティーで暢気に不浄の大地(ディス・エンガッド)を歩いていた。
半日も歩けば大きくはないが小さくもない街につく予定になっていたが、しかして思ったほど距離が稼げていなかった。

「ちょっとぉ、待って！」

私とエヴァの背後から、疲れた声がした。
「今度は何？」
エヴァが不機嫌そのものと言った声で振り返る。
朝からまだそれほど歩き詰めたというわけではないが、何度その言葉を聞いたことか・・・。私にはもう振り向く元気もなかった。
「だってぇ、私は天使の花嫁なのよ！」
へなへなと乾いた大地に座り込んでハクアリティスは、あの台詞(せりふ)を叫びながら肩で息をしている。しばらく休憩が必要そうだった。
「また、それ？僕らにそれが通用しないことくらい分かってるでし

ょ？大体どうして、そればっか言うの？」
「そういえば、そうだな。」
我儘をいうにしても、そんな言葉じゃ伝わるものも伝わらないだろう。
私も同じことを思っていたのでエヴァに同意して彼女を見ると、何とも言いにくそうにぼそりと呟いた。
「・・・口癖だったのよ。」
『は？』
小さな声で聞えなくてエヴァと二人で聞き返すと、やけくそ気味にハクアリティスは吐き出した。
「だから！口癖だって言ってるでしょ？！」
顔は真っ赤。言い切って彼女はうつむいて私たちの視線から逃れた。
「口癖って・・・。あんな言葉が普通、口癖になるか？」
なんといっても、『私は天使の花嫁よ。』である。
口癖というには変わっているという他ない。
「だって、人間の私が天使たちの居住区にいるじゃない？事あるごとにどうして人間がここにいるんだ。って天使たちに言われるし説明するのも面倒になって・・・。だったら、はじめから天使の花嫁って自己主張してしまえ・・・って。そうしたら、我儘も何でも聞いてくれるようになったのよ。」
「・・・」
中々すごい理由である。
要は天使たちに我儘を言うための魔法の言葉、と言うことだったのだろう。
それが不浄の大地（ディス・エンガッド）では通用しないことくらい、考えなくてもわかるだろうが、それでもつい口に出てしまうほど口癖になるということは相当言いなれていたに違いない。
私は思わず苦笑した。

「ばっかじゃないの？！」
「なんですってぇ？」
二人がにらみ合い噛み付き合う。（おいおい、こんなところで喧嘩を始める気か）
「喧嘩する元気があるなら先に進むぞ。時間が惜しい。」
「えぇぇ～？！」
ハクアリティスが不満の声をあげるが知ったことではない。
私は彼女を街まで連れて行く約束はしたが、我儘を聞いてやる約束をした覚えはない。
無視してさっさと歩き出した。
「そうだね、ヒロちゃん！あんな馬鹿女置いて先行こう！もうすぐなのに、あいつに付き合ってたら日が暮れちゃうよぉ。」
エヴァが同調して私の右に着く。いつになく猫なで声である。
「やだ！置いてかないでよ！冗談でしょ？！」
と、ハクアリティスが走ってくる気配がして左側から私をのぞく。
走る元気があるなら、初めから歩いて欲しいものである。
私を挟んでぎゃあぎゃあとわめきだした二人のせいで頭痛がするような気がしたが、ふと前を見た視線の先に、岩と地平線以外のものが見えて私は少しだけ気分が軽くなるのを感じた。

「おい！二人とも見ろ！アルヴァーナの街が見えたぞ！！」
『え？！』
二人とも罵り合いの途中だったが、私の言葉に目の前を凝視した。
まだ距離としてはいくらかあるが、目標が見えているのと見えていないのでは大きく気分が違う。
何もさえぎることのない地平線しかないので、街はよく見えた。
「本当だ！」
「建物が見える！！」
二人が手を取り合って飛び上がって喜ぶ。
これで喧嘩も止まったし、ハクアリティスも疲れたといって座り

込むこともなくなるだろう。
ハクアリティスもとりあえず街までたどり着ければ一安心といったところだ。
彼女は自分のこれまでの人生を捨てて、死ぬ気でこの不浄の大地（ディス・エンガッド）に来たのだ。
アルヴァーナの街は規模はさほど大きくなかったように記憶していたし、一人で生きていくことも簡単ではないだろうが、死ぬ気があればきっと不可能なことはないだろう。
きっと彼女は新たな人生を歩めるはずだと、私は思った。

「早く行きましょう！」

全く現金なもので街が見えた途端、満面の笑みで私たちの先を歩き出すハクアリティス。
きっと彼女の頭の中には自由な人生が様々に思い描かれているのだろう。そう、思った瞬間だった。

――何か音がした気がした

「？」
私はあたりを見回したが、特に何も見当たらない。
気のせいかと思って彼女のあとに続いた。
しかし、私はハクアリティスの頭上に落ちる影があることに気がついて、彼女の上に視線を移した。

「ハクアリティスっ！」

私は彼女の頭上を認めた後、彼女を抱きかかえてその場からどかせた。
ヒュンと空気を切る音がして、ハクアリティスが先ほどまでいた

ところに何かが通り過ぎた。
「ひ・・・ろ?」
彼女は突如のことに、何が起こったか理解できず私を見上げている。
私は彼女を自分の後ろに追いやると、背中にさしている自分の剣を鞘から取り出した。エヴァもライフルを構えていた。
ヴァサヴァサと、耳に届く羽音。乾いた大地に柔らかな羽が舞い落ちる。

「あらら。失敗失敗。」

続いて軽い感じの男の声が上から聞えた。
「ああっ・・・・」
ハクアリティスが上を見上げて、叫びにならない叫びを上げる。
――――そこには天使がいた

羽をはばたかせながら１０メートルほど上空を飛んでいる天使がいた。
全身黒ずくめという異様な井出たちの男はくすんだ青色の大きな翼を持って、にたりと歯をむき出しにして悪魔のような嫌な笑みを浮かべた。

「どうも花嫁さん?迎えに来たよ。」

ハクアリティスの甲高い叫びが私の鼓膜を震わせた。

第5話　天使は悪魔の如く笑う　1（後書き）

加筆修正　０８・４・２３

第6話　天使は悪魔の如く笑う　2

私が生まれて初めて見た天使は、神の僕というにはあまりに似つかわしくない悪魔のような姿をしていたなぁと、後に私は振り返る。

しかして、悪魔と表現したのは別に彼の容貌が醜いとか恐ろしいとかではない。

容貌という点では、天使はハクアリティスに負けず劣らず美しい。

ただ、一見儚げな彼女の美しさと比べると、男らしい鋭さを持った美しさをその天使は持っていた。

また、天使の翼は大きく光の加減で何とも表現しにくい色をしていたが、私には青がくすんだような色に見え、翼はにょっきりとその背中から生えていた。（服にはそれ用に穴が開けられているようだ）

人間にしてみれば翼が生えているなど異形としか思えないが、まあ天使ならば翼が生えていて当然なわけで、問題はその天使の服装についてだったりする。

驚くべきことにその天使は全身黒のぴったりしたレザーで身を固め、動きやすそうではあったが、正直、私は着たいとは思わない格好だった。

更に髪の色は翼の色と同じような色で、つんつんと至る所がはねているハリネズミのようで、耳にはピアス、指には指輪、首には首輪をし、ジャラジャラと金属同士がぶつかる音がして、ブーツは明らかに不必要なほどヒールが高い。

女でもないのに、顔に濃い化粧もしている。

――キモイ

天使を見た瞬間にそんな感想を抱いた。
私のあの神々しいまでの天使に対するイメージを返して欲しい。
私はそんな天使を見上げながらそう思った。

「やっと、見つけましたわぁ。花嫁さん?」
そして、こちらが突然の天使の登場に混乱している中、笑顔を向けながら天使は第一声そう言った。
その声は厭(いや)らしく私の耳元をくすぐる。
しゃべり方もイントネーションがおかしく、どこか含むところがあるようで気に入らない。
そして、何よりその笑顔が誰が見ても笑顔だと思えるのに少しも嬉しそうにも、楽しそうにも見えない感情のない笑顔だった。

――――そう、そののっぺりと張り付いただけの笑顔が、私にはどうにも悪魔の笑みのように思えたのだ

そして、天使は花嫁(ハクアリティス)を迎えに来たと私たちに告げた。
それはすなわち、天使が彼女を連れ戻しに来たということな訳で、街まで後一歩という状況もあいなって『ちきしょう』と思わず私は心の中で悪態(あくたい)をついて、ハクアリティスを振り返った。
「ハクアリティス。あれが君の夫か?」
「いやっ・・、こないでっ」
連れ戻しに来た相手で男であることからハクアリティスの夫なのかもしれないと声をかけるが、返ってくるのは要領を得ない言葉だけ。
彼女は天使から身を守るように体を自分で抱きしめ怯えきったまま泣いて、全く使い物にならなそうだった。
しかし、その代わりに上空の天使が口を開き私の問いに答えてくれた。
「いやいやぁ。ハクアリティス様の夫なんてそんな身の程知らずの

ことは言えまへんわぁ。わいは通りがかりの普通の天使ですわ。」
そして、ふふふと笑いながら私とエヴァを見下ろして天使が問う。
「それにしても、あんさんたちは誰でっか？ハクアリティス様はお一人で逃げはった・・・と聞いとりましたが、まさか愛人さんでっか？」
「・・・」
唐突な問いになんと答えたものかと私が言葉に詰まると、天使は質問しておいてまた自分で話し始める。
「いやいや、分かってまっせ？あんたらを見たらアーシアンっちゅう事は一目瞭然でっからな。偶々ハクアリティス様をお助け頂いたって所でっしゃろ？あははは、ちょっとした冗談ですわ？そんな怖い顔をしなさんな。」
分かっているなら、いちいち質問をしてくるなっつー話である。
しかし、心では悪態をつきながらもそれを全く口にできないほど、緊張し小さくなっている自分がいることにも気が付いている。
何故なら天使は笑っているのに、身が切れそうなほどの殺気を纏い、こちらにプレッシャーをかけ続けているのだから。
私はただ立っているだけなのに嫌な汗をかき唾を飲み、エヴァはすでに戦意すら喪失している。

――――殺される

根拠もなく何をされたでもないのに、私はそう直感していた。
私も不浄の大地のならず者を数多く相手にしてきたつもりだったが、こんな予感めいた直感は今まで感じたこともなかった。
さすが、人間たちを断罪し続ける存在といったところであろう。
だが、だからといって怯えているだけでは何も始まらない。私は気を引き締めると、天使を見据えて口を開いた。
「それは失礼した。怖い顔をしたつもりはなかったんだが、なにしろ天使様など見たことがなかったもので、思わず凝視してしまった。

」

そうして、私が軽口をたたいて言い返すと、天使は意外そうに切れ長の瞳を丸めて如何(いか)にもおかしそうに目を細めた。

「ほぉ。まあ、アーシアンが天使を見るなんて普通は一生ないでっしゃろからなぁ。でも、わいは割りとアーシアンが好きなほうなんよ？たまに不浄の大地(ディス・エンガッド)の街にも立ち寄ったりしますんや。」

「不浄の大地(ディス・エンガッド)に？それは、神の掟に逆らうことではないのか？」

話の内容など頭半分で言葉を発しながら私は天使から目を離さずにハクアリティスを抱えて、じりじりとエヴァの方へ足を進める。

天使はそんな私の動きを認めながら、それでも悠然(ゆうぜん)と構えている。

私たちが何も仕掛けないと踏んでいるのか、それとも自分の力に絶対的な自信があるのか。

「あれはエンディミアンへの掟でっから、天使は関係おまへんのや。まあ、あんまり褒められた行動とはいえまへんがな。」

私の言葉にご丁寧に返答までしてくれる余裕が非常に癪(しゃく)に触る。

「屁理屈(へりくつ)だな。自分たちが守らない法を人間に押し付けるとは。」

「あはは。正論ですなぁ。わいもそう思いますわぁ。」

そして、少しでも隙が見えたら攻撃の一撃でも食らわせてやるものを、私の言葉を楽しむかのように天使はその悪魔らしい笑みを深めるだけ。

私は剣の柄を握る手にも、背中にも、全身から嫌な汗が吹き出ていることを感じた。

そうして、戦ってもいないただ話しているだけなのにひどく自分が消耗していることを感じながら、私はやっとエヴァの傍(かたわ)らまで移動することに成功した。

「・・・エヴァ、ハクアリティスを頼む。」

エヴァのほうは見ず、天使に視線を置いたまま私は言う。

「ヒロちゃん・・・。」

振り返らずともエヴァの泣きそうな声から、天使の殺気に飲まれ

ているのが分かった。
だが、それでは困るのだ。
「エヴァ。」
だから、私はエヴァの名を呼ぶ。
「大丈夫だ。私を信じろ。」
そして、エヴァを振り返りその少し震える指輪を嵌めている右手を握った。
ハクアリティスを助けた時に岩で切った掌の血がエヴァの手を濡らし、それを見てエヴァが悲鳴に似た声を上げる。
「ヒロちゃんっ」
私はそれを振り切るように告げた。
「頼んだぞ。」
エヴァにハクアリティスを渡すと、私は天使に改めて向き合う。

――――さあて、これからが本番だ

「お二人はヒロさんにエヴァさんとおっしゃるんでっか。では、わいも自己紹介させていただきましょか。」
しかして、天使は私たちのやり取りなど気にしないように、再び話始め上空から翼をはためかせて、ゆっくりと降りてくる。
「お初にお目にかかりますわ。わいは天空騎士団（アイッシュグランド）、第一師団副団長エンリッヒと申します。以後、よろしゅうお願いしますわ。」
不浄の大地（ディス・エンガッド）に降り立った天使・エンリッヒはそういって凶悪な笑みを深める。
ぞわぞわとした不愉快さが増した。
「天空騎士団（アイッシュグランド）？それはそれは・・・、遠路はるばるこんな辺鄙（へんぴ）なところまでご苦労様だな。」
天空騎士団（アイッシュグランド）とは詳しくは知らないが、神に戦うことを禁じられた世界で唯一認められた天使たちの武装集団。
天使の領域（フィリアラディアス）を守り人間を罰する役目を持つ天使・・・そう語り継

がれている。
　要はただの天使ではなく、戦うことを生業とする天使様ということだ。

――――厄介な事に巻き込まれたもんだなぁ

　他人事ではないが、あまりの急展開に心の中で一つぼやく。
　そして、そんな私の心を逆撫でするようにエンリッヒは慇懃無礼にお辞儀をすると、殊更(ことさら)ゆっくりと体を起こし手をかざし、その手に瞬時に大鎌を出現させる。

――――どうやら、武器まで天使らしからぬもののようだ

　そして、武器を手にした天使の瞳の金色が私を射抜いく。
　底冷えする瞳の光は殺気が満ち溢れ、彼がこちらを攻撃してくると本能的に私が思ったその時だった。

ガンッ

　金属がぶつかる音と、剣を持つ腕に衝撃。
　瞬(またた)きをする間に、エンリッヒは１０メートルはあった距離を一気に飛んでいた。
　スピードはかなり速い。
　私は紙一重(かみひとえ)で大鎌の鋭い攻撃を防御したが、一瞬でも反応が遅れていたら首が切れていた。
　エンリッヒの大鎌は私の首から１センチのところで、私の剣に遮られて止まっていたのだ。
　正に命からがらである。
　ギリギリと金属同士がきしみ合う音が耳元でする。
「あらぁ。結構やりますなぁ。」

軽くて暗い声が近くでする。
「そ・・・れはっ、どうもぉっ！！」
私は言いながら、腕に力を入れて大鎌をはじいた。
そのまま後ろに飛び体勢を立て直そうとしたが、その暇も与えられる間もなくエンリッヒの次の攻撃が左から振り下ろされる。
「ちっ・・・！」
崩れた体制のまま私はなんとか大鎌を剣で再び受ける。これまた、自分の首元ギリギリだ。
この悪魔のような天使は、どうしても私の首を胴体から切り離したいらしい。
鋭い大鎌は綺麗に磨(みが)かれていて、私のみすぼらしい姿が鏡のように映る。
鏡など持ち歩いていない私は、こんな形で久しぶりに自分の姿を見た。相変わらず、ボロボロな姿である。
その私と対照的な美しくもキモいエンリッヒの姿も私の剣に映り、また笑みを深めた。
「細っこいわりには大した腕力やねぇ。」
崩れた体制で膝を突いている私は、エンリッヒが上からかけてくる力に歯を食いしばり耐えるしかない。
しかし、それでも刃がだんだんと首元に近づいてくる。

「ヒロちゃんっ！！」
エヴァが叫ぶ。
ハクアリティスを放って、私を助けようと向かってこようとするのが視界の端に映った。
「来るなっ！」
私はそのエヴァの行動を遮るように怒鳴った。
エヴァはこちらを心配そうに見ている。
私はエンリッヒに押されながらも、エヴァを見つめながら首を振った。

「・・・っ」
エヴァが小さく息を呑む。
「エヴァ。」
私は彼の名を呼んだ。
「・・・逃げろ。」
そして、笑って告げた。
多分、あまり見れたものじゃない笑顔だったろうがエヴァを心配させたくなかった。
エヴァがかつて私とした約束を覚えているのかは分からないが、私の言葉に意を決したような表情をしてエヴァは頷き私を助けることなく背を向けた。
それを見てエンリッヒは驚いたような声を上げた。
「あらぁ？」
エヴァに意識を向けたエンリッヒの力が、一瞬だけ緩(ゆる)む。
私はそのエンリッヒの隙を見逃さず、エンリッヒを押し返しす。
そして、そのままエンリッヒの体に馬乗りになり、彼の動きを抑え込みその首元に今度は私が剣を突きつけた。
形勢逆転。
状況は私に圧倒的に有利と見えるだろうが、私にはそんな余裕はみじんもなかった。
ただ一刻も早く二人をこの場から逃げさせたかった。その感情のままに叫ぶ。
「エヴァっ！早く行けっ！！」
「・・・うんっ」
私のただならぬ様子に、一瞬呆けた様子だったエヴァが急いでハクアリティスを抱えて駆け出す。
「動くなよ。」
そして、私は一瞬も油断することなくエンリッヒに剣を突きつけ

ていたはずだった。
しかし、何かが光ったと私が認識してすぐ、私はエンリッヒの上から吹っ飛ばされていた。

「ガッ・・・」
何が起きたか瞬間、理解できなかった。
見えない力に体を吹っ飛ばされて岩に叩き付けられた私は、背中に強い衝撃を感じ一瞬息ができず気が遠くなる。
それでも痛む体を省(かえり)みず、私はすぐエンリッヒの攻撃に備えようとした。
しかし、天使の声は私から離れた場所から聞えた。
「だから、わいは花嫁さんをお迎えにあがったと言ってまっしゃろ？どうして、逃げるんかなぁ？」
私の目にエヴァを見下ろす長身の天使、いや悪魔の姿が映った。
「・・・エヴァっ！」
エヴァは言葉もなくハクアリティスを抱えて固まっている。
エンリッヒは笑みを殺気で歪(ゆが)ませる。
「ちょっと、それは見逃せませんわぁ・・・。」
大鎌がエヴァの血を啜(すす)ろうと高々と振り上げられる。
「エヴァアッ！！！」
私は叫びを上げた。
この距離では私の助けは間に合わない。
大鎌が私の叫びをあざ笑うかのように振り下ろされた。
エヴァの恐怖に満ちた瞳が、その大鎌が振り下ろされる様をじっと見つめている。

「やめろぉっ！！！！」
慟哭(どうこく)が、晴れ渡る不浄(ディス・エンガッド)の大地の空を突き抜けた。

第6話　天使は悪魔の如く笑う　2（後書き）

加筆・修正　08・4・23

第7話　天使は悪魔の如く笑う　3（前書き）

注意書き

この話は戦闘場面があり、ぬるいですが流血表現や暴力表現等があります。
お嫌いな方はご注意くださいませ。

第7話　天使は悪魔の如く笑う　3

千年前、神と天使よって東方の楽園（サフィラ・アイリス）に追い詰められた人間たちが行き着いたのは、大地と大地の狭間にあるといわれる最果て（ロシギュナス）の渓谷という場所。

そこではかつてないほど激しい戦いが繰り広げられ多くの人間が天使によって殺された。

天使は神に逆らった人間たちに与えられし大いなる力を見せることにより、人間たちに戦うことを無意味さを知らしめようとしたのだ。

しかし、天使の勝利による短期決戦で決着がつくかと思われた最果（ロシギュナス）ての渓谷の戦いは予想外に泥沼の様相を呈することとなる。

――何故ならば、人間に天使の力に匹敵（ひってき）する能力を持つ一族の存在があったためである

言い伝えによると彼らは強大な悪の力を持ち、人間たちに神から大地の奪取をすることを唆（そそのか）し扇動したというのだ。

しかして、その一族の存在により神の目論見（もくろみ）は外れ、戦いは天使にも多大な犠牲を出す熾烈（しれつ）なものへと変わり、世界の果てにあるといわれる最果（ロシギュナス）ての渓谷は地獄の戦場と化した。

そして、戦いは両軍とも決着がつかないままに、終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告の発動が天使を勝利へと導き人間を地獄へと突き落とした。

結果、東方の楽園（フィリアラディアス）は神の教えのもと天使たちに導かれかつての楽園に還る日を待ち続け、人間は神に懺悔（ざんげ）と祈りを捧げ続けるエンディミアンと、未来永劫罪（みらいえいごう）を償い続けるアーシアンに別れ、現在まで天使たちに支配され続けている。

しかし、悪の力を持つ一族についての記述は終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告後、一切途切れており彼らがどうなったかについては後世に生きる私たちに

は何一つ分かっていない。
彼らが歴史上に登場したのは、この最果(ロシギュナス)ての渓谷の戦いにおける神話の記述しかなくその一族については名すら分かっていないのだ。
それでも、語り継がれる物語の中で、その一族の末裔(まつえい)ではないかと言われている一族がある。
その一族は自らを流離人(さすらいびと)と名乗る流浪を続ける民・・・すなわち私の一族だというのだ。
正直言って、自分がそんな大それたことをしでかした一族の末裔などということは聞いたこともなかったのだが（それに例えそうだったとしても千年前もの話で私には何の関係もないだろう）、それでも一つだけ私には普通に人間とは違うかもということに思い当たる節があった。
それは・・・

「あらぁ？」

エンリッヒの妙に気の抜けた声が、私の悲鳴に似た叫びの名残が残る大地に響く。
「エヴァさんとハクアリティス様が、わいの前から消えてなくなったように見えるんやけど、ヒロさんどう思わります？」
悪魔の大鎌が振り下ろされた先に、エヴァの惨殺(ざんさつ)死体は存在しない。
私の目の前で大鎌が振り下ろされるその瞬間、エヴァとハクアリティスは忽然(こつぜん)と魔法のようにその場から姿を消していた。
――エンリッヒも見ているのであれば、これは幻でも私の願望でもないらしい

私は安心で体から力が抜けるのを感じた。
「・・・よかった。」
思わず安堵の溜息と共についた言葉。
実はエヴァたちがこの場から消えたのは奇跡や偶然などではなく、私の使った『魔法』のおかげ。
故にもちろん実はエヴァたちが消えることは想定内の事態であった。
ただ、エンリッヒの行動が思いのほか早かったため、『魔法』がギリギリまで発動しなくて心臓が止まるほど驚いたのだ。
まあ、何はともあれ『魔法』は間に合ったのだから、エヴァとハクアリティスは今はもう安全な場所にいるはずだ。
安心したのもあるが、このいけ好かない天使を出し抜くことができて非常に愉快(ゆかい)で、思わず口元に笑みを浮かぶ。
「ちょいとヒロさん?その妙に人の悪そうな笑顔は何ですの?」
しかして、私が笑っていることに何かを感じ取ったのかエンリッヒがジトリと私を見据えた。
同時にエンリッヒの声の調子や雰囲気は変わらないが、彼を取り巻く空気の温度が下がったのを感じた。
さっきまで、やられてばかりだったので実に気分がいい。うん。
私は更に笑みを深め、
「さあ?別に?」
と嫌味ったらしく言ってやる。
わざわざ敵に素直に教えてやるわけはないだろうが、この笑顔を見れば私が何かを知っているのは明らかであろう。
エンリッヒがあからさまに溜息をつく。
「全くアーシアンちゅうのは、どうしてそんなに死にたがりなんかねぇ?天使を挑発するなんて神への冒涜(ぼうとく)でっせ?何の得にもならしまへんがな。」
そして、寧(むし)ろハクアリティスがいなくなろうとも自分の優位を疑わず私を挑発してくる。

確かに二人がいなくなったところで、私とエンリッヒの力関係は変化があるわけではなく、私の天使を相手にするという絶望的状況は変わっていないのだ。

――だが、それがどうした？

「どうせ生まれながらの罪人だからな、今更冒涜の一つや二つ大したこともないだろう。それに何の得にもならなくても私は気分が良い。」

どうせアーシアンは何処までいっても天使たちにとって罪人なのだ。

そう思えば、自分でも呆れるほどに開き直って啖呵をきれた。

そんな私にエンリッヒは戸惑ったような表情を浮かべる。

「こんな風に正面から喧嘩売られるんは久しぶりですわ。言っときますが、わいは向こうてくる相手にはどなたさんであれ容赦しまへんでぇ。あんさん、まさか天使に勝てるとでも思ってるんでっか？」

言っている言葉は冗談半分だったが、その声は殺気が篭った威圧するような低い声だった。

「だから、さっさと言ってしまいなはれ。ハクアリティス様さえ渡してくだはれば、あんさんとエヴァさんは見逃しましたりますから。」

はなから自分に敵うはずもないのだから、ハクアリティスの居場所さえ教えてくれれば逃がしてやろう・・・ということらしい。

どうやら、ハクアリティスはそれほどまでに彼らにとって重要人物ということのようだ。

――本当に厄介なことに巻き込まれたもんだ

そう改めて思いながら、天使の提案にさてどうしたものかと考える。

まあ、普通なら昨日会ったばかりのあんな傲慢な女のために私もエヴァも命を張る必要などない。だったら、さっさと自分たちが助かる選択を選べばいいだけだ。

しかし、その反面で天使の物言いに私は酷く馬鹿にされた気がした。

確かに人間は天使から見たら非力だろう。それでも、人間にだってプライドってものがある。

だから、ほどんと無意識に言っていた。

「馬鹿にしないで貰おう。そんなみっともない真似ができるか。」

「何でや？あんさん、ほんまにハクアリティス様の愛人かぁ？たかが女子(おなご)一人のために自分と仲間の命、差し出すといわはりますのか？」

そんな私に私の理性を代弁してくれるエンリッヒ。

だが、私はその理性を振り切った。

「そんな訳あるか。人間と言うのは天使ほど高尚(こうしょう)にはできていない。誰かのために自分を犠牲にするなんて、綺麗事は言うわけないだろう。」

「じゃあ、どうしてでっか？」

「まず、一つはお前の言うことが信じられない。」

見逃すと言われて、二人の居場所を言ったらすぐに殺される可能性だって十二分に考えられる。

「あははっ。なるほど！一応誠心誠意(せいしんせいい)言うたつもりでしたが、わいは中々人に信用されんのですわぁ。別にあんさんたちのことは命令されてるわけじゃないんでっから、元々抵抗さえなかったら見逃すつもりだったんでっせ？」

だから、そのしゃべり方が不審すぎて信用ならんのだ。

この男の様子では、男を信用しようとする人物のほうが稀(まれ)であろう。

「一つってことは、それだけじゃないんでっしゃろ？」

私の心中など知らないエンリッヒが促(うなが)す。

「まあ、大したことじゃないさ。もう一つって言うのは、単にこれで私が二人のことを話して助かったところで、後味が悪いからってだけのことだ。」

「そ・・・れだけ、でっか？」

私が鼻息荒く言い切ると、エンリッヒは驚いたような顔をした。

「そうだ。人間って言うのは天使と比べれば短い人生なんだ。だからこそ私は後悔や後味の悪い生き方だけはしたくない。自分の命は自分の思うように使う。」

天使相手に何を演説しているのか分からないが、天使相手だったからこそだったのかもしれない。

人は時として自分でも理解できない行動をしてしまうものである。

しかし、話もここまでだ。

「それに私もこっからが本気だ。心配されなくても、簡単に殺されてやる気はない。人間を舐めんなよ。」

そう言って笑うと、エンリッヒも笑った。

「あんさんには言葉で言ってもわからんようや。天使を甘く見とるとえらい目におうてしまいますよ？」

「上等だ。」

それ以上の語る言葉は無用だった。

――――ガンッ

剣と大鎌を交じらわせ、私と天使・エンリッヒの本気の戦いの幕が切って落ちた。

戦いは一応の均衡を保って、想像通りしばしエンリッヒ優位で停滞した。

何故なら互いに剣と大鎌による攻撃は互角といってよかったのだが、如何せんエンリッヒにはあの翼がある。

私が追い詰めるとひらりと上空に逃げられるのに対して、私には何処にも逃げ場はない。
「はぁ、はぁ」
おかげで一方的に私ばかりが消耗をする。
そして、私の劣勢を更に助長する要因がもう一つ。
「蒼の風（アンダ・シェスタ）」
私との剣戟（けんげき）を避けて上空に逃げていたエンリッヒが言霊を口にすると、彼の翼が淡く蒼い光を発し上空に無数の風の刃が私目掛けて放（はな）たれる。
これぞ天使の力。
人間がもちえない『魔力』、人智を超えた力というやつである。
その自分の真上にある無数の風の刃を、避けることも叩き落すことも不可能だと判断した私は、すぐさま腕で体を抱え込み防御の姿勢をとった。
「・・・っ」
痛みに思わず呻（うめ）く。
風の刃は致命傷（ちめいしょう）に至るほどの威力はないが、私を容赦（ようしゃ）なく切り刻んだ。
そして、その傷を確認するまもなく今度はエンリッヒ自身が大鎌を振り下ろしてくる。
「グッ・・・」
辛（かろ）うじてエンリッヒの大鎌を剣で受け止めるものの、その受け止めている腕にも、踏ん張っている足にも無数の風の刃が刺さっていたり切り傷ができたりしている。
エンリッヒの攻撃を受けたその傷口から血が滲（にじ）みでた。
「見ているこっちが痛そうでっせ。さっさと居場所を吐いたらどうですの？」
耳元で天使の囁（ささや）き・・・いや、悪魔の戯言（ざれごと）。

「誰がっ・・・！」
血が出ようが構わない。私はエンリッヒを押し返し、そのまま彼の体に切り込んだ。
剣の切っ先がわずかにエンリッヒの胸元を掠(かす)るが、大した傷は負わすことができない。
エンリッヒは再び上空へ逃げる。
「はあ、はあ、はあ」
息が上がる。痛みが全身に走る。
急速に血が抜けていくのがリアルに感じられて眩暈(めまい)がした。
見れば私は全身血まみれになっていた。
もう一度、同じ技を喰らったら危ないかもしれない。
しかし、私の願いも虚(むな)しく、エンリッヒは再び技を使おうとまた翼を光り輝かせる。
「どうしまっか？もう一度この技を喰らいまっっか？その怪我でもう一度これを喰らったら、ただじゃすみまへんで？さあ、話してしまいなはれ。」
そんなこと言われずとも、本人のほうがよく分かっている。
風の刃はエンリッヒの号令を待つ犬のように、従順に上空で整列している。
エンリッヒが攻撃を命令すれば、刃は寸分狙いを外(はず)すことなく私を貫くことだろう。
「さあ。」
「・・・」
「さあ。」
「・・・」
私が押し黙ると、勝ち誇った笑みでエンリッヒが声を高らかに上げる。
絶体絶命のこの状況で話さないはずはないという自信が見て取れた。
「さあっ！」

二人の居場所を話すと言うことはエンリッヒに命乞いをするということ。命欲しさに強い相手に屈することだ。

命は無論大事であるから、人間がそういう行動に出ることに私は恥ずべき感情は抱かない。

しかし、それは同時に戦う者としてはあまりに屈辱的な選択であるのは確かなのだ。

だから・・・

「誰が言うか。」

私は最後まで意地を張り通す。

「な・・？！」

「誰がお前などに屈するか。」

エンリッヒに色々演説したくせに、そんなこととうに忘れていた。戦っているうちにエヴァのこととか、ハクアリティスのことは私の頭から消えうせている。

誰がこのいけ好かない男に逃がしてくれと許しなど請うものかと、今の私を突き動かしているのはその思いだけだった。

それがなければこの怪我で気を失っていたかもしれないし、エンリッヒに許しを請うていたかもしれない。

人間、意地になる時というのはあまりに単純な動機のせいだったりする。

「わかっているんでっか？これは脅しじゃあらへんのですよ。わいは・・・」

何故だかエンリッヒのほうが動揺している。

この男、元々関係ない私を攻撃するのにためらいでもあるのだろうか。さすが、天使様はお優しいことだが、何とも甘い。

私は鼻で笑ってやった。

「ごちゃごちゃ、うるさい。やるんなら、やれ。受けて立つ。」

そんな私にやけくそになったのかエンリッヒが、腕を振り下ろし

風の刃に号令をかけた。
「・・・っ！死んでも、しらへんからなっ！」
先ほどよりも多いのではないかと思われる風のの刃が、上空から私目掛けて降り注ぐ。

――誰がこんなところで、死んでたまるものかっ！

降り注ぐ風の刃がスローモーションのように、ゆっくりと落ちてくるのを見上げながら私は決断を下す。

――『あれ』を使うしかない

私は流れ出た血がべったりとついた手で、剣の刃の部分をつかむと言霊と一つ口にした。
「目覚めよ、黒の剣（ローラレライ）。」
銀の刀身が、私の血からじわりと黒く侵食（しんしょく）する。

――私が唯一自分が他の人間と違うと思う力、黒き力の目覚めである

第7話　天使は悪魔の如く笑う　3（後書き）

加筆・修正　08．4．29

第8話　天使は悪魔の如く笑う　４（前書き）

注意書き

第八話には、戦闘場面があり、ぬるくはありますが流血表現・暴力表現があります。

嫌いな方・苦手な方はご注意ください。

第8話　天使は悪魔の如く笑う　4

『あれ』を使うことに、一抹の不安があったのは事実だ。
『あれ』は私に大きな力を与えるが、その大きさは私が使いこなせるほど容易なものじゃない。
力とは自分で使いこなせてこそ力なのだ。
使用者が振り回される力など、自分の身まで危なくする諸刃(ものは)の剣でしかない。
だから、私は余程のことがない限り『あれ』を使ったことはないし、使ったことも本当のところ両手に余るほどの回数しかない。
しかし、この天使との戦いというのはその余程の事態であることは確かであり、そうである以上、不安があったとしても私は力を使うことに躊躇(とまど)いは微塵も感じてはいけないのだ。

――何故なら生き続けること、生き延びること、私はその事に対しては酷く貪欲でなければならないと定められているのだから

「目覚めよ、黒の剣(ローラレライ)。」
言霊(ことだま)を呟くと、剣の刀身が黒く侵食されていく。

――ドクン

その様を瞳に映し私は胸が痛いほど高鳴るのを感じ、体温が上昇し妙な高揚感(こうようかん)に包まれる。
そして、その高揚感に身を任せるように私は剣を腰辺りで構えると、迫りくる風の刃に向かい思いっきり振りぬいた。
すると剣から黒い衝撃波(しょうげきは)が生まれ、迫っていた風の刃を根こそぎ

弾き返した。
そして、衝撃波は威力が削がれることなく、そのままエンリッヒに目掛けて襲いかかる。
エンリッヒも突然のことに反応が一瞬遅れ、衝撃波が彼の肩口から腰辺りまでをばっさりと切り裂いた。
エンリッヒの表情に苦悶の色が走り、鉄壁だった彼に隙が生まれる。
それを逃す手はなく、私はそのまま一気に勝負を決めるべく、次の一撃を剣を振りぬいて放つ。
「いっっけえぇ！！」
しかし、最悪なことに衝撃波は天使を掠ることもなく、見当違いのところに飛んでいった。
攻撃のモーションに入って足を踏み込んだときに血で足がすべり手元が狂ったのだ。
舌打ちをしながら私はすぐさま二撃目を放つ体勢に入るも、今度はひらりとエンリッヒに交わされてしまう。
そして、私が三撃目を放とうとした瞬間、最後にはエンリッヒを見失った。
「？！」
――――何処だ？
辺りを見回したが、何処にも天使の姿も気配も感じない。
どこかの岩陰に潜んでいるのだろうかと、私は気配を探すために神経を集中させる。
そして、その瞬間に殺気だった気配が突如として現われた。
――――私の背後に！
「いきなりで驚きましたわ。でもやられっぱなしは、性に合わない

んですわ。」

後ろから耳に息を吹きかけられ、寒気が背中に走る。

反射的に振り返った先には、私に大鎌を振り下ろすエンリッヒがいた。

「これでしまいやぁっ！」

エンリッヒが吠える。

この距離では逃げられないと感じた瞬間に、襲いくる痛みに備え私は瞼を強くつむる。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

しかし、どれほど待っても大鎌の刃の冷たさも、大鎌に切られた痛みも私を襲うことはなかった。

「・・・？」

不思議に思い私は恐る恐る瞼を開く。

「！」

そして、どういうことか大鎌を振り上げたまま時を止めたように固まったエンリッヒがそこにいた。

大鎌は私の頭までわずか数センチのところで止まり、エンリッヒは驚愕で目を見開いたまま固まっている。

私は何が起こったか分からずエンリッヒに触ろうとして、手に持っている黒の剣に引っ張られるような違和感を感じた。

「？」

何かに引っ掛けたかと思い、剣を見下ろすと剣から足元の血溜りに血が滴り落ちるのが見えた。

――――ポタリ

血が不浄の大地に血溜(たま)りをつくる。
血の流れを視線で辿(たど)り、剣の先に目をやって私は驚いた。
――そこにはエンリッヒの腹部を貫いた黒の剣(ローラレライ)があった

「ガハッ・・・」
呆然と私が目の前の状況を見ていると、エンリッヒが苦痛に顔を歪めて吐血(とけつ)した。
私はありえない状況に混乱した。
だって、自分の前方に向けて剣を構えていたし、それに対しエンリッヒは真逆である背後ろから私を襲ったはずなのだ。

――現状を整理してみれば、黒の剣(ローラレライ)がエンリッヒを貫けるはずがない

だが、現実として剣は間違いなくエンリッヒを貫いている。
ありえない状況を現実にしたのは、黒の剣(ローラレライ)がまっすぐ前を向いていたはずの自身を伸ばし、まるでゴムか何かのようにグニャリと曲げ１８０度反転を果たしていたという事実。

――どうして、こんなことになっている？

状況として私は私の手によってエンリッヒを倒した・・・ということになるのだろう。
だが、現状は何一つ私の手によるものではないのだ。
そもそも私は黒の剣(ローラレライ)にこんな能力があることさえ知らない。
知らない能力をどうして私はこうして使っているのだろう？
考えられるのは黒の剣(ローラレライ)が私の意志とは関係なく、独りでに勝手に動いたという可能性。

――――だから、この力は使いたくなかったのだ

後悔をするつもりはないが、血とは別の苦いものが広がるのを感じた。

自身で制御できない力。

それに翻弄されている自分が腹立たしく、同時に何処となく恐ろしかった。

そして、柄を握る手にわずかに力を入れると、黒の剣（ローラレライ）はまるで生きているかのようにエンリッヒから離れすぐさまいつものまっすぐな刀身にもどる。

少しだけ振ってみたがグニャリと曲がるどころか、確（しっか）りとした硬い金属の感触があり、今となっては私の意志でどうにも曲がるようにすることはできないようだ。

しかして、私がそんな風に現状の確認に浸っていると、貫いていた剣が抜けてエンリッヒが力尽きたように地面に崩れ落ち傷口を押さえながら呻（うめ）く。

「あ・・・おいっ！」

思わず駆け寄って、その肩をつかもうとしたら思いのほか強い力で払われた。

「あんさん、何者や？・・・アー・・シアンが何で、そないな攻撃を・・・。」

言葉は痛みのためか途切れ途切れだが、意識は確（しっか）りしているようだ。

出血さえ止めれば命に別状はないだろう。

逆に言えば、止血をしなければこの天使は恐らく死ぬ。

そう考えて私の頭に浮かんだのは、勝ったことや命を奪われなかったことに対する喜びではなかった。

――――むしろ感じたのは妙な後味の悪さ

「・・・」

だから、私はしばし考えるように黙り込んだ後、倒れるエンリッヒのそばに膝をついて彼の怪我を見ようと彼を覗き込んだ。

こんな私としても不本意な戦いの中で死なれては目覚めが悪いことこの上ない。

「な・・にを？」

エンリッヒの意識は遠のいてきているようで焦点が合っていない。

「まあ、お前は不本意かもしれないが大人しく止血だけでもさせろ。」

腰にかかる鞄には、薬品や包帯なども入っている。

「ははっ・・自分で・・・怪我させおって、その手当てをしてれ・・ば世話はありませんなぁ。なんや、やっと色々肩の荷が下りるかとおもったん・・のに。」

呻くエンリッヒの言葉は、最後は誰にいうともなしに独り言のようだった。

だが、血だらで化粧も剥げかけている顔は見られたものではないが、それでもそんな天使の表情が酷く私の中では人間じみているような気がした。

「もう、しゃべるな傷に響くぞ。」

エンリッヒの傷は剣自体が細身だったこともあり、さほど大きな傷口ではない。

縫い合わさずとも、止血剤と包帯だけで応急処置はできそうである。

「なあ、あんさん・・・は、ほんま・・・なんなん・・や？」

「・・・」

私は弱弱しく問われたエンリッヒの疑問に、答えることができなかった。

沈黙したまま私は横たわるエンリッヒを見下ろしながら黒の剣を見た。

気がつけば黒から銀にに戻っていたが、私とエンリッヒの血がこびりついた刀身は赤黒い。
それを見ながら私はエンリッヒの問いを今度は自問自答する。
アーシアンである私が、本来こんな力、天使の力にも似た力を持っているはずもないのだ。

――――これはまさか本当に千年前の悪の力・・・だとでもいうのか？

今更だとは分かっていたが、それでも私は自身にそう問わずにはいられなかった。
しかし、どれほどに考えたところでその剣については最悪の思い出は限りなくあるが、殆ど何も知らない私はエンリッヒの問いに答える言葉を持たない。
私は沈黙を守り、彼の手当てに専念した。
エンリッヒも私が答えるつもりはないと思ったのか、それともう何かを言うのも億劫なのか、それ以上は何も口にしなかった。
「・・・天使っていうのは不老不死だと聞いていたが、怪我をすれば動けなくなるものなんだな。致命傷だったら、死んだりもするのか？」
手当てをしながら、私は思ったことを口にした。
「あたりま・・・えでっせ、天使かて生き物やからね。歳老いることはあらへんが、心臓をとめられれば死ぬし・・・首を絞められても死にますわ。・・・あの、もうちょっと、包帯ゆるめて・・・くだはいません？」
「締め付けないと止血の意味がないだろう。」
エンリッヒの願いを即答で却下し、私はなるほどと妙なことに感心していた。
てっきり不老不死だというので例え息絶えてもまた復活したりするんじゃないかと途中で思い至り手当てを中断しようかと思ったのだが、そういう事なら今やっている手当ても無駄にならなそうだ。

（要は天使は不老というだけで、不死というわけではないのだ）

そして、エンリッヒの怪我の程度を見るに、私のほうが遥かに軽傷であり、これならば自分の手当てが終ったら彼をここに置いて、エヴァたちと合流するのも難しくはないだろう。

エンリッヒならば勝手に一人で帰るだろうと、働かない頭で先のことを予定していた。

――――そんなことばかり考えていたから気が付かなかったのである

「動かないでもらおうか、アーシアンよ。」

気配に気が付いたときは遅かった。

十数人の天使に囲まれ、私は剣を突きつけられていた。

「・・・天使？」

油断していた私は、エンリッヒの仲間が近くにいるという可能性を思い至らなかった。

恐らく彼らはエンリッヒの仲間であろう、そうでなければ不浄（ディス・エンガッド）の大地にこんなにたくさん天使がいるはずもない。

「くそ・・・仲間を呼んだのかっ。」

どんな手段かはしらないがエンリッヒは、自身一人で動けなくなったために私に気が付かれぬように仲間に助けを求めたのであろう。

そんなことにも気が付かず、わざわざ手当てまでしてやるなど馬鹿だった。さっさと逃げ出せばよかった。

本気で私は後悔し唇をかんだ。

「無駄な抵抗はしないことだ。」

私を囲む天使たちはエンリッヒとは違い、全身を鎧に身を包んでいるがその翼は皆赤っぽい色をしている。

しかし、髪や瞳のように個人差があるらしく、色合いは様々だった。

私は剣を突きつけられたまま、天使に両腕を拘束された。

「・・・あなたらは・・・第三師団のお方ですか？ど・・・うして、

ここに？」

「それはこちらの台詞ですよ、エンリッヒ第一師団副団長殿。我々はただハクアリティス様の探索の命を受け、ここにいるだけです。そのハクアリティス様を追っていたら、偶々あなたが倒れていた所に鉢合わせたのです。」

会話の様子からどうやらエンリッヒが助けを求めた訳ではないらしい。

しかし、偶然にしてはできすぎであろう。

「あははは。・・・いやぁ、ちょっと色々ありましてねぇ・・」

「まあ、その話は後です。先にこのアーシアンを始末します。どんな手を使ったかは知らないが、天使を傷つけたアーシアンは死あるのみですから。」

首もとに突きつけられていた剣が更に迫った。

エンリッヒにやられた傷は痛むし、血は出て行く一方で私の意識もぼんやりし始めている。更に体の自由は天使にがっちりと固められて、身動き一つできない。

――正に万事休す

私は一体今日何度死を覚悟すればいいのだろう。

そんなことを考えながら、それでも天使たちに屈することだけは最後までするまいと閉じそうになる目を見開いて天使たちを睨み続ける。

すると、他の天使に肩を貸してもらっているエンリッヒと目が合った。

彼は笑顔でもなく、また戦っていたときの殺気に満ちた目でもない、妙に静かな瞳でこちらを見ていた。

私も何故だか彼から目が離せないままでいたら、エンリッヒがあのいけ好かない笑みで私を見た。

ただ、先ほどまであった殺気だけは消えていたが、やはり生理的

に受け付けない笑みだと思った。
そのエンリッヒが私から視線をはずすと、口を開いた。
「ああ、その人は殺さんどいたほうがいいでっせ？第三師団さん。今のところハクアリティス様の行方の手がかりを知る、唯一のお人ですからなぁ。」
「何？それは本当ですか？」
天使がエンリッヒを振り返る。
「ええ。わいも偶々(たまたま)そのお人とハクアリティス様が一緒にいるところを発見した・・・までは良かったんやけど、あははこの通りですわ。・・・イタタ」
明らかに嘘っぽそうな叫びを上げるエンリッヒが、天使に支えられて私に背を向ける。
そうしてエンリッヒは去っていったのであるが、次に天使たちは私を更に狭い円で囲むと、私に凄(すご)んだ。
「アーシアン！さっさとハクアリティス様の居所を吐けっ！！！」
私は大地に顔を押し付けられて痛みに呻いた。
乱暴な物言いに所業。私が描いていた天使とは程遠い。
「・・・誰がいうか・・それに、私は一端(いったん)彼女を別の場所に移したに過ぎない。彼女はもう私の仲間と別の場所に逃げたろう。」
私とエンリッヒが戦っている間、逃げる時間はあったはずである。
「それを信じるとでも思うのか？！あとでゆっくり吐かせてやるっ！おい！このアーシアンも連れて行けっ！」
そう言って乱暴に引っ立てられる。
とりあえず殺されずにはすみそうだが、先行きは非常に不安である。
しかし、次第に気が遠くなり始めていた私には、それ以上先のことなど何も考えられず、重たくなる瞼に身を任せたのである。

第8話　天使は悪魔の如く笑う　４（後書き）

『天使は悪魔の如く笑う』終了です！ハクアリティスを狙う天使の登場、エヴァたちとの別離、ヒロの謎の力などなど、色々と急展開でしたが如何でしたでしょうか？
次からは天使に捕まったヒロではなくエヴァ視点で物語が展開する予定です。

加筆・修正　０８．４．２９

第9話　あの約束を覚えていますか？　1

＜ＳＩＤＥ　エヴァ＞

――約束をしてくれ

貴方はそう言って笑っているはずなのにとても悲しそうな顔をしたね。

――私が逃げろと言ったら必ず逃げると・・・、決して私を助けるために自分を犠牲にするようなことだけはしてくれるな

優しい貴方らしい言葉だと思ったけど、そう約束をかわしながらも貴方の目に決して僕が映っていないことを僕は知っていた。
貴方の中に僕じゃない大切な誰かがいることを僕は知っている。
でも、それでも僕はいいんだ。
代わりに僕は貴方と約束を交わしたんだから・・・

――ねえ、僕との約束を覚えているよね？ヒロちゃん

【あの約束を覚えていますか？】

「――――う」
意識が浮上する感覚と同時に背中に痛みを感じて僕は呻(うめ)いた。

――あれ、僕どうしたんだっけ？

どうして背中が痛いのかも分からなくて、ただ頭がぐるぐる回って少しの間自分がどんな状況にいるのか把握できなかったけど、すぐに僕を殺そうとする天使の大鎌の映像が頭の中でフラッシュバックして、僕は飛び起きてとりあえず自分の首と体が繋がっているか確認した。

そして、自分がどうやら生きているらしいことを確かめたところで、僕はやっと辺りを見回す余裕ができる。

あたりは人気のない寂れた建物がポツリポツリとある町外れのようだけど、ヒロちゃんもあのエンリッヒとか言う天使も見当たらない。

それを見てヒロちゃんの思惑通り、僕はちゃんとあの場から逃げ出すことに成功したことが分かる。

――ヒロちゃんは無事かな？

あんなに切羽詰ったヒロちゃんを今まで見たことがなかったし、何より相手は天使なんだ。

ヒロちゃんは無事だと信じる気持ちはあるけど、だからって彼を心配する自分を止めることなんかできない。

――もし、ヒロちゃんに何かあったら僕は・・・

そう思うと涙が溢れそうになる。

でも、逃げ出した僕にはここでヒロちゃんの無事を祈ることしかできないし、あそこにいたところで僕に何かができたとも思えない。

それに『逃げろ』と言われたら何であろうと必ず逃げなきゃいけない約束を僕はヒロちゃんと交わしているし、泣いたところでヒロちゃんのピンチが変わるわけでもない。

だから、僕は涙を流すまいと顔を振り、そして、横に誰かいるの

に気が付いた。
そこには涙に顔を濡らしたまま気を失っている女・ハクアリティスがいた。

――この女のせいで・・・

思わず僕は心の中で毒づく。
本人に自覚はないかもしれないけど、ヒロちゃんは綺麗な人や女子供にに弱い。
だから、こんな見ず知らずの女をほいほいと助けちゃうけちゃうんだ。
まあ、弱い者を放っておけないそんな所がヒロちゃんの良いところで、そんなヒロちゃんだから僕も大好きなんだけど。
でも、だからって女を一人逃がすために、天使を敵にしようなんて子供の僕から見たって馬鹿としか言いようがないよ。
「これで本当に死んじゃってたら、ただのバカなんだから。絶対に約束は守ってよね、ヒロちゃん・・・」
そして、僕は全ての不安に蓋をして精一杯の強がりを言って、僕は右手の人差し指にしている血に濡れている足跡の指輪（エンダー・ケルト）を見て、これを貰った時のことを思い出す。

「ほれ、受け取れ。」
3年くらい前、ヒロちゃんが無造作に投げたものを受け取って、僕が手を開いてみるとそれは古ぼけた指輪だった。
「うわっ！もしかしてプロポーズ？」
そんなことがある訳はないと分かっているけど、冗談で左手の薬指に嵌（は）めようとしして殴られる。
「馬鹿者。そんな訳あるか。」

「いったぁ！」
ヒロちゃんはしゃべり方同様性格も堅いから、時々冗談が通じないときがある。
そんな時のヒロちゃんの一撃は、しょちゅう僕を叩くときのそれより五倍くら痛いんだ。
ヒロちゃんが当然の制裁だというばかりに鼻息を荒くして、僕がそれを恨みがましい目で見上げる。

でも、この頃の僕はそうやってヒロちゃんに怒られることで自己認識をしていたのかもしれない。（言っとくけど、マゾじゃないよ？）
何しろヒロちゃんと出会ったばかりだったこの頃は、彼と会う前のことは何一つ記憶がなかった僕には自我というものが酷く不安定な時期だった。（『エヴァ』という名前もヒロちゃんがつけてくれた名前なんだ）
僕の覚えている初めての記憶は、僕に剣を突きつけて怖い顔をしていたヒロちゃんの顔。
ちなみにヒロちゃんと出会って3年くらい経つけど、記憶は未だに何も思い出せていない。
ヒロちゃんは僕に剣を突きつけてたし、僕が記憶を失う前のことを知っているんじゃないかと思うんだけど、
「自分で思い出さないと、意味がないだろう。」
と言って何一つ教えてくれようとはしない。
そんなこと言われても、当たり前だけど僕は納得できない。
でも、僕が記憶のことを聞くとロちゃんが困ったような顔をするから、いつしか僕からはその話をしなくなった。
まあ、記憶がなくて困ることは何にもないし、それよりもヒロちゃんが困ることはしたくなかった。
記憶がなくなった雛鳥みたいな僕とって、ヒロちゃんは親鳥みたいなもので何よりも大切で大好きなたった一人の人。

――だから、もしかしたらこんな事を思う僕は異常なのかもしれないけど、思い出せない記憶より僕にはヒロちゃんさえいればそれでいいと・・・そう、思えたんだ

で話は元に戻るけど、僕は頭を抱えながら改めて渡された指輪をしげしげと眺めた。

確かにエンゲージリングにしては、その指輪は酷くぼろい。

所々赤黒い汚れが目立つ銀の太めな指輪で、中心には片足をデフォルメした足跡が黒色で刻印されていて、まるでおもちゃの指輪みたいだ。

そして、僕から何も言わないと、ヒロちゃんが指輪について説明し始めた。

「それは我が一族に伝わる『足跡の指輪（エンダー・ケルト）』。驚け。なんと、こいつは使用者が今まで行ったことのある場所なら、願えば何処でもワープできるという素敵アイテだ。」

『驚け』って、『素敵アイテム』って・・・、微妙にヒロちゃんのキャラとは違う物言いと、突拍子もない指輪の説明に僕は吹き出した。

「あははっ！うそぉ！」

だけど、すぐにヒロちゃんに睨みつけられて、僕の笑顔は引っ込む。（もう一度、殴られるのはゴメンだもん）

「嘘じゃない。」

「絶対嘘だよ。ありえないって！」

でも、殴られるのが怖いからって信じられないもんは信じられない。

そして、頑固に反論する僕にいつものようにヒロちゃんがため息交じりに折れてくれる。

「・・・まあ、信じられないのも当然か。じゃあ、私が今ここで実践（じっせん）してやるから、よく見ておけよ。」

それに頷いては見るけど、ワープなんてそんな魔法みたいなことできるわけがない。
指輪を返しながら僕はかなり胡散臭そうな顔でヒロちゃんを見ていたんだろう。
ヒロちゃんはちょっとだけむっとした顔をしたまま、僕の思いもしなかった行動に出る。
「ヒロちゃん？」
なんとナイフを取り出すと掌を少しだけ切って、溢れてきた血を指輪に垂らしたんだ。
「誘え、足跡の指輪。」
そして、ヒロちゃんが小さく呟く声が聞えた次の瞬間に、本当に僕の目の前から影も形も消えてしまった。

「・・・ヒロちゃん？」

一瞬手品か悪戯かと思って、荒地をせわしなく見回すがヒロちゃんは何処にもいない。
「う、嘘？・・・どこ？」
まさか本当にいなくなるなんて思っても見なかった僕は急に怖くなった。
走り回って探してみてもヒロちゃんは何処にもいない。
指輪のことなど僕の頭にはもうなくて、ただヒロちゃんを求めて僕は探し続けた。
「ヒロちゃん！ヒロちゃん！」
僕はもう泣き出して半狂乱で探し回った。
「エヴァ？！」
それからどれくらい経ったか分からないけど、ヒロちゃんが肩で息をしながら僕を呼ぶ。
「う～っ。ヒロちゃぁん！」
僕は安心したやら気が抜けたやらで恥ずかしながら、大泣きして

ヒロちゃんに抱きついてしまった。
「エヴァ、どうして動いたんだ?元の場所に戻っても、いないから探し回ったじゃないか。しかも泣き声聞えてくるし。」
「ばかぁっ!」
抱きついて離れようとしない僕に、ヒロちゃんは目を白黒させて驚いている。
僕は急に一人されて不安になったなんて恥ずかしくていえなくて、ただ泣くことしたできない。
そんな僕に途方(とほう)にくれながらも、それでもヒロちゃんは僕の好きなようにさせてくれる。
ぽんぽんと肩を叩かれれば、一人じゃないと思えて安心できた。
そして、僕が泣き止むとヒロちゃんはものすごい自慢げに言った。
「ほら、ちゃんと私が消えたのを見たろ?あれがワープだ。」
僕のほうはすっかり忘れてたのに、未だに拘っている様子のヒロちゃんが面白くて僕は思わず笑ってしまった。

そう、僕があの場から忽然(こつぜん)と消えたのにはこんな種があったわけで、その証拠に指輪には僕の手を握ったときについたヒロちゃんの血がついている。
ヒロちゃん本人もどういう原理で足跡の指輪(エンダー・ケルト)がワープを発動させているのか理解していないらしいが、そのためには誰でもというわけではなくてヒロちゃんの一族の血が必要らしいことだけは分かっていた。
だから、血のついた手で僕の手を握ったのだって、本当は僕を安心させるためなんかじゃなくて、こうして僕が足跡の指輪(エンダー・ケルト)で逃げれるようにするためだったんだ。
「それにしても、ここはどこ?」
僕の手を握ったとき、小さくヒロちゃんは呟いた。

『サビラ街で合流する。』
足跡の指輪（エンダー・ケルト）は使用者が行った事のある場所にしかワープできない。
だから、僕が行ったことがあって、あそこから場所的に近いサビラ街をヒロちゃんは指定したし、僕はヒロちゃんに教えてもらった言霊（ことだま）を呟いて、サビラ街のことばかりを考えていたつもりなんだけど・・・

「サビラ街じゃないし。」

記憶にあるサビラ街は小さな街だったけど、目の前にある街は僕が今まで見た街の中で一番大きい。
不浄の大地（ディス・エンガッド）にある街は、だいたいどれもが小さな街ばかりで自給自足で何とか生きているだけなのに、この街は広大で街自体も発展している様子が外からも窺えたし、街の向こうには白壁の大きな影も見えた。
「・・・どこ？」
何一つ見覚えのあるものがなくて僕は途方に暮れる。
ヒロちゃんに言われたとおりにサビラ街のことばかり考えたつもりだったけど、何か違ったのかな？
何回か足跡の指輪（エンダー・ケルト）を使うことがあったけど、一度も失敗をしたことなかったのに。
そして、どうしようと一人で頭を抱えた瞬間、背中にぞくりと冷たいものを感じ、僕の耳元に誰かが囁きかけた。

――――おかえり

はっとして振り返った先には誰もおらず辺りを見回してみると、ぐにゃりと視界が歪んで頭に頭痛が走った。
そして、同時に頭の中に様々な映像が映し出された。
その映し出されるスピードが速すぎてそれが何なのか僕には理解

できない。
だけど、頭痛が治まって視界も元も戻った後にもう一度見覚えがない街を見たとき、僕にはそれがとても懐かしく感じられた。

――僕はここに来たことがある？

疑問形で自分に問いかけてみたけれど、それは僕の中では確信に近い問いかけだった。
そして、そう思った瞬間に自分が自分でなくなるような気がして怖くなる。
「ヒロちゃん・・・」

――ヒロちゃんにはやく会わなくちゃ、ヒロちゃんに会えさえすれば、こんな怖さはすぐになくなるに決まってる

とりあえずここがどこか確認してサビラ街に行かなくてはならない。
僕は不安になる自分を叱咤して勢いよく立ち上がる。
そして、嫌だったけどヒロちゃんにも任されているからハクアリティスを起こす。（本当ならもうここにほかっておきたいところだけど）
「・・・ねえ。おきてよ。」
彼女の肩をゆすると、苦悶の表情を浮かべてハクアリティスが暴れした。
「いやっ！私は帰らない！！！もう私のことは放っておいてよ！！！」
「ちょ・・・、確りしてよ！」
いい加減に目を覚ましてくれと、僕はハクアリティスを叩いた。
「っ！わ・・・たし・・・。」
とハクアリティスは正気に戻ってくれたらしい。

「・・・ったく。面倒かけないでよね。」
僕は大げさにため息をついた。
状況を把握しきれていないハクアリティスは呆然と僕を見上げている。
でも、説明するのも面倒だったから、何も言わずにハクアリティスをまず立たせた。
「行くよ。」
「・・・行くって、ヒロは?」
ヒロちゃんの名を呼ぶハクアリティスを僕は睨(にら)まずにいられなかった。
僕の視線にハクアリティスが怯えたような表情をする。
「ヒロちゃんはあんたを助けるために天使のいるあの場所に残った。僕たちはヒロちゃんのおかげで、ここまで逃げれた。ちなみにここがどこかは分からないけど。」
ハクアリティスが僕の言葉に蒼白になる。
せいぜい罪の意識を深くするがいいんだ。
考えたくないことだけどヒロちゃんに何かあったらりしたら、この女を僕はどうにかしてしまいそうだ。
「ここ・・・」
しかし、そんな風に僕が物騒なことを考えていると、蒼白になりながらもハクアリティスが見覚えがあるのか街を見回している。
「ハクアリティス。ここがどこか知ってるのか?」
「・・・ここは、懺悔(ざんげ)の街よ。」
「懺悔(ざんげ)の街?」
やっぱり街に聞き覚えはないけど、どうしてか名前のつけられないような感情が胸を過る。
もしかして、記憶を失う前に僕はここに来たことがあった?
だから、何かの拍子にここにワープしてしまったの?
不思議に思ったけど、それより今はハクアリティスが更に蒼白なる様子にただならぬものを感じた。

「ちょっと・・・、どうしたんだよ？」
ハクアリティスは唇を震えさせながら口を開く。
「ここは・・・、天使の領域（フィリアラディアス）が支配しているのアーシアンの街。アーシアンが自分の罪を懺悔（ざんげ）するための街・・・なの。」
そして、街の向こう側に見える白壁を震えをそのままに指差した。
「・・・そ・して、あれが天使の領域（フィリアラディアス）よ！折角、逃げ出してきたのにまた振り出しなのっ！？」
――あれが天使の領域（フィリアラディアス）？
「もういやっ！どうしてよ！！」
ハクアリティスは、一人で何かを叫んでいるが僕は無視した。
色々なことが急に襲ってきて、もはや僕の許容量をゆうに超えている。
ただそんな動きの鈍くなった思考でぼんやりと、天使の領域（フィリアラディアス）は確かサビラ街からかなり離れているはずだとか、歩いて一ヶ月はかかる距離だったとか考える。
もう、何も考えてたくなくて僕はただひたすらにヒロちゃんの元へ戻ることだけを願った。

第9話　あの約束を覚えていますか？　1（後書き）

加筆・修正　08．5．10

第１０話　あの約束を覚えていますか？　２

何はともあれ、とりあえずは如何にしてヒロちゃんと合流するかだ。

ヒロちゃんと合流予定のサビラ街へは人間の足ではどんなに急いでも一週間はかかるけど、馬とかを使えば二日も不眠不休で走れば着くことができる。

ヒロちゃんと連絡が取れない今、徒歩などと悠長なことは言っていられない。

だけど、まず街に入るのに一悶着。

ハクアリティスが街に入るのを渋りやがったんだ。

僕だってこの女が懺悔の街に何回か来たことがあるという情報を知らなければ、さっさと町外れに置いていった。

だけど、今は少しでも時間が惜しい。

だから、この街の様子を少しでも知っているハクアリティスの案内が必要なんだと、そう主張する僕にハクアリティスの言い分は次のよう。

「エヴァは知らないかもしれないけど、ここは普通のアーシアンの街とは違うのよ?!懺悔の街は天使がアーシアンに懺悔することを許した場所・・・、アーシアンだけじゃない天使やエンディミアンもいるのっ！私が見つかったらどうするのよ?!」

「はあっ？そんなの顔隠せばいいだろ?!だいたい、天使とエンディミアンがいるってどういうことだよ!?神の掟はどうなるんだよ？」

アーシアンに会うのは罪じゃなかったのかよと、僕は怒鳴る。

対してハクアリティスも、先ほどまでの怯えモードからから逆上モードに切り替わり言い返してくる。

「私に怒っても知らないわよ?!ただ、アーシアンたちが天使やエンディミアンに奉仕することこそが、神に対する懺悔だとされてる

の！！だから、この場所だけは掟は免除されてるのよっ！」
「じゃあ、何？ここのアーシアンたちは天使やエンディミアンに奉仕をするためにいるっていうの？」
怒りのあまり僕の口調が段々荒くなるのをとめられない。
――穢れだとかいってアーシアンを隔離したくせに、奴隷としてなら利用するのっていうの？！
ありえない！本気でありえない！！
だけど、今はそれについてハクアリティスと論議している暇はない。
僕はごねるハクアリティスに頭からマントを被せると、彼女を引きずって懺悔の街へ高ぶった感情のままに入っていった。
そして、僕らが倒れていたのは街外れだったから人気は全くなくて街の様子はあまり知ることができなかったけど、歩いてしばらくすると人と物が集まる市場みたいな場所に突き当たった。
そこは街の中央を貫く大通りで売買が盛んに行われ活気が溢れているように見え、ハクアリティスがいうように翼を持つ天使と小奇麗にしているエンディミアンと、みすぼらしいアーシアンが混在していた。
「馬を調達するにもお金が要るけど、持ってるの？」
そんな中、しぶしぶ僕に連れられてハクアリティスが言った。
「オカネ？」
聞き覚えのない言葉に聞き返す。
「ないの？」
「ていうか知らないよ。何それ？」
僕がそういうと深々とため息をつかれた。（何かムカつく）
「お金っていうのは何かを得るための対価のことよ。何だってタダじゃ手に入らないでしょ？」

それに対して普段は手に入った魔物の肉や皮と食べ物を交換したりしていると話すと、ハクアリティスは僕に背中を向けて歩きだした。

「じゃあ、そのいつも物々交換をしているものをお金に換えるわよ。説明するのも面倒だから付いてきて。」

「・・・」

本当にこの女の言い方はいちいち鼻に付くと一人げんなりとして、彼女の夫とやらもどうしてこんな一緒にいて不愉快な女と結婚したんだかと、先ほどまで街には入りたくないと駄々を捏ねていたことなど忘れて僕を引き連れるようにして歩くハクアリティスの背中を追いながら僕はそんな下世話なことを考えた。

そして、ハクアリティスを追いかけながら僕は市場の様子を観察した。

市場には新鮮な食材が並び、生活必需品だけではなく贅沢品まで見え、そんな活気溢れる市場の様子は懺悔とはまるで無縁の姿だ。

しかし、その裏で鞭打たれて働かされ天使とエンディミアンの足元にひれ伏しているアーシアンの姿が目に入った。

「・・・」

僕は黙ってその様子を観察していたけど、この街の歪みみたなものに顔をしかめずにはいられなかった。

「エヴァ！ここよ！」

ハクアリティスが大通りに面した、一つの建物の前で立ち止まる。

看板が掛かっているが文字が読めない僕には何が書いてあるかは不明だ。

「ここが換金所っていう、物をお金に変えることができる場所よ。」

「ふーん。」

「店や施設は天使かエンディミアンしか使えないわ。私が換金して

あげるから、換金するもの出して。」
僕は昨日の戦利品である怪物豚（かいぶつぶた）の皮と骨の入った袋を鞄から取り出した。
ハクアリティスは中身も確認せずに僕からそれをふんだくると、さっさと店の中に入っていく。僕もその後を追う。
『いらっしゃいませ。ようこそピエフ換金所へ！』
店の中に入ると店員たちが笑顔で一斉にこちらに向かって頭を下げた。
明るく清潔感に溢た店内に、にこやかな女性たちと初めて目にする光景に一瞬目が点になる。
しかし、ハクアリティスはこれが当たり前なのか、気にした風でもなく店の中に進んでいく。
奥にはカウンター５つあり、その内４つは既にほかの客がいたので、空いていた残りの一つに目を向けるとハクアリティスはマントをとった。
「おいっ！どうしてマントとるんだよ。ばれたら、どうするんの？」
僕は驚いて小声でハクアリティスに耳打ちしたけど、馬鹿にしたように笑われた。
「こんなぼろいマントしてたら、エンディミアンに見えないでしょ。エンディミアンの証明はアーシアンとは違う美しさってやつなの。」
なるほどエンディミアンとアーシアンでは、その見た目は生活環境の違いから同じ生き物とは思えないほどに違う。
ハクアリティスは数日の不浄の大地（ディス・エンガッド）逃走劇により多少やつれてはいるけど、性格はともかく見た目はとてもアーシアンに見えないくらい綺麗だ。
「いらっしゃいませ。今日はどういった御用でございましょうか。」
そして、彼女の思惑通りエンディミアンとしてすぐに認めてもらえたらしく、女性店員はにこやかにハクアリティスに微笑んだ。
「これの換金をお願いしたの。」
ハクアリティスは僕が渡した袋を店員の前に置いた。

「拝見いたします。動物の骨と皮でございますね。動物の種類は？」
ハクアリティスが僕のほうを見る。
「怪物豚（かいぶつぶた）だよ。」
「畏（かしこ）まりました。少々お待ちください。」
そう言って店員がカウンターにある機械に何かを打ち込む。
それから袋に入っていた骨と皮を機械の端末に触れさせ、そのまましばらく待つと、ぴぴっと電子音がした。
「はい。間違いなく怪物豚（かいぶつぶた）のものあることが確認されました。」
機械で怪物豚かどうか判断できるらしい。
不浄の大地（ディス・エンガッド）は基本的に人力と自然しか存在しないけど、天使文明は魔法科学という分野が発達していて、色々不思議なことができると聞いたことがある。
その媒介が『機械』というもので実際に機械を見るのは初めてだけど、ハクアリティスにあらかじめ教えてもらっていたので、驚かずに様子を見つめることができた。
「怪物豚の相場から計算いたしまして、買取価格３０万ヴァルドでいかがでしょうか？」
「え？そんなに高く買い取ってくれるの？」
それまであまり気乗りしなさそうに、髪の毛を触っていたハクアリティスが身を乗り出した。
「はい。相場ではこのくらいが妥当だと思われますが、いかがでしょうか？」
「もちろん！お願いするわ！キャーッ！！！こんなに高く買い取ってもらえるなんて！」
僕にはよく分からないがハクアリティスが興奮したように叫ぶ。
店の中にいる他の客たちが、大声を出しているハクアリティスをまじまじと見ていて、僕は内心まずいと思った。
「ちょっと、あんまりうるさくしないでよ。」
「だって、３０万ヴァルドよ？！１ヶ月は余裕で生活できるわよ！」
お金なんてどうせ不浄（ディス・エンガッド）の大地では使えないから、ただ馬さえ調達

できればいいのにと、僕は一人興奮しているハクアリティスを白い目で見る。

――この女は自分のことばかりだ

自分が怖いから周りの状況など考えず自分を見失い、自分が嬉しいからこんな場所ではしゃぐ。

そんな彼女に感じたことのないくらいの嫌悪感が湧いた。

「ともかく、用を済ませてさっさとここを出るよ。お姉さん、それでいいから早く換金してください。」

だけど、何となくこちらを見ている視線の中に、きな臭いものを感じて僕はハクアリティスの腕を引く。

「ありがとうございます。では、こちらが３０万ヴァルドです。」

店員から金を受け取ると僕はさっさと店を出て

「またのご利用をお待ちしております！」

女性たちの麗(うるわ)しい声が、明るく僕らを見送った。

「なんなのよ？もっと喜べば？」

早歩きの僕を追ってきたハクアリティスが憤慨(ふんがい)したようにいった。

少し話をしときたくて、僕はハクアリティスの腕を取ると大通りから一本細い道に彼女を引き込んだ。

人気のない建物と建物の間の細道は薄暗い。

「・・・お金なんて、馬さえ調達できればいいんだ。興味ないよ。それよりあんた追われてる立場なんだから、もうちょっと大人しくしててよ。」

気が付けばハクアリティスは換金所を出てもマントをとったままだ。

あまりの無防備に苛ついた。

「なっ・・・！どうしてそんな言い方するの?!お金はあったほうがいいでしょ?折角だから買出しとかすればいいじゃない！不浄の大地（ディス・エンガッド）にないものがたくさんあるわよ。私も急いで出てきてなんの準備もしてなかったから、欲しいものもあるのよ。ね、いいでしょ？」

そんな暢気な言葉に僕の中の何かが震えた。

「あんた、今このときもヒロちゃんが誰せいで戦ってると思ってるんだ。」

悪人だとは思わないが、彼女はよくも悪くも目の前のことしか頭にない。

「・・・え?」

「ヒロちゃんのことだから、あんたのためとは言わないだろうさ。結構負けず嫌いだから、今頃、天使相手にやられっぱなしは嫌だとか言って戦ってるんだろうね。僕の気も知らないで！」

僕の中で静かにだけど、何かがきれた。

「でも、あの天使をヒロちゃんと出会わせたのはあんただ。あんたさえいなければ、僕もヒロちゃんも天使と関わることなんてなかったのにっ！あんたはそれを忘れたわけ?!」

初めて彼女を見たときから、何故だか嫌な予感が僕の胸にあった。何か明確な理由があるわけじゃなかったから、ヒロちゃんにこの女と関わるのを強く拒否することができなかったけど、こんなことになるなら強引にでも、あの時この女がどうなろうと不浄の大地（ディス・エンガッド）に置いていけば良かった。

そうしていたら、きっと今頃ヒロちゃんとアルヴァーナの街でのんびりしていたはずなんだ。

そんな僕とヒロちゃんの未来をめちゃくちゃにしておいて、この女は・・・

「僕は一刻も早くこんな街でてって、ヒロちゃんの所に行きたいんだ！それが嫌なら、もう僕らに関わらないでくれないか?!金なら、馬が調達できた後の分はやるから・・・」

僕の言葉に泣きそうになっているハクアリティスを見ても、罪悪

感すら感じなかった。
そして、最後に言い切った。
「もう、僕らに関わらないでっ！！」
それは、僕の本心だった。
「あ・・・わ・私は・・ただ・・・。」
他人を強く批判するくせに、誰かに強く批判されたりすることには慣れていないのだろう。
僕に言い返すことも、今のハクアリティスにはできない。
「ああ、あんたの境遇はかわいそうだろうさ。ヒロちゃんは優しいからな、昨日慰めてくれただろう？でもそれはヒロちゃんが特別優しいからだ。普通のアーシアンがあんたの言ってること聞けば、普通は僕みたいな反応だよ。」
優しいヒロちゃんを、悲しませたくなくてヒロちゃんの前では何も言えなかったけど、言えなかったことが言えて少し気分が落ち着いた。
これでもうこの女と関わるのはお仕舞いだ。そう思うと清清(すがすが)しい気持ちがした。
「じゃあ、お金は半分あげる、後は一人で――――」
そして、そう言ってハクアリティスにお金を突きつけてやろうすると、呆然としている彼女の代わりに誰かがそれを横取りした。
「何？坊やたち喧嘩でもしたのかなぁ？金が要らないなら、俺に頂戴(ちょうだい)よ？」
見ると換金所で僕たちを舐(な)めるように見ていた男だ。
３０万ヴァルドという大金に釣られて僕らを追ってきたのだろう。
男は小奇麗なエンディミアンだと一目でわかったけど、ハクアリティスのように際立った美しさはなく、あまり特徴は見つからない平凡な容姿だった。
僕は泣きそうに顔を歪めるハクアリティスに、この男と面倒ばか

りが起こるのにため息をついた。

――――僕はただヒロちゃんのところに行きたいだけなのに

「あらあらぁ？この娘、すっげー上玉！泣いてる姿がそそるねぇ～！姉ちゃん、こんなこえー彼氏は放って俺と一緒にこいよ！」

そういってハクアリティスに下品な顔を近づける。

「勝手にしろよ。僕には関係ないから。そこをどけ。」

「はあっ？！死にたくなかったら金は全部おいてけよ！大体てめぇ、アーシアンだろ？俺様たちはエンディミアンだぞ！アーシアンがそんな大金持つこと自体が罪なんだよぉ！」

エンディミアンっていう奴は本当にどいつもこいつも嫌な奴ばっかりだ。

僕はこいつらと話すのも面倒になってきて、腰にあるライフルに手を伸ばした。

相手は一人、僕一人でも問題ないだろう。

そうして、僕が物騒なものを出そうとすると、新たな乱入者が建物の上から男たちに襲いかかった。

「ぐはっ！」

「ウグゥっ！」

「ゲチャっ！」

男は奇声に似た叫びを上げると、乱入者にあっという間に倒された。

エンディミアンを倒したのは、おそらくアーシアンと思われる若い男。この男もさっき換金所で見た顔だった。

「くそぉ！野郎ども出てこい！」

しかし、倒された男には奥の手があったようである。

ボロボロになりながらも男が叫ぶと、仲間らしき十数人の男たちが路地の奥からぞろぞろと出てきたのだ。

さすがにあんなにたくさんの相手は面倒だなと思っていたら、ア

ーシアンの男が僕に声をかけた。
「少年！来い！！！」
「へ？」
「逃げるんだよっ！」
「きゃあぁ！」
だけど、僕が展開の速さについていけず、呆気にとられていると男はハクアリティスを肩に担ぎ上げて大通りに向かって走り出した。
一瞬迷ったけど、それに僕も従って街に繰り出す。だけど・・・
――本当に、ここは懺悔をするための街なの？
そんな思いに改めて囚われながら、市場でにぎわう人々の様子に目を背ける。
アーシアンの誰一人も神に懺悔を捧げている様子もなく、ただ天使とエンディミアンにひれ伏して許しを請うように、涙と汗をかいている。
そして、天使とエンディミアンはそれを嘲笑うかのように見下し、奉仕と称してアーシアンたちを働かせている。
彼らにとってアーシアンは人間ではなく罪人であり奴隷であり、そして、アーシアンは誰一人もそれに対して逆らおうともしない。
しかして、追いかけてくるエンディミアンたちを撒くために僕はハクアリティスを担いでいる男に従って、人の多い市場のある大通りから細い裏街に入る。
裏街には疲れた目をして道端に座り込むアーシアンの姿ばかりが目に付いた。
そのアーシアンたちが一様に力尽きている様子なのに、下を俯かないで、ただただ上を見上げている。
異様な光景に彼らが何を見ているのか気になって、全力で走りながらも僕も視線を彼らと同じように上へ向ける。

すると、その視線の先には一点の陰(かげ)りもない白い空が光り輝いている。

それは、天使の領域と不浄の大地の境界線。

あの街外れから見えた白壁が太陽の光で反射して輝いている姿。

白壁は懺悔の街の空を遮るほどに高くて、この位置からは白壁がまるで空のように見えた。

「おお、神よ。罪深き、我々をお助けください。」

そして、走り続ける僕の耳に白い空を見上げるアーシアンの掠(かす)れた声が聞える。

天使やエンディミアンがこれを聞けば、きっとこの言葉は懺悔の言葉であると思うんだろう。

でも、僕の耳にはこの世界で生きることに絶望した人間の最後の懇願のように聞えた。

――どんなに懇願したところで『神は誰も助けない』のに・・・

そんな風にふとアーシアンの声を聞いて心に浮かんだ言葉が、何故だか以前に聞いた事のある言葉のような気がして、それなのに誰の言った言葉か思い出せなくて僕は気になった。

第１０話　あの約束を覚えていますか？　２（後書き）

加筆・修正　０８．５．１０

第11話　あの約束を覚えていますか？　3

――――前略ヒロちゃん、僕は今、猛烈に後悔しています

いつもヒロちゃんに『知らない人には付いて行ってはいけません』と言い聞かせられていたはずなのに、僕は知らない人に付いて行ってしましました。

そして、僕は現在見知らぬアーシアンたちに攫われて監禁されていたりするのです。

『・・・』

味気ない石造りの部屋には自由に開く扉と窓はないが、生活するには困ることのない程度に家具も生活用品もそろっている。

僕とハクアリティスはその部屋にもう半日近く閉じ込められながらも、一言もしゃべらないで目も合わすことなく大人しく椅子に座っていた。

やることもなくて、僕は改めてどうして自分がこんな状況になったか思い出す。

エンディミアンに金目当てで襲われた僕とハクアリティスは、僕らを助けに入ったアーシアンの男に導かれるままに懺悔の街を疾走（しっそう）した。

助けてもらったという事実と彼がアーシアンであったこともあり、僕は油断していたんだ。

彼もまたあの換金所にいて僕らをつけてきていたのだ、と言う簡単な事実を僕は見逃してしまっていた。

そして、気付けば僕はエンディミアンから追われていたはずだったのに、武装したアーシアンに囲まれていたりして？

――――・・・はあ、本当に何度考えても僕が馬鹿だったという事実

しか見えてこない

だけど、そうは言うものの僕には色々考えてみたところでどうして監禁されるのかその理由が思い浮かばない。

だって、３０万ヴァルドのお金はまだ僕の手の中にあるんだし、

――それ以外？

僕は怯えたような表情を浮かべ続けているハクアリティスに視線を向ける。

僕が少し見ただけで泣きそうに顔を歪める彼女は、どうやら怒鳴られたことで僕を怖がっているらしい。

だけど、そんなことはお構いなしに僕は彼女を睨みつけた。

瞬間的に思いついたこととはいえ、何度思い返してもついさっき懺悔の街にたどり着いた僕らが攫われる理由なんて天使に追われているこの女くらいしかありえない。

だけど、そう考えてみたときこのアーシアンたちがハクアリティスを天使の花嫁であると知りえる可能性は？知ったところでアーシアンに天使の花嫁を攫う理由がどうしてある？

それに僕らがいるのは多分、懺悔の街じゃない。

僕らは懺悔の街の人気のない裏街でアーシアンの集団に袋詰めにされて運ばれたため、何処をどうして攫われてきたのか分からない。

ただ袋の中でもどうも馴染まない懺悔の街の空気から、いつも感じている不浄の大地（ディス・エンガッド）の乾いた空気に変わったのを感じた。

だけど、それは少なくとも懺悔の街からは出たということだけで、わかるのはそこまで。

結局、どんなに頭を悩ませても僕はここがどこかも、彼らの目的が何かも、そして彼らが何者かすらも分からないまま。

情報を得るには相手に探りを入れるしか方法はないが、その相手も僕らをここに放り込んでからは一切の接触もしてこない。

「・・・はあ」
ため息だってつきたくなる。
ここで何をしても何にもならないから部屋の中で大人しくしているしかないけど、僕の心は沈黙を守りながらも、その内は相当焦っている。
僕がこうしている間にもヒロちゃんは天使を倒して街へ向かっているかもしれないのに、何もできず動くこともできない自分が嫌で仕方なかった。
そして、どれくらいハクアリティスと沈黙しかない部屋にいたんだろう。
時間の感覚もなくなってきた頃、何時間かぶりに部屋の扉が開き銃を持っているアーシアンの男が二人、部屋に入ってきた。
「おい。坊主のほう出ろ。」
しかして、僕だけが監禁されていた部屋から出される。
背中に銃を突きつけられている状態じゃ、逃げ出すことも不可能なので目の前を歩く男の後に従うしかない。
だけど、袋詰めにされたままさっきの部屋に押し込められた僕は、初めてこの場所の様子を観察することができた。
まあ、建物の中にいるので全容は計り知れないけど、長く続く廊下や階段は僕の想像よりも、この場所が大規模であることを推測させる。
そして、引っ立てられる僕は何人ものアーシアンらしき者たちとすれ違ったけど、皆が皆武器を携帯しているのを見て僕は驚いていた。
僕が言うことじゃないけど、人間、ましてアーシアンがこんなに大勢で武器を携帯しているなんて、天使のお膝元で可能なことなんだろうか。
僕がそんなことをグルグルと考えていると、前を歩いていた男が

扉の前で止まりノックをした。
「アラシ、連れてきたぞ。」
「おお！入ってくれっ！！」
扉の向こうから、やたら大きな声が返ってくると銃で背中がつつかれる。
入れ、ということらしい。
一体何が待っているのか、緊張して僕は唾をごくりと飲み干すと部屋に入った。

「よお！少年、よく来たな。」

・・・でかい。
僕がその男を初めて見た第一印象は、その一言に尽きた。
中に入った部屋は僕が監禁されていた大きさと同じぐらいに思えたが、身の丈2メートルくらいありそうな男がいると俄然小さく見えた。
筋肉はモリモリ、肌は色黒、そこらじゅう毛むくじゃらの強面のおっさんは、見るからに恐ろしいことこの上ないけど僕を迎えた笑顔は妙に人好きしそうな、人懐っこい熊みたい。
「二人は下がってくれていいぞ。ご苦労だったな。」
そして、熊男は僕を連れてきた男たちを部屋から下がらせるとソファを僕に勧めた。
部屋は男の仕事部屋のようで大きな机には書類が散乱していて、本棚には本がぎっしり後は僕が座っている応接セットのようなものがあるだけだ。
「えっと・・・まず、手荒なマネをしたことを謝らんといかんな。まさか、お前たちがエンディミアンに襲われたりするとは思わなかったもんでなぁ。あんな強引な手になって悪かったわ！あはは！」
熊男はそういうと脈絡もなく豪快に笑い出した。
「はあ？」

僕は何を言われるのかと、身構えていたのに急に謝られて気が抜けた。
しかも熊男のいい様は、謝っているのか、謝っていないのか、よく分からない。
「本当はもっと穏便にここに来てもらおうと思ってたんだ。ただ、せっかく見つけたハクアリティス様をみすみすエンディミアンに持ってかれる訳にはいかなかったからなぁ。」
こんな馬鹿っぽい男に付き合っている時間はない。熊男に僕は噛み付いた。
「あんたらの目的はやっぱりハクアリティスか。でも、どうしてアーシアンのあんた達があの女のことを知ってる?!どうして僕まで攫ったぁ?!あんた達は一体何者なんだ?」
次から次へと質問をぶつける僕に熊男はきょとんとして、その後、破顔した。
「あれ?そういえば俺、自己紹介してなかったっけ?俺の名前はアラシだ。29歳、独身。それで好きな食べ物は――」
――へえ、見た目より若いな・・・、ってそんなこと聞いてないし
男・アラシは僕の質問など無視して、自分の自己紹介をしだした。
僕はその勢いを止めることもできず呆然とその様子を見ていたけど、アラシは思いもよらない事を言い出した。
「ま、俺の自己紹介はこれくらいにしといて・・・、少年の名前はエヴァだろ?アーシアンのヒロと共に不浄の大地を旅し続けている。」
「?!」
僕やヒロちゃんのことまで知っている?
アラシは僕を見て更に話を続けた。
「だが、ハクアリティス様を助けたために天使たちに襲われ、どうやってあの距離を短時間で移動できたかは知らんがお前たちは懺悔

の街に逃げ、ヒロは天使を引き付けておくためにアルヴァーナの街付近に一人残った・・・。あってるだろ？」

先ほどまでの馬鹿っぽい表情がなりを潜め、男は驚く僕を見て底意地が悪そうに笑った。

こいつ、とんでもないくわせものだ。

ハクアリティスが天使の花嫁であることだけではない、アラシは僕らが彼女を助け天使に襲われたことまで知っている。

――――でも、どうやって？

僕は手のひらに嫌な汗をかくのを感じた。

「それでお前さん、その後どうなったかは知ってるのか？」

「その後・・・？」

「ヒロが、どうなったかだよ。」

「！知ってるのかっ？！」

僕はソファから立ち上がり、アラシに詰め寄った。

椅子に深々と座っているアラシと、立ち上がった僕はちょうど同じくらいの背の高さだ。

背が低い僕でもアラシに顔を近づけることができた。

「知ってるよ。」

「教えろ！」

このとき僕は自分のほうが捕まっている立場だとか、そういうこともすっかり頭から抜けてアラシに叫んだ。

大きな机を挟んでまじまじと見たアラシの顔は、激昂（げっこう）する僕とは対照的に冷静なものだ。

「ヒロは天使に捕縛（ほばく）された。今はあの白壁・守護天使（ガルヴァチュア）の壁の向こうにある断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）の中さ。」

「天使に捕まった！？それで無事なのっ！？」

よく分からない言葉が連なったけどヒロちゃんが今、天使の領域（フィリアラディアス）内にいることだけは分かった。

しかし、それよりも大事なのはヒロちゃんの安否だ。
「傷を負ってはいるが、命の別状はないらしい。それに心配しなくても天使たちは、ヒロをしばらく殺しはしないさ。それどころか大事に大事にするだろう。」
「ど・・・いうことだ?」
アラシの言うことを１００％信じていいかわからない。
でも、アラシが僕を見る目は嘘を言っているようには見えない。
それにハクアリティスのことだけじゃなくて、どういう方法を使ったかは知らないけどこいつは僕らが彼女を助けたことまで知っているくらいだから、ヒロちゃんの行方を知っていてもおかしくはない。
今はこの男の言うことを信じるしかない。
そして、それ以上にヒロちゃんが無事であるという言葉に僕は縋(すが)りつきたかった。
――――でも、どういうこと?天使がヒロちゃんを大事にする?
「それはヒロが黒の武器(カシュケルノ)を使うことができるからだ。」
「カ・・・シュ・・・?」
何のことだろう?
思い当たることもなくて僕は訝(いぶか)しげにアラシを見た。
「もしかしたら、お前が何か知っているかと思ったが、その顔じゃ黒の武器(カシュケルノ)については、何も知らんらしいな。」
「知らないよ、そんなこと・・・っ!それより、ヒロちゃんが天使(フィリ)の領域(アラディアス)にいるって言うのは、確かな情報なの?!」
何時間ここに監禁されていたか分からないけど、思ったより時間が経っていたのかもしれない。
いくら安否が確認できても、ヒロちゃんが怪我をしていると聞いて、ここでじっとしていることなんて僕にはできない。
「それを知って、どうする気だ?」

「ヒロちゃんを助けに行くに決まってるだろ?!」
「・・・あははっ！」
僕の言葉に腹を抱えてアラシが笑い出した。
「ははっ・・いやいや、そんな馬鹿なことを堂々と言われると驚くを通して、笑えてくるな。」
「なにっ?!」
大笑いされた上に馬鹿にされて僕はアラシに殴りかかろうとして、腕をアラシにものすごい力で掴まれた。
「イタッ」
「こんな細腕一つでたかが人間が天使の領域（フィリアラディアス）に殴り込もうなんて、馬鹿以外になんていえばいい?」
ギリギリと腕を掴まれた手に力が入っていく力が、あまりに強くて腕の血が流れないで、しびれていく感覚がわかった。
「離せよ!!この熊男!」
「ははっ熊男か、俺にはぴったりの言葉だな。だが、それが人に物を頼む態度か?」
更に手に力が入る。
「いだだだっ!・・・くそ、お願いだから、離してください!」
やけくそで叫んだら、ぱっと手が離された。
「はじめから、そういう態度でいればいいんだよ。子供は素直が一番だ。」
そう言ってからからと笑うアラシを、僕は腕をさすりながら恨みがましい目で見た。
服の上から掴（つか）まれたはずなのに、腕にはくっきりと手の跡が付いている。

――――なんつー馬鹿力

「まあ、諦めるでもなく自分の力で何とかしようって言う、その心意気は買うぜ?なにせアーシアンっつう生き物は、罪人根性ばかり

が先立って何でも不幸をそのせいにして、何もしない奴ばっかりだからな。」

笑いながらアラシが僕の頭を撫で回す。完全に子ども扱いだ。

しかし、僕はその手を払いのけながら言い返す。

「なんだよ、他人事みたいにあんたもアーシアンだろ？」

「もちろん俺もアーシアンだが、罪人根性は持ってないつもりだからな。懺悔の街にいる奴らを見ていると、苛々しちまうんだよ。そこいくとお前は見ていて清清しい！」

「・・・そりゃ、どうも。」

アラシの言うことには一々脈絡がないというか、意味がないというか。会話をしていて段々話がそれている。

僕はそんな話をしたいわけじゃない・・・そう思っているとアラシが再び僕の頭を撫でた。

「ま、ヒロのことは心配すんな。俺が何とかしてやるから。」

告げて、僕に笑ってみせるアラシに戸惑った。

「何言ってるんだよ？人間が天使の領域に行くのは馬鹿がすることなんだろ？それに、あんたがヒロちゃんを助ける理由なんてないだろ？」

訝しげな僕にアラシは胸を張った。

「大丈夫。その辺は俺に任せておけ！お前が一人で空回りするより、確実にヒロを救出してやるから。それに俺はどうしてもヒロに聞きたいことがあるんだ。」

その言葉に縋りつくことができたらどんなに楽だろう・・・と思う。

だけど、僕一人が何をしても天使にかなわないことも、何も知らない場所でヒロちゃんを助け出すが不可能なことも僕は知っている。

そして、だからってアラシの言葉に素直に頷けるほど、自分が素直な子供でないことを僕はいやっていうほど知っている。

そう思う心が顔に出ていたのか、アラシは仕方ないとでも言うように苦笑した。

「まあ、俺が信じられんのなら、後は神にでも助けを求めるしかないな。」

「誰が神に助けなんか求めるかっ！」

「どうした？」

アラシが戸惑ったように出した声に僕は自分を取り戻した。

自分でもどうしてこんな事をいったのか分からない。

「何でもないよ。」

「そうか？」

アラシは気にした様子もなく話を続けた。

「ともかく、お前の気持ちは分からんでもないが、悪いようにはせんから、しばらくはここで大人しくしてろ。また何か分かったら教えてやるから部屋に戻れ。足りないものがあったら、言ってくれればできるだけ用意させる。おい、誰かエヴァを部屋まで送ってやってくれ。」

アラシは僕が何も言わないことに良いことに、話をとっとと切り上げると僕を再び部屋に戻すつもりらしい。

僕はそれに黙って従った。

結局ここに来て分かったのことはヒロちゃんの安否だけで、このアーシアン達が何者なのかも、ここが何処なのかも、僕やハクアリティスを攫った目的も、他は何一つ分からないままだ。

ただ、ヒロちゃんのことが分かったのは、僕の中では何が分かるよりも大きな収穫だった。

そんなことを考えながら、僕はまださっきの自分に戸惑ったままだった。

さっきの自分が、よく分からなかった。

ただ、『神に助けを求める』という言葉を聴いた瞬間に、目の前が真っ赤になって、僕の心の中の僕の知らない僕がその言葉に激しく首を振った。

そんな感じがした。
もしかしたら、それは記憶がなくなる前の自分なのかもしれない。
でも、どうしてそんなことを過去の自分が思うのか、今の僕には何も分からなくて不安がつのった。
無性にヒロちゃんに会いたくなって僕は足跡（エンダー・ケルト）の指輪を触り、心の中で呟いた。

――ヒロちゃん、この不安から僕を助けて

神やアラシには助けを求めることはできなくても、僕はヒロちゃんには素直に助けを求めることができた。
それは、多分ヒロちゃんなら僕を助けてくれるという信頼がなせるものだろう。
と、いうことは多分、僕は神を信じていないのだろう。
だから、こんな言葉が頭をよぎる。

『神は誰も助けない』

その言葉は僕を酷く不安にさせた。

第１１話　あの約束を覚えていますか？　３（後書き）

加筆・修正　０８．５．１０

第１２話　あの約束を覚えていますか？　４（前書き）

注意書き

この話には一部、ぬるいですが一方的な暴力行為の表現があります。

苦手な方や、ご不快に感じる方はご注意ください。

第12話　あの約束を覚えていますか？　4

＜ＳＩＤＥ　ヒロ＞

痛い、苦しい、辛い、気持ち悪い、熱い。
言葉で表せる全ての苦痛や、不快な感触を伴った一方的な暴力が私を襲っている。
「ほらっ、さっさと起きろ。」
そして、気が遠くなると、顔を水の中に突っ込まれて意識を引き戻される。
「ゲハッゲハッ」
水が気管に入って咳(せ)き込む私に、天使はすぐさま容赦(ようしゃ)なく、鉄棒を振り下ろす。
私は両手両足を鎖によって拘束され、髪をつかまれ、気を失うまで殴られ、叩かれ、蹴り飛ばされ、気を失えばすぐ意識を取り戻させられる。

――――そう、私はいわゆる拷問(ごうもん)というものを体験していた

不浄の大地(ディス・エンガッド)で天使達に捕らわれ拘束された私は、何やら見たこともない空飛ぶ鉄の乗り物で、どこかに運ばれた。
正直ここがどこだか、自身もよく分かっていない。
そして、それからはこの地獄のような天使たちの拷問が繰り返されている。
何も抵抗することのできない私を、楽しげに見下ろしている天使たち。
その姿を見て、もういっそこのまま殺してくれと自分の命を投げやりに思う。

所詮、私は罪人（アーシアン）なのだから、こうして天使に殺されるのは世界の摂理にかなっているんじゃないのだろうか？

そんな風に一方的な暴力を受け続けるうちに、次第に何も悪い事をしていないのにそんな気持ちになってくる。

だが、そんな私をたった一つエヴァとの約束だけがつなぎとめる。

――ああ、そうだ。私はあいつとの約束を果たすために天使に殺されてやるわけにはいかんな

苦痛に途切れ途切れになる意識の中で私はただそれだけを思っていた。

「ハクアリティス様をどこにやった？」

だが、そんな私を天使たちがなおも容赦なく襲う。

ぐったりした私の髪を掴（つか）み、顔を上げさせて天使は顔を醜（みにく）く歪ませながら、彼らは私にハクアリティスのことを詰問を繰り返す。

ちなみに私を拷問しているのは、不浄の大地（ディス・エンガッ）で私を捕らえた天使が引き続き行っていた。

天空騎士団（アイッシュグランド）第三師団の皆さんである。

アーシアン一人に天使１０人が寄ってたかって暴力に訴えて、女一人の行方を聞き出そうとしている彼らの姿は、天使という神聖なイメージなど微塵（みじん）もない。

「何処だ？！さっさと吐けっ！」

「し・・・らん」

「どうして、ハクアリティス様の反応が消えているっ！？」

反抗すれば天使に鉄棒みたいなもので腹部を強打されて、息が詰まった。

「ガッ・・はん・のう？」

「そうだよ。貴様、ハクアリティス様の居場所を我等がいつも把握していたことを知っていたんだろ？だから、反応を消したんだろ？！」

グッっと服を乱暴につかまれて足が床に着かないほど持ち上げられる。
「・・・知るか。」
しかして、反抗的な私は天使たちに思い切り何度も顔を殴られた。
だが、殴られながらもどうして不浄の大地（ディス・エンガッド）のど真ん中で、ハクアリティスが何人もの天使達に見つかるのか納得した。
昨日の様子からハクアリティス自身も知らないようだが、天使達にはハクアリティスの位置を知る何らかの術（すべ）があるのだ。
それでは、ハクアリティスが何処にいようが、天使達が見つけに来るのは当然である。
しかし、今はハクアリティスの反応を天使達が追えないらしい。
――ハクアリティスがそのことに気が付いたということなのだろうか？それとも、他に何かあったのだろうか？
そして、拷問中に天使達は更に私のあずかり知らぬことまで聞いてきた。
「いい加減に吐けよ。貴様、黒の雷（オルヴァラ）の一員なんだろう？貴様らはずっと、ハクアリティス様のことを付け狙っているという噂だったからなぁ！」
「な・・・何のこと・・・だっ！？」
しかして、ここにきて私も理不尽なことばかりで痛めつけられ続け、いい加減に煮詰まっていた。
だから、私は気が付けば掴みかかっていた天使の顎下（あご）に頭突きを食らわせていた。
それが思いのほかクリーンヒットして天使は仰け反ったまま倒れた。
「こ・・・の、汚らわしいアーシアンの分際でっ！」
見っとも無く転げた天使を見て私が笑ってやると、天使は逆上したらしく顔を怒りで高潮させ血走った目で私を見た。

「こいつっ！自分の立場が分かってないのかっ！！！殺してやるっ！」

激情に身を任せ天使は拷問部屋にかかっている槍に手をかける。

これで天使とは聞いてあきれる。

私のほうがよっぽど清廉潔白に生きてるだろう。

私はその時、妙に肝が据わっていて、そんなことを暢気に考えていた。

多分痛みやら緊張やらで、私は何が何だか分かっていないのだ。

だから、そんな天使を前にしても馬鹿なことを考えながら笑っていられたのだ。

そんな様子の私を見て、逆上している天使以外の天使達は顔がこわばらせた。

「・・・こいつ何か変だぞ？！」

「こんな状況で、笑ってやがるぞ？！」

そして、騒然としている拷問部屋でリーダー格らしい天使が声を上げた。

「おい、やめろよ！こいつは殺すなと、命令されてるのを忘れたのか？」

かくして混乱する天使達を諫めると、槍を手にして暴れている天使を本格的に押さえにかかるが、逆上した天使はそれでも私に襲いかかろうと暴れまくり拷問室は一時騒然となった。

そして、収集が付かなくなり私はそのまま拷問から解放され一端、冷たく狭い牢屋にぶち込まれた。

焼けるように痛い切り傷や疼くように痛い打撲、そういった体中の傷による痛覚だけが全てを支配し、私は何もかも放棄するように大の字になって寝そべる。

「・・・それにしても黒の雷って、何だ？」

しかして、拷問の中で気になった言葉が思わず独り言が口をついて出た。
「・・・あなた黒の雷(オルヴァラ)なの？」
私の声に反応した、若い女の声。
その声に痛む体を起き上がらせると、私の向かいの牢屋にこちらを見ている女がいた。
牢屋に放り込まれるまでは痛みで全く周りが見えていなかったが、よく見てみれば牢屋にいるのは私だけではない。
拷問部屋から伸びている暗く長い廊下には数え切れないくらいの牢屋だけが続き、その一つ一つに私と同じような囚人達が捕らえられていた。
「えっと・・・」
急に女に声をかけられて、私が何と言葉を返すべきか迷うと、女のほうが言葉を重ねた。
「あ、ごめんなさいっ。今、・・・黒の雷(オルヴァラ)って聞えたから・・・。えっと、あなた新入りさんよね？初めまして、私はアルムっていいます。」
女改め、アルムは私のぼこぼこにされた顔を見て、一瞬ぎょっとしたような表情をしたが、この場所ではそれも日常なことなのか、すぐに気を取り直すと私におずおずと微笑んだ。
そういうアルムも囚人らしく姿形はあまり美しいとはいえないボロボロな様相だ。
「・・・私はヒロだ。確かに今黒の雷(オルヴァラ)とは言ったが？」
「あ・・・あのっ。」
私がそういうと、女は何か言いたげな様子をしたが、横からの声にその権利を奪われた。
「なんだい、新入り！やっぱりあんたも黒の雷(オルヴァラ)かい！あたしもそうだったのよっ！」
アルムの右隣の牢屋にいる恰幅(かっぷく)の良い中年女性の声が、割り込んで私に明るく話しかけてきたのだ。

牢獄という環境には似つかわしくない明るさと、声量に私もビビる。

「いや、私は黒の雷とかいうものじゃない。何も分からないまま、天使にそう間違えられているだけだ。もし、差し支えなかったら、ここが何処かと、その黒の雷というもののことを、教えてもらえないか？」

黒の雷が何かはもちろんだが、折角彼女達から話しかけてくれたのだ、色々聞いておきたかった。

「あんた何も知らずに、ここにつれてこられたんかい？」

私が頷くと女性はあらあらと、目を見張った。

「ここはねぇ。天使の領域の中にある、天使の意に従わない人間を収容して、天使たちが人間を玩具にするための場所、断罪の牢獄だよ。」

「天使の領域？ここが？」

こんな牢屋の中では実感がわかないが、女性が嘘を言っている様子はない。

「そうさ、天空騎士団が治安維持を名目に統括している。あんたも天空騎士団に捕まえられたんだろ？そんな怪我して男前が台無しだよ。可哀相に・・・。」

エンリッヒも拷問をした天使達も、皆が天空騎士団だったことは確かなので、私は頷いた。

「それにしても、ここ最近は黒の雷以外で捕まってくる奴は、全くお目にかかってないってのに・・・。それに、ここは女性用の牢屋区画だよ、男のあんたがここに入れれるとは・・・もう男どもの牢屋は一杯になっちまったってことなのかねぇ。最近は天使どもも黒の雷に厳しいからね。」

なるほど、確かにあたりを見回してみると牢屋にいるのは皆、女性だ。

「・・・私は天使に連れてこられただけだから、何ともいえないな。それより黒の雷（オルヴァラ）のことも教えてくれ。」

私は考えるような仕草をする女性に話を促した。

「ああ、そうだったね。まあ黒の雷（オルヴァラ）っていうのは、簡単に言うならばアーシアン解放軍ってとこかね？」

「アーシアン解放軍？」

思わぬ言葉だったので、思わず聞き返した。

「そうさっ！」

女性は戸惑う私に、やはり牢獄の中にいる囚人とは思えないくらい胸を張って答えた。

「あたし達は、過去に縛られて天使やエンディミアンたちに、謂（い）れのない服従を強いられている。そんなのは、もうまっぴらごめんだよ！だから、あたし達はあたし達の生きる自由と権利を勝ち取るために戦うことを決めた・・・そんなアーシアンの集まりが黒の雷（オルヴァラ）って訳だよ。」

「生きる自由と権利・・・、それは天使の領域（フィリアラ・ディアス）の開放ってことか？」

「そうさ！！あたし達だって、あんな不浄の大地（ディス・エンガッド）じゃなくて、もっと楽しく生きていてもいいだろ！あんただって、アーシアンなら分かるだろ？そう思うアーシアンも最近じゃ多くてね。規模も大きくなって天使達も放っておけなくなってきているのさ。それであたしやアルムたいにこの断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）に捕らえられる仲間も少なくないって訳さ。」

道理でこんなに囚人がいるわけである。

それにしても、そんな流れがアーシアンの中で起こっているとは想像したこともなかった。

まあ普段、不浄の大地（ディス・エンガッド）の中でも、辺境といわれる場所ばかり流離っている私が知らなくても不思議なことではないと思うが、そのことより私にはアーシアンたちの中で、天使たちに反旗を翻（ひるがえ）そうと考える者が現れたことに驚いていた。

――天使と人間は生まれつき対等ではないのだ

エンリッヒと戦ってみて実感したが、彼らのもつ神の力は人間には巨大すぎる。

故にあれにまともに立ち向かって、ただで済むはずはないのだ。

天使達に支配され続けた人間達に、それが分からないはずもないのに・・・。

それとも、何か天使に神の力に対抗できる力でも黒の雷（オルヴァラ）は手に入れたのであろうか。

そんな風に私が色々考えていると、今度は女性が私にしゃべるよう促した。

「それであんたは何をしてきたんだい？その傷からいくと、大層なことをしてきたんだろうね？」

私の無残（むざん）な姿を女性は何故だか嬉しそうに見る。

「・・・女を一人助けただけだよ。」

「女？恋人か何かかい？」

そう問われて、美しいが私の手には負えないハクアリティスのことを思い出して、私には苦笑いしかできない。

「いや、まさか。その人は天使の花嫁って言ってたからな。一応売約済みってことになるんじゃないかな？まあ、その天使の旦那から逃げてきたみたいだが・・・。」

何でもないことを言ったつもりだったが、私を見る女達の目が豹（ひょ）変（うへん）したように感じて、首をかしげた。

気が付くと、女性とアルムだけではない。私の視界に入る限りの囚人達の全ての視線を私は感じていた。

「今・・天使のは・・花嫁って言ったかいっ？あんた・・・？」

「ああ。・・・それがどうかしたのか？」

私が頷くとアルムが牢屋の鉄格子を掴み。私に襲い掛からんばかりの勢いで叫んだ。

「その女っ！！！名前は？！」

「は・・・ハクアリティスだ・・・けど。」
「それで?!」
「へっ?」
アルムがあまりに必死なので、その勢いに私は痛む体にもかかわらず後ずりした。
「だからっ!あなたがここにいるってことは、その天使の花嫁も天空騎士団(アイリッシュ・グランド)に捕まったのかって聞いてるのよっ?!」
――ああ、そういうことね
「いや。ハクアリティスは逃がしたよ。そもそも不浄の大地(ディス・エンガッド)で行き倒れている彼女を助けたのが始まりだったんだが、天使達にはハクアリティスの位置を知ることのできる術があるらしくて、まあ反応をもう天使が追えないらしいんだが、追ってきた天使から彼女を逃がすために私は捕まったんだよ。それからは天使と戦う羽目になるは、拷問されるは、牢屋に閉じ込められるで、私は踏んだり蹴ったりだ・・・・って。」
思い出してハクアリティスのせいで酷い目にあいながらも、あまり気にしていない自分のお人よしさ加減に苦笑した。
しかし、囚人達を取り巻く空気がまたも変化した気がして見てみると、やはりアルムが泣いているのが目に入って驚いた。
「フ・・・、ご・・めんさない。でも、天使が花嫁の位置を分からないってことは、アラシ様が・・・、花嫁を奪取したってことなのよっ。う・・れしくて。」
「アラシ様?」
どうやらこの女達は、ハクアリティスのことを知っているらしい。
そういえば、黒の雷(オルヴァラ)がハクアリティスのことを付け狙っていると、天使がさっき言っていたな。
私が黙っていると、女性が勝手に話を進めた。
「アラシ様って言うのは、黒の雷(オルヴァラ)のリーダーで。アルムの憧れの人

なんだよ。」
　他の女達のすすり泣く声も聞えてくる。
　どうやら、ハクアリティスを奪取することが黒の雷（オルヴァラ）にとっては重要なこととらしい。
「・・・泣いているところを申し訳ないが、レディ。」
「嫌だね、ミシアって呼んどくれよ！あんたはあたしたちに吉報を運んできてくれたんだ！」
　ハクアリティスが何だというのだろう。
　何だか急に胸が騒ぎ出した。
「ではミシア。どうして、そのあなた方のリーダーがハクアリティスを奪取したことが吉報になるんだ？」
　私が尋ねるとミシアの涙が引っ込んだ。
「・・・もしかしてあんた、天使の花嫁って言うのが何か知らないで助けんたんかい？」
「いや。彼女に聞いたところでは単に、天使の妻と言う意味としか聞いていないが、それ以外に意味があるのか？」
　ミシアはそういう私にあきれた顔を浮かべた。
「あんた、そりゃ天使の花嫁に謀（たばか）られたんだよ。まあ、確かに天使の妻には違いないが、その相手が誰か聞かなかったのかい？」
「相手？」
　確かにそこまで聞いてはいなかった。
「言えば、あんたが助けてくれないと思ったんだろうね。・・・なにせあの女は万象（ばんしょう）の天使の妻だからね。恐れ多くて普通のアーシアンなら名前を聞いただけで。裸足で逃げ出しちまうよ。」

――――万象の天使？

『あいつは私から全部奪った。』
　あの夜のハクアリティスの言葉が頭の中でリフレインする。
　まさか、その『あいつ』というのが天使の中でもっとも高位なる

天使にて、人間に粛清・終焉の宣告（ディルト・ヴェネス）を下したあの万象の天使？

想像以上の大物の登場に私は、急に体の痛みが増した気がした。

私を拷問した天使達の必死な様子と、ハクアリティスの夫かと聞いたときのエンリッヒの嫌な笑みが思い出された。

同時にまだハクアリティスと一緒にいるエヴァのことが気にかかった。

とりあえず、一端逃げれれば大丈夫かと思ったが、相手が万象の天使の花嫁では天使達もそう簡単には諦めまい。

正直、私は天使たちを相手にしているというだけで、現実味を感じていなかった。

その上、今度は万象の天使など私にとっては御伽噺の登場人みたいな天使の登場である。

状況が段々と悪化の一途を辿っている気がして、私は急に怖くなってきた。

喜色に満ちる囚人たちに隠れて、私は大きく深い溜息を付いた。

第１２話　あの約束を覚えていますか？　４（後書き）

加筆・修正　０８．５．３０

第１３話　人間というものの定義　１

貴方は化物の姿をした人間
私は人間の姿をした化物
――――どっちがまだ人間らしい？

【人間というものの定義】

断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）の牢の中で初めて明かした夜から一週間、エンリッヒとの戦いによる怪我は大分良くなっていたが、この一週間続けて拷問部屋に招かれているので、新たしい怪我が徐々に増えていったりする。

ただ天使たちは何故だか私を殺さないように命令されているらしく、死なない程度には手を抜いてくれている。（まあ、それでも満身創痍（まんしんそうい）であるには違いないのだが）

拷問部屋にいる以外は牢屋に閉じ込められ何もすることがないので、ともかく体力温存のために寝ている。

まあ、寝てばかりいるのも暇なのでそれ以外は寝転がりながら、ここに着てからのことを色々考えていたりする。

正直考えるのはこれから先、自分がどうなるのかとか？

考えてもどうしようもない事は分かっていても、自分が喧嘩を売った相手が万象の天使さまともなれば、ビクビク怯えるのも当然だ。

しかして、私はハクアリティスの夫というのが万象の天使、その人であることを聞いた驚愕（きょうがく）から立ち直って、ミシアに聞いた更に詳しい話を思い出す。

「――まあ、ハクアリティスが故意に自分のことを黙っていたかどうかは、この際置いといてだな。それでどうしてハクアリティスを黒の雷（オルヴァラ）が奪取したという事実で、君らはそんなに喜ぶんだ？ハクアリティスを拉致（らち）したとして、それからどうするつもりなんだ？」

確かに天使長である万象の天使の妻ともなれば、人質として価値はあろう。

しかし、そうはいっても所詮（しょせん）ハクアリティスは人間なのだ。

それにハクアリティスの態度からもこう言っては悪いが、ハクアリティスがそれほど天使に大事にされていた様子はなかった。

万象の天使自体を人質にしたわけでもあるまいし、ハクアリティスを拉致（らち）したからといって天使たちが彼らの思い通りになってくれるとは考えられなかった。

「そ・それは・・・」

私の質問にそれまで嬉々（ききき）として答えてくれていたアルムが、はじめて戸惑った様子を見せた。

今までの話は私みたいな田舎者はともかくとして一般的に知られている常識だったのだろうが、これから先の話は誰もが知っている話ではないあまり黒の雷（オルヴァラ）以外には知られたくない話ということなのだろう。だが、

「ハクアリティスが黒の雷（オルヴァラ）に捕まっているということは、私は君たちの仲間のせいで拷問を受けないといけないわけだな。」

「な――」

「・・拷問が続けばつい言ってしまうかもな。」

私の言葉に牢の空気がピンと張り詰めた。

「私じゃない黒の雷（オルヴァラ）がハクアリティスを奪取してるとか？それに、ハクアリティスの反応を消している理由も知っているとか？・・・言ってしまうかもなぁ。」

「やめてっ！」
アルムが叫ぶ。
「折角、黒の雷（オルヴァラ）とは関係なさそうな私が、天使たちはハクアリティスを逃がしたと思っているのに、もしそうだと分かったら黒の雷（オルヴァラ）への厳しさは更に増すだろうな・・・」
白々しく私は言葉を連ねた。
「どうして、そんなっ！同じアーシアンじゃない！だったら、少しくらい・・すぐにアラシ様が助けに来てくれるわ。」
「どうして？拷問を受けるのが誰でもない私だからさ。誰だって理由も分からないまま命を張るのは嫌だろ？もし助かる道があるなら、それに縋（すが）り付くのは人間の正しいあり方だと思うがな。」
――――もし話さなければ、天使に私が知っていることを全部話す
それは黒の雷（オルヴァラ）に対する明確な脅しであるが、私は何の躊躇（ためら）いもなかった。
大体、仲間が助けに来てくれるといっても、確かに彼らには仲間に対する信頼は絶対だろうが、私はそんな見ず知らずの人間をそう簡単に信じられるほどできた人間ではない。
まあ、ハクアリティスを逃がしたのが私である以上、知っていることを話したところで私への拷問が減るとは思えなかったし、彼女らが知っていることを聞いたところで、こうして牢に入っていては何の役にもたたないのだが、それでも未だ彼女と行動を共にしているエヴァのことが心配だった。
だからこそ、彼女の本当のところをきちんと把握しておきたいと思った。
「・・・仕方ないね。」
「ミシアっ！でも・・・」
声を上げるアルムをミシアは諌（いさ）めた。
「やめな、アルム。この男が言っていることは正論だよ。確かに理

由が分からないんなら、あたしだって命張れやしないよ。」
しかして、私の訴えはどうやら受理されたらしい。
「一度しか聞かないから、よーくお聞き。」
芝居がかったしゃべり方は、どこか滑稽でやはり牢獄には似つかわしくない。
私は声を潜めたミシアの声がよく聞けるように耳をすませ、牢獄にはこちらの様子を息をひそめて聞いている囚人たちの息遣いだけが響いた。

「あの女はね、契約者なんだよ。」

「け・契約・・・者？」
眉を顰める私を見てミシアは更に続ける。
「あんたあの女の歳は、どれくらいだと思う？」
しかし、続いた言葉は意外なもので私は表情を険しくした。
それでも、ミシアの表情は変わらず真剣なままなので私は素直に答えた。
「見たところ１８，９って所だろ？それがどうした？」
私がそういうとミシアはにやりと笑う。
「やっぱりね。あたしは天使の花嫁の姿を見たことはないが、本来そんな若い姿のままいられるわけがないんだよ。あの女は正確には７００歳はとうに越しているはずなんだからね。」
「・・・？」
あの美しく若々しい女が７００歳？
「あの女は人間じゃないのさ。天使と契約した契約者なのさ。」
だから、その契約とは何だと尋ねれば、そんなことは知らないよとミシア。

――ただ、契約を交わすとその人間と天使は繋がるらしいのだ

繋がるという表現が正しいかは分からないが、天使と契約者は自分の持っている全てを共有することになるらしい、痛みも感情も命すらも。

すなわち、それは天使と契約することで天使の不老不死すらも共有することができるということで・・・だから、ハクアリティスは７００年生きようが、歳をとらずに若いままあることができるというのだ。

「万象の天使は自分の花嫁であるハクアリティスと共に生きるために、彼女と契約を交わしたってわけよ。・・・て事はよ？どういうことか分かるかい？」

もったいぶるなと視線で送ってみると、せっかちだねぇと言われて白々しく溜息をつかれ、せっかちな男はもてないよと付け足された。（余計なお世話である）

「要は天使の花嫁の命は、すなわち万象の天使の命ってことさ。」

「そうか！では、ハクアリティスを人質にとっているということは、万象の天使を人質にとっているとい言うことになるのか・・・」

しかして、私がやっと納得したように言うと、ミシアは一仕事終えたような清清(すがすが)しい表情を浮かべた。（本当に何処までも牢獄に似合わない明るい女性である）

さて話を現在に戻し、以上の話を整理すればハクアリティスは万象の天使の花嫁というだけでなく、契約者という天使の命すら担(にな)う重要な存在であるらしいことが分かり、天使たちの中でのその重要性も推し量ることが容易だ。

それに黒の雷(オルヴァラ)たちの言っていることも曖昧(あいまい)な部分が多い。

ハクアリティスさえ人質に取れれば彼女らは全て上手くいくと思っているが、彼女たちも具体的にどんな方法でそれがなされるか聞いていないようだし、実際にいつ助けてくれるかも全く分からない

という。
そんな作戦がうまくいくなどと、私がいくら世間知らずの田舎者でもすぐに分かる。
結局、脅しを仕掛けた私を警戒したらしく、ハクアリティスの反応が消えた理由は教えてもらえなかったし、彼女たちから聞いた話を餌にして天使たちに交渉をして助けてもらうにも、黒の雷（オルヴァラ）についての情報も少なかった。
助けは今のところ何もない等しいし、自力で脱出するのも黒の剣（ローラレライ）を取り上げられた今の状態では不可能だ。
かといって、このまま何もしないままに拷問され続けるのは絶対に嫌だ。
どうにかしてここを脱出したいと考えながら唸るっていると、遠くから近づいてくる足音が聞えてきて思わず身構えた。

――――そろそろ拷問の時間か？

私を迎えに来るだけのために天使たちがやってくるわけではないのだが、毎日私を拷問部屋まで引っ立てる天使というのがやって来るのだ。
ばくばくと心臓がなる音を聞きながら、やってくる人影を窺ってみる。
しかし、それはいつもの天使というか天使ですらない人間だった。
しかも、私の目の前をスルーして違う牢の前に立つと女性囚人を一人引っ立てていく。
私の前を再び通り過ぎて、去っていく男と囚人女性。
その様子を気がつれないように見つめていた私は、女性の表情が可哀相なくらい青ざめているのを見とめた。
「あの人は何をしたんだ？」
「ん？なんだい？」
「いや・・今の女の人すごい顔色が悪かったから、私みたいな目に

あうのかと思ってな。それにしても、ここの看守って天使だけじゃないんだな。」

二人の気配が全く消えてから私はミシアに話しかけた。

ミシアの明るい気性からか、彼女には遠慮なく色々聞苦とことができた。

アルムのほうは脅しまがいなことをしたためか、あれから警戒されてあまり会話をしていない。

「別にあの子は何もしてないよ。顔色が悪かったのは、あの子は多分戻ってこれないと思っているからだろうね。」

「戻ってこれない？」

「ここは天空騎士団（アイツシュ・グランド）の管轄ってのは知ってるだろ？確かにここの全ては、天使たちが管理しているんだよ。でも、時々ああやって天使じゃなくて、エンディミアンが囚人を迎えに来るときがあるんだよ。」

確かにこの一週間で見かけた見回りや食事を運んでくる看守は、皆翼を持った天使たちだった。

「そんでもってエンディミアンに連れて行かれた囚人は誰一人、牢屋に戻ってこないって話なんだよ。」

「へえ・・・」

「まあ、戻ってこない以上、エンディミアンに連れ出さた先に何があるのかも、さっぱり分からない。天使たちに聞いたところで答えてくれないからね。ただ、噂はあるんだけど。」

本当に色々と知っているおばさんである。

聞くところによると、彼女はもう5年くらいここで囚人として居続けているらしい。

「噂？」

「そうだよ。ここの牢獄の中でＤｒ．パルマドールを見たって奴がいるのさ。」

「誰だ、それは？」

「Ｄｒ．パルマドール。奴はエンディミアンの狂った科学者（マッドサイエンティスト）だよ。

希代の天才で天使たちにも一目を置かれててね。専用の研究所が天使の領域内にあるくらいだ。」

とここまで言って、ミシアは誰も聞いている人間もいないのに声を低くした。

「ただあんまりいい噂は聞かない。例えば実験のために不浄の大地の街を一つ燃やしたとか、夜な夜な人体実験をしているとか・・・ね。」

なるほど、そんなきな臭い噂のある科学者が、こんな牢獄に何の用があるかと想像豊かな人間が想像したところ、もしや実験の材料でも物色しにきたのではないか、と考えたのであろう。

何の証拠もない憶測の域を超えていない噂にすぎない。

しかし、普通なら天使が囚人を引っ立てるところを、エンディミアンがそれを行う。

そして、その囚人は牢を出たっきり戻ってこないというのは、恐らく何かしらの理由があると考えることは考えすぎなのだろうか。

――偶然にしてはできすぎている

「そのエンディミアンに連れて行かれる囚人って、何か共通点とかあるのか？」

「は・・・？さあ、あたしも連れて行かれた囚人の全員を知ってるわけじゃないからね。」

「そうか。」

「あんた、何考えてるのさ。」

その問いには答えなかった。

もし何か共通点があるのならば、エンディミアンに連れて行かれるように、自分を仕向けたいなどと私が言えば、今の囚人女性を哀れみの目で見ている他の囚人たちに白い目で見られることは間違いないからだ。

特別何か考えがあって、そんなことを考えたわけではない。

ただ、引っ立てる相手が天使よりもエンディミアンのほうが、はるかに逃げ出せそうな気がした。
そう。ただ単純にそれだけなのだが、何も共通点もないなら私からは手を打つすべもない。
いつしか来てくれるかも知れない、エンディミアンの訪問を待つしかないわけである。
かくして、エヴァのこともハクアリティスのことも断罪（ここ）の牢獄からの脱出も、何もかもが八方塞（はっぽうふさがり）である。

「あーあー。」

私は色々面倒になって、ごろりと横になった。
今日はまだ拷問に私を引っ立てる天使がやってこない。
私はそのまま睡魔に吸い込まれ、日常化してきた囚人生活に戻るのである。

――そして、何日経ってもあのエンディミアンに連れて行かれた女性囚人はそのまま戻ってこなかった

「おい、起きろ！」
何かが私の背中を力いっぱい蹴る。
――拷問の時間か
そんな突然の暴力にも、囚人として生活するここ一ヶ月ほどで大して驚かなくなった私は眠気の残った顔のまま、私を蹴った天使を

見上げた。
私を拷問するのは相変わらず天空騎士団第三師団（アイッシュグランド）の面々だ。
その中でも迎えに来るのは、決まってこの一番下っ端らしい背の低い騎士の格好があまり似合っていない天使だった。
毎日毎日、同じことで私を拷問し続けている天使たちは、未だにハクアリティスの行方をつかめていないらしい。
それなら、いい加減に私を拷問しても何の意味もないことに気が付けばいいのに、そんな気配は全く見られない。
「はいはい、今、起きますよ・・ん？」
また蹴られるのも嫌なので、昨日の拷問の傷を押さえながら起き上がると、その背後に見ない顔があるのに気がついだ。

――――それは翼を持たない人間、エンディミアン

私は下っ端天使に手の拘束具をつけられると、牢から出される。
エンディミアンが私を引っ立てていく事に周りの囚人たちが戸惑うような表情を一様に浮かべているのが目に入った。
特にミシアは私を気にしてか心配そうな表情を浮かべている。
私は彼女に大丈夫だというように少し笑ってやると、大人しく天使とエンディミアンに従った。
かくして、下っ端天使はいつもの拷問部屋への通り道ではなく別の道を歩く。
やはり、エンディミアンがいるせいなのだろう。
私は注意深く辺りを見回した。
まあ、ここは牢獄なのだから、どんなにあたりを見てみたところで牢と囚人しかいない。
しかして、牢屋の区画を過ぎると長い螺旋状（らせんじょう）の階段をずっとずっと上に上ってゆく。
牢屋区画も円状の廊下にひしめき合っている。
恐らくこの断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）自体が、筒状の塔の形をしているのではな

いかと想像できた。
ただ、牢や廊下、この階段にも全く窓のようなものがないために、外を窺うことはできないので確かなことは何一ついえない。
そして、天使とエンディミアンは一つの扉の前で立ち止まると、私をその中に押し込んだ。（本当に乱暴な所作は最初から変わらない）

「あーあー。来ましたね、来ましたね。」
しかして、私が部屋に入ると、キーキーと高い音の声が私を出迎えた。
それは妙に細くて白い男。
眼鏡をしていて、服装などはきっちりしたものを着ているのに、どこかだらしない埃っぽい感じがする男だった。

――なんだこの男は？

私はかなりあからさまに男を見ていたと思ったが、男のほうは私を見たままへらへらと気持ち悪く笑っている。
「Ｄｒ．パルマドール。お分かりかと思いますが、このアーシアンにはまだ聞かなければならない事があります。お渡しはしますが今日中にこちらにお戻しください。」
「？！」

――この男がＤｒ．パルマドール！

エンディミアンにつれていたかれた先に、人体実験をすると噂される狂った科学者（マッドサイエンティスト）の姿。
どうやらミシアの言っていた噂は、あながち嘘というわけでもないらしい。

――ならば私はこれから人体実験をされるのか？

「はいはい。わかってます、わかってますよ。大体、大体ですね、あなたたち天空騎士団（アイッシュグランド）がもっとしっかり、しっかりですね？情報を吐かせていれば、もっと早く私がこのアーシアンを貰い受けることができるのですよ！できるのです！」

なんとも珍妙なしゃべり方だ。

意味もなく同じ言葉を繰り返して、言っている言葉の意味を分かりにくくしている。

それでも話の意味を考えるに、貰い受けられて何をされるか分かったものではないが、ハクアリティスがまだ見つかっていないから、私の命はまだ何とか大丈夫なようだ。

「なんだと？！我々をエンディミアン如きが侮辱するな！貴様などラインディルト様のご命令さえなければ！！！あのエンシッダの腰巾着め・・・っ！」

そう言って下っ端天使が怒鳴ると、Ｄｒ．パルマドールはむふふと小ばかにしたように笑った。

「黙れ、黙るのです！貴様が何を言おうが、わたくし、わたくしはラインディルト様に、このアーシアンのことを命令されているのです！！はいはい。わかったら、さっさと渡しなさい、渡すのです！」

何ともせっかちな様子でＤｒ．パルマドールは言い捨てると、私たちに背を向けて部屋を出てってしまった。

「お待ちください！」

するとエンディミアンが慌てて私の手についている鎖を、天使からひったくるとその後に続いた。

「う・・・わっ」

私は急なことに声を上げたが、小走りになるエンディミアンに飼い犬のようにひっぱられるままにＤｒ．パルマドールの後を追った。

かくして、私は何が何だか分からないままにエンディミアンに引っ張られたままいると、気が付つけば断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）を脱出していた。

第１３話　人間というものの定義　１（後書き）

加筆・修正　０８．５．３０

第１４話　人間というものの定義　２

閉鎖された牢獄から出ることができた瞬間、澄んだ空気が肺の中に入ってきたことに違和感を感じた。

――そうか、ここは天使の領域（フィリアラディアス）なのだ

生まれてから今まで不浄の大地（ディス・エンガッド）の乾いた、澱（よど）んだ空気しか吸ったことのない私は、天使の領域（フィリアラディアス）の空気すらにも馴染めないらしい。

空気だけじゃない、私の頬を撫でる風も降り注ぐ太陽の光も踏みしめている豊穣な土地も、全てが全て私には今まで夢にすら見ないものたちなのだ。

明るい日の光が眩しい緑の草原の広がる場所。

広々とした草原にはどこかに水場もあるのか涼やかな音も聞え、花でも咲いているのか、甘い匂いがした。

純粋に綺麗な景色だと思う。

でも、何だか私には幻のような現実味のない景色に感じられた。

全てが今まで見たことないものばかりだったが、それでも広がる空だけは同じだろうと見上げてみると、空すらも様子が違った。

――空が狭い

高い白壁がぐるりと草原を囲んでいて、空はまるで切り取られたかのように小さかった。

いつでも、永遠と広がる空しか見たことのなかった私には、その空はまるで別物の空のように思えた。

僅かな青だけが覗き、太陽も雲も見えず、それでもこの世界が明るいのは、白壁内に太陽に変わる光る物体が浮かんでいたから。

そして、その小さな空の下には、天使とエンディミアンが住んで

いるだろう巨大都市が聳(そび)えている。
草原を囲む白壁と同じ、全部が白い石で作られている都市は神々しく荘厳だ。
都市はひたすら空に向かって高く聳え、最上部は白壁の天辺と同じくらいの高さにある。
地上にいる私にはその部分は、まるで豆粒ほどにしか見えない。
全てが未知で、全てが私には関係のない世界だった。
これが、最後の楽園・天使の領域(フィリアラディアス)。
本当はもう一ヶ月以上ここにいたはずなのに、私は今始めて自分がこの世界に立っていることを実感した。

しかして、生まれて初めて見た景色に目を奪われていた私であるが、エンディミアンに鎖を引っ張られて我に返る。
そして、今までどんなところにいたのか確認をしておきたくて断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)を振り返る。
しかし、さぞ大きな建物だろうと思って振り返った断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)は、草原の中にポツリとある石造りの小さな建物だった。
「あれ?」
「んんん?何?何だね?」
私が思わず声を出すと、草原の整えられた道でせわしく動きながら何かを待っているＤｒ．パルマドールが私を見た。
「いや、断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)があまりに小さくないかと思って。」
「ああ、ああ。まさか、あそこには何百人という囚人、囚人がいるのに、あんなちっぽけ、ひひ、ちっぽけな豚小屋みたいなもので全部なわけないでしょ。ちみは馬鹿だな。馬鹿。」
いひひひと人間ではない、別の動物の鳴き声のようなキーキー声で鳴くように笑うＤｒ．パルマドールは、私を馬鹿にしたようにそう言った。
「そんなことといっても、他には草原しかないじゃないか。」
カチンときたが断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)と思しき建物の前には、４人の天使が

警備に立っているのが確認できる以上、ここで暴れるわけにはいくまい。
それに実はこの手に付いた拘束具をはめてから、何故か体に力が入らないのだ。
私は殴りかかりたいのをグッと堪えた。
しかし、私のそんな感情など全く気にずかず、Ｄｒ．パルマドールは私に視線を置いたまま地面を指差した。
「何だ？」
「まだわからないの？わからないかね？」
――――そんなんで、分かるわけないだろう
しかし、私がその意思表示をする前にせっかちなＤｒはさっさと説明しだした。
本当に慌しい男である。
「だから、だからね。地下なんだよ、地下！ちみはさっきまで地下にいたんだよ。断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）は入り口以外は全てが地下に埋まってるの。埋まっちゃってるわけなのよ！！」
と、勝手にきれだして地団駄（じたんだ）を踏みだす。
その様子は何だか壊れた玩具のようで非常に滑稽だ。
しかし、訳の分からない物言いと行動であるが、いいたい事は理解できる。
そういえば思い出してみると空気は妙に薄かったのは、また牢獄内には窓一つなかったのは、牢獄全体が地下に埋まっているからだったのだ。
私が納得しような様子を見せるとＤｒ．パルマドールは、
「これだから、野蛮なアーシアン。アーシアン。は馬鹿だというのです。見える、見えるものしか、信じようとしない。この世界にはね。世界には。目には見えなくとも、大事な大事なことがたくさんあるのですよ。あるんです。いひひひひ。」

と言ってまた不気味に笑った。
私はそれを無視して改めて今までいたはずの断罪の牢獄（エヴィラ・アメン）を振り返る。
一見すればまさかこの綺麗な草原の下に広大な牢獄が広がり、何人もの囚人が捕らわれているとは思いも付かない。
まるでこの草原が臭いものにされた蓋のように思えて、私はいいようのない感情に捕らわれた。
でも、それがアーシアンをこんな地下に閉じ込める天使に対しての怒りなのか、それともこの草原を美しいと思った自分に対しての罪悪感なのか、はたまた、この草原自体に対して気味悪さを感じているのか、私には判断が付きかねた。
どれもが正しいように思えて、それでいてどれもが違う気がした。
そうして、そんな感情だけを残し私は断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）を後にした。

その後、私は草原の向こうからやってきた『車』という動く鉄の塊に押し込まれ移動させられた。
車の乗り心地は悪くなかったが、道が悪いのか少し揺れる。
私が車の中で不思議そうにきょろきょろしているとそれが気になるのかＤｒは、この車のことについて私の分からない言葉で一々詳しく説明してくれた。
しかし、私があまり意味をわかっていないと分かると、馬鹿ですね。馬鹿。とさっきと同じようにあの鳴き声みたいな声で笑った。
この男、どうも自分の知識をひけらかしたい、話したがりの性格のようである。
しかし、言い方がムカつく上にしゃべり方も聞き取りにくいし嫌味な物言いなので、こんな男の話はそうそう聞く耳をもたれないだろうなと言う感想を私はもった。
かくして車は草原を過ぎると、高く聳（そび）える白い都市に迷うことな

く入り、鎖には繋がれたままであったが、車の窓から外を眺めることは咎められることもなかったので、私は遠慮なくじろじろと外を見ることができた。

――都市の名は白き神（イア・ルマンヌ）の御許

話によると全ての生命の源たる白き神イヌア・ニルヴァーナの街であるらしいが、内部は外から見ているよりも、煌（きら）びやかで美しい装飾の施されている白い石造りの建物たち、様々に咲き乱れる木々や花々に彩られている。

また街中は活気に溢れており、生き生きと生活している天使とエンディミアンがそこかしこに見ることができた。

しかして、車がどれくらい走ったか分からないが、白い石造りが眩しい明るい場所から何となく暗がりに入って、建物の白さが灰色っぽく感じられるようになり、私はあれ？と思った。

そして、見るからに先ほどまでの美しい建物たちとは雰囲気が違う、無機質で冷たい雰囲気のする四角い建物に車がぐんぐん向かっていくのを感じて、私はやっと自分の置かれている状況を思い出した。

――そういえば、私は人体実験・・・されるんだったか？

外に出られたことで、つい自分がどうして外に出られたか忘れてしまっていたらしい。

白き神（イア・ルマンヌ）の御許を見て高揚していた感情が急に萎（しぼ）んで、今頃どうしようかと急に焦りだした私であるが、まあ、何もかもが遅いわけで・・・、私は何の手段を講じることもできず、車でその建物まで運ばれていく。

「さあ、さあ。降りるのです。」

そして、車の中に居座るわけにもいかず、Ｄｒ（ドクター）パルマドールに急

き立てられ、建物の入り口に降り立った瞬間ひやりと空気が冷たく感じられた。

周囲は車から眺めていた賑(にぎ)やかな白き神(イア・ルマンヌ)の御許の気配一つせず、何処からか不気味なカラスの鳴き声さえ聞えてくる。

生えている植物もどこか湿っている感じがして、建物全体の醸し出す雰囲気がオドロオドロしくて、まさに如何にも何かが出そうな・・・そんな雰囲気がびんびんする。

「こっちです。こっち。」

そう言っていつの間にかエンディミアンではなくＤｒ．パルマドールが、明らかに建物に恐れをなしている私の鎖を握っている。

私は思わず引っ張られる力に逆らって足を踏ん張った。

何せひょろひょろした男相手だ、力で負けることはあるまいと、高を括(くく)ったのがいけなかった。

何と私が足を踏ん張り逃げ出そうとし力を入れようとした瞬間に、体から力がガクンと抜けたのである。

「？！」

予想もしない力の抜け具合にそのまま地面に倒れこんだ私を見下ろして、Ｄｒ．パルマドールがヌフフと気持ち悪く笑う。

「逃げようとしたでしょ？逃げようと？無駄ですよ。その拘束具は、このわたくし、わたくしが作った特殊な鎖なんでしょ。それを付けて、付けている限りはどんな超人だろうが、子供にすら勝てない、イヒヒ、勝てなくなるんです。」

「なにっ？」

見ても至って普通の鎖だが、牢獄にいたときからこれを付けられると力を込めれないのは確かだった。

どんな原理で鎖が作られているかは定かではなく、その説明を聞いてもどうせ分からないだろうが、もしこれを作ったのがこの男だと言うのであれば、やはりこの男が天才というのは確かなのだろう。

――――この鎖さえなければ、こんな細い男など片手でつるし上げて

やるものを！

　Ｄｒ．パルマドールにひゃひゃと笑われながら見下ろされて、私はうつむいて奥歯を噛み締めた。

「さあ、さっさと入れ、入るのです。」

　そして、Ｄｒ．パルマドールは私のそんな感情など気にすることなく、せわしなく私を引っ張る。

　今の私に逆らう力もなく、悔しいかな私はこの不気味極まりない建物の中に入っていかざるを得なかったのである。

「さあ、ここが生態兵器開発研究所なのです！なのですよ！！！」

　何に興奮しているか謎だが、Ｄｒは奇声を発してなにやら鼻息を荒くし始めた。

「生態兵器研究所？」

　やたらと長たらしい、堅い名前である。

「ヤハハハハ！わたくしめが、わたくしが責任者を務めている研究所！研究所です！！」

「・・・あんたが責任者って言うよりは、あんたしかいない研究所じゃないのか？」

　建物内のロビーのようなところにはいっても、誰の気配もしない静まり返った暗い空間を見つめて私が言い返してやると、壊れるくらいＤｒが首を横に振った。

「何、何いってるのよ！！まず、わたくしのじょじょ助手のアースラ君！アースラ君がいるでないの！ねねねね？」

　と大声で断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）からずっと一緒にいる、やけに影薄い見るからに真面目そうな容貌のエンディミアンを指差した。

「はい。私はＤｒのことを尊敬しもうしあげています。」

　すると、今まで言葉らしい言葉を殆ど発していなかった男が、何の感情も見せない様子でそう言う。

　それを聞くとＤｒ．パルマドールが嬉しそうにイヤヤヤヤと照れているのか、またあの奇声じみた笑いか分からない声を上げた。

――何なんだこの二人？

私は両極端な二人の様子にひきまくりで、乾いた笑いしか浮かばない。

こんな濃い人間に未だかつて出合ったことのなかった私は、正直どうこの状況に対処していいか分からないのだ。

しかし、この狂った科学者様にはアーシアンの気持ちを思う遣る心などあるわけもなく、私の様子など一切無視して更にマシンガントークを続ける。

「それに、ここにはわたくしのたくさんの研究の協力者たちがたくさん、たくさんいるのですよ？？」

「協力者？」

支援者とか、助手とは違う共同研究をしている科学者が他にもいるのだろうか。

まあ、この入り口にいなくとも研究所は大きそうなので恐らく他所にいるのだろうと、私はそれ以上聞かなかったし、ハフフフとＤｒ．パルマドールは一人笑うだけだった。そして、

「ままま、こんなところで立ち話、立ち話もなんですから！お茶でも飲みましょ、飲みましょうよ！わたくし、じじじ実は、ちみに聞きたいことがあるんです！あるんですよ！！」

と言うと、Ｄｒ．パルマドールは私を建物の奥のほうへ助手のアースラ君を置いて、グイグイと引っ張っていく。

――聞きたいこと？お茶だと？

てっきり人体実験か何かされるのかと身構えていた私は拍子抜けしてしまった。

しかし、この不気味な男を簡単に信じるのも危ないし、アーシアンの私がこの天才だが狂った科学者に教えることなど何一つないよ

うに思う。
　早歩きで薄暗い建物の中を進む後を続きながら、私は油断しないように気を引き締めた。
　研究所内の照明は薄ぼんやりとした緑の光だけが廊下を点々と照らしているだけで、足元すらも覚束ないが、さすが自分の研究所というだけあってＤｒの足取りに迷いはない。
　何処までも静かで薄気味悪い建物であったが、よくよく気配を探ってみるとＤｒの言っていたように確かに人の動く気配もあった。
　そして、暗いし迷路みたいな研究所内をどれくらい進んだか定かではないが、Ｄｒ．パルマドールはやたら豪華な一室に私を通した。
　手術室みたいなところに通されるのではないかと緊張していた私であるが、しかしこんな部屋に通されたら通されたで、何が起こるのか分からず身をかたくした。
「ささささ、この椅子に座れ、座るのです！」
　部屋に入るとＤｒ．パルマドールは鎖から無用心に手を離した。
　私が鎖が付いている限り自分に敵わないと思っているからだろうが、逃げ出すとは考えないのだろうか。
　しかし、すぐに釘を刺された。
「言っておきます、言っておきますが、この部屋の扉はわたくし、このわたくし以外は開けられないようになっております。」
　要はこの部屋に私は閉じ込められたわけである。
「・・・」
　私は憮然としたまま部屋の中心にぽつんと置かれた椅子に腰掛けた。
　そこは妙にガランとした寂しい部屋で、作り自体は豪華で、壁紙や絨毯の図柄や室内照明などは煌びやかで凝ったものだったが、如何せん物が少なかった。
　私が座る椅子以外は一つの机とその上に黒い縦長の箱が置かれているだけ。
　部屋の異様な雰囲気に飲まれ、これから何が始まるか全く予想も

付かない私は、Ｄｒ．パルマドールの一挙手一投足を緊張したまま見つめるしかない。

しかして、Ｄｒは私のそんな視線など意に介さないように、机の上の黒い箱を手に取り話を切り出したのである。

「ししししっ。わたくし、こいつのことについて、ちみに、ちみに聞きたいことがあるのですよ！聞きたいことが！！！」

そして、何の緊張感もなくばばっと、箱から何かを取り出すと私の前に突きつけた。

一瞬それが何か分からなかった私であるが、目の前のそれに見覚えがあって私はぼんやりとその名を呟いた。

「・・・黒の剣（ローラレライ）」

第１４話　人間というものの定義　２（後書き）

加筆・修正　０８．５．３０

第15話　人間というものの定義　3

黒の剣（ローラレライ）は私のものだ。
だから、天使に取り上げられたはずのその剣を目の前に差し出されて、当然のことながら私は手を伸ばす。
細く身の丈は1メートルほどの銀色の鉄の刀身を持つ黒の剣（ローラレライ）は、一見すると何の変哲（へんてつ）もない、どこにでもある普通の剣。
それでも迷うことなくそれが私の剣だと分かるのは、その柄の先に亡き母の形見である青い石が紐で結ばれて目印になっているから。
また父がいなくなってから私が譲り受けて以来は、ずっと共に戦ってきた唯一無二の相棒であるから。
そして、何より私と剣を結び付けているのが『彼女』だから、私は決して剣を見間違うはずなどなく常に共にありたいと思うのだ。

――なのにどうしてだろう？

剣を手にしようとした瞬間に天使と戦った時のあの私には制御できなかった時の感覚が蘇り、胸に嫌な冷たさが落ちるのだ。
「あれ？あれれ？この剣、剣は、ちみのものですよ？！いらなのですか？！」
Ｄｒ．パルマドールのけたたましい声が、ぼんやりとしていた私を呼び戻す。
沈黙したまま黒の剣（ローラレライ）を手にしようとしない私に、彼は釈然としていない表情を浮かべていた。
だが、自分でもどうして自分の武器を手にしようとしないのか上手く言葉にできないのだ。
他人である上に変人のこの科学者様にそんな私の気持ちを説明したところで、理解してくれるとは思えなかったし、必要もないと思った。

それにこのＤｒ．パルマドールは私がしゃべろうがしゃべらまいが、自分の好きなようにまた話し始めるのだ。

「心配しなくても、心配は無用です！わたくしは、ちみにこの剣を、返す、返すために、わざわざ天空騎士団（アイゾシュグランド）から、この剣を拝借（はいしゃく）して、ちみを呼んだのですから。そう！だから呼んだのです！！」

――いやいや、囚人の私に武器を返すなど誰が見ても怪しい行動だろう

しかして、そう冷静に心の中だけで突っ込んだ後、Ｄｒは更に突っ込みどころ満載の言葉を発する。

「しかし、しかしですね？この事態はわたくしの意志ではないのです。ないんですね！ラインディルト様の、ああ、ラインディルト様のご命令で、わたくしは今、ちみにこの剣を返しているだけなのです！そして、確かめるのです。確かめーる！」

そして、何だか段々とＤｒ．パルマドールのテンションが上がっていっている気がする。

私は謎の生物の如く耳障（みみざわ）りな鳴き声で喚（わめ）く科学者を見ながら、拳に余計な力が入る自分を自覚していた。

狂った科学者様にはこのテンションが普通のことなのかもしれないが、慣れない私には正直会話するだけで大変な疲労感とストレスだけが溜まっていく感覚を覚えるのだ。

しかし、今はまだこの男の目的を聞くことが先決である。

私は殴りかかりたい気持ちをグッと押さえた。

「ラインディルト？」

「『様』をつけるのです、『様』を！」

「ら・・・ラインディルト・・・様？」

Ｄｒ．パルマドールの血走った目をした顔をギリギリまで近づけられてので、私が引きつった顔のまま大人しく言うとおりにるすと満足したのか顔を離してくれた。

「うほん。ラインディルト様は万象の天使を支える三大天使。そう、三大天使！の一人、大地の天使であられるのです。ちみのような、低俗極まりない、低俗！なアーシアンがその名を口にすることすら、本来はおこがましいのです。全く、おこがましい！」

万象の天使の次は三大天使。

ここ最近、出てくる名前のあまりの大物っぷりにいまいち私は現実感が沸かない。

そのせいでＤｒの話を聞いて、私は驚くを通り越して呆れるような感情に捕らわれた。

「まあ、誰でもいいがその大地の天使様がどうして私に武器を返してやろうという気持ちになったわけだ？」

私の全く大地の天使を敬う様子のない態度にＤｒ．パルマドールは、酷く不服そうな表情を浮かべる。

こんな非常識極まりない男でも天使には敬意をはらっているらしい。

「天空騎士団第一師団、副師団長エンリッヒの報告のせいです。あの若造天使の報告のせいなのです！」

とＤｒは今度はエンリッヒに対して怒り出したようで、その感情のままに黒の剣を怒りに任せて私の足元に叩き付けた。

どうも天使全てを敬っているというわけでもないらしい。

本当に分かりやすい男である。

床に転がった黒の剣が、僅かに私の足に触れる。

しかし、私はそれに気がつかないふりをして下を向かず、Ｄｒ．パルマドールに視線を置いたままにした。

Ｄｒは私の様子など目も向けず、ひたすら自分のペースで話続けている。

「大体、こんな何の変哲もない剣が黒の武器、あの黒の武器なわけはないのです！それをあの若造天使、若造天使が、言うのですよ！ちみがこの剣を黒く変色させて、神の力と同等の力を発したなどと法螺を、プププ、法螺を吹いたために、ラインディルトさまがそれ

を気にされたのです！」
　若造天使とはエンリッヒのことだろうと予想できる。
　要約すればＤｒ．パルマドールはエンリッヒの私との戦闘における報告の真偽について、確かめるよう敬愛する大地の天使に命じられているようだ。
　この傍若無人（ぼうじゃくぶじん）な科学者も、自分が敬っている大地の天使には絶対服従らしい。
「『カシュケルノ』というのは、何だ？黒の剣（ローラレライ）のことをいっているのか？」
　エンリッヒの報告が今言ったとおりであれば、特に偽装された報告というわけではないだろう、ということは黒の剣（ローラレライ）は、三大天使に目をつけられるほど何か特殊なものだということなのだろうか。
――しかし、『カシュケルノ』という言葉には、とんと聞き覚えがない

「・・・ほら！見てみなさい！見てみなさい！」
　しかして、素直に私が尋ねると誰に言っているのか分からないが、元々高かったＤｒのテンションが更に上がった。
「きぃー！！こんな黒の武器（カシュケルノ）が何たるかも知らない低脳な、低脳すぎるアーシアンが、天使すらも滅するといわれる黒の神の力を持つはずが、いいえ、持つことが許されるはずもありません！！！」
　頂点に行ってしまった科学者は狂ったように笑う。
　そして、その狂った勢いのまま黒の剣（ローラレライ）を踏みつけて、私に見せ付けるように目が血走ったまま笑みを浮かべた。
「所詮、低俗で、低俗なアーシアンがもつ剣など、わたくしたちに踏みつけられるぐらいが、ちょうど良い・・・、ひひひ、ちょうど良いのです。」
――――プツン

それを聞いていい加減に、色々溜まっていた私は・・・きれた。
「言わせておけば。おい。この変人科学者、誰が低俗？何がちょうどいいって？」
静かに頭に血を上らせた私は黙ったままＤｒ．パルマドールに近づくと、鎖に両手を縛られたまま腕を振り上げて、そのいけ好かない顔を思いっきりぶん殴った。
「ピギャッ！」
Ｄｒ．パルマドールはそれまで従順だった私が、殴りかかってくるのとは予想もしていなかったのだろう。
驚愕（きょうがく）に目を見開いたまま呆然として、情けない声を上げて床に転がった。
鎖の効力のせいで拳の威力は強くないだろうが、その分は堅い鎖を顔にクリーンヒットさせていることで補うことができただろう。
みっともなく転がったＤｒを見下ろして、ちょっとすっきりした私である。
アーシアンにだって最低限のプライドはあるし、黒の剣（ローラレライ）は私にとって特別なものなのだ。
踏みつけられて怒らない人間などるはずもない。
「ななななんん、何をするのですか！何を！！！ここの天才科学者である、わたくしを殴って、ちみ！ただで、ただですむと思っているのですか！？」
思わぬ反撃に気の動転したＤｒ．パルマドールが何事かまくしたてるが、どっかの何かが切れた私は、脅されるように言われたところで何も感じない。
「じゃかぁしい！こっちは一ヶ月も拷問され続けるは、何にも状況が分からないは、あんたみたな変人に付き合わされるはで、鬱憤（うっぷん）がたまりまくなんだ。まさか、あんたこそ一発殴られるだけですまされると思ってないよな？幸い、部屋はあんたしか出入りできないらしいし、邪魔は入らないよな？」

私は小心者の癖に昔から切れてしまうと後で激しく後悔するのに、何もかも忘れて突っ走ってしまう。
本来は自分で言うのも何なのだが、単細胞としかいえない人間なのだ。
そして、単細胞な今の私にはこの科学者を気が済むまでぶん殴ることしか考えられない。
恐らく顔に笑みすら浮かべて、私は床に転がった男にまた一歩近寄った。
すると、恐怖に顔を引きつらせたＤｒ．パルマドールが、声をあげた。
「やめるのです！はい・・・、やめるのです！！わ、わたくしなど殴っても、何の生産性もありません！あるわけないでしょう！むしろ、自分の立場を悪くしますよ！！」
しかし、私の切れ具合は変わらない。
「生産性はなくても私の気がいくらか晴れる。」
「ぎゃー、野蛮人！野蛮人です！」
実際は神経を逆撫でしかしてないが、本当は私を必死で宥めようとしているらしい。
そんなＤｒ．パルマドールを、私は一言で切り捨ててやると、ついに彼は絶叫した。
それを見て酷く気分がいいと感じる私は、よほど一ヶ月の囚人生活でストレスを溜めていたらしい。
「さあ、覚悟してもらうか？」
そういって今は凶器と化した鎖をジャラリと鳴らし、もう一歩踏み出した瞬間だった。
それまで恐怖に顔を引きつらせていたＤｒ．パルマドールが、私を見てにやりと笑ったのだ。
「？」
しかして、おかしいと思うよりそれは速かった。
足元の床がなくなる同時に、落下していく浮遊感が私を襲ったの

だ。

「うわぁぁぁぁぁっ・・・・・・・・・・！」

ベシャッ（↑私が底にぶち当たった音。）

「イダッ！」

両手が縛られているので、碌（ろく）な受身が取れずに体に衝撃が襲った。

「いたた。一体、なんだ？」

落下した距離は短かったので、衝撃とはいってもさほど大きくなかった。

しかし、予想もしない事態だったので驚きが先立った。

私はすばやく起き上がると、周囲を確認した。

先ほどの豪華な部屋とはうってかわり窓や出入り口さえない、継ぎ目のない白い壁が無機質に、だだっ広い空間が広がっていた。

「ここは・・・」

私が落ちてきただろう天井を見上げてみるが、落とし穴は既になんの痕跡（こんせき）も残っていなかった。

「ししししし！」

私が辺りを見回していると、変な動物の鳴き声のような笑い声が空間に反響した。

「いい気味です！わたくしを殴った当然の報い。報いなのです！アーシアン、アーシアンめ！！」

「ここはどこだ？私の剣が『カシュケルノ』か確かめなくてもいいのか？」

声は聞えても姿は見えない。

私は気配を探りながら声を張り上げた。

「あんな普通の剣が黒の武器（カシュケルノ）であるはずが、あるはずないのです！しかし、しかしです。たとえ可能性がゼロに等しくとも！科学者たるもの、わたくしのような天才科学者たるものですよ？ちゃんとその確証を得てから結論は、結論は下すものです！」

私の声に答えるようにＤｒ．パルマドールがけたたましく持論を述べるた。

すると天井の穴がまるで生き物の口のようにパクリと開き、上から黒の剣（ローラレライ）が落っこちてくる。

そして、Ｄｒの話は続く。

「まあ！ちみ如きに、わたくしがわざわざ手を下して、確証を得る必要はないのです。はい。全くないのです。なので、ちみにはここで死ぬまで戦って、戦ってもらうのです！」

「どういう意味だ？」

何が『なので』かさっぱりわからない。

脈絡のないＤｒ．パルマドールの言葉に私が問うと、それには律儀に答える。

「だから、だからよ？今から、ちみにはわたくしの協力者と戦っていただくわけですよ！もしそれがあの黒の武器（カシュケルノ）だっていうであれば、ちみは、協力者を倒すことができるです！で、それが間違いであるならば、ちみは、死ぬしかないのです！死になさい！」

響き渡る声が大きくて耳鳴りがした。

その叫びに答えるように、音もなく私の目の前２０メートルの壁がパクリと人一人くらい通れるほど開いた。

その先にマントで全身を覆っている人影が一つ。

叫びと笑い声が収まると付け足されるように声が続いた。

「まあ・・・それが黒の武器（カシュケルノ）であるはずはないのですから。間違いなく、ちみは死ぬんですがね？せいぜいわたくしに無礼を働いたことを後悔して死ぬが良いのです！」

本当に言うこと、なすことムカつく男だ。

さっき、もっと殴っておけばよかった。

そう後悔しながら、目の前に現れた『協力者』を見据えた。

「協力者だか何だか知らないが。剣など必要なく私がこいつを倒したら、どうるすんだ？」

「しゃしゃしゃ・・・、その拘束された素手で、まさか素手で倒せ

ると?このわたくしの協力者の真の姿を見ても、同じことがいえるのかしら?」

真の姿とはどういう意味だろう?

私は距離を保ったまま沈黙を守る『協力者』をみた。

『協力者』と言うのは、恐らくＤｒの研究の協力者ってことのはずだ。

まさか、天使とか?

それであるならば黒の剣(ローラレライ)を使わざるを得ないだろう。

Ｄｒ．パルマドールに力を見せることには、いささか躊躇(ちゅうちょ)する思いがないわけではないが、

――今はここを切り抜けることだけ考えよう

頭を切り替えると『協力者』との距離を確認し私は駆け出して黒(ロー)の剣(ラレライ)に手を伸ばした。

しかし、黒の剣(ローラレライ)までもう少しというところで、私は剣との再会を別の力に阻(はば)まれた。

「ぐ・・・」

そして、そのまま私はマントで何もかもが覆われたままの『協力者』に、首根っこを掴まれたまま体を持ち上げられていた。

首が締まる。

――なんて力だ・・・

私と大して体格も変わらないはずだが、私を片手で持ち上げてその首を絞めるなど、その力は私など比較にならない怪力だ。

「ひひひひ。さあ、わたくしの愛しい、愛しい『協力者』よ。その姿を見せてあげなさい。きっと、驚いてくれますよ?きっと・・・。」

私のそんな姿を見て酷く嬉しそうな声でＤｒ．パルマドールは、

『協力者』に命令した。
そして、その命に従い『協力者』は私を掴んでいないほうの手で、頭にかぶっているマントをとった。
「！」
その姿に私は目を見張る。
「紹介しよう。わたくしの人体実験の『協力者』。」
――『協力者』？
違う。それは『被験者』の『犠牲者』の間違いだろう。
「フシュー。フシュー。」
規則正しく息を吐く唇からは、人間のものとは思えないほど大きな牙。
苦しむ私を見るのは、もう何の感情も移さない、瞬きもせず赤く光る瞳。
私の首を掴む手は、もはや魔物としかいい様のない爪と大きさを持つ。
そして、部屋の照明にさらされた肌は、死んだ人間のように青紫の傷だらけの肌。
――それは人間の原型は保ちつつも、もはや人間とはいえない魔物だった

第１５話　人間というものの定義　３（後書き）

よくドクターが「ちみ」と言っていますが、「君」という意味です。
加筆・修正　０８．５．３０

第16話　人間というものの定義　4

目の前にあるものが人間なのかそれとも魔物なのか、私には判断が付かなかった。
ただマントを取ったその姿が何なのかと問われれば、やはり人間としかいいようがない。
だって、頭も手足もそのシルエットは人間のそれと寸分変わりないのだから。
それでも手の先に付いている爪の鋭さも、肌の継ぎ接ぎされたような多くの傷跡の残る青紫の肌も、生気のない顔に浮かぶ禍々しく光る赤い瞳も、どれが生きている人間の姿といえるのであろう？
でも、人間でないというのであれば何であると私は言えばいいのだろう？
私は目の前の存在に何と名をつけていいかすら思いつかない。
だけど、そんな私が唯一ついえることがある。
それは私の首を掴むその『協力者』の顔に怒りも憎しみも狂気すら人間が持つ感情という名の表情は、何一つ浮かんでいないということ。
私はそれが無性にやるせなかった。

「ひゃははは！苦しそう、苦しそうな顔ですね、アーシアン！どうですか？わたくしの人体実験の『協力者』の力は？この素晴しい力は！」
酸素不足で動かない頭に興奮したＤｒパルマドールの声が響く。
「ぐ・・『協力者』？人体実験の『被験者』・・の間違い・だろう？」
私の首を掴むその鋭い爪が生えた手に、私は何とか自分の鎖に拘束されたままの手をかけることができた。
しかし、相手のあまりの力の強さに首から手を剥がすどころか、

抵抗したことにより更に首にかかる力が強くなる。
「うぐっ」
「ひふふ・・まあ、まあ、そういう言い方もありますかね。でも『被験者』より『協力者』、『協力者』のほうが良くないですか？わたくしは、わたくしの研究の糧（かて）となってくれるアーシアン、アーシアンの皆さんに敬意を、そう敬意を払っているのですよ？」
やはり、噂どおり断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）から連れ出した囚人たちを使って、この狂った科学者は人体実験を繰り返していたのだ。
「け・敬意だ・・・と？くそ・たれっ！」
どちらにしろこの科学者の研究ために彼らは人体実験に『協力させられた』だけではないか。
あの私の目の前で連れて行かれた囚人女性も、すでにこの男の手で人体実験の犠牲となったのであろうか？
色々なことが頭をよぎり私は怒りだか何だか分からない感情で、目の前が真っ赤になるような感覚を覚えた。

「黙りなさい！強がりを言っても無駄。無駄ですよ。わたくしの『協力者』にたかが、ふふ、たかがアーシアン如きが敵（かな）うはずもないのですから。まあ、ここで一思い、一思いに首の骨を折ってやってもいいのですが、一応その剣を使って戦っている記録を残さないといけないですからね。一応。」
しかして、Ｄｒ．パルマドールは声だけで私の首を絞めているかつて人間だったその人に、私を放すように命じる。
Ｄｒ．パルマドールの命令を理解し、その人は私の首を何の躊躇（ためら）いもなく放すと、そのまま直立不動で立ち尽くし顔は無感情な顔のまま視線は何処を見ているか分からない。
「わざわざ一端（いったん）は殺さないでいてあげるのです。ええ、あげるのですから、さっさと、剣をとりなさいな。まあ、どうせ、どうせですよ？先に死ぬか、少し後に死ぬかの、どっちかですがねぇ。ふふ、どっちかです。」

掴まれた首には恐らくこの『協力者』の手の跡がくっきりと残っているに違いない。
私はそこを両手で擦(さす)りながら、けたたましい声を無視して何も映すことのないその瞳を見つめた。
「おい、変人科学者。これは本当に人間なのか？」
「誰が変人です！誰が！まあ、いいでしょう。彼らは確かに人間でしたよ？今は人間よりも素晴しい、『魔人(ベルトゥール)』という新たな存在に、わたくしが、このわたくしが生まれ変わらせてあげたのです！さあ、ちみも死ぬ前に、死ぬ前に、わたくしの素晴しい研究に触れて、触れてですよ！最後にわたくしのすごさ！を思い知って死ぬといいのです！さあ、死ぬのです！！」
質問されると答えずにはいられないのは、きっと自分のことについては、どんなことでも聞かれるということが嬉しくて堪らないのだ。
あまりに人間として素直すぎるＤｒ．パルマドールの感情など、私には手に取るように分かった。

――だが、この目の前の存在にはもう嬉しいという感情もその中には存在しないのだ

「私の質問に答えろよ。大体、私のことは断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)に返さないといけないんじゃないのか？」
「ふふふん！天空騎士団(アイッシュグランド)など、恐るるに足らず！足らずなのです。ラインディルト様には、ちみが黒の武器(カシュケルノ)の保持者でなければ、いつものように研究に使ってもいいと、ひひ、使ってもいい！と許可を得ています！」
まあ、『ちみ』みたいな低脳で無礼なやつは研究にも使ってやらないと、子供のように付け足された。
こっちだってそんなもの願い下げである。
「・・・三大天使が許可をしているということは、これは天使も容

認している研究ということなのか？」

そもそもこんな研究所が白き神（イア・ルマンヌ）の御許にあること事態が、その証拠のような気もするが、私は聞かずにいられなかった。

まだ、私は天使や神に夢を持っていたかったのかもしれない。

彼らという存在は人間を救ってくれるものであるという、美しい夢を。

しかし、そんなものはどうしたって愚かな夢か幻でしかないのだ。

「当然！当然です！この生態兵器・魔人（ベルトゥール）の研究は天使たちの中でも、今一番注目、なんて言っても、一番注目されている研究なのです！」

やはり天使たちはやはり人間を人間とも思っていないのだ。

これでは、人間は天使の家畜か奴隷である。

過去の罪だけで、何故に私たちがここまでの扱いを受けなければならないというのだ。

私は魔人（ベルトゥール）と言われた、人間の成れの果てを目の当たりにして、やりきれなさと怒りを覚えた。

天使達だけにではない、この同胞を同胞とも思わない腐った科学者にもだ。

「どうして、こんな下らないことを・・・。」

しかし、言いたい事は山ほどあったはずなのに、私の口から出たのは低いそんな言葉だけだった。

後はもう言葉にならずに、あふれ出る怒りが体の震えになるだけだった。

「下らない？この素晴しい研究のどこが下らないというのです？！この魔人（ベルトゥール）はですね？ある方法を使って、まあ、それは内緒ですが。人間の身体能力を飛躍的に、神のごとく飛躍的に！上げることができるのですよ？あなたも今、実際にそれで、体感したでしょう？！その力が手に入るのであれば、人間たちは皆、何をしても、ちみだって何をしたって、この魔人（ベルトゥール）になりたいと思うでしょう！！！当然思うのです！」

――誰が、こんな、もはや人間ではない姿になりたいと思うだろう？

こんな腐った科学者の言いなりになり、人間としてすら扱われず、何の感情すらも持たない姿などに、誰がなりたいと思うのだろう。

どうしてそんな風に考えることができる？

私には、この魔人（ベルトゥール）と呼ばれた人が、どんな思いをしてこんな姿になったのか想像すらつかなし、この人のために何かをしてあげたいなどと、そんな大層なことは考えてはいない。

ただ、今はこの私の怒りを増長させるだけの、狂った科学者の息の根を止めてやりたいという、純粋な殺意と衝動だけが私を支配していた。

私はその感情に身を任せると、まだ喚いているＤｒの声ももう耳に入らず、魔人（ベルトゥール）の横を通り過ぎて、黒の剣（ローラレライ）の元まで無言で歩いた。

黙って愛剣を見つめる私は、やっぱり僅かに伸ばしかけた手を彷徨（さまよ）わせる。

何故だかこの剣を取るのが怖かった。でも、今は・・・

「黒の剣（ローラレライ）・・・・、私に力を貸してくれるか？」

見下ろした剣が答えるはずもないが、無性に聞いておかないと不安になった。

そして、その言葉を黒の剣（ローラレライ）に伝えただけで、何故だか心が軽くなったような気がして、彷徨（さまよ）っていたその手が戸惑いを断ち切り黒の剣（ローラレライ）の柄を確りと掴む。

私は黒の剣（ローラレライ）の柄を鎖で拘束されたままの両手で握ると、刃の部分を使って、何とか器用に鎖を壊すことに成功した。

自由になる両手の感触を確かめると、私は戻ってきた黒の剣（ローラレライ）の感触も確かめた。

黒の剣（ローラレライ）は一ヶ月前と変わらないように私の手に戻り、その姿を少

しだけ見つめた後、私は自分の手の平を傷つけ黒の剣（ローラレライ）の刃の部分に自分の血を垂らし、言霊を呟いた。

「目覚めよ、黒の剣（ローラレライ）」

そして、私は黒の剣（ローラレライ）を解放したのだ。

「ううううう？それかね？それが、あの副団長が言っていたやつかね？むむむ？」

黒く侵食していく剣を見て、それまで一人で喚いていたＤｒが興味深げに呟く。

「確かに、確かに、黒く変色は、黒くはなるようですね。しかし！それくらいで黒の武器（カシュケルノ）と断定するのは早いでしょう。ええ、早すぎです！魔人（ベルトゥール）３８号、やっておしまいなさい！おしまいなさいです！」

Ｄｒ．パルマドールがそう口早に命令すると、魔人（ベルトゥール）は、ユラリと動いたかと思うと次の瞬間にはその鋭い爪を私に向けて攻撃していた。

私に視線を移すことなく攻撃のモーションに入るその速さは、とても人間のものとは思えない、野生の動物の本能的な動きのようだ。

幸いあらかじめ攻撃されるだろうことは予測できていたので、避けるだけならば何とかなる。

しかし、その後も次々に繰り出される攻撃を、紙一重で避けることはできるものの、私はそれ以上のことは何一つできない。

防戦一方である。

「どうしたかね？かね？避けているだけでは、その魔人（ベルトゥール）は倒せないよ？それじゃあ、死んじゃいますよ？死じゃっていいのですか？」

その私を見てはしゃぐ声が、うっとおしい。

死んじゃって、いいわけはない。

しかし、私の目的はこの魔人（ベルトゥール）を倒すことじゃないのだ。

魔人（ベルトゥール）を殺すために黒の剣（ローラレライ）を解放したわけではない。

だから、別にこれはこれでいいのだ、というか今はこれしかできない。

魔人（ベルトゥール）から繰り出される速くそして重い、爪による斬撃は受けるだけで、精一杯だし、その相手の刃は、人の爪とは思えない強度を持っている。
解放状態の黒の剣（ローラレライ）のほうが、刃こぼれを起こさないか心配になってくるくらいだ。

――ただ、私は今、待っているのだ

これだけ重い攻撃を立て続けに力一杯い繰り出すためには、前に思いっきり体重を乗せて攻撃する必要がある。
よって魔人（ベルトゥール）の体の重心は、次第に私のほうに傾いてくるざるを得ないのだ。
そして、その決定的瞬間はやってくる。
その時、私は黒の剣（ローラレライ）ごと体を後ろに引けばよい。
そうすれば、思いっきり体重を乗せいている腕の勢いで、魔人（ベルトゥール）の体勢は前のめりに体勢を崩さざるをえない。
私はその隙を見逃さなければいいのだ。
「黒の鎖（ガティスロン）。」
言霊と共に首、両手首、両足首に黒の剣（ローラレライ）から生まれ出でた黒い鎖が巻き付いて、魔人（ベルトゥール）を部屋の床に磔（はりつけ）にしてしまう。
「何ですか？今のは何ですかね？」
Ｄｒ．パルマドールが、突然起こった事態に声を上げたが、私は無視した。
そして、拘束を解こうともがき動物のように呻く魔人（ベルトゥール）を見下ろして、小さく呟いた。
「悪いな。そこで大人しくしていてくれ。」
もともとこの人とは戦う気などなかった。
ただ、少しの間だけここで大人しくしてくれればいい。
私は謝ってしまうと、ゆっくりと部屋の天井を見上げた。
私がさっきまでいた部屋は恐らくこの真上のはずだ。

そして、Ｄｒ．パルマドールの気配はこの部屋にはないが、この頭上に確かに感じることができる。まだあの部屋にいるのだ。

私は気配を感じながらそのＤｒ．パルマドールのいる辺りの真下まで歩くと、徐に黒の剣（ローラレライ）を顔の前で構えた。

それから、瞼（まぶた）を軽く閉じて神経を集中させると暗記している言霊を口の中で呟いた。

「我黒き剣の保持者（われローラレライ）は、希う（こいねが）。我体（わが）に眠りし、黒き力の目覚めをもちて、我前（わが）に立ちふさがりし、全ての存在（もの）を、打ち滅ぼせし力にかえ。今、我手（わが）に黒の目覚めを。」

呟く言霊の一言一言に応えるように、黒の剣（ローラレライ）の黒さが深まり、その刀身が振るえ、熱を帯び始めるのを感じた。

同時に体が血が熱くなり、心臓の鼓動が早まるのを感じた。

「ちみ、ちみっ！？何をしようというんだね？ちみの敵はちみの後ろ！後ろだよ？！」

さすがに魔人（ベルトゥール）に背を向けて何事かやりだした私に何か感じるところがあるのか、Ｄｒ（ドクター）パルマドールの焦った声が耳に入った。

しかし、もう遅い。

私はグッと柄を握りしめて黒の剣（ローラレライ）を振り上げると、最後の言霊を言い放った。

「黒の目覚め（ア・ルヴェガダス）」

言霊と同時に剣を振り下ろすと、剣の中で私の中で熱くなっていたエネルギーが黒い大きな力の塊となって、天井目掛けて飛んでいく。

そして、天井にエネルギーがぶつかった衝撃音と爆煙があがる。

「ガハッ！」

その直後に誰かの叫びと何かが落ちてきた音。

煙の中には一つの人影。

私は煙の中に入ると、その人影を見下ろした。

「かくれんぼは終わりだ。」

まさか私が天井をぶち抜いて自身を引き摺り下ろすなどとは、考えていなかったのだろう。

状況が分からないまま、尻餅をついたまま私をぽかんと見上げるＤｒ．パルマドールがそこにいた。

黒の剣（ローラレライ）を解放したときから、私の狙いは魔人（ベルトゥール）ではない。この男だったのだ。

「ひひぃーひっ」

剣を鼻先に突きつけて低く言った私にＤｒ．パルマドールの叫び声が上がる。

Ｄｒ．パルマドールは逃げ出そうと体を動かすが、突然のことに動転しているのか一歩も動くことができないどころか、立ち上がることすらできず手足をバタつかせることしかできない。

そして、出た言葉がこれである。

「た・助けるの・・・です！わたくしを助けるのです！」

どんな状況でも、偉そうな態度は変わらない。

しかし、今の私はそれを許せるほど寛容ではないのだ。

「助けるのです？」

低い声で問い直すとＤｒ．パルマドールが顔をこわばらせる。

私の顔が冗談を言っている顔ではなく、本気で自分を殺すつもりがあると察しているのだろう。

「た・助けて！助けてください！」

だからこそ、この男は自分の命のために素直にそう叫ぶのだ。しかし・・・

「魔人（ベルトゥール）はお前にそう言わなかったのか？」

この研究所に引っ立てられるとき、人体実験に協力させられるとき、この魔人（ベルトゥール）も言ったはずだ、今この目の前の男と同じように恐怖に顔を引きつらせて、この同じ言葉を。

「そ・それは、それは・・」

必死で何か言い繕（つくろ）おうと考えて、視線がさまようＤｒ．パルマド

ール。
いかに天才でもこの命の危機的状況においては、その優秀な脳みそも上手く機能しないらしい。
言葉は一向に出てこない。
それでは、答えずとも答えを言っているのも同じだ。
「言っただろう?言わないはずはないだろう?そしてお前はその人を、どうした?・・・今から私がするのは、それと同じなだけだ。因果応報って聞いたことあるだろ?」
それだけ言うと、私は何の躊躇(ためら)いもなく剣をＤｒ．パルマドールの首に向かって振り切った。
もう、この男の戯言(ざれごと)を利く気はなかった。
さっさとこの世から消してしまいたかったのだ。
断末魔のような、あの動物の鳴き声じみた奇声が高らかに上がるはずだった・・・しかして、何故だか剣がＤｒ．パルマドールの首を切り落とすことはなかった。
言っておくが、私が黒の剣(ローラレライ)を退(しりぞ)けたわけではない。
何かが黒の剣(ローラレライ)の刃をＤｒ．パルマドールの首まで辿りつくまえに、受け止めていたのだ。
残念なことにＤｒ．パルマドールは自分の命を助けてくれた相手を、あまりの恐怖に気を失ったため見ることができなかった。
しかし、私は黒の剣(ローラレライ)を受け止めている刃のその先にある人影に見覚があった。

「どうもぉ。ご機嫌よろしゅう。ヒロさん、お元気でっかぁ?」

妙な口調に馴れ馴れしい態度。
そして、その見ているだけでムカつく嫌味で無意味な笑み。
「ああ、お蔭様で楽しい囚人生活を送らせてもらったよ。天使さま。」
それはあの天使。

私の黒の剣（ローラレライ）を受け止めていたのは、あの不浄の大地（ディス・エンガッド）で血みどろの戦いを繰り広げたあの天使エンリッヒだった。

第１６話　人間というものの定義　４（後書き）

加筆・修正　０８．５．３０

第17話　偶然は後に運命と呼ばれるのだ　1

ここにいることは偶然？
ここにいることは運命？

――いいや、偶然と運命に本当は違いなどない

【偶然は後に運命と呼ばれるのだ】

突如として眼前に現われたエンリッヒ。
この場所が天使の領域内（フィリアラディアス）とはいえ、エンディミアンの人体実験場で、まさにこのタイミングで天使が・・・しかも、かつて私が相対した天使が助けに入るなど普通は偶然とは考えにくい。
「いやいや、偶然ですなぁ。こんなところで会うなんて。」
なのに、そんな白々しい言葉を吐かれるのだ。
いい加減にカチンとくる・・・だが、それがいけなかった。
そうしてエンリッヒばかりに意識が向いてしまい、いつもの私ならば気をつけるであろう周囲の様子が見えなくなった。そして、
「グェッ」
カエルの潰れたような情けない声が出たと思った瞬間には、エンリッヒではない誰かに背後から襲われ私は床にへばりつかされたいたのだ。
「くそ、仲間がいたのか。さすが天使さまは、自分たちの信望者の危機には駆けつけるってわけか？」
まあ、その信望者たるＤｒ．は気絶したままのようだが
「あららぁ？なんか言葉に棘がありしまへんかぁ？」
その言葉にエンリッヒに対する怒りは勿論、Ｄｒ．パルマドール

の首を切り落とすまで後一歩というところで、呆気なく天使に取り押さえられている自分が情けなくて仕方がなく口を閉ざす私。

だが、そんなこと気にも留めないエンリッヒは一ヶ月前と変わらない軽い様子で話を続ける。

「いやいやぁ、そう言えばあの時は応急処置をおおきに。本当にエライ目にあいましたわぁ。おかげでわい、ついこの間までベッドから起き上がれへん生活を余儀なくされましたんでっせ？」

――こっちはおかげで一ヶ月間の拷問生活だったわ

「仕事はできまへんし、仲間たちにはアーシアン一人にボコボコにされたって、副師団長の面目丸つぶれですわ。なあ、シャオン？」

とそこで初めてエンリッヒは私の上に視線を向ける。

「そうだったわねぇ。だって、そんな強いアーシアンがいるなんて普通は信じられないわよ。」

答える明るい声は若い女のもの。

押さえつけられ背後を振り返ることすらままならない私は、その声でやっと自分の背中を押さえつけているのが女であると理解する。

しかし、相手が女性でろうともこうがっちりと両手と背中を押さえられてしまうと、こちらは身動き一つ取れない。

「実際、見てみてどうや？わいのいっとることは本当やったろ？」

しかして、エンリッヒは女性に向けていた視線を、私から奪い取っていた黒の剣（ローラレライ）に移す。

「まあ、目の前で見せられちゃ嘘だとはいえないわよね。で？それが黒の武器（カシュケルノ）なの？」

――カシュケルノ

後に黒の武器（カシュケルノ）であると知ることになるのだが、現在の私には音で

しか理解できず何であるかも分からない。
ただ今の言葉のやり取りにくわえ、Ｄｒ．パルマドールも黒の剣（ローラレライ）に興味を示していたし、それに二人がＤｒに全く注意を払わないことから、Ｄｒを助けに来たのではなく、恐らく黒の剣（ローラレライ）が目的なのだろうと察しをつける。
「十中八九（じゅっちゅうはっく）、間違いないやろ。」
「でも、その外道科学者はそうだとは思っていないようだったけど？」
エンリッヒは大鎌を脇に抱えると、黒く色を変えたままの黒の剣（ローラレライ）を軽く振ってみたりしていた。
「あら・・・やっぱり、わいが使っても何も起こりまへんな。」
「ちょっと！私の話を聞いているの？」
エンリッヒが黒の剣（ローラレライ）ばかりに気をとられ、言葉を無視されるとシャオンと呼ばれた女が気の強そうな声を上げる。
「ああ？すまん、すまん。まあ、この男の目が節穴（ふしあな）なだけやろ。大体、あの慎重なラインディルト様が、わざわざ命を下して調べさせたんやで？まあ、解放させてみな、あの方も核心はなかったんやろが、この剣を見て大体検討はついておったと思うわ。」
しかし、折角エンリッヒが説明したのに、自分で聞いた割りに女はふーんと気のない返事を返すだけ。
そんなやり取りを黙ってみているしかない私は、知らず知らずのうちに黒の剣（ローラレライ）を持つエンリッヒを上目遣いに睨んでいたらしい。
不意に目が合ってしまうと、エンリッヒはニタリ・・・とあのいけ好かない笑みを浮かべる。
「やだわぁ、ヒロさん。そんな熱い視線を向けんといてください。恥ずかしいわぁ。」
そんな楽しげな声に、私は奥歯を噛み締めて屈辱（くつじょく）に耐える。
しかし、次にその忌々しい口から出たのは思わぬ言葉だった。
「あのね？こんな状況じゃ信じられへんかもしれまへんけど。わいは別にヒロさんの邪魔をしたいっちゅーわけじゃないんですわ。む

しろ、『魔人（ベルトゥール）』なんて研究をしとるこんな外道は殺された方が世のためだと思うとるぐらいですわ。」

「？」

この状況の何をもってそんなことを言い出したのか、私には理解不能だった。

エンリッヒと女は私がこの狂った科学者を殺すのを止め、そして今も私を取り押さえているではないか。

――――アーシアンの魔の手から従順なるエンディミアンを守る天使

どこをどう考えても、今の現状はそんな当たり前の様子にしか見えないではないか。

なのに、どうしてその天使がそんなトチ狂ったことを言うのか？

Ｄｒ．を殺そうとしたあの衝動が再びせり上がってきて、私はエンリッヒを殺意を湛えた瞳で睨みつけた。

「この腐れ科学者は天使たちの承認を得て、研究を進めているといっていたが？」

しかし、私の殺意など受け流してエンリッヒはあの笑顔を顔に貼り付けたまま動かさない。

「確かにそういう天使がいるのも事実でっせ？でも、それが天使の総意というわけじゃありゃしません。」

そこでエンリッヒは言葉を一端切ると、床に磔（はりつけ）にされたままの魔人（ベルトゥール）に視線を向けたまま、次の言葉をつむいだ。

「少なくともわいは天使であろうがアーシアンだろうが、生きている者をあんな風にしてしまうんは許せへんことだと思うとりますわ。・・・あんな誰も制御できないような魔物（モンスター）」

瞬間、声と表情に張り付いた笑顔に影と憎しみが宿ったような気がした。

私はその意味を測るようにエンリッヒを見つめた。

「じゃあ、何で止めた？」

だが、私の当然の問いにエンリッヒが苦笑して黙り込み、代わりに私の上に乗っかっている女が口を出してきた。
「疑り深い男は嫌われるわよぉ。まあ、私はそういう男も好きだけどぉ？」
そういって女に背後から首筋を撫でられ色っぽい息を吹きかけられて、
「ぎゃあっ！」
思わぬ刺激に声を上げた私を女が面白そうに高い笑い声を上げる。
「きゃあっ！かわいい！」
「～～～っ」
私は顔が熱くなって言葉にならない叫びを上げた。
話をそらされるは、女一人にいいようにあしらわれるはで、正直もう泣きそうだ。
しかして、そんな私の様子を見るともなしに見ていたエンリッヒが黙り込んでいた口を再び開く。
「ちょいちょいシャオンさん、シャオンさん。あんまり苛めとかんどいて下さいね？えっと、ヒロさんの質問はこの外道科学者を殺すのを止めたか・・・てことでしたっけ？」
どうやら女が逸らした問いに答えてくれる気になったらしい。
私は床に張り付いたまま、改めてエンリッヒを見上げた。
「実はこの科学者を殺すってことには、わいも異論はありゃしまへんのや。・・・ただ、ただですな？わいには、この外道を殺してあげたいお人がおるんですわ。」
――――『殺させてあげたい人』
『殺したい人』でも『殺されたい人』でもない、エンリッヒは誰かにこのＤｒ．パルマドールを『殺させてあげたい』と言った。
私はその言い回しが気になた。
そして、エンリッヒにはいつものあの笑顔が張り付いてはいるが、

目はぞっとするほど殺気に満ちて冷たい色が宿っている。

――本当は自分で殺したいんじゃないのか？

私はエンリッヒが何をいいたいのか、何をしたいのか、分からなくて眉を顰めた。

「こっからは単なる独り言だと思うてください。」

エンリッヒははじめにそう前置きをした。

何となく拒否できる雰囲気でもなかったので私が頷くと、エンリッヒは笑みを深めて話し始めた。

「ヒロさんはずっと旅を続けてはるんですよね？エヴァさん以外には、家族とか大切な人は今いらっしゃりますか？」

そう言われて思い出すことは楽しい思い出ばかりではない。

「・・・今となってはエヴァしかいないな。」

「変なこと聞いてしもうて、すんまへん。実はお恥ずかしながら、わいには大切と言える他人はおらんのですが、誰よりも大切な家族がおります。」

エンリッヒの話の意図は全く見えてこない。

「ただ・・・こんな誰かを傷つけたりする職業だと、酷く簡単に天使だろうが人間だろうが目の前で死んでいきます。殺してしまいます。・・・ふと、考えることがあるのですわ。例えばもし自分が殺したように、家族が誰かに呆気なく殺されてしもうたりしたら・・・」

いいながら想像したのかエンリッヒはその笑顔を泣きそうに歪めた。

一ヶ月前も思ったのだが、この天使はある部分だけとても甘い所があるようだ。

「変でっしゃろ？そんなこと考えても何の意味もありゃしまへんのに。でも、もしそんなことになったら、わいはその相手を殺したいほど、いや、殺しても足りんくらい、苦しめてやりたいと思うんや

ろなぁ・・・と思うわけですわ。もしヒロさんだったら、どうでっか？」

長い独り言の果てにエンリッヒが最後に私に問うた。

その言葉には私に何か語りかえるような響きがあった。

だが、私はその問いには答えず、彼の真意を測るように逆に問い返した。

「要はお前の言う『殺させてあげたい人』というのは、この外道科学者に誰か大切な人を殺された人物で。だから、私にこの外道を殺すのを、その人に譲ってくれないか・・・てことか？」

すると表情を変えないまま小さく小首をかしげるエンリッヒ・・・何とも微妙な反応である。

恐らく私の言っていることはあっているのだと思うのだが、たったこれだけの事を伝えるために、エンリッヒは妙に遠まわしな方法を使い、しかもこんな風に答えを濁されるのは何となく気持ち悪くい。

するとエンリッヒは私のそんな感情を察したのか、最後に付け足すように言った。

「あの人ねぇ、誰かに同情されたりとか嫌いなんです。もし、誰かに同情されて自分の仇を譲られたらなんて知られたら、わいは一生あの人に口をきいてもらえんくなります。わいもそれは嫌なんや。どんなに酷いお人だとしても、あの人はわいの大切な人やからね。」

「エンリッヒ？」

そう言っておどけたように笑うエンリッヒに、私だけではなく私を抑えつける女の方も訝(いぶか)しげな声を発した。

要は大切な人を殺された可哀相な人に私が同情してＤｒ．パルマドールを殺す役割を譲ったのではなく、エンリッヒの独り言を聞いて何となく殺すのを取りやめたという形をとらなければ、その人のプライドを傷つけてしまう・・・というのことのようだ。

聞いているだけで何となく呆れてしまうような理由だが、気持が分からないでもない。

Ｄｒ．パルマドールを殺してやりたいという怒りの感情が決して消えたわけではないが、エンリッヒの話に動かされた自分がいた。

エヴァが聞いたら、自分の感情まで殺して馬鹿だなぁと笑われそうであるが、まあ、どうせこの状況ではしたくでもできないのだ。

それにもし、自分だったら、大切な人を殺した仇を、自分でない誰かが殺したとしたら。

それは結果としては『仇の死』という同じ結果だとしても、やっぱり嫌だと思うだろうから。

でも、そう納得する前に、一つ聞いておきたくて私はエンリッヒに問いかけた。

「だが、その人にはＤｒ．パルマドールを殺すことができる算段はあるのか？」

それがないなら、ここで殺してしまったほうが世のためだ。

「まあ、それはわいもばっちり手伝ってあげとりますから。お任せですわ。」

「・・・そうか」

それを聞いて安心して、私は今さっき用意した言葉を白々しく吐いた。

「お前ののんびりした独り言など聞いていたら、あんな男、殺す気もうせたなぁ。」

まあ、女一人に完全に拘束されている人間の言う言葉ではなかったが、エンリッヒはその言葉に満足そうに頷いた。

私が殺すのをやめたのはその人に同情にしたわけではない、ただの気紛れ・・・そういう事にしておいた。

そうして、開き直ったりエンリッヒの話を聞いたりして、いくらか気分が落ち着いてきた私は、いい加減、女の人の下敷きにされ続けている状況からは脱出したいと考えて、ようやく話を自分に戻した。

「で？お前たちも、私に用があるのか？Ｄｒ．パルマドールは私が用なしだったら三大天使さまに殺してもいいという、お達しを受けていたようだが」

だから、ハクアリティスのことも私から聞くのは諦めて、てっきり天使たちは私には用はないのだと考え、逃げ出せるものなら何とかして逃げ出してやろうと考えていた。

しかし、先ほどの二人の言動や様子からは、どうにもただＤｒ．パルマドールを助けに来たとうだけには見えない。

「その話は後にしましょうよ。こんな辛気臭（しんきくさ）い所からはさっさと出たいわ。」

そうですなぁと、のんびりとエンリッヒがそれに答える。

しかし、二人は私の質問など聞く気がないように、そそくさと私を拘束したままこの場を去ろうと言い出したのだ。

思わず焦る。

「おい・・・この腐れ科学者は？魔人（ベルトゥール）はどうする気だ？私を何処に連れて行こうというんだ？」

黙ってそれを容認することはできなくて、私は声を上げた。

「・・・まあ、今が好機と言えんこともないんですがね？まだ『その時』じゃないんですわ。」

エンリッヒは含み在る言葉で私を振り返る。

そして、床に押し付けていた私を立たせ、その両手を背後で締め上げて女が私の耳元で呟いた。

「そ・れ・に、この状況で私たちに逆らえると思っているのかしら、ヒーロ？」

その言葉が蓋（けだ）し正しかったのと、耳元に吹きかけられた息がくすぐったかのとで、私は黙らざるを得ず、沈黙のまま私は地獄のような生態兵器研究所を何もせず、後にしなくてはならなかった。

ただ、エンリッヒの言葉どおり『その時』私は再びこの場所に舞い戻ることになるのだが、それはまた先の話である。

第１７話　偶然は後に運命と呼ばれるのだ　１（後書き）

しばらく忙しくて進んでいなかったですが、また少しづつ進めていけたらいいと思います。

加筆・修正　０８．８．１０

第１８話　偶然は後に運命と呼ばれるのだ　２

「おい、これは何の冗談だ？」

低く地を這うような声は自分でも驚くくらい迫力があった。

「いやいやぁ冗談なんかありゃしまへんよ？これはれっきとした作戦・・・ぷぷぷ」

しかし、鏡に映る私の後ろで笑いを耐えるエンリッヒを見れば、そんな声も訴えたかった相手には通じてないことが分かる。

「あははっ！良く似合っているわよ、ヒロ！！」

そして、女のくせに大口開いてわらっているシャオンの声に私の堪忍袋の緒が切れた。

「私に女の恰好が似合うわけないだろっ！！」

・・・言っておくが、断じて私は好きでこんな恰好をしているわけじゃない。それだけは断じて違う！

しかし、何が悲しいのか大きな鏡に映る私は今、天使たちに連れられて研究所から脱出後、攫われるように白き神の御許の中にある建物の一室に押し込められると、有無を言わさず女の恰好をさせられているのだ。

鏡の中には笑いを堪えきれない天使二人と（目に涙までためてやがる）、怒りと恥ずかしさと情けなさが入り混じった複雑な表情を浮かべた格好な女が一人、白いワンピースと長い黒髪、そして天使に化けるためにと偽の翼まで付けてそこにいる。

そして、更に追い打ちをかけるようにシャオンが言い放つ。

「ヒロったら男のくせに細いし、髪も長いものね。あははっ！何か妙にはまってて面白いわ！！」

「〜〜〜っ」

ぐうの音も出ないとはこのことだと思う。
いっそ女にも見えないのであれば、文句の言いようも、諦めのつけようもあろうというものなのに、どういうことかこの女装させられた私という奴は何となくその辺にいそうな女なのだ。
かといって、そこにいるのは別に絶世の美女というわけでもなく、どう贔屓(ひいきめ)目に見ても平平凡凡の十人並みの女。
まあ、女装が似合っているなどと言われても男の私が喜ばしいことなど何一つないのだが、何もかもが中途半端な自分が余計に私を情けなくさせた。
しかして、どうして私がこんな姿を晒(さら)す羽目になったかと言えば・・・

「ヒロさんには今から天近き城(フェデス・ジグロア)でとあるお人に会って頂きます。」

そんなエンリッヒの提案が全ての元凶。
何しろ天近き城(フェデス・ジグロア)、そこは白き神(イア・ルマンヌ)の御許の頂上にありし天使たちの居城で、天使の中でも選ばれた存在だけが立ち入れることができる場所であり、世界でたった一つ白き神イヌア・ニルヴァーナのいる神の揺りかご(ビシェリス)への入口がある場所ともされているのだ。
まあ、私が知っているのは精々(せいぜい)がアーシアンたちでも知ることができる噂や伝承程度の内容だから、それに大した信憑性があるわけではないが、それでもその場所が天使たちにとって重要な場所であることは確かなようで
「だけどですな?そこはわいらでも仕事以外じゃ、そうそう入れる場所じゃないんですわ。まして人間なんてよほど例外以外では入ったことのない場所です。だから、ヒロさんにはとりあえず天使に化けてもらいます。」
そう言って、まずは偽物の翼をつけられた。(うん。まあ、そこまでは私も大人しくしていたさ)
「しかもっ!天近き城(フェデス・ジグロア)はわいらを始めとした天空騎士団(アイッシュグランド)が警備を任

されとるんです。やから、万が一にもヒロさんのことを断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）で見かけた天使がいるかもしれません。よって！絶対ヒロさんだと分からない変装をせんとかんのですわ。」

そして、ここで一呼吸。（いや、あとから思えばこれから言うことに対してエンリッヒは一瞬吹き出しそうになったのかもしれない）

「・・・せやからここはヒロさんに女子（おなご）の恰好をしていただきまっす！」

「はあっ！？」

どうしてそうなる？！と私が大声を出したのも納得していただけるだろう。

話は理解できるが、だから、何だって男の私が女の恰好をしないといかんのだ？

しかして、私がどんなに嫌だと抵抗し暴れまくったところで、天使二人に武器も取り上げられ、力づくで押さえつけられては結局押し切られる形で現在に至り、

「ささっ！ヒロさんの支度がすんだところで、いざっ天近き城（フェデス・ジグロア）へ！とあるお方がヒロさんを待っとりますよぉ。」

更にはそんな楽しげというか、私で楽しんでいるとしかいいようのないエンリッヒの声のままに私は着替えさせられた一室からも急きたてられ、何やら豪華な造りの乗物に乗せられると、気がつけば白き神の御許（イア・ルマンヌ）の天辺まで来ていたりして・・・

不浄の大地から断罪の牢獄（ディス・エンガッド）、人体兵器研究所（エヴィラ・アメンド）をほんの少し経由して、そして、天近き城（フェデス・ジグロア）へ。

――私は本当に一体、これからどうなるんだ？

天使に捕まってから、いや、ハクアリティスを助けてからのあまりの目まぐるしい展開に私は追いつけないまま、そこに立っている。

「これはこれはエンリッヒ殿、今日は如何なされました？確か今日の城の警護は我ら第三師団のはずですが？」

そして、天近き城（フェデス・ジグロア）の正面に乗りつけた私たちを迎えたのは無論、ここを守る天使。

どうやら、エンリッヒ達も今日はここにいるはずではなかったらしく、訝しげに私たちを見る。

いっそ、このまま私たちを追い返してくれ！と私は切に願った。

「どうも、ご機嫌さんです。今日はうちの主さんがこのお人にお会いしたいっちゅーことでお連れしました。連絡はいっとると思いますが？」

「ああっ！申し訳ありません。伺っています。」

しかして、その願いは呆気なく崩れ落ちる。

天使の居城などと言われているのだから、女の恰好までしたものの人間である私が入ることなど、そう安々とはいくまいと腹をくくっていた私だがどうやらそれは間違いらしい。

それにしても、私に会いたいという人物とは何者なんだ？

一応は天使に化けているとはいえ、今のやり取りからエンリッヒの言ったようにここに入るのは天使といえども容易ではなさそうだ。

なのに、その人物の一声で見知らぬ天使がこうも易々と天近き城（フェデス・ジグロア）に入れてしまうのだ。

――私、ひょっとして結構やばいんでない？

天使に捕まった時点である程度は覚悟していたが、その程度がどんどんと深刻な状態になって、もう抜け出せなくなってきているような気がして私は二人の天使について歩きながら、冷や汗を流していた。

おかげで見たこともないような、巨大なクリスタルでできた美しい城の外観も内部もほとんど目に入らない。（まあ、おかげでそこらじゅうにいる天使たちにも緊張せずに済んだので、それはそれでよかったのかもしれない）

だが、ほとんど現実逃避と言っていいほどに自分の意識に入り込

んでいた私は、突如として叫びをあげてこちらに近づいてきた存在にびくりと体を震わせた。
「副師団長っ！！」
そこには尋常ではない様子で走ってくる天使（エンリッヒを副師団長と呼んでいることから、おそらく天空騎士団（アイツシュグランド）の一人なのだろう）。
「あれぇ？どうしたん？」
それに対して、何とも緊張感のないエンリッヒ。
だが、それもいつものことなのか、慌てた様子の天使はそんなことも気にせずに一気に言い切った。
「団長たちがっ！」
・・・？
「何ぃっ！？ほんまかい！！」
え？ええ？
「ちょっと、あの二人はディアス・オーレたちはどうしてるわけ！？」
「それがっ、たまたまお二人ともいらっしゃらなくてっ！！」
しかして、私に分からない会話がぽんぽんと交わされる。
大体、普通は『団長たちがっ！』だけで何を言いたいか分からんだろう？（述語はどうした？述語は！）
そして、更に驚く私を尻目にエンリッヒは言い放つのだ。
「悪いですが、ヒロさん。ちょっとばかし、ここでまっとってください！！」

――いや、普通、脱獄したアーシアンを一人、何の拘束もしないでおいて行かないとおもうぞ？

「すぐ戻ってくるから、いい子で待っててね？」

――いい子って・・・、私もいい加減、大人なんですが？

二人の天使たちに言いたいことは心の中にはすぐに浮かんだが、何一つ口に乗せられることもなく、しかして、私は一人取り残された。

天使に化けたアーシアンが一人、信じられないことに天使の城に拘束の一つもなく。

「・・・逃げちゃうぞ。」

なんて、ぽつりと沈黙に落ちる私の言葉が虚しく城内に響いた。

第１８話　偶然は後に運命と呼ばれるのだ　２（後書き）

加筆・修正　０８．１０．１３

第19話　偶然は後に運命と呼ばれるのだ　3

『逃げちゃうぞ』なんて言ってしまったものの、こんな天使だらけの場所で下手に動くことも憚(はばか)られ、かといって廊下につっ立っているままというのも微妙な気がして、私はとりあえず廊下に面している中庭らしき場所に目をやり、足を向けることにした。

城内にあるにしては広い中庭で、緑が青々と生い茂り、天に近い城内では白き神(イア・ルマンヌ)の御許の大部分を照らしているまやかしの光ではなく、本当の日の光が眩しく中庭を照らしている。

その日の光を仰ぎ見れば本当に届きそうなところに空があって、私はその天の近さに目を奪われた。

「・・・」

そうして、私は何も考えずに手を大きく空に向かって伸した。

――それは昔、エヴァと出会う前に私がよくしていた所作

不浄の大地(ディス・エンガッド)ではただ永遠に広がるかのような空は、私にはあまりに大きな存在で空を見上げるたびに自分の小ささを感じ、そして、そんな広い世界にたった一人で存在する自分の孤独を呪った。

あの当時、大切な人たちとの別れからエヴァと出会うまで一人だった私は、色々なものが崩れかけ何処かバランスを傾けていた。

そして、気がつけばこんな風に空に手をかざして、空に焦がれた。

空に手が届けば大切な人たちに届くような、あの中に彼らがいるような気がしてならなかった。

今となってはそんな事をどうして考えたのか、その理由は自分でもよく分からない。

それが例え馬鹿らしい幻想だとしても、頭のおかしくなった妄想だとしても、あの当時の自分を繋ぎとめるたった一つの手段だったのだろうと今の私にはそれしか分からない。

ただ、あの中に自分の溶けてしまえたら、消えてしまえたらと、何度も何度も思い続けていたことだけは覚えている。

――エヴァに会うまでは

そして、それをしてエヴァと出会ってから彼とこんなに長く離れている時間が初めてだと、ふと気がつく。（天使に捕まってからというもの、こんな風に一人で一息つけた試しがなかったからな）

しかし、そんな風に過去の自分を思い出すように、あの時を懐かしみながらもエヴァを心配する心が混じったままに、力いっぱい天高く腕を伸ばしていた私の耳に、くすくすと鈴を転がしたような笑い声が聞えて私は我に返った。

「あ」

そこには私を面白そうに見る天使がいた。

「すまないな、邪魔をしただろうか？」

低く響く美声に笑みを浮かべたその天使は、いろんな意味で言葉では言い表せない天使だった。

言葉で言い表せないと私が評したその姿は、この世のものとは思えぬほど美しく、絶世の美男子というものがいるとしたら、正に彼のためにある言葉だと誰もが言うだろう。

長くきらめく銀の髪を肩に流し、宝石のような紫の瞳は何もかもを見通すかのように透き通っている。

そして、表情の細部に渡るまで、まるで神が丹精込めて作りこんだように、一分の隙もなく整っており、体格も美しくも女性とは見えないように華奢ではなく、程よく逞しく均整の取れた体つき。

ただ、そんなこの世の美を集約したような天使だからこそ、一つだけ欠けている部分が異様に目に付いた。

――背に羽ばたく大きな翼、その純白の翼が片方欠けていた

その姿に私は胸が騒ぐのを感じた。
理由は分からない。
ただ、その天使の美しさに対する動揺ではない何かが私の中を駆け巡ったのだ。

――――だが、それは何だ？

「いきなり声をかけて驚かせてしまったかな？」
しかして、呆然と天使を見ていた私に苦笑した天使は小首をかしげ、私はそれで我に返る。
「あ・・はいっ。すいません。ぼうっとしていていたものですから。」
私は慌てながらも自分の正体がばれないように自分で出していて気持ち悪いくらいの高い声を発する。（それでも女性にしては低い声だろうとは思うが）
「そうみたいだね。私が近づいても全く気が付かなかったからね。そんなに集中して何をしていたんだい？」
ばれないかどうか心臓ばくばくものだったが、どうやら彼に怪しまれた節はなさそうだ。
しかし、油断は禁物だと私は下ろした長い髪で顔を隠すように俯く。
「い、いえ、その・・ちょ、ちょっと、空に手が届かないかな・・・と、試してみてたんだが。」
確かにエンリッヒ、シャオンだって綺麗な天使だが、この天使の美しさはその比ではない。
理由の分からない胸騒ぎやアーシアンであることがバレるかもしれない不安、それにこの次元が違う美しさも相まって、私は未曾有のパニックを起こし、適当な嘘も思いつかず明らかに馬鹿な事を口にした。
なんて馬鹿馬鹿しいことを言っているという自覚はあったが、ま

さか誰かが見ているとは思わなかったのだ。
さぞ笑われるか、変な顔でもされるかと思ったが、その美しい天使の反応はそのどちらでもなかった。

「空に手は届かない。どんなに手を伸ばしてもね。」

「え？」

思わず顔を上げた先には青い空を見上げる天使がいた。
その瞳は何かを求めているような、焦がれているような、憂いているような、何だかいろんな感情が見えるような気がして、私はその美しさに見入った。

「まあ、例え手が届かないとわかっても、手を伸ばしてしまうのが、生き続ける者の性（さが）かもしれないけどな。」

何だか妙に実感のこもっている言葉だった。
こんなきれいな天使様だったら、手に入れれないものなんてなさそうなものだが、やっぱり誰にだってそうやって焦がれ続ける存在というものはあるものなのだ。
あまりにきれいすぎて恐れ戦いていた私は、そんな彼に何だか妙な親近感を抱き、気がつけば自分の言葉で彼に言葉を返していた。

「・・・そう、ですね。そうかもしれない。でも、そうやって求め続ける存在があるから、私は生きてこられた。それがなくちゃ、きっと誰もが生きている意味なんて・・・ない・・んだと思う。」

求めるモノ、焦がれるモノがもし私の中に何もなければ、あの時の私はきっと壊れていたに違いない。

――――彼らが生きろと言ってくれたその言葉こそが、私が焦がれ続け、求め続けるモノ

彼の言葉を聞いて、私も空を見上げて半分独り言のように呟いていたら顔に視線を感じた。

そして、天使のほうに視線を向ければ、こちらをじっと見ている彼がいた。
「あ・・・の」
調子こいて色々しゃべってしまったが、もしかして天使じゃないのがばれたとか？
そう思い至って私は顔を青ざめて顔を逸らせようとしたら、天使の手が頬を添えられてた。
「う」
恐る恐る少しだけ私より高い天使を見上げた顔は、思っていたより遥かに近い。
「い・あう」
ばれたかもしれないという焦りと、美しい顔にじっと見つめられた居心地の悪さで、訳の分からない言葉を漏らす私に天使の顔は、何故だか無意味にどんどん接近してくる。
「君はおもしろいな。この俺の近くにいてこんなに平然としていられるなんて・・・君が初めてだよ。」
何だか妙に甘い声が吐息と共に私の顔に吹きかけられ、私はもうパニックで天使の言葉の意味など何一つ理解していなかった。
「！？」
「ふふ、そうして焦った顔もいいな。なあ、名前を教えてくれないか？そして、俺の――――」
そして、美しい顔の全体を確認できないほどに近づいた天使の瞳が、妙に意地悪げに細められた瞬間

「ここにいたんですかっ！」

中庭に響く大きな女の声が聞えたかと思うとごく自然な動作で天使が離れ、何事もなかったかのように声の主を振り返った。
そこには女装した私など足元にも及ばない、美しい天使の女性が婀娜(あだ)っぽい笑みを浮かべて、少しはなれたところに立っていた。

何が起こったかよく分からないが、どうやら助かったらしい。
私はいろんな意味でバクバクとなる心臓を抑え、安堵の息を大きく吐いた。
しかし、女が次に発した言葉を認めると私の思考は停止した。
「まったく、エヴァンシェッド様はすぐにふらふらと女性にちょっかいをかけられるんですからっ！ラインディルト様が探しておいでしたよ？何でも急ぎお見せしたいものがあるとか。」
「ああ、そうか。」
なにやら睦言(むつごと)でも呟きあうように寄り添う二人を見送りながら、私はやり過ごせた安心感など忘れ去って、いいようのない大きな衝撃に身を震わせていた。

――――彼女は今、何と言った？

「エヴァンシェッド・・・・？」
その名を聞いた瞬間に、私の中であの記憶が呼び覚まされた。

乾いた大地に横たわる引き千切られた片翼
血に染まる純白の羽
ニタリと笑う、禍々しい口元
何かに貫かれた私の体
私から迸る(ほとばし)大きな力、暴走する黒き剣(ローラレライ)

――――そして、父親に幼い頃に聞かされたお伽噺

全てがフラッシュバックされて、記憶の渦となって私を襲う。
そして、私は動かない頭でただ思った。

――――ああ、終わりが近いのだ・・・と

私はもう一度空を見上げた。
青い空があまりに眩しくて瞳を覆った手の平が、目から零(こぼ)れる水で濡れた。

第１９話　偶然は後に運命と呼ばれるのだ　３（後書き）

加筆・修正　０８．１０．１３

第二十話　天使が語るは嘘か真か　其の三

突如として現れた片翼の天使と女性天使は、私が二人の存在をきちんと認識するより早く私の目の前から消えた。
何だか私にはあの美貌の天使が夢か幻のような、狐につままれた気さえして、呆然と立ちすくんでいた。

それでも、しばらくすると酷く疲れた顔をしたエンリッヒとシャオンが戻ってきたので、何事もなかったように二人に声をかけた。
「何かあったのか？」
あんな大慌てたっだのだ。何か重大なことでもあったのだろうと私が問うと、二人は力なく笑って言った。
「まあ、喧嘩するほど仲がいいちゅーことですわ。」
「ほんと、何であんな、どうしよもないことで喧嘩できるのかしら？」
と詳しくは教えてくれなかったが、何はともあれ大事には至らなかったらしい。

そして、互いに気を取り直すと再び私に会いたいという人物の元へと向かうことにする。
「お待たせして、すいまへんでした。さ、向こうさんもヒロさんを心待ちにしとると思いますから、行きまひょか。」
「ああ。」
何事もなく二人の後に続く私。

しかし、美貌の天使によって、思い起こされたあの記憶が焼きついて離れないまま、私の心を大きく揺さぶり続けていた。

第二十話　天使が語るは嘘か真か　其の三

私が二人に連れてこられたのは、飾り気はないが高貴な薫りが漂う一室だった。
窓は大きく開け放たれ、さわやかな風がレースのカーテンを揺らし、優しい光が部屋を明るく照らしていた。

「エンリッヒ様、ご無沙汰しております。」
その部屋で私たちを迎えた声に振り向くと、そこには一人の慇懃無礼な黒のスーツを着込んだ翼がない人間の女性が立っていた。
そう、人間だ。
自分のことは棚に上げて、まさか高位天使しか入ることを許されないと聞いていた天近き城で、人間を見るとは思っていなかった私は酷く驚いた。
しかし、単なる野次馬根性でしかないことは自覚していたので、彼女が何者なのか聞きたい心をグッと堪えて、エンリッヒの後ろで沈黙した。

「リンズさんもお元気そうで何よりですな。約束しとるんやけど、あの人はおります？」
どうやら顔見知りらしいエンリッヒは、あの胡散臭い笑み満開で話しかけたが、リンズと呼ばれた女性はその笑みに笑みを返すこともなく淡々としたものだった。
「はい。聞いております。すぐにお呼びいたしますから、そちらでお座りになって、お待ちください。」
リンズは深々と頭を下げると、そのまま部屋の奥に消えていく。
私たちはそれを見送ると勧められるがまま、テーブルセットに腰掛けた。

「うわ！おいしそう。」
テーブルの上には、既にお茶の用意がなされていた。
その準備されていた美味しそうな匂いが立ち上るお菓子を前に、シャオンが女性らしく声をあげ、それに手を伸ばそうとした。
「つまみ食いはあかんよ、シャオン。あの人、あれで意外と礼儀作法には厳しい人やから。」
しかしつまみ食いをしようとしたシャオンのその手を、ぴしゃりとエンリッヒが叩いた。
それに対して、シャオンは不満そうに頬を膨らませた。
「え～？うそぉ。あのお優しい聖母様みたいな方が？前々から思ってたけど、あんたのあのお方に対する態度って、ちょっと冷たくない？」
「・・・。」
信じられないと言わんばかりのシャオンの言葉に対して、エンリッヒの笑みを強張らせて黙り込む様子が目に入って、私は少し首をかしげる。
一体どんな人なんだろうと、私が二人の会話から今から会う人物を想像するより先に、部屋の奥の扉が開いたので、思考はすぐに中断した。

扉が開いたと思ったその瞬間に、エンリッヒとシャオンが椅子から立ち上がり礼をした。
その表情や身のこなしに、ついさっきまであったのんびりとした空気はなかった。
その空気に呑まれるが如く、訳が分からないまま私も一拍遅れて、それに習った。

そして、その人は私の前に現れた。
「お待たせしましたね。久しぶり、エンリッヒ、シャオン。そして、始めましてヒロ。さあ、頭を上げて。わたくしの名はサンタマリア。

三大天使が一人、明海の天使です。」

目の前に現れたのは、アーシアンにとって本来ならその名を口にすることも憚られる存在だった。

しかし、その事実をきちんと理解しても、私はさほど動揺しなかった。

『三大天使』と言う存在に、驚かないわけでも、怯えないわけでも、畏れを抱かないわけでもない。

少なくとも私は、そんな感情を捨てれるほど気の大きな人間ではない。

ただ、その三大天使と名乗る女性が醸し出す穏やかな空気が、私のそういった全ての感情を消し去ってしまったのだ。

それでも三大天使と聞いて思わず、まじまじと観察してしまった私であるが、いくら彼女を見つめても彼女と目が合うことはなかった。

彼女は瞼を閉じ、その瞳を私に見せることがなかったからだ。リンズが手をとって彼女を誘導していることから、恐らく盲目なのだろうと想像が付いた。

そして、サンタマリアは女性にしては背は高く、長い紫がかった髪は足元にまで達している、そして翼はまるで波立つ水面のようにグラデーション状の美しい青色をしていたた。

しかし、三大天使の一人が明海の天使・サンタマリアという肩書きから、さぞ美くい天使だろうと思われる人も多いだろうが、まあ、女性には失礼だとは思うが、目の前の天使が私には特別に美しい姿をしているとは思えなかった。

もし最初に三大天使と聞かなければ、どこにでもいそうなこの城には不似合いな、平凡な天使だと私は思っただろう。

だからこそ、緊張も畏怖も彼女には感じないのかもしれないなと、私が最高位の天使相手に大変失礼なことまで考えていると、瞳を開

けることはなくてもその穏やかで豊かな表情でサンタマリアは微笑んだ。
「さあ、皆座って、座って。リンズ、お茶を入れて頂戴。」
開かれることのない瞼（まぶた）、リンズに手をとられて席に着くサンタマリアの足取りは確りとしていたが、その様子は彼女の瞳が見えていないという私の考えを確かなものにした。

「かしこまりました。」
サンタマリアを椅子までエスコートすると、リンズが私に入れたてのお茶を差し出してくれる。
それに対して礼を言えば、目礼してそれに答えるその姿は女性ながらに立派な執事のように見える。彼女はサンタマリアの世話役・・・と、いうことなのだろうか。
しかし、それについて詳しく考えるより先にサンタマリアに声をかけられた。
「突然呼び立てたりして悪いわね、ヒロ。」
「いえ・・・。」
正直、言いたいことは本当なら山ほどあるが、さすが世界を支配する天使の中の天使。
その平凡ながらもシャオンが聖母様と称した、後光すら射していそうな姿に、私の文句など気軽に言えそうな雰囲気は皆無であった。

気後れした小心者の私が、それ以上何もいわないと、サンタマリアがみえない目で私に顔を向けたまま言葉を続けた。
「エンリッヒから聞いていた話ではとても強いアーシアンだそうだけど、ワンピースを着ているようじゃ、とてもそんな風には思えないわね。」
「！」
目が見えていないと思い込んでいた私は、その言葉に大いに驚かされた。

驚きも覚めやらぬまま、更なる爆弾が投下される。
「貴方が考えているように私は瞳による視覚は失われているけれど、私にはそれ以上のものが色々見えるの。例えば、貴方がワンピースは早く脱いでしまいたいとか、ヒールが高くて歩きにくいとか、そういった心の中さえ見れれば、貴方の今の姿を想像することは容易いわ。あら？不本意そうね。私のいっていることは間違っている？それともその格好が嫌なだけ？」、
「・・・こういう動きにくい服は、着慣れていないもので。」
微笑むサンタマリアに、私が返すことが出来たのは、それだけだった。

心の中が見えると、彼女は言った。確かに彼女の言った私の心中は当たっていた。
しかし、それだけでこの女が私の心を見ることができると、私が安易には信用するはずもなく、サンタマリアだけでなくエンリッヒやリンズの表情も窺ったが、誰しもその言葉に動揺している様子もない。
サンタマリアが心を見る能力は周知ということか？いや、口裏を合わせているだけ・・・、私を動揺させる意図があるだけかもしれない。
疑う心は、余計なことは口にすまいと私の口を重くした。

しかし黙り込む私など関係なくサンタマリアはリンズを呼び寄せ、私に動きやすい服を用意するように指示し、リンズはそれに従い部屋を出て行った。
「あらら、折角可愛らしくしましたんに。」
サンタマリアの指示に、わざとらしいほど大きなリアクションでエンリッヒが残念がり、シャオンもそれに頷くが、サンタマリアは二人に首を振る。
「二人ともヒロは不浄の大地（ディス・エンガッド）に生きる『黒の一族』の末裔、生きる

ために戦い続ける戦士に、動きにくい服装など不安でしかないわ。後、エンリッヒ、貴方が取り上げたその武器も返して上げて、戦士にとって武器は体の一部よ。」

サンタマリアの思いもよらぬ言葉に、私もエンリッヒたちも驚きに目を見開いた。

「ば・・・、何を考えとるんでっか。そんなことしたら・・・・。」

エンリッヒは私をちらりと見やりながら抗議の声を上げた。

その手にはずっと、彼の大鎌と一緒に油断なく私の黒の剣（ローラレライ）が握られている。

「心配せずとも、この人はこんな天使だらけの場所で戦うほど馬鹿ではありません。あなただって、自分の武器が取り上げられたら不安でしょう？これから話すことのために、ヒロには私を信用してほしいの。武器を返すということは、その気持ちの表れなの。」

毅然（きぜん）とした、異を唱えさせない言葉だった。

その態度の前にエンリッヒは、あの笑みを浮かべる余裕もなく、しぶしぶながら私に黒の剣（ローラレライ）を差し出さざるをえなかった。

エンリッヒは妙なマネをするなと低く言ったが、私はそれには答えなかった。

確かにサンタマリアが言うように、逃げる場所もないような敵地同然の場所で、大立ち回りするような馬鹿な真似をする気はない。

それでも、チャンスさえあれば、いつでもこんな場所から逃げ出したいという気持ちは強い。

確かに天使の領域（ここ）は、最後の楽園といわれるに相応しい場所かもしれないが、私には決して相応しくない場所であることは、僅かな間、この楽園の空気に触れることで骨身に沁みていた。

そんなやり取りをしていると、リンズが洋服をもって返ってきたので、私はそれを受け取り、着替えるための部屋に押し込まれる。

武器を持たせた私を一人にするのも、私を信用しているというサンタマリアの気持ちというわけである。
私は着慣れないワンピースを脱いで、その用意された動きやすいだろう服に袖を通しながら、サンタマリアの言っていたことについて頭をめぐらせた。

彼女は私に信用して欲しいといった。
信用させて、私に何を求めている？
果たして、その言葉を、その意味どおりにとっていいものだろうか。
何せ相手は、心の中を見るとまで言いのけた、化け物としかいいようのない三大天使だ。心が落ち着かないのも無理のない話であるのだ。
まあ、私がここで色々考えたところで、何をどうこうできる相手ではないのは分かりきったことなのだが、それでも、今は黒の剣（ローラレライ）がこの手に戻ったことで、私の心はいくらか落ち着きを取り戻しつつあった。
それに服を着替え、化粧を落とした私は印象も全く変わり男にしか見えない、そうした元の私に戻ったことも、私を落ち着かせる要因になった。

そして私は怯えそうになる心を引き締めるためにも、黒の剣（ローラレライ）を握る手に僅かに力を込める。
しかして、少しばかり気後れしている私の心とは反対に、これから起こる想像できない全てのことに、喜んでいるような黒の剣（ローラレライ）の胎動を感じて私は僅かに苦笑した。
全く、どこまでも持ち主に似ない武器だ。
しかし、そんな黒の剣（ローラレライ）に勇気付けられて、私は少しだけ勇気を奮い立たせたのであった。

そうして、灯（とも）った小さな勇気が萎（しぼ）む前に、さっさと話を終えてしま

おうと、天使たちの元に戻った私は、率直に話を切り出した。
「それで、アーシアンの私に三大天使のあなたが、一体何の用があるというんだ？それにさっきあなたは私のことを『黒の一族の末裔』と呼んだ、それは何だ？」
「あらあら、せっかちね。まあ、一ヶ月も拷問され続け、あんな変な科学者に殺されそうになったんだもの、これ以上焦らされるのも嫌よね。そうね、簡単に言えば、私はね、ヒロ。あなたに私たち天使に力を貸して欲しいの。」
・・・嘘くさ。
私は言われた時反射的に思った。
神の力を操る天使が、しかもわざわざ三大天使直々に、どうして何の力も持たないアーシアンの力を借りなければならないというのだ。

「私の話、信用していませんね？」
「・・・。」
その通りだったが、それには言葉を返さなかった。
「まあ、明海の天使である私が、人間のあなたに力を借りたいなどと、普通は信用できませんよね。そのお気持ちはわかります。ただ、これから聞く話を聞けば、私の言っていることも少しは信用してくれると思っています。」
大した自信である。
まあ、確かに彼女だけではない、Ｄｒ（ドクター）パルマドールの言葉から、もう一人の三大天使も私に何かしら目をつけていたようなのだ。
それに冗談だけでここに私を呼ぶほど、三大天使というのは暇な存在でもないだろう。

何かあるとしたらと思いながら、手の中にある黒の剣（ローラレライ）に意識を向けた。
黒の武器（カシュケルノ）と、呼ばれるこれしかないだろうとは思いつつも、何を聞かれたところで、私は何も知らないのだという思いがよぎった。

そう思うと、断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）でのハクアリティスをめぐる問答と拷問を思い出して気が重くなる。
結局、あそこに立ち戻るのではないだろうかという考えが胸をよぎったのだ。

「心配しなくても、拷問なんてしないわ。」
心が読まれた。
「でも貴方の考えは、正解よ。」
サンタマリアの、瞼の閉じられたままの、のっぺりとした顔が笑みを深めた。
その笑みが、心を読まれているという焦りが不気味な色をのせた。
「黒の武器（カシュケルノ）。私はその力が欲しいの。黒き神が残したその遺産が。」

そうして、明海の天使は語り始めた。
嘘か真か分からぬ、世界にたった一人の神と全てを消された神の物語を・・・。

第二十一話　天使が語るは嘘か真か　其の四

「黒き神が残した遺産？」
聞き返す私に、サンタマリアは微笑んだ。
黒き神。

聞き覚えのない言葉だった。
そもそもこの世界に神は一人しかいないはずだ。
人間に粛清を下すことを天使に命じた白き神・イヌス・ニルヴァーナ。それが、この東方の楽園（サフィラ・アイリス）にあるただ一つの神の名だ。

では、黒き神。
神の名を持つ、それは一体何者だというのだろう。
そう思った瞬間に、私が握る黒の剣（ローラレライ）がざわつくような感覚がした。
黒の剣（ローラレライ）、お前はその神の名を知っているのか？

第二十一話　天使が語るは嘘か真か　其の四

「そう。確かに東方の楽園（サフィラ・アイリス）には、白き神という唯一神しかいないわ。」
背中に悪寒が走った。
サンタマリアは私のぼんやりとした感情じゃないない、彼女はその思考まで正確に見通している。
『心の中を見る能力』、はったりかとも思ったが、どれほどのものかは定かではないが、これだけ正確に言い当てられては、認めざる

を得ないであろう。
しかし、恐らく私がそんなことを考えていることなど百も承知だろうに、サンタマリアはそんなこと全く気が付かないように言葉を続けた。
「でも、はるか昔、一千年以上前には、白き神以外にも多くの神がこの世界にはいた。」
一千年以上前といえば、終焉の宣告（ディルト・ヴェネス）が下される前、千年戦争が繰り返されていた神話の時代である。

しかし、永遠を生き続ける天使には、それも過去の話というわけである。
「そう、私はそんな神々が生きる時代も生きていたの。」
また心の中を見られた。
「では、どうして今は白き神しか世界にはいない。」
私は白き神すら見たこともないのが、サンタマリアの話では白き神はこの世界に確かにいるらしい。
しかし天使とて生き続ける時を、他の神が生き続けれない道理はないだろう。

「それはね単純な話よ。ヒロ。」
私の質問に答えるサンタマリアは、急に表情が明るくなり、楽しい内緒話をするように弾んだ声になった。
「白き神以外の神がみんな死んでしまったから。だから、この世界にはあの女神しかいないの。」
「し・・・んだ、神がか？」
「ええ。神だって生き者なの。私たちと同様、不老不死でも心臓を衝かれたり、首を絞められれば死ぬのよ。」
言っている言葉の意味が分からない私に、サンタマリアは酷くにこやかに言葉を続けた。
「だから、神がいないってことは、誰かが殺して回ったということ。

その名は黒き神・ウ・ダイ。神殺し、同族殺しの神よ。」

黒き神ウ・ダイ。

その名を聞いた瞬間、黒の剣（ローラレライ）がそれに反応するように熱を持つのを感じた。

今まで、黒の剣（ローラレライ）が私に何かを訴えようとする不思議な感覚に捕らわれたことは、何度かあった。

でも、こんなに如実な反応は初めてだった。

「じゃあ、黒の武器（カシュケルノ）というのは、貴女が言う神殺しの神の遺産・・・というわけか？どうしてそんな大それたものをアーシアンの私が持っている？天使がそんなものの力を、どうして欲する？」

手に焼けるように熱い黒の剣（ローラレライ）を感じながら、私はサンタマリアを睨みつけた。

そうして虚勢（きょせい）でも張っていないと、この羊の皮をかぶった化物の前で話すことすらできない気がした。

「まあまあ、話を急がないで、物事には順序と言うものがあるでしょ？」

私がどれほど虚勢（きょせい）を張っても、怯える私の心の中が見えているサンタマリアには何の意味もない。

彼女は変わらない調子のまま言葉を続けるだけだった。

「そもそも、どうして黒き神が神々を殺すという凶行に走ったかと言えば。それは本来、世界に対して干渉しないことを、暗黙の了解としていた神々の掟を破った黒き神が、人間にその力を与えたことがすべての始まりだった。その結果、神の力を手に入れた人間たちは、私利私欲（しりしよく）のために、力によって世界を支配し、他の種族を侵略し、大きな戦争を始めた。それが千年戦争の始まり・・・といわれているわ。」

千年戦争の始まりは、人間たちの戦いだと伝えられてきた。
その裏に神の力が介在しているなど、誰しも想像したこともなかっただろう。
何故なら黒き神の存在など、人間たちの歴史には記されてはいなかったから。
そこまで考えて、ふいに違和感を覚えた。
それは、自然に忘れ去られたのか、それとも、誰かが故意にそうしたのか？

しかし、私の違和感に誰も答えることなく、サンタマリアの長い話は続いた。
「他の神々は黒き神のそんな所業を許すはずもなく、彼を封印して、人間たちからも与えられた力を取り上げることにしたの。殆どの人間たちからは、力を取り上げることに成功したわ。でも、まだ残っていた黒き神の力を有した7人の人間たちが、神々に刃向かい黒き神を助け出したのよ。自分を封印しようとした神々を恨んだ黒き神は、自分を助けた7人の人間たち、後に黒の一族と呼ばれる人間の一族と共に、神々に復讐することを誓ったの。」

そこまで言い終り、喉が渇いたのかサンタマリアは、もう湯気の立っていないお茶に口をつけた。

「黒き神たちの復讐は壮絶なものだった。神々だけではない、それは自分を認めようとしない世界全体に対する復讐だった。人間たちの狂気を煽り、下火になりかけていた千年戦争を再び焚きつけた。そしてその混乱に乗じ、神々を殺して回ったの。さて、そうして気が付けば残った神は、白き神だけになっていた。」

長い話はあまりに壮大すぎる物語で、私は全くリアリティを感じなかった。

聞いていても、いつの間にか寝物語でも聞いている気分になっている自分がいた。

「でも、困ったことに白き神と黒き神、二人は神の中でも二人だけの最高位の神だった。力は同等くらいだったけど、戦闘においてその力を強く発揮するのは、男神である黒き神なのは周知の事実。だから、白き神は自分を守る騎士を作ることにしたの。それが天使。白き神は私たち天使に、神の力を与え黒き神と黒の一族の討伐を命じたの。それが、最果(ロシギュナス)ての渓谷の戦い。これは聞いたことくらいあるんじゃないかしら？」

「ああ。千年戦争の最後の戦い・・・、天使に対抗する力を持つ一族と人間を、天使たちが討伐に向かった戦い。」

私がそう答えると、よく答えましたと、サンタマリアが陽気に拍手をした。

「そう神話では、そう伝えられているけど、その実は天使が白き神を守るために、黒き神と黒の一族を殲滅(せんめつ)するための戦いだった。私も戦ったわ。私たち天使は苦戦を強いられたわ、だって相手は神だもの。そして、私たちは最後の賭けに出た。」

「賭け？」

「そう、神の力ですら制御できない滅びの力、終焉(ディルト・ヴェネス)の宣告。その力をもっても、神を殺すことは、神ではない天使は不可能だけれど、私たちは黒の神と黒の一族を捕らえ、白き神の御前に差し出すことができた。」

サンタマリアの話を聞く限り、終焉(ディルト・ヴェネス)の宣告が、人間たちへの粛清ではなく、神々の戦いの末路であるように聞えた。

そう思った瞬間に、サンタマリアが口を挟んだ。

「まあ、実質的には神々の戦いが引き金だけど、黒き神に煽(あお)られた

たとはいえ、千年戦争をしていたのは、人間だと言うのは確かよ。人間たちも、黒き神たち同様罰は受けなくてはならなかったのよ。」その言葉に若干の言い訳の色を感じたのは、私の錯覚だったのだろうか。

「さあ、続きを話しましょう。」

そう言って話を逸らしたサンタマリアの言葉を、簡単に鵜呑みにしてしまって私はそれでいいのだろうかと思ったが、口は出さなかった。

言わずともサンタマリアは分かっているのだ。今何も言わないと言うことは、口にしたところで何も答えてくれまい。

「そして黒き神と黒の一族は、白き神にひれ伏した。私はきっと白き神が彼らを処刑すると思ってた。でも、白き神は慈悲の心を持って、彼らを殺すことはしなかった。そして黒き神をその力で永遠の苦しみの中に封印し、黒の一族を東方の楽園（サフィラ・アイリス）から追放したの。そして彼らからは、与えられてた神の力であった黒の武器（カシュケル）を取り上げて・・・ね。」

私は自分の手の中にある熱を持ち続けている黒の剣（ローラレライ）を、まじまじと見つめた。

「そう、その剣は黒き神の力そのもの。天使は、その力を取り上げると二度と、その力が悪用されることのないように不浄の大地（ディス・エンガッド）に封印したの。まあ、長い歳月を経て、その封印は解かれてしまったようだけどね。」

サンタマリアはそこで言葉を切った。

長々と話していた疲れは見えないが、小さく息を吐く音が聞えた。

その沈黙に乗じて、サンタマリアには駄々漏れであろうとも私は考えを纏めようとした。そうしないと落ち着かなかった。

人間たちが知らされることのなかった、神と天使と人間の戦い。
黒の武器（カシュケルノ）の正体。
しかし、はたしてそれをそのまま信じていいものだろうか。
それにこんなに話を聞いても、サンタマリアが私に求めていることは分からないままだし、私の質問の答えにもなっていない。

「サンタマリア、さっき私を黒の一族の末裔・・・と言っていただろ？それって結局どういうことだ？確かに私は黒の武器（カシュケルノ）をもっているのかもしれないが、だからって、黒の一族は東方の楽園（サフィラ・アイリス）を追放されたんだろう？それに黒の武器（カシュケルノ）の正体については理解したが、貴女がこの力を求める理由はまだ聞いていない。」
「分かっているわ。・・・リンズ。」
問いの答えを急ぐ私に対して、サンタマリアは余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）で、お茶のお変わりを求めた。
リンズのお茶を用意する音だけが部屋に響く。

そういえばと、しばらくエンリッヒもシャオンも口を開いていなかったことに気が付いて、私は二人を見やった。
そこにはエンリッヒの実家にいたときに彼らではなく、三大天使の前で僅かに緊張した面持ちの二人がいた。
同じ天使でも、こうして本来ならば話しかけられなければ口を開くことも許されない相手に、どうしてアーシアンの私が口を利いているのだろうと、おかしくなって私は心の中だけで僅かに笑った。

「さて、どうして、あなたが黒の一族の末裔かという話だけど。それは簡単よ、貴方がその黒の武器（カシュケルノ）を扱うことができるから。その武器はね、黒の神に忠誠を誓った黒の一族の血を引く者にしか使うことができない品物なの。」
「だったら、おかしいだろ？追放された、東方の楽園（サフィラ・アイリス）にいないはずの一族がどうして？」

「黒の一族を追いやったのは結界を挟んだ隣の世界・西方の魔境（シェストリア）と言う名の大地だった。ヒロには分からないかもしれないけど、世界と言うものは東方の楽園（サフィラ・アイリス）だけが全てじゃない。同じような大地がいくつも折り重なって形成され、強い結界同士で、互いに干渉しないようになっているの。西方の魔境（シェストリア）も、その一つだった。」

世界が一つでないと言うのは聞いたことがあった。

世界はそれぞれが、世界の果て（レドヴァガンナ）によって区切られ、その先には別世界が広がっていると言う伝説があった。

「結界は簡単に通り抜けられるものではないけど、追放することができるのならば、きっと戻ることもできるはずだ。彼らはそう思ったんでしょうね。危険を冒してまで彼らは、故郷に帰るため、そして黒き神を解放するために東方の楽園（サフィラ・アイリス）に戻ったのよ。まあ、全員が戻ってこれたわけじゃないらしいけど。」

危険を冒してまで、彼らは故郷に帰って着たかったのだろうか。それとも、神や天使に復讐をしたかったのだろうか。

ふいに、彼らのことを想った。

「そして、東方の楽園（サフィラ・アイリス）の全てが白き神と天使によって、支配されているとわかると、黒の武器（カシュケルノ）を失い、仲間とも散り散りになった自分たちだけでは、黒の神を解放できないと悟った彼らは、黒の武器（カシュケルノ）を求めて不浄の大地（ディス・エンガッド）を流離うようになったの。すなわち、それが貴方たち流離人の始まりというわけよ。」

ご先祖様が流離い求めたのは、黒の武器（カシュケルノ）だというのであれば、黒の剣（ライ）を手にした私はもう流離いの目的を達したと言うことなのだろうか。

では、未だにどこかに生きたい、何かを求め続けている私の心は・・（ローラレ）

・。

サンタマリアの言葉に、自分の存在意義さえ揺さぶられてた私は混乱したが、サンタマリアは話を続けた。

「そして、長い時間をかけ貴方のご先祖様は黒の武器（カシュケルノ）を取り戻し、神の力をいつか黒の神を助けるときのために受け継がせた。でも、貴方の血統は、その力の意味を、その記憶もその想いと共に、忘れ去ってしまったようね。でも、忘れていない黒の一族の血統もいるのよ。」

サンタマリアの声が低くなった気がした。

「これでやっと本題には入れるわね。」

そういいながら、サンタマリアは改めて私に向き直った。

「貴方と同じ、でも先祖の記憶も想いも、そして黒の武器（カシュケルノ）を取り戻した黒の一族の末裔が、今、天使に反旗を翻そうとしているの。その動きは東方の楽園（サフィラ・アイリス）だけではない、西方の魔境（シェストリア）の血統たちも、長い年月をかけて結界を通り抜ける方法を編み出し、天使に、東方の楽園（サフィラ・アイリス）そのものに、牙を向こうとしているの。」

その先は心の中が見えなくても何となく分かった。

「私にそのほかの黒の一族と戦え、力を貸せと言うのか？」

そうでなくては、わざわざ三大天使が直々に私に物を頼むはずもない。

いや、神殺しの力を持つかもしれない私に対しては、三大天使くらいしか対峙しようという気が起きなかったのかもしれない。

だが、そんな御伽噺みたいなことが真実なのか。

それに、もう一つはっきりさせておきたい事があった。

「大体、長々と話はきいたが、黒の剣（ローラレライ）が本当にその黒の武器（カシュケルノ）という確証があるのか？」

しかし、私の2つの問いにサンタマリアは笑顔を崩さなかった。

「さすが話が早くて助かるわ。はじめにも言ったでしょう？私は貴方に信用してもらい、そして私たちに協力して欲しいの。心配せずとも、その剣は間違いなく黒の武器（カシュケルノ）よ。私は実際に当時の実物を見たことがあるし、その剣が放つその魔力を絶対に忘れないわ。」

サンタマリアは可笑しなくらいにはっきりと言い切った。

そして、私はその開かない瞼の下から強い視線を感じた。

「貴方もこの城の物々しさを感じるでしょう？最近、黒の一族による天使殺しが、いくつかあったの。それに恐れをなした私たちは、黒の一族が襲ってくるかもしれないから、最近警備を強化したのよ。私が言うことでもないけれど、黒の武器（カシュケルノ）相手では、正直平和ボケした若い天使たちでは全く相手にならないわ。エンリッヒは運が良かったとしかいいようがないわね。」

「あははは。いやいや、これでもえらい目にあったんですよ？」

サンタマリアに笑って返すエンリッヒであるが、多分脳裏にはあの最後の黒の剣（ローラレライ）の異様な姿が思い出されているだろう。

「それに、万が一にも貴方をはじめ黒の一族が黒の武器（カシュケルノ）を7つ揃えたりしたら、私たちは再び終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告を発動させなければならない。そうなれば、世界は今の不浄（ディス・エンガッド）の大地どころじゃないくらい死の世界が待っている。」

今の不浄（ディス・エンガッド）の大地より酷い世界・死の世界。

考えたくない世界だ。

「でも、それくらい、黒の一族と黒の武器（カシュケルノ）は私たちにとっては脅威なのよ。だからこそ、私たちに対する恨みつらみを忘れた貴方に、私は協力を求めたいの。もう二度と終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告を発動させないためにも、東方の楽園（サフィラ・アイリス）に生きる全てのものを守るためにも。」

「・・・。」
世界のためと言われても、話が大きすぎていまいち実感がわかない話である。
それにどんなに真面目に話を聞いた頃で、どこかあまりに現実味のない話に真剣に考えられない自分がいるのも確かだった。
それに、腑に落ちない点もある。
一方的にサンタマリアの話を聞くだけでは、あまりに私自身が持つ情報が少なすぎた。

「少し、考えさせてはもらえないだろうか。」
そんな私が言えた言葉はそれだけだった。
「それは考える余地があるということかしら?」
「・・・。」
それには答えなかったが、サンタマリアには私の心などお見通しであろう。
ただ、混乱する私の頭では今はまともなことは考えられないし、心を見るサンタマリアが言う場所ではおちおち考え事もできない。

サンタマリアは無表情のまま私の顔を閉じた瞼の奥からじっと見つめた後、笑顔を私に見せた。
「わかりました。では良いお返事をお待ちしてるわ。それにしても、長い話で体が固まってしまったわね。一緒に散歩でもしない?」
「・・・ええ。」
断る理由もなかったので、サンタマリアの提案に乗ったが、呆気なく引き下がったサンタマリアに私は少しだけ違和感を感じた。

そしてリンズがサンタマリアをエスコートする後に続き、開け放たれた扉から庭に出た私は、一瞬その眩しさに目がくらんだ。
そして、眩しいと考えて目を細めるより先に、私は熱い何かが自分を貫いたのを感じた。

「・・・ガッ。」
私は黒い槍に、腹部を深々と貫かれていた。
エンリッヒとシャオンの声が遠くで私の名を呼ぶのが聞えた。
そして、聖母のように微笑むサンタマリアを見た。

・・・まさか、今のはサンタマリア？

しかし、聞き覚えのない声がすぐ傍で聞えた。
「恨みを忘れた一族など、もはや黒の武器（カシュケルノ）を持つ資格もない。」
私を槍で貫いていたのは黒いマントを身に纏った、若い男。顔はマントの影でよく見えなかった。
そして男は槍を私から無造作に抜く。私の体は重力にしたがって、グニャリと力もなく倒れた。
「弱いな。それでもわが同族か。」

同族？
ではこの男もまた、私と同じ黒の一族？
今までのサンタマリアとの話を聞いていた？

しかし、それ以上は何も考えられなくなった。
槍が抜けた傷から血があふれ出し、その身から命が消えていく感触が体を迫上がる。

ああ、この感触はいつも見た夢と同じだ。

ただ突然のことに痛みや、苦しさは感じず。
ただ、無性に体が熱かった。
しかし頭は霞がかったように何も考えられず、次第に意識が遠のいていくのを感じた。

第二十一話　天使が語るは嘘か真か　其の四（後書き）

第二十話・第二十一話、同時更新です。本当は一話でまとまる予定だったんですが、サンタマリアの長話を一気に書いていたら、まとまらず二話に分けることに・・・。

長い上に、分かりにくい説明ばかりになってしまい、ヒロ同様混乱している人がいましたら、大変申し訳ないばかりです。上手く文章に纏められず、私の不徳の致すばかりです。

そして、常に酷い目にあってばかりのヒロですが、今度こそ絶体絶命！しかも次からはヒロではなくエヴァ視点に物語りは切り替わったりします。こんな拙い文章を、楽しみにしてらっしゃる奇特な方がいましたら、気になるところで終ってしまい、すいません。

第二十二話　死してなお君を守る　其の一

ヒロちゃん唯一の同行者こと、僕、エヴァは機嫌が悪かった。

熊男・アラシが僕とハクアリティスを拉致監禁し、ヒロちゃんを助けると安請け合いをしてから、一ヶ月以上の時が経った。

なのにあの熊野郎は、未だにヒロちゃんを連れてきてくれないし、僕をここから解放しようともしていない。

ただただ、僕を男だと思っていないのか、ハクアリティスと同じ部屋に僕を押し込めて、意味の無い気詰まりで窮屈な生活を、彼らは僕に強制し続けていたのだ。

第二十二話　死してなお君を守る　其の一

一ヶ月の間に、僕も手をこまねいているだけではなく、色々情報収集してみたんだ。

しかし、どうして僕を解放しないのか理由はわからないまま。

それにハクアリティスの正体（なんとこの女は、天使長である万象の天使の妻だった）と、僕らを監禁しているアーシアンが天使からの解放を望む集まりということは知ることができけど、それにも関わらずハクアリティスを使って何の行動もしている様子はない。

彼らの目的が見えてこなくて不安を感じないわけじゃないんだけど、それ以上を知るすべが僕にはないから仕方なかった。

まあ、暴力を受けるわけでも、食事を与えられないでもなく、至って普通、不浄の大地（ディス・エンガッド）で暮らしているよりも、数段良い生活をさせて

もらっていたりするのだから、ヒロちゃんが見たら贅沢を言うなとか怒られそうだけど、ヒロちゃんがいないという事実だけで、十二分に僕にとっては文句を言うに値するのだ。
そもそもこんなに長くヒロちゃんが傍にいなかったことなんてなかった。

きっと、だから、僕はこんなに不安に押しつぶされそうな気持ちになって、ここ最近、怖い夢まで見るようになったに違いない。

戻れ、戻れ、戻れ、戻れ、戻れ。

ヒロちゃんが僕の傍にいなくなってから、そんな声と白い手が、真っ暗な場所にいる僕を白い光の法へ連れて行こうとする悪夢を毎晩見るようになった。
普通なら真っ暗な場所にいるほうが悪夢で、白い光のほうへ、明るいほうへ行きたいと思うはずなのに、何故だか夢の中で僕はその白い光が怖くて仕方がなくて、ただ必死で逃げるのだ。
しかも日が経つにつれて、次第にその手の力が強くなっているのか、はたまた僕が弱くなっているのか、僕は少しずつ白い光のほう着実に近づいていた。

夢の声の主は、僕にどこに戻れというのだろうか。

もしかしたら、その先に僕が失った記憶とかが、あるかもしれないと思ったこともあったのだが、ただ本能的な直感で僕はあの白い光が怖いと思ったのだ。
まるで、自分が自分でなくなるような、あの光を感じると、夢の中で僕はそんな錯覚さえ覚えた。

まあ、僕の話はこれくらいにしておいて、ハクアリティスの様子も

一応報告しておくと、あの女のふてぶてしさは、大したものだとムカつくを通り越して、僕は呆れるしかなかった。
監禁されている身の癖に、捕らえている人間たちが自分に対して逆らわない臭いを嗅ぎ付けると、食べ物はもちろん、室内の内装や服装までに文句をつけ、実際に実行させていた。
そんなありえない我儘にも、何故だかここの人間たちはが愛想良く答えるものだから、たちが悪い。
恐らく、ハクアリティスがここで、一番怖がっているのは、ずっと一緒にいるのに未だに殆ど彼女と口を利こうとしない、同じ捕らわれの立場である僕ではないかと思う。
最初は嫌な女とか、ムカつくとか、彼女に対して色々な感情を持っていた僕だけど、もう彼女に対しては、自分の感情を動かすことすら面倒になって、ハクアリティスに対してはいないものとして僕は監禁生活を送っていた。

でも、そんな監禁されているという事実以外は、いたって平和な毎日に終止符が打たれる時は、ある日突然やってきた。

僕はその日、あの悪夢であの白い光の中で、初めて『戻れ』とは違う言葉を聞いた。
『お帰り、俺のーーー。』
でも夢から覚めてみると、僕はあの冷たい声が発した言葉を確かに聞いたはずなのに、ついぞ思い出すことはできなかった。
そんな夢見がすっきりとしない日の（悪夢にこういう言い方をするのも、変な話だけど）午前、僕とハクアリティスが監禁されているとは名ばかりの場所に、見知らぬ来訪者が来たのだ。

「あっ。エンシッダ！やっときたのね！」
短いノックの後、部屋に入ってきたのは、アラシと見たとこのない男女二人だった。

ハクアリティスはその現れた見知らぬ男を認めて、今まで見たことのないくらい明るい顔で破顔した。

この男が来て当然とでも言いた気な、ハクアリティスの言葉に僕は目を細めた。

「もう！計画がめちゃくちゃよ！！どうしてあたしが不浄の大地（ディス・エンガッド）に放り出されたとき、すぐに助けに、来てくれなかったのよ！おかげで天使に襲われたのよぉ！本当に、これで、あの方の心を取り戻すことができるんでしょうね？」

この女は、一体何を言っている？

ハクアリティスの言葉に、冷静になれと呟く自分を振り切って、頭の中が沸騰（ふっとう）するような感覚が僕を支配しようとしていた。

「心配はございません、ハクアリティス様。しかし、貴女様が姿を消して、万象の天使は、それはそれは心配なさっている様子。もう少しだけご辛抱（しんぼう）されれば、いなくなって初めて気が付いた貴女様の大切さに気が付いた万象の天使は、前より更に貴女様に夢中になられることでしょう。」

そう言って、ハクアリティスの前に跪（ひざまず）くエンシッダといわれた男は、年の頃なら２０代後半くらいに見える、白い歯がまぶしい笑顔の素敵な好青年という感じだった。

そのエンシッダの影のように控えているのは、まだ少女といっても過言ではない、あどけなさの残る美少女。

しかし、一点の表情すら見えないその様子は、さながら人形のように見えた。

そして、この二人を連れて来ただろうアラシが、目の前の状況を何の疑問もなく見つめている様子を見て、僕は我慢ができなくなって

口を開いた。
「ハクアリティス、どういうことだ?」
僕はともかく、少なくともヒロちゃんは信じていた。
このハクアリティスの言っていることを、全て信じてた。
だからこそ、僕らを逃がし、一人で天使と戦うことを決めた。
なのに、今の会話から導き出された僕の想像が正しければ、この女は・・・。

今の僕は相当凶悪な顔をしているだろうなという自覚があった、ハクアリティスは一瞬僕に怯えるような表情こそ浮かべたが、すぐに自分の味方が現れたからか、いやに強気な顔で僕の顔を見返してきた。
そして、尊大にのたまったのだ。
「聞いた通りだけど?」

それは僕の想像が当たっているということ・・・、目の前が真っ赤になるのを感じた。
「聞いたとおり?僕には、お前が夫の興味を引くために、わざわざ不浄の大地(ディス・エンガッド)に狂言家出でもしたみたいに聞えたけど?しかも、ここにいるやつらもグルで。」
怒りやら動揺やら、色々な感情で声が震えるのを感じた。
しかし、そういった感情を我慢していた僕の箍(たが)を、ハクアリティスは簡単にはずした。
「あら?よく分かってるじゃない。そうよ、本当はあたし天使の領域(フィリアラディアス)から直行でここに来る予定だったのよ。なのに、ちょっとした手違いがあって、あたしは一人不浄の大地(ディス・エンガッド)に放り出された。でも、貴方とヒロのおかげで助かった上に、天使から逃げるっていうイベントまで発生したおかげで、あたしの脱走もさぞ信憑性のあるものになったことでしょう。そういう意味では、貴方たちには感謝してい

るわ。」

僕の座っていた椅子が、倒れる音が遠くで聞えた。
言葉の意味を理解する前に、僕は衝動のままにハクアリティスに殴りかかろうとした。
「はなせ！」
しかし、図体のわりに俊敏なアラシに背後から取り押さえられた。
「エヴァッ・・・！やめろ！」
「どうして、止める?!この女はっ！女はっ！」
手足をばたつかせて、力の限りアラシから逃れようと、僕は暴れた。
だって、こんな裏切りが許されるというのか？
僕はいいんだ。
でもヒロちゃんは、こんなあまりに身勝手で醜悪な我儘のために、命を張って天使と戦い、今も天使にどんな目にあわされているのか。

しかし、僕が力の限り暴れたところで、僕よりも、はるかに横にも縦にも大きなアラシに押さえ込まれては、ハクアリティスに手も足も出せないのは、当然のことだった。
そんな僕の様子をせせら笑うように、ハクアリティスは言った。
「ふんっ。アラシも、ここにいるアーシアンたちも、あたしには逆らえないのよ?あんた、一ヶ月間も、ここにあたしと一緒にいて、そんなこともわからなかったの?それに、あたしは助けてくれなんて、頼んじゃいないわ!ヒロが勝手にやって、勝手に天使に捕まっただけじゃない!それを、あたしのせいにするなんて逆恨みも、いいとこよ！」
「〜〜〜っ！」
僕は悔しさやら、怒りやら、もう何が何だか分からないほど感情がごちゃごちゃになって、それ以上言葉でず、ハクアリティスを睨みつけるしかなかった。

しかし、エンシッダのよく通る声が僕らの睨み合いの中に割って入った。

「ハクアリティス様。私が言ったことを、お守りにならなかったのですか？私はこの一ヶ月の間に、そのエヴァと仲良くしていただくようお願いしていたはずです。一体、何のために同じ部屋に監禁したと思っておいでですか？」

「？」

どう見ても、険悪な関係にしかみえない僕とハクアリティスを見て口を挟んだらしいが、どういう意味だ？

僕は沸騰する頭の中でも、頭の隅ではそんな風に冷静に考えていた。この一ヶ月、僕とハクアリティスを同じ部屋に監禁していたことに。何か意味があるのか？

それは、ハクアリティスに意味があるのか、それとも僕に意味が・・・？

「・・、それは、ごめん。だって、あの子、あたしがどんなに打ち解けようとしても、全然反応ないんだもん。」

とハクアリティスは、エンシッダに対して自分が如何に愛らしく、美しく見えるか、計算された表情と仕草で謝っているのか、いい訳をしているのか分からないようなことを言った。

「そうですか。それは仕方ありませんね。」

しかし、そんなハクアリティスの態度に、エンシッダは全く気を悪くした様子もなく、彼女に微笑みかけた。

ハクアリティスも、それに安心してエンシッダに甘えるようにしなだれかかる。

こんな状況を見せ付けられればハクアリティスが、この男を全面的に信頼していることは、馬鹿でも分かった。

ただハクアリティスには見えなかったろうが、じっと二人を睨みつけていた僕は見た。

エンシッダが一瞬だけ、酷く冷たい、底が見えない色の瞳でハクアリティスを見ているのを、
その表情にはハクアリティスに対する何の感情も見えなくて、僕は好青年然としている彼に違和感を覚えた。
しかし、エンシッダはすぐに好青年の彼に戻ると、ハクアリティスをやんわりと自分から引き剥がし、優しく彼女を諭すように呟いた。
「申し訳ありません。もう少しこちらにいたいのは、山々なのですが、僕は彼を迎えに着ただけなので、すぐに失礼しなくてはなりません。」
といって、僕のほうを見た。

「え～？エヴァなんかに何の用があるのよ？」
しかして、僕を迎えに来たというエンシッダに不満げを上げるハクアリティス。
だが、エンシッダはその問いには答えなかった。
「ハクアリティス様には、もう少しだけこちらで我慢をして頂くことになりますが、その先には必ず貴女様の望む幸せが待っていますから。ね。」
ハクアリティスに囁かれた甘い言葉。まるで恋人にでも対するように甘い笑顔。
彼女はそんなエンシッダに、操られるように大人しく一つ頷いた。
我儘な彼女をこんな簡単に説き伏せるとは、大した手腕である。

そうして、エンシッダに促され、暴れたまま僕はアラシに取り押さえられ、ハクアリティスを睨みつけながら部屋を出された。
ただ、最後に僕たちを見送る心もとなそうなハクアリティスの表情を見て、ふいにもしヒロちゃんだったら、こんな状況でも彼女は単に強がっているだけなのだろうなんて、考えるんだろうなと想像できて、少し笑ったらエンシッダがそれを目ざとく見ていてた。
「何がそんなに楽しいのかな、エヴァ？」

一分の隙もない笑顔だった。
しかし、さっきの違和感を忘れられない僕は、その笑みに騙されないぞ。

「僕をどうするつもりだよ。似非笑顔。」
「似非・・・？」
僕のよく分からない罵りに、エンシッダはキョトンとした表情を浮かべ、僕を拘束したままのアラシは焦ったように僕の口を手でふさいだ。
「ば・・、お前、エンシッダ様に何を・・・イダ！」
すぐさまその手のひらに噛み付いてやる。
「何するんだよ。この熊男！大体、ヒロちゃんを助けてくれるとか、言ったくせに！僕を何処に連れてこうって言うんだ！」
人気のない廊下に僕の怒号が響く。
「う・・うるさい。状況が変わったんだよ。そ、それに、お前のことは俺だって・・・。」
気のいい男は嘘をつけない。
僕をどうするかは、彼の視線の先にいる、僕のことを面白そうに見ているエンシッダのみが知るというわけだ。

「中々威勢がいいなぁ。それにしても、似非笑顔なんて、中々的を得た言葉じゃないか、気に入ったよ。」
そう言ったエンシッダは、先ほどとは１８０度違う顔を持つ冷徹な表情を浮かべる、寒気さえ感じるくらい鋭い男に変わっていた。
ほら見ろ、やっぱり何か似非臭いと思ったんだ。
「全く、天使やエンディミアンも簡単に騙せる笑顔なのに・・・。だから、子供は嫌なんだ。」
そう言って、アラシに拘束されて、身動きが取れない僕の髪の毛を乱暴に掴んでエンシッダは僕の顔を覗き込んだ。

「ふーん。顔はあいつの面影は全くないんだな。まあ、気配は殆ど同じだから、間違いないと思うけど。」
「？」
「ああ、自分が何者か、やっぱり自覚はないんだな。そりゃそうか、もしあったら自力で戻ってきてるよな。」
エンシッダの言葉に、心臓がドクンと鳴った。
熱くなっていた体温が急速に冷めるのを感じた。
「おかげで、とんだ二度手間を踏む羽目になったけど、まあいいよ。君という存在が戻ることで、やっと全てが動き出すんだから。」
「・・・僕のこと知っているの？」
呆然と呟いた僕に、獲物を見つけた獣のようにエンシッダ瞳を光らせた。
エンシッダの瞳の奥にある深い闇が見えた。
深い、何処までも底のない深い・・・。
その闇に吸い込まれそうになりながら、僕の本能は『この男はいけない。』と警鐘を頭の中でならしていた。
でも・・・。
「ああ、よおく、知っているよ？君も自分のこと、知りたいだろう？教えてあげようか？」
そう耳元に息を吹き込まれるかのように呟かれた言葉が、まるで呪文のように僕の判断能力を奪っていく。
「う・・・ん。」

この男の言葉に頷いてはいけないと思っているのに、体がいうことをきいてくれず、エンシッダに魅入られたように力なく頷いたのだ。
確かに自分のことを、知りたいと思う気持ちはある。
でも、この男はいけない。
僕はあの夢の中の、白い光に覚える恐怖に似たものを彼に感じていた。

このままじゃ、僕が僕でなくなる。
そう思った瞬間に、先ほどまで思い出せなかった夢の中の言葉が頭の中で再び響いた。

『お帰り、僕の翼。』

声と共に、見たことのない情景が次々に頭の中に映し出された。

激しい羽音。
鳴り止まぬ剣戟の音。
世界を揺るがす雄たけびと、悲鳴。
断末魔の叫びのような、呪の言葉。

そして、孤独を嘆く女性のすすり泣く音・・・・。

ああ、そうだった。
僕は、全部思い出した。いや、思い出したというのはおかしいか、僕は気付いたんだ。

僕は、僕はあの人の翼。
そして、僕は戻らないと、還らないといけないのだ。

「全部、思い出したようだね。では、行こうかエヴァ。あの方の元へ。」

そう言って、エンシッダがアラシの拘束を解いて、僕に手を伸ばした。

そして、僕はその手をとった。

そのときの僕は、ハクアリティスへの怒りも、ヒロちゃんへの思慕も、感じていた恐怖も、全てを忘れて、ただ、あの人の元へ還ることしか頭になかった。

第二十二話　死してなお君を守る　其の一（後書き）

エヴァ視点でお送りしましたが、いきなり急展開となりました。
裏切りのハクアリティス、謎の男エンシッダ（ちなみにこの人の名前はヒロ視点のほうで、一度出てきます）、そして記憶を取り戻したエヴァ。
物語はエヴァを視点に、一部のクライマックスに近づきつつあります。果たしてエヴァの正体はいかに?次回もエヴァ視点で、少し長めでお送りします。

第二十三話　死してなお君を守る　其の二

あの日、僕らは互いに約束を交わした。
ヒロちゃんは、僕に『逃げろ』という言葉に僕の絶対服従を要求した。

僕、気が付かないふりをしてたけど、本当は知ってたよ。
ヒロちゃんが、僕に誰かを重ねていたことを・・・。
その誰かを守れなかったから、ヒロちゃんはどんな手を使っても僕を守ろうと、逃がそうとするんだ。
でもね、僕はそれでも良かったんだ。
誰かの代わりでも、ヒロちゃんが実際に守ろうとするのは、逃がそうとする僕だから。
だから、本当はヒロちゃんと約束したくなかったけど、僕はそれを承諾した。

ヒロちゃんは、記憶がなくて右も左も分からない僕に、生きることを教えてくれた。

僕にとって人生は記憶のあるたった3年間しかないけれど、それでもヒロちゃんが一緒だったから、短い人生だって僕にとっては素晴しい人生だったと僕は胸を張って言えるんだ。

ねえ、ヒロちゃん。
僕がヒロちゃんと交わしたもう一つの約束・・・、覚えてる？

あの約束を果たすために、僕はほんの少しだけ運命に逆らうことにしたよ。

約束を守りたいから。
だから、ヒロちゃんのためじゃないんだよ？僕は自分のためにそうするんだ。
でも僕の選んだ結果をヒロちゃんは、怒るかもしれない、悲しむかもしれない。
もしかしたら、僕のことを憎んじゃうかもしれないね？

それでもいいよ、でも忘れないで欲しいんだ。
あの約束は果たすから、どうか僕がこの世界にいたことを、死ぬまで覚えていて。

第二十三話　死してなお君を守る　其の二

遠くで声が聞える。

「この子供が本当に、翼なのか？」
疑いの気持ちを隠そうともしない声。
「はい。マールの予言により、見つけた翼です。間違いありません。」
それを、はっきりと否定するのは、エンシッダの声だ。
「・・・私は予言などは好かんが、あの小娘の力はあの方も信頼しているからな。」
「前々から、あの方から探索依頼を受けていました。こうして見つけることができて、私も嬉しく思っております。」
あからさまな男の嫌味を、エンシッダがさらりと流す。

僕はその会話の場にいたし、エンシッダと赤い翼を持つ男が、僕を無遠慮にまじまじと見つめる視線も感じていた。

だけど何もかもが一枚分、厚いガラスを隔てたように、ぼんやりとしているように僕には思えた。

僕は今、天使たちの城にいる。
何も考えられないまま、エンシッダに連れられ、気が付けば僕は守護天使（ルバチュア）の白壁を通り抜け、白き神（イア・ルマンヌ）の御許の中に入り、天近き城（フェデス・ジグロア）に登城していたのだ。
不浄の大地（ディス・エンガッド）の貧しくて乾いた景色に見慣れていた僕には、見るもの全てが眩しくて輝いているはずだけど、今の僕には感動の声を上げることもできなかった。
多分、今の僕はもう僕ってだけじゃない。
半分はあの人に持ってかれているのだ。

「・・・わかった。ともかく、まずはご本人に確認していただくのが一番早いだろう。子供は私が預かる。お前は下がれエンシッダ。」
その言葉を聞いて、エンシッダは好青年の笑顔にあの深い闇の瞳を僕に向けると、何も言わず部屋を退室した。
ただ、去り際に思い出したように振り返って言った。

「そういえば、いい忘れておりました。マールが翼について謡った予言をお伝えするのを忘れていました。」
しかし、そう聞いて天使の男は嫌そうな顔をした。
「私が予言を好かんと聞いといて、それを言うか。」
「まあまあ、そういわず。」
簡単ですよ。とエンシッダは嫌な顔をする天使を押し切って、予言を謡いだした。

白き光より　堕ちた翼は　黒き寝台で眠る
千の夜　千の朝の果て

其(そ)を　白き光より　引き千切りし
黒の血が　其(そ)を　永き眠りから　目覚めさす
目覚めし翼は　契約という名の楔(くさび)を　身に差し
白き光に　還るのだ
しかして　翼の永い旅は　終わを告げ
世界の胎動(たいどう)が　全ての始まりを告げる

「後はこの前の下りで、翼の居場所を示す予言の部分もありますけど如何致します？」
そう伺いをたてると、天使は首を振る。
エンシッダはそれをやはり笑顔のまま見ると、やっと部屋を退室したのだった。
意味ありげな視線を僕に残して・・・。

「お前が本当に翼であるか確信していただくため、御前(ごぜん)に連れて行くが無礼は決してするな。」
エンシッダを見送った天使は、僕に一瞥(いちべつ)しただけで僕が後を付いてくるかも確認せず、大股で歩き出した。
僕はその後に続いたけど、僕の頭の中では予言の中の一つの言葉が、何故だか心に響いていた。

ーーーーー契約という名の楔(くさび)

『私に付いてくるのは構わないが、一つ条件がある。』
ずっと頭の名で繰り返されているあの冷たい声と声の合間に、声が聞えた。
この声は・・・。
『私が逃げろといったら、全力で逃げろ。』
ああ、これは、ヒロちゃんの声だ。

これは僕とヒロちゃんが交わした約束の言葉だ。

思い出して、僕は感覚が戻り、僕が僕を取り戻していくのを感じた。

僕の記憶が更に蘇ってくる。

『じゃあ、僕とも約束してくれる？』

記憶の中のヒロちゃんは嫌そうな顔をしたけど、自分が約束させた手前もあり仕方ないなぁと言う顔で頷いてくれた。

『絶対死なないって、約束して。』

『それは無理だろ。人間というものは、いつかは死ぬものだ。』

即効で否定された。

でも、この時の僕はヒロちゃんが何を言おうとも、僕を逃がすためにヒロちゃんが無残に死んでいく様をまざまざと想像してしまい、想像と現実の区別が付かず混乱していた。

『だったら、死ぬ時はその前に、僕に殺されて！僕以外の誰にも殺されないで！』

そう悲鳴にも似た声で意味不明なことを口走ると、ヒロちゃんは顔をギョッとさせた。

『ば・・・、お前は、何を馬鹿なこといってるんだ。大体、死ぬって言っても、病気とか、事故とか、老衰で死ぬ事だってあるだろう！どうして誰かに殺される心配ばかりしとるんだ、お前は。』

『あ・・・。』

そういわれて気が付いた。

確かに僕は何故だか、ヒロちゃんが知らない誰かに殺されてしまうという思い込みに支配されていた。

『全く縁起でもないこというなよな。』

そう苦笑されて僕は何だか恥ずかしくなって、その話はそのまま消えていくかと思ったけど、ヒロちゃんはその後に、

『まあ、でも、約束してやってもいいぞ。』
と言ったのだ。
僕は自分で言い出したことにも関わらず、ヒロちゃんの承諾に驚いた。
そんな僕にヒロちゃんは、あっけらかんと笑った。
『まあ、誰か知らない奴に殺されるくらいなら、お前に殺されたほうがマシかもしれないと思っただけだ。あまり真剣にとるなよ？大体、私がそうそう簡単に死ぬわけないだろ？変な心配ばっかするなよ。』

約束ともいえない、ヒロちゃんにとっては他愛もない言葉だったかもしれない。
でも、そういわれて僕は気が付いた。
僕は別にヒロちゃんを殺したいわけじゃなく、この約束の中にある僕の本当の願いは・・・。

「ああそっか、これが契約の楔（くさび）か・・・。」
そして、僕は僕を完全に取り戻した。
「何か言ったか？」
「あ、いえ。何でも・・・。」
前を歩く天使が僕を振り返ったけど、僕は曖昧（あいまい）に笑って首を横に振った。

天近き城（フェデス・ジグロア）は武装した天使が何人もいて、ピリピリとした空気が伝わってきて、僕が歩いている廊下は耳が痛くなるほど静まり返っていた。
天使は迷いなく城内を歩くと、城の奥、綺麗な庭園の中心にある離れみたいな建物の扉をノックした。
庭園はそれほど大きくなく、城の一階と庭続きになっている。

恐らく城の一階からも、この庭園を散策できるようになっているのだ。

「あら、ラインディルト様。御機嫌よう。」

ノックの後しばらくして出てきたのは、あの人じゃない、でもあの人の気配が残る女の天使だった。

美人だとは思ったけど綺麗だとは思わない、ちょっと斜に構えたような雰囲気のある女性だった。

女天使にラインディルトと呼ばれた天使も、あまりこの女天使にいい感情は持っていないらしく、女天使を認めると少しだけ顔を顰めた。

「あの方は？」

「今はいませんけど？探してきましょうか？」

そう、女天使は婀娜っぽく笑った。

「では、お願いする。その間こちらで待たせてもらう。」

しかし表情一つ動かさずラインディルトは、女に冷たくそう言うと、遠慮なく建物内に入っていった。

女があの人を探しに行って、離れの中は僕とラインディルト以外の誰の気配もなかった。

広い城内に比べれば、こじんまりとしているけど、一家族くらいは余裕で住めそうな広さはある。

そして、吹き抜けのリビングのような部屋に入るとラインディルトは、乱暴な動作でソファに腰掛けた。

「くそっ、あの女・・・。」

忌々しげに吐き出された言葉は、酷く焦燥した声だったように思う。

その声につられて僕が見たラインディルトの顔は、僕に見せていたような氷のように冷たいだけの表情ではなく、何か暗い感情が宿った顔だった。

だが、僕が見ていることに気が付くとラインディルトはすぐにその

表情を消す。
僕は何故だか、見てはいけないもの見たような気がして、何も言えずに視線をはずした。

それからは、一時間ほど沈黙が一室を支配した。

そして、時は満ちた。
僕は次第に近づいてくる気配に体中が熱くなり、自分の全てが引き付けられるのを感じた。
「来るよ。」
「え？」
僕の呟きにイライラして床を見ながら貧乏揺すりしていたラインディルトが顔を上げる。
そして同時に扉が開いた。
強くて白い光を感じた。

その光を見て、ここが僕の還る場所だと確信した。
僕が恐怖という蓋(ふた)をして気付かないふりをしていた、本当の僕の居場所。

「やあ、初めまして・・・というのは、おかしいかな？でもやっぱり初めましてだよね？えっと、なんて呼んだら良いかな？」
「おい、貴様・・。」
僕の馴れ馴れしい態度にライディルトが静止の言葉を上げるが、現れた人物はそれを手を上げて制した。
「エヴァンシェッド。本当は違う名前なんだが、気が付いたらこの名が定着していた。」
現れた白い光改め、エヴァンシェッドはにべもなく言った。
美しい片翼の天使。

その美しさも、神々しさも、強い光も、全てが生きるもの全てを惹きつけてやまない万象の天使、それが真実の僕の還る場所なのだ。

「エヴァンシェッド・・・、古い言葉で『飛べない翼の天使』か、皮肉な名前だね。ひょっとして、僕のせいかな？」

「当たり前だ。一人で動けるなら、さっさと帰ってこい。おかげでこの数百年、ずっと片翼のままだし、不浄の大地（ディス・エンガッド）をさんざん探させる羽目になった。・・・ずっと、一人で彷徨（さまよ）っていたのか？」

その問いに、少し笑って答えた。

「違うよ。目が覚めたのは3年前さ。あの時、エヴァンシェッドが最果て（ロシギュナス）の渓谷の戦いで黒の一族に、翼を切り落とされて、翼（ぼく）は君から独立した。そして君の力を秘めた存在ということから、ずっと黒の一族によって封印されていたんだ。だから、僕を見つけられないのは当然だよ。」

今なら僕が誰だか、答えられる。

僕はこの目の前にいる、万象の天使・エヴァンシェッドの片翼、力の一部が切り落とされたことにより独立した存在。

「それにしても驚いたな。俺が言うのもなんだが、力が自分の意志でひとりでに動くなんて聞いた事もない。長い封印のせいか？」

そういいながら、僕を面白そうにエヴァンシェッドが眺めたり、触ったりしている。

彼にはラインディルトのような、僕が本物かどうかという疑いや迷いは感じられない。

まあそれも当然だよね。

元は同じ存在である僕らが、互いを分からないはずがない。

僕が彼を感じられるように、彼も僕を感じているのだろう。

彼に触れられる部分が見られる体が熱くなり、彼の元に返りたいと魂が叫んでいるのが、その証拠だ。

「僕にも良く分からないよ。ただ、僕だって自力で黒の一族の封印を解いたわけじゃなくて、僕の封印を解いてくれた人がいるんだけど、その人との接触が原因じゃないかとは思う。」
「なるほど。まあ、何はともあれ、よく帰ってきてくれた。今は色々問題が山積みでな。正直、力が万全になるのは非常に助かる。お前がいなかったせいで、片翼ってだけじゃなくて力も半分程度になったからな。」
そう言って笑ってから、エヴァンシェッドは急に難しい顔になった。
「それにしても、どうして俺の力を封印するなんて面倒な手段をあの黒の一族はとったんだ?まあ、俺の翼を切り落としやがったあの男は、変わり者だったと記憶しているが。いっそお前を消滅させる事だって、黒の武器(カシュケルノ)があれば可能だったろうに。」

そうだ。
エヴァンシェッドの翼を切り落とすことで力を削いだ黒の一族は、翼(ぼく)を消滅させずに封印させるという手段をとった。
初めは、確かに僕を消滅させようとしていたんだ。
でも、何故だかあの男は僕に・・・黒の剣(ローラレライ)をつきたてることはせず、その力で封印するという手段をとった。

そう思い返してみると、黒の剣(ローラレライ)とは可笑しな縁があるものだ。
もしかしたら、ヒロちゃんと僕をめぐり合わせたのも、あの黒の武器(カシュケルノ)なのかもしれない。

ヒロちゃん・・・。
僕はその名を心の中で、もう一度呟いて、勇気を奮い立たせた。
これからが、本番なのだ。

「それは僕にも分からないよ。それより、貴方の片翼として還る前に、一つだけお願いがあるんだ。」

「お願い？」
僕の言葉に、エヴァンシェッドはとても意外そうな顔した後、面白そうに笑った。
「あははははっ。俺が俺にお願いされるなんて、何か可笑しな状況だね。」
確かに彼の言うとおりである。
「でも、エヴァンシェッドの中に戻ったら僕は・・・、エヴァは消える。」
「エヴァ？」
僕の言葉にエヴァンシェッドは、不思議そうに顔を傾ける。
「僕の封印を解いて、ずっと傍にいてくれた人が、僕につけてくれた名前だ。」
「古い言葉で『翼』という意味だね。君にはぴったりの名前だ。」
ヒロちゃんはきっと、僕のことを知っていた。
そりゃ、僕の封印を解いたのはヒロちゃんだし、それにしても翼に、翼という意味のある名前をつけるなんて、安直な過ぎて笑えた。
でも、ヒロちゃんに『翼（エヴァ）』と名前を呼ばれるたびに、優しい気持ちになれたことを思い出す。

だから、僕は意外だろうが何だろうが、この願いは意地でも聞いてもらわなくてはいけないんだ。

「消える前に、一つでいい！お願いだから、・・・聞き届けてよ。」
「別に、聞いてやる必要はないと思うが？そもそも、お前は俺だ。俺は俺のしたいことだけする。お前には本来、自我なんてものはあるはずがないだろう。お前がそれと感じているのは、錯覚か幻だ。」
・・・確かにそうかもしれない。
そう思う節、自分が自分という存在が嘘っぽいと思う時だって本当は何度もあった。

でも、この込み上げてくる熱くて、苦しい何かは違うんだ。

「錯覚でもいい。ただ、聞いてもらえないというなら・・・・。」

『！』

そう言って僕はすぐ傍にあった、この部屋で飾られていた美しい短剣を、自分の首元に当てた。

実用品ではないだろうが、頸動脈をきるくらいには鋭い刃を持っているはずだと、この部屋に入ったときから目をつけていた。

「確かに僕は僕じゃなくて、エヴァンシェッドの一部かもしれない。でも、こうして自ら命を絶とうとしている僕は、きっと僕という存在だよ。だって、エヴァンシェッド、僕を止められないだろ？」

エヴァンシェッドとラインディルトから距離をとるように、僕は部屋の隅に移動する。

「・・・短剣（こいつ）で命を絶ったら、力（ぼく）は永遠に消えてなくなり、君は二度と力を手に入れることはできないよ。言っとくけど、脅しじゃないよ。僕の願いを聞いてくれないなら、僕はすぐにでも命を絶つ。どうせ、僕はいなくなるんだ。今更恐怖はないよ。」

壮絶に美しい顔で僕を睨む、僕の本体ともいうべきエヴァンシェッドを僕は見つめた。

本当は恐怖がある。

でもそれは、死に対する恐怖ではなく、絶対者（エヴァンシェッド）に逆らおうとしている今の事態に対してだ。

だって、何度だってあの悪夢で、僕を呼んでいた白い光そのものが彼なのだ。

さっきまでの自分が自分と思えなかった僕は、僕という存在の殆どを彼に持っていかれてたからだ。

今はその主導権を自分に戻すことができているけど、一瞬でも気を抜けば、すぐさまエヴァンシェッドに全てを奪い去られてしまいそ

うな強い力を感じる。
でも、負けるわけにはいかないのだ。

「いいだろう。言ってみろ。」
エヴァンシェッドはしばらくの睨み合いの後にそう呟いた。
どうやら僕の本気を察したらしい。
「その願いとやらを聞けば、俺の元に戻るんだな？」
「うん。それは約束するよ。」
どんなに僕が否定しても、僕が彼の一部、翼（エヴァ）であることは変わらない。
彼の中に戻るという運命は変えることができないものだと、僕にはわかっている。
でも、少しだけ逆らいたいのだ。

「僕の願いは、唯一つ僕の代わりに、ヒロちゃんを守って欲しいんだ。」

「ヒロちゃん？」
「僕の封印を解いた黒の一族の末裔の名前だよ。まあ末裔って言っても、過去の遺恨は何もかも忘れた血族だけど。ヒロちゃんは、これは僕の推測だけど黒の武器（カシュケルノ）を持っているために、天使の領域（フィリアラディアス）に捕らわれているんだと思う。天使に捕まってから連絡が取れないんだ。だからヒロちゃんを天使から助けて、僕が戻ってからもヒロちゃんが死ぬまで、誰にも殺されないよう、ヒロちゃんが不幸にならないよう全てから守ってあげて欲しい。」

ヒロちゃんが今どこにいて、どんな状況かなんて分からないけど、このままじゃヒロちゃんはきっと、僕が知らないところで、知らない誰かに殺される。
そんなの許せない。

でも、それは僕がヒロちゃんを殺したいわけじゃないんだ。
その思いは、ヒロちゃんにただ幸せな一生を生きて欲しいと願う僕の願いだったのだ。
単に誰かに殺されるというのが、僕の中で不幸の象徴のように思えただけで、僕の本当の願いはヒロちゃんから、全ての不幸を取り除くことに他ならなかった。

でも、実際はそんなこと僕にも、ヒロちゃん本人にも不可能だってことは分かっている。
だが、事態は変わったのだ。
「だって、エヴァンシェッドは天使の中で最高の天使だろ？人間一人守ることくらい朝飯前でしょ？」

僕のそんな言葉に、エヴァンシェッドが顔を顰めた。
「俺に黒の一族を守れ・・・と？」
僕は首元にぐっと短剣を近づけた。
「いっとくけど、エヴァンシェッドに拒否権はないと思うけど？」
「・・・。」
張り詰めるような空気が部屋を支配する。
ここが正念場だと、僕はエヴァンシェッドから目を放すことなく見つめた。

そして、極度の緊張が最高潮に達したとき、ふうと、息を吐く音が沈黙の中に落ちた。
「全く、自分に脅迫されるなんて思っても見なかった。・・・いいだろう。分かったよ。」
その了承の言葉を聞いて思わず気が緩みそうになるが、まだここじゃない。
僕は短剣を握る手に、嫌な汗をかくのを感じながら、次の言葉を発した。

「じゃあ、契約を。」

「馬鹿な！そんなことのために、神聖な天使の契約をさせるつもりか？！」

僕の言葉にラインディルトが声を上げたが、エヴァンシェッドは予想していたのか表情一つ変えなかった。

「まあ、当然だな。エヴァは俺の中に戻ったら最後だ。俺が約束を守るかなんて、確認しようがないからな。契約を交わせば、それは絶対の拘束力を持つ。それで、何を媒介（ばいかい）にする？」

僕は短剣を握っている左手をはずして、そのまま短剣を握り続ける右手の人差し指から足跡（エンダー・ケルト）の指輪を指から取った。

「この指輪に・・・。」

僕はこの時、自分の手が震えているのを感じていた。

こんなに上手くいくなんて信じられない気持ちで一杯だったが、エンシッダが教えてくれた予言が僕を後押ししてくれている。

だから、契約なんて大それたことを思いついたし、契約の楔（くさび）とは、きっとこのことに違いないんだと、気持ちを決めることができた。

僕は指輪を左手に持ちながら、契約を紡いだ。

「僕、エヴァは、万象の天使・エヴァンシェッドと契約する。僕がエヴァンシェッドの一部に戻ることと引き換えに、黒の一族のヒロに降りかかる全ての不幸を取り除き、幸せに導くことを約束するか？」

僕が固唾（かたず）を呑んで見つめる中、エヴァンシェッドは僕の言葉に息を一つすって答えた。

「約束しよう。」

エヴァンシェッドがそう言った瞬間に、手の中にある足跡（エンダー・ケルト）の指輪が光を放ち、僕の手から飛び出しエヴァンシェッドの右手の人差し指

に収まった。
あれはもう、エヴァンシェッドから二度と外れることはない。
体に力が入らないくらいほっとした。
これで、ひとまず安心だ。

契約は、絶対に守られる。

まあ、体に力が入らないのは其れだけが理由じゃなくて、僕の人生のクライマックスへのカウントダウンが始まったって言うのもあるけど。
自分の意識や力が吸い取られていくような感覚が僕を襲う。
契約どおり僕は、エヴァンシェッドの一部となるべく消えつつあるのだ。

その割には落ち着いている自分がいたが、ふと、周りを見回して、ラインディルトが呆然としているのが目に入り、その後ろの窓の向こうに動く人影が見えた。
何の意識もせずに視界に入ったその人影が、ふいに不自然な動きをして、僕は違和感を覚えた。

あれは・・・。

「どうかしたのか?」
目を凝らして外を見る僕の様子がおかしいのを感じたのか、エヴァンシェッドが僕に尋ねたが、僕はそれを無視してそれをよく見ようと、立ち上がり窓際にずんずん歩いた。
「おい、貴様!・・・おい、あれは・・・。」
突然の行動にラインディルトが僕の肩に手をかけ詰め寄った。
そして彼もその景色の異常さに気が付いたらしい。

だって、平和と平穏を体現させたような天近き城（フェデス・ジグロア）で、槍に貫かれている人の姿なんてありえない光景だ。

しかも、まさか槍に貫かれているその人物は・・・。

「ヒロちゃん！！！！」

悲鳴に似た絶叫を上げ、僕は窓を開け放ち、ラインディルトの静止も、何もかもを振り切って離れを飛び出しだ。

どうして？
どうして、ここにいるの？
そんな姿で！！！

第二十三話　死してなお君を守る　其の二（後書き）

急展開続くです。エヴァの正体にエヴァンシェッドとの関係など、色々一度に説明してしまったので分かりにくかったから、すいません。

ところで、エヴァがヒロをどうしてこれほど執着するかについて、疑問に思う部分もあるかもしれないですが、これについては他でまた詳しく書きたいと思っているのでご容赦ください。

第一部は次回で終る予定です。交わるヒロとエヴァの物語の行き着く先まで、お付き合い頂ければ幸いです。（ちなみにここでエヴァンシェッドを迎えにいった女性が、ヒロと話しているときにエヴァンシェッドを呼んだ女性です。）

第二十四話　流離いし翼の果て

私はいつも一番大切なものを守れない。
それどころか、大切なものはいつも私のために消えていくんだ。

エヴァ、私と一緒にいたいって言っただろう？
なのに、どうしてそんな目で私を見る。
なのに、どうしてそんな言葉で私に別れを告げる。

孤独な私を救ってくれたお前までいなくなったら、私は一人になってしまう。
本当は私の傍にエヴァがいたわけでなく、私がエヴァの傍にいたのだ。
私にこそエヴァと言う存在が必要だということを、お前は知っているのか、エヴァ？

だから傍にいてくれと、みっともなくエヴァに纏わり付こうとする自分の浅ましさも、醜さもわかっている。
それでも、それでエヴァが傍にいてくれるならと、私は手を伸ばしてもエヴァに手は届かない。

そして、エヴァは私に淡く微笑みながら白い光に還って行く。
私にはエヴァと出会った時と同じように、ただ一つ血に染まった純白の羽が残った。
それが無性に悲しくて、いとおしかった。

第二十四話　流離いし翼の果て

黒い影が言った。

「恨むなら、黒の掟を忘れた先祖を恨め。黒の武器(カシュケルノ)を天使にやるわけにはいかないからな。貴様には死んでもらう。知らぬことが罪なのだ。」

貫かれた腹部は焼けるように熱く、朦朧(もうろう)とする意識の中で、私は処刑宣告を聞いた。

霞(かす)む視界の中、黒いマントを頭から被った黒い影が、私の血で光る黒い槍を振り上げて、私にとどめを刺そうと動くのが見えた。

黒い影の動きには無駄がなく、スピードも速い。

しかし死ぬ間際だからか、何故だか私にはその動き全てがスローモーションのコマ送りのように見えた。

それでも熱を持った私の体は攻撃を受け止めることも、逃げることもできず、ただぼんやりと自分の上に落ちてくる凶器を眺めた。

ああ、これで終わりか。

そう思った瞬間だった。

『おい、テメェはそんなに諦めがいい人間だったかよ。』

頭の中にいやに柄の悪い声が聞えた。

『ったく。あんな天使の小難しい話なんぞ、大人しく聞いたりしてっから、あんな攻撃一つ避けきれねぇんだよ。情けねぇ。』

よく分からない一方的に罵倒(ばとう)されたというには、のんびりとした口調で罵(ののし)られながら、私は妙にその男の意見に納得してしまった。

確かに、自分の柄にもないことをして調子を狂わせているような気はしていた。

『・・・納得すんな。それに、これしきのかすり傷で弱音を吐くん

じゃねぇよ!』

・・・かすり傷というには、いささか大怪我なような気がするが。

『細けぇことはいいんだよ!大体よぉ。おめぇが今その手に持ってるのは何だよ?日傘か?そこらに落ちてる棒か?違うだろ?』

そうだ、とそこで天使の手から返されたばかりの自分の相棒を思い出した。

『このまま、何もしねぇまま、殺されるようなら、地獄に来たってあいつに叩き出されっからな。まあ、精々みっともなくあがけ。潔く死んでやるなんぞ、馬鹿のやることだぁ。お前は知ってるだろ、それが俺たちの掟だろ?』

あははははと、下品な笑い声が頭にガンガンと響いた。

五月蝿(うるさ)い声だし、言ってることはめちゃくちゃだし、これが誰の声なのかも私は全く分かっていなかった。

しかし、それは私を生き返らせる声であり、言葉だった。

それでも声は私をやる気にさせても、奇跡を起こすものじゃない。体は相変わらず熱くて苦しくて動かないから、正直この攻撃を避けるのは不可能だ。

ならば・・・と、私は振り下ろされる槍を睨みつけ、痛む体をおして手の中にある黒の剣(ローラレライ)を握り締めた。

幸いに刺されたところからあふれ出た血が、銀の刀身にはべったりと付いているはずだ。

「目覚めよ、黒の剣(ローラレライ)。」

呟く言葉は、息を吐く音に掻き消えるほど小さかったが黒の剣(ローラレライ)は私の言葉に呼応するように、手の中で熱くなるのを感じた。

私は頭の中で、黒の剣(ローラレライ)がロープのように伸びて、黒い影を貫く光景を描いた。

口と手は動かせても、剣を振り切ることができない私には手持ちの術で攻撃を避けることができない。
そんな私が咄嗟に思いついたのが、エンリッヒと戦った時のことだった。
あの時、黒の剣（ローラレライ）はロープのように伸び、エンリッヒを攻撃できたのだ、それなら今だってできるはずだ。

行け！
私は血の付いた手を、祈るように力の限り握り締めた。
黒の剣（ローラレライ）はそんな私に答えるように、大きく一つ胎動し黒い影を襲った。

「ほう。さすが黒の剣（カシュケルノ）の中でも一番最強と謳われた黒の剣（ローラレライ）。一瞬、ひやりとしたぞ。」

しかし黒の剣（ローラレライ）の攻撃が急襲したわりには、どこか楽しげで余裕のある黒い影の声が耳に飛び込む。
私の攻撃は黒の影にはかすりもしなかったのだ。
言い訳じゃないが、黒の剣（ローラレライ）は、私の描いたとおりの軌道を描き、黒い影に向かっていった。
しかし、相手の身体能力のほうが上だったというわけだ。
こいつ、槍を振り下ろしている途中だったにも関わらず、黒の剣（ローラレライ）が自分に向かって伸びてくるのを察知し、そして黒の剣（ローラレライ）まで距離１メートルとなったはずなのに、紙一重で攻撃を避けるという人間離れした動きを見せたのだ。

・・・普通なら、間違いなくクリーンヒットの完璧に意表をついた攻撃だったが、こうもあっさりと避けられてしまうと笑うしかない。
「マントもかすりもしない攻撃に・・・、光栄な言葉だ。」
「思ったより元気じゃないか。」

そう言う黒い影と私との距離は5メートル。
リーチの長い槍なら腕を伸ばせば届く距離。また、先ほどの黒の剣（ローラレライ）の攻撃でもまた届く距離だろう。
互いに互いとも、次の攻撃のタイミングを図るように見つめあい、駆け引きをする緊張感と体の熱さで喉がなる。

「急所を外したつもりはなかったが・・・、あの一瞬で避けたのか。大した反射神経だ。殺すには惜しい人材だな。」
最初の視界からの一撃。
確かに全く反応できていなかったが、急所を少しだけ避けることは何とかできた。
反射神経というには、あまりにお粗末な動物的本能に近い反応だったが、おかげで出血は多いが致命傷には至らないし、何とか意識は保っていられた。
「ふ・・・ん。この様でそんな事いわれても、嬉かないわ。」
「謙遜（けんそん）するな。それに先ほどの黒の剣（ローラレライ）の攻撃。あれほどまでに思い通りに動かすことができるとは・・・、一体何を掛けた？」
一瞬マントの下から見えた眼光が、私を貫く。

その言葉に呼応するように思い出される、生々しい黒の剣（ローラレライ）を介して伝わる誰かを刺した感触。

「・・・関係ないだろ。」
私に言えるのは、それだけだった。
黒い影の口元が皮肉そうに歪（ゆが）められる。
「確かに、最もな意見だな。では、余計な話はこれくらいにしてそろそろ終らせてもらおう。先ほどのようなことは二度はない。これで決めさせーーーーっ。」

そしてマントの下に見える眼光に殺気が浮かんだ刹那（せつな）、黒い影を取

り囲む天使たちが私と彼の間を遮った。

「ヒロさん、応援呼ぶ時間を稼いでいただいてご苦労さんです。おかげでサンタマリア様を安全なところまで、連れて行けましたわ。それにしても、いやはや、前とは逆の光景ですな。」

黒の影を取り囲んだのは、ずらりと二十は下らない武装した天空騎士団（アイッシュ・グランド）。

緊張感のない声と笑顔のエンリッヒが、瀕死に近い私を面白そうに見下ろした。

恐らく、エンリッヒが言っているの『前』とは、一ヶ月前の戦いのことを言っているのだろうが、相変わらず嫌味な男である。

「言ってろ・・・。たく、死ぬかとおも・・・？」

とりあえず、助かったと息を吐いた私は何かが聞えた気がして言葉を止めた。

『さあ、パーティの始まりだ。』

誰かが笑った。

しかし、それが誰の声なのか問いかける余裕はなかった。

「ヒロちゃん！！」

何故なら、ここにいるはずのない声が私を呼んだことで、私が混乱したからだ。

エンリッヒもその声に反応して驚いたように、声の主を私と振り返った。

「あらぁ、エヴァさんやないの。」

表情とは裏腹に驚いているとは思えないような口調で、エンリッヒはエヴァに手を振る。

しかし、エヴァはエンリッヒなど眼中になく、私から視線をはずさないまま一目散に走って、私に詰め寄った。

「どうしてここにいるの？なんでそんな血まみれなわけ？！」
いきなり現れて耳元で喚くエヴァは私の幻覚ではない。
その思いがけない展開に、私は目を白黒させるしかない。
「ど・・・て、おまえこそ、どうして？」
一瞬、ハクアリティスと共に天使にでも捕まったのかとも思ったが、
一ヶ月ぶりのエヴァは、私の情けない姿に動揺しているようだが、
外傷は見当たらない。
むしろ、前より小奇麗になっているくらいだ。
私のように、拷問されたりということで、ここにいるようには見えない。
では、どうして、ここにエヴァがいる？

「僕のことはいいよ！そんな大怪我して！！ヒロちゃんは馬鹿じゃないの？！」
エヴァは血まみれの私を見て酷く動揺し、興奮してまともに話すことができる様子ではない・
ここはとりあえず、互いに落ち着かなければなるまい。
怪我は命に別状あるものじゃないことを示すため、そして私自身も落ち着くために、私は息を一つ吸って、微笑んでエヴァの肩をぽんぽんと叩いた。
腕を上がるだけでも、体が痛んだ。
「馬鹿とかいうな。私の怪我は大した事ない。それよりお前のことが、私にとってどうでもいいはずないだろ？ちゃんと説明しろ。どうしてここにいるんだ？ハクアリティスはどうした？」
なるべくいつもと変わらぬ様子でエヴァに接すると同時に、黒の影の様子にも視線を走らせた。
天使たちは皆で黒い影を取り囲んで、緊張状態を保っている。
天使たちの戦闘能力を疑っているわけではないが、ここを早く離れたほうがいいと本能が呟いている。
動けない私は仕方ないとして、何とかしてエヴァだけでも逃がせな

いものかと、頭をフル回転させるが出血が多くていまいち考えがまとまらない。

しかし、そんな私を見つめるエヴァは私の質問に答えることなく、じっと私を見ている。
その視線に僅かな違和感を感じた。
「エヴァ？」
「なあに、ヒロちゃん。」
笑うエヴァの姿が、ふいに揺らいだ気がした。
見たことがないほど、淡くて消えてしまいそうな微笑みに胸が騒いだ。

どうして、そんな風に笑うんだ？

そして、不安になった私の目にあの純白の片翼が見えた。
幻ではない。
「あ・・・。」
私は小さく声を漏らす。

「な、エ、エヴァンシェッド様！どなして、こんなところに・・？！いや、それよりお逃げください！あの黒助、多分ここ最近の天使殺しの下手人ですわ。」
呆然とする私に気が付かずエンリッヒが、片翼の美しい天使を認めて慌てたように声を上げた。
だが、あの片翼の天使は笑ってエンリッヒの指示をかわしながら、私とエヴァを見下ろすところまでやってきた。
『不浄の大地（ディス・エンガッド）の何処かには、どんな願いも叶えてくれるという白い翼が眠っている。』

「だ・・・駄目だ。エ・・・エヴァ、逃げろ。」
震える声で、私はあの言葉を使った。
まだ間に合う。

『神と契約を交わした天使を妬んだ悪魔が、剣で切り落とした翼。(エヴァ)
それは眩しいほどの純白で、見るもの全てを魅了するという。』

でも、エヴァは私に消えそうな笑みを浮かべたまま、首を横に振った。
「ごめんね、ヒロちゃん。」

『ふーん。それで、翼を失った天使はどうなったんだ?』
『いやいや、普通聞くのは、そこじゃないだろ?普通はその翼はどこにあるの?と可愛らしく聞くもんだろ?』

「僕は還る事にしたんだ。ヒロちゃん、知ってるんでしょ?」

『まあ、いい。翼を失った天使は空を飛べなくなり、飛べない翼の天使(エヴァンシェツド)と呼ばれるようになった。』

「知らない!」
私は力いっぱい首を振った。
体はその動きに悲鳴を上げたが、そんなこと気にならなかった。
知らない、知らない、知らない。
私は知らない!

エヴァが・・・・・
「僕がエヴァンシェッドの翼だってこと・・・・。」

私の記憶の中にある、不浄の大地(ディス・エンガッド)の乾いた大地に、黒い鎖で繋がれ

ていた白い翼。
これが幼い頃に聞いた事のある伝説の白い翼に違いないと思った過去の私は、白い翼に願いをかけた。

「ああ・・・。」
エヴァは全部知っているのだと、私が今まで隠してきたことを全て思い出したのだと、エヴァの言葉により理解させられた。
思い出せば私の元からエヴァが戻ること、私が止めてもエヴァが戻ってしまうことは分かっていた。
だから、エヴァには絶対思い出して欲しくなかった。
だって、私はずっとエヴァに何も教えないという、卑怯な手でエヴァを手元においていた。
そんな浅ましく醜い自分を知られたくなかったから、思い出して欲しくなかった。

そんな自分を見られたくないのと同時に、エヴァが下した決断を直視したくなくて、私は項垂(うなだ)れてエヴァから視線を外した。
だが、エヴァはそれを許さなかった。
「ヒロちゃん。僕を見て。」
そんな私の肩を抱いてエヴァは、優しく私の名前を呼んだ。
それはいつもエヴァが取り乱したり元気がないときに、私がしてやった動作そのものだった。
私はエヴァを見た。
エヴァは私と目があうとゆっくり話し出した。

「僕はエヴァンシェッドの中に還る。これは決まっていたことなんだ。でもね、少しの間でも僕はエヴァとして生きることができた。これは本当に奇跡みたいにすごいことで、僕にとっては、本当に大切な大切な時間だったよ。」

サンタマリアのように私の心を読んだわけでもないのに、どうして、そんなことを今言うんだ。

「まあ、不浄の大地（ディス・エンガッド）の生活なんて碌（ろく）なもんじゃないし、ヒロちゃんは細かくて厳しいし、いちいち僕のこと叩くし、何しても怒るしさ・・・。やんなっちゃうことも、何度だってあったよ。」

もう、なるべく細かいことも、厳しいことも言わないようにする。叩く回数も減らすさ。

「でも、でもね。僕にはそんな事だって、とっても大切な毎日だったって、今なら思えるよ。」

馬鹿いうなよ。
楽しいのはこれからだろ？

「どんなときでも、ヒロちゃんがいてくれたから。僕にはそれだけで幸せだったんだ。」

これからだって、一緒にいるだろ？
そんな涙を流しながら笑って言うことじゃない。

「僕はエヴァンシェッドの中に還る。でもね、ヒロちゃんのことをずっと見守ってるよ。ずっと一緒にいる。だから・・・。」

だから、なんだよ？
どうして、エヴァの体が透けて見えるんだ！

「行くな、エヴァッ！」

体が透けるエヴァは、白い光に包まれて今にも消えそうだった。
そんなエヴァを少しでも引き止めておきたくて、痛みを忘れた体で私はエヴァに手を伸ばした。
だが、無常にも手はエヴァをすり抜けて私は地面にまた倒れこんだ。
地面に顔を突っ伏しながら、私は目を強く閉じ、拳を握り、悔しさや悲しさに震えた。
もうエヴァに手も届かない。

「ウワッ！」
倒れこんだ私の耳に、誰かが叫びを上げる声がした。
「黒助！何やっとるん、取り押さえんかい！！エヴァンシェッド様、お逃げください！ヒロさん、起き上がってぇな！」
断続的な叫びと剣戟（けんげき）、エンリッヒの焦った声が聞えた。
強い殺気が近づくのを感じた。

でも、私は動かなかった。
エヴァがいなくなるなら、死んでいもいい。
そんな風に思った。

倒れこんだまま震える私の頭を誰かが優しく撫でて、耳元でそっと呟いた。
「大好きだよ、ヒロちゃん。ずっとずっと、傍にいるから。生きていて。僕のこと・・・、忘れないでね。」
今にも消えそうだが、優しい声だった。
「・・・エヴァッ！」
その声にはっとして、起き上がった先にエヴァはいなかった。

代わりにあったのは、美しい純白の世界。
頭の中でなり続ける、あの羽音。
見（まみ）える白と黒。

全て3年前と同じ情景に眩暈がした。

「エヴァンシェッド様！」

「やめろ！攻撃するな、エヴァンシェッド様に当たる！！」

そこにいたのはエヴァを全て自分の中に戻し、もう片翼ではなくなったエヴァンシェッドと天使たちを振り切って私を殺そうとする黒の影。

私が見上げる先で互いに白と黒の武器を交わらせ、それを天使たちが囲いこんでいた。

「万象の天使ともあろうお方が、まさか黒の一族をかばうとは・・・、下手な冗談は止めてもらおうか。」

黒い影が低く唸るように言った。

確かにそうだ。私もその理由が全く分からなかった。

「冗談で片付けられればいいが、事実だよ。黒の一族の末裔よ。」

私に背を向けているエヴァンシェッドの表情は窺えないが、その声には黒の一族を前にした天使たちが発していたような緊張はない。

「まあ、俺のことはこの際良いだろう？それより、君は少々おイタが過ぎた。」

まるで悪戯をした子供に言い聞かせるような声音だった。

はためく翼から、抜け落ちた羽が呆然と二人を見上げる私に降り注ぎ、私から二人の姿を隠した。

「白き力は全てを制する力なり。」

鈴が鳴るような声が、肌を切り裂くほどに研ぎ澄まされた氷のように色を変えた。

「グハッ、ガッ・・・ア・・・ギャァーーーーッ！」

純白のはねに覆われた視界の中、ただ耳が痛くなるほどの黒い断末魔が天近き城（フェデス・ジグロア）に木霊した。

エヴァがあの天使の翼になったというなら、この羽はエヴァそのもの。

それが今私を何もかもから守るように、私の全てを白で覆い隠そうとしているように思えて切なくなった。

そして雪のように降る白い羽が、地に堕ち、溢れでた私の血に触れ赤く染め上がる。

その様が何故だかどんなに私が白い羽に守られようと、決して血に穢れた自分が許されるはずもないといっているような気がして笑えた。

白い景色が次第に晴れ目に映る、黒い影は血に染まり、白き羽に覆われていた。

ふいにそれが自分の姿を重なった。

にも関らず、私はその光景を泣き笑いの顔で見ていた。

色々な感情があふれ出して、制御できない自分を感じた。

私は今どんな顔をするのが相応しい？

エヴァを身に戻したエヴァンシェッドをどんな顔をして見れば、エヴァは喜ぶ？私は救われる？

混乱する私を白い翼が再び全て覆った。

「ヒロちゃん？」

エヴァと同じ言葉を、エヴァとは全く違う声が私の名を呼んだ。

「ヒロちゃんて、呼ぶな。」

違うと分かっていても、私はいつもと同じように返した。

返ってくる言葉が、いつものエヴァと同じであるという期待を抱いて・・・。

「じゃあ、何と呼べばいい？」
しかし、返ってきたのはいつもと違う言葉、声、姿。

ああ、本当にいなくなってしまった。
「ヒロと呼び捨ててくれればいい。」
涙はもう出なかった。
だが心は慟哭の叫びを上げ続け、血の涙を流し続け、ただエヴァを求め続けていた。

エヴァ、エヴァ、エヴァ。
そう何度心で名を呼んでも、私の目の前には美しすぎる天使しかいない。
それがもう、死ぬほど辛くて、悲しくて絶望しているはずなのに、現実の私は泣くことも、声を上げることも、エヴァを求める言葉もいえない。

私の中で何かが死に、何かが終った音がした。
この時の私には、それが全てだった。

だから気が付かなかった。

私を見つめる美しき天使が胸に秘めたエヴァとの契約も、
倒れる黒い影の正体も、
私に力を貸して欲しいといったサンタマリアの目的も、
ここにいないハクアリティスの行方と思惑も、

全て終ったわけじゃない。
今、全てが始まろうとしていたことを、私は気付きこうともしなかったのだ。

第一部　流離う翼編　完

第二十四話　流離いし翼の果て（後書き）

第一部流離う翼編、無事終幕となりました。ここまでお付き合いしてくれた方がおりましたら、本当にありがとうございました！
もしよろしければ、一言でもいいので感想等を戴けると、とても嬉しいです。今後の励みにします。

さて、第一部について少し。
謎ばかりが残る終わり方となったんですが、実は第一部は本当に導入部分なので、話の本題はこれから・・・ということになってます。これからどろどろの愛憎劇を予定しておりますので（笑）、今まで恋愛要素は０に等しかったのですが、今後は少しは期待していてください。

最後に、あらすじと登場人物の説明を、同時にアップしております。これを読むと、第一部も少しは全体像が分かりやすくなるかと思もうので、もしよく分からないようでしたら参照してください。最後に第二部の予告もあります。興味がある方はどうぞ。

■　第一部　あらすじ・登場人物・用語（前書き）

ここは第一部流離う翼編のネタバレを含みます。
第一部を読まれてから、読まれることををお勧めします。

■ 第一部　あらすじ・登場人物・用語

【第一部　流離う翼編　あらすじ】

東方の楽園（サフィラ・アイリス）は、遥か昔、人間たちによって起こされた醜悪（しゅうあく）なる千年戦争に、怒った白き神イヌス・ニルヴァーナが遣わした天使によって下された粛清・終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告により、生命の育たぬ不浄の大地（ディス・エンガッド）に覆われた世界。

終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告が下って千年の時が流れても神の怒りは収まらず、不浄（ディス）の大地（・エンガッド）に生きる人々はアーシアンと呼ばれ、千年戦争をおこした大罪人として天使たちに支配され続け、不浄（ディス・エンガッド）の大地にて常に死と隣り合わせの毎日を送っていた。

アーシアンの中で流離人（さすらいびと）と呼ばれる今はもう数少ない、不浄（ディス・エンガッド）の大地の死の大地を旅する一族の生き残りヒロは、3年前ヒロと出会う以前のことは覚えていないという同行者エヴァと共に、一族の掟に従い不浄（ディス・エンガッド）の大地を、危険な目にあいながらも、何処とも目的を定めずに旅を続けていた。

そんな毎日の中、ある日久々に怪物豚（かいぶつぶた）というご馳走にありつく事ができた夜のこと。不浄（ディス・エンガッド）の大地で野宿する二人の下に、お腹をすかせて遭難していた美しい女性が現れた。

ヒロはハクアリティスと名乗ったその女性を助けることにする。その女性は何とエンディミアンであり、天使の花嫁だったが、その天使から逃げ出すために天使の領域（フィリアラディアス）から脱走してきたというのだ。

天使の領域（フィリアラディアス）とは、この世界で唯一終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告を免れた天使たちの住まう街であり、エンディミアンとは天使たちに従ったことで、アーシアンとは違い天使の領域（フィリアラ・ディアス）に住まうことを許された人間たちのことであった。しかし、それ故彼らは穢れである不浄（ディス・エンガッド）の大地に降りるこ

とは許されていないはずであった。（第一話〜第四話）

ハクアリティスの本気を見て取ったヒロは、反対するエヴァを押し切って次の街までハクアリティスを送っていくことにしたが、次の街・アルヴァーナの街まであと少しというところで、ハクアリティスを追ってきた天使・エンリッヒに急襲される。

世界で唯一武装を許された天空騎士団（アイッシュグランド）の副師団長という天使の強さは本物で、防戦一方のヒロは窮地を脱するためにも、エヴァとハクアリティスの二人を魔法の指輪だという足跡の指輪（エンダー・ケルト）を使い、その場から瞬間移動させ二人を逃がし、自身は黒の剣（ローラレライ）という不思議な力を持つ剣を使い何とかエンリッヒを退けることに成功するが、後からやってきた天使たちにあっさりと捕まってしまう。（第五話〜第八話）

一方、ヒロに半ば無理やり逃げさせられたエヴァとハクアリティスは、ヒロが指定したサヴィラ街ではなく、天使の領域（フィリアラディアス）が間近にある不浄の大地（ディス・エンガッド）唯一の天使が管理する街・懺悔の街に移動させられていた。

懺悔の街は、天使とエンディミアンがアーシアンを使役することで罪を償えるとして、アーシアンをもはや奴隷同然に扱うという街であった。

ヒロと合流するために乗り物を調達しようと街の中に入る二人だったが、ハクアリティスが天使の花嫁であると知る謎のアーシアンたちによって拉致監禁される二人。その監禁された中でエヴァはヒロの行方を知るアラシという男と会う。（第九話〜第十一話）

天使に捕まったヒロは、そのまま天使の領域（フィリアラディアス）の中にある広大な地下監獄・断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）で天使たちから拷問を受け続けていた。

そん中、牢が近い女性ミシアから黒の雷（オルヴァラ）というアーシアン解放軍の話や、ハクアリティスが実は天使長・万象の天使の妻であるという

事実を聞いて驚く。
そして監獄から脱出する術が見つからないまま一ヶ月という時が過ぎたある日、ヒロは人体実験を繰り返すという噂のある狂った科学者（マッドサイエンティスト・ドクター）・Ｄｒパルマドール（エヴィラ・アメンド）の手により、断罪の牢獄から出ることとなった。
（第十二話～第十三話）

Ｄｒ（ドクター）パルマドールに連れられてきたのは、白き神（イア・ルマンヌ）の御許の中にある彼が主たる生態兵器研究所。ヒロはそこで自分が持つ黒の剣（ローラレライ）のことを聞かれ、ヒロに殴られたことにより激昂したＤｒ（ドクター）パルマドールが差し向けた、アーシアンを人体実験した結果である魔人（ベルトゥール）に襲われる。ヒロはそれを避け、非道を尽くすＤｒ（ドクター）パルマドールを殺そうとしたところを、かつて自分を襲ったエンリッヒとシャオンという天使にそれを遮られる。
（第十四話～第十七話）

生態研究所からエンリッヒの実家に連れ込まれたヒロは、変装と称した女装をさせられ最高位の天使たちの居城・天近き城（フェデス・ジグロア）を訪れる。エンリッヒたちには会わせたい人がいるといわれていたが、その途中で一人残されたヒロは美貌の片翼の天使・エヴァンシェッドに出会い。胸を騒ぐのを感じたが、その場は気にしないことにする。
その後、戻ってきた二人に連れられた先にいたのは三大天使が一人、明海の天使・サンタマリア。彼女は盲目であるが、人の心を読めるといってヒロを動揺させた。彼女はヒロに黒の剣（ローラレライ）を返し、これが黒（カ）の武器という神殺し（シュケルノ）の黒き神の力の源であり、ヒロと黒の剣（ローラレライ）に力を貸して欲しいと願い出た。
ヒロはそれを保留しようとしたところを、突如現れた黒い影に腹部を貫かれて重症を負う。
（第十八話～第二十一話）

ヒロと会えないまま時間がたつばかりでイライラしていたエヴァであるが、そんな彼とハクアリティスの元に、エンシッダと呼ばれるエンディミアンらしき人物が訪れ、ハクアリティスが喜ぶ様子にエ

ヴァはハクアリティスの脱走劇が狂言であることを知り、彼女が夫の気を引くためにこれを計画したことに怒った。
しかし、アラシにそれを押さえつけられたまま、エヴァは一人エンシッダに拉致監禁された場所から外に出される。そしてエンシッダとの会話の中で、エヴァは今まで思い出すこともなった自分の事を全て思い出し、還るべき場所に戻ることを決めた。（第二十二話）

エンシッダに連れられるまま、天近き城（フェデス・ジグロア）に訪れたエヴァは三大天使が一人、大地の天使・ラインディルトに引き渡され、そしてエヴァの戻るべき場所である天使長、万象の天使・エヴァンシェッドに見えることとなる。
エヴァは最果ての渓谷（ロシギュナス）の戦いの際に、エヴァンシェッドが黒の剣（ローラレライ）によって切り落とされ、封印され続けられていた彼の片翼であったのだ。
エヴァは自分が再び彼の翼として戻る代わりに、ヒロを助けて守るという契約をエヴァンシェッドを結ぶが、その時ヒロが黒の影に刺されいる場面を目にして、そこに駆け出す。（第二十三話）

ヒロは何とか黒い影のとどめの一撃を黒の剣（ローラレライ）によって退けることに成功し、サンタマリアを逃がし、応援をよんだエンリッヒたちに助けられ窮地を脱する。
しかし、そこに現れたエヴァとエヴァンシェッドを見て取り乱すヒロ。ヒロはエヴァの正体もエヴァンシェッドとの関係も知っていたのだ。
しかし、エヴァは逃げろというヒロの言葉を聞かず、ヒロに今までの謝罪と感謝、そしてヒロへの気持ちを残してエヴァンシェッドの翼に戻る。
完全なる力を取り戻したエヴァンシェッドは、契約の通り襲い来る黒い影からヒロを守る。

ヒロはエヴァを失った失意を胸に秘めたまま、エヴァンシェッドのとった行動に混乱するのであった。　（第二十四話）

【登場人物】

ヒロ（アーシアン）
流離人と言われる何処にも定住せず放浪し続ける一族らしいが、自身も今は亡き家族しか同族に出会ったことはないらしい。
しかし、黒の剣（ローラレライ）など普通の人間が持っているはずのない不思議な力を持つ道具などを、先祖から受け継いでおり、本人は知らなかったようだが、サンタマリアの話から自分が黒き神に忠誠を誓った黒の一族であることを知る。
黒髪・黒い瞳を持ち、いつも憮然とした表情の裏で、悶々と色々悩み多き苦労人で、女子供など、自分より弱いものは放っておけないお人好しな性格。

エヴァンシェッド（天使）
天使一族の中の長・万象の天使。銀髪、紫の瞳の絶世の美男子で純白の翼を持つ。
しかし、最果て（ロシギュナス）の渓谷の戦いの際に、黒の一族によって翼の一つを切り落とされ、長きに渡り失い続けていたが、ヒロの同行者であったエヴァがその翼を具現化した姿であったために、再び元の姿を取り戻すこととなった。
片翼であったために飛べない翼の天使と呼ばれ続けているが（エヴァンシェッド）、本当の名は別にある。
その翼であったエヴァは感情豊かで子供な性格であったが、本体であるエヴァンシェッドは優しげな様子をしているが、底知れない恐ろしさを感じさせる部分も併せ持つ。

エヴァとヒロを守る契約を結ぶ。

サンタマリア（天使）
三大天使の一人、明海の天使。生まれつき目が見ず、変わりに心の中を見る能力を持つ。
蒼い翼を持ち、背は高く、長い紫がかった髪に、瞳は常に閉じられている三大天使という名のわりには、ヒロは普通な容姿だと感じている。
黒の武器（カシュケルノ）をもつヒロに、天使に力を貸すように頼む。

ラインディルト（天使）
三大天使の一人、大地の天使。本編に描写はないが、赤い翼に、赤髪、黄色の目を持つ知的な美男子。
また、天使一族の総意を決める機関・世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）により、エンディミアンの管理を任されている人物。Ｄｒ（ドクター）パルマドールの魔人研究（ベルトゥール）などとも関係が噂される。

エンリッヒ（天使）
天空騎士団（アイッシュ・グランド）第一師団、副師団長の肩書きを持つ大鎌を操る。
アッシュグレイのつんつん頭に、青の瞳、青みがかった翼を持つ天使だが、その服装は奇抜で妙なしゃべり方をし、いつも気味の悪い笑みを浮かべているため、ヒロには悪魔のような天使と称されている。
Ｄｒ（ドクター）パルマドールに何か思い入れがあるようだが、それはまだ分からない。
両親と十二人の弟と妹がいるらしいが、現在実家に残っているのは下から5人の子供たちだけで、後はエンリッヒを始め皆独立している。

シャオン（天使）

エンリッヒと同じく、天空騎士団（アイッシュ・グランド）第一師団に所属している。
ヒロの持つ天使に対する清廉なイメージを壊した人物で、妖艶で豊満な体を持つらしいが、あまり詳しく描写すると彼女に訴えられるので、ご想像にお任せする。
ただ、赤い翼を持つことだけは第十八話より察することができる。

ハクアリティス（エンディミアン）
ヒロを巻き込んだ発端となったエンディミアンの女性。
『天使の花嫁』と呼ばれるエヴァンシェッドの妻であり、契約者であるために人間ながら７００年も生き続けている。
彼女の脱走劇は実は天使から逃げ出したいわけではなく、夫エヴァンシェッドの気を引くためだったことは分かっているが、今後どのような動きをするかは未知数。その身は黒の雷（オルヴァラ）に捕らわれたままである。

アラシ（アーシアン）
黒の雷（オルヴァラ）のリーダーの若者。独身。エヴァ曰く、毛むくじゃらの熊男。
アーシアンの解放のために戦っているらしいが、エンディミアンであるエンシッダに傅（かしず）き、ハクアリティスを人質としてではなく、客人として扱っているなど、彼の行動には謎が残る。また、ヒロにどうしても聞きたい事というのも、今だ謎のままである。

Ｄｒ（ドクター）パルマドール（エンディミアン）
生態兵器を専門とする狂った科学者（マッドサイエンティスト）と噂される人物。
アーシアンを人体実験した結果、生態兵器魔人（ベルトゥール）の研究進める人物。
相当な変人で、『ちみは、ちみは馬鹿だね！』などと、君の事を『ちみ』といったり、何度も言葉を繰り返す口癖がある。

エンシッダ（エンディミアン）
好青年という言葉をそのまま体現させたような人物だが、エヴァは

その姿があまりに嘘っぽいために彼の冷たい裏の顔も垣間見るなど、大きな二面性を持つ人物。

黒の雷のアラシと接触しているかと思えば、三大天使ラインディルトと接触があるという謎の多きエンディミアン。

黒い影（黒の一族）

本編ではほとんどまだ語られていない人物。

ヒロはその言動から、恐らく同じ黒の一族ではないかと検討をつけている。黒の武器らしき、黒く染め上げられた槍を持ち、ヒロが人間離れしていると称するほどの身体能力を持つ。

サンタマリアが話していた、ここ最近天使の領域で起きている天使殺しの下手人ではないかと目されているが、何故ヒロを襲ったのか、はたまたどうやって天近き城に入り込んだかなど、謎が多く残る人物。

【地名・建物】

東方の楽園＜サフィラ・アイリス＞

かつてはその名の如く美しい楽園のような大地だったが、千年前終焉の宣告により死の世界へと姿を変えた。

不浄の大地＜ディス・エンガッド＞

東方の楽園のほとんどを占める生命の育たない、岩と砂しかない死の荒野。

天使の領域＜フィリアラディアス＞

死の世界である東方の楽園に残った、天使たちが住まう最後の楽園。

高い白壁に覆われ外からはその中は何も分からない。

守護天使（ガルバチュア）の白壁
天使の領域（フィリアラディアス）を囲む、天高く聳（そび）える白壁。

白き神の御許＜イア・ルマンヌ＞
天使の領域（フィリアラディアス）にある、天使の超高層都市。

天近き城＜フェデス・ジグロア＞
白き神（イア・ルマンヌ）の御許の最上部にある天使たちの城。天使の中でも、最高位の天使たちが住まう。

断罪の牢獄＜エヴィラ・アメンド＞
天使の領域（フィリアラディアス）の巨大な地下牢獄。

生態兵器研究所
エンディミアンの狂った科学者（マッドサイエンティストドクター）Ｄｒパルマドールが所長を務める、白き神（イア・ルマンヌ）の御許の下層部分にある魔人研究（ベルトゥール）が行われている不気味な研究所。

懺悔（ざんげ）の街
天使の領域（フィリアラ・ディアス）のすぐ傍にある、不浄の大地（ディス・エンガッド）で唯一の天使と人間が混在する街。人間たちが天使に罪を懺悔（ざんげ）するためにある街とされている。

西方の魔境＜シェストリア＞
世界の果て（レドヴァガンナ）によって交流はないが、東方の楽園（サフィラ・アイリス）と隣り合わせにあるとされる、別の大地。

世界の果て＜レドヴァガンナ＞
幾重にも重なりあう大地を区切ると言われる強固なる結界。

【神】

白き神＜イヌス・ニルヴァーナ＞
最高神の片割れ。次々に黒き神によって神が殺されることに危機感を覚え、天使たちに力を与えたとされている女神。
現在は、東方の楽園（サフィラ・アイリス）の唯一神とされている。

黒き神＜ウ・ダイ＞
最高神の片割れ。その昔、世界に不干渉の掟をやぶり、人間たちに力を与えたために千年戦争の切っ掛けをつくり、その後、神々を殺して回るという凶行に走ったが、終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告により力を奪われ、白き神に封印された。
現在は、その姿どころか、その名すら語られていない。

【種族】

天使
色とりどりの翼を持ち、魔力を秘めた一族。不老不死をもつ。
世界の唯一神である白き神に東方の楽園（サフィラ・アイリス）の統治を任され、人間たちを支配している。
長・万象の天使、三大天使を中心として天使の領域（フィリアラディアス）の中にすまい、その存在は不浄の大地（ディス・エンガッド）に住む人間たちには、謎多き種族。

エンディミアン
千年前戦いに明け暮れていたが、白き神に許しを請い、天使たちに保護された人間の総称。人間でありながら天使の領域（フィリアラディアス）に住む。

アーシアン
千年前、白き神に従わず戦うことを止めなかったために、天使たち

に粛清を下された罪深き人間とされる、不浄の大地（ディス・エンガッド）に生きる人間の総称。

黒の一族
黒き神に、その力の象徴である黒の武器（カシュケルノ）を与えられた七人の人間たち、又その末裔の総称。黒き神を封印し、自分たちを西方の魔境（シェストリア）に追いやった天使たちを恨んでいるとされている。

流離人（さすらいびと）
アーシアンの中で定住せずに不浄の大地（ディス・エンガッド）を放浪し続ける少数種族だが、今はその名が残るのみで、その存在はほとんど確認されていない。
しかし、サンタマリアの話によると、西方の魔境（シェストリア）を脱出して、東方（サフィラ・アイリス）の楽園にたどり着くことができた黒の一族の末裔らしい。

【歴史的な用語】

終焉の宣告＜ディルト・ヴェネス＞
戦いに明け暮れた人間たちに怒った白き神が、万象の天使を使って人間に下した粛清。東方の楽園（サフィラ・アイリス）を一瞬にして死の世界に変えたといわれる。
しかし、サンタマリアの話によると、その実は神殺しである黒き神の一党を、滅するための最終手段だったらしい。

千年戦争
実際千年もの間、戦争が続いていたかは定かではないが、それぐらい長きに渡り続いた人間同士の戦争。終焉の宣告（ディルト・ヴェネス）により終わったとされ、アーシアンたちの罪の象徴のような戦争。
サンタマリアの話によると、その裏には、神々の戦いも関わってい

たらしい。

最果て（ロシギュナス）の渓谷の戦い
歴史的には謎が多い戦いとされているが、その実は、天使が唯一出兵したといわれる、天使と黒の神一党との戦いだった。

【その他の用語】

天空騎士団＜アイッシュグランド＞
東方の楽園（サフィラアイリス）で、唯一神に武装を許された天使たちの武装集団。

黒の武器＜カシュケルノ＞
一見すると普通の武器と変わりないが、血で濡らしたり、言霊を唱えることで、その姿を黒く変え、魔力を使うことができる。その力は、黒の一族しか使うことができず、黒き神の力の象徴。
ヒロが持つ黒の剣（ローラレライ）もその一つ。

魔人＜ベルトゥール＞
エンディミアン、Ｄｒ（ドクター）パルマドールが発案したといわれる、人間の人体実験のなれの果て。人間では考えられないような力を持つ。

黒の雷＜オルヴァラ＞
アーシアンを解放するために活動しているらしいレジスタンス。

こんな所まで読んでくれた方だけに（笑）

【第二部予告】

黒い影によって重傷を負ったヒロは、理由も分からないまま天近き城（フェデス・ジグロア）で手厚い看護を受け、エヴァを失った悲しみと、本人の意思とは関わらず『エヴァンシェッドの男の愛人』などと囁かれることに堪えられなくなり、天使の領域（フィリアラディアス）からの脱出を図ろうとする。

脱出する途中で出会ったのは、黒の雷（オルヴァラ）のリーダー・アラシ。

彼との出会いが、ヒロを天使たちの間で垣間見える陰謀と愛憎に巻き込み、そして東方の楽園（サフィラ・アイリス）の全てが恐怖に陥る大きな戦いの引き金となろうとしていた。

「全部、忘れられればいいのにな。」

「黒き神の力が増しておる。我らも戦いに備えねばならぬ。」

「自殺やと？馬鹿いうな！」

「何を犠牲にしてもいい、力が欲しい！」

「エヴァ、私はどうすればいい？」

（以上、第二部予告ですが、あくまで未定なので話は若干変わるかもしれないです。ここまで見ていただいてありがとうございました！では、第二部でお会いしましょう。）

第二十五話　始まりは真夜中の狂気（前書き）

【注意】

第二十五話には一部、残酷な描写、流血表現がありますのでご注意ください。

第二十五話　始まりは真夜中の狂気

俺は真夜中の散歩が好きだ。
昼の太陽の暖かな光よりも、月の静かな光の冷たさがいとおしい。

「ふんふんふん。」

特に今日みたいな月の光が、特に細い日は言うことがない。
俺は鼻歌交じりで、スキップでもしてしまいそうなほど軽やかな足取りで真夜中の散歩を楽しんでいた。
自分でも上手くないという自覚がある、相当調子の外れた鼻歌。
普段は鼻歌なんて歌うのは柄じゃないが、今日は特別だ。

だって、今日は俺が待ちに待った日だったから。
気分は最高にハッピーだ。
今からしなくちゃいけない面倒な仕事だって、全く苦にならなかった。

薄い月明かりに浮かぶ俺の影が、にやりと口元を歪めのが見えた。

第二十五話　始まりは真夜中の狂気

暗くて、じめじめと湿気が多い感じがする空気の中を進む。
足元を照らすものは、うっすらとした月明かりだけ。
生きるもの全てが死に絶えてしまったように静かな夜。
吐息すらも漏らすことを躊躇（とまど）う夜の暗闇の中を、俺は鼻歌を歌いながら闊歩（かっぽ）する。

真夜中の暗闇は俺の領域、誰も侵すことのない絶対の空間なのだ。
だから、俺に話しかける人も誰もおらず、俺は一人、鼻歌を歌い、スキップをして、笑みを浮かべながら闇夜を歩く。

「ふんふんふふん。」

気が付くと僕の手には、闇の中で鈍く光るナイフがあった。
ああ、そういえば、ずっと手の中にあったような気もするし、突然魔法のように手の中に現れたような気もする。
何だか妙に浮かれている俺は、頭の中がふわふわとしていて現実と夢の境界が曖昧（あいまい）になっているのだ。

でも、そんなことは、どうでもいい。
俺は手の中のナイフを、まるでお手玉で遊ぶように上に放り投げてキャッチした。
ナイフは手から離れると、月明かりを反射しながらくるくると回転する。
なんだかそんな様子が面白くて、何度も何度もそれを繰り返した。
自分では確認できないが俺の目には闇の中に浮かび上がる、危険で鈍い光がぎらぎらと瞬（またた）いていることだろう。
きっと空に浮かぶ星の瞬（またた）きより、よほど刺激的で甘美な匂いがすることだろう。
そんなナイフの放つ光をじっと見ているだけで、ぞくぞくと背中を快感が駆け上がる。

ああ、堪らない。
ほうと、一つ生暖かい息を吐いた。

そして、しばらく危うい手元のままに闇の中を歩いていた俺は、前方に月明かりに照らされる扉を確認した。

その扉の前には、二人の武装した天使が仁王立ちで立っている。
邪魔だな。とぼんやりと思った。
でも、今日は機嫌が良いから許してあげるよ。と後から付け足す。

俺はにっこり笑って二人に手を振った。
「どうもどうも、ご苦労様です。」
「一一一一殿。」
こんな真夜中に、突如(とつじょ)現れた俺に天使たちが驚いたような表情を浮かべて、俺の名を呼んだ。

俺が何でここにいるのかって顔。

感情駄々漏れだよ、天使さん。
あなたたち天空騎士団(アイッシュグランド)の戦士でしょうに、俺なんかにそんな簡単に心読まれちゃっても言い訳？
まあ、俺は何考えてるかなんて、君たちに知られるようなヘマしないけどね。
俺は滅多(めった)なことでは見破られることのない、笑顔を張り付かせたまま言葉を続けた。
「いやいや、ここに噂の連続天使殺しの下手人がいると聞いたもので、ちょっとどんな感じかと見にきました。」
「そんなことは、貴方には関係ないことだ。」
天使たちに、人間である俺に対する差別の色が浮かぶ。
天使はいつもそうだ、関係ないのだと人間を締め出し、そして人間は愚かだとせせら笑う。
いつまでたっても、天使という生物は変わらない。
天使と話をしたりすると吐き気がする俺がいる。
だからいつもなら、ここで頭に血が上るところだが、今日の俺は機嫌がいい。
俺は天使たちのすぐ傍まで近づくと、自分でもわざとらしいなと思

うほどの笑みを浮かべて二人を見ながら、行動に移った。

「なっ・・・・ガハッ。」

何が起こったか天使が分からない間に、一人の天使の胸を手で突いた。

ナイフは使わない。

「な・・・なにを！・・・・ギャッ。」

傍らの天使が急に倒れたことに、こちらに槍を向ける天使だが、今更遅い。

俺は天使の胸から手を抜くと、その血にまみれた手で今度は武器をこちらに向けている天使の懐に飛び込み、その首元を切り裂いた。

血が噴水のように飛び散り、舞い落ちる。

暗闇の中に散る赤い華は、中々目にも楽しいものだ。

バタリバタリと、倒れる二人の天使の顔には恐怖も悲しみも映さず、ただ驚愕(きょうがく)に目を見開いたまま絶命している。

そんな表情を見て、何だか急に高揚していた気分が冷めた俺は、べたつく右手の血を舐めとると、血はざらりと鉄の味が口の中に広がり、思わず顔を顰(しか)めてしまう。

まあ、気分はいくらか冷めてしまったが、これでやっと彼と俺の間に障害はなくなったわけだし、と思い直して改めて自分の姿を確認する。

思ったより返り血を浴びてしまったが、これはこれでお洒落かな？

今まで彼にはいつもきっちりとした姿でしか、会ったことがなかったし、こんな姿もたまにはいいかな？

彼はこんな僕の姿を気に入ってくれるかな？

そう思うと、ふふふと笑いが零れた。

はやく彼に会いたい。

楽しい気持ちを取り戻して、血の濡れた扉を開けて俺は更に深い闇の中を進んだ。
やっぱり今日の俺は、ちょっとやそっとちゃ動じないほど、どうにも浮かれているようだった。

「ふんふんふん。」

誰もいない長い廊下を、こつんこつんと、一歩ずつ一歩ずつ彼に近づく。
しばらく使われていないかび臭い牢獄には、今は彼しか捕らわれていないはずだ。
一つ一つの牢屋の中を、彼がいないかどうか確認しながら進む。
そして、いくつかの牢屋を見た後、牢屋の中に黒い影が一つ。

「ああ、いたね。」
俺の声に、牢屋の床に蹲(うずくま)っていた影がぴくりと動いた。
「・・・・ーーーーー様!」
嬉しそうな彼の声が俺の名を呼ぶ。
耳に付く高い声だった。
楽しい気持ちに、影が差した気がした。
しかし彼の歓迎に答えてやるように、俺はにっこりと微笑んでやった。
「やあ、酷い目にあったね。体は大丈夫かい?」
「はいっ!万象の天使は、私に聞きたいことがあるといって、加減をして攻撃したようですから・・・。」
鉄格子(てつごうし)越しに相対する俺と彼。
彼は一気に言い切ると、言いよどむように僅かに言葉を濁らせた。
その顔には怯えの色が見えた。
「どうしたんだい?」

しかし、優しげな声で俺が聞いてやれば、躊躇(ためら)いながらも口を開く。
彼には俺に対して絶対服従をするよう、それと悟られぬ様に教育してきた。
俺の命令に逆らうはずもない。
「あ・・・、私は、ーーーー様の命令を達することができず、あの黒の一族を殺すことができませんでした。それが、申し訳なくて・・・。」
案の定、彼の気にしていたことは、俺の命令を守れなかったことに対する、自分の不甲斐(ふがい)なさ。
その声がどうにも耳障りな気がして、俺は手にしているナイフを落ち着きなく指でこすった。

「なんだい、そんな事を気にしていたのか。」
しかし僕はそんな様子を悟らせることなく明るく返した。
だって、そもそも気にする必要なんて彼にはないのだ。
すると僕の言葉に安心した彼は、嬉しそうに顔を上げる。
その顔はご主人様に褒められた犬のよう。
尻尾(しっぽ)があったら、はちきれんばかりにそれを振っていることだろう。
それを想像して、俺は更にイライラすると同時に、笑みを深めた。
それをどうとったか知らないが、彼は俺の顔を見ると決意も新たに、こう言い出した。
「あ・・・、ありがとうございます！私は絶対にーーーーー様のご期待に沿えるよう、今回は万象の天使の邪魔が入ったせいで失敗しましたが、次こそは必ずあの黒の一族を殺して・・・・え？」

ぎこちない笑みを浮かべながらしゃべる彼の、笑顔が固まる。
ポタリ・・・。
彼と俺以外はいない牢獄に、床に落ちる水音。
ああ、やっと静かになった。
いつも静かにしろと言っていたのに、彼はそれを忘れていたらしい。

俺はそれを思い出させてやった。
「うるさいよ。こんな静かな夜はもっと声量を落とさないと駄目だろ？」
そう言って、笑う俺の手には、やっとその役割を果たすことができたナイフが、深々と彼の胸に刺さっている。
このために天使たちにはナイフは使わなかった。
はじめからこのナイフは、彼の胸に刺すために用意されていたのだから。
血がどくどくと、まるで音を立てるようにナイフから滴り落ち、水音が断続的に聞えた。

「・・・ど・・・どう・・して？」
かすれた声、その目からはみっともなく涙が流れ落ち、崩れ落ちるのを堪えるように彼が俺の服の胸元を握り締める。
「どうして？だって、君失敗したんだもの。次回なんてある訳ないだろ？あいつはあの時、確実に殺しておかなければならなかったのに・・・、君が失敗するから。全く、君といいあの女といい、どうして俺の言ったことを守れないんだろうね？そんな難しいことを要求した覚えはないはずだけど。」
あまりに当たり前の事を聞かれたので、呆れてしまった。
同時にいいながら思い出して腹が立ってきたので、ぐりぐりとナイフで抉(えぐ)ってやったら、苦しそうに呻(うめ)きを上げた。

そう、何もかも俺の段取りどおり、完璧に進んでいたはずなのに、彼とあの女のせいで厄介な問題だけが残ってしまったのだ。
それも決して無視のできない問題。
「まったく君には多大な信頼を置いていたのに、君だから任せたのに・・・がっかりだよ！」
「うぁ・・・。」
いいながら更にナイフに力を込めてやれば、顔を歪める。

中々いい表情だ。
「しかも、おかげで俺がわざわざ君を消しにこないといけないっていう、面倒まで俺が処理しないといけなくなったしね。また、他の誰かを天近き城（フェデス・ジグロア）に入れようとすれば時間がかかる。その前にサンタマリアなんかに君の心を読まれれば、折角ここまでもぐりこんだ面倒まで、ぱあだからね。まあ、唯一黒の槍（アルヴァトーレ）を天使に頑として渡さなかったことだけは褒めてあげるよ。」
そう言って、彼が天使に何をされようと握り続けていたという黒の槍（アルヴァトーレ）にそっと手を触れた。
おかげで、彼は天使たちに黒の力を封じられる鎖をされているから、簡単に殺せちゃうしね。

酷く饒舌（じょうぜつ）な俺。
普段はこんなにぺらぺらしゃべるわけじゃないけど、やっぱりどこかウキウキしている心が隠しきれていないのかもしれない。
まあ、いつくかの問題は確かにいくらかの計画に支障をきたそうとしているが、それよりも上手く言った部分のほうが大きいからね。

だからといって彼の失敗を見逃すわけにはいかない。
あの女も、そのうち消えてもらおうと思っているけど、彼女にはまだ使い道があるからね。
でも、彼はもう用済みだ。
「だから消えてよ。いっただろ、俺のためになら何でもするって。」
そう、彼は俺に何度となく忠誠を誓ってくれた。
まあ、俺がそういう風に仕向けたんだけど、でもそれを決めたのは間違いなく彼だ。
自分の言葉には責任を持たなくちゃね？

しかし、彼は激しく首を振る。
あらら、俺への誓いは嘘だったの？

あはは、まあ、そんな程度だと思ってたけど？
でも、もう遅いでしょ。
「だって、所詮君は俺の駒。駒には自分の意志なんて存在しないの。
俺が消えろといったら、大人しく消えちゃいなさいよ。」

そして、静かな牢獄に断末魔の叫びが小さく上がった。

「さようなら、・・・あれ？名前忘れちゃった。ま、いっか。どうせ死んじゃったしね。」
俺は彼の死体を置いたまま闇の中を、やっと面倒が一つ片付いたとばかりに、彼の手から落ちた黒の槍をナイフの代わりに手にし、鼻歌を歌いながら歩き出す。
さあ、真夜中の散歩の続きをしよう。
それにしても、天使と違って、絶望と悲しみに満ちた彼の死に顔は中々良かった。
やっぱり死に顔は、ああでなくちゃと、俺は口元を緩ませる。

「ふんふんふふん。」

狭い牢獄を出て、月明かりの元に舞い戻る。
俺は空を、月を見上げた。
小さな空と、大きな月が血まみれの俺を照らしている。

「どうして、こんなに空は小さいのかな？」

俺は空を見上げながら、誰にでもなく呟いた。
誰も答えてくれないし、別に答えを期待しているわけではない。
大体、俺は答えを知っているからね。

この空が、こんなに小さいのは簡単なこと。

何故なら、大きな壁で世界を囲い、本当の大きな空を誰も見ることができないから。
外は不浄で野蛮だと、天使たちは壁で楽園を囲い、自分たちの楽園を守っているのだと安心しているから。

馬鹿馬鹿しくて、あまりに滑稽な理由。

馬鹿な天使どもは、何もわかっていないのだ。
天使どもは壁に守られているわけではない、本当はこの壁の中に閉じ込められているのだ。
その事実を自覚すらしていない彼らは、この空が小さいことにも気付きはしないのだろう。
だから、頑なにこの壁を守ろうする天使たちに気が付かれない様に、この壁を壊そうとするには本当に長い時間と多大な労力が必要だった。

ああ、そのためにどれだけの苦労をしたことか・・・。

だが、それもやっと報われる。
やっと、全てが動き出したのだ。
あまりの嬉しさに、先ほどまでの苛ついた気持ちなど全部忘れて思わず声を出して、俺は笑ってしまった。

「何がそんなに嬉しいのですか？」
そんな俺に女の声がかかる。
静かな俺の好きな声だ。
振り返った先には、見慣れた姿が立っていた。
「ああ、君か。やっと待ちに待った宴が始まるんだ。これが嬉しくなくて、何が嬉しいというんだ。」

そう言うと、女は何も言わずに一つ頷いてくれる。
やはり彼女は、先ほど殺した男と違い、静かを好む俺のことを分かってくれている。

それが更に俺を嬉しくしてくれて、はしゃいだ声が出た。
ああ、いつもはこんな声は出さないのに、今は自分を抑えることができない。
「さあ、前祝だ！謡ってくれ。全ての始まりま告げる、予言者が告げたあの予言を！」
女は返事もせずに従うと、静かに予言を紡ぎだす。
その声はまるで、鳥のように美しく、あまりに儚い。
少しでも力を込めれば、ぽきりと折れてしまいそうにか細く、切ない声は、俺の背中をぞくぞくさせる。

白き光より　堕ちた翼は　黒き寝台で眠る
千の夜　千の朝の果て
其を　白き光より　引き千切りし
黒の血が　其を　永き眠りから　目覚めさす
目覚めし翼は　契約という名の楔を　身に刺し
白き光に　還るのだ
しかして　翼の永い旅は　終わを告げ
世界の胎動が　全ての始まりを告げる

美しくも、儚い詩に、うっとりした。
予言は更に続く。

しかして　世界の胎動は　汚れた神の　目覚め促す
全ての始まりは　破滅の階段を　転がり落つ
翼の帰還
其は　始りにして終わりを　告げるもの

東方の楽園（サフィラ・アイリス）の　封印を解くもの

これは予言者マルーも知らない、共犯者である俺と彼女しか知らない真実の予言。
誰も知らない。
万象の天使も、三大天使も、エンディミアンも、アーシアンも、黒の一族も・・・
誰も知らない。
だから、誰も知らないうちに始末をつけなければならないのだ。

しかして　始まりと終わり　再生と破滅を　決めるは
目覚めし翼が　白き力に　刺したる　契約という名の楔（くさび）
世界の全てを　握りし鍵
世界は　楔（くさび）の存在に　全てを　＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞委（ゆだ）ね
―楔＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞くさび＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞は　全ての　始りにして終わりなるものと　相成（あいな）りなん

楔（くさび）となったのは、恐らくあの黒の一族。
だから、この予言を天使たちに知られる前に、あの黒の一族を消さなければならないのだ。

「ふんふんふんふん。」
でも、今は彼女と一緒に歌おうと思う。
あの黒の一族を殺すことは、今は忘れよう。
もうすぐ、全てが叶うから。

血にまみれた体で俺は鼻歌を歌い、真夜中の闇に溶けていく。
全ては始まったのだ。
そう、全ての終わりが始まった。

今日は最高の始まりにして終わりを告げる日なのだから・・・。

第二十五話　始まりは真夜中の狂気（後書き）

第二部連載開始です。
まだプロローグですので話自体が動いた訳ではないのですが（笑）、何だか再びヒロを襲う不幸の臭いだけがプンプンします。そんな第二部ですが、気長にお付き合いいただければ幸いです。

最後にすこし宣伝を（笑）
ヒロとエヴァが不浄の大地を旅していた一年前を描いた番外編『異邦の少年　亡国の遺産』の不定期連載を始めました。読まなくても本編には全く関係ありませんが、第一部では描ききれなかった日常の二人がおりますで、興味がありましたらご一読してもらえると嬉しいです。

私は悪夢の中にいる。
私の中で貴方が何度も死ぬ・・・、そんな悪夢に私は永遠に責め続けられている。

・・・それが、私の犯した罪の代償。

第二十六話　私は天使に喧嘩を売った　其の一

そしてまた、私の中で貴方に似たエヴァが死んだ。
「大好きだよ、ヒロちゃん。ずっとずっと、傍にいるから。生きていて。僕のこと・・・、忘れないでね。」
黒い影によって受けた傷に苦しみながら、私は何度も何度も夢とも現(うつつ)とも分からぬ時の中で、エヴァを失う悪夢に魘(うな)される。
何度も何度もあの淡い微笑が、あの細い声が、あの通り抜けた体が、私の前で繰り返し現れては消えうせる。
繰り返される悪夢に、私は気が狂いそうな悲しみと絶望に苛(さいな)まれる。
いっそ気が狂ってしまったほうが楽なのかもしれない。

だが、低く懐かしくも厳しい声が私を引き止めるのだ。

他者のせいにして、罪を犯すことはかなわぬ。
罪を犯(おか)すのであれば、それは常に自分の責において犯(おか)すべし。
それは罪のみにあらず、生き続ける限り行われる、全ての行動に当てはまる。
汝(なんじ)、生きるということは、自分であり続けるということである。

自分ならざる生とは、それは生きるということに在らず。
しかして、死したるということでもない。

流離人としての掟、それは幼い頃より貴方から聞かされ続けていた
私を縛り続ける呪い。
貴方を、エヴァを理由に生きることを放棄してはならぬと、私を戒
め、責め続ける。
だから、私は狂気に逃げることすら叶わずに、未だにこの醜くも、
いとおしい現にあり続けなければならないのだ。

エヴァ、お前はやっぱり子供だ。
言っただろ？
『自分にされて嫌なことは、他人にしてはいけません。』

あんなに私がいなくなるのを怖がっていたお前だ。
私がお前を失うことを怖くないなんて思わないだろ？
お前がいなくなれば、現に戻る、生き続けるのが嫌になるくらい、
私が弱いことをお前は知っていただろう？

だが同時にお前は知っていたはずだ。
それでも、私がどれほど辛かろうと現に戻ると、生き続けると・・・
。
何故なら、お前は私が自分で自分の命を諦められるほど、強い人間
ではないことを知っていただろ？
そして、私が掟に縛られ続けていることも、お前は知っていたはず
だから。

・・・だからこそ、私はお前を許せないんだ。

お前無しで生きるには弱いのに、お前を追って現(うつつ)を捨てることが叶わない私を知っているのであれば、この状況が私にとって生き地獄でしかないことは分かっていただろ？
その生き地獄に・・・・。

・・・・。
・・・・。
・・・・。
・・・・。
・・・・。

・・・・、はあ、生き地獄か。
そこまで思考が行き着いて、私は思わず自分の心中にもかかわらず、溜息をついた。

だんだん、言ってることが暗くなってきたな。
私らしいというか、なんというか・・・、このままどん底まで落ちていったら、どんな思考に行き着くか自身に興味はあるが、何かキリがない気がするだよ。
そもそも、エヴァを失ったことを私自身が吹っ切れていないのに、悶々(もんもん)と考え続けたところで、その果てに何か答えが出るわけがないのだ。

あーだ、こーだ言ってみたところで、エヴァが翼に戻ったこと、私の前から消えたことは、もう取り消せない現実でしかない。
ならば、エヴァの消失に悲観して気落ちし続けることが、エヴァのためになるかといえば、それはノーだろう。
大体エヴァのせいにして、エヴァを守れなかった自分を嘆き続けるのは柄ではない。
せめてエヴァにしてやれることは、エヴァが最後の言葉通り、きっ

と『エヴァを忘れずに、生き続けてやる』ことくらいなのだ。

結局、また私は一人になって、私の中で何度となく死んでいく人々を抱えて、いつか私が死ぬその日まで、悲しみと絶望を胸に、みっともなく生を全うするしかないのだ。

それが、彼らの望みであり、多分私の罪であるから。

深い底なし沼から、這い上がるような重い意識の浮上を感じた。
ここが、もし慣れ親しんだ不浄の大地であったならば、浮上をやめて再び意識を沈めていたかもしれないが、私はここが親しんだでないことを本能で感じていた。
だから、無意識下で私は無理をしてでも意識を浮上させる。
長年アーシアンとしてしぶとく生きていると、本人が望む望まざるは関係なく生存本能というものが、先立つものなのだ。

「・・・ん。」

瞼をあけることも億劫なほど、体が重い。
そうして折角開けた瞼だったが、隙間から入る強い光が眩しくて、すぐにまた私に瞼を閉じた。
起きぬけのぼんやりとした意識が、徐々に覚醒してくると、腹部が焼け付くように熱く痛むのを感じた。
そして痛みが私の置かれた状況を、紙芝居のようにコマ送りで急速に思い出させた。

黒い影に腹部を貫かれた熱い衝撃。

私が捕まえることができなかったエヴァ。
何故だか私を守ったエヴァンシェッド。
そして、エヴァンシェッドは黒い影を捕らえる天空騎士団（アイッシュグランド）を確認すると、私を抱えて持ち上げた。
「大丈夫か？少し辛抱（しんぼう）してくれよ。」
私は返事をしなかった。
ただ、体を揺らされて痛みとも苦しみとも取れぬ鈍い感覚と、エヴァを失った喪失感、その両方を忘れたくて、私は呼びかけるエヴァンシェッドを無視して、意識を保つことを放棄した。

記憶はそこから途絶えたままだ。
それから果たしてどれくらい時間が経ったのか、部屋の明るさからいえば、恐らく朝方であろうが、それがあれから何日たった朝かは分からない。
何度となく悪夢を見ては、魘（うな）されて目を覚ましたような感覚はあったが、夢とも現（うつつ）ともいえぬ、曖昧（あいまい）な記憶しかない。
ただ、夢の中で何度も繰り返しエヴァの別れの言葉を思い出してはその名を呼び、エヴァを失った失意の迷宮に迷い込んでいたような気がする。
果たして私が出口にたどり着いたかは、夢から覚めた私には分からない。
しかし、エヴァを失って悲しい気持ち、絶望する気持ちは無論あるのだが、今の私には、エヴァを失った直後の死んでもいいという、あの狂気にも似た感情はまるで起こらない。

そんな自分に安心しつつ、私は思ったよりもダメージを受けているらしい体を起こす。
「よ・・・こらせ。」
思わず年寄り臭い掛け声が口をつく。
そうしてやっと起き上がった私の視界には、綺麗で、豪華で、広い

部屋。
てっきり、黒の一族として認識されているはずの私は、また断罪（エヴィラ・アメンド）の牢獄にでも投獄されるかと思っていたが、違うらしい。
恐らくだが、ここはまだ天近き城（フェデス・ジグロア）だ。
どうにも独特の澄みすぎた空気の匂いは、私には馴染（なじ）まずにその存在を私に知らしめる。

思わず頭を抱えた私である。
よくもまあ、天使の本拠地とも言えるような場所で、昏々（こんこん）と眠り続けていたと自分でも呆れるしかない。
エヴァを失った直後だったこともあり、心身ともに喪失状態だったのかもしれないが、それでも今まで、これほどまでに無防備に、例え重症を負おうとも意識を失い続けるなんて、私的には非常にありえない状況だ。

それと同じくらいありえないのは、いくら重傷者とはいえ、天使たちから見れば危険人物の私に拘束どころか、監視が一人も付いていないことだ。
室内どころか、扉や窓の傍にも動くものの気配がない。
監視一人も置かれずに、室内で休まされている自分という状況が信じられなかった。
しかも、視線を落とせばベッドの傍に黒の剣（ローラレライ）が立てかけられているのが、目に入った。
果たして今の自分は天使間で、どういう位置づけになっているのかが非常に気になった私である。
武器まで与えられて、そこまで天使に対して無害になった覚えはない。
と、そこで頭を抱えた私は、サンタマリアの言葉を思い出した。

『貴方には私たち天使に力を貸して欲しいのです。』

まさか、黒の一族に襲われた私が、だからといって簡単に天使に力を貸すものと思われているわけではあるまいか。
その想像にげんなりと私は肩を落とした。
そんな風に思い込まれて、私というか、黒の剣（ローラレライ）の力を当てにされても困る。
エヴァの事もあるし、正直これ以上天使たちと関わりたくないというのが本当だった。

天使の翼を見れば、必ずエヴァのことを想わずにはいられないことは想像に容易（たやす）い。
エヴァのために馬鹿なことをする気はないが、それでも今はまだ思い出せば酷く胸が痛む。
しばらくは悪夢に魘（うな）されるだろうし、あの時ハクアリティスを助けなければなどと、今となってはどうしようもない愚かなことも考える。
エヴァのことを忘れるつもりは毛頭ないが、今は極力自分のそういう弱い部分を刺激したくなかった。

そんな風に自分の思いに浸（ひた）りながら、私は部屋の外に人の動く気配を察知した。
気配は次第に近づいてくると、部屋に一つしかない扉の前で立ち止まり、それを開けた

「あら、目が覚めたの。二、三日は目が覚めないって聞いてたけど、さすがアーシアンね。一日で目が覚めるんなんて大した生命力だわ。」

どんな輩（やから）が現れるかと自分が弱っている分、構えていた私であるが、現れたのは何処かで見覚えのある天使の女性だった。

シャオンのようにあからさまな色気ではなく、しどけなく色っぽい空気を纏う美しい天使は、私を見ると癖のある婀娜っぽい微笑を浮かべた。
それを見て頭の中に、エヴァンシェッドを呼びに着て、恋人のように寄り添っていた女性が思い至った。

「あ・・・。」
「あら?どうかした?」

しかし、女性のほうは私に気付いていないらしい。
いやそもそも、あの時の私と今の私が一致していないのかもしれない。
なにせあの時の私は、今の自分の面影のあまりない変装をしていた。

・・・それならば、それはそれでいいだろう。
あんな自分を自分だと思われたくないというのが正直な思いだが、説明するのも面倒だった。
私は首を横に振った。
「いや、何でもない。・・・・・ていうか、貴方は?私は今どういう状況なのか聞いてもいいだろうか?」
天使は私の問いに笑顔を返すと、そのまま何も答えずに手にしていた果物を私に見せた。
「まあ、とりあえずお腹すかない?私、一晩中貴方の看病していて、お腹ペコペコなの。」
「・・・。」
そんな風に言われては、強く出られないのが私の小心者なところで、黙って頷くしかない訳であった。

しゃりしゃりしゃり。

手際よく、瑞々(みずみず)しい赤い果物の皮が薄く剥(む)かれてゆく。
白魚のような、指先まで丁寧に綺麗に整えられた手にしては、中々の包丁さばきである。
リリアナと私に名乗った天使は、私の寝ているベッドの横に椅子をつけると、宣言どおりに本当に果物を食べるつもりらしい。
よく、アーシアンの横でこうも平然としていられるものである。
私は何も言わないが、天使の領域(フィリアラディアス)に放り投げられてからというもの、エンリッヒが言うには天使の大多数は人間を差別しているらしいが、こうして人間に対しても平然としている天使にも多く出会っているのだ。
人間をどう思うかなど天使たちから見れば、それは個人の自由であるのは分かっているが、断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)のあの虫けらでも見るような天使たちとのギャップに、戸惑うのは私が小心者だからなのだろうか。

「よし。上手く剥(む)けた！ヒロも食べるでしょ？」
「あ、いや、私は。」
「まだ、固形物は厳しいか。だってお腹に穴が開いてるんだもんねぇ？後で食べれそうなもの見繕(みつくろ)ってくるわね。」
見た目の家事なんて一切しないわ、みたいないい女っぷりからは窺(うかが)い知れないほど、リリアナ嬢はテキパキ、ハキハキとモノを言い、行動するタイプのようだ。
第一印象とは大きく違う彼女に戸惑いながら、私は乾いた笑いを浮かべた。
よくよく部屋をちゃんと見れば、ベッドの傍(かたわ)らにある机には途中で取り替えた血に汚れた包帯や、タオルなどが無造作(むぞうさ)に置かれていた。
どうやら、彼女がここで一晩私を看病していたという話は本当らしい。

「・・・どうして、私にこんなに良くしてくれるんだ？」
本当のところは天使に力を貸す気など更々ない私には、天使たちの

好意にも似た行為が、気の小さい私にやたらと重く圧し掛かる。
その思惑が知れなければ、どうにも気分が悪い。
「どうしてって言われても、私は貴方の世話をエヴァンシェッド様に頼まれただけよ。」
私が聞くと、リリアナはあっけらかんとそう言った。
「エヴァンシェッドが？」
てっきりサンタマリア辺りの指示かとも想ったが、確かにエヴァンシェッドと一緒にいるところを見た彼女が世話をしてくれているのだ。
エヴァンシェッドの指示という方が、しっくり来るのかもしれない。
だが、どうして私を助けるのか、その理由が見えてこない。

そうして私が訝しげにしていると、リリアナが面白そうに笑みを浮かべた。
「あら、万象の天使を呼び捨て？様付けしとかないと、尊き血の天使たちに殺されるわよ？あの人たちの人間嫌いは徹底しているから。人間は天使に傅いて当然と思っているんだから、彼らには今みたいに喧嘩売っちゃ駄目よ？」
ああ、エヴァンシェッドは万象の天使だったのか。
リリアナの言葉に、初めてそれに気がついた。
『万象の天使ともあろうお方が、まさか黒の一族をかばうとは・・・。』
同時に黒い影の低い呟く声を思い出した。
しかしそれまでの、いや今でも私にとって彼は、エヴァを奪った御伽噺に聞いた『飛べない翼の天使』なのだ。
今更万象の天使といわれても、ぴんとこないものがあった。

だが、そんなことを言ってもリリアナに理解されるはずもないだろう。
私はリリアナの言葉に頷いた。

「すまない。なら今後は気をつける。・・・尊き血の天使というのは？」

ここでは私の常識など一切通用しない。

長居する気はないが、何も知らないで厄介ごとに巻き込まれるのは勘弁願いたい。

知れることは、何でも知っておきたかった。

「尊き血の天使っていうのは、天使一族のなかでも由緒正しき貴族様のこと。まあ、王国解体後の今となっては貴族なんて特権階級は存在しないけど、天使一族はずっと昔は、王様を頂点とし貴族がその周りを囲む王国を形成していたの。」

リリアナはしゃべりながら、果物をおいしそうに食べている。

「まあ、今でも貴族という存在が全く消えたわけではないんだけどね。今でも、踏ん反り返って偉そうにしてるわよ。」

「リリアナは尊き血の天使が嫌いなのか？」

私の問いにリリアナは当たり前でしょといわんばかりに頷いた。

「あんな頭の固い連中を好きな分けないじゃない！私はエヴァンシェッド様を筆頭としている神と契約せし天使の天使たちに仕えているのよ？」

「エヴァンシェッド・・・様は、尊き血の天使じゃないのか？」

てっきり、今の天使の頂点である彼こそ、天使一族の王だと思ったが、どうやら違うらしい。

「違うわよ！あんな偏屈爺どもとエヴァンシェッド様を一緒にしないで。」

怒られても知らんもんは、知らん。

「あいつらは何の苦労も知らずに私たちを虐げ続け、見捨て続けた。でも、エヴァンシェッド様を始めとする神と契約せし天使たちは、私たちを解放してくれた。力を持った彼らは、貴族から、全てから解放してくれたの。」

「なるほど、ではエヴァンシェッド様たちが王国を解体したという

わけか。白壁の外からじゃ、天使たちの様子なんて何一つ分からんからな・・・。」

リリアナの言葉に相槌(あいづち)を打ちながら、違和感を感じた。

純粋にクーデターを起こし王国を解体したにしては、貴族たちという名残が残っているらしいし、リリアナの『全てから解放してくれた。』という言葉が妙に引っかかった。

「そういうことよ。以来、天使一族は神と契約(ファギュラド)せし天使たちを中心にして導かれているわ。まあ、尊き血(ビットゥ・ラ)の天使たちも、世界の円卓(アディス・ジア・ヴァッハ)を使って無駄な足掻(あが)きをしているようだけど?」

「あ・・でぃ?」

またまた、聞かない言葉が彼女の口から出た。

しかも上手く口が回らない。

「世界の円卓(アディス・ジア・ヴァッハ)。天使一族の総意を決める議会の名前よ。そこで色々天使一族の将来のことを決めたりする・・・てことになってるわ。そんなものほとんど機能していないけどね。」

無法地帯の常識しか知らない私には聞きなれないし、よく意味の分からないことばかりである。

王国に、議会、貴族に神。

何もかもが、意味は理解できても身近に考えられない言葉ばかり、起きぬけの頭には少々荷の重い内容のようだ。

思わず息を吐いてしまうと、リリアナが気遣わしげにこちらに視線を向けた。

「あら、大丈夫?そういえば、まだ重症人だもの。長々と話ている場合じゃないわよね?どっか痛む?」

「リリアナは私の質問に答えただけだろう。大丈夫だ、これくらい・・・、誰か来るな。」

リリアナが私の背中を支えて、ベッドに横にさせようとしてくれた

のを遮った。
殺気だった気配が、こちらに近づいてきたのだ。
「え？」
何だか分からないが、迷いなくこちらに近づいてくる気配に、私はベッドから起き上がり黒の剣を手に取った。
体は痛んだが折角今生きているのだ、ベッドに横になったままやられてしまっては、馬鹿馬鹿しい。

「ちょっと、何してるのよ！傷口が開くわよ！」
そんな私をリリアナが驚いたように止めようとしたが、私は彼女の手を払いのけた。
彼女やエヴァンシェッドは私に敵意がなくとも、さっき言っていた尊き血の天使やら、その他大勢の天使全てがそうじゃないのは今の話でよく分かった。
万全な私なら悠然と待っていてやってもいいんだが、弱っている以上、卑怯といわれようとも生きるためには待ち伏せ上等である。
私は近づいてくる気配を感じながら、自分の息を殺した。
私のただならぬ様子に、リリアナも呆然としている。

バァン。

そして、扉が荒々しく音を立てあけられると、人影がすばやく私のいたベッドに向かって突っ込んでいった。
私は扉側の壁に張り付いて、人影の背後を取るとその後ろから襲い掛かろうとした瞬間だった。
「ヒロさんは、どこや！」

ん？

黒の剣を振り上げようとしていた私いは、聞いた事のある妙な口調

に固まった。
「・・・エンリッヒか？」
私が思わずその名を呼んでしまうと、殺気だった天使が勢いよく私を振り返った。
「ああ、ヒロさん！何処におったんですか！良かったぁ、どこも怪我はありまへんか？」
と、エンリッヒは私に掴みかかってきた。
「痛い！怪我なら昨日、これでもかというくらい大きなのを喰らってるわ。お前も見てただろう。」
どうも、私を襲いにきたわけではないらしいが、妙なことを言い出したエンリッヒに私は眉を顰めた。
一体、何事だ？

「ああ、そうですな。・・・て、そういう意味じゃなくて、あれから誰かに襲われたりしとりませんか？！」
切羽詰って、焦ったようなエンリッヒに私は押された。
「・・・今さっき、目が覚めたばかりだから分からんが、もし襲われてたら、生きてないだろ。」
眠っている間に襲われていたら無抵抗のまま、殺されるしかない。
「心配しなくても、一晩中付いていたけど、エヴァンシェッド様以外は誰もこの部屋には入っていませんよ？」
私の言葉を補完するように、リリアナが言葉を添える。

「はぁ～。そうでっか、よかったわぁ。もしヒロさんに何かあったりしたら、サンタマリア様に殺されるとろこでしたわ。」
その言葉を聞いて、へたり込むエンリッヒ。
そこでやっと、いつもの嫌味な笑みが復活した。
「何だ？サンタマリア様が、どうかしたのか？」
立っているのも疲れるので私はベッドに腰掛けながらエンリッヒに問いかけた。

「いえいえ、サンタマリア様がどうした言う訳じゃないんですわ。」
そういって笑う、エンリッヒの顔は微妙に引きつっている。
どうも、この天使はサンタマリアに対して怯えているような所作(しょさ)が見え隠れする。

「じゃあ、何だよ?あんな殺気だって駆け込んできて、何もないってことはないだろ?」
私が襲われるかもと構えていたのだ。
「・・・いえですね。まだ極秘な話なんで内密にお願いしますよ?」
「内密って・・・、アーシアンの私が天近き城(フェデス・ジグロア)に噂話をする相手がいるわけないだろ。」
どうも、混乱しているのか、エンリッヒは馬鹿なことを言い出す。
「あ・・・、それもそうですね。えっと、そちらの別嬪(べっぴん)さんも、ご内密でお願いします。」
私のと言葉にぽんと手を叩くと、リリアナを見て笑いかけるエンリッヒ。
「ええ、分かりました。」
そして、リリアナが快くエンリッヒの言葉に頷くと、彼は他には誰もいないのに、声を低く内緒話でもするかのように言った。

「それがですね。殺されたんですわ。」
「主語を言え。」
「まあまあ、そう焦らせんといて。ええ、殺されたんですわ。ヒロさんを昨日襲った、あの黒の一族が。」
腹部の傷が、熱を持って疼(うず)いた。
「あいつが?誰に?」
あれほど強い奴が、エヴァンシェッドに痛めつけられていたからといって、そう簡単に殺されるだろうか。
それに、天使たちも昨日の今日では、天使殺しの下手人という話であったし、すぐに処刑というわけではないだろう。

「それが、よう分からんのです。ただ、監視しとった天使も殺されとるし、なにより黒の武器が奪われとったんで、もしやヒロさんの黒の武器も狙われとるかもしれんと、こうして慌てて来たんですわ。」

「黒の武器が？」

嫌な予感がした。

エンリッヒがもたらした、その報せに胸が騒いだ。

元来、勘が鋭い気質ではない私だが、如何せんこういう悪い予感だけは、妙な的中率を発揮するのだ。

エヴァを失い、重傷を負い、黒の剣を狙われる？

いい加減、自分の不幸っぷりに、腹部の傷と連動するように頭がズキズキと痛んだ。

第二十六話　私は天使に喧嘩を売った　其の一（後書き）

ヒロのエヴァを失った心情を主にした話だったので、最初はすごいグルグルしてますね。でも途中から急に調子が変わって、明るくなったりしているんですが、あれはヒロの強がりです。（ヒロが薄情なわけじゃありません）

基本は最初みたいにウジウジしているヒロが根底にある所に、あの強がっているヒロが被さってきて表面上は見えなくなってしまったのです。そして、それは本人自体もあまり意識してやっていません。だから、目が覚めたヒロは普通に装っていますが、本当はあんまり大丈夫じゃないんです。一人称なのに分かりにくくて、申し訳ありません。

次は、ヒロからエヴァを奪った、あの美貌の天使様が登場する予定です。

第二十七話　私は天使に喧嘩を売った　其の二

恐怖というものを、小心者の私は今まで何度だって感じたことがあった。
不浄の大地（ディス・エンガッド）で危険に晒（さら）されるに死の恐怖に苛（さいな）まるし、強い敵に相対（あいたい）したときは、敵の力に尻込（しりご）みするように体が恐怖で震えた。
ただ、度重（たびかさ）なる恐怖には時間がたつにつれて慣れる。
恐怖を感じなくなる訳ではないが、それが当たり前になっていくのを感じていた。

ただいつまでたっても慣れることのない恐怖もある。
それは、大切な人を喪失する事への恐怖。
きっと、これは死ぬまで慣れないだろうという確信がある。
何故なら、大切な人を失う時の、あの気が狂いそうになるほど感情は、きっとどれほど時間が経とうが私は忘れることができないだろうから。
あの感情が私の中にある限り、喪失への恐怖は永遠に消えないだろう。

死、力、喪失。
恐怖と一口に言っても、その度合いも感じ方も様々なのだ。
きっと、私が未だ感じたことのない、未知の恐怖も生きている限り存在するのだろう。
そして今、世にも美しい存在を目の前にして、私は新たなる恐怖と対峙（たいじ）していた。

その美しい存在は、酷く甘く優しい言葉を囁（ささや）く恋人のように微笑みを浮かべているが、私の中にある全てを喰いちぎるような凶暴な化け物をその中に飼っている。

小心者の私が、そんなものを前にして恐怖を感じない訳がないだろう？
いい知れぬ恐怖を感じた私は、ただただ、その前から逃げ出したいという感情に捕らわれた。
そして、私は全力で逃げ出せるように息を殺して体勢を整える。

第二十七話　私は天使に喧嘩を売った　其の二

何だかいい知れぬ胸騒ぎがした。
「それで、私が狙われているかもしれないからといって、どうしてお前がそんなに慌ててるんだ？」
だが、エンリッヒを前にして混乱する自分を落ち着けるためにも、私は何でもないかのように言葉を発した。
嫌な予感はビンビンにしているのだが、だからといって直感を鵜呑(うの)みにするのはどうかと思ったし、・・・というよりは、寧(むし)ろ気のせいならいいと思った。

・・・これ以上、面倒が起きるなど信じたくないのだ。
まあ、単なる逃げだと言われれば、それまでなのだが。

「ど・・・どうしてと言われましても。実は、わいはサンタマリア様にヒロさんの警護を仰せつかっとるんですわ。」
「警護？」
こめかみが、ピクリと動くのを感じた。
「いえいえ！ヒロさんに負けたわいが、ヒロさんを守るっちゅーの

も、おかなしな話だというのは、わいもわかっとるんですよ?ただぁ、サンタマリア様が・・・。」

男の癖にはっきりしない物言いには苛付いたが、エンリッヒの言いたい事は概ね理解した。

「要は警護じゃなくて、監視だろ?」

「あは?分かりますかぁ?」

私が忌々しげに吐き出した言葉に、エンリッヒがからからと笑った。

エンリッヒが私の傍にいるのは、まあ狙われているというならば『警護』と言う意味もあるだろうが、それ以上に、黒の一族殺害の話を聞いて臆病風に吹かれた私が、天使の領域から逃げ出すのを防ぐためだろう。

あの明海の天使は、どうやら本気で私の力を求めているらしい。

まあ、黒の一族殺害の話を聞くまでもなく、私はさっさと逃げ出すつもりだったけどな。

「あの・・・。」

私とエンリッヒだけに分かる会話に、リリアナが何か言いたげな表情を浮かべ、口を開こうとすると新たな人物の声がそれを遮った。

「今のはどういう意味かな?天空騎士団第一師団副師団長・エンリッヒ君。」

ドクン。

私の胸が縮こまるように震えた。

『!』

エンリッヒとは天と地ほども差がある爽やかで嫌味のない声を発した人物に、気配を感じていなかった私もエンリッヒも驚いて振り返った。

「あら、エヴァンシェッド様。いらしたんですか?」

驚く私とエンリッヒを尻目にリリアナがにこやかに、純白の翼を持つ絶世の美男子を迎えた。

昨日までは片翼だったのに、今は翼を取り戻して完全になった天使がそこにいた。

「『いらしたんですか』は酷いじゃないか、リリアナ。ここは俺の離宮だぞ？」

リリアナの言葉に苦笑したのは、白き神に仕える天使一族の長であり、終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告を下したと言われる万象の天使・エヴァンシェッド。

そして、私から翼（エヴァ）を奪いし飛べない翼（エヴァンシェッド）の天使。

・・・いや、もう『飛べない翼』ではないか。

私は、絵画から抜け出てきたように優雅に歩いてくる天使から、白い二対の翼から目を逸（そ）らした。

心臓が痛いくらいに強く動くのを感じた。

血流が急に良くなったからか、腹部の傷の痛みが強くなったような気がした。

私は傷を庇（かば）うように手のひらを添える。

手のひらには、嫌な汗を感じた。

だが、私より嫌な汗をかいているのはエンリッヒだった。

「え、エヴァンシェッド様！勝手に離宮に入ってしまい、ほんま申し訳ありません！」

えらく恐縮しきったエンリッヒが、声を上げて頭を直角に下げた。

私と対するような余裕は消えうせ、ここに入ってきたときよりも顔を青ざめている。

どうやら、ここは万象の天使の離宮で、エンリッヒは無断でここに侵入してきたらしい。

だが、エヴァンシェッドはその顔に、この世のものとは思えない美

しい笑みを浮かべた。
「あはは、気にしなくて良いよ。今の聞いてたけど、サンタマリアの命令なんでしょ？あの人も仕方ないな・・・、まあ見て見ぬふりをしてもいいんだけどね？」
そう言って、エンリッヒを見た顔に、より深い笑みが刻まれた。
エンリッヒはその表情に見惚れるにうっとりとしていたが、私は綺麗だとは思ったが、同時に冷たい何かが胸に落ちた。
「でも、まあ俺に見付かった以上、理由は確り話していってもらうよ？大体、ヒロを天近き城に呼び寄せたのはサンタマリアらしいじゃないか。その辺も、ついでに話して言ってよ。」
「は・・・はい。」
まるで操られるかのように、エヴァンシェッドの言葉に頷くエンリッヒの顔には、先ほどまであった恐縮も青ざめた表情もなかったが、いつも彼が浮かべるあの嫌味な笑みも浮かんでおらず、ただエヴァンシェッドに見とれている締りのない表情だけがあった。

「ふーん・・・、じゃあ、ヒロは元々『あの女』を逃がしたせいで天使に捕まって、黒の武器を持つ者として、サンタマリアやラインディルトに目を付けられたんだね。」
エンリッヒから、私と不浄の大地で出会ったところから全部の話を聞き終えたエヴァンシェッドは、そう言って考え込むように頬に手を添えたようだ。
『ようだ』というのは、私がエヴァンシェッドの背中しか見えておらず、ちゃんとその姿を確認できないからだ。
エヴァンシェッドの離宮の客室らしい部屋で、私は一人ベッドの上に座らされ、エヴァンシェッドとエンリッヒはベッドから少し離れたテーブルに相対して椅子に座っていた。
ベッドの位置から、エンリッヒは正面なのだが、エヴァンシェッドは私に背を向けている。
因みにリリアナは私のために食事を用意してくると言って、部屋を

出て行ったまま帰ってこない。

天使二人は私の話をしているにも関らず、どうしてか当人の目の前に当人をを無視して会話を進める。

それに些かの疑問を感じつつも、私はエヴァンシェッドがハクアリティスのことを『あの女』と言ったことに眉を顰(ひそ)めた。

元はといえば、今は黒の一族や黒の武器(カシュケルノ)のことばかりで天使たちに興味をもたれているようだが、最初はハクアリティスを天使たちから逃がしたことが始まりだったはず。

そして、目の前にいる美貌(びぼう)の天使はその夫だったはずである。

なのに・・・。

「まあ、あの二人の考えていることは大体想像が付く。・・・ヒロ。」

私がエヴァンシェッドの背中を睨みつけるように見つめていると、突如、私の存在などないかのように振舞っていたエヴァンシェッドが私を振り返った。

「・・・。」

紫の高貴な薫りのする瞳が私を映す。

だが、その瞳には、その声同様、失踪(しっそう)した妻を心配するような、その妻を逃がした汚らわしいアーシアンを憎むような、感情という色は見えなかった。

ただただ、美しく見惚れるような天使が、そこにいるだけだった。

この天使は、自分の妻のことに何の感情も持っていないのか？

ハクアリティスとの会話が脳裏をよぎった。

『あたしの意思なんて関係ない。天使が嫁に来いといえば、あたしが嫌がろうが何だろうが、あたしは嫁に行かなきゃならなかった。

そのとき初めてあたしは、自分がが天使の人形だって思った。』

『人形？』

『そう。逆らうことも、逃げ出すことも叶わない。天使の意のままに動く人形よ。所詮（しょせん）、天使なんてみんな心の中では人間を見下しているのよ。あたしはずっと見下されてきた。誰に頼ることもできなくて、もう気が狂いそうだった。それだけじゃない、あいつはあたしから全部奪った。もう耐えられなかった・・・。』

確かにハクアリティスに対して、この天使が何かしらの感情を持っているようには見えない。

だが、それはハクアリティスだけに対してだけというよりは、まるで・・・・。

「怪我の具合はどうだ？」

「見ての通りだ。大したことはない。」

本当はそんなこともないのだが、敵とも味方とも分からぬ相手の前で弱みを見せることができるほど強い人間では私はない。

それに、自分の推測が正しいとするなら、より一層、この天使を信用する事などできなかった。

「君はサンタマリアに協力するつもりかい？」

「断る。」

今となっては、サンタマリアどころじゃない。

天使全てから、さっさと縁を切って、ここから逃げ出したい。

それも一刻（いっこく）も早くだ。

「ちょ・・・ヒロさん。」

「エンリッヒ君は、少し黙っていてくれたまえ。」

エンリッヒが私の返事に声を上げたが、エヴァンシェッドを前にしては黙らざるを得ない。

「どうして、断るんだい？悪い話じゃないだろう。サンタマリアは

君を奴隷のように扱うつもりはないだろう。君を一人の人間として協力を仰がなかったか？君には恐らくエンディミアン以上の待遇が用意されているはずだ。」

待遇の話までサンタマリアとした覚えはないが、彼女は確かに私の意志を尊重しようとはしていた。

「例えそうだとしても、協力するか否かは別問題だろう。」

私の言葉に、エヴァンシェッドの表情が美しく歪んだ。

「私はこれ以上、天使と関わるつもりはないんだ。大体、どうして私の手当てなどした？私に用があるというサンタマリアならともかく、万象の天使、貴方には私を助ける理由はないだろう？」

先ほどエンリッヒを魅入らせたあの美しさに歪んだ表情が、今度は私に向けられている。

自分でもこんな美しい天使に、『歪んだ』という表現を思いついたか分からない。

ただ、美しいというだけではない、エヴァンシェッドはその全てが、酷く凶悪なものに感じられたのだ。

サンタマリアに心の中を読まれていると分かったときの恐怖にも似ているが、彼を目の前にして感じる恐怖はその時に感じたものよりも遥かに得体が知れなく、強烈だ。

私はエヴァンシェッドに視線を置いたまま、手探りでベッドの上にある黒の剣を探した。

「天使と係わりあいたくないなんて、珍しいことを言うんだな。」

言葉を発しながら、彼は椅子から立つと私のほうへ一歩一歩近づいてくる。

一層、その顔を壮絶に美しく歪めながら。

その声に、瞳に、空気に、魅入られそうになる自分を感じた。

だが、それに抵抗するように、私の本能は呟いていた。

『彼に魅入られては、屈してはいけない。』

魅入られては最期エンリッヒのように、この美貌の天使に抗えらなく、支配されてしまう気がした。

エンリッヒはそうとは感じていないかもしれないが、彼の色をなくしたその表情に彼がこの天使に乗っ取られてしまったような錯覚を覚えるのだ。

私は黒の剣を探し当てると、シーツの中で静かにその刃を鞘から取り出した。

「はぐらかさずに私の問いに答えろ。どうして、私を助けた?」

私はエヴァンシェッドの力に負けないように、強く彼を睨みつけ、言葉を強くした。

しかし、いくら彼を睨みつけたところで、美しいだけの、その姿からはエヴァンシェッドの考えていること、その感情、彼が生きているという匂いというか、名残みたいなものが全く見えてこない。

こんな生き物は、初めてだと思った。

どんな怪物だろうが、何人か出会った天使だって、その姿や、服装、話し方、癖や醸し出される空気など様々なものから、その生き物が生きてきた結果というか、その生き物独特の匂いの様な、名残の様なものが大なり小なり感じられるものだ。

だが、この天使からはそれが一切感じられない。

ただ私に分かるのはこの天使が、異常に美しいというだけだ。

・・・これは、本当に生き物なのだろうか?

今、どんな化け物に出会ったときよりも、私は恐怖を強く感じていた。

しかしそれでも、私がエヴァンシェッドを目を逸らさずに見つめていられるのは、辛うじてその化け物の背中の翼が、『エヴァ』だと

思えればこそ。
その化け物に、大切なエヴァの名残を見ることができるからだった。

「はぐらかしたつもりはないけど。君を助けたのは、そうだな・・・まあ、翼(エヴァ)の封印を解いてくれたお礼・・・ということにしておいてくれ。君が封印を解いてくれなければ、俺は未だに片翼の飛べない翼の天使(エヴァンシェッド)のままだったからな。君には感謝しているんだ。」

『・・・ということにしておいてくれ。』だぁ？

何だその煮え切らない答えは。

私は目を細めた。

この男とは性格的にも、非常にあわない予感がした。

どうにも、エンリッヒのように嫌味な笑みや言葉で話されているわけでもないのに、エヴァンシェッドの一つ一つの行動や言動に恐れと共に、苛立ちを感じる自分がいるのだ。

だが、今は感情のままに身を任せては、エヴァンシェッドに付け入れられてしまう気がして、私は感情を抑(おさ)え、声を抑(おさ)えた。

「・・・・礼のつもりなら、手当てなどいらんから、私を不浄の大地(ディス・エンガツド)に返してくれ。」

「どうして？」

間髪いれずに返ってきたエヴァンシェッドの問いに、抑(おさ)えている感情が強く動くのを感じた。

気が付けば、エヴァンシェッドは私のすぐ傍まで来て、私を見下ろしていた。

その目を見た瞬間に駄目だと思った。

恐怖が、苛立ちが、私を強く揺さぶり追い詰める。

気が付けば、私はシーツの中に隠していた黒の剣(ローラレライ)をエヴァンシェッドに突きつけて叫んでいた。

「だから言っただろ？私はもうこれ以上天使に係わり合いたくないんだ！もう、天使の領域（こんなところ）には、いたくないって言っているんだよ！」

「ヒロさん！いかん！」

エンリッヒが逆上した私を取り押さえようとするが、エヴァンシェッドが腕を上げてそれを止めた。

エヴァンシェッドは私を、美しい笑顔で歪めたまま見つめていた。

その目を見てはいけないと思うのに、その視線から逃げることができない。

「不浄の大地（ディス・エンガッド）に戻せっていうのかい？君は天近き城（フェデス・ジグロア）よりもあの死の世界のほうがいいっていうの？」

『違うだろ？あんな苦しい毎日、死に怯える毎日など、もういやだろう？』

エヴァンシェッドの誘惑の声が、重なって聞えた。

「そ・・・うだ。」

思わず頷いてしまいそうな誘惑の声に、私は首を振った。

だが、エヴァンシェッドを前に何故だか、強く出られない自分を感じた。

それでもエヴァンシェッドの力に屈しないよう、黒の剣（ローラレライ）を握る手に力を込めた。

体が焼けるように熱く、朦朧（もうろう）として意識が遠のく。

「サンタマリアに協力するのが嫌なら、何もしなくていいさ。言っただろ、俺は君にはお礼がしたいんだから、何もせず、ここで一生幸せに暮らしてくれてもいいんだよ？」

『何もかも忘れて、この楽園にいようよ。苦しいこと、悲しいこと、

全部忘れられる。ここには幸せだけがあるんだから・・・。』

美しい瞳に吸い込まれ、甘い誘惑が私の思考を奪い、私は自分の心が見えなくなるような感覚に陥(おちい)った。
あれ?私は何を考えて、この美しい天使に黒の剣(ローラレライ)を突きつけていた?
そう思った瞬間に、黒の剣(ローラレライ)が手の中から落ちた。

「わ、たしは・・・。」
力なく言葉を発する私に、エヴァンシェッドは更に笑顔を深く歪め、私にそっと手を伸ばす。
そして、私の頬に手を添えるエヴァンシェッドを見上げながら、引き寄せられてしまう力に、誘惑に、私は抗(あらが)えずに身を任せようと・・・。

しかし、そんな私の視界に白い翼が目に入った。
『ヒロちゃん。』

そして、エヴァが私の名を呼ぶ幻聴を聞いた瞬間、私は僅かながらに自分を取り戻した。
体はまるで金縛りにあったように動かせず、エヴァンシェッドと口付けを交わさんばかりに近い顔を動かせないままだったが、それでも強張る口を再び開いた。

「天近き城(フェデス・ジグロア)・・・、いや、天使たちのいる場所には・・・いたくない。・・・私を出せ。私を解放しろ、万象の天使。・・・・それが私の願いだ。」

バチッ!

言葉に呼応するように、私の頬に添えられていたエヴァンシェッド

の手から静電気のような強い力が一瞬発せられた。
『?!』
私も金縛りから解放されたように、はっとしてエヴァンシェッドを見ると、彼は右手を押さえて、こちらを忌々(いまいま)しそうな表情で見ていた。

なんだ、そんな顔もできるんじゃないか。

そちらのほうが余程、親しみやすい表情だと思った。
私が彼を見つめていると、エヴァンシェッドは私を静かに見下ろしながら言葉をつむいだ。
その顔はもう感情の色は消えていて、美しさに歪(ゆが)められていた。
「・・・君のいいたいことは理解したよ、ヒロ。しかし、少なくともその怪我が治るまでは面倒を見させてくれ。そうしないと俺はエヴァに顔向けできない。」
そういうと、私の答えも聞かすに背を向けると、こちらの様子を呆然と見ていたエンリッヒを振り返った。
「エンリッヒ。君はサンタマリアにヒロの事を監視するように言われているんだったよね?」
「え?!・・えっとぉ、一応監視じゃなくて、警護なんですがぁ・・・。」
エンリッヒは急に話を振られて、しどろもどろに答えたがエヴァンシェッドは構わずに続けた。
「どっちでもいい、君はここにしばらく、いてくれて構わない。ヒロが逃げないように見張っててくれたまえ。」

『!』
先ほどまでとは、打って変った彼の態度と言葉に私は目を見張った。
しかし、それを問いただす前にエヴァンシェッドは言い捨てるように言うと、音を立てて足早に部屋を出て行ってしまった。

そして、部屋には私と呆然としているエンリッヒだけが残された。

「なあ、ヒロさん。」

ぽつりと、エヴァンシェッドが出て行ったほうを見ながらエンリッヒが私に問いかけた。

「何だ。」

「エヴァンシェッド様、急にどないされたんでしょ？ヒロさんが急に襲ったりするから、驚いたんでっしゃろか？」

まるで、寝ぼけたままのような表情のエンリッヒはエヴァンシェッドの影響下にまだあるのだろうか。

エヴァンシェッドの得体の知れぬ力が、何たるかを知らない私にはよく分からない。

「まさか、黒の剣（ローラレライ）を鼻先に突きつけても眉一つ動かさなかったような奴が驚いてたわけないだろ？」

「じゃあ、どうして、急に？！」

まるで、母親に置いていかれた子供のような顔のエンリッヒが、突然私の肩を掴（つか）んで体を揺らし始めた。

「いたっ！おい、エンリッヒ！確（しっか）りしろ！」

痛む体を揺らされてはたまったもんじゃなく、私はどう見ても正気じゃないエンリッヒを思いっきりぶん殴った。

エンリッヒは受身も取らずに、みっともなく床に転がる。

「・・・あ。ヒロ・・・さん？」

そして、殴られた顔を押さえて私を見上げた顔は、まるで夢から覚めたようにただ呆然としていた。

「どうして、私に殴られたか覚えているか？」

「・・・それが、何となくは覚えとるんですが・・・、わい、何か

しました？」
「・・・。」
とりあえずは、正気を取り戻したようだが、どうも記憶も曖昧（あいまい）らしい。
私はやはり、あの万象の天使の力だろうとエンリッヒを視線を置いて、エヴァンシェッドのことに思いを馳せようとしたが、突然エンリッヒが大声を張り上げたので驚いた。

「あーっ！！！！」
「？！・・・なんだよ。」
「思い出しました！ヒロさん、わい、わい、今さっきひょっとして、エヴァンシェッド様に全部話してしもうた！？サンタマリア様がヒロさんに、協力をお願いしとる事とか？！」

「・・・。」
エンリッヒの勢いに言葉なく私が頷くと、エンリッヒが叫びを上げながらその場に崩れ落ちた。
「ぎゃー！殺される！わい、あの人に殺されてしまうわ！・・・ヒロさん、助けてくださいぃ！」
「はぁ？何を言い出しとるんだ・・・。」
突然訳の分からないことを言い出して、叫びもだえながらエンリッヒがベッドに縋（すが）りつくのを、私は君が悪くて足で蹴り落とす。
それでも、負けじとすさまじい形相で私に縋りつくエンリッヒを無視しながら、私はやはり先ほどまでのエンリッヒの様子との違いに、エヴァンシェッドに何かしら他者を支配するような力があるという直感を確信に変えた。

ただ、一つ。
どうして、私を支配できそうな一歩手前で彼が私から手を引いたのか・・・。

それだけは少しばかり、疑問が残った。
それについて色々考えをめぐらせて見たが全く答えが出ないまま、
私がその理由を知るのは大分先の話である。

第二十七話　私は天使に喧嘩を売った　其の二（後書き）

謎多きエヴァンシェッドですが、少しどんな奴か分かっていただけましたか？いや、ていうか更に謎が深まりましたかね？どうも、かいてる自分で言うのもなんですが、この人は非常に難しい人です。どうしてこんな人を主要人物に据えたんでしょう私・・・。（でも一応つかみ所のない人物っていう設定なんです）

しかし、ヒロは今後このエヴァンシェッドとの関わり合いから色々面倒に巻き込まれていきます。

第二十八話　私は天使に喧嘩を売った　其の三

「ヒロさん、ヒロさん。」
いやに嬉しそうなエンリッヒが私の名を呼んだので、私は億劫な表情のまま彼を振り返った。
「何だよ？」
「あはは、機嫌悪そうですなぁ。」
先日の様子とは違い、完全に自分を取り戻しているエンリッヒの顔には、あの嫌味な笑みが張り付いている。
その表情に私はこめかみの皺を更に深めた。
言われなくても、自分の機嫌が悪いことは自覚している。

「じゃあ、ヒロさんの機嫌が少しでも晴れるような話をしましょか。」
「・・・。」
無言で彼の言葉を促す私にエンリッヒは嫌味な笑みを引きつらせた。
多分、酷く極悪な顔をしている私がエンリッヒを睨んでいることだろう。
機嫌の悪い私に話しかけるなら、睨まれるくらいの覚悟を持って接していただきたい。

その心の声が伝わったのか、エンリッヒはすぐに楽しそうに顔の笑みを深くして私に言葉を続けた。
「聞いて、驚きますなぁ。」
さっさと言え。勿体つけるな。
「ヒロさん、エヴァンシェッド様の『男の愛人』の称号を得ましたでぇ。」

「・・・・。」

「あれ？リアクションなしでっか？」

バコン。

どんなリアクションを期待していたか知らないが、面白そうに私を遠慮なくのぞきむエンリッヒを見ることなく、私は何の前触れもなく彼の顎下を思いっきりぶん殴った。

私のアッパーは綺麗に決まり、エンリッヒは弧を描いて床に落下した。

リアクションがないわけではないのだ、ただエンリッヒのいった言葉に色々なことを通り越しすぎて、私は感情を表情には出せなかったのだ。

エンリッヒに心配してもらわなくても、心の中では驚きやら怒りやら、吹き荒れまくりである。

『男の愛人』だとぉ？！

ありえない！ほっんきで、ありえない！

これも、それも、全部、あの馬鹿天使のせいだっ！！

私は倒れたまま起き上がらないエンリッヒを踏みつけながら怒りを発散させてみたが、一向に心は晴れないまま鼻息を荒くした。

第二十八話　私は天使に喧嘩を売った　其の三

そもそも、こんなありえない状況の始まりは何だったのだろう。
私が悪夢から目覚めたその日、今となっては数週間も前の話だが、美貌の天使・エヴァンシェッドは私を支配しようとして叶わないことがわかると、私を天近き城（フェデス・ジグロア）の自分の離宮に幽閉した。
特に私自身が何かに拘束されていると言うことはない。

ただ、離宮は常にエンリッヒが連れてきた天空騎士団（アイリッシュグランド）の戦士たち十数人に囲まれ、ネズミ一匹出入りできないような状況だ。
しかも、私は離宮から怪我を理由にされて一歩も外に出ることも叶わない。
力尽くで逃げ出すにしても、天空騎士団（アイッシュグランド）相手では、私もそれ相応のリスクへの覚悟が必要だ。
しかも、エヴァンシェッドが何を考えているかさっぱり分からないままなので、今のところ私は離宮でじっと息を殺して、彼の出方を窺（うかが）うしかなかった。

だから、エンリッヒの言った噂が実際どんなものかは知ったことではないが、何かしらの噂がたつことは予想がついた。
私は天使でも、エンディミアンでもなく、アーシアン。
しかも、天使たちの敵であった黒の一族の末裔だ。
監禁するとなれば、普通は一ヶ月前まで私がいた断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）なりと然（しか）るべき場所があろうはずである。
少なくとも、万象の天使・エヴァンシェッドが生活している離宮ではないはずなのだ。
そう断じて、こんな監禁生活が許されるはずもないのである。

「ヒロ、何か嫌なことはないかい？」

これが彼の私に対する口癖だった。

エヴァンシェッドが毎日私の顔を見来て（大体これも、どうかと思うのだが）開口一番に口にするこの言葉に、私の答えもいつも一緒だった。

「天使の領域（フィリアラディアス）にいるのが嫌だ。」

不浄の大地（ディス・エンガッド）に帰りたい。

それだけが、私の願いであり、望みだったがエヴァンシェッドは私に美しく微笑んで、

「そう、何もないならいいんだ。それより、今日は美味しいお菓子を持ってきたんだけど、食べるよね？」

そう言って、私の願いを全て無視する。

私の願いを聞きたくないだけなのかと思って、ある日、

「この部屋の壁紙が気に入らない。」

といつもとは違う、かといって簡単に叶えられそうもないことを言ってみた。

すると、エヴァンシェッドはいつものように美しく微笑みながら、私の願いに快諾（かいだく）したのだ。

壁紙はその日の内に、あっという間に違うものに取り替えられた。

それだけでは確信がもてず、何度か同じようなことを繰り返してみたが、そのどれもが相当面倒な願いにも関らず、エヴァンシェッドは微笑み一つで私の願いを聞き届けた。

・・・どうやら、私の願いを聞きたくないわけではなく、不浄の大地（ディス・エンガッド）に帰りたいという願いだけを聞きたくないらしい。

彼が何を考えているかなど興味もないし、干渉する気もないが、どうして、ここまで頑（かたく）なに私を不浄の大地（ディス・エンガッド）に返さないのか、それが全く理解できなかった。

だって、彼は私をここに留（とど）めておくだけで、サンタマリアのように

黒の武器（カシュケル）の力を求めようともしない。
むしろ、私に協力を仰（あお）ごうとするサンタマリアと私を会わせまいとしているらしい。（これは、エンリッヒからの情報だ。）
それどころか、エヴァンシェッドが私に近づけないのはサンタマリアだけではない。
黒の一族という、天近（ここ）き城においては、どう見ても異端（いたん）である私に、天使たちが興味を持ったり、差別感情を持つのは至極当然といえるだろう。
しかし、エヴァンシェッドはその全てを私の周りから排除をし、この離宮に出入りする者で、私のことをとやかく言うような天使は即刻（そっこく）で私の前から消えた。

おかげで私はこの数週間、生まれて初めてこんなに刺激の少ない、ただゆっくりとした穏やかな毎日を過ごすこととなった。
このままここで、朽ちてしまいそうな、ただ只管（ひたすら）に穏やかでゆっくりとした時間。
・・・正直、息苦しくて仕方がなかった。
不浄の大地（ディス・エンガッド）のあの乾いた空気が、広がる大きな青空が、恋しかった。
生きることだけで精一杯の毎日だろうが、こんなところで毎日何もしないで死んだように生きているより、余程あの毎日のほうが幸せだ。

だから、何度もエヴァンシェッドにその旨（むね）も訴えた。
エヴァのことに感謝してくれているならば、私をここから出してくれと、相当下手にでて言ってみたりもした。
しかし、その全てをエヴァンシェッドは一切無視するのだ。
暖簾（のれん）に腕押しとは、正にこのことかと思った。

しかもある時なんぞ、偶々（たまたま）その場にいたエヴァンシェッドにしな垂れかかっていた連れの女に、

「あらぁ、そんな事いって、エヴァンシェッド様の気を引きたいだけじゃなくて？これだから、人間は卑しいのよ。」

と、口紅で毒々しいまでに赤い唇で嘲笑われながら言われた。

男女の逢瀬を邪魔した私が悪い・・・と思えれば、まあ我慢できた。

ただ、それには相当の忍耐を必要としたのはいうまでもない。

しかして、このエヴァンシェッドの連れの女というのに興味を持たれた方もいるだろうから、いくらか説明を加えたいと思う。

彼女こそ、本当のエヴァンシェッドの『愛人』さん。

しかも、ここで更に説明すると、このエヴァンシェッドの愛人というのは、一人ではない数人はいるのだ。

どうして、そんなことを私が知っているかといえば、この離宮はエヴァンシェッドの天近き城の自室みたいなものらしく、彼は仕事以外の時間を、ここで概ね過ごしている。

おかげでエヴァンシェッドが自室に何度も女を連れ込むのが、気配に聡い私には嫌でも分かってしまうのだ。

毎晩、エヴァンシェッドの部屋には女らしい人物の気配がし、しかも何度か気配だけでなく、見かけた女が全部違う女なので、愛人がたくさんいるという予想がつくのだ。

・・・出歯亀では、断じてない。

そもそも、奴はハクアリティスという美しい妻のいる妻帯者であったはずだ。

その妻は現在失踪中。（というか脱走中か）

なのに心配するとかそう言った様子は皆無で、毎晩違う天使の女性を連れ立って離宮に帰ってくるエヴァンシェッドを私は白い目で見つめる。

確かにあの容姿だ。

寄ってくる女は星の数ほどいるに違いない。

別にそれについて、とやかく言うつもりはないのだが、しかし、な

らば妻を持たなければ良いのに・・・と、純粋な感想を抱いた。
何人もの愛人を持つというもの、私には正直理解できない。
しかし、これだけ派手に愛人さん達を連れて歩いているのだ、きっと愛人さん達も互いの存在は認識しているだろう。
それでもいいというのであれば、他人が何かをいうのは野暮というものだろう。
しかし、それでもと思うのは、私が真面目すぎるのか、はたまた天使と人間ではそのあたりの倫理観念（りんりかんねん）が違っているのか。

・・・まあ、私が口出しをしていい問題じゃないのは重々承知だが、少しだけでも関わりのあったハクアリティスのことを思うと少しだけ胸が痛んだ。
それでも、それが嫌で彼女もここから逃げ出したのかと思えば、そんなことを気にする必要もないのかもしれない。

そんなわけで、私の毎日の刺激といえばエンリッヒ・リリアナ・そしてエヴァンシェッドとの会話と接触。
時々、エヴァンシェッドの情事を目撃するといった、本当に泣きたくなるくらい情けない毎日だった。
数週間たち、私の傷もかなり癒えてきた今、その思いは膨れ上がるばかりで、最近の私はただただ天使の領域（フィリアラディアス）の白壁に囲まれた小さな空を見上げながら、不浄の大地（ディス・エンガッド）を恋しがる毎日を送っていた。

そして、ついに色々私の中で限界が越えた。
我慢に我慢をし続けて、遅かれ早かれいつかはくる事象であったが、エンリッヒの愛人発言によって、ついに爆発してしまった訳だ。
本当はエヴァンシェッドと話なり、何なりをして、彼が私をどうしたいのか知ってからここを去ったほうが気持ち悪くないだろうと考えていた。

しかし、私にだってプライドってものがあるんだ。

・・・超ちっちゃいプライドだけどな。

要は『男の愛人』扱いされて、黙っていられるほど人間ができていない・・・じゃない、そこまでのへたれじゃないってことだ。

しかして、場面はエンリッヒをぶん殴ったところに戻り、私は黒の剣を掴むと離宮に有るエヴァンシェッドの気配の元へ向かう。

因みに、エンリッヒについては、当たり所が悪かったのか、そのまま床に沈んだままだったが、私はそれには見て見ぬふりをした。

駆け出すというほどの勢いはない、だが静かなる怒りが私の中で沸々と燃えているように、若干前のめりになって私は早歩きで廊下を進む。

本当なら、こそこそ隠れながら逃げ出すほうが賢いのは分かっているが、どうしてもあの色ボケ天使に一言でも言ってやってからじゃないと、気がすまなかった。

なにしろ、もう二度と私の人生の中に、あんな綺麗な生き物が出てくる予定はない。

「あら、ヒロ。どうしたーーーーーーーー。」

無言で突き進む廊下でシーツを抱えたリリアナとすれ違ったが、彼女の言っていることに私は立ち止まることなかった。

そして、少し廊下を進んだ先にある離宮の中心に位置している広い場所。

離宮の共同談話室のような場所、そこに今エヴァンシェッドと、もう一つ気配。

部屋の真ん中にある大きなソファに不必要なほどに引っ付いて座っている男女の天使を見つけて、私は静かに声をかけた。

「おい。」
「ヒロ。」
私の声に、女に唇を寄せようとしていた美貌の天使が顔を上げた。
女が不満そうに顔を膨らませて、きつい瞳を私に向けた。
「何か用？何か嫌なことでもあったのかな？」
「いや、特に何もない。」
女を放ってソファから立ち上がるエヴァンシェッドに、私はこれまでにないくらい笑顔を浮かべた。
しかし、心の中では、こいつのせいで私は気苦労ばかり（しまいには『男の愛人』だよ）、あの綺麗な顔を・・・っていうのは、やっぱり気が引けるから、ボディーブローくらいはくらわしてやりたい、と思うのは仕方ない感情だと思う。
（・・・まあ、実際はしないけど。（やっぱり、所詮は小心者なのだ。））
「何かご機嫌だね。」
「エヴァンシェッドさまぁ。」
私の笑顔に何かを感じ取ったのかエヴァンシェッドが一歩近づこうとするが、厚化粧の女がそれを甘ったるい声と、細い指で引きとめる。
精々（せいぜい）貴様はその女とよろしくしていろ。
「ああ、やっとここを出て行けると思うと嬉しくて仕方ないんだ。」
そう言い放つと、エヴァンシェッドは面白そうに目を見張った。
いかにも私の言うことを信じていないといった風だ。
そりゃそうだ。普通、監禁している側にわざわざ宣言して出て行こうとする脱獄囚などいない。
「それは、それは。」

「あはははっ、バッカじゃないの？」
エヴァンシェッドの馬鹿にするような声に、更に女の甲高い声が被さる。
「何者かしらないけど、エヴァンシェッド様に少し目をかけられてるからって、でしゃばらないでよ。邪魔しないで頂戴！」
つかつかと私によってきて言い放った彼女は、頭が足らなさそうな女性だったが、怒った顔も綺麗で愛らしい。
さすが万象の天使の愛人さんだ。
私とは大いに違う。（一緒にされたくもないが）
「申し訳ありません、お嬢さん。もう、出て行きます。世話になったので、一言ご挨拶をと思っただけです。」
私はそう言って彼女に恭しく頭を下げ、彼女の後ろにいるエヴァンシェッドをありったけの怒りを込めてを睨みつけてやった。

「本気でここを出て行くつもりんだ。どうして？」
その目に冗談がないことを悟っても、エヴァンシェッドは何でもないように私に問いかける。
ただ、一瞬その顔がまた美しく歪んだように見えて、私は自分を保つために黒の剣を強く握り締めて口を開く。
「前々からここを出て行きたいとは、何度も言っていたはずだ。聞いていないとは言わせない。それに、どうして・・・ね。それは何度も言ってるが、ここは天使の場所だ。私の場所じゃない。だから出て行くんだ。」
そんな私にエヴァンシェッドは言い放った。
「俺が君に場所をあげているだろう？」

『あげている？』
その言葉に私の笑顔が固まった。

なんだ、その上から目線。

まあ、エヴァンシェッドが私と対等に接しようとしているのが、装(よそお)っているだけなのは知っているのでその言葉にも驚きはしない。
その本質では、私を酷く見下していることも重々知っている。
エンリッヒやサンタマリアが、私という個人と常に対等でいてくれているから、エヴァンシェッドのその白々しい態度が余計に目だって見えるのだ。

・・・とはいうものの、これが本来の関係であるのは、実際エヴァンシェッドが私なんかが口を聞くのも、おこがましい相手だというのはわかっている。
加えて、確かに私はアーシアンだ。
そりゃ、黒の一族かもしれない。
天使から見れば罪人でしかない。
しかし！しかしである！
こんな愛人とよろしくしているような、馬鹿男にそんな風に言われるのは非常にムカつくのだ。
天使とか、人間とか、天使長とか、黒の一族とか、全部全部取っ払ってしまえば、こんなくそ男に謙(へりくだ)った態度で接することもないのだ。

ビビるな、私。
そう自分に言い聞かせながら、私は美しく歪むエヴァンシェッドから目を離さずに静かに微笑み、そして悪意を持って言い放った。

「あげるてるだと？貴様が下さるような場所はいらなんだよ、この馬鹿天使が。」

かくして、微笑んだ私は今まで天使の領域(フィリアラディアス)に来て以来溜りに溜まったフラストレーションを発散するかのように、天使長・エヴァンシェッドに喧嘩を売った。

まさか、この喧嘩のせいで自分が非常にやばい立場になるとは思わずに、ただ、その場ののりで、そんな気は更々なかったのに、私は喧嘩を売ってしまった。

この美しくも、空恐ろしい天使様が、さらには相当に執念深いとは露とも知らずに・・・。

第二十八話　私は天使に喧嘩を売った　其の三（後書き）

ヒロＶＳエヴァンシェッド、第一ラウンドのゴングが鳴りました。
この二人の相性は最悪です（笑）まあ、二人の相性については、次の話で二人の考え方がもう少しはっきりするので、そこでまた詳しく解説できたらと思ってます。
今回、ヒロは『男の愛人』発言で、ちっちゃなプライドまで傷ついちゃいましたね。しかも、ほんとに囲い者みたいな生活していた自覚があるだけに、本人も溜まりに溜まっていたモノがあったんです。そうしてエヴァンシェッドの愛人まで巻き込んで、喧嘩を売ってしまったヒロ。エヴァンシェッドは果たして喧嘩を売ってきたヒロにどういう対応をするのか・・・。
次回も頑張って更新したいと思っていますので、よろしくお願いします。

第二十九話　私は天使に喧嘩を売った　其の四

長々とくどくどと、そして何故だか妙に堅い言葉で紡がれた私の静かなる怒りは、天近き城（フェデス・ジグロア）の夜の静寂に響いた。

「こんな鳥籠（とりかご）の鳥みたいな生活の、何処が私の居場所だと？野生の鳥には、鳥籠（とりかご）の世界には小さすぎる。こんな所にいろというのは、私に死ねと言っているようなものだ。大体、自分の居場所は、誰かから与えられるものじゃない、自分で勝ち取るものだろ？考え方は様々かもしれないが、少なくともこれだけは言える、私には貴様から場所を与えられるなんて、屈辱（くつじょく）でしかない。」

息継ぎも少なく言いながらエヴァンシェッドに黒の剣（ローラレライ）を突きつけた私は、肩で息をしていた。
言葉は更に止まらない。

「だから私は、私が自分で勝ち取った居場所に戻る。それを貴様に指図（さしず）される覚えはない。貴様はエヴァの一部だから、できるならば穏便（おんびん）に出て行きたかったが、貴様は私の言うことなど耳も貸さない。・・・私も色々限界なんだ。仕方ないから、このまま強行突破で天近（ここ）き城を辞することにした。」

言い切った私は、そこでやっとエヴァンシェッドの纏（まと）う空気が数週間前と同じ、ただならぬ雰囲気にあることに気が付いた。
びりびりと、空気が痛い。冷や汗が流れる。動悸（どうき）が早くなる。
だが、それでも一度売った喧嘩を取り消すつもりは毛頭なかった。
ここで逃げ腰になっては、折角売った喧嘩が勿体無（もったいな）い。

私たちは互いに互いを見つめあい、睨みつける。

後々振り返れば、私とエヴァンシェッドの、世界の全てを巻き込みながらも、最後まで二人っきりでしかなかった、長い長い喧嘩が始まったのは、きっとこの時だと思うのだ。

・・・この時は何にも考えてなかったが、これは運命なのだと後の私は思うこととなる。

第二十九話　私は天使に喧嘩を売った　其の四

私が言いたいことを概ね言い終わるまで、エヴァンシェッドはただ黙って話を聞いていた。

そして私が黙り、夜の沈黙がリビングに落ちると、飛び切り美しい顔を私に向けた。

「そう。」

ゾクリと、悪寒が背中に張り付いた。

その言葉は穏やかな中にも、底冷えするような冷たさがあった。

美しい天使は、先週と同様に何か別の生き物にその姿を変えるような錯覚を私に見せた。

「だからって、俺がそれを許すと思っているわけじゃないよね？」

美しい紫の瞳が怪しく光り、エヴァンシェッドの纏うあの強い力が、再び私を支配しようとプレッシャーをかけてくるような感覚。

それでも、自分から喧嘩売っといて、その相手に怯えるなんて格好の悪いことできるわけもなく、私はまた虚勢を張って、強がりをいってしまうのだ。

「貴様に許される覚えはない。」

私のその虚勢に、天使は美しく歪む。

「ふふふ。君って本当に面白い奴だよね。どうしてか、君には俺の力が効かないみたいだ。・・・いや、効いてない訳じゃないよね？単なる強情っぱりなだけか？」

力が更に大きく、強くなるのを感じた。

今までエヴァンシェッドが被っていた美しいだけの仮面の下から、私が歪んでいると感じた、何か禍々しいものが仮面の中から顔を出す。

心臓が引き絞られるように痛んだ。

今まで朧げながらに感じていたものが、はっきりと体にびりびりと叩きつけられて私の体と精神が悲鳴を上げる。

リビングの花瓶にひびが入り水が漏れ、本棚から本が数冊落ちた。

力がはっきりと、現実の現象となって私を襲う。

これが、万象の天使の力。

かなりギリギリでも耐え切れないものではない、それでも強い力に私はじりじりと押しやられる。

「？」

何かが押しやられた足元にあたって見下ろすと、そこにはエヴァンシェッドの愛人が放心して、顔をぐちゃぐちゃにして泣きながら、腰を抜かしていた。

だが、エヴァンシェッドはそんな愛人は目に入っていないように、私だけを強い光をたたえたまま見つめ、力を向けている。

どうやら、彼女を盾にしたところで力は緩まないらしい。

・・・女性は大事にしてやれよ。

妻や愛人に対するエヴァンシェッドの態度に心の中で言葉を吐き捨

てながら、私は押しやられる力に逆らいながら、愛人にエヴァンシェッドの力が当たらないような位置に移動した。
あのまま私の巻き添えをくって、エヴァンシェッドのあの力の影響を受け続けたままじゃ、彼女がどうなるか分かったものではない。
エヴァンシェッドの愛人のために何かしてやる必要もないのだが（本来は寧ろエヴァンシェッドの役目だろう）、これは私とエヴァンシェッドの喧嘩だ。
他人を巻き添えにするのは、嫌だった。
私が移動してやれば、力から解放された愛人はそのまま力尽きたように気を失った。

・・・とりあえず、一安心だ。

「ヒロは優しいな。自分を罵った女を助けてやるなんて。」
愛人が見えていないかとも思ったが、そんなことあるはずもない。
私はエヴァンシェッドの力に押されながらも、彼を睨みつけた。
「どうして助けてやらない？貴様の愛人だろうが。」
「そんな女、どうでもいいし？」
軽い言葉に、苛立ちが募った。
「最低だな。自分を好いていてくれる女性を。」
声が自然と低くなる。
「真面目だなぁ、ヒロは。そんなんじゃモテないよ？大体、この女達だって、そういう俺だってわかってて、近づいてくるんだからいいんじゃない？」
エヴァンシェッドが言葉を重ねるたびに、胸糞悪くなる。

だが、エヴァンシェッドはそんな私の心情などお構い無しで、愛人から私に視線を移し、本当に不思議そうに顔を傾ける。
「それにしても、本当に初めてだよ。ここまで俺に屈しない奴。どんなに肉体的・精神的に屈強な天使も人間も、これだけ俺が本気に

なれば、俺の前に皆が跪くのに。降参すれば楽になれるよ？楽になりたくないの？」

言われなくとも、楽になりたいわ！

・・・とは、口が裂けても言えない。（本音はそうだが）

確かに自分で言うだけあって、今のエヴァンシェッドは、もはや美しい天使の仮面を完全に取り去り（・・・とはいっても、美しさはそのままだが）、私を肉体的にも精神的にも、ギリギリのところまで追い詰めている。

だが、彼の前に屈してしまえば、あのときのエンリッヒのようにエヴァンシェッドに支配されてしまう。

それは死んでも嫌だった。

何しろ、エヴァンシェッドは私が喧嘩を売った相手だ。

その相手に支配されるほどの屈辱もない。

そんな意地だけが、今の私をギリギリのところで支えていた。

「大体、今みたいな力を使う俺を見ると皆、刺激が強いみたいで、彼女みたいに気を失うんだけどなぁ。」

そういって、倒れた愛人さんを何の感情もない瞳を向けた。

だから、どうして自分と関係のある人を、そんな風にモノでも見るような目で見ることができるんだ。

私にはそれが理解できなかった。

「貴様みたいな、愛人侍らせるだけ侍らせといて、その愛人の面倒も見れないような、情けないクソ男に私が屈する理由が見当たらん。」

・・・ああ、また強がりを言ってしまった。

いや、本当は本当にビビってる。

それでも小心者の癖に、こうして自分が納得できないと、何が何でも強情を張ってしまうのだ。

だから、いつも貧乏くじを引いてしまうことも分かっている。
分かっていても、駄目なのだ。（あとでいつも、後悔するくせに）

そして私が心の中だけで自分を省みていると、私の言葉の意味が一瞬分からなかったのか（確かにエヴァンシェッドは言われ慣れていない言葉だろうよ）、一拍の沈黙の後、エヴァンシェッドは思いもかけず爆笑しだした。
「あはははは！俺が情けないクソ男か！初めて言われたよ、そんな言葉！この万象の天使である美しい俺に！」

「・・・自分で、美しい、言うな。」

酷く楽しそうに笑うエヴァンシェッドの言葉に、心の声が思わず口に付いた。
やばいと瞬間、小心者の私は思ったが、その突っ込みに更に笑い出すエヴァンシェッド。
・・・こいつ、笑い上戸か？
「いい！ヒロ、いいよ！この俺にこうも正面切って喧嘩売る奴なんて！しかも、そいつが俺の力に屈しない相手なんて・・・完璧だよ！」
『美しい俺』とか、美しいだけの仮面を取っ払うとエヴァンシェッドはどうやら、とんだ高飛車男らしい、いや、とんだナルシスト男？まあ、ただ綺麗なだけの作り物みたいな表情を浮かべて、当たり前のことしか口にしないよりは良いけど、それにしても、万象の天使がこれでいいものなのか？

しかも『完璧』て、何が？

と、いきなりテンションが上がってきたエヴァンシェッドに肩を掴まれた。

気が付くと体が軽くなって、エヴァンシェッドの力は私の体を解放していた。
「ヒロ！」
何を思って、力を解いたか知らないが、エヴァンシェッドは私に詰め寄って名を呼ぶ。
そして、私が想像もしない言葉を口にした。

「俺と勝負をしないか？」

美しい、どうにも悪そうなことを考えていそうな笑顔が浮かんだ。
ただ、それは今まで私が見た中で一番、生きている者の気配がする笑顔だった。
「・・・・・勝負？」
一瞬だけ、その笑顔に気をとられたが、すぐに気を持ち直した私はエヴァンシェッドの言葉を問い直した。
突拍子も、意味も無い言葉だ。
笑顔のままエヴァンシェッドが私に頷く。
「そう、勝負をしよう。何、簡単な勝負だよ。俺がヒロを完全に支配することができるか、それともヒロが俺から逃げ切るかって言う勝負。ヒロみたいな骨のある人が現れたら、是非やってみたかったんだ。」
「・・・そんな勝負に意味は無いと思うのだが。」
私には何のメリットもないし、この天使を楽しませるために私が勝負をしてやる謂(いわ)れもない。
それが顔に出ていたのか、エヴァンシェッドが眉を顰(ひそ)めた。
「何、やる気ない？」
肩を掴まれたまま尋ねられたので、躊躇(ためらい)いなく頷いた。
「うーん。じゃあ、もし俺がヒロのことを支配できないって降参したら、ご褒美(ほうび)をあげるよ。」

そこまでして、私とそんな下らない勝負をしたいかと呆れた。
まあ、本当に単なるエヴァンシェッドの暇つぶしだろう。
自分の力に屈しない私が珍しくて、少しだけ興味が沸いたというだけのことだ。
最初に喧嘩を売ったのは自分の癖に、私は全く相手にする気もなかったが、エヴァンシェッドの次の言葉に大きく動揺した。

「俺が降参したら、エヴァを君に返してあげる。」

「え・・・。」

「だから、僕のこの片翼(エヴァ)を君に返してあげるよ。君、ここ何日か何でもないようにしてるけど、翼(エヴァ)がいなくなって、かなり堪えているみたいだし、俺に勝ったら、翼(エヴァ)をーーーー。」

『返してあげる』と続くのだろうが、その言葉は空気を揺らすことはなかった。
何故なら私がエヴァンシェッドの言葉を最後まで聞くことなく、彼の鳩尾(みぞおち)に剣の柄を打ち込んでいたからだ。
どうにも興奮していたらしく、私に油断していたエヴァンシェッドは意表をついた攻撃になす術もなく崩れ落ちた。

「な・・にを。」

「軽がるしくエヴァを返すなんていうな!」

熱くなる感情が先行した。

「あいつは運命に従い、自分の望まぬ形でお前の中に戻った。あいつだって、まだ生きたいと思っただろう。私だって返ってくるというなら返ってきて欲しいさ。」

あの時のエヴァの悲壮な決意を秘めた表情を思い出すと、切なさがこみ上げてくる。

私を苦しげに見上げるエヴァンシェッドを見て、思いを吐き出した。
「だが、あいつは自分で決めて貴様に戻った。なら、誰であろうがその決意を軽々しくなかったことにしたらいけないんだ！エヴァはお前じゃない。お前はエヴァじゃないんだ。まあ、、神様然として、エヴァのことなど自分の一部くらいしにしか思っていない、お前には分からないだろうけどな。」

この天使にとっての、エヴァはその程度なのだろうが、私にとってのエヴァはあまりに大きすぎた。
だから、こんな風に軽々しく扱われたことに腹が立った。
もちろん、エヴァが返ってくると思うだけで、心は大きく動いた。
でも、エヴァの決めたことを私の思い一つ、こいつの思い一つで動かすなんてことは、違うと思った。
そんな簡単に、あいつがあんな顔をしてまで決めたことをなかったことにしてやりたくはなかったのだ。
あいつは最後まで、エヴァンシェッドの一部ではなく、エヴァとしての人生をまっとうしようとしていたのだから。

だから、そんなエヴァのことを、軽々しくいわれて私は頭に血が上っていたのだ。
「いいだろう。その喧嘩かってやるよ。」
言った瞬間、自分でまずいと思ったが、エヴァのことを言われて言葉が止まらなかった。
「だが、そのときはエヴァは返してくれなくてもいい。貴様が私に支配されるんだ。これでイーブンだろう？」
そう言って私は崩れ落ちるエヴァンシェッドの腹部に蹴りを入れた。
エヴァンシェッドが低く唸(うな)る。

「じゃあ、とりあえずは天近(ここ)き城にはいたくないんで、出て行くな。怪我の治療は世話になった。」

苦しげなエヴァンシェッドを見下ろすのは、大層気分がいいかとも思ったが、何の感情も浮かばなかった。
私の感情はエヴァンシェッドで動くわけじゃない、それは彼に振り回される女性たちであり、エヴァのためであった。
だから、エヴァンシェッドに対しては何の感情も浮かばなかったし、本当のところはエヴァンシェッドと勝負する気もなかった。

ただ、言ってやりたかった、思い知らせてやりたかったのだ。
エヴァンシェッドに支配されない人間もいるということ、そして、支配されて苦しんでいる人がいるということを思い知らせてやりたかったのだ。
でも、思い知らせるって言ったところで、私は現実問題、この天使に何かする度胸もないから、虚勢を張ってこの天使に喧嘩を売り、この天使の喧嘩を買うことくらいしかできないんだ。
だから、精一杯の意地を張って捨て台詞を言った。

「今ここで貴様を殺すこともできるけど、それじゃあ、世話になった借りを返せないからな。とりあえず、勝負はお預けだ。勝負をしたきゃ、私を見つけることから始めるんだな。」

こちらは会う気もなきゃ、正直こんなクソ天使のことを全部忘れ去りたいというのが本音であるが、エヴァンシェッドには一秒でも長く私のことを、エヴァのことを思っていて欲しかった。
まあ、私に対しては興味半分、エヴァのことは自分の一部くらいにしか考えていないだろうから、案外すぐに忘れられてしまうのかもしれない。
しかし、こうして自分のせいで、苦しんだり悲しんだりした存在がいることを一秒でも長く分かっていて欲しかった。

まあ、それは私のエゴみたいなものだけどな。

そんなふうに考えると、苦い笑みが顔に浮かんだが、私はそれをすぐに消すと、エヴァンシェッドを見下ろし、今度は苦しめるためじゃない、確実に気を失わさせるために一撃を落とした。
一瞬だけ苦しそうな表情をしてエヴァンシェッドは、そのまま床に倒れ、完全に意識を失った。
それを見届けると、私はもう二度と会うことのない美しい天使の顔ではなく、美しい白い翼を目に焼き付けた。

「じゃあな、エヴァ。お前のことは絶対に忘れないからな。」

本当はずっとこの白く美しい翼にエヴァがいるんじゃないかと淡い期待もしていたけど、翼（これ）には、いや、この世の何処にももうエヴァはいないんだ。
エヴァンシェッドに言われて気が付いた、私はまだ何処かでエヴァが戻ってくるんじゃないかという幻想を抱いていたのだ。
それを彼に言われて初めて、それはない、それをしてはいけないんだ、という現実を突きつけられたのだ。

まあ、そういう意味では、この色ボケ天使のおかげで、ちゃんとエヴァに別れを告げれたのかもしれないな。
私はエヴァに別れを告げると、エヴァンシェッドには目もくれずに踵（きびす）を返そうとした瞬間、静かなリビングに物音がした。

「誰だ?!」
私が物音のほうを振り返ると、そこには呆然とこちらを見ながら腰を抜かしている、リリアナがいた。

「あ・・・あ・・・。」

どうやら、エヴァンシェッドを交わしただけでは、ここを去れそうもない。

さて、どうしたものかと一つ溜息をついた。

第二十九話　私は天使に喧嘩を売った　其の四（後書き）

ヒロとエヴァンシェッドの喧嘩、後編です。
『喧嘩した』というよりは、なんと言うか、正直互いの主張とか、願っていることを言い合ったみたいな感じですね。喧嘩という名の意見の交換は、この回にはないです。（だから、この話も『喧嘩を売った。』ににとどめています。）
そしてエヴァンシェッドは、これまで妖しくも美しい天使のイメージを心がけていましたが（大丈夫でしょうか？）、本性もそれに見合った酷い人だというのが、何となく分かってもらえたかと思います。対して真面目で地味めなタイプのヒロとは、相性最悪ならざるを得ません。
しかし、この二人の関係性が物語の重要な要素になる予定なので、今後二人がどういう関係を築いていくのかも見所の一つ？だと思います。とりあえず、関係を築くどころか、ヒロはそれすらも放棄しようとしてますけど（笑）

あと、最後に宣伝を。
以前もあとがきで宣伝した『異邦の少年　亡国の遺産』の第二話を更新したので、お目汚しですがもし見ている人がいたらどうぞ。

第三十話　私は天使に喧嘩を売った　其の五

用心深いというか、小心者の私は、天使の領域（フィリアラディアス）から逃げるに当たり、何もかもが上手くいくとは最初から考えていなかった。

ただ一番厄介だと思っていたエヴァンシェッドを、案外簡単に黙らせることができたのはラッキーだった。

なにせ相手は天使一族の長だ。

その戦闘能力は未知数だし、エヴァンシェッドには隙がなかった。

しかし、私としてはどうしても彼に一言だけ言いたかった以上（実際は一言どころじゃ、すまなかったが）、こっそり出て行くわけにもいかず、エヴァンシェッドの出方次第では、彼を退（しりぞ）けることが、最大の難関だと思っていたのだ。

だが、あの私に詰め寄ったときの彼だけは少し違っていた。

おかげで、エヴァンシェッドを難なく黙らせることができたが・・・、やはり少しばかり気になるのは、彼のいきなりの申し出だ。

彼が何を思って私に勝負など申し出てきたか、果たして本当に退屈しのぎなのか、それとも何か思惑があるのか分からない。

まあ、気になるのは確かだが、もう二度と会わない相手だ。

これ以上、考えても仕方ない。

そう思って、さっさとこんな場所からは逃げ出してやろうと思って踵（きびす）を返す。

しかし、エヴァンシェッドを床に沈めたはいいが、新たなる問題発生。

私と倒れたエヴァンシェッドを怯えたような表情で見ているリリアナを前に、私は小さく溜息をついた。

第三十話　私は天使に喧嘩を売った　其の五

すれ違った私を追ってきたのか、いつからそこにいたか分からないが、エヴァンシェッドに気をとられていてリリアナに気が付かなかったとは、私もまだまだだ。
こちらを見て明らかに怯えているのが見て取れたが、それでも彼女は気丈に口を開く。
「ヒ・・ロ、エヴァンシェッド様は・・・。」
それでも彼女が聞いてくるのは、やはりこの床に沈む色ボケ天使のことで、私は思わず心の中で苦笑した。
「心配しなくても、気を失っているだけだ。いつからそこに？」
私が一歩近づくと、びくりと体が震える。
自分が彼女を怯えさせていると、少し申し訳ない思いがした。
エヴァンシェッドというよりは、ここでは彼女に非常に世話になったのだ。
それが奴の指示とはいえ、彼女に感謝する気持ちに嘘はなかったし、アーシアンの私にも優しく接してくれた彼女には好感を持っていたから余計だ。

「あ・・・、チルッダが倒れたあたり・・・から。」
といって、リリアナは愛人さんのほうに視線を向ける。
チルッダというのが、愛人の名前なのだろう。
「そうか、怖がらせてすまない。私はすぐにここを出て行くから、彼女とそこに倒れている色ボケ天使を頼む。最後まで面倒かけるな。」
叫ばれたりして、外にいる天空騎士団（アイッシュグランド）を呼ばれたら面倒だと思ったが、彼女はどうやら助けを呼んだり、叫びを上げるという所まで頭

が働いていない様でほっとした。

これならば、騒ぎを起こさずに外に出れそうだ。

とりあえず、天近き城（フェデス・ジグロア）さえ無事に出れれば、後はエンディミアンにまぎれて、何とかなるだろう。

正直、エヴァンシェッドに喧嘩を売ったのものの、それは突発的で何の計画性もなく起こした行動だった。

故に、こうして外に気がつかれずにエヴァンシェッドを黙らせることができ、静かに脱出を謀（はか）れるという、今のこの状況は幸運が重なったとした言いようがない。

先のことは、どうなるかさっぱり見えない状況だが、それでも、ここでエヴァンシェッドに愛人のように囲われている毎日より、たとえ一寸先（いっすんさき）は闇であろうとも不浄（ディス・エンガッド）の大地で旅を続けていたほうが、生きているという実感を得られるに違いない。

私は不浄（ディス・エンガッド）の大地に帰るのだ。

だから、何の憂いもなく、私はリリアナに頭を一つ下げると、黒（ローラレ）の剣（ライ）一つだけを手に持って出て行こうとした。

「ま・・・待って。ほ、本当に出て行くの？」

しかし、私に怯えているはずのリリアナが腰を抜かしたまま、私を引き止めるのだ。

無視しても良かったが、どうして私を呼び止めたのか知りたくて、私は彼女を振り返った。

「話を聞いていたんだろ？ここは私の居場所じゃない。」

「そ・・んなの、いいじゃない！だって、エヴァンシェッド様があんなふうに人に接したりするの、私、はじめて見たの・・・だから・・・、ここにいてくれない？」

一瞬だけ、彼女が私を引き止めたことにドキリとしたが、それは所詮（しょせん）、エヴァンシェッドのためというわけだ。

ドキリとした、自分が間抜(まぬ)けである。
そんな思いがあったから、ちょっとした気恥ずかしさも手伝って私は思わず、棘棘(とげとげ)しい言葉が口からついてでた。

「そりゃ、君たち恋人と私とじゃ、色ボケ天使の態度も違うだろう。」

そういうと、リリアナがはっとしたような顔になった。
気が付いていないとでも思っていたのだろうか？
他の愛人たちのように、私の前でエヴァンシェッドとのあからさまな接触はなかったが、一つ屋根の下で生活していれば、二人が単なる主従関係じゃなくて男女の仲なのは、何となく分かった。
リリアナが、どれくらいエヴァンシェッドを想っているかも、彼女の彼を見つめる瞳が全てを語っていた。
一見して私は色恋には無関係な朴念仁(ぼくねんじん)だと思われがちだが、男女の仲のことだって、全く知らないって訳じゃないのだ。（・・・経験は少ないけど。）

「好きな女性と、偶々(たまたま)現れた珍しいアーシアン。私とあなた方に対する態度の違いは、単にそういう違いに過ぎない。そんなことで、わざわざ黒の一族を引き止めないほうがいい。」
そう言って、私は倒れるエヴァンシェッドの胸元に黒の剣(ローラレライ)を近づけ、
「さもないと、今度こそ愛しの天使の首が飛ぶぞ。」
と、悪そうな笑みを浮かべた。
「や・・めて！」
さすれば、必死の表情で愛しい男のためにリリアナが声を上げる。
そうそう、それでいい。
彼女は怪我をして無害な私しか知らないが、本当の私は天使に対して本来は有害でなければならないのだ。
引き止めようなどと、考えるほうが愚かな話だ。

そう思いながら、リリアナに騒がれる前にここを出て行こうと思った瞬間だった。

「そこまでだ！大人しくしろ！！！」

野太い声が私の耳を震わせた。

「？！」

驚いた私が状況を把握する前に、武装した天使たちが離宮に雪崩れ込む。

気配を消していたのか、目算（もくさん）だけで、ざっと２０人は下らない天空（アイツ）騎士団（シュグランド）の武装した天使たちは、私が黒の剣（ローラレライ）を構える暇もなく、全員で私を取り囲むと一斉に武器を突きつけた。

私を中心に、剣や槍や斧の大輪の花が一輪咲く。

・・・おいおい、それは、やりすぎだろう。

そんなにしなくても、大人しく降参するっつーの。

状況は絶体絶命だが、意外と冷静なまま私は武装する天使たちを見回した。

全員が全員、断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）で私を拷問していた天使たちと同じ、酷く汚いものでも見るような瞳で私を見ている。

「エヴァンシェッド様から離れろ！」

天使に近づけられた刃が、顔にひやりと当てられる。

私は促（うなが）されるままに、エヴァンシェッドの胸元から黒の剣（ローラレライ）をどけ、倒れる彼からじりじりと離れた。

私の動きにつれて、私を中心とする天使の円陣も動く。

３６０度全てから、こうして武器を突きつけられては私も逆らいようがない。

ただ、天使たちの視線を避け、私は黒の剣（ローラレライ）のむき出しの刃を掴（つか）み、

握り締めれば手の平から血が滲む。
刃に血を付いたことを確認すると、そして口の中だけで言霊を呟いた。

剣が黒き神の力に染まれば、体が熱くなるのを感じた。

エヴァンシェッドから十分に離れてしまえば武器と体の自由を奪われる。
そうなってしまえば、もう自力では逃げることは不可能だ。
その前に私は黒の剣を握る手に力を込めた。
刃が手に食い込んだ痛みと共に、黒の刃が足元の辺りから放たれる。
その威力は、天使たちの足を切り裂くほどの強さはないが、その分範囲は大きく、私を中心に黒い刃の円が、私を取り囲む天使たちの足元を一度に襲う。
意表をつかれた足元を掬うような攻撃に、なす術もなく天使たちの垣根が崩れる。

チャンスはこの一瞬。

私は天使たちを飛び越えると、そのまま一気にリビングの窓を突き破り、夜の庭園に転げ出た。
「逃げたぞ！」
「追え！殺しても構わない！」
「捕まえろ！」
天使たちの殺気の篭った叫びが私の背後で上がり、飛び道具と、天使たちの飛び魔法が、私目掛けて放たれる。
まともにこの数の天使を相手にできるはずもなく、私はただただ全力で天使たちに背を向けて駆け出した。
駆け出したところで、正直に言えば、自分が何処に向かって走っているのかも分からない。

ただ、立ち止まったら捕まる、殺される。
それだけが、私の中で唯一つ確かなことだった。

横目に見える城内に逃げ込むという手も考えたが、数週間前でさえ、あれだけ黒の一族を警戒した警備体制だったのだ。
黒の一族の襲撃を受けてから、犯人は死んだとはいえ、その黒の一族を殺した存在さえ未だ分からないままでは、城内の警備はあれより更に厳しくなっていると考えることは容易い。
城内のほうが隠れる場所は多いだろうが、そんな警備の中に逃げ込んだら最後、自分を追ってくる天使を増やすだけだ。
恐らく、あっという間にお縄になるに決まっている。

よって、美しき天近き城（フェデス・ジグロア）に逃げ込む案は、即刻却下（そっこくきゃっか）。
私は行き着く先も分からないまま、ただ闇雲（やみくも）に庭園を走り抜けるしかなかった。
ただ、幸いにも、庭園内は木々や花壇やオブジェなど、だだっ広いだけではなく、様々な物が点在していた。
天使たちの攻撃も、私が小刻（こきざ）みに方向転換をすることにより、そういったものたちを盾代わりにすることで避けることができた。
離宮の窓から見えていた美しい庭園を破壊するのは勿体無（もったな）いが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

どれくらい逃げていただろう。
数分かもしれないし、案外数十分だったかもしれない。
「はあ、はあ、はあ。」
ただ浅い息、速い動悸（どうき）が、全力で走る私の限界の近さを示していた。
しばらく、部屋から一歩も出ないような生活をしていたために、明らかに体力が落ちているのを感じた。

バァン！

「・・・うわっ。」
私の足元ギリギリで爆発する魔法の攻撃の衝撃に、体勢が崩れて地面に倒れこんだ。
外傷はない。
すぐに立ち上がり走り出すが、タイムロスで確実に天使たちとの距離は縮まった気配が感じられた。
「すぐそこだ！」
「殺せ！生きて逃がすなとの、命令だぁ！！」
天使たちの声が、獣の雄叫びのように響く。

「クソッ・・・。」
思わず悪態をついた。
どうしてこんな状況になったかなど、悪態でもつかないと考えられなかった。
確かにリリアナと話しているあの瞬間まで、物音だって殆ど立てていなかったし、誰かが叫びを上げていたわけでもない。
それなのに、どうして天使たちが離宮に踏み込んだりしたのだ？
誰かが、離宮の中を見張っていたとでも言うのか？
それに、誰かが見張っていたと仮定したとしても、私が逃げ出すことを決め手から小一時間もたっていなかったはずだ。
それにも関わらず、短時間であれほど多くの天空騎士団が離宮に押し入ってくるなんて、あまりに都合が良すぎではなかろうか？
誰かが、私すら予想していなかった、この逃走劇を予言でもしていたというのか？
考えが頭から離れないのと、体力の限界でもつれた足に天使の攻撃が掠る。

ズキュン・・・。

走る私の脹脛（ふくらはぎ）に掠ったのは、銃撃。
足元が一瞬だけふらついたが、私は何とか踏ん張ることができた。
視線を上げた先には、庭園をぐるりと囲む木々が生い茂る森のような場所。
これだけの森ならば、あるいわ天使たちを撒くことができるかもしれない。
私は迷わずに真っ暗な森の中に駆け込んだ。

月明かりすらも木々の葉が遮り殆（ほとん）ど届かない森の中は、想像以上に暗かった。
ただ私は夜目が効くほうだから困りはしないが、それでも方向感覚は全くつかめなかった。
「森に入ったぞ！」
「何もみえん！明かりを用意しろ！！」
天使たちの追撃が緩むのを感じた。
逃げ切るなら、今しかない。
どうにか天使たちを振り切る方法はないかと、私は走りながら視線を彷徨（さまよ）わせた。
すると、闇の向こうにぼんやりと浮かび上がる光が目に入る。

「光・・・？」

一瞬城内の光かと思ったが、振り返った先には天近き城（フェデス・ジグロア）のクリスタルの輝きが木々の間から見える。
すると、あの光は城ではない建物のものに違いない。
この森を抜けた先が、果たして天近き城（フェデス・ジグロア）の外なのかは定かではないが、迫り来る天使たち相手に迷っている暇はない。
私は光に向かって、一気に森を駆け抜けた。

「・・・・・え？」

がくん。
足を踏み外し、体が落ちる。
ふわり・・・と体が宙に浮いたような感覚がして、次の瞬間、体は重力にしたがって急速に落下し始める。

「なななん・・・あぁぁぁ！」
私の腹からの絶叫が響いた。

森を向けた先は、踏みしめる足場もない、断崖絶壁（だんがいぜっぺき）。
天近き城（フェデス・ジグロア）の端であり、そこを飛び出した私は天近くに聳（そび）えていた高さから落ちたのだ。（・・・いや、この場合は自ら飛び降りたことになるのだろうか）

「まじぃ・・・でぇぇぇ？っ！」

落下する私は叫びながら、混乱する思考で状況を確認する。
とりあえず、まず私は落ちている。
そして、天近き城（フェデス・ジグロア）は外から見たとき、白き神（イア・ルマンヌ）の御許の中でも殊更（ことさら）に高い位置にあったことを思い出した。
そこから飛び降りた私には、今はまだ建物や人がまるで豆粒のように見えた。

次の瞬間に黒い煙が私を包んだ。

「ゲホッ！」

煙にむせ、目に沁みる。
見れば、今正に私が落ちようとしている真下辺りが、轟々（ごうごう）と炎を上げて燃えているのが確認できた。

それも、かなり大規模な火事のようだ。
私が何かの明かりと思った森の中で見た光は、燃えている炎の光が街を囲む白壁に反射していたものだったのだ。
だが、今はそんなことはどうでもいい。

この高さから落ちたらぺちゃんこ。
しかも、間違いなく炎の中に突っ込む。

・・・結果として、多分間違いなく、助からない。
そう思った瞬間、ただただ混乱して固まっていた思考が、すごい勢いで回転した。
死にたくない。
まだ、死ぬわけにはいかない！

その思いだけが私を突き動かす。
私は空中で体勢を整えながら、どんな事があっても手放すことのない黒の剣（ローラレライ）を風圧に邪魔されながら、何とか両手で持ち顔の前に構えた。

豆粒ほどだった建物が、どんどん大きく私に迫ってくる。
同時に炎の熱さを、肌に感じた。

気が遠くなりそうなほどに、ものすごいスピードで落下しながら、私は口の中で言霊（ことだま）を唱えた。

「ーーーーーー。」

言霊（ことだま）は、空気を切り裂く音で、自分の耳にすら届かない。
そして、炎で燃え上がる建物が目の前に迫る。

ドガシャシャシャシャーーーーンンンン！

そのまま想像していた通り炎の中に突っ込んだ私が感じることができるのは、強い衝撃と、炎の暑さ、そして耳が壊れてしまいそうなほどの轟音（ごうおん）。

そして、私の全てが暗転（ブラックアウト）した。

第三十話　私は天使に喧嘩を売った　其の五（後書き）

ヒロ、ついに逃げ出しましたね。
しかし、天使たちに追われるわ、しまいには断崖絶壁から火の海に落っこちるわで、相変わらず不幸を背負ってますね（笑）
はてさて、ヒロが火の海に飛び込んで、その後どうなったかも気になるところですが、ヒロの話はしばらくお休みで、次からはエヴァンシェッド視点で話を進行させるつもりです。

第三十一話　天使たちの謀　其の一

背中に二対の翼がある。
それは天使にとっては、あって当たり前の存在。
あまりに当たり前すぎて、その存在の大切さを忘れてしまうほどに、
その存在がなくなることなど、想像もつかないほどに・・・。

だが、俺は千年前の最果(ロンギュナス)ての渓谷の戦いで、あの黒の一族に左翼を
切り落とされ、その存在を失った。

まるで、自分の半身をなくす事に似た喪失感。
翼を失った俺には、同時にその心の中で、何かを失った。
その何かは、千年経った今でも分からない。
ただそれ以来、俺は何かに渇き続け、飢え続ける、空虚(くうきょ)な燃えカス
のようなものを、自分の中にもてあまし続けている。

しかし、もう二度と手に入ることなどないと思っていた、諦(あきら)めてい
た翼が、偶然か運命か再び自分の元に戻ってきた。
俺は完全なる自分を、あの時の自分を、取り戻す機会を得たのだ。
ああ、これで心の中にある、飢え、渇き、空虚(くうきょ)で、燃えカスみたい
なものを消し去ることができる。
そう、思った。

・・・だが、それは違った。
翼(エヴァ)が戻ったところで、俺の中の『それ』は何も変わりはしなかった。
変わらず、飢え、渇き、空虚(くうきょ)で、燃えカスみたいな『それ』は、俺
の中で燻(くすぶ)り続けている。
翼(エヴァ)さえ戻れば、全てが元通りになると思っていた俺は笑うしかなか

った。
そして俺は自分の右手の人差し指に鈍く光る、玩具のように安っぽい指輪を見た。
こんなことなら、契約という危険を冒し、あんな下らない願いまで聞いてやって、翼を取り戻すことなどなかったのかもしれない。

『僕の願いは、唯一つ。僕の代わりに、ヒロちゃんを守って欲しい・・・それだけだ。』

それはあまりに稚拙で、醜くて、愚かなエゴの塊のような願い。
その願いを聞いただけで不快感で、虫唾がはしり、吐き気がして、鳥肌が立った。

・・・ただ、同時に飢え、渇き、空虚で、燃えカスみたいな『それ』に、一滴の水が落ちる水音が聞えたのだ。
ただ、それが俺には、永遠に砂漠を流離う旅人に与えられた、一滴の水にすら思われた。

第三十一話　天使たちの謀　其の一

俺は永遠とも思える長き時間を生きる、天使一族の長・万象の天使。
飛べない翼の天使という名が罷り通っているものの、本当の名前は別にある。
本来、片翼を失った俺を揶揄って、俺のことを気に入らない奴らが付けた通り名であったが、その名を気に入った俺が自分でそう名乗るようになり、気が付いたら本名みたいになっていた。
だから、片翼が戻ったこれからも、今更、名前を改める気はない。

・・・と、冷静なモノローグで始めてみたけど、飛べない翼（エヴァンシェッド）の天使こと、俺は今非常に機嫌が悪かったりする。

「どうして、ここに呼ばれたか、分かっているか？」

その機嫌は顔には出していなかったけど、それは自分の声が酷く低くて、冷たいことが如実（にょじつ）に示していた。

そして、俺がその声でもって話しかけているのは、深く頭（こうべ）を垂れる天空騎士団（アイッシュグランド）第零師団小団長・テルシー・ミルデスト。

天空騎士団（アイッシュグランド）は、第零から第五師団まで大きく分かれおり、それぞれの師団を支配している存在は別々で、同じ天空騎士団（アイッシュグランド）といえど、師団ごとに、それぞれは全く独立した存在である。

テルシー属する第零師団は、万象の天使、要するに俺が支配する師団であり、テルシーは俺が使役することができる天使だ。

その屈強で、がたいのいい天空騎士団（アイッシュグランド）第零師団に属するテルシーが、俺の声に体を小さくし、小刻みに震えてまでいるという状況は、俺の支配下にある天使とはいえ、あまりに珍妙で滑稽（こっけい）だった。

「・・・いえ。」

その搾（しぼ）り出されるような声に、俺は片眉を上げた。

「いえ？」

聞き返す声にテルシーの体がびくりと震えるのに、俺は更に機嫌が悪くなるのを感じた。

「君は、私の自宮の法を知っているかな？」

我が自宮は、噂好きの天使たちには、俺がとっかえひっかえ愛人を連れ込んでいるのを揶揄（やゆ）って、『後宮』なんて呼ばれているようだが、特に名はない俺の唯一のプライベートな場所である。

天近き城内、いや、天使の領域内には、万象の天使（フィリアラディアス）である俺を知らない者など存在せず、それは等しく俺にはプライベートなどないこ

とを示している。
だから俺は、自分が一人になれる、誰の視線にも晒されない場所の確保には力を入れた。
故に『法』というには仰々しいけど、天近き城において、不文律ともいえるルールを俺は定めていた。
しかして、俺は今その自宮のリビングのソファに深く腰掛け、その正面に項垂れながら突っ立っているテルシーに、その不文律を問うていた。

「・・・。」
その問いにテルシーは、脂汗をかきながらも答えない。
しかし、城内の警護を任されている天空騎士団であり、ましてや俺の直属である第零師団に所属するテルシーが、その不文律を知らないはずもない。
「黙っていては分からない。知っているのか、それとも知らないのか？」
「・・・。」
なのに、なおもテルシーは俺の問いには答えない。
・・・いや、答えられないというのが正しいだろう。
テルシーは、それに答えれば自分の立場が、とても悪くなることを知っている。
だから、俺の問いには答えない。
だが、それが更に俺の機嫌と、状況を悪くしていることまでは気が回っていないらしい。

力を使って言うことを聞かせてもいいが、それでは俺の気がすみそうもないので、俺は質問ではなく、断定に言葉を変えた。
「『我が自宮には何人たりとも、私の許可なくば、入ることを禁ずる。』それが唯一にして、絶対のルールであることを、まさか我が第零師団の君が知らないわけはない。」

許可を与えているのは、俺の腹心である三大天使の面々と、ここの唯一の使用人として管理を任せているリリアナ、そして最近ではヒロとエンリッヒだけだ。（ヒロに関しては、許可もくそもないのだが）

「そして、俺は君に許可を与えた覚えはない。君はそのルールを破ったことになるな。ルールを破ったものには罰を与えなければならない。だから、私は君をここに呼んだのだよ。」

だが、その俺の言葉に、初めてテルシーが顔を上げた。

「し・・・しかし、それはエヴァンシェッド様を、あの黒の一族からお守りするためでした！」

「理由は問題ではない。」

縋(すが)りつく様なテルシーの言葉を、俺は一言で切って捨てた。

「私は君たちには、この宮の外の警備のみを命令したはずだ。にもかかわらず、君はこの宮に無許可で立ち入り、しかも、私が何があっても『守れ』、『逃がすな』と命令したヒロを殺そうとし、とり逃がした。この宮に入るなというルールを破っただけではない。君は三つも命令違反を犯したことになる。命令違反は厳罰に処するのが慣例(かんれい)だ。知っているだろう？」

天空騎士団(アイッシュグランド)は、それぞれの師団のその支配者である者、第零師団の場合は、すなわち俺が法。

誰も否とは言えないのだ。

そうして顔を真っ青にするテルシーに最後通告を突きつけ、彼を打ちのめし甚振(いたぶ)ってやりながら、それでも色々なことを思い出し俺は忌々(いまいま)しい思いで一杯だった。

時間にすれば、数時間前。

今はもう夜が明けているが、真夜中といってもいい時刻。

情けないことに俺は、翼(エヴァ)と交わした契約を履行(りこう)するために、全ての

不幸から守るために、この自宮に囲っていた黒の一族に昏倒させられた。

『囲っていた』という言い方は誤解を招くかもしれないが（実際に噂もされたようだが）、決して指一本触れておらず、本当にただこの宮で、不浄の大地では考えられない素晴しい生活をさせてやっていた。

しかしその相手に、とんだしっぺ返しを喰らったのだ。

全く、あの黒の一族・ヒロには面倒ばかりかけられる。

元はといえば、翼とあんな契約をした俺が愚かだった。

しかし、いくら後悔しても『契約』とは、違えることはできない絶対の約束。

違えれば、神の裁きを受けることとなる。

それは、たとえ万象の天使である俺とて、避けられるものではない。

だから、初め俺は手っ取り早く力を使い、ヒロを支配することにした。

ここでいう力とは、相手を支配する力、その行動も、思考も、感情も、全てを支配する力。

だから、その力によってヒロを支配さえしてしまえば、ヒロの元の感情など関係なく、永遠の幸せを与えてやることなど、簡単だと思ったのだ。

しかし、それはこの契約の証である指輪によって阻まれた。

すなわち、支配による幸せは契約違反ということだろう。

俺は面倒な仕事が増えたと思ったが、相手は不浄の大地で生きてきたアーシアン。

苦労と不幸だらけの人生であったことは、容易に想像できたので、本当にヒロを幸せだけに浸らせることなど、造作もないと楽観して

いた。
だから、ヒロが望むのがただ不浄の大地（ディス・エンガッド）に帰ることだけだと言放った時は正直参った。

だって、わざわざ苦労と不幸しかない場所へ、どうして帰りたいと思う？

そんなこと許して、ヒロが苦労と不幸を背負ったりしたら、契約違反で俺は神の裁きを受けなければならない。
それはご免だった。
だから、エンリッヒに命じてヒロがここから逃げ出さぬよう監視を命じた。
ここでしばらく天国みたいな生活をしていれば、ヒロの気も変わるだろうと思ったし、何よりヒロを手元から逃がすわけにはいかなかったのだ。
何故なら、翼（エヴァ）との契約により、ヒロは俺に神の裁きを下すことのできる存在になった訳である。
それは転じて、ヒロが俺の弱点ともなりえる存在になったといっても過言ではなかった。
現時点では契約の話は、契約を交わしたあの場にいたラインディルトしか知らない。
これでも、結構俺の周りには敵が多い。
その存在を多くに知らせるわけにはいかなかった。

故に監視は厳重に厳重を重ねることとし、それにあたり、エンリッヒはヒロと顔見知りだったようなので、サンタマリアの直属である第一師団の副師団長ではあるが、話し相手も兼ねるようにして宮に入ることも許可した。
だが、それ以外の天空騎士団（アイッシュグランド）は、通常通り宮の外での見張りしか許さなかったし、それで本来は十分だったのだ。

俺の油断でヒロに倒されるようなことさえなければ・・・。
あの地味で、無愛想で、堅物な黒の一族が、俺の求める完璧な『ーーー』でさえなければ、俺があんなに興奮して、隙を付かれることもなかった。

そこまで回想し終って俺は現実に自分を戻し、俺の前で土下座をせんばかりに平謝りするテルシーに意識を向けた。
「お許しください！黒の一族を逃がしたことは、ともかく！他は、決して私が命令したわけではないのです！『御宮へ入ること』も『黒の一族の殺害命令』も私の命令ではないんです！！！」
自分の言い訳のときばかり、口達者になるテルシーは、あまりにみっともない。
「私の命令ではない？あの時の責任者であるお前以外に、一体誰が命令を下すというんだ？」
「そ・・・それは・・・。」
俺の詰問にテルシーは言葉を濁す。

しかし、意を決したように再び口を開いた。
「で、でも、本当に私じゃないんです！だって、あの時私は持ち場を離れて、夜食をとっていました！」
「・・・何？」
しかし、目を覚ました俺にヒロを逃がし、庭園の森で見失ったと報告をしてきた団員の話では、それらの指示は全てテルシーが下していると聞いている。
「う、嘘じゃありません！確かに俺はあの時は持ち場を離れていました！！」
「下手ないい訳だ。もういい、下がれ。沙汰はおって知らせる。」
これ以上うっとうしい言葉を聞きたくなくて、俺はテルシーを下が

らせようとしたが・・・
「エヴァンシェッド様。」
静かで、落ち着いた女の声が、俺を呼んぶ。

「サンタマリア。」
振り返った俺の視界に現れたのは我が腹心、三大天使の一人、明海の天使・サンタマリア。
数少ない自宮に入ることを許可した存在だ。
「おはようございます。今、少しだけよろしいでしょうか?」
俺がその姿を認めるとサンタマリアは俺に挨拶をしながらも、その永遠に開くことのない盲目の瞳でテルシーを見る。
しかし、それも一瞬で、すぐに彼女は瞼(まぶた)を閉じたまま笑みを浮かべた。
それに頷くと、俺は有無を言わせずに、何か言いたげなテルシーを宮から下げさせた。

サンタマリアは、神と契約(ファギュラド)せし天使の紅一点だが、どうにも華のない容姿をしている。
しかし、それを補って余りあるほどの能力・人の心を見抜く力を彼女は持っているのだ。
彼女にかかれば、テルシーの嘘など一目瞭然(いちもくりょうぜん)なーーー、

「華のない容姿で、すいませんね。」

・・・しかし、その力は俺とて例外ではないけどな。
俺はそれに苦笑したが、彼女はすぐに俺の欲しい情報を口にした。
「彼は嘘を言っていません。」
「そうか。」
俺が如何(いか)にテルシーを疑おうとも、彼女の見た真実に敵うはずもない。

テルシーが嘘をいっていない。
すなわち、昨日ヒロが逃げたときに、この場にいないというのが真実であるならば、
「そうなると、テルシーに成りすました誰かがこの宮に無断で入り、『ヒロを殺そうとした』ことになるな。」
宮の警護を任せてある第零師団には、『何があっても、ヒロを絶対に殺すな』と俺が命令をしていたのだ。
俺の命令がある以上、恐らくテルシーに成りすました者の命令がなければ、団員たちはヒロを殺そうなどとはしなかったに違いない。
「そうね。ヒロを殺そうとする相手に、心当たりはないの？」
サンタマリアは俺のエスコートに従って、ソファに収まり俺を見上げた。

その表情には俺の心を探ろうとする色が見えた。
彼女がヒロの、黒の一族の力を欲していたらしいことはエンリッヒから聞き出していたし、サンタマリア自身からも、ヒロを引き渡すように何度か言われていた。
しかし、契約のこともあり俺がヒロを渡すはずもなく、また、サンタマリアも俺にヒロを欲する理由を話そうとはしなかった。
俺は心を読まれないように、すぐに別のことを考えた。
サンタマリアの能力とて万能ではないらしい。
心の声を聞くにしても、やはり一番大きく聞えるは、記憶や深層心理下の部分ではなく、その人が意識して考えている、思考する表面層の部分なのだ。
だから、別のことを意識的に考えることで、サンタマリアに知られたくないことを、一時的だが隠すことはできるのだ。

「今のところは、全くない。」
俺が首を振ると、サンタマリアは俺が心を隠そうとしたことを察したのか、こちらを窺うような色を消して、悪戯っぽい表情を浮かべ

た。
「例えば貴方を恋偲(こいしの)ぶ誰かが、貴方の『男の愛人』を殺そうとしたのではくて？」
「まさか。」
くすくすと笑うサンタマリアに、俺もにこやかに微笑んだ。
正直、笑えない冗談だ。

「それより、ヒロの足取りはつかめたのかな？」
俺は話を変えた。
逃げたヒロを殺す勢いで追いかけたまではいいが、第零(うち)師団の団員たちは庭園の森の暗闇でヒロを見失った。
その追跡を情報収集能力では、右に出るものはいないといわれる第一師団副師団長にお願いしたのだ。
「あのいざって時に、役に立たないお宅の副師団長さんは？」
「おほほほほ。ほんっとに、役に立たない子で申し訳なかったわ。まさか、ヒロが逃げ出したときに、暢気(のんき)に寝てるなんて！」
渇いた笑い声を上げる俺とサンタマリア。
そうなのだ。ヒロが逃げ出したあの時、こういう時のためにわざわざサンタマリアに頭を下げて貸してもらったエンリッヒであるが（まあ、サンタマリア側としてもヒロの様子を見るために、願ったり叶ったりの申し出だっただろうが）、奴はヒロに殴られて気を失ったまま部屋でのびていたのだ。

どいつも、こいつも本当に使えない。

「まあ、私が後でしっかり叱っておくから、許してあげてよ。」
そう言って笑うサンタマリアの後ろに黒い何かが見えた。
一見すると、無害そうな姿をしているサンタマリア。
ところがどっこい、本当はその羊の皮の下に、狼どころか、とてつ

もない怪物を隠していることを知っているのは、限られた人物だけだ。
エンリッヒがこの後どんな目にあうか、想像するだけで恐ろしいところだ。

「エヴァンシェッド。」
・・・、と俺もこれ以上の詮索はよしたほうがよさそうだ。

公では、俺の腹心として仕えてくれている彼女だが、その実は俺たち関係は絶対的な主従関係というよりは、互いに互いを利用しあう関係といったほうが、しっくりくる。
故に互いに隠し事や、互いに疚しい部分もないとは言わない。
まあ、俺もサンタマリアも天使一族の未来のためという、共通の目的がある以上は、互いに信頼はしていないが、信用はしている。

だから、ヒロの脱走で混乱する第零師団にかわり、サンタマリアとエンリッヒにヒロの行方を捜させることにも躊躇いはなかった。
「どうも、ヒロは落っこちたみたいよ。」
サンタマリアは簡潔に言った。
その言葉の意味するところを察して、俺は自分の表情が固くなるのを感じた。
「落ちた?まさか、天近き城層から?」
間違っていて欲しいと思ったが、サンタマリアは呆気なくそれに頷く。
「ええ。森の中でヒロの足跡を辿ったところ、森の外に向かってヒロの足跡が点々と残って、それから先は消えていたらしいわ。」
森の外は断崖絶壁、この下の層・喜ぶ天使の街層との高低差はおよそ1キロメートル。
翼の有る天使ならともかく、飛ぶことのできない人間のヒロには、絶対に助からない高さだ。

「まさか・・・。」
俺は無意識に契約の指輪を触った。
「ええ。ヒロは恐らく死んだ・・・というのが、エンリッヒの出した結論よ。私もそう思うわ。人間があの高さから落ちて生きているわけがないもの。念のため第一師団総出で城内を捜させたけど、ヒロは見付からなかったし、城から出た痕跡も見付からなかったわ。」
ヒロが死んだ・・・。
その可能性は、サンタマリアの報告を聞く限り、間違いないように思えた。
だが、それに素直に頷きたくない俺がいる。
「死体は、見付かったのか?」
一キロメートルの高さから人一人落ちたのだ。
真夜中とはいえ、騒ぎになっているはずだし、ヒロが死んだというのであれば、死体もすぐに見付かるだろう。
だが、その問いにサンタマリアは首を振った。
「どういうことだ?」
「それが、昨日の夜、ヒロが落ちたと思われる辺りで大きな火事があったのよ。」
「火事だと?」
「ええ、火事を見ていた野次馬から、何かが上空から落ちてきたという目撃証言は、エンリッヒが聞いてきているのだけれど、ヒロは炎の中に落ちたらしくて、焼け跡からは何の痕跡も見つけれなかったらしいわ。」
要するに死体も何もかもヒロという存在全てが、炎の中で燃えてしまったということか。
「・・・報告ご苦労だったな。」

出た声は、思いのほか沈んでいた。
「エヴァンシェッド？」
「今日はもう下がってくれ。夜はあまり寝れなかったんだ。今から一眠りする。」
サンタマリアは俺の様子に何かを感じ取ったようだが、これ以上は彼女に、心の中を見られたくなくて、俺はそう言うと立ち上がり、サンタマリアに背を向けると、リビングを出てすぐの寝室に逃げ込んだ。
ドアの外にサンタマリアの気配を感じたが、しばらくすると静かに立ち去った。

サンタマリアの気配を見送って、俺はずるずると扉にもたれかかった。
「ヒロ。」
名を呼んでも虚(むな)しいだけだったが、折角今から捕まえようとしていた相手が、呆気なく死んだと聞かせれれば、誰だって拍子抜けするだろう。
「折角見つけた『一一一』だったのにな。」
一人ごちながら、俺は右手の指輪を触った。

ヒロが死んだ以上、翼(エヴァ)の契約も無効だな。
神の裁きが下らないところをみると、不幸と感じるまもなくヒロは死んだらしい。
不幸中の幸いだな。

そんなことを思いながら苦笑して、俺はふと違和感を感じた。
そうだ。
ヒロが死んだのであれば、契約は無効のはずだ。
俺は触っていた指輪を掴んで、指から外してみようと試みた。
いくら力をこめても、指輪は外れない。

その事実が示す意味は、契約が続行中であるということ、そして、それはすなわち・・・、

「ヒロは生きている。」

サンタマリアやエンリッヒの報告が足らないわけじゃない。
これはもう彼女らの常識よりも、ヒロのゴキブリ並の生命力のほうが一枚上手だということだろう。
思わず笑みが浮かんだ。

そうと分かれば、至急天使の領域（フィリアラディアス）にヒロがいるうちに見つけ出さなければ、不浄の大地（ディス・エンガッド）に出られてからでは捜すのが面倒だ。
それと同時に、ヒロを殺そうとした犯人も見つけなければならない。
やることは山ほどある。
一眠りしている暇はない。
そう思い、急ぎ寝室を出たところ、リリアナと鉢合（はちあ）わせした。

「あ、エヴァンシェッド様。今ちょうどお呼びしようと思っていたんです。」
「どうかしたのか？」
リリアナの表情が固い。
何かあったようだ。
「今知らせの者が参りまして、今日の午後世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）より、天使長様に提案したいことがあるので、お越し願いたい・・・と。」
リリアナの言葉に俺は瞳を細めた。

面倒が、また一つ増えたようだ。

第三十一話　天使たちの謀　其の一（後書き）

エヴァンシェッド視点による、ヒロが逃走した後の様子です。
エヴァとの契約のことや、サンタマリアとのやり取りなど、ヒロ視点では分かりにくいところも彼の視点だと描きやすかったです。天使たちの間の陰謀が、少しは垣間見えたかと・・・。
しばらくは、エヴァンシェッド視点でお送りできたらと考えておりますので、よろしくお願いします。

あと、よく分からない用語が多いこの物語ですが、一応出るたびに説明を加えているつもりです。
しかしながら、繰り返し出てくる用語とか、忘れてしまったりするものも多いかもと、第一部まであらすじのところに用語の説明も加わりました。もし、分からないものがあったら参考にしてみてください。

第三十二話　天使たちの謀　其の二

その黒の一族は、いつも憮然(ぶぜん)とし無愛想なくせに、それでいてその瞳は常に色々な感情を宿していて、傍(はた)から見ていて飽きない人物だった。
それなのに、何故か俺に対しては、何の感情も見せようとはしなかった。
だが、翼(エヴァ)のこと俺がを持ち出したとき、初めて俺に向けるその瞳に感情の色が灯(とも)った。

『いいだろう。その喧嘩買ってやるよ。だが、そのときはエヴァは返してくれなくてもいい。貴様が私に支配されるんだ。これでイーブンだろう？』

そう吐き捨てて、俺を見るその瞳が、例え憎悪や怒りという負の感情に濡(ぬ)れていても、俺は構わなかった。
俺に必要だったのは、俺に支配されることのない心を持つ、強い力を秘めた瞳。
そして、お前はそれを俺の前に突きつけたんだ。

だから、買った喧嘩には責任を持てよ、ヒロ？

どうやら、お前は俺の前から消えるつもりみたいだが、そんなことは俺が許さない。
求め続けた瞳を持つお前を、俺は『ーーー』にすることに決めたのだから・・・。

第三十二話　天使たちの謀(はかりごと)　其の二

世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）というものは、本来無用の長物だと俺は考えている。
そもそも、その始まりは天使一族を支配していた王国解体後、尊き血の天使（ビットゥ・ラ）が、自分たちの権威を誇示（こじ）しておくために設立した議会。
その建前として、王族独裁だったために崩壊した以前の轍（てつ）を踏まないために、天使長である俺と三大天使たち、神と契約（ファギュラド）せし天使の独裁を防ぐための議会であるとしている。
しかし、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）を構成する、そのほとんどは、王国解体前は貴族であった尊き血（ビットゥ・ラ）の天使たち。

そうである以上、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）にどれほど権威と威厳があろうとも、俺たちはその意見など聞く気は、更々ない。
もし、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）が、一般の天使たちにも開放された議会だというのであれば、俺たちも、神と契約（ファギュラド）せし天使も敬意を払い、その意見を尊重しようとしただろう。
しかし、元はといえば、王族を始めとするその貴族たちを打倒（だとう）するために、俺たちは王国を解体した。
なのに、元は貴族たちであった尊き血（ビットゥ・ラ）の天使の意見を聞いていては、本末転倒（ほんまつてんとう）でしかない。

大体、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）などなくても、王国解体後に、神と契約（ファギュラド）せし天使すら干渉し得ない、身分も何も関係なく全ての天使たちに、広く開かれた白き議会（イビシデュア・カルヴァ）をつくった。
白（そこ）き議会から上がってくる意見には、俺たちも真摯（しんし）に耳を傾け、その議会にも参加することも厭（いと）わない態度を貫いている。
俺たちは独裁をするため、または尊き血（ビットゥ・ラ）の天使たちのために、王国を解体したわけじゃない。
俺たちは天使一族全てのために、王国を壊したんだ。
だから、相手が貴族様だろうが尊き血（ビットゥ・ラ）の天使に力を与えてやるつも

りは、さらさらない。

しかし、俺たちだって鬼じゃない、誰であろうが、天使一族である以上、彼らに白き議会（イピシデュア・カルヴァ）に参加させてやろうとしたし、それが嫌だというから、貴族たちの面子（めんつ）のためにつくった世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）も黙認してきた。

だが、貴族のプライドか彼らが白き議会（イピシデュア・カルヴァ）に参加しない以上、尊き血（ビット）の天使（ウ・ラ）に権力を与えるつもりはなかったし、王国は解体した以上、貴族であった彼らに、特別な施（ほど）しをしてやるつもりもなかった。

そういうわけで、本来、何の力も持たない尊き血（ビットゥ・ラ）の天使で形成されている世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）は、俺にとっては、あってないような存在だったし、特に何の感情も持ち得ないものだった。

しかし、彼らもお飾りとはいえ、元貴族のプライドからか、今回のように俺や三大天使を世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）に召喚することがあり、俺たちのやり方に色々小言を並べることがある。

正直に言えば、今はヒロの事もあるし、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）の呼び出しなど無視してしまいたい所だ。

しかし、果たして今回は何の小言か分かったものではないが、召喚を無視をして、後々に嫌味を言われるのも面倒だなぁと思うわけで、仕方無しに、俺はいそいそと召喚に応じるべく身支度（みじたく）を整えているのだ。

「お美しいです、エヴァンシェッド様。」

リリアナがそれを手伝いながら、ほうと息を吐く。

確かに鏡の前に立つ俺は、天使一族の正装に身を包んでおり、黒の装束に銀髪が映え、自分で言うのもなんだが、中々美しいと言えるであろう。

だが、だからといって何の感情も浮かびはしない。

何故なら、俺は自分が特別目立つのが好きなわけでもないし、特別

ナルシストというわけでもない。
ただ、天使一族の頂点に立つものとして、常に皆が求める万象の天使像を壊さないようにしているだけだからだ。
今の俺は、美しい自分に見ほれるわけでも、愛人のリリアナに言葉を返すわけでもなく、ただただ、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）へ赴かなければならないことが苦痛で仕方なかったりする。
でも、鏡の中の俺は、そんなこと微塵（みじん）も感じさせないほどに晴れやかに、美しく微笑むだけだった。

「ご足労頂いて申し訳ありません。万象の天使。」
恭（うやうや）しく、白い歯をきらめかせ笑顔を浮かべて、俺を迎えたのは、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）の中心的人物の一人・ケイン。
天使の喜びの街（カイルーク）の一角にある、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）の議会場の扉を開けた俺を見て、彼だけが椅子から立ち上がり、物腰柔らかに挨拶（あいさつ）をした。

議会場の中にいる、残りの十数人の天使たちは、一様に石のごとく動く気配すらない。
元貴族のプライドが捨てられない彼らは、未だに自分たちは偉く、俺みたいな元は平民は、呼びつければ、俺が出向いてきて当たり前と思っているのだ。
一々それに目くじらを立てるほど、俺は小さな器のつもりはないが、彼らのこの様子を見るたびにあまりの進歩のなさに、苦笑を禁じえない。
そんな下らない権威や威厳にしがみつき続けるなど、本当に愚かしいことである。

だが、そんな想いを相手に悟らせるほど俺は愚かではないから、彼らに小さく会釈をすると、上辺だけの言葉を並べた。
「尊き血（ビットゥ・ラ）の天使の皆様お久しぶりにお目通りいたしまして、お変わ

りないようで安心いたしました。」
そう言って、頭を下げてやれば、それで自尊心が満足したのか、醜く一同の表情が歪むのが見えた。
こんな上辺だけの敬意を払われただけで、気分をよくするんだから、本当に愚かでお手軽な連中である。

議会場の中は、高く広くガランとした石造りの荘厳な建物の中に、豪華で装飾の施された重厚な円卓が一つ。
円卓の周りには、尊き血の天使（ビットゥ・ラ）が均等な間隔で座っている。
その円卓にスポットライを当てるように、天井のガラスから日の光が燦燦（さんさん）と降り注ぎ、円卓の真上辺りにはステンドグラスが張られており、円卓の中心の辺りには美しい七色の光が床に映し出されていた。
何度きても、冷たくも、美しく、寂しい場所だと俺は思う。

「万象の天使、こちらの席にどうぞ。」
勧められたのは円卓から少し離れた、光の当たらない場所にある一つの椅子（いす）。
豪華な革張りの椅子で、全てが石造りのこの場所においては、明らかに違う異質な存在だと感じた。
それに意味があるのかは定かではないが、俺は言われるがままにその椅子に座る。
「それでお話というのは、何なのですか？世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）が、私を召喚するほどのことです。何か余程火急の事態ではないかと、心配しております。」
自分でも空々しい言葉だと思ったが、相手も馬鹿ばかりではない。
「いやいや。万象の天使とも、あろう方が我らの召喚如きに、心配などなさりますまい。それより、万象の天使よ。お見受けいたしますところ、噂どおり千年振りに翼が戻られたようで。おめでとうございます。」

そう言う天使のねっとりとした視線に、強い嫌悪感を抱いたが、俺はそれをにっこり笑って礼を言って受け流した。

更に重ねられたのは、しわがれているが、強い力をもった老人の声。

「本当に良かったですなぁ。これで貴方のあの力も完全に戻ったということですかな？」

その声の人物は、世界の円卓の中で最も力を持つ老人、バルバドン・テリド公爵様。

爵位なんて意味のなくなった、今でもその名を使い、自尊心は山より高く、海より深く、自分のために世界は回っていると考えているような時代錯誤甚だしい人物だ。

恰幅のいいずんぐりとした姿を豪華な服装に包まれ、白髪と豊かなひげを蓄える、如何にもといった風体の老人だ。

「ありがとうございます、テリド公爵。」

そういって嫌味半分で微笑んでうやると、醜い皺だらけの顔に更に深い皺を刻んで笑う。

「では、飛べない翼の天使という名は返上で、あの名に戻られては如何かな？わしはあちらの名のほうが、貴公にはおうておると思いますぞ。」

それに俺は一切答えずく、一層晴れやかな表情を浮かべた。

「・・・、今回私が呼ばれたことと、私の力が戻ったこと、何か関係があるんですか？」

「・・・。」

俺の言葉に白い眉がぴくりと動いたが、それ以上は公爵も追求せず、大人しく俺の疑問に答える。

「まあ、よい。わしもまどろっこしいのは嫌いじゃからのう。早速本題に入ろう。万象の天使よ、お主、先日の黒の一族の襲撃及び、その殺害という幕切れについて、どう見ておる？」

それは、下らない小言を言われるだろうと、覚悟していた俺にとっては、いやにまともな話題であり、妙な違和感を感じた。

「どう・・・とは？」

「そのままの意味じゃ、あの黒の一族が殺されたことにより、結局その正体や、目的は分からぬまま、しかも未だ殺した犯人も捕まっておらぬ。それについて、どう思うておるか、聞いておる。わしは、なにやら嫌な予感がしてならんのだが・・・。」

それについては、俺も同感だった。

そもそもヒロはサンタマリアが自ら招いたという例外中の例外だが、それ以外、万に一つも黒の一族、それも天使に敵意を持ったそれがこの天使の領域（フィリアラ・ディアス）に入り込むなど、実際のところ絶対に不可能であるはずなのだ。

何故なら、細かいところまで説明すると長くなるのだが、天使の領域（アス）を囲んでいる守護天使（ガルバチュア）の白壁は本来、不浄の大地（ディス・エンガッド）との境界ではなく、黒の一族や、アーシアンから天使の領域（フィリアラ・ディアス）を守る防壁であり、魔法結界により入り口以外からは絶対に入れないようになっている。

そして、その入り口自体は何箇所かあるのだが、それらは２４時間天空騎士団（アイッシュグランド）によって守られており、その監視の目をかいくぐって、黒の一族だろうが、アーシアンだろうが、招（まね）からざる客が天使の領域（フィリアラディアス）内に入ることなど考えられないのだ。

「嫌な予感・・・。それは天使の領域（フィリアラディアス）内に誰か、黒の一族を手引きするものがいるという可能性でしょうか。」

俺もすぐにその可能性については考えてた。

そうでなければ、あの白壁は破られるはずはない。

「うむ。無論、黒の一族どもが、何かしら白壁の結界を破る方法を、見つけ出したという可能性も捨てきれんが、裏切り者がおるという可能性のほうが、高いとわしは踏んでおる。ただ、どちらにしてもいえることは、世界の果て（レドヴァガンナ）が千年振りに弱まっている、今の時期、

西の、黒の一族の動きが活発になっておるということだ。」

世界の果て（レドヴァガンナ）という名の結界により、幾重（いくえ）にも折り重なる大地たちは、互いに干渉し得ないようになっているといわれている。

しかし、その結界は千年に一度だけ、その強固なる力が弱まるのだ。

実際に黒の一族を西方の魔境（シェストリア）に追いやったのも、その周期があったからこそ実行できたことだった。

そして、再びやってきたその周期に呼応するように現れた黒の一族。

ヒロのように時間と共に全てを忘れ去ったわけでもなく、天使一族に復讐心を持ち続けた彼が、何をしようとしているかは、馬鹿でも分かる。

彼らは、全てを取り戻しに来たのだ。

また不浄の大地（ディス・エンガッド）でも、いくつか黒の一族らしい存在のの情報も有る。

確かに確信はないが公爵が言うように、今回のことや、またアーシアンの動きも活発になっているのも、もしかしたらそれと無関係ではないかもしれない。

どちらにしても、今は目に見えていなくとも、黒の一族の力が活発になってきているのではないかと、俺も考えていた。

「まあ、わしとしては、黒の一族が本腰を入れてくる前に、お主の力が完全になったのは幸いじゃと思うておる。お主の力さえあれば、まず負けることはないからな。ただ、黒の一族が黒の武器（カシュケルノ）まで持ち出してこれば、お主が如何に強くとも、こちらの犠牲とて、覚悟をせぬといかんのもまた、事実じゃ。」

それで、俺の力が戻ったことを喜んだわけである。

あいかわらずの、自分勝手ぶりに心の中だけで笑った。

「確かに、黒の一族がどれほどの戦力を持っているか、定かではあ

りませんが、黒の武器（カシュケルノ）が向こうにあると想定したとき、私たちとて犠牲を覚悟する必要があるでしょうね。」

千年前戦った俺だから分かる。

黒の一族（あれ）は、そういう力を持つものだ。

俺たち天使を傷つけるものであり、白き神の力の唯一対抗できる存在。

故にサンタマリアは、恐らくヒロを使ってその力を手に入れようとしたのだろうが、俺としては、ヒロを手元において置くなら、あの力はやはり封印したほうがいいと考えている。

俺の言葉に公爵は頷いたが、一転して今まで朗（ほが）らかだった様子が一変した。

「その通りじゃ。だが、人間如（ごと）きに、我ら天使一族が傷つく必要はないであろう？」

ニタリと笑う顔は醜く、憎悪に揺れる。

恐らく、千年前の人間との戦いのことを思い出しているのだろう。

あの時は、天使も人間も多くのものが犠牲になった。

俺だって、あの時の情景を思い出すだけで、人間たちなど八つ裂きにしたい思いに駆られる。

「どういう意味ですか？」

確かに、人間相手に天使が犠牲になることは、なるべく避けないことではあるが、公爵が差すところのことは全く思いつかなかった。

「なあに、愚かな人間どもは、人間同士で戦えばいいということじゃよ。」

その言葉を聞いた瞬間に、俺はある一つのことに思い至った。

同時に彼らがどうして俺をここに呼んだかを理解し、そして酷い嫌悪感が胸のうちを支配した。

そして、公爵が一つ手を叩くと、誰かが一人、場違いにけたたまし

い声を上げながら入ってきた。
「ふひひひひぃっ。こ、これは、万象の、万象の天使様っ！始めまして！わ、わたくし、わたくしは・・・・」
現れたのは気持ち悪い笑い声を上げる、細く、青白い顔色の人間の男。
俺を不躾（ぶしつけ）に覗き込む男の顔には見覚えがあり、俺の推測は確信に変わった。
「だまらんか！人間如きが、我らの許可なくしゃべるでない！」
「ひぁい！」
しかし、すぐに天使に取り押さえられた。
俺はそれに一瞥（いちべき）だけ向けると、円卓に視線を戻した。
「あれを使う気ですか。それは何度も無理だと申したはずですが。」
そう、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）から、何度もこの人間の男の研究を使うように打診は受けていた。
だが、俺たちは今までそれを全てはねつけていた。
「魔人（ベルトゥール）は、危険だから・・・かのう？」
魔人（ベルトゥール）。
聞いただけで、吐き気がする存在だ。
このパルマドールというエンディミアンが造りしおぞましい存在、人造人間魔人（ベルトゥール）。
見た目もそうだが、それだけではなく、それは暴走を繰り返し、不安定で、危険な存在を、天使一族のためにも使う気はなかった。
そもそも人体実験など、いくら人間が憎いとはいえ、倫理的にも受け入れがたい方法を使ってまで、人間を従わせるつもりはなかった。
だが、天使一族の犠牲を極端に嫌う老人連中は、それでも魔人（ベルトゥール）の軍事的採用を求め続けてきた。
だから、俺たちはその魔人（ベルトゥール）の危険性を盾に、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）の意見を全て却下し続け、その管理を全て大地の天使・ラインディルトに任せ

た。
それにより、老人たちとこの狂った科学者との接触も許さず、魔人（ベルトゥール）研究も大して進まないようにさせた。
・・・だが、この目の前で自信満々な笑みを浮かべている公爵を見れば分かる。
どうやら、ラインディルトの管理では不十分だった。
俺は心の中で舌打ちをした。

「心配はいらんよ。おい！あれをお見せしろ！」
今度は公爵が二つ手を叩くと、扉から新たな人物が出てくる。
一人は白衣を着た背の高いひょろひょろした男、そして、その男に背中を支えられたまだ歳若い子供といってもいい感じの少年。
その足取りは軽く、翼がないから人間であることは分かったが、これといって他には特徴ない普通の人間の少年だ。
俺はそれを僅（わず）かに、目を細めてみた。

「説明しろ。」
「はい。」
しかし白衣の男が答えようとすると、それまで床でぐずぐずとしてた男が、天使を跳ね除けて、ばっと起き上がり、あのキーキー声を発した。
「わ・・・わたくしがします！アースラ君、アースラ・・・。」
「お前はしゃべるな！」
しかし、天使に再び押さえ込まれて、ぐぐぐと動物の鳴き声のようなうめき声をあげる。
それには目もくれず、公爵はアースラと呼ばれた人間に、先を促した。
「さあ、説明しろ。手短にな。」

「はい。まず、この少年は魔人（ベルトゥール）だということを、ご了解ください。」
俺を見て、淡々とアースラは言った。
「魔人（ベルトゥール）といえば、実験を繰り返すために、これほど綺麗な状態は保てないと聞いていたが？それに精神的不安定さも見えないようだな。」
俺が報告を受けていた魔人（ベルトゥール）といえば、確かに継ぎ接ぎだらけで、精神的にも全く自分の意志を持たないような人形みたいな存在だった。
そして、それ以上は研究を進めないようにさせてきたはずだった。
だが、研究は俺たちの知らないところで、確実に進歩していたようだ。
「はい、従来までの魔人（ベルトゥール）とは違い、精神的・肉体的にも改良がなされ、これならば間違いなく軍事的にも利用できるようにいたしました。」
「さあ、これで魔人（ベルトゥール）の軍事利用について、問題はないはずですな、万象の天使？この魔人（ベルトゥール）の利用を今日こそは了承してもらうぞ。」
にやりと笑った公爵の顔は、俺に勝ったという喜びに満ち溢れていた。
今まで危険を理由に、魔人の軍事利用をはねつけてきた、こちらとしては、何とも苦々しい思いがした。
だが、そんなものを表に出して、相手を喜ばせることはしたくない。
俺はにっこり笑ってやった。
「そうですね。ただ、こちらとしてもその改良された点を、きちんと吟味（ぎんみ）させていただいた上で、利用を検討いたします。」
その言葉の意味に円卓の面々は、気に入らないような表情を隠そうともしなかったが、俺は無視した。
誰がこの場で即決などできるものか。

そんなことを思いながら、ふと視線の端にいた少年が無邪気に笑うのが目についた。
それから俺はすぐに視線を円卓に戻し、天使たちに腹のうちを見せないような表情を顔に張り付かせた。
「・・・。」
その後も沈黙をもって、うだうだと五月蝿(うるさ)い天使たちを黙殺しながら、俺は如何にして今後の対応をすべきか考えていた。

しかし、何故だか先ほど見た少年の浮かべた笑みが、脳裏(のうり)から離れず、気になって仕方なかった。

第三十二話　天使たちの謀　其の二（後書き）

第二部も『起』から『承』の部分に差し掛かりつつあります。第一部で出てきたパルマドールとその研究成果『魔人』。これから、色々物語に関わってまいります。

また、世界の円卓や、尊き血の天使（彼らについては第二十六話でリリアナが少し触れてます）など、天使の内部も一枚岩ではなく、色々抱え込んでいる部分が出てきましたね。これから、更に蠢く陰謀にエヴァンシェッドは立ち向かっていく予定です。

後、もしこんな大したこともない物語を毎回読んでいて下さる奇特な方に少しお知らせを。

お蔭様でここまで何とか快調に一日おきに更新を進められてきましたが、ちょっとばかし私に余裕がなくなりそうなので、一日おきは崩さないつもりなのですが、更新のボリュームが減るかもしれません。

善処はするつもりですが、楽しみにしていて下さる方がいましたら、『ああこの人、余裕がないのね。』と暖かい目で見守っていただけると幸いです。

第三十三話　天使たちの謀　其の三

俺が何を言っても沈黙を貫いたことに、業を煮やした円卓の面々は魔人については、白の議会で決着を付けてやると豪語して、やっと俺を解放した。

白の議会が魔人の軍事利用を了承したとなれば、何人たりとも、その決定を覆すことができないことは、何度となく自分たちを意見を撥ね付けられてきた、彼らのほうが骨身にしみているはずだ。

それを言い切るということは、この魔人に関して、彼らは何らかの確信に近い自信があるということなのだ。

そうして世界の円卓を後した俺は、今後の対策を協議するためにも、すぐに三大天使たちを召集しなければと、足早に議会場の前に停めておいた馬車に乗り込もうとした。

そんな俺を呼び止める声がして振り向くと、先ほどまで円卓に座っていたケインが、俺に向かって子供のように手を振っていた。

俺は手を振り返すことはなかったが、それでもケインに軽く頭を下げた。

第三十三話　天使たちの謀　其の三

そして、今俺はケインと馬車の中で、向かい合わせに座っている。

「〜♪」

「・・・。」

ケインは何が嬉しいのか知らないが、機嫌良さげに鼻歌交じり。

今まで彼と個人的な付き合いもなかった俺は、そんな彼の真意を測りかねていた。

御者には天近き城（フェデス・ジグロア）には帰らず、喜び（カイラーク）の天使の街を適当に流せと命じてあるが、正直今は刻一刻と流れる時間が惜しい。
じりじりと一人じれていると、思いが通じたのか、やっとケインが口を開いた。
「お呼び止めて申し訳ありませんでした、エヴァンシェッド様。この後、何か用事などありましたでしょうか？」
「いいえ。特に急ぎの用事はありませんからいいですよ。」
互いが互いに嘘をつく、何ともいえない、腹の探り合いの空気がひしひしと感じられた。

「それで、一体何の話ですか？」
それでもさっさと話を済ませたい俺は、そう切り出してみるが、ケインは窓の外に視線を移して、言葉を返してこない。
・・・この男、一体何を考えている？
俺はケインが何を考えているのか分からないやら、話が進まないやら、ケインの大人の癖に妙に子供じみた仕草やらが気になって、どうにもイライラが募（つの）る。
そんな俺を知らないケインはのんびりとしたもので、話の本題には入らずに世間話を始めるのだ。
「そういえば、昨夜喜び（カイルーク）の天使の街で火事があったのをご存知ですか？」
「ええ。」
外を見れば、ちょうど火事の現場の近くを馬車が走っていた。
恐らくヒロが落ちたという火事だ。

「ああ、ほら、あれですよ。うわ、本当に何もかも真っ黒こげですね。」
興味本位丸出しの声に釣られて、視線を外に移してみれば、確かに見るも無残（むざん）な大きな屋敷の残骸（ざんがい）から、火事の規模の大きさがうかがい知れた。

・・・ヒロはこんなところに落ちて生きているというんだから、不老不死の天使が言うのもなんだが、まるで不死身だな。
ヒロが生きているに違いないと思っている俺は、関心半分、呆れ半分で俺はその景色を眺めた。
そうして馬車がその焼け跡前を、ゆっくりとしたスピードで通り過ぎると、ケインは何気ない風に再び話し始めた。
「そういえば、あの屋敷の主は、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）の一員のヤナウス殿なんですよ。今日は、こんなことの後ですし、参加されてませんでしたけど。」

「ああ、そうなのですか。」
俺は相槌をうちはしながらも、ケインの声に世間話というだけではない、他に別の何かを感じ取って、俺が僅かに眉を顰（ひそ）めた。
それを見て、ケインは身を乗り出して俺に顔を近づけ、ひそひそ話でもするように声を潜めた。
「いえねぇ。私、今日の午前中、早速ヤナウス殿のお見舞いに伺ったんですよ。意気消沈（いきしょうちん）されて、お気の毒に。」
その声に、ヤナウスを気遣う色はない。
「その時ですね、面白い話を聞いたんです。」
「面白い話？」
思わず聞き返すと、嬉しそうにケインは笑った。
「ええ、何でもヤナウス殿はアーシアンたちに襲われたらしいんですがね。」
「ああ、最近よく聞く、アーシアンの・・・。」
天使に虐（しいた）げられたアーシアンが逆上して天使を襲うという話は、懺悔（ざんげ）の街などでは、よく聞く話だった。
そもそもアーシアンと混在できる街など、白の議会（イビシデュア・カルヴァ）で決められたことでなければ、俺が即効でつぶしてやっている。
天使は皆、人間たちを舐めすぎているのだ。

力がなくとも、大人しい犬も時には飼い主の手を噛(か)む事だってある。

「ええ、まあ。ヤナウス殿のアーシアンへの扱いは、天使の我々がいうのもなんですが、目を覆いたくなるほどに、残酷らしいですから・・・。まあ、過激なアーシアンたちに狙われるのも当然という感じですよ。」

そして、ここからが本番といわんばかりにケインは声を低くした。

「ただ、まさか天使の領域(フィリアラディアス)で襲われるとは、考えていなかったようですよ?」

ふふふと、人の不幸を楽しそうに話すケインに、虫唾(むしず)が走った。

・・・これだから、貴族のボンボンは。

だが、ケインが何を遠まわしにいいたいかは、これで何となく理解できた。

『黒の雷(オルヴァラ)』

罪人として虐(しいた)げられているアーシアンたちが、天使の支配下から解放されたいと願い、天使個人や天使の領域(フィリアラディアス)に向かって、暴力的な行動に出るということは、その度に天使はその全てを鎮圧してきたが、この千年来、何度もあった。

ただ、所詮(しょせん)アーシアンがいくら集まったところで、その活動はたかが知れている。

そもそも天使がいる場所が、懺悔(ざんげ)の街か、もしくは天使の領域(フィリアラディアス)しかないため、彼らが活動しようにも場所は極端に限られる。

そのために、天空騎士団(アイッシュグランド)による取り締まりも容易(よう)であり、大した被害もなく、その全ては断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)から永遠に出ることはないか、もしくは処刑された。

だが、黒の一族の動きが活発になることに呼応するかのごとく、ここ最近現れた黒の雷(オルヴァラ)という、武装集団のテロ行為といってもいい活

動は、それまでのアーシアンたちとは明らかに違い、俺も目を顰めざるを得なかった。
彼らのテロ行為は、今まで侵されたことのない守護天使の白壁内にまで及び、今回のようにアーシアンに対して非道を行うような天使たちの屋敷が襲われるという被害が、黒の雷が現れて以降、頻繁に起こっている。
天空騎士団で警備を強化し、何人も黒の雷の工作員を摘発もしたが、一向にその勢いが留まることがなく、また、その存在も色々調査はしているが謎が多い集団なのだ。

火事としか、サンタマリアから聞いていなかったため気にしていなかったが、ヒロが落ちた先がそんな場所だったとは。
そう思うと、急にヒロのことも気になりだして、俺はさっさとケインとの話に、けりをつけたくて、やんわりとだが話を急かした。
「面白い話というのは、そのことですか？」
さすれば、大げさなほど手を振って、それを否定する。
「ああ、違います。違います。面白のは、これからですよ。」
・・・だから、何の話なんだ。
感情の何一つ、この天使に見せる気はなかったが、苛付きは押さえられなかった。
元貴族だという連中は、優雅すぎて、どうにも俺にはあわない部分が多い。
俺とて優雅な様子は、貴族なんかより完璧にこなして見せるが、だからって元は普通の平民。
我慢はできても、馴染めない部分は捨てきれない。
だが、そんな微妙な気分も、次のケインの言葉で吹っ飛んだ。

「実はヤナウス殿が見たって言うんですよ。襲ってきたアーシアンにまぎれていた、天使の姿を。」

黒の雷（オルヴァラ）が、どれほどのものか定かではない。
しかし、そもそもアーシアンが、そんな簡単に天使の領域（フィリアラディアス）の中に入れるはずはないのだ。
黒の雷（オルヴァラ）が、どうこうという問題ではない。
守護天使（ガルバチュア）の白壁の警備は今も昔も完全だ。
問題は天使の領域（フィリアラディアス）の内部にあるのだ。

それは、すなわち黒の一族にしてもそうだが、内部に裏切り者がいるということを示唆（しさ）しているに他ならない。

それも天使の領域（フィリアラディアス）内で、天使に始終監視されているエンディミアンではない。
天使でなくては、アーシアンや黒の一族を天使の領域（フィリアラディアス）の中にいれることなど、現実的に不可能だ。
裏切り者は、我が一族の中にいる。
・・・信じたくない、考えたくない現実だったが、一族を守る長として、目を逸（そ）らすことはできなかった。

だから、その方向で内偵（ないてい）も進めていたが、こうして、本当に天使がアーシアンに手を貸していたという事実を突きつけられると、衝撃が違った。
顔に出していない自信はあったが、内心は動揺（どうよう）を隠せないでいた。
俺は人間が嫌いだ。
人間はかつて、この世界を千年戦争によりめちゃくちゃにした。
そしてその人間から一族を守るために、俺を初めとする多くの天使は戦い、この楽園を守り続けているのだ。
その想いを踏みにじられたような気がした。
それなのに、ケインは更に俺の心を揺さぶるような言葉を続ける。

「しかも、ヤナウス殿は、その天使に見覚えがあるというのですよ。

」

どれほど調べても分からなかった、裏切り者の姿を見た？

「・・・本当ですか？」

俺の声は震えてはいなかっただろうか？

「ええ、知りたくないですか？私も聞いて驚いたんですがね？」

裏切り者を知りたいという思いは強い。

だが、個人的な感情からは、知りたくないという思いが強い。

知りたい。

知りたくない。

知りたい。

知りたくない。

・・・だが、一族の長として俺は、それを知らなくてはなるまい。

「ええ、是非知りたいです。」

気持ちとは裏腹に、言葉は恐ろしいくらいにすんなりと出た。

「はい、もちろんですよ。エヴァンシェッド様。そのために、こうして貴方をお呼びたてしたんですから。」

ケインは俺の言葉に晴れやかな声で答えた。

この男が何を考えて俺を呼びたて、こうしてこの話を俺にしたかは分からない。

恐らく単なる好意ではない。

だが、一族を守ることこそ、我が願い。我が務め。

そのためならば、何を犠牲にしても構わない。

「それで、誰なんです？」

感情は揺れていたが、俺の決断は揺れない。揺れてはいけないのだ。

「ーーーーーーです。」

だが・・・。

「え・・・。」

ケインの告げた天使の名は、そんな俺の決断すら揺さぶった。
にこやかなケインの顔が霞み、規則正しい馬車の振動が遠のいた。

「さあ、どうさなさいます?」

そういわれて、瞬時に答えられない俺がいた。
あいつが?
その天使が自分を裏切っていることが指し示す意味を、俺の頭は瞬時に理解したが、感情が拒絶した。

嘘だ。
すぐにそう思った。

「まあ、信じられないのもわかりますよ。まさか、あの天使が・・・。私も驚きましたから。」

当たり前だ。
そんなこと、信じられるはずはない。

「しかし、そう思って躊躇(ちゅうちょ)していたら、取り返しのつかないことになるかもしれませんよ?」

分かっている。
黒の一族、黒の雷(オルヴァラ)、それらは天使一族に害をなすもの。

そして、その害を排除するのが、俺の役割だ。

「それにしても、こんなことを聞かされても表情一つ変えないとは、さすが万象の天使。」

意外そうな、嬉しそうなケインの声。
ああ、俺はこんな時でも、仮面を被っていられているのか。

「これなら、今から言う話も話しやすいですよ。実はお願いがあるんです。」

やはり、この情報は何かと交換条件というわけか。
だが、今はそんなことはどうでも良かった。
俺は冷静にケインの話を、一から十まできちんと聞き、理解をした。
だが、心は未だにケインの話を信じられずに、混乱したままあり続けている。

ヒロのこと。
魔人（ベルトゥール）のこと。
黒の一族のこと。
黒の雷（オルヴァラ）のこと。
・・・裏切り者のこと。

何かが動き出している予感がした。
そして、それは俺を待ってはくれないようである。
それでもいい。
俺は何でもないように、全てを受け入れる。
ただ、気休めでもいい。
今だけでいいから、誰かいってくれ。

あの人が、俺を裏切ったなどと嘘だと・・・。

・・・誰か、嘘だといってくれ。

第三十三話　天使たちの謀　其の三（後書き）

天使の裏切り者は、果たして誰か？エヴァンシェッドをこれほどまでに動揺させるとは、徒事じゃなさそうですね。（私が他人事みたいに言うのもなんですが）

でも、こうしてエヴァンシェッド視点で物語が展開すると、ヒロは彼に対して感情が見えなくて怖いみたいなことを言ってましたが、そういう訳じゃないんです。彼の場合は隠すのが上手いんです。

エヴァンシェッド視点は、あと一話。次は、三大天使が全員集合する予定ですので、よろしければお付き合いください。

第三十四話　天使たちの謀　其の四

俺は忘れることはないだろう。
自分の楽園が血みどろの戦いに傷つき、醜く汚れ、踏みにじられた事を。
絶えず戦いだけに支配しされて、疲れきった俺は、いつのまにか隣人を信じることもできなくなり、力がある者だけが生きることを許され、弱いものは涙を流すしかないのだと教え込まれた。
そして、俺は全て喜びと尊厳とを失い、全ての嘆きと屈辱に塗れた。

全てを破壊し、全てを元通りにするために、教えられたとおり、ただただ俺は力を求めた。
世界を恨み、全てを憎み、俺は狂ったように力を求め、そのためには、どんな犠牲も手段も厭わなかった。

そして、俺は世界を変えた。

俺は、俺から全てを奪ったものから全てを奪い返し、かつての楽園を再びこの手に戻した。
そして、二度と奪われないよう、永遠のものにするために、俺は未だに力を求め続け、戦い続けている。
そのためになら、どんな犠牲も手段も厭わない。
そんな強迫観念にも似た感情すら変わらないままに、俺は未だあり続けている。

第三十四話　天使たちの謀　其の四

俺は天近き城（フェデス・ジグロア）に戻ると、すぐに三大天使を城内の一室に集めた。
その理由は無論、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）で公爵に突きつけられた魔人（ベルトゥール）の軍事採用について、白の議会（イピシデュア・カルヴァ）に議案を出される前に、今後の対応を協議するためだ。
次の議会の開催は１０日後。あまり時間があるとは言えなかった。

招集（しょうしゅう）をかけた部屋は城内では比較的小さく、豪華でもなく、ただ落ちかけた西日が窓から差し込み赤く染まっていた。
俺はその赤い日を背にして窓際に立ち、盲目の天使サンタマリアは一脚しかない椅子に座り、赤髪の天使ラインディルトは俺の傍らに、そして最後の三大天使シェルシドラは部屋の真ん中に突っ立っていた。
俺も三大天使たちも、ずっと魔人（ベルトゥール）の存在については反対をしてきたのだ。
俺が目にした魔人（ベルトゥール）の話に、三人の天使が一様に表情を堅くしたのは、言うまでもなかった。

「まさか・・・。」
中でもラインディルトは、ありえないというように驚愕（きょうがく）の表情を浮かべ、否定の言葉を口にした。
まあ、自分が監視をしていたはずの対象が、真実その監視を掻い潜っていたのだ。驚くのも無理はないだろう。
「あなたの責任ですよ、ラインディルト。どう責任を取るつもりですか？」
そのラインディルトに、きつい言葉を投げかけるのはサンタマリア。
だが、それを宥（なだ）めるように長身の天使、三大天使が一人・蒼穹の天使シェルシドラが間に入る。
「まあ、そういうなよ、サンタマリア。何を言っても事実は変わらないんだし、今の俺たちができるのは、如何（いか）にして、魔人（ベルトゥール）を使わせないかってことだろ、な。エヴァンシェッド？」

同意を求められ俺は一つだけ、頷いた。

三大天使の中では一番背が高く、ひょろりとして軟派（なんぱ）な印象をもたれがちなシェルシドラは、青い翼に短かい金髪に碧眼（へきがん）を持つ美丈夫で、三大天使の中では一番目立つ容姿をしていたりする。
その実は大層真面目なのに、そんな容姿で損をすることが多いのが、この男。
また、俺たち神と契約（ファギュラド）せし天使の中では、一番明るく、単純で、三大天使という肩書きを持つ割には、誰にでも親しみを持たれる性格をしている。

そんなシェルシドラに宥（なだ）められ、サンタマリアは些（いささ）か納得していないようだったが、俺の同意もあってか、ラインディルトから視線を外した。
「・・・そうね。まあ、ここでラインディルトの監督責任を追及しても、何の問題の解決にはならないわね。」
棘（とげ）のある言い方だが、まあ、彼女が言わなければ俺が言わなくてはならないことだろう。
ラインディルトを信用して任せたのだ。
そうである以上、この事態は確かに許されるはずのない、失態（しったい）であるなのだ。
ラインディルトも、それは分かっているから、俺の横で酷く苦々（にがにが）しそうに表情を歪めている。
だが、今は過ぎ去ったことを後悔している場合ではない。
これ以上、状況を悪化させるわけにはいかないのだ。

「とりあえず、白の議会（イビシデュア・カルヴァ）で否決してくれさえすればいいんだ。・・・となると、議員たちを、俺たちが説得をするしか方法はないよな。」
シェルシドラが、とりあえず提案を投げかけた。
白き議会（イビシデュア・カルヴァ）の議員は、１０年に一度、無差別に選んだ身分に関係ない

天使たち５０人で形成されている。
議会は臨時の場合は除き、一月に一度開かれ、その度に様々な議題を検討、承認する。
承認するには過半数の賛成が必要となる。（因みに、俺たちは議会に口を挟んだりすることはできるけど、賛成・反対する権利は有していない。）
「もちろん、そのつもりだ。ただ、議員たちを説得するにしても、改良された魔人（ベルトゥール）の情報があまりに少ないのが問題だな。」
何の変哲（へんてつ）もない、だがそれでいて、何か恐ろしいものを抱えている少年の姿を思い出した。

「実際、見てみて、どう感じたの？」
サンタマリアの問いに、俺は苦笑いを浮かべる。
「俺たちが長年恐れてきた、そのものの姿だった。強さは定かじゃないが、戦いに恐怖を抱かず、使い捨てがきいて、何より命令に背かない完璧な兵士だ。俺たちが問題にしてきた、精神面の不安定さも解消されたみたいだしな。何も知らなければ、あれほど素晴しい兵器もないだろうな。」
「では、何も知らない白の議会の議員たちが、改良された魔人（イビシデュア・カルヴァ）を見れば・・・。」
ラインディルトの言葉を俺は、引き継ぐ。
「間違いなく、了承されるな。魔人（ベルトゥール）の軍事採用が。」
俺の出した結論に、一同で重い息がついて出た。

「まあ、元々何も知らない議員たちは、今までの魔人（ベルトゥール）だって、賛成している奴も少なくなかった。そこを何とか俺たちが説得してたくらいだもんな。・・・その説得の理由までなくなるっつーのは苦しいよなぁ。」
その理由というのは、例えば倫理的なものに訴えたり、その不安定さを指摘したりと論理的に理解できるものだった。

だが、改良された魔人（ベルトゥール）に、倫理的という理由は依然としてあり続けるが、それも今の黒の一族や黒の雷（オルヴァラ）の危機が迫っている今、魔人（ベルトゥール）を完全否定する理由としては弱いであろう。

「いっそ、私たちが魔人（ベルトゥール）を拒否する理由を話しては、どうでしょうか？」

「言えるわけないじゃない！何のために長年、秘密を守ってきたと思っているの？大体、あんな外道科学者、さっさと始末しておけばっ・・・。」

ラインディルトの提案を、サンタマリアが珍しく強い口調で切って捨てる。

『・・・。』

西日も消えつつある、薄暗い部屋に沈黙が落ちた。

ラインディルトの気持ちも分からないでもないが、サンタマリアの言うことのほうが、正しいだろう。

あの『秘密』を守るために、俺たちは長年魔人（ベルトゥール）が公（おおやけ）になるのを阻止してきたのだ。

そして、その『秘密』に近づきつつあるあの科学者を、どうしてもっと早く、尊き血（ビットゥ・ラ）の天使に目を付けられる前に、始末しなかったのかが悔やまれるのは当然といえば当然のことなのだ。

だが・・・。

「今からでも、遅くないわ。あの科学者を始末しましょう。」

サンタマリアが、高らかに宣言する。

「馬鹿な！それは、あの時しないと約束したではないですか！」

だがラインディルトが、それをすぐに否定した。

ラインディルトは、暗殺など汚い手が嫌いな潔癖症（けっぺきしょう）だ。

かつて、あのエンディミアンを暗殺しようという話が出たときも彼

の反対により、それはなされることはなかった。
「でも、他に方法はないでしょ?!魔人(ベルトゥール)であの『秘密』に近づいているのは、あの科学者だけよ!あいつさえ始末すれば、後はどうにでもなるわ!」
「落ち着け、サンタマリア!」
ラインディルトに食って掛かるように激昂(げっこう)するサンタマリア。
シェルシドラが、咄嗟(とっさ)に二人の間に割って入るも、険悪な雰囲気が漂う。
シェルシドラが困ったように、俺に視線を向ける。

俺はそれに小さく息を吐くと、もたれていた窓から背を離して、ラインディルトに視線を向けた。
「二人とも、そう感情的になるな。ラインディルト、サンタマリアの言うことも最もだ。綺麗事(きれいごと)だけじゃ、一族を守れないことはお前も分かっているだろう?」
「それは・・・。」
俺の言っていることを、頭では分かっているラインディルトは言葉を濁した。

それから、目が見えない彼女には無用かもしれないが、サンタマリアにも向き合う。
「サンタマリアも、言っていることは正しいと思う。だがそれを実行できるかどうかは、また別問題だ。大体パルマドールを殺したところで、今となっては魔人研究(ベルトゥール)をとめられる可能性は、さほど高くないと俺は踏んでいる。それより、お前がパルマドールを殺したいのは、個人的理由じゃないのか?」
ビクリ。
サンタマリアの肩が震えた。

・・・やはりな。

「気持ちは分かるが、それが理由なら、パルマドールを殺すのはやはり却下だ。世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）も奴の周辺警備を厳重にしているのは目に見えている。それを俺たちの仕業（しわざ）と悟らせずに殺すのは、今の状況じゃ相当難しい。」

「・・・私たちの仕業（しわざ）と悟らせずに殺す。」

サンタマリアは俺の言葉に、呆然と一つ呟いた。

俺はそれを一瞬だけ目を細めてみて、それからすぐに話を変えた。

「ともかく、魔人（ベルトゥール）については、シェルシドラが初めに言った通り、各議員を説得して回る方法でいく。まあ、時間と労力はかかるが、俺たち全員でかかれば不可能ではないだろう。いざとなれば、俺の力を使っても構わない。」

議員の数は５０人。

正直その過半数を力を持っても支配するというのは、かなりの無茶だし、感情的にもしたくないとは思う。

だが、この件はそれに目をつぶっても、必ず阻止しないといけないことなのだ。

まあ、それとしても、少しでも負担は小さいほうがいい。

そのためにも、議員を説得して、支配する人数は少なくする必要がある。

皆、俺のその考えを理解してくれたらしい。

「了解しました。」

ラインディルトは、背筋を正した。

「おう。まかせとけ。」

シェルシドラは、俺に笑いかけた。

「・・・ええ。そうね。」

サンタマリアも、落ち着きを取り戻して同意を示す。

よし。

「では、以上で協議は終了だ。時間があるとはいえない状況だ。皆、頼んだぞ。」
俺が三人を見回して言うと、一同頷く。
俺たちは常に天使一族を守るために一丸となって、様々な問題に直面し、それを全て瓦解してきた。
今回も、４人で当たれば不可能な問題などないはずだ。

そうして解散を宣言し、それぞれの仕事に戻ろうという時、ふと気が付いたようにシェルシドラが俺を見た。
「あ、そういや、エヴァンシェッド。夜、大変だったらしいな。飼っていた黒の一族に逃げ出されたんだろ?」
「そういえば、貴方は大丈夫だったのですか?やはり、黒の一族などさっさと断罪の牢獄に入れておくべきだったのですよ。」
シェルシドラの楽しげな様子をぎらりと睨みつけて、ラインディルトが心配げな表情を浮かべる。
どうやら、二人ともヒロの脱走劇の話を聞いたらしい。
まあ、あれだけの大立ち回りだったのだ。
天近き城内で、隠すことは不可能だろう。

「騒がせて、すまないな。でも、あの黒の一族は天近き城層から落ちて、死んだという報告を受けた。もう心配はいらないさ。」
俺はにこやかに、ヒロの死を告げた。
「ええ?!そうなの?俺、黒の一族と手合わせしてみたかったのになぁ。」
「そうですか。それならいいのですが。」
俺の話に、あからさまに驚くシェルシドラと、ほっとしたような様子のラインディルト。
「ああ、それはサンタマリアのとこの、第一師団が確認を取ってくれた、なあ?」

俺が二人に頷いて、サンタマリアに話を振れば、椅子に座ったまま彼女は少し首を傾けた。
「ええ、報告はしたけど・・・、エヴァンシェッド、それでいいの？まだ調査させることはできるけど・・・？」

ヒロの死の報告を聞いたときの、俺の様子が可笑しかったことを知っている彼女は、そう言ってくれたが、俺は首を横に振った。
「でも・・・。」
まだ、何かいいたそうなサンタマリアの言葉を俺は遮(さえぎ)る。
「ともかく、今は黒の一族よりも魔人(ベルトゥール)の問題が先決だ。」
そう言ってヒロの話を断ち切ってしまうと、俺は率先(そっせん)して日がもう殆ど沈みかけて、暗闇に満たされた部屋を足早に出る。

その時、俺の横にいたラインディルトは何か考えこむように、堅い表情でうつむいた。
次に立ったまま通り過ぎたシェルシドラは俺にやけに挑戦的な表情を向けた。
そして、最後にシェルシドラの後ろに座ったままのサンタマリアは、俺に瞼を閉じたままの笑顔を向けた。

バタン。

「・・・ふう。」
扉を閉めて、彼らと別の場所にいると思うと思わず溜息が出た。

かつかつかつ。

天空騎士団(アイッシュグランド)が、所かしこに立っている廊下を、俺が歩けば皆が敬礼をした。
だが、今の俺には何も目に入らない。

俺はあの部屋で、いくつかの嘘をついた。
そして、その嘘には意味がある。
全ては、わが一族を守り抜くための嘘だ。
三大天使とて、そのための嘘ならば、きっと俺を責めたりしない。
だから、俺は嘘をつくことに躊躇いはなかった。

そんな俺を待つ二つの人影。
「エヴァンシェッド様、どうでしたか？」
一つはケイン。
「問題ない。」
俺の言葉に楽しそうに、ケインが微笑む。

「サンタマリアにばれませんでしかた？」
そして、もう一つは、
「それも問題ない。お前が言ったとおり、サンタマリアの心を乱したのが良かったのだろう。ーーーーー。」
俺が名を呼べば、ーーーーもまた、俺にまたにこりと微笑んだ。

その微笑から目を逸らした先には、ただ夜の帳（とばり）が下りた闇夜が広がる庭園が見えた。
日は、完全に落ちた。

第三十四話　天使たちの謀　其の四（後書き）

色々混乱してまいりました。（ちゃんと上手く、その辺りを表現できているか不安ですが）
三大天使を騙してまで付かなくてはいけない嘘とは？
エヴァンシェッドの真意は？
ケインと、もう一つの影は何を考えているのか？
ちゃんと第二部で解明するつもりですの、分かりづらかったら、本当に申し訳ありません。こんなごちゃごちゃした話ですが、見捨てずにお付き合いいただけると幸いです。
そしてエヴァンシェッド視点のお話はここまで、次からはヒロ視点（一応、生きてます）にもどりますので、彼のぼやき物語（笑）に再びお付き合い下さい。

第三十五話　再び流離人は牢獄へ　其の一

♪そこに、貴方はいるのでしょうか？
私には貴方が見えないのです。

貴方、道に倒れていないでしょうか？
貴方、誰かに傷つけれていないでしょうか？
貴方、未来を見失っていないでしょうか？

ああ、貴方のことを思うだけで心が引き裂かれそう。
私は貴方のことだけを思って、眠りにつきます。
せめて、貴方の夢を見れるように・・・。

誰もいない空間に私の下手な歌が響いた。
掠(かす)れた低い声に、女の恋歌なんて似合うはずもない。
昔、この歌を無意識に口ずさんでいた私に、エヴァが苦笑したことを、今でも昨日のことのように覚えている。

『なんて歌なの？』

無邪気なエヴァの質問。

『さあ、私も知らないな。』
『知らないのに歌ってるの？』
『別に名前なんかしらなくても、歌は歌えるだろう？』

しかし、私の答えが気に入らないのか、エヴァは子供っぽく頬を膨らませて不機嫌を表した。（全く男がそんな顔をするな）

『・・・本当に知らないんだ。私も知り合いが歌っているのを聞いて覚えただけだから。』
『ふーん。』

私がそう答えると、もともと大して興味もなかったのかエヴァは気のない返事をして、歌のことはすぐに忘れた。
しかし、私の中には、かつて私の傍でこの歌を歌っていた人影が、私に向かって何かを言った。

ああ、わかっている。
私は君を忘れてなどいない。

その影は、エヴァの前に私の心に刻み付けられた、醜くも美しき思い出の影。

第三十五話　再び流離人（さすらいびと）は牢獄へ　其の一

冷たくて、硬い床と、不浄の大地（ディス・エンガッド）の荒地のごつごつした地べたとでは、果たしてどちらが寝心地がいいだろう？

ここ最近天近き城（フェデス・ジグロア）で、やたら柔らかい分不相応（ぶんふそうおう）なベッドで寝かせて頂いていた私は、自分に慣れ親しんだ寝心地に戻ったからか、そんな下らないことに頭を巡らせた。
そして、そんなことを考えながらごろごろと寝転がる、私の視界映るのは、迫りくるような石の壁、自由を奪う手枷（てがせ）、行く手を阻む鉄格子（てつごうし）。
さあ、私は今何処にいるのかと問われれば、

・・・お察しの通り、現在私は牢屋に捕らわれていたりするのだ。

ええ、ええ、どっかであったような状況ですよ。（それもつい最近。）

・・・うう、もう嫌だっ。

と、まあ、私のやっていられない気持ちの吐露などは、この際、置いておくとして（人間切り替えが肝心だ）、私は天近き城で天使たちから命からがら逃げ切ったはいいが、新たなる相手に、再び不浄の大地への帰路を阻まれたのだ。

その新たなる相手というのが、断罪の牢獄で噂を聞いた、アーシアンたちで構成されているという、アーシアンの解放を目的としたレジスタンス・黒の雷。

・・・まあ、同族のアーシアンに捕まったというのも、どうかと思うのだが、あれだけエヴァンシェッドに啖呵をきっておいて、あっさりと天使に連れ戻されるという状況よりは、はるかにマシだ。（それだけは死んでも嫌だ）

ただ、マシというだけで、今の現状に私が多大なる不快感を感じていることだけは、述べておきたいけどな。（はあ。↑重い溜息）

そもそも広い不浄の大地でしか生きたことのなかった私に、こんな窮屈で何の自由もない生活が耐えられるはずはないのだ。

しかし、それにも関わらず断罪の牢獄での一ヶ月の囚人生活が、私をそれに適応させている感もまた否めなかったりするから、慣れというものは、ほとほと恐ろしい。

そうして、私は黒の雷による二度目の囚人生活（天近き城の生活も似たようなものだったから、三度目か？）を、不快感こそ多大に受けているものの、それでも何とか恙無く（？）送らせてもらってい

た。

「・・・・はぁ。」

そもそもどうして、私が黒の雷（オルヴァラ）に捕まったといえば、とりあえず、何とか、追いかける殺気溢れる天使たちから逃げ切ろうとして、天近き城（フェデス・ジグロア）の建つ高所から落っこちて、助かった所から始まる。

正直、エヴァンシェッドを気分よく沈めて、リリアナに別れを告げた後、私を明らかに殺そうと追ってくる天使たちから命からがら走り続けたこと、そして運悪く（結果としては幸運だったのかもしれないけど）天近き城（フェデス・ジグロア）から落ちたこと。

この二つの出来事を、私はあまり覚えていない。

今思い出そうとしても朧げ（おぼろ）で、断片的な記憶しか残ってはいないのだ。

ただ、『死にたくない』とか『不浄の大地（ディス・エンガッド）に帰りたい』とか、そんな動物みたいな本能的な感情だけが鮮明で、私を突き動かし、支配していたことだけは確かで。

そんな本能だけで動いていた私が、落下し続けながらとった行動は黒の剣（ローラレライ）を手にすること。

このまま地面に打ち付けられれば死ぬしかない。しかも、眼下に広がるのは炎の海。

状況は最悪だったが、それでも私は黒の剣（ローラレライ）の力を解放すると、その力を剣に込めた。

多分、黒の剣（ローラレライ）の力を下方向にぶつけて、落下の衝撃とスピードを和らげようと考えたのだろう。（本当に本能的な行動だったので定かではないが）

無論、タイミングを間違えれば、このまま落下するのと同じ結末。

いや、寧ろ即死よりも、苦しむ羽目になるかもしれない。
だが、その時の私にはそれを躊躇(ちゅうちょ)する時間はなかった。

落下し続ける私は黒の剣(ローラレライ)を構えたまま、建物から舞い上がる炎が目の前に迫る。
熱いと感じたかどうかも、私は覚えていない。
ただ、炎で赤い視界だけが記憶に焼き付けられていた。
そして、燃えている建物にぶつかる前に、私は黒の剣(ローラレライ)を振りぬいた。

建物の破壊音と共に、舞い上がる風圧。
その熱風ともいって差し支えない風圧は凄(すさ)まじいもので、私の体は垂直に落ちていた軌道から、ものすごい勢いで上空に弾き飛ばされた。

落下していたスピードは殺せた。

だが、とりあえず、落下スピードさえ落とせればと思っていた私は、その後のことは何も考えていなかった。
どこに落ちるかは『神のみぞ知る』である。
落ちどころが悪ければ、それもまた即死覚悟だ。

ドシャッ・・・！

それでも日ごろの行いが良いからか（神様に祈ったことなどないけど）、何とか燃え盛る建物の中ではなく、燃えていない何もない場所（多分、建物の庭だろう）に無事着地することができた。
私は、やわらかい草が絨毯(じゅうたん)代わりになって、それでも体に喰らった衝撃はかなりのものだったが、現在大した怪我もなく済ませることができた。
これは黒の剣(ローラレライ)の力云々(うんぬん)ではなく、運によるところが大きい。

正に不幸中の幸い。
私は、ラッキーだったのだ。

ただ、その時の衝撃で気を失ったのがいけなかった。

記憶は助かったと思った瞬間で途切れたまま、目が覚めた私はこの牢屋に閉じ込められいたのだ。
どうやら、あの火事は聞くところによると黒の雷（オルヴァラ）が天使を襲撃した現場だったらしく、空から落ちてきた私を、彼らは回収したらしい。
そのまま倒れたままだったら、天使たちに捕まっていたに違いない。
そういう意味では、黒の雷（オルヴァラ）には感謝しなければならないだろう。
うん。そこは感謝している。

ただ、彼らとて単なる善意で、空から落ちてきたような怪しげな私を助けてくれたわけではないのだ。
私を助けたのには黒の雷（オルヴァラ）の思惑があった。
私がここに、牢屋に捕らわれているということは、そういう意味なのだ。

その理由についても、ここに連れて来れられて一週間で概ね（おおむ）理解している。
牢につながれた私に訪れた3人の来客が、それを教えてくれた。

一人は私に請い。
一人は私に激昂（げっこう）し。
一人は私に問いかけた。

その三人の客人から導き出される私への要求は、叶えられるものもあれば、叶えられないものもある。
全部叶えてやりたいと思う気持ちもあるが、私は何でもできる超人

でも神でもない、単なる一個人である。

一度に色々言われても、困るよなぁ。

そんな想いが、この状況を更に不快にする。
捕らわれているというだけでも不快極まりないというのに、私を捕まえる人々は、揃いも揃って皆が、私に無理難題を突きつける。

だが、それを無視し続けることも小心者の私にはできず、こうして牢屋につながれながらも、ただただ頭を悩ませているのだ。

「はあ・・・。」

そして、また私は溜息をつくのだ。
溜息をつけば、つくほど不快感が募ると知りながらも・・・。

第三十五話　再び流離人は牢獄へ　其の一（後書き）

ヒロの新たなる展開にあたる、プロローグっぽい感じです。色々考えているようで、結構本能で動くタイプの彼の行き当たりばったりな様子も見ていただけたのではないでしょうか（笑）

次からは最後に少し出てきた、牢に閉じ込められたヒロを訪ねる三人の客人との接触により物語が展開していきます。うち二人は既に出てきているあの人とあの人、そしてもう一人は新たなる登場人物の予定です。ヒロが予想だにしていない修羅場がある予定なので、お楽しみに（笑）

第三十六話　再び流離人は牢獄へ　其の二

牢屋での生活、一日目。
というか、私が見張りを睨みつけて今の状況を聞き出した頃、その男はやってきた。
男は見張りを下げさせ人払いをすると、私に向かって手を上げて挨拶をした。

「よう。うちの牢屋の寝心地はどうだ？」
「・・・。」
「？なんだ、怪我は大したことないって話しだったが、喋れねえほどに調子悪いのか？」

その男は一見して、身の丈2メートルはありそうだった。
更に筋肉は隆々、肌は色黒、顔には無精ひげのはえた、強面のおっさんは、見るからに恐ろしいことこの上ない。
しかし、私に向けた妙に人好きしそうな笑顔は、
まるで、熊。
こいつは熊男で決定だな。

そう一人で納得する私は、エヴァが同じことをこの男に対して思ったことは知らない。

第三十六話　再び流離人は牢獄へ　其の二

「俺の名前は、アラシ。」

熊男、改めアラシはそう名乗った。
その名には聞き覚えがあったので、私は全身が打ち身で痛む体を起こした。

「・・・黒の雷（オルヴァラ）のリーダーか。わざわざ、私に挨拶に来るとは、レジスタンスというのは暇なのか？」
嫌味で言ったつもりだったが、アラシは動じることはなかった。
「いやいや、これでも意外と忙しいぞ？まあ、その忙しい体に無理をして、お前に会いに来た俺の気持ちを察しろよ。ヒロ。」

「どうして、私の名を知っている？」

私は瞳に殺気を込めた。
捕らわれた私と、捕らえたアラシ。
状況は私に一方的に不利だが、だからといってこの男に服従する謂（いわ）れはない。
しかし、アラシはそれをあの妙に人懐っこい笑顔でさらりと流す。
「これだよ、この剣のおかげでおめえが誰かすぐに分かった。でなきゃ、空から落ちてきた奴なんか、襲撃中に助けるかよ。」
そう言って、鉄格子（てつごうし）の向こうで彼が私に突きつけたのは黒の剣（ローラレライ）。

「おめえの顔は知らなかったが、黒の剣（ローラレライ）を持つものが、ヒロという黒の一族だというのは知っていた。エヴァから聞いてたからな。」
「エヴァを知っているのか？」
そういえば、ハクアリティスは恐らく黒の雷（オルヴァラ）に捕まったかもしれないと、断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）でミシアらに聞いていた。
ということは彼女と一緒に、まさか、エヴァもここに捕らわれていた？
でも、確かにエヴァはハクアリティスと共に、私が逃がした。

とりあえず、二人が一緒にいた可能性は高いだろう。
だが、そう仮定した時、何故にエヴァは天使の、エヴァンシェッドの元に連れられてきたのだろう、という疑問が発生する。

「ワハハ。そう怖い顔しなさんな。」
豪快に笑い声を上げながらも、その顔は笑っていないのが見て取れた。
どうやら、見た目通りの人のよさそうなだけの男というわけでもないようだ。
そう私が思った瞬間に、アラシの雰囲気ががらりと変わる。

ガシャンッ！

鉄格子(てつごうし)が強く叩かれて、渇いた音が牢屋に響く、それを追ってアラシの鋭い声が私に向けられた。
「状況がわかってねぇ様だな。お前は質問ができる立場だと思っているのか？」
そう言って、鉄格子越(てつごうしご)しに見たアラシの顔は、体格に見合った恐ろしいものだったが、生憎(あいにく)私にはどうという効果は現れない。
さすがはレジスタンスの長だと、ぼんやりと関心してしまったくらいだ。
そんな私の様子を悟ったのか、アラシはその表情をすぐにもとの温和な表情に戻した。
相手に合わせて態度を変えてきたのか、はたまた何も考えていないだけか・・・、まあ、中々の変わり身である。

「まあ、エヴァの名を出したのは俺だしな。イエスかノーくらいは教えてやるわ。エヴァのことは知っているかと聞かれれば、イエスだな。奴はハクアリティス様と一緒にいたからな。同じく捕らえさせてもらってたんだよ。」

ハクアリティス『様』？
その言葉に違和感を感じたが、この時はさらりと流した。
それよりも、ハクアリティスと共にエヴァは黒の雷（オルヴァラ）に捕まっていたということが、これではっきりした。
ならば、どうしてエヴァは天近き城（フェデス・ジグロア）にいた？
そもそも、あまり深く考えていなかったが、エヴァはどうやって天使の領域（イリアラディアス）に入った？
まさか黒の雷（オルヴァラ）のアジトが、天使の領域（フィリアラディアス）の中にあるわけもないだろう。
エヴァは自分からエヴァンシェッドのもとに還るために、自分の足で戻ったのか？
それとも・・・。

「・・・もう一つ聞かせてくれ。」
「何だ？」
「エヴァはどこにいる？」
エヴァがここに、いや、もう世界の何処にもいないことを、私は知っている。
だが、エヴァのことについて、アラシが何処まで知っているかで、私の今後の対応も変わってくる。
その問いに、渋るかと思ったアラシであるが、彼は案外簡単に言葉を続けた。
「もうここにはいないぜ？エヴァはあるお方に引き渡した。その相手については聞くなよ？何言われても話せねえからな。」

引き渡した？
エヴァはそいつから逃げ出して天使の元へ？
それとも、そいつがエヴァを天使の元へ？
だとしたら、そいつはエヴァのことを知っていた？
考えは色々浮かぶが、これ以上はアラシに聞いても答えそうもないし、知らないように見えた。

彼は単純な男のようだが、自分というものは確り持っていそうだ。
短時間の会話で、私はそういうアラシという熊男を感じた。
『あるお方』というのが、気になるがこれ以上は突っ込んでも無駄だろう。

「お前の質問はここまでだ。最初に言ったとおり、俺も忙しいんでな。用はさっさと済まさせてもらうぞ。俺が聞きてぇのは、ただ一つだ。」
どうやら、やっとこさ本題らしい。
アラシは黒の剣を手の中で遊ばせながら、私の顔を睨みつけた。
「黒の剣の使い方を教えてもらおうか?」
「使い方?剣の使い方なんて、私に聞くこともないだろう。」
シラを気って見せれば、アラシはギリリと怒りを露にする。

「そんなこと聞いてねぇのは分かってるだろう?俺が聞きたいのは黒の武器の使い方だ!」
激昂するアラシ、それに対しても私は冷静に考えをまとめていた。
とりあえず、黒の武器という単語に違和感を感じた。
その名を知るのは天使たちや、エンディミアンばかりだと思っていたが、アーシアンの間でもメジャーだということか?

「どこで、黒の武器のことを知った?それにどうして、私がそれをもっていると知っている?」
「これ以上、お前に質問はさせんぞ。」
睨まれても、全然怖くないからな。
「そんなもの、知ったものか。なんなら無理やり拷問でもしてみるか?言っておくが、何も知らないこの状況じゃ、死んでも私は何も話さんぞ。」
「・・・・うぐ。」
いくらか年下であろう私に、何も言い返せないアラシ。

悪いが、拷問については天使たちのおかげで耐性(たいせい)がついている。
ちょっとやそっとじゃ、口を割らない自信があった。
すると、アラシは簡単に白旗を揚げた。
「・・・とある天使に聞いた。お前が黒の武器(カシュケルノ)を持っていると。」
「天使？」
アラシは天使と繋がりがあるのか？
どの程度私のことが天使の間で認知されていたかは定かではないが、天使ならば私のことを知っている可能性はあるだろう。
だが、天使たちの支配からアーシアンを解放しようという彼が、天使と繋がりがあるという事実に私は思わず眉を顰(ひそ)めた。
アラシは私のそんな感情など気が付かないように、更に私に募(つの)った。
「それよりも、黒の武器(カシュケルノ)の使い方だ。俺には黒の武器(カシュケルン)が必要なんだ。さっさと教えろ！」
かなり焦っている様子だ。
だが、残念だな。
「言っとくけど、黒の武器(カシュケルノ)は、黒の一族にしか使えない。」
誰が自分の武器を、黒の剣(ローラレライ)を見ず知らずの相手に渡すものか。
そう思いながら、これでこの話は私がアラシを手玉にとって終るはずだったが、アラシはそれには、さらりと答えを返した。
「心配しなくても、俺も黒の一族だ。」
思わず目が点になった。
アラシもまた、私と同じ黒の一族？
「・・・お前は西方の魔境(シェストリア)から来たのか？」
殺されたとはいえ、黒い影も然(しか)り。
こんな形でまた同族に会うとは、世間が狭いのか、はたまた黒の一族というのは、今まで縁がなかっただけで、案外多いものなのか？
「いいや。俺は東方の楽園(サフィラ・アイリス)生まれだ。おめえとは違って流離(さすら)うこと

は、やめちまった一族だがな。俺も西方の魔境（シェストリア）から、脱出してきた黒の一族の末裔だ。ただ、お前と違って我が家系は色々過去のことは覚えていたが、黒の武器（カシュケルノ）については何も覚えていないんだ。」

要は、黒の神のことは知っていても、黒の武器（カシュケルノ）の使い方は知らんということか。私とは逆のパターンだ。

アラシは黒の剣（ローラレライ）を床に置くと、両手にはめられていたグローブを私に見せた。

それは何の変哲（へんてつ）もない、極一般的なグローブだ。

「？」

私が何をしたいのだろうかと、首をかしげるとアラシはグローブを私に突きつけながら、更に私を驚かせた。

「これが俺の黒の武器（カシュケルノ）。名前は黒の雷（オルヴァラ）だ。」

話しによれば、世界に7つにしか存在しないといわれている黒の武器（カシュケルノ）。

こんなにひょいひょい出てきていいものなのか。

驚いたのは一瞬、次の瞬間には何だか呆れたような、気が抜けた気分になった。

だから次に心に思い浮かんだのは、その名前について、レジスタンスの名前を黒の武器（カシュケルノ）から取ったのかということ。

まあ、天使に一矢報いた黒の武器（カシュケルノ）の名前は、レジスタンスにはぴったりかもしれないなあ。

と、のんきに考えた。

だが、その一方でアラシは真面目な話を続けいた。

「俺たちの一族も、お前たちと同じように黒の雷（これ）を代々受け継いできた。」

アラシの祖先も、サンタマリアの話が本当ならば、不浄の大地（ディス・エンガッド）を放

浪した末に、黒の雷（オルヴァラ）を取り戻し、その後は目的もなく放浪することをやめ、定住を決めたのだろう。
そして、長い時の中でその使い方を忘れた。
「だが、使い方が分からないんじゃ、こんなものただのグローブだ！お前は知っているんだろう？これの使い方を！頼む！天使たちに対抗するために、どうしても黒の雷（オルヴァラ）は必要なんだ！教えてくれ！！」
黒の武器（カシュケルノ）などと恐れられようが、力を目覚めなければ、単なる普通の武器。
それは黒の剣（ローラレライ）とて同じことだ。
黒の武器（カシュケルノ）の大きな力の話だけ伝え聞いていて、それが手元にあるのに使えないという状況は、今のレジンスタンスのリーダーとしてのアラシの立場ならば、もどかしい事この上ないだろう。
「頼む！」
土下座も厭（いと）わないといった勢いのアラシ。
「・・・。」
だが、そんな必死なアラシの様子を前に、私の心中は複雑だった。

私とて彼が本当に天使たちから、アーシアンの解放を願っているとしたら、そのために力が欲しいというならば、無論、力の解放の仕方を教えてやるのはやぶさかではない。
しかも、彼はどうやら黒の剣（ローラレライ）を私から奪って使うのではなく、黒の雷（オルヴァラ）を使いたいということらしい。
それならば、教えてやりたいと思わないこともない。
だが、アラシは何も知らない。
黒の武器（カシュケルノ）の力を得るためには、『代償（だいしょう）』を払わないといけないことを。

『ヒロ、愛しているわ。』

脳裏に蘇る彼女の影。
私はぎゅっと瞼を閉じた。
「おい！聞いてるのか？！」
そんな私の様子に、アラシは焦れたように叫ぶ。
「・・・そんなに力が欲しいのか？」
「当たり前だろ！」
私の問いに間髪いれずに、アラシは答えた。
そんな彼に私は問うた。
「そのために、誰かを殺さなくてはいけなくてもか？」
「え？」
アラシは耳を疑うように、声を漏らした。
私は重ねていった。
「黒の武器の使い手になるためには、誰かの命を差し出さなければならない。それが、使い手にとって大切な命であればあるほど、黒の武器は大きな力を与えてくれる。・・・そんな力でもお前はーーーー。」

「嘘だ！お前は、俺に力を使わせたくないから、そんな出鱈目を言ってるんだ！」

私の言葉を遮るようにアラシが叫んだ。
まあ、受け入れがたい事実ではあるだろうな。

「そう思いたいなら、それでもいい。だが、お前が黒の武器にどんな風に考えていたかは知らないが、それが黒の武器の真実だ。」
「黙れっ！」

アラシは、自分のために誰も犠牲にしたくないんだろう。
誰だって、普通はそうだ。
だから、こうして激昂する。

私とて・・・とは、黒の武器（カシュケルノ）の力を持つ私が思うことは許されないことだろうな。
そう自嘲（じちょう）しながら、私は更にアラシの神経を逆なですると分かっていても続けた。
「言っておくが、ただ殺すだけじゃ駄目だ。それにも方法があるんだが・・・、それはお前が力を欲するか、力を諦めるか、決めてから教えてやるよ。」

「そんなもの、知りたくない！！」

ガァ・・・ンッ！！！

アラシは足元の黒の剣（ローラレライ）を、鉄格子（てつごうし）に思い切り投げつけた。
ビビビンと、鉄がなる音が余韻を残して響く。
「はあはあはあ・・・。」
私は身じろぎしないまま、肩で息をつくアラシを見守った。
もう、彼に私が告げる言葉はない。
私の問いに、後は彼が答えるだけなのだ。

力を欲するか。
力を諦めるか。

アラシとて『嘘』だと言っていようが分かってはいるのだと思う。
私が言っているのが真実だと。
そもそも、ここで私が『嘘』をいう理由もないからな。
だが、その事実を受け入れたくないから彼は『嘘』だと言うのだ。
「・・・。」
アラシは無言のまま投げて床に落ちた黒の剣（ローラレライ）を掴むと、私と目をあわせることなく、私に背を向けた。

「俺は、そんなことは絶対に信じないからな！」

最後にそれだけ叫ぶように言って、アラシは私の目の前から消えた。

大きい体のわりには、素早い動きだな。

そんなことをぼんやりと感じながら、私は近いうちにアラシが再び私の目の前にやってくるだろうという予感だけは、確かに感じていた。

第三十六話　再び流離人は牢獄へ　其の二（後書き）

一人目の客人はアラシです。彼がヒロに聞きたかったこととは、黒の武器の使い方だったんです。しかし、それが大切なものの犠牲の上に成り立つことは、まっすぐな彼の気性には合わないようですね。それにしても、黒の武器が使えるということは、ヒロは誰かを犠牲にしている・・・ということになるんです。今は亡き黒い影がヒロに『何を賭けた』と聞いている場面があるんですが、それは要は『何を犠牲にした。』という意味なんです。彼もまた、何かを犠牲にしたんだと思います。ヒロが何を犠牲にしたかは、また後々のお話で出てくると思いますので、その時に詳しく。

さて、次の客人は誰か・・・、ちょっとだけ予想がついたりしませんかね？ヒロと修羅場を繰り広げるあの人が出てきますよ。

第三十七話　再び流離人は牢獄へ　其の三

アラシが私に背を向けて、数十分後のことだった。
私は鉄格子越しに胸倉をつかまれ、体を揺らされながら、ぎこちない笑みで固まっていた。
何故って？それは、

「ちょっと！！！エヴァンシェッド様の『男の愛人』て、どういうことよ？！」

なんて、今となっては屈辱（くつじょく）すぎて抹消したい過去の話を、今さら声も高らかに叫ばれたら、もう笑うしかないだろ？
しかして、そんな私の目の前で怒りに震えるのは、かつて私が不浄（ディス）・大地（エンガッド）で助けた天使の花嫁・ハクアリティス。
彼女は、別れたままの美しくも激しい様子で私に向かって叫んだ。

「エヴァンシェッド様に変なことしたら、ただじゃ置かないわよ？！」

しかし、頭が真っ白になって、そんな彼女に何一つ言い返せない私は、心の中ではものすごい勢いで首を横に振っていた。
いやいや、奥さん。
私のほうが、変なことされそうでしたけど？
噂は確かにあったけど、だったらどうして私はここで捕まってるか、考えてみてくださいよ？
どこを、どう考えたら、私がエヴァンシェッドの愛人やると思うんです？

思わず口調まで変わってしまうほどに、混乱している私。

しかし、私がいくら呆気にとられて茫然(ぼうぜん)としていようが、彼女の瞳に私は夫を取られた憎き愛人にしか見えないらしく、嫉妬の炎がめらめらと燃えている。
大抵の化け物にも恐れを抱かない自信はあったけど、嫉妬に燃え盛るハクアリティスを前に、愛人と呼ばれた衝撃とともに、なんともいない恐怖を感じている私がいた。

・・・女の嫉妬は、怖い。

第三十七話　再び流離人(さすらいびと)は牢獄へ　其の三

彼女はものすごい勢いで牢屋部屋に入ってくると、牢屋の見張りの男に張り倒すような勢いで詰め寄った。
「ヒロに会わせなさい!!」
「し・・・しかし、危な・・・。」
その時は、一体誰が来たか分からなかった私だったが、
「このヘタレ男に、あたしをどうこうするような甲斐性(かいしょう)はないわよ!」
そう何気に酷いことを言いながら、ギリギリと見張りを締め上げる美しい顔を、鬼のような形相に歪めている彼女の顔を見て、それが誰だか理解した。

「・・・ハクアリティス?」

あれ?捕まってるんじゃないのか?
しかし、私がその質問を口にする前に、彼女は見張りを押しやって鉄格子越(てつごうしご)しに、私の目の前に来ると力の限りに叫んだ。

「こんの泥棒猫！」

一瞬何を言われたかわからなかった私である。
そのまま頭が真っ白になってハクアリティスに罵倒（ばとう）され続けること数十分、私があまりの衝撃に回復するのに要した時間だ。
その後、私がハクアリティスの誤解を解くのに更に数十分。
苦痛だったが、私はもう忘れたいと思っていたあの噂について、ハクアリティスにこと細かく説明する羽目になったのだ。（さもないと、鉄格子（てつごうし）を挟んでいるのに殺されそうな気がした）

・・・本気で疲れた。

「噂はでまかせだっていうことよねっ！」
しかして、ハクアリティスが何を怒り狂っているか理解した私は（大体どうして、その噂のことを知っているんだか）、とりあえず何とか彼女の誤解を解くことに成功した。
黒の一族のこととか、色々細かいことは、どうも理解していないような気配がしたけど、私の必死の言葉に、何とか嫉妬の炎は鎮火（ちんか）してくれたようだ。
私は安心のあまり、息を吐き、額（ひたい）の汗をぬぐった。
その私の肩を叩いて笑うハクアリティス。

うーん、我儘（わがまま）っぷりと言うか、この自分勝手さはかわらんなぁ（というか、それに拍車がかかっている気がしてならない）と思いながら、私は曖昧（あいまい）に笑うしかない。
「そうよねぇ、まさかあのエヴァンシェッド様が、『男の愛人』なんてつくるわけないわよねぇ？『女の愛人』だっていないのにぃ。」
「・・・。」
いやいや、山ほどいたけど・・・とは、無論口にしない私である。

機嫌のよくなったハクアリティス（それでも結局私に謝罪の言葉はなかった）を、わざわざまた不機嫌にすることもないだろうし、彼女とエヴァンシェッドの夫婦関係がどうなっているか知ったことではない。

うーん、ただここまで浮気を隠せる方法は、少し知りたいかも。

まあ今はそれよりも、ハクアリティスだ。

私は聞きたいこともあり、私と違い牢屋という場所が似合いようもないハクアリティスと向き合いながら、彼女に何気なく質問を投げかけた。

「それより、驚いた。何で君がこんな所にいるんだ？」

自分でも、白々しいなぁ、とは思った。

何せアラシの言葉から、ハクアリティスが黒の雷（オルヴァラ）に捕まっていることは察していたから、本当のところは聞く必要もないことではある。

だが、こんな風に偉そうというか、見張り相手に自分勝手できる環境とは知らなかった。（見張りがハクアリティスの背後から、ハラハラしながらこちらをうかがっている）

その理由には、少し興味があった。

答えないか？と内心は半信半疑だったが、ハクアリティスはカラカラと笑いながら、機嫌よく答えてくれた。

「ああ、本当はね。天使の領域（フィリアラ・ディアス）から脱出したら、不浄の大地（ディス・エンガッド）じゃなくて、黒の雷（ここ）に匿ってもらう予定だったのよ。心配しなくても、捕虜とかにされているわけじゃないの。」

「どういうことだ？」

そうそう、その辺が聞きたいんだ。

「だから、不浄の大地（ディス・エンガッド）に逃げ込んだのは、あたしにとっては不測（ふそく）の

事態だったのよ。天使たちの追手に想像より早く見つかっちゃって、黒の雷（オルヴァラ）の迎えが来るよりも、先に天使があたしを追いかけてきたの。だから、必死で逃げてたら、ヒロたちに助けられたってわけよ。」

違う違う。それはどうでもいい。

さて、私が知りたいことを聞き出すには、何と聞いたものかと、頭を捻（ひね）って出た質問は更に白々しい言葉だった。

「・・・私と離れた後はどうしたんだ？エヴァは一緒にいるのか？」

エヴァがいなことは百も承知だ。

だが、変に勘繰（かんぐ）った聞き方をして、彼女の口が閉じてしまうのは避けたかった。

なるべく、何気なく、何気なく言葉を選んだ。

「ああ、えっとぉ。」

そんな私の考えなど知ったことではないかのように、ハクアリティスはのんびりと答えを探す。

「なんか、気がついたらあたしとエヴァは懺悔（ざんげ）の街にいたのよ。」

懺悔（ざんげ）の街といえば、天使の領域（フィリアラディアス）のすぐ側の街のはずだ。

確かエンリッヒから二人を逃がした時、私はエヴァにサヴィラ街に行くよう指示をした記憶がある。

しかし、今の話からすれば二人はサヴィラ街ではなく、懺悔（ざんげ）の街に移動したということだ。

足跡（エンダー・ケルト）の指輪が誤作動を起こしたのか、はたまた、エヴァが自分で意図して懺悔（ざんげ）の街に移動したのか？

「で、エヴァがヒロと合流するために移動手段を見つけようとして、街に入ったところを黒の雷（オルヴァラ）に保護されたってわけ。」

その言葉からすれば、エヴァは自分で意図していたわけではないだろう。

だが、あの足跡（エンダー・ケルト）の指輪が誤作動というのも考えにくい・・・、そもそもエヴァが肌身離さず持っていたあの指輪は、今どうなっている

のだ？
ふいに気になったが、今はそれより目の前の問題から片付けないのとな。

「それじゃ、エヴァもここにいるのか？」
言っていて、虚(むな)しいことこの上ない。
だが、ハクアリティスはエヴァンシェッドの妻なのだ。
エヴァのことを、どこまで知っているか気になった。
もしかしたら、エヴァがエヴァンシェッドの翼ということを知っていて、私たちに近づいてきたとしたら、それはそれで問題が変わってくる。

しかし、ハクアリティスの言葉かあっけらかんとしたものだった。
「エヴァならいないわよ？よく分らないけど、エンシッダが用があるらしくて、連れて行ったけど？」
あまりに自然体なハクアリティスの言葉には、嘘はないように見え、アラシと同じことを言っていることも、信憑性(しんぴょうせい)を高めた。
そして、アラシは話すことのなかった『エンシッダ』という人物。

私は焦(あせ)らないように言い聞かせながら、更に突っ込んだ質問をした。
「エヴァに会いたいんだが、エンシッダという人を訪ねたりはできないのか？」
まあ、牢屋に閉じ込められて何を言うんだという感じだが、ハクアリティスは気にならなかったようだ。
「エンシッダはエンディミアンの長だし忙しいみたいだから、それは聞いてみないとわからないわね。」
「エンディミアンの長？」
てっきり天使かと思っていたが、エンディミアンなのか。
「うん。連絡は黒の雷(オルヴァラ)にいるから難しいけど、今度会ったときにでもエヴァのこと聞いておくわね。」

彼女はエヴァがもういないことを知らないらしい。
彼女に安請け合いに、私は嘘の笑顔を浮かべた。

その笑顔につられるように、ハクアリティスはさらに情報を口にする。
「あ、エンシッダとエヴァと言えば、あたしエンシッダに変なことを頼まれたわ。」
「変なこと？」
どうにも腑に落ちないのか、表情が固い。
「うん。黒の雷にいる間、エヴァと仲良くしろって言われていたのよ。」

『エンシッダ』・・・・か。

「ヒロ？」
「いや、何でもないさ、ありがとう。」
黙り込んだ私を見つめるハクアリティスに頭を下げると、彼女は少しだけ表情を何か言いたげなものにした。

「どうかしたか？」
「・・・ヒロはあたしのこと何も聞かないし、怒らないのね。エヴァはあたしが黒の雷に元々来るはずだったって事を知ったら、あたしを問い詰めて、すごい怒ったのに・・・。」
と、急にしゅんとしたハクアリティスの態度。
自分勝手極まりない彼女であるが、どうしてか妙にしおらしい一面も見せる。
これを計算でやっているなら、大したものだと思う。

『ヒロちゃんは、本当に美人に弱いんだから！』

そんなエヴァの声が聞こえてきそうだったが、今の冷静な私は別にそういうんじゃないんだ。

「まあ、私も気にならない訳じゃないけどな。大体さっきの剣幕からして、万象の天使が嫌で逃げ出したわけじゃないんだろ？」

私が言えば、ハクアリティスは力の限り頷いた。

「ええ！あたしはエヴァンシェッド様を、誰よりも愛しているわ。今回の脱出は、あの方の気持ちをより確かにするためのものだったのよ？最近忙しくて相手をしてくださらないんだもの。エヴァンシェッド様、あたしのことを心配していたでしょ？」

「そうだな。」

その言葉に相槌を打ってやりながら思った。

エヴァ、私とてそこまでのお人好しじゃない。

黙ってハクアリティスの言葉を聞きながら、反面その細く白い首を締めあげてやりたいと思う感情が首をもたげているんだ。

当然だ。

そもそも彼女のせいで、私とエヴァは巻き込まれた。

あの時、天使と関わるようなことさえなければ・・・と思ったことだって、エヴァを失った直後は一度や二度ではないのだ。

なのに私もエヴァも命を張ったというのに、たかが男の気を引きたいというくだらない理由で、こんなことに巻き込まれるなんて・・・。

こんな自分勝手な女のせいで、と思えばその感情とて一入だ。

・・・エヴァも、恐らく今の私に似た感情を、彼女に抱いたのだろうか。

ハクアリティスが、エヴァを奪ったわけではないのは分かっているが、こんな身勝手な理由で私もエヴァも大きく運命を変えた。

やりきれなくて、拳を強く握った。

そんな私に気がつかないハクアリティスは、更にうるさく言葉を続けていた。

「うふ！あとはいかに感動的にエヴァンシェッド様のもとに戻るかよね？！アーシアンたちの権利と引き換えに帰るつもりなの！アーシアンたちのためにもなって、あたしもエヴァンシェッド様との愛を確かめられて一石二鳥じゃない？！」

こちらを期待一杯で見上げるハクアリティスに、あの色ぼけ天使には愛人が山ほどいたと、君の話など一度とて出たこともない、と言ってやればいくらかこの感情が落ち着くのだろうか？

そんな残忍（ざんにん）な感情が、笑う私の中にひょっこりと顔を出す。

だが、それでも今の私は、怒りや憎悪という感情よりも、ひどく冷静な自分だけが先だっているのだ。

その理由も、ちゃんと自分の中でわかっている。

何故ならもう、全部終わったことだからだ。

ハクアリティス、一人に怒りや憎しみをぶつけたところで、エヴァは帰ってこない。

だから、きっとこのままハクアリティスに怒りを露にして、きっとすっきりとする部分もあるのだろう。

だが、結局はひどく虚（むな）しい気分だけが残るのだ。

女相手に、こんな自分勝手な人間相手に、そんなみっともないマネをするのは、御免だった。

だから、私はハクアリティスを許したわけじゃない、エヴァンシェッドと同様に、ただ、彼女のことは、どうでもいいだけなのだ。

それよりも、今の私の心を占めているのは『エンシッダ』、その人

のこと。
恐らく、そいつがアラシの言っていた『あるお方』に違いない。
そして、多分『エンシッダ』はエヴァが、エヴァンシェッドの翼であることを知っていたのだ。
だから、エヴァを黒の雷(ここ)から連れ出した。
何の根拠があるわけでもないが、私の直感がそう囁(ささや)いていた。

問題は、それまで天使たちにも気がつかれることがなかったエヴァの正体を、『エンシッダ』がどこで知ったか。
それが、偶然か、はたまた必然か・・・。
それを知ったところで、何が変わるわけじゃないことは、ハクアリティスに怒りをぶつけるのと同じだ。

でも、何故だか私はそれを知りたいと思った。
知らなければならないと思った。
本当に何故だろう?

・・・エヴァ、これはお前のお導きか?

ハクアリティスの言葉を右から左に聞き流しながら、私はそっとエヴァに話しかけた。

第三十七話　再び流離人は牢獄へ　其の三（後書き）

二人目の客人は、エヴァンシェッドの妻でもあったハクアリティスでした。修羅場っていうほど、修羅場じゃなかったかもしれないですね。期待されていた方がいらしゃったら、すいません。ただ『泥棒猫』って呼ばせてみたかったんです（笑）

そして今回のお話、ハクアリティスがべらべらしゃべってくれたおかげで、ヒロもいろいろな謎に一歩近づいた感じです。

次は、新しい登場人物が客人として登場します。

第三十八話　再び流離人は牢獄へ　其の四

『ヒロちゃんは、生きて。』

それはエヴァとの約束。
そして、彼女とも約束でもある。

だから、どんな状況になろうとも精々(せいぜい)みっともなく、足掻(あが)きながら生きてやる。
あの天使たちに囲まれた、天近き城(フェデス・ジグロア)で死んだように生きながら、エヴァンシェッドに啖呵(たんか)を切った私はそう決めた。
いつか、この命が尽きるその日まで、私はエヴァと彼女の幻影をこの胸に抱きながら生き続ける。

なのに、どうしてそんな命を大事にする私に、無遠慮に死を突き付けるような存在が現れるのだろう？
そうして、私は一人嘆(なげ)き続ける。（誰も聞いちゃいないだろうが）

第三十八話　再び流離人(さすらいびと)は牢獄へ　其の四

一人目の客人・アラシは、私の答えに背を向けた。
二人目の客人・ハクアリティスは、噂に怒り、私を泥棒猫と言った。
そして、三人目の客人は・・・

「さようなら、死への旅路を貴方に。」
闇夜にギラギラ光る短剣を振り上げて、私に死の言葉を呟いた。

牢屋の硬く冷たい床で就寝についていた私は、その夜、死の言葉とともに発せられた、凄まじい殺気で目が覚めた。

ギンッ・・・。

覚醒すると同時に、喉元に振り下ろされようとしていた攻撃を回避できたのは、偏に夜も野生の動物たちがうようよしている不浄の大地での野宿に慣れていたためだろう。

たが、この瞬間はそんなことを考えている余裕はない。

ある意味、牢屋の中というのが、一番襲撃などないだろうと安心していたのだ。

そんな場所で、こんな夜討みたいなことをされるとは、普通思わない。

「だれ・・・うわっ！」

一撃目の攻撃をほとんど無意識の本能だけで、転がったまま避けた私は膝立ちに体勢を立て直しながら、私を襲撃した相手を見定めようと、暗い牢屋で目をこらした。

しかし、相手は私が状況を把握する前に、短剣を突き付けて突進してくる。

それを何とか避けてみるが、生憎ここは狭い牢屋の中、どんなに私が避けるのがうまかろうと、先はすぐに見える。

避けた拍子に壁際に追い詰められた私は、牢屋の中では言うまでもなく当然丸腰、両サイドは壁に挟まれ、避けるスペースは皆無。

私は勢いをつけてもう一度こちらに向かってくる相手を、瞬時に避けれないと判断した。

やられるっ！

そう思った。

だが、諦めの悪い私は、突進してくる相手の動きを見つめながら、相手があと一歩で私に短剣が突き刺さる瞬間に、体を屈め、無防備になった相手の腹部に抱きついて押し倒した。
咄嗟の行動だった。

カラン・・・。
短剣が床に落ちる乾いた音。

・・・避けるのが駄目なら、攻撃に転じるまで。
短絡的な行動とはいえ、結果は上々。
私は相手を押し倒しすことに成功し、私の体の下で何事か動く気配のある相手の首を手で押さえこんだ。
「ぐ・・・。」
首を押さえられ、息苦しそうなくぐもった声。
「動くな。動けば、首の骨を折る。」
掴んだ首は想像してたより細い。
ギクリとした。
・・・恐らく相手は女か、子供。
内心、面倒なと思ったが、そんなことは表に出さずに、私は声を低くした。
「何者だ?」
夜目に慣れてきて、次第に相手の姿が私の前にあらわになる。

まずはじめに、目についたのはその血のように赤い、ルビーのような瞳。
その瞳は首を押さえられているというのに、怯えの色は全くなく、ただ私を見上げている。
肩くらいまでの黒髪が石の床に広がり、私が力を込めてしまえば折れてしまいそうな細い首、体。
私を襲った相手は、私の想像していた通り『女』だった。

それも、若い私とそう年頃も変わらないだろう、どこにでもいそうな普通の『女』。

だが、物騒な殺気を身に纏った、どうみても普通じゃない『女』。

だが、その女に見覚えはなく、こんなことをされるような覚えは私にはない・・・はずだ。

「貴方の死神。」

「真面目に答えろ。」

からかうような言葉に、ぐっと首を絞める。

女は一瞬苦しそうに顔をゆがめたが、大して動揺することもない。

「私を殺しに来たのか？」

「ええ。でも、さすがね。完全にやったと思ったけど、まさか避けられるなんて。」

「何故？」

ついて出たのはそんな言葉、正直殺されるような覚えは皆無だ。

すると、女は面白そうに笑みを浮かべる。

「あら、自覚がないの？憎い男。あの熱い夜の出来事を覚えていないの？」

そう言って、口元に婀娜っぽい笑みを浮かべる。

「冗談はなしだ。残念だが、ここ何年か子供のお守で手一杯で、私にそういう色っぽい出来事はなかったんでな。変な嘘はつかないでもらおうか。」

こんな女に、相手をしてもらった覚えなどないし、エヴァと旅をし始めてからは、女性との交際など正直皆無といってよかった。（別にだからと言って、困ったことがあったわけじゃないけどな）

「うふふ。冗談が通じない固い男ね。」

しかし、どれほど脅したところで、この女には全く通用していない。

込めた殺気も、全部受け流されている。

さてさて、口じゃ勝てない、脅しても口を割らないじゃ、力づくでも話を聞き出すか？
しかし、どうにもやはり女性に乱暴するのは気が引けるのが私である。
私は首を押さえたまま、しばし固まった。
そんな私を見て、女が先に口を開く。
「貴方、優しいのね。女性には手を上げないなんて、私が冗談で殺すと言ってないことはわかってるんでしょ？殺そうとした相手に、遠慮してどうするのよ？」
どうやら、こちらの考えもお見通しのようだ。
「悪かったな。相手がどんな恐ろしい女だろうが、女は女だろ。それとも君は、男なのか？」
「ふふふ。まさか。」
そう言って笑う女の顔は、こんな異常な状況にもかかわらず、至って普通。

うーん、これは舐めきられたな。

そうとは分かっていても、女性には手を上げたくないと思う。
だが、こうも舐められるのも癪（しゃく）に障る。
だが、どうにも女をやりこめられそうな気もしない。
・・・もう、こうなりゃ、やけだ。
「それは光栄だな。そんな好きな男を殺そうって言うのか？あんたは酷い女だな。でも私は好きだぞ、そういう思い通りにならない女。」
無論、冗談だ。（私は素直で、優しい女性が好きだ）
正直、何か言い返したくて、やけっぱちで言った言葉だったので、鼻で笑われるか、無視されるかのどちらかと思った。
言ってから後悔したのは言うまでもないのだが、女は一瞬だけ、き

ょとんとした顔になってから、彼女は声をたてて笑い出したのだ。

「あはははは っ！貴方、中々面白い男ねっ。今の本気で言ってる？！うんうん、好きよ、そういう男！」

「笑うなっ！」

冗談で言ったつもりだったが、こうも笑われるとなんだか恥ずかしくなってくる。

私は、照れ隠しに一つ叫んんだ。

するとさらに女の笑い声は、高く大きく牢屋に響く。

「・・・っくく、苦しぃ。」

「・・・。」

しまいには目に涙まで溜めている。

何だ、何がそんなにこの女のツボに入った？

別に笑われるのは構わないんだけど、まあ、それにしても気分がいいものじゃない。

多分、そんな思いが顔に出ていたのか、一頻(ひとしき)り笑いきると女は私の顔をじっとみた。

「ふふ。今日のところは失敗ね。これだけ笑わせてもらったお礼に、もう殺さないであげるわ。」

「は・・・、いっ！」

思いがけない言葉に、聞き返そうと思った瞬間だった。

女を押さえつけていた私の体が急に宙に浮いたかと思ったら、牢屋の鉄格子に打ち付けられた。

「ふふふ。今日は会えて楽しかったわ、ヒロ。」

「くそっ！だから、何なんだ！！」

いきなり私を殺そうと現われておいて、何も言わずに今度はさっさと消えようというのか？！

訳がわからないが、ともかくこのまま何もわからないまま、女を逃がしてはおちおち眠れたものではない。
だから、女をこのまま逃がすまいと飛びついたら、私の腕は女の体を通り抜け、再び硬い床にダイブする羽目になった。
「・・・っ！」
驚いて振り向けば、闇の中で透けて消えそうな女が、まるで幽霊のように立っている。

「無駄よ。まあ、そんなに私の正体を知りたければ、一つだけ手掛かりをあげましょう。」
「手掛かりだと？」
私が低く唸れば、あら怖いと、女は笑う。
・・・いちいち、癪（しゃく）に障る女である。
「3日後に黒の雷（オルヴァラ）は、天使の領域（フィリアラディアス）に対して、強襲をしかけるつもりよ。」
私と関係のある話ではなかったが、意外な言葉に目を見張った。
「まさか・・・、天使に喧嘩でも売るつもりなのか？」
黒の雷（オルヴァラ）がどれほどの戦力を備えているか知らないが、人間が天使に牙をむくなど正気の沙汰とは思えない。
失敗するのは目に見えている。
私はありえないと、首を横にふった。

「ふふふ。まあ、信じられないのも分かるわ。でも今の黒の雷（オルヴァラ）はある天使の後ろ盾のせいで、周りが見えなくなっているの。普通に考えれば、上手くいくはずのない作戦であることは、火を見るより明らか。」
アラシが言っていた、繋がりというやつか。
でも、それだけでそんな愚かなことをしようというのか？
「どうして天使が人間に手を貸す？」
それに、天使が人間に手を貸したところで、一体何の利益があると

いうのだ。
しかも、そんな結果が見えているような作戦。
天使が手を貸していることがわかれば、その天使とてタダでは済むまい。
そんな危険な橋を渡ってまで、その天使はどうして人間に手を貸す？

「天使は黒の雷（オルヴァラ）の天使襲撃に手を貸す代わりに、一つだけ条件を出したのよ。それは天使の領域（フィリアラ・ディアス）を襲撃するのに乗じて、生体兵器研究所を破壊すること。」
『生体兵器研究所』、Ｄｒ（ドクター）パルマドールの研究所だ。
私はあの悲しくも醜い魔人（ベルトゥール）のことが頭をよぎり、わずかに眉を顰（ひそ）めた。

「それは魔人（ベルトゥール）に関係しているのか？」
「あら、魔人（ベルトゥール）を知っているのね？そう、その天使は魔人（ベルトゥール）研究を消し去りたいのよ。そのために黒の雷（オルヴァラ）に、今までにないほど肩入れをすることにした。」
私は女を睨みつけた。
「馬鹿な。天使なら、そんなまどろっこしい方法を使わなくてもいいはずだろ？研究をしているのはエンディミアンだ。」
天使が中止といえば、エンディミアンの研究など、すぐに辞めさせられるに違いない。

しかし、女はそれには首を横に振った。
「まあ、そう簡単な話でもないのよ。色々複雑な問題があるのよ、天使にも。」
女はふふふと、楽しげに笑った。
「ふふ、楽しみよねぇ。あの天使がついに動き出した。」
この女は何を知っている？
黒の雷（オルヴァラ）の作戦のだけじゃない、天使のことも知っている？

本当に一体、何者なんだ。
しかも、大体そんな話をして、それが私に関係あるというのか？
女の支離滅裂（しりめつれつ）とも思えるような話に、私は混乱した。

「でも、あの天使には邪魔はさせないわ。」
「？」
独り言のように小さくつぶやかれた言葉。
私にはその声は届かなかったが、一瞬だけ女の赤い瞳が暗く光った気がしたて、私は首をかしげた。
そんな私に女は笑みを浮かべた。
「何でもないわ。その生体兵器研究所で、貴方を殺したいと思っている人が現れる予定なの。私はあの人にあなたの抹殺を頼まれただけ・・・、知りたければ、そこに行ってみたら、どうかしら？」
先ほどまで自分が私を殺そうとしていたのに、今はもう私に何の関心もなさそうに女は言い捨てた。
この女の真意が本当に見えてこない。

「行ってみたらって・・・、状況を見て言えよ。」
牢屋に閉じ込められていて、どうして外に出れるっちゅーねん。
「大丈夫よ。アラシは必ず貴方に力を求めるはず。きっと、すぐに外に出れるわ。」
この女、先日の私とアラシの会話を知っているのか？
私がそれについて、口を開こうとした瞬間、女の姿は跡形なもなく消えていた。
何もかも見透かされたような、気持ち悪い感覚と、混乱するだけを私に残し、女はさっさと言いたいことだけ言ってしまうと、牢屋の中に楽しげな声だけ残して・・・。

「私も行くつもりだし、また会えたら嬉しいわ。じゃあね、素敵な黒の一族さん。」

「・・・。」

私はまるで狐にでもつままれた様な、夢でも見たいたような気さえした。

しかし、先ほど鉄格子（てつごうし）にぶつけた背中は、まだ痛む。

これは夢でも、幻でもないのだ。

しかし、誰が私を殺そうというのだ？

まさか、逃げ出した私にエヴァンシェッドが抹殺命令でも出したのか？

嫌、ならばここで黒の雷（オルヴァラ）ごと殺さず、生体兵器研究所に私を誘い込むような真似（まね）をする？

嵐のように現れて、去っていった女のせいで、混乱のあまり牢の中で頭を抱える私。

しかして静けさが戻った夜の牢屋には、こんなにバタバタとしていたにもかかわらず、まったく何も気がつかないかのように眠りこけている見張りの寝息だけが聞こえいた。

第三十八話　再び流離人は牢獄へ　其の四（後書き）

最後の客人は、ヒロを抹殺しようとする刺客の女。突然現れて、突然去って行きました。ヒロも茫然としてますね。はてさて、彼女の正体は？そしてエヴァンシェッド視点の話でも見え隠れする、ヒロを殺そうとする人物とは？謎は深まるばかりですね（笑）

若干今までの謎の布石を全部、これから上手にさばいていけるか、私の力では不安です。というか、すでに皆様に伝えられているか不安なばかりです。何か変な箇所、辻褄合わないんじゃないの？みたいな所があったら、本当に私の不徳の致すところです。申し訳ありません。

それでもいいと言ってくださる、ここまで、そしてこれからも読んでやろうと言ってくださる奇特な方々には、本当に感謝でございます。

はてさて、どうしてか長い謝罪文になりましたが、物語自体は第一部と違い、ヒロが捕まってばかりで動きのない第二部が、女が口にした黒の雷の作戦を通し、ついに動きを見せ始めますのでお楽しみに。

第三十九話　再び流離人は牢獄へ　其の五

断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）から出てからしばらく見ていなかった、あの悪夢を見た。
夢の中で私は日の光の届かない暗くて冷たい部屋にいて、鎖で両手両足を壁に縛り付けられる。
そして、そのまま身動き一つできないままいると、部屋にただ一つある鉄の扉が、錆（さび）ついてるような音を立てて重々しく開き、誰かが部屋に入ってきた。
その手元が眩（まぶ）しく光り、その手には美しい純白の剣が握られているのがわかった。
そして、徐（おもむろ）にその白い剣を振り上げられる。

「あなたに邪魔はさせません。」

冷たい言葉が聞えたと思った瞬間に、胸に燃えるように熱い衝撃。
私の左胸に白い剣が深々と突き刺さる。
血が大量に流れ出ていく感じがした。
だが、私には何もできない。
そして、そのままいくらか時間が経つと、私はふと気が付くのだ。
どうして心臓を一突きされているのに、私は死なないのだろうと？
そう思った瞬間に、いつも目が覚める。

・・・だが、今回はなぜだか違った。

何もできずに茫然（ぼうぜん）としていると、私を刺したのは男のはずなのに、気がつけば私を見下ろしているのは女に変わっていた。
その女には見覚えがある。
「き・・・きみはーーーーー、どうして、ここに？」

しかして、女は口元に赤い笑みを浮かべて顔を私に近づけると、そっと囁くのだ。

「ヒロ、愛しているわ。だからーーーー」

私はその先の言葉を聞きたくなくて、叫びをあげた。

第三十九話　再び流離人は牢獄へ　其の五

私が牢屋に入れられて七日目の朝。
自分の悲鳴で目が覚めるなんて最悪だ。
「何なんだよっ。」
私は手で顔を覆うと、思わず口の中で吐き捨てた。

・・・どうして、今さら彼女が出てくる？

どくどくと、ありえなほど動悸がうるさい。
体は嫌な汗で、ぐっしょり濡れていて気持ち悪い。
あの夢の中の女性の顔が、こびりついて離れない。
そんな風に朝から混乱し、頭を抱え、体を小さくした私は、近づいてくる気配に気がつかなかった。

「おい、ヒロ。大丈夫か？」

呼ばれて、初めてアラシがそこにいることを知った。
気がつけば、見張りは人払いされている。
どうやら、ほとほと取り乱しているらしい、私は自嘲した。
「アラシ。・・・大丈夫だ。何でもない。」

私が首を横に振れば、
「話がある。」
そう言って、アラシは牢屋のカギを開けると、でかい体を小さくして中に入ってくる。
何をしたいのかは分からないが、こちらを見るアラシの目には何かを決めた強い光がある。
それを見て私は理解した。

ああ、アラシは決めたのだ。
だから、あんな夢を見た。
あの時のことを、私に忘れさせないために、彼女は私の前に再び現れたのだ。

「ああ、聞こう。」
私はアラシの後ろに彼女がいるのを見つけて、一つ笑った。

アラシが決断を迫られているのは、力を欲するか、諦(あき)めるか。
そのどちらか。
求める力の名は、黒の武器(カシュケルノ)。
それは、親から受け継いだ私が持つ力でもある。

しかして、その黒の武器(カシュケルノ)とは、黒き神ウ・ダイに選ばれし黒の一族にしか扱えない、天使に対抗できる唯一の武器。
そのあまりの力の強大さに、天使たちはそれを不浄の大地(ディス・エンガッド)に封印し、黒の一族はその力を取り返すために不浄の大地(ディス・エンガッド)を流離った。
だが、取り戻したところで、その本来の力を解放するために、武器の主は黒の武器(カシュケルノ)に代償を支払わなければならない。
それがなくては、黒の武器(カシュケルノ)は、なんの力ももたない武器にすぎず、その代償が大きければ、大きいほど黒の武器(カシュケルノ)の力は強きくなる。

しかして、その代償とは『人間の命』。

さて、アーシアンを解放したいと願うアラシよ。
お前はどうする？
アーシアンを解放するために、力は力と割り切って、その強き力を欲するか？
それとも、人間としての尊厳を守り、人の命を喰(くら)う力などいらぬと、それを諦(あきら)めるか？

私が言えることはただ一つ。
力のために、誰かの命を掛けるなど、家畜以下の外道のすることだ。
・・・まあ、その力を当たり前のように使っている外道の私が言うことなど、聞く耳は持たないかもしれないがな。
私は神妙に私に向かい合うアラシを前に、そんなことを心の中で思っていた。

だが、私の心配など、やはりアラシには無用だった。
「俺は黒の雷(オルヴァラ)の力はいならない。」
彼は開口一番(かいこういちばん)、力強く穢れた黒の武器(カシュケルノ)の力を拒否した。

それでいい。

私は何も言わなかったが、アラシの第一声を聞いて、内心ほっとした。
「誰かの犠牲を払ってまで、俺は力がほしいとは思わない。綺麗(きれい)ごと言われてもしかないと思うがよ。それでも・・・俺は嫌なんだ。」
普通の人間が、そう思うのは当たり前だ。
そんな苦しそうな顔をするな。

いくつも浮かんでくる、項垂れるアラシへの慰めの言葉。
しかし、私は何一つそれを口にはしない。
何故なら力を持つ私が行っても、何一つ説得力がないのが分かっているからだ。
言われたところで、アラシも嫌味にしか聞こえないに違いない。

だから、アラシを前に私は黙って見守っていたが、しばらくの沈黙の後、彼は顔を上げ、私に視線を合わせると、何やら言いにくそうに言葉をもごもごさせた。
「・・・だからってわけじゃない・・・ってことはないんだが。」
「？」
何が言いたいか分からなくて、私は首を傾げた。
「・・・。」
「・・・。」
牢屋の中で、座り込み、互いに見つめあう私とアラシ。
こんなむさくるしい熊男と見つめあってても、正直虚しいだけ。
しかし、アラシが何も言わない以上、今の私に言うことはないもない。
そうして、私に何を期待していたのかしらないが、私が何も彼に言わないのを悟るとアラシは意を決したように、きっと私を見た。そして、

「俺に力を貸してくれ、ヒロ！」

そう言って、アラシはいきなり土下座をした。
「調子がいいのは分かっている！でも天使たちを相手にするにはどうしても、黒の武器の力が必要なんだ！」
叫ぶようにアラシは言い切った。
大きな男に勢いよく土下座されて、私は戸惑った。
アラシの言うことは、わからないでもない。だが、

「・・・どうして、黒の武器（カシュケルノ）の力をそんなに欲しがる？今までだって、力がなくともやってきたんだろう？」
黒の武器（カシュケルノ）の力を否定しながらも、その力を欲するなんて、そんな矛盾を、アラシのような気性の男が許せるようには見えない。
その証拠にアラシの表情は固く、何かを我慢しているようだ。

「そうだ、今まではそれでも何とかなっていたんだ。だけどよ、もうすぐ大きな作戦がある。」

どきり、心臓が鳴った。

私を殺しに来たという女の言葉が甦る（よみがえ）。
正直、あれから何のアクションもなかったし、寝ぼけてでもいたのだろうかと思っていた。
でも、やはりあれは夢じゃなかった？
アラシの言葉に、いやな汗が背中を伝った。

「それは、どういう作戦なんだ？」
まだ、女が言っていたことが正解というわけではない。
私は、アラシにさらに突っ込んだ話を求めた。
「天使の領域（フィリアラディアス）を強襲して、直接天使たちに、天使の領域（フィリアラディアス）の解放を直談判するんだ。何千年前の罪をどうこう言われたって、俺達には関係ない。俺達にだって、あの楽園に生きる権利はあるはずだろう？」
アーシアンなら一度は夢見るだろう。
東方の楽園（サフィラ・アイリス）、最後の楽園に生きる自分の姿。
それを実現しようというのか、アラシは・・・。

「どうやるんだ？」
しかし、そんな夢のようなことを、果たしてどうやって実現しようというのだ。

私の問いに、アラシはすこしだけ瞳を揺らす。
「ハクアリティス様を使う。」
「万象の天使を人質にするつもりか？」
「そううことだな。」
アラシの提案に、断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）でミシアに聞いた、エヴァンシェッドとハクアリティスの関係についての話を思い出した。
ハクアリティスは、エヴァンシェッドの妻というだけでなく、『契約者』という存在らしい。
そして、『契約者』は、その契約した天使と命を共有することができるのだ。
すなわち、ハクアリティスの命＝エヴァンシェッドの命という方式が成り立つ。
天使一族の長であるエヴァンシェッドの命を盾にすれば、天使たちも楽園を解放するかもしれないとことだろうが、どうにも不確定要素が多すぎる作戦だ。

「それだけか？ほかに何か・・・。」
「今はそれ以上言えねぇよ。あとは、お前の返事を聞いてからだ！どうするんだよ？！協力してくれるのか？！くれねぇのか！？」
私がそれ以上を聞こうとすると、アラシが声を荒らげた。
全く、それでは何かあると言っているようなものである。ほとほと、嘘がつけない体質らしい。
「・・・。」
さて、どうしたものかと思う。
このまま、アラシに力を貸してやるのは簡単なことだが、あの女の言う通りになるのが嫌だし、何よりこれ以上天使に関わるのもどうかと思う。

「と・・・ともかく、力を貸してくれよ！そしたら、ここから出してやるし！！黒の剣（ローラレライ）も返してやる！」

黙り込む私にアラシは猶も言いつのる。
まあ、確かに牢屋から出ないことには、不浄の大地にも帰れないし、女の言う通りになるのは癪に障るが、しかし、私を殺そうとする相手とその理由を知らなくては、おちおち寝てもいられないと思う私もいる。（実際ここ四日ほどは、眠りが浅く寝た気がしない毎日だった）。
それに・・・、と考えるのは先日のハクアリティスとの会話。
エヴァを連れていったというエンディミアンの長のことも気になってはいるのだ。
さすれば、『エンシッダ』というエンディミアンに会うためには、アラシに恩を売っておくのも悪くはないだろう。

まあ、あの女がわざわざ来いというのだから、罠の一つでもありそうな気はしたが、とりあえず進んでみないことには、何も始まらない。
私の意志は固まった。
「・・・ああ、わかった。力を貸してやる。」
「本当か?!」
アラシは飛び起きて、私の手を取った。
むさくるしい男に喜ばれても微妙だが、私を見るアラシの顔を見るとなんだか温かい気持ちになれた。
だが、そんなことはおくびにも出さず私はぶっきらぼうに言った。
「言っとくけど、貸し一つだからな。」
うんうんと無言で言葉なくうなずくアラシに、私は苦笑する。

しかして、不浄の大地を流離っていた私は、天使に捕まり断罪の牢獄から何と天使の居城天近き城にまで行き、三大天使や、天使長にまで見え、そして今は天使たちと相対するために黒の雷に協力しようとしている。
そう考えると、ここ最近の私は本当に波乱万丈というか、苦労山積

というか・・・、ともかく、静かに旅をしていた時は明らかに違う生活を送っている。

そんな生活は正直私の性には合うはずもなく、早く元の生活に戻りたいとただ願うだけなのだが、しかし、その一方でこのときの私はなんとなく、もう自分が後戻りができないところまできているような気がしていたのだ。

・・・認めたくはないけどな。

第三十九話　再び流離人は牢獄へ　其の五（後書き）

アラシは結局、黒の武器を使うことを諦めてしまいました。案外潔癖症なのかもしれないですね。でも、ヒロはそれでいいと思っていますし、普通の感覚を持っている人ならば、それが正解だと思います。（ならなんでヒロは黒の武器を使うのかというのは、後々分かるので突っ込まないでくださいね。）

さてさて、アラシが黒の武器を拒否したことにより、その役割をヒロが担うこととなりました。アラシもヒロも、互いを利用し合おうというわけです。

さて、アーシアンの天使に対する作戦は成功するのか？次回はその作戦の全貌が明らかになる予定です。

第四十話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の一

天使の領域（フィリアラディアス）の夜に月はほとんど昇らない。
何故なら、守護天使（ガルバチュア）の白壁に高く囲まれているから、空の天辺（てっぺん）に月が昇らなければ、その姿は見えないのだ。
だから、天使の領域（フィリアラディアス）の中には、偽物の月がある。（同様の理由で、昼には偽物の太陽が昇る。）

私は今、黒の雷（オルヴァラ）の一員として、その偽物の月の下で戦っている。
・・・ということは、私は今天使の領域（フィリアラディアス）にいるということで、わざわざ命がけで逃げ出したたくせに、私は戻ってきてしまったということだ。
二度と天使の領域（フィリアラディアス）になど戻ってくるものかと思っていたくせに、二度と天使なんかと関わるものかと決めていたくせに、二度と・・・。
（言ってると切りなくなってくるから、これ以上はやめておくが）
まあ、そんな下らないことを考えながら、ついに黒の雷（オルヴァラ）たちによる天使の領域（フィリアラディアス）襲撃作戦に参加した私は、たくさんの天使の前に立ちはだかり、背後にアーシアンたちを庇（かば）って、今戦っているのだ。

「くそっ！このアーシアンが！！天使に逆らってタダで済むと思っているのか？！」
相手はおそらく、見回りの天空騎士団（アイッシュ・グランド）。
天使の領域（フィリアラディアス）に入り込むことには成功したのだが、運悪く偶然その一団に私たちは見つかってしまったのだ。
天使たちは十数人、私たちも十数人。（ちなみに天使の領域（フィリアラディアス）に入り込んでいるアーシアンの人数は数百人で、今はバラバラに行動している）
天使の人数は、この間私を天近き城（フェデス・ジグロア）で追ってきたのと同じくらい。
あの時は逃げるだけで精一杯で、正直、天使たちを相手にしような

ど考えてもいなかった。

でも、今は・・・違う。

私はアーシアンたちを後ろに庇(かば)いながら、いきり立つ天使たちをと睨みつけると、最大級の虚勢(きょせい)を張った。

「さっさと、かかってきたらどうだ？私は逃げも隠れもしないからな。」

・・・やっぱり、ちょっと虚勢(きょせい)を張りすぎたか？

すぐにそう思ったけれど、しかして、こんな緊迫(きんぱく)した場面では、言い直すこともできないのは当然である。

第四十話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の一

『3日後に黒の雷(オルヴァラ)は、天使の領域(フィリアラディアス)に対して、強襲をしかけるつもりよ。』

3日前、私を殺そうとした女の話は本当だった。

しかも、彼女が言い当てた通り、黒の雷(オルヴァラ)と繋がりがあるという天使に（この天使についてはよく分からないままだが）、天使の領域(フィリアラディアス)に入り込む手引きをしてもらう代わりに、生体科学研究所を破壊するという所まで、あの女は言い当てていた。

ちなみに今アラシを中心とする私たちのチームは、その生体科学研究所に向かっている途中だったりする。（他のチームは街を強襲するために散らばっている）

はてさて、女の正体も非常に気になるところなのだが、とりあえず、今はその話は置いておいて、その作戦の話を聞いた時の自分の反応を、私はよく覚えている。

『まさか・・・、天使に喧嘩でも売るつもりなのか？』

正直、失敗するのは目に見えている作戦だと思った。

そんな無謀な作戦を、天使の後ろ盾ごときで成功すると思い込んでいるなんて、正気の沙汰とは思えなかったくらい、私はアラシ達の行おうとする作戦を馬鹿にしていた。

それはアラシに力を貸してやるといった時とて、同じだった。

ハクアリティスを、エヴァンシェッドを人質に取っているといわれても、天使の圧倒的な強さの前には、到底意味がないと私は思っていた。

大体、ハクアリティスに、それほどの人質としての価値があるというならば、エヴァンシェッドがもっと心配していたと私は思うのだ。

ハクアリティスには悪いが、エヴァンシェッドと一カ月近く共にいて、あの天使が彼女を心配していたという素振りは一度としてなかった。（まあ、あの天使が何を考えているか分かったもんじゃないが）

だから、私は正直にいえば、ハクアリティスの人質としての価値を疑っていた・・・、というか『契約者』という存在の認識が違っているのではないかと思っている。

どんな風に違っているかは推測の域を越さないが、とりあえず彼女の命とエヴァンシェッドの命の連動については違うのではないかと考えている。

ともかく、そういう考えもあったから、私はアラシに力を貸してやるとは言ったものの、その実はこの作戦には、あまり乗り気ではなかったのだ。

アラシに恩を売る意味でだけ、力を貸してやり、あとは適当に死な

ない程度に戦おうと思っていた。
きっと劣勢というか、自分たちの考えがいかに甘いかがわかれば、アーシアンたちも自分の命が惜しいから即時撤退(そくじてったい)をすると思ったのだ。
私もそれに乗じて逃げてしまえばいい。
そんなやる気半分で、この作戦に臨(のぞ)もうと思っていたのだ。

だが、私は今本気で天使たちと対峙している。
あの時のやる気半分の私はもういない。

「ヒロっ！」
天使に剣を向けた私に、アラシが声を上げた。
「ここは私が何とかする。アラシ達は先に進め。」
「でもっ。」
次に声を上げたのは、人質として連れられてきたハクアリティス。
「後から、すぐに追いつく。」
だが、私は天使たちから視線をそらすことなく、冷たくアラシたちを突き放しした。
背後のアラシ達の様子を見ることはできないが、僅かに戸惑う気配の後、アラシたちが走っていく足音が遠のいていく。

「逃がすものかっ！追え！！」
しかしそれを天使たちが逃がしてくれるはずもなく、追跡をしようと数人の天使が私の横を通り抜けようとする。
だが、私だってそれを許すわけにはいかない。
「目覚めよ、黒の剣(ローラレライ)。」
素早く言霊(ことだま)を唱えると、私はすぐさま天使たちを剣で薙(な)ぎ払った。
黒い衝撃波が天使たち目がけて、狙い定めた通りに飛ぶ。
上がる悲鳴。
衝撃波で吹っ飛んだ天使たちは、白き神(イア・ルマンヌ)の御許の白い石の町並みに、

激突し、そのまま力なく倒れる。

「今のは何だ?!!」

「こ・・・、こいつ、アーシアンかっ?!」

黒の武器を知らないのか、アーシアンらしからぬ力を持つ私に天使たちに動揺が走るのが分かった。

この動揺を逃す手はない。

飛び道具で攻められれば、私に勝機はないのは確実だ。

とりあえず、遠距離戦は避けて、接近戦で短期決戦が望ましい。

私は目を細めると、黒の剣の柄を強く握り、混乱する天使たちに突っ込んだ。

突っ込んだと同時に、未だ戸惑っている一人の天使の懐に入ると、私はその天使を黒の剣で峰打ちして昏倒させる。

しかし、天使たちも戸惑っているのは一瞬で、そこは普段訓練を受けてきている天空騎士団の団員達、一人やられたことで自分を取り戻すと彼らは一斉に私に武器を突き付けた。

「う・・・動くな!」

「武器を離せ!」

だが、私はその言葉など聞こえないように、天使たちを見据えると再び黒の剣を構えると天使たちに向かって言った。

「ぎゃあっ!」

「い・・っ。」

飛び道具で集中砲火を浴びてしまっては、到底彼らには敵わないのは分かっていたが、私は今までこの剣一本で不浄の大地を生きていたのだ。

悪いが、接近戦においては彼らに負ける気は更々なかった。

しかも、エンリッヒ並（天空騎士団の副師団長並）の天使が十数人

もいたら裸足（はだし）で逃げだすしかないだろうが、幸い彼らは見回りをしている下っ端の天使だったのも幸いした。
天使たちの小さな叫びがあがる中、私は次々にこの剣だけで、天使を全員を倒していくことに成功したのだ。

そして、彼らと対峙（たいじ）して数分。
私は見回りの天使たち全員を、白き神（イア・ルマンヌ）の御許の美しき石畳に沈めることができたのだ。
「・・・ふう。」
私は一つ息をつくと、黒の剣（ローラレライ）についた僅かな天使たちの血を払った。
悪いが、黒の雷（オルヴァラ）が暴れきるまで彼らにはここで大人しくして頂かなくてはなるまい。
私は黒の雷（オルヴァラ）から支給された長いロープを取り出すと、気を失った彼らを一か所に集めると、全員をふん縛ってやった。

「ふふん。どうだ、私が本気を出せば、こんなもんさ。」
私の声は息が上がり、僅かに震えていた。
正直、天使十数人に対し一人で戦うに当たり、アラシ達には見栄を張ったものの、かなりの不安があったのだ。（だったら、見栄なんぞ張るなという話だが、変なところで私は意地っ張りなのだ）
大体ここは天使の本拠地なわけであり、いつ応援が来るとも分からない。
まあ幸いに、ここは白き神（イア・ルマンヌ）の御許の中でも最下層部の人気のない、薄暗い場所。
短い時間と、大した音も立てずに天使たちを倒すことができたために、ほかの天使たちに気が付かれた様子はない。

それをきちんと確認することができ、誰に聞こえるでもない大見栄を張りながら、そこで私はやっと、息をつくことができたのだ。（全く自分の小心者っぷりには、泣けてくる）

しかして、私はアラシ達を追うべく、気を失った天使たちを建物の影に隠してしまうと、踵(きびす)を返して駈け出した。
黒の剣片手(ローラレライ)に走る私には一分のやる気のなさもなく、それこそ正に本気と書いて、マジという私的には超本気モードなのだ。
あれほどにこの作戦について、やる気というものがなかった私が、如何にしてこれほどの変容を致したかといえば、それにはいろいろ理由があるのだが、まず第一にこの戦いに私が戦う意味を見出したことがあるだろうと思う。

しかして、その戦う意味は、天使と関わりたくないと思っていた私を奮(ふる)い立たせ、再びエヴァンシェッドに囚われる、いや、今度こそ殺されるかもしれないという恐怖や意地も吹っ飛ばし、本気で天使に喧嘩を売る覚悟をもさせているのであった。

第四十話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の一（後書き）

と言う訳で、いきなり『黒の雷、天使の領域襲撃作戦』（長いですね）開始です。
実際、作戦がどのようなものかとか、ヒロがどうして本気になっているとか不思議なことこの上ない感じですが、大丈夫です。あとでちゃんと説明します。
いや、先に説明あってもいいんですが、最近どうにも会話ばかりの動きのない話ばっかりだったので、久々に戦闘シーンを入れてみました。（短いですけど）
ともかく、こんなにやる気のあるヒロというのも珍しいと思うので、本気で戦うヒロをしばらくお楽しみください。次はヒロと因縁のある天使が出てきますよ。

第四十一話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の二

それは、私がまだ天近き城（フェデス・ジグロア）に軟禁されていた時のこと。（断じて『囲われて』いた訳じゃない）

毎日、毎日、毎日、何にもすることがなく、ただただ生きているのに、死んだような生活の中で、仕事はどうしたと聞きたいくらい、たった一人私にまとわりつく天使が一人。

「ヒロさん、御機嫌よう。」

「うちのお袋が焼いたケーキなんですが、一緒に食べまへんか？」

「あらあらぁ、ヒロさん。ひょっとして、その顔は欲求不満とちゃいますか？」

正直聞き捨てならないような言葉も多々あるのだが、何もすることのない私にエンリッヒは、彼が何の目的で私のそばにいたかは知らないが、とても良い話し相手であった。

短いような、長いような天使の領域（フィリアラディアス）の中での生活、天使たちとの関わり合いの中で、あんな別れ方をしたものの（まあ、あれはあんな下らないことを嬉々として言い出したエンリッヒが悪いのだが）、何人かの出会った天使たちの中でエンリッヒと過ごした時間が最も多く、最も私が気を許した天使といってよかった。（多少の難はあるが、話してみると意外に話の分かる天使だったのだ）

だから、こうして天使と戦おうという状況に直面して、唯一（ゆいいつ）戦いたくないなぁと頭に浮かんだのはエンリッヒの顔だったりする。

それは、無論かつて彼と戦った時の強さを思い出したのもあるが、やっぱり長い間一緒にいたことで多少の情がエンリッヒに移ったということなんだろう。（これでも、結構私は情に厚い人間だ）

そうはいっても、この作戦の中においては、例え誰が私の前に立ち

はだかろうとも戦わない訳にはいかないのだ。
だから、先ほど天空騎士団（アイッシュ・グランド）の天使たちと対峙した時に、エンリッヒだけは出てきてくれるなと心の隅で思った。

しかし、人生というのは、期せずして自分が嫌だと思ったことばかり起こりうるものなのである。（・・・そう割り切ってはいるものの、最近、どうにも単に自分が不幸体質なだけではなかろうかと疑っている）

第四十一話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の二

「あらぁ、ほんまに生きとったんですか。よかったですわ。」

それはあと一歩で、生体兵器研究所というところだった。
聞き覚えのある妙に軽い声、それでいて、何だか底冷えがするような感情のこもらない声が、アラシ達の元へと急ぐ私を引き止めた。
声を聞いた瞬間に思ったのは、出てくるなバカ野郎！というやり投げな感情。
次に、どうして、という疑問が浮かんだ。

だが、私の口をついて出たのは、そのどちらでもない言葉。
「生きてたら、悪いんかい。」
それは、エンリッヒの言葉の揚げ足を取るような悪態（あくたい）。（自分でも無意識の言葉だった）
その言葉に、殴って気絶させて逃げ出した時と、変わらない様子のエンリッヒはにこやかな表情を浮かべた。
「あはは。いやぁ、そういう訳じゃないんですが、だって、ヒロさん、天近き城（フェデス・ジグロア）から落ちたんでっしゃろ？ふつー死にますわぁ。」

そう言われて、気がついた。
「・・・、何だ、天使たちの間じゃ、私は死んだことにでもなってるのか？」
「ええ、ええ。そういうことになっとりますよ。」

エンリッヒはそう言って笑ったが、私にとっては益々笑い事じゃ済まされない。
「じゃあ、どうして貴様がここにいる？」
死んだはずの私をこれほどにピンポイントで待っていられる、その意味に表情が厳しくなるのを感じた。
それは、それはすなわち、黒の雷（オルヴァラ）の作戦を知っているということに他ならない。
それも、天使のエンリッヒが・・・だ。
ということは、この作戦は天使に筒抜けということなのか？
私は嫌な汗が背中を伝うのを感じた。（私を襲った女は、とりあえず天使じゃなかったので、天使にばれているとは思っていなかった。）

だが、エンリッヒは私のその真偽（しんぎ）を確かめる問いに、にへらと笑みを浮かべた。
いくらエンリッヒと話が合おうとも、どうにも、私が好きになれないあの笑みだ。（多分、あの笑顔だけは死ぬまで好きになれないと思う）
「さあ、それは企業秘密ですわ。」
私は、おどけたように口元に一本指を立てるエンリッヒを睨みつけた。
あはは、怖い。と笑うエンリッヒ。

だが、それから一瞬で表情を一変させた。
瞬時に放たれる殺気。

それは不浄の大地（ディス・エンガッド）で剣を交えた時と同じように、本物の殺気。（実際は、剣と大鎌だが）

「まあ、わいがただ、一つ言えることはですなぁ。ここは大人しく、わいと天近き城（フェデス・ジグロア）に帰ってくださいってことですわ。黒の雷（オルヴァラ）の作戦は失敗します。」

ぴりぴりと痛い空気が、エンリッヒの本気を伝えている。

エンリッヒがどうして、私がここにいるか知ったかは分からないが、どうやら彼は作戦が本格的に始まる前に、私を連れ戻しに来たらしい。

多分、その後ろにいるのはエヴァンシェッドか、サンタマリアか。

厄介な天使様たちに対する恐怖が思い起こされて、心が震えた。

だが、どんなに心が恐れをなそうとも、今のこの状況で、はい、戻ります。と大人しく天使たちの元に戻れるはずもない。

「んなもん、聞き入れるわけないだろう！何のために、あんな高いところから命がけのバンジーしたと思ってる！」

私は威嚇（いかく）のつもりで、黒の剣（ローラレライ）をエンリッヒに向かって構えた。

天使にこちらの作戦が知られているというならば、一刻の猶予もない。

早く皆に、そのことを知らせなければ、取り返しがつなくなる。

だが、隙のないエンリッヒを先ほどの天使たちと同じように、簡単にかわせるとは思えない。

そんな、かなり切羽詰（せっぱつ）まったような私の様子に、エンリッヒが片方の眉をあげるような、意外そうなものを見る目で私を見た。

「あらぁ？もしかしてヒロさんは、アーシアンたちに真剣に味方してはるんでっか？」

エンリッヒの小馬鹿にしたような声が、揺らぐ。

多分、私が本気で黒の雷（オルヴァラ）に協力しているとは思っていなかったのだろう。

「だったら、どうした？」
天近き城（フェデス・ジグロア）では、エンリッヒは一番私と共にいた天使だったろう。
『ばあ様』が人間好きか知らないが、アーシアンの私にもあまり気にした態度のエンリッヒは付き合いやすかった。（まあ、腹の中では何を考えているか分からないが）
実際、人間と天使という枠すらも取っ払った関係になりつつあったのかもしれない。

だが、やっぱり違うのだ。

一応、私はエンリッヒという個人が嫌いな訳じゃない。
気に食わない部分も多大にある奴であるが、それでも剣を交え、言葉を交わすことで分かり合えた部分もたくさんあったのだ。
ただ、私はこの話題では、アーシアンをめぐる話においては、天使のエンリッヒとは死んでも相互理解が得られるはずもないと思った。
そして、その事が私とエンリッヒを決定的に別（わか）つのだ。

しかし、それが分からないエンリッヒは私を引き留めようと、更に言い募る。
「まあ、いくらアーシアンが騒いだところで、どうしようもないのはヒロさんだって、わかってらっしゃるんでっしゃろ？まあ、今回の黒の雷（オルヴァラ）の作戦は、少しは被害がでるかもしれまへん。でも、大打撃を受けるほどのことは、絶対にありゃしまへん。ヒロさんは、馬鹿なアーシアンたちとは違って、そこの所は、骨身にしみてますやろ？」
ああ、天使の強さは、よく分かっているさ。
言葉にはせず、心の中で苦々しい思いで私はエンリッヒに答えた。
エンリッヒと戦ったことは勿論、断罪の牢獄（エヴィラ・アメンド）で拷問されたことや、天近き城（フェデス・ジグロア）で天使たちに追い回されたことを思い出した。

答えいない私の問いを待つことなく、エンリッヒは言葉を重ねる。
その顔には、あの笑みが浮かんでいるが、表情がわずかに強張っているように見えた。
「一緒に戻りましょうや、ヒロさん。サンタマリア様は、あんさんのことを高う評価しとります。サンタマリア様が言うていた通り、世界のためにもわいらに力を貸すんが、あんさんにとっても良いことだと、わいは思いますわ。少なくとも、こんな馬鹿げた作戦に手を貸すよーーーーー。」
それ以上は聞いていられなかった。
別に私のことを、悪く言われた訳じゃない。
むしろ、私については勿体ないほどに高く評価してもらったようで悪いが、だから『違う』のだ。

ガンッ！
気がつけば、私は問答無用でエンリッヒに切りかかっていた。
エンリッヒは動じずに、その一撃を大鎌でうけている。
しかし、その顔に浮かぶ笑顔の瞳は真剣だった。
その剣が黒く染まっていることで、エンリッヒには私の本気が伝わっているのだろう。

「わい、今話の途中じゃないでっか？」
こちらの真剣さが伝わっているにもかかわらず、軽い言葉がエンリッヒの口からは出てくる。
「話の意味がない。交渉は決裂だ。エンリッヒ。」
話を長引かせようとするエンリッヒと、そんな時間はないと強硬手段に出た私。
剣と大鎌を挟む会話に、不浄の大地で戦ったあの映像がダブる。
だが、ここに決定的にあの時とは違うことが私の中に一つある。

「あんさん・・・、本気で天使と戦う気なんですな。」

はじめて戦った時は、ハクアリティスという存在を挟んで天使と戦っていた。（個人的にエンリッヒが気に入らないというのもあったけど）

でも、今の私とエンリッヒ、いや天使の間には何もない。

エンリッヒは感じたのだ。

私はエンリッヒと戦おうとしてるんじゃない、ハクアリティスを襲う奴と戦おうとしているんじゃない。

不浄の大地（ディス・エンガッド）に生きる『アーシアン』として、天使の領域（フィリアラディアス）の『天使』を戦おうとしているのだ。

そこに、私とエンリッヒという個人はない。

これは、人間と天使という二つの種族の戦いなのだ。

そして、私はその戦いに参加する覚悟を決めた。

私はエンリッヒの問いに一つ頷くと、剣で大鎌をはじき、後ろに飛んで彼から一つ距離をとり、再び黒の剣（ローラレライ）を構えた。

対峙するは人間と天使か、それとも私とエンリッヒなのだろうか。

「どうしてでっか?!わいら、気がおうとりましたやろ?」

「だから、何んだ?」

「この楽園で暮らしたほうが、幸せですわ!」

「それは私が決めることだ。」

「ヒロさんに、この作戦、何の義理があるっていうんです?」

「義理はない。でも、戦うことに意味は感じた。」

「ヒロさんを連れて帰らんと、サンタマリア様にわいは殺されます!!」

「・・・そんなもん、知るか。」

はあはあ。
互いに睨み合いながらも訳のわからない押し問答。（特にサンタマリアの下りのエンリッヒは必死の形相だった）
天使たちと人間たちの衝突が始まるまでの、時間稼ぎだと分かっている私は、そのすべてをバッサリと切り捨てる。

「・・・。」
「・・・。」
しばしの沈黙、そして嘆息してエンリッヒは最後に一つぽつりと言葉を漏らす。

「・・・わいはヒロさんを殺しとう、ありません。」

「私もだ。」
エンリッヒが、はっとしたように私を見た。
その瞳が、驚きからその私の答えに縋(すが)るような瞳をした。
「だ、だったら・・・。」
だが、そんなエンリッヒらしからぬ様子も私は突き放す。
私は首を横に振った。

「エンリッヒを私も殺したくはないと思う。だが、『天使』とは戦わなくてはいけないんだ。」
「・・・どういうことでっか？」

私は再び黒の剣(ローラレライ)をしっかりと構えた。
エンリッヒの表情は定まらないまま、彼もまた鎌を構える。
エンリッヒが私と戦いたくないというのは、私と同様に情があるのか、はたまたサンタマリアなどの命令なのだろうか、私には分からない。
だが、戦うことを生業(なりわい)にする者として、向かってくる相手に無条件

でやられるわけにはいないだろう。（私だって、そんなのは御免だ）
そんなエンリッヒに私が言えることは、ただ一つ。

「私が人間で、貴様が天使、そして人間と天使は違う生き物だった・・・て話だ。」

その言葉をエンリッヒが、どうとらえたかは分からない。
ただ、私にはそれだけで十分だった。
アラシから聞いたあの話が、人間と天使が違う生き物であることを教えてれた。
そして、それが今の私を突き動かす理由なのだ。

私は戸惑うエンリッヒに構わず、生体兵器研究所への道をこじ開けようと黒の剣（ローラレライ）を構えたまま駈け出す。
しかして、それを止めなければならないエンリッヒは、瞬時に私の目の前に現れる。

ガンッ！

再び合わさる剣と大鎌の金属音が、まだ静寂を保つ白き神（イア・ルマンヌ）の御許に響いた。

第四十一話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の二（後書き）

エンリッヒ再登場です。ヒロとエンリッヒはまさに突っ込みとボケで会話もぽんぽんと弾む感じで、物語の中では出てこなかったですが、天近き城でも仲が良かったんです。（決してエンリッヒが動かしやすいから、私が故意に登場回数を増やしているわけじゃありません（笑））

そんな中、改めて言うまでもない人間と天使は違う種族という事実がクローズアップされます。正直、その事実をヒロはあまり気にしている風でもなかったはずなのですが、今のヒロはその種族の差を非常に気にしていますね。彼のそんなスタンスを変えたアラシの話とは？次回で明らかになります。

第四十二話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の三（前書き）

【警告】

この話にはストーリー上、残酷な表現があります。そういった表現を苦手な方、嫌悪される方はご注意下さい。

第四十二話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の三

アラシの話を聞くまで、私は人間と天使が違う生き物だと分かっていたが、それは本当の意味では分かっていなかった。
私が分かっていた『違う』とは、例えばその外見であり、その力であり、生れながらの待遇（たいぐう）の違いであった。
無論、それも大きな違いであろう。

でも、それは全て私にはどうしようもないことで、全てがこの世界では当たり前で、決まりきったことであると思っていた。
だから、天使たちと関わるようになるまで、その事に何の不思議もなかったし、だから、きっと黒の雷（オルヴァラ）のアーシアンたちのように天使に恨みを抱いたり、攻撃を仕掛けようなんて、これっぽちも思ったことはなかった。
天使と関わることもなかった私は、人間は天使に従わされているものだと思っていたし、逆らおうなどと、ハクアリティスやエヴァのことさえなければ、今でも思わなかったに違いない。

でも、本当は違ったのだ。
私が知らないだけで、人間と天使は、私が思うよりも、もっともっと本質的な意味で違ったのだ。
そして、その『違い』は、私が思っていたような、当たり前で、世界の摂理みたいなものじゃなく、天使たちによって、押しつけられた理不尽（りふじん）だった。

私はアラシの話をと聞きながら、出会ったばかりのエヴァが不思議そうに私を見上げている顔が、ふいに脳裏に浮かんだ。
それは、何も記憶がなかったエヴァに世界の成り立ちのことを教えてやった時、不浄の大地（ディス・エンガッド）で生きることがアーシアンの償（つぐ）いなのだと

話してやると、ぽかんと私を見上げたエヴァの表情だった。

「何でヒロちゃんが、天使に罪を償(つぐ)わないといけないの？」

そう言って心底、不思議そうに首を傾(かし)げるあいつに、私はそう決まっているんだと気のない返事を返したはずだ。

どうして、あの時エヴァの質問に答えてやれないことに違和感を感じなかったのだろう。

その違和感こそが、正しい人間の感覚だったのに。

第四十二話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の三

「色々詳しく説明する前に、ヒロに見てもらいてぇものがある。」

黒の雷(オルヴァラ)に協力することを了承し牢屋から出ることができた私に、アラシはまずそう言った。

「ああ。」

私は薄くて着心地の良い天近き城(フェデス・ジグロア)で着せられていた寝巻きみたいなものから、アラシから手渡された着なれたごわごわしていて、生地の厚いボロ着に袖を通しながら（どうにも天使たちの服装は薄くてペラペラで、頼りない感じがして好かない）、それに頷いた。

とりあえず、協力するといった以上、アラシの言うことに逆らうつもりはなかった。

そうして、私の汚い牢獄生活からの脱却が済むと、私はアラシに連れられて黒の雷(オルヴァラ)のアジト内を案内された。

荒い石レンガ造りのアジトは、天使の住まう建物とは雲泥(うんでい)の差があ

るほどボロく、ところどころレンガが欠けていて隙間風(すきまかぜ)や、雨漏りがしている跡が見えた。
すれ違う人々も、皆が私と同じような色のないボロ服を纏(まと)い、その姿は薄汚れ、疲れた表情が見える。
普通ならば天使たちの美しい世界の後に、この現実を見たらがっかりしたり、逃げ出すんじゃなかったと後悔の一つでもするのかもしれない。
でも、何故だか私はそれを見て、安心する気持ちが大きかった。
やはり、小心者の私には天使の世界は恐れ多すぎたのだ。（やはり、住み慣れた世界が一番ということだ）

「黒の雷(オルヴァラ)っていうのは、実際どれくらいの人数がいるんだ？」
そんなことを考えながらアラシの後に続いていた私は、ふと思いついたことを尋ねた。
気になったのは、すれ違う人々の中に、子供や年寄り、どうみても戦闘員には見えない人々が多々いることだった。
そういえば、断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)で出会った黒の雷(オルヴァラ)のアーシアンも、ミシアやアルムも戦闘員とは言い難(がた)い。（まあ、私が女性の牢屋に放り込まれたというのも、あるかもしれないが）
そんな戦いの役に立たないアーシアンまでレジスタンスに所属しているとなると、大きな作戦を実施するという割には、よほど人員が足りないのだろうか。

「・・・。」
だが、アラシは私を無視した。
「アラシ？」
聞こえなかったのかと、名を呼んでみるが
「いんや。さあ、何人だったかな？」
と、曖昧(あいまい)にはぐらかされる。
そんな聞きにくいことを聞いただろうか。

それ以上は何となくアラシに言葉をかけずらくなって、私は黙ったままアラシの後に続き、そしてアラシは私をアジトの外へと誘った。

ザァ・・・。

外から建物の中に懐かしい、不浄の大地（ディス・エンガッド）の乾いた砂混じりの風が通り抜ける。

だが、その風に僅かに違和感を感じた。

しかし、外は私も見慣れた不浄の大地（ディス・エンガッド）の寂れた集落で、特に特筆すべき様子もない。

「？」

私は気のせいかと、あたりを見回し観察した。

建物がたくさん並び集落の規模は大きそうだと思ったが、人々にはアジト内と同じように生気がなく、皆が俯（うつむ）きがちに視線をさまよわせている。

ただその割に、人々の血色は悪くなく、食糧不足で飢え死にしそうという悲壮感が見受けられないのと、目の前に聳（そび）える白い空だけが、私が知る不浄の大地（ディス・エンガッド）の集落との相違点といったところだろうか。

「・・・守護天使（ガルバチュア）の白壁。」

あまりの近さに、青い空が見えず、太陽の光も遮った人間と天使を分かつ壁のせいで集落は、より一層陰気に暗くなっている。

それにしても、中側から見た時も高い壁だと思っていたが、外から見たほうが存在感があるなと、その壁を大口を開けて見上げているとアラシに声をかけられた。

「おい、こっちだ。」

「ああ。なあ、アラシ。」

アラシは、あとに続く私を振り返った。

「こんな天使の領域（ディス・エンガッド）に近いところに、アジトがあって大丈夫なのか？天使にばれたりしないのか？」

あまりの近さに思わずそう聞くと、アラシの顔が苦々しく歪む。

「天使にばれる・・・な。まあ、絶対ないな。ていうか、ありえねぇ。」
「はあ？」
そのあまりの自信満々さに、私は眉を顰める。
「俺達、楽園の贄は絶対にこの贖罪の街から出られないことになっているし、完全に天使たちに管理されていることになっているからな。」
「言っている言葉の意味が、私には分からないのだが。」
「・・・。とりあえず、場所を移動しようぜ。ほら、俺が見せたかったのはあれだ。」
私の問いには答えずアラシは顎をしゃくって何かを示した。
それは、何やら人気のない広場のようなにポツンと一つある影。

・・・あれは、箱か？

近寄って見てみると、人一人が入れるくらいの、アーシアンの集落には似合わないような白い石で造られた、装飾美しい箱が鎮座している。
その様子に、ただならぬ異様さを感じ、同時に、外に出た瞬間に感じた違和感が私を襲った。
何かおかしいというのは本能が察している、だがその正体が分からない。

それが、心底気持ち悪かった。

「これは何なんだ？いい加減、もったいぶるのはやめろ。」
そんな気持ちが先立つのか、出た声は自分でも思わぬほどに苛ついたものだった。
その声に、アラシが決まりが悪そうに笑ってみせる。

「あは、すまん。話すとか言ってるくせに、俺ってば、話したくないから、どうにも歯切れ悪くなっちゃって。」
『ちゃって』など熊男が使っていい言葉じゃないだろう、と瞬間突っ込んだが、話が進まない気がして口には出さなかった。（エヴァとの会話は、いつもそんなやり取りで色々有耶無耶（うやむや）になった覚えがある）
「・・・言いたくないなら、別に言わなくてもいいんだぞ。」
気持ち悪いが、無理に聞きだそうとは思っていない。
協力をするつもりはあるが、黒の雷（オルヴァラ）にすごい共感しているわけでもないので、その全てを知りたいという訳じゃないのだ。

しかし、私の言葉にアラシは首を横に振った。
「いんや。ヒロに話したくないとか、そういうんじゃないんだ。ただ、口にするのも嫌なだけで・・・、でも、作戦に参加してくれるヒロには知っていて欲しい・・・ことなんだ。」
アラシは、そう言いつつも辛（つら）そうだ。
石造りの箱に、手を乗せるとその上で拳をぎゅっと握りしめ、私を見ようとはしない。
その顔には、寒気がするほどの憎悪と、痛々しいくらいの切なさが合わさっているような、複雑な表情が浮かぶ。
拳は握り締めすぎて、血が滲（にじ）んでいる。
その瞬間に、感じていた違和感が濃くなるのを感じて、私は初めて気がついた。

ああ、血の匂いだ。

私が感じていたこの集落への違和感の一つは、集落全体に血の匂いが僅（わず）かに香っていたことだったのだ。
不浄の大地（ディス・エンガッド）は確かに死の世界だと言われているし、生きていくのは辛く苦しい、旅をしているだけで行き倒れた人間の屍（しかばね）を何人も見る

ような場所だ。
だが、こんな風に全体に血の匂いが混じっているというような集落は、今までお目にかかったことはない。
最初は風に交る微(かす)かな匂いだけだったので、よく分からなかったが、今になって思えば、この箱に近づくにつ入れて、だんだんと濃くなっていく血の匂いが、気配がしていたのだ。

嫌だな。

そう気がつくと、ここにいることが急に嫌になるのは、私が臆病者だからなのか。
私の中の本能が、急速にこの場所を嫌悪しているのを感じ、私は無意識のうちに一歩、箱から離れていた。
「どうかしたか?」
「あ・・・。」
そんな私を見て、アラシは笑った。
いや、顔は笑っていたが、その表情はまるで泣きそうに歪んでいる。
「これはな、聖櫃(せいひつ)っつう、天使達が、いや、あの悪魔達が、俺達に用意した、処刑台なんだよ。」

血の匂いが、急に濃くなったような気がした。

「ヒロはおかしいと思ったことはないか?どうして、東方の楽園(サフィラ・アイリス)のほとんどが、不浄の大地(ディス・エンガッド)になって死んでいる様なものなのに、天使(あ)の領域(そこ)だけ楽園みたいに、どうして豊かなままなのか、変だと思ったことはないか?」
そう言って、忌々しそうに守護天使(ガルバチュア)の白壁を睨むアラシ。

だが、私はそんなこと思ったことなどない。
天使が住まうところは楽園というのは、元々そうだと決まっている

ことだから、そう思ってきたから、それ以外のことなんて想像したこともなかった。
私は言葉も出さずに、横に首を振った。
「そうだよな。何も知らねぇアーシアンは、あの楽園が当たり前だと思ってるもんだ。天使たちはアーシアンに罪人根性を植え付けて、神に選ばれた自分たちは楽園に住むのが当たり前だと思いこませた。あの楽園の全てが嘘っぱちなのにっ！」

ガンッ！
アラシが激情のまま箱を強く叩く。
その様子を茫然と見つめながら、私は急展開に頭がついていけていないのを感じていた。
つい最近まで私がいた、楽園としか言えない場所が『嘘っぱち』？
それは、どういう意味なのだ？

「あの楽園は、本当はここと同じように不浄の大地と同じはずなんだよっ。それを天使たちが、アーシアンたちの生命力を糧にして無理やり捻じ曲げてるんだ！！この中に生きたアーシアンを入れて生命力を、その血を絞り出すことによってな！」
アラシが叫びながら聖櫃の蓋を地面に落す。

瞬間に目に飛び込んだのは、赤黒い血の汚れ。
それが、美しい外見とは裏腹に、聖櫃の中を埋め尽くしていた。
目に入った蓋の裏側には、血の手形が付いている。
きっと、聖櫃の外に出ようと中のアーシアンがもがいたのだ。
同時にむせかえるような血の匂いが空気に充満する。

この中でアーシアンが血まみれで殺されたということを理解した瞬間、吐き気がせり上がってくるのを感じて、私は口元を押さえた。
天使の領域は、本当はあんな楽園のような美しさも、豊かさもない、

不浄の大地（ディス・エンガッド）と同じ死の荒地で、それをあの姿にするために、天使たちはアーシアンを生贄（いけにえ）にする。

全てを理解するにつれて、吐き気が強くなる。

きっとこの贖罪（しょくざい）の街は、その生贄（いけにえ）を逃がさないための街であり、そして、そのために天使たちはこの箱の中でアーシアンを殺すのだ。

それがどういう理屈なのかは分からない。

ただ、ここでアーシアンが血まみれで死んでいくことは確かだった。

「うっ・・・。」

私は堪らずに、ついに胃から何もかもを吐き出す。

血に慣れている私が、血の匂いに吐き気をもよおしたわけじゃない。

それよりも最近まで自分がそのアーシアンの命の上に立っていて、それを美しいと感じていた自分に、そして、アーシアンの命の上に立っていると知りながら、あれほどに楽しげに、何の罪悪感もなく生きている天使たちの姿に吐き気がしたのだ。

濃い血の匂いが、ここに集められたアーシアンの人数が、天使の領域（フィリアラディアス）に捧げられたアーシアンの命が少ないことを示している。

それを思うと、怒り、憎悪、悲しみ、やるせなさ、後悔、悲嘆、もう何もかもが分からなくなるくらいの感情が私の中でせり上がってくる。

『こんな世界はおかしいよ。』

エヴァの声が頭の中に響いた。

ああ、おかしいよ。

混乱する頭で、私は心の中だけで呟いた。

人間の罪だか、何だか知らないが、少なくともこんな誰かの犠牲の上に楽園を成り立たせようとする天使たちが、正しいなんて私には思えない。
そんなこと、黒の剣（ローラレライ）を使う私には資格がないかもしれないけど、神が許しても、それでも私は許すことが出来そうもない。

私はもう一度、恐る恐る聖櫃（せいひつ）に視線を上げた。
そのアラシが力なく項垂（うなだ）れる横の聖櫃（せいひつ）に、血まみれのアーシアンの頭を掴み上げる天使の幻影が見えた。

その時私はそこで初めて天使が自分とは、人間とは違う生き物なのだと唐突に理解した。

私は違う生き物だと分かっていながらも、心のどこかで人間と天使といえども、心を通わせることが出来さえすれば、分かり合えるのではないかと、天使の領域（フィリアラ・ディアス）での生活から思っていたのだ。

でも、それは私の滑稽（こっせい）すぎる錯覚だった。

分かり合えるものならば、こんな物でも扱うようにアーシアンの命を犠牲にできるはずがあるものか。
違う生き物だと、天使たちにとってアーシアンが家畜のような存在だと思っているくらいの気持ちじゃないと、・・・こんな非道ができるはずはないのだ。

第四十二話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の三（後書き）

ヒロが天使と戦う覚悟をした理由が、分かっていただけましたでしょうか。多分、第二部一番の衝撃場面かもしれないです。

個人的には、もちろん誰かの命を犠牲にして幸せを得るなんてことは許せない行為だと、私は思っています。でも、こういった表現が嫌いだという方がいて、私の下手な文章で不愉快な思いをされたりしたら、申し訳ありません。

第四十三話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の四

「・・・アラシ。」

項垂(うなだ)れるアラシを、私は力なく呼んだ。
アラシは聖櫃(せいひつ)にもたれ掛り放心した瞳で私を見返す。

「私はこの話を聞くまでは、正直、天使に本気で戦いを仕掛けるなんてバカなことだと、愚かなことだと思った。協力するといっても、作戦が成功するとも思わなかった。それは今とて同じ気持ちだ。」

どうして、こんな事を言ったのか自分でもわからない。
アラシの今の話からすれば、それは彼にぶん殴られても仕方ない無神経な言葉だと思う。
だが、アラシは怒り一つ表わさず、彼に似合わない自嘲(じちょう)するような表情を浮かべた。

「そりゃそうだよな。俺だって、いや、俺たちだって本当はそう思ってる。でも、あの人は俺達に言ってくれた、この作戦さえ、Ｄｒ(ドクター)パルマドールを殺すことさえ成功すれば俺達、皆、助けてくれるって。」

第四十三話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の四

私とアラシは聖櫃(せいひつ)という名が似合わない、アーシアンたちの処刑台を挟んで向かい合っていた。

「お前は天使に直談判するって言ってたじゃないか、その言葉じゃDrパルマドールを殺すほうがメインみたいだな。」
アラシが先ほど言っていた言葉とは違う所を見つけて、私は眉を顰めた。
「・・・嘘をついたのは謝る。でも、本気で協力する気がない奴に本当のことを言いたくなかったんだよ。」
「じゃあ、何か?その人っていうのが、誰かは知らんが、そいつがお前たちにDrパルマドールの殺害と引き換えに、この街から逃がしてくれるっていうのか?」
アラシはそれに頷いた。

「・・・それは信用できる話なのか?それに街からでることができているなら、いっそ脱出の作戦を立てたほうがいいんじゃないのか?」
アラシ達が信じたい気持ちは分かるが、そんなうまい話がそうそうあるものなのだろうか?
そもそも、そんなことが可能なのか?
アラシもそれは分かっているようで、苦々しい顔になる。
「この街から出れたりするのは、一重に天使の手引きがあるからだ。この街は四方に魔法の壁で囲まれ、天空騎士団に監視されているからな。脱出なんて少人数なら可能だろうが、街の皆なんて無理に決まっている。」
天使の領域を支える生贄たちを、天使たちも逃がすつもりはないということか・・・。
確かに、ここには老人や子供もいる。
全員で脱出するのは難しい。

「俺たちはもう限界なんだ。この地獄から、仲間の死を、自分の死を待つだけの人生から脱出できるなら、何でもやるさっ。」

その声を、言葉を聞いたら、何も言えるはずもなかった。
アラシは私が考えていることなど全部分かっていても、自分や一人や二人なら助かる方法もあるのに、皆で助かるための道を選ぼうというのだ。
作戦に参加する者たちは、それで助かるか分りもしないのに、自分の命を賭(と)して・・・。
そう思うと胸が痛んだ。

泣き声が混じる声を出しながら、アラシは聖櫃(せいひつ)に縋りつくように蹲(うずく)まる。
彼らは一体、この箱の中に何人の同胞を死を見てきたのだろう。
その中には、もしかしたらアラシの大切な人がいたのかもしれない。
黒の武器(カシュケルノ)を諦めた時の、誰かを犠牲にして力を得たくないと言った彼の様子が思い出された。

ああ、だから、誰かの犠牲をあれほどに厭(いと)うたのだ。

「・・・救われたいんだよっ！」

絞り出された言葉、むき出しの感情、アラシは何も隠そうとはしなかった。
だから、私は決めた。
黒の雷(オルヴァラ)に私の全部の力で協力しようと、そして、その先にあるのが破滅でも、助けるという約束が偽りでも、死を待つしかなかった彼らには、戦おうとすることが、助かりたいと行動することが生きるということ、そして救いになるのだ。きっと。

だったら、私は一人でも多くのアーシアンをここから助けてやりたいと、救われるような何かをしてやりたい。
・・・いや、助けてやりたいなんて、それはきっと私の醜(みにく)くて、汚

いエゴでしかない。
それでも黒の剣（ローラレライ）しか持たぬ私が、作戦に参加することで彼らに何かできることがあるというなら・・・、私にできることは全部全部したいと思ったのだ。

ガァ・・・ン
ザッ
ドドドド・・・ン

深夜、静かな街中に不釣り合いに響く轟音（ごうおん）、立ち上がる砂埃（すなぼこり）。

「蒼の風（アンダ・シェスタ）」

闇夜に光るエンリッヒの翼から繰り出される青い刃。
その上空からのエンリッヒの攻撃を、私は黒の剣（ローラレライ）の力で叩き落とし、そして、もう一度剣を振りぬいてエンリッヒに向かって黒い衝撃波を放った。
攻撃が速かったため避ける余裕がないエンリッヒは、翼を魔力でコーティングして、翼で身を包み攻撃を防ぐ。
攻撃は防がれた。
だが、上空で一瞬動きが止まる。。
それを見て私はぐっと足を踏みしめると、思いっきりジャンプをして二階建ての建物の屋上に、非常階段を踏み台にして上ると、エンリッヒに屋上から飛び降りて襲いかかった。

「でりゃぁっ！！」

エンリッヒは意表をつかれたが、ここはさすがに天空騎士団副師団長（アイッシュグランド）。
解いた翼のガードで黒の剣（ローラレライ）が襲いかかる前に再び身を包んだのだ。
だが、私はそんなこと頓着（とんかちゃく）せず、黒の剣（ローラレライ）を握る手に力を込めた。
黒の剣（ローラレライ）、力を貸してくれ！！

そんな私の心の叫びに応えるように、黒の剣（ローラレライ）の刀身が鈍く光り、熱を放つのを感じた。
そして、私は頭上に振り上げ黒の剣（ローラレライ）をエンリッヒに切りかかる。

「いっけえぇぇっ！！」

ザンッ！
確かな手応え（でごた）えとともに地面に着地した私の後に、エンリッヒが地面に落下する気配がした。
すぐにこちらに掛ってくるかと思ったが、エンリッヒは倒れこんだまま動く様子もない。
どうやら、深手を負わせられたようだ。

「う・・・、くそぅっ。」
立ち上がろうとして、エンリッヒがぐらりと再びバランスを崩す。
私は倒れこんだエンリッヒに、黒の剣（ローラレライ）を突き付けた。
よく見るとエンリッヒの翼は、左翼が血に染まっている。
かなりの出血のようだ。
「まさか、わいの魔法防御を破ってまうとは・・・、さすがですなぁ。前より、強うなっとるんとちゃいまっか？」
エンリッヒは剣を突き付ける私に痛みをこらえた顔で、それでもいつもの調子でおどけてみせた。
「・・・そうかもな。」

あの時だって手を抜いて戦った気はない、だが、あの時とは明らかに戦う動機が、覚悟が全く違う。

だが、今はそんなことよりも、アラシ達に天使たちに作戦がバレている事を早く知らせなければならない。
私は倒れるエンリッヒを置いて、急いで踵を返した。
一刻も早く、アラシ達の所に、天使たちが待ち構えていることを知らせに行かなくてはと、気が急いだ。
「待ってぇな。」
だが、走りだそうとした私をエンリッヒが引き止めた。
立ち止まる義理はない。
でも、私の足は止まっていた。
「どうして、わいを殺さんのでっか？」

甘いだろうという、自覚はある。
私はエンリッヒの言葉を、振り返らずに聞いた。

「天使と本気で戦う覚悟があるんなら、あんさんは、わいを殺していかなあかんでしょ。」
エンリッヒに言われていたら世話はない。
でも、言っていることは正しい。
例えエンリッヒに個人的な情があろうとも、エンリッヒは天使。
この反吐が出るようなアーシアンの血に染まった楽園で、のうのうと生きてきた天使なのだ。
そして、事実を知った私は、誰であろうが天使を許さないと決めたはずなのだ。

だが、果たして私にエンリッヒを断罪する資格があるのだろうか。
本当のところ、エンリッヒを殺すことを躊躇わせているのは情より

も、頭に浮かんだそんな問いだった。
エンリッヒを振り向かないまま、私は手の中の黒の剣（ローラレライ）の存在を確かめた。
この黒の剣（ローラレライ）も、また、この楽園と同じように、彼女の犠牲の上に成り立つ力。
黒の剣（ローラレライ）が悪い訳じゃない。
誰に強制されて黒の剣（ローラレライ）に犠牲を捧げたわけじゃない。
それを、こんなに重く、醜く、悲しくしたのは、一重に私の罪。
全ては私が悪いのだ。
そんな罪を背負う私が、果たして天使に、アーシアンの正義を振りかざして殺すことが正しいことなのか、私には分からないのだ。
私とて、似た者じゃないのか？
そう思うと、剣先が鈍るのだ。だから、

「嫌だ。」
私の答えは、エンリッヒを殺さないというものだった。
「ヒロさん。」
エンリッヒに背を向けた私には彼の表情は見えないが、その声は意外そうだった。
「さっきも言っただろ？貴様を殺したくはないんだ。」
「でも・・・。」
こいつは私に殺されたいのか？
はっきりしないのは自分のほうなのに、八つ当たり気味な気持で苛々した。
「言っとくけど、お前だけ特別ってわけじゃないぞ。」
だから、私の声は若干棘棘（とげとげ）しい、不機嫌な感じになった。（こういう所は、私もまだまだだと思う）

「はい？」
私の唐突な言葉にエンリッヒが声を上げる。

「・・・私は天使と戦う覚悟をした。でも、それはアーシアンたちのために使いたい覚悟だ。少なくとも私の邪魔をする天使の相手をする覚悟ってわけじゃない。」

「・・・・それって、屁理屈ちゃいまっか？」

言われなくても分かってる。

エンリッヒの苦笑する気配に、私は何も言えずにいる。

でも、とりあえず、これでいいのだ。

もし、ここに他のアーシアンがいて、その時エンリッヒが襲ってきたとしたら状況は変わるが、でも今は誰もいない。

私とエンリッヒだけなのに、わざわざ頭を悩ますのも馬鹿馬鹿しい。

・・・まあ、問題の先延ばしでしかないけど。

分かっていても、結局覚悟ができているといっても、私は色々なことをぐるぐる考えてしまうような、小さな人間なのだ。（こればっかりは、中々自分を変えられｒない）

だから、これ以上エンリッヒと話していても、時間の無駄だと私は今度こそ生体兵器研究所に駈け出そうと、一歩踏み出した。だが・・・、

「そんな急がんくても、生体兵器研究所には天使は誰もおりゃしまへんよ。」

その声に思わず振り向いた。

「黒の雷（オルヴァラ）の作戦は確かに、サンタマリア様がある人物の、天使を裏切ったお人の心を読んだことで、天使たちに筒抜けですわ。でも、サンタマリア様は黒の雷（オルヴァラ）が生体兵器研究所を襲うことと、ヒロさんが黒の雷（オルヴァラ）におることは、誰にも話しておりまへん。」

なるほど、作戦がバレたのは黒の雷（オルヴァラ）と繋がっている天使の心をサンタマリアを見通したのか。（その天使については結局アラシは私に教えてくれなかった）

だが、どうして生体兵器研究所のことと私のことを話さない？
そもそも、Ｄｒ（ドクター）パルマドールを殺すほうが作戦のメインで、他は皆陽動なのだ。
心を読めるサンタマリアが、その意図を知らないはずはない。
その意味が分からなくて、私は眉をひそめたが、エンリッヒははいつもの嫌味な笑みを浮かべているだけだ。
「ですけど、他の場所には天空騎士団（アイッシュ・グランド）が張り込んでまっせ？仲間に知らせるなら、早いほうがええんとちゃいますか？」
「どうして・・・。」
私の疑問についてはこれ以上する気はないらしい、エンリッヒは打ち切るように言った。
確かにエンリッヒが言う通り、一刻も早く皆に知らせに回らなければならないのは変わらない。
だが、どうして教えてくれたのか気になって私は最後に彼に尋ねた。
すると、やっぱりあの好きになれない笑みで、
「・・・さあ。どうしてでっかね？まあ、命を助けてくれたお礼ってことに、しといて下さい。」
そういってエンリッヒは私に手を振った。
私はそれに一つ苦笑すると、今度こそエンリッヒを置いて走り出した。
そして、二度とエンリッヒを振り向くことはなかった。

第四十三話　人間と天使は違う生き物だったのだ　其の四（後書き）

エンリッヒとの戦いは若干少なめになりましたが、今回でヒロが、黒の雷がどうして天使と戦うことを決めたか・・・という説明は終了って感じです。
次からは、エヴァンシェッド視点の話で残したままの謎やらを巻き込んで、生体兵器研究所を舞台に第二部も終焉に向かいだします。
あと、４，５話ってところです。拙い話ですが、お付き合いいただけると幸いです。

第四十四話　錯綜せし事局

生体兵器研究所はもうすぐそこだ。

エンリッヒの話を信じるなら研究所には天使はいない。
だが、アラシが持つ通信機を使って他のチームに連絡をとったほうが、私が街を走って回るより恐らく早い。
私はともかくアラシ達と合流すべく、静けさに包まれた白き神（イア・ルマ）の御許（ンヌ）を何も考えずに走るのである。

第四十四話　錯綜（さくそう）せし事局

かつて、Ｄｒ（ドクター）パルマドールに車に乗せられ連れられた時は、この生体兵器研究所の薄気味悪さに怖気（おじけ）づいたものだった。
しかし、真夜中の暗さに、その気味悪さがパワーアップしているにもかかわらず、今の私にはそんなもの気にもならなかった。（多分、その余裕が今の私にはないのだろう）
ともかく、生体兵器研究所に天使がいないのであれば、こちらの作戦は続行も可能だろうが、他の陽動チームはすぐに撤退だ。
奇襲だからこそ天使たちと戦うことも有効なのであって、待ち伏せなどされた暁（あかつき）には１００パーセント勝ち目はない。

幸いにまだ陽動作戦が始まっている気配はない。（陽動は大々的にやる予定だったはずなので、もし始まったら街がこれほど静かなはずはないだろう）
だが、陽動を開始する前に天使に捕まっているという可能性も捨てきれない。

・・・まだ、どのチームも天使たちと交戦していないと願いたい。
そう思いながら走り、ぐんぐんと近くなってくる生体兵器研究所、しかしあと一息で入口・・・という所で私は走る足にブレーキをかけ、もの影に隠れる羽目になる。

「・・・あれは天空騎士団(アイッシュグランド)？」

エンリッヒの話ではいないはずの天使が、生体兵器研究所の入り口の前に何人も立ちはだかっていたのだ。
エンリッヒに嘘をつかれた？（あのいけ好かない笑顔が浮かんだので、頭の中でぶん殴ってやった）
だが、あんな場面でエンリッヒが嘘をついても意味はないし、そうではないと信じたい。
そもそも、妙に小賢しいところで頭の回るあの男が、こんなすぐに分かる嘘をつくとは思えない。
それよりも、問題は天使たちの足元にある物影。

「おいおい、全くこのアーシアンたちのせいで、こんな夜に俺たち仕事だぜ？」
「ほんと、タダでさえ、ここ最近仕事がキツイっていうのによぉ。」

・・・間違いない。
暗がりで判断に苦しむところだが、今の話声から恐らくあの物影達は私が先に行かせた黒の雷(オルヴァラ)のアーシアンたちだと見当がつく。
やはり、天使たちに待ち構えられ、彼は倒されたのだ。
うめき声や、かすかに動いている様子は確認できるから、まだ殺されてはいない。
エンリッヒの言っていたことを、うんぬんと考えるより先に私は飛び出していた。

「まだ、残りがいたぞっ！」

すぐに私に気が付いて、わらわらと集まってくる天使、４，５・・・８人。

私は天使たちに向かいながら天使の人数と位置を確認すると、作戦も何もなく、ただ向かってくる者、目の前にいる者、その全てを切って捨てた。（アーシアンたちが倒れているから、大技は使えない）

そして、あらかた研究所の外にいた天使たちを切り伏せると、私はまだ意識がありそうなアーシアンの一人を抱き起こした。

「おい、大丈夫か！」

「・・・う、て・・・天使たち・・に、ま・・ちぶせを。」

途切れ途切れに、苦しそうな声。

「あ・・・アラシが、う・・・、天使たちに連れて・・・。さ・・・作戦を・・・頼む。」

そう言って、震える腕を上げ彼が示したのは生体兵器研究所の中。

「分かった。心配するな。」

私がそういうと、ほっとしたような顔をしてそのまま意識を失う。

安心したのだろう。

私はそっとアーシアンを地面に横たえると、不気味に私を見下ろす生体兵器研究所を睨みつけた。

「・・・すぐ、戻るからな。」

とりあえず、外の天使は一掃（いっそう）したし、すぐにこの場に応援が来るということはないと思われるし、ここに彼らを置いておいても大丈夫だろう。

多分、アラシもまたここで倒されたはずなのに、彼だけここにいないというのが気になった。

しかも、連れて行かれたのはこの生体兵器研究所の中。

一か月前の、自分の記憶が甦（よみがえ）る。

・・・嫌な予感がした。
生体兵器研究所とて、これだけの天使がいたのだ。
他も同じような状況だろうと予想がつく。（通信機がないから確認のしようもないが）
それでも、こうなった以上、私一人でも作戦を実行することが、彼らの想いに答えるということなのだろうと思う。
私は気を引き締めると、研究所内に入るために立ち上がろうとした。

・・・と、ひやりとした空気が、私の頬をなでた。
「動くな。」
眼だけで顔の横を見れば、背後から偽物の月に鈍く光る剣の光が突きつけられていた。
天使がまだ残っていのか？
黒の剣（ローラレライ）は手の内にあるが状況は打開できそうもない。
このまま天使にやられる訳にかない・・・と、ぎりりと歯を噛みしめていると、くすくすと華やかな笑い声。
「・・・なんちゃって。こんばんわ、ヒロ。」
聞き覚えのある女の声。
そして、剣はあっさりと引かれて、私はさっと女を振り返る。
「あんた・・・。」
肩くらいの黒髪に、血の色に似た赤い瞳、今日は黒いワンピースに白いカーディガンを羽織っている。
牢屋に現れた私を襲った女だ。

「あんたじゃないわ、私の名前はティア。よろしく。」
私を殺すと言った時の殺気どころか、友好的な笑みを浮かべて彼女は自己紹介をする。
「・・・どういう風の吹きまわしだ？どうして、ここにいる？」
「あら？私はここに来る言って言ってたでしょ？そんな警戒しなくても、アーシアンに味方する貴方を殺そうとは思ってないわ。」

言いながら彼女は女性が持つにしては大きすぎる剣を鞘(さや)におさめた。
細身だが、恐らく彼女の身の丈ほどはある。
「・・・どういう意味だ？」
「私が貴方を襲ったのは、天使に力を貸す黒の一族の抹殺を命令されていたから。今のあなたは、黒の雷(オルヴァラ)に本気で協力している。殺す理由がなくなったって訳。」
聞き捨てならない言葉だった。
「天使に力を貸す気など、私はない。」
それが嫌で天使たちから逃げ出したのだし、アラシの話を聞いてからそんなことを言われては、ひどく気分が悪かった。

それが声にも多分、表情にも出ていたのだろう、ティアは苦笑して言った。
「ふふ、ごめんなさい。でも、まあ、色々あるのよ。何せ貴方はあの万象の天使のそばにずっといたのだもの。天使の回し者じゃないかって疑ちゃってたのよ。」
「・・・それで、今は信用されているというわけか？」
そばにいただけで疑われる理由は知らないが、とりあえず、天使の間者(かんが)として私は疑われていたらしい。
「それより、あんたこそ何者なんだ？私からすれば、あんたのほうが余程疑わしい気がするんだが。」
数日前に殺されそうになったばかりなのだ。
そうそう、信用できたものではない。
だが、ティアの方はあっけらかんとしたもので、
「だから、あんたじゃなくてティア！心配しなくても、とりあえず私は天使の敵よ。それより、いいの？アラシを助けに行くのでしょう？彼、今すごいやばい状態よ？」
と、笑いながら言い放った。
「な・・・！」
「さ、案内するわ。」

かくして、そう言われてさっさと研究所の中に入っていかれては、それ以上追及することもできず。
私は釈然としないまま、彼女の後を追うこととなった。（うーん、どうにもこういう押しの強い女は苦手だ）

研究所の中は、以前に私が来た時同様、静かで暗くて寒い。
てっきり、まだ黒の雷（オルヴァラ）を待ち受けている天使がいるだろうと思っていた私は拍子抜けした。
「あの天使たちは、黒の雷（オルヴァラ）を待ち伏せしてたんじゃないの。この研究所をもともと警備していた天使よ。」
あたりを見回す私の思考を読んだのかのようにティアが言った。
「・・・一か月前はそんな天使いなかったはずだ。」
警備どころか、助手一人しか魔人（ベルトゥール）以外はいなかった。
「一か月前と状況が変わったの。今、この研究所は天使たちの台風の目だもの。」
「どういう意味だ？」
「色々よ。色々。」

そればっかりだ。
私はどうにも、知らないことが多すぎるこの事態に気味の悪さを感じていた。
ティアに限ることではない、アラシだって私に肝心のことは話さない。
戦いの中心にいながらも、知らないことばかりが私を取り巻いていることで、戦う目的こそはっきりしているが、私は本当にそのために戦っているのか、それすら不安に思えてくる。

・・・誰かに、踊らされているような。

普段、こんな不透明な中で戦うことのなかった私には（いつもは襲

ってくる相手を叩き伏せるだけだ）、この状況はあまりに歯がゆかった。
何の根拠もなかったが、私の直感がそう囁(ささや)いていた。
だからって、今さら引き返すこともできないんだが。

そんな思いを抱えたまま、ワンピース姿の女が長剣片手に前方と走る女の背中を見た。
走るティアに迷いはない。
研究所の無機質な廊下を右に曲がり、階段を上り、広場を横切る、今度は右、そして左に曲がって、長い渡り廊下を突っ切った先に一つの大きな扉が目に入る。
それを、何の躊躇(ためら)いもなくティアはその扉を蹴り破る。（女がスカートでそんなことをするなよ）

「いひゃひゃひゃっ！なななな、何ですか、ちみたち、何ですか！！！！」
飛び込んできたのは、一度見たら忘れられない珍妙な科学者が、メスを片手に私とティアを見て人間らしからぬ声を上げた。
そして、その科学者の実験に今にもされてしまいそうな、実験台の上に磔(はりつけ)にされているアラシとハクアリティス。
『ヒロっ！！』
アラシはともかく、ハクアリティスまで実験されそうになっているとは驚いた。

私を見て声を上げる二人、そして同じく私を認めてこちらを指さして目を見開く外道科学者。（お決まりのリアクションだ）
「あ、あー！あの時の、愚かな、愚かな黒の一族っ！」
「よお。」
私はそんな彼に視線を合わせて、一つ笑ってやりながら彼に近づくと、

「ひぎゃっ！」
Ｄｒ（ドクター）パルマドールを床に叩き付けた。
そのまま取り押さえてやると変な鳴き声を出してもがくが、大した力はない。
そうして、とりあえず、Ｄｒ（ドクター）パルマドールが目に入ったから捕まえてみたが、そういえば、部屋の中をきちんと確認していなかったと、周りを見回す。
他に天使たちでもいるかと思ったが、どうやら、Ｄｒ（ドクター）とアラシ達以外は誰もいないらしい。

「大丈夫？二人とも。」
一方、私がうるさい男を取り押さえている横で、ティアが実験台みたいなものにくくりつけられている二人に声をかけていた。
「おう、悪いなティア。ヒロも助かった。」
ティアはアラシとは顔見知りらしい。
だから、作戦のことを知っていた？
うーん、しかし、さっきの物言いからは黒の雷（オルヴァラ）の一員ってわけでもなさそうだ。
それに、牢屋に幽霊のように現れたり、消えたりする力・・・。

そんな風にＤｒ（ドクター）を取り押さえながら悶々とする私の横で、拘束から逃れられたハクアリティスは大そうご立腹だった。
「さいあっく！もう、何で私まで？」
「まあまあ、そう怒らないでくださいよ。」
「だまらっしゃい、アラシッ！」
実験されそうだったわりには元気なハクアリティスが、アラシに食ってかかっている。
大きな熊男が、（一見）儚（はかな）げな美女にやりこまれている様子は非常に滑稽（こっけい）だ。

だが、今はそんな二人を見て和(なご)んでいる場合でもない。
「・・・おい、今はコントをやっている暇はないぞ。すぐに他のチームに連絡を取って、撤退させろ。この作戦、天使にバレている。」
「本当かっ?!どうしてっ・・・。」
私の言葉に驚きの声を上げるアラシを、私は制した。
今はエンリッヒの話をしている暇はないだろう。
「詳しい話は後だ。Ｄｒ(ドクター)パルマドールはこうして確保したんだ、すぐに連絡をーーーー。」
だが、言葉は全部言えなかった。

「その必要はないわ。」

何処にでもいるような、それでいて、何だか特別な雰囲気のある女の声が私とアラシの間に割って入ってきた。
Ｄｒ(ドクター)パルマドールを押さえながらその人物を振り返って驚いた。
「サンタマリア様!!!」
これは私ではなく、アラシの声。
そう、突如として現れたのは三大天使が一人、深海の天使であるサンタマリアと、彼女をエスコートしている黒づくめの人間・リンズ。
アラシは驚きの声を上げると、すぐさまサンタマリアに頭を下げて、彼女に礼を尽くす。
それを見るだけで、一目瞭然だった。

「貴女が、黒の雷(オルヴァラ)に手を貸していた天使だったのか。」
「ええ。お久しぶりですね、ヒロ。アラシから貴方を確保したと聞いた時は驚きました。てっきり、死んでしまったかと思っていましたから。」
優しげな声だが、どこか鋭利な感じがした。
それは彼女に心をのぞかれているという意識があるから、そう思うのか、はたまた、今の彼女に何か私に含むところがあるのか・・・。

そこで、私は一つ違和感を感じた。
確か、ついさっきエンリッヒは言っていなかったか？
『黒の雷（オルヴァラ）の作戦は確かに、サンタマリア様がある人物の、天使を裏切ったお人の心を読んだことで、天使たちに筒抜けですわ。』
そうだ。
エンリッヒの話が本当なら、サンタマリアが天使を裏切った人物の心を読んで作戦が天使に知られることになったはずだ。
だが、その天使の裏切り者こそがサンタマリアだというのであれば・・・。
私ははっとして、サンタマリアを凝視した。
彼女はアラシにねぎらいの言葉をかけてやりながら、盲目で瞼（まぶた）が開かないままでも、聖母のような笑みを浮かべている。
そのサンタマリアが、彼女を見つめている私の方を振り返った。
そして、微笑んだ。
ぞくり・・・、背中を寒気が突き抜けた。
そして、その笑みを浮かべたまま彼女は私の方に近づいてくる。
それに従って、まるで、化け物にでも出会った時のような恐怖に身が縮こまるような感覚を私は覚える。
「さあ、ヒロ。その人間を私に・・・。」
私は何も言えないまま、状況を整理しようと回らない頭をフル回転させていた。
黒の雷（オルヴァラ）に力を貸す天使の目的は、この外道科学者。
そういえば、エンリッヒはかつてこの研究所内で再会した時に言っていなかったか？
この私の下で震えて奇声を上げ続けている男を、『殺させてあげたい人』がいると・・・。

「そうよ。それが私です。それにしても、エンリッヒは全く役に立たないわね。何のために、あの子に貴方をここに近づけさせないよう言ったのかわからないわ。」

・・・心を読まれた。

でも、今の言葉で確信が持てた。

サンタマリアは、この外道科学者を殺したい。

だが、それは何故だ？しかも、こんなまどろっこしい手を使って、黒の雷（オルヴァラ）に抹殺を命令しながら、自分でこんなところまで来て。

それに、どうして作戦の一部をばらす？

それに誰の心を読んだというんだ？他に黒の雷（オルヴァラ）に手を貸している天使が？

ああっ！こんな状況じゃ、全く考えがまとまらん！！

「くすっ。ヒロは本当に色々なことを考えているのね。でも、今はそんなこと考えなくてもいいの。さあ、余計なことは考えず、その男を私に。」

そう言って、混乱したままの私にサンタマリアは手を伸ばし・・・

「駄目だよ。」

その手は、鈴が鳴るような美声とともに叩き落とされ、視界に白い羽が舞った。

同時に私の背後から、誰かの手がポンと置かれた。

見なくても分かる、痛いほどに左胸を叩く心臓の鼓動、あふれ出る冷や汗、この感覚には覚えがある。

忘れたかったが、忘れられるはずもない・・・あの美しくも歪んだ

異形の天使。

「え・・・エヴァンシェッド・・・・どうして？」

サンタマリアもその出現は予想外だったようだ。

私だけじゃない、この場にいる全ての者が驚きに硬直した。

そんな中、一人だけ悠々としているエヴァンシェッドの気配。

ふふふと、彼は私の耳元で笑う。

「さあ、どうしてかな？それはサンタマリアの方が、良く分かっていると思うけど？」

耳に息がかかってくすぐったいわ、相変わらずどうにもしゃきっとしないしゃべり方だわと、相変わらず私の神経を逆なでしてくれる男だ。

とりあえず、私から離れてくれねーかな？

・・・ぶん殴ってもいいかな？

色々考えていたはずだし、考えないといけないはずなのに、脳の許容範囲を超えた事態の発生に、私の頭に思い浮かぶのは、何故だかそんなことばかりだった。

私の追いついていかない所で、事態は急変しようとしていた。

第四十四話　錯綜せし事局（後書き）

今回の話は、登場人物がだんだんと増えていくし（後に出てくる人につれて濃い人が出てきてます）、ヒロ自体が状況についていけてないので、一人称が分かりにくくなっていないか不安です。その現れた人たちについて一言。

まず、ヒロを殺そうとした女性・ティアはまだまだ謎が残りますが、とりあえず敵ではなさそうですね。ヒロはハクアリティスも同様なんですが、押しの強い女性は苦手です・・・ていうか、この話はそんな女性が多い気がします。だから、ヒロはいつも女性にはタジタジです。

次、サンタマリア。天使を裏切り、黒の雷に手を貸していたのは、実は彼女だったわけですが、何だかただそれだけっていう感じはしないですよね。ヒロは動物的本能でその辺を嗅ぎとってますが、それは次回以降明らかになります。

で、最後はエヴァンシェッド（ちょっとしか出てないですけど）。実は次回からは彼視点の話で、ヒロが付いていけていない部分を補完するつもりです。

第四十五話　嫌がらせの君　其の一

俺が現れたことに驚く顔は、皆、非常に滑稽（こっけい）で見ていて愉快だった。
サンタマリアとリンズ以外は知らない顔。
多分、黒の雷（オルヴァラ）のアーシアンの皆さんだろう。

ああ、もちろんヒロも知っている顔だ。
でも、彼の顔は背後から手を回している俺には見えない。
あ・・・、後、ヒロの足元にあのパルマドールとかいうエンディミアンもいたか。（ヒロに踏みつけられて、もごもごもがいている。）
でも顔を見なくても、ヒロの気配から驚いているのは、ちゃんと分かる。
ただ、皆と違うのはその驚いている気配の中に、僅（わず）かに漂ってくる物騒な気配。（多分気のせいじゃない、何を考えているんだか）

ふふふと、心の中で笑った。
まさか、こんな所で再会できると思わなかった偶然と、ああ、やっぱり、ヒロは俺の『一一一』だという確信が相まった高揚した気分が背中を駆け上がる。
それでも俺は何でもない顔をして、ヒロの手に置いた手に力を入れながら、こちらを見て、いつもまにか驚きから立ち直って開かない瞳で、俺を睨みつけているサンタマリアに微笑んでやった。

第四十五話　嫌がらせの君　其の一

時間は戻り、１０日ほど前。
世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）から解放されて、ケインが俺に天使の裏切り者の名を告

げるその瞬間。

「私たち天使を裏切っているのは、・・・・」

ケインは重大なことを言っているはずなのに、どことなく楽しげな様子だった。

まるで、子供が仲良しの友達だけに内緒話をするような、そんな気軽なようで、それでいて何だか粘着質（ねんちゃくしつ）な感じが受け付けないと感じられた。

だが、わざわざ知りたいことを教えてくれるというのに、下手なことを言ってへそを曲げられるのも面倒なので、俺は黙って言葉を待った。

幾人か、裏切っていそうな天使たちの顔がよぎる。

しかし、ケインの発した天使の名は、その誰でもなかった。

「ラインディルト様です。」

瞬間に思ったのは、『ありえない』につきた。

だが、ケインがこんな嘘をつく理由も思いつかない。

心中に相容れぬ感情と理性。

故に俺は、ラインディルトが裏切り者か、そうではないか、判断が瞬時につかず、答えを先伸ばすと同時に、情報を収集するために言葉を濁した。

「・・・まさか、それは本当ですか？申し訳ないが私には信じられない。」

作った表情に、冷静の挟間に戸惑いと悲しみを混ぜた。

ケインは、そんな俺の演技に優しげな笑みを浮かべて、慰（なぐさ）めるような言葉を重ねた。（多分、万象の天使である俺よりも、上の位置に自分がいるのだと錯覚をしているのだ）

「ええ、そうでしょう。私もヤナウス殿から話を聞いた時、まさか

と思いましたよ。天使の中でも貴方に最も忠義を尽くしているはずの三大天使の一人・・・ですからね。」

そう言われて気がつく。

そういえば、そのヤナウスという貴族が、黒の雷（オルヴァラ）のテロ現場でラインディルトを見たと言っているだけで、後は、裏切り者とケインが囃（はや）したてているだけで、その決定的な証拠はないではないか。

そんなことに気がつかないなんて、余程動揺しているか、ケインのペースに嵌（はま）っていたな。

ラインディルトが裏切り者ではないと確信しているわけではないが、とりあえず、そう思った俺の天秤はラインディルトが裏切り者ではない方へ傾いた。

ただ、ケインとて嘘を言っているとは思えないのも事実で、恐らくラインディルトがヤナウスの襲撃された屋敷にいたというのは本当だろう。

ラインディルトが俺を裏切っているとは考えたくないが、その場にいた理由については問いつめる必要がありそうだ。

そこまで考えて自分のラインディルトは俺を裏切っていないだろうというスタンスを決めると、俺は改めて言葉を続けていたケインに向きなおった。

「しかし、考えてみてください。貴方は私たちが元貴族であるというだけで、私たちを遠ざけようとしますよね。」

正確には特権意識を持っている貴方たちが相容れようとしないってだけだと思うんだが、まあ、確かに俺達の方にもそういった先入観はあるかもしれない。

それにしても、こいつは何を言い出した？

「それは仕方のないことだと思います。私は当時生まれていなかったですが、王国解体前の貴族たちの悪行は聞くに堪（た）えかねないものがありますから。」

俺は思い出しただけで、反吐が出そうだよ。
でも、どうしてそんなことを言い出したかと思ったが、そこまで聞いて彼が言わんとすることが分かった。

「ですが、そういう意味ではラインディルト様も私たちと同じではないでしょうか？だって、あのお方は、本来なら尊き血の天使の筆頭である、天使一族のたった一人の王族の生き残りなのですから。」

想像通りのケインの発言に、俺は彼には分からないように、ぎりりと歯を噛みしめた。
脳裏によぎったのは、初めてラインディルトと出会った時のこと。
かつてあった荘厳な天使の城、俺達が王国を解体するために押し入った瓦解しかけた城の中で、俺とラインディルトは出会った。
美しい面影も残らない廃墟にも似た城の中、ラインディルトは俺の前に跪く。
そして、俺とラインディルトは破られることのない盟約を交わしたのだ。
だが、それをしらない外野は、いまだにこんな事を言い出すのだ。
何百年も王族という身分を捨て、俺に力を貸してくれている彼の過去を引っ張り出す。

「本来、貴族どころか王族最後の生き残りであるあのお方が、天使の王国再興を願う。それはある意味正しい考え方のような気もします。どうですか？」
道理は通っている。
だが、そこには俺とラインディルトの盟約の存在はないのだ。
「しかし、目撃証言だけで、ラインディルトを裏切り者扱いすることはできません。」
だが、俺のそんな言葉すら予想していたかのように、ケインは笑った。

「ええ、もちろん。それは分かっていますよ。だから、決定的な証拠もご用意しています。」
「決定的な証拠？」
「はい。ラインディルトの裏切りを証言する者を我々は見つけたのです。その者は、包み隠さず彼の裏切りを告白してくれました。」
まさかと思った。
だが、何の気負いも見えないケインの言葉に、ラインディルトを信じている俺も不安を感じずにはいられなかったのである。

そうして、楽しげなケインに案内されたのは彼の屋敷。
天近き城（フェデス・ジグロア）とは比較するまでもないのだが、尊き血（ビットゥ・ラ）の天使が住んでいそうな豪華で贅沢（ぜいたく）な作りの屋敷。
俺はその一室で、ラインディルトの裏切りを証言するという見知った人物と引き合わされた。

「君がラインディルトの裏切りを証言する・・・というのか？」

「・・・エヴァンシェッド様。」
そういって、顔を複雑な表情を浮かべて、既に泣き声の入り混じった声で俺の名を呼ぶのは、エンディミアンの長にして、エンディミアンの監視を任せてあるラインディルトの右腕でもあるエンシッダ。
彼をエンディミアンの長にと任命したのは俺であるので、人間とて俺も無論よく知っている人物であった。
固まってしまった俺と、俺を前にしてそれ以上の言葉を発っせられず震えてしまったエンシッダを見て、ケインがエンシッダの肩を抱いて話を促した。
「彼が全てを告白してくれました。彼は天使の王国復興を目論むラインディルト様の手伝いをさせられたらしいですが、自分をエンディミアンの長として取り立てて下さった貴方や天使に対して、罪の

意識に苛まれ、ヤナウス様の目撃証言を聞いてラインディルト様のことを探っていた私に自ら進んでその罪を告白してくれたのです。」

だから、彼を責めないで下さいとケインは言葉を閉じ、可哀想なくらいに体を震わすエンシッダを慰めるように肩を叩いた。

すると、エンシッダが大げさとも思えるほど目に涙を溜めて、俺の前に土下座をした。

「申し訳ありませんっ！！この罪はどんなもので受ける所存です・・・っ！」

「・・・。」

俺は黙って、土下座をして表情が見えないエンシッダを見下ろした。何も言えないことが俺の答えだと言わんばかりに、ケインは嬉々として話を先に進めようとする。

「それでですね。エヴァンシェッド様、これでラインディルト様の罪状も明らか。私は彼の三大天使の剥奪を要求しますよ。そして、裏切り者を発見した功績をもって、その暁には何卒私を次の三大天使にーーーーー。」

・・・なるほどこれがケインが、俺に情報を売った理由か。

しかし、こうも易々と話を進めさせるわけにはいかない。

俺は停止していた思考を再び動かすと、閉じるということを知らないらしいケインの口にそっと指をあててやると、にっこりと最上級の微笑みを浮かべてやった。（未だかつて、この微笑みの前に目を奪われなかった者はいないという俺の必殺技だ）

「ええ、わかっていますよ、ケイン。」

俺の術中にはまったケインは、子供っぽい溌剌とした表情がトロンとしたものに変わる。

「しかし、私も突然のことにまだ感情が追い付いていないのです。少しお待ちいただけないでしょうか？」

彼は俺の言葉に動かされるように、ぼんやりと首を縦に振った。

「・・・はい。」
そういうのを確認して、俺は話を詳しく聞きたいとエンシッダを連れてケインの屋敷を後にして、今度はエンシッダと馬車を共にした。
馬車に揺られる俺の表情は、ケインがいたときとは時比べ物にならないくらい、冷たいものに変化していた。それも、これは演技じゃない。
そして、俺以上にその様子が変わっているのが目の前にいるエンシッダだ。
先ほどまでは俺を前に、恐怖に怯え、自分の罪に苛まれ涙まで流していた男が今は、俺を面白そうに見ているのだから。

「どういうことだ?」
「何が?」
俺の物言いを楽しむかのようなエンシッダの表情が忌々しかった。
「ふざけるな。」
俺が語気を強めれば、おお怖いと、わざとらしく両手を上げてみせる。

・・・くそ、こいつのペースに飲まれたら終わりだ。

ここは冷静にならなくては、エンシッダの思う壺だ。
俺は苛立ちを押さえて、エンシッダを見据えた。
「どうして、お前がラインディルトの裏切りを告発するようなことをする?」
「だから、ケイン様も言ってたでしょ?ラインディルト様の命令で嫌々、天使を裏切ってはいたものの、俺を拾ってくれた天使様たちに対する良心の呵責に耐えられなくなったんです。か・しゃ・く。」
まるで感情がこもらない、おどけた口調にこめかみがぴくぴくと痙攣する。

「馬鹿を言うな。お前が天使の命令を聞くことや、天使に良心の呵責を感じるなんて、死んでもあり得ない。ラインディルトを利用して、何を企んでいる？ことによっては、俺はお前を・・・・。」

「あんたが俺をどうするって？」

冷静にと思ったにもかかわらず、感情のままに言葉を発した俺を、ぴしゃりとエンシッダの妙に乾いた言葉が遮った。

その声に、我に返る俺。

・・・駄目だ。こいつ、相手になると、どうにも感情が制御できない。

自分のそんな不甲斐無さに、汗をかいた手のひらを握りしめ俯き、俺は謝罪を口にした。

「・・・いや、何でもない。」

「ふーん。ま、いいけど。でも、さすがエヴァンシェッド様は俺のことをよくご存じだ。長い付き合いなだけあるよね？」

そんな俺の上から、エンシッダの強い声が降ってくる。

「その通りだよ。俺が天使の命令を聞くはずも、ましてや、良心の呵責なんて感じるわけがない。俺が動くのは自分のためと、そして我が白き神イヌス・ニルヴァーナ様のためだけだ。」

そう、だからこそ、ケインが言っていたこの男がラインディルトの命令を聞いていただの、俺に罪の意識を感じていたことなど、絶対にあり得ないのだ。

むしろ、この男は俺を嫌って、いや、憎んでいると言ったほうが正しい。

故に、エンシッダが現れるまでは件を楽観視していた俺も、急に不安に襲われたのだ。

「だから、そのお前がどうしてラインディルトを陥れようなどとっ！」

「あれ、あの王子殿が本当に自分を裏切っているとは考えないのか？」

「お前が絡んでいるなら、例え本当に天使を裏切るような行為をラインディルトがしたとしても、全部お前のせいだ！お前が俺に嫌がらせをしたいだけだろう？！」

そう、自分のためと、自分の主のためにしか動こうとしないエンシッダは、憎い俺に嫌がらせをしたいだけなのだ。

今までだって、何度もあったことだ。

それでも、これまで三大天使を利用しようということはなかったが、こいつなら俺が嫌がるのであれば彼らとて利用しようとするだろう。

エンシッダは俺への嫌がらせを楽しみにしている、俺の『嫌がらせの君』なのだから。

だから、ラインディルトが天使を裏切るような行動をしていようとも、それはエンシッダに誑かされたか、騙されているにすぎないと俺は断言できる。

エンシッダはそういうことにつけては、天才的な才能があるのだ。

そうと分かれば、事が公になる前に全て隠蔽をしなければ、騙されたと分かればラインディルトも、エンシッダの戯言から解放され、自分の行いを悔い改めることだろう。

幸いにケインはしばらくは俺以外にこのことを話さないと約束させた。

ケインとヤナウスという貴族の口を塞ぐだけなら、簡単なものだ。

後は、いつもどおりのラインディルトが俺の元に残るだけだ。

「おお、おお。物騒なことを考えている面だな。エヴァンシェッド。ケインをやっちまおうって腹か？相変わらず、身内のこととなると

見境（みさかい）がなくなる奴だ。」

「黙れっ！お前の好きなようにはさせない。」

熱くなっているという自覚はあるが、エンシッダ相手には冷静になろうとしてもなれない俺がいる。

ラインディルトをエンシッダから解放するためにも、ともかく、彼が何を企んでいるかを知らなければならないのに、こんな熱くなってはそれも不可能だ。

力づくで聞きだそうにも、それはこのエンシッダにはしたくてもできないのだ。

八方塞（はっぽうふさがり）の状態に、俺は焦りを感じた。

だが、そんな俺を嘲笑（あざわら）うかのようにエンシッダはあっけらかんと、自分の手の内を話し始めたのだ。

「そう怒らなくても、今からちゃんと説明してあげるよ。考えても見てよ、今回の俺わざわざ自分からケインの所に自首したのよ？その意味がわかるぅ？」

「意味？」

確かに用意周到なこの男が、不用意にケインに捕まるはずもない。ケインに捕まったことも、俺にこうして問い詰められていることもエンシッダの嫌がらせの内ということだ。

「そう、要するにね、俺の目的はラインディルトに君を裏切らせて陥（おとしい）れることが目的じゃないの。だって、もし三大天使が揺らぐようなことがあっちゃ、天使の領域（フィリアラディアス）が駄目になっちゃうでしょ？別に俺、あんたに嫌がらせをしたいだけで。この楽園は気に入っているんだ。」

そうだ。こいつはこういう男なのだ。

では、何をしたいというんだ？

「だからね、俺はあんたが一番信頼している三大天使たちの間をグ

チャグチャにしてやって、裏切られた傷心の君が、それを取り繕うために奔走する見たいの。大丈夫、頑張れば、皆元に戻るようにしているから、ただ・・・、少しでも手を抜いたら・・・・。」

この言葉の節々に、嫌な予感を感じた。

「皆・・・ていうのは、どういう意味だ？」

「あれ、わかってるでしょ？エヴァンシェッドは、頭いいんだから。」

口の中が乾くのを感じた。

「お前の罠に嵌っているのは、ラインディルトだけじゃないということか？」

ラインディルトが裏切っているかもしれないというだけで、心がぐらぐらと崩れそうになっているというのに、これ以上俺を揺さぶるようなことはやめてくれ。

しかし、その懇願はエンシッダの前にはあっさりと切り捨てられた。

「ピンポーン。案外簡単なものだよね、あんたが信頼している三大天使って言っても、所詮はそんなものなのよ。さあ、それを教えてあげるね。せいぜい、彼らを更生させるために頑張ってよ。」

信頼している者たちに、騙されているとは言え裏切られるという事実は、俺を否応なしに傷付ける。

だって、それはどんな理由にしても、彼らの中に俺を裏切りたいという気持ちがなくては、いくらエンシッダに騙されたといえ、そういうった行為につながるはずもないのだ。

その事実と、今から直接その事実と対峙しないといけないのだ。

・・・今までの中で、確かに一番の嫌がらせだな。

そう思いながらも、彼を断罪できないのは俺の罪。

嫌だと逃げたくても、天使一族のためにそれをなさければならないのは俺の責務。

そして、誰にも相談できず、一人で立ち向かわなければならないのは、俺の・・・。

第四十五話　嫌がらせの君　其の一（後書き）

エヴァンシェッドとエンシッダのお話ですね。（いや、ケインもいるんですが）

エンシッダは、名前は何回か出てきているのですが、第二部でちゃんとした登場は初めてですね。結構、重要人物な予定です。演技が上手ですね。ある意味、エヴァンシェッドとはそういうところが似ているところがあるので、仲が悪いのかもしれません。

今回だけでは、天使たちの陰謀が全部分かってないですよね。次でちゃんと話をつなげるように致しますので見捨てずにお付き合いください。

第四十六話　嫌がらせの君　其の二

それから、エンシッダはべらべらと俺の神経を逆撫(さかな)でする言い方で全てを話した。
その一つ一つを聞いていく中で、苛つく自分を抑えるのに酷く労力を使ったのは言うまでもない。
だが、一族を守るため、何より三大天使のために、俺は多大な精神力を要して我慢に我慢を重ねたのである。

エンシッダの話によれば、三大天使のうち、奴の術中にはまっているのは、ラインディルトとサンタマリア。
本当は全員を手玉に取ろうと考えていたらしいが、シェルシドラには隙がなかったというか、彼の弟のディアスオーレの監視が厳しかったらしく容易に近づけなかったらしい。（どうやら、エンシッダはディアスオーレに嫌われているようだ）

しかも良く聞いてみれば、ラインディルトには俺を、天使を裏切っているという自覚はなく、エンシッダに弱みを握られているだけで、ヤナウスの屋敷にエンシッダの名前で呼び出された所を目撃されただけだったというのだ。
その弱みについてはエンシッダは口を割ろうとしなかったが、しかし、問題はどうしてラインディルトを目撃させたかということで、その事実に俺は愕然(がくぜん)とすることになる。

「別に俺はラインディルトを利用しようなんて思ってなかったんだ。でも、サンタマリアが言うだよね。」

一瞬、聞き間違いかと思った。

「この期を利用して、魔人（ベルトゥール）の監視もできないラインディルトを失脚させたいから、彼が天使を裏切っているように見せかけよう・・・てね。自分の裏切りの罪を全部ラインディルトにかぶせる気なんだね。だから、ヤナウスに目撃させて、こうやって君の耳に入るようにした。あー女はこわい。いうなれば、この裏切りというか、この嫌がらせは俺というよりはサンタマリア・プレゼンツなの。」

サンタマリアが、この巧妙な裏切りを考えた？

「言ったろ、これは嫌がらせ。俺主導の裏切りじゃなくて、三大天使主導の裏切りの方が君には打撃が大きそうだから。サンタマリアに作戦は一任しているんだよ。俺は従順なエンディミアンを演じながら、彼女を手伝っているだけ。ああ、でもこうして君に作戦をばらしているのは俺の独断。だって、知らせないと嫌がらせにならないからね。でも、彼女の相手は疲れるよ、俺の本性を知られないために、色々苦労しているよ。」

そう言って高らかに笑うエンシッダの笑い声を聞きながら、俺は盲目の彼女がいつもどんな瞳で俺を見ているか必死で思い出していた。

第四十六話　嫌がらせの君　其の二

嫌がらせの君・エンシッダと別れた後、一人打ちひしがれている暇もなく、俺は三大天使を招集し、魔人（ベルトゥール）の件で話し合った。（話し合った内容については、第三十四話参照）

あの時、俺がついた嘘は２つ。

１つはヒロが死んだと認めること。

別につかなくてもいい嘘だったが、サンタマリアは俺にヒロを諦めてほしいことが、明らかだったので、とりあえず、それを信用してやるふりをした。
変な所で彼女を疑って、警戒されるのを防ぐためだ。

もう1つは、俺がＤｒ（ドクター）パルマドールを悟らせずに殺せることができれば一番だと匂わせたこと。
むしろ、俺としてはＤｒ（ドクター）パルマドールには死んでもらうわけにはいかないと思っているくらいなのに、そんなことを言ったのには訳がある。

それは、サンタマリアへの警告。

エンシッダによれば、サンタマリアの目的は、Ｄｒ（ドクター）パルマドールの抹殺。
どうして、サンタマリアがあのエンディミアンを殺したいかその理由には見当が付いている。
その理由から彼女があのエンディミアンを殺したいと願うのも、分からないでもない。
でも、だからって、そのために黒の雷（オルヴァラ）の襲撃を目くらましに、そのドサクサに紛れてアーシアンたちにＤｒ（ドクター）パルマドールを殺させ、黒（オ）の雷（ルヴァラ）を手引きした罪はラインディルトに着せようとしたのだ。
確かに黒の雷（オルヴァラ）によって殺されたというのであれば、尊き血（ビットゥ・ラ）の天使に付け入る隙（すき）は与えないだろう。

それでも、今はＤｒ（ドクター）パルマドールを殺されるわけにはいかないし、ラインディルトに失脚されても、ましてや、サンタマリアの裏切りが明るみに出られても困るのだ。

だから、黒の雷（オルヴァラ）の襲撃まで、俺はさまざまな手を使って、本心を隠

しながらサンタマリアに警告を促した。
ただ、エンシッダのことは俺の都合で言うことがかなわないし、エンシッダのことさえなければ、何の証拠もないのに、いきなりサンタマリアに俺を裏切っているだろうと聞けるわけもなく、曖昧（あいまい）な警告しかできなかった。
例えば、さっきのように彼女の作戦を匂わせるようなことを言ったり、はたまた、ケインの証言だけ、ラインディルトが怪しげな行動をしているとをサンタマリアに話して、ラインディルトの心を読んでくれと頼んだりもした。
ラインディルトはサンタマリアの作戦については何も知らない。
だから、彼女が本当に俺を裏切る気がないなら、エンシッダが言うような彼女主体の裏切りではないというなら、ラインディルトを庇（かば）うようなことをいうと思った。
でも・・・、

「間違いないわ。ラインディルトは黒の雷（オルヴァラ）の手引きをしている。作戦は2日後の夜。天空騎士団（アイッシュ・グランド）を配備させましょ。これで、黒の雷（オルヴァラ）も一網打尽ね。」

彼女は嘘をついた。
エンシッダの言っていることを、１００パーセント信じているわけじゃない。
だけど、確かにサンタマリアを疑い、彼女の裏切りの一つ一つを確認し、彼女のその思いを考えている今のこの時ほど、苦しいものはない。
エンシッダは、こんな苦悶（くもん）に喘ぐ俺が見たいのだ。
これが嘘では、あいつの楽しみも半減するというものだろう。
そんなことをするような男じゃないことは、嫌がらせを長年受け続けている俺には分かりすぎるほど、分かっている。
だから、多分、あいつの言っていることは正しいのだ。

・・・こんなことで、それを確信するのも嫌なんだけどな。

そして、サンタマリアに直接切り出せないまま、黒の雷（オルヴァラ）が襲撃してくる夜になった。

色々考えた末に、襲撃の前に黒の雷（オルヴァラ）を討伐してしまえばどうかと考えた。

でも、それは頑（がん）としてそのアジトなどは教えてはくれないので、できなかった。

多分、俺の考えていることなど、あの男にはお見通しなのだろう。

一方、直接彼女を説得しようとも、サンタマリアがしらを切ると想像がついた。

証拠もなしに彼女を問い詰めたところで、それで彼女が作戦を止めるのであれば、はじめから俺を裏切ろうとはしないはずだと思うのだ。

彼女の人となりは理解しているつもりだ。

そして、彼女とてあの事さえさければ、エンシッダに付け込まれて、俺を裏切るようなことはしかなかったと断言できる。

だからこそ分かる、彼女の覚悟が半端（はんぱ）ではないということが。

故に俺は彼女がＤｒ（ドクター）パルマドールを殺す現場にいくだろうと推測していた。

エンシッダの話では、Ｄｒ（ドクター）パルマドールは黒の雷（オルヴァラ）に殺させるとしていたが、確実主義なサンタマリアの性格と、あのエンディミアンに対する彼女の憎悪を考えると、直接自分の手で殺しに行くのは目に見えていた。

彼女の思いを知っているから、その思いを遂げさせてあげたいとも思う。
だが、それをしても、たぶんサンタマリアの悲しみや憎しみが晴れることはないと思うのだ。

残るのは、きっと虚しさだけ。

それを俺が知るからこそ、俺を裏切ってほしくないという感情と同じくらい、憎しみの果ての凶行を彼女にして欲しくないと思う気持ちが強かった。
だからこそ、きっと彼女を止めるのであれば、その思いが最も強くなるDrパルマドールを殺す、その瞬間しかない。
そして、俺はその全てを一人で受けとめようと決めていた。
他の天使にその姿を見せるわけにはいかないのもあるし、これもまたエンシッダの嫌がらせの一つなのだと思う。
ならば、一人で立ち向かわなければという使命感みたいなものがあったのかもしれない。

そして、騙されているとは知らないラインディルトは、今回もエンシッダに呼び出されて黒の雷の陽動の現場に呼び出されている。
これも、他の天使に目撃されるのは避けたかったので、そちらの方は裏切りについては話さないままシェルシドラに取り押さえるように頼んだ。
気のよいシェルシドラは、訝しげにしていたが俺の頼みを快諾してくれた。

もちろん、サンタマリアに感づかれないよう、また、ついでに黒の雷を殲滅してしまえるように、サンタマリアとラインディルトが現れる場所以外には天空騎士団を配備した。
サンタマリアも黒の雷に手こそ貸しているものの、Drパルマドー

ルさえ抹殺（まっさつ）できれば用がないらしく、彼女がラインディルトの心を読んだふりをした時に言っていた黒の雷（オルヴァラ）の襲撃場所は生体兵器研究所以外はすべてエンシッダに教えてもらったものと同じだった。
用がなくなれば、天使に捕まろうがいいということだ。

今夜は、天使の領域（フィリアラディアス）で未だかつてない騒がしい夜になるだろう。
今はまだ静けさを保つ夕闇の中、俺は一人天近き城（フェデス・ジグロア）の庭園で物思いに耽（ふけ）っていた。
指示できることはすべて完了した。
黒の雷（オルヴァラ）を包囲するための天空騎士団（アイッシュ・グランド）の配備も、これから俺がとる段取りも何度も頭の中でシュミレーションした。
だが、なんどもサンタマリアと対峙する様子を思い浮かべても、何もかもが不確かで落ち着かなかった。

「エヴァンシェッド。」

そんな俺に女の声がかかった。
振り向けばそれは純白のドレスに身を包み、純白のベールに顔を覆われた女性。
その女性を俺は知っている。
俺は、揺れる心を隠して、とっておきの笑みを彼女に浮かべた。

「我が、白き神。我が主よ、どうされました？」

そう、それは東方の楽園（サフィラ・アイリス）にたった一人残った女神、白き神・イヌス・ニルヴァーナ、その人。
普段は天近き城（フェデス・ジグロア）の上空にある神の揺りかご（ビシェリス）出てこない彼女が、どうして・・・と思った。

「何やら、下界が騒がしいので気になって。」

確かにここ最近、ヒロのこと、翼のこと、黒の雷（オルヴァラ）のこと色々と天使（フィリ）の領域（アラディアス）内も騒がしい。
特に今日は、天空騎士団（アイッシュ・グランド）のほとんどが街の中に潜んでいたり、普段は天近き城（フェデス・ジグロア）に誰かはいる三大天使が、このままだと皆出払うのだ。
感受性の強い女神が、この殺伐（さつばつ）とした空気に気がつかないはずはない。

「我が君が心を悩ますほどのことではありません。心配いりません、今日全てに片がつきます。」
俺は跪（ひざまず）き、女神が安心できるよう、できうる限りの優しげな声を出した。
こんな時でも、仮面さえ被（かぶ）ってしまえば自分の心など隠してしまえる自分が可笑（おか）しかった。

「・・・貴方の心がざわついている。」

だが、我が君はそんな俺の心もお見通しらしい。
ざわぁ・・・。
風が強く吹く、神のベールが舞う。
その奥に隠された女神の瞳は、まっすぐに静かな瞳で俺を見つめていた。

「貴方は一人ではありません。なのに、どうしてそんな風に一人で抱え込むのです？」
「・・・。」
「エヴァンシェッド。」

声が俺を呼ぶ。
だが、その声は俺の心を支える声じゃない。俺を癒す声でも、助ける声でもない。

俺は俯(うつむ)いた顔を上げ女神に、最上級の白々しい、それでも誰もが見とれる笑顔を浮かべた。

「わかっております。それでは、私もこれから出向くところがありますので、白き神もどうか神の揺(ビシェリス)りかごにお戻りくださりますよう。」

俺は女神に一つ頭を下げると、その場を辞(じ)した。

そう、わかっています。

俺は独りだ。

ずっと、ずっと、彼女が消えてから俺の心には誰もいない。

誰も俺の中に入ってくる者などいなかった。

それで良かったし、それを望んできたのは俺だった。

でも、今は俺は独りでいることが不安なのかもしれない。

信頼していた三大天使に裏切られ、そこをエンシッダに揺さぶられ、きっと情緒不安定なのだ。

もしかしたら、遅い思春期なのかもな。

そう考えると、何故だか笑えた。

だからじゃないけど、ヒロが何故だか恋しかった。

決して変な意味じゃない。

もしかしたら、翼(エヴァ)の感情が残っているのかもしれない。

でも、あんな風に俺に何の隔(へだ)たりもなく、一人の存在として喧嘩を吹っ掛けてくるような彼といれば、なんとなくこの不安がなくなるんじゃないかと思ったのも本当だ。

だからこそ、彼を『――――』にしてしまいたいと思った。

そんなことを考えながらも、今の俺は独り闇に立ち向かうしかない。

さあ、サンタマリアに会いに行く時間だ。

・・・そして、今俺は生体兵器研究所で、想像した通りにこの場にいたサンタマリアと対峙していた。

思いがけず、ヒロがここにいたのは嬉しい誤算だが、あとは概ね考えていた通りにことは進んでいたようだ。

「俺は全てを知っている。サンタマリア。もう、言い逃れはできない。今ならまだ間に合う、もう馬鹿な真似はやめろ。お前がラインディルトの心を読んで告白した通り黒の雷はもう全て捕まったし、何も知らないラインディルトはシェルシドラに秘密裏に確保させている。ここも、すでに多数の天使たちに囲ませてある。」

ただし、俺が指示を出すまで、ここには入ってくるなと言ってある。天空騎士団の出番は、ここからサンタマリアを逃がしてから、黒の雷を捕まえることだけだ。

「どういうことですか?!」

そう声を上げたのは、サンタマリアではなくやたらとでかい男。サンタマリアに食ってかかっているところを見ると、たぶん黒の雷の人間なのだろう。

エンシッダは自分も黒の雷に加担しているくせに、その正体だけは話さなかった。

そういえば、黒の雷といえば、エンシッダは気になることを言っていた。

「いっとくけど、君のその翼を確保してくれたのは黒の雷の皆さん

なの、それを俺が確保してきてあげたんだから感謝してよね？」

そう言って、エンシッダは俺の元に戻った翼を指さした。

てっきりラインディルトがマルーの予言を元に探し当てたかと思っていた翼（エヴァ）であるが、その時、エンシッダが連れてきたのだと初めて知った。

俺のためになるようなことをする男ではないのは分かり切っているので、見つからなかった翼（エヴァ）を何の目的で見つけたのだと、怪しむのは当然の成り行きだと思う。

「いやな顔するなよ、別にそれに対しては悪意はないよ？ただ、あんたの力が万全じゃないと、俺の地位も危ういからね。」

そんなもの誰が信じるものか。

だが、その先の思惑を知る術は俺にはないし、釈然としないままにその話はうやむやになった。

後、翼（エヴァ）の話が出た時、エンシッダはヒロにも興味を示したようだった。

「そういえば、どうしてあの黒の一族を手元に置いておいたの？」

翼（エヴァ）との契約のことを知られれば、嫌がらせのネタにされることは分かっていたので、俺は気のないふりをして、そっけなく言った。

「ああ、サンタマリアが気にしているようだったからな。様子を見ていただけだ。」

「そう。」

エンシッダはそれ以上は何も言ってこなかったが、翼（エヴァ）のこととといい、どうにもエンシッダの言動は気になった。

まあ、今はそんなことを考えている暇もないか。

こちらを隙なく、見つめてきているサンタマリア。
開かない瞳のはずなのに、なんとも強い感情が蠢(うごめ)いているように見える。
分かってるさ。
どうして、君がここにいるかも、君が何をしたいかも。

「では、どいて。」

俺の感情を読み取ったサンタマリアが、平坦な声で俺を威嚇(いかく)する。
邪魔をするなら、俺とてただじゃ済まないということだろう。
だが、だったら俺の気持ちも分かっているだろう?

「それは・・・。」

サンタマリアの表情が揺れる。
彼女とて、分かっているに違いないのだ。
ただ、今は混乱している。戸惑っている。
そこをエンシッダに付け込まれた。
でも、俺は、君に俺を裏切って欲しくない。
そして、それ以上にあの時の俺みたいになって欲しくないんだ。
この想いが、サンタマリアに届くよう強く思った。

第四十六話　嫌がらせの君　其の二（後書き）

どうでしょうか、色々ちゃんと伝わりましたでしょうか？こうして二話前のヒロ視点の話と繋がってますかね。上手く伝わっていなかったら、申し訳ないです。

まあ、こうして舞台は第二部最終章に、ヒロ視点の話に立ち戻ります。後、2話で何とかまとまりそうですので、あと少し、第二部も最後までお付き合いいただければ幸いです。

第四十七話　宣戦布告　其の一

Ｄｒ（ドクター）パルマドールの広い実験室は、息が詰まるような重い空気で満ちていた。
低い天井や、無機質な人工物の壁と床には、よく見れば明らかに血（けっ）痕（こん）らしき赤黒い汚れが飛び散っている。
ここでも、何人ものアーシアンが命を落としている。
いや、あの科学者に言わせれば、新しい存在として生まれ変わったのか。

どちらにしても、この実験室はあの聖櫃（せいひつ）と同じだ。

天使やエンディミアンのために、いわれのない罪を被（かぶ）せられてアーシアンが犠牲になる。
同じアーシアンとして、許しまじきこの悪行が一つでもなくなるように私は、黒の雷（オルヴァラ）はここに来た。
アーシアンたちの、血の涙を流して上げる慟哭（どうこく）を、天使たちが一欠（ひとか）けらでも気がつけばいい。
そんな思いで、私たちは今ここにいるのだ。

第四十七話　宣戦布告　其の一

「どういうことですか、サンタマリア様っ！！」

突如現れたエヴァンシェッドのことを、ちゃんと理解しているか分からないが、エヴァンシェッドの天空騎士団（アイッシュ・グランド）に囲まれているという言葉に、アラシが堪らずに声を上げた。

多分、アラシは状況が全く把握できていない。
それでも、声を上げずには、不安に押しつぶされそうなのだ。
私とてアラシと同じくらい混乱しているが、それでもエンリッヒが与えてくれたヒントのおかげで、エヴァンシェッドの言葉から、この状況の薄ぼんやりとした輪郭(りんかく)くらいは見えていた。
見えてきた状況の最悪さ加減に、思わず舌打ちをしたくなったけどな。

サンタマリアは黒の雷(オルヴァラ)に力を貸してくれた天使。
だが、同時に黒の雷(オルヴァラ)を利用した天使。
彼女は、Ｄｒ(ドクター)パルマドールを殺すためにこの作戦を黒の雷(オルヴァラ)に持ちかけた。
そして、最後は黒の雷(オルヴァラ)を天使に捕らえさせる。

どうして、何のために、こんなまどろっこしい事をするのか、サンタマリアのように心を読める私に分かるはずもない。
ただ一つ確実なのは、サンタマリアが黒の雷(オルヴァラ)に手を貸していたのは、贖罪(しょくざい)の街の人々に同情したわけでも、天使の罪を悔いているからでもない。
ただ、この私の足の下で奇声を発し続けている、こんな最低のエンディミアンを一人殺すためだけに、黒の雷(オルヴァラ)のアーシアンたち全てを利用して、そして使い捨てようというのだ。
こんなの、聖櫃(せいひつ)や、この狂った科学者とやっていることは同じではいかっ！
こみ上げてくるような怒りとも分からない、強い感情で眩暈(めまい)がした。
抑えられない感情で震える私に追い打ちをかけるように、私の肩に手を置いているエヴァンシェッドと会話をしていたサンタマリアがこちらに顔を向けた。

「そうよ、ヒロ。私はその男を殺すために全てを賭けているの。ア

ーシアンなんて、どうでもいいのよ。さあ、その男を渡して頂戴(ちょうだい)。」

魔人(ベルトゥール)の事実、聖櫃(せいひつ)の事実。

それらを聞いた時と、同じくらい強い怒りと憤(いきどお)りと殺意が私を支配し、気がつけば、私はエヴァンシェッドを振り払って、一人サンタマリアに切りかかっていた。

「ヒロっ！」

誰が私の名を呼んだかは、分からない。

だが、名前を呼ばれた瞬間に体に強い衝撃が走る。

ガウンっ！

衝撃の次に、実験室に響く銃声が耳に届き、火薬のにおいが薬品の臭いに交る。

「・・・つっ。」

左足に強い痛みと、焼けるような熱さ。

立っていられずに、私は片膝をついた。

怒りに我を忘れた私の前に立ちはだかったていたのは、サンタマリアにつき従っていることさえも忘れていたリンズ。

彼女が煙が残る銃口を向けて、私を見下ろした。

その瞳は、引き込まれそうな闇。

その闇を見たことがあるような気がして、一瞬だけ怒りすらも忘れてその瞳を見つめると、リンズは再びサンタマリアの後ろに控える。

私も我に返った。

「ヒロ、大丈夫か?!」

アラシが、床に倒れた私に駆け寄る。
痛みに、やっと、周りが見えるようになった私は頭の血が下がるのを感じた。
どうやら、とんだ場違いな行動をしていたらしい。

サンタマリアと、影のように彼女に控えるリンズを中心に、それに対峙するエヴァンシェッド。
二人の間には、決して入り込めないような雰囲気があった。
その足元に、もう私という重しもないのに、立ち上がることもかなわずにジタバタと足掻(あが)いているＤｒ(ドクター)パルマドールの顔は、滑稽なほどに恐怖に歪んでいる。
そして、少し離れた所で戸惑いがちにエヴァンシェッドにだけ視線を向けているハクアリティス。
きっと、久しぶりに会えた夫に近寄りたいが、視線すら向けてくれない夫に声をかけることもできないのだろう。
その横で、ただ静観を決め込んでいるティアは、私に視線を合わせると声には出さずに口だけで「馬鹿ね。」と呟いた。

・・・確かにこの状況は、私はお呼びじゃないな。

見つめあう天使に支配された空気の中、私もそこでやっとこの状況が私たちだけじゃなく、天使たちにとっても尋常(じんじょう)ないことに気がついた。
天使たちが私に目もくれていない以上、今はこの状況を静観するしかないということだ。
だが、ただ静観してても仕方ないだろう。

「なんつー威力のある銃だよ。悪いが、肩を貸してくれ。」
「まじかよ？」
言いながら近寄ってきたアラシに肩を借りるふりをして、私はぼそ

りと周りに聞こえないように呟いた。
「アラシ、逃げるぞ。」
「え？」
「サンタマリアはやっぱり黒だ。彼女が作戦を天使にばらしたから、天空騎士団（アイッシュ・グランド）が待ち構えていたんだ。このままじゃ、私たちも捕まる。」
多分、他のチームはもう捕まっている。
「なっ・・・！」
「黙れ。私を連れていくふりをして、ゆっくり扉側の壁の方へ歩くんだ。」

サンタマリアにはバレているだろうが、それでも、今の彼女の意識はエヴァンシェッドとＤｒ（ドクター）パルマドールに向けられているらしく、視線は一切はずれない。
逃げ出すなら、今がチャンスかもしれない。
サンタマリアを許すことはできないが、それも生きていればの話なのだ。
この怒りも憤（いきどお）りも殺意も、生きていなければ意味がないのだ。
しかし・・・、

「駄目ですよ、ヒロ。貴方には残って頂かないと、どうやら外は天空騎士団（イッシュ・グランド）にに包囲されているらしいから、その傷で出ていったら今度こそ殺されてしまうわ。」

・・・やっぱり、駄目か。
サンタマリアがこちらを見ないまま呟いた言葉に、ちっと舌打ちをした。

「心配しなくても、この男さえ殺せば、すぐに私が天近き城（フェデス・ジグロア）に連れ帰って手当てしてあげるわ。貴方には、天空騎士団（アイッシュ・グランド）に捕まってもら

うわけにはいかないの。」
サンタマリアは、こちらに体さえ向けいないが、こちらが逃げ出そうとすれば今は石のように動かないリンズが再び銃口を向けるのが予測できた。
アラシも同じなのか、私を抱えたまま壁際で固まる。

「そんなこと、俺がさせると思っているのか、サンタマリア。もう、やめるんだ。」
しかし、そんな私たちの動向など気にしようともしないのが、エヴァンシェッド。
どうやら、Ｄｒ（ドクター）パルマドールをめぐって、二人は対立しているようだ。
「・・・まさか、エンシッダが私を裏切っていたなんて、心が読めるからと言って油断していました。でも、ここまで来て後には引けないわ。今なら、黒の雷（オルヴァラ）とラインディルトに罪を着せて、この男を殺せるんです。エヴァンシェッド、お願い。」

ひい。
動物のような、人間のような、高く細い悲鳴が上がる。

「俺が今、どんな気持ちでいるか分かっているだろう。」
肩を抱かれているときは分からなかったが、エヴァンシェッドの美しさは相変わらずで、あの感情の読めない表情も変わらない。
「分かってる。エヴァンシェッドに心配をかけて、悪かったと思ってるわ。でも、貴方だって私の気持ちが分かるでしょ？この男を殺したくて仕方がないのっ！！」

いまいち会話の意味が分からない部分があるが、一方的に熱くなっているサンタマリアと、感情が見えないエヴァンシェッドに、私もアラシもハクアリティスも言いたいことはあるはずなのに、二人の

天使の張りつめた雰囲気になにも言葉を発することができない、

「・・・子供をこの男に殺されたからか？」

子供？

ふいに、先日ここに連れられた時に話をしたエンリッヒの言葉が思い起こされた。

そういえば、エンリッヒがこの男を殺させてあげたい人、すなわちサンタアリアは、大切な人をＤｒ（ドクター）パルマドールに殺されたと言っていた。

「そうよ！この男が作った魔人（ベルトゥール）の暴走。そのせいで、私の、あの人が残したたった一人の宝物が永遠に失われたのよっ！！」

穏やかな印象が残るサンタマリアの上げた叫びは、甲高い、今にも切れてしまいそうな細く、それでいて痛々しかった。

「殺したって、殺したりないのに、尊き血（ビットゥ・ラ）の天使がそれをさせてくれなかった！！魔人（ベルトゥール）も、それを造ったこのエンディミアンも、全てこの世から消えてしまえばいいのよっ！！！」

叫びからは断片的な情報しか分からない。

ただ、見えてくるのはサンタマリアの子供が、魔人（ベルトゥール）によって殺され、彼女はその恨みを晴らすために、今この状況を作り出したということ。

「馬鹿言うなっ！！！」

しかし、そんなサンタマリアの叫び独壇場を壊したのは、思いもよらぬアラシの叫びだった。彼は私を肩に担（かつ）いだまま、こちらを振り向かないサンタマリアに食ってかかった。

「あんた、何言っているんだよ？子供が殺されたから、俺達を騙（だま）して恨みを晴らそうって？」

先ほどの私と似た激情。

だが、私とアラシとではその重みは何倍も違う。

「あんたら天使は、俺達の家族を何人も奪っておきながら、何を言ってるんだよ!!たった子供一人の仇討のために、俺達を、アーシアンを何人犠牲にしようっているんだ!いい加減にしろよっ!」

アラシが震えているのが分かった。

天使に力を借りてまで、仲間のためにこんな所まで来たのに、その理由が天使の子供一人のため。

やりきれないのは、私も同じだ。

少なくとも、こんな思いをするために戦うことを決めたわけじゃない。

・・・本当に、私を、アーシアンを何だと思っているんだろうな、天使ってやつは。

だが、サンタマリアは無情に言い放つ。

「何よ、アーシアンなんて、生きていても、いつか私たちのために死んでいく存在。でも、あの子は違うの!輝かしい未来も、永久の命もあったのに!・・・それを下らない魔人(ベルトゥール)のために!!」

憎悪むき出しの激昂(げっこう)、サンタマリアの翼から緑の光が迸(ほとばし)り、言葉に言い返そうとした私たちの体を押し返した。

「サンタマリア。」

しかし、サンタマリアの暴走を止めたのは、エヴァンシェッドの一声だった。

「それ以上は、思っていても言うんじゃない。お前はハクアリティスの最期の言葉を忘れたのか?」

緑の光が萎(しぼ)むように小さくなり、代わりに身に覚えのあるエヴァンシェッドと対立した時のあの空気が実験室に垂れこめた。

「・・・・あ。」

サンタマリアが力の抜けたような、悪い夢から覚めたような虚ろな表情になる。
それはサンタマリアだけではない、他の一同も皆がエヴァンシェッドに吸い寄せられるように、あの美しく歪んだ異形の天使を見る。

ただ、私だけが一人痛みに顔をゆがませ、今のエヴァンシェッドの言葉を反芻していた。
『ハクアリティスの最後の言葉』？
そのハクアリティスを見てみるが、エヴァンシェッドの力にわなわなと震えているだけだし、また天使二人も彼女の名を出した割には、彼女には一瞥も視線をよこさない。

それどころか、辛そうに微笑むエヴァンシェッドと私の方が目があった。
「？」
その表情の意味が分からなくて、思わずその問いが口に出そうになった。

しかし、それはできなかった。

何故なら、突然の爆音と揺れが私たちを襲ったのだ。

第四十七話　宣戦布告　其の一（後書き）

エンリッヒの言葉とか、私も昔のことすぎて忘れてしいそうでした（笑）（第一部、第十七話『汝、隣人に殺意を与えたもう。』にあります。）

サンタマリアの子供の話とかは、本編ではヒロやエヴァンシェッド視点では触れる余裕もないので、第二部終了後、閑話として補完しようかと思っております。（予定です）

第四十八話　宣戦布告　其の二（前書き）

【警告】

この話には、流血表現が一部ありますので、そう言った表現に嫌悪感を抱かれる方などはご注意ください。

第四十八話　宣戦布告　其の二

大きな振動の後、断続的に大きな音が遠くから聞こえてくる。
天空騎士団（アイッシュ・グランド）との交戦が始まったのであろうか？

「やっと、始まったわね。」

だが、私だけじゃない天使たちも訝（いぶか）しげな中、小さな呟きが聞こえて、私はその声に振り向いた。
そこには、それまで一言も口を開くことのなかったティアの姿。
どうやら、彼女はエヴァンシェッドの力に屈していないようで、放心状態や、私のように辛そうにしている人々を尻目に、平然とした顔をしている。
そんな彼女は私と目があうと、口元に人差し指をあてた。
「？」
そうかと思いきや、一瞬で消えるティアの姿。

「ぎゃあぁっ・・・・・。」

苦しげな叫びと呻（うめ）きが一緒になったような聞き苦しい悲鳴が聞こえた。
「？！」
まさかと、嫌な予感がして悲鳴の方を見ると、そこには長い剣で胸を貫かれて床に縫（ぬ）い付けられたＤｒ（ドクター）パルマドールがあった。
その瞳は恐怖を映したまま閉じられることなく固まり、顔は涙や鼻水でぐしゃぐしゃなまま彼は、ぴくりとも動かなくなり絶命していた。

サンタマリアがふらふらと死体に近づくと、糸が切れた人形のよう

に、その死体になった男を前に膝をついた。

「あ・・・ああ・・・あああああっ！」

盲目の瞳から涙は出ない。

だが、膝をつき、高い悲鳴を上げる彼女の姿は、私には泣いているようしか見えなかった。

第四十八話　まずは、宣戦布告といきましょう。

左足は、まだ焼けるように痛い。（銃弾は貫通しているし、急所ということもないので、重症とは言い難いだろうが、痛いものは痛い）

だが、混乱する一方の現状は、そんな私の痛みすらも吹っ飛ばす勢いだった。

「・・・ティア？」

エヴァンシェッドの支配下にあったはずの、アラシも思わぬ展開にぽつりと言葉を漏らした。

「き・・・キヤァッ！！！」

床に流れ出る鮮血に、ハクアリティスが悲鳴を上げた。

飛び散る赤黒い血痕が、Ｄｒパルマドールの血に覆い隠されてゆく。

「・・・・。」

放心状態のままのサンタマリアは、その血が手につき、断末魔の叫

びをあげたまま瞳を見開いて死んだＤｒパルマドールを前にして、彼女を支えていたリンズをふらふらとしながらも振り払うと、Ｄｒパルマドールを刺したままのティアの服を掴んだ。
その手は、血に汚れ、小刻みに震えている。

「・・・どうして？」
声も細く、頼りなく震えていた。
そんなサンタマリアを、ティアの血のように赤い瞳が射抜く。
「サンタマリア様？あなたがぐずぐずしているから、いけないんですよ？せっかく、殺させてあげるチャンスを上げたのに。」
笑うでも、怒るでもない冷静な表情の中に、一抹の狂気の色が光って見えるのは、あの赤い瞳のせいだろうか。
サンタマリアは、焦点の合わない表情でそれを見上げる。
エヴァンシェッドとの会話以降、どうも彼女の様子が可笑しい。

「でも、悪いけどこの外道を殺す資格は天使なんかにないのよ。多くのアーシアンの命の上に立つ天使に、そんなものあると思うの？」
淡々と言葉を紡ぎながら、Ｄｒパルマドールから剣を引き抜いて、サンタマリアの頬に当てる。
平凡なくせに、どこか雰囲気のある天使の青白い顔に、べっとりと赤い血がついた。
背後にいたリンズが、すばやく銃口をティアに向ける。

「動かないで。大切な主が死ぬわよ？」

だが、動じることのないティアは、そう言ってリンズと、そして後ろにいるエヴァンシェッドをも牽制した。
サンタマリアを人質に取られては、両者も手も足も出ないようだ。
「何が望みだ？」
サンタマリアに剣を突き付けるティアに、エヴァンシェッドが低く

言った。
その声に、彼の支配力が強くなるのを感じた。
あの力でティアに言うことを聞かせようということだろうが、先ほどの様子からティアがエヴァンシェッドの力に影響されているようには思えない。
私やアラシ、ハクアリティスはその力に圧迫され苦しんでいるが、やっぱりティアは顔色一つ変えない。
あれが、単に意地を張っているだけだとしたら、大したものである。
（・・・こっちとら、立っているのも、やっとだというのに）

「望み・・・ね。まあ、心配しなくても、それは今から分かるわよ。」

どういう意味だ？と問い直すより先に、爆音と衝撃が再び襲う。
先ほどより、確実に近い。
「・・・っ何だ？！」
怪我で足の踏ん張りがきかない上に、肩を借りているアラシがエヴァンシェッドの力でへろへろになっているため、体勢を保てない私はドンと壁に背中を預けずにはいられなかった。
その瞬間に、少しだけ天使たちとティアから視線が外れる。
すぐに視線を戻した私だが、そこにいた人物が異常に増えているのに気がつく。
実験室のど真ん中に、十人弱の人が忽然（こつぜん）と現われていたのだ。
「！？」
幻覚か、はたまたついに頭でも可笑しくなったのではないかと自分を疑った。（いい加減、疲れているのかもしれない）

「やあ、こんばんわ。皆さん。」

若い男の声。

楽しそうといわれれば、そうだし、何の感情もないといわれれば、そう感じられる。
何とも個性のない声。
これも幻聴かと思った瞬間。

「エンシッダァ！」

その声に烈火のごとく反応したのが、エヴァンシェッド。

・・・どうやら、幻覚でも幻聴でもないらしい。
それにしても、いつも人形みたいに表情を変えないイメージのあるエヴァンシェッドが、こんな風に感情を剥き出しにするとは意外である。
そして、それに反応するように私たちを苦しめていた彼の力が、無数の刃が体を貫くような痛みが走ったかと思った瞬間霧散した。
エヴァンシェッドの感情の乱れが、力に呼応しているのだ。

・・・こんなに取り乱すなんて、あの男は一体何者なんだ？

外見は好青年風の人間だ。
白い装束に身を包み、なんともさわやかな印象を受ける。
だが、それを嘘くさいと感じるのは、私が捻くれているだけなのだろうか。
それに、気になるのは彼を取り囲むように立っている数人の男女。
皆、一様に灰色の服を着ており、その胸には十字架の中に、小さな十字架が重なっている様な刺繍が白い糸で縫い付けられている。
あの紋章も何処かで見たことがあるような気がしたが、思い出せずに私は頭を軽く振った。
それよりも、『エンシッダ』といえば黒の雷の仲間のはずだ。
ハクアリティスが、エンディミアンの長だと言っていた。

・・・助けが来たということなのだろうか？

「怒るなよ、エヴァンシェッド。ああ、サンタマリア様も良い姿だね。ティア、アラシ、それにヒロ・・・だよね？御苦労さま。ああ、ヒロは怪我までしてるじゃないの。後で手当てしないとね。」

そう言って、嫌ににこやかに、それでいてどうにも表情のないように見える彼が手を上げると、彼を囲んでいた男の一人が私を助け起こした。

アラシとハクアリティスも、未だ茫然としているところを支えられる。

ティアもサンタマリアから剣を外し、苦痛に歪む私の顔を面白そうに見た。

「？」

なんだよ？

「あれ、エンシッダ様。ヒロを殺すとか言ってたのに、やめたんですか？」

殺す？

この男が私を殺そうとした、相手？

「うん。状況が変わった。彼は手元に置いておくことにしたよ。だって、アーシアンのために戦ってくれるんでしょ？それに何度か殺そうとしたけど、全部それを退けてるんだもん。大した悪運だよ。俺も逆にその悪運にあやかろうかと思ってね。」

何度もって、どういう意味だよ？

言っている意味が分からない。
展開の速さについていけない私は声が出ない。（こんなんばっかだな、私は）
そんな私と正反対なのが、エヴァンシェッドだ。
「何を考えているっ！？」
威嚇するように大声を上げ、エンシッダを睨みつけ、詰め寄る。
サンタマリアは剣が外されても動こうとしないし、リンズはその彼女を庇うように抱きしめている。
二人は、もはや戦力外だ。
一対大勢。
どうみても、エヴァンシェッドに不利な状況としか言いようがない。

「何って？」
「また、お前の嫌がらせか？！たちの悪い冗談はよせっ！」
美しい人というのは、怒っても美しいままだ。
「嫌がらせ？・・・ううん。違う。これは反逆さ。」
そんなエヴァンシェッドを刺激するような、声と表情。
エヴァンシェッドはそれに露骨に反応しているが、やっぱり私にはどうにも芝居がかっているように感じられる。
そんなエンシッダ演出の芝居のようなやり取りを、延々と見せられるのではないかと思われた。
だが、エンシッダが僅かに体をずらした先に、白いドレスと、白いベールに顔を覆われた女性が佇んでいる女性によって、事局はまた急転する。

「・・・白き神、どうして？」

・・・神？

それは私が思っていたよりも小さくて、全然神々しくもなくて、彼

女を神だと自覚しても何の衝撃も感じなかった。
神々しいという言葉や、衝撃という意味じゃ、エヴァンシェッドとの出会いの方が余程、大きかったし、彼と対しているときの方が緊張した。
こんな何のオーラも纏(まと)っていないような女性が、本当に最後の神なのか？

「そういうことだから、はい。この手を放してね。」
言って、神の名を呟いて固まってしまったエヴァンシェッドの手を自分から外す。
「全く彼女を奪取(だっしゅ)するために、邪魔な神と契約(ファギュラド)せし天使を、全員天近き城(デス・ジグロア)から引き離すためとはいえ、この作戦は些か(いささ)派手過ぎたよね。でも、こうでもしないと神を天使たちから奪うことはできなかったからね。」
言葉に疑問が頭をすごいスピードで駆け巡る。

今のはどういう意味なのだ？

私は私に問いかける。
私がここにいるのは、アーシアンのためだ。
Ｄｒ(ドクター)パルマドールを殺して、サンタマリアの復讐をするためでもなく。
白き神を奪うためでもなく。

なのに、どうしてどいつも、こいつも！

何にが本当で、何が嘘なのか、本当に分からなくなってきて、支えられたまま私は頭を押さえた。
しかし、私を置いてエンシッダの一人芝居のような独壇場はまだまだ続く。

「さて、こうして白き神を手に入れた所で、俺達は天使と敵対を宣言するよ、エヴァンシェッド。」
そう言って、エンシッダは白き神のベールをそっとなでた。
「馬鹿なっ！！」
確かに天使に宣戦布告するなど、馬鹿だとしか言いようがない。
だが、思わずその言葉を信じてしまいそうになる。
彼の言葉には、そんな力がある。

「馬鹿じゃないさ。その宣戦布告のために、わざわざ俺はここに来たんだよ？」
エヴァンシェッドの瞳が、驚愕以外の何物も映していないのが分かった。
その美しさはそのままだが、精彩が欠けて、焦燥が色濃く見えた。
あれでは、エンシッダの思うがままだ。
力さえ使えば、エヴァンシェッドに勝機があるはずなのに、我を失った彼は力を使うことすら忘れている。

・・・らしくない。

エヴァンシェッドという人物を深く知る訳じゃなし、よけいなお世話だろうが、エヴァンシェッドらしくないと思った。
「大丈夫か？」
私を担いだ男が、私に声をかけてきた。
「・・・ああ」
相槌を打ちながらも、私の視線は何故だかエヴァンシェッドから外れなかった。

「ともかく、今回の作戦に参加しているアーシアンをはじめ、贖罪の街のアーシアン、断罪の牢獄の囚人、全てを解放してもらうよ。
そのために、俺は軍隊を用意した。聞こえるだろ？その軍隊が今、

天使たちと戦っている。」
この音と振動は、やはり天使とアーシアンたちの戦っているのか。
「軍隊だと？人間が天使にかなうはずがない！」
エヴァンシェッドの言っていることは、至極当然といえる。（私だって、そう思う）

だが、エンシッダは涼しい顔だ。
「大丈夫だよ。君も世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）で見たんだろ？」
その言葉に、エヴァンシェッドの肩が震えた。
「ほら、この少年に見覚えあるでしょ？」
エンシッダの足元から一人の年端もいかない少年が出てくる。
その少年を見て、眼を見開くエヴァンシェッド。

この少年は何者なのだろう？

そう思った私に対してではないだろうが、エンシッダは説明を加えてくれる。
「尊き血の天使たち（ビットゥ・ラ）には魔人（ベルトゥール）と説明しておいたけど、厳密にいえば彼らは魔人（ベルトゥール）じゃないんだ。天使により近い、いや天使以上の存在なんだ。」
「ま・・さか・・・。」
エヴァンシェッドの声が嗄（か）れて、だらんと腕が下がる。

確かに魔人（ベルトゥール）には見えない。
私が見た魔人（ベルトゥール）は、継ぎはぎのだらけの人間になりそこないのような、眼を覆いたくなるような姿をしていた。
この少年は、どこからどう見ても人間にしか見えない。
それに、天使に近い、天使以上の存在とは、どういう意味なのだろう？

だが、それにはエンシッダも説明は加えてくれない。
「ま、そういうことで。宣戦布告はこれくらいにしないと、これ以上いじめるとエヴァンシェッドも壊れちゃうよね？」
白き神を盾にとっているような状況のエンシッダは、余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）にもう、声を張り上げる元気もないエヴァンシェッドに背中を向けた。
「さあ、行くよ。」
エンシッダはそういうと、手をかざし何もなかった空間に一つの扉を出現させた。
『はい。』
魔人（ベルトゥール）ではない、天使に近い人々が声を揃えて返事をし、エンシッダに従うように扉に向かって歩き出す。
私も男に支えられたまま、扉に向かう。

ギギギギ・・・。

音を伴って開く扉の向こうは、光り輝いていて見えない。
だが、この状況では扉の向こうに行かない訳にもいかないのだろう。
とりあえず。
何より、エンシッダ。
この男が何を考えているか、知りたいと思っていた私が彼に付いていかないはずもない。

彼はエヴァを知り、私を殺そうとし、何より天使に本当の意味で喧嘩を売ったのだ。（私みたいなちんけな喧嘩じゃない）

私は状況がどうなっているか、自分がこの先どうのるのかも分からない。
それでも、この戦いが何なのか、この先戦いはどうなるのか、それを知りたい欲求には勝てないのだ。
最後にちらりと後ろを振り返る。

何となく天使たちの様子が気になったのだ。

・・・振り向いて固まった。

サンタマリアとリンズはいい。
放心したままのサンタマリアと、それを支えるリンズ。
二人はもうこちらに視線すら向けていない。
ただ、私を動けなくさせたのは、美しくも歪んだ深い紫の瞳。
その瞳が私だけを見ていた。

「ひ・・・ろ。」

声は爆音が近くで響く実験室内で、私には届かない。
でも、彼の口の動きが私の名を呼び、そして、彼は私に手を伸ばす。

・・・見なければ良かった。

何故だか、分からない。
ただ、見た瞬間に焼きついたその姿が、きっと忘れられないと思った。
もう会うことはなくて、会ったとしても敵同士でしかないのに、こんな気持ちを残してどうなる?

私にとって、彼はただエヴァの戻る場所というだけの接点。
エヴァさえいなければ、会うことも、こうして視線が合うこともなかったはずだ。
なのに、どうしてそんな切なげな瞳で私を見る?
彼の瞳に、初めて出会った時のエヴァの瞳がダブるのだ。
瞬間、私は自分が喧嘩を売ったことなど忘れて、彼に手を伸ばしそうになった。

しかし、その手は、扉をくぐり、光に包みこまれたためにエヴァンシェッドに届くことはなかった。

第二部　血塗られた楽園編　完

第四十八話　宣戦布告　其の二（後書き）

やっと、第二部完結までこぎつけれました！こんな拙い作品を通して読んで頂いている奇特な方がいらっしゃるなら、本当にありがたいばかりです。
大分長い話になりつつあるわりには、一向に本題に入らないこの話も、第二部のだらだらと動きのない部分の我慢を経て、やっとこさ大きな流れに向かいつつあります。
すなわち、天使と人間の戦いです。
ただ、大きな山場はそこにあるんですが、まだまだ片付けないといけない謎が多く残る話ではあるので、まだ長く続く予感がいたします。もしこんな話ですが気に入っていただいている方がいらっしゃるなら気長にお付き合いいただけると幸いです。

今後ですが、とりあえず第二部は完結しましたが、サンタマリアの補完話と第二部のあらすじ等を次にアップするつもりです。それで次なんですが、第三部を更新していくか、久しく更新していない番外編『異邦の少年　亡国の遺産』を重点的に更新するか迷っている次第です。第三部は更新するつもりなんですが、番外編も並行すると、すこしペースが落ちると思います。どっちでもいいかなと思っているんですが、どっちがいいですかねぇ？もし、こんな後書きまで目を通してくださる方々の中で、こっちを先になんて要望があったら、言っていただくと優柔不断な私は助かります（笑）もし、よろしければ感想と合わせて、そういった要望等もあれば、是非ご一報くださいませ。
では、長くなりましたが、最後にこの話を読んで頂いている皆様には感謝ばかりです。ありがとうございました。

閑話　静かに壊れゆくもの

僕には、厳しくて、怖くて、それでいて変わり者の祖母がいる。
僕の祖母の名は、サンタマリア。
三大天使が一人、深海の天使のサンタマリア。

閑話　静かに壊れゆくもの

祖母は生まれた時から目が見えず、でも他人の心を覗(のぞ)き見ることができるらしく、僕は昔から祖母には嘘をつけた試しがない。
悪いことをした時は、いつも母親以上にきついお仕置きが待っていたものだ。

そんな祖母が無条件に甘くなる人物が、母親の兄で、僕の伯父にあたるハイン。
祖母は、伯父を溺愛(できあい)していた。
おかげで、俺の母親はたくさん子供を持つまでになったのに、伯父はまだ結婚すらしていなかった。
祖母が伯父を手放そうとしなかったのだ。
でも、伯父の方も「まったく、お袋にはまいるわ。」とか言いながら満更でもなさそうだったから、まあお互い様なのかもしれない。

同時に祖母は人間を愛した。
人間を蔑視(べっし)する風潮のある天使において、それはあまりに異端(いたん)だった。
理由は知らない。

ただ、祖母は人間を生贄のように扱う贖罪の街の廃止を天使たちに訴え、エンディミアンやアーシアンなど人間を近くに置いて重用した。

天使たちに白い目で見られること、酷い罵りを受けることもあったが、長たる万象の天使が表立って咎めることがなかったから、何か処分が下ることもなかった。

おかげで、僕をはじめとする祖母の家族たちは一様に人間を嫌うということがなく、人間と接することに躊躇することもなかった。

そんな僕ら家族が許せない存在が、先の贖罪の街と、もうひとつ魔人。

人間を使ってつくる異形のモンスターである。

祖母は激しく嫌悪を示し、廃止を天使たちに求めたが、白き議会で承認されることはなかった。

その様子は傍から見ていても常軌を逸しているように見え、僕には単に人間に肩入れしているだけとは思えなかった。

しかし、魔人研究はそんな祖母の思いとは裏腹に進み続け、祖母の悩みは募るばかりであった。

「お袋、最近笑わんようになったと思わんか？」

伯父と僕は、同じ天空騎士団に所属していたので、よく話すことがあった。

大人しく、引っ込み思案な僕に対して、伯父は誰に対しても明るく、親しみやすい人だったので伯父が話しかけることが多かったが、僕は伯父と話すことが嫌いじゃなかった。

その日も、いつものように明るい笑顔で何気なく伯父が話しかけてきた。

僕もその通りだと思ったので、伯父の言葉に僕は素直に頷いた。

「やっぱり、そう思うか？わいもそう思うんよ。お袋のあないな顔

は見とうないのぉ。」

「でも、魔人（ベルトゥール）のことは仕方がないよ。白き議会（イピシデュア・カルヴァ）で決まったことは絶対だし。」

心配なのは僕とて同じだけれど、これぱっかりはどうしようもない。

そういうと、そうやなあと、伯父は曖昧（あいまい）に笑う。

何でも白黒はっきりつけないと気が済まないような性格の伯父にしては、らしくない笑い方だと思った。

その笑い方が気になった僕は、何かあったのかと彼に問うた。

「いーや。何でもないわ。ただ、ちょっと・・・な。」

やっぱり、そんな言葉を濁（にご）すような言い方をする。

気になったのは確かだけど、これ以上突っ込んで聞くこともできず、去っていく背中を見送ることしか僕にはできなかった。

・・・そして、それが伯父の姿をみた最後となる。

伯父は、その夜非番であるはずだったが、天空騎士団（アイッシュ・グランド）の団員の一人と交代して夜の見回りを買って出ていたらしい。

その夜の見回りをしている時、生体兵器研究所から脱走したという魔人（ベルトゥール）が暴走を起こし、伯父に襲いかかったというのだ。

でも、伯父は強い。

魔人（ベルトゥール）なんて、伯父の敵ではないはずだったのに、最悪の偶然が続くのだ。

伯父が戦っている所に、偶々騒ぎを不思議に思ったエンディミアンが現れたのだ。

暴走した魔人（ベルトゥール）は、戦いと血だけを求める狂戦士（バーサーカー）と化す。

魔人（ベルトゥール）は無防備なエンディミアンに狙いをつけ、そして伯父はそれを庇（かば）って凶行の刃に倒れたという。

以上が、伯父と一緒に見回りとしていた天空騎士団（アイッシュ・グランド）の団員の話だ。

そして、伯父は死んだ。

魔人（ベルトゥール）にやられた伯父は、正直目を覆いたくなるような姿で死んでいた。

その姿を見て、誰があの笑顔の似合う伯父とこの死体を同一人物だと思うのだろう。

その思いが一番強かったのが、祖母だった。

だからこそ、伯父の死を最も受け入れ難かった祖母が、返ってきた伯父の亡骸（なきがら）を見て拒絶反応を示すのは当然だったのかもしれない。

「違うわっ！これはあの子じゃ、私のハインじゃない！！返して、私の子供を、あの人の子を返してぇっっ！！！」

いつも冷静で、穏やかな笑みをたたえている祖母の、狂ったような慟哭（どうこく）は聞いていて辛かった。

結局、祖母は伯父の葬儀の間、ずっとそんな様子だった。

僕は祖母を取り押さえる役割を与えられ、そんな祖母にやるせなさに胸が押し潰れそうだった。

そして、それから祖母は壊れ始めた。

まず、リンズ以外、誰も近寄らせなくなった。

ぶつぶつと始終何事か呟き、リンズ以外が近寄ると叫びをあげて暴れ出す。

僕ら孫はもちろん、母親や、母親の妹も心配して祖母に話しかけるのだが、彼女たちでも駄目だった。

祖母が、このまま狂ってしまうのではないか。

祖母を愛していた僕らだったが、何もできず、僕らは祖母を心配するしかなかった。

それから、どれくらい月日がたっただろうか。
僕はある日、突然リンズに呼び出された。

「サンタマリア様がお呼びです。」

喜びよりも、驚きが先だった。
ずっと天近き城（フェデス・ジグロア）の自室にこもり続けて、誰も近づけようとしなかった祖母が僕を呼んでいる？
しかし、断る理由もなく、僕はリンズに連れられるまま祖母の元に急いだ。

部屋は閉め切られていたはずの、カーテンと窓が開け放たれ、明るい日の光と爽やかな風が通り抜けていた。
その日の光の中で、伯父が死ぬ前と変わらぬ姿で立っている祖母がいた。

「・・・おばあさま？」

やはり何日も部屋に閉じこもり、食事もまともに取らなかったので、やつれている様子は否めないが、それでも僕が名を呼ぶと開かない瞳で、口元だけでほほ笑むあの独特の笑顔が僕の心を安心させた。
「心配をかけたわ。もう、大丈夫よ。」
「よかった、おばあ様！すぐに母や兄弟を呼んできます！！皆、本当に心配していたんですよ？」
涙が出そうなほどに嬉しかった。
すぐに皆に教えてやらなければと、僕は取って返そうとした。
しかし、それをリンズが扉の前に立ちはだかって遮（さえぎ）った。

「リンズ？」

しかし、普段無口な彼女が僕に答えることはなく、代わりに背後の祖母が口を開く。
「今はまだいいの。今日は貴方に頼みがあって、ここに呼んだのだから、まずは座って話を聞きなさい。」
「・・・？はい。」
僕は祖母をエスコートして、部屋の椅子に向かい合わせに座った。
すぐにリンズが、祖母の背後に立つ。
祖母が部屋に閉じこもって、重用していた人間たちはリンズ以外全てが解雇された。
彼らが悪いという訳じゃないが、伯父の死に関わったのは人間たちばかりだった。
きっと、祖母も人間を近くに置いておきたくなかったのかもしれない。
そんな風に、軽く考えていた。

だが・・・。
「まず、もう二度と人間と関わるのはやめなさい。」
祖母は開口一番にそう告げた。
「あの子は人間のために死んだ。私はもう人間に家族を殺させたくないの。」
これが、あの人間を愛していた祖母の言うことなのだろうか？
僕は耳を疑った。
「もとはといえば、人間などを擁護（ようご）した私がいけなかったのよ。そうでしょ？」
「あ・・・はい。」
その表情には鬼気迫るものがあった。
気がつけば、僕は頷かされていた。

「ああ、やはり貴方なら分かってくれると思ったわ。ハインに一番よく似た貴方なら。」

その言葉を聞いた瞬間にぞくりと、悪寒が這い上がった。
確かに僕は、両親には似ず、珍しく伯父によく似た容姿をしていた。
伯父と甥よりも、兄弟だとよく間違われたものだ。
だが、伯父を溺愛する祖母は、いつも僕など伯父の足元にも及ばないと、似ていると囃し立てる周囲を一蹴していた。
なのに、今目の前にいる祖母は何と言った？

「ああ、貴方を見ているとハインが戻ってきたような気がするの。ねえ、あの子と同じように喋ってくれない？」
祖母は笑った。
その時、僕は知った。

祖母は元に戻ったわけじゃない、まだ、静かに壊れ続けているのだ。

祖母が異常に愛した伯父と人間。
祖母の心中を僕が図り知ることなどできはしないけれど、人間によって殺されたも同然の伯父、伯父を殺したも同然な人間。
この最悪の取り合わせによって起きた、最悪の事態が祖母の心にどれほどの傷を負わせたのか想像するに難しくない。

「それでね？私、あの子に似た貴方と復讐をしようと思っているの。」
僕を見ながら、伯父を見つめる祖母はうっとりと言葉を紡ぐ。
厳しい祖母のこんな甘い声を、僕は聞いたことがない。
こんなに優しげな微笑みを向けられているのに、恐怖しか湧いてこない。

そして、祖母は僕のこんな臆病な心を見ているはずなのに、僕に何の言葉をかけてはくれない。

「手伝ってくれるわね、エンリッヒ？」

その日、引っ込み思案で口数の少ない僕もまた死んだ。

それから、何年かという月日が流れた。

「まあ、命を助けてもらった、お礼ってことにしといてください。」

伯父に似た僕は、未だ祖母の言いつけどおり伯父と同じしゃべり方をして、祖母のために伯父の復讐を手伝っていた。

でも、僕は突如現れた黒の一族・ヒロを足止めしておくように言われているにも関わらず、彼を生体兵器研究所に行かせ、尚且つ、彼に壊れた祖母の復讐劇のヒントを教えた。

どうしてかは、分からない。

ただ、あれ以来リンズ以外の人間を毛嫌いするようになった祖母が、あれほどに執着するヒロならば、もしかしたら壊れゆく祖母を助けてくれるのではないかと思ったのかもしれない。

馬鹿だよな。

何も知らないヒロが、そんなことできるわけがないと分かっているはずなのに。
僕は唯、もう逃げ出したかったのかもしれない。
祖母のために伯父のできそこない見たいな芝居を続け、復讐などと誰も喜びもしないことをし続けることから解放されたかったのかもしれない。

走りゆくヒロの背中を見送りながら、ふいに伯父の背中が彼に重なる。

もし、伯父がいきていたら、祖母は今も壊れないままだったのだろうか？
そして、復讐を遂げた祖母は、これからどうするのだろうか？
祖母は元に戻るのか？
それとも、壊れ続けるままなのか？

・・・僕は、ただ元の天使が好きで、人間が好きで、皆を愛していた祖母に戻ってほしかっただけなのに、僕は結局、何もできなかった。

ヒロにやられた傷を引きずり、冷たい街の建物に凭れ掛りながら、ギュッと瞳をつぶった。
そして・・・・

ドォ・・・・ン。

大きな爆音と、次の瞬間に揺れる大地。
「？！」

思わぬ出来事に、眼を見張る。
確か生体兵器研究所以外は、黒の雷（オルヴァラ）を捕えるために天空騎士団（アイッシュ・グランド）が彼らを待ち構えて、今頃全部が捕えられているはずだ。
それにもかかわらず、見上げた天使（カイラーク）の喜びの街から上がる炎と遠くから聞こえる悲鳴。

それが、どんどん白き神（イア・ルマンヌ）の御許全体にそれが広がるのに、大して時間はかからなかった。

僕はそれを、伯父が死んだ時と同じように何もできずに見つめ続けた。
・・・それしか、できなかったのだ。

閑話　静かに壊れゆくもの（後書き）

サンタマリアの話をと思いつつ、気がついたらエンリッヒの身の上話みたいになってしましました。
この二人が祖母と孫という設定につきましては、初めから決まっていました。（驚きました？）ちなみに、第十八話『天使の棲家』でエンリッヒが『ばあさま』、すなわちサンタマリアのことを語っている場面があります。これは過去のサンタマリアのことを話しています。（ほかにも、二人の関係を匂わせている部分がいくつかあるんですが、分かりますかね？）
正直、本編では語る必要もない設定部分ではあるので、まあ、こんな事情があったのね。くらいに思っていただけると嬉しいです。

今後ですが、一応方針を決定しました。（決めるの早いですかね？こういうのさっさと決めないと、先に進めないタイプです。）これから、本編と番外編を交互に更新していくことにしました。そんなこと、お気になさらない方もいらっしゃるかと思いますが、一応ここに報告しときます。（ちなみに次が番外編、その次は『第二部のあらすじ』を更新する予定です。）

■　第二部　あらすじ・登場人物・用語（前書き）

注意

第二部の内容を含みますので、本編を読まれてからの閲覧をお勧めします。

■　第二部　あらすじ・登場人物・用語

【第二部　血塗られた楽園編　あらすじ】

エヴァが、片翼の天使であり、天使一族の長たる万象の天使・エヴァンシェッドの翼に戻り、世界から消え、そして、黒の一族だと名乗る男に重症を負わされたヒロは、心身ともに深い傷を負った。そんなヒロを看病したのが、リリアナという名の女性天使。

彼女はヒロの看病をエヴァンシェッドに頼まれたと話し、ヒロはそれに疑問を覚える。

そんなヒロの元に慌てて転がり込んだは天空騎士団（アイッシュ・グランド）の天使エンリッヒ。彼はヒロに重症を負わせた黒の一族が牢屋の中で殺されたことを告げる。

（第二十五～二十六話）

エンリッヒがヒロを心配したのは、三大天使の一人サンタマリアの命令があったからであるのだが、その話をしていた時に丁度エヴァンシェッドが登場。

彼はエンリッヒを不思議な力で魅了してサンタマリアがヒロを欲している話を聞き出す。

一方、ヒロがどうして自分を助けたのだという問いには何も答えない。ヒロはエヴァンシェッドに不気味な力を感じとる。

（第二十七話）

不浄の大地（ディス・エンガッド）に帰りたいというヒロを、エヴァンシェッドは天近き城（フェデス・ジグロア）内の自宮に半ば軟禁。

一か月ほど時間がたった頃、ヒロは不穏な噂（ヒロがエヴァンシェッドの男の愛人だという噂）にブチ切れて、愛人といちゃいちゃしていたエヴァンシェッドに殴りこみ、エヴァンシェッドの力に屈す

ることなく、彼に喧嘩を売ると、そのまま天近き城（フェデス・ジグロア）から逃走する。
しかし、その際に道も何もわからないヒロは、高層都市である白き神の御許（ルマンヌ）の最高層部分である・天近き城層（フェデス・ジグロア）から落下してしまう。
（第二十八～三十話）

一方、ヒロに逃げられたエヴァンシェッドは、何者かがヒロを殺そうとしている影を感じ取り、またサンタマリアからはヒロが天近き城層（フェデス・ジグロア）から落ち、且、落ちた先が偶然昨晩火事があった場所だったらしいという事から、彼は死んだのではないかという推測を聞かされて意気消沈（いきしょうちん）する。
しかし、翼（エヴァ）との契約の指輪が効力を失っていないことから、ヒロが生きていることを確信する。
（第三十一話）

エヴァンシェッドがヒロを探しに行こうとした矢先、エヴァンシェッドは元天使一族の貴族、尊き血（ビットゥ・ラ）の天使の議会である世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）に召喚される。
世界の円卓はエヴァンシェッドに魔人（ベルトゥール）の軍事的利用を迫る。
（第三十二話）

魔人（ベルトゥール）の軍事利用を良しとしないエヴァンシェッドは、世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）の追撃をかわし、三大天使たちとの話し合いを急ぐが、そんな彼を尊き血（ビットゥ・ラ）の天使の一人であるケインが引き止める。
彼はエヴァンシェッドに天使の中に天使の領域（フィリアラディアス）にテロを仕掛ける黒の雷（ルヴァラ）に力を貸す裏切り者がおり、自分はその人物を知っていると話す。
そして、三大天使との話合いは白き議会（イピシデュア・カルヴァ）（天使一族の総意を決める議会）で魔人（ベルトゥール）の軍事利用を却下させるために力を尽くすということで話がつく。
（第三十三～三十四話）

天近き城層（フェデス・ジグロア）から燃え盛る火事の現場に落ちたヒロであるが、実はその火事は黒の雷（オルヴァラ）の強襲によるものであり、ヒロは彼らに捕縛（ほばく）されていた。

牢屋に捕らわれたヒロを三人の客人が訪れる。

一人目のアラシは、ヒロに黒の武器（カシュケルノ）の使い方を聞いた。彼は黒の一族だった。

二人目のハクアリティスは、ヒロを「男の愛人」だと罵（ののし）った。（誤解は解けたが）そして、三人目の女はヒロを殺そうと襲いかかり、失敗に終わるものの、ヒロに黒の雷（オルヴァラ）が天使たちを襲う作戦があることを告げて去る。

（第三十五～三十八話）

黒の武器（カシュケルノ）を使うためには、大切な人の命を捧げなくてはならない。

アラシにそう告げていたヒロの元に、アラシは自分はそんな力はいらないときっぱりと言い切り、代わりにヒロの力を貸してくれと願いでる。ヒロはそれを受け入れる。

そして、謎の女が言っていた天使の領域（フィリアラディアス）を強襲する作戦に参加するヒロ。

その作戦の中で彼は自分の前に立ちはだかる天空騎士団（アイッシュ・グランド）のエンリッヒと再会する。

（第三十九～四十話）

ヒロをこれ以上先には進ませないというエンリッヒ。

しかし、贖罪（しょくざい）の街の事実を知っているヒロはそれに断固として応じない。

贖罪（しょくざい）の街とは、アラシ達黒の雷（オルヴァラ）のアーシアンたちが住まう街であり、天使たちに囚われ続け天使の領域（フィリアラディアス）の豊かさを保つために、聖櫃（せいひつ）と呼ばれる箱の中で、命を奪うための牢獄だったのだ。

アラシの嘆きにも似たその告白を聞いたヒロは、それまでやる気半

分で彼らに力を貸そうとしていたが、アーシアンのために本気になって戦うことを約束するのであった。
そして、その約束を胸にヒロはエンリッヒを打ち破る。
（第四十一～四十三話）

しかし、黒の雷（オルヴァラ）の作戦とは、とある天使に持ちかけられたもので、生体兵器研究所を強襲してＤＲ（ドクター）パルマドールを殺すことと引き換えに贖罪（しょくざい）の街に住まうアーシアンたちの解放を約束したものであった。
そのためヒロをはじめ、アラシなど主力は生体兵器研究所に向かっていたのだが、エンリッヒなどの妨害にあいヒロは一人遅れて研究所にたどりつく。
しかし、そこには倒れたアーシアンたちの姿と、ヒロを殺そうとした女性・ティアの姿があった。
彼女の案内により、Ｄｒ（ドクター）パルマドールに実験されそうになっていたアラシとハクアリティスを助けるヒロ。
しかし、その場所に黒の雷（オルヴァラ）に力を貸していたという三大天使・サンタマリアとリンズが現れる。
そして、万象の天使・エヴァンシェッドが登場する。
（第四十四話）

一方、数日前、エヴァンシェッドは天使を裏切っていたのが、三大天使・サンタマリアであることをエンディミアンの長・エンシッダから聞いていた。
エンシッダは、エヴァンシェッドに嫌がらせをするといって、黒の雷（オルヴァラ）を使い彼女がＤｒ（ドクター）パルマドールを殺すのを手伝っているというのだ。
その影に見え隠れする、サンタマリアのＤｒ（ドクター）パルマドールへの憎悪。
エヴァンシェッドはそれに一人で立ち向かおうとする。
そして、それを止めるために、生体科学研究所に現れたのであった。
（第四十五～四十六話）

サンタマリアは自分の子供が殺されたことを恨みに思いＤｒ（ドクター）パルマドールを殺そうとしていたのだが、エヴァンシェッドの言葉により魂が抜けたようになる。
そんな時、爆音と振動が一同を襲ったかと思えば突如、ティアがＤｒ（ドクター）パルマドールを殺害。
そして、エンシッダが姿を現す。
彼は白き神を天使から奪取して、天使たちに宣戦布告をするためにサンタマリアの復讐を利用したのだと高らかに宣言すると、ヒロやアラシ達を伴って天使たちの前から姿を消すのであった。
（第四十七～四十八話）

【登場人物】

・人間（エンディミアン・アーシアン・黒の一族のごった煮）

ヒロ（黒の一族）
黒の剣（ローラレライ）を持つ黒の一族。
強いが気は弱く、いつも流されるように戦っている。しかし、贖罪（しょくざい）の街で天使たちの悪行を知ってからは自発的に戦いに参加している。
主人公にありがちな不幸体質だが、他の主人公と違うのは彼の不幸はいつも報われないということ（笑）
容姿は平凡だが、よく見ると味がある顔をしているらしい。

アラシ（黒の一族）
黒の雷（オルヴァラ）を持つ黒の一族。
黒の武器（カシュケルノ）の力を求めていたが、誰かの命を犠牲にしないと力を得ら

れないと知り、それを拒否する。
レジスタンス黒の雷（オルヴァラ）をまとめるリーダーで、贖罪（しょくざい）の街から仲間を解放するために天使・サンタマリアの思惑に乗るが、それはエンシッダの作戦の一部だった。（アラシはそれについては何も知らなかった）
ヒロとエヴァに熊男と称されるような、眼を見張る大男で毛むくじゃら。

ハクアリティス（エンディミアン）
万象の天使・エヴァンシェッドの妻。
彼から逃げ出すために天使の領域（フィリアラディアス）を逃げ出したかと思われたが、どうやらエヴァンシェッドのことは愛しているらしい。彼の愛を確かめるために黒の雷（オルヴァラ）に捕まっていたが、その言動には矛盾が目立つ。
美人だが、わがままで気性が荒い。
第二部ではあまり活躍の場がなかったが、結局エヴァンシェッドの元に帰れなかった彼女が今後どういった行動に出るかは未知数。

エンシッダ（エンディミアン）
エンディミアンの長。
天使の領域（フィリアラディアス）でも確固たる地位を持っていた人物であるが、黒の雷（オルヴァラ）に力を貸し、この度、サンタマリアの復讐を利用した大規模な作戦を決行。白き神を奪取し、天使たちに宣戦布告をする。
ヒロを殺すことをティアに命じた人物であり、エヴァを天使の元に連れていったり、エヴァンシェッドに嫌がらせをし続けているにも関わらず、エヴァンシェッドが強く出られなかったりと、まだまだ謎が残る人物。
好青年風の容貌をしているが、ヒロはそれを芝居がかっていると称する。

ティア（？）
エンシッダに従う謎の女性。
ヒロを殺そうとしたり、Ｄｒ（ドクター）パルマドールをその手に掛けたりと、
女性にしては攻撃的といっていい。
血のように赤い瞳が印象的。

リンズ（エンディミアン）
サンタマリアに従う人間。
無口で無表情、サンタマリアのためだけに動く。
いつも黒尽くめの服装をしている。

Ｄｒ（ドクター）パルマドール（エンディミアン）
魔人（ベルトゥール）研究をする狂った科学者。
ティアの手によって殺害される。

黒い影（黒の一族）
黒の槍（アルヴァトーレ）を持つ黒の一族。
ヒロを襲い天使に捕まっていたが、何も語らぬままに何者かに殺害
される。
その死については、謎が多く残る。

・天使

エヴァンシェッド（万象の天使）
天使一族の長。
純白の翼をもつ絶世の美男子。その美貌で妻ハクアリティスをはじめとして、たくさんの愛人を虜（とりこ）にしている模様。
かつては平民だったらしいが、天使一族の王国を解体し、今のような白き議会（イビシデュア・カルヴァ）を中心とする民主主義を作り出した。

サンタマリア（明海の天使）
緑の翼をもつ三大天使の一人。
盲目だが、人の心を読むことができる。
かつては人間を愛していたが、数年前、息子・ハインを失って以来、人間を憎み、ずっとＤｒ（ドクター）パルマドールへの復讐を願っていたところを、エンシッダに利用された。
平凡だが、どこか特別な雰囲気を持つ女性。

ラインディルト（大地の天使）
赤い翼をもつ三大天使の一人。
実は解体された王国の王子だったが、今はエヴァンシェッドに忠実な臣下。
魔人研究（ベルトゥール）の監視を命じられていたが、それに失敗し、サンタマリアの策に嵌り、天使を裏切った罪人として疑われるが、彼は無実。
どうやら、エンシッダに弱みを握られているらしいが、それはまだ明らかにされていない。
真面目一徹な性格。

シェルシドラ（蒼穹の天使）
青い翼をもつ三大天使の一人。

金髪、碧眼と神と契約(ファギュラド)せし天使の中では一番軟派で派手な容姿をしている。

エンリッヒ
天空騎士団(アイッシュ・グランド)の第一師団副師団長を務める、青みがかった翼をもつ天使。
実はサンタマリアの孫で、彼女の亡き息子・ハイン（エンリッヒにとっては伯父）によく似ており、彼女を慰めるために、ハインの喋り方を真似、同じような服装をして、サンタマリアの復讐に手を貸している。
本当は引っ込み思案で、口数が少ない暗い性格だが、伯父に自分を似せているためにそれとは正反対の自分を演じている。

ハイン
サンタマリアの実子。
彼女に溺愛(できあい)されたため結婚もできなかった。
ある日、突然魔人(ベルトゥール)の暴走に遭遇し、エンディミアンを守るために死亡。

ケイン
尊き血(ビットゥ・ラ)の天使。
エンシッダに利用され、エヴァンシェッドにラインディルトの目撃証言をつげ口、次期三大天使の座を目論むも、エヴァンシェッドにはあまり相手にはされていない。

テリド公爵

世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）の中心的人物で、王国解体後も、未だに地位に拘る頑固爺。

リリアナ
エヴァンシェッドの自宮にいる唯一のメイド。
隠しているが、エヴァンシェッドの愛人でもある。

・神

白き神　イヌア・ニルヴァーナ
東方の楽園（サフィラ・アイリス）最後の女神。
普段は天近き城（フェデス・ジグロア）の上空に浮かぶ、神の揺りかご（ビシェリス）にいる。

【地名・用語】

・地名

東方の楽園＜サフィラ・アイリス＞
荒地・不浄の大地（ディス・エンガッド）が広がる死の世界。白き神と天使が支配している。

天使の領域＜フィリアラディアス＞

東方の楽園（サフィラ・アイリス）の最後の楽園。
守護天使（ガルバチュア）の白壁に囲まれ、他の侵入を許さない天使たちの世界。しかし、その豊かさは数多くのアーシアンの命の上に成り立っている。

白き神の御許＜イア・ルマンヌ＞
天使の領域内（フィリアラディアス）にある、超高層都市。

天近き城＜フェデス・ジグロア＞
白き神（イア・ルマンヌ）の御許の最上部にある、天使の居城。
万象の天使や三大天使が住まう。

神の揺りかご＜ビシェリス＞
天近き城（フェデス・ジグロア）の上空に浮かぶといわれる、白き神がいる場所。

生体兵器研究所
Ｄｒ（ドクター）パルマドールが館長を務める、魔人研究（ベルトゥール）がされている場所。

喜びの天使の街＜カイラーク＞
白き神（イア・ルマンヌ）の御許の上層部に位置する、天使の中でも高位な天使たちが住まう街。世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）など政治的な場所も多くある。

不浄の大地＜ディス・エンガッド＞
生命が生きるには、ちと厳しい死の荒地。アーシアンが生きること

が許された領域。

懺悔(ざんげ)の街
天使の領域(フィリアラディアス)のすぐそばにある、天使が統治しているアーシアンの街。

贖罪(しょくざい)の街
懺悔(ざんげ)の街とは天使の領域(フィリアラディアス)を挟んだ向かい側にある、＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞
天使の領域＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞フィリアラディアス＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞の豊かさを保つための生贄(いけにえ)であるアーシアンたちを捕えておくための街。
街は魔法の塀で囲まれており、天使たちが警備に当たっている。
街の住人全てがレジスタンス・黒の雷(オルヴァラ)であり、彼らは繋がりのある天使の手引きによりテロ活動をするにあたって、出入りはできていたがアーシアン全てが助かるにはいたっていない。

西方の魔境＜シェストリア＞
世界の果て(レドヴァガンナ)によって、東方の楽園(サフィラ・ファイリス)とは区切られた別世界。

・用語

神と契約せし天使＜ファギュラド＞
万象の天使であるエヴァンシェッドと、三大天使のサンタマリア・ラインディルト・シェルシドラの総称。かつて天使一族の王政を解

体した天使たちの中で中心的な人物であり、白き神の寵愛を受けている天使らしい。

尊き血の天使＜ビットゥ・ラ＞
かつて、天使一族が王政だった時代、貴族として権勢を振るっていた天使の総称。

世界の円卓＜アディス・ジア・ヴァッハ＞
尊き血（ビットゥ・ラ）の天使がつくった天使一族の議会の一つであるが、その権力はさほどあるわけではない。
エヴァンシェッドなどは、呼び出されるたびに小言を言われてうんざりしているらしい。

白き議会＜イピシデュア・カルヴァ＞
天使一族の民政の象徴。
身分も力も関係なく、天使一族であれば誰しもが参加できるという、天使一族の総意を決定する議会。
何人たりともここでの決定を覆（くつがえ）すことはできないとされている。

天空騎士団＜アイッシュグランド＞
天使の武装集団。
第零師団～第五師団まで、大きく六つの師団に分かれており、それぞれ命令系統が違っている。
第零師団は万象の天使・エヴァンシェッド。
第一師団は明海の天使・サンタマリアを主とし、師団長・ジグラッド、副師団長・エンリッヒ。

第二師団は蒼穹の天使・シェルシドラが主と師団長を兼任。副師団長はディアスオーレとマリアーナの二人。
第三師団は大地の天使・ラインディルト。
第四・第五師団は、主に警察みたいに天使の領域（フィリアラディアス）の治安維持を目的としている。

黒の雷＜オルヴァラ＞
贖罪（しょくざい）の街のアーシアンたちが天使に反旗を翻すためにつくったレジスタンスの名称。
その名は、アラシが持つ黒の武器（カシュケルノ）から命名されている。

黒の武器＜カシュケルノ＞
世界に七つある、黒き神ウ・ダイが残した神の力を宿した武器といわれている。
しかし、黒の一族しか使えず、その力を引き出すためには使用者の大切な人の命を差し出さなければならないらしい。
謎が多くある武器。

聖櫃（せいひつ）
贖罪（しょくざい）の街にある石造りの箱。アーシアンたちの命を吸い上げて、天使の領域（フィリアラディアス）にそのエネルギーを送り続けているらしいが、詳しいことはよく分からない。

魔人＜ベルトゥール＞
Ｄｒ（ドクター）パルマドールが、多くの人間を人体実験した末に作り出した人間のなれの果てだが、改良が進んでいるらしい。

しかし、まだまだその存在には謎が残る。

最後に、こんな所まで読んでくれた方だけに、当てにならない第三部予告です（笑）

報われない不幸体質の主人公・ヒロは、天使と人間の戦いに巻きこれた・・・はずだったが、第三部で彼に舞い降りる不幸はーーーーーー『女難』（笑）

「私ね、あの人が好きなの。嫌われていないか心配で。」
ある時は、恋の悩みの相談を受け。

「ちょっと、しっかりしてよね？」
ある時は、背中をつっつかれ。

「触らないでっ！誰もあたしに触るんじゃないわよ！」
ある時は、ヒステリーに直面する。

「さあ、ヒロ。君は誰を選ぶ？」
嫌がらせの君・エンシッダがヒロに用意したヒロインは三人（？）。
男一人に、女三人の愛と憎悪がドロドロに絡み合う物語が、今・・・・・・・

始まるわけもなく（笑）
「何で私が・・・・。」
「私は厄介事請負人じゃないんだが？」
ヒロは、やっぱり報われることもなく、苦労ばかりを背負い続けるのであった（笑）

→でも、いつもより女性率3割増くらいでお送りする予定です。（予定は未定なので、あんまり気にしないでください）

第四十九話　誰がために君は歌う（前書き）

【注意】

この話には、一部流血表現があります。そういった表現に嫌悪感を持たれる方はご注意ください。

第四十九話　誰がために君は歌う

♪そこに、貴方はいるのでしょうか？
私には貴方が見えないのです。

貴方、道に倒れていないでしょうか？
貴方、誰かに傷つけれていないでしょうか？
貴方、未来を見失っていないでしょうか？

ああ、貴方のことを思うだけで心が引き裂かれそう。
私は貴方のことだけを思って、眠りにつきます。
せめて、貴方の夢を見れるように・・・。

闇の中、一つだけのスポットライトに照らされて君は歌う。
君がいつも歌っていたあの歌を、着てみたいといっていた真赤なドレスを身に纏(まと)い、まるでどこかのお姫様のようにキラキラと輝きながら君は歌う。

愛を囁(ささや)くように、
夢を見るように、

私はそのたった一人の観客なりながら、ただただ罪を請うべく君にひれ伏す。
どうか、私が君を二度と殺すことなどないようにと願いながら。

第四十九話　誰がために君は歌う

「どうかしたか、息子?」

父親は私のことを、名前で呼ぶより『息子』と呼ぶことが多かった。
多分、私の名前は幼い頃に死んだ母親が付けたものだから、私の名を呼ぶと母親を思い出すのが辛いのかもしれない。
もう、母親が死んで月日も流れたはずなのに、父親は未だに母親の死を引きずっていた。
それだけ、母親を愛していたのだと思う。

「別に何でもない。」
「・・・その物言いは、子供らしくないのではないか?」
「こんだけ大きな息子を捕まえて、子供らしさを求めるのもどうかと思うがな。」

互いによく似た容姿に、よく似た性格。
年齢の差異(さい)こそあったが、私と父親はまるで鏡に映った姿のようによく似ていた。
母親はそれが嬉しいようだったが、年頃の息子と父親がそんなことで喜ぶわけもなく、でも笑う母親に何も言えずに、父親も私も苦笑するしかなかった。
そんな父親と他愛(たあい)もないことで言い争う。

これは私にとって、とてもとても幸せな記憶。

私が十代の半ば、父親がいて、ここにはいないが彼女に出会って、そしてあの惨劇(さんげき)が起こった、一番幸せで、一番不幸だった時の記憶。
気がつけば、時が止まったように静止している幸せだった父親との記憶の一ページ。
その中に佇(たたず)んでいる二十代になった私がいて、一番幸せで、一番不

幸だった過去の私が、現在の私を見ていた。

「よう、未来の私。」

彼は私に口を開く。

今より幼くて、子供っぽい私。

隣で時間が止まったように固まっている父親の顔は、気がつけば今の私とよく似ている。

それは年月がそうさせたのか、それともあの頃は知らなかった父親の苦労を今の私が知っているからなのか。

「私(おまえ)は彼女を殺す。」

そう言って、気がつけば過去の私は黒の剣(ローラレライ)を手にしていた。

この頃は父親が所持者であった黒の剣(ローラレライ)。

・・・そして、父親が持っていた時は、何の力も持っていなかった何の変哲(へんてつ)もない黒の剣(ローラレライ)。

「黒の剣(ローラレライ)は、先祖代々受け継いできただけの、どこにでもある普通の剣。そう、教えられていたよな?」

ああ、そうだったな。

「例え、大切な人の命をささげれば、強大な力を得られると伝えられていても、それを試してはいけないと言われていたし、お前もそんなの下らない迷信だと思っていたんだろ?」

力なんて興味がなかった。

ただ、不浄の大地(ディス・エンガッド)を旅するのに、自分を守れるだけの力があれば、それだけで十分だった。

過ぎた力は、身を滅ぼすだけだと父親に教えられていた。

だから、黒の剣（ローラレライ）の伝承については知っていたけど、大して気にもとめていなかったし、信じてもいなかった。

「でも、結果としてお前は黒の剣（ローラレライ）を目覚めさせた。彼女の命を使って。」

「っユイア！！」

私は何年振りかに彼女の名を叫んだ。

過去の私の腕の中に、黒の剣（ローラレライ）に貫かれ絶命しているだろう彼女の姿。

何年たっても忘れることができない私の罪を目の前に、どうして叫ばずにいられるだろう。

いつも適当に切るという、揃（そろ）っていない短い髪。

手入れなどされていない日に焼けて、ボロボロな肌。

でも私に見せる切れんばかりの輝きを放っていた笑顔はとても魅力的で、なのにいつもどこか陰りがあった彼女の笑顔。

私は彼女が好きだった。

その笑顔と一緒に、私に聞かせてくれるあの歌声が大好きだった。

「ヒロ。」

茫然（ぼうぜん）と死んだ彼女に見とれていた私を、誰かが呼ぶ。

それに操られるかのように振り返ると、そこには今そこで私に殺されていたはずの彼女、ユイアが私の大好きな笑顔で笑っていた。

「ゆ・・・いあ？」

「なあに？そんな幽霊でも見た顔しちゃって・・・・うわっ。」

私は彼女を抱きしめていた。

この彼女が、いつも見る消えてしまう夢ではないと確かめたかった。

彼女は抱きしめても消えなかった、高めの子供体温も、どこか甘い香りのする彼女の汗の匂いも、痩せて骨ばかりが当たる硬い体も私が覚えている彼女と同じだった。

「ユイアユイアユイアユイア、ユイアっ！！」

私は腹の底から彼女の名前を呼んだ。

もう、涙声だろうが、何だろうがどうでも良かった。

「本当に、どうしたの？ヒロが、私にこんな風に甘えるなんて珍しい。」

ユイアは混乱する私の背中をぽんぽんと叩いてくれた。

エヴァに私がしてやるのと同じ所作だった。

ああ、彼女が私にしてくれたことだったのだと、初めて気がついた。

そんな彼女の優しさに安心して、その私より小さな体に身を任せてしまいそうな心地よさから私は一瞬で覚めることになる。

「・・・それとも、また、私を誰かの身代わりにしているの？」

何の感情感じることのできない声に、私は冷水でもかけられたような心持になり、咄嗟（とっさ）に彼女の肩を掴んで否定の言葉を言おうとした。

「っちが・・・・！！！」

だが、私の腕の中にいたのは、生身の彼女ではなく、冷たくなった骸骨（がいこつ）だった。

驚いて、さっきまで彼女だったそれから私が身を離すと、骸骨（がいこつ）はがしゃりと音を立てて崩れ落ちた。

『そこに、貴方はいるのでしょうか？

私には貴方が見えないのです。』

何が何だか分からない私の耳に、闇の中からどこからともなく歌声が聞こえてきた。

『貴方、道に倒れていないでしょうか?』

心臓がうるさいくらいに音を立て出した。

『貴方、誰かに傷つけれていないでしょうか?』

呼吸が荒くなる。

『貴方、未来を見失っていないでしょうか?』

ごくりと生唾(なまつば)を飲み込む。

『ああ、貴方のことを思うだけで心が引き裂かれそう。
私は貴方のことだけを思って、眠りにつきます。』

ヴァンっ。

私の目の前に、闇の中一筋(ひとすじ)だけ差し込む強い光に目が眩(くら)んだ。
そこに佇(たたず)む人影、たった一つのスポットライトを浴びて、真っ赤なドレスを身に纏(まと)い、美しい歌声を響かせる。

『せめて、貴方の夢を見れるように・・・。』

・・・その胸に深々と黒の剣(ローラレライ)を突きたてて。

良く見れば、スポットライトのあたった彼女の足元には赤黒い血溜(ちだ)

まりができ、真っ赤なドレスだと思っていたその深紅は、黒の剣（ローラレライ）が突きたてられた胸からあふれ出る鮮血の色だった。
吐き気がするほどの血の匂いに、眩暈（めまい）すらした。

そして、彼女は歌を歌い終わると私の方を見た。
血の気の失せた青白い顔に、口から一筋の血が流れ出ている。
それでも彼女は何の穢（けが）れもないままに、あの私の大好きな笑顔を私に向ける。
そして、一層その笑みを深くして、私に呪いの言葉を呟くのだ。

「ヒロ、愛しているわ。」

そして、まるで糸の切れた人形のように彼女は、自分の血の海に倒れ落ちる。
倒れたまま絶命して、生命のない濁った瞳が私を見つめる。
「あ・・・あ・・・あ・・・。」
かつて見た同じ光景が、フラッシュバックする。
そして彼女の死に顔が私の方を見つめながら、血の海に沈んでいく。

歌は彼女が完全に血の海に沈んでも続いている。

どうして、どうして、どうして??
何度、彼女を私の中で殺せば、私は許される?

頭の中で止むことのない歌声が、私の罪を責め立て、私を狂わせていく。

「や・・・、やめろぉぉぉぉっ!!!」

絶叫する私に誰も答えることもなく、美しき歌声に責め続けられな

がら、私は一人闇の中に取り残された。

第四十九話　誰がために君は歌う（後書き）

第三部、開始です。
短めのプロローグなので、全く話は進んでいないのですが、これを見ていただいて分かりますように、第三部はヒロの過去編的な感じです。どうぞ、気長にお付き合いくださいませ。

後、ここで一つ宣伝を（またかい！とは言わないでくださいね）。
本編の番外編『異邦の少年　亡国の遺産』も現在本編と合わせて更新中。こちらは本編と違って、展開も早くて短め（１０話前後の予定）で終わる予定ですので、もし良ければ、本編と併せてご覧頂けたら嬉しいです。

第五十話　掌の上のヒロ　其の一

エンシッダに誘(いざな)われ、光る扉の向こうには私の知らない街が広がっていた。
街の名前は、銀月(ウィンザード・シエラ)の都。
私はこの街が空を飛んでいるということ以外、何も知らない。
しかし街から見える空は信じられないほど青く、高く、吸い込まれそうになるほど澄み切っている。
そんな空を、ただただ眺(なが)めて思うのだ。

ああ、全部夢だったらいいのに・・・と。

第五十話　掌(てのひら)の上のヒロ　其の一

銀月(ウィンザード・シエラ)の都は、その名の通り夜になると、街全体が銀色の月のように冷たい光を放ち、本物の月に似た姿で空を飛ぶ。
それは、街全体を形成する見たこともないような特殊な銀色の鉱物のせいらしいのだが、実際はよく分からない。
また、その特殊な鉱物によってこの街は空を飛ぶことができるらしいということを聞き及んだが、その話も噂半分で信憑性(しんぴょうせい)のほどは確かではない。
まあ、広い世界、私が知らないことなど五万とある。
この街もまた、その一つであるというだけの話なのだ。

街は半球の土台の上に形成されており、上半分は透明なシールドみたいなものに覆われ、綺麗な球状をしているらしい。
らしいというのは、魔法の扉みたいなものを使って、この街に入っ

てから私はエンシッダ達によって、この街の外に出ることを禁じられているため、この街の全体像は掴めていないのだ。
まあ、禁止されているといっても、監禁されているわけでもないから、さしたる不自由を感じてはいない。

さて、話を街の様子に戻そう。
街は先の銀色の鉱物だけで造られていて、緑一つなく、無機質で、鋭く、高く聳え立つような建物しかなく、傍から街並みを眺めるとまるで針山のようになっているのだろうと簡単に想像できる。
そんな冷たく、鋭い街の雰囲気を私は好きになれそうにもなかった。
まあ、まだ街の大きさに反して街の人間が少ないためにそう感じるだけかも知れないが、今の閑散として、静寂が街を支配している感じは、まるでゴーストタウンにでも迷い込んだような錯覚を覚えるのだ。

そして私は今、その銀月の都の街外れにいる。
街の外の景色を見るための場所なのか（外の景色と言っても空をかなりの高さで飛んでいるため、空しか見えないが）、ひらけた場所でベンチや噴水や、オブジェなどがあり公園のような場所だ。
そこからは、迫ってくるような青空と、今はかなりの上空を飛んでいるために眼下に白い雲海が広がっているのが見え、色のない、冷たい街の雰囲気の中、空の青さや、雲の白さだけが私の心を和ませた。
強いて言うなら、更に外の風を感じることでもできれば良かったのだが、空を飛ぶ街の風など感じようものなら、あまりの強風に私など吹っ飛んでしまうだろう。
その風は幸いに、街を覆う透明なシールドによって遮られていた。

しかして、あんな衝撃と混乱の末に天使の領域から出てきたはずの私が、こんなのんびりとモノローグ風に語れているのにはわけがあ

る。

実のところ、この街に来て数日が経つのだが、私はリンズに撃たれた左足の傷を理由に療養を言い渡され、先に言ったようにエンシッダをはじめとする天使に宣戦布告をした人間たちの集まりに（長い集まりの名前だが、私は彼らについては本当に何も知らないのだから仕方ない）、銀月の都（ウィンザード・シエラ）から出ることさえ許されず、何の情報も与えられずにいるのだ。

街の中に部屋も用意され、私の面倒を見てくれる人もいるし、ある程度の自由も許されてはいる。

だが、今の私にできるのは、精々日長一日（ひながいちにち）この場所でベンチに座り過ごしているぐらいでで、いい加減、尻に苔（こけ）でも生えてきそうな気さえしてきた。

そんな流れゆく空を口をあけながら眺めていた私（さぞ、阿呆（あほう）な顔をしていることと思う）の目の前に、やっとこさ、新たなる展開が訪れようとしていた。

「あ、ここにいたの。」

「ティア。」

現れたのは、生体兵器研究所から扉を抜けて銀月の都（ウィンザード・シエラ）に来て以来、姿を見ていなかった彼女である。

「部屋にいないから心配したわよ。傷はもういいの？」

「これくらい、大した傷じゃない。それに、部屋に閉じこもっている方が体に悪いからな。」

「それも、そうか。でも、良かったわね。」

ティアは笑いながら、私の横に座った。

今日の彼女の装い（よそお）は、別れた時と同じ黒いワンピースだが、デザインは若干（じゃっかん）違うように思われる。（女性の服装など、あまり詳しくないので何処が違うといわれると困るのだが）

「お陰様でな。それで、何か用か？」

わざわざ私にあてがわれた部屋にまで行ったのだ。
何か用があったのだろうと思って聞くと、ニヤリとティアが笑う。
女性がするにしては些(いささ)か物騒な笑い方だが、どうしてかティアにはそれがよく似合った。
「んん？傷が大丈夫かな？っていうのと、後はそろそろヒロが煮詰(につ)まっているんじゃないかな？と思ったから。」
「そりゃ、何も分からぬままにこんな場所に放り込まれて、更に人に何を聞いても、知らぬ存ぜぬで通されては煮詰まるのも当然だろ。」

そうなのだ。
あれだけ私を巻き込んでおいて、銀月の都(ウィンザード・シエラ)に来て数日、どいつもこいつも私に何の事情も知らせないどころか、アラシもティアも私の目の前に現れもしなかった。（見舞いくらい来ても、罰(ばち)は当たらないと思う）
更に私の世話をしてくれる人や、周りに多くのアーシアンもいるのだが、誰も本当に知らないのか、知らないふりをしているのか分からないが、私の知りたいことを何一つ教えてくれなかったのだ。
まあ、エンシッダらの集まり（長いので以下略）は、街のどこかに缶詰状態らしく、実際私の近くにいるのは贖罪(しょくざい)の街から解放されてきた非戦闘員の女子供ばかりで、正直、情報を知っているという方が可能性は低いかもしれない。
だがしかし、何も知らされず、何処に行くこともできず、何もすることがない、これほどまでに緊張感のない生活を送っていれば、そりゃあ、誰だって煮詰(につ)まるというものだ。（暴れ出さなかったことを感謝してほしいものである）

私がそういった数日の鬱憤(うっぷん)も込めてティアを睨むと、ティアは口を開けて大笑いする。（女が口を開けて、笑うなよ）
「あははは。そりゃそうよねぇ。ごめんごめん。でも、こっちも

色々バタバタしててさ、やっとこさ落ち着いたから、こうしてヒロの所にきたのよ？」

「バタバタ・・・というと、やはり天使の追手か？街の中にいるだけでは、よく分からなかったが。」

あれだけの大立ち回りをして、万象の天使相手にあれだけの宣戦布告をしたのだ。（自分のことを棚に上げるわけではないが）

更に周りのアーシアンたちの話を聞けば彼らは、贖罪の街のアーシアンや、断罪の牢獄の囚人をはじめとして、天使の領域のエンディミアンや、懺悔の街のアーシアンなどから、天使から解放されて、ここに来たというではないか。（そういえば、生体兵器研究所でエンシッダがその様なことを言ってきたような気がする）

すなわち、私たちは天使の周りにいる人間たちを全てをかっさらってきたという形になるのだ。

聖櫃があの楽園を成り立たせるものであるというならば、天使にとってどれほどの打撃になったか、また、人間相手にここまでやりこまれては天使の面目も丸つぶれというものだろう。

以上のことを考えれば、銀月の都で空を逃げているとはいえ、天使が躍起になって私たちというかエンシッダ達を探し回るかは見当がつくし、追手がかかっても当然というものだ。

にも関わらず、ここ数日毎日静かな空を眺めるだけの生活を私は送れているわけで（好きで送っていたわけではないが）、そんな気配が微塵もなかったのだ。

でも、今のティアの物言いからすれば、やはり天使の追手の一つもあったのだろうかと思ったのだ。

「うーん、まあね。私たちも追手を警戒して、ずっと戦闘配備で身動きが取れなかったのは確かなんだけど、結局ここ数日追手どころか、天使の影すらないのよ。」

「追手がない？」
私もだが、ティアもそれについては不思議そうな顔だ。
「そう。まあ、あの夜天使の領域（フィリアラディアス）を襲撃して、かなりの打撃を与えたのは確かなんだけど、でもだからって、それは決して天使たちの動きを完全に止めるほどのものじゃなかったはずなのよ。」
「エンシッダが言っていた人間の軍隊というやつか。・・・ティアも、その一員なのか？」
私は数日前の、生体兵器研究所での記憶を呼び起した。
エンシッダは黒の雷（オルヴァラ）やアーシアン達を助けるために、天使の力に匹敵するという人間の軍隊を向かわせたと言っていたはずだ。

「良く覚えてるわね。そう、天使に対抗するための人間の軍隊、その名も女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）。でも、私はその一員ではないの。あれには、神の子（マイマール）ではないと入れないから。」
「？」
色々と私が知らない事情が出てきて、？マークを出していると、ティアがいけない、いけないと苦笑する。
「彼らには後で紹介したげるわ。ヒロだって、いまや人間軍の貴重な戦力だもの。」
「・・・その割には、放って置かれたような気がするのだが。」
「もう、いい大人が拗（す）ねないでよっ！」
私は嫌味で言ったつもりなのだが、ティアは大口をあけながら私の背中をバンバンと叩いて、けらけら笑う。（・・・やはり、こういう女性は苦手である）

「まだ、戦力が整わない中で、天使たちの攻撃を受けたら大変だもの。持ち場を離れられなかったのよ。状況説明ができなかったことは悪かったと思うけど、優先順位ってものがあるじゃない？何事も。」
まあ、それは理解できるが。

「では、ティアが此処にいるということは、もう天使たちの脅威は去ったということか？これから、どうするつもりだ？」

これは私だけではない、天使から解放されるためとはいえ、よく分からない街にいきなり連れられて、空を飛んで何処に向かうかもわからない中、何の情報も与えられない銀月の都にいる人間たちが、皆感じている疑問である。

「まさか、そんなわけないでしょ？もはや天使を敵に回した私たちに東方の楽園に安住の地はないわ。」

安住の地はない・・・か。

その言葉を彼女は本当に意味が分かって使っているのだろうか。

私は、その言葉の意味に恐怖に震えあがる心地さえした。

もちろん、天使に敵対を表明したのだ。

天使が支配する世界である東方の楽園で、その天使に仇をなすものに安住の地がないのは当然といえば、当然なのだろう。

天使に刃を向けた時点で、それは当然覚悟して然るべきことなのかもしれない。

だが、それが想像でなく現実のものとなった時、私の様に震えあがるような恐れを感じることもまた、然るべき人間の姿ではなかろうか。

相手は人間にとって絶対的存在であると教えられてきた天使なのだ。

その天使と戦う、戦うと声高に叫んだところで、この先が見えない現実の中で戦いを挑み、自分が、人間がどうなるのか、ここにいる誰しもが、どれほどに虚勢を張ったところで不安を感じているはずだ。

そんなものは感じないと言っているのは、余程の鈍感な人間か、それとも未来を知る術を持っているのもだけに違いない。

ちなみに私はそのどちらでもない。

だからこそ、天使と戦うことに大きな不安や恐怖を感じてることを、私は全く恥じてはいない。

そして、ティアの言葉に恐れすら抱いているとはっきりと言うことができる。（いや、こんなことばかり、断言できても仕方ないが）

私は、この世界に生まれ、この世界に生き、この世界のルールに従ってきた。

そして、この世界の全てを定めてきたのは、天使たちなのだ。

すなわち、天使に反旗を翻すということは、世界にそれをするのと同意義であり、そして、それをすることを決めたのは私だ。

だったら、潔く腹を決めたらどうだという話かもしれないが、だからといって、今まで生きてきたこの世界を否定することに恐怖を抱いて何が悪いというのだ。

先の見えない、今に不安を覚えて何が悪い。

私は、そんな逆切れにも似た思いを隠すことなくティアを見た。

彼女がそんな私の臆病な部分を察したかどうかわからない、だが、ティアは一つ頷くと私を促した。

「場所を移してもいい？ヒロを案内したい場所があるの。そこで、ゆっくりと話しましょう。」

この街での私の行動範囲は、当てがわれた部屋とこの公園くらい。

後は、入るなとエンシッダらに言われてる故、他のアーシアンたちとじっとしていたのだ。

案内してもらえるというのであれば、願ったり叶ったりといったものだ。

「ああ。」

そうして僅かに左足を引きずりながら、先ほどまで見上げていた空に背を向けて私はティアに続いた。

空は怖いくらいに晴れ渡っていたが、私にはその蒼さが何かの憂いすら湛えているように見えていた。

それはきっと、私の心を映しているからかもしれない。

後から、そんなことを思った。

第五十話　掌の上のヒロ　其の一（後書き）

プロローグはあんなにシリアス色満点なのに、どうにも締まりのないヒロですいません。まあ、でもこれがヒロなので（笑）
そして、第三部の舞台が明らかに！第三部は第二部の閉鎖された雰囲気から一変、空中都市を舞台に東方の楽園全体を駆け巡れたら・・・と思っております。ちなみに、この空中都市・銀月の都のイメージは、メタリックで近未来な『天空の城ラ〇ュタ』（笑）（↑私が好きな映画の一つです）

第五十一話　掌の上のヒロ　其の二

私とティアは、銀月の都（ウィンザード・シエラ）の端から中央へと延びる、高いビル群が連なるメインストリートを連れ立って歩いていた。

太陽の光がたくさんのビルを反射して、ちかちかと強い光を放ったり、その光を受けて銀色の鉱物が七色に光ったりと、なかなか煌（きら）びやかだ。

これで、たくさんの人でもいたら、一層賑（にぎ）やかなのだろうが、見える人々はまばらで、みんな天使に追われているという不安からか疲れた表情をしていて、街はひっそりと静まり返っている。

そんな、まるでちぐはぐな街に言葉にできないような違和感を、私は感じていた。

第五十一話　掌（てのひら）の上のヒロ　其の二

「なあ、銀月の都（ウィンザード・シエラ）はお前たちが用意したものなのか？こんなものどうやって造った？」

この空中都市は、私が知らない五万のうちの一つだという認識でいる。（何しろ空を飛ぶ街だの、銀色に光る街だの、私は見たことも聞いたこともない）

だからこそ、こんな現在の人間の文明ではありえない規模の街をどうやって用意したのか、エンディミアンに協力者がいたとしても天使たちの監視下で、こんな大きなものを如何（いか）にして造ったのか非常に気になったのだ。

私としては、元々天使のものだった銀月の都（ウィンザード・シエラ）を奪ってきたという

線も考えていたが、それにしたって天使の領域（フィリアラディアス）に引きこもりの天使たちがこれほどの空中都市を造る理由が思いつかなくて、その推測も確信に足るものにはならなかった。

なので、ここはティアにその真実を聞こうと思ったわけだが、彼女の答えは私の想像を越えたものだった。

「まさか、こんな超科学の塊（かたまり）みたいな街を今の時代の人間に造れると思うの？この街はね、亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟の一つなのよ。」

「ありえない。」

ティアの言葉を私は即座に切って捨てた。

確かに空を飛んでいるというだけではなく、この街の至る所には天使の領域（フィリアラディアス）で見た様な不浄（ディス・エンガッド）の大地では存在しえないような超科学がある。

今の人間たちにこの空中都市を造れというのが不可能だというのは理解できる。

だからこそ、この街がどういうものなのかティアに聞いた。

だが、その答えがこの空中都市が亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟だということには納得はできない。

「だって、こんな完全な形で残っている亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟があるはずがないだろう。終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告の残骸だから、廃墟というんだぞ？廃墟がこんな綺麗な形であるわけがない。」

亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟とは、千年前に東方の楽園（サフィラ・アイリス）が死の荒地に覆（おお）われる前の栄華を誇った人間たちの文明の名残り。

終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告を、辛うじて生き残った過去の遺物なのだ。

私は不浄（ディス・エンガッド）の大地に点在するいくつかの亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟を訪れたことがある。

街の中の建物などは、壊れかけてはいるが見たこともないデザインや、鉱物によって建物が造られており、そこに確かに今のアーシ

アンたちの原始的な文明では到底造れないような技術を見ることもできる。（アーシアンたちはそんな廃墟に居着いてしまい、新しく自分たちの街にしてしまうことも少なくない）

しかし、所詮（しょせん）は残骸であり、抜け殻なのだ。

銀月の都（ウィンザード・シエラ）に見ることができる、超文明と言わざるを得ない空を飛ぶやら、光を放つなんて技術は、少なくとも私が訪れた亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟には微塵も存在せず、全て終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告により消滅させられていた。

それが、普通だと私は思う。

終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告を受けてなお、これほどに完全な、損（そこ）なわれたものが何一つないような銀月（ウィンザード・シエラ）の都がありえないのだ。

だから、私はティアの言葉をすぐに否定した。

「でも、これほどの街を造る技術が今の世界にないことも知っているはずよ。恐らく天使だって、この街を造る技術を有していない。それじゃあ、銀月（ウィンザード・シエラ）の都は、どうしてここに存在しているの？」

ティアは私に答えを求めたが、それが分かっていれば彼女に質問などしない。

私は首を横に振り、それを見たティアが勝ち誇ったように笑う。

「なら、答えは千年前の文明に求めるしかないでしょ？」

その論理は些（いささ）か強引な気もするが、とりあえず私は反論する言葉を持たなかったので黙った。

そんな私の沈黙をどうとったのか知らないが、ティアは更に言葉を続けた。

「それに、この街が何かなんて関係ないじゃない。何であろうと、生きるために、戦うために私たちは利用できるものは何でも利用する。それぐらいじゃないと、この先はやっていけない。そうでしょ？」

ひたりと、ティアの強い赤い視線が私の上に定まる。

「・・・まあ、そうかもしれないな。」

ティアの言葉には、否と言わせまいとする強い意志が感じられ、私はその勢いに押されるように一つ頷いた。

まあ、確かにこの空中都市が何であろうが私には関係ないのかもしれないが、それでも僅かな蟠りが私の中に残ったのは確かだった。

そして、ティアは私が一応納得した様子を見届けると表情を和らげ、

「さ、ここよ。入って。」

そう言って、私を一つの建物の中に促した。

それは、街の中心に位置する銀月の都で一番大きな建物。

高く聳える建物の上部が傘のように広がっておりビル群全体を覆い、太陽の光を透かしながら様々な色に変化している。

どう見ても、この空中都市で一番目立つ場所であるのは確かだが、ここは私をはじめとして非戦闘員たちが入ることを禁止されている区画であった。

「ここは、銀月の都の心臓部、月見の塔よ。ここで、銀月の都の全部を制御しているの。同時に今のところ私をはじめとする武装集団の溜まり場になってるわ。」

そういって、コンコン・・・ココンとティアが銀色の壁を叩くと、人が5人くらい余裕で通れそうなくらいの穴が開く。

扉がないと思ったら、そんな便利な機能が付いていたらしい。

そして、そこを潜った途端に眩い光に目がくらんだ。

それは一瞬のことで、すぐに建物の中を確認することができたが、それにしても室内だというのに、この光の強さは半端ない。

どういうことかと室内を見回してみると、気がつくのは遙かに高い天辺まで吹き抜けになっている建物の天井はガラス張りにでもなっているらしく、太陽の光が差し込み、街の外観と同じようにその

光がチカチカと反射したり、様々な光を放っていたのだ。
こりゃ、眩しいわと思いながら上を見上げて、改めて周囲を確認すると、建物の中は街の外とは違い、人と熱気に溢れており、たくさんの武装した人間たちがざわざわしている。
そんな外からは分からない、思わぬ月見の塔の様子に私は圧倒されティアの後ろにつきながらキョロキョロと落ち着きなく首と目玉を動かした。

「ティアっ！どこに行っていた！？」
しかし、私のそんな挙動不審な行動も、大きく響いたどなり声によって一端中止となる。
声に驚いて振り向くと、そこには、生体兵器研究所でエンシッダを囲んでいた（多分）女神の十字軍の灰色の制服を着た中年というにはまだ若いが、かといって若いとも言い難い男性。
彼が非常にいきりたった様子で、最初はティアを見ていたが、私を見るとさらに目尻を釣り上げた。

何なんだよ？

だが、私のそんな戸惑いは、一切無視される。
「しかも、部外者をこの中に入れるとは、この非常時に命令を忘れたのか？こんな薄汚い男はさっさと・・・うわっ！」
怒った勢いのまま、私を摘み出そうとする男。
私は別に何をしたわけでもないのに、怒られるのは割に合わない（しかも、薄汚いと言われたしな）と、男の私に伸ばされた腕を避けると、反対にその腕を捻り上げた。
「何をするっ！？」
「何って・・・、それはこっちのセリフだろう？別に出てけと言われれば、あんたにつまみ出される前に出ていくさ。私はティアに案内されただけだ。」

そう言って、ぎゃんぎゃんと喚く男を放してやる。
そうして、はたと気が付いてみると、その場にいる人々の目がこちらを向いているではないか。
それは灰色の制服を着ている者もいれば、見たことがあるような姿もある（多分、黒の雷のアーシアンだろう）。
嫌な目立ち方をしている自分に、酷く居心地の悪さを感じた。

「どういうことだ、ティア？！」
しかし、男の方は何も思わないのか、更に大声を出して再びティアにくってかかる。（あんなに怒って、血管でもきれないだろうか？）
それに対して、ティアは動じることなく平然としている。
「彼はヒロ。私とコンビを組む予定の人で、エンシッダ様のご命令でお連れしたの。何か文句があるかしら、ハレ？」
いやいや、私は場所を移すとしか聞いていないが。

ティアの発言に非常に戸惑った私だが、それ以上に衝撃を受けたのは周りの野次馬の人々だったようで、ざわざわと波のように人々の声が広がる。
そして、私を摘み出そうとした男が信じられないといった顔で呟やいた。
「まさか、この薄汚い男がヒノウのかわり・・・なのか？」

ヒノウ？（ていうか、薄汚いって一々しつこい男だな）

「そうよ。」
「こんな弱そうな男が、ヒノウのかわりになるわけがないっ！」

・・・あのさ、本人の目の前で弱いとか言うなよ。

二人のやり取りに置いていかれながら、そんなぼやきを心の中だけで呟いてみるが、とりあえずここは私は黙っておくことにする。

「私はあんな気位だけが高いヒノウより、ヒロの方が強い思ってるわ。ましてや、ヒロはヒノウと同じ黒の武器を持つ黒の一族よ？」

話が進むにつ入れて、こちらに向けられる視線が増えていくのを感じる。

正直、こんな晒しものみたいな状況は、勘弁願いたいのだが、状況は更に私の思いなど知らずに、ヒートアップしていく。

「じゃあ、こいつが黒の剣の所持者か！それでは、こいつのせいでヒノウは死んだのではないかっ！大体、こいつは殺す予定ではなかったのか？そいつがどうして？！！」

私のせいで死んだ？

それに、私と同じ黒の一族。

記憶の棚を色々と開けてみる中で、ふいに頭をよぎる映像。

『恨むんなら黒の掟を忘れた先祖を恨め。』

それは私を殺そうとした黒の一族の言葉。

まさか、二人の話題に上がっている『ヒノウ』とは、天近き城で私を殺そうとした黒の一族のことではないだろうか？

しかし、それは単なる思い付きにすぎず、何の確証があるわけでもない。

そもそも、同じ黒の一族は私を襲った黒の一族とアラシくらいしか知らないのだ。

省略法で行けば、生きているアラシは却下で、残るはあの時の黒の一族ということになるが、だからといって私のせいで彼が死んだという訳じゃないしな。

私は二人の会話をもう少し聞くことにした。

「あなただって聞いてるでしょ？ヒロの抹殺命令は取り消されているわ。」

そりゃそうだ。でなきゃ、私がここに今いられるはずがない。

「それに、ヒノウが死んだのはヒロのせいじゃないわ。天使に捕まって、私たちの情報が彼から漏れることはあってはならない。」

天使に捕まった黒の一族。

やっぱり、あの私を襲った黒の一族のような気がする・・・が、今はそれを聞く雰囲気ではないな。

「そして、そのために、彼は自ら命を絶った。その崇高な行為をそんな風に言って、貶めることは私が許さないわ。」

それまで、いくらかの余裕をもって彼に接していたティアの様子が、ぴんと張り詰めた。

「し・・しかし・・・。」

「ともかく、彼の死にヒロは全くの無関係だし。これからは、ヒロは私たちの仲間なの。わかったら、行かせてくれる？私たちエンシッダ様をお待たせしているのよ。」

言い切るとさっさと歩いていくティア。

どうしたものかと一瞬迷ったが、言葉が出ない男と、たくさんの奇異の目の中に一人置いて行かれるのも、甚だしく居心地が悪い。

私はとりあえずティアを追った。（というか、この場合はそうせざるを得なかった。）

第五十一話　掌の上のヒロ　其の二（後書き）

銀月の都がどういう場所かという補足半分、そして第二部でほっぽとかれた黒の影こと、（やっと名前が出せました）ヒノウの話ですね。（詳しくは第二十四・二十五話参照）

彼のことなど、皆さま忘れ去っているかもしれないですが、しばらく彼に纏わる話が続く予定です。

第五十二話　掌の上のヒロ　其の三

吹き抜けの開放的な場所から、細く長い廊下に入り、足早に歩くティアを追いかけた。
こちらを振り向こうともしない背中は、何処にでもある普通の女性の背中に見える。
しかし、その背中に背負っているものは、もしかしたら私などよりも重く、苦しいものなのかもしれない。

特にそう思ったことに理由はない。
これは、私の野生の勘というやつである。（注・当てにはなりません）

第五十二話　掌（てのひら）の上のヒロ　其の三

「なあ。」
歩きながら私はティアに聞いた。
「なあに？」
ティアは背中を向けたまま、私に応える。
「『ヒノウ』という黒の一族の黒の武器（カシュケルノ）は、もしかしたら槍・・・ではないか？」
もしそうであるならば、7つの黒の武器（カシュケルノ）の内で槍が二つないのであれば、それは間違いなく天近き城（フェデス・ジグロア）で私を襲った黒の一族のはずだ。
確証があるわけではない。
だが、私はティアの背中に聞かずにはいられなかった。

そんな私に、ティアが立ち止まって振り返った。

その瞳に宿る光に、彼女が何を考えているか探る手がかりは何もない。

だが、その瞳は私がたじろぐくらいに強いと感じた。

「そうよ。因(ちな)みにその槍の名前は黒の槍(アルヴァトーレ)というの。ご想像通り、貴方を殺そうとした黒一族。それがヒノウよ。」

私はティアが肯定の意を示したことに、やはりと思う一方で、湧いて出てきた新たな疑問に眉を顰(ひそ)めた。

「なら、どうして嘘を言う？彼は自害じゃない、ころ――――――。」

天近き城(フェデス・ジグロア)で聞いたエンリッヒの話によれば、私を襲った黒の一族は何者かに殺されており、自害をしたわけではなかったはずだ。

更に言えば、その黒の槍(アルヴァトーレ)という名前の黒の武器(カシュケルノ)がなくなっていたという話だし、監視していた天使も殺されたと聞く。

以上の事柄を踏まえれば、エンリッヒがこの事で私に嘘をつく理由もないし、ティアの自害という話より、エンリッヒの殺害されたという話の方が信じるに足る話だと私は思う。

ということは、ティアの話は情報が間違っているか、・・・嘘ということになる。

どちらにしても、ヒノウが死んだということには変わりはないが、先ほどのハレという男はヒノウの関係者のように見えたし、真実を知りたいと思うだろうと、先ほどのヒノウのことを声を荒らげてティアに突っかかっていた様子を思い出しながら考えた。

だからこそ、まずはティアにそのことを話そうとしたのだが、言葉がいい終わる前に私はティアに腕を引っ張られて、廊下から部屋に連れ込まれた。（扉は手で開けなくても、その前に立っただけで自動で開いた）

「お・・・おいっ！」

「今の話、あまり大きな声で言わないでもらえる？」

その声には、こちらを咎(とが)めるような色がある。

「？」

どういうことだよと私が彼女がとっている腕を振り払うと、ティアが僅かに嘆息した。いかにも面倒だと言わんばかりに。

ティアは、私を無視して、まずは入った部屋に誰もいないかどうか確認した。

部屋は物置か何からしく色々な物が積まれており、窓もない、カビ臭く、薄暗い部屋で、どうみても誰かがいるという気配はない。

「・・・他の誰にも言わないでよ？」

別に誰かに言いふらすために聞いた訳じゃないので、私は気軽に頷いた。

それを確認して、ティアが誰もいないはずなのに、心持ち声を顰めるようにして話し始める。

「確かにヒノウは、ヒロが言うように自害じゃないわ。他殺よ。」

やはり、エンリッヒに聞いていた話の方が正しいようだ。

しかも、こうして他殺だと断言する以上、ティアはそれを知らない訳ではなく、知っていて先ほど嘘を言ったということになる。

では、どうしてそんな嘘をついたのかという話になるが、私がそれを聞く前に、ティアの言葉に絶句することとなる。

「いいえ、殺した・・・という方が、言い方としては正しいのかしら？」

私は驚いてティアの顔を見た。

聞き間違いかと思ったが、ティアのこちらを見る硬い表情を見て、聞き間違いなどではないと分かった。

「殺した・・・とは、どういう意味だ？その作戦のために彼の命が失われたという意味か？それとも――――」

「私たちが、彼を殺したってこと。比喩でも、嘘でもないわ。ヒノ

ウが天使たちに余計な情報を話す前に、私たちの手で彼を殺したという意味よ。まあ、手を下したのは私じゃないけど。」

私が言いたいことなど分かっているとも言わんばかりに、ティアが私の言葉を遮って言葉を重ねる。

その何の躊躇いも、後悔もない言葉に私は嫌なものを感じた。

「どうして？彼は仲間だったんだろう？」

確かに天使に捕まって情報が漏れることは問題だろう。

だが、だからといってそんな簡単に殺したなどと言われることに違和感を感じるのは私だけなのか？

しかし、ティアはそんな私の問いに意外そうな顔をした。

「ヒロって、案外お人好しね。ヒノウのことを気にしているみたいだけど、自分のことはいいの？彼は元々貴方を殺そうとしていたじゃない。その彼が私たちの仲間だったのよ？」

そのこちらのことなど全てお見通しのような、茶化すような物言いが、妙に癪に障るが、今はその挑発に乗るわけにはいかなかった。

私はティアに苛立ち始めている自分を押さえこんだ。

「そんなこと、別に今さら驚くことでもないだろう。そもそも、あんただって私を殺そうとしたじゃないか。それについては、黒の武器を天使に渡さないためだと、あんたも、それにヒノウも言っていた。」

その理由も納得はしていない部分もあるが、一応の折り合いは自分の中で付けているのだ（でなきゃ、大人しくここにいるものか）。

「それより、話を逸らすな。ヒノウは仲間だったのだろう？それをそんな簡単に殺すだの言うような奴らに、私は力を貸す気はない。」

今私が聞きたいのは、それなのだ。

「別に簡単じゃないわよ。」

「では、どうして仲間には自害だと嘘を言う？」

何か疚しい部分があるから本当のことを言わないとしか、普通は

考えられない。
そんな大した理由もなく、簡単に仲間を殺したり、仲間に嘘を言うような人間たちに、力を貸すつもりなど毛頭ない。
信用できそうもない相手に、仲間として命は預けられないだろう？
それに、もうすでに私は彼らに殺されかけているのだ。
その辺り、私が敏感になるのも仕方がないというものだろう。（何しろ、私は気が小さいからな）

「ヒロなら、言わなくても分かってくれると思ったけど？」
「茶化すなと言っている。」
ティアは大きく一つため息をつく。
だが、彼女が何と言おうと、このことを有耶無耶（うやむや）にする気はなかった。（もしかしたら、私だって彼と同じ状況になるかもしれないからな）
「もちろん、天使たちに勝つためよ。そのために情報は漏らすわけにはいかないでしょ？でも彼を逃がすなんて、天使たちに捕まっているんだから無理に決まっているわ。だから、殺したの。」
ティアも平然としているように見えるが、興奮しているのか、話しながら身振り手振りがつき、彼女の瞳の赤色が濃くなり、強くなっているように見えた。

「自害だと言ったのだって、殺したといえば、貴方みたいに感情的になる人が出るでしょ？だから、自害ということにしたのよ。そうすれば、彼のためにとか言って頑張る人も出てくるかもしれないじゃない。どうせ、死んだということには変わりないのよ？」
だから、せめて聞こえのいいものを選ぶというのか。真実を曲げてまで・・・。
ティアの言い分は理解できた。
だが、それは私がはいそうですかと、納得がいくものではなかった。

「あんたの力があれば、天使に捕まろうが、牢屋の中だって彼を救うこともできたんじゃないか？現にあんたは私の牢屋まで来たじゃないか。」

本当に彼を殺すしかなかったのだろうか？

仲間だったら、色々な手を使ってでも助けようとするものではないのか？

少なくとも、それがエヴァだったら、私はどんな手を使っても、あいつを助けたいと思うはずだ。

それが、ともにある仲間というものだろう。

少なくとも、無論、天使の悪行に怒りを覚えたということもあるが、それ以上に贖罪（しょくざい）の街の人々をどんな手を使っても守りたいと思うアラシの気持ち、黒の雷（オルヴァラ）の気持ちに打たれて、私はここにいるのだ。

私はここにいる理由を見失いたくはなかった。

「まさか、黒の雷（オルヴァラ）の牢屋とは訳が違うのよ？天近き城（フェデス・ジグロア）なんて天使の結界が張り巡らされているし、貴方の時みたいに瞬間移動の魔法なんて無理に決まっているわ。殺すのだって、わざわざエンシッダ様が自ら危険を冒したくらいだったのよ？私たちだって、できることなら彼を殺したくはなかったわよ。それはエンシッダ様だって同じよ。仕方がないじゃない。」

その言葉を、言葉どおりに受け取れないのは、私が彼女たちを信用していないからだ。

こんな話を聞いた後では、それも一入（ひとしお）というものだ。

だが、躊躇（ためら）いのないティアの言葉に、私がこれ以上何を言っても彼女が私の言い分を理解することはないと思ったし、その逆もまたないと思った。

それに、再び私の前に出てきた『エンシッダ』という名前。

その名前を聞いただけで、何故だかザワリと胸が騒ぐ。

私は一端（いったん）、言葉を閉ざした。

「それにしても、やっぱりヒロがそんなこと言うなんて思ってもみなかったわ。」

それでもどうにも納得いっていないというような顔を隠していない私の顔を見て、ティアは心底不思議そうだった。

私はどういう意味だと、彼女に表情だけで問うた。

それに、やっぱり不思議そうな顔をしてティアが言う。

「だって、仲間の命を簡単に殺すような奴らに力は貸せないというけど、貴方のその黒の武器（カシュケルノ）だって、似たようなものじゃない。」

ドクンっ

心臓が気持ち悪いくらいに大きく鳴る。

臆病（おくびょう）な私は、自分の罪を突き付けられるだけで、未だに心臓が縮むような思いがする。（自分でも自分が嫌になる）

「黒の武器（カシュケルノ）の力を使うためには、それこそ大切な人の命が必要なのでしょう？貴方は、自分の力を、生き残る力を得るために、その人を犠牲にしたのではないの？今回のことも同じよ。天使たちに情報が漏れるということは、私たちにとって死活問題だった。皆が生きるために、彼を犠牲にしたのよ。決して、無駄なことじゃないわ。」

彼女は黒の武器（カシュケルノ）が、所有者の大切な人の命を犠牲にして力を解放することができることを知っているようだ。

なるほど、と思った。

だからティアは私なら分かると言ったのだ。

要は、不浄の大地（ディス・エンガッド）で生き残るため、黒の剣（ローラレライ）の力を得るために彼女

を、大切な人すら殺してしまう私なら、赤の他人のヒノウを殺したという事実など、とるに足りないことだと思うに違いないと彼女は考えていたのだ。

確かに筋が通った論理だと思った。

そう思われても、私は仕方ないとも思う。でも、

「分かっていないな。」

そう思い至って呟いた私の言葉に、ティアがどういう意味よと言わんばかりに、眉を上げた。

「確かに戦いに、生きるのに犠牲はつきものだと思う。」

私だって、多くのものを犠牲にしてきた。

「だが、それと人の命をどう扱うかとは話が違うだろう。人の命は、たった一つだ、そしてどんな命だろうが、それはきっと誰かの大切な人の命だ。少なくとも私は誰かの命を、あんたの様に簡単に切り捨てることなどできない。」

だからこそ、私はここにいる。

誰であろうが、他人だろうが、生きたいと思う人々の命を見捨てることなどできないのだ。

だが、そう言った私の言葉を聞いた途端に、ガラリとティアの様子が変わる。

「貴方、言っていることがめちゃくちゃだって分かっている?貴方は、その命を、しかも大切な人を自分で殺したんでしょっ!?自分が生きるために、自分の力にしたんじゃないっ!なのに、命を簡単に切り捨てることができないっ?じゃあ、どうして殺したのよ?!」

私の耳の鼓膜(こまく)を痛いほどに振るわせる声は、私にイライラしているのか、それとも話の内容に腹を立てているのか、はたまたその両方なのかもしれない。

「大切な人を殺しといて、他人の命の心配なんかしないでよっ!今

更、そんな偽善を振りかざして、貴方に殺された大切な人はどうなるのっ?!・・・はぁっ、はぁ・・・。」

息切れをするまで、感情のままに叫ぶティア。

急に激昂したティアに驚いてはいたが私は妙に落ち着いていた。

それは彼女に言われたことなど私がいつも考えていることだし、加えて、彼女の言葉に私に対しての怒りだけでなく、別の感情も見ることができたから。

それは多分私に対してだけではなく、彼女自身に対しする怒り。

それを見た瞬間、妙に冷静になる自分がいた。

「あんたの言う通りだ。」

ティアが彼女の叫びを肯定する私を見て、はっとしたような顔をした。

「でも、それが人間だろう?」

「え?」

「生きるために誰を殺していても、剣を誰かに向けるときは恐怖が先立つし、誰かが自分の目の前で殺されようとしていれば、どんなに恐怖が先立っていても助けたいと私は思う。人間なんて、そんな矛盾だらけの生き物だ。」

私はそれだけ言って(彼女というよりは、自分に言い聞かせているに近かったかも知れない)、一つ笑うと妙に冷静な私に毒気を抜かれた様な、ぽかんとしているティアの肩を叩いて先を促した。

「そういえば、私はエンシッダ様に呼ばれているんだろ?途中で足止めさせて悪かったな、さあ、行こうか?」

「え・・・、ええ。」

急に態度を変えた私を明らかに怪訝そうな表情で見るティアだが、笑う私にためらいがちに頷いた。

別に態度を変えたわけではないが、ここから先はティアにではな

く、どうやら彼女たちのリーダー格であろうエンシッダ、その人に聞きたいと思ったのだ。

聞きたいことは、山ほどあるのだ。

第五十二話　掌の上のヒロ　其の三（後書き）

ヒロＶＳティア。ヒロは本当にいろいろな人と言い合ってますね。小心者のくせに頑固なのが悪いんですね。多分（笑）（まあ、話している内容は、笑いごとではないんですが）

さて、そこから分かった情報。ヒノウを殺したのは、エンシッダ。（何となくお気づきの方もいらっしゃいましたかね？）第二十五話は実はエンシッダ視点だった訳です。その事実が分かったところで、次はついにエンシッダとヒロの直接対決（？）です。

第五十三話　掌の上のヒロ　其の四

「やあ、ヒロ。」

ティアに案内された部屋に入ると、涼しげな声に迎えられる。

声の主は、生体兵器研究所で見た時と同じように好青年としか見えないエンシッダ。

あの時の私とエンシッダの視線があったのは一瞬だけだった。

でも、こうしてちゃんと顔と顔を突き合わせた時、あの時も感じていた彼の芝居がかったような、わざとらしいような雰囲気が濃くなるのを感じた。

やっぱり、どうにも好きそうになれない。

別に見た目や第一印象で他人を嫌ったりする人間ではないと私は自分のことを思っているのだが、このエンシッダという男はどうにも好きにはなれない、いや、はっきり言って嫌いなタイプだと直感的に思った。

どうしてそんな風にを思うのか、自分でも不思議だったが、嫌いなものは嫌いなのだ。仕方ない。

ただ、彼を嫌う理由が自分の中でも明確にならないのが、どうにも気持ち悪かった。

第五十三話　掌（てのひら）の上のヒロ　其の四

この部屋は月見（ミュージアシェタ）の塔でも上層部にあるらしく、私を迎えるエンシ

ッダの背後にある大きなガラス張りの窓からは、私がさんざん見飽きた青空が見えるだけで、銀月の都（ウィンザード・シエラ）のビル群の頭すら見えていない。

そういえば、ティアと一緒に乗った私たちを上に連れてきてくれた建物内を上下する箱には、かなり長い間乗っていたような気がする。

今まで地べたに這いつくばるような生活しかしたことがなかったが、最近この銀月の都（ウィンザード・シエラ）といい、この間まで世話になっていた天近き城（フェデス・ジグロア）といい高い場所に縁があるらしい。（もう、落ちるのは勘弁して欲しいが）

そんなことを頭の片隅で考えていると、エンシッダが扉の所で立ち止まっている私を部屋の中へ促した。

「とりあえず、椅子にでも腰掛けてよ。まずは、謝らないといけないかな？何も知らせないままに。君のことを放っておいたことを。ティアから聞いたかもしれないけど、状況が状況だし、君も怪我していたからというものあったんだけど、怒っているかな？」

まずは席を勧められながら、先手を打たれるように謝られた。

ティアは、椅子には座らずにエンシッダの後ろに控えるように背後に立つ。

先ほどの会話のことがあるからか、その表情は幾分か硬いように見えた。

私は彼女に一瞬だけ視線をやると、すぐに向かいに腰かけたエンシッダにそれを戻す。

「別に構いません。それにしても、まだ油断できる状況ではなさそうですが、私をここに呼んだ理由は何ですか？」

エンシッダ相手にするに当たり、まずどういう言葉遣いにしたものか迷ったが、ティアが『様』付けしていたのを思い出して、とりあえず無難（ぶなん）に下手に出ることにした。（下手に出られて、嫌がる人間というのも、そうそういないだろうと思ったのだ）

こんな所で、いきがったところで仕方がない。

「そうなんだよ。天使たちがこの銀月の都（ウィンザード・シエラ）のことを気が付いていないはずもないのにね。どうしてか、天使から何のアクションもないのさ。不気味だろ？」

「そうですね。」

そう言われても、外の状況を何も知らない私が分かるはずもないのだが、とりあえず頷いておいた。

「まあ、何をしてくるにしても俺達は戦うしかないんだけどね。それで、戦力的にも俺たちが楽なはずもないし、そろそろ君も正式に俺たちの仲間になってもらおうかと思ってね。その前に、君にはちゃんと話をしたいと思っていたから、ティアに呼んできてもらったんだよ。」

さっきから、言っていることは至極（しごく）まっとうなことで、聞いていても何の違和感も疑問も浮かばない。

私は黒の雷（オルヴァラ）に、人間に力を貸すとアラシに言ったのだから、エンシッダがこう言ってくることは想像できた。

だが、何故だかエンシッダの言葉には、その裏があるんじゃないかと勘ぐってしまう私がいた。だからだろうか、

「君には、これから俺直属の指揮下に入ってもらい、ティアとコンビを組んでもらう予定だ。俺達に協力してくれるんだろ？」

という、エンシッダの至極当然な確定にも等しい問いかけに、

「いいえ。」

出たのは自分でも驚くほど、はっきりした拒否の言葉。

正直、色々相手の腹を探りながら会話を進めていくつもりだったはずなのに、こんなにあっけなく自分の手持ちのカードをエンシッダに見せてしまっては、腹の探り合いもくそもない。

私は視線を天井に向けて、自分の素直というか、馬鹿正直な部分

に自分で呆れた。

だが、正面に戻した視線の先にはティアはその言葉に面をくらったような表情があったが、エンシッダは眉ひとつ動かさず、変わらぬ好青年風の表情のままだ。

まるで、私の答えなど予想していたかのような余裕がそこにはあった。

「どういうことかな？」

その声も、どこか楽しんでいるような気配さえある。

色々考えていた話の持っていきようも、馬鹿な私のせいで全部おじゃんであるが、しかし、見せてしまったカードをなかったことにすることはできない。

私は頭を切り替えると、あれこれ考えるのも面倒になって、この際聞きたいことをさっさと聞くことにした。

「さっき、ティアにあんたがヒノウを殺したと聞いた。」（もう、下手に出た言葉遣いも面倒になった）

そんな、もう半分やけっぱち気味な、でも正にズバリな私の問い。

ティアの表情が険しくなるのが見えた。

「ヒノウって誰？」

だが、返ってきたのはキョトンとして、何を言われているか分からないといったエンシッダの顔。

「・・・。」

一瞬、彼が私をからかっているのかと思い、ティアの方にも視線を移すが、彼女は険しい表情のままだ。

更に沈黙に沈黙で返すエンシッダの表情は、彼の名を本当に分かっていないように見えて、私を困惑させる。

私は少しだけ、頭の中でどうしたものかと思ったが、話も進まないのでエンシッダに言った。

「・・・天近き城（フェデス・ジグロア）で、私を襲った黒の一族のことだ。」

暗に『あんたが襲わせた』と言わんばかりに、皮肉をこめていったつもりだったが、全くそれに気が付いていないのか、無視しているのか、初めて気がついたというようにエンシッダは手を打った。

「ああ！彼か。へえ、ヒノウという名前だったんだ。確かに、俺が口止めのために殺したよ。生憎（あいにく）、たくさんの人間がここには出入りしているからね。全員の名前を覚えるに至らないんだ。名前だけ言われても気が付かなかったよ、ごめん。ごめん。」

エンシッダの言っている言葉は、非常に謙虚で殊勝（しゅしょう）といえようが、聞いているだけで胸糞（むなくそ）が悪くなるのは私だけなのだろうか。

『どうせなら殺したくなかった？』

『エンシッダ様も危険を冒した？』

簡単に肯定された、明るい声。にこやかな表情。

それを目の前に、頭の中で先程のティアとの言葉を思い出して、一層苦々しい気持ちになった。

なら、どうして、その名を覚えていない。それとも、しらばっくれているだけなのか？

どちらにしても、仲間がたくさんいて、全ての名前を覚えられないというのは分かるが、だからといって、戦いの中で命をとした、増してや自分が殺した仲間を覚えていないなんて、神経を疑うとしか言えない。

しかも、私の目の前にあるエンシッダからは、懺悔（ざんげ）も後悔すらも感じられない。

彼を殺して僅（わず）かな時間の経過で、これほど簡単に自分が殺した相手の名前を忘れ、尚且つ明瞭（めいりょう）に彼のことを口にするなど、別にヒノウに特別な感情がある訳ではないが、聞いていて気持ちのいいものではなかった。

「それが？」
だが、エンシッダはそんな私を知ってか知らずか、更に私の神経を逆撫でするように、それがどうしたと聞く。
エンシッダに聞きたいことはヒノウの話だけではなく色々あったはずだが、全部頭の中で消えた。
「あんたたちが、どれだけ人間を救いたいと思っているか知らないが、私はヒノウを、仲間を簡単に殺すような奴らと、共に戦うつもりはない。私にだって譲れない一線というものがある。」
綺麗事を言うつもりはなかったが、だからって自分を偽ってまで戦うことに意味は感じない。
天使たちに虐げられる人間たちを助けたいという気持ちに嘘はないが、だからといって、こんな彼らと一緒に戦えるとは思えなかった。仲間になりたいとも思えない。

「ふーん。」
しかし、はっきりとした拒否の言葉を二度も口にしたはずだが、エンシッダは気のない風で、私をまじまじと見るだけだ。
・・・彼は、大して私の力など欲していない？
エンシッダの様子に、彼が私という存在に大きな意味を持っていない感じがして、それならそれでさっさと出ていくだけだと思い、席を立とうと僅かに体を前のめりにしたが、それはエンシッダの次の言葉で止められる。

「まあ、そう言ったって、君はちゃーんと俺達のために戦うことになる。」

「だから、今の言葉を聞いていなかったのか？」
これだけ拒否の言葉を吐いた私に、戦ってくれと頼むわけでもなく、彼は『戦うことになる』と、まるで未来でも見てきたかのように言った。

その言葉もだが、その言い様が気になった。
「聞いていたよ。でも、君は戦う。だって、そうなるように俺が決めた。あの時、君を生かすって決めた時にね。」
全く成立しない会話。
いい加減、天使たちと接して、上から目線の言葉には慣れているつもりだったが、このエンシッダという男との会話は、なんとも気持ち悪いという感覚を覚えた。
会話をしているのに、意味が分からない、意味が通じていない。
そんな意味のない会話をしたのは、初めてなような気がする。
大体、『決めた』といわれて、この私が『はい』というとでも思っているのだろうか。
「自分のことは自分で決める。あんたに決められることは何一つない。」
「いーや、決まってるの。もう、この話はいいよ。きりがないでしょ？それより、もっと聞きたいことがあるんじゃないの？」
自分で話を振っておいて、この男、どれだけ自分勝手な野郎だ。
私はぎりりと歯ぎしりでもしたい気持ちになった。（実際はしていない）
だが、次のエンシッダの言葉により、私はさらに驚くこととなる。
「例えば、そうだな、万象の天使の翼（エヴァ）のこととか？」
「・・・。」
ふいに思い出したのは、サンタマリアと会話した時に似た違和感。
一言もエンシッダに言っていないエヴァの話。
だが、この男は的確に私が聞きたいと思っていたエヴァの話を持ち出した。
エヴァと私の関係を知っているというならば、まあこの手の話を

持ち出してくるのも納得できるが、それにしても、どうしてエヴァが私と旅していたことを知っていたのか、ということが問題になる。
どちらにしても、このエンシッダという男。
私のファースト・インプレッション通りの嫌な男というのは勿論のこと、ただのエンディミアンという訳でもないらしい。

「何？だんまり？まあ、いいよ、君の聞きたいことは分かっているし。俺が勝手に話してあげるね？」
『分かっている』？
やっぱり、サンタマリア同様にこの男も、人の心を読むことができるのだろうか。
そういう考えに行きついて、そうであれば何をしても無駄なのだが、エンシッダを黙って目つける私。
それを見て、これまでで一番晴れやかに笑って、エンシッダは『分かっている』という私の聞きたいことを話しだす。

「どうして、俺が翼（エヴァ）のことを、そして君のことを知っていたか。そして、どうして君の言いたいことを、そしてこれから君が俺たちのために戦うと決まっているか。それはね、全部、一つの答えに求められるんだよ。」
言い終わると、ぱちんと、芝居がかった仕草でエンシッダが指を鳴らした。
すると、私が入ってきたのとは違う扉から新たなる人物が現れる。
（合図があるまで、扉の外で待っていたのだろうか？そんな所も、芝居みたいだな）

「紹介するよ。予言者、ヴィ・ヴィスターチャ。全部、彼女のお告げによって知ったんだ。分かったんだ。」

第五十三話　掌の上のヒロ　其の四（後書き）

ヒロ、腹の探り合いをするつもりだったらしいですが失敗してます（笑）元々、そういう駆け引きごとに向いている人じゃないので、これは仕方ありません。しかも、相手は嫌がらせの君エンシッダ氏ですから、彼はまだまだヒロ相手に本領発揮してませんが、ヒロはその辺り動物的な嗅覚で察しているのかもしれないです。

第五十四話　掌の上のヒロ　其の五

「紹介するよ。予言者ヴィ・ヴィスターチャ。全部、彼女のお告げによって知ったんだ。翼（エヴァ）のことも、君のことも全部ね。」

エンシッダの芝居かかった演出で私の目の前に現れたのは、見たこともないほどに美しい少女。

だが、その表情はまるでガラス細工で造られた人形のように、繊細で儚（はかな）げで冷たくて微塵（みじん）も動くことのない完全な無表情。

そして、何より頭から被ったマントのためにその全体像は定かではないというのもあるが、これが本当に人間かどうか私は判断に迷うくらい少女には人間が放つ生命力というものが感じられなかった。

本当に呼吸をしているのか、心臓は鼓動しているのか。

そんなありえない考えが頭をよぎる。

彼女にはそれくらい生きているという気配がしなかった。

第五十四話　掌（てのひら）の上のヒロ　其の五

だが、私のそんな馬鹿げた考えと反し、ちゃんと生きている少女ヴィ・ヴィスターチャは部屋の中にしずしずと入ってくる。

エンシッダはその肩を抱いて、彼女を席に座らせてやる。

「ヴィ・ヴィスターチャ。ヴィスって呼んであげてね？」

エンシッダの表情が晴れやかな分、ヴィスの陰鬱（いんうつ）さがより強調されるような気がする。

「この娘が本当に予言者だというのか？」

「怖い顔してるとヴィスに嫌われるよ？」

だが、私のそんな思いすら見通しているようにエンシッダが茶化

す。
「もともと自分が女好きするような顔じゃないことは分かっている。今さらだ。」
「君、こんな軽口までに付き合うなんて、本当にお人よしだね。」
「・・・。」
どう見てもおちょくられているのに気が付き、思わず黙る。（悪かったな。自分でも自覚しているさ）

「ふふ。そんな君だから、翼（エヴァ）は君を楔に選んだんだろうね。」
「・・・楔（くさび）？何の話だ？」
「心配しなくてもヴィスの予言の力は本物だよ。」
さらりと私の直前の問いは無視されて、話が立ち戻る。
「だって、君の言いたいことをはっきりと俺は言い当てただろ？あれは、君がここに来る前にあらかじめ、ヴィスが俺と君の会話を予知していたから分かったるのさ。俺が先に翼（エヴァ）のことを口にしなくても、君はそのことを俺に聞いたろう？それをヴィスは予言して、俺に教えてくれていたんだ。」
エンシッダは私に向かって話しているはずなのに、私には視線を向けずヴィスをべたべたと触り続けている。その様は、まるでセクハラ・ロリコン親父だ。
なのにヴィスはエンシッダがそんな風でも、眉ひとつ動かさずにじっとしている。
「それに、彼女の力があってこそ俺は翼（エヴァ）を見つけることができたんだよ？君も不思議に思っていたんだろう？翼（エヴァ）のことを探していたのであれば、もっと早くに天使側に動きがあってもいいはずだ。なのに、今更になって自分と翼（エヴァ）が離れた時を狙ったかのように、翼（エヴァ）がエヴァンシェッド（エヴァンシェッド）の元に戻ったことを・・・さ。」
私はエヴァが、飛べない翼の天使の翼であることを、エヴァがいつか飛べない翼の天使の元へ還ることを知っていた。

どうして、私がそれを知っていたのかといえば、それは初めて出会った時のエヴァの様子が、私の父親に聞いた不浄の大地にある封印された翼の伝説の翼と同じだったから。

その伝説というのは以下のようなものだ。

昔、とある悪魔が神に寵愛を受ける天使を妬み、その天使の翼の片方をもぎ取った。

その天使からもぎ取られた翼は天使と同じ魔力を秘め、眩しいほどの純白で、美しく見るもの全てを魅了する、すごい力を持っていた。

それを知った悪魔は奪った翼を、天使が再び手にすることがないように、この不浄の大地のどこかに封印してしまったという。

今になって思えば、天使は万象の天使であり、悪魔とは私の先祖である黒の一族ということになるんだろうな。

さて、天使の元に帰りたい翼だが、封印されていては身動きがとれない。

また、翼を失い飛べない翼の天使と呼ばれるようになった天使は、天使故に穢れの象徴である不浄の大地には踏み入ることができない。

だから、翼は封印の場所に足を踏み入れる人間に契約を持ちかけるというのだ。

自分を飛べない翼の天使のもとに返してくれるのなら、お前の願いを何でも一つだけ叶えてやろうと。

とまあ、父親に聞いた伝説というのはこんな感じだったと思う。

封印されていたエヴァとの出会いをここで詳しく思い出すつもりはないが、実際これに近いやり取りが私と翼の間にはあった。

だが、そのやり取りを終えるまでエヴァは確かに翼としての自分を持っていたはずなのに、その後翼は全てを忘れ私のエヴァとなっ

た。

しかし全てを忘れたといっても私の中には、いつかエヴァが自分の元を去ってしまうのではないかという思いがあった。

何故なら、エヴァは私の願いを叶えてくれていたから。（エヴァはその時のやり取りも、そのことも全部忘れてしまっていたが）

しかし、私はエヴァが自分が翼（エヴァ）という自覚を失っていたのをいいことに、あいつを飛べない翼（エヴァンシェッド）の天使の元に還してやろうとはしなかった。

気がつけば、私にとってエヴァは大きな存在となりすぎていたのだ。

しかし、エヴァと出会って3年。

エヴァを探す存在どころかエヴァ自身もそんな素振りすら見せず、私は安心しきっていた。

そんな時、期せずしてエヴァと離れることとなり、そして私は飛べない翼（エヴァンシェッド）の天使に出会い、エヴァはその元に還ったのだ。

今更だと思って何が悪い？

「エヴァと私のことはヴィスの予知能力で知ったとして、どうして私とエヴァが離れるその時まで待った？エヴァを捕えるチャンスなどいくらでもあったはずだ。」

「君が近くにいては翼（エヴァ）は、君の元を離れるのを嫌がり、それが失敗に終わることが分かっていたからだよ。」

まるで見てきたかのような言い方だった。

実際はエヴァを連れていこうとする輩（やから）など、これまで一度もなかったはずなのに。

「ヴィスの能力は万能でね。彼女が見るのは、必ずやってくるたった一つの未来じゃない。未来なんて、その瞬間が来るまでどうなるか分からない流動的で、無限の可能性のある存在だからね。予言を

するとヴィスは、一度でたくさんの未来を見る。その予言する未来が時間的に現在より離れていれば、離れているほどその数は多くなる。そこそ千、万という単位になるほど・・・ね。ヴィスはその中から、俺が欲している未来を選択して、その未来のためにはどうすればいいかを教えてくれるという訳さ。」

未来を選択する?

「すなわち、翼(エヴァ)のことは待っていた訳じゃなくて、たくさんの可能性のある未来の中からから翼(エヴァ)がエヴァンシェッドに戻る一番早い未来のためにすべきことをヴィスに教えてもらい、俺はそれに従っただけという訳だよ。」

私はヴィスの予言なり、予知能力は一つの未来を見ることだと思っていたが、どうやら違うらしい。

ヴィスの能力、それは現在から広がる無限の未来を見ることができる。例え予言したその未来を選択しなくても・・・だ。

そして、その中から自分の欲しい未来だけを選ぶことができる。

まるで夢のように、後悔も失敗もない人生を送れる。それは人間というよりは、神に近い能力といえるのではないだろうか。

人は未来を知らないから失敗を犯(おか)し、その失敗を恐れて行動を起こす前に恐怖をし、その失敗に後悔をする。

でも、過去を変えることはできないから、人はそれでも生きていく。その胸に例え大きな傷を負ったとしても。

それが人間であり、そうでなければこれまでの人生を否定されたようなものだ。

自分で選んだと思っていた未来、でもヴィスという存在を仮定するともしかすると、その選んだと思っていた未来は、誰かが選んだ未来かもしれないということにもなるのではないか?

そこまで考えて、嫌な予感が胸をよぎる。

「じゃあ、エヴァが還ったことはあんたが全部仕組んだことなのか？ハクアリティスと私たちを出会わせたのも、エンリッヒに私たちを襲わせたのも、足跡（エンダー・ケルト）の指輪の誤作動も全部・・・。」

「そう、全て俺が望んだ翼（エヴァ）がエヴァンシェッドの元に還るために用意したシナリオだよ。でも、俺は何一つ手は出していない。そうなるように、駒（こま）を動かしたにすぎないのだから。」

過去を後悔したところで何が変わる訳じゃないことは分かっているつもりだ。

でも、今になってどうしてこんなことが分かる？

ふいによぎるのは、消える瞬間のエヴァの泣き笑いの表情。

エヴァは自分で選んで還ったはずなのに、本当はこの嫌味な男の手のひらで転がされていただけだというのか？

怒りとも悲しみとも後悔とも、グチャグチャして言葉にならない感情が胸の中を支配する。

爆発しそうなそれを押さえるかのように、私はぐっと拳を握りしめエンシッダを睨みつけた。

「・・・どうして、エヴァの封印を私が解くのを待っていた。エヴァを手に入れるのに私が邪魔ならば、その前にエヴァを手に入れればいいだけだ。それほどの予言の能力があればエヴァが封印されている場所など分かっていただろう？」

エヴァと出会ったのは3年くらい前。そんな昔の話ではない。

「それに、エヴァが還れば万象の天使に力が戻るようなことを？」

そう。すっかりエンシッダは敵のような感覚で話をしていたが、この男は天使から人間を守るために立ち上がった男であるはずなのだ。

だが、相当突っ込んだ質問だったはずだが、エンシッダの表情も態度も変わらない。

「やっぱり、そこに気がつくかぁ。」
笑いながらヴィスを抱きしめ、私への言葉のはずなのに何故か彼女の耳元に話しかけるエンシッダ。
「まず、この歌を聞いてくれる？」
歌？と私が聞き返す前に、それまで瞬(まばた)きさえしていないように動かなかったヴィスからか細い歌声が聞こえてくる。

白き光より　堕ちた翼は　黒き寝台で眠る
千の夜　千の朝の果て
其(そ)を　白き光より　引き千切りし
黒の血が　其(そ)を　永き眠りから　目覚めさす
目覚めし翼は　契約という名の楔(くさび)を　身に刺し
白き光に　還るのだ
しかして　翼の永い旅は　終わを告げ
世界の胎動(たいどう)が　全ての始まりを告げる

しかして　世界の胎動(たいどう)は　汚(よご)れた神の　目覚め促(うなが)す
全ての始まりは　破滅(はめつ)の階段を　転がり落つ
翼の帰還
其(そ)は　始りにして終わりを　告げるもの
東方の楽園(サフィラ・アイリス)の　封印を解くもの

しかして　始まりと終わり　再生と破滅を　決めるは
目覚めし翼が　白き力に　刺したる　契約という名の楔(くさび)
世界の全てを　握りし鍵
世界は　楔(くさび)の存在に　全てを　委(ゆだ)ね
楔(くさび)は　全ての　始りにして終わりなるものと　相成(あいな)りなん

「これは、変えられない運命の歌だよ。」
この歌は何だ？と私が聞き返す前に、今度はエンシッダが言葉を

重ねる。
「運命？」
「さっき言ったみたいに、未来はいつ何時どうなるか分からない流動的で、無限の可能性を秘めた存在だよ。でも世の中には、誰にも動かすことのできない運命という名の未来もある。これは、それを示した予言の歌。そして、君はこの歌にある楔（くさび）なんだよ。さっき言ったろ？」
だが、そんなこと言われても私にはその意味が分からない。（正直、歌の内容もよく分からない）
「君、結構バカなのね。」
それが顔に出ていたのか、エンシッダが私を馬鹿にした顔で見る。その横のヴィスの顔も変化はないはずなのに、何だか私を馬鹿にしているように見えるのは多分私の被害妄想だろう。きっと。うん。
「まあ、簡単に言っちゃえば君が翼（エヴァ）の封印を解くことは運命で決まっていたってことだよ。」
どうして、私とエヴァが出会うことなんかが『運命』になるのだろう？
あれは私にとっては、偶然でしかなかったはずだ。
「そして、エヴァンシェッドの力が完全になった時、世界は初めて変動を始める。確かにあいつの力を目覚めさせることは、こっちにとっても大きな痛手と言えるけど、それがなければ俺達は、人間たちは天使や神の束縛から逃がれようとすることさえできない。これは、それを俺達に教えてくれる歌なのさ。」
「じゃあ・・・」
それが嘘か真か分からないが、もっとエンシッダに話を聞こうとした瞬間だった。
「エンシッダ様っ！！大変です！！」

慌てた大声を上げながら、灰色の制服の女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）が飛び込んできたのだ。その様子は尋常（じんじょう）ではない。

「どうしたんだい？」

だが、エンシッダの言葉のテンポは変わらない。淡々としていて、どこか他人事のような、芝居がかったような物言いも。

だが、事態は急転直下の動きを見せることとなる。

「天使ですっ！天使が近くの人間の村を襲っています！！！」

第五十四話　掌の上のヒロ　其の五（後書き）

今回の話は、エンシッダ、ロリコン説？も飛び出して、本当に彼の独壇場といった感じでしたがいかがでしたでしょうか？色々ややこしい設定とかも出してしまい、私の力量不足で分かりにくい部分もあったかと思いますが、話も何となく進んできた感じがしませんかね？そういう雰囲気だけでも察していただけると嬉しいです（笑）

さて、こんな稚拙な話しながら、何人の読者様が読んで頂いているという非常にありがたい環境に恵まれている私ですが、先日ショックなことがありました。

この物語、実は以前から自分で書き溜めていた物語を修正してアップしていたのですが、その書き溜めていた物語を保存しておいたものを、事情があってなくしてしまったんです・・・（涙）（その事情をここで詳しく書くことはしませんが、もちろん不可抗力です）物語の流れやら、設定は別で保存して無事だったので、物語自体が変わるとかはないと思うんですが（実はこの後も結構続く予定なのです）、何もないところからまた文字をおこしていくとなると、絶対に今の更新ペースは不可能だと思います。

なので、とりあえず本編はしばし止めさせて頂いて、番外編も無事だったので、そちらをとりあえず最後まで更新してしまおうと思っております。（あと４話くらい）

まあ、そんなこと気にしてないやという方々が、大半を占めているとは思うのですが、いきなり更新をしなくなって、やめたのかな？と思われるのも悲しいので、ここで一つ長くなりましたがお知らせさせていただきました。こんな所まで、読んで頂いてありがとうございます。

付け足し

物語は流れは決まっているので、全部書き上げてから更新という長いスパンではなく、ある程度物語を復活することができたら順次更新する予定です。なので、更新ペースがゆっくりになるくらいだと思います。（そのペースがどれくらいになるかは、やってみないと分からないのですが。番外編が終わったら、本編も更新を再開できたらとは思っています）

第五十五話　掌の上のヒロ　其の六

天使が人間の村を襲う。

そんな話を、世界中旅していても私は今まで聞いたこともなかった。

そもそも天使たちにとって不浄の大地（ディス・エンガッド）とは、罪に穢（けが）れし踏み入らざる大地。（まあ、実際はそれと違っていたんだが）

天使を見たという人間の話すら聞いたことも、見たこともなかった。

なのに、いきなり天使が人間を襲うなどと考えもしなかった。現状でこの銀月の都（ウィンザード・シエラ）を襲うならともかく。

「贖罪（しょくざい）の街の人間の補充（ほじゅう）かもしれないな。それとも、俺達の燻（いぶ）り出しか、罠か？」

そういうエンシッダに私に対するようなお茶らけた態度や、からかうような様子はない。

でも、彼に対する懐疑心（かいぎしん）で満たされた私には、そんなエンシッダの真剣な様子すら、彼の一人芝居の続きのような気がしてならなかった。

第五十五話　掌（てのひら）の上のヒロ　其の六

エンシッダだけ物知り顔の中、私が彼の問う。

「どういう意味だ？」

「贖罪（しょくざい）の街の人間が消えたということは、天使の領域（フィリアラディアス）の楽園のよう

な姿を保つ存在がないということだからね。とりあえず、その解消のために人間の確保をしているんじゃないかって思ってね。まあ、僕らをおびき寄せるっていう後者の推測も可能性としては高いと思うけど・・・ね。」

そう言うと、エンシッダは私に向って手を振る。

「？」

急の態度にあっけにとられる私に、エンシッダは更に私を驚かせる。

「そういうわけだから、早く天使たちを倒しに言ってくれるかな、ヒロ？まさか、何の罪のない人間が、すぐ近くにいるというのに見捨てたりはしないよね？言っとくけど、確かに俺は天使に対抗できるような軍隊をつくったつもりだけど、それも黒の武器（カシュケルノ）の力には早々敵わないよ。君の力があるとないのとでは戦力に大きな違いがある。」

「・・・。」

私の性格からして、確かにそんなことできるはずがない。

それができるなら、黒の雷（オルヴァラ）に手を貸してすらいないだろう。

だが、それはすなわちエンシッダの思惑通りになるということだ。

「だから言っただろう？君は俺達のために戦うことになるってね。」

苦々しい思いで、私は黒の剣（ローラレライ）を握る手に力を込めた。

「贖罪（しょくざい）の街の人間を解放したって、結局はイタチごっこ。何の解決にもならないんだよ。だからこそ、俺は全ての人間をこの銀月の都（ウィンザード・シエラ）に集め、全ての人間を天使から守り、そして全ての天使を討ち滅ぼして人間たちを解放させる。それが叶わないなら人間は、天使たちに家畜同然に扱われて死んでいくだけの存在として永遠に苦しみ続けることになる。君はそれを許せるのかい？」

許せるはずがない。

そんなことになるくらいなら、ここに集まった人間たちと同様に私も戦う道を選ぶ。
だが・・・

「許せないのなら、君は俺に力を貸すしかない。ヴィスの予言能力があれば、君の力も有効に活用してあげるし、人間の勝利は１００パーセント成功するに決まっているだろ？別に君の力を悪用しようっていうんじゃない。人間の未来のために力を発揮できるんだ。寧ろ感謝して欲しいくらいだよ？」

ヒノウの死、先のほどの謎の予言など、この男を信用できないのも事実だ。
だから、私の中に迷いが残る。（本当にエンシッダさえいなきゃ、喜んで力を貸すだろう。）
でも・・・

「さあ、ティアと村を助けに行ってくれるかい？俺は銀月の都で援護するよ。俺って、君と違って非力だからね。」

今天使たちに襲われているという人間たちは、エンシッダとは何の関係もない、本当に罪のない人間たちだ。
それを見捨てて、この場をさることはできない。
結局、あーだこーだと理屈を並べて見ても、このエンシッダの言うように私には、彼に力を貸す道しか残っていないのだ。
こんな奴の掌の上でいいように動かされているなんて・・・。
私はそんな苛立たしい思いのまま、無言で（口を開けば罵詈雑言でも出てきそうだったから）荒々しく部屋を出ていこうとしたが、その前に聞きた事を思い出して、最後にもう一度エンシッダを振り返った。
「最後に二、三聞いてもいいか？」

「もちろん、でも時間もないし手短にね。」
「あんた、この人間の村が襲われることも、もしかしたら予め知ってたんじゃないのか？」
疑問形で聞いたが、ヴィスの能力をもってすれば知っていて当然だと思った。
そして、私が出ていこうとするタイミングで、今までなかった天使たちの急激な動き。
それが、私を引き留めるために用意されたような事象に私には思えた。
こんなことを考えるのは自意識過剰かもしれない。それは、すなわち私を引き留めるために村の人間たちを人質にしたということだ。
そんな下らないことをするくらいなら、その村人たちを助ける努力を、人間の未来を憂えているなら普通するだろう？
なのに、どうしてそれをせずに、村人たちは襲われている？
そういう疑惑を込めて、エンシッダを睨みつけた。
だが、エンシッダは相変わらず飄々と落ち着いたものだ。
「知らないよ。言ったろ、ヴィスの能力も万能じゃないのさ。」
エンシッダから出たのは否定の言葉だったが、瞬間に私はそれが嘘だと思った。
根拠はない。
だが、私の本能がそう囁くのだ。
それに、こんな時だけヴィスの能力が万能じゃないというのが、そもそも空々しい。
だが、エンシッダを追い詰める武器がない今の私は切り返すこともできず、もう一つの疑問を促すしかできない。
「最後にもう一つ。お前は私を殺そうとしていたな。だが、さっきの予言の詩を聞けば私が、楔が生きるのは運命とやらで決まってい

たんじゃないのか？なのに、どうして私を殺そうとした？」
詩の内容を全て理解した訳じゃないが、世界がどうのこうのするのに楔というフレーズが何かしらの影響を及ぼすようなことを歌っていたように思う。
それは、世界が変わる時には楔はその場に存在しているということではないのか？そして、少なくとも世界が変わった瞬間というほど大げさな事件は、まだ起こっていないように思う。
まあ、私が楔かどうかという議論はとりあえず置いておいて、彼は私を楔だと思っているのだ。
世界を変えたいというならば私を殺そうとするのは、やはり矛盾を感じるし、運命に従えば私が少なくとも世界を変える瞬間までは死なないことは決まっているということになるのだ。

「ふふ。そうだなぁ。君はどうしてだと思う？」
「分からないから聞いている。時間がない。言葉をはぐらかさないでもらおうか？」
今度は私がそういって皮肉を言ってやると、エンシッダは見た中では一番晴れやかな顔で私に向ってほほ笑んだ。

「うーん、強いて言うなら、運命に逆らってみたかった・・・ってところかな？」

エンシッダはそれだけ言うと、もう答えてやらないよと言わんばかりに私に背中を向けると、ヴィスを連れて隣の部屋に行ってしまった。
それを追うことは叶わず、結局、何も分からないままティアに連れられて私は部屋を出る。
ここにきて、いくつか解決した問題もある。
だが、もろもろは分からないまま更に混乱をしただけのような気がした。

そして、私の胸を支配するのはエンシッダという名の不気味な男。
そこが知れない上に、ヴィスという予言の能力者を要する彼が何を考えているのか、全く見えなことが嫌だった。
正直、今は彼の言うとおり天使たちから人間を守り、戦うことしか私にはできなさそうだが、それしかできない自分が、それすらエンシッダの掌（てのひら）の上にいるということが私の不機嫌さに拍車をかける。
まあ、戦いの際に苛つくことは、命を落とす隙（すき）になりかねないから気持ちを落ちつけようとは思うが、それにしても・・・・。

「結局、エンシッダ様の口車に乗っちゃったわね。情けない。」
一人の世界に入って色々ぐるぐると考え込んでいると、いつの間にか月見の塔（ミュージアシエタ）を箱に乗って降りる最中だった。
そして、今のは出し抜けにそれまで沈黙を守っていたティアの言葉。
その声には、なんとなく私を非難するような色が含まれている気がした。
「何だよ、私が力を貸したら邪魔か？」
「そう言う訳じゃないわよ。確かに貴方がどれだけ強いか知らないけど、天使相手に猫の手だって借りたいわよ。」
そう言いながら、ティアは何故だか苛立たしげだ。
「なら、存分に利用してくれ。私だって人間の端くれだからな、困っている人間が目の前にいたら助けないでいられん。」
彼女とて、これから戦いに行くのだ。
何をイライラしているかは知らないが、私の軽口で少しは気を落ち着かせて欲しかった。
「・・・貴方って、本当にお人好しね。」
だが、返ってきたのは結局は私をより不機嫌にするような、深いため息。（・・・軽口なんて、言わなければ良かったか？）
箱を降りると、そこはさっきまでの緊迫した雰囲気だけでなく戦

士たちが右往左往と動き回り、怒号が響きわたり、まさに戦場さながらの混沌とした様子があった。

私は初めての雰囲気に圧倒されながら、その中に足を踏み入れ一歩二歩と歩みを進めて、ティアが箱の中から出てきていないことに気がつく。

「ティア？」

私は彼女を振り返って、彼女の名を呼んだ。

だが、たぶんこの雑音が飛び交う中では、私の小さな声は彼女には聞こえなかったかも知れない。

どうしたのだろうと、私が彼女の元に駆け寄ろうとすると彼女は私の顔を見つめながら、箱の中から出てくる。

そして、すれ違いざまに彼女はぼそりと独り言を呟いたようだった。

「でも、そんな貴方だからエンシッダ様の術中には嵌って欲しくなかったのかも知れない。私みたいに。」

「？」

声はあまりの小さく、私の耳にはよく聞こえない。

そして、もう一度それを聞きなおそうとしたが、足早に戦士たちの合間を縫うように歩くティアに追いつくのが精一杯で私はすぐにそんなことを忘れてしまうのだった。

第五十五話　掌の上のヒロ　其の六（後書き）

本編復活です。思ったより、早くに連載が再開することができまして嬉しい限りです。（この一週間ちょっと頑張りました）これから、のんびり不定期連載になるとは思いますが、また頑張りますのでよろしくお願いします。

さて、話の本題について少し。エンシッダとヒロのファーストコンタクト終了です。事態はごちゃごちゃとしたやり取りから、天使の襲撃という混乱へ。今からしばらくヒロは戦いの中に身を投じる感じですが、これまでにない敵が出てくる予定です。

第五十六話　観客なき舞台が幕を開ける

舞台が始まる。

人間と天使。

それは二人の役者が舞台の上にいながらも、千年という永きに渡り視線すら合わせずに沈黙を守り続けたために始まることのなかった喜びも、悲しみ、怒りも嘆きすらも凍りついてしまった舞台。

しかし、舞台は人間が天使に反旗を翻したことによって、その凍てついた封印を解かれた。

東方の楽園という名の舞台に照明が灯り、その上で時と止められた役者たちが、それぞれの思惑を抱えて動き出す。

そして、誰も知らないその舞台の結末に震えながら、私もまたその舞台に上がる。

言っておくが、私は主人公じゃない。

私など一向にやってくることのない出番を舞台袖で待ち続ける、ほんの脇役で十分だ。（それどころか、エキストラくらいでも私は構わない。基本、目立つのは好きくないのだ）

そして、そのほこり臭い舞台袖で私はふと思うのだ。

私が脇役ならば、あの男・エンシッダはさながらこの舞台の主役であろうか？

そう思って舞台の上に目を凝らすが、たくさんの人影の中にあの男はいなかった。

それから、少し考えて一つの推測に至る。

ああ、あの男は私のように舞台には上がっていないのだ。だって、あの男はこの舞台の結末を知っている。

だから、観客席から愚かにも彼らの書いたシナリオのままに芝居を続ける私たちを見ている。そうに違いない。

そう思って私は、舞台袖から観客席をそっと覗いた。
しかしそこにあるのは、暗闇にぽっかりと浮かぶ誰も座っていない椅子だけ。

始まりし舞台の観客席は、未だ空席。
そして、エンシッダはこの舞台の何処にも存在していなかった。

では、やつは何処にいる？

そう考えている間に、幕開けのベルが鳴った。

第五十六話　観客なき舞台が幕を開ける

私とティアをはじめ天使に襲撃されているという村を助けに行く者たちは、月見の塔（ミュージアシエタ）の大広間のような場所に召集され、状況についての説明を聞いていた。
広間には灰色の制服をきた女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）が、それ以外は恐らく黒（オ）の雷（ルヴァラ）だろう私が見たことのある顔もいくつかあった。
皆、戦い前の興奮と不安の入り混じった複雑そうな表情を浮かべている。
そして私が彼らの様子を観察している中で気がついたことが一つ、それは全体的にここに集まった人々が、妙に若いということ。
まあ、年寄りよりは若い方がいいのだが、それにしても少なくとも半数が私より年若い２０代にも満たないだろう少年、そして少女の姿もちらほらと見える。
そして、その少年少女たちの殆どが灰色の女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）、あのエンシッダが作った軍隊の構成員であるということが、頭の片隅（かたすみ）に引っかかった。

「襲撃されているのは罪人（アークヴェル）の巡礼地。先行している偵察の報告によれば、街には天使が溢（あふ）れ、火の手もあがっているとのことだ。」

この作戦の指揮を執るらしい男が声高に叫ぶ。

それはよく見れば、エンシッダに会う前にティアに噛みついていた男。名前は確かハレといったはずだ。

彼の言葉に一斉にざわめく広間。中には悲鳴や絶叫も交じる。

「騒ぐな、落ち付け！」

ハレがそれを鎮めようとするが、誰もその言葉には耳を貸さずにざわめきは大きくなる一方だ。

そもそも、この事実を告げているハレ自身が動揺を隠せていないようでは、それも仕方ないであろう。

だが、心情は分からないでもない。

「罪人（アークヴェル）の巡礼地をいきなり襲うなんて、噛みついた犬には天使たちも容赦ないわね。」

ざわめく人々の中、それとは対照的にティアが私の横で静かだが忌々（いまいま）しそうに吐き捨てる。

「アーシアンの心の拠（よ）り所のような街だからな。そこを襲えば天使にとっては、いい見せしめになるだろうな。確かに。」

私も動揺を隠せるよう低い声でティアに答えたが、もしかしたら声が震えていたかもしれない。

それがどうしてかと言えば、私はエンシッダの元に報告にきた男から『天使が村を襲撃している』としか聞いていなかった。

『村』などと言われれば、普通は不浄の大地（ディス・エンガッド）では一般的な十数人の住人しかいないような小さくて、寂（さび）れた村を想像する。

それくらいならば、天使たちから人間を守ることも大して難しくないように感じていた。

だが、それが罪人（アークヴェル）の巡礼地となると状況は大きく変わる。
そもそも、ここに集まっている人数の多さからそれを察しても良かったのかも知れない。
広間に集まっている人数は目算でも２００人は下らない。十数人の村を救うには大げさすぎる人数といっていいだろう。
だが、それが罪人（アークヴェル）の巡礼地となれば、それも納得だ。
実際の現状を確認しないことには定かには言えないだろうが、村を・・・、というよりはその都市を救援することは、この人数をもってしも難しいことなのは目に見えていた。

何故なら、罪人（アークヴェル）の巡礼地はいつくかある不浄（ディス・エンガッド）の大地の中でも大都市といってもいい大きな街の中でも最も大きな街であるから、そしてその名の通りその街がアーシアンたちの信仰の対象である場所であるから。
故に寂（さび）れた、生きていくのもやっとの村ばかりが点在する不浄（ディス・エンガッド）の大地の中で罪人（アークヴェル）の巡礼地だけは、色々な点で別格といってよかった。

その元は、この銀月（ウィンザード・シエラ）の都と同じく亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟。
だが、その存在は昔から多くのアーシアンの目に触れ、その希望となっていた。
というのも、あの街だけには何も育たないといわれる死の荒地たる不浄（ディス・エンガッド）の大地にあって植物や作物が芽を息吹き、天使の領域（フィリアラディアス）には劣るだろうが、それなりに人間らしい生活を営むことができる唯一のアーシアンの場所であったからだ。
それは、神に見放され、死の荒れ地で絶望の中で苦しみ抜いて生き続けることを運命づけられたアーシアン達にとって、まるで神が許してくれた唯一の希望のように感じられるのは当然の流れであろう。
生命の息吹は決して罪人（アークヴェル）の巡礼地を越えて広がることはなかったが、それでもアーシアン達はその場所をたった一つ、神が与えた希

望のように崇め奉ったのだ。

故に旅をするのも命がけの不浄の大地であっても、アーシアンたちは人生に一度は、その場所に出かけようと決死の覚悟で巡礼を決行する。（私も一度だけ、父親に連れられてその場所に行ったことがある）

その場所を、アーシアンの最後の希望を天使が襲撃している。まるで、天使に反旗を翻したことへの罰のように、私たちから唯一の希望すら奪おうというのだ。

実際のところ罪人の巡礼地自体はさして大きな場所ではないのだが、街の近くにはいつくもの街が隣接していて、正確には分からないが千・万という単位のアーシアンがいるはずだ。

それを全て救出するということが大変だというのはもちろんだが、それよりも天使がそこを襲ったということは、天使が本気で人間を潰しにかかっているという事実に他ならないのだ。

戦うか、それとも天使に隷属して生きていくか。私たちにはその二つの道しか残っていない。

ああ、本当に引き返せない所まで来たのだと、改めて実感して、動揺してしまったのは気の小さな私としては致し方ない状況であろう。

また、ここに集まった人間たちも皆が、私と似たような感想をもっているのかもしれない。

「作戦の説明をする！」

しばらくしてざわめきがひと段落すると、ハレは厳しい表情で壇上から私たちを見回した。

人々は我こそがアーシアンの希望を守るのだと息巻いている様子が、私に伝わってくる。

だが、ハレの作戦はその気持ちを踏みにじるものであった。

「この作戦の一番の目的は人命救助である！住民たちのこの銀月（ウィンザード）の都（シエラ）へ避難させ、それ以外は極力戦闘も避けること。詳しい役割分担については、それぞれ隊長格より聞くこと。以上だ！」

『その作戦はなんだ！』

『住民を避難させて、罪人（アークヴェル）の巡礼地はどうする？！』

広間が怒気を含んで、沸き立った。

アーシアンの心情としては、希望たる罪人（アークヴェル）の巡礼地を死守したいと思うのは当然の感情だ。

だが、ハレの下した命令は人命の優先。そして、罪人（アークヴェル）の巡礼地の放棄であった。

だが、それが単に臆病風に吹かれた作戦ではなく、事態の切迫を意味していることは明らかだった。

無論、彼とて人々を助けることができ、且罪人（かつアークヴェル）の巡礼地を守ることができれば、それに勝ることはないと考えているだろう。

だが、それをしないということは、その両方を成り立たせることが現状では難しいということだ。

そして、人命と罪人（アークヴェル）の巡礼地を天秤にかけた時、作戦は人命を優先した。

この戦力では、人命を助けるだけで精一杯。

それは、天使たちがそれほどの戦力を持って罪人（アークヴェル）の巡礼地を襲撃しているという、頭が痛くなるような事実を私たちに付きつけていた。

「状況は切迫している。天使たちのは二個師団。第一師団と第二師団が出てきている。その中には、師団長・副師団長クラスも含まれているとのことだ。いいか。このクラスの天使出会ったらまず戦おうとはするなっ！」

殺気だった広間の中で、以上と締めくくりながらもハレの言葉は続いていた。

第一師団というのは、記憶によればエンリッヒやシャオンがいるはずだ。
さらに言えば、エンリッヒは副師団長だったはず。
あいつは確かに強かった。人命を優先させる状況下では、極力戦闘を避けるのは正しい選択だろう。
『馬鹿を言え！俺は戦うぞっ！！』
『天使を前に逃げろというのか！！』
だが、上がるのは強いブーイング。
興奮ぎみの一同の神経を、敵前逃亡しろという命令はより逆なでしたらしい。

しかし、その人々をハレは一喝する。
「黙れ！いいか、この戦いは先に言ったように人命の救出が優先なのだ。この戦いで、来るべき最終決戦で使うべき我らの戦力が削がれることなどないように、戦いは極力避けよ！！」
それから、彼は息を一つ吸って、殊更に声を張り上げた。
「これは、我らが主導者・エンシッダ様のご命令であるっ！！！」

・・・じゃあ、本人がこの場に立って説明しろよ。

それを聞いて妙に白けた気分になったのは、たぶん私だけだ。
しかし、エンシッダの名を出ただけで、それまで反抗的だった一同がぴたりとブーイングをやめて、歓喜の雄たけびを上げ始めたのだ。
『やるぞぉ！！』
『エンシッダ様のご命令なら、神は我らの味方だぁ！！』
と、えらい変わりようである。（まるでエンシッダを崇める狂信者の集まりだ）
それを聞いて、更にげんなりとする私。
多分、これも彼のシナリオの一つということが、やる気を削ぐの

だろう。
何しろどうころんでも、ヴィスの予知能力を使って、この作戦は成功するようになっているに違いないのだから。
そう思って、ふと気がつく。
・・・ならば、どうして罪人（アークヴェル）の巡礼地を放棄するのだろう？
その意味はハレに聞いたとて恐らく何も分からないのだろうが、気になるのは確かだった。
そんな風に、色めき立つ周囲とは裏腹にやる気をなくしつつある私の肩をティアがポンと叩いた。
「心配しなくても、私とヒロには、これとは別の特別任務があるのよ？」
そう言われて、ぎょっとした。（特別任務なんて、聞いただけで面倒そうだ）
「・・・わ、私は人命救助で十ぶ・・ん――――」
「はいはい。じゃ、行くわよぉ！」
しかして私の話など聞こうとしないティアは、私の首根っこをひっつかむとずるずると引っ張っていったのである。（私は動物かっ。）

第五十六話　観客なき舞台が幕を開ける（後書き）

次なる舞台への序章って感じでしょうか？それか舞台設定？新たなる敵が出てくるとか言いながら、その影もまだ出てきてませんね。すいません（笑）

第五十七話　女神が私に微笑んだ　其の一

「おっさん、足手まといになるなよ。」
生まれて初めて『おっさん』と言われた。（エヴァにはよく年寄り臭いとからかわれたものだが、言っておくが私は２０代だっつーの）

「こちらが、白き神イヌア・ニルヴァーナ様よ。」
生まれて初めて神というものと目を合わせた。

「はじめまして、ヒロ。」
そして、生まれて初めて女神が私に微笑んだ。

第五十七話　女神が私に微笑んだ　其の一

ティアに引きずられるように、慌ただしく殺伐（さつばつ）とした雰囲気の中にある月見の塔（ミュージアシエタ）を移動した。（目まぐるしく移動したため、正直、どこがどこだか私にはさっぱりだ）
かなりの距離を移動した末にティアが立ち止まったのは、銀月（ウィンザード）の都（シエラ）を一望できるガラス張りの展望室のような場所だった。
通常ならばここでお茶を楽しむ人がいてもおかしくないだろうに、こんな非常時だからだろう人っ子一人おらずガランとして静まり返っている。

「ここで待つわよ。」
「何を？っていうか、こんな所でのんびりしてていいのか？あの煙、罪人（アークヴェル）の巡礼地だろ？」

外に目をやれば、ガラス越しの青空の向こうに黒煙が上がっているのが見えた。

まだかなり離れているらしく炎や街は見えないが、現状から考えれば間違いなく罪人の巡礼地から上がる黒煙であろう。

「後、15分くらいで天使との戦闘に入るってところね。」

「だったら・・・」

「言ったでしょ？私たちは特別任務があるの。そのために、ある人に協力が必要不可欠。その人を待っているの。」

だから、私はその『特別任務』をするとは言っていない！とティアに訴えようとしたが、それは待ち人が現れたために口から出ることはなかった。

「お待たせしました。」

その人は、部屋の中心にあった豪華な螺旋階段をしずしずと下りてきた。

後ろに灰色の制服を着た女神の十字軍の少年を伴い、白いヴェールを被り、白いドレスを身に纏っているその女性。

どうみても、これから戦場に行こうという服装ではないだろう。

（あんな純白といってもいい格好など、目立って敵の的になるだけだ）

『お待たせしました』といった以上、彼女は『特別任務』とやらの関係者なのだろうが、こんな戦力にならない女性を連れていくなど問題外だと、いつもの私ならすぐさまティアを諫めようとしただろう。

だが、私は何も言わずにティアにならって、その女性に頭を下げている。

何故なら、私は彼女を見たことがあり、何者であるかを知っているからだ。

「二人とも頭を上げてくださいな。」
そう言われて頭を上げた先には、あの夜に生体兵器研究所で見た女性が微笑んでいた。
とはいえ、こんなに近くで話しかけられ、微笑えまれるのは初めてだ。
きっと、彼女の方は私があの場にいたことも気がついてはいまい。
「こんな状況です。堅苦しい挨拶はやめましょう。」
丁寧で謙虚な物言い、柔らかい声、優雅な仕草、美しい容姿。
女性は明らかに私と縁遠そうな種類の人間だ。それは確かである。
だが、私には彼女が悲しいほどに凡庸な人間に見えた。
そして、それは甚だしく問題なのだ。

「はい。では、簡単な紹介だけさせてください。彼はヒロ。黒の一族で、先の天使の領域襲撃から力を貸してくれています。ヒロはこの前会ったから分かってると思うけど、こちらが白き神イヌア・ニルヴァーナ様よ。」
そう、彼女こそが我らが主。
この世界にたった一人生き残った神。白き神イヌア・ニルヴァーナ、その人なのだ。
その女神様を凡庸なる人間としか思えないというのは、やはり甚だしく問題であろう。（まあ、口に出さなければ私が思っていることなど、そうそうバレないだろうが）
だから、自分でも戸惑ってはいるのだ。それと見せないようにしているのだが。

「そうですか。はじめまして、ヒロ。わたくしはイヌア・ニルヴァーナと申します。」
私の心中など知らない丁寧な挨拶に、私は直角に近い角度で体を曲げる。
「ヒロです。」

それ以上に今は言うことも思いつかない。
何しろ、彼女が神だとどんなに自分の中に言い聞かせても、私の瞳には『神』という絶対的な存在とはとても思えないほどに、凡庸な彼女にしか映らない。
いや、もしかしたら私が作り上げた『神』という名の偶像があまりに神々しかったり、人智を越えた存在だったために、それとのギャップに戸惑っているだけなのかもしれない。
だが、それとは別にエヴァンシェッドという、どこから見ても神々しく、人智を超えた存在としかいえないような存在がいるのも確かなのだ。
私から言わせれば、エヴァンシェッドの方が、些か禍々(まがまが)しいというか、毒々しい気もするが余程『神』という存在に近い気がする。

要は私の中で『神』とは支配者なのだ。

遥か昔とは言え、人間に罰を与えこの不浄の大地(ディス・エンガッド)に生きることを強要した。東方の楽園(サフィラ・アイリス)の絶対的な存在こそが『神』だ。
なのに彼女には誰かを支配し、屈伏させるような強い力を感じない。
それが、やはり腑に落ちないのかも知れない。

・・・まあ、しかし、私がどう思うが彼女が神であることに違いはないのだが。

「それから、ニルヴァーナ様の護衛をしている女神の十字軍(イヴィスタン・ディード)最強の戦士・ケルヴェロッカ。」
そう言われて一歩前に出たのは、最強という名とは縁遠そうな細っこい少年。どうみても１０代前半だ。
そんな子供が私を勝気そうな大きな瞳で見上げてくる。
「ケルヴェロッカだ。後、俺の相棒のロッソ。」

相棒と言われて彼の足元を見ると、尻尾をふっている葦毛色の子犬と目があった。（・・・犬が相棒かよ。）

「ニルヴァーナ様は俺が命に代えても守るから、せめておっさんは足手まといになるなよ。」

「・・・。（誰が『おっさん』だっ！私はぴちぴちの２０代だっつーの！！）↑声にならな叫び」

子供というのは総じて生意気なものだ。

エヴァでそれに対する耐性を養っていたため、私は沈黙で一瞬爆発しそうだった感情を押さえることができた。（私は大人。大人なのだ。）

「わかった？」

しかし、総じて子供というのは、大人しくしているとつけ上がるものなのだ。

正直叩いてやろうかとも思ったが（これがエヴァなら一発は叩いているに違いない）、何とかそれもこらえた私である。

何しろ忘れそうだが、今は天使が罪人の巡礼地を襲っているという未曾有の緊急事態なのだ。

こんな所で、下らない時間を費やしている暇はないだろう。

「善処しよう。」

私の怒りを押させた答え。にっこりと引きつった笑顔もサービスしてやった。

「善処？」

力は強いが（それもこんな子供じゃ怪しい）、頭の方は馬鹿らしい。

「君の足手まといにならないよう努力しますという意味だ。」

私の声は微妙に震えていた。

「あはは。おっさん、いい心がけだね。」

だが、それに気が付いているのかいないのか、ケルヴェロッカはあっけらかんと笑う。子犬のロッソも何やら嬉しそうに鳴き声をあげて、尻尾を振る。

「ヒロはおもしろい人ですね。」

更に白き神からは、のんびりとした状況を理解していない褒め言葉。（おもしろいは、褒め言葉でいいんだよな？）

もう何とでも思ってくれと乾いた笑みを浮かべ続ける私の耳に、ぼそりとティアのこ声が聞こえた。

「・・・・本当に、お人好し。」

それは否定できないなと、私は心の中で苦笑した。

「ともあれ、顔合わせは終わりです。さっそく、今から罪人（アークヴェル）の巡礼地に私の魔法で移動します。ニルヴァーナ様も準備はよろしいですね？」

仕切りなおすように、和（なご）やかな空気を断ち切ったのはティアの冷静な声。

「・・・白き神も一緒に行くのか？」

そうだろうなとは思いつつ、本当にそうするのかと確認の意味で私はティアに聞いた。

その理由として、まず、どう見ても白き神が戦力にはなるまいというのが一点。

それよりも気になるのが、本来天使を寵愛（ちょうあい）し、人間に罪を与え続けてきたはずの神が、どうしてこの銀月の都（ウィンザード・シエラ）でにこやかに立っていられるのか、そして人間に味方しようとしているのかという点。

女神は天使を見捨てたのか？

それとも、他に理由があるのか？

「私たちは今から『ある物』を取りに行くの。そして、天使がいきなり罪人（アークヴェル）の巡礼地を襲ったのも、ヒロがいうようにアーシアンに対する見せしめもあるだろうけど、それ以上に恐らくその『ある物』を私たちに渡さないためなのよ。」

天使も人間も欲しがる『ある物』・・・ねえ。そりゃまた何ともきな臭い。

「それを見つけるためにはニルヴァーナ様の協力が必要不可欠なの。そして、神は私たちに協力をしてくれると約束してくれたわ。」

私は白き神に視線をやった。

美しいが、凡庸な穏やかなる微笑みが私に向けられる。

「はい。わたくしは天使たちが人間たちに、これ以上非道をしているのを見ていたくはないのです。」

「なら、どうして今まで人間を助けようとしなかったのですか？」

責めるつもりないが、咄嗟（とっさ）にでた言葉は正直だった。

『神』であるならば、天使たちの非道を止めることなど造作もないはずだ。

「・・・わたくしは、お飾りの『神』ですから。」

女神は自嘲気味に笑った。

ああ、そんな表情もまた、彼女の人間臭さを助長する。

やめてくれ。私は普通の女性を責めるような趣味はない。

私が責めているのは、絶対的支配者たる『神』なのだ。

そう思いたいのに、眼の前の彼女はやはり私には普通の人間の女性にしか見えない。

だから、悲しそうに笑う彼女に罪悪感が湧いてくる。

「世界を支配していたのは、わたくしではなく天使。わたくしに天使を止める力はありませんでした。こんな事を言っても、きっと言い訳にしか聞こえないのでしょうが・・・。」

天使が世界を支配していた？

じゃあ、天近き城（フェデス・ジグロア）で聞いた、神と天使と人間の戦いの話を、サンタマリアの話は、黒き神の凶行や、白き神が天使を寵愛したというのは嘘なのか？

だが、現に白き神は天使の元にいたのだ。

全部が偽りという訳では・・・

白き神の言葉に、彼女への罪悪感よりも混乱の方が先行し始めた思考だったが、それを断ち切ったのはケルヴェロッカの声変わり前の高い声。

「ニルヴァーナ様を責めるのはやめよろっ、おっさん！！」

「・・・『おっさん』ではない、私にはヒロという名前がある。」

白き神を庇（かば）うように立ちはだかるケルヴェロッカ。足元では子犬が威嚇（いかく）するように唸（うな）り声を上げている。

「うっせー！ニルヴァーナ様を責めるような奴は、おっさんで十分なんだよ。おっさん！」

最後の『おっさん』は妙に強調された。

それにいい加減切れそうになった私だが、それを遮るように私とケルヴェロッカの間にティアが割り込んでくる。

「二人ともやめて。何にしても天使は既に罪人の巡礼地（アークヴェル）に入っているのよ。今は時間がない。話は後にして頂戴（ちょうだい）。」

そう言われては、言い返す言葉もない。（混乱のあまり、私も冷静さに欠けていた）

だが、それでも懲（こ）りずに、これだけはと思い私は彼女に聞いた。

「『ある物』とは、何だ？」

「聖櫃（せいひつ）よ。」

ティアは私の顔を見ずにそういった。

贖罪（しょくざい）の街で見た赤黒い血のこびり付いた柩（ひつぎ）が、頭の中に思い出された。

第五十七話　女神が私に微笑んだ　其の一（後書き）

お忘れの方も多かったことでしょう。私もいつ頃、エンシッダとともに銀月の都にいるはずの白き神を登場させようかと思っていました。やっと、登場です。そんな神をも巻き込んで、罪人の巡礼地で色々起きる予定ですのでお楽しみに。

更新ペースは今のところ一週間に一度くらいを目標に頑張っていますので、どうか見捨てずに（笑）お付き合いくださると嬉しいです。

第五十八話　女神が私に微笑んだ　其の二（前書き）

【警告】残酷表現があります。苦手な方はご注意ください。

第五十八話　女神が私に微笑んだ　其の二

ティアの魔法により、上空にあった銀月の都（ウィンザード・シエラ）から、天使に襲撃されている罪人の巡礼地（アークヴェル）に降り立った瞬間に感じたのは、むせるような煙（けむ）たさと、吸い込んだ空気の熱さ、視界に飛び込んだ炎の赤、そして耳だけでなく胸に響く人々の悲鳴。絶叫。断末魔。

「助けてっ！」
「痛い・・よぉ。」
「天使様、どうしてですかっ？！」
「死にたくないっ。」
「苦しいっ！！」
「お母さん！」
「・・・神よ。」

罪人の巡礼地（アークヴェル）はもはやアーシアンの希望の地ではなく、地獄の様相を呈（てい）していた。

それは悪夢にすら見ないような景色。

燃える街、泣き叫ぶ人間、そして笑みすら浮かべてそれを追いかける天使。いや、それはもう悪魔か死神だ。

翼は血に濡れ、そして燃える炎の光と相まって全身が返り血で赤く染まったような姿は血に飢えた獣かもしれない。

そこに人間の誰もが想像している神に愛された天使の姿はなかった。

いや、これこそ人間の命の上に楽園を築いた天使たちの本当の姿なのかもしれない。

だが、どうしてだろう？

この瞬間まで直接目にすることのなかった真実の天使の姿であるはずなのに、何故だか私はこの惨状に見覚えがあるような気がしてならないのだ。

頭の中で、目の前の地獄とよく似た映像が何度も何度も繰り返される。

そして、いつの間にか人間を追い回している天使が私になり、私が剣を突き刺している相手が彼女に・・・・。

気がつけば頭の中で目の前の現状と5年前の事件とが入れ替わり、私は混乱の極み(きわみ)に突き落とされた。

第五十八話　女神が私に微笑んだ　其の二

私たちはティアの魔法により、閑散とした銀月の都(ウィンザード・シエラ)から一変して、炎に包まれた建物の中に移動していた。恐らく罪人(アークヴェル)の巡礼地の建物の一角だろう。

幸いに建物の中までに炎は回っていないようだが、窓からは勢いよく燃え上がる炎が見えて、赤い光が薄暗い建物の中を照らす。

その光のおかげで確認できた建物の中は、これといって何の変哲もない民家のようだ。しかし、天使が既にここに来ていたらしく室内は荒らされていた。

それを見回しながら、一つの物影に私の視線が止まる。

「想像以上に天使の攻勢は強いわね。これじゃ、炎を避けながら進むだけでも一苦労だわ。・・・何処に行くつもり?」

窓から天使が人間たちを追い回しているのが見える。

距離としては離れているので話し声や気配は気が付かれないと思うが、建物から外に出れば見つけられるに違いない。

それと分かっていても、私は外に出ようとしていた。
「街の人たちを助けに行く。止めるな。」
私たちはここに人命救助に来たわけではないと、ティアにはあらかじめ言われていた。
そのために、天使に気が付かれぬようにティアの魔法を使って秘密裏に罪人（アークヴェル）の巡礼地にこうして潜入した。
だが、私は先ほど目にとまった光景を瞼（まぶた）の裏に焼き付けるように閉じる。

それは、惨殺（ざんさつ）された三人の人間の死体。

それを見た瞬間に、自分がどうしてここに来たのかなど吹っ飛んだ。
恐らく、母親と子供二人。
母親は子供を守るように二人を抱きしめたまま、子供たちは母親の胸に抱かれたまま殺されていた。
薄暗い室内であるために詳しいことは分からないが、おそらく剣などの刃によって体を切り裂かれたのであろう。良く見れば、室内には血が飛び散り、三人の倒れている場所には血だまりができていた。（これだけの出血だ。すぐに匂いで分かりそうなものだったが、むせるような煙（けむ）たさがそれを邪魔していたのだ。）
そして、きっと天使に襲われ恐怖のままに絶命したのであろう。
その表情は、こちらが苦しくなるような痛々しいものだった。
これを直接目の当たりにして、どうして何もせずにいられる？
いてもたってもいられず、天使に飛びかかりたいと思うのは普通の感情ではないのか？

だが、ティアはきっと私の感情など分かっているだろうに、それを止める。
「折角（せっかく）天使に見つからずに街の中に入れたっていうのに、気持ちは

分かるけど台無しにしないで。・・・それに、ほら。」

炎と黒煙の上がる窓から見える外を指さされると、銀月の都（ウィンザード・シエラ）の大きなシルエットがだんだんと高度を下げてくるのが見えた。

「街の人たちは女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）たちが何とかしてくれるわ。」

確かにそうかもしれない。大勢の天使に私一人では、大したことができないことを頭では理解している。

だが、これはそういう理性で割り切れるものじゃないだろう？

「よくそんなことが言えるなっ！これを見て！目の前で人が助けを求めてるんだぞ？！」

天使にバレても構わないくらいの大声で私は叫んだ。

母子が死んでいるだけじゃない、建物の中にいても聞こえてくる呻（うめ）きが、嘆きが、助けを求める声があるのだ。それなのに、私には何もできないなんてっ！

「聖櫃（せいひつ）が天使の手に渡れば、より多くの人間が苦しむことになるのよっ？」

そんな頑（かたく）なな私の態度にティアも頭に血が上ったらしく、天使が近くにいるのを気にしてか声を抑えてはいたが私を責めるように強い口調になる。

「目の前の人も守れないのに、より多くの人間を守れるわけないだろっ！？誰かを守るために、違う誰かを犠牲にするなんて、もう嫌なんだよっ！！」

胸をよぎるのは愛した女性の死に顔と、最期の言葉。

私は黒の剣（ローラレライ）を強く握りしめ、こんな所で押し問答してても埒が明かないとばかりに、ティアの静止を振り切って今度こそ外に飛び出そうとした。

だが、それを止める力強い力が腕を引っ張った。ティアかと思って、それを振り払おうとして後ろを振り向くと、そこにいたのは私の大声に驚いていた白き神を庇（かば）うようにしていたケルヴェロッカだった。

「放せ。子供(がき)。」
自分でも怖いくらいにどすの利いた低い声だと思った。
普通の子供なら怯(おび)えて手を放すだろうと思っていたが、そこは伊達に女神の十字軍最強(イヴィスタン・ディード)の名を持つ子供。
怯(おび)えるどころか、いやに挑発的な視線を私に向けてきた。
「おっさん。子供(がき)じゃないんだから、我慢しろよ。」
揚げ足を取られたこともあり、思わずかっとなって本気でケルヴェロッカに手を振り上げた私だったが、それは空振りに終わった。
そのまま、勢いあまって床に倒れこむ私。
目の前には母子の死体。そして、床についた手にはまだ温かい、母子の血液がべっとりと付いた。
私はそれを握りしめた。
「・・・どうして止めるんだよっ！私は守りたい人を守りたいだけなのにっ！！」

多分、これは目の前の母子に対する言葉ではない。

自分でも、どうしてこんな事を口走ったのか分からない。
しかし、何故だかこの時の私は現在と5年前の私が混じっていたような感覚になっていたのだ。
だが、子供のくせに妙に大人びたケルヴェロッカの声が、私を現在に引き戻す。
「力がないからだよ。」
私はその言葉に、びくりと肩を揺らす。
「出てった所で、天使から全部の人間を守れるわけでも、天使を殺したところで死んだ人間を生き返える訳でもないことは、おっさんも分かってるんだろ？力のない人間は、結局何もできなんだ。」

・・・それは、過去に誰かに言われた言葉。

「でも、それを分かっていながら、無謀に戦いを挑むのは勇気でも何でもない。ただ、逃げているだけだ。」

ぐっと、血に濡れた拳を握りしめた。

言わずとも分かっている。今も昔も、私は逃げているだけだということも。

「だから俺は力を求めるよ。聖櫃さえあれば、全てを守れるだけじゃない。死んだ人間さえも甦らせる力を得られるんだ。」

「？」

私はケルヴェロッカを見上げた。

聖櫃に、そんな大それた力があるというのか？

そもそも、どうして聖櫃を求めるのか、そしてそれを得てどうするのかも私は知らされてはいない。（銀月の都でティアは意味ありげにその名を告げたくせに、それ以上は時間がないと問答無用でここに移動した）

それに、あれは人間にとって忌まわしきものはずだと、贖罪の街でアラシから聞いた話と自分の目で見たものを思い出す。

聖櫃とは、人間の命を吸い上げて天使の領域を楽園にしていたものだった・・・あれ？

そこで初めて気がつく、もしかしたら、この罪人の巡礼地にあった緑は、それによって得たものだったのか？

ここにあったはずの希望も、誰かの命を踏みにじった忌まわしき血に濡れた生命だった？

「聖櫃さえあれば、力が手に入る。おっさんが感じてるような悔しい思いもせずに済むさ。だから、今は堪えろよ。」

意味が分からない私にケルヴェロッカは言い募る。

聖櫃があれば、力を手に入れることができる？

その言葉に更に混乱する。

私の知っているそれと、ケルヴェロッカの言っているそれは違うというのだろうか？

そうこうと混乱していると、窓から見えていた天使がばたばたとこちらに近づいてくる。咄嗟（とっさ）に息を殺す私たち。

「人間の援軍だぞ！」

「応戦だっ！」

「灰色の花園には近づけさせるなっ！」

銀月の都（ウィンザード・シエラ）の救援が街の中に入ってきたらしい、殺気だった天使たちがバタバタと近くから去っていく。

「彼らが陽動も引き受けてくれる。ケルヴェロッカの言うとおり、私たちは私たちのすべきことをしましょう。」

ティアが天使の気配がなくなるとそう言って、窓からその体を外へと滑りこませる。

それに従って白き神とケルヴェロッカも後に続く、私だけが室内に一人残って絶命した母子を見つめた。

その姿が、一瞬だけ私が愛した女性に変化して、そしてそれが消える。

「おっさん。」

そんな私をケルヴェロッカが呼ぶ。

「おっさんじゃない。ヒロだ。・・・今行く。」

分かっている。

結局力のない私は、力ある誰かの思うとおりに動かされる駒としてしか今はいられない。

その力に逆らうことも、ましてやそれを変える力もない。

だが、それと分かっていて声を上げたのは、多分目の前にちらつく君の、ユイアの姿があるからだ。

・・・私に何かを言いたいのか？

私が彼女を殺して5年という歳月が経とうとしている。

常に彼女に対する罪の意識だけは心の中に持ち続けている。だけれど、人間の記憶とは便利なもので、あの時のことも昔ほど多く私を苦しむことも少なくなった。

なのに、今になってどうして5年前の記憶が現状とダブるのだろう？

そんな風に騒ぐ胸の理由が分からないまま、私は一人黒の剣（ローラレライ）に語りかけてみるが、彼女は私に応えてくれることはなかった。

第五十八話　女神が私に微笑んだ　其の二（後書き）

量は少なめ、スピード早めの更新です。
ヒロはどうやら罪人の巡礼地で胸騒ぎを覚えている様子。実は第三部は第一部や第二部より、大分長くなる予定ですが（全然話が進んでないのが原因なんですが）、この罪人の巡礼地での話は今後の話のキーにる予定です。お見逃しなく（笑）

第五十九話　女神が私に微笑んだ　其の三

ここには、何も残ってはいない。

以前、私が訪れた罪人（アークヴェル）の巡礼地には幸せな人々の笑顔と、豊かな緑、そして降り注ぐ明るい光があった。

白き神（イア・ルマンヌ）の御許のような溜息をつきたくなるような造形美はないが、そこには生きてる者たちの希望や息遣いを体現した、力強い生命の気配が確かにあったのだ。

しかし、今の私が目の前にする罪人（アークヴェル）の巡礼地は全てが炎で燃えつくされ、天使によって破壊されていた。

第五十九話　女神が私に微笑んだ　其の三

一悶着（ひともんちゃく）あったものの（というか、私が恥ずかしながら駄々をこねただけか）、現在私たちは白き神の案内で燃え盛る罪人（アークヴェル）の巡礼地の街を走っていた。

ティアが言っていた通り私たちのいる辺りとは反対側に銀月の都（ウィンザード・シエラ）の登場したことが陽動になっているらしく、街中を走っていても全く天使と出くわす気配がない。

今のところは燃え上がる炎や、崩れ落ちそうな建物にだけ注意を払えばいいだけなのだが・・・、

どうにも、スピードの出ない走りに苛立ちを隠せないでいる私である。

目の前をひらひらと舞う白いドレスの裾（すそ）。

のろのろと進むそれを見ながら、それを抜き去りたいのに、抜き去れないイライラが募っているのだ。
要は白き神の案内で街を走っている以上、高いヒールをはき、どう見ても早いスピードで走ることができない彼女の後をついている訳で・・・、そりゃあスピードが出ないのも当然な状況といえば、それまでである。
何しろ、目的の聖櫃(せいひつ)の場所を探せるのは彼女だけらしいから、仕方無いといえば仕方ない。
それでも、普段はこんなことで女性相手に苛つくことなど、温厚な私には珍しいことなのだ。
たぶん、さっきの一悶着(ひともんちゃく)の件もあるし、それにこの現状が私を焦らせているのだろう。
こうして、ちんたらと走っている間にも、きっとこの街で誰かが傷ついているのだからと思うと、落ち着いてなどいられない。
だからだろうと思うが、私は自分でも考えられないくらい大胆な申し出を気がついたらしていたりした。

「白き神を私が抱えて走ったら、スピードが上がるんじゃないか？」

白き神の斜め後ろ、私の少し前を走っていたケルヴェロッカが、それに振りかえって軽口を叩く。
「おっさん。下心が見え見えだぜ？」
「違うわっ！」
確かにそう間違われてもおかしくない発言だと言われてから気がついたが、そんな下心など微塵(みじん)もないので強く否定した。
しかし、ケルヴェロッカがありえないと思ったこの申し出に、ティアが食いついた。
「そうね。その方が早いのは確かだわ。ニルヴァーナ様いかがですか？もし、お嫌でなかったら、ヒロが抱えさせてもらってもいいですか？」

『お嫌でなかったら』『抱えさせてもらって』・・・と、まあ言い方は些か引っかかるものを感じるが、とりあえず私も黙って白き神の反応を伺った。

注目されて白き神はこちらも振り返りながら、ゆっくりと緩慢な動きで首を傾げ、

「いいんですか？わたくし、重いですけど。」

と、こちらが焦れるようなスピードで（優雅と遅いは紙一重だと、私は常々思う）、承諾の意を示した。

その快諾といってもいい答えが予想外で私も一瞬面をくらったが、言いだした手前もう後には引けず、

「ははっ。私も一応男ですから、白き神を担いで走ることくらい大したことではありませんよ。」

と引きつった笑顔と乾いた笑いを振りまいた。（状況が状況にも関わらず、何故だが白き神を相手にしていると緊張感が薄れるような気がするのは私だけだろうか？）

「ちょ・・・まっ。じゃあ、俺が・・・」

ケルヴェロッカも予想外の白き神の反応だったのか、私に抱きあげられるくらいなら自分がと慌てて言い出した。しかし、そこは白き神にあっさりと説き伏せられた。

「でも、ケルヴェロッカはわたくしより体が小さいですから。」

何だ。小さいから、私を持ち上げるのなんて無理でしょ？ということだろうか。

「・・・そうっすね。」

そんな身も蓋もない言葉に、言い返す言葉もないケルヴェロッカ。

（案外、小さいのがコンプレックスなのだろうか？確かに成長期前だろう彼は小柄は小柄だ）

そんなケルヴェロッカの微妙に凹んでいる様子が可哀想な気もしたが、慰められると余計にプライドに触るだろうから私は何も言わずに話を進めた。

「えっと、じゃあ背中に乗ってもらっていいですか？」
抱き上げるにしても色々方法があるだろうが、背負うのが一番いいだろう。手も空くし、私も動き安い。
「はいっ！」
・・・白き神がのりのりなのは少し気になったが、屈んだ背中にふわりと羽のように軽い・・・とまではいかないが、まあ重いとは感じないほどの体重がかかる。
女性らしい柔らかい体に、心地よい体温、そして僅かに香るいい匂い。
一瞬だけ自分の中の男が騒ぐような感じはしたが、緊急事態だぞと私は心の中で首を横に振る。
何しろ相手は神様なのだ。
普通、神相手にそんな感情を抱くことすら罪だろう。そう頭では分かってはいるのに、どうしてか普通の人間の女性のように、白き神のことを感じている自分に私は戸惑うばかりだ。
「それじゃ改めて、どっちですか？」
それを隠すように私が言うと背中から、にゅと突きだした白き女神の細い腕が方向を指し示す。
「あちらです。」
私は一度彼女を自分の良い位置に担ぎなおすと、そちらに向かって駈け出した。
無論、スピードが先ほどとは格段に早くなったのは言うまでもない。

「ちなみに私たちはどこに向かっているんですか？」
白き神とこんなに近距離にいることなど、恐らくそうそうあることではないだろう。
本当なら夢にでも、いや夢にすらも見ない幸運なのだろうが、どうにもそうとは思えない罰当たりな私は、大して気負うことなく背中の彼女に声をかける。

「はい。灰色の花園ですよ。」
その名前は、確か先ほど天使が近づけるなと叫んでいた場所だ。
「私は前にも罪人（アークヴェル）の巡礼地にきたことがありますが、そんな名前の花園はなかったように記憶しています。」
白き神の言うことを疑っているわけではないが、それにしても『灰色の花園』なんて、かわった名前は忘れそうにもない。だから、ふと本当にそんな花園があるのか気になった。
「『灰色の花園』は人間たちの目に触れないように、エヴァンシェッドが封印した場所です。誰も知らないのは無理もありません。」
「万象の天使が・・・ですか？」
思わぬ所で聞く、美しくも恐ろしい天使の名前に私は眉をしかめた。
二度と会うつもりはないと喧嘩を売ったにも関わらず、すぐに生体兵器研究所で会う羽目になるし、正直聞きたくない名前だ。

「灰色の花園には彼の思い出が詰まっています。きっと、誰にも穢（けが）されたくも、立ち入らせたくもないのだと思います。」
「思い出？」
亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟などにどうして・・・と思ったが、おそらく千年以上前、人間が罰を受ける前、この街も栄華を誇った時代の話なのだろう。
忘れてしまいそうだったが、この女神も天使たちも人間では考えられないくらい長い時を生きてきた存在なのだ。
「・・・ここは、かつて黒き神が治めていた神も人間も天使すらも共存していた、理想の楽園でした。」
神も人間も天使も共存していた理想の楽園。
確かに、罪人（アークヴェル）の巡礼地という場所は亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟の中でも比較的大規模な街であるが、そんな大それた街だとは私が知るはずもない。
しかも、その街を私のご先祖様の主人たる（実感はないが）黒き神が治めていたとは、妙な巡り合わせだ。

私は一人そんなことを考えていたが、背中の白き神は話を続けている。（酷い話だが、自分で話を振っておいて、自分の思考に没頭すると私はしばしば他人のことを忘れてしまうのだ）

「エヴァンシェッドと彼の恋人ハクアリティスはこの街で出会ったのです。そして、その中でも灰色の花園は二人の思い出の場所。きっと、その場所を暴かれるようなことになって、彼も心を痛めているでしょう。」

言っておくが別に万象の天使の恋愛模様など、私は全くもって興味がない。

期せずして、愛人との逢瀬やら、彼の妻であるハクアリティスと知り合う機会はあったが、それは全部私とて知りたくて知った訳じゃない。（断じて違う）

しかし、話している白き神の声が、幾分か沈んだような感じがするのは気になった。

その理由というよりは、白き神と天使の関係性とでもいった方がいいのだろうか？

先に彼女は天使たちにお飾りの神にされているといっていた。天使たちの非道を止めたいとも言っていたはずだ。

しかし、灰色の花園のことを話す白き神の言動には、目の前の惨状に対しての焦りや、人間を憂う感情も、天使たちを嫌悪する色すら見えない。

ただ、まるで万象の天使のことを心配しているような気配さえ私は感じている。

「灰色の花園は、そのまま誰の目に触れないままに千年という時を封印されたままにあります。そして、その封印を解くことができるのは力ある極一部の天使たちだけ。きっと、三大天使かエヴァンシェッド本人が来ていはずです。あ・・・次を右へ。」

白き神の指示通りに私は右へと進路を変える。

それにしても、万象の天使か三大天使が来ている・・・ね。

会いたくもない相手の来訪を聞いて、私は顔を顰(しか)める。

しかし、私の思いなど知らない白き神は背中で「ほう」と溜息交じりに呟くのだ。

「ああ、エヴァンシェッドに会えるかしら?」

それは溜息というよりは、吐息。

それも、恋しい人を思うような甘い、甘い吐息だった。

この惨状を眼の前にして、どうしてこんな言葉が呟ける?

私は背中に背負って気が付かれないことをいいことに、白き神に嫌悪感すら抱いて顔を歪めた。

第五十九話　女神が私に微笑んだ　其の三（後書き）

前回と大分雰囲気が変わった話となりました。それこそがヒロと白き神との温度差だと思ってください。ヒロもそれをひしひしと感じています。

そして次回こそ天使様を出すぞ！と思っています。本当大分彼らの存在を忘れていた様な・・・？（今回エヴァンシェッドだけ名前が出てきましたけど）

第六十話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の一

「ここが入口です。」

白き神を背負って罪人（アークヴェル）の巡礼地を駆け抜けた先に、それはあった。
しかして、そこにあったのは何の変哲もない建物の壁。
思わず目をぱちぱちと瞬（まばた）きさせた私である。
しかし、いくら瞬（まばた）きした所で眼の前にあるのは、見たところ何の変哲（へんてつ）もない壁でしかなく、人が入れるような入口は見当たらない。
（月見の塔（ミュージアシェタ）のように、叩いたら扉が開くのだろうか？）

「え・・と、この建物の中にあるってことですか？入口はどこですか？」

「いいえ。この壁が入口です。既に封印も解かれているようですから、このまま歩いて行って下さい。」

封印が解かれているといわれても、何度見ても私にはただの壁にしか見えないし、白き神も何か特別なことをして入口を開けるというようなこともしない。
なのに、どうしてこのまま歩くことができようかと私は白き神の言葉に戸惑った。（私に見えていない入り口でもあるのか？？）

「さあ、早く行きましょうっ！」

しかし、私の戸惑いなどお構いなしの（空気が読めない）女神は甲高い声とともに私の背中を強い力で押し、それで体勢を崩した私はそのまま壁に突っ込まざるを得なくなる。
「うぅ・・・わぁっ！！」
思いがけない女神の行動に、情けないかな私は声を出しながら顔面を壁に激突させるに違いないと、眼の前に迫る壁を前にギュッと

瞼を思いっきり瞑った。

第六十話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の一

白き神に背中をど突かれて思いっきり壁に突っ込んだはずの私だったが、何と顔面を壁にぶつけることはなかった。

何故なら、私の体は驚くことに壁をすり抜けて地面に倒れこんだから。

壁は幻覚であり、入口はちゃんと存在していた・・・ということだろう。（恐らく、開いている入口は幻覚で隠されていて、白き神にはそれが見えていたのだ。）

ドベシ

「きゃあっ！」

しかし、入口が開いていて壁に直撃は避けられても、結局体勢を崩して倒れるしかない私は地面に直撃する羽目になる。（背中にいる白き神は無事だろうに、何で悲鳴を上げるんだ？）

私を突き飛ばすくらいなら、まずは壁が幻覚であり、入口があるということを話してくれてもいいだろうと、心の中で罰あたりにも白き神に悪態をついた。

そして、倒れた私の背中から白き神が降りる気配がして、私はしこたまぶつけた顔を押さえながら起き上がる。

そして、顔を上げて目に入る視界に、痛みも女神に対する悪態も忘れ、狐につままれたような心地で茫然とした。

「ここ・・・は？」

妙に頼りなさげに呟く私に、白き神の嬉しそうな声が被さる。

「ここが『灰色の花園』ですよ。」

言われてストンとその言葉が頭で理解され、確かにここは『灰色の花園』だ・・・と私はすぐに思う。

何故だろう?こんな場所には来たこともないはずなのに、私が思ったのはその奇妙な景色への驚きでも、妙に嬉しそうな白き神への嫌悪でもなく、何だか懐かしいような切ない感情。

だが、それもすぐに霧散(むさん)した。

そして、すぐに状況を把握しようとする冷静な思考が回り始める。

とりあえずは、この奇妙な景色への疑問。

本来、『灰色の花園』など存在するはずもない景色だ。

花とは様々な色があるものだし、草木は緑や茶色であろうものだろう?(まあ、不浄の大地(ディス・エンガッド)でそれらを見ることは稀(まれ)であるが)

しかし、確かにここは言葉の通り、灰色だけに彩(いろど)られた花園。

他の色は一切存在しない。

草木だけではない。恐らく入口から別次元にでも繋がっているのか、建物の中のはずなのに空も大地もあり永遠と終わりが見えない花園が続いているが、その全てが灰色なのだ。(思わず自分も灰色になってしまったのではないかと思ったが、幸いにそれはなかった)

白と黒、それ以外は何も混ざっていない、曖昧(あいまい)で混沌としたその色だけの世界は遠近感もなく、まるで平面の絵画の中に吸い込まれたような不思議な感覚を覚えた。

だが、その色彩以外は至って普通の、いや普通どころか天近き城(フェデス・ジグロア)で見たような美しく整えられた花園だった。

もしかしたら、あの壁同様にこの景色も幻覚なのではなかろうか?

現実味のない景色にそう思って、すぐそばに咲いている花に手を伸ばしてみるが、それは確かに生花の花弁の感触がする。それに花

の濃厚な香りもする。
幻覚にしては、それはあまりにリアルであった。

「なかなかシュールな景色だこと。こんな場所を千年も守り続けるなんて、万象の天使も何を考えているのかしらねぇ？しかも、天使にとっても大切だろう聖櫃（せいひつ）を、こんな人間の手の届く場所に置いたまま。」

そうして私が灰色の景色に意識を向けていると、いつの間にかティアとケルヴェロッカも魔法の壁をすり抜けてきていた。

「この思い出の場所で眠り続けることが、彼女の願いでしたから。」

「なるほど、愛する女の願いを叶えるために・・・ということですか。万象の天使はロマンチストですね。まだその女の人を愛しているのでしょうか？白き神はどうお思いですか？」

ティアの赤い瞳には、挑発的な色が見えた。

彼女というのは、ハクアリティスのことだろうか？

白き神の話を総合すれば、そうだろう。

しかし、ならば『眠り続ける』とはどういう意味だ？眠り続けるどころか彼女は、今も銀月の都（ウィンザード・シエラ）にいるはずだ。

それにしても、いきなり何を言い出すんだとティアの発言に訝（いぶか）しい気持ちになった私だが、そんな思いは次の白き神の発言により吹っ飛ぶこととなる。

「彼女は過去の人です。今のエヴァンシェッドにはわたくしがいるのですから。」

その声には、如実に女の色香が香っていた。

そして、私は自分の中でぼんやりとしていた推測が、急速に確信に変わるのを感じた。

ああ白き神は、あの美しくて歪んだ天使のことを愛しているのだ。

美しいが神とは思えない平凡な女は、あの天使に男女の情を寄せている。

そう考えれば、さっきの甘い吐息や嬉しそうな様子の説明がつく。

しかし、同時に私の中で疑問符が湧いていくる。

白き神が万象の天使に男女の情を抱いているというならば、どうして今彼女は天使を裏切るような真似をしている？

だが、それを確かめる前に、

「おい！人間が入り込んでいるぞ！！！」

と振り向けば武装した天使が大声を上げていた。

そして、声に応えて現れた多数の天使たちがあっという間に私たちを取り囲み、何の警告もなく、問答無用で魔法攻撃を四方から放ってきたのだ。

「きゃあっ！！」

それを避けようとした私だったが、白き神が咄嗟（とっさ）に私の背中を掴み放さずに固まってしまったために私の動作は遅れる。（要は、彼女は私を盾にしようとしたのだ）

すぐに避けることを諦めて、黒の剣（ローラレライ）で魔法攻撃を相殺しようとしたが、私というか白き神の前に立ちはだかったケルヴェロッカが、魔法壁らしきものを作りだしてくれた。

次の瞬間に魔法攻撃が着弾する音、同時に煙が辺りを包む。

視界が全くきかなくなり、私は神経を尖（とが）らせて天使たちの様子を伺った。

「どうなった？！」

「今のは命中したのか？？」

動揺する天使たち、向こうも煙でこちらの様子がわからないらしい。

だが、その動揺する天使たちの近くで、殺気をまき散らす気配が

早いスピードで動くのを感じた。
「？」
何だと思ったが、その気配は私と私の背中にへばり付いている白き神には殺気を向けてこないので、とりあえず様子を見ることとする。
1・・2、その数は3。
ケルヴェロッカとティアかと思ったが、それにしては一つ多い。

「ぎゃっ！」
ガンッ
「うぐぅ・・・。」
グシャ
「ガウッ、グルルルル・・・。」

剣戟の音や悲鳴や呻き、そして何やら動物の唸り声まで聞こえてくる。
しかし、視界が煙に遮られているため、何がどうなっているかさっぱり分からない。
とりあえず、いきなりのことに怯えきっているらしい白き神を背中から剥がさないことには、私もここから動くことはできない。
私は周りの気配に意識を向けながらも、私は背中の白き神を振り払らって彼女に向かいあった。
「今のは天使?それとも人間?？」
どうやら、突然のことに何者が攻撃してきたかもわからなかったらしい。
「何がって・・・、分からないんですか?」
しかし、その姿を確認していなくとも状況から察することもできないとは、本当に呑気な女だと思った。もはや、彼女を敬う気持ちなど皆無だった。
「貴女が会いたがっていた天使様に決まってるじゃないですか。」

白き神以外には、この灰色の花園の封印を解ける者はごく一部の天使だと言っていたのは彼女自身だ。

そして、封印は解かれていたではないか。すなわち天使以外に、誰がここにいるというのだろう。（それが白き神の会いたがっていた、万象の天使とは知らないが）

その意味するところを分かっていないなんて、空気が読めないどころか愚かとしか言いようがない。

「まあっ、エヴァンシェッドがいたの?!」

かなりイライラした声で白き神が少しでも私の嫌味を感じてくれればいいと思って言った言葉だったが、私の言葉の意味など図り知ることもなく、女神は怯(おび)えなど一瞬に忘れて白き神は自分の髪の毛を押さえ、頬を赤く染める。

そのあまりにずれた言葉と行動に、怒るを通り越してあきれた気持ちになった。（どうして、あの天使に惚れる女どもは、揃いも揃ってバカばっかりなのだ?）

「あのなぁっ!」

そうして、この愚かなる女神に状況を説明しようと、声を上げようとした私だったが、そうこうしている間に煙が次第に晴れてゆく。

白き神に一言言ってやりたいところだったが、煙が晴れた以上、襲い来るだろう天使たちに備えて私は黒の剣(ローラレライ)を構えなければならなかった。

第六十話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の一（後書き）

前話でなんとなーく感じていた方もいらっしゃるでしょうが、ニルヴァーナのエヴァンシェッドへの感情が分かった回となりました。しかし、その割に天使の非道が許せないとか、色々言ってましたよね？ヒロ同様、皆さま彼女の矛盾には「？」な部分が多いかと思います。その辺は、しばらくしてたら分かるようにしてありますのでお待ちください。しばらくは、この灰色の花園での話が続きます。

第六十一話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の二

『ズット・ズット・マッテイタ』

第六十一話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の二

煙が晴れてゆく灰色の花園、私は天使たちの次の攻撃に備えて黒（ロー）の剣（ラレライ）を構える。

しかし、天使の攻撃は一切襲ってくることはなかった。

早い話、魔法攻撃を仕掛けてきた天使が皆、地面に倒れて目を回していたのだ。

私は気が張り詰めていた分、気が抜けたというか、肩すかしをくらったような気持ちになった。

そして、地に伏した天使たちの上にふんぞり返っているのはケルヴェロッカとティア、それに魔法攻撃を受ける前はいなかったはずの大きな犬のような獣。（どうやら、煙の中で動いていたのはこの二人と一匹だったようだ）

しかして、人間に倒される天使たち山盛という見慣れない図式に、口を開けてぽかんとしている私と目が合ったケルヴェロッカがにやりと子供らしくない笑みを浮かべた。

「油断すんなよぉ、おっさん。なぁ、ロッソ？」

「キャンっ！」

またこの子供（がき）は、とカチンとくる気持ちもあったが、それよりも・・・『ロッソ』っていったか？今。

「このデカイ犬はあの子犬・・・なのか？」

鳴き声もなく大人しくしていたために実はずっとケルヴェロッカの足元にいたのだが、私もいることを忘れかけていた葦色の子犬ロッソ。そう、確かに『ロッソ』という犬は私の顔ほどしかない子犬だったはずだ。

なのに、この目の前にいる『ロッソ』はなんだ？

体長は2，3メートル。確実に私より大きいだろう。ころころと子犬らしい丸い体は、引き締まり強靭な足腰と鋭い牙に爪をもつ獣と化し、その瞳は円らな愛くるしいものから、眼光鋭い威圧感のあるものになっている。

思わず目を擦った私であったが、その疑問はすぐにケルヴェロッカが生意気な物言いで解決してくれた。

「俺の魔法で大きくしたんだぞ！カッコいいだろう！」

『カッコいいだろう』って言い方は妙に子供じみていたが、言われてはいそうですかと普通は頷けないだろう。

魔法で子犬を獰猛な獣にしてしまうなんて、聞いたことも見たこともないのだ。そんなことできるなんてことも、私は知りもしないのだ。

私はそれに驚くとともに、やはりティアもケルヴェロッカもただの人間ではないのだと、そこで初めて認識することとなった。

これまで私が生きてみてきた魔法と名のつくものは、大きく二つに分類される。

一つは天使が使う魔法だ。これは言い伝えによると天使は白き神と契約を交わしたことで、永遠の寿命とともに手に入れたのが魔力であり、それを行使したものが魔法ということになる。（まあ、もうそんな話はどこまで本当か分からないが）

ともあれ、天使は天使というだけで魔法を使えることができる。

この場合、魔法を使うための魔力の根源は、天使本体ということになる。

そして、もう一つは人間である私も使うことができる魔法。基本、神に見捨てられた人間は天使と違い魔力を有しておらず、魔法を使うことはできない。

しかし、黒の剣（ローラレライ）など所謂魔法アイテムを介した場合、人間でも魔力を使用することができるのだ。

この場合、魔法を使うための魔力の根源は、天使と違い魔法アイテムということになる。

天使がどういった魔法を使うか詳しくは知らないが、二つの大きな違いはその魔力の根源に求めることができるのだ。

しかし、今、目の前の二人はどういうことか、人間が有していない魔力を、天使と同じように自身の体に有している。

私は自分の肌に強い魔力をひしひしと感じていた。そして、見たところ彼らは魔法アイテムらしきを持っていない。

更に目の前の二人から立ち上る魔力。（ケルヴェロッカは銀色、ティアから深紅のオーラみたいなものが見える）

それは、肌で感じるだけでなく、眼に見えるほど強い。

いい加減に、自分の予想を超えた出来事にも慣れてきてもいいところだが、人の良い私はそれでもやはり驚いてしまう。いや、驚きというよりは戸惑い、疑心といった方が正しいのかも知れない。

・・・彼らは、本当に人間なのか？

人間じゃなかったら、何なんだと自分で突っ込みを入れたくなるような馬鹿げた問いだと思う。

しかし、それは私は真剣に自身にそれを問うてしまうほど、眼の前の二人に戸惑っているということなのだ。

『サア・コッチヨ』

そんな風に一人戸惑いに揺れていると、ふと耳に聞き覚えのあるような女性の声がしたような気がして、私は辺りを見回した。
「どうかした、ヒロ？」
「あ・・・いや。」
ティアの言葉にも気持ち半分で言葉を返して、きょろきょろとなおも周りを窺う。
誰かに呼ばれたような気がした・・・が、見回しても白き神やティア達のほかには天使が倒れているだけで、灰色の花園に特に変わった様子はない。
だが、気配には敏い方だと思っているし（そうでないと、中々不浄の大地を生き抜けはしない）、だから何だか気になるのだ。

『ヒロ・ヒロ』

・・・やっぱり、声が聞こえる。でも、その声の主は見当たらない。
何だ？どうして？
そう、この声は聞いたことがある。だが、その人物のはずがないのだ。
だって、彼女は・・・。
そう思うからこそ、こんなにも心が騒ぐ。

「おっさん、何でそんな挙動不審なんだよ？」
「きゃんっ！」
「大丈夫ですか？」
もはや、彼らの声に答える余裕すらなかった。
私の耳に聞こえてきたのは、声だけではなくなっていた。

『ソコニ・アナタハ・イルノデショウカ』

歌。彼女の歌だ。
「――――いあ？」
私は掠れた声で彼女の名前を呼んだが、声は意味をなさない音となる。
おかしい。おかしい。彼女の声がどうして聞こえる？彼女の歌がどうして聞こえる？
だって、彼女は、私が・・・殺したんだぞ？
ティア達は明らかに様子のおかしい私に戸惑いを見せている。
その様子から、彼女たちには声も歌も聞こえていないんだろうことは分かる。
これが、もしかしたら、彼女を失った直後に何度もあった幻聴の類かもと一瞬思った。しかし、悪夢に襲われることは未だにあるが、幻聴はもう何年も前からなくなっていた。
ないとは言い難いが、それでもこんな状況で自分が幻聴に襲われるなんて思いたくなかった。
それに、黒の剣（ローラレライ）が騒いでいる。
混乱のあまりにすぐには気が付いていなかったのだが、言霊で発動させていないはずの黒の剣（ローラレライ）が熱い、それに黒く染まり始めているのだ。
こんなことは、黒の剣（ローラレライ）の力を解放させてから初めてのことだった。
間違いないと思った。
「・・・こだ？」
「ヒロ？」
ティアが気遣わしげに私の肩に手をかける。私はそれを振り払って、今度は力の限り叫んだ。

「何処にいるんだ!?出てきてくれっ!!!」

いる。いる。彼女がここにいる。

焦る感情、彼女への罪の意識、そしてずっと心の中にあったありえない希望が私に言葉を叫ばせる。根拠のない確信を私に抱かせる。

「さすが、ヒロ。よく気がついたね。」

ああ、やっぱり君は生きていてくれたんだ。

そんな思いを抱いて私はその声に振りかえった。その声を聞けば、それが女どころか男のものだと分かるはずなのに、この時の私にはその判断さえできなかった。

彼女だと思って振り向いた先にいた人影に、私は強い落胆を覚える。

「・・・・っ!エヴァンシェッド!」

喜色に満ちた白き神の声。それを聞いても、彼女のことが頭を占めている私には何の感情も湧いてこない。

ただ、どうして彼女ではなく、エヴァンシェッド、この万象の天使が出てくるのだと不思議に思ったくらいだった。

「っち。」

本当なら、今のティアのように舌打ちでもしたい感情にならないといけない状況のはずなのに。全てが彼女のことに支配されて、今の私は麻痺しているのだ。

「気配も魔力も完全に消し君らの背後から一気に拿捕(だほ)してしまおうと思ったけど、まあそうは上手くいかないってことか。できたら、無駄な抵抗はしないでもらいたいなぁ。」

そう言って、透明になる魔法でもかかっていたのか万象の天使以下、次々に天使たちが灰色の空間から突如として姿を現してくる。

違う。違う。
私はお前たちになんか会いたくないんだ。

今にも万象の天使に飛びかからんばかりの白き神を止めるようにケルヴェロッカが彼女を押さえ、ロッソが先頭になって天使たちを威嚇するように唸り声を上げ、ティアが剣を構える。
だが、私は何もしない。いや、何もできないのだ。
心の麻痺が、いつのまにか思考も体の自由すらも麻痺させていた。
「おい！おっさん、しっかりしろよ！！」
ケルヴェロッカの罵声にも何も動かない私。
今の私を動かすことができるのは、ただ一人。

『ソウ・ワタシハ・ココヨ』

やっと会えた。
私の視線は彼女を捉えることができた。
次々に現れた天使たちの先、灰色のドレスに身を纏い、まるでこの花園の主かのように、ぴったりと花園に合わさった姿で彼女は私に微笑んでくれる。
歌は止まず私の中で響き続け、視線は天使たちなど一切映さない。
人間も、天使も、罪人（アークヴェル）の巡礼地での出来事も、聖櫃（せいひつ）すら、全てのことが私の中からなくなって、私は五年前の私に立ち戻っていた。

しかし、この時の私は気が付いていなかった。
黒の剣（ローラレライ）、いつもは黒い魔力を纏（まと）っているはずの私の黒の武器（カシュケルノ）が、どういうことか灰色の魔力を発していたことを。

第六十一話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の二（後書き）

ヒロの過去編と銘打っている第三部ですので、そろそろその一端を・・・と言う訳で、その始まりです。（本当に始まりで、まだ何も分からないですよね（笑）すいません）でも、次は完全にヒロの過去編となります。というか、次はヒロ回想編です。

第六十二話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の三

「君が好きだ。私と一緒に生きてほしい。」

それは恥ずかしながらも、精一杯背伸びをした幼かった私の愛の告白。

第六十二話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の三

『ヒロ・コッチヨ』

ユイアが私に微笑んでくれている。

私の記憶の中のユイアと寸分変わらぬ姿に、フラフラと吸い寄せられる様に私は歩んでいく。

「バッカ！何やってるんだよ！！」

「ヒロ？！」

静止の声は聞こえたが、全てが麻痺した状態だった私には無いも同じだった。

ユイアにずっと会いたいと思ってきた、でも会いたくないとも思ってきた。

会いたいと願ったのは、私はユイアを愛しているから。

そして、会いたくないと願ったのは、私がユイアを殺した男だから。

そのどんなに違うと首を振っても変わらない事実が、ユイアを愛していたその分だけ私を罪の意識で苛(さいな)む。

そして、私もまたそれでいいと思って生きてきた。
だから、再びユイアを目の前にして、喜びというよりもどうしていいか分からない思いの方が強い。

「ヒロ？」
そして、美しい天使も私が無防備に近づいてくる様に、あからさまではないにしろ訝(いぶか)しげな表情を浮かべている。
しかし、万象の天使に近づく私に天使たちは武器を鼻先に突き付けてくる。私はそれを手で自分の目の前からどける。そして、
「どけ。」
驚くべきことに私の声に反応するように黒の剣(ローラレライ)から魔力が溢(あふ)れだし、万象の天使以外の天使たちを吹っ飛ばしたのだ。
言霊(ことだま)も剣を振るモーションもなしに黒の剣(ローラレライ)の力が発動していることも、魔力が黒ではなく灰色であることも、今までにないことだと私は気づいていた。
でも、私はそれらを全て無視した。今の私には何も考えられないのだ。
「・・・。」
そして、私の力に唯一吹っ飛ばされなかった万象の天使。
しかし、私を前に何故だか茫然としている。その理由は私の知ったことではないし、これ幸いと私は彼の横を何事もなく通り過ぎる。

そうして、私はやっとユイアのすぐ傍まで来ることができた。

「ユイア。」
眼の前のユイアがついに頭のおかしくなった私の妄想の産物か、それとも本当に本物の彼女なのか定かではない。
どうして、いきなりこんな場所で彼女が現れたのかも分からない。
しかし、こうして手の届く所まで来ても消えないユイアと対面して、そんな訳のわからない状況や罪の意識が全てが消えてなくなる。

そして、私の心に残ったのはユイアを愛していたというその事実だけだった。

「会いたかった。」

私の言葉にザワリと、灰色の花園がざわめいた気がしたが、今の私には全てがどうでもいいことだった。

私とユイアの話を語るには、現在から5年前に立ち戻る必要がある。

その当時、放浪の途中に病魔に倒れた父親を亡くした私は、それでも流離人(さすらいびと)として一人旅を続けていた。

流離(さすら)うことは別に私が始めたものではない。しかし、流離(さすら)うことを終わりにしようなどという頭は私にはなかった。

何故なら流離(さすら)うこと自体が私たち、流離人(さすらいびと)の存在意味である以上、流離(さすら)うことをやめた時点で私は私でなくなるからだ。

だから、私は寂しくとも、悲しくとも、最後の流離人(さすらいびと)になったとしても流離(さすら)うことをやめるわけにはいかないのだ。

しかし、恥ずかしながら父親を亡くしたことで悲しみを抱えていた私は、それを少しでも紛らわせるために学者まがいのことをしていた父親の研究を引き継ぐことを考えた。

父親が何を調べていたか、いまいち頭の悪い私にはよく分からない部分もあったのだが、どうやら終焉(ディルト・ヴェネス)の宣告が下る前、人間たちの文明が栄えていた頃を調べていたようだ。

それは、一緒にいて何となくわかっていた。だが、死ぬまで父親は何を調べているかを教えてはくれはしなかった。

私に残された手がかりは、父親が残したたった一切れのメモ。
それには『異端の一族』、『最果(ロシギュナス)ての渓谷の戦い』、『罪人(ディッチ・ア・)の処刑台(ヴァリス)』、『翼』と、たった４つの言葉が並べられていた。
この４つの言葉には共通点もなければ、私の思い当たらない言葉もある。正直、このメモが何を指すのかは私には皆目見当もつかなかった。
ただ、『翼』の所に何度も丸で囲まれていることから、父親はこの『翼』について何かを調べていたのではなかろうかという推測を私はたてた。

『翼』・・・古い言葉では翼(エヴァ)とも読む。

それから、私は父親に聞いたことのある１つの話を思い出すことができた。
確か神に愛された天使から悪魔が魔力の宿った翼を奪い取り、不浄(デイス・エンガッド)の大地に封印してしまったという話。
しかし、所詮(しょせん)は御伽噺か伝説でしかないその話の何を調べていたのか？
結局、私の推測はそこで停滞することとなる。
だから、私はとりあえず他の知っている言葉を調べてみることにしたのだ。

そして、そのために私は一つの街を訪れ、ユイアに出会うこととなる。

街の名前は、ミンナアテナ。
そして、そこから少し歩いた所にもう街だった面影もない亡国(ドルガバ・)の廃墟(チェシエ)の一つ・・・といっていいか分からないが、ともかく千年前の人間の街の柱とか壁とかが少しだけ残っているような場所、罪人(ディッチ・ア・ヴァリス)の処刑台と呼ばれる場所があった。

そこが父親のメモに残された言葉の一つだと考えた私は、その場所を調べることにしたのだ。
野宿しても良かったのだが、折角街が近くにあるのだからと私はその街で宿をとることにした。

そして、その宿屋で働いていたのがユイアだった。

本当に何処にでも転がっていそうな出会いだったと思う。
最初は本当に客と店員。
さしたる接触もなく、私たちはすれ違うだけだった。
しかし、ユイアが罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）について昔から語られている伝説を知っているという話を宿主から聞いたことで、私が彼女に声をかけたことが始まりだった。
「罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）について話を聞かせてもらえないか？」
罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）を調べ出して一週間ほどたっていたが、父親の研究の手がかりになるようなものは何も見つかっておらず、私としてはユイアはの話は藁（わら）に縋りつくような心地だった。
「・・・はぁ？」
しかし、思えば唐突でかなり胡散臭（うさんくさ）い物言いだっただろう。（事実、あとでユイアに話を聞いたところ、心外だが初めはナンパだと思われていたらしい）
それでも私は一応宿屋の客な訳で、ユイアは怪しみながら私の話を聞き、そして、私の言うことを納得してくれたらしく色々話を聞かせてくれることになった。
結果、私が父親から聞いた『翼』の話に興味をもったらしいユイアは、私の調査に協力してくれるようになった。

それから私たちは色々話をするようになる。
罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）の話だけじゃない。ミンナアテナを出たことのないというユイアは、不浄の大地（ディス・エンガッド）を旅し続けてきた私の話を聞きたがっ

た。私もそれに快く話をしてやった。
そうして、罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）を調べ、父親が調べていた研究について知っていくうちに、私はユイアを意識しするようになり、男として好きになってした。
最初はユイアといれば、父親も死に一人になって寂しいと感じていた自分を忘れることができる。その程度の認識だった。
しかし、気がつけばそれだけでは片づけられない大切な存在になっていたのだ。
恋とは本当に自分では抑えることも、止めることもできないのだと初めて知った。
だから、もしユイアさえ頷いてくれれば、罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）を調べ終わっても一緒にいられたらいいと思った。

ユイアとずっと一緒にいたいと願った。

そして、すべての悲劇が幕を開ける前夜。
何も知るはずのない私は、今まで使ったことのない種類の勇気を出してユイアを宿屋の外へと呼び出した。
「話って何？こんな改まっちゃって。」
ユイアはそう言って笑ったけれど、私は緊張のあまり顔を引きつらせるしかできなかった。（今も昔も、基本的に私は小心者なのだ）
だが、ここで逃げては男が廃（すた）る。
私は意を決して、ユイアに向きなおった。
「あのな・・・。」
「なあに？」
しかし、いざユイアを前に告白しようとすると、様々な感情が私の決心を鈍らせる。

無論彼女が私の思いを受け止めてくれれば、何も言うことはない。
だが、もし駄目だったらどうしよう？と臆病（おくびょう）な私が問いかけてく

るのだ。

そうなれば私が喰らうのダメージは勿論のこと、更に告白したことが原因でユイアと気まずくなってしまったら、それは私にとって思いが通じないことよりもきっとダメージが大きい。

女々(めめ)しい男と笑ってもらっても構わない。

だが、例えこの告白が上手くいかなくても、私はユイアには笑っていて欲しかった。私に笑いかけてほしかった。

流離(さすら)うことしかしてこなかった私には、両親以外に取り立てて親しい人間もいない。

だからこそその両親がいなくなった今では、きっとユイアだけが私のことをよく知っている人物なのだ。

その人と恋人・・・になれれば最高だが、せめてそれが叶わないまでも彼女の心の中の片隅に残りたいなどと、本当に自分でも女々(めめ)しいとしか思えないようなことを考えていたのだ。

だから、こんな土壇場になっても私は迷う。

本当に言っていいのか？

もし、断られたら、彼女の笑顔さえ見れなくなるかもしれないのに。

でも、ここで言わなかったら、二度と告白できないかもしれないんだぞ？

しかして、ものの数秒でかなり悶々と葛藤した私だが、いかんせん若かった私はもう考えることも面倒になって、一晩寝ずに考えたはずの告白の言葉も全部忘れて一気に言い切ったのだ。

「君が好きだ。だから、私と一緒に生きてほしい。」

さんざん、色々な状況を考えて様々なシュミレーションをしたくせに、出てきた言葉は味もそっけもない告白だった。

正直、言ってから失敗したと自分で自分を嘆(なげ)いたりもした。（ユイアの周りをリサーチした結果、ユイアはロマンチックな演出に憧(あこが)れているらしいと聞いていたのに）

失敗した・・・と返事も聞いていないのに、私の心はもう振られたも同然だった。

よって、どうやってユイアと気まずくならないようにしようとかと、落胆する気持ちも大きかったが、それでも瞬時に思考を切り替えた私だったが・・・

「うん。」

肯定の返事をして私に微笑む彼女が目の前にいて、頭が真っ白になった。

「へ？」

思わず間抜けな声が出る。

「だから、『うん』って言ったの。私もヒロと一緒に生きたい。ヒロが好きだから。」

照れくさそうに、でも嬉しそうに頬を染める愛らしいユイアは、そう言って私に抱きついてきた。

私も一瞬だけ呆けたけれど、ユイアの言葉の意味を遅くらばせながら理解すると、飛びあがるくらいに嬉しくて彼女を強く抱き返した。

私たちは死の大地と言われる不浄の大地(ディス・エンガッド)に生まれおち、神に背いた罪人として生き続ける運命下にある。

それを知っていても、あの時だけは自分が世界で一番幸せ者に違いないなどと、頭に花が咲いたような思いすら抱いた。

直後、奈落の底に突き落とされるとも知らずに、私はただただ通じあった思いに喜びだけに支配されていた。

第六十二話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の三（後書き）

ヒロ過去回想編というわけで、なんとも恥ずかしい文章ですいません。ヒロとユイアの恋愛を過程まで詳しく書けたらいいのかもしれないのですが（実際、細かい設定は一応あります）、あまり本編に関係ない部分ではあるので今回は告白の部分のみで端折らせてもらいました。いつか、番外編とかで書けたら・・・とは思っているんですが。まあ、あまり期待はしないでください（笑）

今まで見えるようで見えてこなかったヒロの過去。どうしてユイアをヒロが殺すことになるのか？それがついに次回明らかになります。

第六十三話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の四

神に愛された天使を妬(ねた)んだ悪魔は、天使の背中にあるその美しい翼の片方を切り落とした。

そして、神の力を宿した翼を二度と天使の元に戻らぬように、悪魔はそれを隠してしまったのだ。

隠された翼は天使の元に帰るために人間に話しかける。お前の願いをかなえる代わりに、自分を天使の元へ連れて行けと。

『ヒロは翼に何を願うの？』

古い御伽噺(おとぎばなし)に対する例え話のはずなのに、ユイアの表情は何故だか悲壮感(ひそうかん)に包まれていた。

彼女がそんな表情をした理由を、私は未だに知らない。

第六十三話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の四

悲劇の扉を開いた後の話をする前に、父親の研究について私が知りえたことを記したいと思う。これから起こる思い出したくもない出来事に、それは深くかかわる話となる。

はっきり言って私一人では父親の研究について何も知りえることはなかっただろう。

全てはユイアの語った伝承が、私を真実に近づけた。

それはユイアがこの地に古くから生きてきた一族の末裔(まつえい)であり、父親の研究を知る上で重要な伝承を知っていたためだ。

しかし、ユイアがその伝承を知っていたことが、もしかすると全ての悲劇の始まりだったのかも知れない。

何故なら私が真実を知らなければ、あの扉を開かなければ、きっとユイアが死ぬことなどなかったはずだから。

しかして、ユイアが私に語った話。

とある罪人が罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）で処刑されたという話が、私とユイアをあの扉の向こう、悲劇の始まりへと誘（いざな）うこととなる。

罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）は、その名の表す通り罪人を処刑するための場所だったらしいが、それは、人間を処刑するための場所ではあっても、人間たちが造った場所ではなかったという。

人間たちの過去の栄光の名残りである亡国の廃墟（ドルガバ・チェシエ）だと思っていた私は、まずそこで驚いた。

更に驚くことに罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）とは天使たちが、終焉の宣告（ディルト・ヴェネス）という人間たちに対する最大の罰が下る前に、人間たちを裁くための場所として機能していたというのだ。

罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）とは、天使が罪深き人間を処刑するための場所であったわけだ。

それだけでも、この当時は（現在はそうでもないが）天使に対してある種、神聖な印象を抱いていた私はその事実に愕然（がくぜん）としたことを覚えている。

そして、そんな場所にまつわる話としてユイアが語ってくれたのが、天使の片翼を切り落とした罪で処刑された罪人の話であった。

その罪人こそ、あの御伽噺（おとぎばなし）の『悪魔』に違いない。

ユイアの話を聞いて、私はすぐにそう直感した。
そして、伝承に話を戻すと寵愛（ちょうあい）していた天使の翼を奪ったその罪人に対し白き神の怒りは大きく、人間に対して翼のありかを話させるために惨（むご）たらしい拷問を繰り返したという。
しかし、罪人は決して翼の場所を教えようとはせず、それに業（ごう）を煮やした白き神は、罪人に処刑を言い渡した。

それも、処刑の中でも最も重い罪人に課せられるそれを。

白き神。
今その現物と実際に接した私は彼女の万象の天使への執着ぶりから、悲しいことにこの話を納得する部分もあるのだが、実態を知らない当時の私は白き神の罪人に仕打ちに戸惑いを隠せなかった記憶がある。（しかも、今考えればその処刑された罪人は、もしかしなくても私のご先祖様である訳で、・・・今考えても微妙な気分だ）
そして、その最も重い罪人への処刑方法というのが、『異端の扉』としかユイアにも名前しかわからないという謎の処刑だという。
まあ、結果として罪人は恐らくその『異端の扉』という名の処刑方法で殺されたのだと思う。
しかし、、ユイアの話もここで終わりとなり、実際の結末は今も知りえない。
とまあ以上のユイアが語った伝承から、いつくか父親の残したメモと重なる部分があることが分かると思う。

『異端の一族』
この言葉があるわけではないが、処刑方法の『異端の扉』と何か関連があるかもしれない。

『最果（ロシギュナス）ての渓谷の戦い』
これについては、物語に記述はないものの、時系列としては同時

代のはずだ。

『罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）』

罪人の処刑された場所。

『翼』

罪人が天使から切り落としたもの。

こうして父親が残したメモの言葉とユイアの語った伝承の関連を見つけたからと言って何が分かったという訳ではないのだが、とりあえず『罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）』と『翼』という二つは繋げることができた。

しかし、実際に見直してみると分かるように、伝承と繋がりのない言葉、説明がつかない部分もある。

また、例え私の考えが正しく、父親が調べていたのがあの御伽噺（おとぎばなし）の『翼』のことだったと仮定したところで、どうして父親がそれを調べていたかも私には皆目見当もついていない。

結局、全てがまだまだ謎は深まるばかりなのだ。

だから、その話を聞いてから私はその罪人についての情報が罪人（ディッチ・ア・ヴァリス）の処刑台に残っていないだろうかと調べ回ることにした。

まだ、何か見落としている部分があり、それがもしかすると父親のメモに残っている言葉と繋がる何かかもしれない。

そして、その結果、私は罪人が処刑された場所を突き止めるにいたった。

古い文字で『異端の扉』と刻まれた石造りの扉を、罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）の隠された地下室から見つけたのだ。

それを見つけた日というのが実は悲劇の前日であり、ユイアに告白をした日であった。

地下室は『異端の扉』で行き止まり、他に通路もない。

更に『異端の扉』は私はいくら力を込めて押しても引いても開くことができなかったため、告白ついでに翌日私はユイアにその扉を見てもらうことを約束していた。彼女なら何か分かること、気づくことがあるかもしれないと思ったのだ。

しかして、明朝、思いが通じあった興奮冷めやらぬまま、私はユイアと少し照れくさいような感じで向き合うこととなる。

「・・・おはよう。」

私の声は若干(じゃっかん)上ずっていた。

「おはよう、ヒロ。」

しかし、ユイアの方は私が照れているのが恥ずかしいくらいに、平常通りの彼女のように見えた。

もし、照れずに私が彼女の顔を見れていれば、ユイアの表情がいつもより青ざめて、強張(こわば)っていることに気がついたかもしれない。

だが、この時の舞い上がっちゃった私には、すぐにそんなユイアの様子に気がつくことができなかった。

しかして、私とユイア、思いが通じあったと思った途端、すれ違い始めた私たち二人で連れ立って『異端の扉』に向う途中、ユイアが不意に言葉を発した。

「・・・ねえ、もし本当に『翼』があったら、ヒロは何かお願いすることがある？」

いざとなれば扉を壊す覚悟で、宿屋で私の身長と同じくらい大きなハンマーを借りて（どうして、宿屋にこんなものがあるか知らないが）担いでいた私は、突拍子もないユイアの問いに体が少しふらついた。

「お願い？」
正直、父親の研究を引き継いだという感覚しかない私には考えもつかないような質問だった。（そもそも、そんなお伽話みたいな話は信じない性質だ）
しかし、ユイアは少しばかり夢見がちな性質をもっていることを知っている私は、ここで正直なところを言って彼女の機嫌を損ねるのも面倒なので『お願い』を考えてみたが、とりあえず昨日ユイアに告白を受け入れてももらったばかりで満たされている自分に気づいてしまい、結局『お願い』は何もでてこなかった。
しかし、そんなこと恥ずかしくてユイア本人に言えるわけもなく、
「そうだな・・・、別に今はないな。」
と言葉を濁すしかなかった。

「本当？」
だが、ユイアの方はそれでは納得がいかないようで、妙に強い語調で突っ込まれた。
「あ・・ああ。」
どちらかといえば、おっとりとした普段の彼女とは違うそんな様子に私は戸惑う。
「誰かに会いたいとかないのっ！？」
だが、そんな私の戸惑いにも気が付かずユイアは更にそんなことを言い出した。

誰かに会いたい？

そんなどうにも限定された『お願い』をユイアが言い出したことにも疑問を感じた。
「・・・まあ、死んだ両親には会えるものなら、会いたいかもしれないけが。とりたてて、会いたいと思う人はいないな。」
そもそも、会いたい人と言われても旅を続けてきた私にはそんな

人は両親以外にはいはしない。
そんなことは、私の生い立ちを聞いているユイアならば分かりそうなものだが。とどうにもユイアの質問に疑問を隠せない私だが、
「本当っ！？」
それでも、ユイアは納得してないように更に言葉を重ねてくる。
いい加減、温厚な私もちょっとばかしイラっとした。

「だから、いないって言ってるだろ？！どうしたんだよ、いきなり？？」

私の声も言葉も自然と語気の強いものとなる
そこで、ユイアもやっと自分がらしくないことをしていると気がついたのか、何かに切羽詰まったような表情が私から逸らされた。
「・・・ううん。ごめん、何でもない。」
そういうユイアの表情は見るからに暗い。
どう見ても、何でもいいという風じゃない・・・が、この様子ではどうしたと聞いても押し問答になるだけだと思った私はユイアに話を振ってみることにした。
「じゃあ、ユイアはどうなんだ？」
「・・・え？」
虚をつかれたようなユイアの表情。
もしかして、昨日の今日だけに私の告白を受けたことを後悔でもしているのかと、心中をヒヤリとした何かが通る。
「もし、『翼』が本当にあったら何を願うんだ？」

「私は、ヒロとずっと一緒にいたい。」

しかし、間髪入れずにけってきた言葉に、面をくらった反面、非常に照れくさくて、心底ほっとした。

・・・どうやら、私の思いを受け入れてくれたことに後悔はないらしい。

しかし、それならどうして、これほどにいつもと様子が違うのだろう？

それをユイアに聞くべきだろうと思うが、彼女の言葉が嬉しくて私は衝動的にユイアを抱きしめた。（ハンマーは地面において）

「そんなの『翼』に願うこともないだろ？私たちはずっと一緒だ。」

「ほ・・んとう？」

頼りなさげな言葉とともに、おずおずと私の背中にまわされる手。

「ああ・・・っていうか、そうじゃないと私も嫌だ。」

自分で言っていても恥ずかしい言葉だが舞い上がってしまった私はそんなこと気にならなかったし、同時にユイアのおかしな様子のことまで気にならなくなった。（というか、自分で手一杯でそこまで頭が回らなくなった）

「だから、他の願いにしろよ？何かないのか？」

「・・・じゃあ、歌がもっと上手くなりたい…かな？」

本当にユイアの願いは欲がなかった。でも、だからこそとても愛おしかった。

「今でも十分・・・上手いさ。他には？」

それから、しばらく私たちは抱き合いながら、とりとめのない会話を続けた。

思えば、もっと様子のおかしいユイアに突っ込んで話を聞けばよかったのだ。

いや、様子がおかしいと分かった時点で、彼女を罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）へ連れていかなければよかったのだ。

そうすれば、彼女を失わなくても良かった。彼女を巻き込まなく

ても良かったのに。

全てが、惨(みじ)めで、叫びだしたいような後悔でしかないが、私は未だにそれを思わずにはいられない。自分を罵(ののし)らずにはいられない。

そして、『異端の扉』が開く。

全ての悲劇の始まりの扉が・・・。

第六十三話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の四（後書き）

ユイアが死んだ理由が明らかに・・・とか言ってたくせに、結局まだ確信まで至らずに申し訳ありません。そこに至るまでというか、色々補足したい部分が思ったより多くなってしまったのです。次こそは！

あと、お気づきの方も多いでしょうがサブタイトルを修正しました。話数が多くなってきたので、ある程度、話で繋がりのある部分はサブタイトルでその区切りが分かりやくすできたらと思いまして。でも、内容は全くかわってないです。

第六十四話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の五

「黒の剣（ローラレライ）には力が眠っている。」

それは、私の幼い記憶。

父親は言葉の意味を分かっていない私に、それでも言い聞かせるように語りかける。

「いいか？その力を決して解放してはいけない。それは人が手にするには大きすぎる力。そして、もし力を手に入れようとすれば、お前は対価として大切な存在（もの）を差し出さなければならない。・・・ヒロ、お前は大切なものを無くしたいか？」

当時の私はその言葉の意味の半分も理解していなかったが、父親の物言いが何だか恐ろしくて力いっぱい首を横に振った。

でも、今なら父親の言葉の字面だけでなく本当の意味も理解した上で、私はその言葉を首が千切れてもいいというくらいに首を横に振る。

あの頃より強く、鮮烈な気持ちを抱えながら。

・・・しかし、そんな感情を抱えた所で、何よりも大切なものを失ってしまった今となっては全てが遅い。

第六十四話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の四

罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）という名こそあれ、そう呼ばれている土地はほとんど何もないただの荒地に近い。

不浄の大地（ディス・エンガッド）では見慣れた風景である荒地に、いくつかの建物の残骸らしき壁や柱がぽつぽつと点在しているだけで、目につくものな

ど何もありはしない。
名や由来を知らなければ、普通に通り過ぎてしまいそうな場所なのだ。
しかして、そんな何の変哲（へんてつ）のない荒地で、偶然にも地面のひび割れの隙間から地下室への入口を見つけたことは、ある意味奇跡に近かったのかも知れない。
だが、この時の私はそれを見つけたことは父親の導きであり、何としても『異端の扉』の先に進まなければという使命感を余計に燃えさせる結果となった。

そんな感情を後に死ぬほど、いや死んだ方がましなほどに悔いることになるとも知らずに。

「何か気付いたことはないか？」
昨日、私はそれこそこの『異端の扉』のある狭く暗い部屋をはいずり回り、隠し通路やスイッチでもないかと探したが、結局は何一つ見つけることはできなった。
だが、この地に長く息づき、私にあの伝承を教えてくれたユイアであるならば、もしかしたら何か気がつくことがあるかもしれない。
そんな一縷（いちる）の望みを抱いて私は、松明（たいまつ）の赤い光で揺れる部屋の中をきょろきょろとするユイアに言葉をかけた。
「えっ？！ああ、うん・・・、そうね・・・えっと。」
しかし、この地下室に来て十数分は経っているが、ユイアの方はどうにも上の空だったようで、私の問いに口を濁す。
それを見て私は外には出さなかったが落胆を感じずにはいられない。（だが、ここで感情のままにため息なんてつこうものなら、ユイアが傷つくのは目に見えているので、口の中でため息を押し殺すのだ）

さて、頼みの綱のユイアがこんな様子ではどうしたものか。

ハンマーもわざわざ重い思いをして（ギャグじゃない）持ってきたものの、改めて重厚で頑丈そうな石の扉を目の当たりにしてみると、どうにもブチ破れそうな気がしない。

しかして、父親の研究を知る上で恐らく大きな手掛かりになるであろう扉を前に、再び私は八方塞状態になってしまったわけで、私の中にここからどうしたものかという自分への問いが思い浮かぶ。

どうしたものかというのは、すなわち父親の研究を調べることを続けるか、やめるか。

正直、父親の研究を調べることは必要に迫られて始めたことではない。

はじめは父親のいなくなってできた空虚な気持を紛らわすために父親の研究を追い求めていたし、そういった部分はユイアと出会ったことによって相殺という訳ではないが（こういうものは誰かが誰かの代わりになるというものではないだろう）、ある程度自分の中で消化できてきていた。

父親の研究を調べる理由は現在、正直ないに等しいのかも知れない。

しかし、ここまで調べたのだ。

最後までやれるところまではやってしまわないと、どうにも後味が悪い出ないか。それに・・・

親父・・・、貴方は何のために、何を求めていた?

調べれば、調べるほどに分からなくなってくる、父親の研究の意味とそれを調べていた動機。

故人のことをあれこれと調べ回るのは、あまり褒められたことではないのかも知れない。

だが、ずっと一緒にいたにも関わらず、父親が生涯をかけて調べていたことを息子である自分が知らないというのは、子供な考えだと言われてもいいなんとなく嫌なのだ。

そう思いながら、ふいに腰に差したまましばらくその存在を忘れていたそれを私は取りだした。

父親が私に残してくれたたった一つの遺産である、黒の剣（ローラレライ）。

私はそれを握りしめて自分に対する問いを提示しながらも、結局は自分の決意を新たにするのである。

やはり、どうしても『異端の扉』の先を見てみたい、父親の研究が何であったか知りたい・・・と、一人で黙ってそんなことをあれこれ考えていると、ユイアがまじまじとこちらを見ていることに気がつく。

「どうかしたか？」

私は尋ねる。だが、私の方を見ているのに、声も発せずにこちらを見つめたまま固まってしまっている。

やはり、様子がおかしい。

私は本格的にユイアの心配をし、彼女を家に帰そうと思ったのだが、その前にユイアが口を開いた。

「ヒロ・・・、その剣をいつも大事にしているわよね？」

脈絡（みゃくらく）のない、唐突な問いだった。

しかも、別に黒の剣（ローラレライ）をさほど大事にしているという認識は私にはない。だが、とりあえず彼女に肯定の意を示す。

「？あ、ああ。まあ、先祖代々受け継がれてきた剣だからな。」

言いながら気がくつ、ユイアに黒の剣（ローラレライ）の話はしていない。というか、本当にこの頃の黒の剣（ローラレライ）は何処にでもある剣にすぎなかったので、とりたてて説明うする必要を感じていなかったのだと思う。

だから、ユイアが急に黒の剣（ローラレライ）を気にする理由がさっぱり分からなかった。
ここに来るまでの『翼に対するお願い』の話といい、ユイアが私に何かを言いたいとしか見えない態度。だが、彼女が何を言いたいのか分からない。
分からないから不安になる。

「・・・そう。素敵な剣ね。」
ともかく、街に一度帰ろう。
「そうか？」
そう思って、それを伝えようと思うのに、ユイアが話を振ってくるので中々それを話すきっかけができない。
「うん。・・・ねえ、ちょっと見せて貰ってもいい？」
更にこんなことを言い出す始末だ。
断る理由はないだろう。
しかし、早く帰った方がいいという思いと、何故だか嫌な予感がして私はユイアの申し出に躊躇（とまど）いを感じた。
だが、黒の剣（ローラレライ）を見せた所で彼女が何をする訳でもないし、拒否するのも変な話なので、持っていた黒の剣（ローラレライ）を手渡した。

「思ったより重いのね。」
ユイアは両手で黒の剣（ローラレライ）を持つ。
「そうだな。見た目より重い感じがするかも知れないな。」
「ヒロは重いとは思ってないの？」
「父親が死んでからずっと肌身離さずって感じだからな。もう、私の体の一部だ。」
「ずっと？」
「あたりまえだ。こいつは私の命を守るものだからな。なければ、生きることも私はできない。」
自身を守るものがなければ生きることはできない厳しい世界であ

るのが、不浄の大地（ディス・エンガッド）だ。
「・・・そうなんだ。ヒロとずっと一緒かぁ。」
何気なく言われた言葉だったが、発したユイアが一瞬だけ見せたうっとりとしたような、何かに浮かされたような表情に、どきりと心臓が鳴った。
それは彼女に見とれたとか、そんな生易（なまやさ）しいものではない。何か冷たい、痛いものが胸を叩いたような感じがした。

・・・何だ？

そして、その正体が分からないままにユイアがおもむろに黒の剣（ローラレライ）の鞘から刀身を取り出す。
そのゆったりとした動作、剣など触ったことのないような危なっかしい手つき、もしかしたらそれに対して私は動揺しているのかもしれない。
だが、本当にそれだけか？
そんな妙に不安で、いたたまれない様な気持ちで私はユイアを見つめていた。
ともかく、何でもいい早くここを出よう。そう思って、私は今度こそ街に帰ろうとユイアに言おうとした。しかし・・・、

ギ・・・ギギギィ・・・・

『え？』
何が鍵になったのか、はたまた何も鍵にもなっていないのかも知れない。
しかし、それはあまりにできすぎのタイミングで起こった。
まるで黒の剣（ローラレライ）の刀身の出現に呼応するかのごとく、私の動揺に、ここから早く出たいという気持ちに呼応するかのごとく、固く閉じ

られていた『異端の扉』は開いたのだ。

両開きの重たそうな石の扉の開く乾いた音。
同時にヒンヤリとした、何か外の空気とは明らかに違う何かが混じった匂い、そして気配が広がっていく。
そして、開いた先に広がる松明の光が届かない闇・・・いや、闇じゃない。
はじめは真っ黒な闇、黒だったはずのそれに白い色がぐるぐると混じり、そして次第に白と黒が混じり合っていく。

その二つが、溶け合うようにしてできた灰の色。

何が起こっている？
突然すぎる展開に、私は驚きを隠せない。
だが、それはその灰色から瞬時に伸びてきた黒い腕のようなものがユイアを掴んだことで吹っ飛んだ。
「きゃぁっ！！！！」
ユイアの悲鳴が短く上がり、灰色の世界の先に彼女の声も姿も全てが消えた。
「ユイアァ！！！！」
その時の私に躊躇（とまど）いの言葉など思う浮かびもせず、私は自分を守る武器すらユイアとともに攫われて手元にないことにも気付かずして、ただユイアを追って灰色の世界に飛び込んだのだ。
飛び込んだ瞬間に水中に入ったように、鼻や口に何かが入ってくる息苦しさ。だが、それはすぐに絶ち消える。

そして、私は何もない灰色だけが広がる空間にいた。
「ユイア！？ユイア・・・っ！」
だが、私はそんな異様ともいえる景色に気を取られる余裕もなく、黒い手に攫われた彼女の名を叫んだ。

辺りを見回してみても彼女と黒い手の影は、私からは見えない。
気持ちが焦った。

『落ち付け。』

「誰だっ！？」

私の近くに気配はないはずなのに、誰かが私に話かけてきた。

『誰でもいいだろ？俺はお前を助けてやる。お前は俺の言うとおりにするんだ。』

傲慢で、妙に偉そうな物言いだ。

「急に現れた奴の言うとおりにすると思うのかっ！？」

そんなことよりも、今はユイアだ。

頭に響くように語りかけてくる男の声など、無視して私は駈け出します。

『俺の言うことを聞かず、この封印されし異端から生きて帰れると思うなよ。』

「じゃかぁしいっ！」

走ってもついてくる纏わりつく声に苛々して怒鳴る。

自分の生き死により、ユイアの安全確認の方が先だ。

私のその気持ちを察したのか、はたまた元々そのつもりだったのか男の声が私の求める言葉に代わる。

『・・・女の行方も知っている。』

「それを先に言え！！」

『だから、言うことを聞け。』

右も左も分からない空間。ユイアの声も姿もつかめない中、頼れるのは怪しげなこの男の声だけしかない。

無論、男を信頼するわけではないが、今の私に他に手段はなかったのだ。

しかして、突如放り込まれた灰色の空間で私はユイアを求め、聞き覚えのない声しか聞こえない男に導かれることとなる。

第六十四話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の五（後書き）

様子のおかしいユイア。開いた『異端の扉』。そして、その先に広がる封印（エルヴァナンド）された異端。ついに、ヒロ過去回想編も佳境に近づきつつあります。（第三部はもっと続きますが）

第六十五話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の六

――灰の色

それは、白と黒が混じり合いし異端を象徴せし色。
白は生命を司り、黒は死を司る。
その二つが相成(あいな)る灰の色とは生きながらに死して、死にながらにして生きしことを意味する、生と死が混在せし存在を表す。
生者でもなく死者ですらない異端なる存在にして、生と死すら超越した全てを支配する存在。

しかして、その存在は異端の扉の内で永きにわたり封印され続けている。

第六十五話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の六

「それで!?どうすればユイアを助けられるっ!」
灰色しかないだだっ広い空間には私だけしか存在していない。
ユイアの気配の欠片(かけら)すら感じられない現状が、私は苛立たせ焦らせる。
そんな私を怒らせたいのか、落ち付かせたいのか、男の声はどうにも緊張感がないままに私の頭の中に響く。
『・・・お前、それしか聞くことないの?もっと、危機感もって冷静になれよ。ほら、入ってきた扉だってなくなってるぞ?お前、自分がここから帰れる手段がないのに女の心配しかしねえの?』
声の言うことは、今考えれば至極常識的な言葉だ。
だけけれど、冷静さなど微塵(みじん)もない私にはそれが癪(しゃく)に障った。

「うるさい！自分の身より、先にユイアだ！！ここから帰る手段など、それからでいい！」

訳の分からない状況で頼るもののない私にとって、この声は残ったたった一つの手がかりである。

本来なら怒鳴り散らすなんてもってのほか、下手に出てこの声に見捨てられないようにするのが当然だ。（今の私ならそうする。信用こそしないが、利用するために下手にでる）

だが、この時の私にはそんなことを考える余裕すらなかった。

ともかく、ユイアの安全を確かめるまでは生きた心地がしなかったのだ。

しかし、そんな態度の悪い私でも幸いに声は私を見捨てはしなかった。

『仕方ねぇなぁ。（こそっ・・・まあ、そうじゃないと困るしな）じゃあ、黒の剣（ローラレライ）の気配を探れ。』

声の聞きにくい部分もあったが、それでもどうすればユイアを見つけられるかという手段の部分は聞き逃さなかった。

「黒の剣（ローラレライ）？」

『そうだ。いいか？異端の扉が開いたのも、お前の女がアレに攫われたのも黒の剣（ローラレライ）が原因なんだよ。黒の剣（ローラレライ）は天使の翼を切り落とした悪魔の武器、アレは未だにニルヴァーナの命令に忠実に従っているだけなのさ。』

どうして、声が黒の剣（ローラレライ）のことを知っているかも気になったが、それよりも衝撃だったのは、黒の剣（ローラレライ）が翼を切り落とした悪魔の武器だということ。

こんな偶然があっていいのだろうか？

いや、これは本当に偶然か？

『アレは悪魔を処刑するため、ニルヴァーナが造りだした異端の処刑人。アレは黒の剣（ローラレライ）の気配に反応して、天使の翼を切り落とした黒の悪魔が来たと思って、それを攫ったんだよ。』

亡くなった父親が私に教えてくれなかった研究を探し求めてやって来た罪人の処刑台(ディッチ・ア・ヴァリス)。

そこで聞いた手がかりの一つである『翼』に関連した処刑された罪人の話。それは、私が幼い頃に聞いた不浄の大地(ディス・エンガッド)に伝わる『翼』の伝説と繋がった。

そして、今私の一族に代々伝わる黒の剣(ローラレライ)とその伝説もが繋がったのだ。

頭の片隅に残っている冷静な自分が、父親があの『翼』のことを調べていた理由が見えてきたと囁き(ささや)、私に声にもっと話を聞けと言うのが聞こえるような気がする。

しかし、今はそれどころではない。私は強く首を横に振った。

知りたかった答えが目の前にあるかもしれないという誘惑はあった。

しかし、それも所詮はユイアのことを考えれば一瞬のことで、私はすぐさま言われた通りにユイアを探すべく黒の剣(ローラレライ)の気配を探すために意識を集中させた。

しかし、現在ならばともかく5年前の黒の剣(ローラレライ)は力を封印されたままであり、魔力もないただの剣にすぎなかった。少なくとも私にとっては。

だから、いくら意識を集中しても黒の剣(ローラレライ)の気配など全く感じられない。

「くそっ！」

私はイライラして悪態(あくたい)をついた。

焦(あせ)りばかりが先行して、何もかもが悪循環だと分かっていても自分で自分を制御できない。

『おい、さっきらか落ち着けって言ってるだろぉ？大丈夫だよ。目

をつぶれ、耳をふさげ、五感全てを遮断(しゃだん)するんだよ。黒の剣(ローラレライ)とお前の魂は繋がってる。必ず、その気配が分かるはずだ。』

声の言っている言葉の意味は分からない。だが、何もかも見通しているようなその力強い声に今の私は従うしかない。

「・・・わかった。」

私は全ての感覚という感覚を殺し、無の状態になった。

そして全ての感覚を殺し私自身を消した時、瞑(つぶ)った視界の端に仄(ほ)暗(の)い黒い気配が映るのが感じられた。

これか？

私は僅かに感じられる気配を辿って、手探りのままに灰色の空間を目を瞑(つぶ)ったまま走った。気配は思ったよりも遠い。

どうせ、私以外物も人も何もないのだ。目を瞑(つぶ)って走ったところで怖がることもない。（だが、あとから思えば、気配の位置さえ大体掴めていれば、目を瞑(つぶ)っている必要などなかったのだ）

そして、全力で走りながら気配を辿った私だったが、薄い膜(まく)のようなものに弾かれてそれ以上先に進めなくなる。

「おいっ！どうやれば、この先に行ける！？」

私は息を荒くしたまま怒鳴った。

『黒の剣(ローラレライ)と同調しろ。』

「同調ってなんだ？！」

『もっと、もっと、黒の剣(ローラレライ)の気配を深く探れってことだぁよ。』

だったら、初めからそう言えと怒鳴り散らしたい気分だったが、それすら今は時間が惜しい。私は、すぐにもっと自分の意識を集中させる。

だが、冷静さの欠けた状態の私では、中々それもうまくいかない。更に声が私の集中を邪魔するように話しかけてくるのだ。

『この先には、本当の罪人(ディッチ・ア・ヴァリス)の処刑台(しょせん)が、あの悪魔の墓場がある。地上の廃墟なんぞ、所詮はカモフラージュにすぎねぇよ。』

本当の罪人（ディッチ・ア・ヴァリス）の処刑台？

乱される集中。もうすぐそこまで感じている黒の剣（ローラレライ）らしき黒い気配までも、ノイズがかかって感じられにくくなる。

『この灰色の空間は、世界に散らばった異端の扉によって閉じ込められた封印された異端（エルヴァナンド）。全ての異端につながる大元で、罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）はその異端の一つという訳だ。』

全ての異端？異端ってなんだ？

『・・・と、さっさと黒の剣（ローラレライ）と同調しろよ。お前の女が悪魔に間違われてアレに殺されちまうぞ？』

「黙れっ！！！お前がうるさいから集中できないんだっ。」

いい加減、頭にきて腹の底から湧き上がる感情とともに怒鳴った。

『あ、なるほどね。』

だが、声の方はあっけらかんとしたもので、それが更に私の神経を逆撫でする。

もっと、言ってやろうかと思ったが、そう思った次の瞬間に感じていた黒の剣（ローラレライ）の気配に変化が起こる。

それまで、感じていた黒の剣（ローラレライ）らしき気配の色は黒だった。

しかし、確かに黒だったそれが、異端の扉を開けた時に見た情景と同じ様に、白色が混じり合って次第に灰色へと姿を変えていくのだ。

『――――ォ。』

そして、頭の中に男の声とは違う声が聞こえた気がした。

「・・・？」

私はそれに一瞬気を取られたが、すぐに私を遮っていた薄い膜が

異端の扉を通り抜けた時と似たような液体状となり、膜によりかかっていた手がずるりと通り抜けたことで、すぐにそれを忘れた。

『お？同調成功だな？俺様はこれから先はお前の手助けはしてやれねぇ。最後に一つだけアドバイスしてやるよ。この先は、散らばった封印された異端の一つがいる罪人の処刑台だ。お前が黒の剣の真の力を手に入れれなかったら、お前には死しか残っていねぇ。精々みっともなく足掻くんだな。』

「おいっ！おま――――。」

声が頭の中で、次第に小さくなっていく。

それに追いすがるように私は声を発したが、灰色の液体みたいなものに突っ込んだ手がものすごい力で引っ張られ、私は結局声の正体を知ることのないままに、異端の扉をくぐった時と同じような息苦しさに見舞われた。

私は何も分からない混乱したまま、灰色の息苦しい液体の中をものすごい力で引っ張られ続け、そしてそれが終わったと思ったら硬い何かに叩きつけられる。

「いっ・・・。」

叩きつけられた衝撃で呻きのような声が漏れ、私は痛みのせいで倒れたまま蹲った。

だが、そんな痛みも耳に入った高い悲鳴によって消え去る。

「・・・ヒロ！！！」

「ユイア！！」

愛しい、愛しいユイアの声。

愛おしい女の悲鳴など聞きたくもないはずだが、今はそれすらも嬉しかった。それは彼女はまだ生きている証拠だ。

すぐに助けてやろうと、私は痛む体も忘れて立ち上がり、ユイアの名を呼んだ。しかして、私の目は驚愕に見開く。

そこは、先ほどの灰色の空間など微塵も感じさせない不浄の大地

の荒野の廃墟のようだった。
何かの劇場の廃墟のようで、円形の舞台が崩れた壁の向こうに見える荒れた大地と空から射す天然の照明に照らされている。
こんな景色は、何度も見たことある。
だけれど、そこでたった一つ見慣れない、見たくもない悪魔のような光景。

十字架に磔にされている、今にも処刑されようとしていたユイア。

「ヒロ・・・っ！逃げて！！！」

そして、磔にされたまま涙を流して私に叫ぶ彼女の後ろに大きな影。そして、心を縮み上がらせるような低く、暗い声が心臓に響く。

『ダレダ？』

それは、生き物が発する音ではない。まるで、全ての醜悪を寄せ集めたかのように、聞くもの全てを不快な気持にさせ、不安にさせ、恐怖させる音。

『ワガ・シメイヲ・ジャマスル・モノハ・ユルサナイ』

そこにいたのは、身の丈5メートルはあろうという巨人だった。
大きな手は、間違いなくユイアを異端の扉に引きずり込んだあの手に違いない。そして、恐らく私を先ほど引っ張ったのもあの手に違いない。
声が言っていた、白き神が造りし異端の処刑人、『アレ』に決まっている。

そしてこの巨人こそが、封印された異端・・・だ。

巨人を目の前にしてそう思う。
その肌も髪も全てが灰色に染め上げられた、まるで石造のような

異様な容貌こそ異端と言わずに何と言おう。
そして、筋骨隆々とした体は腰布だけを纏い、その猛々しい体からはかなりの存在感と怪力が想像された。
また、口からは唾液が滴り落ち、はき出される息の荒さから、巨人がかなり殺気だっていることが分かった。

正体不明の声のおかげで、ユイアは見つかった。
しかし、巨人と磔にされた彼女を目の前に、私は自分がいわゆる絶対絶命の状況に陥っているということをここにきて初めて自覚するのであった。

第六十五話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の六（後書き）

謎と混乱まみれのヒロ過去回想編、思ったよりスムーズにすすんでおりません。でも、今後大いに関わる重要な所なので、ちょっとずつでも丁寧に話を進めていきたいと思っております。（でも、ちゃんと進んではいますので（笑））

第六十六話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の七

愛してる。愛してる。
だから、どうか貴方だけは死なないで。その私が愛した笑顔のまま生き続けてくれ。

この命が失うことになろうとも、貴方の命があるのであれば私は決して後悔しない。

第六十六話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の七

崩れかけた廃墟の劇場は薄暗く、外はどうやら夜らしく崩れ落ちた天井から差し込んでいる淡い月光だけが頼りだった。
しかし、その月光はユイアが磔（はりつけ）にされている舞台の上だけに照明のように降り注いでいるだけで、客席らしき一段下がった場所にいる私は闇の中にいる。

壇上の囚われた女、それを助けに来た愚かな男、そして男女の間を阻（はば）む異形の怪物。

正に昔母親が寝物語に聞かせてくれた御伽噺のようだと、あまりの現実離れした状況に混乱するを通りしこして妙に落ち着いてい私は思う。
そして、それい以上にユイアがまだ生きてくれていたという事実が、私の熱くなっていた頭を急速に冷やしてくれたのだろう。
何せユイアを助けることができるのは私だけなのだ。
その私が冷静さを欠き取り乱して間違った選択をしてしまったら、

全てが終わる。
だが、同時に何か違うものが私に作用しているような気がしてならない。
今まで感じたことのないような不思議な感覚。
それが、私の心に何かを語りかけてくるような、自分でない感情が私の中に流れ込んできて私を落ち着かせつかせている。そんな気がした。

そんなバカなことがあるわけがない・・・か。

私はしっかりしろと、頭に浮かんだ考えを打ち切って改めて現実と向きなおる。
そこにはやっぱり、私とユイアと巨人しかいない。
何が私に作用しようというのだ?
今はこの場をどう切り抜けるか、ユイアをどうやって助けるか。
それが、一番重要なのだ。

「ヒロ、逃げてっ!殺されちゃう!!!」
そして、現実はユイアの悲鳴のような叫びとともに私にぶつかってくる。
その叫びを聞いて、私ははっとした。異端の処刑人をその背後にしたまま、彼女は自分の死すら覚悟して私を逃げろと言ったのだ。

だが、どうしてそれを私が受け入れるというのだろう?

見るからに獰猛(どうもう)な獣の本性を抱きし、人の皮を被った処刑人。
私はそれを前にすぐに人間には到底勝ち目のない相手だと直感した。
更に無駄に想像力豊かな私は、瞬時に自分が巨人に握りつぶされる様までありありと思う浮かべられた。

そして、それは私があと一歩磔にされたユイアに近づけば現実になることも、巨人がこちらを威嚇しながら唸りを上げていることから直感していた。（多分この距離が、巨人の間合なのだ）

しかし、だからといって私がユイアを助けることを諦められるわけはなく、私は何かユイアを助ける手段でもなかろうかと視線だけで周りを見回してみるが・・・どんなに眼を凝らしたところで、都合よく巨人の弱点なんて見つからず、何か武器になるものでもと思って見ても、あるのはガラスの破片や瓦礫だけ。

状況設定こそ御伽噺ようでも、現実はそうは上手く物語は運ばないということなのだろう。

大体、ユイアとともに攫われていた私の唯一の武器である黒の剣が、そもそも既に巨人の手の中にある。

・・・手の打ちようもないほど、状況は最悪としか言いようがないのだ。

そして、冷静な頭でどれほどに考えをめぐらせても、結局何の良い手段も思いつかない私の視線は最後に、悲壮な表情を浮かべるユイアに行きつく。

仕方がない・・・よな。

愛おしい彼女を見て、私は思った。そして、今にも涙があふれてしまいそうな彼女に笑って見せる。

いや、笑ったというのは嘘かな？

私の顔に浮かんだのは、恐らく見るに堪えない笑みとも呼ぶことも躊躇われる、できそこないの笑みだったことだろうだから。

だって、この異端の処刑人を前に死を覚悟しない人間などいないだろう？

それに、死を覚悟して、朗らかな笑顔を浮かべられる人間もいないだろう？

そう、すなわち、この情けないかな痛々しい笑みの裏には、私の死への覚悟が込められいたのだ。

「ヒロっ！？」

ユイアもそれを敏感に感じ取ったのだろう。逃げも隠れもしない私に悲鳴のように声を上げる。

「逃げてっ！！私のことはいいから・・・っ！」

そして、なおも私のことを逃がそうと、生かそうと言葉を重ねてくれる。

私はそのユイアの声を聞いているだけで胸にこみ上げてくる様なものを感じた。本当にうれしかった。

でも、・・・それに従うことは死んでもできない。

「逃げるなんてできるわけ・・・ないだろっ！」

掠れながらも、腹の中から出てきた声がガランとした高い天井に響く。

ユイアがはっとしたように私を見て、私は彼女に見っともないまでに歪んだ笑みを浮かべる。

「逃げれるわけないだろう？」

「・・・ヒロ。」

重ねられる私の言葉に、ユイアの目からは涙が堰を切ったかのように流れ出た。

私は今まで母親に父親を失い、気がつけばたった一人で世界に立っていた。

二人とも若い死だった。特に母親は私を助けるために死んだとっても良かった。だから、私は誓った。

もう、誰も私のために死なせるようなことはしない・・・と。だから・・・、

「命に代えても、私はお前を助けてみせる。」

それは、そう決意しながらも逃げ出したくなるほどの恐怖に手足が震えている私への戒めでもある。

こう言ってしまえば、弱いくせに妙な所で意固地な私が逃げ出す道は全て断たれたこととなるだろう。

でも、これでいい。

ユイアを置いて逃げることで得られる命より、ユイアを助けて死する命を私は選ぶ。それが、正しい選択なのだ。

しかして、どんなに決意をしようとも眼の前の状況は、私の置かれた全ては変わりようもないわけで・・・。

さて・・・どうしたものか。

しばし頭を動かし視線を彷徨(さまよ)わせて、自分の死の覚悟によって生まれ出た一つの推測と手段を思いつく。

そして、それをするか否かと頭の中で吟味(ぎんみ)する余裕があるわけがなく、さっそく私は相対する巨人に向って口を開いた。

「・・・おい、お前はユイアを、そこに磔(はりつけ)にした女をどうするつもりだ?」

とりあえず話が通じる相手か定めるために、ゆっくりとした口調で私は言葉を発した。

『コロス・コロス・アクマヲ・コロスノガ・ワガ・シメイ』

返ってくる返答は若干(じゃっかん)たどたどしいものの、どうやら言葉は通じているようだ。

さて、しかして巨人の返答から分かることといえば、悪魔とは天使の翼を切り落とした者で、その悪魔の武器が黒の剣(ローラレライ)。だから、それを持っていたユイアが悪魔であり、今からそれを処刑する。

それが、白き神からの命令だから。

何とも短絡的で、頭の足りない考え方だ。
普通、一度殺した相手をまた処刑しようなどと思うものか？その処刑から千年という時がたってなお、その使命が生きていようなど誰が思う？
そんな単純かつ、強い命令は、私がどう正論を並べ立てた所できっと崩れることはないだろう。
だが、だからこそ私の作戦はきっと上手くいく。いや、上手くいかせてみせる。
そのためにも・・・と、私は一つ一つの言葉を慎重に選びながら巨人に話しかけた。

「処刑人よ、彼女は悪魔ではない。悪魔はお前が千年前に処刑しただろう？」
『チガウ・チガウ・アクマ・アクマ』
どうにも意思の疎通がしがたい相手にイライラする部分もあるが、ここは我慢のしどころだ。
幸いに今すぐ私の目の前でユイアを処刑しようという素振りも見せていないし、間合いに近づきさえしなければ私に攻撃を仕掛けてきそうな様子もない。ゆっくり、言葉を重ねる。
そして、私は巨人と一定の距離を保ちながら、そろりそろりと移動をしてガラスの破片らしきものを、そうっと拾う。
そして、それの行動をいくつか繰り返した後、私は巨人に再び口を開く。
「おい、悪魔は彼女じゃないぞ。」
そう。本来、黒の剣を持っているのは私。
異端の扉の前では、たまたまユイアが黒の剣を持っていたにすぎない。
『オンナ・アクマ・ローラレライ・モッテタ・ダカラ・コロス』
思ったとおりの短絡的な答え。だが、巨人の頭がそうであるなら、

それを逆手に取ってしまえばいい。

「違う。悪魔は私だ。」

そう、ユイアではなく私が悪魔になればいい。

ユイアではなく、私が悪魔であると思い込ませるために語気を強めながら巨人に言い聞かせた。

『オマエ・アクマ？』

そして思ったとおり、単純な巨人は私の言葉に食いついてきた。

これを逃すことはできない。私は言葉をたたみかける。

「そうだ！黒の剣（ローラレライ）は本来私のものだ！！！だから、処刑するなら私にしろ！！」

「ヒロっ！！」

ユイアの声が悲鳴に変わる。彼女にこんな声は出させたくない。

だけれど、私は自分の命に代えてもユイアを助けると誓ったのだ。

丸腰の今の私には自分の命しか囮（おとり）にするものがない。ユイアを助ける手段がないのだ。

そのためならば、命など躊躇いなく巨人に差し出せる。

『アクマ・コロス』

そして、巨人は悪魔だと名乗る私に牙をむき出した。

声に凄（すご）みが増し、灰色の体から蒸気が出て、私に地響きを鳴らしながら一歩踏み出した・・・と思った瞬間に、ものすごい勢いで灰色の腕がゴムのように私に向って伸びた。

それを間一髪で転がりながら避ける。私がさっきまでいた場所には、巨人の太い腕が深々と突き刺っていた。

あれを受けたら私などひとたまりもない。動きはのろいと思っていたが、どうやら部分的には素早いらしい。

だが、私の思い通り巨人の意識は磔（はりつけ）にされたユイアから、圧倒的

に私に向ってくれた。

ドォ・・ン、ガァンッ、バ・・・アン

両手から次々と攻撃が絶え間なく私を襲い始めた。私はそれを死にもの狂いで避ける。

そして、次々に私の代わりに巨人の攻撃を受ける劇場の廃墟は、ガラガラと音を立てながら穴だらけとなり、ものの数分で今にも崩れてきそうなほどにぼろぼろになっていた。（後、何分もすれば建物自体が崩れるだろう）

「ヒロっ！！ヒロっ！！！」

そんな私に対して叫びを上げ続けるユイア。巨人の意識が私に向いていても、磔（はりつけ）にされたままではユイアを逃がすこともできない。

私は劇場自体が崩れる危険性もあることから、巨人の攻撃を避けながらそれを視界の端でとらえ続けながら、とり急いでチャンスを伺った。

そして、巨人の両手が同時に壁と床に突き刺さった瞬間、チャンスが来たと思った。

私は次の攻撃が来るまでの一瞬の隙（すき）をつき、先ほどひそかに拾っていたガラスの破片を投げナイフのようにユイアに向って一つ二つ、そして三つ放り投げたのだ。

ユイアに当たるかもしれないという恐れはあったが、それでも躊躇う暇は私にはなかった。

幸いにガラスの破片はユイアを十字架に張り付けていたロープに全てが命中して、ユイアは突然のことに何の準備もできていないまま十字架から落ちた。

「きゃあっ！！」

悲鳴とともに、彼女が手首を少し押えているのが見えた。どうやら、ロープとともに彼女の手首を傷つけてしまったようだ。

だが、視界に映るユイアの様子から、それは大したものとは思えない。本当は無傷で逃がしてやりたかったのだが勘弁（かんべん）してくれ・・・と思っていた瞬間、巨人の次の攻撃が容赦なく私を再び襲いだした。

「どわっ！」

ユイアに気を取られていて、巨人の攻撃を初めてくらった。

幸いに直撃ではなかったが、その衝撃で私は瓦礫（がれき）の山に突っ込み、私とともに吹っ飛ばされた石つぶてが次々と私の体を襲い痛みがはしる。

「ヒロっ！！」

ユイアが私の名を呼び、近寄ってこようという気配がした。

「馬鹿！さっさと逃げろ！！！」

怒鳴りながら巨人から視線を外さないでいたが、ユイアを十字架から解放したというのに、巨人はユイアに視線すら向けようとしない。完全に私を悪魔だと思い込んでくれたようだ。

後はユイアが逃げ切るまで、私が巨人相手に力尽きなければいいのだ。

まあ、最後は私は力尽きて巨人に血祭にあげられてしまう結末だろうが、これならばユイアの命を助けることができる。

正直、上手くいくかも分からない、私の命を代価にした賭けにも似た最後の手段だった訳だが、ここまでは私の思うとおりにことが運んでいる。

なのにユイアがこちらに向かってきては、それも全てがおじゃんになってしまう。

「早く、ここを出ろ！！外は不浄（ディス・エンガッド）の大地のはずだ、走って走って走り続けろ！！！」

巨人が開けた穴から見えるのは、間違いなく不浄（ディス・エンガッド）の大地のはず。不浄（ディス・エンガッド）の大地とて、ユイア一人では危険ではないといい難いが、巨人のいるこの劇場よりは遙かに危険も少ない。

本当なら私も一緒に逃げて守ってやりたいところだが、私が一緒

に逃げてはもれなく巨人も一緒についてくる。

それでは、本末転倒だ。

だから、私一人で巨人を引きつけるからユイアだけ逃げてくれと私は叫ぶ。

それで、自分の命が潰(つい)えることになっても私は後悔などしない、それが私の命を賭けたユイアにしてやれる、たった一つのことだ。

恋人としてしてやれる、最初で最後のユイアへの・・・。

本当はもっと恋人として、ユイアに色々な事をしてやりたかった。あんな言葉足らずの言葉ではなく、彼女にもっともっと思いを伝えたかった。

でも、それも叶わなくなる。

そう思いほんの少しだけ泣けてくるが、ユイアを助けるためならば悔い一つ残りはしない。

なのに、それもユイアが逃げてくれなければ、私のしたことは全て無駄になってしまう。

きっとユイアも私のために命を捨てようとしてくれたのだ。

恐らく私を置いて逃げるのが耐え難(がた)いと思っていてくれるのだろう。私だって、もし逆の立場だったら、そうするに違いない。

それは、きっととてもとても光栄なことだ。

でも、私も同じ気持ちだから、それは死んでも受け入れてはいけない。

だから、ユイアに例え恨まれてもいい、私はユイアに更に語気を強くして促すのだ。

「逃げろ！逃げてくれ！！」

だが、私が必死で巨人の攻撃を避け続けている中で、舞台の真中に棒立ちになったままユイアはぴくりとも動かない。
どうして？
私とて無尽蔵（むじんぞう）の体力を持っているわけではない。巨人の攻撃を避け続けるのにも限界がある。（すでに、息はあがりつつあるしな）
ユイアには一刻も早く、ここを離れてほしいのに・・・

「頼むっ！生きてくれ、ユイア！！！」

私は焦る思いのままに、最後の力を振り絞って叫び続けた。
それは一重にユイアに生きていて欲しいという、たった一つの願いのために。
なにの、どうして運命はこうも残酷なのだろう？

そのたった一つの願いは、直後、最悪の形で永遠に叶わないものとなったのだ。

第六十六話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の七（後書き）

ＶＳ巨人の話ですが、イメージとしては巨人はトロールみたいなのろそうで、ごつい筋肉隆々の怪物です。それに、ヒロは触れていませんが私の偏見ですが臭い感じです（笑）

もうこの話を初めて５か月近くになるのですが、今回が２００７年最後の更新となります。拙い話にも関わらず、読者の方も何人かいらっしゃる上に、感想までいただくことができ本当に言葉が出ないほど嬉しい限りです！（感想がもらえた日は飛んで喜んだものです（笑））

今年は保存していたデータがなくなったりとまあ色々ありましたが、予定は未定ですが２００８年も今のペースを保てたらと考えています。どうか見捨てずに暖かい目で見ていただけたら嬉しいです。来年もどうかよろしくお願いします！

第六十七話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の八（前書き）

【注意】

この話には、流血表現があります。苦手な方はご注意ください。

第六十七話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の八

「ヒロ、愛しているわ。」
ユイアは笑ってそう言った。
私もだ・・・と伝えたかった。

だけれど、それは永遠に叶わない。
私はユイアさえ生きていてくれれば、それ以上に望むことなどなかったのに。
ユイアに恨まれても、忘れられてもいい。彼女が笑って生きていてくれるなら、私はそれで本望(ほんもう)だった。
しかして、私を一人残して彼女は消えてしまうのだ。永遠に。

愛の言葉とであると同時に、解けることのない呪いとなる言葉を呟いて――――

第六十七話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の八

どれほど、私が逃げろと声を張り上げても、ユイアは逃げ出すどころか足が大地に根付いたかのように頑(かたく)なに動こうとしなかった。
・・・仕方がない。
このままでは、ユイアが逃げるより私の方が先に巨人にやられてしまう。私はユイアが逃げぬのならば、自分が巨人を連れて彼女から離れることに決めた。
だが、巨人の息をつかせぬ攻撃を避けながら、巨人の開けた穴から外に飛び出すのも難しい。

更に吐く荒い息遣い、大きく叩く心臓の早い音、何度も叩きつけられた痛む体。精神的にも体力的にも私は限界に近づいていた。

それでも、ユイアの命を守るためだと気力をふり絞り、私は穴のあいた壁から勢いをつけて外へと転がり出ようとした。

そして、最後にもう一目だけでもユイアを見ておきたいと、振り向きざまに彼女を見やったのだ。しかし、私はユイアだけでなく思いもよらぬものを目にすることになる。

それは、ユイアの他にもう一人の見慣れぬ女。

もしかしたら、幻か見間違いかもしれない。しかし、その時の私の眼には、十数メートル先のユイアの横に灰色のドレスを着た翼をもった女が見えていたのだ。

そう、それは天使だった。

一瞬思ったのは、これが死ぬ間際に見えるという天からの遣いではないかということ。だが、それならどうして私ではなくユイアの傍に天使がいる？

更に天使は、いつの間にか巨人の手の中から消えていた（多分、私を攻撃している間に落したのだろう）黒の剣（ローラレライ）をユイアに手渡しているではないか。

いやいや、これも渡すなら私だろうと、俄然（がぜん）それは幻でなければ、どんな意味を持つ光景だか分らない。

しかし、私の眼には天使が現れた意味よりも何よりも、焼き付いているものがある。それがあるから、私はあれを幻だとは思えない。

あのユイアがうっとりとしたような、いや、何かに魅せられた如き狂気に触れたあの表情、異端の扉で見たあの表情が。

ユイアはその幻というには、どうにも現実味を帯びすぎた表情をしたままに、天使から黒の剣（ローラレライ）を受け取っていた。

その意味を、私はユイアのあの表情の意味を知りたかった。いや、私は知らなくてはならなかったはずだ。

しかし、私は巨人の攻撃を避けるために再びユイアから視線を外さなければならならず。その意味を問いただすどころか、劇場の外に出たため彼女の姿は全く見えなくなる。

だが、ユイアと天使の二人の姿が瓦礫（がれき）の影で見えなくなる最後の一瞬、私の角度からは見えなかった灰色の服を着た天使の顔がこちらを見て、私と目が合った。

そう、私は確かにその天使の顔を見たはずなのだ。

なのに、五年たった今でも私はその顔をどうにも思い出せない。その天使が幻であろうとも、私は確かにその姿を覚えているはずなのに、顔を思い出そうとすると不思議に霞（かすみ）がかかったような記憶になる。

一瞬だったからか、それともそれこそが天使が幻であるという証拠なのかもしれない。だが、今となってはそれを確かめるすべもない。

・・・気にはなるが、今は話を本題に戻そう。

巨人の攻撃を必死で避け続けユイアが逃げないのであれば、私が巨人を連れてユイアから離れるだけだ・・・という作戦を実行にうつした私であったが、それは結局巨人の攻撃をより猛攻にした結果となった。

逃げる場所は広くなったのだが、だだっ広い不浄の大地（ディス・エンガッド）は隠れる場所が少なく、また巨人の大きな体の長いリーチを存分に発揮されることとなったのだ。

右に左に大きく走り動き、背中に巨人の気配が私の真後ろから離れることもないという極度の緊張状態。

しかして、私はただただひたすらに逃げ続け・・・というか、も

うそれしか考えられなくなっていく。

「はぁっ、はぁ・・・っ！」

そして、劇場からどれくらい離れたか自分でも定かではなくなるくらいに訳が分からなくなった頃、それは来た。

体力と気力の限界がきて、私はみっともなく足を縺(もつ)れさせ荒地に倒れこんだのだ。

それを私を殺すことしか頭にない巨人が逃すわけもなく、すぐに恐ろしいくらいに早い腕の攻撃が倒れこんだ私の体を貫こうとする。

しかし、ただひたすらに往生際(おうじょうぎわ)の悪い私は、それを倒れこんだまま地面を転がってぎりぎりで避ける・・・が、転がり続けて仰向(あおむ)けになった私は、巨人を見上げる格好となり、それまで逃げるだけで精一杯で振り向けなかった巨人の姿が視界に飛び込む。

「っ！」

だが、一撃を避けて安心していた私の目の前には、既にもう片方の腕の攻撃が迫っていたりして・・・、瞬間に感じたのは逃げられないという諦(あきら)めだけ。

しかして、人間は死ぬ気になればなんとかなるもので、私は再び大地を勢いよく転がってぎりぎりの所で逃げた。

これで、巨人の両手が地面にのめりこんだ形となり数十秒は猛攻の隙間ができると、私はすぐさま立ち上がり逃げようとした。

だが、私の考えは甘かった。

なんと巨人は両手をめり込んだ地面から抜くこともなく、そのまま隙など私に与えぬように体ごとぶつけてくるような勢いで首を伸ばし、砲弾のように私に降りかかろうとしていたのだ。

・・・まあ、要は頭突き。

まさか、この状況で巨人の頭突きがくるなど考えてもいなかった

私は、頭が真っ白になり、今度こそ攻撃を避けるどころか、一歩もそこから動けなり自分の死を覚悟した。
迫りくる巨人の顔。死の間際だからか、スローモーションで私に近づいてくる。
あんな世にも恐ろしい顔にぺちゃんこにされて死ぬくらいだったら、腕に貫かれてたほうがましだったかもしれないなんて、のんびり考えれる余裕すらあったのだから。
でも、そんな下らない考えはすぐに私の中から消え去って、最期に私の脳裏に浮かんだのは、ただひたすらに愛おしいユイアの笑顔。

・・・さようなら、ユイア。

その笑顔に向って心の中で最後にそう呟いて、迫りくる最期の時を意識して私は瞼を瞑った。
すると、様々な映像が瞑った瞼の裏に映し出されてくる。きっと、死に際に見るという走馬灯に違いない。

見たこともないような美しい子供の笑顔。
髪を振り乱しヒステリックに叫ぶ女。
剣を向け、殺意をむき出しにした髭を生やした男。

――――どれも、私が今まで見たこともない映像だった。・・・これが、走馬灯？

そして、様々な見覚えのない人間たちが全てブラックアウトして、次に現れたのは鮮やかな赤と白。
切り落とされた翼。
白い背中、吹き出る血潮。
そして、穢れを知らない純白の羽と血にまみれた紅の羽が舞い散っていく。

――何だ？これは？

そうして走馬灯とは言えない映像が次々に映し出されていく中、赤と白も消え去って私は再び灰色の空間の中にいた。

しかし、どういうことだと私が疑問に思う前に、現れたのは宙に浮かんだぎょろりと私を見つめる一つの大きな瞳。

――ドクン

それと目があった瞬間に、大きく胸が高鳴った。いや、そんな言葉は生ぬるいほど、私の心臓は破裂しそうなほどに大きく動いた。

そして、割れそうなほどの頭痛とともに声が響いた。

――ニガサナイ

その声を耳にしたと私の頭が理解する前に、私はここにいてはいけないと本能が呟いた。

瞬間に、私は無理やり夢から覚めるように走馬灯を中断させて、瞑った瞳を開ける。

「・・・はぁ、・・・はぁ、・・・はぁ。」

息を乱しながら、私の開いた瞳孔に映っているのは、瞳を閉じる前と同じ巨人の世にも恐ろしい形相のアップ。

悪夢から覚めたかのようなぼんやりとした思考。だが、それを見て私は巨人に殺される寸前だったことを思い出す。

・・・どうして、私はまだ死んでいないのだろう？

フリーズした頭で色々に思考をめぐらせ、視線を動かす。

そして、数秒後、私はフリーズしたのは私の頭ではなく、巨人自体であったことを理解した。

そう。私を潰してしまうあと一歩の所で巨人はその動きを完全に止めていたのだ。

早い息遣いと鼓動が静まるのを待つように、ただただその事実を知っても茫然とその場に立ち尽くす私。

巨人は石のように固まり、息すらしていなかった。そして、巨人はそれこそ本当に灰色の彫刻にでもなってしまったかのように、両手を地面に突き刺したままに絶命している。

正直、訳が分からなかった。

自分の危機が去った・・・という感覚は、絶命した巨人を目の前にしても湧いてこなかった。それは、いつまでたっても収まろうとしない早い息遣いと鼓動のせい。

だが、それは次に私が目の当たりにする最悪の光景を予感していたからだったのだと私は思う。

ともかく、巨人がどうして動かなくなったのかは定かではないが、ここに突っ立ったままでいても仕方ないので、私はユイアの元に駆けつけようとしたのだ。

麻痺したように動かしにくい体に鞭を打ち、ともかく劇場に戻ろうとした私だったが、体を動かしたことでそれまで見えていなかった巨人の先ほどと違う部分に気がつく。

それは、ぽっかりと空いた巨人の左胸。

血もでておらず、まるで心臓だけがくりぬかれたように、真ん丸な穴が巨人の体を貫通して、穴を通して向こう側の景色まで見え・・・

「ユイアッ！！！」

体が動けないとか、痛むとか、そんなものは頭の中から消え去った。

だって、だって、巨人の左胸の穴を通して見えた景色の中にユイ

アがいたのだ。

左胸を血で真っ赤に染めたユイアが・・・っ！

私は混乱する思考のままに、血まみれで立ち尽くすユイアに駆け寄った。

ユイアは私に死を目の前にした人間の濁った瞳で視線を合わせると、にこりとかすかに笑ってその場に力なく崩れる。

私はユイアが不浄の大地（ディス・エンガッド）に倒れる前に、それを抱きとめる。

「ユイア？！ユイア？！」

「・・・ヒロ。」

まだ意識はある。

「大丈夫だ！すぐに私が傷を治してやるからな？・・・・っ！」

ともかく、今はユイアの命を繋ぎ止めるための処置をしなければと、血に染まった彼女の左胸を見て私は何度目になるか分からない衝撃を受ける。

何故なら、ユイアの胸を貫いていたのは自分の愛剣・黒の剣（ローラレライ）だったのだから。

どうして？どうしてだっ！

ただただ混乱するばかりの私だが、ともかくユイアの左胸を貫くものが何であろうが、今はそれを抜くことから始めなければ、どうしようもない。

考えることは後でもできると、私は黒の剣（ローラレライ）に手をかけて、その柄が火傷しそうに熱いことを知った。

一瞬、驚いて手を放すが、すぐに再びその柄を握りユイアから引き抜こうとする。

だが、それを止めるものがあった。

「や・・・めて。このままで・・・・。」

力ない細いユイアの声。だけれど、出血量の割には彼女の意識も声もしっかりとしていた。そして、それとともに、黒の剣（ローラレライ）に手をかけた私の手にユイアの自身の血に濡れた手が重なる。

「・・・何を言ってる？」

「これは、私が望んだことだから。」

言っている意味が分からなかった。

望んだ？ユイアが？何を？

「ヒロを助けるためにできるたった一つのことを・・・私はしたの。」

口の端から血を流しながら、血の気の失せた白い顔なのに、ユイアはまるで幸せの絶頂とでも言わんばかりの蕩（とろ）けた笑顔を私に見せる。

いつもなら、それを見て私も幸せになれるはずなのに、今はそんな彼女の顔すら怖かった。

「ヒロを愛している。」

――――ああ、やめてくれ。

――――これ以上は、聞きたくない。

「だから、私は貴方のために自分の命を捧げるの。」

「そして、私は黒の剣（ローラレライ）の中で永遠に生き続けてヒロの力になる。ヒロを守る力になる。」

――嫌だ・・・嫌だ、嫌だ！

「そうすれば、ヒロは私を永遠に忘れない。そうすれば、彼女に勝てるでしょ？」

第六十七話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の八（後書き）

・・・新年早々、辛気臭い話ですいません。でもまあ、ヒロとユイアの話は9割方終わりました。あと、ほんの少しです。次は回想編クライマックスと話を現在に戻す形となります。

第六十八話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の九

白と黒、二つの色が混じり合うとき、灰の色が現れる。
曖昧（あいまい）として、混沌たるその色は生と死の狭間にありし異端の色。
私はその異端の色に支配された空間に囚われ続け、それから逃げ続け、それが呟く言葉に耳を塞（ふさ）ぎつづけている。

――――アナタヲ・ダレニモ・ワタサナイ

その声の主は・・・誰だ？

第六十八話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の九

ユイアの蕩（とろ）けるような幸せそうで満ち足りた表情。

「ヒロを助けるためにできるたった一つのことを・・・私はしたの。」

だけれど、私にはその表情に狂気が宿っているように見え、恐怖すら感じた。
あの時、彼女が何を思いあんな表情をしていたのか、私は未だに知ることはない。

「だから、私は貴方のために自分の命を捧げるの。そして、私は黒（ロー）の剣（ラレライ）の中で永遠に生き続けてヒロの力になる。ヒロを守る力になる。」

そして、ユイアは私が未だに鮮明に覚えており、その意味を理解できていない言葉を発する。

「そうすれば、ヒロは私を永遠に忘れない。そうすれば、彼女に勝てるでしょ？」

正直なところ、当時の私にも、現在の私にも『彼女』といわれて思い当たる人物はない。

しかして、血を流し続けるユイアを前に気が動転していた私はそんなことを気にする余裕もなくて、ただただ、左胸から彼女の温かい命の滴（しずく）が溢れ出ていく様をリアルに感じ続けていた。

そう私にそれを止める術もなく、ただそれを感じることしかできず、気が遠くなるような想いが胸を塞（ふさ）いだ。

だって、ユイアはこれが私のためだと言ったのだ。私を助けるためだと。

ならば、この状況を引き起こしたのは私せいであり、ユイアは手こそ下していないが、私が殺したようなものではないか・・・。

――――愛する女を殺した

その目も覆いたくなるような事実が、私を絶望させ、動揺させる。もう、いっそ気さえ失いたかった。何もかもから逃げ出したかった。

「だ・・めだ。駄目だっ！」

だけれど、私は叫ぶ。

例え気が違いそうになるほどに感情が揺さぶられようとも、ユイアが死ぬということだけは私の中で許されない事だから。

こうなったら・・・と、私はユイアの意志など関係なく黒の剣（ローラレライ）を

強く握りしめてそれを引き抜きにかかった。
だが、私がいくら力を込めても、ユイアと一つに繋(つな)がってしまったかのように黒の剣(ローラレライ)はぴくりとも動かない。

「・・・ヒロ。私はいいの。これでいいの。私は黒の剣(ローラレライ)と契約したの。」

そんな私にユイアはあの表情で大地に身を横たえたまま首を横に振る。

「良い訳あるかっ！私はこんなの絶対に・・・絶対に、嫌だ！！」

それに対して、聞き分けのない子供のようにユイアの言っていることを否定するしかできない私。

でも、これだけは間違いなく譲れない想いだった。

なのに、ユイアはそれでいいという。それを望んでいるというのだ。

信じられなかった。同時に抜けない黒の剣(ローラレライ)に憎悪すら感じながら、私はこれが夢ならいいのにと馬鹿な現実逃避すら想像した。

だって、こんな事実信じたくもない。

自分の命と引き換えに私の力になりたいとか、私に忘れてほしくないとか、そんなの違うだろ？

命を引き換えにしなくたって、私は、私は・・・・

「ユイアを・・・お前を・・・・あ・・・い・・・してるんだっ！だから、失いたくないのに・・・・ど・・・してっ！！！！」

ただただ、涙が溢れた。父親が死んでも流れなかった涙が。

一緒になって溢(あふ)れ出る悔しさとも、絶望とも、慟哭(どうこく)とも、悲しみとも、怒りとも・・・、何と名を付けていいか分からないようなグチャグチャの感情がせり上がってきて私の声は掠れた。

それが、聞きとりにくかったのだろう。

「い・・・ま、何て？」

ユイアが私の言葉を問い、そして男のくせに見っともないまでに泣きわめいている私を見て瞳を揺らす。
「ユイア？」
更に私に重なったユイアの手に力が入った。
それに気がついて、私は涙に滲む視界の先のユイアを見る。
それは先ほどまでの恐怖すら感じたものではなく、私に縋るような、何かを語りかけるような、悪夢から覚めた子供のように頼りなさげな表情だった。

だが、それもすぐに強張って固まった。

「ユイアっ！！」
その異変を察して私は叫んだ。
ユイアの左胸を貫いている黒の剣が黒く染まり、剣だけでなくユイアの体をもその黒が侵食し始めたのだ。
そして、その変化が如実にユイアに現れた。
先ほどまでの狂気じみた幸せそうな顔が一変し、顔が恐怖に歪み首を大きく振り、体が痙攣し始めたのだ。
「やめろ！黒の剣！！」
何をすればユイアが助かるなんて全然分からなかった。
でも、何もせずにはいられなくて、私は立ち上がり力の限り剣を抜こうとした。

・・・黒の剣はびくともしなかったけれど。

「頼む！・・・頼むからっ！！」
何でもいい、ユイアを助けてくれるなら何だってする。
そんな思いすらこめて、私はユイアの血に濡れた黒の剣に縋りつき、涙で顔をグチャグチャにしながら叫んだ。
だけれど、私のそんな願いも虚しく、侵食は続きそしてユイアを

完全に黒く染め上げようとしていた。そして・・・

「・・・い・・・き・・・て・・・。」

それが、最期の言葉だった。

その言葉とともにユイアの体は完全に黒く染まり、黒の剣（ローラレライ）とまるで一対の彫像にでもなったように固まった。

だけれど、それはあの時の私が恐怖した狂気に狂ったものではなく、悪夢から覚めたような切なくも、美しい顔であった。

「ゆ・・いあ？」

私はその事実を受け入れがたくて、返事をするはずもない彼女に語りかけ、白く温かく柔らかかったはずの彼女の頬に触れた。

それは、私が知っているはずのそれとは全く違う、黒く冷たくて硬い頬となっていた。

「・・・・っく。」

堪（こら）えることも忘れた涙が、とめどなくユイアに降り落ちた。

ピシリ

そして、涙を流し続ける私に乾いた、何かがはじける音がした。

嫌な予感がして、私は伏せていた顔を上げた。

そこにあったのは、黒く固まったユイアの体に幾つものひびが入っている様。

「っ！」

私は声なく叫びをあげた。

「や・・・めっ。」

私は誰に言っているのかもわからない静止の声を上げた。

だが、ひびは私の声など無視して音を立てながら次第に大きくなり、そして、ユイアはガラス細工のように粉々に砕け散ってしまった。

黒き結晶がキラキラと輝きながら、風に舞う。
私はそんなことをしても何にもならないと分かっていても、それでも風に流されていく結晶を必死でかき集めた。
「っふ・・・うぅ・・・・・ゆい・・あ・・・・ユイアっ！」
私はそれを抱きしめながら、遂には不浄の大地（ディス・エンガッド）に突っ伏して、いつまでもいつまでも咽（むせ）び泣き続けた。

――――私には、もうそれしかできなかった。

それからどれくらい経ったか分からなった頃、再び一人旅立った私であったが、私は繰り返し同じ夢を見るようになった。
それは、あの灰色の空間と一つの大きな目玉・・・、巨人に襲われた時に見たあの走馬灯（そうまとう）と同じ光景。目玉は私を何処かに誘（いざな）うように私に色々なことを語りかけてきた。

そして、私はその夢に導かれ翼（エヴァ）に出会うことになる。

そのエヴァも私の元から去り、そしてユイアを失って五年もの歳月が流れようとしている。
これまで、私は無論自分もユイアの後を追うことすら考えたこともあった。いっそ、死んでしまった方が私は楽だったと思う。
何しろ、ユイアの死は自分の罪だと思いつづけ私は生き続けてきた。心の底からの幸せなど、あれから一度として味わったこともないし、そんなものは私にはあってはならないことだと思い生きてきたのだ。
きっと、こんな罪の意識だけを抱えて生き続けるより、自ら命を絶ってしまった方が幸せなだろう・・・と、そんなことを考えた一度や二度ではない。

だが、ユイアは私を助けるために命を落とし、また彼女は最後に

私に生きろと告げたのだ。

そのユイアの死に様が最期の言葉が私をこの世に繋ぎ止め続け、私を生かし続けてくれている。

そして、それは同時に私の時を五年前から止め続けている呪いの言葉となった。

ユイアが私のために命を絶った事実、そして、それに纏わる私には理解のできない彼女の言動と行動の端々。

それらが、私を未だにあの罪人の処刑台に留めているのだ。

どんなにいろいろな場所を旅しようとも、私の心は永遠にあの場所から出ることを許されない。

ユイアはどうして死ぬことになった？

きっと、その真実を知ることができない限り、私は死ぬことも、そして幸せに生きることもできないのだろうと思う。

だからこそ、私は未だに自分に問い続けている。

まず、不思議に思ったのは、どうしてユイアが黒の剣の隠された伝承を知っていたのかということ。

先日、私がアラシに告げたように、黒の武器の真実の力を手にするためには、大切な人間の命を捧げることが必要だ。

しかして、それはただ誰かを殺してなせるものではない・・・と、だがその事実は多くの人が知るものではないはずだ。何しろ黒の武器を持っているアラシでさえ知らなかったのだから。

そして、私はそのことをユイアに一言も話した覚えない。

なのに、ユイアはそれを知っていた・・・のだ。

それは、『黒の剣と契約を結んだ』や『ヒロを守る力になる』といったユイアの言葉から察することができる。

だが、どうしてユイアがそれを知っている？
彼にも告げていない事実、その偉大にして、血塗られた力は命を捧げる者、その自らが剣の主のために黒の剣（ローラレライ）で自分の命を絶たなければならないのだ。
まさに、ユイアの行動。それこそ、黒の剣（ローラレライ）の力を解放するための儀式であったのだ。
普通、そんなことが現実に起こるなんて考えない。父親に話だけは聞いていたけれど、そんなことが私の目の前に起こるなんて思ってみたこともなかった。
だけれど、それは私の目の前に降りかかった。

だけど、何度も言うが私はそんな話を何一つユイアにした覚えもないのだ。

なのに、どうしてユイアはそれを知っていた？
知らなければ、あんな事実は何一つ怒らなかったはずだ。

それに、どうしてあの時黒の剣（ローラレライ）の力が解放されたことによって、巨人はその動きを停止させた？
ユイアと同じく左胸に大きく穴をあけて動きを止めた巨人は、きっとそれと無関係ではないはずなのだ。

それにユイアの最後の言葉、『彼女』って誰だ？

あの灰色の空間は？

あの声の主は？

灰色の天使は本当にいたのか？

いつも考え出すと、きりがなくなった。
そして、最後にいつもユイアの死に顔を思い出す。
どんなに私が彼女のことを思っても、結局のところ彼女自身に聞いてみないことには、全てが分かるはずのないことなのだと考えが行きつく。
だから、私は聞きたかった今、五年という時を経て、幻でも構わない今目の前で私に再び笑いかけてくれている彼女にそれを・・・、どうしてあんなことをしたのか、どうしてあんな表情をしたのか、その意味を聞きたかった。
そして、彼女に告げたかった。
あの時、彼女にちゃんと告げられていない言葉を、『愛している』と告げたかった。

しかして、何年振りかにユイアを目の前にして、私は気がついた。
ここに初めて入った時に感じた、妙に懐かしいような感じ。
ああ、あれはあの異端の扉の向こうの風景。翼(エヴァ)と出会ってから夢でも見なくなった、あの灰色しかない空間とこの場所がよく似ていたからだ。
そう思った瞬間に、灰色の服を着たユイアがにこりと笑って私の腕を掴む。
そして、灰色の花園が私の目の前でぽっかりと人一人入れるくらいの大きさの穴を開け、ユイアが思いもよらぬ強い力で私をその穴に引きずり込んだのだ。

「ヒロ！！」
「おっさん?！」

私を呼ぶ声が聞こえた。
そりゃ、急に私が錯乱したような行動をした上に、急に消えよう

ものなら驚くだろう。
だが、当事者の私だけは何の不安も驚きもなかった。
何故なら、私の腕を引いたのがユイアだったから。

彼女が私にすることならば、私は何をされても構わないと思っていたから。

第六十八話　白と黒、混じり合いしは異端の色　其の九（後書き）

という訳で、ヒロの過去回想編終了～！長かった、上に暗い話でしたね。根気強く、ここまでお付き合いして下さった皆様！本当に感謝です。

さて、ユイアの死については様々な謎を残しておりますが、この後、この灰色の花園でそのほとんどが解決する予定ですので、この後も第三部も後半部分に差し掛かっているので、お付き合いいただけると幸いです。

第６９話　神と天使、そして悪魔　１

悪魔とは誰だ？

神は言った
それは、私に従わぬ者だ

それは、私ではない

天使は言った
それは、天使の翼を切り落とせし者だ

それは、私ではない

君は言った
それは、愛する人を殺した者だ

ああ、それは私だ
悪魔は私、私は悪魔だ

【神と天使、そして悪魔】

そこは、静かな場所だった。
物音一つしない、まるで時を止めたような冷たい場所。

ユイアに腕を引かれた私はたった一人、天使に囲まれていたはずの場所から違う場所に移動していた。

だが、周りは相変わらず灰色で支配されていたし草木の壁に囲まれているその場所は、一見すれば灰色の花園から出た様子はない。同じ灰色の花園の中で移動しただけだろうと思う。

ただ、空気は違うと感じた。

入口に近い場所だったからだろうか空間は違ったものの、先ほどまでいた場所では炎に燃える罪人（アークヴェル）の巡礼地の気配を感じることはできていた。

しかし、ここではそれを微塵（みじん）も感じるとこはできないし、その代りに長い間閉ざされいた空間特有の冷たさと匂いを感じることができた。

「ここは・・・、ユイア？」

ユイアは茫然としている私から、すぐに身を離す。

そして、そのままスタスタと迷いなく歩いていく。その先にあるのは、恭（うやうや）しく台座に鎮座された・・・石の箱。

――それに、私は見覚えがあった。

豪華で荘厳（じゅうごん）なデザインで装飾された、人一人くらいが入れる大きさの重厚（じゅうこう）な石の箱。

そう、まるで死体を入れる柩と見紛（みまご）うようなその箱を、私は贖罪（しょくざい）の街で同じものを見た。

だが、贖罪（しょくざい）の街で見たあれから漂（ただよ）っていた血の匂いは全くしていない。

でも、目の前の箱は間違いなくあの時に見たものと同じだと私の本能が呟いていた。

あれは、あれは・・・

「聖櫃（せいひつ）だ。」

私の心の中の声を、先んじて誰かが代弁する。
その言葉の示す意味より、ユイアにばかり意識を集中させていた私は、その声の主の存在に驚き辺りを見回した。
しかし、驚き急いで声の主を探さずとも、それはこつこつと足を鳴らしながら現れてくれた。
そのまま声の主は聖櫃に近づき、既に私から離れ聖櫃のそばにいたユイアの肩に触れた。

・・・その瞬間、ユイアがまるで霞のように私の眼の前から消えた。

「ユイアっ！」
その事実に気が動転し、私は殺気さえ含んで彼女の名を呼んだ。
だが、それに対してユイアを消した声の主は、馬鹿にするような表情で私を見た。
「おいおい。まさか、今のユイアが本物だと思ってたんじゃないだろうな？」
「・・・っ！」
図星だった。
いや、本物でないと心の中では分かっていた。でも、それは受け入れ難かったのだ。幻でもそれに縋りたかった。
だが、そんな弱い私を嘲うかのように、声の主は私に追い打ちをかけてくる。
「気持ちは分かるが、死んだ人間は二度とは戻ってこないもんだ。なあ、ヒロ？」
分かるといいながらも、その声はこちらを完全に見下している。
私はぎりりと歯ぎしりした。
「貴様は誰だ？どうして、私とユイアのことを知っている？」
「何だ？俺が誰だか分かってないのか？」
「知らないから聞いている。」

声の主は中年も間近に見える、長いぼさぼさの髪に不精(ぶしょう)ひげを生やし、見るからに不潔(ふけつ)そうな男。（まあ不潔(ふけつ)な人間など不浄の大地(ディス・エンガッド)には五万といるし、私も似たり寄ったりなので大きなことは言えないが）

顔は長い前髪に隠れて全貌は見えないが、口元だけがにやにやと笑っている。不潔は気にならなくとも、口元に浮かぶその笑みだけは私は好きになれないと感じた。

・・・私がこの男を知っている？

顔もよく見えないのに、そんなもん分かるもんか。

私はにやにやと笑う男にそんな当然の理由で憤慨(ふんがい)したが、それは意外な形で破られることとなる。

「まあ、実際に会ったことはねぇからな。でもよ。この声には聞き覚えがあるだろ？」

それは、考えもしない問いだった。

だが、そう言われて私の中が揺れた。

「何だよ？二度も助けてやったこの俺様の声を忘れたのかぁ？？」

そう言われて、私の中で揺れたものと男の声が繋がった。

ああ、そうだ。

この人の悪そうな物言い、気の抜けるやる気のない声。これには、確かに聞き覚えがある。

「あの・・・・灰色の空間の？」

繋がった記憶は先ほど回想したばかりのユイアを失った時、私を

ユイアの元へ導いてくれた声。
そうだ、確かにあの声と目の前の男の声は同じ。
でも、二回とはどういうことだ？
「おおっ！思い出したか？でも、あの時だけじゃねぇぞ？あと、ついこの間も天近き城（フェデス・ジグロア）で助けてやったんだぞ！」
ひたすらに偉そうな物言いで、男は胸を張る。
それにしても、天近き城（フェデス・ジグロア）・・・だと？
そう考えて私の脳裏に浮かんだのは、淡く消えゆくエヴァの姿と私を覆い尽くすほどの白い羽。
その美しい情景を壊す、粗野で乱暴な男の声。

『テメエは、そんなに諦めのいい人間だったかよ？』

そう、この声だ。
ヒノウの槍に貫かれ、このまま死んでいくのかと思った私に、発破をかけるような言葉がかけられた。
あの時、意識は朦朧（もうろう）としていたし、エヴァを失ったショックで今まで忘れてしまっていたが、確かに私の頭の中でこの男の声がした。
でも、どうして？
どうして、この男の声が私の頭の中に聞こえてくるんだ？

――――ドクン

そう、疑問に思った瞬間に黒の剣（ローラレライ）が息を吹き返すかの如く鼓動を始めた。握る剣の柄が熱を帯びる。
更に頭痛がして、思わず閉じた瞼（まぶた）。そして、その裏に映るあの時に見た走馬灯（そうまとう）。

美しい子供の笑顔
ヒステリックに叫ぶ女

剣を突き付ける髭を生やした男
切り落とされた翼
白い背中、吹き出る血潮

次々に移り変わる映像の最後はあの大きな目玉

引き込まれ抜け出せなくなるような錯覚さえ覚えて、私は無理やり瞼をこじ開けて現実に戻ってくる。
そして、瞼を開いた先には口元だけ笑う声の主。それを、改めて見つめて私は気がついた。

・・・声だけじゃない。私はこの男を知っている。

あの走馬灯で見た剣を突き付ける鬚を生やした男こそ、間違いないこの目の前の男と同じなのだ。
私は嫌な予感がした。

「思いだしたみてぇだなっ！ま、そうでないと助けたかいがねえよなっ。わざわざ、助けたくもないやつを助けて、会いたくもねぇ奴と会うために、あんな死んだ女の幻まで作るなんて面倒くさいことをしたんだ。精々、俺様を崇め奉れ！」
言っている言葉はめちゃくちゃで、こちらの神経を逆撫でするような物言いだが、私はもう取り乱しはしなかった。
「あんたは・・・誰だ？」
広がる嫌な予感が、私の心を怖いくらいに冷たくさせていた。
それが、身体的に影響しているのか黒の剣が熱を発しているはずなのに、それを握る掌は悴むくらいに冷たくなっている。

「昔もお前はそれを聞いたな。あの時は、答えた所でお前が俺のことを理解できなかったろうから、何も言わなかったがもう解禁だ。

お前は俺を知っているからな。」

そう言った瞬間、男が纏う空気がガラリと変わった。

敵意すら感じるほどに強い力。彼からユイア達に見たような、視覚で認識できるほどの魔力が立ち上り渦巻く。

その色は・・・黒。

「俺の名前は、ウ・ダイ。」

それは、白き神にあだなした神殺しの神。封印された黒き神の名。

第６９話　神と天使、そして悪魔　１（後書き）

新たなる神、黒き神ウ・ダイ登場です。第二十四話でガラの悪い謎の声は実は彼だったのです。果たして彼の目的は・・・それは次回からのお楽しみということで。

さて、お知らせがあります。実は今話からサブタイトルの話数などが漢数字から普通の数字になっていますが、それは近々大規模な加筆修正を行うことに決定しまして、それを加えた話は目印として話数を、漢数字から数字に変えることにいたしました。ということで、今回からそれに合わせて数字にしたんです。（以降は数字で統一するので）

急に何を？とお思いかもしれませんが、話が長くなってきて、もっと分かりやすい感じに話をできないだろうか？と模索していたら加筆修正が必要かなと思い至りまして（笑）

話の大きな流れや登場人物については一切変更はありませんので、今後加筆修正を加えたものを見て頂かなくても支障はないかと思います。しかし、大規模な加筆修正にするつもりなので、興味がある方は是非とも話数が数字になっていたらご一読いただけると嬉しいです。

最後に、以上のことからしばらく更に更新スピードが遅くなると思います。多分、一週間に一回くらいになるかな？と自分では予想しておりますので、その辺りご勘弁いただける有難い限りです。それでは、長々と後書きにお付き合いいただいて、ありがとうございました！

第７０話　神と天使、そして悪魔　２

黒き神　ウ・ダイ

その名を聞いた瞬間に、その黒い魔力を肌で感じた瞬間に、私の体の下の方から何かが湧き上がってくるような感じがした。

それが、もう口や鼻、耳など、私の体にある穴のすべてからあふれ出るような感じ。

だけれど、それを私の中から出してくなくて、私はそれを飲み込んだ。押さえこんだ。

そして、その名の実を知ったのは三大天使・サンタマリアの話の中。知られざる千年戦争の真相を聞かされた時。

蓋し黒き神　ウ・ダイ、それは世界全てに復讐を誓った神殺しの神の名。

聞くところによれば、人間を煽り、私の先祖である黒の一族とともに千年前には多く存在していたという神々を殺して回り、結果、黒き神を討伐するために天使たちは終焉の宣告を発動させ、東方の楽園は死の世界へと姿を変えた。

私のご先祖様と関係があるようだが、正直、この話だけを聞いていれば私を含め後世の人間たちからすれば、ただただはた迷惑な・・・なんて軽い言葉ではいけないかもしれないが、この神さえいなければ、この世の中もっと平和で穏やかでなかったのかと思うような存在だ。

それにしても、サンタマリアの話では終焉の先刻の発動で死に瀕した黒き神は、天使たちによって捕えられ、最後は白き神に封印されたと聞いていた。

それがどうしてここに、私の前に立っていられる？

偽物か？しかし、そんな嘘をつく理由はないな。

「その顔、ちゃんと俺が誰だかは分かっているようだな。しかも、どんだけ俺の悪口ばっかり聞かせられたんだか。俺を思いっきり不信がってるだろ？」

そんなことを言われても、自分でどんな顔をしているかなど分かるはずもないが、言われた通りの顔をしているんだろう。大体そんな感情でいるし。

だから、ずばり思い切って聞いてみる。

「本物なのか？」

そういうと、長い前髪の奥にある黒い瞳が、一瞬大きくなってから面白そうに細められた。

「はは、おもしれーこと聞くなぁ。おう、見ろよ。この黒としか言い表しようのない魔力。お前だって感じてるだろ？黒の武器（カシュケルノ）と同じ色の魔力だ。これを持つのは、黒の武器（カシュケルノ）とその魔力の根源である俺様、黒き神だけだ。」

纏（まと）う魔力を私に見せ付けるように、男は手をかざして魔力の固まりを作り出してみせた。

確かに黒の剣（ローラレライ）の魔力と、男の黒い魔力は色だけじゃない、その感触のようなものも似ているように思う。それに男が魔力を発し出してから、より一層黒の剣（ローラレライ）が熱く反応を示している。

まるで、共鳴しているようだ。

今までも黒き神の名を耳にしただけで黒の剣（ローラレライ）が反応する場面があったが、この反応の仕方はそれの比ではない。

それどころか、私の体にも変化がある。この吐き気のような、何かを吐きだしたいような感じ。・・・気分が悪い。

そうなると、本当の本当にこの男こそが黒き神ウ・ダイというこ

とだろう。（神にしちゃあ、威厳（いげん）どうこうという前に、その身なみからして信じられないが）

「まあ、あんたが誰だろうが私はどうでもいい。」

男の正体が分かったところで、私の態度は変わらない。男に聞かなければならないことは、それではないから。

「それより、あんな趣味の悪いやり方で私をこんな場所に呼び出して、どういうつもりだ？」

ユイアのことを知っているというのは、灰色の空間での出来事を知っているということでとりあえず納得しておこう。（だからって、どうして黒き神が私に干渉してきたかは謎のままだが）

しかし、当たり前だがユイアの幻を使ってまるで誘（おび）き出すよう真似（ね）をされて、私が黙っていられるわけがない。

「なんだ、あれが気に入らなかったのか？お前も愛した女に会いたいかと思ってわざわざ用意してやったのに？」

「当たり前だろう！」

私の感情をかき乱すようなことをしたことで怒っているんじゃない。彼女はもはや、私にとっては罪の象徴であり、聖域なのだ。

それを、そんな風に扱われて誰が喜ぶと思う？

「感情的だな。お前は今も昔も変わらねぇな。」

「？」

懐かしむように言われたが、昔と言われて思い当たる節もない。

あの時、灰色の空間のことで言われているのか？あんな僅かな時の間で、そんなことを言われる筋合いはない。

黒き神の物言いに違和感を感じた。

「まあ、その話は後だ。それより、俺はお前と話がしたくてここに呼んだ。俺は封印されたままだからな、ある一定の条件下でないと現実世界に姿を現わせれない。今の俺は幻に近い存在だぁ。・・・さて、時間もないんでさっさと本題に入らせてもらうぞ。」

やはり、封印されているというのは本当らしい。だが、幻という

には存在感は確かであるし、それに一定の条件とは何だ？
しかし、私と話をしたいと言った割には、黒き神は自分の話だけを一方的に話し始める。（それにしても白き神もそうだったが、神ってやつは自分のことしか考えられんのか？）

「単刀直入にいえば、お前は俺の封印を解くためにここにいる。」

更に偉そうというか、その明らかな命令口調な言葉にカチンときた。

確かに私のご先祖様はこの神の僕（しもべ）か何かだったかもしれないが、だからって千年も前の話を私にまで適用しないでいただきたい。

「何で私がお前の言うことを聞く必要がある？」

当然の物言いだ。普通、誰だってそう思う。

だが、その物言いに対して返ってきた言葉は思いもよらないもの・・・いや、それどころか私に対して大きな大きな衝撃を与えることになる。

もしかしたら、それは私が一生知りたくもなかった事実だったのかもしれない。

「黒の武器（カシュケルノ）は俺の魔力の一部。それに生贄（いけにえ）を捧げたということは、俺に忠誠を誓ったつぅ『契約』になるんだよ。だから、あの女がお前のために死に黒の剣（ローラレライ）の力を得た時点で、お前は俺に忠誠を誓ったという『契約』をしたことになる。俺様の思惑どおりに、どっちかが死ぬまで破棄されねぇ『契約』をなぁ。」

その、言葉尻が上がる聞いていて不快な言葉を最後まで理解した瞬間に、身体が沸騰（ふっとう）したような感覚を覚えた。

そして、吐き気が強くなった。

「・・・あんたは私に忠誠を誓わせるために、ユイアを死に追い込んだのか？」

なのに、現実の自分は恐ろしいくらいに冷静な声だった。頭は身体とは正反対なほどに冷たくあった。

「おお？怒らねぇの？お前が声を上げて怒るリアクションを楽しみにしてたんだがなぁ。お前は過去のことは、あまり引きずらねぇ性質か？思ったより冷てーやつだな。」

「・・・ユイアを殺したのは私だ。それについて、例えそれにあんたが干渉していたとしても、それはユイアを守れなかった私の罪だと思っている。それより、私の質問には答えないのか？」

物言いも黒き神がこれから話そうとしている推測される事柄にも、事実として、怒鳴り散らしたいような、腸が煮えくりかえる気分である。

だが、そうであっても私の言ったことは、私の中の変わらぬ事実なのだ。それは、例え何があっても変わりはしない。

きっと、だからこんなに私は冷静でいられる。

「・・・ちぇ。つまんねー。」

そんな私の様子に、黒き神も調子が外れたのか小さく悪態をつくと仕方なく私の問いに答え始めた。

「まあ、大体がお前の思ってる通りだと思うぜ？そうだ、お前を従わせるために俺はお前の女を死に追い込んだ。」

グワリ、グワリと視界が歪む。

せり上がってくるものが強く大きくなる。それは、今まで私の中にあるとは知らなかった何か。

「どうやって、ユイアを死に追いやった？」

『ヒロを守るために私は命を捧げるの。』

そうだ。

ずっとずっと不思議に思っていた。

結果、黒の剣の力を解放させたユイアの自殺に近い行為。

だが、黒の剣（ローラレライ）の真実を知らなければ現実になるはずのない行為。
そして、私はその話をユイアに教えてはいなかった。
私を助けるためという理由は立てど、その行為につながる情報を彼女は持ち得なかったはずなのだ。ならば・・・、
「簡単だ。お前の女に話してやったのさ。黒の剣（ローラレライ）を渡してやって、それで胸を貫けばお前の命と引き換えにヒロは命は助かることができるって・・・な。黒の剣（ローラレライ）の話を耳元で一から十まで話してやったのさ。そしたら、女は躊躇（ためら）いなく自分の胸を刺したよ。想われてたなぁ、お前は。」

ユイアの死に顔がフラッシュバックする。
辛い、悲しい思いとともに、その言葉の端々（はしばし）から黒き神への憎しみも怒りも膨らみ、それと一緒に先ほどからせり上がってくる何かがもう溢（あふ）れそうになる。
そして、一緒に思い出されたユイアに黒の剣（ローラレライ）を渡していた、顔の思い出せないあの灰色の天使。

「ユイアに黒の剣（ローラレライ）を渡したのはあんたか？」
「・・・ふーん。お前、もしかしてあいつを見たのか？まあ、そうだ。それをしたのは、俺じゃねぇよ。計画を立てたのは俺だけどな。」

私の言葉で何を言わんとしているかを理解した黒き神は、あっさりと私の疑問を肯定した。
やはり、あの天使は幻ではなく現実だったのだ。
だが、黒き神の計画にどうして天使が協力していたのかという疑問は残る。
「では、あの天使は一体？」
私がその問いを発したと同時に、幻とは思えないほど圧倒的な存在感を持って、黒き神は自分より一回り大きな魔力を纏（まと）い私を威嚇した。

「お前には関係ない。」

静かだが、これ以上こちらにものを申させぬほど強い拒絶だった。

不思議に思ったが、他に聞きたいことがあった。だから、私はとりあえずその質問をそれ以上言葉にはしなかった。

それに、私の中の何かがもう溢れんばかりになっている。きっと、もう我慢できなくなる。

だから、問いの紡ぐ言葉は早くなり、私は急いだ。

「では、もう一つ。どうして、私だった?」

「んん?」

そう、これが一番聞きたかった。

「封印を解くために僕が必要だったんだろう?」

感情の乱れのあまりに忘れそうになるが、黒き神は私に封印を解けと言った。

だから、恐らくそれこそがこの神が私をここに呼んだ理由。黒の剣を解放させた理由。

そして、ユイアを死なせた理由に繋がる。

ユイアを殺したのは私だという意識は、黒き神の言葉を聞いてなお変わりはしない。きっと、どんな事実が出てきてもそれは変わりはしないだろう。

だが、その根底にあった理由は知りたいと思った。結果は変わらないとも、私とユイアが、どうしてこんな目にあったのかその理由は。

「どうして、それが私だった?黒の武器が必要だったのか?だが、他にもそれを持つ黒の一族はいただろう?」

その問いには、先ほどとは打って変わって黒き神は晴れやかな表情になる。私の表情は色々なものを我慢するあまりに怖いくらいに

固まり、強張(こわば)っているというのに。
「それは簡単だ。黒の武器(カシュケルノ)は必要でないが、黒の剣(ローラレライ)が必要なんだぁ。そして、黒の一族は必要でないが」

ああ、もう我慢できない。
口までせり上がってきた何か。
悲しみも、怒りも、憎悪も、絶望も、慟哭(どうこく)も人間が持つ全ての感情があふれてくるような、そうあのユイアを失った時と同じような名のつけられぬような感情が、その何かとともに、もう私の中では抑えきれないものになった。

「天使の翼を切り落とした悪魔であるお前が必要なんだぁ。」

黒き神の言葉癖だろう。時々、こちらを不快にさせるほどに言葉尻が上がる。この時も上がった。
そして、その言葉尻が上がった言葉を聞いた瞬間に、我慢していたものがついに爆発した。
灰色の世界に一つあった黒い存在である神を、私から溢れだした灰色が襲いかかった。いや、灰色が襲ったんじゃない。
灰色の魔力を纏(まと)った私が黒き神に襲いかかっていた。

第７０話　神と天使、そして悪魔　２（後書き）

黒き神なんて、大分前の説明になると思うのでお忘れの方も多いことでしょうが、詳しくは第二一話あたりを読んでいただければ、ヒロが言うところのサンタマリアの話があります。

さて、ユイアの死の真相にまつわる話とともに、ヒロについても何かが分かりそうな展開となってまいりましたね。次回は、予告どおり一週間後くらいの更新になりそうです。

第71話　神と天使、そして悪魔　3

ガンと、金属同士が激しくぶつかりあう音が鼓膜を激しく振るわせる。

それは黒の剣（ローラレライ）と黒き神が何処からか取り出してきた剣が、ぶつかり合った音。

幻だという割には、神は確実なる実体をもって存在している。

私はそれを確認しながら、黒き神と剣を合わせたと思うとすぐに身を離し、地面を蹴って再び飛びかかり、剣を振り上げた。

そこには、何の計算も作戦もない。

純然たる、破壊衝動だけで私は黒き神に剣を振り上げていたのだから。

そして、その破壊衝動に呼応するかのように、息苦しいまでに熱い身体からは灰色の魔力が吹き出してくる。

自分の中から湧き上がるその灰色の魔力が、私を制御無きまでに凶暴な破壊衝動だけの獣にしてしまっていた。

でも、どうしてだ？

どうして、私はこんな風になっているのだろう？

下らない理由のためにユイアを死なせた黒き神への怒りで、私は我を忘れている？

それとも、ユイアを守りきれなかった不甲斐（ふがいな）無き自分への憤（いきどお）りのための八つ当たり？

だが、これはそんな生易しい感情とは一線を画しているような気がしてならない。

何だろう、本当にまるで獣にでもなったみたいに、全ての人間性を捨てた私は人間ならば誰もができるような正常な思考すら出来そ

うもないのだ。

いや、そんなことはない・・・？

だって、こうして今も妙に自身を冷静に分析している私がいるじゃないか。

だが、それはまるで心と身体が分裂してしまったかのように、黒き神に向って牙をむいている自分を他人のように見つめている私だ。

戦っている自分は自分ではないような、そんなおかしな錯覚さえ私は覚えている。

黒き神に戦いを挑んだ所で、ユイアが返ってくるわけでも、私の無念が消えるわけでもないことを私は理解しているのに、剣を振り上げ続ける私は全く理解しようとしていない。

もはや、何のために振り上げられる剣なのかも、きっと私は分かっていない。

ただただ、何の目的のない破壊衝動に身を任せたその姿はあまりに醜悪（みにく）く、見ているだけで不快になる。

これが、私だろうか？

いや、これも私？

それとも、これこそが私の本当の姿なのか？

こんな、まるで悪魔のように醜悪（しゅうあく）で、人間味のない私が？

悪魔？

私が悪魔？

「真の姿を現したようなだ。悪魔・ヴォルツィッタ。」

そんな私の思考とシンクロしたように告げられた言葉。

身体の私と剣を交わらせたまま黒き神が、にやりと笑った。前髪の奥から覗（のぞ）くその瞳は、間近で見ると怖いくらいに真っ黒だ。

そして、笑みを湛えたままに黒き神は、身体の私を力押しで地面に薙ぎ倒してきた。

「・・・っぐぁ！」

無論、ただ倒されただけなので大きなダメージがない身体の私はすぐに起き上がろうとしたのだが、上から頭を足で踏みつけられて私は再び地面に倒される。と同時に体に声を出すほどの激痛が走ったのだ。

「痛いだろう？ご主人様に逆らった罰だ。忘れてもらっては、困るがよぉ。お前は俺と契約を交わしているんだ。契約に基づきお前の身体は俺に逆らえないようになっているんだぁよ。ヴォルツィッタ？今も昔も、お前は俺様の下僕なんだ。」

言いながら、頭を踏みつけた足がぐりぐりされる。

更に私を踏みつけながら、黒き神の話は続く。だんだん、神も興奮しているのか、声はだん次第に大きく張りあげられゆく。

「そう！千年前、お前はあの忌々しい天使の翼を切り落とした、我が下僕の悪魔・ヴォルツィッタの転生した姿。懐かしいぞぉ、お前は前世の姿と瓜二つだからな。それどころか、お前は昔の記憶すらも見ているはずだ。昔もお前の武器だった黒の剣を通してな。」

あくま？

アクマ？

・・・・悪魔。

言葉は私にまで届いても、あまりに考えもつかない話に、その意味を自分の中で形あるものにするのに時間がかかる。

だが、理解してしまえば、もうその言葉は聞かなかったことにできない。

黒き神は、私を悪魔だと告げた。

私がエヴァンシェッドの翼を切り落とした悪魔だと。

ユイアが死んだ罪人の処刑台で処刑された悪魔だと。

では、あの身に覚えのない走馬灯はいわゆる前世の記憶？

・・・そんなこと、急に言われても信じられるわけがない。

自分という存在を根底から覆すようなその事実は、結果、心の私のキャパシティーを大きくオーバーして、私を完全にフリーズさせた。

しかして、心の私はそんな状態なのに、身体の私は依然として破壊衝動を抑えられず、体は激痛に蝕まれているというのに、それでもなお黒き神に逆らおうとしている。

そして、そんな両方の私など無視して黒き神の独壇場は続いている。

「それにしても、痛いだろぉ？どうしてだか、わかるか？それはなぁ、その灰色の魔力のせいなんだぞ？」

言いながら、黒き神は私の頭から足をどかすと、すぐに私の後ろで一つに結ばれている髪を掴で私の顔を覗き込んだ。

「その灰色の魔力は異端の証。そしてお前が悪魔と呼ばれた所以。黒の一族、いやその昔、『異端の一族』と呼ばしめたのが、その灰色の魔力。それは、一族に人間が持つには大きすぎるほどの力を与えたが、代わりに耐えがたいほどの苦痛を与えた。それこそ、夜も眠れないほどの痛みだった。」

『異端の一族』。

それは、私が見た父親のメモにあった言葉の一つ。

「だから、お前らは俺様にその痛みを取り除いてくれと泣いて頼んできた。優しい俺はその望みを叶えてやった。おかげで一族は皆痛みから解放された。感謝しろよぉ？それから、お前たちは俺に泣くほど感謝をして、子々孫々に渡り俺の下僕なるという契約を交わした。」

身体の私が髪を掴まれようとも暴れているのを、どこか面白そうに黒き神は見ている。

「だが、俺様は結構用心深くてな？痛みがなくなったから・・・と、すぐにお前らが俺に対する感謝の心を忘れ、その灰色の魔力を使って神に歯向う・・・なんつーことがないように、お前たちに鎖を付けた。」

黒き神が髪を掴んでいる逆の手で、私が握りしめていた剣を抜き取る。

「それが、この黒の武器（カシュケルノ）だ。」

ペシペシと、神が私の頬をそれで撫（な）でた。

「一つ、灰色の魔力は黒の武器（カシュケルノ）と契約を交わしたものしか使うことを禁ずる。一つ、黒の武器（カシュケルノ）と契約を交わすためには大切な人間を生贄に捧げなくてはならない。一つ、黒の武器（カシュケルノ）を俺様の意に沿わぬ使い方をした場合は、封印した痛みを全てその身に受けることとなる。これが、俺とお前たち一族が交わした契約だぁ。」

すなわち、『異端の一族』と呼ばれていた私の祖先は、魔力による痛みから解放されるために、このガラの悪い神の下僕となる契約として、神の一存がなくては力も使えず、神の意に沿わなくなれば命すら握られているという、自分たちの魔力も命も全てを委（ゆだ）ねてしまったということ。

そして、私もまたその契約を結んだということなのだ。

自分が悪魔どうこうという事実より、そのことに気が遠くなるような気がした。

「そうだ。事のついでだぁ。もう一つ、面白いことを教えてやるよぉ。お前の親、ずっと何かを調べていただろ？」

そして、黒き神は急に話をガラリと変えてきた。

それにしても、父親のことまで知っているとは・・・こいつは私のストーカーか？

「何を調べていたと思う？」

心の私が身体の私を制御できていないと分かっているはずで、答えが返ってくるはずもないと分かっているはずなのに、黒き神は一々私に問いかけてくる。（すぐに自分で勝手に答えを言うくせに）

「それはなぁ、お前のことを調べてたんだよ。」

違う。父親が調べていたのは翼（エヴァ）の伝説だと、心の私はすぐにそれを拒否した。

だから、私は罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）に訪れることになったし、結果エヴァの封印を解くことになったではないか。

それは、父親が調べていたのが翼（エヴァ）のことだったから、そうなったんだ。

「話は一端かわるがな？俺は一定条件下でしか地上に姿を現わせねぇ。姿を現わせなければ、封印されている今の状況じゃあ、そうそうお前にコンタクトもとれねぇのよ。その一定条件つうのが、大まかにいえば異端のある場所なんだ。ここでいう、異端ってのは罪人（ディッチ・ア・ヴァリス）の処刑台やこの灰色の花園みてえに、異端の魔力、灰色の魔力に満ちた場所のことだ。だがよぉ、そんな場所、そうそう多くある訳じゃねぇだろ？それに、お前が例え俺様の下僕（げぼく）であっても、封印された俺がお前にここに来るように強制はできねぇ。ってことはよ？お前が異端の場所に来る可能性ってのは、本来そうは多くねえんだ。」

確かに、それはその通りだ。

でも、その少ない可能性を私は引き当ててしまった。

ああ、異端の場所に行きさえしなければ、もしかしたら私とユイアは未だに二人で生きていたかもしれないのに。

私はなんて運のない男だろう、とそこまで考えて、ふと思った。

そういえば、どうして私はそんな場所に行くことになったんだっけ？

「だから、俺はその可能性を上げるために、確実にするために、お前の親にお前が生まれる前に、たまたま異端に近づいた時に言ってやったのよぉ。将来、お前たちから生まれる子供は呪われた『悪魔』だとな。」

――悪魔

「言っとくが、告げたのはそれだけだ。だが、親ともそんなことを言われたら心配になるだろう？自分の子供が悪魔だとは思いたくないだろう？それに、悪魔とは何だ・・・とか？結果、お前の親が前世のお前の足跡を辿ることは目に見えていた。お前の足跡、それこそ異端だからな。だから、親がその調べる過程できっとお前を異端に連れてくると、俺は踏んでた訳よぉ。」

――本当に、親父は翼（エヴァ）ではなく、悪魔について調べていたのか？

「結果、俺の思惑どおり親は一生をかけて悪魔について調べるようになった。まあ、大きな誤算だったのが、親が調べてるのに、悪魔って言葉を怖がりすぎちまったのか、お前を悪魔の関わる地から遠ざけちまったことだな。おかげで、お前との接触は遅くなっちまった。でも、お前は親の意志を継いで、異端の一つである罪人の巡礼（ディッチ・ア・ヴァリス）地に辿りついてくれた。まあ、結果オーライだぁ。」

私に何を調べているか決して教えてくれなかった父親。

それは、私が悪魔かどうか、確かめるためだったのか？

ひょっとして、両親は私を悪魔だと思っていた？

いや、そんなことはない。

父も母も、私のことをとても大切にしてくれた。両親に関して言

えば、私には幸せな記憶しかないんだ。
悪魔だと思っていたなら、私にきっとこんな両親の記憶は残らないはずだ。
それを、私に教えてくれなかったのは父親の愛情だ。私が悪魔であるなど、信じていなかった。いや、信じたくなかった。
そう、私は信じたい。
でも、それでもそんなことを言われて怖かったから、きっと私を異端の場所には、悪魔の纏(まつ)わる場所には連れて行かなかったし、それに何を調べているかも教えてくれなかった。

なのに、私はわざわざ自分から異端の場所へ行った。悪魔について調べ始めたのだ。

その事実に愕然(がくぜん)とした。
ああ、悪魔という存在から、できるだけ遠ざけて育ててくれた両親の思いなど知らずに、私は自ら悪魔へと近づいて、そして、ユイアを殺したのだ。
絶望が私は支配する。

そして、その絶望に呼応するように、私の中の灰色の魔力が音を立てて沸騰(ふっとう)し出した。

第７１話　神と天使、そして悪魔　３（後書き）

詰め込み過ぎた感もありますが、色々分かってきた感じですよね。
ヒロにも、こんな隠された事実があったわけですよ。
でも、黒き神との場面は、これがメインではありません。当分、
このガラの悪い神様とお付き合い頂く形となりますが、皆さまどう
か見捨てずにお付き合いください。

第72話　神と天使、そして悪魔　4

とにもかくにも、人生の中でこれほど自分に腹がたったことはない。

そして、これほどに誰かを憎んだこともない。

「いいぞぉ、ヒロ!!もっと、怒れ、悲しめぇ!そうすれば、もっと魔力が満ちる!俺様の封印を解くための魔力が満ちるぞぉっ。」

しかも、それほど憎い相手が神様などと、普通はたちの悪い冗談にしか聞こえない。

しかして、全て、そう私と私の愛すべき人たちの悲劇のその全てが私のせいであり、この黒き神のためだというのだ。

それを知った私がこの黒き神を許せるはずはない。

愛したユイアの笑顔が、父と母の優しい面影が悔し涙のたまった瞳に滲んだ。

そして、断続的に続く激痛とともに、彼に対する純然たる殺意はムクムクと膨らんでゆく。

「俺がどうして、こんなに喜んでいるか聞きたいかぁ?聞きたいだろう??」

耳障りの悪い声に、絶望、不甲斐無さ、後悔、全ての負の感情が交差して、私は思いつく限りの罵詈雑言を吐きながら地団駄を踏みたい様な、そんな最悪な気分だった。

「いいかぁ?良く聞けよ?全ての灰色の魔力は、俺と共に千年前に封印されたんだよぉ。なのに、俺様の封印を解くにはその灰色の魔力が必要だぁ。まあ、ここをはじめとして異端と言われる場所には

確かに灰色の魔力がある。だが、そりゃあ所詮残りカスにすぎん！世界のどこにも俺様の封印を解くのに必要な分だけの魔力はねえの！！このままじゃ、俺様は自由になれん！！」

声を聞けば聞くほどに不快感とともに次第に身の内で大きくなる何か。そして、それが再び溢れだぞうとしているのを私は感じている。

それに共鳴するかのように、私を蝕む激痛が増していく。きっと、私の中の灰色の魔力が大きくなってきている。先よりも強い魔力が私から溢れようとしているのだ。

魔力を持たぬ人間から、どうしてこんなに魔力が溢れてくる？

これは、いよいよ私が悪魔だという話に信憑性が出てきたってもんだろう。

そして、その事が私の愛すべき人々を悲劇に導いた。

だが、それもこれも、今は忘れようと思う。

今はただ全てをこの灰色の魔力に、溢れくる破壊衝動に身を任せ、この先ほどから耳元でうるさい黒き神へ、この言いようのない苦しみと悲しみを叩きつけてやりたいのだ。

なのに、溢れる灰色はもはや身体の私だけに留まらず、黒き神を憎む心の私すらも侵食し始めており、私の願いにも似た感情すらも朧げにしようとしている。

恐らく私の全てが私ではなくなるのも時間の問題だろう。

「だが、俺は思い出したぁ！俺を解放できるたった一つの存在を！！」

もし、このまま私が私でなくなったらどうなるのだろう？

灰色の魔力に支配された私は本当に悪魔にでもなってしまうのだ

ろうか？

そして、二度と人間に戻ることはなく、この神を殺し、私は世界の全てを破壊する。消えかかる意識の中で、そんな倒錯（とうさく）した考えが浮かんでは消える。

だが、この黒き神を消し去ることができるなら、それでもいいと思った。

たとえ、私の命を賭けたとしても、世界の全てを失っても、黒き神が私の眼の前から消えてくれるなら私は何を失っても構わない。全てを私の中の悪魔に捧げよう。

黒き神がいなくなっても、何も帰ってはこない。誰も喜びはしない。それは分かっている。

そして、全ての悲劇が私のせいだという想いも変わりはしない。だけれど、どんなにその感情が強かろうとも、もはやこの黒き神を許すことはできないのだ。

私を愛してくれたユイアを死に追いやり、私を愛してくれた父を嘲笑（あざわら）ったこの神を、彼らに愛された私が許さないなどと、例え誰が許そうとも私自身が許せない。

全ては私が愛した人たちのために、私を愛してくれた人たちのために、私はその愛に報（むく）いるために全てをかけてこの神を殺さなくてはいけないのだ。

そして、そんな想いすら満足に訴えることもできない制御不能の身体の私だが、溢れてこようとする灰色の魔力に歓喜を示し、膨（ふく）れ上がる殺意に同調して、獣のような叫び声を上げて再び黒き神に牙をむく。

掴まれた黒き神の手を払い、黒の剣（ローラレライ）をその手から奪い返すと神に向って灰色の魔力の塊を放つ。

黒き神はそれをふわりと軽い足取りで交わした。だが、それをすぐに身体の私が追う。

ガガンッ!!

そして、再び合わさる剣と剣、ぶつかりあう力と力。

二色の魔力が黒き神と私の間で剣と同じ様にぶつかり合い、黒混じりの灰色の魔力が生まれ出でては、火花のように一瞬で消える。

そして、黒き神は剣を合わせながら、私の顔に唾(つば)を吐きかけるほど近くで叫ぶ。

「それが!俺様をこの世でたった一人解放できる存在こそ、悪魔・ヴォルツィッタ。お前だよ、ヒロォ!」

声の大きさに比例するように黒き神の魔力が剣を通して大きく爆発し、私を吹っ飛ばし大地に叩きつけた。

身体が軋(きし)むような激痛はなおもまだ続き、それを更に痛めつける衝撃が背中に走った。

「それが、どうしてだか分かるか?思い返せば千年前、俺が黒の魔力によって封印したお前ら異端の一族の持つ灰色の魔力!俺はそれを、俺の許しがなくては黒の武器(カシュケルノ)があったとしても使えないようにしたっ!だが、オメーだけは今みてえに感情を昂(たかぶ)らせるとその魔力を出しやがるっ!」

怒っているのか喜んでいるのか分からない怒鳴(どなり)り声、そして神は笑う。

それから一瞬で別人にでもなったかのように、瞬時に能面のような顔で私を見ると、それまでの興奮した様子とは一転して、妙に短く冷めた声で言ったのだ。

「だから、光栄に思え?お前だけが、俺様を解放できる役割を与え

られるんだ。」

声がだんだんと遠くなる。

聞こえてくる言葉に怒りも悲しみも憎しみも感じているはずなのに、次第にそれは私という存在とともにゆらゆらと消えようとしている。

嫌だった。

悪魔に魂を売り渡してもいい。だが、この神だけは私の意識のあるうちに殺したかった。

その想いに応えるように、身体の私が痛みを振り払い再び黒き神に向ってゆく。

「おいおい、あんまり暴れるなよ?せっかくの花園が台無しだろ?ここは、前世のお前も知っている女が愛した場所だぞ?」

そして、その湧き上がる破壊衝動に身を任せたまま、本能の赴くままに黒の剣(ローラレライ)と溢れる魔力をふるい続ける私に、軽口ばかりをたたき油断していたのか一瞬だけ黒き神がよろめき、体制を崩した。

絶好のチャンスを見逃すことなく、すかさず身体の私は剣に常である黒の魔力ではなく、灰色の魔力を込めると体勢を崩した黒き神に向って叩きこむ。

「グッ・・・」

僅かに掠(かす)った感触と、上がった小さな呻(うめ)き声で私の攻撃が黒き神に当ったことは分かったが、体制を崩しながらも黒の剣(ローラレライ)を地面を転がるように黒き神はそれを避けた。

そして、神は存在を忘れていた聖櫃(せいひつ)の辺りまで転がると、その花園の中央部の台座の上に鎮座されている聖櫃(せいひつ)に手をかけて立ち上がった。

だが、悪魔に近づきつつある私は体力すらも無尽蔵(むじんぞう)になったのか、

痛む身体も上がる息も関係なく、一気に走り抜けながら神が体勢を整え直す前に黒の剣（ローラレライ）を思いっきり振りかぶった。

「ダアァァ！！！」

「ば――――」

黒き神にとって、ただただ剣を振り上げているだけの私の攻撃など避けることも容易（たやす）かったはずだ。

だが、背後にある聖櫃（せいひつ）のことを気にかけるような素振りを見せた黒き神は、逃げることなく黒の剣（ローラレライ）を受け止めるように自らの剣を構えたのだ。

それならば・・・と、制御不能の身体の私がそこまでの状況を把握していたかは定かではないが、まあ、その辺りは本能で感じ取ったのだろう。

身体の私は黒き神が逃げないことを確認すると、それまでとは比べ物にならないくらいの魔力を剣に込めた。

それにより、身体の全てが激痛に悲鳴を上げる。

黒き神が言うように、確かにこの灰色の魔力は人間の身体には耐えがたいものだろうだろう。正直、このまま体がバラバラになってしまうような気さえしていた。

そして、私と黒き神の力が、灰色と黒の魔力が高まりをもってぶつかり合う。

びりびりと腕が痺（しび）れるほどの衝撃が剣に伝わり、灰と黒の火花が弾（はじ）けた。

剣を上から振りおろした私と、それを下から受けた黒き神。

両者の力は今のところ互角。ぎりぎりと剣を合わせたままに私たちは力の押し合いになった。

少しでも力を抜こうものならば、間違いなく吹っ飛ばされる。

それも、先ほどとは比べ物にならないほど、それは強い衝撃となるのは目に見えている。
私も黒き神も、ここは一歩も引けなかった。
そして、溢れる魔力を纏った私と神の力の押し合いは魔力の渦を作り出し、次第にそれは大きな竜巻のようになり上空に向ってうねりを上げた。
更に、その魔力の竜巻は本物のそれのように凄まじき風を巻き起こし、私と黒き神を中心にして灰色の葉がものすごいスピードで飛ばされる。
そして、その強い風という名の衝撃波は、黒き神に守られるようにしてその後ろにある聖櫃にまで影響を及ぼし始めた。
見るからに重いその石の箱が、私たちから放たれる衝撃波にガタガタと音を鳴らしながら台座から追いやられるように動き始めたのだ。
そして、ガタンッと風の音が凄まじい中に木霊する重いものが落下した音。
灰色の大地に落ちた聖櫃
箱が割れはしていないがその蓋は外れてしまったようで、黒き神越しに私は、その忌まわしき箱から何かが転がり落ちてくるのを見た。
そして、その転がり落ちたものと目があう。
――――ドクン
大きくなる心臓。ぐらりと視界が揺れた。
そして、それまで何とか耐えていたぎりぎりの自分がぷつりと切れるような感覚。
抑えていた身体の中の、灰色の魔力が決壊した。

――全てが灰色に染まる

しかして、私という全てが灰色に塗りつぶされて消えゆく意識の中、私の目があったそれは天使だった。

そう、それはとても美しい女性の天使。

もしかしたら、人形かもしれない。

転がり落ちても目を見開いたままにぴくりとも動かないそれは、おそらく人形か死体に違いない。

だが、それは遠目に見るだけには、どちらとも私には言えなかった。

死体にしては美しすぎ、人形にしては妙に生々しい、その

――灰色の衣を纏(まと)いし天使

そして、その異形(いぎょう)なる天使には私は見覚えがあった。

そう、どうして今まで忘れていたのか分からないが、その天使を見た瞬間に私は思い出したのだ。

それはあの時、ユイアに黒の剣(ローラレライ)を手渡していた、私に微笑みかけた灰色の天使だ・・・と。

そして、それだけではない。

異形なる天使のその顔を私はつい最近も見ていたのだ。

――ハクアリティス

そう、その異形なる天使は、エンディミアンであり今は恐らく銀(ウィンザード・シエラ)月の都にいるはずの、あの天使の花嫁である彼女と瓜二つの姿形をしていた。

これは、どういうことだ?

しかして、その答えには至らず私の意識は完全に灰色に覆われ、
記憶はそこでぷっつりと切れた。

第７２話　神と天使、そして悪魔　４（後書き）

気になる所でヒロの意識が完全に切れました。果たして、ヒロは本当に悪魔になってしまったのか？聖櫃から出てきた天使の正体は？黒き神の封印は解かれるのか？

・・・と、まあ、色々気になる所ではなりますが、ヒロの意識が完全に切れた形となるので彼の話とは、しばしお別れです（笑）次からは、お忘れの方も多いかとは思いますがヒロに置いて行かれた人々が、どうなったかエヴァンシェッド視点でお送りしたいと思っています。

第73話　神と天使、そして悪魔　5

その瞬間、それまで耳が痛くなるほどに静かだった灰色の花園が突如として動き出した。

地鳴りが響き、灰色の花や木々が落ち着きなく騒ぎ、地面がグラグラと立っているのも覚束(おぼつか)ないほどに揺れる。

「一体、何だっ!?」

「これは?!」

ヒロが消えてから互いに睨みあいの膠着(こうちゃく)状態が続いていた俺達天使と、白き神を抱えた人間たちも花園の明らかな異常さに色めき立つ。

人間たちにも動揺が見えたことで、すぐに思い浮かんだこの異常事態がエンシッダの作戦であるという可能性が消える。

・・・いや、あの男のことだ。味方すら騙(だま)しているという可能性もあるか。

「エヴァンシェッド様、これはっ?!」

俺に従ってここまできた天空騎士団(アイッシュグランド)たちも浮足立つ。

「落ちつ――――」

とりあえず、まだ敵である人間たちが目の前にいるのだ。

この混乱の中で彼らに逃げられては、エンシッダのことだから恐らくここにある聖櫃(せいひつ)を狙ってくるだろうと思って待ち伏せていた甲斐がなくなる。

だから、まずは天使たちを落ち着かせようとしたのだが、俺が最後までそのための言葉を発するより先に恐怖に染まった悲鳴が上がった。

「うわぁあぁぁぁっ!!!」

「どうしたっ!?」

隊長格である天使が硬い声で悲鳴に応え、俺もその方へ素早く視線を向けて絶句した。
「アレは・・・っ！？」
――――それは、灰色
なんと人間ほどの大きさのアメーバ状の灰色の塊が、天使を飲み込んでいたのだ。
そして、そこから出られない天使が、まるで水中に閉じ込められているかのように苦悶の表情で、手足をばたつかせてもがいている。
ゾワリ・・・と背筋を駆け上がる悪寒に俺は足が竦み、真っ白になった頭の中では、目の前の光景とだぶるように惨たらしい映像が映った。
そう、俺はこの光景を知っている。
これは、これは・・・
ドンドンと血液が流れる音が鼓膜を叩き、頭は沸騰しているように熱くなり、それとは反対に体は過る不安に怖いくらいに冷たくなった。
「――――まっ！エヴァンシェッド様！！」
「っ！？」
そんな茫然自失の俺に、天空騎士団の天使が大声を張り上げる。
「早く飛んでお逃げください！！ここは何かがおかしい！！！」
その声に我を取り戻せば、天使を飲み込む灰色の塊がいつのまにか俺達を囲んでおり、天使たちも一人どころではない。幾人もが既に飲み込まれている。
一方人間たちは今はまだ飲み込まれていないものの、彼らにもまた灰色の塊が間近に迫っている。
飛び上がる翼のない彼らは、完全に逃げ道を塞がれている。

「白き神は、我々が後から人間たちから取り返しておきますので、エヴァンシェッド様はお早く・・・っ！」
「いや、問題ない。」
「えっ！？」
直面したことのない状況に混乱する天空騎士団（アイッシュグランド）を尻目に、自分を取り戻した俺は、掌（てのひら）に身の丈以上の長さのある全知（シェーヴァ・ミシェ）の杓杖を出現させた。

「白き力よ、我が声にこたえよ。」
声に全知（シェーヴァ・ミシェ）の杓杖の頂点に鎮座する白き宝石が眩（まばゆ）い光を放ち、俺はそれを灰色の空に打ち上げる。
瞬間、それに引き寄せられるように天使たちに襲いかかっていた灰色の塊（かたまり）が、飲み込んでいた天使たちを捨ててまでも上空の白い光に吸いついてゆき、瞬（またた）く間に見るのも気分が悪いほど大きくなった。
そして、一体どれだけ塊（かたまり）があるのだろう。その肥大（ひだい）はとどまることを知らずに続いていく。

俺はちらりとそれに目をやると、灰色から解放されても恐怖と混乱に陥（おちい）っている天使たちに声をかけた。
「これで、しばらくはこちらを襲ってくることはない。お前たちは白き神を連れて、急ぎここを離れろ。」
「は・・・はいっ！」
それから、すぐにこちらも未だ状況を掴（つか）めていないような人間たちと、それとは対照的に蒼白な顔をした白き神たちに俺は近寄った。
「それ以上、近寄るなっ！！」
だが、さすが人間とは言え、エンシッダに戦士として教育されているだろうことだけはある。
どんなに混乱していようが自分のすべきことは分かっているらしく、近づく俺にどうみてもまだ子供であろう戦士が牙をむく。

しかし、俺はそんな風に向けれる敵意を全く無視し、俺に対して縋(すが)るような表情をする白き神だけに視線を落とした。
「我が主よ。貴女が何のためにエンシッダに協力しているか、私には分かりません。」
――――いや、本当は知っている。
「私は・・・っ。」
追いすがる声に、俺はすぐさま背を向ける。
知っていると認めた瞬間に、壊れるものがある。だから、俺にはそれを分からぬふりをする術しか持たない。
ただ、これ以上は白き神をこの場にいさせるわけにもいかず、俺は白き神を急(せ)かすように言葉を重ねた。
「ともかく、すぐにここを離れてください。それが御身(おんみ)のためです。あれは、異端なる灰色の魔力。飲み込まれたら最後、神とて五体満足ではいられないもの。天空騎士団(アイッシュグランド)とお逃げ下さい。」
「イヌア・ニルヴァーナ様はお前とは行かないっ！ロッソ！！」
背中を向けたままに言う俺に、子供が回り込んで吠(ほ)えた。
その声に従うように、子供の後ろにいた彼より大きな体をした獣が牙をむき出しにして無防備に背を向けた俺に飛びかかる。
「ケルヴェロッカ、やめてっ！！」
高い声とともに背中に柔らかい感触と、俺に抱きついた細く白い腕。
襲い来るはずの獣の攻撃は俺を守るように抱きしめるその存在故に牙を失くし、勢いあまって俺を通り越した。
「ほら、見ただろう？」
俺は子供を見下ろした。
「白き神はお前たちとは行かない。俺の所に来るのさ。」

冷たく言い放ちながら自分の胴に回る腕に手を添えれば、ほぅと白き神の溜息が洩れるのを感じた。
子供が悔しそうに顔を歪める。
俺は白き神の腕をとり、今度こそ彼女を天空騎士団に引き渡そうとした。

「ヒロを何処にやったの？」
だが次いで発せられた声に、その動きを止められた。声の主は、それまで沈黙を守っていた人間の女。
俺は白き神に抱きつかれたままに、顔だけをその声に向けた。そこには、赤い光を湛えた瞳を持つ女がいた。
その赤い色が不思議と気に入らなかった。そして、その問いも俺の神経を逆撫でした。

『どけ。』

思い出すのは、俺の顔も見ずにそう言ったヒロ。この俺を前にしても、眉ひとつ動かさなかった彼の顔は全ての感情を失っていた。
まさに、死人のような。

『会いたかった。』

なのに、俺に背を向けてそう呟いた小さな声には、例えようもないほどに愛おしげな感情が見えた。
顔も見ていないのに声だけで、ヒロがそう告げた相手をどれだけ大事にしているか分かるそんな声。
どうにも、その声を聞いて意味の分からない不快感が募った。
それは、誰もいないはずなのにそう告げたヒロに対する不信感からか、それとも、俺の中で燻り続けているエヴァの嫉妬からなのか定かではない。

だが、ヒロにはそう簡単に死んでもらっては困るのだ。思いながら、抜けることのない指輪を白き神の腕に添えながら擦った。

――――ヒロが何処に行ったかなど、知りたいのはこちらの方だ。

俺は女の問いに心の中だけで苦々しく答えながらも、実際には一瞥をくれただけで、今度はすぐに白き神に向きなおった。

「白き神、私は行かなくてはなりません。」

「・・・何処に？」

「灰色の魔力をこのままにはしておけませんから。原因を突き止めて、これ以上に魔力が広がらないようにしなくては。」

俺の言葉に白き神が大きく首を横に振って、俺になおさら抱きついた。

「駄目ですっ！そんな危ないわ！！」

「心配ありません。これが私の役割ですから。」

俺の言葉に白き神の表情が強張り、そして、次の瞬間に強い敵意の色を露にする。

「貴方は、千年経ってもあの女の犯した罪を償い続けようというのですか？」

言い募る白き神は、放さないとばかりに腕の力を強めた。

俺はその腕にそっと手を添えて、それからこの異常な事態には不似合いなほどに微笑んで見せた。

それに反応して、白き神は頬を赤らめる。同時にその瞳に映る自分の頬笑みに、俺は反吐が出た。

だが、それを表に出すようなヘマはしない。

俺はその微笑みのままに白き神から身を放し、するりと力抜けた腕から解放される。

「貴女はすぐにここを離れて下さい。」

そして、言い捨てて俺は先に進むべく歩きだした。
本当は天空騎士団（アイッシュグランド）に白き神を引き渡したかったが、それをして人間たちと戯（わたむ）れている余裕が今はない。
背後では白き神の追いすがる気配もしたが、それはすぐに人間たちによって引き留められた。彼らとてその実は知らずとも、あの灰色の魔力の恐ろしさを肌で感じ、ここから離れた方が良いことを分かっているのだろう。
これ以上は聖櫃（せいひつ）を求めず、白き神と逃げる様子が視界の端（はし）に見えた。
魔力を持つ、彼らだからあれの恐ろしさを敏感に感じているに違いない。
そう、人間のくせに魔力を纏（まと）っている彼ら。

それは、世界の理に反した存在だ。

だからこそ、先日殺されたあのエンディミアンが造りし魔人（ベルトゥール）も魔力を持っていたが、理に反した代償として彼らは人間としての存在意義を失った。
だが、彼らはどうだ？
人間としての存在も持ちながらにして、彼らは天使と同等か、それ以上の魔力を俺の前に示した。
魔人（ベルトゥール）とは、明らかに一線を画している。
そう、強いていうなれば、彼らは世界の円卓（アディス・ジア・ヴァッハ）で見たあの改良された魔人（ベルトゥール）と良く似ているのではないだろうか？
そう思い至り、嫌な予感が脳裡（のうり）を過る。

――――まさか、あのエンディミアンの研究は完全に完成していたというのか？

先日、背後にいる女によって殺されてくれたエンディミアンのお

かげで完全に魔人（ベルトゥール）の研究も頓挫（とんざ）した。そして、尊き血（ビットゥ・ラ）の天使の思惑も全て白き議会（イビシデュア・カルヴァ）で潰してやったというのに、彼らの存在は今後の行き先に大きな影を落としそうだ。

そう思うと、非常に気が重い。

だが、今はそれも後回しにするしかない。

白き魔力に無尽蔵（むじんぞう）に群がる灰色の塊（かたまり）を見ながら、俺は顔を顰（しか）める。

そう、全てはこの異端の存在をどうにかしてからだ。

俺は様々に散る思考を中断させて、不安に押しつぶされそうな自分を奮（ふる）い立たせるように、全知（シェーヴァ・ミシェ）の杓杖を強く握りしめた。

第７３話　神と天使、そして悪魔　５（後書き）

混迷を極める灰色の花園編は、もうしばらく続きそうです。更にエヴァンシェッド視点で今回はお送りしましたが、混迷ついでに、しばらくはころころと色々な人々の視点に変わる予定です。落ち着かない話になるかもしれませんが、よろしくお願いします。

第７４話　お前に流れる血は何色だ　１

その人は、そっと手首に刃をあてた
滑らかなる柔肌に紅の血が浮かぶ
肌の白きその場所に、血の色の何と鮮やかなことか
その美しさに私は思わず感嘆の息を漏らす

――――赤き血は人間の証

人間であることを遠い昔にやめたその人が、人間であることを示すたった一つの証
だから、その人は血を流し続ける
世界がその人を人間だと認めずとも
せめて、自分だけは人間であることを忘れたくないからと
自分の手首に刃を当てて、その人は血を流し続ける

【お前に流れる血は何色だ】

「離してくださいっ、ティア！エヴァンシェッドが行ってしまいますっ！！」

この白き神という女神は、今しがた自分が万象の天使に自分が突き放されたということが分かっていないの？
何者が追ってくることも拒み頑なままに遠ざかる天使の背中を見送りながら、引き留める私から逃れようともがいている女神にそんなひどく冷めた感想を、私は今抱いている。

その反面。
はっきり言って、このどう見ても緊急事態の中でも恋する男しか目に入っていないという、ある意味感心してしまうこの女神に敬意を表し、このまま万象の天使を追わせてもいいかな・・・なんて思っている自分もいたりする。
だけど、この異常事態は合図。
だから、私は彼女をここで離すわけにはいかないの。

『そうだなぁ、明らかにこれは異常だっ！てティアが思ったら逃げ出して頂戴。』

そう。これは銀月の都（ウィンザード・シエラ）でヒロをエンシッダ様に引き合わせる前に、下されたたった一つの命令。
『今現在、銀月の都（ウィンザード・シエラ）は、天使に襲われる予定の罪人（アークヴェル）の巡礼地（ヴェル）に向っている。』
挨拶も何もなく出し抜けに、私はそう言われた。
エンシッダ様は否定したけれど、ヒロが言ったように彼は罪人（アーク）の巡礼地（ヴェル）が戦場になることを本当は予め知っていた。
そして、これは私の憶測（おくそく）だけど、それを止める術（すべ）もエンシッダ様にならあったとも思う。

・・・まあ、私にはヒロのようにエンシッダ様に物申すようなことはしないけどね。

『罪人（アークヴェル）の巡礼地は非常に危険な戦場となる。しかし、君には白き神を連れ、ヒロとケルヴェロッカとともに聖櫃（せいひつ）の奪取の命を下す。だが、それはあくまでも建前だと覚えておいてほしい。』
エンシッダ様の横には、いつも人形のように佇（たたず）んでいるヴィ・ヴィスターチャがいた。
あの造られたかのような美しい顔は嫌いではないけれど、私は苦

手。何もかもを見透かされているような気がするから。
だから、いつもエンシッダ様と共にいる彼女と、私は一度だって視線を合わせたことはない。

『建前・・・聖櫃はよろしいのですか？』
『もちろん、聖櫃は後々頂く。でも、それは君たちの役割じゃないってだけさ。だけど、建前上、君たちには聖櫃奪取という目的の名の元に灰色の花園に行ってもらわないといけないの。』
『・・・。』
いつも思うんだけど、エンシッダ様の言葉は特別難しい訳じゃないのに、その言葉の意味を理解するのが、どうにも難しい。
それは結論だけで、彼が決してその意味を教えてくれないから。
『まあ、難しく考えなくてもいいよ。君は何も考えず、聖櫃を奪取するために灰色の花園に行くと白き神たちに言えばいい。後は、君は何もしなくても俺の目的は達せられる。』
『連れてゆくのはケルヴェロッカとヒロ、そして白き神・・・ですか。』
『何？何か言いたいことでもある？』
白き神という名に言いよどむ私に、エンシッダ様は問いかける。
『あ・・いえ、罪人の巡礼地は天使との戦闘になるのですよね？そんな危険な場所に白き神をお連れするというのは如何なものかと。』
『まあ、気持ちは分かるけど、封印された灰色の花園への扉を開くことができるのは三大天使と白き神である彼女くらいだからね。俺の目的のためには灰色の花園の封印を解くことが大前提である以上、白き神を連れていくことは仕方無いんだ。』
そうエンシッダ様に言われてしまえば、私には了解という他ない。
だって、私はきっと彼からすれば、単なる駒の一つだから。そして、それは私が自ら望んだこと。
遠い昔、私は彼の復讐劇の端役になることを自分で決めたのだから、私は決してそれに逆らうことはしないの。

――――例え、その役目を負うことで人間であることをやめることになったとしても・・・

『そうですか。それで、聖櫃を奪取してはいけないんですよね？では、灰色の花園に向かった後はどうすれば？』

そうして、全ての疑問も憤りも飲み込んで、私はただただ彼の下す命令にだけ従順な端役になるべく問いかける。

『別にどうする必要もないよ。心配しなくても、君たちは聖櫃を奪取しないんじゃなくて、奪取できないように決まっているんだから。そんなこと気にしなくても、君たちはそれどこじゃなくなるから。』

『それは、ヴィスの予言ですか？』

『そういうこと♪』

楽しげに瞳を細め、彼はヴィスを抱きしめる。でも、ヴィスは瞬き一つ反応を示さない。本当にまるで人形みたい。

『何が起こるというんですか？』

『先に言っちゃ、君たちも楽しくないだろうから何が起こるかは言わないけど、灰色の花園は君たちがかつて直面したことのないような事態になる。だから、そうだなぁ、明らかにこれは異常だっ！てティアが思ったら逃げ出して頂戴。あ、その時は、白き神とケルヴェロッカはちゃんと連れ帰ってね？』

先に教えてもらった方が気が楽なんですが・・・とは言えない。

それに言った所でエンシッダ様が予言を知らせてくれないのは、長い付き合いの中で十分知っているの。

そう、例え口先だけで仲間だと言っても、私がこの身の全てを彼の復讐に捧げていると知っていても、この人は決して私にも誰にもその予言を教えようとはしない。

何故なら予言とは誰かの不意の行動で、大きく変わる可能性のある流動的なものであるから。

そして、エンシッダ様は予言を不用意に多くの人間が知ることで、

それを知った人間に自分が望む未来を変えられることを非常に気にしている。
だから、予言を知ることができる資格を持つのは、彼とヴィ・ヴィスターチャだけ。駒である私たちは知りたくとも、それを知ることはない。

『ヒロは連れ帰らずともいいのですか？』
だから、予言の内容については問わず、でも、連れ帰る面子（めんつ）の中にヒロのながないことが気になった。
『ふふ、彼はねぇ。いいの。彼はその異常事態の台風の目だ。俺が求めるものを手に入れるためには、白き神以上に彼の存在こそが絶対に必要だからね。』

ヒロ・・・が？

ここ最近、エンシッダ様の関心を一心に集めているらしいその男の姿を頭の中で思い浮かべる。
黒の一族ということは聞いていたし、けど他には特に普通の人間とは変わらない、むしろ目立たない平凡な青年。
その青年が一体、何だというの？

『色々知りたいだろうけど、それはティアには関係のないことさ。それより、このことを君に話したのは、白き神を連れ帰る時に、一つだけ気を付けてほしいことがある。灰色の花園には万象の天使・エヴァンシェッドが現れる。』
『万象の天使が？』
大物の名に思わず聞き返したけど、エンシッダ様は私の問いを無視して続ける。
『いいかい、万象の天使が現れれば、白き神は取り乱し彼を追おうとするだろう。でも、決して彼女に万象の天使を追わせてはいけな

いよ。』

それは、白き神を天使たちの元へ返してはいけないということ。

どう見ても憎き相手である万象の天使を愛しているといっていい彼女を、どうしてエンシッダ様はこれほどまでに重要視するの？

そんな彼女が本当の意味で私たちの味方になってくれようとは到底思えないし、力も天使対する権限もあるようには思えないのに・・・どうして？

だけれど、人間であることをやめ、彼の駒（こま）になり果てた私は、ただ彼に従うしか術（すべ）がない。

『了解しました。』

『絶対に白き神から目を離さないで、彼女が一人で走って行かないように気を付けておくんだよ。』

それに何の意味があるというの？未来が見えない私にはさっぱり分からない。

『はい。』

――――だけれど、私にはそれに従うしかないの。

「放してっていっているじゃないですかっ！いやぁっ！」

耳元で大声を出されれば、誰だって耳が痛い。

灰色の花園の出口を目指し私は白き神を担（かつ）ぎながら歩き、白き神は異常なくらいに暴れ叫ぶ。

力の差は歴然だけれど、この高い悲鳴みたいな叫びは本当に鬱陶（うっとう）しい。でも、かといって白き神より一回りは身体の小さなケルヴェロッカにそれを任せれるはずもない。

そのケルヴェロッカは、そんな私と白き神をもどかしそうに見つめているだけ。

「ケルヴェロッカ。もう、灰色の花園から出るわ。外は戦場の罪人（アー）の巡礼地（クヴェル）、警戒して。」

「あ、うん。」

そう言われて初めて、そのことに気がついたような表情をする彼。
女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）として訓練を積んできた彼だけれど、やはりまだまだ子供な部分もあるみたい。
「いやぁっ！！！」
でも、それより更に面倒なのは、今から危険な戦場だというのに、それでもなお叫び続けるこの白き神。
「・・・。」
致し方ないわよね。
このままじゃ、天使がうようよいる場所でかっこうの標的なるのは目に見えているもの。

「申し訳ありませんね。」

私の心のこもらない謝罪の言葉の後に、途端に静かになる白き神。
「ティア？！」
それを見て、驚きの声を上げるケルヴェロッカ。
「心配しないで、気を失ってもらっただけよ。あんなに暴れられたんじゃ、守れるものも守れはしないもの。」
「でもっ！」
「いいから、行くわよ。もう、ここも長くはもたない。」
灰色の花園の出口の前で振りかえった先には、怖いくらいに膨れ上がった灰色の大きな塊（かたまり）。それが、今にも暴れ出しそうにグラグラと揺れている。
また、さっきみたいにあの得体の知れないものが私たちを襲うのも時間の問題だと思う。
恐らく、あれがエンシッダ様の言っていた『私がかつて直面したことのないもの』に違いない。
確かに、私はあんなもの知りはしない。

――――ただ、万象の天使だけはあれを知っていたようだけれど。・

・・本当にここで今何が起こっているの？

だけれど、今は白き神を連れてここを逃げることが私の使命であり、ここにいる意味。

だから、最後に万象の天使が消えたことで統率（とうそつ）を失って右往左往する彼の連れていた天使たちが追ってこないことを確認して、私はいざ出口を目指す。

ここには、もう用はない。

「おっさんは、どうするんだよ?!」

「それもいいの。」

ヒロもケルヴェロッカも白き神も万象の天使も、そして私もまた、全てはエンシッダ様の思惑どおりに動いているのだから。

だから、だから、私たちはここから逃げればいいの。

――――駒は駒らしく、何も考えずに命令に従っていればいいのよ。

第７４話　お前に流れる血は何色だ　１（後書き）

第三部は長くなると申し上げていた通り、二つほど大きな話の流れが残っています。どういう形にしようかなと思っていたんですが、ティア視点で話を進めることにしました。ヒロ視点では語られる事のない部分を、表現できたらと思っています。

なので、しばらくヒロやエヴァンシェッドの出番はお預けですが、次からは今まで活躍してこなかった人たちが再登場したり、新しい登場人物が登場したりする予定です。

第７５話　お前に流れる血は何色だ　２

灰色の花園から出た瞬間に感じたのは、燃え盛る炎の熱さと何処かでドンパチしているだろう爆音や破壊音。

灰色の花園に入ってからどれくらい時間がったのか曖昧（あいまい）だし、現在の戦況は定かじゃないけど、それらを感じただけで私にも女神（イヴィスタ）の十字軍（ン・ディード）と天使の戦いがまだ終わってはいないらしいことと、人間たちの最後の都だったろう罪人（アークヴェル）の巡礼地が完全に炎に包まれてしまうのが時間の問題だということくらいは分かった。

「げほ、げほっ。」

そんな冷静だか、混乱だか分らないような思考の中で、煙（けむ）たい空気を吸い込んだのか、ケルヴェロッカが咳（せ）きこむ音が私の耳に届いたことで、私は自分が何をしなければいけないのかを思い出す。

どうやら、あんまりに現実味がない光景に一瞬だけ茫然としていたみたい。私もまだまだね。

「何か布を口に当てて煙を吸いこまないようにしとくのよ？ロッソも元のサイズに戻して懐（ふところ）にでも入れておきなさい。この煙は鼻のいい彼には辛いでしょう。」

ケルヴェロッカがその通りにするのを横目で見ながら、白き神を肩に担いでいる不安定な体制のままに、自分も洋服の裾の部分を適当に切り裂いて顔にその布を巻きつける。

「さっさと逃げるわよ。白き神は私が運ぶから、ケルヴェロッカは炎を魔力で消して逃げ道を作って頂戴。後、この炎じゃ天使たちと出くわすことも、そうあるとは思えないけど、周りの気配には注意してね。」

「おうっ！」

これほど火の回りが早くては、もう火を避けながら逃げるのは無理だろうし、ドンパチしている気配こそあるが、それはここから遙

か遠い。きっと、これだけの炎だし、罪人（アークヴェル）の巡礼地から離れながら戦いは続いているんだと思う。

だからこそ、普通なら天使が周りにいないことだし魔術を使って一気に銀月の都（ウィンザード・シエラ）に飛ぶことも考える所だけど、何かに邪魔されているようで上手く魔術が発動しない。

理由は知ったことじゃないけど、とりあえず、自分の足で逃げるしかない・・・ということなんだろう。

という訳で、私は炎の海に飛び込み、ケルヴェロッカが出す大きな魔力で一時的に炎を退（しりぞ）けながら走り抜けるという方法をとった訳だ。

そして、しばらくは順調に走り続けた私たちは思っていた通りに天使に出くわすこともなく、このまま白き神を守りきって立ち上がる煙の向こうに見える銀月の都（ウィンザード・シエラ）に戻れそうだと思った。

でも、人生そうは上手くいかないのよ。

「止まってもらおうか、人間たち。」

辺り一帯の炎の壁をわざわざ圧倒的な魔力とともに吹き飛ばして現れたのは、見たくもなかった天使の姿。

それも、その辺りにいる天使たちとはそのプレッシャーも全く違う強い力を秘めているだろと、その魔力をひしひしと感じるような天使。

そういえば、ハレが天空騎士団（アイッシュ・グランド）の隊長格も出張ってきているとか言っていたわね。

目の前に現れた5人の男女の天使を前に私は、ついさっきのことなのに、どうにも遠い昔のことのように思えるハレの言葉を思い出して、その面倒さに目を細める。

「なんだよっ！」

「落ち付きなさいっ、ケルヴェロッカ。」

そして、咄嗟（とっさ）に彼らに食いかかる彼を止めた。

万象の天使に食ってかかった時も思ったけど、本当に子供って言うのは怖いものを知らなくて困るのよ。

臆病よりはいいかもしれないけど、だからって誰かれ構わず噛みついては、いつかしっぺ返しを食らうのは彼自身。

この状況で甘いことを思っている自覚はあるけど、子供が傷つくのはできれば見たくないわ。（私もヒロのことを怒れないなぁ）

そんな私とケルヴェロッカのやり取りを一瞥するだけの天使たちからは、5対2という数の上の有利な状況以上に、彼ら自身の強さからくる余裕みたいなものを感じる。

状況は・・・最悪。

「女。お前が肩に担いでいるのは白き神だな？渡してもらおう。」

そうして、疑問形で聞くくせに否定することを許さないような威圧的な物言いをするのは、男のくせに綺麗な金のサラサラ長髪を靡かせる男の天使。

「白き神？彼女は違いますけど？」

「とぼけるんじゃないわよっ！こっちは、白き神の魔力を辿ってきているのよっ！」

『サラサラ』（↑以下、『』内は私が勝手につけた天使たちのあだ名ってことで）を挑発するための言葉だったのに、それに反応したのはやたらと肌の露出の激しい女の天使。

ほとんど下着にといっていいその服装は教育上あんまり良くないだろうと、私はケルヴェロッカの視界を遮るように前に動いた。

「あらあら、シャオン。お宅の副師団長さんが、この人間たちに手酷くやられたからって、そんな風に八つ当たりで怒ると皺が増えましてよ？」

「何ですって？！」

と、『下着』にあからさまな嫌味を言い放つのは、つんとしたキツネ顔の冷たい印象を受ける女天使。

こっちはきっちりと暑苦しいくらいに服を着こんでいて、その肌は顔くらいしか見えていないくらいだ。（何とも、両極端な二人だなぁ）

「二人ともやめろ。」

そうして、『下着』と『キツネ』を止めるべく静かに声を挟んだのは、やたらとガタイのいい大きな天使。（この大きさは多分、うちのアラシと張るわね）

なのに・・・？

「わたくしは、本当のことを言ったまでですわ？」

「何が本当のことよ！私のことはともかく、エンリッヒのことを悪く言わないで！！彼は人間なんかにやられて、ここに来れないんじゃなくて、サンタマリア様の警護のために来れないだけなんだから！！」

「言い訳は見苦しくてよ？」

「き――――！」

と、まあ『デカ』が止めに入っているのに、女天使の争いは一向に止まる気配もない。

「ティア、俺達、忘れられてない？」

「そうね。」

その喧嘩の凄まじさは、私たちが思わずそんな会話を漏らしてしまうほど。

でも、『デカ』ではなくて、最後の天使が口を開くことで終わらないように見えた女たちの喧嘩は呆気なく終わってしまう。

「シャオン、マリアーナ。二人とも喧嘩するなよ。」

それは『デカ』の無骨な声より、華やかで軽い声。

そして、その声の主はそれに相応しいキラキラと眩しい金の短髪に大きな青い瞳を持った天使。

この『キラキラ』を、私は見たことがあった。

「・・・蒼穹の天使・シェルシドラ。」

「えっ？」
その名前を口にした私にケルヴェロッカが聞き返すような声を発し、そして、まさかと言うように驚きの表情で『キラキラ』の顔を改めてまじまじと見る。
「あれ？人間の女性に名前を知ってもらっているなんて光栄だな。君の名前も教えてよ？」
「三大天使様に人間の卑しい名前なんて、お教えできませんよ。」
軽口に軽口で返しながら、想像していなかった大物の登場に忌々しい感情で舌打ちでもしたい気分がした。
でも、さっき万象の天使に会ったくらいなんだし、三大天使がここにいたとしても何の不思議なことはないということに気付かされる。そして、
――でも、まさか天使の中で最強の強さを持つを謳われるこの天使と、こんな場面で出くわすなんて、誰も考えないし考えたくもないわっ！
と冷静に装いつつも、私は心の中で絶叫した。（失礼）
だが、軽口すらも三大天使様には許されないらしく。
「あんた、シェルシドラ様にまでなんて口の利き方をする訳？！」
「本当ですね。人間のくせに身の程を知りませんわ。」
さっきまで喧嘩をしてきた『下着』と『キツネ』（本名はシャオンとマリアーナらしい）が、蒼穹の天使の鶴の一声で喧嘩をやめたかと思えば、今度は一斉に私に牙をむいてくる。
その顔は、相当に怖い。ケルヴェロッカもそれに恐れをなして、私の背中にしがみつく。
「まあ、そう怒るなよ。」
『はい！シェルシドラ様！！』
しかし、それも蒼穹の天使の取り成しで、二人で声をハモらせてころりと笑顔に変わる。

そんなやり取りを見て明らかに無視された『デカ』が肩を落として、『サラサラ』がそれを慰める。

・・・この天使たちは何かのコント集団かしら？

だけど、そんな暢気（のんき）な考えも、コント集団のリーダーであろう蒼穹（そうきゅう）の天使によって吹っ飛んでしまう。

「別に君の名前に興味はない。言いたくなければ、言わなければいい。だけど、君に担（かつ）がれている白き神は俺達に返して貰う。それに君たち二人にも同行してもらうよ？」

その声は華やかで軽い声だけれど、それだけじゃない重く冷たい何かが含まれている。

「白き神を奪い返すために、灰色の花園で待ち伏せをしていた万象の天使の気配が消えた。そして、その灰色の花園から出てきた白き神を抱えた君たち。灰色の花園には増援を送っておいたけど、君たちからも話を聞かせて貰わないと。まったくラインディルトといい、君ら人間が反抗的なってから神と契約（ファギュラド）せし天使がバラバラになって困るよ。まあ、元々大してチームワークが良かった訳でもないけど。」

――ラインディルトって、大地の天使のこと？

「私たちからお話しすることはないと思います。万象の天使は勝手にどっかに行ったし、大地の天使・ラインディルトのことなど、私たちは関知していませんから。」

ちなみにこれは軽口じゃなくて本当のこと。

万象の天使のことは知らないこともないけど、大地の天使の話など私は本当に知らない。

「言い訳はよせ。ラインディルト様はお前らが天使の領域（フィリアラディアス）を襲った夜から一切の消息を絶った。シェルシドラが監視をしていたにも関

わらず・・・だ。更に万象の天使から伺ったエンシッダの発言から、あの男とラインディルトが何らかの形で繋がっていることは証明されているのだ。状況証拠からして、お前らがあの方に何かしたといしか思えん。ラインディルト様をどうした？」

だが、私の言うことなんて信用していない『デカ』が、女たちの仕打ちから立ち直ったのか、怖い顔をして聞いてくる。

「何と言われても私は大地の天使にはノータッチですから、私に何を聞いても無駄よ。それにこの女性も何と言われても渡すわけにはいかない。」

「ふんっ！そんなこと、この状況で通るとでも思っているの？！」

嫌味なくらに高飛車に笑いながら言い放つ『下着』。

それは、三大天使である『キラキラ』のご加護ゆえか、それとも自分の力に自信があるからか知らないけど、こっちだって半端な覚悟じゃ天使に楯つこうなんて思いはしない。

――――渡さないっていったら、死んでも渡さない。

「通す気がないというのなら、力づくで通るまでよ。ケルヴェロッカ、やっちゃって！！」

その声にケルヴェロッカが素早く反応して、大きな黄色の魔力を前方の天使たちに向かってぶっぱなす。

同時に私たちを囲んでいた炎の海へ、再びダイブ。いや、今回は逃げ込んだという方が正しいわね。

あの天使たちと戦うくらいなら例え炎の海だろうが、白き神を守り抜くという点に重点を置けば、こちらの方が余程任務の成功率が高い。

自分と白き神の周りに魔力のバリアを張って、まあそれでも熱さは感じるけど、同時に少し遅れて追ってくる天使たちの気配も感じる。

どうやら、ケルヴェロッカの意表を突いた不意打ちも天使たちに

大打撃を与えるには至らなかったみたいだ。

――仕方ない。本当なら、こんなことさせたくなかったんだけど。

「ケルヴェロッカ、神の血（ニス・ドゥア）の解放を許可します。倒す必要はない。天使たちを足止めして。」

前方を走るケルヴェロッカが驚いたような、戸惑ったような顔をした。

「でも、あれはアオイがまだ研究段階だって！」

「エンシッダ様に許可はもらっているわ。私が本気になっても片手が塞がっていちゃ、天使たち5人を相手にするのは無理なの。ここは、貴方に頑張ってもらうしかないのよ！」

「でも、俺はあれは嫌だっ！」

分かってる。だから、私だって出来ることなら貴方にそんなことさせたくないの。だけど・・・

『異常事態が起こったら、白き神を連れて罪人（アークヴェル）の巡礼地を君たちはただ走って逃げればいい。そして、しばらくすると君たちの前には大きな障害物が現れる。』

――障害物・・・ですか？私はそれを排除すれば？（ああ、それがきっとあのコント集団みたいな天使たち）

『いいや。君の力はまだ見せてはいけない。だから、ケルヴェロッカを連れて行くんだ。彼に神の血（ニス・ドゥア）を使わせて。そっちは、別に見せても構わない。』

――それも、予言ですか？決まっていることなんですか？

『いや。これは別に予言じゃない。単なる俺の策略さ。』

――・・・。（ごめんなさい。ごめんなさい。ケルヴェロッカ）

エンシッダ様とのやり取りを思い出し心の中で謝りながら、冷酷な顔をして私は炎の中で彼を追い詰める言葉を告げるしかない。

駒（こま）である私が、エンシッダ様の命令を覆（くつがえ）すことはできないから。

「今更、人間でなくなるのが嫌なの？」

彼が息を飲む音が聞こえた。

「でも、残念ね。貴方はすでに人間ではない。そうでしょ？神の血（ニス・ドゥア）が流れている神の子（マイマール）？」

愛らしい子供顔が悲しそうに辛そうに歪（ゆが）む。

「・・・わかったよ、ティア。」

――――ううん、違う。人間じゃないのは私なのに・・・ごめんなさい。

第７５話　お前に流れる血は何色だ　２（後書き）

状況は緊迫しているんですが、久々に重々しくない話を書いた気がします。第三部は過去回想編が長かったせいでヒロの暗い話ばっかりでしたから（笑）

シェルシドラとシャオンは前で少し出てきたキャラですが、他の３人の天使は初登場。でも、実は他の三人も名前だけは既に登場してたりします。分かりますか？

第７６話　お前に流れる血は何色だ　３

分かったと小さく私に呟いてケルヴェロッカが纏う黄色の魔力は、ピリピリとした張りつめたものへと変化し、そして、それはいつの間にか肌で感じるだけでなく、前方を走るケルヴェロッカから立ち上る黄色の蒸気からも知ることができた。

更にその魔力の蒸気は炎の海に広がっていき、蒸気に負けるように炎は次第にケルヴェロッカの魔力に平伏して、いつしか私は魔力のバリアを張らずとも炎の中を進むことができるようになっていた。

「ティア。」

そして、私を振り返るケルヴェロッカの顔からは先ほどまでの愛らしい子供の表情は消え失せて、釣り上がった瞳は色を変え黄の色に光り、上がる息が漏れる口はまるで飢えた獣のように涎を垂らしたままになっている。

その姿はケルヴェロッカが嫌がった人間というには常軌を逸した魔力に支配され、人間ということを忘れそうになるくらいの狂気に彼が近づいているということ。

それを見て心が痛む。だけど、私はそんな心情とは裏腹に彼に先を促すの。

「やれるわね？」

「ああ。危ないから少し離れいろ。ロッソもティアと一緒に。」

ロッソもケルヴェロッカの魔力に恐ろしさを感じているのか、逃げるような勢いで私の足元に走ってくる。

それを一瞬だけ悲しそうな瞳で見送るケルヴェロッカ。だけれど、それはすぐさま向かいに見えた天使たちに向けられる。どうやら、先回りをされたみたい。

ずらりと再び私たちの目の前に立ち並ぶ天使たち。

「逃げ場はないぞっ！」

『サラサラ』が距離をとりながら、こちらを予断なく見つめていた。
「言ったでしょう？わたくしたちから逃げることはできないと。」
『キツネ』が冷静に私たちに宣言して、
「だから、初めから逃げないで欲しいわよ。無駄な力を使うでしょうにっ！」
高飛車な『下着』が笑いながら言って、再び二人のバトルが始まった。
「あら？それは、年寄りの発言ですわね。」
「何ですって！」
そして、無視されると分かっていてもそれを止めに入る『デカ』。
「二人と――――」
「あら？聞こえませんでした？やはり、年寄りは耳が遠いんでうのね。」
「喧嘩は――――」
「誰が年寄りですってぇ！！」
「あ・・のな？」
「本当のことを言われたから怒っていらっしゃるの？オホホ」
そんな完膚無きまでの無視っぷりは、いっそ見ていて笑えてくるわ。
それでも彼女たちの喧嘩を止めに入るのは『デカ』が真面目すぎるのか、それともそれに気がつかないバカなのか。
結局最後まで『デカ』は無視され続け、二人の喧嘩は
「二人ともやめろ。」
『はいっ！シェルシドラ様！！』
蒼穹の天使によって終止符を打たれる。
それを目の当たりにしてやっぱりさっきみたいに項垂れる『デカ』を見て、そんな落ち込むなら、どうしてわざわざ止めに入るんだろ

う？と私は思った。（まあ、私には関係ないけど）

そうして、一連のコントを見つめながら私はこちらを余裕なく睨（にら）みつけている『キラキラ』三大天使様ににっこりと笑ってやった。

――きっと、ケルヴェロッカの反応の真実の意味を知っているのは彼だけなのだろう。

でなければ、そうケルヴェロッカのこの魔力の増大の理由を知っていて、あんなコントみたいな余裕があるわけがないもの。

「人間の女。」

軽さのない、重く冷たい蒼穹（そうきゅう）の天使の声。

「はい？」

視線はケルヴェロッカから外れることなく、私をその声で呼ぶ。

「この子供は――」

だけれど、言葉は最後まで私に耳に届くことはなかった。

「あああああぁぁぁっ！」

それは本格的に始まった神の血（ニス・ドゥア）の胎動がケルヴェロッカに苦痛を与えはじめ、彼の痛みに歪（ゆが）む絶叫が罪人（アークヴェル）の巡礼地に響いたから。

叫びとともにケルヴェロッカの体から立ち上がる魔力の蒸気が濃さを増し、それはもう天使すらも凌駕（りょうが）するほどの魔力の強さだ。

コントをしていた天使たちの顔からも余裕の色が消えた。

私が感じている何かに魔力が邪魔されているような感覚も、きっとこれほどまでに圧倒的な力をもってすれば、全部をねじ伏せてしまうに違いない。

今、確かに強い天使たちを前にしても、ケルヴェロッカの魔力は飛びぬけている。

――――これが神の子（マイマール）が持つ、神の血（ニス・ドゥア）の力

あのいけすかない男、神の子（マイマール）の生みの親である『アオイ』から話は聞いていたし、実際にそれを見たこともあった。

でも、それは結局のところ実験の中の出来事であり、『神の血（ニス・ドゥア）』とはケルヴェロッカが言う通り本当はまだ研究段階でしかない状態。

でも、できることならそのまま実験段階だけで終わってくれればと願っていた。

この目の前で目覚めようとしている、人間が人間ではなくなる力。

・・・私の中に眠る力と良く似た『それ』

人間が人間でなくなるあの瞬間を、私と同じ思いをする人をこれ以上増やしたくなかった。

それも、ケルヴェロッカのような幼い子供に、それを強（し）いることになるなんて、これが戦場の真っ只中じゃなかったら、私は本当に泣いていたかもしれない。

確かにエンシッダ様の命令であるから、私はそれを彼に強（し）いた訳だけれど、それでも実際の告げたのは私。

だから、泣きたくても私はそれをちゃんと見ていなくてはならない。

例え今まさに人間をかなぐり捨てようとしているその小さな後ろ姿に、かつての自分を重ね合わせるのが耐えがたい苦痛になるとしても。

「な・・・何よ・・・あれっ！」

そして、ケルヴェロッカを蝕（むしば）むその血は次の段階へと移行してい

く。

「ぎゃあぁぁぁっ！！！！」

痛みと苦しみに上がる絶叫は、もう人間が出す音じゃない。

そして、黄色の魔力の立ち上る彼の背中から、骨を肉を肌を服を突き破って何かが勢いよく生えだしてきた。

それは・・・『翼』

血とも体液とも分からない液体が二対の翼が広げられたことで飛び散り、私の顔に体に降り注ぐ。

舞い散る薄い黄色の翼が炎の海に消えていった。

『っ！！！』

その姿に天使たちも声なき悲鳴を上げる。

ただ一人、恐らくケルヴェロッカに起こっていることの真実を知る三大天使だけが、それを信じられないという瞳で見つめている。

「ケルヴェロッカ！」

――――そんな瞳でこの子(わたし)を見ないでっ！

私のうちに湧き上がったのはそんな突発的な感情。

そして、私はその感情のままにケルヴェロッカに命令を下した。

「行きなさいっ！！！」

「ヴアァァァァァ」

私の声とともに、もはや人間の言葉を話せなくなったケルヴェロッカが鳴き声を上げて、怯(ひる)む天使たちに牙の生えた光る口を大きく開けた。

そして、その化け物じみた勢いに天使たちも一斉に身構えて一歩後ずさる様子を見て、私は僅(わず)かに笑った。

ケルヴェロッカは叫んだまま大きく腕を広げ、魔力を両手に集めるとそれを一気に土の上に叩きつけた。

ババババッと電気的な音が耳につき、そして魔力はそのまま天使たちに向って一直線に進んでゆく。
この程度の魔力であれば防げると踏んだのか、『デカ』が仲間たちから一歩前に出て攻撃を防ぐように腕を前に突き出した。
――――でも、残念。それは攻撃じゃないの。
天使を出し抜いたような優越感に笑みを隠せない私の思う通りに、ケルヴェロッカの黄色の魔力は天使たちに向い、その直前で土中で四方に散り天使たちを囲むようにした場所で留まると魔力の檻を造り出した。
これは対天使のために、私とケルヴェロッカが予め打ち合わせておいた作戦。（この状態でも、ケルヴェロッカにはものを考えれる理性はちゃんと残っている）
「これはっ!!!?」
「なに?!・・・きゃあっ」
閉じ込められ混乱する天使たち。
そして、彼らを囲むケルヴェロッカの魔力の檻に触れた瞬間、『キツネ』が悲鳴を上げて手を檻から引っ込めた。
「触らない方がいいですよ?その檻はケルヴェロッカと同種の魔力を持つ者以外は触れることができない『不触の檻』というものですから。」
『同種の魔力』とは、すなわちケルヴェロッカと同じ黄色の魔力という意味。
この世界にある魔力は、全てが魔力の持つ色によって大別され、色によりそれぞれ属性も違うの。
例えば白き神の持つ白の魔力は『生命』を、私の持つ赤の魔力は『炎』を、そして、ケルヴェロッカの黄の魔力は『雷』を。

まあ、黄や赤については単純にそれだけでなく、その中でもいくつかの種類に分けられるんだけど、それはまた時間がある別の機会にでも。

ともかく、この檻から抜け出すにはケルヴェロッカと同じ黄色の魔力を雷属性の魔力を持っている必要があるということ。

でも、天使たちにはその属性を持つ天使は『絶対』にいないから、彼らが決してこれを破れないのは確か。

よって、天使たちはまさに籠の中の鳥と同じ状況という訳。

「くそ!!こんな時に限って魔力が上手く練られないっ。」

更に天使たちも私と同じ状況らしく、檻を破ろうと自分の魔力を練り上げようとしても上手くいかないようだ。

それを見て、本当の本当にいい気味だと思った。

「いい様ですね、天使様方。誰かに囚われる恐怖が少しは分かって頂けましたか?」

この天使たちがいかに美しい姿をしていたとしても、どんなに愉快で面白い掛け合いをしたとしても、所詮天使は天使だ。

今も昔も人間を苦しめ続け、不浄の大地という永遠の苦しみに人間たちをつき落とし、私たちを搾取し続ける存在。

私はそれを決して許しはしない。

だから、少しは味わえばいいの。

誰かに自分の運命を握られるという、この不安と恐怖しかない人間たちの心を。

なのに、檻の中から荒々しい感情の声が響いくの。

「君たちは自分たちが何に手を出しているか分かっているのか?!それもこんな子供に!!!」

それを聞いて、私は一瞬意味が分からなかった。

――何を言い出すの？

私はその声に静かだけど、確実に怒りを覚えた。

「人間がっ！人間が人間でなくなる禁断の力だぞ！！！それを――」

「いい加減にしろっ！！！」

そして、それはすぐさま静かなものから烈火のごとく燃え盛り、遂には我慢が出来なくなって大声になって私から飛び出た。

ケルヴェロッカも、天使たちも突発的に激昂（げっこう）した私に目を剥（む）いた。

――誰が、どんな口でそんなことを言う？！！

「あ・・・ああ・・・あ・・」

怒りが空回って、もどかしいくらいに言葉が出てこない。

そして、私は腹の底から叫ぶのだ。

「『先に』人間を捨てた天使がふざけたこと言うんじゃないわよっ！！！」

瞬間、私の怒りに呼応するように耳の鼓膜（こまく）を大きな音が打った。

それは何かが爆発するような音で、まさに私の心情に相応しい音だった。

けれど、それは別に私が意図（いと）して出した音ではなくて、本当に偶然のタイミングだったから、あまりのタイミングの良さに私の方がビビったくらいだ。思わず出た怒りが引っ込んだ。

でも、その音の出所を見て私は更に驚くことになる。

「・・・あれは、『灰色の魔力』？」

断続的に続く爆発音の中、ぽつりと呟いた蒼穹（そうきゅう）の天使の声が聞こ

えたのもまた偶然。
そして、爆発音は灰色の花園があった方向から聞こえ、そこから噴火した火山から溶岩のように後から後から花園で見たあの灰色の塊が溢れ出てきて、私たちのいる場所へ迫ってきているのが見えた。
万象の天使が押さえこんだものが決壊したということだろうけど、もう少しくらい待っていてくれてもいいのにと、これから天使たちを傷めつけてやろうとしていたところを邪魔されて、私は思わず眉を顰めた。
だけれど、肩にずっしりと重い白き神がいることに気が付いて、私は自分の役割を思い出した。
まあ、私とケルヴェロッカが手を出さずとも、このままいけばあの灰色の塊が罪人の巡礼地を全ての覆うのは間違いないだろうし、ならば、ここから動けない天使たちは皆、花園の天使たちと同じように一網打尽というものだろう。
そう思いなおし、私は本来の役割を果たすことを選ぶ。
「ケルヴェロッカ。その翼で一気に銀月の都に飛ぶわよ。」
そうして言葉を話せずとも、私の言っていることを理解できるケルヴェロッカは白き神を抱えたままの私の両腕を掴んで、ヴァサヴァサと翼を空に飛び立った。

「ちょっとぉ!!私たちはどうすればいいのよ!!!」
「出してください!」

そうして、あたふたと慌てふためく天使たちを眼下に私たちは罪人の巡礼地を後にした。
結局、最後の最後までここで何が起こっているのか、何のためにここに来たのか分からないまま、私は遣り切れない思いを抱え、炎の赤ではなく、灰色の何物かに覆われてゆく都を空から見つめ続けた。
そして、それが罪人の巡礼地を見た最後になる。

それが何故かと言えば、この数時間後、都はその原型すら留めない形で、ううん、形すら残さず跡形もなく消え去ってしまったから。

第７６話　お前に流れる血は何色だ　３（後書き）

色々、分からない所だらけで分かりにくかったかもしませんが、神の子のことは第四部で明らかになる予定なのでもう少し先になります。すいません（泣）

そして、ティア視点の話はここまでとなり次は、まんをじして『あの方』の視点の話となります。ヒントは第二部でも一度この人視点の話を書いています。分かりますよね？はい、そのお人です（笑）

そして、ものすごく長くなってきているこの話ですが、最近本当に見ていてくれる人がいるのか不安な想いを抱いております（泣）

いえ、アカウントは増えているのでこんな稚拙な話でも読んでくれている有難い読者様がいることは、分かっているつもりなのですが、ゼロではないにしてもなんとも感想とかコメントが少ない話なので、何だか見てくれている人がいるのか不安で、気が小さいのでこんな話を続けていいものかと悩んだりしている今日この頃。

稚拙な話すぎて感想も何もないのかも知れませんが、もし、こんな話を読んでくれている奇特な読者様がいらっしゃったら、続けていくにあたって本当に励みになりますので、一言でも感想を頂けたら幸いです！涙を流して喜びます！

ただしこれは勝手な作者の願いなので、そんなものを後書きに書いて、もし気分を害された人がいらっしゃったら申し訳ありませんでした。

第77話　お前に流れる血は何色だ　4

――――赤き血は人間の証

そう思い込んで血を流す人間を嘲笑(あざわら)い続ける

それが、我が役割である

「はぁ、はぁ・・・・はぁ・・・」

浅く早く繰り返される吐息は苦悶(くもん)に満ちて、今にも消えてしまいそうに細い。

「大丈夫ですかぁ??」

そんな様子で倒れた人間を前に、俺は自分でも楽しげな声だと分かる声音で尋ねた。

赤く燃え、灰色に染まりつつある罪人(アークヴェル)の巡礼地をガラス張りの展望台から一望できる部屋で、その苦しむ姿が楽しくて俺は笑みを浮かべるのが抑えられない。

だって、ずっと、ずっとこんな光景を見てみたいと俺は思っていたから。

「ふふふ。」

つい、笑い声も漏れるってもんだ。

「はぁ・・・助け・・・て。」

しかし、こんな自分でも酷いなぁと思ってしまうような俺に、倒れた人間、そうこの目の前の女は助けを求めるんだ。

それがより一層、彼女を滑稽(こっけい)に見せて俺を笑わす。

「エ・ンシッ・・ダ・・おね・が・・・あぁっ」
そうして、俺の名を呼びながら懇願し、激痛に叫びを上げて、床を転がり痛みに耐えるように体を丸めた。
それを月見の塔の頂上に俺専用に用意された展望室で、俺は一人の観客となってニヤニヤと見つめている。
苦しむ女、滅びゆく都、そして、立ち上る灰色の魔力の奔流。
全てが俺が長きにわたり待ち続けてきたもの。

――ああ、なんて素晴らしい光景っ

そう叫び出しそうになるのを何とか耐えて、俺はこの素晴らしい光景を作り出してくれた彼女に優しく語りかける。
「助けて差し上げたいのは山々なんですが、ハクアリティス様？その痛みは、俺には取り除いてあげられないものなんです。すみません。」
だけれど、高揚する感情には逆らえず、声は陽気になる。
もしかすると演技以外では、先日の全ての始まりを喜んだ時以上のテンションの上がり具合かもしれない。
「・・・ど・ぉ・してぇっ・・！？」
苦しみが滲んだ声で、俺に問いただすハクアリティス。
その声には苦しみだけでなく、今まで彼女に従順で忠実な僕であった俺に対する疑心と怒りが感じられる。

――ふふふ
それを聞いてまた笑いが抑えられない。
だって、この美しくも愚かなる『ハクアリティス』と名付けられた女は、本当に俺の言うことを信じ、己が『天使の花嫁』だと『万象の天使の花嫁』だと『ハクアリティス』だからと、俺を使役しているつもりだったのだ。

・・・だけど、それは全てが虚ろなる幻

でも、彼女はそれが幻であることには気がつかない。
だから、どうして体が痛むのかも、俺が彼女の僕であり続けないのかも分からない。
本当に愚かで哀れな女――それが、俺のハクアリティスへの認識。
だけれど、俺だって悪魔じゃない。
「しかぁし！せめて貴方の痛みを和らげて差し上げようと、わたくし、素晴らしいゲストをお呼びいたしました！！」
そう高らかに告げた俺の言葉に、痛みに耐えて虚ろなハクアリティスの表情が僅かに動く。
そのゲストを見た時のハクアリティスの姿を思い浮かべて、俺には隠しきれない笑みが浮かんだ。
「なんと、貴方の旦那様がお越しですっ！！」
苦しそうな彼女の顔が、一転して明るいものになった。
「ふふ、嬉しいんでしょ？貴方は本当にご自身の旦那様のことを愛しているんですねぇ。」
「あ・・・エヴァ・・・ン・・・」
しみじみと言った俺の言葉など、もう届いていないのだろう。
そうして語りかける俺など見向きもせずに、ハクアリティスは痛みに起き上がることもできなままに、自分の夫が『エヴァンシェッド』であると信じたままに、少しずつだが扉の方へ腹ばいで移動していく。
一瞬でも早く『旦那様』に会いたいらしい。
「その感情も記憶も君が生きてきた全ては、俺が作り上げた虚像でしかないのに、本当に君は哀れだよ。そして、君はもうすぐ『最悪の悲劇』を引き起こす。それすらも、君は何も知りえないのだから。」

ぽつりと漏らした俺の言葉は届いてはいまい。
そして、俺は苦悶の声を上げながら、ずりずりと扉に向って進むハクアリティスの背中に更に語りかける。
「せめて、君が俺の目論み通り楔になってくれれば、もう少し君の未来も変わっていたかもしれないけれど、結局はあの悪魔が運命通り楔になった。まあ、所詮、運命は俺には変えられないということかもしれないけど・・・ね。」
そうして、独りごとに近い言葉を発してから、俺は罪人の巡礼地から巻き上がる灰色の魔力を見やって、一つ自分の中の下らない感傷に区切りをつけると、ぱちんと指をならして合図をした。
「さあっ！ハクアリティス様の旦那様をお連れしてくれ！！！」
俺の言葉に従って、扉が開き、それを感じて扉までたどり着けなかったハクアリティスが上体を震えながらも起こす。
その輝かんばかりの彼女の表情に俺は笑みを深くした。そして、

「い・・・・イヤァァァ！！！」

彼女の輝きは一瞬にして恐怖に凍りついて、夫に会えた歓喜の声ではなく耳で聞き取れないほどに高音の悲鳴が上がる。
次いでハクアリティスは扉の先の人物を見るなり、痛みのことなど忘れてしまったかのように、怯えた表情を顔に張り付かせて、床をものすごい勢いで首を横に振りながら這いずり、逃げるように展望室の隅に身を寄せた。
「な、なんでぇっ・・・・ああ・・・・・っ！こないで・・・・・来ないでぇ！！！」
錯乱したように、もはや、美しさの欠片も見えぬ形相で泣き叫び続けるハクアリティス。
思った通りのその表情に俺は少しだけ視線を送り、それから、ハクアリティスをそこまで変えた彼女の旦那様である人物に微笑んで

近寄った。

「やぁ、ラインディルト。」

そう、彼女の様子から察してもらえるだろうが、ハクアリティスの視線を釘付けにして、扉の向こうに現れたのは決してエヴァンシェッドなどではない。

それは紅の翼を持つ、三大天使が一人・ラインディルト。

「調整は済んでいないのか。」

こちらは挨拶しているというのに、出し抜けに簡潔な言葉。

彼のために色々してやっているというのに、それでも俺とは馴れあうつもりなどないという、彼の徹底した態度には感服してしまうばかりだ。

まあ、それは俺だって同じだから気にしないけどね。

「調整は完璧だよ。ただ、灰色の魔力があんなに暴走しているんだ。仕方ないだろ？」

「まあ、いいだろう。」

「久しぶりの逢瀬だし、せいぜい楽しんでくださいませ。俺は席を外させてもらうよ。」

俺などには目も向けずハクアリティスから視線を外さずに、淡々としているラインディルトではあるが、彼を知るものであれば微妙に落ち着きがないのが何となしに分かる。

まあ、ここしばらく俺がこの『ハクアリティス』を色々利用させてもらっていたから、何ヶ月も彼から彼女を取り上げていた訳だしね。彼が心逸る気持ちも仕方ないのかもしれないけど。

――――だからって、彼のこの『ハクアリティス』に向う愛情は本当に歪んでいると、俺は思うよ。

そうして、俺の言葉に返事を返すわけもなくハクアリティスへと

近づくラインディルト。それに悲鳴を上げるハクアリティス。
この光景をラインディルトを信じ切っているエヴァンシェッドが見たら、どうなるだろうか？
部屋から一歩出て、天使の領域（フィリアラディアス）から恐らく俺達に攫われたことになっているだろうラインディルトを信じ切っている俺が最も憎むべき天使のことを、そんな風に思い浮かべた。
裏切られたと怒り狂うだろうか？
それとも、悲しむのか？
でも、俺に組することなど信じられないだろうラインディルトが、こんな風に俺のもとに、まさか銀月の都（ウィンザード・シエラ）に自分から存在していようなど、悪知恵は働けども、あまりに純粋すぎ、無垢すぎる彼（か）の天使には今は決して想像もつかないことだろう。

――――そして、ラインディルトがあの『ハクアリティス』に執着する理由など・・・

尚、彼には絶対に理解することはできないだろう。
そうして、扉を閉めてもなお響き渡る女の半狂乱の叫び声を聞きながら俺は苦笑した。
そんな俺に新たなる登場人物が声をかけた。
「エンシッダ様。」
暗闇の廊下に響く声は低い。
姿は見えないが、その声で俺にはそれが誰だか分かった。
「コウル」
「はい」
「お前はヒロの回収に向かえ。いいか、ヒロを黒き神にも万象の天使にも決して渡すな。ヒロが、あの悪魔こそが全ての鍵。白き神のために、ヒロを必ずや奪取（だっしゅ）しろ。」
「御意」
ハクアリティスのことも、ラインディルトのことも、エヴァンシ

エッドことも、全ては俺には些細なことにすぎない。
どんなに他の誰かのことに頭を思い巡らせようとも、全てはただただ白き神の御ために繋がっている。

――そう。俺の行動も、この未来を縛るような茶番劇も、全ては我が君の御ため

だから、俺はその誰かのことを考えているにすぎない。
そして、今は白き神のために、あの『悪魔』の使いようが肝要。
そう、今はまだ『悪魔』と『天使』と『神』を同じ所に置く訳にはいないのだ。
そのためのヴィスの予言であり、それを実行していくのが俺の役目。
だが、俺自体が行動を起こす前に、確認しておくことがあった。
「後、ティア達は戻って来たか？」
誰を巻き込んでもいいが、これから起こることに彼女たちだけは巻き込んでは問題だ。
「はい。先ほど、ケルヴェロッカが神の血を解放させていたため、一時混乱しましたが、白き神は無事にお戻りのようです。」
やはり、神の血を解放させることになったか。
その辺は、ヴィスの予言通り動いたらしいな。
「そう、それでケルヴェロッカは大丈夫なの？」
「はっ。今はアオイが様子を見ております。ティアも付いているので、暴走の危険性はないかと。」
ならば、問題ないだろう。
「そう。じゃあ、ヒロを回収したら、すぐにこの罪人の巡礼地を離れる。ここは直に大きな力が働く。ともかく急いでヒロを銀月の都に連れ帰れ。」
「御意」

了承の言葉とともに暗闇から声と気配が消えて、残るのは女の叫びと男の高笑いだけ。

俺はそれを遮(さえぎ)るように瞳を一瞬だけ閉じると、自分もまたヴィスの予言の実行のために彼らに完全に背を向けた。

第７７話　お前に流れる血は何色だ　４（後書き）

久々エンシッダ様の登場です。しかも、何か色々混乱な展開です。『あの』とか『この』ハクアリティスという記述などが出てきていて、ハクアリティスはハクアリティスでしょう?と変に思っている方もいらっしゃるかも知れませんが、詳しくはお話しできませんがヒロが灰色の花園で見た聖櫃の中のハクアリティスと同じ姿の『天使』と、今回苦しんでいる『エンディミアン』のハクアリティスと、実は今、二人のハクアリティスが物語の中に存在しているのです。色々ややこしいかもしれませんが、いつかこの謎も解ける日がやってくるかと思うので、その日をお楽しみに。（このペースではいつになることやらですが（笑））

そして、ついに長かった第三部もそろそろゴールが見えてまいりました。今回は最後までヒロに視点は映らず、次からは再びエヴァンシェッド視点に戻り、そのまま第三部は終わる予定ですので、あと少しだけお付き合いください。

第７８話　悪魔の遠吠えが聞こえる　１

耳の奥に音が響いている
この世のものとは思えぬ化物の断末魔の如き音
ああ、これは遠い昔に出会った悪魔の遠吠え
悪魔はすぐそこにいる

【悪魔の遠吠えが聞こえる】

白き魔力で防御壁をはりつつ、灰色の魔力が濃くなっていくほうに向って俺は進む。
そして、その中心と思われる場所にまでたどり着いた時、俺は絶句することとなる。
そこにいたのは、我妻の遺骸と憎むべき黒き神と、そして、灰色の魔力を纏った男。

――灰色の魔力

この世界に存在する全ての魔力の中の『異端』とされるその存在。
すでに完全に封印したと思っていたその力を前に俺は言葉すらも失い、眩暈すら感じた。

灰色の魔力が『異端』と呼ばれるその理由を説明するには、まず

は魔力というものがどういうものか話す必要がある。
そもそも、魔力とはそれぞれ神という源が必要不可欠なのだ。
例えば、俺の使う白の魔力は白き神イヌア・ニルヴァーナの魔力を源としているし、それぞれ皆が使う様々な色の魔力はそれに対応した神がその源にいる。
すなわち、神という存在なしに、魔力は存在しえないのだ。
だから、神に見捨てられし人間には魔力を使うことができない。

だが、灰色の魔力だけには、その前提が通用しない。
何故なら、灰色の神という存在はこの世のどこにも存在していないから。
そう、灰色の魔力とは何故にこの世界に存在しているかもわからない、その存在はただひたすらに謎に包まれた魔力なのだ。
故に、灰色の魔力には『異端』という名がついたし、その魔力を使った人間たちは『異端の一族』と呼ばれていた。

そして、明らかに他の魔力とは違うその特異性。
本来、魔力とは神の加護を受けた使用者の力を増幅し守るための力であり、神と契約を交わした使用者に対しては、絶対の服従であり使役されるだけの存在であるのだ。
だが、灰色の魔力は違う。
それを身に纏(まと)いし者は、その魔力の大きさに身が耐えられなくなり生きながらにして死の苦痛に苛(さいな)まれ、魔力を使役するどころかその魔力に身を滅ぼされてゆくとされた。
そして、それを救ったのがあの黒き神であり、故にあの神は『異端の一族』を従えるに至った。
だが、黒き神という鎖がついてもなお、千年前の戦いで見たあの生と死すらも超越し、荒々しくすべてを支配してしまうその圧倒的な存在感。
そして、千年前の戦いの中でその魔力に触れた瞬間に俺は感じた。

あれこそ、世界の禍であると・・・

触れた瞬間に自分が自分でなくなるような、痛みと錯覚。
見るもの・感じるものすべてが現実か虚実かわからなくなるような曖昧で混乱した感覚、そして、それとともに駆け上がったのは抗いがたい誘惑に似た快感だった。

そう、あの魔力に触れた後に残るのは、痛みでも恐怖でもなく快感なのだ。

それは、どんな強靭な精神力をもってしても、屈せざるを得ないものをもっていた。
だから、危険なのだ。
力が強いだけだというならば、痛みが伴う以上、皆が皆その魔力を敬遠し広がることはない。
だが、灰色の魔力にはそれを打ち消してしまうような快感があり、その快感をもって千年前あの灰色の魔力は神の加護を受けた天使たちに悉く侵食していった。
それだけなれば個人の問題だ。
俺がとやかく言うことではないかもしれないが、それによって天使たちが黒き神に支配されてゆくことは許すことはできなかった。
黒き神は灰色の魔力を与える代わりに、人間だけに留まらず天使たちにまで服従を要求し、この世界を支配しようとしたのだ。
白き神の名において、それは絶対に許すことはできなかった。
しかし、許すことはできないと言って、それを禁止しただけでは阻止することは、あの灰色の魔力の持つ理性だけでは拒むことができない誘惑がある以上難しいことはわかっていた。
だから、俺はその魔力を封印した。黒き神と共に、この世界に再び出てくることなどないように永遠の闇に封印したのだ。

そう。
後にも先にもあの灰色の魔力を、黒き神という鎖なしに、完全に自分の支配下に置き、制御していたのは世の中でたった一人・灰色の悪魔と呼ばれたあの男だけだった。

・・・まあ、すべては過ぎ去った事実であり過去だ。
この場では、このくらいにしておこう。
ともかく、以上の説明のようなあの魔力の危険性を重要視した俺は、黒き神とともに封印した。
そして、その封印は完全であり、もう千年もその封印は有効であったはずなのだ。
なのに・・・
「どうして？」
この現在、目の前で不敵に笑って立っている神がいる。

黒き神ウ・ダイ

灰色の魔力の中心に佇(たたず)んでいた柄が悪い、忌々(いまいま)しいほどに昔と変わることのないその存在。
俺が白き神の力をもって封印した二つが最悪の取り合わせで目の前に存在しているなどと、最悪すぎて吐き気すらした。
「何だぁ？久しぶりなのに、いきなり御挨拶だな『ヨイ』。」
そして、こちらを神経を逆撫でするように強調された言葉。
「その名はとうの昔に捨てた。茶化さないで私の質問に答えろっ！どうやって、この灰色の魔力を？」
「まあ、そお怒るなって。きれいな顔が台無し――」
「黙れっ！」

「・・・」

しかして、混乱し湧き上がる感情と共に神を一喝する俺を、面白そうに、それでいてひどく冷めた表情で見る黒き神。

俺はよくこんな表情で世の中を見てるこの神が昔から大嫌いだった。生理的に受け付けなかった。

忘れかけていたそんな感情が胸の奥から吐き気と共にせりあがってくる。

何もかもが最悪な気分だった。

だが、そんな幼稚で感傷的な感情が、次の黒き神の言葉によって一瞬にして消滅する。

「俺はきれいな天使様とお話したかっただけなんだがなぁ。まあ、いい。そんなに知りたきゃ、教えてやるよ。おーい、『ヴォルツィッタ』」

――――今、なんと言った・・・

その名を認識した瞬間にガンガンと頭の中で鳴り響く警鐘と共に、何百年経とうとも忘れなられぬ情景が色褪せないままに昨日のことのように鮮明に呼び起こされる。

背中の片翼が熱く疼いた。

更に半身をもがれた苦痛と、目に焼きついた自分の翼を切り落としたあの悪魔の姿。

悪魔と呼ばれるには、大層人の良さそうで、どことなく寂しそうな顔をしていた男の顔が、脳裏に蘇る。

だが、あの悪魔は死んだ。

間違いなく千年前に罪人の処刑台で処刑されたはずの悪魔が・・・、ましてやそれを命令したのは俺なのに、それなのに、その悪魔がここにいると神は言うのか?

突拍子もない言葉に信じられないという思いが強い中、それでも、目の前の黒き神の様子を前にすると、ただただ嫌な予感ばかりが俺の胸を締め付けた。そして、

ガサリ

黒き神と俺だけしかいなかったはずの空間に、新たなる気配が背後で動いたのだ。

それを感じた瞬間、気配を振り向かなくてはいけない、その正体を確かめなければと思っているのに、心を支配する嫌な予感が体を動かそうとしないのだ。

あまりの情けなさに笑い出したい気分だったが、そんな余裕が今の俺には皆無だった。

「はぁ・・・ひぃ・・・」

そして、固まった俺に届いたのは浅く苦しそうな息使い。

それが、想像以上に近いところから聞こえて、俺は反射的にその姿を振り返る。

それは、振り返らなければという理性ではなく、敵が近くにいるからという本能的な反射的な動き。

「あ・・・」

そして、その姿をその目で見て、頭で認識するまでにわずかに時間がかかった。

「ひ・・・ろ?」

呟いた名は疑問形だったが、それは見間違えようもなくその人。

数週間前に俺のもとから逃げ出した黒の一族であるヒロが、俺の背後でひどく苦しそうに立ち尽くしていた。

「なんだ。」

思わず拍子抜けした。ビビりまくって損したとすら思った。

彼の顔を見た瞬間に、何故だかそれまで張りつめていた自分が解

れてゆくことすら感じた。

「驚かせないでくれ、ヒロ。」

「が・・・うう」

だが、そう言って黒き神がいるという非常事態にもかかわらず、思わず微笑んでしまった俺に対してヒロの態度は明らかにおかしい。

「ヒロ？」

言葉を発することもなく、その瞳はひどく虚ろで、あの俺をまっすぐに見る瞳は淀んでいて、ひどく苦しそうだ。

「そいつぁ、もうヒロじゃねぇ。」

そういった黒き神の言葉と共に、ヒロの体からすさまじい灰色の魔力が溢れだして、俺の視界をすべて灰色に染めた。

第７８話　悪魔の遠吠えが聞こえる　１（後書き）

第三部・最終章の始まりです。あと、４．５話ってところでしょうか？

いやいや、ここまでお付き合いくださっている皆様には本当に感謝の思いでいっぱいです！作者ももうひと踏ん張り頑張りますので、どうぞよろしくお願いします。

第79話　悪魔の遠吠えが聞こえる　2

「白き力よ、我を守れ！」
間近に迫る灰色の魔力に対して、気がつけば汗が滲むくらい握りしめていた全知の杓杖を盾にして、俺は自らの身を守っていた。
それは、まさに咄嗟の行動。
何も考えずに体が動いた、本能的で衝動的な動きだった。
だが、そんな状況においても俺はいつもの習慣で、恐らく眉一つ動かさずに涼しい顔をしているのだろう。（本当のところは何が起こっているのか、さっぱり分からずに心臓はばくばくいっていたりするが）
そうして、一通り襲いくる攻撃を凌いだ後、灰色の魔力を体から立ち昇らせているヒロを目の当たりにして俺は、それでも、表情こそ悠然としているかもしれないけど（自分じゃ自分の顔は確認できないから確かなことは言えないが）現実が信じられなくて呆然としていた。

『そいつはもう、ヒロじゃねぇ。』

リフレインする先の黒き神の言葉が空っぽの意識に響いて、止んでいた頭の中の警鐘が再び更に大きくなって鳴り出す。
「ひ・・ろ――――」
「だから、そいつはヒロじゃねぇって言っているだろ?」
それでもなお、何も考えられなくて彼の名を呼ぶ俺の声に被さるのは、その存在を忘れていた黒き神の聞き触りの悪い声。
聞いた途端に、ざわりと不快感がせり上がる。
「その男は悪魔ヴォルツィッタの生まれ変わり。そして、今やこの灰色の魔力の源となり、我が下僕になり下がった哀れな人間だぁ。こいつさえいれば、俺は再び灰色の魔力を手中におさめ、世界に華

々しく返り咲けるってもんだ。なぁ、そう思うだろ麗しの天使様よお？」

――悪魔の生まれ変わり？

聞いてもなお、その言葉を信じられず呆然としたままに俺はただヒロ、いや、その悪魔の生まれ変わりだというもうヒロではない男を見た。

溢れる魔力に苦しみ暴れそうになる身を縮こまって耐えるその仕草、表情、吐き出す息すらも灰色に彩られる様子は、男が本当に灰色の魔力に侵されていることを俺に伝えた。

更に灰色の魔力をその身から立ち昇らせ、そして、男の苦しみに反応するかのように花園を取り囲む魔力たちがざわめくことから、また今の黒き神の言葉からもこの目の前の男が、この灰色の魔力の中心にあるのは確かなようだ。

そして、じりじりと左手の指に嵌る翼との契約の指輪が熱くなり俺にその存在を主張していることが、信じたくなくてもこの男が間違いなくヒロであることを知らせてくれている。

全ての状況証拠が目の前の男がヒロであり、この男こそがこの突然の灰色の魔力の出現の原因であることは明らかにしている。

なのに俺は動くことができない、客観的な事実は理解しているのに、何をしたらいいかが全く考え付かないのだ。

いや、やるべきことは分かっている。この男が灰色の魔力の源であるというならば、その存在を消すのみ。

でも、男がヒロであることが俺を思考能力を奪っている。そうし

て、俺はやっと気がつくんだ。

――――ああ、俺はこれまでにないほどに動揺と混乱をしているんだ・・・と

「悪魔に加えて、お前には懐かしい人にもう一人会わせてやろうじゃないかぁ。」

しかし、停止した思考が続く中で、それでも流れ続けるのが現実。

呆然としている俺を待ってはくれず、黒き神が俺に向かって新たな登場人物を示唆する。

そうして突如として黒き神の腕の中に現われた一人の細い天使の背中。

その後姿、あの緑がかかったような翼には見覚えがあった。

それに気がついた瞬間に止まっていた思考が急激に動き出し、動揺に熱くなっていた体が急速に冷めていく。

「死者の墓を暴いたのですか？それも我が妻の。」

趣味が悪いと小さく呟いて俺は、心底軽蔑した目で黒き神を見る。

見間違えるはずはない。

それは、この灰色の花園を愛し、この場所を永遠なる寝屋にと望んだ我が妻の遺骸。

だが、死して何百年経とうとその姿は眠ったままの姫君のように瑞々しく美しいまま。

それでも、彼女はもう死んでいて生き返ることはないのだ。なのに、こんな死者を冒涜するようなことを、俺への嫌がらせだけのためにする黒き神に反吐がでるほど嫌悪したした。

しかして、黒き神は全くそんなものを気にした風でもなく、にや

にやした柄の悪い笑みを浮かべたまま、
「聖櫃なんぞ、死者すらも働かせる棺桶に入れるほうが俺はよほど趣味が悪いと思うがなぁ。なあ、ハクアリティス？」
そういって、ハクアリティス、かつて我が妻であったその天使の美しい顔に頬を寄せる。
そのまま、誰にいうでもなく独り言のように黒き神は言葉を続けた。
「ハクアリティスも可哀想なもんだぁ。万象の天使なんぞの妻になったばかりに、死してなお使役されるような罪を犯さざるを得なくなった。」
それまでのふざけた様な色の声が、突如として妙に重々しく、刺々しい殺気のような色を帯びる。
「だから、お前はいけねぇんだよ。」
『いけねぇ』
何が悪いというわけじゃない、俺という存在自体を否定するその言葉。それは千年前も幾度として、この神に言われた言葉。
しかして、常にその言葉の意味を俺は測りかね、ついには封印してもなお俺はその意味を知ることはなかった。
それはそんなことを問うている余裕があの戦いの中にはなかったのと、どうしてかその先の言葉を知りたくないような気がしたから。
だが、千年という時を経てもなお、繰り返されるその言葉を前に俺は観念しなくてはならないようだ。
「・・・どういう意味だ？」
「お前は禍だ。」
――――わ・・ざわい？
「この世界の誰も、俺以外はお前自身でさせも気がついていないだ

ろうが、お前こそが世界を破滅に導く禍なんだよぉ。」
「意味が分からない。」
黒き神に強く返した。
一瞬、聞きなれぬ言葉と雰囲気の違う黒き神の様子に戸惑ったが、すぐに俺は理不尽ともいえるその物言いに反発した。
だって、全く意味が分からないだろ？
何の根拠もなくして禍だと言われて、誰が『はい。そうですか』と頷くもんか。
千年前からの『いけねぇ』という時の黒き神のただならぬ様子に、こちらも構えてしまっていたが、聞いてみれば何とも乱暴な物言いに腹すら立った。
なんだ、やっぱりこの神は俺のことが気に入らないだけなのだと。
言葉に意味などないのだと。
そんな風に少し気を抜いてたのがいけなかった。

「意味。ならば、その証拠をみせればいいのか。お前が――――だという証拠を」

おかげて黒き神の告げた肝心な部分を聞き逃した。
「？今なんと――――」
そうして、聞きなおした俺の問いはものすごいスピードで俺の横を通り過ぎた存在によって掻き消された。
空気を切り裂く風の音、次いで鼓膜を揺らすのは音にならない空気の振動。
「ッヒロ！！」
そこには苦しんでいたはずのヒロが、まさに悪魔の如き形相で黒き神に襲いかかっていたのだ。俺は思わず、名を呼んだ。

「がぁあっ！！！」
「ほぉ、まだ俺に牙をむくような自我が残っていたかぁ。」

黒き剣（ローラレライ）の全てを灰色の染め上げた灰色の魔力の結晶のような剣を、黒き神は自身の愛剣破壊という名（ガーダ・ガヴァダ）の死で悠然と受け流し、ヒロをその圧倒的なまでの力で弾き飛ばす。

死と破壊を司る黒き神の強さは、千年前の戦いで封印という形にしろ勝利という形をおさめた俺でさえ、今でも悪夢に見るほどに恐ろしい。

その強さは天使最強と名高いシェルシドラでさせ、勝てる気がしないとまで言わしめた。

いくら灰色の魔力を有しているとしても、それすら黒き神によって与えられている形である異端の一族のヒロがどうしてこの神に勝っているというのであろう？

「やめろっ」

そんな思いがあったから、俺は届くはずのない言葉を思わず発していた。

「お前は邪魔だ！！」

だが、届くはずのない言葉には俺に背を向けた悪魔から強い返事が返ってくる。俺は呆気にとられた。

「ヒロ、・・・正気に戻ったのか？」

そうして、そのはっきりとした確かな声からヒロが自我を取り戻しているとわかっているのに、俺はひどく不安な気持ちで振り返らない彼の背中に問いかける。

なぜなら、この灰色の魔力の暴走ともいえる氾濫（はんらん）の中心にあるヒロが正気に戻ったというのであれば、この止まらない暴走の灰色の渦に何らかの変化があるはずだ。

なのに暴走は止まるどころか、むしろその勢いを増しているようにさえ見える。

こんな様子では、とてもヒロが正気に戻ったとは思えなかった。

「そんなことはお前には関係ない！ともかく、お前はここから去るんだ、『ヨイ』」

「え？」

そうして、告げられたのはヒロが決して知るはずのない俺が永遠に捨て去ったはずの忌まわしき呪われた名前。

「・・・どう・・して、ヒロがその名を？」

言葉が震えた。

「はっはあっ！！」

黒き神が高らかに笑った。

「ついに現われたかぁ、ヴォルツィッタ！！！！会いたかったぜぇ！！！我が封印を解きし、悪魔の鍵よ！！」

第７９話　悪魔の遠吠えが聞こえる　２（後書き）

ここでは多くを語りません。
次回は久々にどんぱちやる予定です。

第８０話　悪魔の遠吠えが聞こえる　３

ヒロは悪魔の生まれ変わりかもしれない。

信じられない現実が、次第に現実味を帯びてゆく。

しかして、俺は灰色の魔力を持つ悪魔の魂が再びこの世界に蘇ることのないよう、生まれ変わりなどそんなことが起こらないために、悪魔の肉体より魂を取り出しそれに剣を突き立てて悪魔を処刑した。

（魂はそれ自体が消滅しなければ、基本的には転生を繰り返すものだから）

そして、その剣を突き立てたのは紛れもなく自分。

間違くなく悪魔の魂は俺の手の中で消滅し、俺の目の前で永遠にこの世界から消えたのだ。

なのに・・・

「俺は会いたくなかったよ。黒き神」

発せられる声と共に彼から醸(かも)し出される雰囲気が如実に変化した。

何の変哲もない人間のそれから、重々しく近寄りがたい空気と威圧感がその背中と声だけでひしひしと感じられる。

そして、いつものようにお固く『私』という一人称はなくなり、そのしゃべり方も声も俺が知っているヒロでない。

そう、俺に背を向けたその男はヒロではありえないんだ。

しかして、俺はそれが悪魔とも言えないでいた。

何しろ悪魔ヴォルツィッタとは浅からぬ縁があるとはいえ、実際のところ戦いの場でしか会うこともない相手だ。

暢気(のんき)にお喋りをするような仲であるわけもなく、俺がこの男がヒ

ロでないと思う一方で悪魔であるとは断言する材料は何一つないのだ。

「ヴォルツィッタ、そうつれないことを言うなよ。」

しかして、怖いくらいに機嫌よく腕の中に囲ったハクアリティスの死体に話しかける黒き神は彼が悪魔だと決めつけて話を進めている。

そして、黒き神の腕の中にいる妻を見て悪魔（とりあえずは、ヒロではなく悪魔ということにしておく）はぴくりと肩を揺した。

「その腕の中のものは何だ？」

ヒロより低い声が更に低く重いものになる。

「何だってお前だって知らない仲じゃねえだろ？」

妻と悪魔が知り合いだったなどと、俺は知らないぞ？

「そんな事を言っているんじゃない。俺が聞いているのは、ハクアリティスの体が『カレド』である理由だ。どうして彼女を『カレド』にした？」

「何？」

理解できない言葉が交る会話は俺を無視したまま続き、その俺が知らない『カレド』という言葉に黒き神が太い眉を顰（ひそ）めて片手に抱いているハクアリティスをまじまじと見つめ、何かに気がついたのだろうかその顔を凶悪な嫌悪に歪（ゆが）めた。

喜色から怒色へと、それは見るに明らか過ぎる変化。

「これはどういうことだぁっ！！」

そして、怒鳴りながら大事に抱きしめていた妻を何か汚いものかのように、荒々しく地面に叩きつけた。

「何を！？」
俺はそれに驚き彼女を抱き起こすと黒き神を睨みつけ、黒き神が凶悪な表情をさらに深めるのを目の当たりにした。
それはぞっとするような表情。
全ての怒りとか憎悪とか、そういった激しい負の感情を凝縮したような・・・そんな言葉にできない感じがして、俺はその迫力に唾を飲み込む。

「何・・・だとっ？何もくそもねぇ！！！俺様をコケにしやがってぇ！！！！」

びりびりと肌が張りつめた空気の振動を感じ、灰色の魔力に支配された空間に神の足元の地面から堅そうな質感を伴って黒の魔力が湧き上がり、人間の顔ほどの大きさのキューブ状をして、次第に黒き神を囲むように増殖していく。
ともかく黒き神が何を怒っているのかも、彼の著しすぎる変化にもついていけなくて俺は妻を抱いたままにただただ戸惑うばかり、だが、悪魔の方は何もかもを見通しているような冷静な声で更に神を挑発するように言葉を続けるのだ。
「それが千年間も封印され続けた代償というものだろう。千年も不在だった神を世界は王とは認めない。時の流れは全てを変える。俺もお前もこの世界にはもう不必要なものなんだ。」
「黙れぇっ！！！」
俺という存在などないかのように、冷静なる悪魔と激昂する神との衝突は、次第に言葉だけにとどまらず花園を包む魔力にも影響を及ぼし始める。
渦を巻くようにしていた灰色の魔力が次第に悪魔のそばで空中に大きく固まり始め、対してキューブ状の黒き魔力も振動し今度は大きさも膨れ上がってゆく。
互いに威嚇し合うように波打ち、胎動する魔力同士の共鳴に似た

反応。しかして、これほどまでに大きな魔力同士のものを俺は千年前以来見たこともない。

「お前は俺に従っていればいいんだ！千年前のように大人しく俺の下僕としてっ」

そして、強い言葉と共に黒き魔力のキューブから鋭く大きな棘の大群が生まれ、悪魔に襲いかかった。

その数は目測では数えられないほど、視界が灰色から黒に一瞬で色を変えるほど。

だが、そんな強い魔力の攻撃であろうとも悪魔は眉ひとつ動かさずに、黒の剣（ローラレライ）を地面に突き刺すと、空いた両手を胸の前で合わせると何事かを呟いて灰色の魔力を自身の周りと、そしてなんと俺とハクアリティスの周りにも魔力の壁を作り出し、その攻撃を全て防ぎ切った。

まさか、悪魔に守られるとは思ってなくて俺は目を剥く。

「黒き神、貴様は何か勘違いしているようだな。俺は今まで一度だってお前の下僕になり下がった覚えはない。」

だが、黒き神の攻撃も俺を助けたこともなかった事のように平然として悪魔は、今度は黒き剣（ローラレライ）を胸の辺りにかざすと、長い髪を揺らす女性の形をした灰色の魔力を作り出す。

――――ああ、これは千年前に見たことがある

悪魔ヴォルツィッタが戦いの際に常にその傍（かたわ）らにあったこの女性の形をした魔力の塊。

それは空を飛び、地中を潜（もぐ）り、戦場を駆け巡って天使たちに襲いかかり死の魔女・ローラレライとまで言われ恐れられていた。

それを見て、俺は体の力が抜けるのを感じた。

もう、これは決定的な証拠。

どうにもこのヒロの姿をした男を悪魔だと認めざるをえない。

そのことが、どうしてか俺をどうしてか呆然とさせていた。
しかし、そんなことを考えていた俺を急にぐるりと悪魔が振り返ったために、俺は再び体に緊張を走らせることとなる。
「ヨイ、お前は早くこの場を去れ。」
だが、悪魔から発せられたのはあまりに予想外の言葉。
「その名はもう捨てた。」
そうして拍子抜けしたというか、言うべき言葉ならもっとたくさんあるだろうに、俺から出たのはそんな意味のない言葉。
そして、悪魔はなんとも珍妙な表情を浮かべた。
「捨てた?」
初めて正面から見たヒロの、いや、悪魔の顔が何かの感情に揺れる。
「・・・そうか、そう。きっと、その方がいいな。」
だが、そう言って納得してしまうと、すぐに感情の揺れは消え、その感情がどんな種類のものなのか俺は判断がつかなかった。
「では、万象の天使。お前がここにいる理由はもうない。さっさとここを去れ。」
「だが、この灰色の魔力を放ってはいけないっ」
そもそも、こんな場所に来たのは灰色の魔力を再び封印するためであり、それをせずに俺がおいそれと逃げ出すわけにはいなかい。
それに俺はすっかり頭から抜けていたが、この悪魔こそが大きく関わっているに違いないと思っていたはずだ。
それを思い出して妻を静かに大地に横たえて悪魔に一歩近づこうとした俺だが、それはすぐさま悪魔に遮られた。
「それは俺が何とかする。いや、これから暫(しばら)くの間は灰色の魔力を俺が抑えておく。その間に、灰色の魔力にとらわれた天使や人間と共に逃げるんだ。」
そうして、返ってきたその言葉に俺だけではなく、黒き神も驚いたらしい。

「馬鹿いうんじゃねぇ！！俺が何のために灰色の魔力を解放したと思っているんだ！！俺の解放をさっさとしろ！」

黒い魔力が今度は大波となり、怒号と共にこちらに襲いかかる。

「黒の剣（ローラレライ）」

だが、死の魔女をそっと悪魔が撫でた瞬間に、彼女が黒の魔力から悪魔と俺を守るように立ちはだかり、キィンと高い声を発した瞬間にその黒き魔力が一瞬で霧散（むさん）する。

壁に打ち付けられた波飛沫（なみしぶき）の如く、黒の魔力がはらはらと細かい欠片となって舞う。

「誰が貴様の封印と解いてやるといった。言ったろ？お前も俺ももうこの世には無用の存在なんだよ。」

「俺はそんなことは許さねぇ」

神は激しく首を横に振った。

「もうこの世界はお前の手を離れたんだ。」

「うるせぇ！！！」

大声は俺の耳に痛くなるほど強烈に届く。

しかして悪魔はそれをひたすらに悠然と聞き流し続けていたが、そんな神に心底呆れたように溜息をつく。

そんな様子は何故だが、俺が知っているヒロと重なった。

「・・・仕方がない。言ってわからないなら、力づくで分からせるまでだ。」

瞬間に悪魔が纏（まと）う魔力の濃さが増した。

花園を包んでいる魔力はそれだけでも十分に濃いものだったが、悪魔のそばにいる俺はその濃さに気分が悪くなるほど。

そして、花園どころではなく罪人（アークヴェル）の巡礼地全体の魔力が、悪魔に結集していくようにその体に吸収されてゆく。

空気そのものが何だがどろりとした質感を持っているほどに濃い感じがした。

「力づくだとぉ？面白い！！！死と破壊の神たる俺様に、下僕の契約を交わしたお前が力でかなうとでも思っているのか！？」

確かに。黒き神の強さは世界で類をみないほどに強靭（きょうじん）で、凶悪な最悪で強さ。

悪魔がそんなものを相手にかなうなんて、たとえヒロではなく目の前の男が悪魔であっても考えられるはずがない。

しかして、悪魔はそれでも全く神に動じることはなく・・・

「お前はわかっていないようだが、この体はもう黒の鎖を断ち切ったヒロ、我が子孫のもの。黒の契約は彼とお前の間では無効だ。」

契約？

黒き神と悪魔の間には、契約があったのか？

「違う！ヒロには5年前に千年前のお前と同じように黒の剣（ローラレライ）と契約を結ばせたっ！千年前と同じくその体は俺の下僕だぁっっ」

「いいや。」

しかして、テンションあがりまくりの神に対して悪魔はひたすらに静かなまま繰り返す。

「契約はヒロとお前の間では結ばれてはいない。」

そうして悪魔の告げた言葉は、黒き神の動きを今度こそ確実に止めたのだった。

第８０話　悪魔の遠吠えが聞こえる　３（後書き）

気がつけばこの話も実は８０話なんてところまで、そして、第三部も次の８１話でなんとか終了しそうです。これも、一重にこんな拙い話を読んでくださっている読者の皆様のおかげです。ありがとうございます！

さてさて、次話で第三部は終了する予定ですが、この勢いのまま今週末くらいには８１話をアップできたらいいと思っておりますので、よろしくお願いします。

第８１話　悪魔の遠吠えが聞こえる　４

「・・・どういうことだ？」

悪魔の確信めいた言葉に神の確固（かっこ）たる何かは砕け、ぼさぼさの前髪の向こうに見える黒々とした瞳が僅かに不安げに瞬（またた）いた。

それに追い打ちをかけるような悪魔の淡々とした声。

「貴様と俺と俺の恋人ローラレライの間に交わされた契約。貴様はローラレライの心の隙をつき俺を永遠に彼女の恋人でいさせてやると彼女に持ちかけた。その対価としてローラレライは自らの命を差出し、俺は自分の意志とは関係なくローラレライの命のそのものである黒の武器（カシュケルノ）の力を得た。」

ぐらりと灰色の魔力の濃さで視界が揺らぐ。

それは恐らく声には見せない悪魔の感情の波なのかもしれない。

「そして、黒の武器（カシュケルノ）の力を得た対価として俺は自ら望まざるして貴様の下僕となり果てた。ヒロにも俺と同じように恋人だった娘を唆（そそのか）そうとしたんだろう。ヒロを永遠に自分のものにしたければ、その命を捧げろ・・・と。無論、そうすることでヒロが黒の武器（カシュケルノ）の力の対価にお前の下僕なることなど何一つ言わずに。」

黒き神は悪魔を下僕にさせるために本人がそれを了承するわけがないから、彼らの恋人を利用してそれを実行したのだ。

しかも、その恋人の命を利用するという最悪の形で・・・

黒の武器（カシュケルノ）の大いなる力の裏に、そんな事実があるなど天使が知るはずもない。

改めて黒き神の卑劣（ひれつ）さに吐き気を覚えた。

「だが、残念だったな。ヒロの恋人はお前の甘い囁（ささや）きに最後は耳を傾けなかった。彼女はヒロを永遠に自分に縛り付けることよりも、ヒロを助けるために力を与えることを願った。故にヒロは黒の武器（カシュケルノ）の力を得たが、それは貴様とヒロとの契約ではなく貴様とヒロの恋

人の間の契約となった。そして、彼女はすでに命という対価を支払っている。」

そして、静かなる長きにわたる悪魔の告白は、黒き神に明かなる驚愕を与える。

「ま・・さか、あの女は望まなかったとでもいうのかぁ?!ヒロを、愛する者を永遠に自分のものにすることを?馬鹿なっ!!!それにさっきヒロは俺の前に崩れ落ちたじゃねぇかっ!それは俺の下僕なり下がった、何よりの証拠だろうぉ?!!」

理解できないと言って汚ならしく悪態をつく彼を、神だと思うものは誰もいないだろう。

むしろ超然として彼を見下すような冷たい瞳を湛える悪魔の方が、よほど神らしい。

「それはヒロが灰色の魔力に痛みを感じただけ。決して貴様との契約の前に屈した訳じゃない。でなければ、俺が貴様にこうして刃を向けられるわけがないだろ?」

しかして、怒りと混乱に我を失っている黒き神に悪魔は言葉を証明するかのように、完全なる不意をつき死の魔女を黒き神に襲わせた。

神は突然のことにそれを避けることもできずして、死の魔女は神の体に纏わりつき彼を瞬時に拘束した。

「離せぇ!!!」

「そう言われて離すはずがないだろ。」

激しくもがき死の魔女に剣を突き付けたり殴ったりしてみるが、対して彼女と言えば実体のない魔力の塊なのだ。何をされたところで黒き神の攻撃など微塵も感じず、黒き神を捕えて離さない。

「俺としてはこんな貴様を殺す絶好の機会を逃したくはないけどな。今の貴様は所詮は影。殺したところで何になるわけでもないし時間もない。・・・さっさと消えてもらおうか。」

そして、悪魔は静かにそう告げて気がつけば喚きまくる囚われの

神に突進し、死の魔女を突き抜けて黒の剣（ローラレライ）を突き刺して黒き神を一瞬にして消し去った。
神の強烈なる印象にしては、あまりに呆気なさすぎる幕切れ。
後に残ったのは黒の魔力の名残と、悪魔に吸収されたが濃密に残る灰色の魔力の気配、そして悪魔と妻と呆然と立ち尽くす俺・・・

「まったく、あの男はいつもいつも面倒な男だ。」
しかし、どうにも流れる微妙な空気の中で悪魔が発したのはそんな愚痴にも似た独り言。
俺はそんな様がどうにもヒロと重なってしまい思わず笑みを浮かべた・・・と悪魔がそんな俺をまじまじと見ていて、ぎくりと心臓が跳ねる。
「――――あ」
どうにもバツが悪い。
「何が楽しいかは知らないが、万象の天使。何度も言っているがお前はさっさとここから逃げろ。灰色の魔力は今は全て俺の体の中に納めてあるから、今なら逃げやすいだろう。後、他に罪人（アークヴェル）の巡礼地に残っているやつらに避難しろと警告するのも忘れるなよ。」
しかして悪魔はそう言い捨てて、さっさと俺に背を向けるとどこかに立ち去ろうとする。
俺は悪魔の腕をとって引きとめた。
「ヒロは・・・ヒロはどうなる？」
と他にも尋ねることはあるだろうに、何も考えずに咄嗟（とっさ）に口をついたのは悪魔の中から出てこないその人間のこと。
「ヒロのことが気になるのか？」
しかして、逆にそう問い返されて俺は何と言っていいか分からなくなる。
ヒロは俺にとっては翼（エヴァ）との契約さえなければ何の関係もない存在で、決して俺にとって比重が大きい訳ではない。
だが、ヒロと一緒にいるときに感じる不思議な安堵感のようなも

の、今も思わずついて出た無防備な自分が求めているヒロの存在。
――これはただ俺の中にある翼（エヴァ）の影響だからと、言い切ってしまっていいのだろうか？
俺は悪魔に問われ初めてそんな疑問が心の中に浮かんだ。
だが、そんな感情に囚われても、万象の天使たる者がそれを悪魔に見せてやる理由はない。
「そんなわけがないだろう。ただ、悪魔にこれ以上、復活されていても困るだけだからな。」
そう言って悪魔の問いをはぐらかした。
「・・・そうか。それならばいいが、間違っても俺に・・・いや、ヒロに気持ちを傾けるなんてことはしてくれるなよ。」
「どういう意味だ？」
しかして、俺は悪魔の言った言葉の意味を測りかねたが悪魔はすぐに話題を変えて俺の追随（ついずい）を許さない。
「何でもないさ。それより、罪人（アークヴェル）の巡礼地はあと数十分後には跡形もなく消えるぞ？本当に早く逃げた方がいい。」
「何？」
思いもよらぬ爆弾発言だった。
逃げろ逃げろと言われていたが悪魔の態度があまりに落ち着いていたので、そんな大事が繰り返される言葉の裏にあるとはこっちは想像できない。
そして、驚く俺に対して悪魔の淡々とした声は変わらずに続く。
「この都にはあまりに多くの灰色の魔力が溢（あふ）れすぎた。その気配はすでにウァブーシュカに気付かれただろう。あいつは罪人（アークヴェル）の巡礼地をすぐに飲み込みにやってくる。」
「ウァブーシュカ？」
聞いたことのない名前だった。

「世界の理を守るために作られたドデカイ化け物のことだ。灰色の魔力はこの世界の理に反した存在だ。だから、あいつはいつもそれを察知すると、魔力だけでなく魔力が溢れる場所も人も全てをその無間地獄が広がるといわれる体内に飲み込んでしまう。」

そんな存在がいるなど聞いたこともなかった。だが、悪魔が冗談や嘘を言っている様子もない。

「そいつがもうすぐここに来る。あいつだけは、俺もお前も黒き神でさえもどうこうできる存在だ。だから、早く行けと言っている。俺はやつの被害ができるだけ広がらないように、このヒロの体がウァブーシュカに食べられないように色々と後始末だけはしないといけないからな。」

「大丈夫なのか?」

それは果たして悪魔にかけた言葉か、それともヒロにかけた言葉だろうか?俺自身も分からない。

「だから言ったろ?俺たちに気持ちを掛けるな。」

「だが・・・」

そう言われても俺は言葉を濁すしかできない。自分で自分が分からない。こんな自分はひどく気持ち悪かった。

そして、そんな俺を見返した悪魔は冷たい固まった表情ではなく、笑っているような泣いているような何ともひどく人間らしい顔で見つめていた。

「?」

俺はその表情の意味を聞きたくて口を開こうとして、なのにそれは悪魔に遮られた。

「ヒロのことは心配しなくても、エンシッダの手下どもが迎えにくるだろう。いいから、お前は自分とこの世界のことだけを考えていろ。」

そして、悪魔はぽんと一つ俺の肩を押した。

それは大した力ではなかったはずなのに、瞬間、俺は何かに引き寄せられるように体を後ろにひかれ、みるみるうちに悪魔が花園が

俺から遠のいてゆく。次いで灰色が目の前いっぱいに広がって、視界がふさがれる。

「ま・・・・、待てっ！」

聞きたいことがまだまだある。だって、何一つ結局俺はわかっていない。

俺は悪魔に手を伸ばす、そう、ヒロがエンシッダに連れて行かれたあの時のように手を伸ばした。

だけれど、どれほどに痛くなるほどに手を伸ばしても俺の手は結局、何一つつかむことはなかった。

そして、耳に残った悪魔の最後の声。

「俺と、いや、ヒロとお前は一緒にはいてはいけないんだよ、ヨイ。」

その意味を俺が知るのは、それから随分先のこと。

このときの俺はただただその意味など理解しようとせずに、その声の優しさと切なさに、何故だか懐かしさと悲しさを感じていた。

そして、気がつけば俺は灰色の花園からはじき出され、灰色の魔力の嵐がおさまり静かなる都の残骸の上に立ちつくしていた。

俺が封印したはずの花園への入口は消えている。

「・・・」

俺がすべきことは一つしか残っていなかった。

戦いの気配こそなかったが、おそらく灰色の魔力に襲われた天使と人間たちの弱った気配がそこかしこに感じられ、俺はそれを助けながら皆にとりあえずこの地を離れることを促した。

悪魔の言っていた『ウァブーシュカ』なる存在については何一つ

信憑性も証拠もないが、悪魔が嘘をいう理由もないし、何より俺の第六感が何かを感じていた。

こういう時はその直観に従った方がいいことを、長年生きて生きた経験の中で俺は知っている。

だから、ともかく天使たちに急ぎ逃げるよう促(うなが)した。

そうして、俺が天使たち助け罪人(アークヴェル)の巡礼地からいくらか離れた瞬間だった。（人間たちもエンシッダの命令だろうかこちらを攻撃してくることなく、なぜだか一目散に逃げていた）

空気が急速に薄くなるような感覚に、息苦しさとまるで罪人(アークヴ)の巡礼地(エル)に吸い寄せられるような引力に僅かに体を踏ん張った。

次いで鼓膜が破れるくらいに激しく揺さぶられるほどに大きな轟音(ごうおん)

それは、何かの爆発した音のようにも聞こえたが、俺には見たことのない化け物の遠吠えのような、鳴き声のように聞こえた。

そして、引き寄せられる感覚の後に、その数倍の勢いをもつ外側に弾き飛ばすような衝撃波が俺の体を吹っ飛ばした。

咄嗟に全知の杓杖(シェーバ・ミシェ)を地面に突き立て体を固定し、同時に飛んでくる都市の瓦礫(がれき)から皆を守るために魔法防壁を広範囲にわたって展開した。

そうして、罪人(アークヴェル)の巡礼地は瞬間に世界から姿を消した。

それはもう先ほどまでの炎上とか灰色の魔力とか、それらとは全く次元の違う破壊力をもって、本当にこの世界から跡形もなくあの場所にあったもの全てが滅(めっ)せられた。

・・・あと少し俺たちが逃げるのが遅れたらと、そう考えるとぞっとした。

同時にこの光景を俺はかつて見たことがあるような気がしてならなかった。だが、それが何処だったか明確に答えられない。

――――これが『ウァブーシュカ』という存在・・・

そして、その破壊力に驚く一方で、悪魔がヒロが本当にこの事象から逃げられたかどうかが頭の片隅で気になって仕方ない。

どうしてあの悪魔の、ヒロの存在が俺の中でこれほどまでに気になるものなのか、俺自身が答えられない以上、誰が答えてくれるものじゃない。

ただ・・・と俺は続く爆破の衝撃波を防ぎ続けながら、上空に浮かびこの衝撃波から逃げていくように移動していく銀月の都（ウィンザード・シエラ）を見上げた。

生きているのであれば、悪魔の言うことが正しいのであれば、ヒロはきっとあの場所に戻ったのだろう。

ならば、何をおいても必ず俺は再びヒロに会おう。

そして、次に会った時にこそ彼と自分との間にあるものの正体を見極めるのだ。

俺は遠ざかる空中都市を睨みつけながら、そのためにすべきことの難解さと自分の残酷さに胸が冷える思いがした。

第三部　異端という名の灰色編　完

第８１話　悪魔の遠吠えが聞こえる　４（後書き）

長ーい第三部が終了いたしました。ここまで読んでいただいた皆様、本当にありがとうございました！何とかここまでこぎつけることができ、作者も本当にうれしい限りです。

ヒロの過去編が半分、新たなる展開が半分といった感じですが・・・まあ、長くなり続いているわりには中々ゴールが見えてこない感じで読者の皆様に飽きられつつあるのではないかと心配しております。また、ご感想・ご指摘などがありましたら是非是非お聞かせくださいませ！

続きまして、次回からはいくらか第三部で付け足したい部分など、ヒロの恋人の話や両親の話などを続いて閑話にしたいと思っています。

閑話　何一つ持たない者

昔物語で神の子を宿した人間が天使に受胎告知を受けたというのはよくある話かもしれない。
でも、美しい天使様どころか髪の毛ボッサボッサの無精ひげを生やした見るからに汚らしい男に、

『お前の腹の子は悪魔だぞぉ。』

なんて、言われることは昔話でもありえない。

【何一つ持たない者】

私の名はササラ。
ほそっこい体に疲れた表情をした何処にでもいるごく一般的なアーシアンの女。（あ、でも腕っ節には少しばかり自信があるかも？そこいらの男ぐらいなら、束になってかかってきても伸してやる実力はある）
だけど、ちょっと他のアーシアンと違うところがあるとすれば、それは私の愛しい旦那様がそれに当てはまるかもしれない――――て、ちょっと、何よ？そのあからさまに嫌そうな顔っ！私が貴方の事を愛しているっていって何が悪いわけ？？

・・・と、失礼。横にいるその旦那が（もう様なんてつけてやるもんか）、変なちょっかいをかけてきたもので、オホホホ。

ともかく、話を元に戻すとうちの旦那はちょっとごく一般的なア

ーシアンとは違うの。

旦那は流離人（さすらいびと）とかいう、この死の世界ともいえる不浄の大地（ディス・エンガッド）を旅している、何とも物好きな一族の血をひいていて生まれた時からどこか一所に定住をした経験がないという変わり者。

正直、旦那に会うまでは生まれた町から出ることなんて考えたことがなかった私は（これはごく一般的なアーシアンの感覚）、旦那と一緒に旅をしているのが普通となった今となっては何も感じないけど、初めて彼と会ったときはもんのすごい驚いたものだ。

でも、旦那は流離人（さすらいびと）という以外は至って普通の人間で、意外なことに体を動かすよりは本を読んでいることが好きという不浄の大地（ディス・エンガッド）を旅しているという割には非常に軟弱（なんじゃく）で、私より全然弱く、今までどうやって生きてきたか不思議なくらい。（あ、でも、逃げ脚だけは異常に速い）

最近は私が鍛えてあげているから体つきも大分良くなってきたけど、以前は本当にもやしみたいに白くて細かった――何よ、本当のことでしょ？

そして、その旦那との間にできたのが我が息子・ヒロ。現在、満7歳。

今、私と旦那の間でぶらぶらと手にぶら下がってご機嫌な彼は、まあ、誰が見ても旦那の子だと一目でわかるくらい彼に似ている。

でも、旦那にはない子供特有の愛らしさや私に向けてくれる笑顔は本当に目に入れても痛くないほど可愛らしくて、私は気がつくといつも息子を思いっきり抱きしめて彼を窒息させかけたことも数回。

（愛しさが溢れて力加減ができなくなっちゃうのよねぇ）

おかげで最近はめっきり旦那のほうにヒロは懐いてしまい、私にくっついてこないのが最近の悩み。

――だけど、そんなものは彼が生まれてくる前の悩みに比べれば本当に小さなものだ

不意によぎった思いに、ヒロの手を握る手に力がこもる。
「おかーさん？」
それに気がついたヒロは舌っ足らずの甘い声で私を呼ぶ。
円らな黒々とした瞳には一点の曇りもない。私は思わず無防備に私を見上げる息子を抱きしめた。
「ぎゃぁーっ！」（ごきごきと骨の鳴る音が聞こえたようなきがしたけど、錯覚よね？）
「ば・・・、サララ、やめろ！ヒロが窒息する！！！」
そして、必要以上に喚く男どもの声は無視して、私はだた自分の中に一瞬去来（きょらい）した不安をぬぐい去るように、ヒロの柔らかい体を自分の体から少しでも離さないように抱きしめた。

――――この子は私の大事な子供よっ

そんな言葉にならない叫びを、心の中だけで大声で叫びながら。

旦那がいて、子供がいて、何の当てもない旅を続けて、・・・苦しいこともあるけれど本当に幸せだと胸を張って言える毎日の中、私のたった一つの不安。
それはヒロがまだ私のお腹にいた頃のこと。
臨月が近くなって、さすがの私たちも旅を続けることが困難だったから旦那の研究がてら（旦那は放浪を続けながら、過去の人間の文明を調べることを私と出会う前から趣味にしている）、とある亡国（ルガバ・チェシエ）の廃墟を訪れた。
そして、名の忘れられたそのかつての文明の名残のある建物の中、私と旦那は不思議な空間に迷い込んだの。
それは建物の中なのに、どうしてか外にいるようなぽっかり開い

た空間。何もかもが灰色に彩られた、くすんだ世界。
そして、何も誰も存在していないように見えたその空間に突如として現われたひどくガラの悪い汚らしい男。
彼は名乗りも、挨拶もなしに出し抜けに私たちに告げたのだ。

『お前の腹の子は悪魔だぞぉ。だから、俺に渡せぇ。』

意味が分からなかった。
しかして、言われた言葉の意味を理解した瞬間に、頭に血が上った私はその男をグーでぶん殴った。
『サ・・・ササラッ』
温厚・実直が服を着た様な旦那は、そんないきなりの私の暴挙に腹の大きい私への心配と戸惑いの滲んだ声を上げる。
だけど、そんなこと今は気にしている余裕は私にはない。
出会ってすぐの男だが、こんな明らかに異常な状態で異常な事をいうような男だ。
直感的に、私はこの男が危険だと感じていた。
だけれど、旦那をはじめ大抵の男なら一撃でノックアウトしてしまう私のパンチがは、その男には全く通じている気配がない。
むしろ、殴られたまま私と視線を合わせて、男はニヤリと面白そうに笑ったくらいだ。
その顔をみて私はぎくりと心臓がはねるのを感じ、すぐさま男から離れた。

『気のつえ―女は嫌いじゃねぇ。だが、理由も聞かずに人を殴るなんて、ちょっとひどかねえか?』
私が殴った方の頬をさすりながら、どこか笑いの含んだ喋り方が気持ち悪かった。
『いきなり人の子を悪魔という方が、よほどひどいと思うけど?この子は私の子よ!!誰にも渡さないわ!!!!』

大きな腹を抱えて私は叫んだ。
どうしてこんなに自分が興奮しているか分からない。
ただ、怖かった。
いきなり現われたこの男に何か月も私の中にいる赤ちゃんを取られてしまうんじゃないかという、ありえない想像がよぎった。
『言ったろ?そいつは悪魔だ。元々は俺様の下僕。俺は俺のものを返してくれと言っているだけだぁ。』
『あく・・・ま?』
旦那の掠れた声に私は一喝する。
『あなたっ!!』
妙に確信めいた男の言葉に旦那がたじろぐのが許せなった。男の言葉に怒りを覚えるならともかく、その言葉に気持ちが揺らぐなんて信じられなかった。
だから、今度は旦那をぶん殴った。男と違って旦那は思いっきり吹っ飛ぶ。
『悪魔だから、なんだっていうのよ!!たとえ、悪魔だってこの子は私とあなたの子よ!?』
『す・・・すまん。』
『すまんじゃないわっ!』
妊婦の私に呆気なくやられた旦那は、呆然と私を見上げている。
死ぬほど情けないと思った。

しかして、そんな私たちを黙ってみてた男は腹を抱えて笑いだす。
『おもしれー夫婦だなぁ。まあ、いい。どうせ腹からでてこなきゃ、俺もその悪魔をどうこうできるわけじゃねえ。今日は挨拶に来ただけだぁ。だが、覚えておけ?その悪魔はいずれ俺様のもとに必ず下る運命だ。千年前と同じようになぁ。』
『千年前?』
尻もちをついたままに呆然としていた旦那が、その言葉に反応した。

『おうよ。そいつは千年前に万象の天使の翼を切り落とした伝説の悪魔ヴォルツィッタの生まれ変わり。この世界で異端とされた魔力を持つ最悪の悪魔だぁ。』

『？』

そして、何を言っているかさっぱり意味は不明だったが、言いたいことは全部言ったのか男は高笑いを残したままに直後に灰色に溶け込むように、まるでそれまでのことが幻だったかのように忽然と消えた。

瞬間に灰色だった空間も消え、後には私たちと廃墟だけが取り残された。

「――ぁーさんっ！ぎぶ・・・ギブだって！！！」

しかして、過去の回想に浸っていた私は息子の悲鳴のような叫びで我に帰った。

「あ・・・ごめん。」

「ごめんじゃないだろっ！息子を殺す気かよぉ！？」

顔を真っ赤にして、涙目になっている様子を見れば本気で苦しかったらしいことがわかる。

「あはは、あんたが可愛いからつい力がはいちゃって・・」

「だからって、限度つーもんがあるだろ！」

へへと笑うと、倍くらいの勢いで文句が返ってくる。（まあ、子供の怒鳴り声など可愛らしいものだけど）

「まあ、ヒロ。いつものことだろ？」

そして、フォローになっているようで、全くフォローになっていない旦那の言葉。

姿かたちは旦那そっくりなのに、そんなのらりくらりとした旦那に対して怒りを露わにしている息子はどっちかというと私に似ている。

そうして、私はあれから7年もたっているのに全く変わった様子もない旦那を見て、再び過去の記憶が蘇るのを感じた。

『ササラ、体は大丈夫か?』

男が消えて力が抜けた私に旦那は気遣わしげな様子を見せる。

『・・・大丈夫じゃないっ!』

訳が分からなかった。

ものの数分。いや数十秒くらいの出来事に、これほど自分が動揺しているのが嫌だった。

それに、そんな自分に対してあんなことがあった後なのに、いやに冷静な旦那も気に入らない。

こいつは本当に私たちの子供のことをどう思っているんだと、そんな苛立たしい気持ちのままに私は声を荒らげた。

だけど、旦那はそんな私と一緒には興奮しないで、そっと肩を優しく優しく抱いて私を落ち着かせようとしてくれる。

『すまない。君一人に頑張らせてしまったな。私は君の夫失格だ。』

『・・・っふ』

どうせ、どんなに彼が情けなくても、興奮のあまり涙が止まらなくても私は旦那を拒(こば)めないのだ。

だって、こんな優しげで、愛おしい声を拒否できるはずがないでしょ?

『でも、君に殴られてよかったよ。おかげで目が覚めた。いきなり、この子が悪魔だなんて言われて私も驚いたんだなぁ。』

そういって、どこか笑い声を滲ませながら、私がずっと守るようにしてお腹を抱えいた腕にそっと旦那が手を添える。

『そうだよな?たとえ悪魔だろうが、この子が私たちの子供であることには変わりはない。大事な大事な私たちの子供だ。私たちが守ってやらないといけないんだよな?それなのに、私は本当に情けな

い・・・ごめんな。許してくれるか？』

『ばかっ・・・』

夫の言葉に涙がさらに増える。私はそれを気がつかれないように旦那の胸に顔を埋めた。

そう、この子が、ヒロが悪魔だろうが、悪魔じゃなかろうが私たちがヒロの親であるということに変わりはない。

この子が愛しい愛しい我が子である事実は消えないのよ。

現実に帰ってきた私は、私に向って頬を膨らます息子をそう思いながら見下ろす。

そして、そもそもこんなに愛らしい悪魔がいるわけがないじゃない――――そう自分に言い聞かせて、無理矢理に自分を納得させる。

ヒロが悪魔だという、何の根拠もない思い出すだけで胃がムカムカするような男の言葉。

何度あれを夢か幻にしてしまおうと思ったことか・・・でも、何もないことにするにしては、あの男の存在は私たちにとってあまりに強烈なだった。

だから、私たちはあの男の言った僅かな手がかりを元に、悪魔という存在やあの男について調べることにしたのだ。

もちろん、それは男のことを知りたいわけじゃなくて、次に男が現れてヒロを攫おうとしたときの対処法を考えるためだ。（まあ、学のない私にはさっぱり分からないことなのでその辺りは旦那にまかせっきりだけど）

だけど、それを調べていることはヒロに教えていないし、ヒロには悪魔や男にまつわることには何一つ関わってほしくなくて、何もかも内緒にしてる。

そして、そんな努力が功を奏したかはわからないけどヒロが生ま

れて7年が経つけれど、あの男が再び現れる気配はない。
だけど、時々こうやってふいに思い出してしまうの。
振り返れば、男がヒロを連れて行ってしまいそうな気がして怖くて怖くて仕方がない瞬間がある。
だから、こうして時々ヒロがいることを私は体全体で確かめずにはいられない。

「おかーさん？」

そうして、黙り込んでしまった私をヒロが気遣わしげに見上げてくるのに笑顔を返す。
私に似て怒りっぽい割には旦那と同じようにやさしいのか、単に気が小さいだけなのか周囲の変化に敏感な我が息子。
彼が悪魔なのかどうか私たちには確かめようがない。
ただ、一つはっきりしているのは、あの見ているだけで気分が悪くなるような男の下僕になる人生などを、この愛し子に背負わせたくないということ。

「何でもないわ、ヒロ」

だから、私たちは彼から全てを隠し、遠ざ、祈り続けるしかない。
古い言葉で『何一つ持たない者』という意味を持つその名前の如く、ヒロには何の束縛も柵（しがらみ）もない人生を送ってほしいと私たちには願うことしかできないのだ。

閑話　何一つ持たない者（後書き）

少しペース早めの更新でお送りするヒロの母親視点の閑話。いかがだったでしょうか？ヒロの母親ササラさんですが、この話だけでは表現しきれないんですがかなり気の強い女性です。多分、ヒロが気の強い女性が苦手なのは彼女の影響があるんでしょうね（笑）さて、次はヒロの恋人ユイア視点の閑話ですが、思ったより長くなりそうなので前後編に分ける予定です。これもできるだけ早く更新できたらいいなと思っております。

そして、その後が少し悩んでいるところで第四部に入ってもいいし、ここはいつかすると言っていた全然進んでいない加筆修正を進めるべきか、はたまたずっと温めてきた千年前の戦いを描いた番外編を始めようか・・・と選択肢がいくつかありまして・・・。作者は優柔不断で中々方向が定まらないので、何かご意見を是非ともお聞かせください！そして、最後に４月に入ったら、少し忙しくなるので更新ペースは遅くなると思いますが、どうか見捨てずにいてください。ご意見・ご感想もお待ちしております！それだけが、執筆を続ける私の心の支えなので（笑）

閑話　貴方のためだけに私は歌う　前編

♪そこに、貴方はいるのでしょうか？
私には貴方が見えないのです

貴方、道に倒れていないでしょうか？
貴方、誰かに傷つけれていないでしょうか？
貴方、未来を見失っていないでしょうか？

ああ、貴方のことを思うだけで心が引き裂かれそう
私は貴方のことだけを思って、眠りにつきます
せめて、貴方の夢を見れるように・・・

昔、貴方が上手いと言ってくれた他愛もない恋の歌は、今はもう貴方にとって呪いの歌のようになってしまったかもしれないね。
貴方は知らないけれど、本当は誰よりも近くにいるのに永遠に触れ合うこともできない私と貴方。
永遠に焦がれ続ける互いの思いが、いつの間にか美しいあの思い出を憎くい悲しい残像に変えて貴方を苦しめ続けている。
なのに、私はこの歌を歌うことをやめられない。貴方を苦しめたいなんて思っていないのに、やめられないの。
・・・ううん、きっと違うね。
むしろ私の死によって優しい貴方が私を永遠に忘れなければいいと、その苦しみが大きければ大きいほどに、それが貴方の愛の証に違いないと愚かな私は思っていた。
そして、貴方のことを信じきれずに『彼女』の口車にのせられて、あの時の私はそんな醜い妄想に囚われて貴方を裏切った。

――――だから、罰があたったのね

貴方が涙を湛えて私に告げてくれた愛の言葉を聞いて、私は驚きと嬉しさに愕然(がくぜん)とした。

そして、こんな形で私の死という最悪の思い出で貴方を縛ったところで、お互いに苦しくて悲しくなるだけだと、これでは私も貴方も幸せになどなれない。むしろ、貴方の人生に私という影が醜く残るだけじゃないかと、そんな誰でもわかる結果に私はやっと気がついた。

・・・でも、それは全てが終わった後で何もかもが遅かった。

そして、私は永遠の闇の中で貴方を思って届かない歌を歌うことしかできなくなった。

いつでも貴方の傍にいるというのに貴方の声も体温も感じられない闇の中で、貴方が幸せかどうかも知ることができず、ただ貴方のことを想い続け歌い続けることしか私はできない。

でもね、今は私・・・後悔していないよ。

それは、自分の間違いに気がついたときは胸を掻き毟(むし)るくらいの後悔の感情に支配されたけれど、それでも最後に貴方の心に触れることができて、私は死の瞬間も貴方を純粋な気持ちのままに、ただ貴方の幸せを願っていられたから。

――――だからね、貴方に永遠にあえなくなっても、ただ貴方を想っていられるだけで私は幸せよ・・・ねぇ、ヒロ？

【貴方のためだけに私は歌う】

両親がいないくて、貧しいくて、生きることで精一杯・・・そんな不浄の大地（ディス・エンガッド）には五万といるだろう平凡な娘の一人。それが私、ユイア。

だから、ごく一般的なアーシアンと同じように私は自分自身しか信じることができず、自分が生きるためだったら他人なんてしったこっちゃない・・・そんな風に思って生きてきたし、その生き方に何の疑問も抱いたことはなかった。

だけど、私は一人の男に出会って違う生き方もあるんだということを知った。

そして、同時に誰かを信じることの幸せとそれに伴うその人の強さを知った。

その人の名前はヒロ。

――私が短い人生の中でたった一人好きになった人

『人間、騙すより騙されろ。相手を恨む気持ち悔しい気持ちはあるが、だからってそれで相手を仕返しをして苦しめて自分が後味悪くなるのは嫌だからな。』

彼がそう言ったのは、さる人物に騙された直後のこと。

結構ひどい目にあったはずなのに、それでもそう言ってバツが悪そうに笑う顔は別に大してカッコいいというわけじゃない、どこにでもいそうな凡庸な青年。

話を聞けば貧乏くじばかりを引いてきた如くのその人生。

だけど、そんな目にあってばかりなのに、それでも見ず知らずの他人が困っていれば面倒だと言いながらも必ず自分のできる限りで人を助けたりして、本当に馬鹿なのかお人よしなのか分からないようなヒロ。

『私は父親が何を調べていたか知りたい。でも、これは私の問題だ。ユイアには話を聞かせてもらえただけで十分感謝しているよ。』

そのくせ誰かに助けられたりすることにはどうにも抵抗を感じるらしく、変なところで頑なで不器用な人。

ヒロの傍にいると心が暖かくなった。幸せな気持ちになった。

そんな彼を好きになったことを私は自分が世界から消えるその瞬間まで、いいえ、世界から消えた今でも後悔したことは一度だってない。

さて、ヒロと出会ってそんな感情を持つまでに至った私だけど、思い返してみても彼との出会いは特に何か運命的なものがあったわけじゃなかった。

それは町の宿屋で働いてた私と、その客としてその宿屋に滞在したヒロという平凡すぎる出会い。

ヒロは彼の父親がずっと調べ続けていたことを知りたいと言って、私が住んでいる町の近くにある亡国の廃墟（ドルガバ・チェシエ）にやってきたと話していた。

そして、その場所にまつわる昔話を私が知っているというところから私たちは親しくなった。（実は最初にヒロがその話を聞きたいと言ってきたときは、下手なナンパかと思ってかなり邪険に扱ったりしたけど）

最初は町の外のことを知っているヒロに興味があっただけ。

だから、ヒロに昔話を教える一方で私も負けじと彼を色々と質問攻めにして、それに対してヒロは一見ぶっきらぼうそうに見えるけど、どうやら押しに弱いのか面倒そうにしながらも私の疑問に丁寧に答えてくれた。

そして、そんなやり取りの中でヒロの見せる不器用な笑顔や優しさ、今まで出会ったことのない種類の人間であるヒロに私は気がつ

けば恋心を持つまでになっていた。

でも、彼は流離人（さすらいびと）と呼ばれる定住をしない一族・・・、調べ物が終われば町を出て行ってしまうことを知っていた私は彼にこの気持を打ち明けることを躊躇（とまど）った。

ヒロと一緒にいたい気持ちは苦しいくらいに私の胸の中に存在している。

だけれど、だからって町の外は死の世界だと教えられて育った私にとっては、彼と一緒に不浄の大地（ディス・エンガッド）を旅することは彼に気持ちを打ち明けることを躊躇（とまど）わせれるのに十分な要因だった。

それに例え私が彼をこんなに想っていたところでヒロの気持ちが分からなくて、それもまた私を不安にさせる。

気持を伝えて断られたら？

想いが通じ合ってもその後、私たちはどうなってしまうの？

そんな自分の中で悩んだところでどうしようもないことばかりを考えて、私は気持をヒロに気持ちを伝えないまま、いっそ、ヒロに対するこの気持がなくなってしまえばいいのに・・・そんな思いすら抱いた。

まあ、だからってこういう類（たぐい）の感情は理性で制御できるわけがなく、相反する気持ちの中で、ヒロと一緒にいると嬉しいのに苦しい気持ちが私の中で渦巻いていた。だけど・・・

「君が好きだ。だから、私と一緒に生きてほしい。」

て、ヒロに一言そう言われたら、あんなに悩んでいたくせに何の躊躇（とまど）いもなくすぐに私はそれに頷いていた。

結局、頭で色々考えていたってヒロと一緒にいたいという気持ちが何よりも私の中で強かったということなのだけれど、自分で自分に思わず呆れた。

ヒロと一緒に生きていくことに不安がないわけじゃない。でも、

それよりもヒロと一緒に生きていくことに喜びを私は感じてたんだと思う。

――――きっと私は誰よりもヒロを愛している

気持ちを尺度で測ることなど神様にだってできることじゃない。だけれど、この時の私の中にはそんな根拠のない確信が過り、ヒロと心を通じ合わせたことが本当に人生で何よりも素晴らしいことだと感じていた。

――――なのに・・・どうして？私は何を間違ったのだろう？

動かない体に剣の突き刺さった左胸からは痛いくらいの熱を感じているのにそこに吸い取られていくように冷たくなっていく体温。その体温と比例するかのごとく、急速に動かなくなっていく体は叫びたいくらいの戦慄を感じているのに何一つ言葉にできない。意識ははっきりとしているのに、何一つ自由にならない体に私は愕然とした。

・・・どうして？

口を開き私を見てみっともないまでに涙を流すヒロを慰めてあげなくちゃいけないのに、どうして私は何もすることができないの？それにどうして、ヒロはこんな顔をしているの？何が悲しいの？私はただヒロとずっと一緒にいたいから、ヒロの中の『彼女』に勝ちたいから自分の身を貴方に捧げるのよ？全ては私が望んだことなのよ？

そして、これが私たちが幸せになるたった一つの方法じゃない。

なのに、どうしてヒロは泣くの？

「ユイアを・・・お前を・・・・あ・・・い・・・してるんだっ！
だから、失いたくないのに・・・ど・・・してっ！！！！」

その言葉を聞いて私は初めて夢から覚めた様な気分になった。
そうだ、私はずっとヒロと一緒にいたいと思っていた。
でも、それはこんな形じゃなかったはず、こんな風に彼が泣いていても抱きしめてあげられもしないなんて・・・嫌っ！
ずっと、そう思っていたはずなのに私はどうしてこんなことになっているの？
その時、私は初めて自分が犯した間違いに気がついた。
ヒロにそれを訴えたくて溺れた人間のように口をパクパクさせるが、動かない私の体はヒロに何も伝えてはくれない。

――――ああ、このままじゃヒロが私のために永遠に悲しむことになるっ！

それだけは嫌でなんとかヒロに自分の心を伝えたい、せめて最後に一言伝えたいと思うのに、体はどんどん生気を失っていくように冷たく固まっていく。
悔しさと悲しみに涙が出た。
そして、涙に滲(にじ)む視界の先にヒロだけじゃなくて別の人物の影が過(よぎ)った。
その人影を見た瞬間に、剣の刺さった冷たい胸に怒りの炎が燃える。

「今更、後悔しても遅いわ。」

その人物は私にしか見えないのか、ヒロを通り抜けて私の傍(かたわ)らに

立つ。
「――（誰のせいでっ！）」
言いたいことは山ほどあるのに、今の私には何も伝えるすべはない。
ただただ、心の中で怒りと憎しみの感情を募らせるだけしか私にはできない。
そう。こんなことになったのは全てはこの美しい女の天使のせい。
そして、その口車に乗ってしまった私のせい。
私はただただ口惜しく、その天使を睨みつける。
それに対して天使は美しい笑みと底知れぬ冷たさを湛えた瞳で、私を見下ろしていた。

閑話　貴方のためだけに私は歌う　前編（後書き）

ヒロの恋人ユイアのお話。本編でいくつか意味不明だった彼女の行動の意味をここで明らかにできたらと思っています。後編は少し更新が遅れるかもですが、ご容赦ください。

ちなみに今回のサブタイトルは『第４９話誰がために君は歌う』と対な感じにしてあります。

閑話　貴方のためだけに私は歌う　後編

全ての過ちの始まりはヒロに告白をされた夜に見た夢。
目が覚めても決して忘れ得なかった鮮明なその夢の中で、私は一人の美しい女性の天使に出会った。
純白の翼、亜麻色の髪、白い肌、スミレ色の瞳。
何もかもが美しく輝くその姿に私はうっとりと見とれ、その美しさによく似合った優しげな微笑みに心を奪われた。
だけれど、その美しき天使は私に唐突に残酷な言葉を突きつける。

「ねえ、貴方の愛する男にはすでにその胸に愛しい人がいる。」

――――・・・え？

「あら、知らないの？貴方は所詮『彼女』の身代わり。じゃあ、どうして彼は翼（エヴァ）を求めているかも知らないのね。」

――――それはお父さんの遺志を継いで・・・

「ふふふ、そんな嘘を信じていたの？考えてみなさいよ、翼（エヴァ）は人間の願いを叶えてくれる存在よ？普通は願いがあるからこそ探すものじゃなくて？そして、彼の願いはただ一つ愛する女に逢うことだけ。」

――――ヒロは私のことを好きだっていったものっ！
何が何だか分からずに進む話の中で置いてきぼりにされていた私だけど、それでもたった一つだけ譲れない思いがあったから、私は叫んだ。

「そうね、生きている者の中では貴方が一番かもしれないわ。でもね、死者も含めたらどうかしら?その中で貴方は一番彼に愛されている存在かしら?」

――死者?死んでしまった・・人?

「そう、彼が愛する『彼女』はもう既に死んでいるわ。『彼女』は彼のために命を賭した。彼が肌身離さず持ち歩いている黒の剣(ローラレライ)こそがその証。黒の剣(ローラレライ)に眠る大いなる力を彼に与えるために『彼女』はその命を捧げた。」

――自分の命を・・・?

「そう。力を得るための対価が命そのもの。そして、彼を救うため彼女は躊躇いなく黒の剣(ローラレライ)でその心臓を突き刺した。・・・貴方、それだけの愛に、命すらも躊躇いなく捨てた『彼女』に勝てると思っているの?」

――あ・・・ああっ

「そして、それだけの愛をもらっていてあのお人好しの男がそのままにしておくと思っているの?ここまで言えば分かるでしょ?彼は『彼女』を蘇らせるために翼(エヴァ)を求めているの。父親の遺志を継ぐなんて真っ赤な嘘。彼は貴方よりも愛おしい『彼女』を――」

――いやぁぁぁぁっ!!!!

「ヨミガエラセヨウトシテイルノヨ」

そして、私は目を覚ました。
破裂しそうなほどに高鳴る心臓の音と荒い息遣いが耳触りで、怖いくらいにかいている寝汗でべっとりと肌着が張り付いてしまっているのが酷く不快だった。
「な・・・に?今のは・・・ゆ・・め?」
起きてみればいつもと変わらぬ貧しくも見慣れた自室。何もかもがヒロに告白されて幸せなままに眠りについた時と変わりないのに、どうしてあんな夢を私は見たの?
今の夢さえなければ、愛する人と気持ちを通わせたという幸せの絶頂にいるはずの私。
だけれど、幸せすぎるということは不意に人を不安にさせる。
こんな幸せがいつまでも続くものか、そもそもこれは本当に現実なのか、そんな取り留めのない不安が私を蝕(むしば)み・・・それが私にこんな夢を見せた?
そして、その不安は夢の中の言葉すらも私に現実味を持たせてしまった。だから、私は尋ねずにはいられなかった。

「・・・ねえ、もし本当に『翼』があったら、ヒロは何かお願いすることがある?」

「そうだな・・・、別に今はないな。」
そのまっすぐな言葉を信じていればよかった。
「本当?」
そう聞き返してはならなかった。
「誰かに会いたいとかないのっ!?」「私は、ヒロとずっと一緒にいたい。」
そう言って私はヒロを疑ってはならなかったのだ。
そして、巡る巡る疑心や不安は次第に私の思考能力を奪い、気が

つけばまるでマインドコントロールにでもかかってしまったかのように私はあの夢の中の天使の言葉を信じてしまっていた。

異端の扉の先で私を守るために囮（おとり）となったヒロ。それを呆然と見詰める私の前に再び現れた天使。

彼女は夢の住人ではなったの？それとも、これは夢？

そして夢の時と同様に私のことなどお構いなしに天使は唐突に話し出す。

「彼を助けたい？じゃあ、自分の胸を黒の剣（ローラレライ）で突き刺しなさい。そうすれば貴方の命を代償に神がヒロに力を与えるでしょう。更に貴方はもれなく『彼女』と同じことをしたことになり、彼の中で『彼女』と同等になることができるわよ？」

後から冷静になって思えば、どうしてこんな信じられないような提案に乗ったりしたのだろう？

まあ、確かにあの時のヒロが目の前で今にも巨人の手に叩き潰されてしまいそうな状況において、私には天使のその言葉に縋（すが）るほかはなかったのかもしれない。

だけれど、それだけだった？

うん、分かっている。本当はヒロを助けるというよりも、天使に洗脳されていた私には天使の言った後者の提案の方が魅力的だった。

ヒロの中の一番になれる。『彼女』に勝てる。

その事の方が、ヒロを助けることよりも遥かに自分の命を捧げるための理由だった。

――本当に泣きたくなるくらいあの時の私は愚かだった

そして、私は自分でも呆気にとられるくらい何の躊躇いもなく天

使が差し出す黒の剣（ローラレライ）を受け取っていたのだから。
「さあ、黒の剣（ローラレライ）で自分の胸を貫くのよ。そうすれば貴方の命がヒロに大いなる力を与える。更にあの巨人も死ぬわ。」
「どうして？」
「あれは灰色の魔力に汚染された哀れな巨人族。黒の剣（ローラレライ）に眠る黒の魔力を引き出せば、灰色の魔力は消滅し巨人も消えてなくなるというわけ。」
「ふーん、そうなの。」
自分で聞いてくせにあの時の私は気がつけば、自分が発した疑問よりも手の中にある黒の剣（ローラレライ）が気になって仕方がなかった。
これはヒロを縛る『彼女』そのもの。だけれど、これからは私が『彼女』になることができる。
それこそが何よりも正しいことだと信じ、私はよほどヒロに告白された時よりも幸せに包まれていた。
だって、そうでしょ？
ヒロに告白されて彼と生き続けていても未来はどうなるか分かったものじゃない。だけれど、ヒロに一番愛されたまま死ねば私は彼の中で永遠に一番愛されたまま生き続けることができる。そんな醜い愛が私の中で渦巻いていた。

だけれど、それはヒロの気持ちを置いてきぼりにした、あまりに独りよがりな愛の形・・・私はそれにやっとヒロの言葉を聞いて涙を見て理解することができた。

でも、それはもう後戻りができなくなった後、その時になって私はこの目の前の天使に自分が騙されたことを知ったの。
「ふふっ、これで悪魔の体は黒き神もの。でも、心配しないでヒロと黒き神の間に結ばれる契約が果たされれば、貴方の願いもちゃんと聞いてあげるから。」
そう。天使の目的は私の愛の成就などではなく、ヒロの体をどう

にかすること・・・詳しくは分からないけど何にしても楽しい話じゃないのはすぐにわかった。
ヒロのため・・・ううん、自分のためにしたことでヒロに何かあったりしたら私は悔やんでも悔やみきれない。
だけれど、天使の告げた言葉に証拠にもなく私は揺らぐの。
「（私の願い？）」
声は無論出ない。だけれど、天使には私の考えていることが分かるらしい。
「ヒロと黒き神の契約が結ばれたとき、貴方は所詮はヒロに契約を結ばせるための駒にすぎないけれど、それに見合った対価はあげるわ。ヒロは永遠に貴方を思い続ける、貴方以外はヒロは愛せなくなる。貴方が望めばそういう願いも聞き届けられるようになるでしょう。どう、嬉しいでしょ？」
要するに私の命を使って黒き神という存在にヒロを売り飛ばす代わりに、私にヒロの心を永遠に暮れるということだと思う。
――確かにちょっと前ならば、飛び上るほどに嬉しかったかもしれない
だけれど、ヒロの涙を目の前に私がそれを望むなんてこの天使は本当に思っているの？
だから、できることならば私は力の限り首を振りたかった。
でも、それすら生きる力が失われようとする私にはすることがかなわない。何もかもがもどかしく自分の不甲斐なさに涙が滲む。
――こんな最後は嫌！こんな思いを残したままに自分の命が終わるのは、ヒロの最後の目に留まる自分が！！！
『黒き契約の前に立つ貴方。貴方の願いは何？』

しかして、天使のほかに聞こえてくる声。
「（けいや・・く？）」
体の中に響いてくるような優しげな声。実態はない。だけれど、不思議と恐怖はなかった。
『私の黒の契約を司りし黒の剣（ローラレライ）。剣に命を捧げ契約の履行を求める貴方。さあ、貴方の願いは何？』
だからかもしれない、死の恐怖や天使に対する悔しさなど様々な感情が溢れていたはずなのに私の心はすぐに静けさを取り戻し黒の剣（ローラレライ）に次の言葉を告げていた。
「（ヒロに貴方の力をあげて！）」
『あら？心配しなくても貴方が彼のために命を捧げたという行為だけで彼には力が与えられるのよ？それが黒の一族と黒き神との契約だから。だから、貴方は貴方の願いを言えばいいわ。』
「（違う！私はいいの！！ううん、私の願いがただそれだけなのよっ）」
難しいことは分からない。けれども、黒の剣（ローラレライ）の言うことも天使の言うことも私は何一つ信じられなかった。
信じれられるのは自分の中にあるこの願いと、目の前でかすみつつあるヒロの涙だけ。

「ユイアァァ！！！！」

耳に聞こえる彼の胸が張り裂けてしまいそうなほどに切ない慟哭（どうこく）すら私にはもう遠い。

――ごめんね、ヒロ。本当はずっと一緒にいたかった

『本当にいいのですね？願いを聞き届けるのはたった一つ。貴方は自分の恋人の心を永遠に自分のものにしておくことを望まなくてもいいのですね？』

この声はもしかしたら『彼女』なのかもしれない。天使の言葉を信じるならばヒロが一番愛している『彼女』。

だから、きっとこんな事を言うんだろう。自分がしたことを私がしないことを不思議がっているようなそんな声色のような気がした。

だけど、もういい。

「（ええ。私の願いはヒロを助ける力の解放だけ）」

確かにそれを願えばヒロを永遠に私のものにしておくことはできるかもしれない。でも、それによってヒロはきっと永遠に苦しむことになる。

そんなことは絶対いやだと、ヒロの涙見て気がつくことができたから。

だから、そうならないためには私の願いはこれしかない。

そして、私の願いは聞き届けられた。

私の命を引き換えにヒロは黒の剣（ローラレライ）の力を得て、私は黒の剣（ローラレライ）の中で永遠の闇の中に取り込まれることとなった。

そのことに後悔はない。

ヒロの姿を見ることも感じることもできないことは悲しいけど、だけれど誰よりも彼の傍いられることは私の幸せだから。

――でも、たった一つ気になることがある

それは私は願っていないはずなのに、ヒロの心が未だに私にとらわれて本当に幸せになっていないということ。

そして、黒の剣（ローラレライ）とは別の大きな力と共にヒロの中に目覚めたもう一人のヒロの存在。

そのもう一人の存在のせいでヒロがだんだんと薄くなっているのを感じる。このままじゃ、ヒロ自体の存在が消えてしまう予感がした。

だけれど、こんなにそばにいるにも関わらず、もう私にはヒロに何一つしてあげることは叶わない。

だから、私には永遠の闇にとらわれながら、願い続けることしかできないのだ。

――――誰でもいいからヒロを助けてっ！！！

そう、血の涙を流しヒロを思って歌い続けながら・・・

閑話　貴方のためだけに私は歌う　後編（後書き）

ユイア視点終了です！こんなんでまとめきれいるか不安ですが、いかがでしょうか？ユイアは黒の剣の中でヒロを見守り続けているんですね。ヒロはそれをあまり感じていないようですが・・・、未だにすれ違い続けている二人です。いつか、この二人にも報われる日がきたらいいな・・・とは思っているんですが、さてどうでしょう？次回は第三部のあらすじとかです。プラス毎回お送りしているあてにあらない第四部の予告をお送りしたいと思っていますのでお楽しみに！（ほんとに当てになっていないんですよね。すいません（笑））

■　第三部　あらすじ・登場人物・用語（前書き）

【注意】ここから先は第三部のネタバレを含みますので閲覧にはご注意ください。

■　第三部　あらすじ・登場人物・用語

◆第三部　あらすじ◆

天使の領域（フィリアラディアス）からエンシッダたちに銀月の都（ウィンザード・シエラ）と呼ばれる過去の人間文明の空中都市に連れて来られたヒロは、そこでエンシッダと未来を予言できるというヴィ・ヴィスターチャから、一連の事象が彼らによって決められたことだったと知り愕然とし怒りを覚える。しかし、突如天使たちが人間の都・罪人の巡礼地（アークヴェル）を襲撃しているという情報が入ったために、ヒロは彼らから話をそれ以上聞くことができず、そこにいる人々を助けるためにティアたちとともに戦いの中に飛び込むこととなる。（第４９～５６話）

そして、罪人の巡礼地（アークヴェル）でヒロはティアと女神（イヴィスタン）の十字軍（ディード）の少年ケルヴェロッカと共にエンシッダが天使の領域（フィリアラディアス）から攫ってきた白き神イヌア・ニルヴァーナを守りながら、天使たちの襲撃により炎上した都の中で封印された『灰色の花園』を訪れる。そこで白き神を奪い返すために待ち伏せをしていた万象の天使たちに襲われる。しかし、そんな中でヒロは過去の幻影に囚われ、一人忽然と姿を消す。（第５７～６１話）

５年前、ヒロは病死した父親の意思を継いで罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）という名の亡国（ドルガバ・チェシエ）の廃墟を訪れ、そこでユイアという名の娘と恋仲になった。しかし、『異端の扉』と呼ばれる手がかりを前にしてユイアを異次元に連れ去られ、彼女を助けるために自分の命すらも犠牲にしようとした。しかし、ユイアはヒロを守るために黒の剣（ローラレライ）で自らの胸を刺し、その力を解放することでヒロを助けた。そのことはヒロに大きな悲しみを残した。（第６２～６８話）

そして、そのかつての恋人ユイアの幻影に導かれ一人、灰色の花園の奥に進んだヒロを迎えたのは黒き神ウ・ダイ。白き神によって封印されている彼は、ヒロがかつての自らの下僕であった悪魔ヴォルツィッタであると告げ、ヒロに自らの封印を解くことを要求した。しかし、ユイアの死が黒き神の策略によるものであることを知ったヒロは黒き神に襲いかかり、その中で灰色の魔力に目覚め次第にその魔力に飲まれ自我を失ってしまう。（第６９～７３話）

一方、ヒロがいなくなった後にらみ合いを続けていた万象の天使エヴァンシェッドとティアたちであったが、突如として起こった灰色の魔力の暴走により混乱に陥る。ティアはエンシッダに命令されたいたとおり白き神を連れてすぐさま罪人の巡礼地（アークヴェル）を逃げるのだが、その最中三大天使の一人、蒼穹の天使シェルシドラたち天空騎士団（アイッシュ・グランド）に出くわし追われることとなる。しかし、ケルヴェロッカの力により逃げることに成功し、その報告を受けたエンシッダは急ぎ撤退を命令する。（第７４～７７話）

そして、灰色の魔力の暴走の原因を探ろうと一人花園の奥に進んだ万象の天使であったが、彼はそこで自らが封印したはずの黒き神と悪魔に体をのっとられてしまったヒロに出くわし混乱する。しかし、悪魔により黒き神は消え、同時に彼は花園から弾き飛ばされる。悪魔の言うとおり天使たちを連れてすぐに罪人の巡礼地（アークヴェル）から逃げた万象の天使だったが、その直後、一瞬にして都が無に帰すという異常事態を目の当たりにすることとなる。（第７８～８１話）

◆第三部　登場人物◆

【人間陣営】

ヒロ

過去に『異端の一族』と呼ばれていた黒き神の下僕とされる黒の一族の末裔。万象の天使エヴァンシェッドの片翼の封印を解いたことにより、様々なことに巻き込まれている。

しかし、第三部により彼がかつてエヴァンシェッドの翼を切り落とした悪魔ヴォルツィッタの生まれ変わりであることが発覚。ヒロは悪魔に体をのっとられたまま第三部を終了。今後、彼がどうなるのか作者もわからない状況である。ちなみに、その名前は『何一つ持たない者』という意味がある。

エンシッダ

『嫌がらせの君』で知られた（？）悪意と不敵に満ちたエンディミアンの長。現在は天使たちに反旗を翻し（ひるがえし）、空中都市銀月（ウィンザード・シエラ）の都で人間たちの長として天使たちを敵対の意思を見せている。

白き神イヌア・ニルヴァーナに忠誠を誓い、未来を予知できる少女ヴィ・ヴィスターチャを使って自分の思い通りに世界を動かしているようだが、その目的やその行動の理由は未だに謎に包まれている。一見、好青年で人当たりはよさそうだが、それは全て演技。腹黒の性悪。

ティア

エンシッダの配下の人間。女性ながらに大きな剣を振り回し人間であるにも関わらず魔力を有しており、エンシッダからも一目を置かれていようだが、その正体は謎が多く残るところ。

赤い瞳が印象的で作者のイメージとしてはアジアンビューティーな感じだが、その中身は相当きつくてがさつ（笑）ただ、ケルヴェロッカに対する彼女の感情を見てもらうと分かるが、母性は強い。

ヴィ・ヴィスターチャ

エンシッダの傍らに立つ未来を見ることができる少女。造りもの

のように目を見張る美少女だが、感情の見えない冷たい印象しか誰にも与えない。

ケルヴェロッカ

まだ十代の前半であろう幼子だがエンシッダの配下の中でも女神（イヴィ）の十字軍（スタン・ディード）と呼ばれる軍事集団の一人。神の子（マイマール）と呼ばれる特殊な魔力をもつ人間だが、神の血（ニス・ドゥア）の謎などその存在はよく分かっていない。

愛犬ロッソといつも一緒で戦闘においては彼を巨大化させている。子供ながらに白き神の護衛を任されるほどに強いが、中身はまだまだ子供である。

ハクアリティス

エンディミアンの女性。ヒロたちに対しては自身のことを『天使の花嫁』であると名乗り、エヴァンシェッドの妻であると主張している。しかし、第三部で彼女の死体が灰色の花園にあり、ラインディルトに異常に怯えている様子などが見られるなどの多くの謎を残す。美しい女性だが、非常に我儘で自分勝手。

ハレ

女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）の一員。

その中心的人物らしく、神の子（マイマール）たちの指揮や統率をエンシッダには任されている。

ヒノウ

エンシッダの配下であった黒の槍（アルヴァトーレ）を有していた黒の一族。『であった』というのは、第二部で彼はすでにヒロ暗殺に失敗し天使に囚われたため、エンシッダによってすでに殺害されているから。しかし、彼の死の真実は伏せられ、名誉ある殉職扱いになっている。

ユイア

５年前に黒の剣（ローラレライ）の力を解放するためにその命を自ら絶ったヒロの恋人。詳しくは閑話『私は貴方のためだけに歌う』を参照してもらいたいが、彼女の決断によりヒロは黒き神と下僕関係を結ばされずにすみ、彼女は死してなおヒロを見守り続けている。しかし、ヒロは未だに彼女を思い悲しみに縛られ続けている。

ササラ

１０年ほど前に亡くなっているヒロの母親。詳しくは閑話『何一つ持たない者』を参照して頂きたいが、悪魔と名指しされて生まれてきたヒロの行く末をとても憂いていた。ちなみに最後まで出てこなかった『旦那』こととヒロの父親の名前は「エンザ」という。

【天使陣営】

エヴァンシェッド

白き神の加護を受けた天使の長たる万象の天使。純白の翼を持つ、男にしておくには勿体無いほどの絶世の美男子で、そのためかはわからないがエンシッダや黒き神など厄介な人物たちから目の敵にされている。本当の名前は『ヨイ』というらしいが、その名前は捨てたらしい。

シェルシドラ

三大天使が一人蒼穹（そうきゅう）の天使。青い翼をもち、金髪に碧眼という派手な容姿をしているわりには割と親しみやすい人物。天空騎士団（アイッシュ・グランド）第二師団の団長であり、天使の中では最強と謳われるほどに強い。

ラインディルト

三大天使が一人　大地の天使。赤い翼をもつ、かつては天使族の王族であったが、現在はエヴァンシェッドに忠誠を誓っているとさ

れている。しかし、現在は天使たちから離れ銀月の都（ウィンザード・シエラ）におり、エンシッダと通じている模様でどうにも謎な部分が多い。

ジグラッド
　赤味がかった翼をもつ、実は天空騎士団（アイッシュ・グランド）第一師団の団長。彼を見たティアに『デカ』と愛称が付けられるほど大きな体をしており、見るからに強そうな容貌をしてるがその強さは未だ未知数。

ディアス・オーレ
　青味がかった翼をもった天空騎士団（アイッシュ・グランド）第二師団の副団長。シェルシドラの実弟で金髪の長い長髪が印象的。

マリアーナ
　茶色っぽい翼をもつ天使。ディアス・オーレと同じく第二師団の副団長。シャオンとは犬猿の仲のようで喧嘩が絶えないらしい。ティアが愛称をつけたように、絵に書いたようなキツネ顔。（ちなみに実は名前だけはディアス・オーレとともに第一部あたりで出ていますが、お気づきでしたか？）

シャオン
　赤味がかった翼をもつ第一師団の団員の一人。ヒロやティアが言っているように非常に露出をした服装をしており、子供の教育上あまりよろしくない姿をしてる妖艶な天使。

【その他】

白き神イヌア・ニルヴァーナ
　生命を司る白き魔力の源である神。神殺しを行った黒き神を封じるために千年前、天使たちとともに彼を封印した後は神のゆりかご（アシェッダ）

にいたが、エンシッダの誘いにより現在は人間たちの手の中。エヴァンシェッドに懸想している様子だが、行動には矛盾ばかりで何を考えているかいまいち分からない。

黒き神ウ・ダイ

死を司る黒き魔力の源である神。千年前に神殺しをしたことにより、白き神の名のもとに天使たちに封印された神。この世で唯一灰色の魔力を使うことができる異端の一族を従えており、彼の封印を解除するためにはその灰色の魔力が必要らしくヒロを付け狙っている。

神という割には姿はとてもみすぼらしく柄が悪い。言葉を汚く伸ばすようなしゃべり方をする。

悪魔ヴォルツィッタ

千年前にエヴァンシェッドの翼を切り落とした黒の一族。しかして、そのために白き神の逆鱗に触れ罪人の巡礼地（アークヴェル）にて処刑されたと言われている。その処刑は魂すらも破壊されるという処刑の中でも最も重い刑であり、その場所は未だ異端の扉により封印され巨人によって監視され続けているなど、あまりにその存在は特別視されており彼の存在については多くの謎が残る。

◆第三部　用語◆

魔力

神によって与えられた天使たちが有する特殊な力。人間は持ってないことが通常。源とする神によってその色は変化する。しかし、ヒロが持つ灰色の魔力だけはその源が何者なのか分かってない。故にその魔力は異端と呼ばれ、ヒロの先祖である一族は異端の一族と呼ばれいた。

異端の一族
　千年前に灰色の魔力を有していた一族。しかし、灰色の魔力に体を蝕まれ痛みを抱えていた一族は黒の神に助けを乞い、神の下僕になることでその痛みから解放されたという。そんな経緯から黒の一族とも呼ばれ、それは現在の流離人につながっている。

黒の武器＜カシュケルノ＞
　黒き神と異端の一族の契約の証。黒き神の力の結晶であり、その力を得ることで灰色の魔力の苦痛から解放され、また、それのためにその力を黒き神のためにしか使うことを許されなくなった。７つの黒の武器があり、それと契約するためには使用者の大切な人の命を捧げなくてはならない。

封印されし異端＜エルヴァナンド＞
　異端の扉の先に広がっていた異次元。

異端の扉
　罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）の隠し部屋にあった悪魔ヴォルツィッタを処刑する際に使われたといわれている開かずの扉だったが、黒の武器に反応して５年前に開いた。

罪人の処刑台＜ディッチ・ア・ヴァリス＞
　千年前に神と天使に逆らう人間を処刑するだった場所。

亡国の廃墟＜ドルガバ・チェシエ＞
　千年目に滅びたかつては栄華を誇っていた人間の文明の残骸。現在はその残骸にアーシアンたちが住み着いているケースも多々ある。

銀月の都＜ウィンザード・シエラ＞

巨大なる空中都市。亡国の廃墟の一つ。現在はエンシッダらに占拠され、人間たちの天使たちと戦うための拠点となっている。その中央には月見の塔＜ミュージ・アシェタ＞と呼ばれる中央塔がある。

罪人の巡礼地＜アークヴェル＞
アーシアン最大の都。千年前は黒き神の都だったらしい。

灰色の花園
罪人の巡礼地に封印されていた全てが灰色という異常な花園。灰色の魔力が封印されていた場所らしいが、その一方エヴァンシェッドの妻の遺体が聖櫃に納められていたなど、謎が残る場所。

神の子＜マイマール＞
エンシッダの配下の中でも女神の十字軍＜イヴィスタン・ディード＞と呼ばれる集団に属している人々の総称。神の血＜ニス・ドゥア＞というものを有しており、その力は未知数。

ウァブーシュカ
悪魔曰く世界の理を守るためのドデカイ怪物。どうやらその力のために罪人（アークヴェル）の巡礼地は一瞬にして消滅した模様。

◆第四部　予告◆（注）非常にあてになりません。

この世界から跡形もなく消えた罪人（アークヴェル）の巡礼地。その後、人間と天使たちの間にはしばし沈黙の時が流れる。
しかして、それはすべてが嵐の前の静けさ。

『これが・・・天使の正体？』
明らかになる真実

『全ては我が愛し人のために』
愛が狂気に変わる瞬間

『獣の王に謁見を求める』
新たなる存在の予感

『あの始まりの場所へ！！！』
そして、世界はついに動き出す

はたしてヒロは生きているのか？
人間と天使の戦いの行方は？
さまざまに絡みつくそれぞれの思惑は、果たしてどこに向かおうとしているのか？

多くの謎を抱えたままその一端を明らかにする第四部（予定）は、そのうちお送りします！

■　第三部　あらすじ・登場人物・用語（後書き）

これで本当の意味で第三部は終了しました。ここまでお付き合いいただいた読者の皆様お疲れ様でした！ありがとうございます。いくらか用語などにも注釈を付けてみましたが、まだほかに何か分からないものなどありましたらお気軽にご質問していただけると勉強になります！

さて、さんざん悩んできた今後ですが・・・、第四部をのんびり更新しながら、並行してのんびり加筆修正を進めていこうかな？と思っております。番外編も考えていたんですが、まあ、あまり色々と手を出して収集をつけれなくなるのも怖いので本編にめどが立ったら・・・ということで（果たしてそんな日が来るのかわかりませんが）なので第四部の更新などは今よりもかなり遅くなる可能性がありますが、頑張って更新していきますのでどうぞこの作品を見捨てずにいて頂けると嬉しいです！今後ともよろしくお願いいたします！！

第８２話　声が聞こえる

気がついたとき私はたった一人で世界に存在して、頭を抱えていた。
何もかもがめちゃくちゃだ・・・私は何だ?私はどうしたらいい?
もう何もかもが分からない。
こんなことになった全ての始まりは、何だった?

ハクアリティスを助けたことか?
それともエヴァの封印を解いたこと?
いや、ユイアを失った罪人（ディッチ・ア・ヴァリス）の処刑台だろうか?

――違うよ

何処かから声が聞こえた。
軽やかなで男とも女ともとれるような綺麗で透きとおった声。
誰もがその声に耳を傾けその声の言うとおりにしてやりたくなるような、あまりに魅力的な声。
だが、私はその声に強烈な吐き気を覚えた。
理由は知らない。
ただ、声がいかに魅力的で素晴らしいものだと頭では理解できているのに、生理的に受け付けない・・・そんな感じだった。
そして、その声の主を振り返った私のその思いは、更に強いものになる。

【声が聞こえる】

「――ヴォルツィッタ」

そこにいたのは年端もいかぬ少年、そして声と同様に非常に魅力的で愛らしい姿をしていた。

大きな瞳に誰もを魅了してしまうような天使の笑顔・・・、だが、それ以上に感じるのは普通の子供がもちえないはずの色気とでもいうのだろうか、何故だか抗えないような力。

それを前にして私の理性が「逃げろ」と叫んでいる一方で、その少年をどこかで見たことがあるような感覚にとらわれた。

「お前は誰だ？」

そして、気がつけば明らかに子供に対するものではないような低い声で私は少年を威嚇していた。

「何言っているの？僕だよ！――だよ？ヴォルツィッタがつけてくれた名前じゃないか！」

少年は私の言葉にひどく驚いたような顔をして、私の威嚇など気にした風でもなくおどけた様にいいながら頬を膨らませる。

「私はヴォルツィッタではない。」

「・・・冗談は一度だけにしてよ。」

だが、私が否定の言葉を口にすれば一転して少年の纏う空気がガラリと変わった。

禍々(まがまが)しいような、こちらが息をするのも苦しいくらいに威圧的な何かが生まれる。

「僕がどれだけ貴方のことを待ち続けてきたと思っているの？ずっと、ずっと傍にいてくれるっていったのに、貴方は僕を置いて行ったっ！！！」

叫びがまるで力を持った針の如く私を襲った。

形をもたぬその力に私は思わず片膝をつき、そこでやっと私は自分がいる場所の異常さに気がついた。

――見える限り全ての世界が灰色に染まっている

どうして今まで気がつかなかったのだろう。
見渡す限りのすべてが灰色・・・ここはまるであの灰色の花園や異端の扉の先にあった封印された異端と同じではないか。
そこで私はあらためて自分がここにいることの異様さにも気がつく。
そうだ、私はあの灰色の花園で黒き神と対峙していたはずだ・・・
それから、体から湧いてくる力に翻弄されて記憶がぷっつりと切れている。
だが、そんな私の戸惑いなど少年には関係ないらしい。
「だから僕はもう貴方をどこにも行かせないよ。貴方は僕とずっと一緒にいるんだから。」
激昂は一瞬にしておさまり、次いで出たのは囁くような誘うような少年の声。
魅力的なその声に私の意識が何かに溶かされるように、思考力を失っていくのを感じた。
しかし、それとは対照的に少年のものとは思えない強い力で腕を引かれ、同時に体の中に強い衝撃が走る。

――――・ぁ・・・・た・・・

心臓を鷲掴みにされたような鈍く強烈な痛みに霞む意識の狭間で、微かに私の頭の中で響く声。
「お願い。僕の傍から離れないで。」
少年の気配を近くに感じれば感じるほどに大きく強くなればなるほどに痛みは増し、朦朧とする意識はグワングワンとかき回され私の思考は更に失われてゆく。
このままじゃ私が私でなくなってしまう・・・、先に黒き神によって目覚めさせられた灰色の魔力に思考が飲み込まれていった時と同じ感覚が私の中から湧いてくる。

「僕は貴方のもの。貴方は僕のもの。」

しかして、その言葉と少年の笑いを含んだ声を聞いた瞬間に、私の意識が一瞬にしてクリアになった。

更にフラッシュバックするように視界いっぱいに飛び込んできたの映像――それは大きな血走った目玉の化け物。そして、私はそれと目が合って心の底から湧きあがるような恐怖に支配された。

「！」

しかし、それは瞬間に掻き消え、代わりに頭をかき回されるような朦朧(もうろう)とした意識が鮮明になることで私は少年を力の限り突き放す。

「・・・ヴォル・・・ツィッタ？」

まさか、突き放されるとは考えもしていなかった少年は呆然と私を見上げ、私は痛みと混乱に息を荒らげながら少年を見下ろす。

「だから、お前は何だって聞いているだろ？！私に何をした！！」

八つ当たりだとは分かっていても痛む体も訳の分からないこの状況も、何もかもがこの少年のせいにしか思えない。

声を上げながら網膜こびりついた映像の残像を振り払うように顔を掌で覆いながら頭を振り、痛む胸をもう片方の掌で押さえた。

そんな私にそれまで余裕綽々(よしゅうしゃくしゃく)に見えた少年の表情が揺れる。

「なに・・・て、僕はただ貴方と一緒に――」

「私は誰のものになる気はない！！」

そして、気がつけば相手はいたいけな少年だという前提はすでに消え去って、私は怒りに似た感情のままに力の限り怒鳴り散らしていた。

もちろん、怒りには理由がある。

「私は私のものだ！」

誰かの所有物になるなんて聞いただけで吐き気がした。

そうか、私がこの少年を生理的に受け付けないのは、少年の頭に

そういった考えがあるからなのだと痛む体を引きずりながら私は思った。

しかして、その理由が分かれば不思議と冷静さを取り戻せた。

「私は罪人だ。だが、私は私だ。罪を償うのも誰と一緒にいるのも、私の全ては私が決める。お前に決められるものなど何一つありはしない。」

――愛しているわ、ヒロ

――僕を忘れないでね

脳裏に浮かび上がる私を置いて行ったユイアとエヴァ、大切な二人の最期。

大切な人、一人守りきれない私は決して幸せになることなどないだろう。

だが、それでも二人は私に生きろとっていくれたのだ。

私として生きること、二人を忘れずに罪を背負って生き続けることが私の贖罪。

だからこそ、少年の言葉は私が決して受け入れることなどできやしない最低最悪の言葉なのだ。

誰かのものになる、誰かの言う通りになる。

それはそれで楽で幸せな道なのかもしれないが、それは罪人である私が決して受け入れてはならないもの。

そして、それだけではなく私という根本とも決して交わらない思考。

だから、気がつけば私は無情に少年に告げていた。

「消えろ。」

私の言葉に泣きそうに歪む少年の顔。

「ヴォ――――」

冷静に告げる私に乞うように少年が手を差し伸べる。そして、それを手酷く振り払う。

しかし、その反面で少年の悲しげな表情に動揺する私がいた。
少年にこんな言葉を告げたくない。もっと、優しくしてやりたい笑顔にしてやりたい。
そんな嫌悪とは相反する気持ちが過るのだ。ありえない感情の同居に、自身のことが分からなくなる。
この少年を前にして灰色の魔力とは異なる感覚で自分が自分でなくなる様が怖かった。だから、告げた。

「（頼む！）私の前に二度と現れるな。」

そう。言葉はもし言われたら自分でも泣きそうになるほど冷酷な言葉なのに、心の中では少年に祈るように告げていた。
少年が何者かも、自分が今どういう状況なのかも分からず、少年に対して強烈な嫌悪感を抱いているにも関わらず、私はそんな感情のままに少年を突き放した。
そして、私の祈りが届いたのか知らないが、ひどく傷ついた顔をしたまま少年はまるで蜃気楼（しんきろう）のように灰色の空間の中に溶けるようにして消えていった。
ほう・・・と、思わず息を吐く。
「い・・・」
だが、少年が消えてなお残る痛みが安堵した体に強烈に戻ってくる。思わず蹲（うずくま）る私。
胸の痛みは少年が消えたことで、さらに増したようにさえ感じた。

――――本当に私は一体どうしてしまったのだろう？

世界のことなど何も分からないままに自分の考えだけで自分の人生を生きてきた。
それでも幸せになりたいと、大切な守りたいと力を求め、だけど何一つ守れず私はまるで自分と周りを傷つけるだけの時間を過ごし

てきた。
いっそ、このまま痛みに身を任せこの灰色の空間にまぎれて静かに眠りにつきたい・・・、痛みに気弱になった心が私にそんな風に呟く。
だが、私の罪がそれを許しはしないのだ。
私は俯(うつむ)いた顔を上げると胸を押さえたまま再び体を起こし、少しでも状況を把握するために辺りを見回した。

「よう。」

そして、少年が消えた今、誰もいないはずだった空間に新たなる登場人物の声が聞こえた。
振り返る私。
そこには見覚えも特徴もない、どこにでもいそうな平凡な若い男が立っていた。
だが、見覚えはなくとも私はそれが誰だか瞬時に理解した。

「あんたが悪魔ヴォルツィッタ・・・か。」

そして、男の方も私のことをしっているのだろう、私の言葉に肯定の意を示すように口元だけで笑いを作った。
その笑い方は何となく自分と似ているなと思ったが、その他は私と何一つ共通点も見当たらない男。（まあ、何の特徴もないって辺りは共通点といっていいのか？）
だが、それでも私はこの男が悪魔だとわかるのだ。
多分、これが同じ魂を共有しているということなのだろう。いや、普通は同じ魂を共有していたらこんな風に相見えることなど叶わないはずだ。
だが、このときの私はそんなことなど考える頭もなく、ついて出た自分の言葉に確信を持っていた。

「ああ。一応はじめましてってことになるのか？お前にはえらい迷惑をかけているな。ヒロ」
「全く。おかげで厄介事ばかりだ。」
皮肉を返してみたものの、不思議と何故だか彼を責める気持ちは私にはなかった。
「だが、可哀そうだがお前はこれらかも厄介事ばかりの人生だ。」
「どういう意味だ？私がお前の生まれ変わりだからか？だが、私にはそんなもの関係ないだろう？」
だけど、そう言われては思わず眉を顰めてしまうというものだろう。（私は厄介事引受人じゃないんだぞ！）
だが、悪魔は私に予言のように確信めいた言葉を告げるのだ。
「もちろん、それもある。だが、俺の生まれ変わり・・・それだけが理由じゃない。さっき、言ってたろ？お前がお前であること・・・まさにそれがお前が世界の『楔』たる所以。そして、それ故にお前はその運命から逃げ出すことだなどできない。」
エンシッダが同じような事を言っていた。
だが、『私が私であることが世界の楔たる所以』？そんな謎めいた言葉は理解できなかった。

「俺の言葉が理解できないか・・・まあ、まだ今はいいさ。お前はアイツに決して屈することがなかった。それこそが、俺が求め続けてきた世界の『楔』である証拠。さあ、お前はもう現実世界へ帰れ。ここは俺や黒き神がいるべき場所だ。」

「アイツ？あの少年のこと――な・・・にっ！」
勝手に納得して話を打ち切った悪魔に追いすがる私。
しかして、ぐいっと体を引かれるような感覚・・・次いで悪魔が視界から遠ざかってゆく。
灰色だけの視界に次第に様々な色が混じり次第に白い光へと姿を変える。そして、その中で悪魔の声が聞こえた。

「だから、頼む。どうか俺の罪を、世界の罪を・・・お前が断ち切ってくれ。」

その言葉がどういう意味かはこの時点で私が知るはずもないことなのだが、意味など知らずとも厄介事の匂いがぷんぷんするその言葉に私は気持が酷く重くなるのを白い光に溶けゆく意識の中で感じていた。

第８２話　声が聞こえる（後書き）

久しぶりに書くヒロ視点の話で第四部開始です！まあ、プロローグ的な話なのでなんのこっちゃといった感じかもしれませんが、そのあたり次回からまた明らかになってゆく予定です。
しかし、やっぱりヒロ視点の方が何かと物語を進行しやすいような気がします。さすが主人公！しかし、第四部はヒロ以外にも色々な視点で物語が進行していく予定ですのでよろしくお願いします！

追記（撤去した◆お知らせ◆をここに残しておきます。第四部と加筆修正は並行して行う予定です。）
０８．４．１２から前々から告知しておりました通り加筆修正を開始いたしました！
サブタイトルも変わっていますが、どこまで進んだかは第〇話のところを見てもらうとわかりやすいと思います、加筆修正が終わってない方は漢数字・終わっている方は普通の数字になっています。
しばらくは第４部の更新よりも加筆修正を優先させていきたいと思っていますので、もし第４部を楽しみにしていた方には申し訳ないのですが、加筆修正でいくらか内容も変更しようかと思っていますので、お暇なときにでもここが変わっているとか探していただけると嬉しいです。
また変更したことによる感想などもお待ちしております。

第８３話　後ろの正面だあれ？　１

後ろを振り向くことなど幾度となくあった
大切な人を失う度、弱い私は過去という名の後ろを振り返った

両親・ユイア・エヴァ

振り返ったその先には、私の人生の中の極僅かなる大切な人たちがいる
彼らと目が合うたびに懐かしさと切なさに胸が詰まる思いがする
失いたくなかった、でも守り切ることができなかった
この人たちのためなら命など惜しくなかったのに、私の命のために散っていった人たち

――忘れないで、生き続けて

愛おしくも、呪いの如き彼らとの約束が私を優しく束縛する
だけれど、ふと彼ら以外の視線を感じた
顔が見えるくらいの距離にいる彼らと違い
目を細めた先に、ぽつんと一つ立っている人影が目に入る
これまで何度となく後ろを振り返ってきた人生を送ってきたが、あんな遠くに誰かいるなど一度として気がついたことはない

――誰だ？

遠すぎて性別すら判別できない人影
しかして、ここには私にとって大切な人しかいないはずだ
思い当たる人がなくて私は両親たちの横を通り抜け、その人のもとへ一歩足を踏み出そうとする

だが、その私の視界を誰かが手で塞いだ

――エヴァ？

その気配の正体は誰だと問うまでもなかった
よく知る気配、そして私の眼を覆うこの小さな柔らかい少年の手は彼以外に考えられない

――だあれだ？

そして、聞こえてくるその舌っ足らずなしゃべり方が、私の想像を確信へと変える
なのに彼は自分がだれかと私に問う
更にふふふと私の視界を塞いだままに笑う彼の気配が、どことなく私の知るエヴァとは違うような気がして、私は何となく不安になった

【後ろの正面だあれ？】

眠りから覚醒へ促される時に感じる僅かに体が浮上するような感覚。
だけれど、長い間眠りについていたような気がするのに酷く重い体と頭を私は不思議に思った。
「――――う・・・」
瞼（まぶた）を開こうとしただけで呻くような声が漏れ、その声を出した僅かな振動だけで体が酷く痛む。
自分のものではないように体が重く、そして熱い。
覚醒したばかりの思考は全くもって動こうとはしないが、ただい

つもと違うということだけは理解した。

――――・・・長い夢を見ていたような気がしたが、何も思い出せない

そして、不意に記憶を辿ろうとして唐突に罪人(アークヴェル)の巡礼地での悪夢のような出来事にを思い出し、私は無理矢理に体の底から力を振り絞るように眼を開き体を起こした。

「・・・こ・・・こは?」

出した声は自分のもとは思えないほどに掠(かす)れ、自分がとても喉が渇いていることに気がついた。

次いで目を開いても輪郭のぼんやりとしていた視界のピントがあい、確かなものになっていく。

――――この場所には見覚えがあった

薄暗く、湿気があって、硬く、狭く、冷たい・・・誰だってこんなところで眠りたくはないだろうというだろう場所どう見たって牢屋・・・だよな?

ここ最近どうにもこの場所に縁があるなぁと、痛む体に集中できない思考の中で考える。

「ヒロ!お前っ、ヒロなのか?!」

しかし、そんな私に唐突にかけられたのは耳が痛くなるほどに大きな声。

ぼんやりしていたこともあり、私はその声にびくりと体を思わず震わせる。

「~~っ」

しかして、体をほんの少しだけ震わせただけで全身に激痛がはしり、私は声なき叫びをあげて蹲(うずくま)った。

「大丈夫か?!」

声の主は唐突に蹲(うずくま)った私に驚いたような様子を見せるが、私と人物を隔てる鉄格子に遮られて私に近寄ることは叶わない。

だが、それでも俯(うつむ)いた私の視界には、鉄格子ごしにその人物の靴が目に入った。

それを見て、一つ声の主に思い当たる節を見つける。

先が汚れたどうみても女性には見えない、それどころか男にしても大きな黒い靴。

そして、一瞬分からなかったがどこかで聞いてことのあった、やたらと大きく粗野な声。

私はそれを確かめるべく痛みの余韻が残る体に負担がなるべくかからないように、もう一度起こす。

そして、想像通りの人物と目があった。

「アラシ・・・」

そう、黒の雷(オルヴァラ)のリーダーである彼は、私とそう年は変わらないはずだが、どうみても老けて見える毛むくじゃらのおっさん面を心配そうに、だが、どことなく驚いているような、緊張しているような様子で見下ろしていた。

現状は分からないが、とりあえず、こんな顔で彼に見下ろされる覚えのない私は彼の様子に困惑を感じる。

しかし、同時にとりあえずは自分がまだ生きていることと(こんな牢屋みたいな場所で、おっさん面が出迎えるあの世なんて私は認めない)、人間たちの中に帰ってきたことに安堵した(実は牢屋だとわかって、一瞬天使たちにまた捕まったかとも考えたのだ)。

――だけど、待てよ?

そこまで思考を進めてから、私は改めて自分の知り得る現状を整

理した。
人間たちの中に帰ってきた私が、どうして牢屋に入れられているんだ？
一応、仲間・・・というのも微妙なところだが、とりあえず罪人（アー）の巡礼地（クヴェル）では人間軍の一員として戦った（まあ、途中からそんなこと頭になかったが）のに、その私が牢屋に入れられなければならないんだ？？
その疑問をせっかく都合よくアラシがいるのだと、彼に聞かないのは嘘だと思い口を開こうとした私だったが、それよりも先にアラシの方が言葉を発した。
「・・・本当にお前はヒロなのか？」
しかも、そんな意味不明な言葉。

――――私が私じゃなかったら、誰だっつーんだ

思った言葉は声にできず低い唸り声になるのみ。だが、顔に思いっ切りそう出ていたのだろう。
私の言いたい事を汲み取ってかアラシは、僅かに強張っていた表情を緩めほっと息をついた。
「良かった。もう、二度とヒロには会えないのかと思ったぞ。」
繰り返される理解できない言葉に私はただ眉を顰（しか）めるが、そんな私にもアラシはおっさん面をただ不器用に微笑ませた。

「お前は悪魔に体をのっとられてたんだよ。」

アラシは私の帰還といっていいか分からないが、私の目覚めを一通り喜んでくれるとそう言って意識がない間の事を私に掻い摘んで話してくれた。

「罪人（アークヴェル）の巡礼地からエンシッダ様直轄の精鋭隊に連れられて銀月（ウィンザード）の都（シエラ）に戻ったお前は人間じゃなくて獣だった。」

そんな抽象的な言い方では分からない。

少し落ち着きはしたが未だ痛む体が億劫（おっくう）で面倒で牢屋の硬い壁に体をぐったりと齎せながら私は視線だけでアラシに話の先を促す。

「目を血走らせて、獣みたいに唸り声をあげ、世の中全部を破壊しそうな勢いで、お前はただ魔力を溢れさせて暴れまくってたよ。俺が束になっても敵わない精鋭隊が１０人がかりで抑え込むのがやっとの様子だった。そんな状態のままじゃ銀月（ウィンザード）の都（シエラ）は壊滅だ。そうさせないためにお前はこの魔力を抑え込む牢屋に入れられたって訳だ。そんで、３日間・・・今、こうしてお前が理性を取り戻すまでお前は寝食をすることもなくこの牢屋の中で暴れまくってた・・・まあ、記憶がないっつーなら信じられんかもしれないがな。」

これがもし黒き神との記憶もないというのなら、自分の中から灰色の魔力が出てきたあの感覚を覚えていないというのであれば、そんな話は信じられなったに違いない。

だが、あの時に感じた自分が自分でなくなる感覚を思い出せば、そうなる自分というものが想像できないわけではない。

そして、更にこの酷く重く痛む体の説明まで付いてしまうってもんだ。

だって3日間も眠ることもなく魔力を溢れさせこの牢屋の中で暴れまくっていたというのであれば、それも納得せざるを得ないだろう。

「そして、俺はこの牢屋の前でお前の監視をエンシッダ様に命じられた訳だが、話ではお前はお前の中に眠る悪魔に体をのっとられて二度とヒロに戻ることはないって聞いてたからな。思わずお前はヒロかって聞いちまったわけよ。だって、悪魔が外に出るための演技をしているかもしれないだろ？」

牢屋の中で暴れまくっていた悪魔になり果ててあ私が急に静かになったんだ。

そりゃ、アラシも警戒するわ・・・というか、牢屋からすぐに出してくれない所を見ると、まだ私だと信用しているわけではないのだろう。

「・・・それで、罪人（アークヴェル）の巡礼地はどうなった？」

そうして、とりあえずの現状が理解できれば（まあ、悪魔どうこうとか私の体のことは分からんが）、気になるのは黒き神の憎々し顔と過去の悲しい思い出。

肝心のところで切れている記憶に舌打ちをしたい気分だが、あの後、はたして私は黒き神に勝つことができたのだろうか？

まあ、その辺りはアラシに聞いてもわかるまい（私を連れてきたというエンシッダ直轄の精鋭隊という人物たちならわかるかもしれないが）。

だが、私は少しでも記憶が切れた後の事を知りたくて尋ねたのだ。

しかして、返ってきたのは思いもよらぬ答えだった。

「罪人（アークヴェル）の巡礼地は消えた。」

「？天使たちに破壊されたってことか？」

意味は何となく理解できたが、何となくその言い方に含むところを感じて私は首を傾げた。

そして、その違和感は当たっていたようで、アラシは私の問いに言葉を重ねる。

「俺にもよくわからねえけど灰色の塊みたいなのが街を襲ったかと思ったら、エンシッダ様から撤退命令が出て、そんで街を出たかと思ったら一瞬ものすごい衝撃があって、それで街ごと跡形もなく消えた。まるで、世界からあの街だけが抉（えぐ）り取られたみたいに存在そのものが一瞬にして消えたんだ。」

「消えた・・・」

アラシの説明はよく理解できた。

恐らく灰色の塊というのは、黒き神というか私の影響だというの

はおぼろげながらに想像がついた。
しかし、それによって街が壊滅状態になったとかなら可能性はなきにしもあらずだが、街ごと存在自体が跡形もなく消えるなど、一体何がおこったというのだろうか？
天使たちの新兵器か何かだろうか？
それとも、私の記憶が途切れた後に黒き神が何かをしたのか？
だが、色々と考えを巡らせる一方で、私はこれに似た話ををどこかで聞いたような気がした。

――ヒロちゃん、呪われた街はどうなったの？

熱ももった体が急速に冷めていくのを感じた。
思い出したのはかつてエヴァと訪れた街での出来事・・・そうだ、あの街も『消えた』。
罪人の巡礼地（アークヴェル）がどんなふうに消えたかはわからないから、断定はできないが少なくとも過去訪れたあの街も『消えた』と表現されるような終わり方をした。
過去との思わぬ符号に痛みだけではない眩暈を感じ、嫌な予感に背中に冷たい汗が伝った。
だが、感じる予感に対して確証はない。
ましてや、考えていることが本当だったとして、だからってどうして自分がそれに怯えを抱いているのかも分からない。
しかして、自分に絡みついていく幾重もの柵（しがらみ）や偶然が気がつけば大きな一つの鎖となっているような気がしたのだ。
今は何が何と繋がっているのかも分からない。いや、もしかしたら、それはただ臆病な私が感じる錯覚なのかもしれない。
でも、今の私はそれが錯覚であろうとも、そう感じてしまう自分が怖かった。

第８３話　後ろの正面だあれ？　１（後書き）

第四部本格始動です。
アラシは第三部では登場してませんでしたが、第二部の流れのままに一応銀月の都にはいました。罪人の巡礼地でも闘っていたんです。さて、これからヒロがどうなるのかも気になるところですが彼が言っている『消えた街』というのは、実は番外編『異邦の少年　亡国の遺産』に出てきている街のことです。番外編も見なくても本編を読み進めることに問題はありませんが、ご興味がありましたらご一読いただけると本編の謎のヒントがあるかもしれません。

第８４話　後ろの正面だあれ？　２

「おー、なんかボロボロだな。」

体中に残った傷跡を見下ろされながら妙に明るく能天気に言われれば、どうにも最近怪我をすることが多かったなあと、上半身の衣服を剥(は)がされ実験台のようなものの上で他人事のように考えた。

思い返してみると黒の影・ヒノウ、万象の天使に三大天使、おまけに黒き神までとここ最近普通に考えればありえない人物たちと戦ってきたのだ。

――――いや、戦ってきたというよりは何とか生き残ったって感じか

何一つ得ることもなく、ただ失い消耗し続け、そして自分だけが取り残されたように感じる最近の一連の出来事を思い出し、私は疲れた笑みを浮かべる。

それを見て私をボロボロだと評した人物が不思議そうな顔をした。

「思い出し笑いかい？いやらしいなぁ。」

私を覗き込む白衣を着たその人物は透けるような青い髪に、空を閉じ込めた様な瞳をもち、見るからに可憐で愛らしい・・・男。

あの後、色々な事を考えすぎるあまりに何も話さなくなった私を置いて、指示を仰ぎに行くといったアラシは帰ってくると、エンシッダの命令だと私を牢屋からそのまま何処かに連れ出した。（体が辛くて一人歩くことも出ず、恥ずかしながらおぶってもらった）

てっきりエンシッダのもとかと思いきや（そこで色々聞きたいこともあったのに）、銀月の都(ウィンザード・シエラ)の中心にそびえる月見の塔(ミュージ・アシェダ)までは想像した通りだったが、私の思惑に反しアラシが私を連れていったのはその地下に広がる実験施設のような場所。（見た瞬間に白き神(イア・ルマ)の御許(ンヌ)の生態兵器研究所を思い出して胸糞悪くなった）

そして、その場所で私を迎えたのがこの一見美少女然としたこの男。

もし、私をおぶったままにアラシが

「あれでもれっきとした男だ。女と間違えるとめっちゃ怒るから気をつけろよ?」

とぼそりと言ってくれなかったら、間違いなく女性と思い込んでいた。(アラシはどうも間違えて怒られたらしい)

しかして、その白衣を纏った女性のような男・アオイはアラシに命じて私を冷たく硬い実験台の上に乗せると、様々な機械のようなものを取り付けて、私を見下ろしながら先ほどの会話に至る。

「うるさい。・・・ところで、私の何を調べているんだ?」

いつもの私ならこんな風に無断で自分のことを調べられるなど許さずこの場を振り切るだろうが、歩くこともままない今の状態ではアラシが監視するように横にいることもあり不可能だろうことは明らか。

ならば、せめて自分の何を調べているかくらいは知りたいというのが普通だろう・・・まあ、現状で何を調べたいかなど想像するに難しくないのだが。

「もちろん灰色の魔力のことさ。」

あっけらかんと想像通りの言葉を告げるアオイにアラシがぎょっとしたような顔になる。

「おいっ!」

「いいじゃないか、言ったところで歩くこともできない彼には何一つできないだろ。それに自分が何をされているか分からないと彼も不安だろう。」

「だが、エンシッダ様には極秘に調べろと・・・」

おいおい、だからて調べる本人にも秘密にするのかよと思ったが、エンシッダの何を考えているか分からない顔を思い出して、あいつならそうするだろうと考え直す。

だが、アオイはそんなエンシッダの思惑もアラシの困惑も可憐に無視する。

「責任は俺がとるよ。俺はこれからの研究のためにもヒロには俺を信用してほしいんだ。」

「研究？」

訝(いぶか)しむ私にアオイは女性のような顔をさらに柔らかく微笑ませた。

「ああっ！俺は長いこと魔力の研究をしてね。色々な研究をしてきたが、君の持つ灰色の魔力にこそ俺の研究の答えがあるような気がしているんだ。だから、君にはこれから俺に協力してもらうよ。」

誰がと瞬間に思って言い返そうとしたが、こんな状態では言ったところで笑われて終わりなだけだ。

私は言葉を飲み込むように押し黙る。

だが、そんなことをしてもアオイには私の思っていることなどお見通しらしい。

「誰だって自分のことを研究されるなんて嬉しくないだろうけど、でも、君だって見知らぬ力が自分の中にあるのは嫌だろう？」

そう問われて思うのは灰色の花園で感じた自分が自分でなくなるあの感覚。そして、つい先ほどまで記憶すらないという私の暴走。

黒の剣(ローラレライ)にも感じていたことだが、自分で制御できない力など自分の力ではない。

暴走するだけの力など自分の身を滅ぼすだけであると、私は知っている。

「俺が研究を進めれば、きっと灰色の魔力を制御する方法だって見つかるさ。そうすれば君だってこんな体を動かせなくこともなくなるぞ？」

「やはり、この体の痛みは暴走のせいなのか？」

私はアオイへの返事を先延ばしにするために問いに問いを重ねた。

アオイの言うことはもっともであり理解できるが、こんな状況では如何(いかん)せんそう簡単に決断などできない。（まあ、私の意思などほとんど無視されているようではあるが）

しかし、アオイはそんな私の思惑など分かっているのか、一瞬だけ苦笑したがすぐに私の問いに答えてくれた。

「まあ暴走のおかげで俺は君には指一本触れてない状況だったからね。確かなことは言えないけど、君の今の状態は魔力の大きさに体が耐えられなかった時の天使や神の子（マイマール）とよく似ている。可能性としては暴走した魔力に君の体が耐えられなかったというのが高いと思うよ。特に初めて魔力を使った訳だからね、君の体はまだ魔力には慣れていないだろうし。」

「黒の剣の力（ローラレライ）を使ったときは、こんなことにはならなかったが？」

あれだって魔力の行使に他ならない。

だが、こんな体を全く動かせないような状況は今まで一度だって経験したことはなかった。

「あれは君の魔力ではなく、剣に宿っている黒き神の力を使っているにすぎない。それに対して灰色の魔力は君自体から発せられている魔力だ。根本的に両者は別物だと考えた方がいい。」

なるほど魔力を研究しているというのは本当らしい。

問いに対して淀みなくスラスラと答えてくれるアオイに私は関心しながら、さて、この男に自分を託していいものか思案した。

恐らく自分一人であの魔力を制御するなどは無理な話だろうと思う。（何しろ魔力を出したら私という存在自体が消えてしまうのだ。そんな状態で制御しろというのが無理な話だ）

ならば魔力の制御云々言うよりは、それ自体を始めから使わなければいい話ではないかと、そちらの方がよほど現実的な話ではないかという考えが一瞬頭を過（よぎ）る。

――その灰色の魔力こそが俺を解放させ鍵だぁ

だが、同時に思い出すだけで吐き気がするような黒き神の姿を思い浮かべて、その考えに頭を横に振る。

これは勘だが、あの醜悪なる神がこのまま私の力を諦めるなど思

えなかったし、自分の記憶が切れてからのことは依然として何一つ分からないままだが、あの神がまだ自分を狙っている予感がするのだ。

――そうまるで見えない背後から、いつも見られているような落ち着かない感覚が、目覚めた今でも私の中に確かにある

そして、いざ再び黒き神と見(まみ)えたとき、私は果たして黒き神に切りかからない自信があるだろうか？

そう考えてすぐさまにそれを否定する。

だって、この世の中の誰を許せても私はあいつだけは決して許せないだろうという確信があった。

そして、そう考えたとき、果たして私は黒き神に勝てるのだろうかという問いが頭を過る。

だが、それもまたすぐに自分の中で否定的な答えが浮かぶ。

灰色の花園で戦ってみて私と黒き神との実力には埋めきれない差があったのは疑いようがない。

所詮は神と人間なのだ。

戦う前から勝負は決まっているようなものなのかもしれない。

――それでも、私はユイアのため・・・いや、私は私のためにあの黒き神に戦いを挑まないとならない

誰に強要されたわけでもないが、その思いだけは揺らぎようがなかった。

黒き神を倒したところでユイアが返ってくるわけでもなく、その後に何も残らないことも、全てを忘れて黒き神から逃げ続けることだってできることだって知っている。

これが復讐という名のつくものなのかもわからないが、ただその結果が誰一人幸せになるものでないことは知っている。

それでも何度思いなおしてみても、私は黒き神を許せないのだ。
そして、あの神と対等に戦うためにはあの神の力を宿した黒き剣(ローラレライ)で鼻から勝負は決まっている。
新たなる力がきっと必要になる。
そして、私の心はきまった。

「いいだろう。アオイ、あんたに協力しよう。」

――この時の私は自分の中に眠る灰色の魔力のことを何一つ分かっていなかった

「そうこなくっちゃ。じゃあ、俺はちょっと色々用意してくる。ヒロとアラシはここで待っててくれ。」

――この魔力の真実も、どうして自分の身にこの力が宿っているのかも

「いいのか？」
だから、アラシが気遣わしげに私を見下ろしているのにも安易に答えられた。
「ああ、今の私には力が必要だからな。」
「力・・・」
「言っとくが別に私はだた力が欲しいわけじゃないし、アラシみたいに人間を守りたいから力が欲しいって言ってるんじゃないからな。」
妙に深刻そうな顔になったアラシに言ってやる。
力を求めた故にそれをあてにされても困るし、図体はでかいくせに妙に気をまわしすぎの感がある彼が黒の武器(カシュケルノ)の力を求めないことに罪悪感を感じてほしくなかったというのもある。
だから、それとこれは別問題だとはっきり言ってやりたかった。

「私はどうしてもぶん殴ってやりたい奴がいるんだ。そのためには今よりも強い力がいる。ただそれだけの話だ。今のところそれ以外に求める力を使うつもりはない。」

――しかして、その力を使った先に見る恐ろしくも悲しい世界の罪を私は知らなかったのだ

第８４話　後ろの正面だあれ？　２（後書き）

美少女のような青年アオイ登場です。
本人はその事を非常に気にしているらしく、他人に言われると烈火の如く怒り出します（笑）今回はそのエピソードをアラシの一言に集約してしまいましたが、いつかちゃんと書けたら面白いだろうなとは思います。（今回はアオイを怒らせたところでヒロがこんな状態ではリアクションも取れないしなぁと思いやめました）
ちなみにアオイは登場自体は初めてですが、名前だけはすでに登場済みです。（こういうの多いですね）この後の展開でそれがどこか分かると思いますが、もしお暇でしたらどこで出てきたか探してみてください。

第85話　後ろの正面だあれ？　3

勢いで言い切った私に沈黙するアラシ、そして規則正しく続く何かの機械音だけが味気のない部屋にいる。

そのことに妙な居心地を悪さを感じた私はアラシに別の話をふった。

「そういえば天使の領域（フィリアラディアス）を出てからは、ほとんど顔を合わすこともなかったな。黒の雷の皆（オルヴァラ）は元気か？」

「あ・ああ、まあ罪人の巡礼地（アークヴェル）の戦いに駆り出されて怪我したやつも少なくないが、概ね（おおむ）は皆元気にしてる。そういえばヒロ、お前ハクアリティス様にはお会いしているか？」

「ハクアリティス？」

しかして、突如として思いもよらない人物の名前が出たことに、私は首だけ動かして思わずアラシの顔を凝視した。

すると焦ったようにアラシが言葉を続け

「いやっ、俺もこっちに来てから会ってないし元気かなぁ？と思ってよぉ。へ、変な意味で言っているんじゃないぞ？！誤解すんなよ！！」

と、こっちが何も言ってないのに勝手にぺらぺらと墓穴を掘り、熊のような顔に朱をさして照れたような表情をする。

――おっさんの照れた表情っつーのは、結構きついな

瞬間に感じたのはそんな直観的な思いだったが、その表情からアラシが並々ならぬ関心をハクアリティスに抱いていることが分かった。だが・・・

「言っとくけど、ハクアリティスは人妻だぞ。」

誰が誰を好きになろうが、嫌いになろうが人の迷惑にならないなら、それは人の自由だ。

しかし、ここまでの私と彼女の色々な出来事と、確かに彼女は美しいが物言いや考え方は好きになれないと常々思っていたので、アラシには言外にハクアリティスを好きになるんてどうかしているんじゃないか？という表情も彼女が人妻であるという正論に付け足す。

「ご・かい――」

「そんだけ顔に出しといて誤解もくそもないだろ。」

「～っ！・・・まあ、うん。あれだ。」

それでも違うと言うアラシにはっきり言ってやると、もごもごと言葉を発する。（だから、おっさんがそんな恋する乙女みたいなことするなっつーの）

「なんて言うか、彼女とどうこうなりたい・・・とかはねえよ。彼女には笑っていて欲しいな・・と思ってるだけなんだ俺は。」

しかして、返ってきたのは想像していたのとは違う言葉だった。

（てっきりあの容姿に騙されて、のぼせているだけなのかと思っていた）

「敵同士になってもハクアリティス様が万象の天使を好きなことは知っているし、それを邪魔したいとは思ってないんだけどさ・・・、黒の雷（オルヴァラ）にいたときとか一人ですごい不安そうな表情とか、それを隠すためにすげー意地を張ったりとかそういうの見てたから。でも、こっちにきて全然顔も見れなくて、天使とは本格的に戦いになったし大丈夫か？ってよ。」

そういうのを普通は惚れているっていうんだよ。とは口には出さないし（多分、アラシも言って欲しくないだろう）、何かあまりの真摯な告白に（聞いているこっちが恥ずかしい）これ以上の詮索は無粋だなと私は思った。

「そうか。でも、残念だが私もこっちに来てからはハクアリティスには会ってない・な――」

しかし、そう告げながら不意にあれ？そうだったけと思いなおし、次の瞬間に灰色の花園で見たハクアリティスと瓜二つの天使の姿が頭の中でよみがえる。

――そういえば、あれは何だったんだ？

棺のようなものに納められた死体か人形かもわからないただ怖いくらいの美しさが、記憶をなくす直前に一目見ただけなのに目に焼き付いている。

エンディミアン・灰色の花園にいた天使・そして5年前に見た天使、これらのハクアリティスの姿をした存在たちは関わり合いがあるのか？

しかし、私がアラシを置いて本格的に思考に浸ろうとした瞬間に、アオイが部屋に戻ってきたためにそれを中断し私はアオイの研究に付き合うことに専念した。

それからどれくらい時間が経ったのか、実験台の上で寝そべっているだけでよかった私は本当に寝てしまって分からない。

ただ、再び目を覚ました時、私を取り囲んでいた研究者たち（驚くことに目を覚ましたら白衣を着ている人間が異常に増えていた）の顔が一様に眉間に皺を深くきざんでいたことから何か芳（かんば）しくないことがあったことだけはすぐに理解した。

だから、今日の実験は一先ず終わりということで地下の研究施設の一角に一人部屋を与えられた私は案内してくれたアオイに尋ねた。

（ちなみに体は幾分か楽になったが、まだ一人では歩けない状態なので部屋まではアラシに連れてきてもらっている）

「何か分かったのか？」

「いいや、さっぱりだ。」

「何だ、調べればわかるんじゃなかったのかよ？」

「そうすぐにわかるもんじゃないんだよ、大体、君自体が異常なんだ。まずはその解明から始めないといけないしね。」

『異常』と言われて普通喜ぶ者などいない。私は顔を顰め、それを見てアオイが苦笑して説明を始めた。

「普通、人間は魔力を持たない・・・いや、出せない構造になっている。」

「魔力は神によって許された力だろ？出せないって、神に許されていないってことか？」

天使を始めとして人間以外の種族が魔力を使えるのは神に愛されているからであり、人間がそれを使えないのは神に許されることのない罪人だからだと幼いころから教えられてきた。

――だが、灰色の花園で神に許されるところか神に喧嘩を売った私が魔力を出した

すると、私を始めとした全ての人間の常識は間違っているということなのか？

そんな私の疑問に答えるようにアオイが言葉を続ける。

「そう、それは決して間違ってない。事実だよ。基本的に魔力は神に許された存在しか使うことはできない。でも、それは神の許しがなくては使うことができないというだけで、そもそも魔力とは誰しもが持っている特別な存在じゃないんだ。」

言いながら彼は私の目の前に見慣れたものを取り出した。

「黒の剣（ローラレライ）」

私は思わずその名を呟く。

「魔力とはどんな生物でも持つ生命力のようなもので、それは主に血液に集約されている。例えばこの黒の剣（ローラレライ）を始めとした黒の武器（カシュケルノ）の発動が君にはわかりやすいだろう。これらは異端の一族の血液を直接垂らすことで魔力を発動するだろ？あれは血液から君たちの生命力という名の魔力を吸い取るための行為なんだよ。」

なるほど、血を垂らすことには意味があったのか。

「だけど、血液のままじゃ、何をできるわけでもない。それを黒の

魔力に還元するのが黒の武器（カシュケルノ）であり、神に許されるということなんだ。すなわち、血に代表される生命力を魔力に変換できる、それが『神との契約』というわけさ。そして、魔力に様々な色があるのはその許しを得た神に影響を受ける。」

なるほど、さすが研究者というだけあってその説明は非常にわかりやすいと感じた。

だが、その説明は私の疑問を半分しか満たさない。

「では、どうして私は黒の剣（ローラレライ）を介さずして魔力を使えた？」

あの体から迸（ほとばし）るような感覚は黒の剣（ローラレライ）を使う時とは明らかに違う感覚だった。

そう、直観だがあれは間違いなく私から発せられた魔力だったし、黒き神もそのような事を言っていた。

「それにティアやケルヴェロッカたちはどうなる？あいつらだって人間だろ？なのにどうして魔力をだせる？白き神に許しを得たというには、彼らの魔力は赤や黄色だった。」

一応、白き神を味方と仮定すれば、人間たちが神の許しを得て魔力を使うことができると想像することができたが、それはアオイの説明らかすれば白の魔力でなければいけないはずだ。

私がそう言うとアオイが少し目を見開いて、次には可憐な笑みを顔に浮かべ、

「へえ、ヒロってなにも考えていないアラシみたいな戦士系直情馬鹿かと思ったけど、思慮深いタイプなんだね。」

と私を小馬鹿にしたように言い放つ。

体さえ動けばその細っこい体にボディブローの一つでも入れてやりたい所で（いくら女のようでも男は男だ。遠慮は無用しない）、思わず同じく馬鹿にされたアラシにそれを期待して彼を見上げたが、やつはワッハッハそうかもなと言いながら笑っている。（器が大きいのか、本当のバカなのかアラシも謎の多い男である）

「じゃあ、ヒロのことはともかくとして、神の子（マイマール）について説明をするには『実物』を見た方が早いからちょっと行こうか？アラシ、悪

いけどまたヒロをおぶってあげてよ。」
「おう。」
「ちょ・・・ま」
しかして、体が辛いし、このまま横になっていたいなどと思っていた私を無視して、レッツゴーなどと言いながらアオイは私を再び部屋から連れ出したのである。

第８５話　後ろの正面だあれ？　３（後書き）

これから神の子や魔力の秘密について色々明らかになっていく予定で、少々説明くさい部分が多くなっていくかと思いますが、いくつかの謎が解明されていきます。

第８６話　鎖は解かれることはなく、ただ絡みつくのみにて　１

鎖は絡みつく
振り払おうとも、千切り破ろうとも
鎖は解かれることなく、ただ絡みつくのみにて
しかして、貴方を殺すことはなくて、ただ未来永劫（みらいえいごう）、貴方を苦しめ続けるのだ

――――ああ、それはきっと罪深き貴方の贖罪（しょくざい）

【鎖は解かれることなく、ただ絡みつくのみにて】

聞くところによると月見の塔（ミュージ・アシェダ）の地下に広がるこの研究所は、銀月（ウィンザー）の都（ド・シエラ）の土台である半球体の大部分を占めるらしい。
延々と続く廊下はいつも同じ様子で無機質で変化がなく、アラシの背にのっかりながら進んでみても果たしてどれくらい距離を稼いでいるのか全く分からない。
「何処に向かっている？」
しかして、さっきまで私に可憐な笑顔を見せていたはずのアオイだったが、廊下を進むにつれてどうしてか無口に無表情を決め込み、それにただならぬものを私もアラシも感じた。
そして、アオイは１つの扉の前で立ち止まるとアラシに背負われて間抜け面の私を振り返り、やっと口を開く。
その表情は私が先ほどから見てきた男とは思えないほど可憐な様子のままなのに、ぞくりと寒気が走るほどに静かで透明な冷たさを湛えていた。

「ここから先には俺の罪がある。」

意味が分からない言葉だったが、そんな軽口を叩ける雰囲気が今のアオイにはない。

「この先には神の子（マイマール）がどうして魔力を出すことができるか、その答えがある。だけど、それは俺が犯した罪の一つ。」

「アオイッ！」

淡々としたアオイの言葉にアラシの鋭い言葉が被さる。

「黙れ、アラシ。神の子（マイマール）、いや、人間に魔力を与えたことは俺が作り出した罪。そのことは罪を犯した俺が一番分かっている。」

神の子（マイマール）は突然変異の人間か何かだと思っていた私は、それをアオイが作ったという事実だけで驚きだった。

だって、そんな神の意に反するようなことが人間の手でなされているという事実、普通は想像だにしないから。

だが、ここ最近起こる全ては私の想像を超える。

「神の子（マイマール）は人間ではなくなった人間。そう、あの可哀想な神の下僕たる契約を結んだ天使たちと同じ存在。」

「――――え？」

言葉は私の頭の中で正確に理解されずして、ただ通り抜けて行った。

「そんな俺の罪を本当なら誰が好き好んで見せようとは思わない。だが、俺の答えを持つかもしれない君にはそれを見ておいてもらいたい。そして、君という存在の異常性を君はきちんと認識しないといけないんだ。」

そして、扉がすべり、アオイの罪が姿を現す。

瞬間に感じたのは、降り注ぐ淡い光と私に絡みつくような幾重もの何か気持ちの悪いもの。

――そして、そこには女が一人、箱の中で幸せそうに眠っていた

そこは家が何個も入りそうなほどに広く、全てが淡い黄色の光に照らされた場所。

その黄色の光は高い部屋の壁の中央にはめ込まれた箱から発せられ、その中には女が一人眠っている。

それを中心として見上げるほど高き壁には、無数の箱・箱・箱・箱・・・そして、その中には人間たちが静かに納まっている。

「な・・んだ?」

それはあまりに異様過ぎる光景。

まるで、標本にされた人間たちが飾られたような錯覚。

そして、壁の箱と箱の間を埋めるのは淡い夢のような黄色の光などではなく、目に焼きつく毒々しいまでの赤。この赤には見覚えがあった。

「血?」

「そう、神の血(ニス・ドゥア)。」

しかして、呆然とつぶやいた私の言葉に女の声が被さった。

振り向いた先にはその血と同じまでに赤々とした瞳をもった女・ティアがこちらを、いや、私を通り越してアオイを睨みつけるように見ていた。

「ティア。来ていたのか。」

答えるアオイに僅かな動揺が見えた。

だが、ティアはそれを無視すると私の方を見て破顔した。

「ヒロ、よかった!罪人の巡礼地(アークヴェル)で別れた以来だったから心配していたのよ?ふふ、でも、面白い恰好でいるわね。」

アラシに負ぶわれていることは明白だったので、私も苦々しい顔になる。

「ケルヴェロッカも目が覚めたら、きっと喜ぶ。あの子、憎まれ口

叩いてたけど貴方のこと結構気に入っていたから。」
そして、いいながら一つの箱を見つめる彼女の視線の先に、箱の中で眠り続けるケルヴェロッカを見つけた。
幼い小さな体、あどけない寝顔、黄色の光に包まれたケルヴェロッカ。
「・・・これは何だ?」
ティアは至って平常のもののように目の前の光景を受け入れているが、私といえばそれに軽口を返すこともできず呆然としながら、アラシの背中から降りるとふらふらと入口から部屋の中に入って行った。
そして、部屋に入った瞬間に後ろの方からも何か気配を感じ、振り返ってみると正面だけではない全ての壁という壁に箱と人間が納まっているのが目に入る。

「これが神の子(マイマール)の真の姿。人間じゃなくなった哀れな生き物。彼らは血を通しこうして一つの命で繋がれている。」
「命を繋ぐ?」
「貴方、『契約』って知っている?」
問い返す私にティアは問いを返した。
不思議に思ったが、そんなティアに何故だか逆らい難い何かを感じて私は『契約』という言葉について考えてみる。
言葉の意味は勿論分かる。だが、ティアが言っているのはそういう意味ではないだろう。
しかして、かつて断罪の牢獄(エヴィラ・アメンド)でハクアリティスについて聞いた話を思い出した。
「詳しくは知らないが、人間であるハクアリティスが万象の天使と『契約』を交わしたことで永遠の寿命を手に入れたという話は聞いたことがある。」
箱の中にいる神の子(マイマール)たちは一様に瞳を閉じているはずなのに、どうしてか四方八方から私は見られているような視線のようなものを

感じ、私はそれに萎縮し口がうまく回らない。
だが、ティアはそれを感じていないのか、至って普通の様子で私に答える。
「ハクアリティス・・・、まあ、彼女のことは私は詳しくは知らないけど。」
そう言ってティアは一瞬だけアオイに視線を送るが、すぐにそれは神の子(マイマール)たちに向かう。
視線をそらされたアオイの表情が歪むのが見えた。

――この二人、一体何なんだ？

ティアの言葉の続きも気になるところだが、ティアが色々と話しだしてから、口を開こうとしないアオイ、そんなアオイを存在自体も無視するようなティア。
どうにも妙な雰囲気に私は眉を顰めずにはいられない。（といって、それを聞ける雰囲気にはないが）
「その例えは間違っていないわ。『契約』とは魔力を介した取引。神とて破ることは叶わない世界の理(ことわり)。例えば貴方が私に対して何かを欲しいと欲したとき、その欲したものの分だけ貴方が古の方法に則(のっと)って私に貴方の魔力を与えれば、私は貴方にそれを与えなければならない。」
魔力を対価として、欲しいものを手に入れることができる・・・そんな話は聞いたことがなかった。
「ちなみに魔力とは生命力のこと。魔力を持たない人間でも、寿命という名の限られた生命力を削るという形でそれは叶えることができるわ。」
「では、神の子(マイマール)たちは魔力を得るために『契約』をしたということか？」

――この異様な光景がその古の方法？

思いついた考えは一見辻褄（つじつま）はあうようで、だが私の中ではしっくりこない。

そして、その直感はあっていたらしくティアが静かに首を横に振る。

「それは正しいようで間違っている。だって、これらは契約のためにある訳じゃなく彼らの命を繋ぐための鎖だから。」

「？」

だが、返ってきたのは意味を解すことのできない答え。

「確かに彼らは魔力を得るための『契約』を交わした。でもね、その対価を人間が支払おうとすれば本来、人間の寿命は全て尽きてしまうの。」

――だが、彼らは魔力を使うことができても生きているじゃないか？

私は絡みつく何かを見定めるように眼を細め、箱の中に納まる人間たちを見る。

皆、一様に安らかに何の不安もない、まるで母親の胎内にいるかのような表情を浮かべている。

だが、そのことに寒気を覚える私がいる。

「だから、それを回避するためにこの男は罪を犯した。」

しかして、それまでその存在すら無視していたアオイをティアが鋭い言葉と瞳で指さした。

「人間に尽きることのない魔力、生命力、寿命を与えるために、この男は神の血（ニス・ドゥア）という名の鎖で彼らを縛りつけたのよ。」

その言葉は静かだが力強い言葉をティアがぶつけ、アオイはそれを黙って受け止める。だが、その表情はひどく悲しそうに私には見えた。

「ヒロ、あの中央の女性が見える？」
だが、そんなアオイにも眉一つ動かさず、ティアは私に言葉を振る。
「あ、ああ」
私も気になっていた。
他の箱とは違い光を放ち、何やら物々しい機械が取り付けられ唸りを上げる中央の箱と、そして、その中で眠る髪の短い一人の女性。
「あの女性の名前はディアルナ、黄色の神の一人。」
「・・か・み？」
「そう、目を覚ますこともなく神の子（マイマール）たちに生命力を供給し続け、もはや魔力の塊となり果てた悲しき女性。」

その言葉の意味を理解した瞬間に贖罪の街でアラシに見せられた聖櫃（せいひつ）のことを思い出した。
天使の領域（フィリアラディアス）の美しさ豊かさを守るために多くのアーシアンの命を奪っていた聖櫃（せいひつ）と、これがどういう原理でなされているものかは定かではないが、どうやら神の子（マイマール）を死なせないために眠り続け、搾取され続けているらしい女神。

――――何かを得るために、何かを守るために、犠牲にされる存在

それがどんなものであれ、どんな形であれ、やはり、見ていて気持ちのいいものじゃない。
そして、私のその直感めいたものは悲しいことに的を得たものだったらしい。

「そして、聖櫃（せいひつ）という名のあの禍々（まがまが）しい機械で、神の子（マイマール）たちの命を繋ぎ続ける存在よ。」

第８６話　鎖は解かれることはなく、ただ絡みつくのみにて　１（後書き）

ちょっと今回は早めの更新です。（その分、週末の更新はありませんが）今回は色々過去に伏線と張ってきた部分が顔を覗かせている感じなので、なるべく今回見ただけで分かるようにしてありますが、分からなかったらまた昔を振り返ってみてください。

それにしても最近加筆修正を進めるにあたって、この話も段々と長くなってきたなぁと思う次第です。しかも、中々終わらないし、お付き合いいただいている読者様も一体いつ終わるの？と思ってらっしゃる方も多いかと思います。

・・・実はこの物語、まだまだ相当長く予定なんです。大きくは第４部を含めてあと２部、第５部までで一区切り「第１章」みたいな感じになるんですが、それが大きくあと３章、全第４章まで続く予定（？）なんです。でも、そんなに長々と続けていいものかと最近悩みを抱えている次第でありまして・・・、まあ第１章は必ず終わらせるつもりですし、なるべくなら物語を完結させたいなとは思っているのですが、予定は未定な状態であります。また、第１章が完結したらその詳細は発表したいと思っていますが、その事について何かご意見・ご要望があったら一報いただけると嬉しいです。では、後書きを長々と続けてしまい申し訳ありませんでした。

第87話　鎖は解かれることはなく、ただ絡みつくのみにて　2

――神、魔力、人間、そして聖櫃（せいひつ）

それぞれ1つ1つは別々のものなのに、今ここで1つに繋がっているそれら。
本来は1つになるはずのないそれ。
その秘密が謎が目の前で明らかになろうとしている。

「さぁ、私の話はここまでにしようかしら？残りはそこの男にしてもらって。」

だが、話が核心に迫ったかと思いきやティアは私たちに背を向けたのだ。
「何だ？ここまで話しといて。」
思わず責めるような声がでたこともご了承願いたい。
「これ以上この男の前にいるだけで、私は別の話をしてしまいそうだから。」
だが、そうきっぱりと告げた彼女の声は何かしら感情を抑えつけているようで、私にはティアを引きとめる言葉がそれ以上は思い浮かばない。
「じゃあ、ここからは俺が話すよ・・ていうか、元々俺が話す予定だったんだしね。」
そして、一度もこちらを振り返ることなく消えたティアの背中を見つめながらアオイは独り言のように彼女の後を引き継いだ。
「ティアはどうして？」
「まあ、ちょっとね。だけど、全部俺が悪いんだから君たちは気にしないで。」
しかして、そう言われたところで私もアラシも納得いくはずもな

く、思わず二人で顔を見合す。
「さて、神の血（ニス・ドゥア）の話をするために、まずはこっちに来てくれるか？」
だけど、私たちのそんな様子など無視してアオイは話を先に進めるのだ。
その事に彼の聞いてくれるなという無言の圧力を感じ、また、それこそそれを無視して彼を問い詰めるという方法もあるのだろうが、アオイとティアの問題に私が口を出すなどお節介の極みだろうし思い直し、私はそれ以上はアオイに声を掛けることをやめた。（アラシも似たようなことを思ったのか、それ以上は何も言わなかった）

「アラシ、少しだけ血をくれないか？」
そして、何が始まるかと思えば、いきなりアオイは神の子（マイマール）たちが入っている箱のすぐそばまで歩み寄りシャーレを取り出してアラシの血を求めたのだ。
「はい？」
アラシもその意味を測りかねているようだが、アオイの求めに応じて懐からナイフを取り出して掌を切りシャーレの中に血を数滴垂らす。
「俺はさっき血液こそが魔力そのものだと話したよね？そして、人間と神たちの違いは血液を魔力に変換できるか否かだとも話した。だけど、血液に関してはもう一つ大きな違いが両者にはある。」
言いながらアオイは箱と箱を繋ぐ神の血（ニス・ドゥア）の流れる管につけられたバルブから、アラシの血の入っているとは別のシャーレに神の血（ニス・ドゥア）を僅かにとる。
「その違いというのは血液に含まれる魔力量。人間には寿命というものがあり、それに含まれている魔力・生命力には限りがある。人間の寿命というのはその人が持つ血液中の魔力量により差が出るんだ。だけど、寿命のない神のそれには際限がない。その1滴だろうともその血液には無限の魔力が含まれている。」
なるほど、神の寿命が尽きないのは生命力、すなわち血液中に含

まれているそれが無限であるからなのか。
「なら、さっきティアが言っていた黄色の神が神の子（マイマール）に命を与えているというのは、彼らに神の血（ニス・ドゥア）を与えているということなのか？」
神の血（ニス・ドゥア）が1滴あれば無限の魔力・生命力を手に入れられるというのであれば、それさえあれば誰しもが永遠の命を得られると思うのは短慮というものだろうか？
だが、そう考えれば、血で繋がれた神と人間たちというこの異様な装置の説明もつくような気がした。
「さすがヒロ。その推理力、案外君は研究者向きかもしれないね。その通り。神の寿命、魔力を与えるということはすなわち神の血（ニス・ドゥア）を人間に与えるということ。だけど、これを見てほしい。」
言いながらアオイは、シャーレとシャーレを合わせアラシの血に神の血（ニス・ドゥア）らしきものを近づけた。
そして、その瞬間にそれは起こる。

――― 一見して同じただの赤き血に見える神の血（ニス・ドゥア）がアラシの血を瞬間にまるで生き物のようにガブリと飲み込んだのだ

「っ！」
しかして、すぐに何事もなかったようにそれは私の中にある血と同じようにそこに存在しているが、こんな場面を目の当たりにした後では、どうしたってそれを私の中にあるただの血だと思うことはできない。
「見ただろ？神の血（ニス・ドゥア）は少しでも魔力のあるものには、その魔力を全て飲み込み自身に同化してしまう。流れる血の色は同じだけれど、人間と神が違う生き物であるように、その血も全くの別物なんだ。そして、本来、違う生き物同士の血液を混ぜる、すなわち違う生き物同士の交わりは世界の理に反することだとされているんだ。」
―――世界の理に反したこと、それが彼の罪なのか？

「世界で決められたことに反すれば必ずどこかで罰があたる。どこかで破綻をきたす。まあ、一見すれば神の子にそれはない。そこは魔人で説明した方が分かりやすいかもしれないかな？」

「魔人？」

天使の領域で見た人間ではない、だれど人間でしかありえない生き物。

確かに人間なのに魔力を持つという意味では神の子と同じだと言えるかもしれないが、人間らしさを失った魔人と私たちと何ら変わりない神の子を同じとしていいのか？

「Ｄｒ．パルマドールは神の血を直接人間に与えることによって人間に魔力を与えようとした。だけど、それでは魔人を見て分かるように、人間の体が神の血の大きすぎる魔力に耐えられない。それに対応させるよう体も改造していたようだけど、それも上手くはいっていなかったようだね。」

なるほど神の血の強力な魔力に負けないような体にするために、魔人たちはあれほどに継接ぎされて体を改造されていたのか。

つながる記憶とアオイの説明にやりきれなさが募る。

そして、アオイはまた自己嫌悪丸出しの、自分ひとりが罪人ですみたいな顔をして言うのだ。

「だって、世界に生きている者の誰もが世界の理に反することができるわけがないし、それこそが俺が犯した罪だから。」

――――もういい加減、聞き飽きたっつーの

だから、私はこの女みたいな顔をした男にいってやるのだ。

「だが、お前はそれをなしたのだろう？」

いい加減、もったいぶったようなはぐらかされているような言葉にイライラした。

「おい、ヒロ。」

アラシがそんな私の肩をつかむが、私はそれを振り払う。（気がつけば、体が想像以上に回復しているような気がする）

「うるさい。罪だ罪だと、自己嫌悪に陥るのは勝手だ。だが、犯した罪をぐちぐちとこんな所で私に懺悔したところで時間の無駄だ。それは私に言うことじゃないだろ？」

――罪を犯したというのであれば、懺悔は犯した罪により悲しみ辛い思いをした人々にしなければしないのと同じだ

「お前が犯した罪が世界の理に反したことだというのは分かった。それが人間に神の血（ニス・ドゥア）を与え永遠の命と魔力を与えたことだということも。だが、それが罪だというのなら世界の理に反することだというのなら――私こそ罪だ。」

長い話を聞いていれば、人間が魔力を使うというその結果こそが罪だと分かる。

ならば、アオイが私を異常といった訳は私が世界の理に反しているということなのだ。

「だから、私は結果じゃないその過程が知りたいんだ。お前だってその中に私が魔力を使える手がかりがあると思ったから私をここに連れてきたんだろ？」

何も知らない私からすれば、私も神の子（マイマール）も結果が同じだから、両者が同じように思えてならない。

だが、研究者たるアオイには違って見える。

きっと、その違いこそが彼の見つけたい『答え』であり、彼の罪への贖罪なのかもしれないと私は感じ。

ならば、その違いを理解しなければ話は始まらない。

だから、私はアオイに話を急かす。だけれど、これだけ言ってもアオイはまだ話さない。

「ヒロ、君は強いな。」

「だから――」

「わかってる。君の知りたい事も話す。だが、俺の思っていることも話したっていいだろ？」

しかして、そういう言い方をされると否とはいえないのが、私の気の小さい所だ。

「君は自分が世界の異端かもしれない、その事実を目の前にしようとしているのにそれを受け入れようとしている。目の前の恐怖に立ち向かおうとしている。」

だが、アオイのそんな真摯な言葉に私は首を横に振る。

――私は知らないことで、無知でいることが嫌なだけだ

両親のこと、ユイアのこと、エヴァのこと、それにここ最近の一連の事象、その全ては私の無知さえなければいくらか解決した部分もある。

もしくは解決まではいかなくても、私もその結果に後悔をいくらかしなくて済んだろう。

だが、私は私の無知のために大切な人を最悪の形で失い、私のためにしてくれた大切な人の思いを踏みにじる結果となった。

――だから、もう何も知らないのは嫌なんだ・・・例えそれが自分を苦しめることになったとしても

「でも、俺はだめだ。いつも自分の罪の重さに耐えられなくて、それから目を背けようとしてしまう。ただ自分を責め続けることしかできない。」

だが、この男は知っているのに何もしようとはしない。

顔と同じくどうにも女々しいアオイに私はイラつく自分を止められない。

しかして、それは決して私とアオイが違うからじゃない。むしろ、彼の考え方は私の本質とよく似ていると思うくらいだ。

アオイは私を強いと言ったが、それは違う。
私はアオイと同じような事を考えているし、いつも罪から苦しみから逃げられたらどんなに楽かと思っている。
だけど、私は同時にそれから決して自分が逃げられないことも知っている。

――だから、どうせならと開き直って私は強がっているだけなのだ

まあ、そんなことはわざわざアオイに言う必要はないことだ。
目の前で自嘲気味に笑うアオイを前に、きっと彼の本質が似ているからこそ私はこんなにイラついているのだろうなと冷静な自分が囁いた。

第87話　鎖は解かれることはなく、ただ絡みつくのみにて　2（後書き）

あれ？まだ引っ張るの？といった感じかもしれません。読者の皆様もヒロ同様イライラしているかもしれませんが、次くらいで一段落する予定です。

第８８話　鎖は解かれることはなく、ただ絡みつくのみにて　３

アオイの自己嫌悪だらけの懺悔に対してもはや言葉もない私、そして、それを神妙に聞くアラシ。

部屋の中はアオイの言葉が途切れたことにより重苦しい沈黙が落ち、しかして彼はまだ何か言い足りなさそうだったが、最後に小さく息を吐いて私に提案をした。

「俺が一方的に話すと結局、話が脱線しそうだ。それじゃあ、ティアがわざわざ俺に話し手を譲ってくれたことが無駄になるし、これからはヒロが質問したことに俺が答えるって風でどうだ？」

それに対して異議を唱える理由はない。私は言葉なく頷くと、さっそく疑問の口を開く。

何故だかこの部屋に入ってから感じている妙な違和感や視線が嫌で、私はさっさとこの部屋から出たいという気持ちがあり、そして、不思議なことにあれほど傷んだ体が驚くほど回復しているのを感じ、それがもしかすると自分の中に芽生えた、いや、本当は元々あったのに気がつかなかった悪魔の存在のせいかと思うと気分が更に滅入って話をさっさと進めたかった。

「では、まず最初の質問だ。今までの話を整理すると血に含まれた生命力を魔力に変換するには神との契約が必要になるとお前は言った。だが、黒き神のことはとりあえず置いておいて、この世界にはもはや白き神しか存在しないはずだ。だが、神の子（マイマール）たちが使う魔力は黄色。彼らは誰と契約したっていうんだ？」

答えは半分は分かっている。

目の前で箱に納まる黄色の神は神の子（マイマール）たちと繋がっている。

普通に考えて神の子（マイマール）たちが契約を交わしたのは、十中八九この女神であろう。

だが、この神は一体いつから箱の中にいる？そもそも彼女は生きているのか？神が死んでいても契約とはなされるものなのか？

その事実一つとっても様々な憶測が私の中に脳裏を過った。
「もちろん、彼らが繋がっているこの黄色の神ディアルナだよ。彼女は聖櫃（せいひつ）の中で生き続けている。神は決して白き神だけじゃない、彼女を始め何人かの神は未だに世界に生き続けているんだよ。神の消滅はすなわち契約の消滅、神との契約の破棄になるからね。そんなこと神を殺した彼らも望んではいなかった。」
白き神以外の神が生きている事実は信じられない思いがする。
だが、魔力の成り立ちを考えれば、今も多くの魔力の存在からそれを理解することはできた。それにしても、

――神を殺した『彼ら』？

神を殺したのは黒き神。
それを複数形で現すのは黒の一族を含めているということか？だが、それならば魔力の消滅は神を殺さない理由にはならないよな？
（黒き神がいれば一族は魔力を使えるのだし、神自身は自分がいれば魔力は使えるはずだ）
不意にわいた疑問であったが、アオイの続く話に私の疑問は一瞬で消えた。
「まあ、聖櫃（せいひつ）の話は後で詳しくするとして、確かにこの中に入れられれば彼女に意識はない。生きながらに死んでいるようなものだ。そして、神の子（マイマール）たちが契約したのは彼女が聖櫃（せいひつ）に納まってから。でも、契約はそれでも交わすことができる。何故なら、契約は神が行うものではなく世界の理によってなされるものだからだ。」

――世界の理

そういえば、この部屋に入ってから何度も耳にしたそれ。
アオイが重々しく口にするその実を私は深くは知らない。
「古の過去にこの世界に平和と命を与えたのは白と黒の二神であり、

彼らこそこの世界の支配者と言っていい。だけど、それ以前に混沌と虚無に満たされていた名もなき世界の原型をつくった存在がいた。その存在が定めたのが『世界の理』。神でさえも覆すことができない絶対の法だ。」

あまりの大きな話にどうにも現実味がない話。

「契約はその世界の理によって成り立ち、魔力を差し出した者が世界の理の管理者・3人の古の魔女（パレス・アディ）たちにその願いを申し出ることで交わされる。だから、契約を結ばされた方は魔力を問答無用で受け取り、同時に契約は無事に成立ということになるんだ。」

「おいおい、どんな悪徳商法だよ。」

しかして、思わずついた言葉にアオイが苦笑する。（でも、相手の意思を無視した契約なんて・・・誰だってそう思うだろ？）

「そうは言われても、世界がそう決めているんだ。俺にはどうにもできないよ。さて、これで最初の問いには答えることができたかな？」

契約については些（いささ）か納得がいくところではないが、とりあえず問いには答えてもらったので私は小さく頷く。

「じゃあ、次の問いは聖櫃（せいひつ）のことかな？」

そして、それも正しいので同じく頷く。

思い出されるのは数分前のティアの言葉。

『彼らは魔力を得るための『契約』を交わした。でもね、その対価を人間が支払おうとすれば本来、人間の寿命は全て尽きてしまうの。』

契約は血に含まれる生命力を対価に使う。

しかし、魔力を使うために神と契約をするには人間が持つ全ての生命力が必要になるという。

それでは契約を交わした瞬間に人間は死に、ことは正に本末転倒。

だから、

「人間に無限の魔力を与えるためには神の血（ニス・ドゥア）を与るしかない。だが、それをすれば人間の体はその大きさに壊れる。だが、アオイ、お前は聖櫃（せいひつ）を使いそれを可能にしたんだろ？それは一体、どういうことだ？」

自分で自分の頭を整理しながら問いを口にする。

この中で知った情報はもはや私の許容範囲を超えていて、一つ一つ確認しないと混乱しそうだった。

「聖櫃（せいひつ）とは、何もかもが一つになる箱。」

――――一つになる

「君は贖罪の街で聖櫃（せいひつ）を見ているだろう？あれを使ってどうして白き神（ア・ルマンヌ）の御許だけが楽園を保つこと出来るか、その理由は知っているかい？」

人間の命を犠牲にして成り立っていた天使の領域（フィリアラディアス）。

想い返すだけで吐き気がするような事実とむせかえる血の匂いに眉を顰めながら私は答える。

「いいや。」

詳しい理由まではアラシも贖罪の街の住人たちも知らなかった。

「聖櫃（せいひつ）とは中に入った者の魔力・生命力を搾（しぼ）り取り、それを繋がった全てのものに分け与えることができる箱。人から神、人から大地、天使と神・・・きっと悪魔と天使だってそれは可能だろう。だから、聖櫃（せいひつ）を通して天使たちは人から血の中の魔力として都に送り、そしてあそこだけ楽園を築くことができた訳だ。」

「さっきの神の血（ニス・ドゥア）の話では違う生物同士の交わりは世界の理に反するということだったが、魔力にそれは関係ないのか？」

神すらも超越するという世界の理を無視することなんてできるんだろうか？

「もちろん、通常は不可能だよ。だけど、千年前、それを覆す存在が契約によって発明されたそれが聖櫃（せいひつ）なんだ。聖櫃（せいひつ）とは世界の理に

よって許された世界の歪み。そして、それを利用したのが俺の罪。」

――――やりたい放題だなぁ、本当

それはアオイへの言葉じゃなく、世界の法だとして神すらも覆すことができないことが契約を介せば、いとも簡単に成立してしまうことに対しての感想。

その不条理さというか、どうにも釈然としない説明にそんな感情が湧いた。

「ただね、契約は完全ではない。世界の理を曲げるほどの契約、これを発明した人物の命を賭しても決定的な欠陥を残すこととなった。」

「欠陥？」

「そう。魔力を供給するという意味ではこの発明は画期的といっていい。だが、この中に入ったが最後、その人物は死ぬまで魔力を全て吸い取られるまで出ることは不可能。そして、この聖櫃（せいひつ）によって繋がれた命は全てこの聖櫃（せいひつ）の中の命に集約されることとなる。すなわち、神の子（マイマール）たちの命は黄色の神の命となり、贖罪の街の聖櫃が常に人間の血で満たされていたのも、それが理由だったのさ。入った人間が死んで、すぐに新たな生贄を入れなければ天使の領域（フィリアラディアス）は滅ぶ。だから、天使は人間を絶やすことを絶対にしない。」

――――聖櫃（せいひつ）に集約された命、それはすなわち個でなく一つになった箱に納められた神の子（マイマール）たちの命

ああ、彼らは皆一つなんだとアオイの言葉を聞いて直観的に理解した。

そして、その言葉を理解した瞬間に急にこの部屋にいることが怖くなり、私は聖櫃（せいひつ）の中の黄色の神を見上げた。

閉じられた瞳、唇、動くとのない表情が僅かに笑みを描いたよう

な気がして、そして、誰かが私の頭の中で何かが蠢く。

「人間が神になったんじゃない。神が人間の命を自分のしたのか・・・」

出ることの叶わない箱、だが、その中にいるだけで神は多くの人間たちの命をその手に収めた。

神の力と寿命を手に入れた人間と人間たちの命を握った神。

それはどっちが幸せ？どっちが不幸？

「気持ち悪い。」

そして、気がつけば呟いていた。

「ヒロ？」

「どうして、繋がらなければならない？」

――ヒトツニナロウ

頭の中で蠢く誰かが呟く。

「どうして、誰かのものにならないといけないんだ？」

――アナタハボクノモノ、ズットズットイッショダヨ

しかして、私は蠢く何かを振り払うように頭を振る。

突如として自分でない誰かの思考が私の邪魔をする。

そう、これはあの灰色の花園で感じたそれ。その正体も私は知った。

これは私じゃない、悪魔の名残。

だから、私には関係のない。だから、私はそれを振り切らなけれ

ばならない。
私は私の考えで私の人生を生きたいから、私の言葉を口にしたいから。

――私は誰かと一つになどなりたくないっ！

そして、強い思いで自分を取り戻す。
神の子（マイマール）と私が同じ原理で魔力を用いているというならば、私は誰かと命を繋いでいるということ。
そんな事実、信じたくない。
何故だかわからないが、そのことに私は強烈な拒否感を抱いた。
だから、逃げだと分かっていても私は独り言に似た問いを無理やりなかったことにすると、別の疑問を口にする。
そうすることで自分が保たれるような気がした。
そして、その逃げるようについて出た言葉が思わぬ波紋を呼ぶとも知らず。
「お前は天使が神の子（マイマール）と同じだといったよな？」
アオイもアラシもそんな私の態度を不思議そうだったが、私の有無を言わせない物言いにアオイは問いに再び答えてくれる。

「ああ、気がついたかい？そう、天使も元は人間なのさ。」

何でもないことのように告げたアオイだったが、それはアラシも知らなかったらしく目を丸くしていた。
私だって自分で疑問を振っといて何だが、正直こう返されると思ってなくて驚いた。（せいぜい、天使という生き物が神の子（マイマール）と同じ原理で魔力を使っているくらいにしか思ってなかった）

――天使が人間？

「あれ?そこまでは気がついてなかった?」
アラシと同じように目を丸くしているんだろう私に対して、アオイがこの部屋に入って初めてあの少女のような可憐な笑みを浮かべる。
「天使はこの神の子(マイマール)たちと同じ条件で魔力を持ち、永遠の命を得た人間なんだよ。ただ、一つ違うのは天使は神々によって無理やり彼らの所有物になったということ。」
「所有物?」
思わず聞き返す私。(アラシはもはや口を開けて、言葉もない)
話は私の想像していない方向へ向かおうとしていた。
「そうさ。天使は神の僕だっていうだろ?それはそのままだったのさ、天使とは神の僕にされた人間たちの名称。」
天使の実態を知るまで『天使』という名称にに神々しいイメージすら私は持っていたというのに、それが奴隷と同義語だと?
「そして、ここまで聞けば君も捻じ曲げられた千年前の事実を何となく察しているだろ?」

神の奴隷だったという天使
白き神以外が存在しないとされた天使の支配する世界
そして、先ほどアオイが告げた神を殺した者たちが神を魔力のために生かしているという話

「まさ・か・・天使が?」
「そう、千年前、神を殺したのは天使たち。人間の反乱に乗じ、彼らは神から自由を得るために神を殺したんだ。」
驚きに思考が停止した。
天使が人間で、天使が神を殺して・・・、全ては私には関係のない話かもしれないが、誰だって何の心の準備もなしに自分の中にある当たり前のことを覆されては思考も停止する。
だが、その停止した思考の隅っこで私は思った。

――アオイはどうして千年前のことをこれほどよく知っているんだろう？

全てを知っていそうなエンシッダにでも聞いたのかもしれないという憶測もあったが、何故だかそれは違うなと私は直観的に思った。

かくして疑問に対するアオイの問いは、更に私の中に疑問と驚愕の嵐を巻き起こしたのである。

第８８話　鎖は解かれることはなく、ただ絡みつくのみにて　３（後書き）

エヴァとエヴァンシェッドや、ユイアと黒の剣の間の契約もここで説明している『契約』です。まあ、世界の理とか深まる謎はともかくとして、ここまでで色々新しい事実が分かってきたのではないかと思います。

さて、その事実の一つ天使が人間だったという話が分かったところで、次からは天使側に視点が移る予定です。ただ、一区切りついたのでしばらくは加筆修正の方に力を注ぎたいと思います。次は６月に入ってからの更新の予定です。

第８９話　世界は偽りに彩られ　１

我が世界は偽りに彩られている
真実は偽りに覆い隠され、右は左、空は海、男は女、喜びは悲しみ、白は黒へと相反する姿へと偽られる
我が世界では真実こそが偽りであり、偽りこそが真実
真実は常に偽りに彩られ、二つはいつも同じ所にある
しかして、二つは一番近い場所にありながら、真実と偽りは決して交わることはない

第８９話　世界は偽りに彩られ　１

＜ＳＩＤＥ　エヴァンシェッド＞

「結果が出たぞ。」

それはいつものシェルシドラの声のはずなのに、どことなく硬さが混じり誰か知らない人の声のように感じた。
まあ、だっだ広いこの部屋で声が大きく反響しているというのもその理由かもしれない。
ここは天近き城（フェデス・ジグロア）の中でも神と契約せし（ファギュラド）天使以外はごく一部の天使しか入ることを許していない部屋。
しかして、その実といえば声が反響するほどにだだ広いだけの数十個の箱だけが存在する、一見すれば何とももの寂しい部屋だ。

――ごく一部の天使たちが知らぬ部屋の名は神の霊安室（ティストーラ）

文字通り聖櫃に眠る神々がおあす場所。
部屋の中に唯一存在する物体たる箱、改め聖櫃は赤・青・緑の三つの色の仄かな色合いの光を放ち、それ以外には光一つない部屋をうっすらと照らす。
そして、その光は聖櫃の中で天使に命を与え続けている神々の、永遠に尽きることのない魔力の灯。
そう、この場所は神々の霊安室であると同時に、天使たちの生命線でもある俺たちにとって最も重要な場所であるのだ。

そんな俺たちにとって神聖なる場所でシェルシドラの重々しい声が続く。
「神の子と呼ばれているエンシッダの配下の人間たちは、ほとんどが俺たちと『同じ』だとシラミネは判断した。ほぼ間違いないだろうと俺も思う。」
「そうか。」
罪人の巡礼地での人間たちとの戦いの後、俺は予めその最中に捕えるように指示した神の子たちを天使の領域に連れ帰りそれを調べるようにシラミネに指示をした。
シラミネとはサンタマリアの娘の一人で、この神々の霊安室に入ることを許した数少ない天使の一人。
非常に優秀な科学者でこの部屋の管理を任せている。

――その彼女が天使と神の子を同じだと判断した

それはシェルシドラが言うまでもなく、確実なる事実ということ。
しかし、神の子という存在に直接対峙した時に予め予想し覚悟もしていたので、俺は大げさに驚いたりはしない。
ただ、やはり・・・という思いの中に、幾許かの落胆があるのは事実だ。

「どうするつもりだ？」
「さあ、どうしようかな？」
それを隠すように明るく答える。
「エヴァンシェッド！真面目に聞け！！俺たちが今までこの事態を避けるためにどれだけの苦労してきたか分かってるだろ？！」
――だが、そのためにどれだけの嘘をつき、俺たちは偽りを重ねてきた？
シェルシドラのいうことを頭では理解している一方で、それに対して酷く皮肉めいた自分を感じた。
そして、そんなふざけた態度に苛つくシェルシドラに、いつもの俺ならもっと真面目に言葉を返すだろう。
だが、今までの長い年月をかけて築き上げてきたものの意味に揺らいでいる俺と隠せない落胆が、それをさせてくれない。
「魔人（ベルトゥール）という存在が出てきた時から、お前だってこの事態を想像していなかったわけじゃないだろ？」
だから、でてくるのはそんな何の解決にもならない言葉。
「俺が言っているのはそういうことじゃない！この事態をどうするかってことだ？！」
そして、そんな俺の心はシェルシドラにすぐに見破られ、彼は俺だって理解はしている正論を並べ立てるのだ。
「もし、天使が人間だということが全ての天使たちに知られてみろ・・・天使たちは今の均衡を大きく崩すことになるんだぞ！」
「そんなこと分かってるっ！！」
突如、大声を出した俺に目を丸くするシェルシドラ。
心の中ではぶつくさ言っていた俺だが、今まで表情一つ変えなかったのに急に声を荒らげんだ。そりゃビビるよな。

そんな風に客観的に状況を判断している自分を感じながら、今の俺にそんなシェルシドラを気遣う余裕はない。

「エヴァ――」

「だが、俺だってどうしていいかなんて分からないんだっ！！」

そう、この最悪なる事態を今まで予想していなかったことなんてない、むしろいつだってその事態を考えすぎるくらい考えていたさ。

――そして、そうならないように嘘に嘘を、偽りに偽りを重ねてきた

――そして、そうする度に増えていく罪状に罪悪感と恐怖が募った

だけど、それを避けることばかりは頭に浮かぶのに、いざ本当に最悪の事態になった時の対処法など何一つ思い浮かばなかったんだ。

そもそも天使とは神によって契約を強いられ、神の血（ニス・ドゥア）を強いられた『人間』。

魔力を、永遠の命を得たけれど、その代償に神々に服従を強いられ彼らの所有物になり下がらざるをえなくなった。

だが、その真実を多くの天使は知らない

先にシェルシドラは天使と神の子（マイマール）は『ほとんど』同じ存在だと告げた。

そう。この二つは完璧には同じではない。

――その違いは人間であった時の記憶のあるかないか

はじめは二つの違いの中に翼の有無も含まれるかと思っていた。

（一見すると神の子（マイマール）には翼はない）

だが、戦いの後にシェルシドラに聞く所によれば神の子（マイマール）にも翼が生えたという話があったため、それはなくなった。

まあ、よくよく考えれば『翼』は神との契約の証だから、神と契約をして魔力を得たというならば翼がないのはおかしい話なのだ。

そして、結果として残った恐らくたった一つであろう天使と神（マイマ）の子（ール）の違い。

基本的に天使たちのほとんどは人間であった時の記憶もなく、自分が人間であったことも、また天使が人間であることも知らない。

それは神が天使たちに『人間』であるという尊厳、そして一族意識なようなものを取り除き、予め俺たちに天使という名の神の所有物であるという意識を植えつけるための手段。

――だから、天使たちは神の所有物であることにも、そして、人間を虐げることにも抵抗がなくなった

それが意図してなされた結果なのか、はたまた単なる偶然の産物なのか俺が知り得るすべはない。

ただ、結果として人間という種族意識の排除により天使たちは人間を殺したり、虐げることに何の抵抗も感じなくなった。

おかしなもので同族であるか、そうでないかは生物にとって大きな意味を持つようだ。

エンディミアンとアーシアンがそのいい例だ。

二つは長きにわたり大きく隔たりを持っていたはずなのに、いざこうして今のように天使と敵対しようとしたとき、妙な連帯感をもって団結する。

同族種族などという事実、それは本当のところは大した意味はない。

だが、自分の仲間かどうか誰にしもが人の腹の中まで見通せない以上、こうした同族かそうでないか、そういった大きな括りが意味を持つような気がしてくるのかもしれない。

だから、俺はシェルシドラは天使たちが自分たちが人間であると知った時の我が一族の揺らぎを恐れている。

天使とはいわば神が作り上げた偽りの種族、そして、それを利用して独立させたのが俺達神と契約（ファギュラド）せし天使たち。

だが、もし自分たちが人間であると知った時、無論その事実に驚くと同時に天使たちには俺たちに対しての不信感や、生贄に捧げてきた人間たちへの同情などの感情が発生するだろう。
そして、それは千年という長きにわたり俺たちが守り続けてきたものへの歪(ひず)みへと姿を変える。

――守り続けてきた偽りの世界の崩壊

それだけは絶対に避けなければならない。
それは俺の罪云々の話以上に、天使という種族の崩壊を防ぐために、この偽りだとしても穏やかなる楽園を守り続けるために。
だから、魔人(ベルトゥール)という人間を天使に近づける研究については、無論戦力としては欲しい研究ではあったが、それは俺たちにとってはタブーに他ならなかった。
だって、それは神の子(マイマール)ほどにないにしても、人間が俺達に近づくという論理を証明させるわけにはいかないのだから。
そして、その事実を隠すために俺たちは確かに様々な事を繰り返した。

――なのに、このままでは俺たちが想像していた最悪の事態を迎えてしまう

それだけは避けなければならないのに、どういうことか神(ファギ)と契約せし天使(ユラド)は俺とシェルシドラしかいない。
サンタマリアは未だ心身膠着状態(しんしんこうちゃく)で今の状況に対応できるようでなく、ラインディルとはどこにいるかすら不明なのだ。

――こんな状態で俺たちに何ができるというんだ?

混乱と困惑の中、俺はシェルシドラの問いの一つにも満足に答え

られない自分が嫌だった。
千年前、どれほどの覚悟をもって天使の長である万象の天使を名乗ったか忘れたわけじゃない。
だが、押しつぶされそうなほどに偽りを重ね続けた重い罪、多くの天使たちの未来を担う長としての重圧に、俺はもう一人じゃ耐えきれなくなってきているのかもしれない。

第８９話　世界は偽りに彩られ　１（後書き）

これからしばらくはエヴァンシェッド視点の天使よりで物語は進行していく予定ですが、しょっぱなから重々しい感じです。
エヴァンシェッドの同族意識云々の話は結構私見が入っているので、人によって色々思うところがあるとは思いますが、私は何かをこう徹底的に攻撃できたり残酷になれるのは、その対象が自分とは全く別のものだと思っているからできるんじゃないかな？と思っています。
もし、少しでも自分と同じ部分があると思うなら、誰だって徹底的には残虐にはなれないし、同情したりするものだと私は思うのです。なのに、相手の気持ちも何も考えなしに、それを傷つけても何も感じないというのは、その対象のことを本当に何一つ分かろうともしていない、分からないものだと思っている、別の生き物だと思っているんじゃないかな？と思うのです。
今回、エヴァンシェッドの言うところは種族みたいに大きなくくりですが、それはもっと人間同士の小さな括りでもあるんじゃないかな？と私は思ったりしています。（この辺りは完全な私見な上に、分かりにくい話になってしまっていてお目汚しですいません）

第９０話　世界は偽りに彩られ　２

「すまない。少しだけ一人にしてくれないか？」
何一つ音のしない神の霊安室（ティストーラ）で興奮して収拾のつかなくなった自分が、これ以上シェルシドラの前で醜態（しゅうたい）を見せないようになるべく声を抑えて告げる。
「ああ。」
シェルシドラはさすがに付き合いが長いだけあって、それだけで俺のことを分かってくれたのかその一言で簡単に引き下がってくれた。
そして、部屋から出る間際に
「俺もお前を責めるような事を言って悪かった。俺が言うことでもないが、自分を追いつめるなよ？これは『俺たち』の問題なんだから、考えるなら俺も一緒だ。」
そう優しげな声を残していった。
シェルシドラの気遣いが分かった。昔からあいつはこんな俺にも優しかった。
だけれど、その優しさが今は余計に俺の心を重くする。
確かに現状は天使全体の問題かもしれないが・・・

「でも、全部『俺』のせいだ。」

しかして、一人になったと油断して思わずついて出た自嘲じみた独り言に、誰かが声を被せる。
「そうですね。でも、それを受け入れたのも、貴方の罪を利用してのも、また天使たちではないのですか？」
「誰だっ！？」
気配も何も感じていなかったため、驚きと警戒を織り交ぜて俺は薄暗い部屋を見渡した。

すると部屋の奥の方、薄暗いを通り越して完全な闇の中からぼんやりと白い影が動く。

「立ち聞きするつもりはなかったんですが、出ていくタイミングを逸しました。言っておきますが、私の方が貴方達より先に神の霊安室（ティスト・ルーラ）にいたんですよ？」

穏やかな口調で紡がれる女の声。

そして、天使ですらほとんど入ることを許されなかったこの部屋にいたのは、翼を持たない女。

しかし、立ち姿は至って普通の人間の女だが、その穏やかな声を発しているだろう顔はその全てを黒塗りの鉄製の仮面で覆われていて表情は見えない。

仮装舞踏会でもあるまいし、ましてや何の装飾も施されていない仮面をつけているなどどうみても異様だとしか言いようがない。

だが、俺は彼女を認めても驚くことも、彼女を捕えることもしようとはしなかった。

「マルー・ドシャ、どうしてここに？」

しかして、シェルシドラとの会話だけでなく、聞かれたくなかった独り言を聞かれたのだ。

俺の声が咎（とが）めるものになり、彼女を睨みつけたことも仕方ないというものだろう。

「ご挨拶ですね。私はただ貴方のために予言を伝えに来たのですよ？だから、貴方が来るだろうこの場所で貴方を待っていた。」

仮面越しに聞こえるくぐもった声、仮面に空いた二つの穴からギョロギョロと動く深い光を湛えた瞳。

果たしてその瞳は世界の未来をも見通す。

――――そう、彼女は予言者

「えらく上からの物言いだが、それがお前の本来の役目だ。予言は告げて当然だろ？ここ最近、それを怠っていた方が異常だ。」

彼女は未来を見通すことができる存在である故に、この天近き城（フェデス・ジグロア）に住まうことを許された人間・・・いや、人間ともまた違うか。
「それは申し訳なかったと思っています。」
謝る声にはそんな様子は微塵も感じられない。
「でも、私もまさかヴィスが裏切るなんて思ってなかったんです。」
「いい訳はよせ。」
そして、続けられた言葉に元々イライラしていた心が喰いついていく。
ぐらぐら揺れる天使たちのというか、俺の危機的状況を嘲笑（あざわら）っているに違いないエンシッダ。
そもそもあいつがここまで俺たちの裏をかき、全てを思い通りにしているのはマルー・ドシャと同じ能力を持つヴィ・ヴィスターチャの存在が大きいだろう。
だが、それに対して俺たちの元に残った予言者であるマルーが、その力を俺たちに全く貸そうとしなかったのだ。
俺が彼女の役割を怠ったといったもの、その辺りに含みを持たせている。
「大体、彼女がエンシッダに肩入れしていることはお前も知っていたはずだ。何より未来を見通す力を持つお前がどうしてそれを予知できなかった？」
それに未来を知ることができる存在が『思っていなかった』という言葉一つで、この現状を逃れられるなど思ってもらっては困る。
何より予言の力を手に入れて、この最悪の現状を避けるために俺たちは彼女たちを身の内に入れるという、ある意味賭けに近い危険を犯したのだ。
「それは何度も言っているはずです。未来とは一瞬一瞬で揺らぐ不安定なもの。いくら私たちが未来を見通せるといってもそれは曖昧で小さなことですぐに変化するものなのです。それにあの子は人間に味方しただけではなく、私の能力を封印までしていったのです。それはやっと解除できましたが、正直、ここ最近の私の力はほとん

ど皆無と言ってよかった。」

――――だから、それがいい訳だというんだ

繰り返される言葉に強い負の感情が湧くが、そういう俺だっていい訳ばかりだ。

それを棚にあげて彼女だけを責めるのは些(いささ)か気が咎めた。だから、話を変える。

「・・・話は分かった。なら、今は力が戻ったということなんだな？」

マルーの力が戻れば、エンシッダの率いる人間たちに簡単に出し抜かれるということもあるまい。

そして、きっと、彼女もエンシッダ達の次の手でも予言したのだろうと思っていた俺だが、かくして不気味な仮面を被った予言者は俺の思惑を大きく超えた次の一手を繰り出した。

「ええ、だから貴方に予言を告げに来たのです。エヴァンシェッド、私が以前告げた『運命の歌』を覚えていますか？」

「？ああ」

それは千年前、いや、それよりも昔、神がこの世界に降り立つ前から刻まれていたという世界の運命を告げた歌だという話。

確か・・・とその内容を思い出すより先に、静かなるマルーの歌が神の霊安室(ティストーラ)に紡がれる。

白き光より堕ちた翼は　黒き寝台で眠る
千の夜　千の朝の果て
其(そ)を白き光より　引き千切りし
黒の血が　其(そ)を永き眠りから　目覚めさす
目覚めし翼は　契約という名の楔(くさび)を身に刺し

白き光に還るのだ
しかして　翼の永い旅は終わを告げ
世界の胎動(たいどう)が　全ての始まりを告げる

静かで穏やかなその歌はまるで目覚めることのない、だが、それでも死ぬことも許されぬ聖櫃(せいひつ)に納められた神々たちへの子守唄のような鎮魂歌のような不思議な歌声。
千年前、白き神にマルーたち未来を見る者と引きあわされた時に聞かされたその歌。
その時はその歌の意味どころか、難しい言葉の言い回しさえ理解できなかった。
だが、その美しい調べが千年経っても胸に焼き付いている。

――ああ、だけど初めて聞いたこの歌を歌っていたのはマルーではなく、今は『柱』となった彼女だった

「だけど、この歌には続きがあったのです。いいえ、『運命の歌』の通り世界が胎動が全ての始まりと告げたことにより続きが生まれたのです。」
千年前に思いをはせていた俺だったが、マルーの落とした爆弾に思考を止める。
「『運命』に続きが生まれた?」
「ええ。私も長きにわたり世界を見つめ続けてきましたがこんなことは初めてです。だから、ヴィスが私を裏切るまで気がつかなかった。『運命』に続きが生まれたことも、それに私よりも先に気がついたヴィスがそれを隠していたことも。」
言いきったマルーからは何の感情も読み取れない。
不気味で無機質な仮面の奥に見える爛々(らんらん)とした瞳に、ユラリと憎悪の揺らぎが瞬(またた)く。
その瞬間に神の霊安室(ティストーラ)の静かな空気が乱れた気がした。

「私はずっとこの歌が貴方を、白き光をその体に宿す生命の主を中心とした世界の始まりの歌だと思っていました。そして、千年前に悪魔によって遠のいた完全なる白き力の解放が、いつしか片翼が戻ることで元に戻るための歌だと。だからこそ、私たち『――』は天使に貴方に従うことに決めたのです。」

最近、戻った片翼がぴくりと震えるのを感じた。

「ですが、それは違ったのですね？私たちが知り得る未来とは所詮は断片的なものにすぎず、事実とは異なる場合が多いもの。私は先ほど貴方が白き力を完全に我がものとすることで、世界が生まれ変わり、新たなる歴史を作り出すのだと思っていましたし、実際、この千年間の東方の楽園（サフィラ・アイリス）がその新しい世界なのだと思っていました。」

――千年前に手に入れた全ての生命を司りし白き力は、確かに世界を変えるほどの力を持っている。だが・・・

「でも、それは違いました。ここは新しい世界じゃない、千年前に死にかけた世界のまま。終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告を発動させたことで騙されていましたが、貴方は決してその白き力の全てを手中に収めているわけではないのですね。」

「騙していたわけじゃない。」

確かに白き神の力を、俺は千年前に得た。

だが、他の神とは違い白き神の力は天使という、元は人間の姿をした俺にはあまりに大きすぎる。

「ええ、分かっています。貴方は言わなかっただけで、力を持っているという虚勢を張ったにすぎません。ですが、その虚勢は貴方が終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告という絶対的な神の力を見せつけたことで全てを騙す結果となりました。そして、今、私の予言はそれを虚勢から真実へと変えることができすのです。」

――虚勢を真実へ？

その言葉に心が揺れた。
だが、次の瞬間にはそれもまた真実に偽りを重ねるだけなのだと自分を戒める。
そうして、俺は、俺たちは罪を重ねてきたんじゃないか？
そう思えば、このままマルーの言葉に流される自分を留めることができた。
だけど、俺の耳元であの人が呟く。

『貴方は何も心配しなくていいの。』

千年前に俺に偽りと罪を犯させたあの人と目の前のマールが重なる。
そうして、マルーは新たなる偽りの歌を紡ぎ出す。

しかして　世界の胎動（たいどう）は　汚（よご）れた神の目覚めを促（うなが）す
全ての始まりは　破滅（はめつ）の階段を　転がり落つ
翼の帰還
其（そ）は　始りにして終わりを　告げるもの
東方の楽園（サフィラ・アイリス）の　封印を解くもの

しかして　始まりと終わり　再生と破滅を　決めるは
目覚めし翼が　白き力に　刺したる　契約という名の楔（くさび）
世界の全てを　握りし鍵
世界は楔（くさび）の存在に　全てを委（ゆだ）ね
楔（くさび）は　全ての始りにして終わりなるものと　相成（あいな）りなん

マルーは過去の運命の歌が俺という『白き光』が新しい世界を始めることを予言したものだと告げた。
それには完全なる白き神の力を俺のものにしなければならず、そ

のために悪魔に切り落とされた翼が必要だった。
翼は神との契約の証故に、片翼のままでは魔力も半減する。（まあ、白き神の魔力は大きいので半分でも十二分な力を持っていたのだが）
だから、マルーは運命の歌の続きを知る前は、その翼が戻ること＝白き神の完全なる力と思い、それにより千年前に神々がいなくなった新しい世界がさらに進化を遂げるのだと思っていた。
だが、続きが始まったことにより、それは単なる始まりではなく更なる問題の発生だと彼女も気がついたのだ。
その意味は歌を聞いただけでは、まだ分からない。
だが、その言葉の意味だけを考えればどうにも楽しい話じゃなさそうだと混乱する思考の中で、どういうことか俺は確かな確信を抱いていた。
生まれた歌を聴いた瞬間に熱くなる戻った片翼と、頭の中に過る見たことのない情景。

『翼（エヴァ）よ！私の願いを聞いてくれっ！！』

そこには泣きそうに顔を歪めた、血みどろのヒロの姿。
そして、彼は枯れた不浄の大地（ディス・エンガッド）で舞落ちる翼の中、彼は俺にいや翼（エヴァ）に向かって叫んでいた。
瞬間に歌の中で『落ちた翼』を貫いた『楔』はヒロだと思った。
何一つ根拠はない。だが、俺の中の翼が俺にそれを教えてくれた。

『お前とヒロは一緒にいてはいけない。』

そして、次の瞬間に何故だか罪人（アークヴェル）の巡礼地でヒロをのっとった悪魔の言葉が蘇った。

第９０話　世界は偽りに彩られ　２（後書き）

いやいや、この物語も９０話まで到達！１００話を目前にして、なんと近々連載を始めて１年を迎えようとしています！
これも一重に拙い作品ながらも温かい目で見守ってくださっている読者の皆様のおかげでございます。本当にありがとうございます！！さて、１００話を迎えたあたりで何か企画でもしようかな？とただ今、色々考えている最中ですのでお楽しみに！（まあ、このペースでは２・３か月先の話になりそうですが、何かリクエストなどがありましたら遠慮くなくいってくださいませ）

さて、話の方は些か急展開を見せておりますが、次からは天使側の話なのは変わりないんですが、エヴァンシェッドから視点は変わります。さて、次は誰の視点でしょう？

第９１話　世界は偽りに彩られ　３

あんな風に声を荒らげるエヴァンシェッドを見るのは久しぶりだった。

美しい男の激昂する姿というのは迫力があり、部屋を出た今も俺の小さな心臓はバクバクと大きな音をたてると同時に何とも言いようのない感情にキュッと縮んだ。

でも、それは決してエヴァンシェッドに驚いただけじゃない。

加えてアイツがあんな顔をすることすら俺が忘れていたことに気がついたから・・・いや、アイツに全てを押しつけて俺たちがアイツに感情を露わにするということを忘れさせてしまったことに気がついたから。

だけど、それを分かっていながら大きな扉の閉じられた先、神々が眠る部屋の中で何かを耐えるようにじっとしているアイツに俺がしてやれることは何一つない。

そんな自分が酷く小さくて情けない存在に思えた。

――――千年以上生きていても俺は何一つ成長していない

＜ＳＩＤＥ　シェルシドラ＞

「シェルシドラ、あの男はこれからどうするつもりなんだ？」

しかして、そんな風に誰もいないはずの廊下でやりきれなさに苛（さいな）まれていた俺を現実に引き戻したのは気持ち悪いくらいに野太い声。

いくら男でもこんなに低くて迫力のある声を持っている人物には、千年生きていてもたった一人しか会ったことがない。

だから、声の主が誰かはすぐに分かった。
そして、同時に声の主が『あの男』と酷くぞんざいに吐き捨てるように告げた人物にも見当がつく。

「仮にも天使の長に対してその言い草はないだろう？」

――そう、『あの男』とはこの扉の先で全ての天使たちの生命という重い重責に一人耐えるエヴァンシェッド

「俺はあの男を自分の上に立つ存在だとは、ただの一度とて思ったことはない。天使の王家に仕えし俺の上には王族がいるのみ。それを勝手に捻じ曲げたのはお前らだろう？」

――そして、それに真っ向から反抗するのは天空騎士団第二師団師団長ジグラッド

ジグラッドはずっとずっと昔、エヴァンシェッドが天使の長になった時から、エヴァンシェッドにというか俺達神と契約せし天使に対してこんな態度だった。
もういい加減、聞き飽きたといってもこの男の態度は変わらない。
こいつは『天使の王家』を壊した俺たちを恨み続けているのだ。
そして、彼がそれほどまでに拘りつづけている『天使の王家』とは何かと問われると、簡潔にいえばそれは神々が勝手に定めた天使の偽りの長。
増えた奴隷を管理するための神々が定めた仮初の王。
しかして、神々の奴隷から脱するためにそれを壊したのは確かに俺達、神と契約せし天使かもしれない・・・
「だが、俺たちは別に天使の長になりたかったわけじゃない。ただ自由を得るために戦った結果、全ての天使たちが俺たちを長だと認めたにすぎない。それはお前だって分かってるだろ？」

例えもう何物にも囚われない自由を手にしたとしても、誰しもが何らかの指標がなくては道を見失ってしまう。

その指標となった人物が潰れそうなほどの重圧に苦しむことになると知っていても、人はそれがなくては不安で不安でどうにかなってしまうのだ。

だから、神という支配者が消えた瞬間に天使たちがエヴァンシェッドという新たなる指導者を求めたこと、それは極めて自然な流れ。

そして、ジグラッドとてそれを知らないはずはないのに、それでもこの男は強情を張り続けるのだ。

「それでも俺から、王家という生きがいを奪ったのは紛れもなき事実。全ての天使がお前たちを認めようと俺が貴様らを認めることは一生ない。」

――――まさしく『頑固者』、ジグラッドにはその言葉しか当てはまらないだろう

そして、神に与えられた王家に従う一族というポジションが未だに彼を縛っている。

実際、尊き血（ビットゥ・ラ）の天使なども王家と神という縛りがなくなった今でも存在しているくらいなのだ。（それも、そもそも神が定めた天使の階級だ）

神の支配下が消えても、天使たちは未だにそれに縛られている現実は正直言えば否定できない。

それは人間という記憶を消された『天使』という名の生物にとっては、生まれながらに刷り込まれた潜在的なものであり、俺たちが躍起になって消そうと試みても消せない存在。（まあ、元は人間だって他の天使たちは知らないのだが）

だが、それでも俺たちの努力も全くの皆無ではないのか、天使たちの大半は現在の体制を受け入れつつあり、ジグラッドの後ろにいた年若い天使の方はそんなジグラッドの方にオロオロとして彼を諫

めようと、ここで初めて声を発した。
「あ、兄貴、やめろよ？こんな所で喧嘩を売らなくてもいいだろ？」
ジグラッドと違いひどく自信なさげで気弱な声、彼の後ろにずっといたのに些か存在感に欠ける影の薄い男。
俺はその男に声をかけた。
「やあ、ヴェルトラス。」
「お、お久しぶりですっ。シェルシドラ様。」
それに対して慌てて恐縮したようにオドオドと俺に挨拶を返すヴェルトラス。
実はジグラッドの実弟である彼は天空騎士団の団員の一人で、ちなみに俺が長を務めている第一師団に所属しており、この頑固兄とは違い俺たちにも敬意を払ってくれる気は小さいが礼儀正しい天使。
だが、頑固兄はそれが気に入らない。
「ヴェルトラス。『様』などとつける必要はないと言っているはずだ。こいつらは王家を滅ぼしたたかが平民出の天使にすぎない。」
そう言って、弟とはいえ威圧感のある声で弟まで脅す。
そういえば、この男は弟が俺の部下になることにも酷く嫌悪感を丸出しにして俺に食いかかっていたものだ。（そのくせ第二師団の師団長としてサンタマリアの部下になることには、別の事情があり何も言わなかったが）
彼にとっては天使の中でも庶民出の俺達と対して、王家の近衛として選ばれたというプライドがあったのだろうが、何度も言うがもうそれはあまりに時代錯誤な考え方。
何が正しいかなんて、正直、そんなに頭が良くないと自覚している俺に判断できるはずがない。（神と契約せし天使の中でも、他の3人と違い俺だけは肉体労働派で、三人の言う通りに動いていただけという自覚はある）
でも、どんなに過去を振り返り、それを望んだところで何一つそれが戻ってくるわけではないんだ。
ならば過去のことをどうこうと論じる前に、こんな現状の中では

今をどうするか考えるべきはそれじゃないのか？

――――そして、アイツは、エヴァンシェッドはそれを思い悩み、過去と戦い今も一人で戦っているというのに・・・

そう思うとそれまで感じていた自分に対する無力感に、ジグラッドに対する苛立ちが加味され自分の中でムクムクと怒りに似た感情が成長し、ジグラッドに殺気じみたものが湧いて出た。

まあ、実を言えばこの男とと話していると、いつもそんな感じになっている自分がいる。（ジグラッドと話していると、その言葉に対する理不尽さと自分に対する無力感は勿論、それに対して何一つうまい言葉を返せない自分に対する怒りが爆発してしまうんだ）

しかして、エヴァンシェッド達はそれを交わすすべをもっているらしいが、単純な俺がそんな器用なことをできるわけがなく、結果としてジグラッドと話しているといつの間にか剣を抜いている自分がいる。（気がつくと喧嘩というには物騒なぶつかり合いが始まって、それを副師団長たちに必死で止められたりしている）

「いい加減にしろ。」

そして、今日もそれから漏れることなく、いつもどおり自分でも大層な殺気だと思わせる気を纏ってジグラッドを威嚇していた。

対してジグラッドもそれが当たり前だと言わんばかりに、それに応じて殺気をこめて俺に向かって剣を構える。

こんな風にこれまで千年間、同じ天空騎士団（アイッシュグランド）の師団長同士だというのに俺とジグラッドはこうして剣を交わらせてばかり。

俺達神と契約（ファギュラド）せひ天使を受け入れられないジグラッドと、その言葉を受け流しきれない俺の交わらない平行線が剣を交わらせ戦いを呼ぶ。

ただ、それでもそれが副師団長たちに些かの迷惑を掛けていると

いう以外には大事になっていなかったのは、ジグラッドが唯一の主人と崇めている天使の王族の生き残りのラインディルトが神（ファギ）と契約せし天使（ユラド）の一人だからで・・・それがいなくなった今、奴の中の感情を留める存在は何一つないのだ。

そして、いつも以上にジグラッドが殺気立って妙に喧嘩腰なのも、未だにラインディルトの消息が不明だということが原因だろうことは明らかだった。

かくして、そこまで回らない頭でようやくたどり着くと、俺の頭の中に贖罪の街の人間たちを筆頭に天使の領域（フィリアラディアス）で人間たちが起こした暴動にまぎれ、ラインディルトが俺の目の前で忽然と姿を消した時のことがありありと思い出された。

第９１話　世界は偽りに彩られ　３（後書き）

少し短めの初シェルシドラ視点の話になりますが、ここらで色々あいまいになってきた天使たちの事情とかを、整理できたらと思っています。なので、過去の部分を遡る感じで話にはあまり動きはないかと思いますがご容赦くださいませ。

さて、所で第一部でヒロが天近い城に訪れたとき、エンリッヒ達が急いで何処かに行ってしまい、ヒロを一人にした場面がありましたよね?それは実は今回みたいにジグラッドとシェルシドラが喧嘩を始めて、それを止めに行ったという裏設定があったりします（笑）

細かい部分ですが、もしお暇でしたら振り返ってみてください。

第９２話　世界は偽りに彩られ　４

「いつまで付いてくるつもりだ？」

蘇る記憶の中でラインディルトの背中から発せられた声はどこまでも感情のない冷静な響きを持っていた。

そう、まるで俺が奴の後を追っていたことなど始めから知っていたかのように。

――――でも、それはおかしいだろ？

だって、お前は利用されサンタマリアの裏切りの濡れ衣を被されただけなんだろう？だったら、どうして俺が見張っていても驚きの一つも見せようとしない？それに――――

「お前こそ何処に行く気だ？その先は不浄の大地（ディス・エンガッド）だぞ？」

エヴァンシェッドの話ではサンタマリアに利用されたラインディルトは、俺の視界の端で僅かに火の手が上がっているのが見える白き神（ア・ルマンヌ）の御許で起こっているだろう、贖罪（しょくざい）の街の人間たちの暴動の中に姿を見せるはずだった。

なのにラインディルトは俺たちの都で何かが起こっていることは分かるだろうに、それには目も向けずにまっすぐ楽園の端であるこの守護天使（ガルヴァチュア）の白壁に進んでいく。

普通の天使ならば近寄ろうともしないこの場所に、この時にどうして用があるというんだ？

「ふ・・・その言葉はそっくりお前に返すぞ、シェルシドラ。人間どもの暴動を鎮圧するのは天空騎士団（アイッシュグランド）の役目だろ？その長がこんな所で油を売っていていいのか？」

「お前っ・・・この暴動のことを知っていたのか？！」

俺は天に届くのではないのかと思えるほど高い壁のせいで月の明

かり一つ届かない暗闇の中、微かな電灯の明かりに浮かび上がる振り返らないラインディルトの背中に近寄り、その肩を強引につかんで振り向かせた。

「知っていたとしたら・・・何だ?」

だけれど、振り向かせたところでいつも通りむっつりと動かない顔を俺に向けるだけのラインディルト相手じゃ（そういえば、こいつは昔からエヴァンシェッドくらいにしか笑顔を見せなかった）、それをしたところで何一つ俺に伝わるものはない。

「な、何だって、知っていたらどうしてっ!?誰にそれを!?」

訳が分からなかった。

『サンタマリアは息子の仇を討つために俺たちを裏切り、そして、その罪をラインディルトに被せようとしている。』

俺はそうエヴァンシェッドに言われていた。

何十年か前に魔人（ベルトゥール）の暴走によって死んだサンタマリアの子供・ハインのことは俺だってよく知っていたし、その事でサンタマリアがどれほど悲しんだか苦しんだかも理解していたつもりだった。

だが、だからって天使が人間であるという可能性を明るみに晒す危険をはらむと同時に、天使の『繁栄』のために非常に有効な研究であった魔人（ベルトゥール）の研究をサンタマリアの私怨だけで終わらせることなどできず、ましてや俺の感情としてはエンディミアン一人を殺したところでサンタマリアの悲しみも苦しみも晴れるとは思えなかった。

だから、そう言い聞かせてサンタマリアを説得し、彼女もそれに納得したと思っていた・・・のに、何十年という時を経てサンタマリアは憎しみの炎を燃え尽かせようとしていたのだ。

そして、そのために人間たちを扇動し、そのどさくさに紛れてエンディミアンの科学者を殺し、人間たちの暴動は魔人（ベルトゥール）の研究の責任者であったラインディルトに被せようとした。

だから、それをしったエヴァンシェッドは自らサンタマリアを止

めに、そして、俺にはラインディルトが利用されることのないように見張りにつくよう命令したのだ。

――なのに、ラインディルトは全てを知っていたのか？

燃えるように赤いラインディルトの瞳に映る俺は驚きと混乱に情けなく歪み、それをいつもなら皮肉な笑みを浮かべて見ているはずのラインディルトが今日この時に限っては些かの余裕も見せずして真剣な様子しか見せない。

それが千年も前から仲間のはずの男を見知らぬ人物のように思わせて、俺は言いようのない焦燥感にとらわれた。

何でもいいラインディルトから何か俺の中に湧きあがるその不安を払拭するような言葉が聞きたかった。

「お前には関係のない話だ。」

だが、ラインディルトからから出たのは俺を突き放すような抑揚のない一言。

「ら・・いん」

そして、呆然とする力の抜けた肩のつかんでいた俺の手も振り払うと、瞳同様に赤く燃えるような翼でふわりと夜の闇に舞い上がる。

追いつかない思考能力のせいで一瞬だけフリーズして固まった俺だったが、すぐにそれを追う。

関係ないと言われようが、このままラインディルトを見失ってはいけないと俺の本能が告げていた。

しかして、体力だけでは負けるつもりはなかったが、飛び上ったと同時に瞬間移動の魔法を発動させていたらしいラインディルトは彼を掴もうとした俺の手をすり抜けて一瞬にして夜の闇に溶けて消えてしまったのだ。

もしかしたら、白き神（イア・ルマンヌ）の御許で人間たちの暴動を止めに行ったのかもしれない・・・、俺なら今すぐそうしたいと、そう願いたいと思うことが闇と何も語らぬ壁だけしかない場所ですぐに思い浮かぶ。

だけど、俺の直感はそれは間違いなくないだろうと告げていた。
だって、白き神（イア・ルマンヌ）の御許に戻るというのなら、また、すぐに会うことになるというのであれば、あんなことは告げないだろう？

「俺は『あの方』のために千年前から止まっていた時を動かしに行く・・・しばしの別れだ。息災にな、シェルシドラ。」

そして、時と場所は現在に戻り、天近き城（フェデス・ジグロア）の人気のない廊下でジグラッドと剣を突き合わせている俺は、未だにあの時から続く混乱から脱出しきれてないのだろう。
あの時から釈然としないモヤモヤとしたものが頭の中に居座り続けて、何をやってもすっきりしないし、ついていないことばかりだ。
サンタマリアはあれから全く元気がないし、罪人の巡礼地（アークヴェル）では白き神を取り戻せないわ、神の子（マイマール）なんて厄介事は増えるし、エヴァンシェッドにはあたってしまうし、こんな所でジグラッドとやりあってるし・・・と、まあ言っていると際限がなくなるっ！
その感情のままにつき合わせた剣を思いっきり振り払う。
高い天井に響き渡る金属音が耳触りも、いきなり剣を突きつけ合った俺たちにオロオロするだけのヴェルトラスにも、いきなり本気モードの俺に若干目を見張っているジグラッドにも一々苛ついた。
もう、何もかも忘れるように思いっきり暴れまくりたかった。

「まあまあ、そういきりたたんといて下さい。」

なのに、妙に間の抜けた緊張感のない声が聞こえたと思った瞬間に、俺とジグラッドの間に人影が現れ、二つの剣はその人影によって止められた。
一応は天使の中で最強と言われているのだ（自分で言うのもあれ

だが）、そうそう簡単に剣を止められるのは不本意な気分だったが、その人影を認めてその気分は消えた。

「エ・・ンリッヒ？」

それは先の暴動で怪我をしたために、実戦を退いていたジグラッドの所の副師団長であり、同時にサンタマリアの孫のエンリッヒだったのだ。

「実家に帰っていたのではなかったのか？」

ジグラッドも突然の部下の登場に驚きを隠せないようで、俺がいるのも忘れて戸惑った表情を浮かべている。

「団長たちがすぐにドンパチ始めるんで、おちおち休めませんわぁ。ほらほらさっさと剣を収めてくださいな。ヴェルトラスも怯えてますやろ？」

独特のイントネーションとテンポは張り付いたような明るい笑顔も相なって、いつも場の雰囲気を和ますというか、どうにも緊張感に欠ける。

だが、俺は昔のエンリッヒがこんな話し方をしなかったことを覚えている。

――そして、こんな話し方をしていたのが彼の叔父であるハインであることも・・・

何が彼を変えたのか聞いたことがあるわけじゃないが、エンリッヒが突如として叔父であるハインを倣うようにしだしたのはハインが死んだ頃からだと記憶している。（まあ、容姿については昔から似ていたが）

そして、それに反応するように塞ぎこんでいたサンタマリアが元気になったことも俺は忘れていない。

――思えばあの頃からサンタマリアの中で何かが狂いだしていたのかもしれない

まあ、そんなことを今更俺が言ったところで何がどうなるわけでもないのだが、こうしてハインに瓜二つの姿に成長したエンリッヒを見ると何とも言いようのない感情にとらわれた。

――――同時に本来は『ありえない』天使の成長に、俺は『サンタマリアの家系』を見るたびに言いようのない違和感に襲われる

「ぼーとしてお疲れでっか？」

「うわっ」

しかして、そんな俺の感慨はいきなり覗きこまれたエンリッヒのドアップによって霧散する。

「人の顔見て叫ぶなんて失礼でっせ？あはは」

そういって笑っているエンリッヒの後ろでは、気分が削がれたのか剣を鞘に納めているジグラッドの姿が見えて、俺もバツの悪さを感じながらそれに倣う。

「怪我はいいのか？」

「はい。ヒロさんは甘いお方でっから、元々大した怪我じゃなかったんですわ。罪人の巡礼地での作戦に参加しなかったことが申し訳ないくらいで・・・その際は申し訳ありませんでしたぁ。」

「ヒロ？」

怪我が大したことないのはいいことだが、聞きなれない名に俺もジグラッドも眉を顰める。

「わいを倒した黒の一族の名前ですわ。」

そういえば話には聞いていたが名前までは聞いていなかった。

サンタマリアの話じゃ天近き城から落ちて死んだということだったが・・・まあ、俺には関係ないかと納得して話を流そうとしたが、次のジグラッドの言葉に思わずむせた。

「ああ、あの男の『男の恋人』とやらか。全く節操のないことだ。」

「はあ？そんな根も葉もない噂、信じてるのか？」

確かに数週間前まで自宮に男のアーシアンを囲っているとかで（確かに女関係には目を覆いたくなるようなエヴァンシェッドではあったが）、前代未聞の万象の天使の男色?!騒ぎとなり俺もビビったものだが、様子や話を聞いた分にはそんなことは微塵もなかった。

それにそのアーシアンもいなくなった訳だし、そんな噂は本当に今更といえば今更の話なのだ。

「だが、俺の部下の話だと罪人（アークヴェル）の巡礼地でもそのアーシアンを目の前にしたあの男の様子はおかしかったらしいが?」

「・・・まじかよ」

聞いていなかった事実に俺は戸惑いというよりは半分呆れたような気分になったが、それに過剰反応したのがそれまで笑顔を張りつかせていたエンリッヒだった。

「それほんまでっか?」

笑顔が消え、低くなった声にジグラッドも不思議な顔になる。

ジグラッドとてエヴァンシェッドや俺に対する当てつけでアーシアンのことを言い出しただけで、まさかエンリッヒが反応するとは思っていなかったのだろう。

しかして、エンリッヒはジグラッドの返事を聞く前に、俺たちから視線を外すと先まで俺が中にいた神の霊安室（ティストーラ）に向かって歩き出した。

「ば・・・やめろ、エンリッヒ!今、中にはエヴァンシェッドがっ」

先からまだそう時間がたっているわけじゃない。

俺は当然のように彼を止めたが、それをはねつけるようにエンリッヒは強い口調で言った。

「わいはそのエヴァンシェッド様に用があるんですわ。」

第９２話　世界は偽りに彩られ　４（後書き）

久々のエンリッヒ登場！シェルシドラが触れたエンリッヒの過去などについては、第二部の閑話の方に詳しい話がありますので気になりましたら御覧くださいませ。

第９３話　世界は偽りに彩られ　５

――――エヴァンシェッドに用事？

天空騎士団（アイッシュグランド）の副師団長とはいえ、エヴァンシェッドとはあまり係わりがなかったはずのエンリッヒのその申し出は、非常に違和感を感じさせ俺はそれをそのまま彼に伝えようと思った。

だが、それは重々しい扉が開く音と、そこから出てきたエヴァンシェッドによって遮られ、

「やあ、来たね。エンリッヒ。」

そして、その後ろから思わぬ人物が出てきたことにより、俺の思考は完全にエンリッヒから離れた。

「マル――？」

見間違えるはずもない。

分厚い鉄仮面に頭全体を覆われた異様な姿をしているのは、未来を見ることができる予言者マル――。

神の霊安室（ティストーラ）の中にいたときには彼女がいることに気がつかなかったが、俺は部屋を出てからずっとこの扉の前にいたし、部屋に通じる扉は目の前にあるもの一つだ。

よってそこから導き出される答えは一つ、マル――は俺が訪れるより先にあの部屋にいたということ。

「どうもお久しぶり、シェルシドラ。」

にも関わらず、さも俺のいたことなど知らなかったように涼しく挨拶をする女に若干カチンとくる。

だけど、今はそれよりエヴァンシェッドに聞きたいことがある。

「エヴァンシェッド、お前がエンリッヒを呼んだのか？」

自分で出したのに驚くくらい戸惑った声。

それはまるでエンリッヒが来るのを分かっていたといわんばかりの言葉とタイミングもさることながら、さっきまで神の霊安室（ティストーラ）でエ

ヴァンシェッドから感じた焦燥感のようなものがなくなり、いつもどおり天使の長として表情一つも変わらない彼がいたから。

――マル―との間に何かあったのか？

この最悪の状況下でエヴァンシェッドが自分を取り戻してくれたこと、それはもちろん俺としては嬉しい限りであるが、その理由が見えないことと、そして何より結局彼に何一つしてやれなかった自分の不甲斐なさが心に影を落とす。

だけど、そんな感傷に浸っている暇はなく、エヴァンシェッドが俺の問いに答えてくれることにより話は話は進んでいく。

「いや、呼んだ覚えない。ただ『分かっていた』だけだ。」

そう言ってマル―にちらりと視線を向けるところを見ると、彼女の未来を見る力によりエンリッヒがここに来ることを予め知ったということらしい。

しかし、エヴァンシェッドはエンリッヒを待っていたと言ったのだ。

ならば、エンリッヒが持ってきた『用事』とやらがエヴァンシェッドにとって、何かしらの意味を持っているということだろう。

俺はそれを見極めるべく、次に続くエヴァンシェッドなりエンリッヒの話に耳を傾けようとしたのだが、それを遮る野太い男の声。

（あ、そういやコイツがいたの忘れてた）

「おい、貴様、この状況をどうするつもりだ？」

それはエヴァンシェッドを親の仇でも見るように彼を見下ろすジグラッド。

そして、その後ろには天使の長に対する兄の不遜な態度にアタフタと目を回しているヴェルトラス。（本当にコントのような兄弟だよなぁ）

だが、いつもの冷静さを取り戻しているエヴァンシェッドは、俺のようにジグラッドに対して目を吊り上げるようなことはなく、にこやかに彼を見やる。

「ジグラッド、相変わらず御挨拶だね。弟君が可哀想なくらい青ざめているよ?ダメなお兄さんだ。」

「ふん・・・そんなことより俺の質問に――」

煙を巻くようなエヴァンシェッドの言葉に俺との争い後の怒りが残っていたのか、あっという間にカッとなるジグラッド。

「分かっているよ。だから、私はその話をするためにエンリッヒに会いに来た。」

だけど、それとは打って変わって静かだが、何者にも屈さない強さをもった声でエヴァンシェッドは薄暗い廊下の空気を完全に支配した。(一人称が『私』になっていることから、彼が完全に『天使長モード』に入っていることが分かる)

ジグラッドはその壮絶な強さと冷たさ、そして美しさを秘めた紫の瞳に魅入られたようにその場で固まる。

そして、薄暗い廊下で立ったまま会話を続ける俺たちの視線は一斉に会話の中心たるエンリッヒに向かった。

「へ・・・わいでっか?」

しかして、状況についていけていないエンリッヒ一人が、その場の緊張感にそぐわぬ歪んだ笑みで首をかしげたのが俺には酷く滑稽に見えた。

「そうだ、エンリッヒ。マル―の予言によれば、君が告げる言葉がこれからの天使たちの未来を開く鍵になるらしい。さあ、君の用事とやらを早く聞かせてはもらいえないか?」

戸惑うエンリッヒに対して、その表情や態度は柔和なものだが雰囲気がどうしても有無を言わせないものになるエヴァンシェッド。

――それにしてもエンリッヒの告げる言葉が天使の未来を開く鍵・・・だって？

「ま・まさかっ！わいはただちょっと気になることがあったさかい、エヴァンシェッド様にそれを言いにきただけでっせ？！そんな天使の未来なんて大それたことは何一つありまへんっ！！」

しかして、俺の感じた戸惑いはそのままエンリッヒの戸惑いだったらしく、エヴァンシェッドに対してぶんぶんと手と首を振る。

それはさっきエヴァンシェッドに用があると言っていた時の表情とは全く違う。

「それは聞いた私が判断する。ともかく、君は言いたいことがあって私の所に来たんだろう？その話をするんだ。」

だが、その戸惑いを知ってなおもエヴァンシェッドの強い物言いは変わらない。

それはこの状況に対する焦りか、それともマル―の予言に対する絶対的な自信か分からない。（俺はあまり予言というものを信じていないけどな）

「・・・わかりましたわ。」

エヴァンシェッドの強い言葉と耐え難い雰囲気に押されたエンリッヒは観念したような絞り出した声を出すも、念を押すことを忘れない。

「ただ言っときますけど、本当に皆さんに聞いてもらうような話じゃないんでっせ？ただ、わいが気になったことを確かめとうて、エヴァンシェッド様に聞きたかった話なんでっから。」

そして、エヴァンシェッドにマル―、ジグラッド、ヴェルトラス、そして俺の視線が一斉に集まった中エンリッヒは話し出したのだ。

「実は『ハクアリティス』様のことなんです。」

「ハクアリティス・・・だと？」

聞いたエヴァンシェッドも戸惑いを現さずにいられない様子。
「はい。」
「それはラインディルトのところのエンディミアンのことだな？」
だから、確かめるように矢継ぎ早に問う。
何故なら『ハクアリティス』という人物が、俺たちの身近に思い当たるのに2人ほどいたから。
そして、その人物とはエヴァンシェッドが問うた人物と、サンタマリアの妹でエヴァンシェッドの妻だった天使のこと。
かくして後者について『だった』というのは、その彼女が千年前の戦いで命を落としているからで、その事からも彼女がエンリッヒの話に上っている『ハクアリティス』とは考えにくかった。（そもそもそっちのハクアリティスにエンリッヒはあったこともないはずだしな）
だから、エヴァンシェッドも『ハクアリティス』と聞いただけで、とりあえずラインディルトの囲っていたエンディミアンのことを聞いたのだ。
そして、更に驚くことにその『ハクアリティス』は何百年か前にラインディルトが身辺に置くようになった名前も姿も『ハクアリティス』と非常によく似ていて、その違いはただ天使かエンディミアンかどうかだけ。
初めて見たときは驚いたものだが、何百年も生きていれば似ている人物などいるだろうしと自分たちを納得させて、俺たちはさして彼女のことを気にした覚えはなかった。

――――それがどうして？

「そうです。だけど、それが妙なんですわ。彼女がエンディミアンの間なんかで『天使の花嫁』なんて言われているのは知っとったんですが、それはあくまで『ラインディルト様の』でっしゃろ？せやけど黒の雷（オルヴァラ）の中ではそれが違っとったんです。」

「違う？」
「そうです。何故だか黒の雷（オルヴァラ）の人間たちは皆ハクアリティス様を『エヴァンシェッド様の』花嫁だと思い込んでおりましたし、それにハクアリティス様自身もそのようなことを言っておりましたんや。」
それは初耳で、そして、それ以上に冗談にしてはたちの悪いものだった。
「何を馬鹿な・・・ハクアリティスは千年前に死んだのだぞ？それに姿は似ていてもあのハクアリティスは天使ではない。」
エンリッヒの言葉に俺だけでない、ジグラッドも混乱しているようだった。
その言葉通りハクアリティスは確かに俺たちの前で死んだし、その死体はつい先日も灰色の花園の中にある棺の中で眠っていた。
そして、先日の戦いにおいて完全に消滅した。
――――何故なら彼女の死体はあの場所を離れることができなかったから
その理由を考えれば、エンリッヒがもたらした話は本当に最悪の冗談だ。
エンリッヒもそれはもちろん分かっていて、むきになって言葉を続ける。
「それはわいも分かっておりますっ！だから、気になることだといっとるんです。確かにあれは天使のハクアリティス様であるはずがないんです！でも、そのハクアリティス様をエヴァンシェッド様の花嫁にする・・・その意味がわいには分からなくてっ！だから、それを聞きにきたんですわ！！」
なるほど、意味があるとは思えないが確かに気になる話だ。
「それにっ・・・！」
勢いよくでた言葉は一瞬止まり、そしてエンリッヒの表情が僅かに何かに戸惑ったようなものに歪むが、それでも言葉は続く。

「エンシッダはハクアリティス様をヒロさんの代わりにするみたいなことを言っとったんをわいは聞いたんです！」

その言葉にどんな意味があるのか俺には到底分からないし、エンリッヒの方もそれは理解していないようだった。

だって、ハクアリティスとヒロという名の黒の一族にどんな繋がりがあったところで、正直俺達天使に大きな関係あがあるとは思えなかった。

ただ、エンシッダ・・・あの男が関係しているというところが、エンリッヒにしても俺にしても何か不安を掻き立てる。

しかし、エヴァンシェッドの方は明確な何かをそれで感じたようだった。

「ヒロの代わりだと？」

彼の纏う空気ががらりと変化したのを俺だけじゃない、廊下に集った者たち全てがそれを感じているようでヴェルトラスなど怯えて顔を強張らせている。

「それで奴は、エンシッダは他に何か言っていなかったか？」

「は・はいっ！えっと、わいも黒の雷（オルヴァラ）で偶々立ち聞きをしただけなんで詳しい話はよう知りまへんのですが」

そういえばサンタマリアの孫であるエンリッヒは祖母のために、サンタマリアと同じくエンシッダたちの計画であった人間どもの暴動に利用され黒の雷（オルヴァラ）とも接触を持っていたんだな。

「『翼（エヴァ）』に刺された楔が全ての鍵で、それはヒロさんなんですが、それにハクアリティス様だけがなり替わる可能性がある・・・みたいな？なんつーか、聞いていてもわけのわからん話だったんやけど・・・でも、何や重要な話のような気がしてならなかったんで・・・」

だから、こうして態々エヴァンシェッドの所まで出向いてきたということなのだろう。（本来ならサンタマリアを通して上がってきてもいい話だが、今のサンタマリアにはそれもできないしな）

『・・・』

しかして、そのエンリッヒの言葉を最後に重い沈黙が天近き城（フェデス・ジグロア）に落ちる。（ジグラッドなどは何か言いたげだったが、エヴァンシェッドの纏う空気がそれをさせなかった）

しかして、その重い沈黙を破るのもまた我らが長。

「マルー、私は決めた。」

「はい。」

そして、その言葉を待っていたかのように、静かだが何処となく喜色を湛えた声。

「私は獣の王に謁見を申し出る。」

その言葉は俺だけじゃない、その場にいた天使たちにも、そして、天使の領域（フィリアラディアス）に生きる全ての天使にとって驚くべき言葉だった。

何故ならエヴァンシェッドはここ千年間動かなかった楽園に変化を与えようとしているのだ。

『俺は『あの方』のために千年前から止まっていた時を動かしに行く・・・しばしの別れだ。息災にな、シェルシドラ。』

衝撃を受けた脳は思考を停止していたが、それでもただラインディルトの別れの言葉だけがまるで壊れたレコードのように繰り返し頭の中で響いた。

ラインディルト、お前はこの展開を望んでいたっていうのか？

第９３話　世界は偽りに彩られ　５（後書き）

天使サイドはこれにていったん終了です！（先が気になるところではありますが）
次回からは再びヒロ視点に物語を展開していく予定で、やっとこさ第四部の本題に入っていきます・・・が、しばらくは加筆修正をしていくつもりなので９５話は少し先になるかもしれません。

第９４話　私が貴方を許しましょう　１

例え全ての人が貴方を許さなくても
例え神様が貴方を許さなくても
例え世界が貴方を許さなくても
例え貴方自身が貴方を許さなくても

私が貴方を許しましょう

【私が貴方を許しましょう】

＜ＳＩＤＥ　ヒロ＞

感じるのは身の内から溢れだしてくる熱く重いドロドロとしたものが、血管を血に交って通る気持ち悪い感覚。
何度か経験したはずだが、きっと私は一生この感覚を好きにはなれないと思う。
「ヒロッ！覚悟！！！」
「イッケェ！」
だが、その感覚が嫌だとここで躊躇してしまっては、今現在、私を剣やら魔術で襲おうとしている連中にコテンパにやられてしまう訳で・・・だから、私は我慢するんだ。
体をめぐる血管から体中の毛穴の穴を通して、熱く重いそれが押し出され体中に痛みを覚えたとしても、それでもそれを耐えるのだ。
そして、痛みに見て見ないふりをして黒の剣（ローラレライ）に、体から放出したそれを移すように集中する。
私の意思に呼応するように、つい最近までだったら黒に侵食され

るはずの剣に、ほの暗い灰色のぼんやりとした光が宿る。
次いでそれを確認すると私は剣を両手で握りしめて、襲いくる色とりどりの魔力が灰色の染め上げられるようなイメージを頭の中で巡らせる。
瞬間に体中からそれ・・・いや、それなんて曖昧な言い方をして逃げるのは良くないな、そう『それ』こと灰色の魔力が膨張し体が軋(きし)む音がして、剣だけではなく私の体を覆った灰色の魔力が襲い来た全ての攻撃を受け止め、色とりどりの魔力は灰色に一瞬にして吸収された。

――これは最近、発見した灰色の魔力の特性

「やっぱり、灰色の魔力には他の魔力を同化させる能力があるらしいね。」
嬉しそうに様々な攻撃を食らったはずなのに傷一つない私によってくるのは、似合わない白衣を纏ったアオイ。
「ちぇえ、つまんねーの！」
そして、そんな私を見ていささか不満げなのはケルヴェロッカを始めとした神の子(マイマール)たち。（相変わらず可愛くないガキである）
アオイに協力することを約束してから数週間が経ち、神の子(マイマール)を相手に灰色の魔力を試す実験を私は繰り返していた。
とはいえ最初は灰色の魔力を自分の自由に出すことから始めたのだが、数週間という時をもってして案外簡単にできている自分がいる。
ただ、今こうして体の外に出している魔力など、自分の身の中に感じている巨大な魔力の切れ端にすぎず、その大本の部分は出したら最後、暴走を始める予感がして出せていない。（何しろ罪人(アークヴ)の巡礼地(エル)での前科があるしな）
だが、少量の魔力であればあの時のように自分を見失うこともなく、しかして、黒の剣(ローラレライ)とは違う感覚で確かに自分の中から私は魔力

を作り出すことができているのだ。
アオイの話を聞いた以上、その事には未だに違和感を感じえない。
――――だって、それは私が人間じゃない、私の中に悪魔がいるという証明に他ならないのだから
故に力を使うたびに私は自分が自分でなくなるような錯覚に陥って、すごい力だとはやされる度にこれは自分の力ではないと叫びだしたくなった。（そんなことは一度もしてないが）
まあ、私のくだらない話はこれくらいにして話を実験の途中に戻そう。
「それで灰色の魔力に吸収された魔力はヒロの中に戻ってくる感覚はやっぱりないの？」
さて、灰色の魔力について実験と研究を進めているアオイと、それに協力しているのは私だが、私が灰色の魔力の扱いに慣れてくるのとは別にその進み具合はさほど芳しいと言える状況ではなかった。
「ああ、ないなぁ。魔力が私の中から出ていく感覚はあるが、魔力が返ってくる感覚はしない。」
「ふーん。灰色の魔力は他の色の魔力を確かに吸収しているのに・・・それはヒロのもとに戻らず何処に行ったんだろう？」
「それを調べるのが、お前の役目だろう？」
「うーん、そうなんだけど、本当にほかの魔力とは何もかもが違うし、何の手がかりもないからなぁ。」
そうなのだ。こんな感じであれこれと議論をし、様々な実験と研究を繰り返しているのにも関わらず、正直言って私は何一つ灰色の魔力について理解できているという実感がない。
ただ、灰色の魔力がどういう原理で働いているかも分からないままに、その扱いだけ上手くなっていくことが何となく怖くて、最近は焦りも感じていた。
どうやら、アオイの方もそうらしくて最近では

「ねえ？この際、ヒロの体を掻っ捌いてみるのがいちばん――――」
「絶対にお断りだ。」
私の体の中を除きたいと言い出す始末。
――――まったく！誰がこんなちゃらんぽらんな男に好き好んで体を掻っ捌かせるかっつーの！

「ははは、やっぱり？」
「当たり前だろ――――て、うわっ！」
そうして、アオイに更に詰め寄ろうとした所に何かが私の腰のあたりに体当たりしてきた。
見下ろしてみればフワフワとした柔らかそうなツインテールの小さな頭が見える。
「シラユリ？抱きつく相手が違うだろ？」
「えぇ～！？あってるよぉ、ヒロに抱きついたんだもん！」
そして、屈託ない満面の笑みが私を見上げてくる。
子供特有の高い体温に、輝かんばかりの瞳、シラユリは本当に美しい少女だった。
「何で父親のアオイじゃないくて、私に飛びつくんだ？」
そう、しかして、何となく見覚えのある顔だと思えば、それは目の前で女のように愛らしい顔で笑っているアオイその人。
女性と見紛うほどに美しいアオイの娘が、このシラユリなのだ。
初めてシラユリを紹介された時は、アオイの子供の時を見ているようで、変な冗談かと思ったくらい二人は本当によく似た親子である。
「だって、ヒロの方が遊んでくれるんだもんっ！」
「いやいや、遊んでくれる相手に誰彼と懐いてちゃいかんだろ？最近は変な奴も増えてるんだぞ？」
しかして、私が他人の子供相手にそんな余計な世話を焼いているというのに、

「あはは、ヒロなら大丈夫だよ。」
と、実の父親の方がこんな無責任な言葉を発する。（それでいいのか？）
お気楽というか、よく似た親子を前に思わず頭痛がするような気がして、私は額を押さえた。

「ねえねえ、今日は何して遊んでくれるの？」
いつも実験の後は、データの解析などが始まり、正直それは私の範疇ではないのでアオイに研究室から追い出される。
そして、何故だかシラユリ・ケルヴェロッカを始めとしたガキどもの世話を押し付けられる。
言っておくが、断じて好き好んで遊んでやっているわけではなく、どうも気がつくと子供たちにいいように玩具にされているというか・・・、更に最近じゃ銀月（ウィンザード・シエラ）の都の大人たちが子供を私に預けに来るという、どうみても保父さんみないな状態になっている私である。
まあ、今日はシラユリとケルヴェロッカの二人だけのようだからいいが、これが十人近くになるともう私一人では手に負えない。（好き好んでやっていないという割に、頼まれると真面目に子供の面倒を見ている自分が悲しいが）
「別に何でもいいぞ。言っとくが危ないのは駄目だからな。」
そして、今日も気がつくとアオイよりもはるかに父親らしいことを言って、シラユリの手を引いてやっている私がいる。
「おっさん、頼むからロリコンの道には走るなよぉ。」
それを見て、いちいちチャチを入れるケルヴェロッカ。
こいつは私に遊んでもらおうなどと、そんな事をいう年齢でもなければ性格でもないはずなのに、こうして保父と化している私をからかうためにやってくるのだ。それも結構な頻度で。
「・・・誰がロリコンに走るか。それより、お前こそ仕事はどうし

た?仕事は?」
「今日は非番で―す!だから、俺もシラユリと一緒にヒロに遊んでもらおうと思って!遊んでぇ!」
「わぁい!!ケルヴェロッカも一緒だぁ!」
「・・・」
――私って一体、何だろうなぁ?
子供二人にいいようにされているような気がして、私は背中を丸めて大きなため息を一つついた。

第９４話　私が貴方を許しましょう　１（後書き）

最近、バタバタしてまして更新が止まっていましたが、何とかヒロ視点に戻ってきた第９４話をお送りします。さて、銀月の都の保父と化した（？）ヒロの物語はどうなっていくのかお楽しみに（笑）

第95話　私が貴方を許しましょう　2

「じゃあ、今日は銀月の都（ウィンザード・シエラ）を探検しよう！隊長は私！二人は隊員だからね！」

反対されることなど微塵も感じていないシラユリの楽しげな声に、もうどうにでもしてくれとばかりに私は天井を仰ぎ、ケルヴェロッカは耐えきれないように吹き出した。

それにしても銀月の都（ウィンザード・シエラ）にそう短くない期間いるというのに、今更何処を探検するのかと思ったりするのだが、シラユリはそうは思わないらしい。

『ヒロちゃん、探検しようよ！』

そういえばエヴァも新しく訪れた街ごとに、シラユリと同じようなことを言って私を困らせた。

シラユリほどに幼くなかったはずのエヴァだが、それだけあれの心が純粋だったということか、はたまた姿は少年から青年の域に達しようとしていた彼であるが、魔力の化身といっても過言ではない以上、彼が人間と同じ感覚ではなかっただけなのかは、エヴァがいなくなった今では確かめようがない。

ともかく、幼く無垢なるシラユリの言動は時々エヴァと酷くダブって、それは私をシラユリに対して弱くさせた。

それが下らぬ感傷だと切り捨てなければいけない感情だと分かっていても、私はエヴァのこともユイアのことも、きっと一生こうして彼らの残像を追いかける如く捨てることなどできないのだと思う。

「でもよぉ、シラユリ。探検つっても何処に行こうっていうんだ？」

「えっと、それはねぇ・・・あっ！」

しかして、私が感傷に浸っている間にも話は進んでいたようだっ

たが、突如としてシラユリが前方に見慣れた人影を見つけた途端に一目散にかけていき、小さな弾丸は先に私に激突したのと同じように目的の人物にぶつかっていった。
「しばらく、任務だって聞いてたけど帰ってきたんだな。」
ケルヴェロッカもその人物を認めて、心なしか嬉しそうに顔を綻ばせる。
しかして、子供二人をそれほどに喜ばせる人物とは聖櫃（せいひつ）のあった部屋以来、見かけなかった彼女。（神と人間を繋いでいたあの異常な装置そのものが、ここでは聖櫃（せいひつ）と呼ばれている）

「ティア、おかえりなさい！！」

エンシッダの片腕的女性と言っていいティアが、任務の内容は定かではないがここ何日か数人の仲間を連れて不在だった事は話には聞いていた。
「ただいま、シラユリ。元気にしていた？」
父親のアオイに対しては何か含むところがありそうなティアであったが、娘のシラユリに対してはまるで母親のように彼女と視線を合わせてやり優しげな表情で微笑んでいる。
「うん！」
シラユリもティアになついているのか屈託なく笑っている。
そして、そんなシラユリにティアの周りにいた彼女の仲間らしき二人の男が笑いを浮かべた。
「シラユリちゃん、最近また可愛くなったんじゃねえ？」
そう言って若い男のはずだが、妙に笑顔と発言がオヤジ臭いのはティアの仲間のイフリータで、
「それはロリコン発言だな、イフリータ。」
そして、それをいつも冷静に突っ込むのは、どうにも年齢不詳な同じくティアの仲間らしいキシン。
「ちっちっち？キシン、それは違うな。可愛い女の子って言うのに

は年齢は関係ないんだよ。なぁ？」
「なあ！」
しかして、キシンの静止を振り切って危ない発言を繰り返すイフリータに、おそらくその言葉の意味など分かっていないシラユリは笑顔で相槌(あいづち)をうつ。
本当ならば私がシラユリを男から引き離すべきなのだろうが、今回はそれはしない。
「子供相手に変なことを言わないで！この変質者！！」
何故ならそんな強気な言葉と共にティアがイフリータのボディに重々しい肘鉄を入れてやってくれたから。（イフリータは言葉ないままに、その場に崩れ落ちた）
子供たちに対して母性というものが強いらしいティアがいてくれるのだ、わざわざ私が出しゃばる必要はないというわけだ。
「ははっ！ティアは相変わらずだなぁ。」
「ケルヴェロッカ！もう、体はいいの？」
しかして、そんな様子を見て笑い声をあげたケルヴェロッカによううやく気がついたのかティアがこちらに歩み寄ってきた。
「うん！ティアにも心配掛けて、ごめん。」
私相手にはどうしても可愛げのないガキでしかないケルヴェロッカであるが、何やらティアには幼い子供のように甘えを見せる。
恐らくティアの母性にひかれているせいであろうが、こんな所を見るとこいつもまだまだ子供だなと思う。それにしても、
「ケルヴェロッカ、体調なんか悪かったのか？」
なんて言った私は本当に大バカ者だ。
ティアが目を吊り上げ、ケルヴェロッカが子供には不似合いな苦笑を浮かべたことで、やっと自分の失言に気がついたくらい私は何も考えていたなかったのだ。
「何、言ってるんだよ？ヒロも見たんだろ、俺が聖櫃の中にいたの。あれの中で俺が神の血(ニス・ドゥア)を貰っていたのを・・・、普段はその必要もないんだけど血の力を使ったら調整が必要になったんだ。」

確かにそんな話をアオイに聞いた覚えはあった。
罪人の巡礼地（アークヴェル）で血の力を使ったらしいケルヴェロッカは、その代償としてしばらくあの聖櫃（せいひつ）の中で休息が必要だったと。

――ミンナ・ミンナ・ヒトツ・ニ・ナロウ

だが、その瞬間に思い出したのはアオイの言葉ではなく、黄色の光に包まれた異様な光景、そして、私が異常までに拒否感を抱いた景色。

「その・・・」

同時にこんな子供に、まるで彼が普通の人間でないことを態々告白させるようなことをした自分が情けなかった。

「謝ったりしたら、ゆるさねーからなっ！」

だから、瞬間的に出てきたのは謝罪の言葉だったが、その先を取ってケルヴェロッカが声を張り上げて、それを遮った。

その表情は少し怒ったような顔をした後に、ニッと歯をむき出しにした笑顔に変わる。

「俺は俺でいること、神の子（マイマール）でいることに何一つ後悔はねえんだから、ヒロがそんな顔すんな！大体、俺たちよりもおっさんの方が異常なんだからよっ！」

確かにそうかもしれない。

だが、その言葉は明らかに私に気を遣っている・・・いや、ケルヴェロッカの言葉は彼の中で真実だろうが、私には子供の強がりにしか聞こえないような気がして・・・でも、私に笑顔を見せる彼にそんなことを言えるはずもない。

そして、きっとこんな強がりは本当の強さになる。

ケルヴェロッカに嫌がられながら彼の頭をなでてやりながら、私はその強さを守ってやりたいなと思った。

それがとんだエゴであることも、自分の中にある様々な私情が混じり、彼らにとってはとんだお節介であることも分かっているが、

それでもふと湧いたそんな感情が私にはとても心地よかった。

「ところでお前たちは雁首揃えて何やってんの？」

「みんなで探検するのっ！」

いつの間にかティアの鉄槌から復活していたイフリータに、彼と戯れていたシラユリが元気よく答える。

「探検？」

「うん！だって、まだまだ見たことないところが一杯あるんだもん。」

確かに結構な期間ここに居はしているが、そう言えば知っている部分、行ったことがある場所というのは限られているような気がする。

「ほう。好奇心が旺盛というのはいいことだ。そういう部分もシラユリは父親であるアオイに似ているのかもしれないな。」

若い男の割には妙に年老いたしゃべり方をするキシンが感心したようにシラユリにそう告げるが、私はティアがその言葉に顔を歪めるのを見逃さなかった。

――先日の態度と言い、ティアとアオイの間には何かあるのか？

ティアが一方的にアオイに強い感情を抱いているように思えたが、アオイの方も何かティアに対して思うところがあるように思えた。（まあ、私には関係のないことなのかもしれないが、興味引かれるというのが人間の性というものだろう）

「でも、シラユリが行ける場所っつっても限られてるしなぁ。」

私やケルヴェロッカはそうでもないが、非戦闘員のシラユリには制限されている場所も多い。

探検と言われても、そう目新しい場所があるだろうか？

しかして、そんな私とケルヴェロッカの心配を振り払うようにシラユリは告げる。

「大丈夫だよ！だって、もう探検する場所は決めてあるから！！」
シラユリの笑顔は弾けるばかりでその先には何の陰りすら見えなかったが、その場所に訪れることで発生する事件をこの時はまだ誰も知るはずもなかった。

第９５話　私が貴方を許しましょう　２（後書き）

さて、シラユリが訪れたい場所とは？そして、その場所では何が待っているのか？

第９６話　私が貴方を許しましょう　３

「嘆き(パシシオン)の間？」

シラユリが告げた探検したいというのは、私が知らない場所だった。

だが、その名前の意味を考えただけでいわくありげな場所なのは見当がついたし、私以外の面々が顔色を変えたので、その予感はより一層強くなった。

「シラユリちゃん、まさかアイツらのことまだ気にしているの？」

イフリータの宥(なだ)める声に無言で首を振るシラユリは、皆が顔色を変えたことで無邪気な笑顔が何かに脅えるようなものに一転している。

その代わり様はまるで、それまでの彼女が全て幻かはたまた演技だったような気さえ私にさせる。

だが、そんな彼女に大人たちは追及の手を緩めない。

「そうだ。それに後はお前の父親に一任されたことだ。今更、現場を調べたって――」

それはシラユリを追いつめ、彼女の幼い瞳には涙が見る見るうちに溜まっていく。

それを察して、ティアがシラユリを庇(かば)うようにキャンキャンと吠え出した。

「ちょっとっ、キシン！そんな言い方はないでしょ？」

そんな様子はまるで子を守る母親のようだが、キシンのほうはどこ吹く風で何を考えているか分からないような表情のまま、ティアの言ったことなど微塵(みじん)も気に留めていない様子だ。

「ケルヴェロッカ、私には一向に話が見えてこんのだが」

しかして、このまま状況を静観して見守るという方法もあるのだろうが、それも何だか居心地が悪くて私は隣にいたケルヴェロッカ

に会話の僅かな沈黙を狙って話しかけた。
「へ？あ・ああ・・そうか、おっさんはずっと牢獄やら研究所やらに籠ってたもんなぁ。あの事件のこともしらね――か。実は――」
「ケルヴェロッカもっ！今更、済んだことを蒸し返すようなことをしないで。」
だが、『事件』とやらのことについてケルヴェロッカが話そうとしたところをティアによって遮られる。
生意気なケルヴェロッカもティアにはどうも弱いようで、冗談抜きで強い口調の彼女に気まずそうに顔を顰めた。
どうやら、ケルヴェロッカが話そうとしてティアが止めたその『事件』にシラユリが関わっていて、シラユリはそれについて心を痛めていて、ティアはそれから彼女を守ろうとしているのだろうが、
「シラユリはそうは思っていないようだが？」
この子の表情を見れば、そんなことはすぐにでも分かりそうなものだ。
先ほどまでの輝かんばかりの笑顔は何処にも見当たらず、ただ涙を今にも零しそうな表情のままギュッと何かを耐えている。
きっと、今の彼女の表情こそが彼女の心を反映しているのだろうが、シラユリはそれを隠して演技をしていたのだろう。
子供だと侮っていた部分もあるのだろうが、私もすっかり騙されていた。
しかして、そんな演技をしてまでシラユリはその事件とやらについて、まだ何か求めているからこそ、その『事件』の現場である嘆きの間に行きたいというのだろう。
だからこそ、大人顔負けに無邪気な子供の演技をして私たちを探検に誘った。（まあ、演技は大人顔負けでも、どこに行くのかと問われて大人にその意図を察せられるような答えをする辺りはまだまだ甘いとしか言いようがないが）
――だが、一つ腑に落ちないのは、どうしてわざわざ私やケルヴ

ェロッカを伴おうとしたのかということ

別に一人で隠れていくこともできただろうに、こうして止められる危険性を犯してまでシラユリは私たちを探検へと誘ったのだ。

そこに行くのに大人の付き添いが必要なのか？

だから、何も知らなそうな私を誘った？

そう考えれば確かに辻褄事態は合う。

だが、彼女のこわばった表情を見る限り、ただ、それだけだとは思えないのは私の気にしすぎなのか？

「シラユリはその『事件』とやらが蒸し返すこともない、些細な過去だとは思っていない。それくらいティアだって分かっているだろう？だったら、少しくらい付き合ってやっても」

シラユリが私の言葉にはっとして顔を上げる。

「馬鹿言わないで。シラユリはすごい傷ついているのよ？もう、あの事は忘れた方がこの子のためよ。」

だから、その『事件』の内容が分からないんではシラユリが何に傷ついているのかも、ティアが何からシラユリを守ろうとしているのかも分からない。（まあ、今はそんなことを言っていい雰囲気じゃないんだが）

それでは何を言い返していいやら、私も途方にくれるところのなのだが、とりあえずは私の知りうる少ない情報で思いついた、思ったことを伝えるしかできない。

「だが、それはティアのエゴだろう？」

「な――――」

言った瞬間にティアだけじゃない、その場にいた全員の空気が凍ったのを感じた。

そんな衝撃的な言葉を云った自覚はなかったので、私は不思議に思ったが言った言葉は取り消せはしない私は言葉を続けた。

「確かに忘れてしまえば、それはそれでシラユリは楽かもしれない。だが、少なくともシラユリはそれを拒否している。だからこそ、そ

の『事件』の現場に行きたいんだ。それを止める権利はティアにはないだろう？」

「で・・も」

ティアは強く動揺しているようで、先ほどまでの強い口調が一転して言葉が途切れる。

私はそれに乗じて畳みかけた。

「シラユリは子供だが自分で考える頭は持っている。大人だろうが、子供だろうが自分のことは自分で決めるさ・・・なあ？」

そうして、大人たちがぎゃあぎゃあと喚いていた中で一人小さくなっていたシラユリが、私の促しにやっと一歩足を踏み出す。

「ティア・・ごめんね？」

「シラユリ」

「でも、私、ちゃんと確かめたい。」

そう告げる言葉は子供のたどたどしい声で、でも、シラユリの表情には確固とした決意が宿っていた。

子供、子供と言っても、子供だっていろいろ考えている。

大人が子供のためと先回りして様々な障害物を取り除いてやろうとしても、結局のところ彼らはそれに気がつき自分からそれに立ち向かおうとするのだ。

――――だって、それがきっと成長するということだから

そして、成長しようという子供に対して、大人がまだ早いとそれを遮ることはティアに言ったようにエゴでしかないのだと私は思っている。

まあ、子供が子供のままでいたいというのであれば、それを甘受しようというのであれば、それはそれでいいと思うのだが、件にかんしてシラユリは成長したいと自分で選択をしたのだから。

「・・・なら、勝手にしなさい。」

しかして、それをティアに折れる形になったのだろうか。

冷たく硬い声の後、彼女はそれ以上何も云わずに去っていく。
如実に残る、誰がどうみても後味の悪い幕切れに、重苦しい沈黙が落ちる。
それを断ち切るかのように、微苦笑を浮かべたイフリータが軽口を叩いた。
「ワリィな、三人とも探検に水差すようなことを、内の姫さんがしちまってよ。」
『姫さん』というのは、おそらく彼らの中で紅一点のティアのことなのだろう。
私はそれに首を横に振った。
「いや、私は別にいいんだ。というか、むしろ私が言った言葉でティアの様子がおかしくなった方が気になるんだが。」
少しばかり冷静さを欠いてシラユリを守ろうとしていたティアだったが、私がそれはエゴだと指摘してからの彼女は一層に様子が可笑しかった。
「ああ、それね」
私はただ自分の思ったことを言ったただけだったが、それでティアを傷つけたというのなら、自分の言ったことを訂正するつもりはないが、元来気が弱い私には罪悪感というか後味の悪さがやはり残る。
「ヒロが気にすることじゃない。」
イフリータに代わって告げたのはキシン。
「アイツはまだ忘れられないだけだ。それとシラユリを混同しているにすぎない。」
「忘れられない？」
それだけ言われても何が何だか分かるはずもない。だが、
「まあ、それ以上は聞かないでおいて？女の過去を詮索するような男は好かれねーぞ？」
とイフリータにさりげなく牽制されてしまえば、追及することは躊躇われる。

「じゃ、俺達は報告の業務がまだ残ってるから。」
「嘆き(パシオン)の間にはもう何もないが、まあ気をつけて探検をしてきてくれ。」
そして、そう言い残して彼らはティアの後を追って私たちの前から姿を消し、後には不完全燃焼な私と、涙目のシラユリと、そして、置いて行かれたように呆然とするケルヴェロッカが残ったのであった。

第９６話　私が貴方を許しましょう　３（後書き）

いつもはここに短いながら作者のどうでもいい後書きを載せているのですが、これから連載一年＆１００話目前を記念いたしまして、登場人物たちの自己紹介（？）みたいなものを次回から載せていきたいと思います。大したものではないのですが、ここまでお付き合いいただいている皆様に楽しんでいただければ幸いです。

記念すべき第一回目はもちろん主人公ヒロ。ちなみに一人では間が持たないのでプレゼンターとしてある人物を予定しております。本編とは違ってかなり崩れたキャラ達がお目見えするよていなので、本編のイメージを崩されたくない方は読まれない方がいいかもしれません（笑）

第97話　私が貴方を許しましょう　4

まるで何物をも拒絶するような小さな、でも見るからに強固そうな石の壁で作られた正方形の建物。

そこは銀月の都（ウィンザード・シエラ）の近代的で開放感溢れる街並みの中で一際異彩を放っていた。

「ここが嘆き（パシオン）の間・・・だよ。」

ティアたちと別れた私たちはシラユリが望むままにこの場所に赴（おもむ）いた。

だからと言ってシラユリの悲しみと動揺の混じった様子が変わるわけでもなく、むしろその様子は段々と酷くなっていさえしたが、シラユリは自分の足で立ち止まることなくここまで、嘆き（パシオン）の間まで歩いてきた。

そして、ここに来るまでの間、私はケルヴェロッカからシラユリの『事件』の概要を聞いた。

まあ、ケルヴェロッカとて人づてに聞いた話だったので本当に大体の話だったが、当事者であるシラユリが嘆き（パシオン）の間にやってくることに異存はなさそうなのだが、頑（かたく）なに『事件』については口を閉ざしたままなのだ。

故に他に『事件』の内容を知るすべは私にはない。

しかして、ケルヴェロッカから聞いた『事件』、その内容と言えば、始まりは何処にでもあるような子供たちの好奇心。

現物を見ても分かるように嘆き（パシオン）の間は街中でも異彩を放っていて、子供たちの中でも一体何なのだろうと話題になっていたらしい。

そもそも現在こうして私たちが我が物顔で居座っていても、本来、銀月の都（ウィンザード・シエラ）は千年前の古代都市である亡国（ドルガバ・チェシエ）の遺産の一つなのだ。

私たちには分からないことが多いのは当たり前といえば当たり前

だろう。
　だから、この建物が嘆きの間（パシシオン）と呼ばれている理由も、この建物の存在理由も誰も知らないという訳だ。
　更に名前だけ聞けば何やら曰くありげらしい・・・とくれば、あっという間に嘆きの間（パシシオン）はちょっと怖い即席のお化け屋敷と化し、まあ、娯楽の少ないこの町で子供たちにとっては格好の探検する場所になるだろう。
　しかして、シラユリは同じ年頃の神の子（マイマール）の子供二人とその日、嘆きの間（パシシオン）を探検しようということになったらしい。

「――――にしても、本当に何もないんだな。」

　ケルヴェロッカの話を思い出しながら、嘆きの間（パシシオン）にある唯一の扉を開けて部屋に入った私の感想はどうにも間の抜けた感じだが、でも、本当にそうなのだ。
　名前も『事件』のことすらも知らなければ、本当に何の変哲もない倉庫のようなその中は窓一つないので入ってきた扉から刺す光以外は薄暗く埃ぽっく、そして、何だかひんやりとしていて、更に室内には何一つ物が置いていない。
　嘆きの間（パシシオン）などという大それた名前が付いているくらいだから、何かしらあるのかと思っていた私は何処となく拍子抜けする。
　そして、それは『事件』の日にここを訪れた子供たちも同じだったようで、暗く何もない部屋に子供たちは少しの落胆と安堵をもって、大した探検をすることもなくその場を後にしようとしたのだ。
　だが、今の私たちの状況とは違うことが起きた。
「でも、声は・・・聞こえないな。」
　扉の傍で小さな部屋をうかがっている私を（シラユリが私の裾を掴んだまま入口から動こうとしないので私は奥には入れないのだ）

通り越し、ケルヴェロッカがきょろきょろと室内の中を見渡す。
そうなのだ。話によれば子供たちはそこで誰かに呼ばれる声を聞いたという。
「シラユリ、本当に声が聞こえたのか？」
嘆き(パシオン)の間に来てから怯えるように小さくなったシラユリに尋ねる。
本当ならこんな状態の彼女を追いつめるようなことを言いたくない。
だが、『事件』の真実を知っているのはシラユリだけであり、そして、ここで何かを確かめたいと思い、ここに自らやってきたのもシラユリなのだ。
彼女を甘やかすのではなく、背中を押してやるのが大人の役割というものだろう。
だから、私は私の問いにいつまでたっても答えようとしないシラユリを辛抱強く待った。
そして、シラユリは小さな声で、でも、確かに彼女自身の声で『事件』のことを話し始めたのだ。
「う・・ん、聞こえたよ？・・・誰かが叫んでる・声。」
「叫び声？今も聞こえているのか？」
もしかしたら、私やケルヴェロッカには聞こえない声なのかもしれない。そう思ってシラユリに聞いてみるが、彼女は首を小さく横に振る。
「ううん。今日は何も聞こえない。」
「ふーん、じゃあ、その日だけ特別に聞こえた声ってことかぁ。ちなみにどんな声だったんだ？何を叫んでた？」
確かにシラユリは叫び声といったが、それにしたって色々な種類があるだろう。
シラユリはそれに一瞬だけ苦しそうに顔を歪め、それでも懸命に言葉を紡ごうとする。
「何をいってたかは・・私、よく覚えてない。」
彼女もパニックだったのだろう。

まさか、何もないと思っていた、ただ少しだけ好奇心を満たそうとして訪れた場所で、何も誰もいない場所でいきなり叫び声を聞いたのだ。

子供でなくても、私だって正直ビビる。

「でも・ね?ほんとに、ほんとにっ聞いたんだよ!下から、下・・からね?聞いているだけで、こわ・・くてっ、だから私っ!!」

しかして、言っている内にその時の事がフラッシュバックし興奮してきたのだろう。

段々と涙交じりの声になり支離滅裂(しりめつれつ)なことを言い出すシラユリの肩を、私は宥めるように叩く。

――――まあ、これ以上は今の彼女に聞いても無駄だな

そんな事を思いながら、私はケルヴェロッカから聞いた話の続きと今のシラユリの言葉を重ね合わせる。

そう。シラユリが聞いたという下からの恐ろしい叫び声、今の話じゃ人間の声かも定かではないが、それを聞いてシラユリ以外の二人の子供は『壊れた』という。

ケルヴェロッカが告げた『壊れた』という表現に始めは違和感を覚えたが、その後の説明で納得した。

神の子(マイマール)の子供たちは死んだわけでも、怪我をしたけでもなく、その声を聞いた瞬間に発狂し、自我を崩壊させたの言うのだ。

それまで至って普通にしていた人間が突如として大声を出し、現在、保護された後も何振り構わず自分を傷つけ、そして、何一つ言葉を解さなくなった。

それは人間として『壊れた』と表現していい状態ではないだろうか?

しかして、叫び声を聞いてもただ一人壊れずにいたシラユリは、声の恐ろしさに加味して目の前で起こった異常事態に驚き、嘆き(パシシ)の間(オン)まで行ったっきり帰ってこない3人を心配して見にきた大人たち

に発見されるまで放心状態で涙を流し続けていたらしい。
そして、その神の子（マイマール）の壊れた原因はその創造主たるアオイにすら分からず、今もまだ『壊れた』ままに二人は研究室の一室で軟禁状態だということだ。
身の毛もよだつ恐ろしい正体不明の声、そして、それで友達たちが狂ったように暴れ出した様子を目の前にして、まあ、ここまで話を聞けばシラユリの異常なほどの怯え具合も理解できる。
むしろ、そんな場所にもう一度訪れた今の状況こそ普通は理解できない。

――だが、何度も言うがシラユリはそれでも再び嘆き（パシシオン）の間に自分の足で来た

それには絶対に何か意味があるはずなのだ。
大人だろうが、子供だろうが、誰だって行きたくない場所に、意味もなく訪れるわけがない。
ならばそれは何だ？
ただ、怯えるように身を縮こませるだけで、それ以上に何一つ行動も言葉を発しようとしないシラユリに私の疑問は高まる。
「まっ！ここには何もないみたいだし、とりあえずは出ようぜ？」
「・・・そうだな。シラユリ、自分で歩けるか？」
だが、今の状態のシラユリに何を聞いても仕方ないだろう。
私はケルヴェロッカの声に頷いてシラユリを促す。
しかして、先ほどティアの言葉を拒否してまでここに来たいといったのだ。
もしかしたら嫌がるかとも思ったが、シラユリは不思議とすんなりと自分の足で嘆き（パシシオン）の間から出る。
その嘆き（パシシオン）の間を出る足の軽やかさ、次いで不意に耳に届いた安堵するような小さな溜息。
「？」

それは嘆き(パシシオン)の間から出れた開放感からの溜息であろうが、それにその時私は何となく違和感を覚えた。

そして、それについて疑問を発する前に、ギギギと音を立てて閉じゆく扉の奥から私は何かを感じた。

「・・っ」

しかして、はっとして振り返った閉まっていく嘆き(パシシオン)の間の室内には誰も、何も存在していない。

だけれど、私は扉が完全に閉まるまで確かに何かの視線を感じていた。

「なあっ！この後、暇だったら二人とも女神の十字軍(イヴィスタン・ディード)の宿舎に来いよ！！今日、スノウの誕生会があるんだ。ウマイもんが食えるぞ？辛気臭い顔ばっかしてちゃ、何も始まらないって！！」

シラユリを元気づけようと笑顔で無理に明るく振る舞うケルヴェロッカ。

「うんっ！」

嘆き(パシシオン)の間を出たとたんに何かから解放されたように、いつもの彼女に戻ったシラユリ。

――――一体、何がどうなっている？

私は抑えきれない疑問と不安に胸が塞(ふさ)いだ。

第９７話　私が貴方を許しましょう　４（後書き）

エヴァ：パンパカパーン！これから、連載一年アーンド１００話目前を記念いたしまして、登場キャラ達の自己紹介イベントを開催したいと思いまーす！プレゼンターはお久しぶり僕、エヴァが務めさせて頂きまっす！
ヒロ：・・・おい
エヴァ：記念とか言いながら、非常にしょぼい企画だけど皆さんお付き合いくださいね！
ヒロ：おい
エヴァ：さて、さてそれでは
ヒロ：おいっ！！
エヴァ：もう、何、ヒロちゃん？僕、登場久々何だからもう少し話させてくれたっていいじゃない
ヒロ：『ちゃん』付けで名前を呼ぶなっ！・・・じゃなくてっ、お前、万象の天使の中に還ったんじゃないなかったのか？
エヴァ：まあまあ、そんなこともあったかもしれないけど、気にしない気にしない
ヒロ：気にしないって言われてもなぁ
エヴァ：それとも何？ヒロちゃんは僕に会いたくなかったの？（目をウルウルさせて上目遣いでヒロを見る）
ヒロ：う・・・いや、別にそう言うわけじゃ。
エヴァ：じゃあ、問題ないよね？では、さっそく自己紹介を始めていこう！（ころりと笑顔に変わる）

かくして、どうも釈然としないまま、でも、結局気の弱いヒロが押し切られる形で自己紹介は・・・次回から始まるのであった。

ヒロ＆エヴァ：始まらんのかい！！

第９８話　私が貴方を許しましょう　５

ケルヴェロッカの提案に難色を示していた私であるが、何だかんだと気がつけば月見の塔（ミュージ・アシェタ）の近くにある女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）の宿舎の中にいた。

宿舎というのだから、無論たくさんの神の子（マイマール）が暮らしている部屋があるのだが、それとは別に一つ大きなホールのようなものがある。

いつもは食堂以外には特に用をなさないその場所に今日は人が溢れ、その中心にいた人物がホールの入口で突っ立っていた私たちに声をかけた。

「あっ！シラユリとヒロも来てくれたの？！」

今回のパーティーの主役・神の子（マイマール）の娘スノウ、その人である。

ケルヴェロッカの姉的存在で、私の実験（？）にも何度か立ちあってくれている彼女には私も何度か会ったことがある。

「今日が誕生日とは知らなかった。何もプレゼントは持っていないんだが、おめでとうとだけ言わせてくれ。」

「そんなっ全然気にしないで！その言葉だけで十分嬉しいわ。」

誕生会に手ぶらで来るような失礼千万の私に対しても嫌な顔一つせず、笑って礼を言うような素直で愛らしい彼女は神の子（マイマール）の中でもアイドル的存在だと認識している。

だからこそ、誕生会一つにこれほどの人数が集まっているわけで、いつもならそんな彼女に癒されている私なのだが、

「おめでとう！スノウ！！」

「ふふっ。シラユリもありがとう。」

先の嘆き（パシシオン）の間の様子とは打って変わったシラユリの態度に戸惑いを隠しきれない私。

「シラユリ、元気になってよかったな。」

そう私の横でぼそりと呟くケルヴェロッカのように前向きに解釈できればいいのかも知れない。

しかし、やはり気になるのだ。

子供を疑うようなことはしたくないが、私の本能が何かを感じ取っていた。

だが、この場でそれを問いただす術ももたず、いや、おそらくこの場でなくともこんな曖昧な感情のままではシラユリに私の気持ちなど話せるはずもなく、私は腹にもやもやしたものを抱えつつも、現状においては場違いなほどに明るい場に居合わせることとなった。

そもそも現在、銀月の都（ウィンザード・シエラ）は天使たちから逃亡中だし、罪人の巡礼地（アークヴェル）での戦いから数週間経つが、天使たちからの接触もこちらからの接触も持ってはいない。

しかして、エンシッダがこれから私たちを何処に誘（いざな）うのかも知らされておらず、私たちは隠れるように逃げるように不浄の大地（ディス・エンガッド）をさまよっているのだ。

それはまるで天使たちとかかわる前の私と同じようで、だが、確実に何かか迫っているようなそんな不安感と緊張だけは半端ない。

自分たちがこれからどうなるのか、どこへ向かっていくのか、それを不安に思っているのは、恐らく私だけではない。

エンシッダを神のように慕っている神の子たち（マイマール）とてそれは同じはずだ。

だが、こうしてそんな緊張感の中でも祝い事を催（もよお）してしまう辺りは、やはり私と彼らの間にエンシッダに対する信頼の厚さの違いなのかもしれない。（だからといって、スノウを祝わない気持ちがないわけではないが）

「あっ！キシン！！」

そうして、ささやかながらも温かなスノウの誕生会に新たなる招待客が現れて、スノウは私たちからその招待客へ視線を移した。

ティアとイフリータと、スノウがうれしそうに名を呼んで駆け寄った人物キシンである。

「へへっ、スノウ、嬉しそうだろ？キシンが好きなんだって。」

言われてみれば、私に向けられた誰もがほっとするような笑みとは違い、でかいキシンを見上げる視界の端に映るスノウはほんのり頬を赤らめ年頃の恋する乙女といった風情だ。
「へえ、そうなのか。」
「何だよ?張り合いね―返事だな。」
――どっかの噂好きのおばさんじゃあるまいし、他に何をいえというんだ
そんなことを思ったが、いちいち癇に障るケルヴェロッカの言い様に思わず言わなくてもいい言葉がついて出た。
「まあ、美女と野獣って感じでお似合いなんじゃないか?」
うん。我ながら的確な言い回しだと思ったのだが、しかして、私の言葉を聞いて一瞬だけ目を丸くした後、ケルヴェロッカは堪えきれないように笑い出したのだ。
「??」
何か私は変な事を言っただろうかと、笑いの止まらないケルヴェロッカに焦りすら覚えたのだが、そんな私に彼は初めていつもの子供のくせに何処か斜に構えた様な笑みではなく、子供っぽい何の憂いもない笑顔を向けた。
「ははっ、ヒロって天然なんだなって思って。」
「私が?」
悪いが生まれてこのかた誰にもそんなことは言われたこともない。心外だと言外に含ませた顔で彼を見下ろしてみるものの、笑い続ける彼には私の睨みなど全く気にならないと云った風だ。
こうなってしまっては何を言っても無駄だろうなと、笑われていることには釈然としないものがあるままだがケルヴェロッカが気が済むまで笑わせてやることにした。
そして、ケルヴェロッカの笑いが治まるまでだと思い、何となしにスノウの誕生会を改めて眺めてみると、私やティアたちもいるの

だが、そのほとんどを神の子（マイマール）が占めていることに気がつく。（そもそもここは女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）の宿舎だから当たり前と言ったら当たり前なのだが）

罪人の巡礼地（アークヴェル）での戦闘や、私の実験に付き合ってもらい神の子（マイマール）たちの人間離れした力と魔力を目の当たりにして、また、先日のアオイの話もあり、彼らはやはり人間ではないのだと表には出さないが思っていた。（まあ、私が言うのも何かもしれないが）

だが、こうしてケルヴェロッカの子供らしい笑顔を見て、スノウの恋する乙女の表情を見て、スノウのために集まった様々な表情を浮かべる神の子（マイマール）を見て、やはり、彼らも私と違いないのだなと改めて感じる。

自由を求め、そのために人間を捨てて神の子（マイマール）という、新たなる人種になった彼ら。

彼らはそれに対してある種、プライドみたいなものを持っていると私は感じていた。そして、それが私やここにいる他の人間たちとの壁になっていることも・・・。

だが、その壁がスノウの誕生会というきっかけで今少しだけ低くなったとき、彼らは私が想像しているより人間で、いや、人間でしかなくて・・・何となく今人間なのか悪魔なのか半端なままの自分と彼らに親近感を覚える。

しかし、一方でこの先が見えない現状で、エンシッダに誘われるままの私や、エンシッダによって生み出された神の子（マイマール）たちが、どうなっていくのか全く見当もつかなくて不安も覚える。

でも、だからこそ今は、せめて誰かのために祝う気持ちが持てる余裕がある時くらいは、こんな穏やかな日常が続けばいいと、何もかも少しだけ忘れて思いたい。

ケルヴェロッカはまだ先ほどの笑いを引きづっているようだったが、私はそうして気持ちを切り替えると全ての憂いを僅かの間忘れるためにたくさんの神の子（マイマール）たちの中に紛れていったのである。

第９８話　私が貴方を許しましょう　５（後書き）

エヴァ：ていうかさぁ。ヒロちゃんの自己紹介なんて今更な気がしない？
ヒロ：まあ、確かになぁ
エヴァ：大体、ヒロちゃんなんて主人公の割には影薄いっていうか、内容がないし
ヒロ：内容がないって・・・
エヴァ：さしたる特徴って言えば、天然記念物並に気が弱くて、不幸体質なところ？
ヒロ：お前は本当に言いたい放題だな
エヴァ：だって本当のことでしょ？まあいっか、さっさと所定の質問に答えちゃってよ。これが作者からの質問事項だよ（といって紙をヒロに渡す）
ヒロ：えーと、年齢に身長体重と・・・って、これはどっかの履歴書かよ
エヴァ：つべこべ言わずに、さっさと答えてよ！後がつかえてんだからねっ
ヒロ：わかったよ（やっぱり押しに弱い）。年齢は２３、身長は１６９ｃｍで体重は６５ｋｇだよ。
エヴァ：うわっ！貧弱っ！！よくそれで今まで生き残れたよねぇ
ヒロ：うっさい（怒）不浄の大地の環境じゃ、これが普通だっ！（実は気にしてます）

しかして、二人の会話は白熱しつつ次回に続きます

第９９話　私が貴方を許しましょう　６

――ここ最近、何故だか夜の闇がとても心地よく感じる

私は一人、スノウの誕生会から与えられた自室へ帰ろうとしていた。

既に日はとっぷりと暮れ、今日は厚い雲の覆う曇天のために夜の闇はより一層の深みを増し、銀月（ウィンザード・シエラ）の都は所々に点在している僅かな街灯の明かりだけが頼りの闇に支配されている。

本来なら夜も街を煌煌と明るくすることも可能らしいのだが、それを目印とし天使に標的にされては大変なので夜は最低限の明かりしか点けないことになっている。

故にこうして月明かりの届かない夜は誰もが部屋に籠り、たくさんの人間たちがひしめいているはずの街が死んだように静まり返り、さながら不浄（ディス・エンガッド）の大地に点在するゴーストタウンのようになる。

――まるで世界に一人、自分が残されたような、そんな錯覚が今はとても心地いい

だが、本来であれば私は元々、そんな孤独を愛するような人間じゃない。

夜の闇に包まれ、誰の気配も感じない孤独など大の大人が言うことではないが、好きになれるはずもない。

むしろそれに対して恐怖すら感じる私は、きっとただの臆病者だ。

なのに、今の私は孤独や恐怖すら感じずに、夜の孤独に恐怖に心地よさすら感じている。

――それは私が変わったからなのだろうか？

過るここ最近の自分の身に降りかかったありえない出来事の数々。
それを思い出して、私は体の奥から何か恐ろしいものが波打つような動揺を覚える。
考えても分からない、考えるだけで恐ろしい・・・きっと、いつか私が私でなくなるような、私とは違う存在がいつしか私自身をも飲み込んでいってしまうような、そんな恐ろしい想像が私の中に浮き上がっては消えてゆく。
変わりゆく自分が、それを感じずにはいられない状況が恐ろしくてたまらない。

――やめよう。悪魔の力を使うことを決めたのは、私自身なのだから

しかして、私は湧き上がる動揺に心の中で首を横に振り、それが逃げだと分かっていても、諦めに似た言い訳を繰り返して頭の中を切り換える。

スノウの誕生会はつつがなく、その場にいた誰もが良いものだったと思える形で終了した。
私も久々に変な緊張をせずに話したこともない神の子（マイマール）たちとも色々な交流が持て、純粋にあの場にいれることを楽しめた。
パーティまでは一緒だったケルヴェロッカはそのまま宿舎に残り、シラユリははしゃぎ疲れたのか途中で眠ってしまい、私より一足先に父親のアオイが連れ帰っている。（ちなみに私は言われてもいないのに、後片付けまで手伝ってきてしまった）

――とりあえずはシラユリの態度っていうよりは、嘆き（パシシオン）の間から感じた視線だな

無論、シラユリの態度も気になるところだが、私にそれを問いただす度胸がない以上、確かめる術はないのだし、むしろその原因が嘆き（パシオン）の間にあると推測すれば、それを突き止めれば自ずと分かることなのかもしれない。

しかして、嘆き（パシオン）の間に行った時の事を何度思い出しても、私たち以外のは嘆き（パシオン）の間の中に誰もいなかった。

――にもかかわらず、感じた強い視線

それこそが私の勘違いという可能性も無きにしも非ずだが（最近、疲れてるしな）、楽しいパーティーが終わってもなおあの時に感じた妙な視線の感覚を私は忘れられない。

ケルヴェロッカやシラユリは視線は感じていないようだったし、もし本当にあの視線が本物だったとしたらそれは私一人に向けられたものということになる。

まあ、何一つはっきりしない現状では考えたところで何も始まらないのだが、今は嘆き（パシオン）の間まで出向いて何かを探しに行こうなどという気は起きない。

だって、こんな真夜中に、あんなうすら寂しい嘆き（パシオン）の間にどうしてわざわざ一人で行かなくてはいけないんだ？

・・・怖いわけじゃない、うん、決して怖いわけではないのだが、パーティもあって疲れたし、『今』は行く気がしないのだ。

――明日、『昼間』にでも行くか

しかして、誰がいるわけでもないのに私は一人そう頷いた瞬間に、静まり返った夜の銀月の都（ウィンザード・シエラ）に強い突風が吹きぬける。

巻きあがる小さな石などが顔に当たる感じがして、私は咄嗟に瞼（まぶた）をつむった。

いきなりの強い風に驚きながらも一瞬で収まった風に、私はゆっくりと目を開ける。

僅かに下に向いていた視線は、私の前方の地面を映す。

そうして同時に厚い雲に覆われていたはずの月が風で消え去ったのか、月の光によってできた誰かの長い影が私の視界に映った。

「――誰だ？」

すぐに雲が月を覆ったのか影は消えた。

だが、影はあったのだからそこには当然、影の主がいるはずなのだからと私は視線を上げ、その人物を見つけようとした。なのに・・・

「いない？」

影の主どころか私の目の前には何一つ存在せず、あるのはゴーストタウンの如く静まり返った銀月の都（ウィンザード・シエラ）と恐ろしいまでの夜の闇だけで、先までと違う様子は何一つない。

しかし、変化ない銀月の都（ウィンザード・シエラ）と夜の暗闇の中から、突如として強いものを秘めた視線が私を貫いた。

「っ！！」

何処からそれを私を貫いたのか分からず突然のことにあたりを見回すが、どこを見てもその視線の大本は存在しない。

それもその視線は嘆き（パシシオン）の間で感じた正体不明の視線と同じだと私の第六感が告げている。

私は腰にぶら下げている黒の剣（ローラレライ）に音もなく静かに手をかけた。

「・・・」

だが、どんなに待っても視線の正体は現れず、それどころかこちらがその正体を見定めようと暗闇に目を凝らしてみてもそれらしい存在は見当たらない・・・が、視線は依然感じ続けている。

――ひょっとして幽霊とか？

自慢ではないがオカルトとか幽霊などが苦手な私は、うすら寒い

ものを背中に感じつつ黒の剣（ローラレライ）を持つ手にジワリと汗をかく。
そして、そんな状態でしばし時がとまった。（はたから見れば、私一人で何をしているんだといった感じだろう）
しかして、再び厚い雲が流れ覆っていた月の光が僅かに漏れた瞬間に私は見ることになるのだ。
「・・・誰だ？」
私から１０メートルといった遠くも近くもない距離のあたり、真正面に一つの人間の影が長く伸びていた。
しかし、月の光がなくなった瞬間に影は闇の中にまぎれ、されとてそこにあるはずの影の本体は掻き消えた。
いや、掻き消えたわけではなく、それは予め私の瞳には映っていなかった？
やはり、先ほど見たのは錯覚なのではなかった。
――――影はそこにあり続けていた、私の瞳には映らかなっただけで突然のことに驚き周囲に意識を飛ばしていた時とは違い、今見えた影の辺りに意識を集中させればそこに確かに何者がいる気配を感じることができた。
実体なき『影』、視線の正体は間違いなくそれだ。
私はそれさえ捕えることができたなら、それからもう少し距離をとり油断なく意識を集中させる。
ただでさえ、視線から感じる気配からどうにも気が抜けなさそうな相手なのだ。
更に姿が見えないとくれば、それから一瞬たりとも意識を離すことなどできない。
見失ったら最後、恐らく月光が再び降り注がない限り『影』を見つけることは不可能なのだから。
大体、この『影』は何なのだ？

本当に嘆き(パシシオン)の間にいたものと同じなのか？
姿が見えないこの都の住人は、ずっとこの場所にいたものか？
それとも・・・

考え出せばきりがないほどの疑問がわいてくる。
しかして、それは『影』の出してきた新たなる展開により、私の頭の中から一気に消える。

『面白いものを見せてやろう』

それは音として紡がれた声ではなく、石造りの床に書かれた赤い文字によって紡がれた言葉。
血のような赤色で突如として現われたその文字は、どうやら『影』からの私へのメッセージ。

『嘆き(パシシオン)の間に来い』

第９９話　私が貴方を許しましょう　６（後書き）

ヒロ：それで？後は何だ？
エヴァ：何かもうなげやりだね、ヒロちゃん
ヒロ：私なんて対して内容がないんだろ？さっさと終わらせよう
エヴァ：（あーあー、もう大人のくせにすぐ拗ねるんだから）えっと、じゃあ、後は・・・好みの異性のタイプは？
ヒロ：押しの強くない人
エヴァ：ははっ、何かすごく具体的だね――って、どこ行くのヒロちゃん！？（何処かに出ていこうとするヒロの腕を慌ててとる）
ヒロ：もう、話は終わりだろ？次が詰まってるんだから、私はさっさと退場する
エヴァ：え～？
ヒロ：お前もちゃんと仕事しろよ？じゃあな
エヴァ：（こりゃ、完全に臍をまげちゃったなぁ。こうなったらヒロちゃん、頑固だし、大人しく引き下がっとくか）わかった！じゃあねぇ～！
ヒロ：・・・（あっさり引き下がられると、それはそれで物足りない）

しかして、自分で言い出した以上、エヴァに何も言えずヒロは退場していくのであった（笑）さて、次からは他のキャラクターが登場します！

第１００話　私が貴方を許しましょう　7

『面白いものを見せてやろう。嘆き(パシシオン)の間に来い。』

簡潔に告げられた言葉だけを残し、かくして実体なき影は気配もろとも消えた。

それは幽霊か、はたまた誰かのシャレにならない冗談なのか分からないが、この状況では嫌だと思ったところで嘆き(パシシオン)の間に向かう他ないだろう。（行かなかったら行かなかったで、気になるだけだし）

だから、ゴクリと生唾を飲み込んで安穏たる睡眠を貪るための自室に向かっていた足を、何やら怪しげな誘いを受けた嘆き(パシシオン)の間へとよっこらせと私は方向転換させたのであった。

――――あれは？

かくして、一人夜の闇に四苦八苦しながら嘆き(パシシオン)の間の近くまでやってきた私は、その前に誰かがいる気配を感じ近くの建物の影に身を隠した。

もしかしたら、その人影はは私を待ち構えていた自体なき影かもしれないし、警戒をして損はないと判断したのだ。

だが、どうやら雰囲気が違う。

「――――して、貴様がここにいるっ！？」

「それは私のセリフかと思いますが？」

人気がない街に響く大きな男の声と静かな女の声。

わざわざ私を面白いものを見せると誘い出したのに、私を待たずして勝手に始まっていた会話は、私を待ち構えていたという感はない。

だが、影が告げた『面白いもの』というのがこの二人という可能性はあるか。

しかして、今はその問いに答えてくれる者は存在しないし、申し訳ないとは思ったが、とりあえず私は二人の会話に耳を傾けることにした。（盗み聞きなど趣味ではないんだが）

そして、建物の影から嘆き（パシシオン）の間の前で何やら言い争っている男女の姿を確認して、私は驚くこととなる。それは

――――白き神・・・と、天使？

罪人（アークヴェル）の巡礼地で別れて以来、見かけることのなかった白き神が、いつの間にか晴れた月夜の光の中に浮かび上がっていた。

そして、天使の方は私に背を向けていて顔までは確認できないが、立ち姿から男だろうということは分かったし、赤い翼が背中から生えている天使であることは間違いないだろう。

だが、天使がどうしてこんな場所に？

まさか、白き神を奪い返しに来たのかとも思ったが、たった一人で敵の本拠地まで乗り込んではこないだろう。

それに、どうも二人の雰囲気はそれとは違っている。

「俺がここにいるのは無論、あの方のためっ。」

言い方もその威勢も、どうしたって崇め奉る女神様に対するものじゃない。

「貴方がここにきて何ができるというのです？それに彼はそれを知っているの？」

白き神も何やら私の目の前にいた時とは趣を異なっている。

「ただ、エンシッダに利用されているだけではなくて？」

「それはあんたこそっ！！」

明らかに冷静な会話が成立しておらず、私にはとりあえず何か言い争っているくらいしか分からない。

「まあ、そんなことはこの際どうでもいいことです。」

白き神が大きく息を吐いた。
「それより、その女は何なんです？」
――――女？
そう言われて初めて気がついたが、どうやら二人だけではなかったらしい、隠れた状態のまま難しい体制で目を凝らすと天使の足もとに何やらもぞもぞと動く人影を発見。（蹲（うずくま）っていたので気付かなかった）
「わざわざ、エンシッダに隠れてあんたが俺をここに呼んだのは、それか？」
「そうです。どうしてその女が・・・ハクアリティスが生きているのですか？」
姿ははっきり見えないが、どうやら天使の足もとにいるのはハクアリティスらしい。
そういえばアラシとも話したがその姿をとんと見なかった・・・ずっとあの天使と一緒にいたのか？
じゃあ、天使もずっと銀月の都（ウィンザード・シエラ）にいた？
その目的は？エンシッダはそれを知っている？
そして、何より白き神の言葉、ハクアリティスが生きていて、何か問題がある？
何もかもが分からず、整理しきれない情報が頭の中でこんがらがる。
「気になるか？何しろエヴァンシェッド様が唯一愛した女だ。まあ、彼に心を寄せているあんたからすれば、ハクアリティスは脅威のほか何物でもないな。」
天使の声に優越感が滲み、彼の足もとにひれ伏しているハクアリティスらしき物影が反応したのが分かった。

「まさか、このようなハクアリティスの偽物など脅威などではありませぬ。私が言っているのはそういうことではなく、こんな存在をどうやって造りだ――」

天使の言葉に何やら口早に言い返す白き神。

しかし、何やら重要な事をいようとしてた矢先にそれは遮られることとなる。

「偽物なんかじゃないっ！！！」

それまで沈黙を守っていたハクアリティスが甲高い声で叫んだのだ。（突如の大きな音は天使たちだけでなく、私までビビらせた）

「私はエヴァンシェッド様の妻！天使の花嫁っ！！！！」

それはあの始まりの夜、同じ言葉を告げたハクアリティスを助けた時に聞いたあの澄んだ歌うような声ではなく、どこから出たのか分からない細く、だがドロドロとした感情が滲み出た声。

「私こそ、私だけがエヴァンシェッド様の――」

繰り返される壊れた機械のような言葉は永遠に続くのかと思ったが、それは何やら鈍い音と共に呆気なくぷつりと消えた。

「失礼。まだ調整が完全ではないのでな。」

月光が降り注ぐ中で、天使がハクアリティスを気絶させたのが彼女がばさりと地面に崩れ落ちたことで分かった。

女性相手に手荒な気がしたが、狂ったように動揺していたハクアリティスを黙らせるにはそれくらいしないといけなかったのかもしれない。（私は恐れ多くてできないが）

「貴方がハクアリティスと同じ名前のエンディミアンを花嫁として傍に置いているという話は噂で聞いていました。でも、彼女が・・・神と契約（ファギュラド）せし天使は知っているのですか？」

肝心なところを濁す白き神。その様は、まるで口にするだけでおぞましいとでも言いたげだ。

ハクアリティスが何だというんだ？

後ろ姿しか見えない目の前の天使こそがハクアリティスの伴侶？

では、彼女は万象の天使の妻ではないから、ハクアリティスに対して万象の天使は関心がなかったということか？

疑問は後から後から湧いてくる。

しかし、声に出せない私の問いではなく、天使が答えるのは白き神への問いだけ。

「知らない。これはエヴァンシェッド様のために俺が独断でしていることだ。美しいあの方を悪魔の束縛から解放するためには、全ての始まりであるあの場所に行かなければならぬ。そのためのこの女であり、それこそが俺がここにいる意味。」

――『悪魔の束縛』に『全ての始まりの場所』、それに『万象の天使』のため？

一向につかめない二人の会話に、『悪魔』という、聞きたくない私だが私でないその存在の名前。

「そして、更に言えばそのために神の子（マィマール）たちが必要だったと？」

だが、白き神は天使の言葉を全て理解しているらしい、そして、彼女の次の言葉が私を更に混乱と不快の中に陥れるのだ。

「貴方がエンシッダから何を聞いたかは存じません。ですが、エヴァンシェッドと悪魔を切り離すことなど不可能などだと知りなさい。」

――エヴァンシェッドと悪魔

千年前、万象の天使エヴァンシェッドの翼を切り落とした私の前世だという悪魔ヴォルツィッタ。

そして、その翼を万象の天使の元に返した悪魔の転生した姿だという私。

確かにこの事実、ただの偶然だと切り捨てるには何やら運命じみ

ているような気はしていた。
実体なき影が告げた『面白いもの』とは、私にこの話を聞かせたかったということか？
だが、そう思う反面、やはり私は私、悪魔は悪魔だという思いが強い以上、その考えに素直に頷けていない私がいる。
私という存在が無視され続け、ただ悪魔という存在ばかりが先行している現状から、目をそらし背中を向けて逃げ出したいと思っている自分がいる。
そして、私は何が面白い話のものか、これ以上は話を聞きたくないと、一歩嘆き（パシシオン）の間から離れようとした。
だが、影は私を逃がそうとはしてくれないようだ。

『逃げても無駄だ。奴はお前をどこまでも追ってくる。』

足もとに先と同じように現われた赤い文字を思わず踏みつぶす。
白き神たちがいなければ、いっそ大声を出していたかもしれない。
しかし、強く握りしめられた私の手にひんやりとした手が触れた瞬間に、驚愕にそんな感情が吹っ飛ぶ。
突然のことに声はかろうじて出さなかったが、これでもかというくらい息を吸い込んだ。
そして、何だとばかりに私の手に触れた人物を見て更に目を見開くこととなる。

――ヴィ・ヴィスターチャ？

そこには先日、エンシッダと共に出会った目を見張る美少女がいた。

第１００話　私が貴方を許しましょう　７（後書き）

エヴァ：ではでは、ヒロちゃんに続く次なる登場人物は・・・絶世の天使族の長・エヴァンシェッド！！
エヴァンシェッド：どうもはじめまして（にっこりと爽やかな笑顔で登場）
エヴァ：さすが絶世の美男子と名高い僕の分身！ヒロちゃんとは存在感が違うね
エヴァンシェッド：うーん、まあその辺はノーコメントで（笑）
エヴァ：何で？
エヴァンシェッド：ん？だってそれを肯定しちゃったらヒロが可哀想だし、なんか自分で自分を褒めてるのってナルシストっぽいだろ？
エヴァ：（可哀想だと言っている時点で、十分肯定していることになる気がするんだけど）えっと、じゃあとりあえず、質問始めさせてもらっていいかな？
エヴァンシェッド：もちろん（にっこり）

かくして、次回より万象の天使エヴァンシェッドへの質問が始まります。

第１０１話　私が貴方を許しましょう　８

白き神たちに気を取られていたとはいえ、こんな簡単に背後を取られたとは不覚であったが、突如現れたヴィ・ヴィスターチャに私はとりあえず驚きを飲み込むことには成功した。

ただ、どうしてこんなところに？という表情だけは惜しみなく表現したつもりだ。

されとて我関せずといった風で美しき少女は表情を全く動かさず、だが、自分の意志だけを強く伝えたいと言わんばかりに掴んだ私の手を引っ張ってくる。（最近、どうにもこの手合いの人物ばかりと相対している気がするな）

「？」

しかし、この少女と会ったのは罪人（アークヴェル）の巡礼地の戦いの前、エンシッダに初めて出会ったとき一度のみで、それも私とは直接会話はしていない以上、彼女が私に用があるというよりは、誰かが彼女に私を呼んでくるように頼んだと考える方が容易い。

なれば私に用があるのはこの少女の所有者のような顔をしていたエンシッダ・・・と思い至り、奴に聞きたいことは山とあるが、とりあえず今は面倒だと思った。

しかし、どうせここでこの少女を振り払ったところで、銀月の都（ウィンザード・シエラ）の中から出られはしないのだし、どこかで私は捕まるに違いない。（しかも、あの陰湿そうな男のことだ、嫌な形で会うに決まっている）

だったら面倒ことはさっさと済ませておくかと、私はぐいぐいと引っ張る少女に少し踏ん張ったが、すぐに誘う彼女に従うことにする。

そして、私が彼女に対して逆らう意識を見せないことを感じ取ったのか、ヴィ・ヴィスターチャは引っ張る力を弱めたかと思うと、次の瞬間、私は夜の銀月の都（ウィンザード・シエラ）の街並みとは別の場所に立っていた。

恐らく移動魔法を使ったのだろうが、突如として目の前に迫った光景は私に大きな衝撃を与え言葉をなくさせた。

――――そこにあるのは赤、赤、赤

低い天井、窓一つない広々とした圧迫感のある部屋に揺らめく松明が照らし出していたのは、壁・床・天井、全てに隙間なく描かれた壁画。

その全てが赤い色で描かれ、その全てが生々しい鮮烈な戦いの絵だった。

所狭しと描かれている人間、天使、それに獣のような姿をした生き物や巨人、彼らは同族や敵も味方もなく、ただただ何かに突き動かされているように戦いではなく、殺戮を繰り返しているような気がした。

剣に貫かれ目を見開いたまま絶命した人の表情、僅かな息を残しているだろう死ぬ寸前の姿、大勢に集団で袋叩きにされている者、一つ一つを上げればきりがないほどの目をそむけたくなるほどの残虐と非道の数々。そして、それを嬉々として行っている人々の姿。

狂気に彩られ、その鬼気迫るような絵の迫力と現実味に気分すら悪くなった。

「ここは？」

かろうじて出た声は酷く乾いて掠れていた。

「嘆きの間（パシシオン）」

だが、返ってきた声は変わらず淡々としていて簡潔で鈴の音のように美しい。

しかし、その言葉は頭の中ですぐに否定された。

「違う。少なくとも私が知っている嘆きの間（パシシオン）じゃない。」

昼間にシラユリに連れられた嘆きの間（パシシオン）と違うことだけは断言できる。

「ヒロが知っているのは嘆きの間（パシシオン）じゃない。あれはここを封印する

ためにある場所。」
「封印？」
見下ろしたヴィ・ヴィスターチャは私ではなくまっすぐ虚空を見つめたまま、私の腕をつかみ続けている。
「彼と彼女を会わせないための封印。表にでているあの部屋は嘆き(パシ)の間(シオン)のたった一つの入口を塞ぐためのもの。」
「じゃあ、ここはあの小屋の真下ということか？」
ふと横に目をやれば天井にのびる一つの階段があったが、あるだろうその先は確かに塞がれていた。（なるほど、だから移動魔法でもないとここに入れないのか）
それにしても『彼と彼女を会わせないための封印』というのは、どういう意味だ？
しかし、少女はそれには言及せず、言葉をさらに重ねた。
初めて彼女と会った時に聴いた歌のせいだろうか？どうも、彼女の話す言葉は感情もなく淡々としているにも関わらず、私には歌を歌っているように聞こえた。
「そう。そして、彼はここに封印されたまま描き続けている。この嘆きの壁画を」

――嘆きの壁画

「これは何を描いている？」
ただの殺戮と破壊を描いたものだと言われればそれまでなのだが、この壁画は何故だかそれだけではないような気がした。
「千年戦争。かつて大地を分ける世界の果て(レドヴァガンナ)がなかった頃、様々な種族の全てが戦いの狂気に溺れた姿。」
伝説に聞いたことはあった。また、サンタマリアからその真実も聞いた。
だが、千年前という過去の話であることや、それ故に自分が体験したことではない故に、私にとってそれは遠いお伽話のような印象

を持っていたし、特に何かを感じることはなかった。
だが、こうして現実味を持って迫られたとき、私の中で悪魔が騒ぐのを感じる。
それはきっと、これが千年戦争の真実を描いているからなのだろう。
だからこそ、その戦いの中にいた私の中の悪魔が私に訴えかけるのだ。
「だけど、この絵は未だ未完成。ううん、永遠に未完成のまま。千年前の罪を償いきるまで彼はここで嘆き、懺悔を続ける。」

――――彼？

いきなり移動させられたことや壁画に圧倒されていた私は、ヴィ・ヴィスターチャがそう言って指さした先に人影があることに初めて気がついた。
そこには壁画にへばりつくようにして動く、ぼさぼさにのばっしぱなしにされた長い髪の後姿。まるで毛玉の化け物だ。
「オウェル、連れてきた。」
簡潔なヴィ・ヴィスターチャの声に、一心不乱に壁に向かって絵を描いているらしい異様な風貌のその後ろ姿がぐるりとこちらを振り返る。
反動で振り回された長い髪から血走った瞳と狂気じみた顔の男が覗いたかと思うと、こちらを睨みつけ、そして、どこからか出したか定かではない声で私たちを歓迎した。
「ヴォオオオッ」
広げられた両手から血がべっとりとついたナイフが音を立てて落ちる。
そして、男の手から滴る赤い血を見た瞬間に気がつく、赤い絵の具か何かで描かれていると思った壁画が実はこの男の血で描かれているということに。

血でよって描かれる、世にも恐ろしい惨劇・・・背筋が凍るほどぞっとした。それは男がものすごい勢いでこちらに突っ込んでくることで、更に悪化する。

「な――――」

完全にビビっている私は咄嗟に足を引き、男から逃れようとするが少女の割に力が強いヴィ・ヴィスターチャの手がそんな私を引きとめて離さない。

そして、男は私の腕を掴んだ。

「いっ・・は、離せ!!」

赤い血がべっとりと私の洋服につく。

血など見慣れているはずなのに、それが何故だか怖くて私は男を振り払おうとするが、男の力はあまりに強く、そして気が動転している私の方は力が上手く入らずにそれは叶わない。（男が私を捕まえた途端にヴィ・ヴィスターチャは私から手を離した）

「許してくれっ!!」

しかして、男から逃れようとする私に対して男が放ったのは理解不能な許しを得るための懇願。

そして、その言葉にふさわしい行動をとるように男は私の腕を離し、そのまま崩れ落ちるように私の足元に平伏し見上げてくる。

「な・・んだ?」

「頼むっ、許してくれ!許してくれ!許してくれ!」

混乱する私に男はなおも言い募る。

狂ったようにただただ私に許しを乞い、床に這いつくばりのたうち回る。

だから、私はつい言ってしまったのだ。

「――――ゆ、許す・・よ?」

疑問形になってしまったのは、気の弱い私の悲しいところだが、その言葉は男にとってどうやら効果絶大だったらしい。

私を見上げていた血走った瞳には正気が戻り、繰り返された許しを乞う言葉はぴたりとやんだ。

そして、目のあった男の瞳は何とも表現しがたい色をしていた。まるで煌めく輝きを凝縮した宝石のようで、揺らめく松明の明かりに様々な色を反射する。

こんな色の瞳を今まで見たことがなくてそれまでの異様な男の所業も忘れ、私はしばしその瞳に見惚れたのである。

第１０１話　私が貴方を許しましょう　８（後書き）

エヴァ：じゃあ、身長・体重・年齢をどうぞ
エヴァンシェッド：身長１８０ｃｍ・体重７０ｋｇ・年齢・・・
エヴァ：あれ？年齢は言いたくないの？そういうのって女の人だけだと思ってたけど
エヴァンシェッド：いや、別に言いたくないわけじゃないんだが
エヴァ：ないんだが？
エヴァンシェッド：・・・実は正確な年齢を忘れてしまってるんだ
エヴァ：はあ？！
エヴァンシェッド：千年以上生きているのは確かなんだけど、寿命がないせいかどうも年齢を気にする習慣がなくって（笑）
エヴァ：な・・・なるほど
エヴァンシェッド：とりあえず、外見は年齢にして２０代後半くらいってことで
エヴァ：天使はみんな、そんな感じなの？
エヴァンシェッド：うーん、それは色々じゃないかな？シェルシドラなんかは自分じゃ覚えてないけど、周りがその辺り逐一覚えているから
エヴァ：へ？何で？？
エヴァンシェッド：（嫌な笑みを浮かべて）ふふ、それはシェルシドラの周りの天使たちにインタビューした時にでも聞いてみるといいよ
エヴァ：？？（何か嫌な予感が）

第１０２話　堕神　１

くるくると堕ちてゆく
真っ暗な闇の中、両手に持っていた全てのモノを失いながら堕ちてゆく
それでもたった一つ、貴方との繋がったこの細い糸を握り締めていられるのなら
僕は決して後悔しない

くるくるくるくる

回りながら底のない闇が僕を飲み込もうとも、この糸の先に貴方がいると信じられるから
僕は全然怖くない

くるくるくるくる

だから、どうかその糸を離さないで
貴方の分まで僕が堕ちてゆくから
貴方の姿が見えなくても、声が聞こえなくても、触れられなくてもかまわない
どんなに隔たっていても貴方とこの糸で繋がっていられる
それだけが、全てを捨てて堕ちゆく僕のたった一つの希望であり、願いなのだから

【堕神】

「はあはあっ」
正気を取り戻したようだとはいえ、あれほどの興奮状態でいたのだ。
男の息はしばし乱れたままで、それが整うまでどうやら本当の嘆き(パシオン)の間らしき場所には沈黙が垂れ込めた。
私は私で男の勢いに圧倒されたまま呆然と立ち尽くすだけだったし、ヴィ・ヴィスターチャに至っては表情一つ動かしていない。
そして、そんな微妙に気まずい雰囲気を断ち切ったのは、初めて聞く男の理性的な声。
「――――すまなかった。」
それはさっきまでの狂気に満ちた男とは全く違う、とても落ち着いた低く心地よい響きをもって私の鼓膜を揺らした。
男は私に一つ頭を小さく下げると、きっと痣になっているだろうほど強く私の腕をつかんでいた手を放し、一歩私から離れる。
私は小さく安堵の息を吐く。
「時々『ああ』なる。ちょっと前までは正気を保っていられていたんだが駄目だな・・・本当にお前に会うとなったらこの様だ。情けない。」
ぼさぼさに伸びた長い髪のせいで隠れた顔の隙間から苦々しい笑みが見えた。
「私を嘆き(パシオン)の間に呼んだのはあんたか?」
男の言葉から、そして、あの浮かび上がった赤い文字とここの赤い壁画の色が同じことから、自然とその言葉がついて出た。
「そうだ。本当はこちらから出向くのが筋だろうが、俺はここの中でしか実体を保っていられない。信じられないかもしれないが、お前も月に浮かび上がった俺の影を見ただろう?声も存在自体も消された状態で俺に唯一残されたのは血文字を残すことだけだ。」

不思議な光を湛えた男の瞳はまっすぐに私を見る。
「だが、そんな姿を晒してでも、俺はお前に会いたかった。お前にこの壁画を見てもらいたかった。」
――この壁画がまさか血文字で告げられた『面白いもの』だとでも？
冗談だろうと切って捨てたかったが、オウェルの雰囲気からそれはできそうもない。
代わりに私は尋ねる。
「それは何故だ？」
私が男に会ったのは間違いなくこれが初めてで、そこまでして会う理由など私の方にはあるはずもない。
だが、オウェルと呼ばれた目の前の男の髪から垣間見える表情やその瞳の色に不意に懐かしさを感じる。
正直、それが答えだと直感している自分もいるのだが、聞かずにはいられないというのが私の悲しい性だ。
結局、その事実をつきつきけられるまで、私はそれを受け入れられない。
「お前が――」
「ヒロ、君が悪魔の生まれ変わりだから・・・だよ。オウェルが用があるのは君じゃない、君の中の悪魔にさ。」
だが、男からの事実を突きつけられるを待ち構えていた私に、予想もしない方向からあっさりと突き付けられた。
それを聞いた瞬間に思う。
――ああ、そうだろうよ
本当にどいつもこいつも悪魔に灰色の魔力・・・、私であって私のものではないものばかりに用がある。

だったら、いっそ私のことなど放っておいてくれとやさぐれる気分にもなるというものだが、それが叶わないことが私は辛かった。

「エンシッダ！」

そして、オウェルが叫んだ名を持ち私に現実を突きつけたのは、ヴィ・ヴィスターチャが私を呼びに来た時から頭をよぎっていたエンシッダで、驚いた部分もあったがある意味やっぱりという思いの方が私には強かった。

だから、あの人好きする笑みの裏に毒を感じずにはいられない彼を前にしても、彼が私の眼を背けたかった事実を突き付けても平静でいられた。

「どうしてっ！？俺が彼に話をするまでは待っているといったじゃないかっ。約束が違う！！」

どうもオウェルにとって、このエンシッダの登場はまだ早かったらしい。

動揺が彼を支配し、落ち着いた様子だった彼が再びざわめいていく。

「別に俺はそれを了承した覚えはない。お前がヒロに俺抜きで会いたいと言ったのに、『そうか』と返事をしただけだ。」

しかし、エンシッダの姿かたちから想像もつかない厭味ったらしい言葉でオウェルを言いやりこめる。（こういう口八丁手八丁の輩には本当に勝てないと思う）

「それに君とヴィスだけでは、ヒロに十分な説明もできやしないだろ？ほら、今も可哀想に話についていけず彼は呆然としているじゃないか？」

エンシッダの言っていることは正しいが、その言い方は一々癪に触って私の神経を逆なでする。（それを見越してこんな言い方をしているに違いない）

「では、あんたが私に説明してくれるのか？この訳の分からん状況を」

だから、私は少しでもエンシッダに負けたくなくて彼を睨みつけ

る。それが虚勢だと分かっていても。
「もちろん。だって、君にはいい加減自分というものを自覚してもらいたいからね。」
それに対して、いっそ気持ち悪いくらいの笑顔をエンシッダは返してくる。
私は細めた瞳を一層に細めて、奴を睨みつけた。
「悪魔の生まれ変わりってことだろう?それこそもういい加減に聞き飽きたし、嫌ってほど自覚しているさ。」
「へえ・・?」
あからさまに本当か?というニュアンスを含んだ言い方に、私は自分でも目を背けてきた事実を初めて口にする。
「あれから・・・罪人(アークヴェル)の巡礼地での戦い以来、私は見たことも聞いたことも感じたこともない存在を懐かしいと感じることが多々ある。それは恐らく悪魔の記憶が私の中に確かにある証拠だ。」
目をそむけたくても、それは私の中に確かにある。
「なるほど、灰色の魔力と共に君の中の悪魔が覚醒しているということか。アオイの報告を聞いていたが中々面白い現象だ。」
アオイが何を報告していたかなど私の知ったことではないが、私の言葉にエンシッダはいくらか納得したように独り言をぽつりと漏らし、ふと何か悪巧みを思いついたような笑みを口元に浮かべた。

「じゃあ、この男・オウェルにも見覚えがあるのかい?」

そう言われて彼を振り返った私にオウェルはびくりと体を揺らす。
ヴィ・ヴィスターチャの話によればここで壁画を描きながら贖罪を続ける男、私をわざわざここに呼びつけた男、そして、狂ったように私に許しを乞うた男。
その全体像は汚らしく伸びきった髪の毛に隠れているが、私を見つめ返す揺れる瞳の不思議は光は確かに私の、いや、この場合は悪魔の心に何かを投げかけてくる。

だから、私は声なくエンシッダの声に頷いた・・・途端にエンシッダは堪えきれないという風に笑いだした。

そのあまりに愉快そうな笑い方は、悲惨な壁画が四方を囲むこの嘆き(パシシオン)の間にはあまりに不釣り合いだ。

「ははっ、これは愉快!!良かったなぁ、オウェル!!どうやらお前の親友はお前の裏切りを忘れてはいなかったようだっ。わざわざシラユリまで使って彼を呼び出したはいいが、怖くて隠れた必要はなかったんじゃないか?」

「シラユリだと?」

黙ってエンシッダの芝居がかった言葉を聞いていても良かったが、その言葉に思い当たる部分があって私はオウェルに問いかける言葉を聞き返した。

「まさか、昼間のあの視線はあんたなのか?」

そして、オウェルに改めて向き直って私は彼に一歩近づいた。

彼は怯えたように一歩下がる。

その様子はあの挑発的な血文字を書いた彼とも、先ほど一瞬だけ見せた冷静な彼とも繋がらない。

「あんたがシラユリを使って私を嘆き(パシシオン)の間に行かせたのか?」

そう考えればシラユリの不審な様子にもいくつか納得がいった。

彼女は決してあの場所に何かを見つけるために行ったのではなく、私をあの場にこの嘆き(パシシオン)の間を封印するための小屋に連れていった。

彼女の目的がそれだというのなら、小屋に行くことにあれほどこだわっていた割に小屋に入った途端に何かに脅えるようだった風も、早くあの場から去りたがった様子も説明がつく。

私を連れていったのだから、怖い思いをしたあの場所からは早く去りたかっただろうし、やっとそこから解放されてほっとしたあの表情の理由も納得がいく。

それにシラユリが聞いたという小屋の下から聞こえたという誰かの叫び声も、きっと恐らくこのオウェルの先ほどのような狂気に満ちた叫びということなのだろう。

――しかし、そこまで考えたところで疑問が新たに発生する

では、それを聞いた神の子（マイマール）はどうして壊れたのか？

それにどうしてシラユリは大人しくオウェルに従って、私を嘆き（パシ）の間（シオン）に連れていった？

シラユリがオウェルに脅えて言うことを聞いただけということも考えられるが、幾重にも矛盾を感じた彼女の様子からそれだけではないような気がしてならない。

しかし、私のその問いは口にせずとも解消されることとなる。

「そうだ。魔力を使って無意識下で彼女を操ってヒロをここに連れてきてもらった。まあ、お前を見た瞬間に足が萎えて何もできず、結局はヴィスにお前を連れてきてもらうことになったんだがな。」

意を決したように私を見つめてオウェルは語り出す。

しかし、何とか正気を取り戻したようにも見えるが、オウェルは何かを押さえつけているようにフルフルと体が震えている。

「操った？」

「ああ。暗示をかけたのさ。あの小屋の中には俺の魔力が有効だからな。『ヒロをここに連れてくる』という暗示を彼女にかけた。まあ、操られている言っても彼女にはその自覚はない。気がつけばヒロを連れて小屋にいた・・・シラユリの感覚としてはそんな感じだろう。」

なるほど不可解ともいえるシラユリの態度にはそんな理由があったわけか。

「他の子供たちにはその魔力が彼らの中の神の血（ニス・ドゥア）と拒否反応を起こして壊れてしまったようだが・・・悪いことをした。」

そして、シラユリがあれほど心を痛めている事件の真相をぽろりと漏らすオウェル。

私はいよいよ眉をひそめて彼を見た。

「・・・あんたは何者なんだ？」

千年以上前からここで壁画を描き続けているというこの男。広い壁に血の絵を描き続けても今に死にそうという風貌でもない様子（私だったら間違いなく出血多量で死んでいる）、それに今、魔力を使ったと告げた彼。

「俺は銀の神オウェル。千年前、友だったお前を裏切り今もこの世界に生き続ける堕ちた神。」

第１０２話　堕神　１（後書き）

エヴァ：えっと、じゃあ、気を取り直して最後にエヴァンシェッドの異性のタイプを教えて？
エヴァンシェッド：別に取り立ててタイプっていうのはないかな？女性は皆、愛らしいしね
エヴァ：お？さすが愛人がたくさんいるプレイボーイ！言うことが違うね
エヴァンシェッド：いやいや、そんなんじゃないよ。でも、強いて言うなら
エヴァ：言うなら？
エヴァンシェッド：大人しい人じゃなくて、気の強い人がいいかな？俺に楯突くくらいの
エヴァ：はあ？何それ？エヴァンシェッドってばひょっとしてＭ？
エヴァンシェッド：まさか、俺に楯突くくらいの人を支配するのが快感なんだよ
エヴァ：・・・えっと、じゃあＳ？
エヴァンシェッド：自分じゃ自覚ないけど、どっちかっていうとそうかもね（笑）
エヴァ：（それって笑っていうことじゃないと思うんだけど、なんか微妙に口答えできない雰囲気だな・・・ここはこれ以上聞くとやばいかも）じゃあ、質問は以上です！エヴァンシェッド、ありがとうございました！
エヴァンシェッド：あ、そうなの？残念だな、もっと話していたかったのに。じゃあ、お邪魔しました、楽しかったよ（にっこりと笑顔を振りまいて退場する）
エヴァ：ふう、あの笑顔なのに怖いくらいの迫力・・・さすが万象の天使？

第１０３話　堕神　２

「あらあら自分で堕ちた神なんて言っちゃたよ、この人は。」
からからとエンシッダが私と『堕ちた神』と間に流れる緊迫した空気に似つかわしくない声で笑った。
だけれど、オウェルは先までの動揺も消え去ったようで私だけをしっかりと見据えてくる。
「俺は昔から神として自覚なんかなかった。ただ、自分の幸せだけを追い求め、そのためならどんな存在を傷つけても罪悪感の一つも俺にはなかった。いや、俺だけじゃない千年前、神と呼ばれた者たちのほとんどがそうだったように今になって思う。」
その言葉で思い出したのは腸(はらわた)が煮えくりかえるようなドス黒い感情とあの汚らしい黒の神のこと。
確かにあの男はオウェルが言う通りの野郎だった。
「あははっ！あの傲慢だった君からこんな言葉が聞ける日がやってこようとはねっ」
うなだれるオウェルに楽しげなエンシッダの声が被さる。
しかし、オウェルはそんなエンシッダは無視してまっすぐに私を見つめてくる。
その視線の強さに私はたじろぎ、エンシッダはつまらなそうに眉を顰めた。（まあ、相手にされないんじゃ、どんなに的確な嫌味を言っても楽しくないだろう）
「そして、俺は自分のためにお前を・・・いや、お前の前世であるヴォルツィッタを俺は裏切ったんだ。親友であった彼を。」
だが、このままオウェルに話させたままでは収拾がつかないと、私は待ったをかけるように手をかざしてそれを中断させた。
「あんたはそれで私に許しを乞いたのか？」
「そうだ。」
「そうだって、そんなん私に許しを乞うことじゃないだろう？」

そもそも私にヴォルツィッタとしての記憶は一切ないのだ。
「分かっている。もちろん、それが俺の自己満足にすぎない。でも、分かってくれよ？俺だってこんな出口もない息苦しい場所で、後悔と罪悪感だけ引きずって懺悔を続けてきたんだ。ちょっとくらいの自己満足は勘弁してくれよ。」
言っていることはひどく重々しいのに何処か軽く言葉を紡ぐオウェル。
その端々から、恐らく神と呼ばれていた頃の彼は今の陰鬱な姿からは考えられないくらい明るかっただろうと想像できた。

――それがどうしてここまで堕ちる結果になった？

誰もいない場所に一人閉じ込められ、千年という長きにわたり一人この血の壁画を描き続け、懺悔を続けていた・・・そりゃ、あんな風に狂気にとらわれもするってものだ。
私だったら、とうの昔に狂っているに違いない。
しかし、だからってさっきは思わず咄嗟に『許す』なんて言ってしまったが、彼の罪どころか彼と関係のない私がそれを彼の自己満足のために『許す』義理は何とつ無いのだ。
私は彼と同調しそうになる感情を振り切って彼に問いただす。
「それが分かっていて、どうしてわざわざ私をここに呼び寄せた？大体、この壁画の何が一体面白いものだっていうんだ？」
何しろ、そもそもオルウェは私に『面白いものを見せてやる』と言って呼び出したのだ。
しかし、実際にあったのは血で描かれた悲惨なる壁画だけ・・・部屋一杯に漂う血の匂いに私は気分が悪くなる。
「まあ、お前には何一つ面白いものなんかないんだろうな。悲惨な戦いの絵なんてな。きっと、ヴォルツィッタが見たなら感想のひとつも言ってくれたんだろうが。」
「言っとくが、千年前の事を何となく感じるというだけで、私には

確かな記憶は皆無だ。」
　千年前の悪魔をこの身に飼っているような感覚こそあるが、だからって、自分が自分でなくなるような感覚はあの罪人（アークヴェル）の巡礼地での一件のみだ。
　すると口を歪ませてオウェルはこれは自分の感傷だと呟く。
「でも、千年前、俺が犯した罪はヒロ・・・お前自身にも深く関わることだ。」
　ぴたりと私に見定められたオウェルの瞳が、散漫な光の瞬きから強い一つの光を湛えた色へ一瞬だけ変化したように思えた。
　だが、それは一瞬で消えたので、もしかしたら私の気のせいかもしれない。
「だからこそ、俺はお前の前にこうして醜態を晒したし、このエンシッダがそれを許可したんだ。」
　それからそれまで全く無視していたエンシッダにちらりと視線を向けて、ちょっとおどけたように肩を上下させて
「でなきゃ、俺の自己満足ためのだけにこの性格の悪い男が俺のために動いてくれるなんてこたぁないからな。分かるだろ？」

――――確かに

　力強い同調と共に心の中で大きく頷いてみたが、それを実際に口にすることはなかった。
　何しろエンシッダがこちらをすごい目でにらみつけていたし、何となく話が脱線しそうだった。（だが、そんなエンシッダの視線が妙に気分が良かったことは間違いない）
「じゃあ、エンシッダの無言の圧力が怖いことだし、それに俺もいつまでこうして自分を保っていられるか分かったものじゃないからな。さっさと話を始めるか。」
　言いながら小刻みに震え続けている右腕をオウェルが抑えているのが目に入ったし、見え隠れする瞳の色が何だか不安定に揺れてい

るように感じられる。
自我を取り戻したように見える彼だが、その言葉と行動の端々に先に見た彼の狂気を感じた。
しかして、時々『ああ』なるといったオウェル。
まるで発作でも起きたかのようなその言葉を思い出して、私は眉を顰める。
確かに彼の境遇は自我を狂気に乗っ取られたとしても可笑しくない状況だとは思うが、こうして自我を保っている彼とのあまりに違いに私は違和感を感じた。
「まず、壁画を見てくれるか？これは単に戦いの悲惨さを描いたわけじゃない、俺はこの壁画に千年戦争の全てを描いた。そして、その千年戦争と物語の中心にいるのは神や天使でもない、たった一人の人間の少年だ。」
そう言われて血に彩られた壁画に目をやれば、どうやら嘆き（パシシオン）の間の中央天井あたりに一人の少年がまるで母親の胎内に漂う赤子のように蹲り丸（うずくま）まっている姿が描かれいた。
だが、それははるか昔に描かれていたのだろう。血は変色した様子でこびりつき所々が掠れたように見え、はっきりと知ることはできない。
ただ少年と言われればそうなのかもしれないが、その姿はどちらかというと髪が長く線の細い描写で描かれ少年といえど中性的な雰囲気を醸し出していた。
「彼の名前はラーオディル・オヴァラ、古き世界の言葉で『神に忌み嫌われた子供』。そして、千年戦争を始め、今も動き続ける世界の中心にいる世界の禍。」

――――ラーオディル・オヴァラ、神に忌み嫌われた子供

聞いたことのない名前・言葉のはずなのに、不意に胸を塞ぐこの感情はきっと悪魔のものなのだろうが、それにしてもその一瞬に襲

ってきた衝撃の大きさに私は胸を思わず押さえ、見上げた天井の少年を食い入るように見つめた。
「そして、同時にヴォルツィッタのたった一人の家族でもあった。」
しかし、その一言でぐるりと私はオウェルを振り返った。
私がどんな顔をしていたかは私自身が知るはずもないのだが、きっと酷く驚いた顔をしていたのだろう。
髪に隠れて見ずらい彼の口元に苦笑が広がるのが見えた。
「とはいっても血は繋がっていない。お前は子供を拾って育てたんだよ。・・・その子供が灰色の魔力の根源とも知らずに。」
アオイの話によれば魔力とはその色の神を魔力の根源としている。だが、灰色の神という神はこの世には存在せず、だからこそ灰色の魔力とは他の魔力とは一線をかくし異常だと言われた。
「では、この少年が灰色の神なのか？」
「馬鹿だな。オウェルの言葉を聞いてなかったのか？ラーオディルは神でも天使でもない『人間』だといっただろう？」
エンシッダが私を馬鹿にしたように言った。確かにそうかもしれない。だが
「人間が魔力の根源なんてことが――」
「そうだ、ありえるはずがない。だからこそ、彼という存在は禁忌とされ、神に忌み嫌われ、世界全てから拒絶されていた。ヴォルツィッタに出会うまではな。」
そう言ってオウェルはラーオディルの描かれた右横あたりで、背後から誰かに剣で突き刺されている男を指さした。
その男は血で真っ赤に塗りつぶされた一つの翼を手に持っていた。きっと、万象の天使の翼をもぎ取った悪魔ヴォルツィッタを表現しているのだろう。
「どうして、ヴォルツィッタがラーオディルを拾ったのか。育てることになったのかは、俺も詳しくは知らない。だが、俺と出会ったとき、彼はすでにラーオディルと共にあり、そして、既に灰色の魔力に感染していた。」

『感染』とは何となく嫌な響きだ。
「その身に灰色の魔力を宿しているのならお前にも分かるだろう？他の全ての魔力をその色に吸収してしまう灰色の魔力の能力を、だが、それだけじゃない。知っているか？灰色の魔力にその魂までも感染させられたら最後、その存在は永遠の命と灰色の魔力を得ると同時にその隷属となり下がる。」
「そんなもの神と天使、神と神の子（マイマール）たちにも言えることだろう？魔力による繋がりは全て私には同じに見えるが？」
今のオウェルの言葉から、少なくとも私には両者の違いは感じられない。
しかし、オウェルは大きく首を横に振った。
「いいや、違う。」
きっぱりとした迷いのない言葉だった。
何が違う？神との契約・神の血（ニス・ドゥア）という名の鎖、全ては神が永遠の命と力を引き換えに人間を隷属させるためのものだ。
「何故な――――グッ」
しかし、何かが確信に迫ろうとしたその途中でそれまで、平然と冷静に物事を語っていたオウェルが呻き、その場に膝をつく。
「だ、大丈夫か？」
そもそもこんな所で血を流し続けていたのだ。神といえど、どこか体を悪くしているのかもしれない。
私は咄嗟に崩れ落ちたオウェルに近づいて、彼の肩に触れようとする。

「ヒロ、やめろっ！」

厳しいエンシッダの声と同時に、私は俯いていたオウェルが顔を上げたことで彼と目があう。
それは、それまで色々な光に反射していた色ではなく、見たこともないほどに深い蒼を湛えた右目とその蒼の色が何かに濁ったかの

ように灰色の混じった蒼の左目。
そして、その瞳の色に気を取られた瞬間、私は突如として巻き起こった強い風に吹っ飛ばされて血で描かれた壁に打ち付けられたのである。

第１０３話　堕神　２（後書き）

エンリッヒ：というわけで、インタビュー第三弾は天使界のナイスガイことエンリッヒさんでぇす！（一人でぱちぱちと拍手）
エヴァ：何が『というわけ』か知らないけど、進行役の僕を無視しないでくれる？それに自分のことを『ナイスガイ』やら『さん』づけで呼ばないでしょ、フツー（エンリッヒを大いに引いた目で見つめる）
エンリッヒ：まあまあ、そう固いこと言わんとぉ。エヴァさんの仕事を少しでも減らせたらと思っただけやしまへんか
エヴァ：気持ち悪い声出さないでよ。それに何なのその変な言葉遣い。天使は皆そんなしゃべり方するわけ？
エンリッヒ：いんや、今までこのしゃべり方をする人はわいも自分のおじさんしか見たことありまへんなぁ
エヴァ：ふーん、まあいいや。じゃ、さっさと始めようか
エンリッヒ：あら？ここはじゃあどうしてそんなしゃべり方をするの？とか会話が広がっていく場面やありまへんの？
エヴァ：別に僕、君に興味ないから
エンリッヒ：ああん、エヴァさんったらツ・レ・ナ・イ
エヴァ：・・・本気で気持ち悪いからやめて

第１０４話　堕神　３

あの女(ひと)を見つけたのはほんの偶然で、決してストーカー紛いなことをしている訳じゃないことを俺は初めに言っておきたい。（見つけた後、彼女の様子が気になって後を追ったことに関しては、多少ストーカーチックかもしれないが）

でも、気になる女が深夜に一人涙で目をはらした状態でフラフラしてたら普通は気になるもんだろう？

＜ＳＩＤＥ　アラシ＞

と、まあ誰に言うまでもねえ言い訳を心の中でしつつも、俺はまるで夢遊病のように深夜の銀月の都(ウィンザード・シエラ)の地下層を歩く細い女の後を追っていた。

地下層のほとんどはアオイの研究施設かもしくは倉庫の類なので、深夜ともなれば人気もなく、どこからか聞こえてくる機械音だけが響いている。

そんな中を彼女に気付かれないよう距離をおいて追いかけている俺。

女の尻の後を追いかけるなんざ情けないことこの上ないが、俺はどうにもあの女のことがハクアリティス様のことが気になっちまうんだ。仕方ねえ。

「ねえねえ、いっちゃうよ？」

しかして、自分の思考と目の前のハクアリティス様に意識が集中していた俺は、突如として下から聞こえてきた舌っ足らずな声にとび跳ねた。

そこにいたのは贖罪の街から共に逃げ出してきた子供たち３人の

丸っこい顔顔顔。
「なっ！？」
驚いて思わず大声を出してしまったが、そろりと横目で見やる彼女の背中には変化はなく、追っていることを気付かれずには済んだらしい。
俺は小さく息を吐くと、でかい体を子供たちと合わせるべく屈んだ。（まあ、屈んだところで１００ｃｍにも満たない子供たちより大きいのだが）
「どうして、ここにいるっ！？」
小声で叫ぶように慌てて言えば、本当なら涙をためて怯えるような表情をしてほしいところだが、何が楽しいのかキャラキャラと笑うクソガキども。
「面白い顔～！」
「へん～！」
「クマクマァ！」
黒の雷（オルヴァラ）じゃ強面のリーダーとして名をはせている俺が、がっくりと肩を落とす。
ガキ相手に何処まで今の俺の状況がどう理解されているか不明だが、人に見られなたくない場面を見られて俺としても何となく微妙な後ろめたさがある訳で・・・
「はいはい。俺は面白くて、変で、クマな顔ですよ。その辺はよおっく分かったから！それより、こんな夜遅くにどうしてお前らここにいるわけ？親はどうした？」
こうなったら、さっさとガキどもには家にかえってもらおうとするのだが、ガキたちは俺の優しい提案に揃って首を横に振った。
「ヤダ！！お父さんたち、ここにいるんだもんっ！」
そして、そんな３人のうち、将来が楽しみな愛らしい顔をした少女が叫んだことで俺は気がつく。
限られた人間しか入ることを許されていないアオイの研究所が広がる地下層、こんな夜遅くにガキどもがこの場所に忍び込んだ訳は、

決して俺の後をつけてきたんじゃなく、彼らの親に会うため。
そして、その親がこの地下層にいるという意味は、
「神の子（マイマール）・・・か？」
それしか考えられなかったが、その言葉を発した途端、子供たちの表情がたちまち明るくなる。
「うん！お父さんやお母さんたちは天使をやっつけるために、つよーくなったんだっ！」
「魔法が使えるんだよぉ！！」
「今はその準備しているの！！」
わいわいと楽しそうな子供たち、きっと両親たちの変化を誇らしく思っているのが分かった。
同時にアオイから贖罪の街の住人たちでも希望があれば神の子（マイマール）化を進める旨を聞いていたことと、黒の雷（オルヴァラ）の中でもその多くがそれに志願していたいたことも思い出す。そして、今はそれの調整中であることも・・・。
ちなみに俺はそれに志願はしなかった。
力が欲しいとは思ったが、先日のアオイとヒロとの会話を思うと何となく踏ん切りがつかなかったし、少なくともガキどもがわいわいと嬉しそうに話すように神の子（マイマール）のことを単純に考えられなかった。
（まあ、知っている情報に差があるし、それを知ったところでガキどもが理解できるとも思えんが）
「・・・」
思わず何と言っていいか分からなくなって、黙り込んでしまった俺に嬉しそうにはしゃいでいた子供が気がついたように声を発した。
「ねえ、本当に行っちゃうよ？」
それにつられて確認すれば、ハクアリティス様の後姿が先ほどよりかなり小さくなり、長いまっすぐの廊下かを右に曲がろうとしているではないか。
俺は咄嗟に子供たちに背を向けてその後を追うべく足音を消して走り出したのだが、パタパタと気配を消そうともしない三つの

小さな気配たちも追ってくることによって、俺の気遣いは全くの無駄となる。
「オイ、ついてくるなよ。」
低い声で言ったつもりだが、しかして、子供たちはにっこりと笑って俺の言葉など無視した。

それから、どれくらい迷路のような地下層でハクアリティス様を追ったことだろう。
「あ～っ！あそこお父さんたちがいるところだよねぇ！」
ふらふらと彼女が不意に入った一室に気づいたガキが大きな声を上げる。（どうやらガキどものここが初めてという訳ではないらしい）
俺もそれは了解していた。

――あそこは神の子（マイマール）の調整室

ハクアリティス様があの場所に入っているところなど見たこともないし、ましてやこんな深夜に用があるとも思えない。
そもそも、あそこは神の子（マイマール）の生命線である重要な場所で、アオイに許しを得たものしか入れないはずであり、ハクアリティス様にはあの扉を開ける鍵をもっていないはずなのに、どうしてあんなにあっさりと扉が開いた？（ちなみに俺は一応鍵を貰っている）
ガキどもは親に会えると純粋に喜んでいるようだが、俺は思いっきり眉をしかめた。
これまでは彼女の動向が気になって隠れてついてきていたが、これを見逃すことは黒の雷（オルヴァラ）のリーダーとしてできることじゃない。
俺はこそこそと追うことをやめ、大股で歩くとその扉を躊躇なく開け放った。

「ハクアリティス様っ！」
そして、呼びたくても呼べなかった名前を叫びながら、俺は部屋に押し入り、こちらに背を向けたままの儚い後姿を確認した。
「あら・・・アラシ？」
だが、その後ろ姿がヨロリと振り返った彼女の表情を見た瞬間、俺は背筋に何か冷たい物が走るのを感じた。
俺の名前を呼んだ以上、俺の姿を確認しているはずなのに、重なり合うことのない視線の虚ろな色。振り乱されたような長い亜麻色の髪。しばらく見ない間に色褪せた彼女の美しさはもはややつれへと変化している。
この銀月の都（ウィンザード・シエラ）に来てからの数か月の間に彼女に何があったというんだ？
自分の知っている彼女とのあまりの違いに俺はたじろいだが、だからといって彼女を見逃すことなどできはしない。
「こんな所で何をしているんですか？」
今にも親に向って走り出そうとするガキどもを背中で押しとどめながら、俺は問う。
「見て分からない？彼女とお話しているのよ？」
それに対して、ハクアリティス様は何を言っているのか分からないというように言葉を返す。
「彼女？」
少なくとも俺やガキたち以外に、もの言う存在はこの部屋にはいない。
いるのは聖櫃に納まった神と、その神に繋がれた神の子（マイマール）たちだけ、彼らは皆眠りにつき、目覚める様子もない。
「もちろん黄色の女神ディルアナに決まっているじゃない。声が聞こえるでしょう？」
決まっている？
聖櫃に入った存在は二度と目覚めることもなく、魔力が尽きるまで永遠に搾取され続けるとアオイに聞いた。

それはまさに生きながらに死んでいるのと同じだと・・・その神がどうしてハクアリティス様に何を語りかけようというのか？

俺は混乱し、ハクアリティス様の様子と相まって、彼女がどこかおかしくなったのかと思った。

だが、ハクアリティス様の様子がおかしいというだけで済まない行動を彼女はとった。

「ここから出して欲しいって、ずっとずっと私に言うの。声が聞こえるのよ。ねえ、どうやったら彼女をここから出してあげられるの？」

そう言ってアオイや神の子（マイマール）以外は決して触れることの許されない聖櫃へと彼女は細い手を触れさせたのだ。

「やめっ――――」

聖櫃から神を出したらどうなるかなど俺が知るわけがないし、実際にどうやってそれを行うかも俺は知らない。

だが、アオイが聖櫃を軸としたこの機械にだけは無暗に触れるなと厳しい表情で言われたことや、ここへの人間たちの出入りの規制具合からハクアリティス様のそんな行動を俺は瞬間的に駄目だと感じた。

そして、ハクアリティス様に手を伸ばし彼女が聖櫃に触れることを止めようとしたのだが、部屋の中ほどにさしかかったところで、見ない壁のようなものにぶち当たって俺は尻もちをついた。

「あらしぃ！」

「だいじょうーぶ？」

「どーしたの？」

予想もしてないことに激痛を感じたが、無論その程度で起き上がれないほどやわな体じゃない。

俺はすぐに体を起こすが、しかして、俺を心配するガキどもに気を使ってやるほどの余裕は消えていた。

「キャァアアア！！！」
甲高く響くハクアリティス様の悲鳴。
怯え、恐怖に歪んだ表情は何もないはずの高い位置の虚空を向いている。
「な・・・なに？」
その尋常でない様子と、何が何だか分からない状況に子供たちも混乱し始める。
だが、俺は何となくその気配を感じていた。
ハクアリティス様と俺たちの間に存在する壁の気配、俺は自分のすぐそばにあるそれにそっと手を触れさせた。
あるはずのない何かの感触は暖かく、何か生き物であることを俺に伝える。
「見てぇ・・・」
そして、俺の背中に貼りついた子供が指をさして震えた声を出す。
それは淡い黄色の魔力の光に満ちた天井の高い部屋に映し出された影、大きさにして１０メートル以上はある異形の魔物の影。
姿なきその影が今にもハクアリティス様に襲いかかろうとしていたのだ。

第１０４話　堕神　３（後書き）

エヴァ：身長・体重・年齢をどうぞ
エンリッヒ：あらぁ？なんか妙に事務的やありません？？
エヴァ：気のせい。気のせい。（面倒なのでさっさと終わらせたい）
エンリッヒ：えっと（相手にリアクションされないと、どうしていいか分からない）
エヴァ：身長・体重・年齢
エンリッヒ：・・・身長は１８０ｃｍ、体重は７７ｋｇですわ、年齢・・・は
エヴァ：年齢は？
エンリッヒ：ちょっと待ってくれはります？今、計算しとりますから
エヴァ：（言動より真面目な性格だな、エヴァンシェッドなんて超適当だったのに）
エンリッヒ：うーん・あ・あれ？（指を使って数え出す）

＜数分経過＞

エヴァ：・・・もういいよ。君がバカなのは良く分かったから
エンリッヒ：ガーンッ！！！

第１０５話　堕神　４

何が起きているかなんか、俺には全く分からなかった。
ただ、壁一面にはめ込まれた神の子（マイマール）たちが眠る箱に、黄色の女神の放つ光に浮かび上がったその異形なモンスターがハクアリティス様を今にも襲おうとしている事実だけは認識できた。
その姿はまるでライオンのような雰囲気だが、だからといってそれだと断定できない異形を纏っている。
大きさのそれぞれ違う４つの翼が広げられ、巨大なギザギザの鱗らしきものがついた尾がしなり、鋭い爪と牙が伸び、影なのでその大きさの正確な所は知れないが俺の目算では１０メートルはある。
「な・んなの？」
その目には映らぬ、だが、その気配と影だけは確かに存在するモンスターに子供たちも怯え、正直、俺の心中にも怯えと恐怖が支配している。でも、
「こないでぇ！！！」
気になる女が目の前で手の届く場所で恐ろしさに震え泣いているというのに、何もせずに尻込みするなんて絶対にしたくはなかった。
「ハクアリティス様っ！！！」
だって、今まで自分たちが生き残るために多くの同胞が天使たちの生贄になっているのを黙ってみてきた。
自分の命を、贖罪の街の全ての人間を守るために聖櫃という名の死刑台に連れて行かれる仲間たちを黙って見送るしか俺にはできなかった。
――――でも、今は違う
俺が守りたいと思っているもの、この都も仲間たちも、そしてハクアリティス様を守ることに何一つ躊躇う理由なのどない。

だから、俺は彼女の名を叫びながら子供たちを置いて駆ける。
モンスターに再びぶち当たることのないように手を前にかざし、気配を感じ、ハクアリティス様とモンスターの間に立ちふさがった。
姿の見えぬ相手にどう立ち向かえばいいかなど分かるはずもないが、この時の俺はただ夢中だった。
ある意味、我を忘れた状態のような俺はただハクアリティス様を、このいつも何かに怯え泣いている女を守りたいという一心に支配されていたのだ。
そして、今まで何一つ守れなかった俺にとってそれはひどく心地の良い感情でもあった。
姿なきモンスターからは、本来ならばあるだろう息遣いも叫びも聞こえてきはしない。
だが、視界の端に映る、唯一その存在を確かめることのできる影はまさに雄たけびの一つでもあげて、俺とハクアリティス様に向ってその鋭い爪を振りおろそうとしている様子が伺えた。
俺は黒の雷(オルヴァラ)をつけた拳を顔の前で交差させ、その衝撃に備える。
ヒロの黒の剣(ローラレライ)とは違い、何一つ力のない俺の黒の武器(カシュケルノ)であっても、せめてハクアリティス様だけでもこの刃から守る盾になればいい。
この時の俺は本当にそれだけを思って、そこに立っていた。だが、
「・・・？」
どれほど待てど暮らせど、俺を殺してしまうほどの衝撃は何一つやってはこない。
聞こえるのは絶え間ないハクアリティス様の嗚咽と、そして
「ギュエ！」
何やら苦しそうな潰れた声と何かが落ちてきたようなドスンという音、そして、突如として感じられた数人の人の気配。
「あーーー！」
状況が変わったのを感じて恐る恐る顔の前の腕をどけ、それを確認する前にガキたちの喜色ばんだ声がその人間の名を叫んだ。
「エンシッダ様ぁ、ヒロ！！！」

そこには俺とハクアリティス様の前に悠然と立ちはだかるエンシッダ様といつもその横に立つヴィ・ヴィスターチャの静かなる立ち姿と、そして、何故だか一人床に這いつくばっているヒロ。（たぶん、さっきの何かの落ちる音はヒロが床に沈んだ音だったに違いない）

「ど・・どうして？」

どうして彼らが突如現れたかはわからないが、周りを確認してみればエンシッダ様が魔法のシールドを張り、モンスターの爪がそのシールドによって遮られている影が確認でき、繰り返し腕を振り上げ続けるモンスターの影はまるで壊れた玩具のように見えた。

「オウェル、もうやめるんだ。」

その様子に呆然としていた俺は、エンシッダ様の俺のことなど一切無視して告げられた言葉に我に変える。

それはモンスターの影さえなければひどく滑稽な姿で、俺やガキどもなどこの場にはいないかのように、恐らく目の前にいるだろうモンスターに語りかけている。

「これがオウェル？」

そして、それに呼応してヒロが床に這いつくばったまま驚いたように声を上げた。

彼も俺のことなんて見向きもしないままに、おそらくモンスターがいる方を見上げている。

「おい、ヒロ？」

俺はもう置いてきぼりをくらっているのが嫌で、とりあえず声をかけやすいヒロの名を呼んだ。

ハクアリティス様の方と言えば恐怖は去った今でも嗚咽を上げたまま、俺の背にその細い腕を回していた。

普段の俺ならば、それに胸ときめくところだろうが状況が状況だった。

「あ・・・アラシ、いたのか？それにハクアリティス？」

俺が声をかければ、あっけらかんと俺の存在に気がつくヒロ、そ

して、彼女を見てほんの僅かに眉をひそめる。
そういえば、彼には俺の彼女への思いを見破られていたのだ。
俺は何となくバツが悪くて（まあ、別に疾しいことは何一つないのだが）、ヒロの無言の問いには答えず自分の疑問をすぐにぶつけた。
「いたのかって、ていうかエンシッダ様と何を話しているんだ？オウェルって？？」
恐らく目の前にいるだろうはずのモンスターのことだろうというのは見当がついた、そして、彼らにはそれが目に見えていることも・・・だが、それがどうしてハクアリティス様に襲いかかっていたのか俺にはそれが重要だった。
「何ってこの目の前にいる奴のことだよ・・・私も信じられんが人の形をしていた彼がこんな姿に」
「ヒロにはあの影が見えているのか？」
「え？」
どうやら、ヒロにはモンスターが見えていることが当たり前のようで、見えないなどとは微塵も思っていないようだ。
「今のオウェルが見えるのは、灰色の魔力に侵されている魂を持つものだけだ。アラシにもヴィスにも見えはしない。この世の中でそれを見れるのは、俺とヒロにハクアリティス、それに――」
エンシッダ様は俺やヒロの方を見ずに淡々と告げる。
何でもないような意味の分からない言葉、もしこれがエンシッダ様以外の口から出たものであれば、俺は何気なしに聞き逃していたことだろう。
だが、俺は食い入るように俺を振り向かない背中に目を凝らし、俺になど興味のないエンシッダ様の言葉に耳を傾ける。
それはこの状況も状況だが、それ以上にエンシッダ様といういまや俺に、いや贖罪の街の人間たちにとって神にも勝る存在の口から出た言葉という意味合いが大きい。

――例え彼にとって俺たちという存在がとるに足りなくとも彼と接していれば分かる。
人間のためだと、世界のためだと俺たちに天使たちからの独立を勧めてくれた、このかつてエンディミアンの長であった人の本当の心がそうでないことを。
それでも、贖罪の街でただ天使たちに浪費され続けていくことに脅えるしかなかった俺たちにとって、この方の本当の心が何処にあろうともそこからの解放はたった一つの希望。
ただ死にゆくためだけに生きてきた俺たちにとって、彼は救世主なのだ。
そして、彼の元以外に俺たちの生きていく術はない。
だから、エンシッダ様の言葉は何一つ聞き洩らしたくなかった。
生きてゆくために、そう生きたいというただその人間にとって本当のでしかないその一つの想い故に俺は必至だった。だが、

「もう、やめてっ!!!」

俺の背に張り付いていたハクアリティス様の高い高い悲鳴のような叫びがそのエンシッダ様の言葉を遮る。
「エンシッダ、貴方また私の邪魔をするのっ!?」
先ほどまであった怯えの表情は消え去り、エンシッダ様に対して敵意をむき出しにしてヒステリックに叫びながら立ち上がるハクアリティス様。
「それは御挨拶だな。君こそ何をしようとしていた?」
「私はただ彼女の願いを叶えてあげたかっただけよっ!!」
「彼女?・・・まさか、ディルアナのことか?」
そこで初めてこちらを振り返ったエンシッダ様の表情は俺が今まで見たことのないものだった。
いつも何処か悠然としていて、本当の表情を見せる気配もなかっ

た彼のいつになく険しい様子。
特にハクアリティス様には甘い様子だった彼の突然の変化も相まって俺は戸惑う。
「それ以外に何があるっていうの？今も聞こえるわ・・・彼女の彼を呼ぶ声が！！どうして彼女をこんな場所に閉じ込めておくの？愛する人と一緒にいさせてあげないのよっ！！」
いつも高飛車で、しかし酷く儚い印象を持った美しいハクアリティス様の強い強い叫び、それはきっと今は一緒にいられない彼女がだた一人焦がれる存在への叫びでもあったのだろう。

『ねえ、アラシ。私ね、早くあの人に会いたいの。』

黒の雷（オルヴァラ）にいた時に見せたとても愛らしい笑顔がダブる。
全く違う表情に言葉、状況なのに何故だか俺にはあの時の彼女とこの鬼のような形相で叫ぶ彼女が同じに見えた。
だが、エンシッダ様はそれに何故だか酷く嫌悪したような表情を浮かべると彼女を一瞥し、再び姿なきモンスターへと相対した。
「勝手に自分とディルアナを重ねて悲劇のヒロインぶるのは勝手だけど、もう二度とこんなことをするな。ディルアナを聖櫃から出すようなことをしてみろ神の子（マイマール）たちは皆、息絶え、ディルアナだって死ぬことになるんだ。」
それを聞いた瞬間にどくんと胸が不安定にな鳴った。
それは、もしかしたら現実になっていたかもしれない事実への恐怖と、そうならなかったことへの安堵。
やはり、聖櫃から神を出すことは絶対にしてはならないことだったようだ。
ハクアリティス様を止めた自分にほっと息をつくと同時に、ガキどもの親をはじめ神の子（マイマール）たちの無事に胸をなでおろした。
だが、俺のそんな心とは相反しエンシッダ様は更に彼女を逆上させる言葉を募るのだ。

「まあ、貴方がそれをするまえにオウェルが貴方を殺すだろうがね。今回のことでよく分かっただろう？オウェルはディルアナを守るためなら貴方を殺すことだって厭わない。殺されたくなければ、二度とこんな事をするな。お人形はお人形らしくあの天使の傍で微笑んでいればいいんだ。」

「何ですってぇ？！」

淡々と、だがどう見たって敵意を露わにするエンシッダ様と激情を振り回すハクアリティス様、そして、それについていけていない俺やヒロにガキども。

しかし、もともと足もとが覚束ない様子だったハクアリティス様だ。

勢いよく叫びながら立ち上がった途端にふらりとその場に崩れ落ちる。

「ハクアリティス様っ！」

その細い肩に触れた瞬間にぞくりとするほど冷たい彼女の体に驚き、俺は彼女に置いた手を思わずどけてしまう。

それに気がついた彼女は俺を振り払い、エンシッダ様をぎろりと睨みつける。

その瞳は血走り、儚い彼女のイメージがガラガラと音を立てて崩れ落ちる。

だが、エンシッダ様はそれを余裕で見下して、

「所詮、貴方はお人形。どんなに本物そっくりにつくっても貴方が本物になり替わることなどない。」

と酷く侮蔑のこもった声で告げると、ハクアリティス様の瞳がこれでもかというくらいに開き、そして彼女はがっくりと項垂る。

「おい、どういう意味だ？」

謎かけのようなエンシッダ様の言葉に訝しげなヒロの問い。

「君に教える義理はないよ。それより、君の出番だ。さっさとオウ

ェルを大人しくさせてくれ。」
「はぁ?私にどうしろっていうんだよ??」
エンシッダ様の興味はすでにハクアリティス様から失せ、彼とヒロは何やら言い争いを始める。
その後ろで俺は彼らの会話に耳を傾けながらも、エンシッダ様に言われた言葉によりぴくりとも動かなくなったハクアリティス様が心配で恐る恐る彼女の体を支える。
先ほども冷たいと感じた彼女の肌がさらに氷のように冷たくなっているように感じられた。

――お人形さん

僅かの体温を感じられないまるで死体のように冷たい体、感情の色を失くした作られたように完全に美しい顔。
ありえない話のはずなのに、エンシッダ様が彼女に向っていったその言葉が、何故だか本当のような錯覚に俺は眩暈を覚えた。

第１０５話　堕神　４（後書き）

エヴァ：もう君の年齢なんてどうでもいいよ。それよりさっさと済ませてしまおう
エンリッヒ：・・・いけずぅ
エヴァ：はい、好きな異性のタイプ
エンリッヒ：お願いだから無視だけは
エヴァ：は・や・く
エンリッヒ：・・・か、家庭的な女性？
エヴァ：何それ最後だけ妙に素を出さないでよ
エンリッヒ：何でっか？！ふざけたら無視して、真面目になったら怒るなんて！！
エヴァ：男のくせに女っぽいヒステリックはやめてください
エンリッヒ：もういやだぁ！！！！

かくして、面倒な相手には容赦ない年下のエヴァに気がつけば泣かされていたエンリッヒは逃げかえっていった（笑）

第１０６話　堕神（パシシオン）　５

＜ＳＩＤＥ　ヒロ＞

あの時、嘆きの間で何かに吹っ飛ばされた後、私は人が獣になる過程を初めて見た。

苦しそうに膝をついたオウェルから羽が尾が牙が爪が生え、肌は人のそれから黒ずんだものへと変化し、体が巨大化していった。

その姿は不浄の大地（ディス・エンガッド）で魔物に見慣れた私でさえ異形の姿だと感じるのに、その佇まいは何故だかとても気高く神聖ですらあった。

そして、オウェルは自分の体から発せられた強力な力で私を吹っ飛ばし、まさに獣の雄たけびを上げたと思った瞬間に嘆き（パシシオン）の間からかき消えた。

私はただ呆然とそれを見ていただけだったのだが、数秒後にはエンシッダの移動魔法によって半強制的にオウェルを追うこととなる。

更に私の意思など何一つ関知しないエンシッダの奴は、さも当然だと言わんばかりに私に命令を下すのだ。（面倒なことには何一つ関わりたくないのに）

「さっさとオウェルを大人しくさせろ。」

「はあ？」

私は移動魔法の際に着地に失敗して座り込んでいた床から立ち上がりながらエンシッダを睨んだ。

「私にどうしろっていうんだ？」

そもそもオウェルがこんな獣の姿になったのか理由も分からないのに、その対処法など私が知るはずもない。

すると、そんなことも分からないのかと言いたげに溜息をつかれる。

「お前も分かっているのだろう？今のアイツをあの姿にしているのは灰色の魔力が原因だ。」

その言葉にギクリとした。
まあ、本当はオウェルに吹っ飛ばされた瞬間から何となく理解はしていた。
突如として苦しみ始めたオウェルから発せられていた最近馴染み始めた灰色の気配を私は感じていた。
だが、苦しむオウェルと獣への変化を目の当たりにして、それを身に巣食う魔力のせいだとは思いたくなかった。（だって、それを認めたら、もしかしたら私まであんな風になるのかもってことになるだろ？）
だから、何となく目を逸らせていたのだが、エンシッダにこうも直球で迫られては、目に映るまでに濃い灰色の魔力を無視することもできない。
私は嫌々ながらにエンシッダに頷いて見せた。
「本来ならば嘆きの間（パシシオン）から出れば、影以外はその存在自体が消される呪いを負っているオウェルがアラシ達に姿は見えずとも触れることができたり、お前の目に映っているのは全て灰色の魔力の暴走のためだ。」
確かに言われてみればそうだった。
先ほどは私の瞳にも映らなかったオウェルが姿は違えども今は間違いなく見えているし、エンシッダのシールドを叩く衝撃はアラシたちにも感じられているようだ。
「だから、お前はオウェルから溢れている灰色の魔力を吸収しろ。」
しかして、そんなことを言われたところでどうすればそれができるかなんて、私は知らない。
反論しようと思わずエンシッダに掴みかかろうとした私だが
「ヴォルツィッタの魂を受け継ぐお前ならばそれが可能だ。ほれ、行け。」
呆気なくエンシッダの返り討ちにあい、私は奴に背中を蹴飛ばされると、安全圏であろうシールドの外に叩きだされたのだ。
「ウゲッ！」

またしても顔から床に突っ込む私。

「ヒロ！！」

アラシと子供たちが驚いたような声を上げ、それに呼応するようにそれまでハクアリティスしか見えていなかったようなオウェルの獣のそれになった血走った瞳がぎょろりと私を見下ろした。

――――その瞳と目があった瞬間に駆け抜けたのは悪寒に似た快感

私は怖くなってみっともなかろうが何だろうが、エンシッダのシールドの中に戻ろうとしたのだが、性格の悪い男はシールドを締め切って私を中に入れようとしない。

シールドに張り付いた私にエンシッダは人の悪い笑みを浮かべるだけだ。（畜生！）

まさに獣の檻に放り投げられたような状態の私は顔をひきつらせた。

内臓に響くような低い唸り声、涎の滴り落ちる牙とその合間から吐き出される息は何やら毒々しい煙を放ち、そして強い魔力が気配だけではなく灰色の獣の輪郭がはっきりと私の目に焼きつける。

灰色の魔力の気配に体の芯が熱くなるような私のどこかが喜びに打ち震えるのを感じ、それが怖いと私の理性が囁く。

だから、ずっと灰色の魔力を使えるようになっても、その本当のところは全く開放しようとはしなかった。

それをしたら最後、罪人（アークヴェル）の巡礼地での一件のように私は私に戻れなくなるような気がしたから。

灰色の魔力を身に持つものとして私には確かな予感があったのだ。

きっと、獣となり果てたオウェルもそうなのだろう。

罪人（アークヴェル）の巡礼地で私が悪魔に体をのっとられたように、今の彼も灰色の魔力に理性を奪われているのではなかろうか？

今の彼は少なくとも、私が嘆き（パシシオン）の間で垣間見た彼ではなった。

だから、辛かった。

オウェルのことなど、本当のところ私が骨を折ってやる義理などないはずなのに、灰色の魔力により苦しむ彼の姿はまさしく未来の私に他ならないのだから。

だからというわけではないが、私は腹を決めると唸り声を上げるオウェルに初めてまともに向かい合った。

何しろエンシッダは私を助けようとはしないだろうし、アラシもオウェルの姿が見えない以上、使い物にならないだろうし、残るは子供とハクアリティスだけ・・・そうなれば、必然として私はこの事態を私一人で乗り切らなければならない。

だったら、誰かに助けを求めるよりも、自分なりにこの事態を乗り切る手段を考えるのみだ。

――――とりあえず、オウェルに話が通じるかどうか試してみるか

私はオウェルを警戒しながら声を張り上げた。

「オウェル。もう、やめろ。気持を鎮めるんだ！」

だが、やはり今のオウェルには理性の欠片も残っていないのか、私の声を威嚇と判断したのだろう、かえって彼を刺激したらしく雄たけびと共に私に向って爪を振りおろしてくる。

あらかじめ警戒していたこともあり、その攻撃は難なくかわすことができのだが、如何せん巨大化したオウェルと私ではリーチの差が大きい。

余裕をもって避けても、結構ぎりぎりだったので私としては冷や汗ものだ。

「ほらほら、しっかりしないとあっという間にあの世行きだ。」

エンシッダの憎たらしい言葉を背にしながら、しかして私は更に自分の事態が悪化していることを発見する。

私に刺激されてか、それまで一歩も動こうとしていなかったオウェルがズシンズシンと音を立てて動き出したのだ。

シールドに守られているエンシッダ達はいいだろうが、オウェル

を挟んで私の向かいにいる子供たちがその足もとに来たのだ。
しかも、子供たちにはオウェルの実体は見えていない。
彼らは何となく恐ろしい気配だけを感じていはいるのだろうが、逃げ惑うことすらできていない。
「走れ！！部屋から出ろ！」
とりあえず、オウェルの意識は子供たちに向いていない。
子供たちは私の叫びに弾かれたように、出口に向って駆け出した。
しかし、最悪なことにその動く気配を敏感に察知したらしいオウェルが私から子供たちへと攻撃の手を変えてきたのだ。
「やめろぉ！！」
子供たちがオウェルの鋭い爪に切り裂かれる最悪の未来が私の頭を過った。

――嫌だ！

腹の底からの叫び、そして、胸を支配する大きな感情が私が無意識のうちに蓋をしていた力を解放させる。
体の中から迸る本来ならば私の中ではおさまり切らない力が、私という小さな器を破ってオウェルを貫き、同時に私にも何とも表現しがたい鈍痛を与える。
それは実験で使っている加減した力以上のものだったからか、私の想像以上の痛みで意識が遠のいてゆく。
それどころか、視界が次第に灰色に染められていく。

――何だ？

痛みに一瞬だけ瞼を閉じただけなのに、気がつけば聖櫃のあった場所ではなく、灰色のので埋め尽くされた世界にいた私は辺りを見回した。
『ああ、やっとお前と誰にも邪魔されることなく話すことができる

な。』

そんな私に不意にかけられる声。

振り向いた先にはオウェルがいた。

その姿は先ほどの獣の姿のままだったが、先とは違い狂気ではなく獣の瞳には不思議と穏やかな光が宿っていた。

それは嘆き(パシオン)の間でみたあの何色とも言えない光を湛えた瞳であった。

第１０６話　堕神　５（後書き）

エヴァ：それではこのインタビュー形式の自己紹介も４人目となりました！・・・でも、正直、僕はこの人を呼びたくない？：何、言ってんのよ！！

突如として現われた人物に張ったおされるエヴァ

エヴァ：何すんのさ！ハクアリティス！！

ハクアリティス：そうよ！この天使の花嫁たる私を呼びたくないなんてっ！！

エヴァ：キーキーとうっさい！！大体、なんか本編見てるとあんた『天使の花嫁』じゃないみたいじゃんっ！

ハクアリティス：それはそれ！これはこれよ！

かくして、本編とは違う次元でこちらは展開させていただきます

第１０７話　堕神　６

「この状況の説明をしてもらおうか？」

先ほどからの急な展開の繰り返しに混乱し、溢れだそうとする灰色の魔力に苦しみつつも、もう私はジタバタするのも面倒になって開き直った。

だから、相手は先に自分を襲おうとしていたオウェルだろうが、どう見たって獣だろうが、私はぞんざいに言い放つ。（まあ、先ほどとは様子が違うなと思う部分もあったからなのだが）

『すまない。』

くぐもったオウェルの声は獣のになっても、私に対して申し訳なさげだ。それが余計にカチンとくる。

「謝罪を求めているんじゃない。私は状況の説明を頼んでいるんだ。」

謝ってもらっても何も解決しない。そんなもの何の役にもたたない。

いつもの気弱な私では出てこないような強い言葉がついて出る。

それはオウェルが妙に私に対して下手であるということもあるが、それ以上に私はただもう嫌なんだ。自分が何一つ知らないままに振り回されるのが、知らないことで何かを失うかも知れないのが。

――――だから、私は事実が現実が知りたい

『・・・そうだな。お前には知る権利がある。世界の楔となったお前には。』

それは私に言われた言葉というよりは、どことなく独り言に近い雰囲気を保っていた。

いつもの私なら、それはどういう意味かと問いただすところだが、自分でも変な合の手を入れては、自分でも気づかぬうちに本題から

話を逸らしている自覚があったので、ここはでてきそうな言葉をグッと飲み込んだ。

『どうせエンシッダは何も話していないんだろうから、始めから話すぞ？ああ、その前にこの状況の説明から始めればいいか？すまん、千年以上の長い話になる。俺も話をまとめられていない。』

獣の姿のまま、大きな体に隠れるようにある輝く瞳がきょろきょろと動く。

その瞳の色だけが、全てが変化したオウェルのたった一つの名残のように見えた。

『ここは封印された異端（エルヴァナンド）。全ての灰色の魔力の大元で、世界に散らばる灰色の魔力に繋がる場所。俺はお前と二人で話したかったから、俺とお前、二つの魔力のぶつかり合いによって異端の扉を開いてお前を誘い出した。エンシッダも灰色の魔力を持っているが、アイツは侵食度が低いからな。多分、ここまでは入ってこれない。』

封印された異端（エルヴァナンド）には5年前罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）から引きずまれた覚えがった。（黒き神も同じような事を言っていた）

確かにそう言われれば、一面に広がる灰色はあの時の場所と同じである。

あの時は気がつかなかったが、この灰色は魔力の色なのだろう。

『後、お前が突っ込んでくれないから言わせてもらうが、実はこっちの方が俺のというか神々の、本来の姿だ。魔力の暴走のせいで人型に保つこともできなくなったんだ。』

その告白にはてっきり、灰色の魔力によって姿が変化したと思っていた私も思わず目を見張った。

そんな私に対して表情の分かりにく獣のままで、器用にオウェルは笑ったように見えた。

『神々は皆、人ならざる姿が真の姿なんだ。ただ、人型の方が何かと便利だから人型を保っているにすぎない。』

「どうして急に灰色の魔力が暴走した？」

黙っていよう黙っていようと思ったが、ついには声を出していた。

（これでも我慢はしたのだ。色々と聞きたかったが、質問は一つに留めただろ？）

『恥ずかしい話だが元々俺はお前のように灰色の魔力を発しながら自分を保っていられない。』

「私が？そうだろうか？」

これは正直な感想だった。

灰色の魔力の暴走が怖くて本気でその力の解放ができず、いつも自分という力弱き蓋を破らんとする魔力に脅えている私が灰色の魔力を発しながら自分を保っているなんて、どんなに自分を過剰評価していても断言できない。

だが、オウェルは首を横に振る。

『お前ほど灰色の魔力に魂を侵食・・・いや、もはや灰色の魔力こそがその魂だと言っていいくらいのお前が自分を保っていられること自体が異常なんだ。俺はお前と比べれば１００分の１くらいしか侵食度は小さいからな。』

「そうなのか？」

『ああ、俺も堕ちたとはいえ一端の神だ。人間の魂の色の見分けくらい朝飯前さ。』

魂の色など見えない私にはピンとこない話だが、オウェルの言葉には確信に満ちた色があった。

『まあ、その辺りはまた後にして、俺はさっきも言ったように灰色の魔力に関しては制御をあまり出来てはいない。お前も見ただろう？狂気に支配されかけていた俺を。あれこそが灰色の魔力に侵された魂の症状だ。理性をかなぐり捨て狂気に身も心も浪費され続ける。最悪なことに俺は不老の神だからな苦しみは、それこそ消滅するまで永遠に続く。』

嘆き（パシオン）の間で私に繰りかえ許しを乞うていた彼の姿がリプレイされた。

『だが、まさか獣の姿になったり、ましてや嘆き（パシオン）の間を抜け出すほどの暴走は起こしたことなんか一度もなかったんだ。何とかそこま

での暴走は抑えられていたしな。でも、あの瞬間、俺は自分からその箍を外したんだ。』

「その言い方、まるで自分で暴走を引き起こしたみたいな言い方だな。あの時、何があった？私は何も気がつかなかったが？」

いくら思い出してみても嘆き（パシオン）の間で特別気になることなどなかったはずだ。

もしかして、この状況を作り出すためかとも思ったが、だったらわざわざ聖櫃の部屋までいく理由もないはずで、嘆き（パシオン）の間で灰色の魔力を発すればいいだけの話だ。

『嘆き（パシオン）の間で何かあった訳じゃないさ。俺にその決断をさせたのは彼女の危機。ディルアナ。黄色の神であり、俺の最愛の存在であり、そして、俺の罪の証。彼女がいたから俺は死んだ方がましだと思える孤独の中でも生きていられたし、彼女を守りたいという思いがあるから自分を保っていられた。でも、彼女がいなければ、きっと、お前を裏切ることも、灰色の魔力に侵され神として堕ちることもなかった。』

何やら意味深な言葉の真実は見えてこないが、私は強くここで一つ訂正する。

「私じゃない。悪魔ヴォルツィッタだろ？」

『ふ、そうだな。』

意固地になっている自覚はあるが、悪魔と自分の間で揺れている私にとってそれは譲れないことだった。

それを見透かしたようにオウェルの声には苦笑が滲んだ。

『ともかく俺はディルアナの危機を察してある意味、自発的に灰色の魔力を暴走させたんだ。俺にかけられた呪いは世界の理によって成り立つものだからな、世界の理に沿わない異端である灰色の魔力をもってすれば、嘆き（パシオン）の間の外でも姿は見えずとも実体を保てるこつができ、彼女を害から守れると思ったからだ。』

害というのは、恐らくハクアリティスがディルアナを聖櫃の外に出そうとしていたことなんだろう。（エンシッダの説明によれば聖

櫃から出た瞬間、神も神の子(マイマール)も死ぬということだったし）

恐らくディルアナを愛しているオウェルにとって、それはどうしても耐えがたいことだったのだろう。例えそれを引き換えに自身を失うほどの狂気に落とすこととなっても。

私にだってその気持は分からないでもない。でも、

「お前は彼女のために悪魔を裏切り堕ちた神となったと言った。それはどういう意味だ?それにディルアナはどうして聖櫃に入ることとなったんだ?」

起こってしまったことを振り返ってみても、何一つ変わらないことは分かっているが、聞かずにはいられなかった。

それはオウェルだけの話にとどまらない。

そもそも私の知っていた千年前の話は全てが嘘が重なった虚実だった。

真実だと聞かされたことが後に嘘だとされ、正直、何が正しいかも分からなくなりつつある。

その中でも一番納得がいっていない部分が、神が死に等しき聖櫃へ入ることになった理由だ。

恐らく神というくらいだ、黒き神と戦ってみても、彼らの魔力は神というに相応しい凄まじきものを感じた。

その彼らがどうして自分の所有物である天使によって聖櫃に押し込められることとなったのか?

千年前に本当は何があった?

虚実ではなく真実が、ぼんやりとした言葉ではな確かな説明が私は欲しかった。

でも、こうして詰め寄ったところで、オウェルが私にそれを与えてくるなんて分からない。

サンタマリアやエンシッダのように上手く嘘をつかれ、真実は隠されごまかされてしまうかもしれない。

だけど、私じゃない、私の中の悪魔の存在がオウェルは本当のことを告げると教えてくれていた。

彼は信用できると、かつて彼に裏切られたはずの悪魔がそう告げいたのだ。

私はそんな皮肉に心の中で苦笑した。

神のくせに妙に気弱なオウェルにそれを告げたら、彼がどんな顔をするだろうとそんな意地の悪いことを考えながら。

第１０７話　堕神　６（後書き）

エヴァ：・・・というわけで、ハクアリティスでぇす（超やりなげ）
ハクアリティス：ちょっと、何でそんなにやる気ないわけ？もっとしっかり私のことを紹介してちょうだい！
エヴァ：もう、そんなに自己アピールしたいなら自分で勝手にやってよ
ハクアリティス：それじゃあ、私が単なる目立ちたがり屋みたいじゃない！
エヴァ：実際そうだろ？
ハクアリティス：それじゃあ、素敵じゃないのよ！
エヴァ：（もう嫌だ。このワガママ女め）分かった分かった。とりあえず、皆に答えてもらっている項目を先に答えて言ってよ。身長・体重・年齢ね
ハクアリティス：そんなプライベートはノーコメント！
エヴァ：・・・はあ

第１０８話　裏切り者の懺悔　１

君は信じてはくれないだろう、裏切り者の僕の言葉なんて
君は許してはくれないだろう、君を裏切った僕のことなんて
だって、僕は君を裏切った
僕を信じ、僕を守り、僕を助けてくれた君を、許されないと知っていて、それでもなお裏切ったんだから

【裏切り者の懺悔】

『全ての中心は神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）だと、俺はさっき言ったな。』
嘆き（パシオン）の間での話の続きらしい。
「そういえば悪魔の唯一の家族で灰色の魔力の根源だと言っていたな。」
その途中でオウェルはディルアナを助けるために暴走し、話は頓挫したままだった。

――神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）

その名前を聞いただけで湧き上がってくる、名もつけれらない感情に気分が悪くなる。
それが自分のあずかり知らぬ悪魔の感情に対する嫌悪感なのか、それともそれ自体が悪魔の感情なのかは分からない。
ただ、その名前が私にとって不吉な何かであるのは間違いないような気がした。
『そう。彼はヴォルツィッタのたった一人の家族。ヴォルツィッタを愛し、敬い、慕い続け、そして、恐らく今もそれは継続中だろう。

故にその魂を受け継ぐお前だけは灰色の魔力に侵されても、その真の禁忌に晒されることはないのかもしれない。』

「真の禁忌？」

問い返す私に表情の分かりにくい獣の姿のオウェルが歪む。

『・・・それは後にまわそう。順を追って話すなら、まずは俺がラーオディルと初めて会ったときだな。』

そして、そのままの表情のままに堕ちた神は語り出した。

――――千年前の彼の真実、彼の過去、そして、彼の懺悔を・・・

＜ＳＩＤＥ　オウェル＞

「さあ、挨拶をしろ。神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）」

そう言って千年前、汚らしい黒き神に前に押しやられたのはその名前とは裏腹に世界の幸を全て集めた如き光り輝く子供だった。

はりのある白い肌、奇麗に整えられた白銀に輝く髪、どこまでも深い黒の瞳は秘めたる輝きを放ち様々な色に煌めき、その表情さえ氷のように冷たくさえなければ、きっと子供を見るだけで全ての者が幸せになれるだろうと、そんなことさえ俺は思った。

だが、その子供に似合わない全ての感情を殺したようなその表情が、彼の美しさを引き立ててぞっとするような感覚を与えていた。

「始めまして。」

子供の声だが感情のこもらない声が、当時の世界の中心であった白き神の城である白き聖城（ルイノイエ）の謁見の間に響き、高い天井に消えてゆく。

縦に長い謁見の間の両端に神々がずらりと並んで子供を不躾なまでに見つめているというのに、子供はまるで神々などないように美

しい人形のように眉一つ動かさない。
だけれど、本来なら神以外が口を開くことさえ不敬とされるこの場で不埒ともいえるこの態度が、彼には許されていた。何故なら・・・

「貴方が私から生まれなかった神。」

謁見の間の一番奥に白いヴェールに覆われて存在する全ての母・白き神イヌア・ニルヴァーナの言葉がその理由を口にする。
そう、黒き神から報告を受けたこの子供の存在は世界の理に反していた。
その理とは白き神の対存在である黒き神を除いた、全ての神は魔力の根源は生命を司りし白き神から生まれるというもの。
だが、この子供は白き神から生まれてはいないし、だが、同じ空間にいるだけでわかるその大きく強い魔力は並みの神のそれ以上だ。

――彼が神以外の種族であるとは、到底思えなかった

そう感じているのはこの場にいる全ての神も同じようで、一様に動揺と混乱が見て取れた。
しかして、この子供の存在が知られることとなったのは西方の魔境（シェストリア）に起こった西を治める獣族たちによる覇権争いであった。
その戦いの結果、数か月前に西を収める獣族の王が変わった。
新たなる獣王の名はグレイン・アッダ。
それまで武力をもってして獣族の中でもいくつかある種族の全てを総ていた前王の圧政を打ち破り、新たなる西方の魔境（シェストリア）を造りだそうとする彼の横には何故だか人間がいた。
本来、東西南北それぞれの大地を治めている始まりの４種族ではなく、魔力ももたぬ人間は差別されるのが慣例であったため、それだけでも周囲は驚いたものだ。

そして、それ以上に神々の興味までさらったのが、その人間たちに神すらも知らぬ魔力が秘められているという事実。

更に西においてその異常性から異端の一族と呼ばれている人間たちの魔力の根源が、神ではないたった一人の子供だというのだ。

黒き神からのそんな報告を受け、正直、俺を始めとしてほとんどの神は何も信じてはいなかった。

「まさか本当にこれほどの魔力を持つ人間がいようとは」

「だが、魔力を有しているからと言って本当に彼は我らの同胞と言えるのか？」

しかして、実際に子供を目の当たりにしてその認識は一転する。

「皆、落ち着きなさい。神ともあろうものが、子供一人にみっともないことです。」

動揺する俺たちを静かな声で一喝する白き神。

それはまさに鶴の一声で開いた口は閉ざされ、動揺も混乱もきれいに静まった。

俺たちの母にして、唯一無二の支配者である彼女は俺たちにはかつて絶対であった。

「ラーオディルとやら、貴方は自身が神だと思っているのですか？」

これだけの魔力だ。

神でなければ何だというのだろうと俺などは思ったのだが、返ってきたは思いもよらぬ言葉だった。

「僕は人間だ。」

「貴様っ！ニルヴァーナ様に対して何と言う口のきき方を！！」

そして、そんな意外だが不敬な言葉に食ってかかったのは、当時、白き神の傍付であった人間エンシッダ。

そういえば白き神もまた差別される人間を憐れみ優遇していた。

「およしなさい、エンシッダ。それよりラーオディル、貴方は自分が人間だと？それほどの魔力を持ちながら。」

ヴェールの向こうにいる白き神の表情は全く分からないが、その声に凛とした響きがありながら怪訝そうな匂いが漂っていた。

本来なら同じ神といえど白き神と対等に話をできるのは汚らしいながらも対存在である黒き神、ただ一人であり、誰とも知らぬ子供に白き神が話し掛けるだけでももったいないことなのだ。

なのに、子供はさも迷惑そうに吐き捨てる。

「魔力なんて関係ない。僕が僕を人間と決めたんだから、それでいいでしょ？それが貴方達に何の迷惑をかけるというの？さっさと僕を元の場所にかえして。」

どれほど大きな力をもてど、子供は子供である。

全くこちらの論理が通じない、彼は自分の論理でものを話す。

「黙れ。お前はこれから俺たちの役にたってもらうんだからなぁ。大人しくしているんだ。」

だが、その言葉をそれまで沈黙していた黒き神が、相変わらずの汚らしい言葉遣いで黙らせた。

子供がきれいな顔に鋭い光を湛えて睨みつける。

「言ったはずだろぉ？あいつを助けるためにお前は俺に忠誠を誓ったはずだぁ。」

両者の間には何やら取り決めごとがあるようで、子供はどうやら進んでこの場に自ら来たというわけではないらしい。

「ウ・ダイ、今の言葉はどういう意味です？」

白き神もそれを見逃すはずもない。

「俺はこの子供の力を、こいつが異端の一族に魔力を与えた原理を解明できんものかと思っているんだぁ。」

にやりと無精ひげと長い前髪で覆われた顔を歪めた黒き神は、神ではなく、さながら魔王のようだった。

――それが後の『天使』へと続く研究となり、そして、灰色の魔力の拡大に広がっていく

「そうすりゃ俺たちは新たなる力を手に入れることができる。なあ、わくわくしねえか、ニルヴァーナァ？」

あの時、黒き神はそれを全て知っていたのだろうか？
そして、その横で黒き神を仇でも見るような憎しみのこもった瞳で見ていた神に忌み嫌われた子供は知っていたのだろうか？
それは今でも分からないままだ。
でも、これが俺とラーオディル・オヴァラ、彼との初めての出会い。
この時はこの子供が俺の運命を、世界の運命を大きく動かすものだなんて思いもしなかった。

第１０８話　裏切り者の懺悔　１（後書き）

ハクアリティス：ちょっと、どれだけ私を待たせれば気が済むのよ？！

エヴァ：そんなの作者に言ってよ。僕が話進めてるわけじゃないんだから・・・でも、今回はちょっと連載を止めすぎだよね？

（作者：・・・すいません、色々ありまして）

エヴァ・ハクアリティス：言い訳無用！！しっかりしてよね！！

（作者：はい！！次はなるべくはやくさせて頂きますのでっ）

ハクアリティス：じゃあ、次回は私を活躍させてよね

エヴァ：そりゃ無理でしょ。だって、千年前の回想だし、馬鹿だなぁ

ハクアリティス：（ムカ）死んじゃったエヴァよりは可能性あるでしょ？！

エヴァ：死んだ言うな！

――かくして二人のケンカはエンドレス・・・インタビューは更に次回に続く

第１０９話　裏切り者の懺悔　２

神であることが羨ましいと言われたことがある。
大きな魔力、尽きることのない命、永遠の若さ・・・確かに客観的に見て神っていう存在は他の種族から見れば羨むに値するものなのかもしれない。
だけれど、俺はその言葉を素直に受け入れることができなかった。
そもそも生まれついての神である俺は（ていうか神は皆そうなんだけど）、それが当たり前のことだったし、そうでない自分なんて想像がつかなかったから。
それに神だからって他の種族が思うほど良いことなんかなくて、神だからと世界の揉め事に対処しなくてはいけなかったし、それを対処したところで神なんだからそれをして当然と思われて感謝の一つもされないのにはうんざりしていた。
まあ、それでもそれが神なんだと、生まれついての神である俺は思うわけで、要は神とは巨大な力と引き換えにただ世界のためにあらなければならない存在なのだ。
だが、それを苦に思ってもそれから逃げようとは思ったことはなった。
だって、何だかんだと言ったって俺は世界が好きだったし、神であることに幸せを感じていたのだから。

――――でも、『世界の理』・・・その存在が俺を神であることに苦しみを与えることとなる

そもそも『世界の理』というものが何かと問われて、『はい、こういう事です』とは中々うまい説明が見つからない。
それは俺が生まれついての神であるように、生まれた時から俺たちを支配していることが当たり前で、それがある理由も、意味も何

もかも分からないし考えたこともない。
だけれど、それから逃げようとしても、それは永遠に俺たちの上に存在し続ける。
まあ、だからといって普通に生きている分には世界の理は誰にも決して破られることなどなく、俺もその縛りに気がつく前までは存在すら忘れているくらいだった。
でも、世界が混沌に陥る少し前、俺はそれを破るか破らないかの瀬戸際に立たされるまで追い詰められていた。
そして、それから逃げるために俺は白き神からの命に応じて西方(シェ)の魔境(ストリア)に赴いていた。
実は神に忌み嫌われた子供を研究するのと同時進行で、その眷属らしき異端の一族とやらを調べることになり、俺はその役割を進んで買って出たのだ。
それが現実逃避であり、逃げたところで苦しみは何も変わらなかったが、せめて離れていたかった。
だって、どんなに望んでも希っても世界の理に反する俺の願いは叶わないのだから。
なのに西方(シェ)の魔境(ストリア)に来てから半年がたったころ、必死でその願いを忘れようとしていた俺を揺さぶる人物がやってきたのだ。

「オーウェールっ！ひっさしぶり！！」

獣王の城にいるはずのない人物の明るい声に驚き、それは更に背中にのしかかってきた衝撃に倍増された。
忘れることなどできない、声を聞くだけでそれが誰だと分かるその声に一瞬我を忘れた俺だが、すぐに自分を切り換えて聊か迷惑そうな声を発した。
「重いぞ、ディルアナ」
驚きだけではない。内心では嬉しさと同時に胸を塞ぐような苦しさを感じているというのに、俺はいつの間に彼女にさえこうして偽

りの自分を演じるようになったのだろう？

「え～っ！？その言い草は酷くない？この可愛い可愛い幼馴染に対してぇ？」

俺のそんな心など知らない彼女は、明るいショートカットの髪が揺れる褐色の肌にはじける笑顔を浮かべる。

聖櫃の中ではその面影すらなく沈黙の中で眠りつづけているディルアナだが、本当の彼女は見るもの全てを明るくする神とは思えない誰にでもわけ隔てない人物だった。

そんなディルアナと俺は白き神から同じ時期に産み落とされ、成人し神として世界の一部になる時までを、共に白の聖城（ルイノイエ）で育っていたため幼馴染のような関係を築き、他の神々よりは近い間柄であった。

――俺にとってはそれだけじゃなかったけれど

「つうか、何でお前がこんな所にいる？」

こんな所というのは本来神がいるべき東方の楽園（サフィラ・アイリス）ではなく、ここが西方の魔境（シエストリア）の獣王の城であるということ。

俺のように用でもない限りは基本的に神は東を出ることは禁じられている。

それがあるからこそ、俺を揺さぶるディルアナが易々と追ってこれないと思っていたからこそ、俺は西に行くことを進んで買って出たというのに・・・

「だってぇ、オウェルったら西に行ったきり全然帰ってこなくてつまらないんだもん！だから、母様にお願いして西の様子を見てこさせてっていったの。」

ちなみにディルアナの言う『母様』というのは白き神のことだ。

俺たちにとって白き神は母という存在だが、成人してまであの人のことをこう呼ぶのはディルアナくらい。（俺も昔はそう呼んでいたが）

「それ・・は、まあ色々あって。」
実のところ命令によって西に来てから半年くらいの年月は流れていたし、実際のところ調べてこいと言われたことはあらかた調べつくしていたし、それを報告してからは白き神からいつでも東に帰って来てもいいと言われていたのだ。
だが、ずるずるとそれを引き延ばしていたのは俺自身。
それを自覚していたからこそ、ディルアナの子供っぽいが厳しい指摘に言葉が詰まり、罪悪感が湧いてくる。
「色々って何よっ!?私、オウェルがいなくて寂しかったのよ??オウェルは私がいなくても寂しくないの!?」
そう言って俺の顔を覗き込んでくる、ディルアナの良く変わるくりくりとした瞳に俺が映る。

――俺の気も知らないで、何でお前はそんなことを俺に言う?

ディルアナに悪気がないのは分かっていたが、その言葉に嬉しさと共に悲しいまでに苛つく感情がせり上がる。
それをグッと爪が掌にくい込むくらい強い力で握りしめてやり過ごす。
「オ・・ウェル?」
きっと、その感情が顔にも出ていたのだろう。
戸惑ったように美しいディルアナの顔が揺らぐ。
いつもの天真爛漫なディルアナではなく、それはひどく女を感じさせるもので、俺の凶悪な心がそれに反応する。
どんなに逃げたって追ってくる叶わぬ願いに、断ち切ろうとした俺を悪気なく追いつめるディルアナの存在・・・俺はいっそ全てをぶちまけて破滅へと落ちていこうかと考えた。

「オウェル、客人か?」

だが、ディルアナに対して酷く残虐な気持ちになった俺の思考を中断させたのは、聞き覚えのある男の声だった。
「ヴォル・・ツィッタ」
「？何だよ、そんな驚いた顔をして。ひょっとして邪魔だったか？」
呆然とする俺に訝しげな表情を浮かべたのは、ヴォルツィッタ、西で出会った異端の一族だ。
彼はディルアナを見て目を見開き、それからにっこりと笑う。
「これはまた見たこともないような綺麗なご婦人だな。はじめまして、ヴォルツィッタと申します。」
「えっと・・」
ヴォルツィッタの言葉に戸惑うように視線を彷徨わせるディルアナの表情はほんのりと赤くなる。
ヒロとヴォルツィッタ、二人は同じ魂を持っているだけあって接した印象は良く似ているが、ヴォルツィッタの方が幾分か軽かったろうと俺は振り返る。（少なくともヒロはこんな歯の浮くような言葉を言うキャラではなさそうだ）
そもそもヴォルツィッタとは異端の一族を調べるにあたって、彼らの主である獣王グレイン・アッダに初めに紹介された異端の一族であった。
彼は数十人いる異端の一族の中で群を抜いた強さを誇り、グレインとはただの主従を超えた友情で結ばれていた。
それに感化されたわけではないが、それから何かにつけて接するようになり、気がつけばグレインも交えて俺達3人は神も人間も関係ない友人なった。（なんて言うか俺が懐柔されたのか？いまやタメ口を叩かれているし）
「私はディルアナよ。」
「ああ、女神様でいらっしゃいましたか。どうりでお美しい。」
どうやらディルアナが黄色の女神であることを知っているらしい、二コリと笑って手を取る様が妙に優雅で、ディルアナの表情がちょっぴり火照っている様が何となく気に入らない。

「何か用なのか？」
だから、妙につっけんどんな言い方になったのも仕方ないというもので、それを敏感に感じ取ったのかヴォルツィッタが眉を吊り上げて俺を冷やかす様ににやりと笑う。
「ああ、グレインがお前を呼んでる。この間の前王の残党の話だと思うんだが。」
元は異端の一族を調べるために西に来た俺だが、気がつけば何やらグレインの手下化している俺は、先日も残党の殲滅を言い渡されたヴォルツィッタの戦闘能力の観察という建前の元、しっかり手伝いまでしてしまっているのだ。
ヴォルツィッタのディルアナに対する様子は気に入らないが、彼の持ってきたグレインの呼び出しに俺はこれ幸いと食いつく。
もう、これ以上ディルアナと一緒にいて揺さぶられたくなかった。
「そういうわけだから、俺は行く。俺はこれでも西で忙しくしているんだ。お前も用がないなら、さっさと東方の楽園（サフィラ・アイリス）に帰れ。」
「あ・・・うん。」
俺がそう言えば急にしおれた様な表情になって俯くディルアナ。
そんな彼女に背を向けて歩き出した俺の横にやってきて、ヴォルツィッタが耳元で囁く。
「おい、いいのか？彼女を置いてって。」
「グレインが呼んでるんだろ？」
「そんなの俺が事情を話してやっとくから・・・ていうか、あの女神様、オウェルの恋人だろ？すっげー美人じゃないか。」
にやにやと笑いながら肘でつついてくるヴォルツィッタには本来何の罪もない。
不敬などというような関係ではもはやなかったし、俺も彼にそれを許していた。
でも、ディルアナのことは別だった。
「うるさいっ！お前に関係ないだろ！？」
想像以上の大きい声、ヴォルツィッタの驚いたような顔に俺も気

まずくなるが、それよりも今は何も考えたくなかった。
「オウェル？」
だから、問いかけるヴォルツィッタの声を無視して俺はさっさと彼を振り切った。

『オウェルの恋人だろ？』

彼のその言葉に頷くことができたら、どれほど幸せだろう。

『オウェルがいなくて寂しかったの』

彼女のその言葉に自分もだと答えられて、抱き寄せることができたら、どれほど嬉しいだろう。
ああ、そうさ。俺は彼女をディルアナを愛している。

――――だけど、それは決して許されないんだ！！

だって、どれほどにディルアナを愛していても、何よりも彼女を大切に思っていても、俺たちは決して結ばれることはない。
いや、それどころかそれを口にすることすら許されないんだ。

『神は他種族との混じり合いは認めるも、神同士で愛し合うことは禁ず』

それは神すらも束縛する世界の理で決められた禁忌。
理由など知らない。どうしてそう決まっているかも聞いても誰も答えてはくれない。
ただ、そう決まっている。
決して破られてはいけない。そして、破ることは叶わない。

だから、俺はこの感情に蓋をしなくてはいけないんだ。
例えそれで俺の心が死んでしまったとしても、世界の理に反することは絶対にできないのだから。

第１０９話　裏切り者の懺悔　２（後書き）

エヴァ・ハクアリティス：はぁはぁっ

二人とも激しい言葉の応酬に息切れ中につき、今回のインタビューはお休みです（笑）

ヒロ：ていうか、作者が休みたいだけだろ？

第１１０話　裏切り者の懺悔　３

結局、俺は東方の楽園（サフィラ・アイリス）へ戻ることとなった。

実はグレインが俺を呼んだのは白き神から俺への帰還命令が出ていることを伝えるためであり、ディルアナはそのための使者だったというわけだ。

それを聞いた瞬間、驚きを通り越して笑い出したくなった。

だって、俺はディルアナから離れることでせめて消せない感情を抑えつけようと必死だったのに、その元凶である彼女がそれを壊すために俺を迎えに来るなんて滑稽な話じゃないか？

だけれど、ここで笑いだしちゃ、ただの可笑しな野郎だし、俺はこみ上げる笑いを引っ込めてその事実を告げた人物を、獣王グレインを見据えた。

獣王という勇ましい称号には似つかわしくない大きなクリっとした瞳の印象的な美少年であるグレインであるが、

「その顔、故郷に帰れるっつうのに嬉しくないのか？」

玉座に踏ん反り返っての神に対する言葉としてはふてぶてし過ぎるその言葉は、愛らしいき美少年然とした容姿から聞かされると何ともアンバランスなのだ。（いい加減、半年もその様子を見せつけられ続けた俺は慣れたが、こいつ・・・まさかディルアナの前でもこんな態度だったのだろうか？）

「まあ、俺としては手駒が減るのは残念な限りなんだが、神の命に逆らうわけにもいかねえからな。」

ガハハと笑うと獣人の独特である人の形をとりながら、尻尾や耳など所々が獣の形をとっている彼のそれらが揺れる。（そんな様は文句なしに愛らしいと言わざるを得ない分、彼の態度や笑い声が非常に勿体無い気がする）

「俺もその神なんだが？」

「ああ、そういや、そうだっけ。小さいことは気にすんなよ！」
基本的におおざっぱで適当なグレインはそういって笑うが、ヴォルツィッタといいコイツといい、本当に俺のことを神だと思っているのか疑問である。
だが、大口を開けて笑っていた顔を一瞬にして真面目なものに変えてグレインは僅かに声をひそめ
「まあ、お前が戻りたくないっつーなら俺は協力は惜しまないんだぜ？」
と、まるで俺の心を見透かしたような言葉に心が跳ねた。
「な・・にを？」
全ての種族は神から生まれ、神に絶対服従を誓っているのだ。
その頂点である白き神の命に神の俺だって逆らえる訳がないのに、獣族のグレインにそれをできるはずもない。
「お前が俺たちのためじゃなく、西方の魔境（シェストリア）に何かから逃げるために留まっていたのは何となく分かってた。」
ギクリと心の中が揺れた。
「それはいい。お前の想いがどうであれ、お前がまだ不安定な西で俺たちに神として協力してくれたことは本当に助かったし、感謝の気持ちは言葉じゃ言い表せない。それに何よりお前は俺にとっちゃかけがえのない友達だ。」
言って獣のように長い犬歯をむき出しにして笑う顔は子供よう。
こんな表情をして、普段は何も考えていなそうなくせに、この男はいつもこんな風に俺の心中をよく見通していた。
「だから、お前が願うなら神が相手でも戦ってやるよ。」
その言葉にはっと顔を上げる。
そこには子供っぽい顔をしているくせにあまりに大人びた光を湛える彼の瞳が俺を射抜いていた。
「――――というのは冗談だけど。お前の居場所は西にもあるんだから、そんな思いつめた顔をするな・・・ってことだけが言いたかったんだ。俺もヴォルツィッタもいつでも歓迎するぜ？」

冗談めいていても本気が伝わるグレインの言葉と友情に、涙がわき上がってくるほど嬉しかった。

でも、そんな自分の心を知られるのが嫌で俺は憎まれ口を叩いてしまう。

「どうせ残ったところで俺をまたこき使うつもりだろ？」

だが、そんな俺の気持ちもきっとこいつにはお見通しなのだろう。

「当たり前だろ？ただで居候しようなんて都合よすぎなんだよ。働かざる者食うべからず・・・だ。」

返ってきた言葉にお互い笑いあった。

そして、俺は半年ぶりに故郷である東方の楽園（サフィラ・アイリス）に帰郷した。

広がる青空と緑の大地に神々の大地たる故郷は、荒々しき自然の広がる西とは違って変わらずに美しく豊かで平和だった。

だが、俺がその変化に気がついたのは白き神への帰還報告のために白の聖城（ルイノイエ）に入城した時。

「どうかした？」

半年前と何かが違うと思わず立ち止まった俺に、俺を連れ戻したディルアナが振り返って笑顔を見せる。

「あ、いや。」

俺は感じている違和感が何なのか分からずに曖昧に言葉を濁したが、これは半年ぶりである帰郷が俺にそう感じさせているだけなのだろうか？

だが、城の中に入っていくと、それは戸惑いではなく確信に変わっていく。

それは半年前には確かに城に溢れていたその城の名にふさわしき聖なる光がかげり陰鬱とした雰囲気が漂い、神々の笑い声や囁き合いは静まり返り耳が痛いほど。

はじめは気のせいかと思ったが、どんなに奥に進んでも自分とディルアナ以外の誰にも出あわないなんてありえない。

なのに、ディルアナはそんなことは気にならないようにズンズンと奥へと進んでいく。

「ディルアナッ、待て。何かおかしくないか？」

こんなことは長く生きてきたがかつてない事態だ。

俺はディルアナの手を取り彼女を止めようとしたのだが、振り向いた彼女はきょとんとした顔をして俺を見る。

「おかしいって何が？それよりあの方が私たちを待っているわ！早く行きましょうよ！！」

しかして、俺の言葉など聞こうとしない無邪気なディルアナに逆に腕を取られた瞬間、俺は急に自分の体に力が入らなり気が遠くなる。

そして、体に力が入らない俺は引きずられるようにディルアナによって白き神の玉座まで連れて行かれた。

誰もいないガランとした広く高い白き神との謁見をするための玉座の間には、今まで感じたことのない重く濃密な気配が漂い、俺の体を強い力で抑えつける。

ここに何か大きな存在がいる。

神としての俺の直感がそう告げていた。

――――ドクン・ドクン

近づけば近づくほどに強くなっていく、城に入ってから感じ続ける違和感。

その大元がここにいる。

だが、この玉座に座ることができるのは白き神、ただ一人のはず。

――――何だ？何だ？この半年の間に何があった？

混乱と焦燥が愛しき女の腕すら振り払いたい気持ちを掻き立て、これ以上の前進を拒んでいるというのに、動かない体がそれを許し

てはくれない。
そして、半年前と同じく俺は白きヴェール越しに白き神の前に跪いた。
でも、これは本当に白き神なのかと俺は疑問ばかりを胸にその影を見上げる。
「久しぶりですね、我が愛し子オウェル。長き渡る我が命の遂行、ご苦労様でした。」
しかし、聞こえてきたのは半年前と同じ白き神の優しき麗しき言葉と声で、俺は驚くのと同時に酷く拍子抜けした。
「半年に及ぶ異端の一族たちの様子の報告や西の動きの情報は、とても役に立ちました。感謝していますよ、オウェル。」
「も・・勿体なき言葉にございます。」
だが、感じざるを得ない異様な気配、それに抑え込まれ動けない俺の体・・・どんなに取り繕ってみても異常な状況だとしか考えられないのに刷り込まれた白き神への服従心が俺にそんな言葉を発せさせる。
そして、白き神の言葉によってありありと思い出すのは半年前、白き神に呼び出された時のこと。
そもそも白き神が俺を西方の魔境（シェストリア）に送り込んだのは、ヴォルツィッタをはじめとする異端の一族の監視やその能力の測定だけではなかった。

『灰色の魔力、その危険性を貴方には見極めてもらいたいのです。』

そう、半年前に黒き神によって東方の楽園（サフィラ・アイリス）に連れてこられた神に忌み嫌（ーオディル）われた子供に宿りし灰色の魔力。
それは当時の魔力の研究者の権威たちによって様々に調べられた。
結果、魔力を持たない人間に魔力を与えることによってそれを隷属化する論理が解明され、他の神の魔力にもその論理を適用して『天使』という新たなる種族が生まれた話は西にいた俺にも聞き及ん

でいたが、それ以前に白き神が特に気にしていたのは灰色の魔力に対してであったのだ。

灰色の魔力と名付けられたそれ。

それだけ聞けば、青の魔力・赤の魔力と神々が持つそれと違いなど無いように聞こえるかもしれないが、灰色の魔力は俺たちの宿しているそれとは明らかに違った。

それは白き神から生まれていない神に忌み嫌われた子供が源であるという始まりに原因があるのかもしれないが、その理由はどんなに調べても不明。

しかして、異質なる力のその本質は『侵略』『侵食』。

他の魔力を自分の色として取り込み、灰色の魔力を巨大化していくそれは俺たちが持つ魔力にはない能力だった。

結局、半年間も異端の一族を通してそれを調べ続けてもその真実こそ、俺には見えてこなかったが、真の姿が見えないからこそ感じる恐怖に俺は白き神に灰色の魔力の危険性について訴え続けていたのだ。

「しかし、灰色の魔力については貴方の意見と相違する結果となったのは悲しいばかりです。」

確かな声とともに、数年来開くことのなかった白き神を覆うヴェールがスルスルと横に避けてゆく。

そして、一歩一歩白き神が俺の方へと歩みを進める気配がして、その人が俺の目の前にその姿を現した。

「し・・・ろき神？」

目に映ったのは忘れるはずもない神の母にして、世界の主である白き神に違いない。

「何かしら？」

「そ・の色は？」

まばゆい限りの美しさのままに微笑まれ、本当ならばうっとりとその姿に見惚れなければならないはずなのに俺の意識は彼女の瞳と

長き髪へと向けられた。
何故なら白き神と呼ばれた彼女のそれらはかつて輝かんばかりの白を集めた光だったはずなのに、今目の前にあるのはまるで曇り空を集めた様な鈍色、灰色なのだ。
本来、魂の色である魔力の色に対応した色をするはずのそれが別の色に変色するなど聞いたことも見たこともなかった。
でも、白き神の変色の様を見て俺の脳裏に一つの言葉が過る。

『灰色の魔力は全てを一つにする。』

それは灰色の魔力についてヴォルツィッタに俺が聞いた時のこと。
他の異端の一族に聞いた話は概ね研究者たちの予想通りのものばかりで目新しいものは何もなかったのだが、あいつだけは聞いたこともない話をし出したのだ。
でも、その話があまりに素っ頓狂なものだったので、俺はそれを信じもしなかった。
だって、そうだろう?

『それは魔力だけじゃない。魂も心も体も何もかもこの力は灰色の染めてしまう。』

魂も心も体も一つになるなんて、そんな様子は想像もつかないのだから。
しかし、それが今目の前にあるのかもしれない。
愕然と呆然としたまま俺はそんなことを考えていた。

第１１０話　裏切り者の懺悔　３（後書き）

色々ありまして今回はキャラ達の自己紹介はお休みさせていただきます。
今年の更新はこれで最後となります。だいぶのんびりした更新になりつつあるもの確実に話は前に進んでおりますので、これからも見捨てずにヒロの物語を読んで頂けると幸いです。

第１１１話　裏切り者の懺悔　４

嫌な汗が背中をつたう感触に鳥肌が立った。
心臓は破裂するんじゃないかというくらい血をせっせと送っているのに、恐ろしいほど自分の体が冷たくなるのを感じた。
ありえない現実に夢でも見ているのではないかと自分を疑ってさえみるが、どんなに瞬きをしてみても白き神の灰色に染まった姿は変わらない。
「貴方は昔から隠し事ができない子でしたね。私がこの姿になったのがそんなに信じられませんか？」
その言葉に一も二もなく頷きたい気分だったが、口は動かせても体の自由は未だに奪われたままだ。
「しかし、残念ながらこれは現実なのです。そして、この姿に身を変えたのは私だけではありません。」
そっと頬に手を添えられ、石のように動けない俺の首を横に動かされ、その先に見えた姿に頭が真っ白になり、俺は目を文字通り点にする。
「クスクス、そんなに目を見開いてたら目が落っこちちゃうわよ？」
そこにいたのは灰色に染まった愛しい女性。
先までそこにあったはずの淡い黄色の瞳も髪も、まるで灰を被ったかのような色をして輝きを失っている。
灰色に染まる。
それに何か意味があるのか、その意味の真意などこの時の俺に分かるはずもない。
でも、ただただ漠然と嫌な予感だけが俺の胸を支配し、俺を混乱に陥れていたのだ。
「二人ともそれ以上、彼を苛めたら可哀想だよ。」

だけれど、そんな俺を更なる混乱へと突き落とす声が響くのだ。
それは高き子供の無垢なる声、なのに背筋に悪寒が走るほどにプレッシャーの含まれた声だった。
次いでゆっくりとこちらに近づいてくる足音と気配はあれど、ディルアナの方を向いたままに動くことのできない俺にはそれが誰なのか全く分からない。
・・・いや、本当は分かっている。
近づくにつれてむせ返るように濃くなっていく灰色の魔力と、俺の身を押しつぶしていく圧力を俺は覚えているのだから。
「ラーオディル」
その声の主の名を破顔した様子で呼ぶディルアナに、予想はしていても信じたくなかった事実を突きつけられる。
だって、白き神はあれほどに神に忌み嫌われた子供のことを、灰色の魔力のことを警戒していたはずじゃないか。それこそ俺に秘密裏に探らせるほどに。
なのに、その彼女がたった半年の間にその魔力にとりこまれているなんて、それが何かの演技でもなければ悪夢としかいいようがなかった。
「彼がイヌアの言っていた西に行っていた銀の神でしょ？えっと、名前は何だっけ？」
「オウェルですわ。ラーオディル。」
だけれど、目の前にあるのは悪夢じゃなく現実だ。
子供に呼び捨てられても嬉々としてそれに答える白き神の気配は、注意深く探ってみても神々しい白き光ではなく鈍く光る灰色だ。
そして、その鈍き光の魔力の源が俺の目の前に立つ。
「こんにちは、銀の神オウェル。こうして直接話すのは初めてだよね？僕のことはラーオディルって呼んでよ。」
にっこりと笑う様子は半年前とは打って変わって表情豊かのように見えるが、その円らなる瞳に何一つ感情の色が灯っていないことを俺は感じる。

そんな彼に恐怖すら感じる自分があるが、それでも今はそれに怯えている場合じゃない。
「白き神に・・・ディルアナに何をしたっ！？」
かみつくように吠えている自分の声が震えているのに気がつく。
どんなに虚勢を張っても体が自由にならない状況と、灰色の魔力に対する本能的な怯えを俺は隠すことができないのだ。
しかして、子供は一瞬だけ目を見張って、それから大げさに溜息をつく。
「酷い言い草だなぁ。何をって、僕は自分からは何もしていないよ？」
「白々しい言い訳はやめろっ！では、どうして白き神がディルアナがその魂まで灰色の染まっている？！お前が何かしたんじゃないのか！」
この状況においてそれ以外の何が考えられるというのだろうか？
「そうだね。もちろん彼女たちを灰色の魔力に染めたのは僕だよ。でもね、それは彼女たちが望んだことなんだよ、オウェル。」
「馬鹿なっ！」
そんなことを信じられるはずもなかった。
元々魔力を持っているはずの神が望んで違う色の魔力を欲するなんて非合理的な話だし、西の異端の一族と神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）の関係がそのままにそれに当てはまるとすれば、それは更に信じられるはずもないのだ。
『返してっ！！我らの神をお返し下さい！！』
女性特有のヒステリー（シェストリア）を帯びた甲高い声が蘇る。
それは俺が西方の魔境を訪れた直後の頃、俺を神だと知った異端の一族たちが神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）を返せと俺に群がってきたのだ。
グレインなどによってその騒動は治められたが、ただただ子供を返せ返せと求める人間たちの群れはどうにも狂気に取りつかれているような気がした。
それはよくよく彼らを観察してみれば、灰色の魔力が近くになけ

れば発狂するジャンキーのようにも見えて・・・神にもそれが適用されるかは定かではないが、だからこその白き神の子供に対する態度ではないのかとゾッとした。
しかし、そんな嫌な予感も次に紡がれる子供の声に吹っ飛ぶこととなる。

「彼女たちは世界の理に逆らうことを望んだ。」

ガツンと頭を殴られたような、グサリと胸を貫かれたような衝撃がはしった。
「研究者たちの見解によると僕の魔力は世界の理に縛られていないんだって。だから、神たちが守らなくちゃいけない世界の理も灰色の魔力を持つ存在ならば、それに縛られることがなくなる。」
世界の理は神が生まれる前から存在する世界の取り決めであり、契約だ。
それを破ることは誰であっても不可能であり、万が一それを破ることがあれば――あれ?どうなるんだ?
「それを知った瞬間に多くの神が自分の魔力を捨てて、灰色の魔力に染まりたいと僕の前に頭を下げたよ。まったくさぁ永遠の命も尽きることのない魔力も持っているというのに、神様っていうのは皆欲張りだよね?」
世界の理を守ることが当たり前すぎて、それを破ることをしてはいけないとだけ念じ続けてきた俺は、それを破った時にどうなるかなんて考えたことがなかったことに今気づく。
でも、どうして今それに気がつくんだ?
まあ、そんなことどうでもいいや。それよりも今の問題は神に忌み嫌われた子供(ディル・オヴァラ)だ。
「結果として自分たちが人間たちを奴隷にしようとしているように、僕の奴隷になることだって予想できただろうに、皆、それでも叶えたい願いがあるみたいだよ。」

なのに子供は俺の目の前で話しているのに、どうしてかその声が遠くに聞こえた。
それに子供の言葉の意味は理解しているのに、どうしてかその意味について何一つ自分の考えが浮かんでこなかった。
だって、子供の言葉を聞いた瞬間に俺の心の中には、混乱も怒りも焦燥も消え去って、たった一つの思いだけが支配したのだから。
「そんな願いが君にもあるのかい、オウェル？」

「――――はい」

何を犠牲にしたって叶えたい願いが、でも、どんなに努力しても手に入らない願いが俺にはあった。
同じ神であるディルアナに愛していることを告げたい。
彼女に拒否されても構わない。
だが、愛を告げることさえ、いや、神同士の恋愛に纏わる全てが世界の理によって拒絶された世界では叶わない願いだったんだ。
それが、今、手を伸ばせば叶えられると子供は告げた。
それを理解した瞬間に信じられない現実も、異常な事態も気にならなくなった。
俺の心を支配したのは、ただ自分の欲望に忠実にならなければという強い想い。
世界の理さえなくなれば、この時の俺は全てが上手くゆくと、自分の願いが叶うと妄信していた。
「そう。じゃあ、君も僕の魔力に染まりたい・・・そう願うんだね？だけど、その代わりに君は自分の魔力を失い、僕に全てを支配されることになるんだ。それは理解しているのかな？」
それは子供と異端の一族の関係であり、神と天使の関係と同じ物が俺と子供の間に築かれるということ。
先に子供が言ったように俺は子供の『奴隷』となり果てるのだろう。

異端の一族を見た瞬間にそれに拒絶反応を感じたはずなのに、どういうことだろう?今は不思議と何も感じない。
むしろ、それでもずっと叶わないと思っていた願いを前に、それすらも些細なことに思えてくる。

「それでも俺には叶えたい願いがある。」

後から考えれば、この時すでに俺は神に忌み嫌われた子供の術中にはまっていたんだ。
子供は全てを見透かしていたに違いないのだ。
俺に薄暗い抗えない願いがあることも、それを叶えるといえば全てを投げだすということも。
でも、それと分かっていたとしても恐らく俺は子供の前に何度でもひれ伏してしまうことだろう。
「ふふふ。皆、本当に欲張りだね。」
子供は笑って、俺の額に口づけた。
それが契約の証。
その瞬間に俺の魂は銀色から鈍色へと変化を遂げて、神であることを捨てたのだ。

――――それが全ての裏切りの始まり

第１１１話　裏切り者の懺悔　４（後書き）

エヴァ：：もうっ！本当にちゃっちゃとインタビューを終わらせよ！
ハクアリティス：：投げやりな態度は気になるけど、私もいい加減疲れてきたし・・・分かったわよ
エヴァ：：じゃあ、異性のタイプについて、どうぞ？
ハクアリティス：：そりゃ、もちろん――――
エヴァ：：君はエヴァンシェッドがそれなんでしょ？はい、じゃあ終了～！！
ハクアリティス：：ちょ・・まっ
エヴァ：：では、ハクアリティス、ありがとうございましたぁ！！そして、作者の勝手で突然ですがこの企画は今回で終了です！
ハクアリティス：：ちょっとぉ！！！
エヴァ：：では、皆さま、また会える日を楽しみにしていまーす
ハクアリティス：：なんなのよぉ！！！！！

かくしてハクアリティス、収拾がつかず強制退場（笑）
後書き企画は今回で終了。いや、いつの間にか登場人物が増えすぎてて収拾がつかなくなりました。すみません（泣）いつか、またこういうお遊び企画ができたらと思っております。

第１１２話　裏切り者の懺悔　５

灰色の魔力に魂を染められた瞬間から、俺は俺の人生を生きてきたはずなのに、ぼんやりとした意識の中で、全てが他人事のような感覚で生き続けてきた。

だけれど、ディルアナへの愛情と、神の立場を放棄したという罪悪感だけは、魂を刻むように鮮明で、それがあったからギリギリのところで俺は俺を保つことができ、決して消えることのない苦痛の中を彷徨い続けることとなる。

とにもかくにもディルアナとの愛と引き換えに俺はラーオディルの支配下に入ったが、しかして、ディルアナとすぐに一緒になれた訳ではなく、ラーオディルは自分の願いが叶った後だと彼女を俺から隠したのだ。

その事によりディルアナという人質ができたことにあの時の俺は気がつかない。

ただ、ラーオディルの言うことさえ聞いていれば、いつかディルアナと愛し合うことができる。

餌を前に吊るされた馬の如く、彼女の気持ちさえ聞いていないのに、その強い願望に囚われた俺には何も見ることができなくなっていた。

そして、それからのラーオディルは子供の姿が嘘のように、狡猾で巧妙に世界を自分の思い通りに動かしていくこととなる。

神々のほとんど、それこそ黒き神と数人の神以外を灰色の魔力によって従わせていた彼は、東方の楽園（サフィラ・アイリス）の王と言っても過言ではなかったが、元々が神々に極秘扱いされていた彼は以降も一度として公に姿を現すことなく、他の種族を動かす時は決まって白き神に命令をさせた。

そして、灰色の魔力については積極的に研究をさせていたが、そ

の源については神以外には知らせることを許さず、現在までそれを知る者はほとんどいない。

結果、他の種族は勿論のこと白き神に従っていた天使たちとて彼の姿は誰も見てはいない。

彼は自分の存在をほとんど世界から消しつつも、自分のたった一人の願いを叶えようとしていたのだ。その願いとは――

「僕の目的は黒き神をこの世界から消すこと。そのために君たちに協力をお願いしたいんだ。代わりに君たちの願いも聞いてあげるんだから、これはギブアンドテイク・・・正式な契約だよ。」

死と破壊を司る黒き神ウ・ダイ。

全ての生命の源である白き神イヌア・ニルヴァーナの対存在であり、神々の頂点にいるはずの彼であるが、神の誰一人としてラーオディルの願いに逆らうものはいなかった。

それが灰色の魔力による力なのか、それとも単に自分の欲望に目がくらんだだけなのかは定かではないけれど、黒き神を世界から消すことに神の誰一人として戸惑う者はいなかった。

最高神である神を殺すという世界の理を破ることだとしても、ネジが弾け飛んだ神々に、もう怖いものなどなかったのだ。

それからはラーオディルの言うままに神は様々な理由をつけて、黒き神を世界を危険たらしめる反逆の神として扱い追い詰めていくこととなる。

その目的のためにラーオディルは、まず人間を使った。

一部の欲深い人間たちを唆し大地を奪うための戦いを仕掛けるようにさせ、千年戦争の引き金を引かせると、前々より不穏な噂の絶えなかった黒き神をその黒幕へと仕立て上げた。

同時に自分の手駒を増やすために自分の魔力の研究の結果である『天使』の研究を進めさせた。

しかし、当時は神一人が契約できる天使は多くて数人、神の子（マイマール）のように一人の神に多数の人間が契約することはできなかった。

そこで研究やたちが開発したのが聖櫃（せいひつ）である。
聖櫃さえ使えば、神は無限の天使を使役することが可能となる。
だが、それには決定的な欠陥があった。
すなわち、聖櫃に入った神は永遠にそこから出ることはできず、死にも等しい眠りを続けなければならなかったのだ。
――故に聖櫃の実用化はお蔵入りとなった・・・『表面上』は
しかして、神一人当たりの天使の数は増えずとも、命を人質にとったことにより、決して神に逆らうことのない天使という名の下僕は、魅惑的で神のほとんどが天使を手に入れた時、その数は一種族にも匹敵するほど多くなっていった。
ちなみに、俺は一度も天使を持たなかった。
ラーオディルによって灰色の魔力の僕となっている俺が、何者かをそんな風に使役するなんて懐疑的でその気になれなかったのだ。
そして、増えゆく天使を使い黒き神や他の種族の差別に苦しんでいた人間たちを段々と追い詰めてゆくラーオディル。
しかし、破壊を司る神の最強の名を持つ黒き神の強さは、魔力を持つとはいえ元は人間である天使には少々荷がかち過ぎた。
その絶対的な強さに数で対抗していったのだが、天使にも多くの犠牲が出ていった。
しかし、それに対して神の態度はまるで天使を消耗品としか見ていないような態度で・・・人間という記憶をなくしたとて自己を確立している彼らに神に対する不満が次第に膨れ上がっていたことに神だけは気づかずにいた。
――そして、全ては最果（ロシギュナス）ての渓谷で動き出す
そこは東方（サフィラ・アイリス）の楽園と西方（シェストリア）の魔境の狭間である場所、天使たちが黒き神たちを追い込んだ最後の戦場。

俺はここで親友であったヴォルツィッタと対峙していた。
天使たちにより黒き神も人間たちも全てを無に帰す作戦、すなわち万象の天使による終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告だ。
黒き神に対して絶対的なダメージを与えるために、大地一つを破壊するほどの最終兵器を持ち出してきたことには俺も驚いたが、もはや灰色の魔力によってラーオディルに完全に支配されていた俺にそれに反対する気持ちは微塵もない。
そして、この時、俺に命じられた役目があった。
「このままここにいたら、間違いなく死ぬ。ヴォルツィッタ、俺と一緒に逃げるんだ。」
それは悪魔ヴォルツィッタの命を守ること。
ラーオディルがヴォルツィッタと家族であることを、俺はラーオディルによって知らされた。
そして、黒き神の下僕として使役されている彼を助けるために黒き神を消滅させたいんだと、この作戦の前に俺に語った。
その作戦は命令だけではなく、彼の親友でもある俺にとっては何一つ断る理由のないものはずだ。なのに――
「そんなことができるわけがないだろっ！？仲間を裏切ることはできないし、大体、俺は黒き神の契約によって縛られているんだぞ？」
天使との戦いに傷つきボロボロなのに、ヴォルツィッタはそれをこれまで見たことのないくらいの怒りの表情で拒否をした。
「それだったら心配いらない。灰色の魔力を使えば世界の理など無いにも等しい。全部、ラーオディル様にお任せすればいんだ。」
だから、俺は彼を安心させるためにそう言って笑う。
だが、それはヴォルツィッタの表情を更に厳しく歪めるだけだった。
「お・まえ、まさか・・・っ！俺が灰色の魔力には注意しろっていったのに！！」
そして、火に油を注いだかのごとく怒りのままに俺に掴みかかってきた。

「分かってるのか!?灰色の魔力に支配されたら、もう後戻りはできない!お前はもはや神ですらなく、あの子供の下僕なんだぞ!」

自分だって同じくせにそんな事を言いうヴォルツィッタにカチンとくる。

いや、本当は彼の言っていることが、見て見ぬふりをしてきた俺の中の罪悪感と理性を刺激する。

俺はそれから逃れたい一心で叫ぶ。

「でも、灰色の魔力がなければ、俺はディルアナを手に入れられないじゃないか!!」

その言葉にはっとしたようにヴォルツィッタの瞳が見開き、俺に掴みかかっていた手から力が抜ける。

「オウェル、お前・・そのために?」

神同士の恋愛が禁忌であることをヴォルツィッタは何処かで知ったのだろうか?

俺の言葉に全てを悟ったかのように、今度は悲しげに悔しげに表情を揺らした。

「・・・バカ野郎。だからって、お前自身を犠牲にして彼女を得て、それで本当に幸せになれるのかよぉ?」

顔を俯け、何かに耐えるように一瞬の激情が嘘のように小さな声。

同時にそれは俺も何処かで分かっている、苦しい真実でもあった。

でも、俺はそれから目をそむけ続けてきた。

「でもっ、苦しかった!苦しくて苦しくて・・・どうしようもなかったんだよ!!!」

それは偽らざる俺の真の叫びだった。

親友も民も世界をも裏切って、それでも俺はディルアナを手に入れたかった。

それが例え灰色の魔力が見せた狂気だとしても、それは俺の心そのものだと俺が感じていたのだから、全てが灰色の魔力のせいにはできない。

――さあ、僕の手を取るかどうかは、君が決めろ

そうだ。ラーオディルの手を取ったのは俺。

これは全部、全部、俺が自分で決めたことなんだ。だから――

「それにお前も言ったろ?灰色の魔力に染まった以上、もう後戻りはできないんだよ。」

そう言って、俺はヴォルツィッタの面前に剣を突きつけた。

「お前をこの戦場から連れ出すことができなければ、俺はディルアナを得ることができない。全てを裏切ったことすら無意味になるんだ。」

「オウェ――」

「動くなっ!」

目を見開くヴォルツィッタに構わず、俺は剣の切っ先を今度はその喉元スレスレに近づけた。

「ともかく、俺はお前をラーオディル様の元へ連れていく。ラーオディル様はこの戦いで全てに決着をつけるつもりだ。これさえ終われば全てが上手くいく。」

だから、どんなことをしても、例え力づくになったとしても俺はヴォルツィッタを連れてゆく。

「俺がそれに従うとでも思っているのか?黒き神との契約がなくなったとしても、一族を捨てることは俺にはできないっ!皆は俺の家族なんだ!」

「ラーオディル様だって、家族なんだろ?」

その言葉にヴォルツィッタの様子が変わった。

「・・・違う。」

「何が違うっていうんだよ?ラーオディル様はお前のためにこの戦いをしているんだぞ?!それをっ」

確かにこの耳でそれを聞いた。

ヴォルツィッタが唯一の家族で、彼を助けるために黒き神を倒したいと語ったラーオディルに偽りはなかった。

いつも浮かべている子供らしからぬ不気味な笑みも、何を考えているか分からない様子もなく、ただヴォルツィッタを想うたった一人の子供の姿だった。

「違う！！」

なのに、どうしてヴォルツィッタがそれを拒むんだ？

あのこの世の至高を集めたような、世界の理すら超越する存在にそこまで想われていて、どうしてそれに不快感すら露わにすることができる？

「グッ・・・」

そして、その感情のままにあふれ出たヴォルツィッタの灰色の魔力は、俺が突きつけていた剣を取り上げ、俺の体に巻きついてきた。

その力の強さに俺は驚く。

俺だって灰色の魔力を持っているし、元は神なんだ。

ヴォルツィッタの強さは理解していたつもりだったが、彼の魔力の強さがここまでだとは思っていなかった。

「オウェル。お前は何も分かってないんだよ。アイツの本当の恐ろしさの微塵も分かっていねぇ。」

ゆらりと彼の傍らに現われる魔力に形作られた女性の姿。

「アレは全てを奪う。なあ、ローラレライ・・・そうだろう？」

もの言わぬ彼女に語りかけ、ヴォルツィッタは今まで見たこともないほどに苦しそうな様子で溜息をついた。

そして、灰色の魔力でグルグル巻きにして蓑虫のようにした俺を地面に放り投げると、彼は俺に背を向ける。

「ヴォルツィッタ！何処に行くつもりだ！？」

「アイツを止めに行く。」

背中を向けたまま、ヴォルツィッタは言いきった。

「これまで俺はアイツから、ラーオディルから逃げ続けてきた。アイツがしたことを許せなくて、アイツを見るとあの時のことを思い出すから、それからも逃げたくて、自分の中から全て消し去って、ただただ逃げた。でも、その結果がこれだ。」

丸まる背中が震えている。
「俺は決着をつけなくちゃならない。お前みたいにこのまま世界を見捨てるなんて俺にはできないから。」
そして、去っていく後姿が次第に小さくなっていく。
「ヴォルツィッタァ！！！！」
腹の底から、みっともない姿で彼を呼び続けても彼は決して振り向くことはなかった。

――――それが俺の彼の姿を見た最期となる

その後、驚いたことに万象の天使による終焉の宣告（ディルト・ヴェネス）は発動されないまま最果て（ロシギュナス）の渓谷での戦いは天使たちの勝利に終わり、黒き神は白き神により封印され、そしてラーオディルを止めると言って去っていったヴォルツィッタは彼ではなく万象の天使の翼を切り落とし、その罪により処刑されることとなる。
だが、表面上は黒き神の封印という大きな結果だけが歴史に残る戦いであったが、その裏にはもっと大いなる野望があったんだ。

「何だ結局失敗したんだ。オウェル。」
地面に転がったままの俺を見下ろす冷たい声に、叫び疲れた俺が視線を上げる。
「ラーオディル・さま？」
叫びつづけて声が掠れていたが、俺はその人の名を呼ぶ。
そこには戦いどころか、滅多に姿を現さないラーオディル、その人が立っていたのだ。
「全く役に立たないなぁ」
その瞳はかつて見たことのないくらいに、冷たく何の色も見せておらず、だが、禍々しいまでに美しく、俺は恐怖に震えながらも、ただただ彼のその瞳に見惚れていた。

第１１２話　裏切り者の懺悔　５（後書き）

お待たせし分、今回は少しだけボリュームアップ（？）

第１１３話　裏切り者の懺悔　６

「げほっ」

無防備にラーオディルを見上げていたのに、突如として腹に衝撃が走り、息が詰まった。

ラーオディルに蹴飛ばされたのだと気づくのに数秒かかった。

「な・・に？」

状況把握ができない俺は、地面に転がされたみっともない姿のままに呆然と呟く。

それに対してラーオディルは、無表情でもなく、子供らしい表情でもなく、普段誰しもが隠している陰鬱な部分がむき出しになったような表情で俺を見下ろしていた。

こんな彼の表情を見たことがなくて、俺はこれが本当にラーオディルなのか心の中で疑ったくらいに。

「どうして？ボケたこといわないでよ。ヴォル、一人、僕の所に連れてこられないなんて、全く無能だとしか言いようがない。こんな男が神だなんて笑っちゃうよ。」

最果ての渓谷（ロシギュナス）から少し離れたこの場所は、戦場とは思えぬほど静かでラーオディルの声と俺の息使いがよく響き、俺はそれをただただ信じられない気持ちで聞くしかない。

「こうなることが予想できてなかったわけじゃないけど、それでもできれば僕はヴォルが僕の所に穏便に戻ってきてくれることを望んでいたんだ。そして、ヴォルの親友の君を使うことは、その最後の手段でもあった。」

『戻ってきてくれる』という言葉のニュアンスにヴォルツィッタがラーオディルを拒絶していた先の彼の様子を思い出し、それが正しかったのだと確信する。

すなわち、仲のいい家族ではなく、ヴォルツィッタはラーオディルから逃げ続けていて、ラーオディルはそれを追い続けているとい

うこと。
　しかし、それを確信したところで、この状況を理解するヒントは何一つなく、ただ『穏便』と『最後の手段』というフレーズが俺の不安を僅かに煽る。
「でも、これで心おきなくディルアナを聖櫃に入れることができるかと思えば、結果オーライってことになるか。」
「!?」
　だが、聞き捨てならない言葉に俺ははっとして、呆然としていた自分を取り戻す。
「当然でしょ?ヴォルが僕の元に来ない・・・結果としてヴォルを巻き込みたくないから、僕は万象の天使に終焉の宣告(ディルト・ヴェネス)を発動させることができない。そのおかげで僕の一番の目的である黒き神を消滅させることはできないんだから、僕と君ら神々との契約は成立しない・・・要するに僕が君らの願いを叶えてやる必要は何一つない。僕はもう一つの計画を実行に移す。」
　確かにラーオディルは俺たちの関係をギブアンドテイクだと告げた。
――――でも、だから?どうして、それがディルアナを聖櫃に入れることに繋がる??
「君たちには話していなかったけど、黒き神だけじゃない。僕は全ての神という存在を憎んでる。そして、その神が支配するこの世界も憎んでる。」
　それはあまりに重大な告白のはずなのに、あまりに淡々と笑顔で告げられて俺は言葉が出てこなくなる。
　憎んでいると告げられた、その対象は世界そのものであり、俺自身のことでもある。
　だが、そんなこと微塵も感じなかった。
　単に灰色の魔力に支配された俺が感じなかっただけなのか?

「だから、僕はこの世界にいる全ての神に復讐をするんだ。そして、神が愛したこの世界にも・・・ね。」

表情は笑顔なのに、語られる言葉も発せられる声も瞳の中に灯る光も全てが憎しみと殺気に満ちている。

神とはいえ、この千年戦争にも参加していた俺はそういったものにも慣れている自信があったが、今、ラーオディルが纏うそれはそられとは異なり、本能的な恐怖を呼び起こした。

「僕は君たちに天使という奴隷を与えてやる傍ら、天使たちには神という存在を圧政を強いる暴君に仕立て上げた。そして、この戦いが熾烈を極め、神に天使たちを使い捨てのように投入させるように裏で交錯し、天使たちの反乱の引き金を引かせることにした。」

千年戦争と後世に語られるほど長きに渡りつづける戦いは、天使の消費により神々に有利な方向へ進んでいった。

だが、その裏にそんな思惑があるなんて俺は知る由もない。

「僕と神々の契約と、神々と天使の契約。それは構造上は同じでも、たった一つ根本的に違うことがあることを神は理解してはないかった。いや、君は何となく理解していたね。だから、君は本能的に天使を持とうとはしなかったんだろう?」

と、ラーオディルは俺に問いかけてきているのに、俺の返答など最初から考えていないように、すぐに次の言葉を続ける。

「それはすなわち魔力によって縛った相手への支配力の強さの違い。灰色の魔力の支配力は君も感じているように決して僕に逆らうことはできないほど強いけれど、君たち神の魔力にはそれほどの強さはない。」

そうだ。ラーオディルによって支配されている俺が、他者を支配することが懐疑的に思えてならなくて、俺は天使を持とうとは思わなかった。

「だけど、神々は命という人質をとっているからと、そんな事は気にも留めず、天使たちを取るに足らない奴隷にすぎないと、安易に考えすぎているとは思わないかい?天使たちが自分たちに牙を剥く

なんて考えてもいないんだから。」
そうはいっても命より大事なものなど、そうそうあるもんじゃない。
命を盾にされちゃ、天使が神に刃向うなんて考えられない。そもそも――
「神を殺せば天使は死ぬが、天使が死んだところで神は傷一つ負わないんだ。天使が反乱を起こした所で、神に勝てるわけがないじゃないか。」
しかし、そんな俺の考えを打ち崩す様に、ラーオディルがにやりと笑う。
「だから、僕は『聖櫃』を天使に与えたんだよ。」
それから、一呼吸を置いてラーオディルは再び話し出す。
俺は彼がこれほど楽しそうに言葉を紡ぐ様を初めて見た。
それが俺たちに対する復讐を語っている・・・ということさえ除けば、もしかしたら様子を微笑ましく見れたのかもしれないが、その事実を知っている以上、今の俺にはラーオディルの言葉の一つ一つが首をゆっくりと絞めていく紐のように思えた。
「あれを使えば神を生きながら殺すことができる。天使という存在を残しながら、神を永遠に出ることの叶わない牢獄に繋げる。今回の戦いには最終戦と銘打って君を始め全ての神々も戦いに参戦させている。天使たちは戦いに乗じ、黒き神だけじゃなく全ての神にも襲いかかり聖櫃へと神を封印する。」
それが僕の復讐さ、とラーオディルは鈴を鳴らしたように笑い、俺は知らず知らずのうちに灰色の魔力に拘束された体を震わせていた。
確かに聖櫃を使えば、ラーオディルの神への復讐は可能だ・・・だけど、
「どうしてだっ!?俺がっ、神がお前に何をしたっていうんだ?!」

奴隷として扱われ続けている天使が神に憎しみを抱くことは容易に想像がつく、むしろ、灰色の魔力によってそれに気づかぬようにされていた神が愚かだと言える。

でも、ラーオディルが神にそれほどまでに強い憎しみを抱く理由は何一つないはずだ。

なのに、どうして俺たちが憎まれなくてはならない？ディルアナが聖櫃に入れられなければならいんだ？

理不尽なラーオディルへの怒りが爆発し、地面に這いつくばった姿も忘れて俺は彼に噛みつく。

しかし、それは圧倒的な強者・灰色の魔力の主によって、すぐにねじ伏せられた。

「そんなこと君が知る必要なんか・・・ない。」

静かな言葉と共に、胸が潰れるような魔力の圧力と俺を締め上げるヴォルツィッタの灰色の魔力。

苦しみに霞む視界に揺れるラーオディルは俺に対する憎しみを隠そうともしない、恐ろしいまでに濁った視線を俺に落としていた。

「それでもヴォルが・・・ヴォルツィッタが傍にいてくれるなら、僕はこの世界に、神に復讐しようなんて思わなかったのに。」

だが、一瞬だけ彼の顔が泣きそうに歪み、しかして、消えそうなほど小さな言葉は俺にその意味をもって届かない。

「――――え？」

「だから、逃げるあの人を捕まえることができるのなら、僕は君達を許そうと・・・チャンスを上げたつもりだった。だけど、その最後のチャンスも君は逃したんだ。残念だったね。」

そして、俺は神は突き放される。

「さようなら、神様。君たちの存在は死すらも生ぬるい。永遠に誰かに使役される苦しみを味わうがいいさ。出ることの叶わぬ牢獄に囚われたままに・・・ね。」

――――しかして、苦しみと共に暗転した世界から俺が目覚めた時、

全ては終わった後だった

＜ＳＩＤＥヒロ　現在＞

その話はひたすらに長く退屈なようにも思ったが、果たして想像よりも激しくて短い話だったのかもしれない。

それはオウェルによって語られた過去、千年前の伝説としか認識できていなかったそれが、今、彼によってリアリティを持って私に迫ったからだろう。

それがただ重く、苦しく私にのしかかる。

だって、それはもう一人の私、悪魔ヴォルツィッタに大きくかかわるものだから、だから、こんなにも胸が騒ぐ。

そして、私は私が世界の楔である理由を知った。

「ラーオディル・オヴァラ。そいつの執着が悪魔を悪魔たらしめた要因・・・みたいだな。だが、結局、奴は何処に行った？そこまで悪魔を欲していながら、奴は悪魔をおめおめと処刑されているじゃないか。それに、私の眼の前にも――――」

『私の前にも現われない』そう言い掛けて、僅かに自分に違和感を感じる。

――――ヒトツニナロウ

そして、不意に頭に響く子供の声。

何処で聞いたのか、誰の言葉なのかは思い出せない。

だが、私はそれがラーオディルの残像であることを、本能で悟った。

せり上がってくる不快感に吐き気を覚え、それをやり過ごすためにぎゅっと目を瞑る。

『ヴォルツィッタが封印した。全ての灰色の魔力と共に・・・俺に

残した最期の言葉通り、あいつは全てに決着をつけたんだ。』

「白き神が封印したんじゃないのか？」

黒き神の封印は白き神がしたと聞いている。

黒き神が灰色の魔力とともに封印されている以上、灰色の魔力もまたそうなのだと思っていた。

『・・・ああ。』

沈黙の後に続く肯定の言葉。

『灰色の魔力と黒き神、そして、この世界に災いをなす全てをヴォルツィッタは最果て（ロンギュナス）の渓谷へと封印した。そして、それにより力尽きたあいつは天使により処刑されてしまったんだ。俺達、神を裏切り反旗を翻した奴らによって。』

ラーオディルの神への復讐は成されたが、彼の望みは叶わないままになったということか。そして、もう一つの疑問が私の中に生まれる。

「ところで、オウェルはどうして聖櫃に入れられていないんだ？」

『ラーオディルに気を失わされ、地面に転がっていた俺をエンシッダが見つけて天使たちの神狩りから逃がしてくれたんだよ。まあ、アイツにとっちゃ天使への復讐のための道具を拾ったくらいの意識だろうがな。』

そういえば、エンシッダは白き神の従者だと言っていた。

神に反旗を翻した天使たちへの復讐。復讐が復讐を呼んでいるってわけか・・・だが、待てよ？

「白き神はまだ聖櫃には入れられていないじゃないか・・・ていうか、神々を封印されて、白き神はどうして黙ったまま天使に従っていたんだ？」

しかして、今はエンシッダの元にいるがと彼女の姿を思い出して、私は自分で問いかけておいてすぐにその答を思いついてしまった。

そして、それは正しかったらしい。

『それは白き神の万象の天使への恋情・・・が理由さ。彼女は決して万象の天使に逆らえない。そもそもアイツという存在自体が白き

神が灰色の魔力に身を落とした理由なんだ。』
「どういう意味だ?」
恋情があるといっても、天使と神との恋愛は禁忌とはされていないだろうに。
『万象の天使は・・・カレド』
『カレド』と言われて、思いつく事は何もなかった。
『カレドとは古き言葉で人形の意味を持つ。その存在は生命は白き神から全てを原初とする理から外れた存在。彼らは白き神から生まれた種族ではなく、俺達、愚かなる人間が生み出してしまった人造生命体なんだ。』

――人造生命体

ああ、と大きく心の中で溜息をつく。
話がまた大きく大きく飛躍していこうとしていく予兆に、私は何となく嫌な予感を覚えた。

第１１４話　全ては繋がる

母を亡くし、父を亡くし、愛する者を失い、絶望した
絶望を希望に変えるため、私はお伽噺にすがった

――そして、私は切り落とされた白き片翼に出会った

私の願いは叶う
しかして、天使の花嫁との出会い、天使の都へ召喚され、私は希望に変えた絶望を再び得ることとなった
それから幾度となく繰り返される悲しみ、怒り、焦燥、憎悪・・・
その先に出会ったのは自分の中に隠されていた悪魔の記憶

――お前には迷惑をかけるな

奴は全てを私に押し付け、私を世界の楔とやらに仕立て上げた
それが何なのか、今の私には正確に分からない
だが、私が生きてきた二十数年、そして、全てが始まった千年前より全ての事象が、今、一つの糸となって繋がろうとしていた

【全ては繋がる】

人造生命体カレド、それは古き言葉で人形という意味がある・・・らしい。
以下人形（カレド）についてのオウェルの話を要約すれば、その起こりは大切な人を失った誰しもが一度は願う死者の復活。
人間が始めたらしいその発端は、非常に怪しげで理論もくそもな

い妄執に取りつかれた儀式だったらしい。
死体の横にそれこそ人間と紛うくらい精巧な人形を置き、生贄を捧げ、ひたすらに祈り続けるだけというもの。
それがどのような変遷を遂げ展開を見せたかはオウェルも分からないらしいが、彼らはその成功の一歩手前まで近づいたらしい。
しかして、そのあと一歩は決して踏み出されることはなかった。
何故ならその前に立ちはだかったのは、世界の理。
死者の復活は神とて起こすことのできぬ奇跡であり、侵してはならぬ禁忌なのだ。
だが、その禁忌を飛び越えてしまう術が千年前、発見されてしまった。
すなわち、全ての事象の要因である灰色の魔力がそれだ。
しかし、灰色の魔力の存在は人間には知られないままだったため、人形（カレド）は成功しないままに人間たちの中でもタブー視され続けた。
その存在が灰色の魔力を手にした白き神の知られるまでは・・・
『白き神にはどうしても蘇らせたい存在があった。全ての生命に平等であることを義務付けられた生命の神が、たった一人愛した存在。無色の神ヨイ。』
「無色の神？」
神という存在は有する魔力の色により通り名が決まっているという。
だが、無色ということはその神の持つ魔力には色がなかったということなのだろうか？
ここ最近、多くの魔力というものに触れてきたが、色のない魔力というものは想像もつかなくて、私は違和感を感じた。
『本当ならば、無色の神なんてことはありえない。彼は白き神が生み出した唯一の不完全な神だった。神というよりは人間に近く、非常に不安定で儚い存在だった。だから、生まれて数年で彼は死んだ。』
しかし、そんな彼を愛してしまった白き神は、彼を生き返らせる

方法を知った瞬間にそれを実行してしまったというのだ。

――――それが彼女が犯した禁忌、ラーオディルに付け入られた隙というわけだ

「なるほど、じゃあ、万象の天使はその神の生まれ変わりってことか。」

どうりでどうにも人間離れした存在感を持っていたはずだと納得する半面、微妙な違和感を感じる。

『生まれ変わり・・・そんな風に言っていいのか俺には分からない。確かに人形（カレド）はその魂も体も全く同じに蘇らせれる訳だが。だが、たった一つ死んだ前と違う部分がある・・・記憶だ。』

魂も体も同じだとしても記憶がないということは、蘇らせたいとまで想ってくれた人のことすら覚えていないということだ。

それは果たして本当の意味で死者の復活と言えるのだろうか？

『記憶はその人物を構成する大きな部分だ。魂も体も同じでも、それまでの記憶や経験がなければ、それは恐らく別人だと言ってもいいだろう。結果として万象の天使はヨイの生まれ変わりであるという事実は知っていても、自分がヨイであるとは全く思っていない。』

それは恐らく、私が悪魔の生まれ変わりだと言われても、悪魔だと認めたくないのと同じだろう。

分かりたくないが、万象の天使の気持ちは理解できた。

『だから、白き神とヨイは愛し合っていたんだが、白き神と万象の天使ではそうはいかず。結果、白き神は奴を天使とすることで縛り付け、同時に恋人を失う絶望を二度と味わいたくないから、万象の天使のいいなりだ。』

故に天使たちの反旗に白き神は異を唱えない・・・ということなんだろう。

それに白き神の『自分はお飾りの神』だという発言にも頷ける。

「だが・・・だったら、今はどうして？どうして白き神は天使たち

と袂を分けて、エンシッダの元にいる？」

白き神が万象の天使に愛想を尽かしたとは思えないし、これが万象の天使の作戦だとも思えない。

それに彼女の言い分を信じ天使の所業を止めるためだというならば、もっと前にそれはなされなかった？どうして今何だ？

「それは最果（ロシギュナス）ての渓谷に彼女の目的があるからさ。それを叶えるために彼女は一時的に俺の元にいるにすぎない。彼女も俺も互いを利用しているだけなのさ。」

私の疑問に答えたのはオウェルではなく、灰色の空間に現われた聞き覚えのある男の声。

『エンシッダ・・・貴様がどうして？！』

入れるはずがないと思っていた所に平然として現われたエンシッダに、オウェルが驚いたような声を上げる。

「灰色の魔力は俺が望もうが望まいが魂を侵食し続ける。封印（エルヴ）された異端（アナンド）に入るくらい今の俺には造作もないことだ。ヒロの説明するのが面倒だったからな、しばらくはお前に任してやろうと思っただけさ。」

ニヤリと笑う彼は一見すると好青年なのに、どうしてこんなにザワリとした嫌悪感を感じるのだろう。

「やっと話が核心に迫ったからな。後は俺が話をさせてもらおうか。」

『だがっ！！』

恐ろしい獣の姿で唸るオウェルだが、エンシッダの内に沈む灰色の魔力がオウェルを瞬時に拘束した。

「黙れ。」

エンシッダの灰色の魔力は強大で底が知れず、神の姿を取り戻したオウェルが太刀打ちできないほど強く、オウェルはもがき苦しむ。

「お前は千年前と全く変わらないな、オウェル。神のくせに弱く、

何一つ役に立たない。お前は大人しく嘆き(パシシオン)の間に引っ込んで銀月(ウィンザード・シエラ)の都(シエラ)の動力部分の役目を果たしてだけいればいいのさ。」

そして、パチンと指を一つ鳴らして、オウェルは消えた。

灰色の空間に残ったのは、私とエンシッダだけになる。

「オウェルは何処に？」

「嘆き(パシシオン)の間に戻しただけだ。今言ったとおりオウェルは銀月の都(ウィンザード・シエラ)の動力部分だからな。彼の魔力を吸い出すための部屋でもある嘆き(パシシ)の間(オン)にいてもらわなくては、都が落ちてしまうからな。」

どういう原理で銀月の都(ウィンザード・シエラ)が動いているかは定かではなかったが、なるほど神の魔力によって起動していたわけだ。

しかし、今はそれよりも知りたいことがある。

「最果て(ロシギュナス)の渓谷に何がある？」

「あら直球だね、ヒロ。」

「お前と長々と話をするつもりはないからな。さっさと話せ。」

エンシッダと話しているだけ不快さが身を満たす。

「ま、俺の方も君とこんな場所で一緒にいるのは嫌だからな。お前に話したい用件だけ伝えよう。ヒロ、君には最果て(ロシギュナス)の渓谷の封印を解いてもらう。」

最果て(ロシギュナス)の渓谷は天使と人間たちの最後の戦場にして、先のオウェルの話によれば天使が神々に反旗を翻した場所にして、

――ヒトツニナロウ

心臓にゾクリと走る悪寒。

そうだ、悪魔が神に忌み嫌われ(ラーオディル・オヴァラ)た子供と黒き神を封印した場所だ。

「最果て(ロシギュナス)の渓谷はあの戦い以来、灰色の魔力や黒き神の復活を恐れ封印されてきた。だが、理由はそれだけじゃない。あそこは世界の果て(ガンナ)の入り口でもある。」

世界の果て(レドヴァガンナ)て、東西南北に分かれた大地を分ける異空間の壁は、千年前は大地間を行き来できたらしいが、今ではその存在すら忘れら

れている。
「俺の目的はこの東方の楽園（サフィラ・アイリス）の解放。この狭い世界からの解放だ。だから、今銀月の都（ウィンザード・シエラ）は最果て（ロシギュナス）の渓谷に向かっている。」
それだけがエンシッダの目的とは思えないが、その先の真の目的について彼は私に話すことはないだろう。
「そして、白き神の目的もまた最果て（ロシギュナス）の渓谷にある。まあ、彼女の場合はあそこに置いてきたものがある・・・てだけなんだがね。」
「置いてきたもの？」
いぶかしんで聞いた私がしまったと思った次の瞬間に、エンシッダがまたあの不快な笑顔を浮かべる。
「それは秘密さ。」
こういわれるのは想像できたはずなのに、私という奴は一向に成長がない。
心中でがっくりと頭を垂れながら、私は次の疑問を口にする。
「私でなくても封印は解けるんじゃないのか？」
「それは無理だ。あれは悪魔が施した封印だからな、奴の魂を持つお前以外の誰にもそれをなすことは叶わない。」
さっきのエンシッダの物いいから、天使か白き神辺りが封印したのかと思っていたが、どうやら最果て（ロシギュナス）の渓谷の封印を施したのは悪魔らしい。
まあ、黒き神や灰色の魔力を封印したのが悪魔ならば、それも道理なのかもしれないな。
「そして、お前はそれを実行せざるを得ない。」
私がエンシッダの命令に従うのを本能的に嫌がっているのを知っている彼は、私の拒否の言葉を発するのを塞ぐように言葉を続ける。
だけど、私だって負けてはいられない。
「人間たちの解放のためには、それしかないから・・・か？」
エンシッダの言葉を予想して先んじてそう言えば、奴の表情は一瞬だけ呆けたようになって、それからいつものあの嫌な笑顔に戻る。
「さすがヒロ、俺が何を言いたいか予想するなんて、俺のことをよ

く分かっているなぁ。」

――――誰が好きでお前のことなど分かりたいものか

「よく言う。一応はお前の表向きの目的は人間の天使たちからの解放・・・だからな。」

私と話している時はそんな素振りも見せないが、少なくともこの都にいる人間たちの多くはそう信じ、そのためにエンシッダのために戦っている。

「一応って酷いな。俺はちゃんとそのために戦っているじゃないか。」

「お前の真の目的のついでだろ？私にはお前が本当の意味で人間たちのために戦っているとは思えない。大体、罪人（アークヴェル）の巡礼地の時だって、お前は私を戦わせるためにここにいる全ての人間を人質にとったくらいだからな。」

エンシッダの心の内を私が本当に理解できているわけじゃないだろう。（ていうか、考えるだけでおぞましい）

だが、いつだって彼の目的は助けを求めている人々ではなく、自分の内に秘めた何らかの野望のように私には思えてならないのだ。

そして、それは正しいらしい。

「だから、君が好きだよ。オウェルと違って俺の言いたい事をちゃんと理解してくれている。」

だから、そんな言い方するな！と本当に口にすればエンシッダを喜ばすだけなので、心の中で叫ぶ。

でも、この一見すれば人間たちのための戦いが、彼の中の何らかの目的のためだということは察することができる。

そして、この男はそのためならばどんな卑怯な手も使う。

「そうだよ。君がどんなに俺の命令を拒んでも、大地の解放は天使に虐げられた人間たちの逃げ道にもなるんだ。俺たちがどんなに力を手にしても、天使全てを滅することはそれこそ終焉（ディルト・ヴェネス）の宣告でも起

こさない限り難しい。」

神の子や私が束になったところで、先の罪人（アークヴェル）の巡礼地（マイマール）での戦闘を思い出せば、確かに人間が天使に一矢を報いることはできても、それに打ち勝つことができるかと言えば、私はすぐに頷くことができない。

「でも、他の大地に逃げることができれば？この死した大地ではなく、天使のいない楽園がその先にあるとすれば？新たなる新天地は間違いなく人間たちの希望だ。お人好しの君がそれを拒めるはずはないからね？」

本当にそんなものがあるかなんてわからないが、だからって、その先の可能性を見るまでもなく断じることは誰にもできない。

そして、私もまたそんな夢を見たことがあった。

「・・・」

無言は苦渋なる肯定。

それを受取って、かくして嫌な笑みを残してエンシッダは灰色の魔力に消えた。

私同様に用件がなくなれば、同じ空気も吸っていたくないということだろう。

一人になりため息をついて、さてどうしたものかと改めて考える。

まあ、エンシッダの言う通りに現状において皆のことを考えれば、私は最果（ロシギュナス）ての渓谷の封印を解かざるを得ないのだろう。

その先に何があるかはわからないが、それでも人間にとって天使に支配された大地は地獄でしかないのだから。

――――でも・・・

私の中の悪魔がそれはするなと叫んでいるような気がした。

彼が私の中に持ち込んだ灰色の魔力の中にいるからだろうか、その声がいつもよりも強く聞こえてくるような気さえする。

私が解こうとしている場所は神に忌み嫌われた子供や黒き神、ラーオディル・オヴァラ、ま

さに世界の災いを封印した場所だ。
それ自体の封印を解く訳ではないが、封印を解かれることを危惧して場所までも封印した悪魔の処置を鑑みれば、場所だけだからと安易にその封印を解くことはしない方がいいのだろう。
それは理解できるのだが、だからといって人間たちが天使から逃れる術が他にあるとも思えない。
だったら・・・と思う。
私の中の悪魔はそれをするなと叫んでいても、私という個人はそれをするべきだと思うのだ。
人間が自由を手に入れるために、この地獄のような大地から解放されるために、エンシッダの目的は別にあったとしても、彼がそのことを厭うているようには思えなかったから。
奴が私を利用するというのであれば、私も奴を利用してやるのだ。
私には家族も恋人も仲間すらもいない。
大切だと思ったものは全て失ってきた。
それでも、私は生きていかなければならず、失った苦しみを知った私は、それをまだ失っていない人々を前にした時、それを助けたいと強く思ってしまうのだ。
誰かを助けるなど、おこがましいかもしれない。大それたことかもしれない。
だけれど、誰かを攻撃したり、傷つけたりすることには何らかの理由がいるのかもしれないが、誰かを助けたいと思うことに理由なんていらないと思うから。
だから、私はこれ以上、少しでも生きている人間たちが悲しく、苦しい思いをしないために、自分ができることをしたいんだ。
――だから、悪いな
届いているか分からないが、私は私の中の悪魔に語りかける。

――例え私の魂が悪魔でも、これは私の人生だから、私は私の決めた道を行く

結局のところ神であるオウェルと話した所で分かったこともあるが、分からないままになった部分も多い。
それでも、あまりに自分ではどうしようもない途方もないことばかりで、ある部分、開き直ることができたようにも思う。
でも、この時の私はまだ知らない。
その分からないままの部分が最果て（ロシギュナス）の渓谷で明らかになったとき、私の中で全てが一つに繋がることを。

――そして、それが全て一つに繋がった時、本当の意味で私はこの世界の運命から逃れられなくなるということを

第四部　罪深きは愛深き絶望編　完

第１１４話　全ては繋がる（後書き）

第４部【罪深きは愛深き絶望】編が終了いたしました。かれこれ１年近く続いた第四部は色々な謎が明らかになっていきましたが、故に物語自体はあまり進んでいない感じがしたようにも思います。のろのろの物語にもついてきて下さった読者の皆様には本当に感謝の言葉以外にはありません。

第５部は3月から連載を開始する予定ですが、以前何処かで書いたとおり物語の最終章となります。第４部で明らかになったことの一つ一つが繋がってゆく予定ですので、まあ、第５部が完結するのがいつになるかは定かではありませんが、物語の完結にむけて頑張っていくつもりなので応援の程よろしくお願いいたします。

■第四部　あらすじ・登場人物・用語（前書き）

第四部のネタバレを含みますので、先に第四部を読まれてからこちらを読まれることをお勧めします。

■第四部　あらすじ・登場人物・用語

【第四部罪深きは愛深き絶望　あらすじ】

自分の前世である悪魔・ヴォルツィッタに体をのっとられたヒロであったが、数日後、魔力の暴走のために投獄されていた牢屋で目を覚ます。ヒロはそこで黒の雷のリーダー（オルヴァラ）であったアラシと再会し、自分が悪魔にのっとられていたことを知る。

自分の身の内にある灰色の魔力のことを知りたいと思ったヒロは、魔力の研究者であるというアオイに灰色の魔力の危険性と特異性について聞く。灰色の魔力とは源である神を持たない異端の魔力であった。

そして、アオイは銀月の都（ウィンザード・シエラ）の奥にある一室にヒロを連れてゆき、聖櫃によって繋がれた黄色の神ディルアナと神の子（マイマール）を見せ、神の魔力によって一つの命に縛られた神の子（マイマール）の真実を告げ、同時に天使が神の子（マイマール）と同じであることを告げた。

一方、罪人の巡礼地（アークヴェル）で神の子（マイマール）が自分たちと同じあることを知った天使たちは、見えぬ今後の未来に危機感を抱いていたが、予言者マール・ドシャの力により万象の天使エヴァンシェッドは何かに気がついたらしく、長く交流を閉ざしていた西方の魔境（シェストリア）の獣王に謁見を申し込むことを決める。

そんなことは知らず銀月の都（ウィンザード・シエラ）で何故だか子守と化していたヒロであるが、面倒を見ていた子供たちの間で奇怪なことが起こるという噂きの間（パシシオン）の噂を聞き、その当事者であるアオイの娘シラユリに誘われ調査を開始する。

シラユリがいたその場では何も起こらなかったのだが、その夜、姿なき人物と予言者ヴィ・ヴィスターチャにより、噂きの間（パシシオン）の地下

にある本当の嘆き(パシシオン)の間に連れて行かれるヒロ。彼はそこで血で描かれた異常な壁画とその製作者であるオウェルと出会う。実は彼こそが姿なき人物であった。彼は自らを堕ちた神と名乗り、ヒロの前世である悪魔ヴォルツィッタを裏切ったことを彼に土下座をする。

エンシッダも彼らに合流するが、突如としてオウェルの様子が変わり彼は嘆き(パシシオン)の間から姿を消し、聖櫃のある場所に姿を現す。そこには黄色の神ディルアナに呼ばれたと言ってやってきたハクアリティスと、それを追ってきたアラシと3人の子供たちがいた。ディルアナに触ろうとするハクアリティスを攻撃しようとするオウェルは、人の姿ではなく巨大な獣の姿をしていた。

その理由を問いただす暇もなく、彼を追ってきたヒロたちが間一髪で食い止めるが、その刃が子供にすら及ぼうとしたとき、ヒロは灰色の魔力を解放し、その瞬間、ヒロとオウェルは封印された異端(エルヴァナンド)に移動し、オウェルはヒロに千年前の真実を語り出す。

それは自分の裏切りとは、世界の理によって禁忌とされている神同士の恋愛である、オウェルが想い人であるディルアナとの愛を成就しようと、ヴォルツィッタの忠告を聞かずに灰色の魔力に染まってしまったということを指していた。そして、ヒロは更に灰色の魔力の源である神に忌み嫌われた子供(ラーオディル・オヴァラ)が千年前の戦いの全ての原因であるということと、ヴォルツィッタがその全てを最果(ロシギュナス)ての渓谷(ナス)に封印したということを知る。

オウェルの話が終局に差し掛かったところでエンシッダが二人の前に現れ、彼はヒロに灰色の魔力が封印されているという最果(ロシギュ)ての渓谷の封印を解くことを迫る。ヒロは躊躇うが、エンシッダに人間たちの未来を人質に取られたヒロはその封印を解くことを決断する。

【新しい登場人物】（数が増えてきたので、前に紹介した人たちは割合します）

アオイ
　魔力の研究者であるらしいが詳しい経歴は不明。黄色の神ディルアナを使い神の子（マイマール）を作り出したのは彼であり、どうやらその事に対して罪悪感を感じている模様。男とは思えない美少女っぷりで、その遺伝子は間違いなく娘であるシラユリに受け継がれている。

ディルアナ
　黄色の神。神の子（マイマール）の力の源である聖櫃で眠りつづける神。

シラユリ
　アオイの幼い娘。嘆き（パシシオン）の間にヒロを呼ぼうとしたオウェルによって操られ、無意識のうちにヒロをその場に誘った。

ヴェルトラス
　天空騎士団師団長ジグラッドの実弟。兄には頭が上がらない様子。

マール・ドシャ
　天使側の予言者。今までヴィ・ヴィスターチャによって力を封印され、思うように未来を見ることができなかったらしい。

イフリータ
　ティアの仲間その1。軽い性格。

キシン
　ティアの仲間その2。しっかり者の性格。

オウェル
　銀月の都（ウィンザード・シエラ）の動力源である銀の神オウェル。かつてはヴォルツィッタの親友であったが、禁断である同じ神のディルアナを愛してしまった故に、灰色の魔力の罠に嵌り、今は半ばエンシッダの囚われの

身として基本的に嘆き(パシシオン)の間の中でしか存在できない。

神に忌み嫌われた子供＜ラーオディル・オヴァラ＞
　灰色の魔力の源とされる子供。かつてはヴォルツィッタと家族のように暮らし、西方の魔境(シェストリア)で獣族の革命に手を貸していたらしいが、その力を黒き神に目をつけられ東方の楽園(サフィラ・アイリス)に連れてこられた。神に対して異常な憎悪を抱き、復讐のために千年戦争を引き起こした。現在はヴォルツィッタによって最果(ロシギュナス)ての渓谷に封印をされているらしいが・・・。

グレイン・アッダ
　千年前に西方の魔境(シェストリア)の覇権をとった獣王。ヴォルツィッタ・オウェルとは親友同士。

＜用語＞

聖櫃
　千年前、神が一度に多くの契約者を得るために考案された装置だったが、その代償として聖櫃に入ったら最後、二度と出ることはできないというリスクを背負うこととなり、その使用は表向き禁止となっていた。しかし、それを神に忌み嫌われた子供(ラーオディル・オヴァラ)は利用し復讐の道具として天使たちに提供した。

神の子＜マイマール＞
　聖櫃によって神と命を一つにした人間。魔力を得るために神の血(ニス・ドゥア)を受け、神と命を一つにする契約を結ぶ。

天使
　基本的には神の子(マイマール)と同じ原理だが人間だった頃の記憶がほとんど

の天使たちになく、天使という一種族だと思っているが元は人間。神が自分たちの利用しやすい下僕として利用するために造り出した存在だったが、千年前反乱を起こした。

世界の理

神が生まれる前から世界に存在したもの。神すらもそれに逆らうことはできない。その代表例として神同士の恋愛の禁止や、死者の再生がある。

灰色の魔力

神に忌み嫌われた子供だけが持つ魔力。人間である彼がどうして魔力を宿していたかは不明だが、その例外的な魔力は神々が持つ魔力とは一線を画し、他者の魔力を吸収し、魔力によって他者を支配する強い力を持つ。そして、何より世界の理を無効化できる力は人間だけでなく神々すら屈服させた。

そして、毎回恒例？当てにならない次回予告（笑）

――全ては世界の最果ての場所で

『ヒトツニナロウ』

私はその言葉を嫌悪すると同時に、その意味が分からなかった。
身体を重ね合わせれば一つになれる？心を曝け出してしまえば一つになれる？

――天使と人間は最後の戦いに臨む

「皆を守るってことは、結局自分を守るってことだから。」

泣きそうに歪むその笑顔は弱弱しい。
だけれど、何者にも負けない強さを秘めたその光が私には眩しかった。

――最悪の悲劇の引き金は引かれる

「そんなもの愛じゃない！！！」

消えゆく命の儚さに涙が止まらなかった。
悔しくて、悲しくて、苦しくて、みっともないほどに私は泣き叫ぶ。
ただただ、愛だという理由のために彼らの命を奪った人物が憎くて仕方がなかったのだ。

――そして、最後の決断は下される

「貴方をずっと待っていました。」

千年も前から決まっていた運命が私を呼ぶ。

その運命が私に告げるのが『死』であったとしても、私が逃げられない運命が・・・。

第１１５話　最果ての最先

３年前、私は父親が追い求めいた翼の伝説が真実であったことを知った。

『さあ、叶えたい願いを言って？』

あの時は人の姿を持たなかった魔力の塊が少しづつ少年の姿へと変化していく。

そして、彼の声はうっとりするような美しい声だったが、何か恐れを抱かせるような不気味さも兼ね備えていた。

５年前にユイアを失い、エヴァに出会うまで私は生きた屍のように、ただただ不浄の大地（ディス・エンガッド）を流離い歩いていた。

しかして、ユイアをあんな形で失った私は何処かおかしくて、記憶も未だとして曖昧な部分も多い。

そして、どこをどう歩いたのか絶望の内に不浄の大地（ディス・エンガッド）を流離い歩き私は不思議な場所に辿りついていた。

――――それは大地に繋がれた巨大な翼

十字で鎖に抑えつけられ、無残な姿で大地に繋がれたその翼を見た瞬間に私は父親が追い求めた願いを叶えてくれるという翼の伝説を思い出した。

しかし、伝説の語られていたような純白の翼ではなく、その翼はまるでつい今しがたもぎ取られたかのように赤い赤い鮮血で彩られていた。

乾いた大地で見ることのない眩しいまでの白と赤のコントラストは、３年経った今でも鮮明に思い起こすことができる。

そして、何も考えることなく気がつけば、その鎖を大地に繋ぎとめていた楔を解き放ったいた。

だが、今から思い返してみればあの時、私はどうやって楔を解き放ったのかも覚えておらず、何もかも自分のことなのに記憶が途切れ途切れだった。

そして、更に可笑しなことに、それまでの記憶は曖昧なのに、翼の封印を解いた瞬間に私の記憶ははっきりしてくる。

自分という存在の意味を何も知らなかった頃はただの不思議でしかなかったことだが、今から考えてみればあの時の私はもしかしたら半ば悪魔に支配されていたのかもしれない。

そう考えれば自分の記憶が曖昧なのにも納得がいくし、知らない封印をあっさりと解いたことにも説明がつく。

何しろ万象の天使の翼を切り落として封印したのは悪魔なのだ。

しかし、そう仮定したとしてどうして自分でした封印を千年の時を経て再び解いたのかまでは私には知るすべはない。

そして、急に意識がはっきりとした私に対して翼は魔力を暴走させて私を襲ってきたのだ。

急に封印を解かれ、制御するということを忘れた魔力はまるで竜巻のように私を攻撃し続けた。

正直、ユイアのこともあり何もかも投げやりだった私としては、始めは反射的なものでエヴァの攻撃を避けたりもしていたのだが、それが続いてゆくとだんだんとそれをしていることすら馬鹿馬鹿しくなってくる。

絶望と悲しみに支配されていた私は、このままエヴァの魔力に進んで殺されようとすらしたのだ。

そして、確かに逃げることをやめた次の瞬間に私は何かに貫かれた。

全てを諦めて瞼を閉じた私には何が私を貫いたかなど分からないのだが、皮膚を肉を骨を貫く何かの感触を痛みを私は確かに感じたのだ。

――しかし、瞼を開いた私を貫く存在は何もなかった

それどころか翼の魔力は暴走をおさめ、それに代わるかのように今度は黒の剣（ローラレライ）が突如の暴走を始めたのだ。

迸る黒の魔力に私は驚き混乱した。

そして、しばらくして黒の剣（ローラレライ）の暴走が終わった所で、あのエヴァの第一声である。

そりゃ、目の前に現れたのは子供だったとしても、誰だってその言葉を不気味がるだろうし、恐怖するだろう？

だけれど、やはりあの時の私は精神的にどうかしていたんだと思う。

『ユイアを彼女を蘇らせてくれ！！！』

願いをと言われて、躊躇いもなく私はそう叫んでいたのだから。

しかして、死者の復活はオウェルの話を聞く限り神とて叶わぬ禁忌なのだ。

『ユイアっていうのは死んだ人でしょ？願いを叶えるには対価が必要だけど、貴方はそれを支払えるの？』

『私の命をやる！』

自分が死んだってユイアが蘇るのなら構わなかった。寧ろ願ったり叶ったりだと思った。

『無抵抗に死んでもいいと思う命で、大切な人の命の対価が支払えるとでも思っているの？』

『！』

もっともな言葉に言葉に詰まった。

しかし、あの当時の私にユイアに勝る価値のある存在などあるはずもなかった。

『願いはそれだけ？うーん、それじゃ僕が困るんだよね。君の願い

を叶えてやらないと、僕の願いを君に叶えてもらえないじゃない。』
そして、伝説通り翼たるエヴァは私に契約を持ち掛けてきた。
『僕にも願いがあるんだ。まあ、君が大切な人を蘇らせたいほどに強くて大きな願いじゃないんだけどね。それは――』
『切り落とされた天使への帰還・・・か？』
父親の研究が真実ならばそれは間違いなかった。
そして、何の穢れもない子供姿をしたエヴァは笑った。
実際、私と3年間共にあったエヴァにはあの時の記憶はなかったし、彼とは別物だという認識が私にはあるのだが、あの笑顔だけは同じだったように思った。
『その通りだよ。話が早くて助かるなぁ。ねえ、だから他の願いを言ってよ。実体のない僕は一人じゃ、この世界に存在できない。君との契約という形をもって、本当の意味で僕は現実世界に実体を持てるんだから。』
しかし、ユイアを蘇らせる以外にあの時の私に切実な願いなど思い起こせるはずもなく、それにこんな怪しげな存在の願いを聞いてやる謂れなど本当は何一つないはずなのだ。
だけれど、弱い私は愚かしい願いを口にしてしまうのだ。
『翼よ！この願いだったら、お前は叶えてくれるのか？！』
弱った時、人は何にだって縋ってしまう。
少しでも楽になれるなら、心が救われるなら、何を犠牲にしたって人はそれに手を伸ばす。
それが悪いだなんてその時は微塵も思わずに、後になって血の涙を流すくらいに後悔するくせに・・・。
『うん。さあ、願いを言って。』
今の私がまさにそれだ。

最果てが迫る今になって、この契約の本当の意味を私は知った。
そして、苦しいほどに後悔をして、懺悔をして、もう、どうしていいかも分からない。
だから、私はこの時になって初めて気がついたのだ。

――ああ、この契約が【最果ての最先き】なのだ・・・と

『私の心をこのまま・・・絶望という名のままに凍らせてくれ！！！』

それは残酷な時の流れという癒しを私に与えないための贖罪だった。
あの時の私には心安らかになることこそが恐怖だった苦痛だった。
苦痛でいることで安心していられた。
そして、それ以来、私は永遠にユイアという存在に捕われ、心はそこから何一つ動かない人間の形をした過去の遺物となり果てた。
その本当の意味など、何一つ知る由もなく。

「さあ、俺と契約をしよう。ヒロ」

そして、私は最果てに辿りつき再び契約を持ちかけられる。
それが世界の最果てとなるか最先きとなるか、全ては私の決断に委ねられて・・・。

第１１６話　嵐の前の静けさは胸に痛く　１

嵐は静けさの後にやってくる
止める術も、逃げる術もなく、私の上に降りかかってくる
だから、胸が痛む
嵐がやってくることが分かっていても、その静けさを前にして何もできないから
自らの無力さに、大いなる運命の偉大さに、我々は胸を痛めるしかできないから

【嵐の前の静けさは胸に痛くて】

＜ＳＩＤＥ　ヒロ＞

「決戦は最果て（ロシギュナス）の渓谷！！全ては人間の自由のためにっ！！」

女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）の司令官であるハレの宣言とともに、快晴の下にある広場に集められた銀月の都（ウィンザード・シエラ）にいる全ての人間たちが歓声を上げた。
私はそれに参加することはなく、広場を臨むことができる自室からその様子を見下ろす。
エンシッダが私に告げた様に、銀月の都（ウィンザード・シエラ）は新たなる大地を目指して最果て（ロシギュナス）の渓谷へと進路をとり、そこで待ち構えているという情報のある天使たちとの最終決戦を前にハレによる作戦の説明がなされていた。（どうせ、ヴィ・ヴィスターチャが天使の動向などは予言したに違いない）
どうやら天使も黙って人間たちを逃がしてはくれないらしい。
しかし、ずっとぎりぎりの生にしがみつかなければ生きて行かれ

なかったアーシアン達にとって、天使からの解放は夢に見ることすらも難しい悲しいまでの悲願。

例え天使が目の前に立ちはだかろうとそれに立ち向かうだろうし、彼らの眼下の熱狂ぶりとてその気持ちは痛いほどに私も理解できるつもりだ。

だから、その先にあるのが人間たちの本当の自由だというのであれば最果て(ロシギュナス)の渓谷の封印を解くことに躊躇いはない。だけど、

――白き神も俺も互いを利用しているだけなのさ

エンシッダのあの嫌味な笑顔が、そして、白き神の存在が私の決心に不安の影を落とす。

エンシッダが信用できないことはもとより、神であることを捨てても欲した万象の天使を裏切ってまで、彼女が最果て(ロシギュナス)の渓谷に求めるものとは何だ？

罪人の巡礼地(アークヴェル)では天使の悪行を止めたいなどと言っていたが、オウェルとエンシッダの話を聞く限り、白き神が天使を裏切った理由は嘘にしか思えてならない。

寧ろ、いざ天使との戦闘になればころりと天使側に寝返る様子の方が想像するに容易い。

しかし、そんな存在をエンシッダが易々と身の内に入れている状況が、更に私の頭を悩ませる訳で…全く見えてこない最果て(ロシギュナス)の渓谷での展開に思わずぐしゃぐしゃと髪の毛を掻きむしる。

「物思いに耽るなんて、らしくないんじゃない？」

と、そこに私を嘲笑う楽しげな声がかかる。

部屋には鍵を掛けていたはずなのにと、私はその声の主をじろりと睨む。

「ティア。エンシッダの右腕がこんな所にいていいのか？」

「別に右腕なんかじゃないわ。」

私の言葉に笑顔を引っ込めたティアの表情は硬い。

彼女は窓に腰かけている私の横までやってくると、壇上のハレを通じたエンシッダの言葉に熱狂する人々を見下ろす。
「私も彼らも何も知らないまま、希望だけを信じて命をかけて戦うゲームの駒にすぎない。」
その瞳には喜ぶ人々への憐みと悲しみの色、そして
「でも、それを分かっていても私たちはエンシッダ様にすがるしか…ない。」
私の身の内にも確かに存在する、自らに対する不甲斐なさが浮かぶ。
結局、間違っていると感じても、自分の中で何一つ納得のいくものがなくても、自分というちっぽけな存在がいくら足掻いても何も変わらないという事実が悔しくて辛い。
そんな彼女の気持ちが分かるからこそ、かける言葉が見つからない。
ハレの声高な演説と人々のざわめきだけが響く室内で、私とティアの間には重い沈黙がたれ込めた。

「…ヒロ、貴方はこの戦いの先に何があると思う?」
それを断ち切るのは、ぽつりと落とされたティアの囁きのような問い。
人々の歓声にかき消されかけた言葉は、私がティアに気を懸けていなければ思わず聞き逃しそうなほどに小さくて掠れていた。
エンシッダにとってティアがどれほどの位置にいるのか、私にはいまいち理解できなくて彼女が何処までを知っているのかも分からない。
女神の十字軍(イヴィスタン・ディード)でも神の子(マイマール)でもないが、ティア達は何かしらエンシッダの密命を受けて行動をしているティアは、私や何も知らずに喜ぶ人間たちよりは明らかにエンシッダに近い場所にいそうなものだが、私などにこんな風に不安を打ち明けてくのであれば、単にそういう話でもないのだろう。

エンシッダの言葉を盲目的に信じる皆よりは知っているが、エンシッダの思惑の全てを知る訳ではない。
恐らく私のように何らかの役割を担うための情報を知っているだけで、それ以上は何一つ知らされてはいない微妙な立ち位置。
しかして、どんなに足掻いたところで何も分からないし、知る術も見当たらなくて、今の私の如く時間だけがぽかりと空けば、無理やりつけたはずの決心がぐらぐらと揺らいでくる。

――これで本当にいいのだろうか？私は間違っていないのか？

しかし、全ては始まってしまったのだ。
「さあ、人間たちよ！自由を勝ち取ろうではないか！！！」
ハレの強い言葉が人々を奮起させ、本日何度目かになる人間たちの歓声による空気の震えが私の鼓膜を大きく揺らした。
もう、勢いづいた人間たちを止めることは不可能だ。
それを見て、無知ということが如何に罪であり、幸いであるかと私は思う。
その先が本当に自由であるのか何の保証もないのに、信じきれることは無知であり幸いだ。
だから、せめてもう前を見ることも、夢を見ることもできない私には、その罪が露わにならないままに全てが終わるように願うことと、それを手伝うことしかできない。
「何があるかなんて私に分かる訳がないだろう。始まってしまった以上、私たちは戦うしかないんだ。その先のものが自分が願うものだと信じて。」
「それはそうだけど。」
「それに人間と天使、二つの種族のあり方はもう修復が不可能なほどに捻じれた。両者がこうして対立した以上、もう何かしらの決着がつかない限り私は何も始まらない…とも思う。」
エンシッダと白き神にとっては大したことではないのかもしれな

いが、人間と天使という二つの種族は元は同じ存在のはずなのに、千年前、その道を大きく違えた。

そして、私はそれが東方の楽園（サフィラ・アイリス）の悲劇だと思う。

神に天使、世界の成り立ち、全てが嘘に塗り固められた世界は天使に優越を人間に劣等を植え付けて、生まれながらにその運命を決めつけた。

だが、本当は運命など神とて決めつけていいものじゃないのだ。

だから、少しづつ歪は大きくなり、今、決壊しようとしている。

エンシッダによって仕掛けられた戦いは、ためにため込んだ人間たちの悲しみ・憎悪・怒りを天使たちへの闘争心に書き換えて、世界を揺るがす戦争へと姿を変えたのだ。

ハレの言葉に天使を罵る野次が飛ぶ集会に、天使たちに弓を引くことすら考えられなかったはずの人間たちの姿は今はもうない。

「…そうね。少なくとも天使をここで倒していかなくちゃ。私たちは始まらないのかもしれない。」

それを私の横で見下ろしながら、揺らいでいたティアの表情が定まった。

気の強い彼女の意外な一面を見たような気がしたが、それとてこの先に待ち受ける戦いのことを考えれば不思議に思うことなどないのだろう。

「でも、貴方は天使と戦うことになってもいいの？」

「何が？」

「貴方はアーシアンなのに人間たちとは少し天使たちへの接し方が違うから。」

その言い方は酷く不自然だった。

自分だって人間でアーシアンだろうにティアは、まるで自分が違うとでも言いたげだった。

だが、瞬間的に湧いたその疑問は、天使を恨む気持ちしか持てない人間ではない自分を責められているような気がして、すぐに忘れた。

いくらでも嘘や言い訳を思いついたが、僅かに考えて私は正直な言葉を口にする。

「そうだな。確かに私はここにいる皆より天使に対する気持ちが違うかもしれない。自分でもよく分からないんだが、少しの間でも天使と対等の関係で生活をしたから…だろうな。」

あれを対等といっていいものか分からないが、少なくとも万象の天使に囲われて生活した暫くの間はある意味、種族の枠を超えた付き合いがあったように思う。

「だが、天使を許せない気持は偽りようがない。贖罪の街や罪人（アーク）の巡礼地（ヴェル）での事を許せる人間なんて…」

顔を歪めた私と同じことを思い出したのか、ティアも眉を顰めている。

――天使の領域（フィリアラディアス）の豊かさを保つために生贄を捧げる贖罪の街の聖櫃

――反旗を翻した人間に報復するために無抵抗な人間すら殺された罪人（アークヴェル）の巡礼地での戦い

胸を満たす気持ち悪い血の匂い・生々しいまでの紅。

天使の皮を被った卑劣な悪魔たちの表情を、無残なまでの人間たちの苦渋の死顔を私は忘れることはできないだろう。

例え、千年前に天使に何があろうとも偽りを真実にするために天使たちが塗り重ね続けた罪は、私の中で鮮明に刻みつけられたのだから。

――この心が動かずとも、心はそれを記憶する

「そうね。私もそう思う。だから、勝ちましょう。」

「そうだな。」

勝敗がつくような結果が望めるかどうかは定かではないが、私は頷いた。

それを見て、やっとティアはいつものような勝気な笑顔で私をのぞきこんだ。
「だから、そのためにも今日は付き合ってもらうわよぉ？」
「は？」
そして、ぐいっと腕をとられると自室から連れ出される。
「な…なんだ？」
「子供たちがヒロに遊んでほしいんだって。貴方が最近、塞ぎこんじゃったもんだから。皆、寂しがってるの。」
オウェルの話を聞いてから考えることが多くて、アオイの研究に協力する以外は自室にこもることが多かった。
「だからって、どうして今？」
決戦が近い今なのか分からなかった。
「馬鹿ねぇ。『だから』でしょ？戦いが近いってことは、貴方が命を落とす可能性があるってことじゃない。子供たちに最後の思い出をつくってあげなきゃ。」
「おまっ…なんつー縁起でもないことをっ！！」
シリアスに決めていたというのにと思わず出た言葉は汚いもので、ティアは声を出して笑う。
「私も貴方も、こんなところで考え込むのは柄じゃないってことよ！」
「それはティアだけだっ！」
と叫んではみたものの、彼女のそんな物言いに久々に口元が緩むのがわかった。

第１１７話　嵐の前の静けさは胸に痛く　２

『ヒロだぁ！！』

大人たちが集会に駆り出されて留守番を言いつかったのだろう。
広い一室に集められた子供たちは私を見ると退屈そうにしていた表情をきらりと光らせた。
それが私に会えたことに対する嬉しいという気持ちであれば本望なのだが、生憎とその表情には面白い玩具を見つけたといった妖しげな光が宿っていて、集まってくる子供たちに私は一歩後ずさる。
「ほら、保父さん？しっかり働いてくださいよ。」
だが、すぐ背後にいたティアにどんと押し出され、私は問答無用で子供たちの群れの中へ、一人放り投げられたのであった。

――――そして、どれほど時間が経っただろうか？私は非常に疲労困憊していた

「なに大げさなモノローグしてるの？」
「あれ…口に出してたか？」
心の中の言葉のつもりだったのだが、ティアにははっきり頷かれて私は空笑いを浮かべた。
「まったく、たかが小一時間ぐらい子供の相手をしたからってばてないでよね？情けない！」
「『たかが』って、ティアもやってみれば分かるぞ？子供が１０人も集まれば、モンスターのできあがりだよ。」
壁際に凭れかかり疲れた表情で言えば、ティアは『おっさんねぇ』と失礼な事を言いながら、子供たちの群れに入っていった。
私はそれを手を振りながら見送る。

まあ、ティアの言うことも分からないでもない。
子供と言っても、本当に化物並の体力を有す神の子（マイマール）の一員である半数近くの子供たちは集会に出ていて不在なのだ。
普通の子供たち相手に、この様は確かに情けないかもしれない。
さて、その集会は果たしてどうなったことやら…と、思考の中に入りこもうとした瞬間、私の横に小さな気配が一つ腰を下ろす。
「大丈夫？」
その優しい言葉に嬉しくなる。
何しろ私が疲労の余り使い物にならないと分かった途端、ガキどもは私に興味をなくして他の遊びに興じ始めたのだ。（素直というか現金というか、子供とはかくもシビアな生き物だっただろうか？）
「私は大丈夫だ。君こそ遊びに加わらなくていいのか？」
「うん。私はあんまり皆と群れるのは好きじゃないから。」
「そうなのか？誰かに苛められてもしてるのか？」
しかし、なんて優しい子供だろうと思ったのに、『群れる』とは中々皮肉な言い方ではないか。
十にも満たないだろう幼い子供の物言いとは思えぬ言葉に私は僅かに目を見張り、そこで初めて自分の横に座っている子供の姿をまともに見た。
「ううん。そんなんじゃない。」
黒い髪のお下げの大人しそうな少女が物言いと同じく、子供のくせに妙に大人びた笑みを浮かべている。
その顔に見覚えがあった。
「君はこの間、聖櫃の部屋にいた…」
先日、オウェルが暴走した際に聖櫃の部屋にいた子供の内の一人だ。
「クリエスよ。皆にはクゥって呼ばれてる。」
大人しそうな様子の割に、はきはきとした言葉を紡ぐものである。
拙い声に乗せられるそんな大人びた言葉遣いがアンバランスだが、妙なことにこの少女にはそれがぴったりだと思えた。

「では、クゥ。子供が子供らしく遊ばない理由が群がるのが好きじゃないってのは、どういう意味なんだ?もしかして君は子供の姿をしているが、実は中身は大人とかそういう落ちじゃないだろうな?」
冗談のつもりだったが、最近の異常事態を鑑みればあながち冗談でもないかもしれないと、頭の片隅で考えたが、
「まさかっ!私は正真正銘のぴちぴちの9歳だよぉ。」
というクゥの力一杯の否定で、それはすぐに打ち消された。(それにしても『ぴちぴち』という言葉自体が、どうにも死語のように思えるのは私だけなのだろうか?)
「それに別に子供だからって皆が皆、ああやって騒いで遊ぶのが好きっていうのも大人の偏見でしょう?個性って大事でしょ?」
言うことが一々正論なのも気になるが、彼女がいうようにそれが個性だと言ってしまえば言い返す言葉もない。
「あんなことしても疲れるだけだし、それよりはここでこうやってヒロとお話してるほうが私には有意義なの。」
大人びているだけでなく、主張もはっきりしているらしい。
私は昔からこうした我の強い女性ばかりに好かれてきているので、彼女の物言いからこのクゥにも懐かれるだろう自分の未来が見えて心の中で大きくため息をついた。
「それは光栄だな。じゃあ、この間クゥといた他の二人はあの中かな?」
何が楽しいか分からないが、走り回り笑い転げる子供たちの集団。
その様子はこれから人間の命運を聞ける戦いが待ち受けているとは思えないほど、見ていて何の緊張感も感じられない。
「オーヴとテレサのこと?うん。二人ともいるよ。」
そう言って彼女が指さした方を見ると転んだらしい少女と、彼女に手を差し出している少年が笑い合っている。
「あーあ、オーヴったら赤くなっちゃって。オーヴはテレサが好きなの。あの可愛らしい顔にころりとやられちゃってるのよ。」
その言葉に何となく棘を感じて思わず『嫉妬しているのか?』と

聞きそうになって、子供とはいえ女性相手にいきなりそれはないなと言葉を変更した。
「二人とは仲は良いのか？」
「何？まだ私が誰かに苛められてるんじゃないかって思っているの？知り合ったばかりの子供に随分優しいんだね。」
先の返答でその可能性を否定されたわけではなかったので、そういわれるのは心外だったが、彼女の言い分にも一理ある。
「優しいわけじゃなくて、お人好しってだけさ。」
「それって自分で言ってて情けなくないの？」
「そういわれると立つ瀬がないが、せっかくお知り合いになれたお嬢さんが苛められてたら悲しいからな。別に何ができるわけじゃないが、話くらいは聞いてやれるし。」
彼女の様子から苛められている訳じゃないことは分かっているが、お節介と言われようともしし彼女が困っているなら何かの力にはなってやりたい。
彼女だけじゃない、私はきっと誰と会ってもそう思うに違いないのだ。
そう、最近、気がついた。そして、その理由にも…

「…貴方は未だに囚われ続けているんだね。」

しかして、返ってきたのは静かなる声。
「私には見える。貴方の中にある絶望…普通の人間ならそれを忘れたいと願うのに、貴方は寧ろそれを永遠に自分の中に残すことを選んだ。そして、貴方の他人に対するその優しさはその代償。」

『翼（エヴァ）よ！契約を！！』

蘇る記憶が胸を抉る。
それはエヴァがまだ万象の天使の一部として封印されていた時の

話。私と翼（エヴァ）との契約。
だが、どうしてそれをこの少女が知っている？
「どうして…？」
「ごめんなさい。知ったかぶりをしたけど、別に私は貴方のことを知ってるわけじゃない。」
すくりと立ち上がるクゥは腰掛ける私を見下ろして笑う。
不意に頭の中にそんな彼女と重なる映像がよぎったような気がしたが、それはすぐにあっという間に消えた。
「私は貴方の前世を知っているというだけ。前世の貴方も絶望を忘れる事じゃなくて、絶望によって腐っていくことを選んだ。いいの？このままいけばヒロは絶望によって身を滅ぼすことになるんだよ？」
「君は一体誰なんだ？」
千年前の私を知っているというクゥから、しかして『悪魔』という言葉は出されないが、私と同じだという彼女の語る私の前世は的を得ている。
単なる少女が急に私の前で得体のしれないものに変化する。
「…それは私も分からないよ。ただね、私は夢を見るんだ。貴方はその登場人物。それが千年以上の過去の話だと知ったのはつい最近だよ。まあ、誰もこの話をしても信じてくれないんだけどね。」
「夢？」
「うん。千年前の話だけじゃない。私はいろいろな夢を見るの。それがいつのことかはわからないけど、きっとそれはこの世界の歴史だと思う。」
馬鹿ばかし子供の戯言だと片づけるのは簡単だが、クゥの話をそんな風にしてはいけないと思った。
「どうして今、私にその話を？」
「…きっと、この戦いは過去になぞらえられる。すべての条件が同じだから。でも、私はあんな悲しみを繰り返して欲しくない。だから、ヒロに私の見た夢の話を聞いてほしいの。」

クゥの大きな瞳には嘘も偽りも隠されていない。

「私は夢を見るだけで皆を守る力はないから。お父さんもお母さんも友達も…私は何も失いたくないから。お願い…ヒロ。」

大切な人を守りたいという他愛もない、だが、何にもまして強いその想いは、私だって嫌というほど理解できる。

彼女の夢というのは不思議だが、それが嘘だろうと真だろうと彼女の言葉に一つ大きく頷いてみせた。

第１１８話　嵐の前の静けさは胸に痛く　３

＜ＳＩＤＥ　アラシ＞

「決戦は最果（ロシギュナス）ての渓谷！！全ては人間の自由のためにっ！！」

女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）の司令官であり、エンシッダ様の代理人であるハレの言葉は、力強く信じるに値するものだ。

だからこそ、人間が自由を勝ち取るための決戦を前にして、俺はその言葉だけを信じ、我武者羅に戦わなくてはならない。

なのに…今の俺は盛り上がる仲間たちの中、一人疑心暗鬼の中に取り残されている。（周りは興奮しすぎて、俺が一人沈んでいようが気にする者もない）

そして、俺はどうして自分がそんな状態なのかも理解しているつもりだ。

――――イヤァア！！

それは数日前のハクアリティス様の耳から消えない絶叫に似た悲鳴。

ハクアリティス様を追って聖櫃の部屋に忍び込んだ俺を待ち受けていた姿なき怪物と、突如として現われたエンシッダ様にヴィ・ヴィスターチャにヒロ。

怪物とヒロが最初に消え、エンシッダ様達もすぐにその場から立ち去った。

立ち去っただけでエンシッダ様から状況に対する説明はなく、結

局、何が起こったか分からず呆然とした俺と子供たちと、混乱したままのハクアリティス様だけが聖櫃から漏れる光の中に取り残された形となった。

「エンシッダァ！！！どこに行ったの！？私にあんなことを言って、ただで済むと思っているの！？」

俺の中で息づいていた儚くて美しい彼女の面影は欠片もない。

鬼の形相で金切り声をあげるハクアリティス様に子供たちは怯えるように壁際に身を寄せている。

俺も少々の我儘とヒステリーを交えた彼女は見たことがあったが、これほどに常軌を逸した様子の彼女は見たことはなかった。

しかし、これほどに取り乱すのは異常だが、確かにあんなことを言われてはハクアリティス様が怒るのも無理はないとも思う。

――――お人形さんはお人形さんらしくしていればいいのさ

その言葉の本意のほどは知れないが、信じていた人間に普通『お人形』さん扱いされたら傷つくものだし、プライドの高い彼女はそれもより一層に違いない。

でも…これほどに？？

「何よぉおおおっ私は天使の花嫁よ！！！何で？どうして？」

髪を振り乱し虚空に向って叫ぶ。

儚い様子の彼女の中にここまでの激しさがあったとは思わなかったが、だてにその上っ面だけに惹かれたわけじゃない。（まあ、少々引いている自分がいるのも確かなのだが）

誰だって色々な面があって、その一部分に好意を感じたとしても、それが消えたからと言って惚れた女が俺の中で何でもない女にすぐにすり替わる訳じゃない。

もしかしたら、時間がたてば俺がハクアリティス様への気持ちを過去のものにできるかもしれない。

だけれど、今の俺の気持ちは現在進行形なのだ。

彼女の思わぬ一面を見たとしても、そうは簡単に気持ちを切り替えることなんて出来ないんだ。

だから、彼女が傷ついているのならばそれを助けてあげたいと思うのは当然のことで、髪を振り乱し体を動かす彼女が壁にぶつかりそうになるのを見て、瞬間的に彼女の肩を抱きしめた。

「ハクアリティス様っ！しっかりしてください。」

「離してっ！私が何をしったていうのよ！！もう、私に酷いことしないで、お願いよ、ラインディルト！」

だが、錯乱している彼女は俺が誰だか分らないらしい。

思わず強く掴んだ俺に怯えるように叫んだ彼女の名に俺ははっとして、掴んだ手を放す。

――――ラインディルト？

それは忌々しい天使の長の一人の名前ではないか。

せめて彼女の夫である万象の天使の名であれば、忌々しくとも理解することができたが、どうしてここでその名前が出てくるのだと、俺は不思議に思った。

同時に今度は怯えるように体を小さくして蹲る彼女に、今度こそ俺は呆然としてどうしたものかと途方に暮れる。

ともかく、子供たちもいることだし、この場所に居続けていいわけもなく、俺はなるべく彼女を刺激しないように優しい声を心掛けた。

「ハクアリティス様？」

とりあえずは名前を呼んでみれば、ぴくりと体が揺れる。

「大丈夫。」

普段は出さないような声音も、惚れた女相手だからこそ自然と口に出た。

そろりそろりと震えが止まる訳ではないが、俺の優しい声が（自分で言っていて気色悪いが）伝わったのかハクアリティス様が顔を

上げようとする。
「俺はアラシです。貴方に何も酷いことはしない。さあ、帰りましょう？」
そう言ってやれば、やっと自我を取り戻してくれたのか、のろのろと彼女は俺のほうに視線を向ける。
だが、その瞳は涙に濡れ、同時に俺の姿は映っていない虚ろの影を貼り付かせていた。
「エヴァンシェッド？」
しかして、出てきた名前は俺の意に決して添わぬ者の名。
彼女の夫にして、我ら人間の最大の敵。
カッと頭に血が上る感覚が俺を支配するが、ここで彼女を刺激するわけにはいかないのでグッと否定する言葉を飲み込んだ。
「やっと、やっと会えたのですね。」
俺の差し出した手に纏わり、涙に溢れた笑みを浮かべる彼女は、本当に美しく幸せそうに見えた。
そして、俺を愛する夫と間違えたまま、ハクアリティスが俺に抱きつこうとした瞬間、俺は後ろから掴みかかられ、床に叩きつけられた。
「うわっ！」
「キャアアッ」
痛みよりも先に聞こえてきたハクアリティス様の悲鳴がそれを忘れさせて、俺は瞬時に起き上がろうとしたが…
「たかが人間が私の所有物に気安く触るな。」
顔先に突きつけられた刃が淡い黄色の光に鈍く光を放つ。
「…大地の天使」
その先にいたのは天使の領域襲撃（フィリアラディアス）のために、情報として写真で見たことのある大地の天使ラインディルト。
その表情には冷え冷えとした、だが、どう見ての俺を見下す表情

が張り付いている。
「どうして天使がこんな所にいる?」
咄嗟にでたのは、人間の最後の砦に存在する異端の存在の理由。
そして、次いでラインディルトに腕を掴まれてそこから逃げようと、激しくもがくハクアリティス様が目に入る。
「ハクアリティス様に何をする!!」
「そんなことは貴様に関係ない。言っただろう、これは私の所有物だ。」
俺に剣の切っ先を突きつけたまま、関係ないと言いながら、俺を見るその瞳は冷え冷えとしていながら憎悪の炎が見え隠れする。
「いやぁ!!離して!助けて、エヴァンシェッドさまぁ!!!」
静かなラインディルトの声が、俺ではなく助けてくれるはずもない天使の名を呼ぶ声でかき消される。
それが無性に悔しくて切ない。
そして、それはラインディルトに対しても何らかの感情を動かしたようで、俺を見ていた憎悪の瞳は皮肉に歪められると、俺に剣を突き付けたままにハクアリティス様に向けられた。
「自分の置かれている立場が分からないとはいい気なものだ。人形というのであれば、せめて姿だけでなく中身も本物と同じにしてくれればいいものを、性格はまるであの女とは違うのだから。」
まただ、エンシッダ様だけじゃない。
この天使もまたハクアリティス様を『天使』と呼ぶ。
「ハクアリティス様はハクアリティス様だろう?貴様もエンシッダ様も何を言っている?」
思わずついて出た言葉に片眉をぴくりと器用に上げて、ラインディルトが再び俺に視線を返す。
「人間、これが『ハクアリティス』だと?」
声が高く高く響く。
「『ハクアリティス』。我らが主エヴァンシェッド様に選ばれたたった一人の妻たる存在に許されたその名が、このできそこないの人

形の名だと？」
皮肉に歪められた瞳に唇の動きもプラスされ、整った天使の顔が酷く醜く見えた。
「あの女は千年前に死んだ。罪人（アークヴェル）の巡礼地で黒き神からエヴァンシェッド様を守ってな。」
――死んだ？
「だったら、そこにいる彼女は？」
死んだ人間が生きているはずもない。
「だから、『人形（カレド）』…なんだよ。この女は死んだハクアリティスの代わり。あの女が千年前にするはずだった大事のための身代わりにすぎん。」
「どういう意味だ！？」
ラインディルトの言葉の本当の意味は何も理解できなかった。
だが、『ハクアリティス様』が万象の天使の本物の妻ではなく、その代わりのための存在であることは何となく分かった。
…『ハクアリティス様』自身は、自分こそが万象の天使の妻だと思っているのに、この矛盾は何なのだろう？
「それにしても全く可愛くない女だ。お前があの方のためになら何でもするというから、自由を与えてやったというのに黄色の神を解放するだけのこと如き失敗しおって。嫌だ嫌だと泣き叫ぶだけとは。」
それは俺に対する返答ではなく、独り言に近い言葉だった。
そして、それを打ち切るとラインディルトはハクアリティス様をぐいっと引き寄せた。
「これ以上を聞きたければエンシッダに直接聞け。私とハクアリティスがここにいることを許しているのはあの男だからな。なあ、ハクアリティス？」
「離して！助けて！」

離れた剣の瞬間に二人を追ったが、そんな意味深な言葉だけを残して彼らもまた去っていった。
最後に残ったのは俺と子供たち3人と、そして、混乱する状況と、エンシッダ様に対する一つの疑惑。

――私とハクアリティスがここにいることを許しているのは『あの男』だからな

『あの男』、すなわちエンシッダ様は天使がここにいることを許しているという。
ハクアリティス様を『人形』と呼んだあの方は、恐らく彼女が万象の天使の妻でないことも知っているのだろう。（まあ、それが確かなことかは定かではないが）
元々エンシッダ様の考えていることなど、俺は何も理解していなかっただろうし、これからも理解することはなかったろうと思う。
でも、それでも彼が人間の未来を切り開くと信じていられたからこそ、俺は彼に従い続けてきたのだ。
でも、ここにきて俺のその確固たる何かが崩れ落ちようとしていた。
天使が銀月の都（ウィンザード・シエラ）にいるということ、そして、ただ惚れた女が苦しそうに泣いていたということ。
だけれど、だからといって何の力もない、黒の雷（オルヴァラ）を持っていてもその力の解放をしない俺に何ができるわけではなく、俺は釈然としないままに最後の戦いへと身を投じるしかないのである。
熱狂し続ける人間たちの群れの中、俺は力の宿らぬ黒の雷（オルヴァラ）をつけた拳を無意識のうちに握りしめていた。

第１１９話　嵐の前の静けさは胸に痛く　４（前書き）

注意：主人公が非常に後ろ向きな考え方に終始しております。苦手な方はご注意ください。

第１１９話　嵐の前の静けさは胸に痛く　４

＜ＳＩＤＥ　ヒロ＞

『前世の貴方も絶望を忘れる事じゃなくて、絶望によって腐っていくことを選んだ。いいの？このままいけばヒロは絶望によって身を滅ぼすことになるんだよ？』

そう言われて驚くのと同時に、酷く薄暗い喜びを覚えた。

曖昧な言い回しに分からない部分も大きいが、私の中の誰かがひっそりと笑いを漏らしているのを感じた。

それが同じように絶望に腐っていった悪魔の私なのか、それとも私自身なのかは分からないが、クゥの前で平然とした表情をしながら確かに私はその言葉に何かを感じていた。

そして、その奇妙な感覚は気がつくと子供たちの親がちらほらと迎えに来て数が減り、過去を夢見るという少女クリエスも両親に連れられて私の目の前から去ってからも後をひいた。

だが、その感覚に引きずられて現実と思考の狭間にいる私を、聞き覚えのある生意気な強い声が呼び戻す。

「最近、引き籠っているかと思ったら、おっさんは結局子守りに逆戻りしてたのか。」

まだまだ若い私を『おっさん』呼ばわりするのはあのガキしかいない。

声のする方を見れば案の定、呆れた顔の神の子（マイマール）・ケルヴェロッカがそこにいた。

「決起集会は終わったのか？」

しかし、何度言ったところで彼が『おっさん』呼びを直そうとする気配もないので、私はその辺はスルーして彼に問う。
「まあな。ハレが血管を浮き立たせて叫んでいた顔は面白かったけど、かったるかった。おっさんもティアもさぼっているなら誘ってくれよ。」
そういって膨れた顔をする様子は少年らしく、その足元では子犬の姿をしたロッソが同じ顔をしている。
「なあ、アラシ？」
そして、ケルヴェロッカの後ろにのっそりと立っている熊男を振り返って同意を求めた。
「え…おう。」
だが、アラシはいつものチョイキモ親父風の軽い受け答えではなく、何処となく心ここにあらずな風で言葉を返してくる。
「？どうかしたのか、アラシ？」
「いや別に…それよりホントにケルヴェロッカの言う通りじゃないが、サボるなら誘ってくれれば良かったのに。」
不思議そうに問うてみれば、いつものようなでかい声で答えが返ってくるが、やはりいつもの覇気がないように思えて、私だけじゃないティアも首を傾けている。
「アラシがそんな風にいうなんて珍しいわね。どこか調子が悪いの？戦い前なんだから無理はしないでよ？」
「大丈夫だ。何でもないさ。」
「当り前だよ！」
弱々しい受け答えにこっちが大丈夫じゃないのだが、そんな大人たちのやりとりなど気にしないようにケルヴェロッカが大声を張り上げた。
「もう大丈夫だとか、そんな事を言っている状況じゃないでしょ？！大丈夫じゃなかろうが、大丈夫だろうが僕たちは全力で戦うだけだよ。」
だが、それは子供の無神経さ故の発言ではなく、大多数の大人た

ちよりもはるかに大人びた考えに基づいた言葉だった。
「だって、そうでしょ？最後の戦いはもう始まっちゃったんだ。僕たちは自分のことなんか忘れて、ただ死ぬまで戦うだけだよ。」
それは私がティアに対して先ほど言った言葉と似ていて、私は僅かに目を見張る。
「ケルヴェロッカ…」
ティアも私と同じ気持ちだったのか、驚いたような声で彼を呼ぶ。
「大人たちは皆、戦いの後のことを心配しているみたいだけど、この戦いに勝たなくちゃ、僕らは何も始まらないんだし、今は戦いのことだけを考えるときでしょ？そのための決起集会な訳だし…なのに二人とも出てこないし。」
最後の方はサボっているなら誘えといった割には、私とティアを非難するような声音があったが、ケルヴェロッカが如何にこの戦いに真剣かを見たような気がした。
エンシッダや天使・神の思惑や、世界の果て（レドヴァガンナ）の先にある新たなる大地への不安、何もかもが曖昧な中で私たちは様々なことに頭を悩ませていた。
だが、ケルヴェロッカの言うとおり、それは全てが最後の戦いについての、そしてそれに勝利してからの話。
私たちが考えなくてはならないのは、『最後の戦い』ただ一つでなければなかないはずなのだ。

「そして、僕らは絶対に勝たなくちゃならないんだ。勝てないかもしれないなんて、微塵も考えちゃならない。」

しかし、同じような考えを持っていても、私にはないその強い意志を湛えた瞳の光は、私には眩しいくらいだった。
天使に神にこの世界に常に虐げられてきた人間が、まだこれほどまでの強い希望を持っていられるなんてと、ケルヴェロッカの持つその光がうらやましく愛おしいと思った。

神の子（マイマール）としての実質的な強さだけではない。
その彼の持つ心の強さこそが、ケルヴェロッカを強く、そして、輝かせているのだと知る。
それから、ケルヴェロッカは子供たちと友達と兄弟と戯れる、女神（イヴィスタン・ディード）の十字軍や黒の雷（オルヴァラ）たちを振り返る。
その表情は子供がするには不似合いなほど慈悲に溢れ、優しげでそれでいて切なかった。
だって、その表情は本当ならまだまだ子供である彼こそが向けられるべき庇護であり、彼がそんな表情をするのはあまりに早かった。
そんな風に思うのは私だけじゃないらしい、ティアもアラシも切なげに表情を揺らして彼の言葉に頷いた。
「そうだな。例え俺の命を賭けてでも皆の幸せを掴みとらなくちゃならねー…だよな。」
「はあ？」
しかし、それには酷く心外とでも言いたげにケルヴェロッカが声を上げる。
「アラシってば、バッカじゃないの？！」
そして、アラシに詰め寄ると彼を力の限り罵倒した。
「誰かのために命を捨てるなんて、そんなの最悪だよ！！そんなことされたって、残された人は悲しくて苦しいだけだ。」

――――そうだな

ケルヴェロッカのその言葉に私は心の中で大きく頷いた。
何故なら私もまた『残された人』であるから、私に生きてほしいと言って私を置いておいていった愛おしい大切な人たち。
彼らの気持ちは痛いほどに分かるが、それは私の心を壊してしまった。

『このままいけばヒロは絶望によって身を滅ぼすことになるんだよ

？』

クゥの先ほどの言葉が蘇る。

時間という優しい忘却を許せなかった私は、翼（エヴァ）との契約により色褪せない絶望を選んだ。

そして、クゥが言うとおりその絶望は確実に私を蝕みつつある。

今まではそれに気がつかないふりをしてきた。

それを感じてもそれを振り切ってきた。

だって、エヴァがいたから。

私の心をギリギリのところでつなぎとめる彼の存在があったからこそ、私は絶望に負けないでここまでこれた。

だが、エヴァが消えたことにより、その均衡は大きく崩れはじめ、悪魔の覚醒によりそれは私が無視できないほどまでに大きくなった。

今まではそれが言葉にできない曖昧なものだったが、クゥの言葉でそれは私の中で形をもったものとして現われたのだ。

「誰かを守りたいのなら、自分が生き残ることを、自分を大切にしないとダメなんだよ！！」

きっと、ケルヴェロッカもまた大切な誰かの命の上に、今ここに生きているのだろう。

彼の必死の瞳には、ただの綺麗事だけでは語れない強い何かが宿っている。

「そして、皆を守るってことは自分を守ることになるから。皆を守るっていう強い気持ちが自分を守り、自分を大切にできる気持ちが皆を守るんだよ。」

あれもこれもと子供らしい、我儘で強欲な、でも何よりも純粋で切実な想い。

ユイアを失なう前には私の中にも確かにあったその感情が、今はとても遠い。

同じような経験をしてきても、私とケルヴェロッカではこんなに

も違う。
　強いケルヴェロッカと弱い自分の違いが、はっきりと私の前に存在していた。
「そうね。ケルヴェロッカ。」
「おう！そうだなっ！！」
　そして、ティアもアラシも同じ強さを胸い秘めている。
「おっさん？」
　私を僅かに不安そうに見え上げるケルヴェロッカに頷いて見せる。
　でも、決してそれはケルヴェロッカの気持ちに同調した訳じゃない。
　私はそんな強さをとうに捨てた。
　腐りゆく私の中で最初に朽ちたその強さを持つ、彼らをせめて守ってやりたいと、そいう気持で私は頷いたのだ。
　だが、この状況では皆が皆、私がケルヴェロッカの思いに答えたのだと思うだろう。
　いや、そう思われるように私は無言のままに頷いただけ。（だって、生意気だがこんなに純粋な子供に嘘をつくのは心苦しかったから）
　ケルヴェロッカもティアも、暗かったアラシでさえ、勇気づけられたように笑顔が浮かぶ。

――ごめんな…

　そして、私は絶望に身を滅ぼす、自分の末路を予感した。
　恐らくこの最後の戦場は、私の死に場所となるだろう…と。
　別に誰だって好き好んで死にたいわけじゃない。
　ユイアやエヴァが守ってくれた命だ。
　無駄死にをしたいと願っている訳じゃない。
　でも、心の底で絶望の先にある自分の末路が、クゥの言葉によって現実化したことによって喜びを感じたのだ。

今まで忘れていた、絶望に腐りかけていく心、それは私が知らないうちに確実に私を死の方向へと誘いつつある。
それがいつから始まっていたのか私にはわからない。
せめて、私の死が人間たちの未来への礎になるのなら、それはある意味最高の死に華をさかせれるんじゃないかなんて、あまりに後ろ向きで最悪な事を私は考えていた。

――こんな所で死んでたまるもんか

――もう、全てから解放されてしまいたい

つい最近まであったはずのそんな葛藤が

――ああ、やっと楽になれるんだ

そんな思いに書き換えられつつある。
最後の戦いに全力を注ぐ気持ちは十二分にある。
しかし、しだいに消えゆく生への渇望が、死への安楽へと書き換えられていくこの感覚こそが、絶望に腐りゆく心なのだと私は確信した。

第１２０話　悪魔の封印　１－１

悪魔は楽園に3つの封印を施した
万象の天使の翼を切り落とし、天使に処刑されるまでのその僅かな最後の時間
彼が何を思い、何のために封印をしたのか、その意味を知る者は少ない
しかして、千年との時を経て悪魔の魂を継ぐ者がその封印を解こうとしている
――まずは一つ目の封印・最果（ロシギュナス）ての渓谷にある封印を封印せしものを

【悪魔の封印】

それは異様な光景だった。
本来、生命が育むことのない不浄の大地（ディス・エンガッド）にひしめく無数の生命。
だけれど、ひしめく生命、相対する人間と天使は、その生命を散らせる覚悟でその場所に立っている。
――生きるために死にゆく生命、その悲しい矛盾がやりきれない
天使は封印された最果（ロシギュナス）ての渓谷を背後に大きな空中母艦や戦車とともに、人間を逃がさないために立ちはだかる。
人間は銀月の都（ウィンザード・シエラ）を中心に、ただその向こうにある新たなる世界を目指している。
人間と天使、千年の時を経て元は同じである種族は再びぶつかり

あおうと、その凄惨なる戦いの火蓋はまさに切って落とされようとしていた。

それなのに私はその戦いの中にはいない。

「戦いは始まっただろうか？」

私は戦い前の緊張感の中ではなく、暗い暗い湿った場所でため息交じりに呟いた。

持たされた僅かな明かりだけを頼りに、ただ黙々と歩き続けるのも大分飽きた。

「そろそろのはずよ。だけど、今は私たちが気にするべきはそのことはじゃないはずよ。無駄口叩いてないでさっさと進むわよ。」

先頭を歩くティアの容赦ない言葉がぴしゃりと私の口を閉じさせる。

「ははっ。まあ、ティアもんなにピリピリすんなよ。」

「黙れ。ボケ男。」

ティアと先日一緒にいた見るからに軽そうな男イフリータの言葉も一刀両断。

「まあ、空気を読めってことだ。」

その後を追いうちをかけるように、ティアの仲間その2らしきキシンがぼそりと口を開く。

そう。私とこのティア・イフリータ・キシンの四人は今から始まろうとしている人間と天使の戦いの戦場ではなく、その地下を走るトンネルの中を鼠のように這いずり回っていた。

どうしてかといえば、私たちは秘密裏に最果て（ロシギュナス）の渓谷にかけられた封印を解くためだ。

人間が目指す西方の魔境（シェストリア）に行くためには、最果て（ロシギュナス）の渓谷の先にある世界の果て（レドヴァガンナ）を超えなくてはならない。

天使の徹底抗戦が予想なれる以上、力押しでその封印を解くより、天使たちの裏をかき先に封印を解くことで戦いに勢いをつけようと

いう作戦だ。
しかして、最果て(ロシギュナス)の渓谷を守る封印は無論としてその近くにあるのが当然で、今は天使たちに占拠されている場所。
そして、最果て(ロシギュナス)の渓谷を守るべき天使はその封印にも、無数の天使を配置しているに違いない。
今は千年前に人間最後の砦であった場所の名残であるように隠しトンネルをこうして進んでいるが、封印の近くにこれで出られたとして、その後、天使の陣内に入ってしまえば袋の鼠状態であることは目に見えている。
「瞬間移動の魔法は使えないのか？」
だから、私はふとつぶやいた。
わざわざこんな地道に歩いて行かずとも、その封印の場所とやらに一瞬で行ってしまって、封印を解いてまた魔法で人間側に戻ってしまえばいいのではないかと思ったのだ。
だが、いい考えだと思った私の意見は馬鹿にしたような笑いと共に一蹴された。
「天使たちだって馬鹿じゃない。瞬間移動を邪魔する防御壁を張っているわ。まあ、それは人間側にも言えることだけれどね。」
確かに瞬間移動の魔法が使えれば、天使側も使ってくるに違ない。
そんな簡単なことは誰でも考えるというわけである。
何となく恥ずかしくなって私は小さく苦笑するしかない。
「そうそう、だから俺たちはこそこそとゴキブリのように――わかった・わかった黙りますよ。」
そんな私の言葉尻を取ってイフリータが妙に明るい声で言ったが、それはティアとキシンの無言の圧力によって黙らされた。
「ったくよ。妙な空気をやわらげてやろうっていう俺様の優しい気持ちが分からんのかねぇ。」
名残惜しそうにぼそりとそう呟いた言葉はどうやら私にしか聞こえないようだったが、この戦いを前に何とも胆の据わった男であると、小心者の私などは感心してしまう。

そして、雑談は終わり、私たちは再び沈黙と共に天使たちの陣中を目指した。

そもそもこの作戦を言い渡されたのは、つい数時間前のことだったりする。

「ヒロ。君には単独で最果(ロシギュナス)ての渓谷を閉ざす第一の封印を解いてもらうよ。」

見晴らしのいい展望室にたった一つの椅子に踏ん反り返って、エンシッダは相変わらずの似非好青年の皮をかぶって言い放った。

これがつい先ほどの話なのだから、嫌でも記憶は鮮明で悲しくなってくるほどだ。

てっきり人間側の先陣でも切らされるのではないかと、その気満々だった私は思わずあんぐりと口を開けた。

「ちょっと、そのだらしない口を閉じなよ。全く君みたいな男に人間の命運を託すかと思うと俺も気が重い。」

本当は『人間の命運』など考えていなくせにとは、思っていても口には出さない。

話が別の方向へいってしまうし、言ったところでエンシッダに私が口で敵うとは思えない。

「ちょ…待て。第一の封印って？私は戦いに出るんじゃないのか？」

「別に戦うなって言っているわけじゃない。戦うよりも遥かに重要で危険度の高いことをしてもらうだけさ。」

非常に嫌な事を聞いたような気がしたし、にこりと笑ったエンシッダの背後に黒い影が見えた。

「この間、最果(ロシギュナス)ての渓谷に封印が施されている話はしただろ？あそこにある封印は三つ。一つは最果(ロシギュナス)ての渓谷自体を封じたもの、一つは世界の果(レドヴァガンナ)てを封じたもの。そして、最後は黒き神を封じた封印。」

先日、この話を聞いた時は驚いたと同時に、どうして私というか悪魔の魂が重要なのかを知った。

白き神と天使によって封印されたと思われていた黒き神は、実は悪魔が封印したものであり、その封印は悪魔の魂を持つ私でなくては解くことができないというのだ。

「だが、後者の二つは最果て(ロシギュナス)の渓谷の中にある。とにもかくにも、まずは最果て(ロシギュナス)の渓谷の封印を解かなければ話にならないというわけさ。」

戸惑う私を置いて行ったまま、エンシッダは話し続ける。

どうせここで私が行かないと言っても、それはエンシッダの不利益と同時に、天使と戦う人間たちを窮地に陥れることに繋がる。

先日からさんざんにエンシッダに脅されてきたが、それが言葉だけでなく現実として突きつけられているということだろう。

「それで私はどこに行けばいい？」

だから、ぐだぐだいうのはやめて私は開き直る。

それに戦いはすぐそこまで迫っているのだ。

ここでエンシッダと言い争っている時間はないし、それもまたこの男の思惑の内だと思うと忌々しいが、今はそれもぐっと我慢するしかない。

「あ・そ・こ」

しかし、そんな私をあくまでも馬鹿にしたまま、妙に明るい声でそれだけ言ってエンシッダは豆粒ほどだが、次第に近づきつつある天使の軍勢の中心にあるだろう一つの棒のような影を指さした。

今は遠すぎて小さい影だが、近づけば間違いなくそれなりに大きいだろうその影に私は目を細める。

「こんなに遠くからでも見えるだろ？実際は５００メートル近くはある『あれ』こそが第一の封印・悪魔の槍(ヴァーシシェル)。千年前、ヴォルツィッタが第二・第三の封印を施した後にまるで槍を投げるかのように、灰色の魔力を大地に突き立てて封印を施した事から天使たちがそう名付けた。」

「じゃあ、あれは灰色の魔力、そのものというわけか？」

そんなに大きな魔力が実体化しているなど想像できなくて、私は

改めて悪魔の槍（ヴァーシェル）と言われたそれを凝視した。
「普通の魔力による封印だったらどんな事をしても俺が解いてみせる。だけど、灰色の魔力だけはお前しか…悪魔にしか解くことはできない。」
「どうしてだ？エンシッダも灰色の魔力を持っているんだろ？」
だからこそ、先日彼は封印された異端（エルヴァナンド）まで私とオウェルを追ってこれたはずだ。
「俺やオウェルは灰色の魔力に侵されているにすぎないから、灰色の魔力に耐性はあっても、あんな巨大な魔力を制御することはできない。だが、お前だけは違う。お前は『灰色の魔力を支配する』資格を持つ者だ。だから、お前だけが灰色の魔力の封印を解くことができる。」
いやいや、逆に灰色の魔力に支配される勢いですけど？とは、間違っても言えないエンシッダの雰囲気にごくりと言葉を飲み込む。
「…ともかく、お前にはティアたちをつけてあげるから、彼らを連れて天使の陣中に飛び込んで悪魔の槍（ヴァーシェル）を破壊するんだ。灰色の魔力の塊である以上、お前が干渉した瞬間に恐らく悪魔の槍（ヴァーシェル）はお前に取り込まれて消滅する。」
そういう状況がどんな真実で成り立つのか、知りたいような知りたくないような奇妙な感覚に陥る。
エンシッダは私が何者なのか間違いなく知っている。
悪魔というだけではない。
悪魔の魂の存在理由、私だけが特別視されるその理由、未だに見えてこない私と灰色の魔力の関係を…。
「悪魔の槍（ヴァーシェル）が消滅したと同時に神の子（マイマール）の力を解放して一気に最果て（ロシギ）の渓谷（ユナス）に攻め込む。お前たちはそのまま第二の封印の解除にかかれ。」
「ちょ…待てよ。そんな天使の陣中から私とティアたちだけで奥に進めっていうのか？」
いくら意表をついたもので悪魔の槍（ヴァーシェル）の消滅までは上手くいったと

しても、その先は天使が許さないだろう。
「天使は悪魔の槍（ヴァーシシェル）で吸収した灰色の魔力でお前が一掃するんだ。あれだけの質量の灰色の魔力だ。全てを解放すればその場にいる多くの天使の魔力を吸収する。」
なるほど灰色の魔力の他の魔力を吸収する性質を利用するという訳である。
「そして、灰色の魔力でパニックに陥った天使陣へ俺たちが総攻撃をかける。だから、灰色の魔力の解放は僅かな間だけに留めるんだ。神の子（マイマール）まで巻き込まれた本末転倒だからな。」
ずいぶん難しい事を簡単に言ってくれるものだ。
私は近づきつつある悪魔の槍（ヴァーシシェル）を見て難しい顔になる。
さっきも思ったのだが私は灰色の魔力を支配などできない、むしろ支配されそうなほどに振り回されているのだ。
正直、どんなに訓練を重ねても自分の中にあるそれすら御し切れていないのに、あれほど大きな灰色の魔力を解放させて、それを収められる自信が正直言って――全くない。
「神の子（マイマール）を使ったところで、圧倒的な力を持つ万象の天使がいる以上、正攻法じゃ人間に勝ち目はない。」
迷っている暇も躊躇している時間もないというわけである。

そこまでの回想を終えて、私は自分の気を引き締めるように手の中にある黒の剣（ローラレライ）の柄を握り締めた。
自分が天使に殺されることが怖い訳じゃない。
ただ、自分のしでかしたことでたくさんの人間の命が左右されることへの重圧が私を押しつぶそうとしていた。
そんな卑怯なことばかり考える自分を鑑みて、どんなに綺麗事を並べても私は所詮小さな人間にすぎないのだと、心の中で私は自分で自分を嘲笑った。

第１２１話　悪魔の封印　１－２

――――このままこの暗闇の中から出られなくなったら、どうしよう？

そんなありえもしない想像が頭をもたげるのも、仕方がないだろう。

なにせ、あるのは足元を僅かに照らす光のみで、あとは狭く息苦しい暗闇の中をただ黙々と歩き続けてきただけなのだから。

時間の感覚は次第になくなり、へんてこな妄想が頭を支配し、その妄想に天使との戦いという異常な状況が拍車をかける。

よって、遠くに漏れる僅かな光を見た瞬間は、頭上には恐らく天使たちがわんさかいるだろうとは分かっていても、思わず飛び上がって喜びたくなった。

しかし、問題はこれからなのだと現実に戻る。

「この先はどうなっているのかしらね？」

僅かな光に近づいてみると、それは洞窟の出口を塞ぐ大きな岩の隙間から洩れているもので、その向こう側には何かが動く気配はするものの、その先がどうなっているかはこの場からは一向に分からない。

ただ、天使がいることが分かるだけで、それがより一層の恐怖を煽る。

せめて悪魔の槍（ヴァーシェル）の位置だけでも掴めないかと、私は目をつぶり意識を集中させる。

自分の中の灰色の魔力が、磁力に引き寄せられるかの如く反応するのを感じ、私はその位置と距離を測る。（これはこれまでの訓練の成果だと、訓練に協力してくれた神の子（マイマール）やアオイに心の中だけで感謝した）

「どうやら位置的には悪魔の槍（ヴァーシェル）の近くらしいな。この場所から１０時の方向に５００メートルくらい先に気配を感じる。」

急襲をかければ、動揺に付け込んで天使たちを突破することが可能な距離ではある。

「さすがエンシッダ様の作戦ははずれがないな。まあ、ヴィスがいるからだろうけどよ。」

「始めから分かっているなら、どのあたりに出るかも教えてもらえると助かるところだがな。」

神の子（マイマール）のようなエンシッダの狂信者とは思えない、皮肉のこもった言葉に私は心の中で僅かに目を見張った。

しかし、そういえばティアからもエンシッダに対する似たような発言を幾度となく聞いてきた気がする。

「じゃあ、私がこの岩を吹っ飛ばすから一気に突っ切るわよ。ヒロは私たちが突破口を開くからその後を付いてきて。…どうかした？」

私がそんな彼らのやり取りに呆然としていると、ティアが不思議そうに私に問いかけた。

「なあ…君たちは一体何なんだ？」

エンシッダを信じていないのに、彼の意のままに命令され続ける彼女たち。

ティアに聞いた時は、『天使に復讐をしたいから』というような言葉を返された気がする。

だけど、それだけじゃない気がした。

いや、彼女たちにとってそれが理由だとしても、それは私が想像できるものとは違う気がした。

そう。ティアが天使が憎いといった時、彼女の瞳に宿っていたのは虐げられた私たち人間が持つ憎しみの色じゃなかった。

「――――何だと思う？」

「おい！ティア！！」

天使が近くにいるのだ。

声をあげるのにも、息を吐くように小さなものにどうしてもなり、ティアが謎かけのようにつぶやいた言葉に、そんな微妙な声でイフリータが先ほどまでのおどけた様子から一変して厳しい様子で彼女

を静止する。
「別に構わないじゃない。誰に隠しているわけでもないんだし。」
「だが…」
キシンも戸惑っているようだ。
それでもティアはそれを振り切って私に詰め寄りながら、語りかける。
「ねえ、私たちが貴方には何に見える？」
覗きこまれた瞳は、初めて会った時から印象的なぞっとするほどに美しい深い赤。
「少なくとも魔力を持つ君らは人間じゃない。」
「ええ。」
「そして、ティア、君は私に自分は神の子（マイマール）ではないと言った。」
「あら。よく覚えてるのね。そうよ、私たちは神の子（マイマール）なんて可愛らしいものじゃない。」
「だから、聞いている。君たちは何だ？」
少なくとも人間に見える彼女たちが、魔力をまとう理由を、その存在の名を私は知らない。
「ふふ。そうよね。貴方が知るはずがないのよね。悪魔の記憶がない貴方は…私を知らない。それが当然なの…よね。」
暗闇の中で光る赤に一瞬の揺らぎが見えたが、ティアの言葉に私はそれに気がつかない。
「どういう意味だ？ティアは悪魔を知っているのか？」
しかも、悪魔という存在の名だけを知っているだけという雰囲気じゃない。
その言い方はまるで悪魔ヴォルツィッタという個人を知っているかの様な…だが、悪魔は千年前に処刑されたのだ。
では、ティアは千年前に生きていたということになる。
「ええ、知っているわ。千年前から私たちは生き続けてきた。」
「君たちは神なのか？」
辿りついた答えはティアの表情を歪ませた。

「いいえ、違うわ。私たちはなりそこねた神（リーヴァネル）。神が作った4種族でも人間でもない。天使によって葬り去られた忘れられた存在。」

自嘲するようにティアは笑って続けた。

「天使という存在が現れる前、神は人間の次に第六の種族を作ろうとしていた。人間は他の種族に比べて繁殖能力には長けていたけれど、魔力を有していないという決定的な弱点を持っていた。次には自分たちにより近い、その両方を併せ持つ存在を作ろうとしていたのよ。神は繁殖能力がない訳じゃないけど、その機能は0に近いほど少ないから。」

なるほど天使や神の子（マイマール）の原型ともいえる存在というわけだ。

しかも、それは人間を改造して作られたものではなく、神々によって創造された正当な第六の種族ということになる。

「だけど、私たちによく似た天使という神の王である白き神の寵愛を得るものが現れたことによって、私たちは用済みになった。そして、天使にとっては自分たちと同じ力を持ちながらも、虐げられることも使役されることもない私たちは憎悪と嫉妬の対象でしかなかった。」

天使はかつて神の奴隷であり、それに反旗を翻し神々を殺した。

そんな彼らの憎悪がなりそこねた（リーヴァネル）神にも向けられたということだろう。

「結果として昔はもっと素敵な名前があった私たちはなりそこねた神（リーヴァネル）なんて名前をつけられ、天使によって迫害され続けた。ヴォル…かつての貴方の前世に助けられるまでは。」

「え――――？」

思わぬ言葉に目を見張った。

「ほとんど迫害され全滅に近かった私たちを助けてくれたのはヴォルだった。彼は私たちに未来を与えてくれた。だから、こうして私たちは生き続けていられるの。」

ヴォル――――オウェルも悪魔のことをそう呼んでいた。

そこからティアと悪魔の間には間違いなく個人的な関係があった

ことが分かる。
「貴方が悪魔の生まれ変わりだって知った時は驚いたわ。だって、貴方、彼とは全然違うから…ううん、よく考えれば似ている。ただね、私が忘れていただけ。時の流れは怖いわよね。どんなに忘れないでいようと思ったことも、気がつけば曖昧になる。」
そういって私を見たティアの表情は、見たことがないほど寂しげでか弱い女性のようだった。
しかし、その表情は一瞬で消えると、いつもの勝ち気で強い赤い光が灯った目で私を見据えて言いきった。
「だから、私は一番忘れたくない感情を忘れないために、天使に復讐を果たすために、天使への憎しみが一番強い人に従うことにした。」
「それがエンシッダ？」
得体の知らない、未だにその目的が掴みきれない男ではあるが、彼女たちから見ると天使への憎しみは並々ならないものがあるということらしい。
「まっ、本当はもっと色々複雑な事情があるんだけど。何だって千年だし？でも、時間もないし、詳しい話はまた今度にしましょう。」
そう言って、話を打ち切ると彼女は身の丈ほどもある剣を魔法で出現させた。
「そうだなっ！全部終わったら酒盛りでもしながら話そうぜ！！」
イフリータが小声で叫ぶという器用なまねをやってのけた。
「仲間の話も最近はしてなかったしな。ヒロだけじゃない、神の子（マイマール）たちにもいつか話してやりたいもんだな。」
きっと、仲間とは天使に殺されていった彼らの同族。
天使への復讐の後に、彼らを忍ぼうということなのだろう。
キシンが口元だけで渋く笑った。
「お前の場合はスノウちゃんに！だろう？最近、いい雰囲気だもんだぁ。」
「僻みか？」

「あははっ、キシンがもてるからって妬くのはみっともないわよ。」
明るい彼ら。
千年もの年月、重く苦しい長いその時間ををきっと彼らは三人で、こんな風に生きてきたのだろう。
ティアが私に自分たちのことを急に話す気になった理由は、最後の戦いを前にしたティアなりの何か心境の変化があったということだろう。
だけど、私はその変化が何かは聞かない。
私にはきっと聞く資格はないんだろう。
いや、本当なら今の話だって聞くべきじゃなかった。聞いても答えてはくれなかっただろう。
だが、私が悪魔の生まれ変わりだから、ティアはそれを話してくれただけだ。きっと。
彼らには彼らの物語が、彼らの聖域があるから、私が踏み込めるのはここまでだと感じた。
それにこれだけ聞ければ、私の腑に落ちない部分も十二分に解消できた。
私は戦いを前にしても笑みすら浮かべている彼らに頷いてみせる。
「じゃあ、行くわよ。準備はいいわね？」

――――ガァンッッッ！！！！！

ティアが振り上げた剣は、重々しい岩を軽々しく打ち崩した。
岩が砕ける音の次の瞬間に外からの光の眩しさに瞳を細める。
「走って！！！」
そして、私たちは今度こそ本当に最後の戦いへと突入した。

第１２２話　悪魔の封印　１－３

天使たちが突然に上がった爆音に右往左往する。
普段は澄ました顔で人間を見下している天使のそんな姿はさぞ滑稽だろうに、今の私にそれをきちんと確認する余裕はない。
息苦しいトンネルの先には、私が想像していたよりもかなり多い武装した天使がいた。
それが動揺はしているが、一斉に牙を剥いてくるのだ。
ティア達が魔力や武器で天使を薙ぎ払いながら進んでいるので、私はとりあえず黒の剣（ローラレライ）を構えてはいるものの、何もしないままに走り抜けられているのだが、奇襲でなければあっという間に取り囲まれてジ・エンドであったに違いない。
そして、一目散に高く高くそびえ立つ悪魔（ヴァーシェル）の槍に向ってひた走る。
遠くから見た時は小さな棒くらいにしか見えなかったはずだが、こうして近くで見上げてみると頂上が高すぎて確認できないほど。
私はその圧倒的な迫力と高さ、そして灰色の魔力によって構成されているその異質なる気配に、全力で走りながらごくりと唾を飲み込んだ。
「ちっ。思ったより悪魔（ヴァーシェル）の槍の守りが堅いわね。」
ティアが女性とは思えない豪快な剣技で天使たちをバッタバッタと切り倒していく。
「おいおい。女が舌うちなんかするなよ。」
それとは対照的に一発必中。
弓を手にしたイフリータは冷静に敵を仕留めている。
「天使も悪魔（ヴァーシェル）の槍さえ封印を解かれなければ、最果て（ロシギュナス）の渓谷を守ることができるとわかっているはずだからな。当然と言えば当然だ。」
「何だ！？」
「に…人間だ！！敵襲！敵襲！！！」

キシンは武器すら持たず、拳と蹴りだけで天使を倒している。
人間ではないと、なりそこねた神（リーヴァネル）という存在だと聞いたばかりだが、それでも彼らの強さに私は驚くほかない。
はっきり言ってしまえば、その強さは天使など赤子をひねるかの如く…だ。
その強さに圧倒されたのだろうか、気がつけば天使は彼女たちを避けるかのように悪魔の槍（ヴァーシェル）への道を開けていた。
「何？俺たちの強さに恐れをなした？」
あまりのあっけない天使の対応にイフリータがおどけながらも警戒するように呟くと、残り僅か数十メートル先にある悪魔の槍（ヴァーシェル）の傍から数人の天使の影がずらりと並んだ。
「イフリータが余計な事を言うから、厄介な奴らが出てきたじゃない。馬鹿っ！」
先頭を走るティアが立ち止まり、イフリータを罵った。
彼のせいではないと明らかだが、ずらりと並ぶ天使の面子に彼女が八つ当たりする気持ちも分からなくもない。
「とうの昔に絶滅させたと思っていた種族にまた出会うことになるとは思わなかった。まさか、なりそこねた神（リーヴァネル）が生きていたとはな。しかも、人間の味方をするとは…貴様ら何を考えている？」
その中央に立つのは天使の長・万象の天使エヴァンシェッド。
この世界でたった一人だけ白き翼を背中に背負い、美しくも禍々しき天使は感情の見えない表情でこちらを見下ろしていた。
「どうして私たちのことを？」
その声にはティア達がなりそこねた神（リーヴァネル）であることを知っているのかと問うのと同時に、私たちの作戦を知っていたといわんばかりの天使に対する様子への二つの問いが含まれていた。
「人間側に裏切りの預言者がいるように、我々の元にもマール・ドシャがいる。人間の動向を探ることくらい造作もない。そして、貴様らはもう袋の鼠…なりそこねた神（リーヴァネル）も今度こそ絶滅だ。」
その言葉に万象の天使を中心にずらりと並んでいた天使たちが私

たちに刃を向け、私たちに道を開けていた天使たちが取り囲むように移動する。

ちなみに万象の天使の横には三大天使であるサンタマリアや、エンリッヒにシャオンという私も顔を見知った天使がおり、その他の天使も私が知らないだけでかなりの魔力の気配を感じる天使たちがいる。

ある程度のことは予想していたものの人間がすぐそこまで攻め込んでいるというのに、悪魔の槍（ヴァーシェル）に対してここまでの守りの布陣を敷いているとは考えていなかった。

未来の予想合戦は、ヴィ・ヴィスターチャの力を過信しすぎた人間側の負けという訳である。

「――ヒロ」

じりじりと迫りくる天使に追い詰められ、万事休すといった状況でティアが視線は天使に向けたままに小さく呟いた。

「私たちが何とか天使を引き付ける。貴方はここから一人で悪魔の槍（ヴァーシシエル）まで走って。」

「バッ――」

この状況下で彼女たちを置いていくなどできるわけがないと、叫ぼうとしてティアに気配だけで制止される。

「黙って。よく聞いて。あの面子相手じゃ、このまま正面切って戦っても殺されるのが目に見えている。でも、悪魔の槍（ヴァーシシェル）の解放で灰色の魔力が暴走でもすれば状況は分からなくなる。」

「だが、私がそばにいなくては、君たちだってその暴走に巻き込まれる可能性だってあるんだぞ?!」

いや、むしろ巻き込まれる可能性が限りなく高い。

私がそばにいれば灰色の魔力から彼女たちを守ることもできようが、自分に帰属していない灰色の魔力の制御については、どんなに訓練を重ねてもほとんどできていない。

だからといって、あれだけの質量の灰色の魔力を一瞬で自分の中に取り込もうなんて、はっきりいって自殺行為。それをしようとし

た瞬間に私は灰色の魔力ではち切れてしまうに違いない。
「しかし、やらない訳にはいかないだろう？」
「あったりまえだ。俺たちは何をしても悪魔（ヴァーシェル）の槍の解放をしなくちゃいけねえんだ。皆のために。」

――――『皆』…今戦っている全ての人間と、そして戦いの果てに死んでいったたくさんの人間

キシンとイフリータの言葉に私は言葉を詰まらせる。
彼らの言うことは正論で、そして同時にこの状況下で他に何か策がある訳でもなかった。
「そういう事よ。さあ、頼むわよ。」
そういって、ティアたちは後ろにいる私に背後で親指を立てて見せた。
最悪の状況なのに、どこまでも明るい彼女たちの強さが頼もしかった。
そして、そのままティア達はこれまでとはケタの違う魔力を身に纏わせて天使に突撃を仕掛けていった。
同時に巻き起こる爆音と爆煙。
恐らく私を移動しやすくするために、わざと煙を上げさせたのだろうが、その派手さに私は目を白黒させる。
しかし、混乱する天使たちの叫び声と同じく混乱する私…じゃ駄目な訳で、私はその煙と混乱に乗じて低い姿勢のまま気配を消して走り出した。
立ち込める煙の中、すぐそばでティアたちと天使が戦っている気配をびんびんと感じながら走るのはスリルがあり過ぎた。
突然、吹っ飛ばされた天使が横から突っ込んできたり、煙で視界が悪く急に目の前に天使が現れて、慌ててぶん殴って気絶させたり…大した距離を走ったはずではないのに、悪魔の槍（ヴァーシェル）の足元に転びながらも辿りついた時は、情けないほどに息を切らしている自分がい

た。

「久しぶりだなヒロ。」

そんな私に戦場に似つかわしくない酷く親しげな声がかけられる。

小高く盛り上がった場所に突き刺さっている悪魔の槍（ヴァーシェル）の足元には煙は立ち込めておらず、その場所に地面に転がった私を見下ろす一人の天使の姿は鮮明に私の中に飛び込んできた。

「万象の天使…」

「いやなだ。俺と君の仲だろう？エヴァンシェッド、いや、君にならエヴァって呼んでくれても構わないよ？あ、その場合は俺は君のことはヒロちゃんって呼んだほ――――」

「笑えない冗談はやめろ！」

先ほどとは打って変わってにこやかな万象の天使に、エヴァを引き合いに出されて咄嗟に声を荒らげる。

そして、同時に態勢を立て直して黒の剣（ローラレライ）を握る手に力を込めた。

あたりを見回すと万象の天使以外は、ティアたちとの戦闘に参加しているらしく誰もいない。

「冗談じゃないんだけどな。せっかく、君と俺、二人っきりなんだ。そんなにピリピリしないでくれ。」

まるで私と二人で話したかったと言わんばかりの言葉に、私は眉をひそめた。

「俺と君は切っても切れない関係にある。」

そして、訳のわからない言葉と共に彼は左手の甲を私に見せた。

一方の私と言えば蛇に睨まれた蛙の如くビビりまっくていたが、じりじりと万象の天使と距離を取るように悪魔の槍（ヴァーシェル）へと近づきつつあった。

濃く重くなる灰色の魔力は私の体に痛みすら与えたが、一悪魔の槍（ヴァ―シェル）の気配がざわめくのを感じた。

「この指輪が何だか分かるか？これはエヴァが君に残した最期の想

い。君を生かすための契約の証だ。」
だが、その言葉に私はぴたりと歩みを止めた。
「どういう意味だ?」
「エヴァは最期、俺の中に還る運命を理解していた。だが、それでもヒロ、君のことが気がかりだったんだろう。君を生かすために、自分の命を盾に俺に迫ったよ。自分に死なれたくなければ、君を全ての不幸から守り幸せにしろとね。おかげで俺は君を幸せにしなくちゃいけない義務を負った訳さ。」

――ヒロちゃん、生きて

万象の天使の語ったエヴァが私の中でそっと囁く。
エヴァは自分の運命に従っただけではなかった。
自分の命を盾に万象の天使から逃げることだって不可能じゃなかったはずなのに、私なんかのためにエヴァは自分の存在が消えることを選んでしまった。
そう思うと抑え込んできたエヴァを守ってやれなかった自分の不甲斐なさと、彼を失った喪失感が再び蘇る。
「だから、君にはこれからは俺の傍にいてもらうよ。俺の傍で君は永遠の幸せを手に入れるんだ。悪くないだろ?俺の中のエヴァもそれを望んでいる。」
そして、同時に思う。

――僕を忘れないで

様々なことがあり忘れた訳ではないが、頭の片隅で燻っていたエヴァの存在が急速に膨れ上がり鮮明になる。
それは翼の封印(エヴァ)を解いた時に交わした契約に似ていた。
ユイアを失った絶望を忘れないための契約が、エヴァを失った絶望にすり替わっていくよなそんな感覚。

今の今までそれは大切な人を守れなかったという類似性ゆえの重なりだと思っていたが、それが急に二つの境目がなくなっていくような感覚に陥る。

いや、それどころかユイアの姿が私の心の中で霞み、エヴァという存在だけが私の中で大きく迫ってくる。

――――なんだ…これ？

そして、混じり合う喪失と膨れ上がる絶望が私の目の前を灰色に染める。

グニャリと歪む視界に、私は初めて悪魔（ヴァーシェル）の槍の様子が可笑しいことに気がついた。

高く聳え立つ鉱物のように固まっていた灰色の魔力が、バラバラと剥がれ落ち、その破片がグルグルと回っている。

灰色の魔力がエヴァのことで昂った私の感情に反応したのかと、気持ちを落ち着かせて暴走しつつある灰色の魔力を制御しようと試みるが、私の手を離れたかのように灰色の魔力は急旋回を繰り返している。

「無駄だ。悪魔（ヴァーシェル）の槍は俺の制御下にある。君がどんなに抵抗しても封印は解かしてあげないよ。」

その言葉にはっとして微笑む万象の天使を信じられない気持で凝視した。

悪魔（ヴァーシェル）の槍は灰色の魔力による封印だ。

だから、エンシッダは悪魔の魂を受け継ぐ、灰色の魔力を支配する資格を持つ私だけが解けると告げた。なのに…

「どうして貴様が？」

問いかけながら、様々な情報と思惑が私の頭の中を駆け巡る。

エンシッダの昔話によれば、白き神は灰色の魔力に侵されていた。

翼の色を見れば、万象の天使が白き神を魔力の根源にしていることは間違いないはずだ。

そう考えれば、彼が灰色の魔力と関係していると考えることができる？…いや、ただ灰色の魔力に魂を犯されているだけだというのであれば、エンシッダやオウェルにだってこの封印を解けてもおかしくない。

ならば、万象の天使にはさらに彼らとは違う部分がある？

そう考えて私は先日、エンシッダに聞いた事実を思い出す。

――人造生命カレド

万象の天使は白き神が亡くしたかつての恋人の魂を灰色の魔力で禁忌を犯して蘇らせたものだと言っていた。

では、その事が万象の天使に何かの作用を引き起こしている？

だが、何一つ確証はないままに、ぐるぐると考え込んでいる私に万象の天使は面白そうに笑って私に手を差し出した。

「どんなに考えても今の君には分からないよ。でも、知りたいだろ？だったら、俺と一緒に来るんだ。どうせ、俺が封印を掌握している以上、人間に勝利はあり得ないんだ。君は大人しく俺と共に――」

「馬鹿にするな！！」

思い返してみれば天近き城（フェデス・ジグロア）にいた時も、こんな会話をした気がする。

ぐるぐると考え込んでも、いつだって気がつけば私はこんな風に自分の思いに正直に叫んでいる。

そして、あの時は私はこの美しくも恐ろしき天使から逃げ出した。

だが、今度は逃げ出せない。

私の行動で人間の運命が大きく変わるのだ。

私は叫びながら封印の掌握を取り戻すべく悪魔の槍（ヴァーシェル）に飛びついた。

第１２３話　悪魔の封印　１－４

私が悪魔の槍（ヴァーシェル）に飛びつくという行動には、正直に言おう、実は別に何か理由があった訳ではない。

要は自分のものにならない灰色の魔力に対して、せめて触れることができれば万象の天使より支配権を取り戻せるのではないかという、極めて短絡的な考えから動いた結果だったりするのだ。

しかし、その行動による事象は私の想像するものではなかったが、結果としては『とりあえず』は悪くないものへと導くこととなる。

万象の天使によって干渉を受けている悪魔の槍（ヴァーシェル）は飛び回っている破片以外は未だに塔の形状を保っていたが、想像していた硬い感触ではなくグニャリとした生暖かいゼリー状で、その感触に僅かに眉を顰めたが、次の瞬間に突っ込んだ腕から入り込んでくる膨大な量の灰色の魔力に体が悲鳴を上げた。

「アアアアアッ！」

今までアオイに付き合った実験の中で、他の色の魔力を灰色の魔力に変えて私は自分の中に魔力を吸収していた。

だが、どんなに大量の魔力を吸収しても、魔力が私の中に貯蓄されているという実感はなかった。

だから、今回も灰色の魔力を吸収して封印本体を消し去れるのではないかと、勢いで行動した後に思いついたのだが、その目論見は大いに外れた。

魔力はどこかに消えるどころか、灰色の魔力を放出する時の比ではないほどに体に痛みを与えて私を苦しめたのだ。

要は今までも体の中に魔力は吸収していたのかもしれないが、恐らくその量が少なくて私がそれを感知できなかったのではなかろうか？

こんな状況でそんなことは、もうどうでもいいのだが、同時にこれは使えると次の作戦を思いつく。

「ヒロッ何をしている！早く離れろ！！」
万象の天使が慌てて私を悪魔(ヴァーシシェル)の槍から引き離そうとするのを振り払う。
「ヒロッ！」
切羽詰まったような万象の天使の声。
彼は恐らく本当にエヴァと契約を交わしているのだろう。
だからこそ、これほどまでに私を心配する。
契約とは神すらも覆すことのできない、世界の理が定めし約束。
それはどうやら万象の天使相手でも同じらしい。
だからこそ、私の賭けに似た策は必ずうまくいくに違いない。
「どうして！？そのままだと死ぬぞ！」
体は灰色の魔力を吸収することで痛み、そして、体の中で蓄積され続ける魔力は次第に私の中の許容量を越しつつあるらしい。
自分の容量以上の灰色の魔力は体を蝕み、痛みと苦しさは増してゆき、視界は歪み、灰色に染まり始めた。
悪魔はこれを自分のものとし、封印と成したというのに、同じ魂を持っていても情けないことこの上ない。だが、
「それでは…貴様が・困るだろっ？」
掠れる声で私は万象の天使を振り返り、天使はその美しい顔を歪めた。
「君は封印を解くために、自分の命を盾にしようとするのか？」
エヴァとの契約の証だという指輪を抑えながら硬い表情の万象の天使に、その通りだと私は苦痛に呻きながら笑ってやった。
万象の天使によって封印をロックされているというのなら、それを解かなくてはいけない状況に持っていくだけだ。
恐らく万象の天使の制御下にある悪魔(ヴァーシシェル)の槍に無理やり干渉したとことにより、封印は解かれるまでには至らないが暴走を始めており、その魔力は私の中に流れ込んできている。
その暴走を止めるには暴走を引き起こしている私を止めるか、もしくは封印を解くかのどちらかだ。

そして、私は殺されたってこの場を動く気はない。
「さすがはエヴァを育てただけのことはある。君と彼はすることが同じだ。俺が君らの命を助けない訳がないと分かっていて、無理な要求を突きつける。」
確かにそう言われれば、そうかもしれない。
私が今やっていることは、エヴァが万象の天使に契約を迫ったことと同じなのかもしれない。
自分の限界を感じ、薄れゆく意識の中でぼんやりとそんなことを考えながら私は笑った。
「いいだろう。封印を盾に君が俺のものになるのであればとラッキーだと思っていただけで、その後に封印は解くつもりだったからな。」
『君が俺のものになる』？…なんつー気色の悪いことを言うんだ。
ぞわりと寒気を感じたのと同時に、封印を守るためにいるはずの万象の天使が封印を解くとさらりと言った言葉が信じられなかった。
だが、どういう意味かと問いかける余裕はない。
今の私はただ苦痛に必死で耐え、途切れそうな意識を保つだけで精一杯なのだから。
「悪魔の槍（ヴァーシェル）よ、我が声を聞きその永きにわたる封印を解放せよ。」
そして、万象の天使が一言そう告げただけで体が急に軽くなるのを感じた。
がくんと体に力が入らなくて膝をついて肩で荒い息をしていたが、照りつける太陽の光によりできた自分の影が一瞬で影に覆われたことに気がついて私は空を見上げた。
「――――な？」
私が驚き目を見開いた先には、雲一つなく晴れ渡っていた空が何かに覆われていた姿。
急に雨雲でもでたというのならいいが、それは厚い雨雲のような悪魔の槍（ヴァーシェル）を形成していた灰色の魔力であり、その灰色の魔力は空へと舞い上がり渦を巻いたと思ったら、ものすごいスピードで私に向

って急降下してくるではないか。

「！」

いや、正確には私にではない。

私の横に立ち白い杖を掲げた万象の天使に向って…、避雷針に吸い寄せられる雷のようにものすごいスピードで杖に吸収されていく灰色の魔力。

私が少し触れただけで容量を超えてしまった灰色の魔力があっという間に消えてなくなる。

同時に恐らく封印のために存在していただろう、天使の陣内の向こう側に立ちこめていた霧が、たちまち晴れていく。

そうして、現われた最果(ロシギュナス)ての渓谷は赤黒い乾いた大地に刻まれた深く大きな溝であった。

溝というには規模が大きく、向こう側の大地までは数百メートルはある、大地の歪(ひずみ)とでも言えばいいのだろうか。

そして、その対岸は東方の楽園(サフィラ・アイリス)では見ることのない景色が広がっていた。

太陽の光がなく雷鳴轟く黒い空、うちつける雨、連なる山々は高く鋭く聳え立ち、見たこともない木々の姿も見ることができた。

決して美しいとは言い難いが荒々しくも生命力に溢れた世界の姿に、あれが人間の新たなる世界なのだと思うと同時に、恐らく悪魔の感覚なのだろうが酷く懐かしい感覚に胸が迫るような思いがした。

しかし、西方の魔境(シェストリア)と東方の楽園(サフィラ・アイリス)の間には、青と黒の空の狭間に見える太陽の光を反射する透明の壁のようなものが確認できた。

きっと、これが第二の封印。

――――これさえ破壊できれば…

後一歩、もう見える所に人間の新たなる世界が存在する。

私は痛む体のことも忘れてフラフラと吸い寄せられるように歩きだした。

「どこに行く気だい？」
だが、万象の天使が私の腕を強く掴むことで、私ははっとして彼を見た。
「君の要望通り封印は解いてあげたんだ。今度は俺の言うことも聞いて貰いたいな。」
ぐいっと腕を引き寄せられて、必要にない近さで彼に囁かれる。
「貴様…一体、どういうつもりだ？」
吐息が触れる距離、深く吸い込まれそうな紫の瞳に怯むことなく私は問い返す。
いとも容易く悪魔（ヴァーシェル）の槍の封印を解いた万象の天使。
彼はこの封印を元々解くつもりだと告げた。
「ヒロ、君に見てもらいたいものがある。一緒に来てくれるね？」
そう囁かれて、思わず彼の言うとおりにしてしまいそうなる。
彼に初めて会った時から感じていた彼が纏う言葉に表せない強い力。
その存在を天近き城（フェデス・ジグロア）にいた時より強く感じた。
美しく歪む笑顔に必死で抗いながら、この時、私は気がついた。
――この力の感触は灰色の魔力によく似ている
そう思った瞬間、不浄の大地（ディス・エンガッド）の赤黒い景色が霞み、目の前が暗転した。

＜ＳＩＤＥ　ティア＞

「ヒロッ！！！！」

叫んだときには、彼はその場所から掻き消えていた。

鬱陶しいほどに高く存在していた悪魔の槍（ヴァーシシェル）がなくなって、ヒロが封印の解放に成功したのだと咄嗟に灰色の魔力の暴走に警戒して振り返った。

だけれど、そこには荒れ狂う灰色の魔力でも、灰色の魔力の暴走に苦しむヒロでもなく、万象の天使に連れ去られ、忽然とその姿を消していくヒロ。

「ちょっと！余裕じゃない、私たち相手に余所見しているなんて！！」

「ほんまやな！そんなことしとると、あっという間に首と胴体がバラバラになってしまうでぇ！！」

それを追いたいと思うのに、この間罪人の巡礼地（アークヴェル）で遭遇した『下着』（ほとんど下着みたいな破廉恥な服装だから）と、何だか妙なしゃべり方をする天使の攻撃に行く手を阻まれている。

二人のほかにも三大天使のサンタマリアがその背後で悠然とこちらを牽制しているので、この二人相手だけならば強引に強行突破というのも可能かもしれないけれど、それもかなわない。

イフリータとキシンにしても同じような状況で、悪魔の槍（ヴァーシシェル）の解放による灰色の暴走で混乱する中から、とりあえずは撤退して主力部隊と合流しようと思っていたから、こんなにも呆気なく、平穏に解放が行われてしまっては思惑が外れたとしか言いようがない。

しかも、頼みの綱のヒロが敵の親玉に攫われていくなんて…

「サイアク」

思わず悪態をついて私は剣を振り切った。

同時に剣から魔力の衝撃波が発生するも、それは天使に当たることなく枯れた大地にぶつかって爆音と爆煙を盛大に上げる。

さっきまではヒロを無事に移動させるためにわざとこんな小手先を多用していたが、もうそんな必要もないかと私は剣を払って、天使といったん相対した。

「なんや？急に大人しくなってからに？」

「戦うことが無駄だって分かったんじゃない？人生諦めが肝心だも

の、あ、でもその人生も終わっちゃうけどぉ？」
耳障りなキャンキャンと吠えるような若者の声。
私はそれに嘲笑すら浮かべて、彼らではなく三大天使の一人サンタマリアだけを見据えた。この瞳にありったけの憎しみと怒りを宿して。
「イフリータ、キシン」
天使たちを見据えているから、彼らがどんな状況かまでは把握できない。
だけど、私の声はいつだって二人に届いている。
「ちょっと早いけど状況は変わったわ。エンシッダ様に許可は貰っている。力を開放させましょう。」
私はそう言って千年間、これほど晴れやかな気持にはならなかったというほど明るい笑みを浮かべた。

第１２４話　流離人　１

――何処から来たかも忘れ、何処に行きつくかも分からない
それが流離うということだと教えられた
だけれど、長い人生を生きてきた中で、それが自分の人生を表していることを知った

――私は何のために生きてきて、この後、何のために生きていくのだろう？

私はそんなことを自分に問いかけ続けている

【流離人】

＜ＳＩＤＥ　ティア＞

――千年間、それはあまりに長い年月だった…そう思う

「私たちが最も憎むべき相手が、ここに二人もいるわ。」

――三大天使、彼らは私たちから全部を奪った存在

「何をいっとるんや？あんたらなりそこねた神と言っとりましたが、天使に神の寵愛を奪われたくらいで憎まれるなんて、わいらとしてはとんだ逆恨みでっせ？」

私の瞳に宿る殺気に恐れをなしたのか軽い言葉を発してはいるが、

私に刃を向ける二人の天使は表情を強張らせている。
「なるほど…一般的な天使にはそんな説明をしているの。そうよね？なりそこねた神（リーヴァネル）にした真実を公にしたら、貴方達が隠し通してきた天使の秘密が明るみに出てしまうもの。」
三大天使の一人・深海の天使サンタマリアは人の心の中を覗くことができるという。
きっと、私が言いたいことが何なのか言葉にしなくても理解しているのだろう。
だから、例えかたく閉ざされたままの瞼の表情でも、サンタマリアの表情が歪んでいることがはっきり分かって愉快だと思った。
そして、ふらりと態勢を崩した彼女をサンタマリアの従者らしき人間の女が受け止める。
「貴方達は私たちから種族の誇りを奪った。『流離人』という名を神からもらっていた私たちを貴方達は『なりそこねた存在』にまで貶めた。」
エンシッダ様に『流離人』であるヒロの様子を見ているようにと言われたあの日、その名前を聞いた瞬間、あまりの懐かしさに涙が出そうになった。
今はもはや人間の中の一つでしかない『流離人』という名前のルーツは、正確には分からないけれど恐らくは私たちの本当の名前なのだ。
人間という種族は神が予期していなかった種族であったが、流離人は神が意図して造り出した存在。
だけれど、大地はすでに他の種族で埋まり、私たちという存在を定住するものとして定義することは新たなる戦いの火種になりかねない。
だから、神は私たちを『流離う』ものとして定義した。
私たちは４つの大地を自由に行き来することを許され、他の種族を監視し、神の手足として生きることを運命づけられて私たちは存在していた。

神の下僕だと悲観することはない。
天使なんかとは違う。人間として生を受け、その後に自分の存在理由を捻じ曲げられたわけではなく、生まれたときより存在理由を定義されていた私たちは、そうやって生きていくことに不満も不安も持つこともなかった。

――――天使が私たちの居場所を奪い、私たちから名前を取り上げていくまでは…

「ねえ、この世の中で一番初めに天使になったのが誰だか知っている？」
動揺する天使たち。
私の言っている言葉が理解できている者と、そうでない者の顔色が全く違うのが、とても滑稽。
「その口を閉じろぉ！！！」
きっと、私がこれ以上の言葉を続けるとまずいと感じたのだろう。
罪人（アークヴェル）の巡礼地で出会った無愛想な表情を浮かべていた『長髪』が、超巨大な魔力の塊を私に向ってぶつけてきた。
私はそれを横目で見やりながら、自分の中の最も嫌いな自分を解放するための言葉を口にする。
「何かであることを奪われた醜き我らはなりそこねた神（リーヴァネル）なり」
これは流離人であるというだけでは持ちえない力を解放するために、私たちが決めた言霊。
決して自分たちの中の悲しみと憎しみを忘れないための、戒めの言葉。
それを発した瞬間に、体の中で血がたぎるのを感じる。
爆発した魔力は『長髪』はぶつけてきた魔力を一瞬にして消滅させる。
「なっ！！！」
「話の邪魔をしないで。大人しく天使の真実を聞いていなさい。」

私は今、千年以上ため込んできた大事な話をしているんだから。
死んでいった大切な仲間達が語れなかった私たち流離人が訴えたかった、たった一つの言葉。
「この世で初めての天使は万象の天使を除いた神と契約（ファギュラド）せし天使、三大天使と呼ばれているサンタマリア・シェルシドラ・ラインディルトの三名。白き神と契約した万象の天使は別として、彼らと他の天使と明らかな力の差があるのは何故だと思う？」
恐らく三大天使にも引けを取らないほどの魔力を纏う私の声に圧倒されたのか、攻撃することすら忘れて天使たちは固唾を飲んで耳を傾けている。
「彼らと貴方達とでは天使になった方法が違うから。」
「天使になった？わいらは生まれた時から天使でっせ？」
「それが第一の間違い。天使なんて種族はこの世界には本来は存在していない。天使の本当の姿は『人間』よ。」
そう言われても真実を知らない天使たちは、言葉の意味が分からないというようにぽかんとした顔を見せるだけ。
それが滑稽の余り忌々しい。
しかし、これ以上は私に好き勝手に話をさせる気もないらしく、三大天使の一人・最強と呼ばれる蒼穹の天使シェルシドラが私に向って剣を振り上げていた。

――――ガンッ

物理的な力だけではない魔力の同士のぶつかり合いは、空気を揺らしびりびりと肌を刺激して、私の真紅と彼の蒼穹が眩しいくらいに煌めいた。
「不意打ちなんて卑怯なんじゃない？」
「貴様に俺たちが守り続けた天使という種族を壊させるわけにはいかない。そのためなら、俺はどんな卑怯者にだってなってやるさ！」
「その心意気だけは褒めてあげる。」

剣を挟んだ先にある焦りを見せる蒼穹の天使の顔を睨みつけた。
「だけど、譲れないものがあるのはこっちだって同じなのよ！」
そして、叫びながら私は自分の中にある魔力を爆発させて、蒼穹の天使をふっとばし、そのまま倒れこんだ天使の首筋に剣を突きつけた。
「三大天使が何故、他の天使とは違うのか私は知っている。」
見上げてくる蒼穹の天使の表情には私に対する怯えも恐怖もない。
だけれど、彼のその名に相応しい深い蒼い瞳の奥に複雑な色があるのを私は見逃さない。
「天使は神の子（マイマール）と同じく聖櫃によって神との契約を行っている。神（ラーオディル・オヴァラ）に忌み嫌われた子供が異端の一族と契約をした方法を模倣してね。」
異端の一族。後に私たちと同じ流離人を名乗ることとなる人間の名前。
彼らにしても、神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）にしても、その存在は謎に満ちているけれど、私だって千年生きているんだ。
ある程度のことは知っている。
「まあ、それすらも一般の天使は知らないようだけれど？でも、三大天使は違う。そうよね？貴方達は繰り返され続けてきた天使創造計画のなかで最も危険な方法で生まれた、たった一つの成功例として生れ出た存在なのだから。」
舞い落ちてくる羽根に交る砂塵。
「聖櫃を介さない、神との契約。それが三大天使の他の天使たちとは違う理由。」
だけれど、それだけじゃない。
聖櫃とは神とたくさんの天使が契約をするために必要だったアイテムにすぎず、神と人間の契約自体は、神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）という世界の理を覆す存在があってこそ成立した。
本来ならば聖櫃や命を繋ぐという対価だけでは成立しない神と天使の契約。
神が永遠の下僕を手にいれ、人間に魔力を与えるためには、本当

はもっともっと大きな犠牲が必要なはずだった。
だけれど、神に忌み嫌われた子供の存在が知られる前から、神々は天使のような存在を欲し、その研究を進めていた。
それが『天使創造計画』。
そして、闇雲に進められてゆく研究は人間という直接的な材料をもとに、失敗が続く研究の中で多くの死体が積み上がっていった。
そう例えばあのエンディミアンの科学者が造った魔人のように、不完全でいつ壊れてしまうか分からない存在くらいしか創造できなかった。
だけれど、その過程でたった一つの成功例で生まれた。それが…三大天使。
「だけど…その方法は神にとってあまりにリスクが大きかった。」
だから、決してその方法で天使が増えることはなかった。
神に忌み嫌われた子供が現れるまで、天使はたった3人のままだったのだ。

「貴方達は神喰い」

その言葉を発した瞬間にそれまで大人しくしていたシェルシドラの瞳が見開き、目にもとまらぬ速さで私の剣を薙ぎ払い起き上がった。
そのまま力の限り天使は剣を私に向って振り下ろした。
私もそれを剣で受け止めたが、その力の強さに膝をついた。
シェルシドラの力の強さの方が上で私は剣を受け止めるだけで精一杯となったが、その隙を逃さず天使は私の腹を蹴り飛ばした。
息がつまり、一瞬意識が遠のく。
『ティア！！！』
イフリータとキシンが私の名を叫ぶ。
そして、次の瞬間には左肩の胸を近い辺りに熱い激しい痛みが貫く。

「ぐっ！」
「貴様に何が分かる。」
シェルシドラの剣が地面に転がった私を串刺しにしていた。
貫かれた部分が熱く、痛みが滴り落ちる血と共に流れ出してゆく。
この世界には様々な種族がいて、真実の姿を偽った存在までいるというのに、その全てが血だけは皆、赤い。
掌にべっとり付いたその赤い血を見つめながら、非常に危機的状況にあるにも関わらず、私はそのことが無性に嬉しくて少しだけ笑った。

第１２５話　流離人　２（前書き）

注意：この話には流血表現、及び残酷な表現があります。苦手な方はご注意ください。

第125話　流離人　2

『ティア！！』

切羽詰まった二人の声を遠くで聞きながら、私は自分で刺したくせに酷く驚いた顔をしている蒼穹の天使の顔をただ眺めていた。
きっと、ある意味で発作的というか衝動的に私を刺したのだろう。
それとも『アイツ』が彼にそれをさせたのか…まあ、自分の行動に酷く傷ついた表情を浮かべる蒼穹の天使がいい気味だったから、この際それはどっちでもいいか。

――――神喰い（グリプス）

そんな蒼穹の天使の表情からも、この言葉が彼にとって如何に大きな意味を持つことということが分かる。
だけれど、それはなりそこねた神（ワタシタチ）だって『同じ』。だから、思う。
「貴方達は…勝手だわ。」
そう呟いて、私は自身を貫く刃を握りしめた。
すると自分の感情に捕われ私のことなんか見ていなかった蒼穹の天使が、はっとしたように私を見た。
彼は自らが戦闘中に我を失うという、死に直結する失敗を犯したことに気が付き、剣を持つ手に力を入れたが、私が既に強く握りしめた剣はびくとも動かない。
刃が食い込む掌は痛みはしたが、私は蒼穹の天使が次に動き出す前に、剣を刺されたまま天使に足をひっかけて転ばせた。
そして、自分から剣を引き抜いて、それを今度は蒼穹の天使につきつけた。
「形勢逆転ね。」
とはいうものの、彼から受けた傷は浅いとは言い難い。

無理やり引き抜いた傷口からは大量の血が自分から抜けていくのがわかったけれど、今は苦痛すら凌駕する何かが私の中にある。

そして、体を貫かれたお礼だとばかりに、私の血がべっとりと付いた剣で天使の掌を地面に串刺しにした。

「があっ」

苦痛に歪む蒼穹の天使の顔と叫びに、これまで何が起こっているか分かっていないままに呆けていた天使たちが殺気立つ。

「動かないで。今の私に蒼穹の天使を殺すことなんて造作もないことなのよ？」

だけれど、私はそれを自分の剣で天使の首筋に近づけることで制止する。

更に剣で天使を地面に縫い付けるだけでなく、片足を彼の腹に体重をかけてのせ、一寸の隙すらなく剣を首筋ギリギリの所に突き付けた。

その距離は荒い息の天使が呼吸をしたり、ごくりと唾を飲み込むだけで、肌が僅かに剣に触れるほど。

「さあ、これでやっとまともに話ができるわね？」

尊ぶべき三大天使を人質に取られては、例え数や力で勝っていたとしても天使も簡単に手出しできないだろう。

この戦場にいる全ての者が時を止め、私と蒼穹の天使のやりとりを固唾を飲んで見つめていた。

色々と予想とは違う状況ではあるけれど、これはこれである意味良かったのかもしれない。

――――さあ、始めようか私の可愛いティア？

腹の底から囁きかけるどす黒い声が、私の中に酷い残虐性と嫌悪感を呼び起こす。

「結局、罪は罰として返ってくるのよ。貴方達は神から受けた苦痛を、なりそこねた神（リーヴァネル）に与えた。それがどれだけの苦痛であり、悲し

みであるかも知りながら、自分たちの都合だけで私たちを使って、自分たちの秘密を守るために私たちを抹殺しようとした。」

視界に入らない所で女が泣き叫ぶ声が聞こえた。

「取り乱すな！サンタマリア！！」

どうやら、それは深海の天使サンタマリアのものらしいけど、それを蒼穹の天使が大声で止める。

張り上げられた声で大きく動いた喉元に剣の先端が食い込んで血が流れたけど、蒼穹の天使は気丈なまま私を睨みつけた。

「それで？お前たちは俺たちを殺せば満足なのか？」

――――死ね死ね死ねっ！天使など全て死んでしまえ！！

「そうね…ある意味、貴方達が死んでくれれば私たちは救われる。」

天使たちに対するこの凶悪なる憎しみがなくなるのであれば、それをしても失くした大切なものたちが返ってくる訳じゃないとしても、きっと楽になれる。

そう思ってにっこり笑うと、苦笑を返された。

「…だろうな。『アイツら』にはそれだけ恨まれている自覚はある。だが、それと同じくらいの憎しみもある。だからこそ、俺たちは千年前、全てを賭けて戦った。そして、勝った。」

「だけど、それになりそこねた神は関係ないでしょ！？なのに、どうして私たちを巻き込んだの！？」

私は天使の腹にのせた足に思いっきり力を込めた。

「天使がしたことを私は絶対に忘れない！千年前、神から解放されただけじゃ飽き足らず、天使は更なる力を得ることに貪欲だった。神から解放されたといったって、神と一つの命を共有しているのじゃ解放された気にならないものね？だから、貴方達は過去の神同様に聖櫃を使わない天使になる方法を求めた。」

そうしなければ、本当の意味で神からの解放とは言えないからだろう。

その考えが分からない訳じゃない。
だけど、その方法を求めるために天使は力のない人間ではなく、魔力を持ち且つ、天使の台頭により種族の数を増やすこともなく、守るべき大地も役割もない流離人を選んだ。
少しでも実験の効率を上げるためだったかもしれないが、それによって私たちは天使に迫害され続ける運命を辿ることとなった。
実験台がなくなるたびに、天使によって繰り返される『狩り』に追い詰められ、捕えられたら最期、実験による苦痛とその先にある死に怯える毎日。
神が天使のいいなりとなり、流離人が世界から抹殺された日から、私たちに安息は一度としてなかった。
「同時に天使は人間のときにはあった生殖能力を失い、子孫を増やせなくなった。だから、神がなくても天使の数を増やす方法を見つけなければ、永遠の命を持つとはいえ天使を増やすことはできない。繁殖ができない種族は破滅の一途を辿るもの…だからこそ貴方達は死に物狂いで聖櫃以外の天使になれる方法を求め続けた。」
天使は生殖能力を持たない。
だから、天使の中の家族とは本当は血も繋がっていない赤の他人にすぎず（人間の時からの家族は別として）、人間の記憶を失った時に植えつけられた新しい記憶によってそうだと思っているだけ。
ああ、でも、三大天使のサンタマリアの血筋だけは子孫を残すことができているはずだ…でも、その血は天使というよりは『ワタシタチ』に近い。
「それこそ、今もあんな魔人（ベルトゥール）なんて外道を許してまで。そして、なりそこね（リーヴァネル）た神はその過去の実験の一つで、貴方達が最も消したい過去。」
だからこそ、なりそこねた神は実験の後に私たち3人以外は天使たちに抹殺され、ヴォルがいなければ私たちも恐らく殺されていたに違いない。
「でも、分かったでしょ?千年も実験を繰り返しても何の成果もな

い以上、聖櫃を使う以外には神喰い（グリプス）となるしか神と同じ力を得ることはできないことが。神喰い（グリプス）…すなわち神を喰らう以外には――」

「…やめろ」

苦しみに満ちた表情で、絞り出すような声で蒼穹の天使は私を止めるが、私が口を閉じることはない。

「今更？貴方は自分の気持ちは私には分からないといったけど、なりそこねた神（ワタシタチ）には分かる。天使たちの実験によって無理やり神を喰らい、神の力を得たのは私も貴方も同じ。そして、力を得た代償に三大天使（アナタタチ）となりそこねた神（ワタシタチ）は永遠に神から逃げられなくなった。」

――アハハハハハッ

そう考えたとたんに、腹底から気色の悪い笑い声が木霊した。

「それは聖櫃で神と命を繋いでいるよりも、深く強い業。」

そして、私は剣を突き立てたままに蒼穹の天使の胸に指を突きつけた。

「喰らわれた神は未だに私たちの中に存在する。」

神の力を他の種族に与えるために存在するたった一つの方法は、神と他の種族の融合そのもの。

一対多数ではなく、一対一の契約。

神の胸に剣を立て、神の血をすすり、神と一つとなる。

――その力も、命も、そして、その感情さえも…

結果として三大天使もなりそこねた神（リーヴァネル）も、神と一つになり、その身に神を飼う事となった。

それは単に神が命と引き換えに…というような黒の武器（カシュケルノ）とは違う、その存在も意識も確かに身の内に感じるほど大きいままに彼らは私たちの中に存在し続けているのだ。

――――さあ、天使どもに復讐をするんだ！ティア！！！

そう。忌々しき神は私の中にいる。そして…

「紅の神イソルマンナか…久しいな」

蒼穹の天使の瞳が青く光り、その声がガラリと変わった。

「貴様か蒼の神レギュー。」

私…いや、男の声を持つ私の中のイソルマンナが蒼穹の天使の中にいる神の名を呼んだ。

きっと、私の瞳は紅い光を放っているに違いない。

第126話　流離人　3

――キモチワルイ

自分の中に誰かがいるというのは、本当に本当に気分が悪い。
頭に胸に腹に、あらゆる場所に自分でないものを感じる。
どんなに振り払いたいほどの不快感であっても、自分の中で自分の一部となったそれを永遠に私は切り離すことはできず、その感覚に慣れるということもない。
なりそこねた神（リーヴァネル）となり神を喰らったあの日から、目の前にいる天使には憎悪を、そして身の中の『神』にはただただ苦痛を私は感じ続けていた。

「我らの目的を忘れたか、イソルマンナ。」
青い瞳が私の中の神を射抜く。
それは蒼穹の天使のどこまでも澄んだ空の青ではなく、どことなく濁った青。
しゃべり方も人相も変化した彼は、もはや蒼穹の天使の気配すら感じられない。
どうやら、天使たちも未だに自分の身の内に住む『神』を封印する術を発見できていないことを知る。
神食い（グリプス）によって力を得た人間にとって、神に主人格を取られない方法は必要な術なのだけれど、完全なるそれは見つけることが出来ていない。
むしろ、千年前、神と一つとなった直後は神によって体を支配されていたぐらいだった。
そして、今はなりそこね（リーヴァネル）た神も三大天使も主導権を神から取り戻せているけれど、こうして油断をしたり自分を見失うと、神が体から出てきてしまう。

「それはお前たちの方だろう。どうして天使に大地を支配させ続けている？奴らは神を裏切ったんだぞ？」
「しかし、それが我らが母の意志。それを知らない汝ではあるまい？我は天使に、いや、人間などに支配されているのではない。我の主はただ白き神のみ。」

――その白き神が『・・・』だとしてもか？
――もういい加減にしてっ！！！！

思考が私と神の二つが混在することで混乱する。
体は一つ、心は二つ。
私を介してされた記憶、神を介してされた記憶、それらは基本的にそれぞれに共通として蓄積されていくけれど、二つの心の感情が共有されることはない。
いいえ、二つは限りなく近い場所で一つになっている。
だけれど、混ざり合うはずのないもの同士が混ざり合い、気色の悪いものになっていく。
どんなに私という存在が優位になっても消えることのない神という汚点は、私の中から出ていかない害虫の何物でもなかった。
自分が主体となっているときは、神を奥底に封じて彼の精神を限りなく無視し続けているから、何とか耐えられているけれど、こうして神に体を乗っ取られたとき神は限りなくオープンな状況でいる。
それは私が主体であるときとは違って、近くに神の気配を感じて彼を無視できず、不快感と苦痛が私の心を支配する。
ふとした瞬間にだけ体の感覚が戻ってきては、神の精神が私に触れて、それが嫌で私が奥に隠れる。
気色の悪いことに、私はいつだって神に消滅してほしいのに、神のほうは私との共存を願っていた。いや、むしろ…

――ティア、もっと近くにおいで、一緒にいよう？一つになろう？

そんなただ吐き気だけしか及ぼさない囁きは、神が表に出たときだけじゃない、彼を無視し続けている間も常に続いていた。

神は体だけじゃない、精神の統合すら願っている。

私はそれが恐ろしくて恐ろしくて、今は神から体を取り戻したかったけれど迂闊に神には近づけずにいたし、常に神に身を取りこまれなりように気を張り続けていた。

神に絡みとられた瞬間、きっとこの気色の悪い神に私は無理やり取り込まれる。

その様がありありと想像できて、悪夢にも何度も見続けて、私は気がおかしくなりそうだった。

「それをイソルマンナ…貴様は白き神に刃を向けるようなことをして、それでいいと思っているのか?我らのすべきことは白き神の為のみにあるべきだ。」

私のそんな思いはどうやら蒼穹の天使の方も同じらしく、うっとりと語られる言葉と連動していない不快感もあらわにした顔が、天使の感情を露わにしていることが分かった。

彼も私も神から体を取り戻す瞬間を探りながら、不快感や苦痛に耐えている。

どちらが先に神から体を取り戻すか、ある意味、この驚きの展開を打開する手はその一言に尽きると思う。

そのためにも今は冷静にならなくては…、いつもの自分さえ取り戻せれば神から自分を取り戻せる。

そもそも、蒼穹の天使の動揺により現れた神の気配に、私は巻き込まれただけだと言ってもいいのだから、今のところ神から自分を取り戻すのは後はタイミングだけ…私はひっそりとそれを狩人のように息をひそめて待った。

神の意識が私を求めるより、目の前の天使の皮を被った悪魔に向くその瞬間を。

「白き神は確かに俺たちの母だ。絶対的の存在…そのことは今も変

わりない。だが、俺たちはそれだけでいいのか？」
「何？どういう意味だ？」
「だって、そうだろう？俺たちには自分の感情があるんだ！」

――ねえ、そうだろう、ティア？
――キモチワルイ・キモチワルイ！！！

ざらりと私の心に直接、触ってくる神に今は自分の意志では動かない体に鳥肌が立つのがわかった。
「自分のために、自分の考えで本当は動くべきなんじゃないのか？白き神の命令とはいえ、俺は自分の納得のいかないことはしたくないんだ。」
「馬鹿な！貴様は人間に取り込まれたことで、頭がおかしくなったのではないのか！？白き神に逆らうなど愚かにも程がある！」
白熱しだした会話に、僅かに私を求め続ける神の意識が外れた気配がした。
「それはお前だろ！いくら白き神の命令とはいえ、お前が天使の皮を被って殺し続けてきたのは俺たちの兄弟だ！お前、一体何人の同胞をその手に掛けた？天使の言うままに力を貸して、神はもはや聖櫃に入っていなくて生きているのは両手で数えられるほどになってしまったというのに！！」
「だが、それが命令だ！」
「命令だから？！俺たちは白き神の僕か？俺たちはあの方の子供じゃないのか？」
「子供だったら、親の言うことを聞くべきだろう！」
「母親が子供を殺せと言うのか！？」
遂に言い合う中で激昂していく神たちの感情が大きくぶれる。
同時に私の中で膨れ上がる神の意識が、耐えがたいほどの苦痛を私の精神に与える。

『やめて（ろ）！！！！』

そして、女と男、二つの声が緊迫した空気にこだました。

それは私と天使の間に同時に発せられた声。

「いい加減に黙ってくれない？」

「神の戯言なんて聞いている暇は今はない。」

興奮のあまり混乱していった神から、取り戻された私と天使の意志。

何も知らない人々から見たら私たちは、さぞおかしな行動ばかりとっていることだろう。

今もお互い顔を突き合わせながら私たちは微妙に合わない会話を続けている。

そして、自分を取り戻すことで精一杯だったお互いが、やっと現実に戻る。

「どうやら害虫に苦しみ続けているのはお互いらしいわね。」

「害虫…？」

一瞬だけきょとんとした緊張感のない顔になってから、蒼穹の天使は驚くくらい輝く顔で破顔する。

「何よ、なんで笑うの？」

「ククッ…いや、あまりに的をえた言葉に感嘆しているのさ。」

――――ドウシテ？ドウシテ？

頭の中で腹の中で胸の中で、声が聞こえ続けている。

神は私と一つとなることを望んでいる。だけれど、私はそれを永遠に臨むことはない。

体だけでさえ、一つになってこれほどの不快感と苦痛を伴っているというのに、一番大事な場所を神などにくれてやらなくちゃいけないの？

聞こえてくる神の声にせりあがってくる吐き気が襲ってくるけど、

今は戦場で目の前にしているのは笑っていようが敵でしかない存在。
「ずいぶん余裕ね？貴方、自分の置かれている立場が分かっているの？」
神が去っても状況は何一つ変わっていない。
私は相変わらず剣と足で天使を地面に押さえつけている状況で、天使にとっては絶望的状況には変わりないはずなのに、彼には焦りも絶望も感じられない。
だけれど、その理由を私はすぐに知ることとなる。

「それは貴様のほうだと思うがな。」

ひやりと冷たく暗い声が耳元でしたと思った瞬間に、腕を取られ私は地面に押し倒された。
「！？」
それまで全く気配を感じなかった上に、蒼穹の天使に気を取られていた私は驚いたままに地面に倒れむ。
驚いたままに半身を起し、私を倒した人物に襲いかかろうとするが、ぎらりと鈍い光を放つ剣が再び私の首元に突き付けられる。
「またまた形勢逆転だな。」
貫かれた掌を庇いながら蒼穹の天使が嫌味なほどの笑みを浮かべ、その横に…
「大地の天使ラインディルト…」
呆然と私が呟いた名をもつ、もう一人の三大天使がそこにいた。
その体の3分の1ほどを大地の中に沈めているところをみると、大地の名をもつ彼の能力を使って大地に身を沈めながら私に近づいたよう。（道理で気配を感じなかった訳だわ）
だけれど、彼がここにいる大きな問題が一つある。
「あんた…天使を裏切ったんじゃなかったの？」
そうだ。彼は天使を裏切り、エンシッダ様との協力関係を結んだ。
少なくとも私はエンシッダ様にそう聞いていた。

なのに、その彼がどうして蒼穹の天使を助け、私に刃を突き付けているの？

「まさか、この俺がエヴァンシェッド様を裏切る訳がないだろう。俺はあの方のために、エンシッダを利用していたにすぎない。」

「どういう意味？」

天使の領域（フィリアラディアス）でもエンシッダ様に協力し天使を混乱させたり、天使の情報などを流していた。

だけど、彼にとってそれ以上の天使にとっての有益なことが銀月（ウィンザー）の都（ド・シエラ）にあったということ？

私は表情こそ変えないが、不気味なほどの静けさを纏った大地の天使に残してきた仲間たちのことが無性に心配になった。

「種は既にまいてきた。後は結果を待つのみ。」

「何をした！？」

思わず声を荒らげる。

天使たちもいきなり現れた行方不明だった三大天使の登場に驚いているようだけど、私と同じようにイフリータもキシンも不安そうな顔をしている。

「だが、それは貴様らが知ることはない。貴様らはここで死ぬのだからな。」

ズズズ…と大地から足まで完全に出てきて、私に向かって剣を振り上げ、一気に振り下ろす大地の天使。

先ほどの蒼穹の天使とは違い、彼には一分の隙もなく私に魔力を発せさせる隙間も与えない。

――――こんな所で死ぬなんてっ

私の中に満たされる後悔。

――――だから、ねえ、俺と一つになろう？そうすれば神の力を完全に自分の物にできる。天使なんかすぐに倒せる

こんな時ですら、いや、こんな時だからこそ、私の弱みに付け込んで囁き続ける神。

だけれど、それだけはできないとすぐに思った。

神を喰らった私の体は化け物でしかない。だけど、せめて心だけは自分のままでいたかったから。

だから…私は意を決して目をかたく瞑った。

――――キエエエエェ

だけれど、そんな覚悟をした私の耳に聞こえてきたのは、さっきも聞いたはずの二人の私を呼ぶ絶望的な声ではなく、鼓膜が破れそうなほどに高い獣の声。

そして、目の前にいたはずの天使の気配が吹っ飛び、次いで私の前に大きく力強い気配が一つ。

「…？」

何が起こったのか一瞬分からなくて、恐る恐る瞼を開けた先に飛び込んできたのは『アオ』。

蒼穹の天使の空の『アオ』でも、群青の神の濁った『アオ』でもなく、それはまるで冷たく厚い氷のような白みがかった『アオ』。

だけど、その『アオ』に触れた瞬間に感じる大きな魔力と、温かな体温。

それは大きな大きな獣。

美しい８枚の翼をもつ、体長は２０メートルはあろうかという大きな鳥。

その姿は決して美しいものじゃないけれど、その姿はまるで魔物のように禍々しくすらあるのに、荘厳で畏怖を感じさせる佇まいをしている。

『ティア、大丈夫か？』

私はこの獣を知っている。

それは千年前、私たちを流離人ではなくした存在。

「ブルー・ナイツ」

『あの男』の本当の名前を私は千年ぶりに呟いた。

第127話　君こそが僕の罪の証　1

『あんたを絶対に許さない』

君の瞳が僕を責める、君の言葉が僕を苛む(さいな)
君は僕を永遠に許さず、僕を恨み続けることだろう
君は僕にとって苦しいだけの存在でしかなく、ただただ逃げたいと思うのに
罪の重さに気が狂いそうになる僕を、現実につなぎとめているのがその苦しさなんて…
だから、僕は君から目を逸らさない

――――だって、『君こそが僕の罪の証』だから

【君こそが僕の罪の証】

――――ブルー・ナイツ

『ティア。その名前は呼ばない約束だろ?』
巨大で人というよりは魔物に近いこの姿こそが、俺の真実の姿。
だけれど、この真実の姿で人前に出ることは、ほとんど無かった。
だって俺はこの姿であることも、『神』であることも何百年も前に捨ててしまっているのだから、それは当然と言えば当然のこと。
だからこそ、俺が何百年かぶりに神であった姿を晒したばかりに、思わずティアも俺が捨てた名前を呼んでしまったのだろうけれど、そう言えばはっと我に返り、俺の本当の名前を呼ぶ。

「…アオイ」

彼女の赤い赤い深い色の瞳が、苦々しく歪んだ。

＜ＳＩＤＥ　アオイ＞

実は俺ことアオイは、かつて神と呼ばれた生き物だった。

『だった』というのは先ほどから言っているように神であることを捨てたから。

だけど、言っておくと俺は決して神として犯した罪は捨てた覚えはなく、ただ神としての地位を捨てたという意味。

「どうして、あんたがここに？」

『君たちから女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）にいつまでたっても連絡がないと報告があったから心配になって…』

かといって未だ銀月の都近く（ウィンザード・シエラ）で天使と交戦中の神の子（マーマール）に偵察を頼む訳にもいかないから、俺が一人こうしてやってきた。

「エンシッダ様は知っているの？」

ピンチのところを助けてやったというのに、ティアが俺を見る目は冷たく厳しい。

だけれど、それは俺が彼女にしたことを思えば仕方がないことだと分かっている。

――何しろ俺こそがティアを『なりそこね』にした張本人なのだから

だからこそ、俺はティアに本当は笑いかけてほしいと思っていても、その言葉を一度だって声に出したことはない。

余計なことは言わず、ただ彼女の問いだけに答える。

『エンシッダはもう銀月の都（ウィンザード・シエラ）にはいないから、許可の取りようはなかった。これは俺の単独だよ。』

「いない？」

そう。この戦いについては銀月の都（ウィンザード・シエラ）で指揮を執るものと思っていたエンシッダは、気がつけばその姿はヴィ・ヴィスターチャとともに消えてしまっていた。

指揮系統については女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）の司令官ハレに一任されているから、今のところ何の問題も出ていないし、神の子たち（マイマール）や、銀月の都（ウィンザード・シエラ）に残っている非戦闘員たちには知らせていない。

いらない混乱を招くだけだと思うし、今はまだエンシッダというかヴィ・ヴィスターチャの授けた策のままに行動した方がいいと思ったからだ。

ただ、嫌な予感は俺の中で無視できないほどの大きさで横たわっている。

だから、それを少しでも振り払うためにも、俺は俺の考えでこうして動いた。

『今はいないエンシッダよりも先にこの状況を打破することが必要だろう？折角、悪魔の槍（ヴァーシェル）の封印は解けたんだ。後は神の子（マイマール）たちのために道を開くだけ…そうだろう？』

「ええ、ただ…ヒロが万象の天使に攫われたの。」

それを聞いて初めてあたりを見回す。

確かにイフリータやキシンはいたが、ヒロの姿は何処にもない。

『まじで？敵の親玉に攫われるなんて、何たるヒロインキャラなんだ、ヒロ！』

だいたい、先日の罪人の巡礼地（アークヴェル）での戦いでも、彼は一人戦場の中で忽然と姿を消していたはずだ。

それはエンシッダの思惑のうちだたっとはいえ、またも同じようなことが起こるなんて（まあ、ヒロが望んだことではなかろうが）思わず叫んでしまった俺に罪はない。

それにしても、俺たちにとってたった一つの天使に対する切り札

といっていいヒロが攫われるなんて、これはヴィ・ヴィスターチャの予言にはない展開だ。

「その意見には同感だけど、ヒロがいないことをどんなに嘆いても仕方がないわ。違う展開が起こったからって、戦いを初めからやり直せる訳はないんだから。」

俺が助けに入った瞬間は、何となく諦めているような…千年前、何もかもに絶望していた時のあの表情と重なる姿をしていたティアだが、今ははっきりと自分を取り戻しているようだ。

「だから、さっさと天使たちを片づけて。アオイ、あんたはそのために来たんでしょ？」

そして、俺に向ける憎しみの表情も変わらない。

それが『愛おしい』て思うなんて…俺ってまぞっけでもあるのかもしれないな。

そんなことを思いながら、俺は初めて天使たちと相対する。

『イフリータ・キシン、離れていろよ？』

俺が言うまでもなく、俺の出現に呆気にとられていた天使たちの群れからいつの間にか距離をとっている二人に一応の声を掛けておく。

そして、俺が天使たちを見据えたことで、やっと天使たちもこの状況に追いついてきたらしい。

「なんだ？」

「あの化物は？！」

「人間たちの生物兵器か！！」

天使の多くは自分たちが神に作られた存在だということを知らない。

まあ、俺たちが天使にしたときに人間の時の記憶を消したのだから、それは仕方ないのだが、同時に彼らのほとんどは神の真実の姿を知らない。

神の僕として成り立っている天使にでさえ、神はその真実の姿を晒すことはなかった。

だが、それはある意味では仕方のないことで、神の中で禁忌に近い形で真の姿を他に見せることはタブーとされていたのだ。

しかし、魔力の暴走や、それこそ死に瀕した時は人型を保てず、真の姿になるしかない時もある。

もしくは、真の姿になると魔力が飛躍的に上がるので、今のような決戦時などは過去にも何度かこの姿になったこともある。

要するに神の真の姿＝神の本気という図式があったりするんだ。

だから、せっかくこの姿になったんだし俺はティアの要望に応えるべく、本気の神の咆哮を一つ上げる。

喉から迸った魔力、震える空気…神に支配されるように作り上げられた天使たちは、本能的に俺が持つ神の魔力に恐怖し震える。

だが、そんな中で恐怖ではなく、驚愕で目を見開く天使が一人。

「ブルー…ナイツ、貴様…生きていたのか？」

シェルシドラがぽつりと呟いた。

『自分が殺したはずの俺が生きていて驚いたか？』

俺は七百年前ほどにシェルシドラに殺されかけた。いや、ほとんど殺されたといってもよかった。

千年前、天使たちの反逆と黒き神と人間の暴走により神の時代は終わりを告げ、結果ほとんどの神は天使によって殺されるか、もしくは聖櫃に入れられた。

だけど、俺のように天使によって利用価値がある神は、一般の天使には伏せられていたが幽閉という形で生かされ続けた。

現に『あの』白き神も天使にとって神という権威、自分たちの正当性を示すために生かされ続けている。

そして、千年前の俺も三百年程の間は利用価値があるものとして生かされ、それがなくなった時、このシェルシドラによって殺された。

『エンシッダに助けられたんだ。お前も甘いよね。いくら俺の死体

を『彼女』に見せないようにするためとはいえ、すぐに死体を誰の目にもとまらない場所に処分するなんて。しかも、シラユリも一緒に…』

俺を瀕死状態、いや、ほとんど仮死状態にして、シェルシドラは俺を不浄の大地（ディス・エンガッド）の真っただ中に捨てていった。

それは今、俺が言ったように『彼女』に俺の死体を見せないため、天使の領域（フィリアラディアス）に俺の死体でもあったならば、『彼女』が壊れてしまうから。

かといって、神は死体となっても腐ることはなく、燃やしても灰になることはないので、苦肉の策として『彼女』が感知できないほどに遠い不浄の大地（ディス・エンガッド）に俺を捨てたんだ。それも…俺のたった一人の娘シラユリと一緒に。

――わあんわあんっ！お父さん！！！

今も耳を離れない可愛い娘の悲しい泣き声。

俺は殺せても子供は殺せなかったのか、もしくは、純粋な神ではないシラユリは不老ではあっても、人間と変わらぬ力と体力しかないから、不浄の大地（ディス・エンガッド）に捨てただけで死んだも同じだろうと思ったのか、俺と一緒に捨てられたシラユリは傷一つ負わされていなかった。

だから、誰も助けにこない場所でシラユリは力の限り泣き続けた。

それを聞いた俺は死の淵から引き上げられる。

恐らく片端は棺桶に突っ込んでいただろうが、娘の泣き声に生へと呼び戻されたんだ。

そして、どれくらいそんな意識はあっても、指一つ動かせないままに、半分以上は死にかけていた俺のもとに、あの爽やかな厚い面の皮をもった魔王のような男が現れたんだ。

――助けてほしいかい？だったら神をブルー・ナイツという名を捨てるんだね

エンシッダはそう言って俺を見下ろした。

――――そして、俺の元でまた天使を造るんだ

この言葉とともに、『天使』、後に『神の子（マイマール）』と呼ばれる彼らを俺は造ることになる。

だが、それを理解した瞬間に当時の俺は拒否した。

俺は神として罪を重ね続けた。

それがわかっていたから、もう、これ以上の罪は犯したくなかった。

誰にも恨まれたくなかった。苦しい思いをしたくなかった。

いっそ、このまま死んでしまいたいくらいだったが、なおも聞こえ続けるシラユリの泣き声だけが俺を世界に引きとめる。

――――へえ…だけど、お前はもう償いきれない罪を散々犯してきたじゃないか

エンシッダの声が俺を詰（なじ）る。

――――なら、これ以上罪を重ねたところで、君の罪状は変わらないよ？永遠に恨まれ苦しみ続けながら生き続ける…心穏やかな時など一時もなく、罪を目の前にしながら生き続ける…そんなのいっそ死んでしまったほうが楽だろうね？

その酷く楽しそうな声に賛同して、このまま何もかも捨てて消えてしまいたかった。

だけれど、シラユリの泣き声以上に強い声が俺を現実に引き戻した。

――そんな楽な死に方、絶対に私は許さない！

それは数百年前に俺の前から消えた声だった。

その声に忘れたかった過去が、捨ててしまった感情が一気に噴き出していくのを感じた。

第１２８話　君こそが僕の罪の証　２

＜千年前回想　ＳＩＤＥアオイ＞

――それは俺がまだ神であった頃の話、俺は神の中でも知識に長けた存在として『天使創造計画』の一役を担っていた

圧迫感を感じさせる四方を壁に覆われた部屋に俺はいた。
その中で反響する機械音・蒸気音が鼓膜だけではない、細胞の全てを揺らす。
薄暗い室内は何の装飾品もなく、部屋の壁や天井、床も様々な機械に埋め尽くされ、その全ては部屋の中央の手術台に集約されていた。
手術台には部屋中の機械と繋がれるための様々なコードが取り付けられ、たった一つの眩しい白い光が台の上を照らしていた。
その光に照らされるのは一人の横たわる神と、手術台にくくりつけられ、もがき苦しむ一人の人間。
「離せっ！！！」
手首も足首も手術台にしっかりと繋がれているというのに、解けるはずのない拘束具を必死で取ろうとしている姿は、酷く滑稽だ。
だが、どんなに足掻いたところで人間の運命は何一つ変わりはしない。
俺たちの研究は、今まさに最終段階に至ろうとしていた。
「Ｎｏ０８７、もうここまできたのだ。大人しくしろ。貴様も取るに足りない人間という脆弱な存在から、神と一つとなり新たな素晴らしい存在になれるのだぞ？むしろ、もっと喜んだらどうだ？」
そうマスク越しにくぐもった声で呟いたのは、俺と同じく手術着に身を包んだ紅の神イソルマンナ。

「馬鹿野郎！！自分とは違う存在になったって、誰が喜ぶかぁっ。そんなこと、お前たちだけで勝手にやってろぉお！！！」

どんなに言葉を繕っても無知な人間に、俺たちの言葉が届くことはない。

だが、年齢・性別・体力など、様々なことを考慮して、このＮｏ０８７ほど今回の実験に適した人材はいない。

これ以上騒がれるのは問題なので、呆れたように溜息をついてイソルマンナはちらりと俺に目配せをする。

それに頷いて俺はＮｏ０８７を大人しくさせるために、麻酔薬の入った注射を彼の腕に刺した。

「大体、俺の名前はそんな数字じゃねえ！俺の名前は『――――』だっ――――う…」

彼がその時、叫んだ名前を俺は覚えてはいない。

確かにＮｏ０８７というのは、実験のために集められていた人間を区別するための番号に過ぎず、彼自身の名前ではなかった。

だが、当時の俺にはそんなことはあまりに些細なことだった。

ちなみにこの時の彼こそが、後に蒼穹の天使シェルシドラと呼ばれる、この世界で初めての神との融合に成功した例となる人間としての最後の姿。

そして、麻酔が効いて急激に大人しくなった彼を見下ろして、その横で静かに横たわっているもう一人の人物に目を向ける。

「レギュー、ではこれから手術を始める。いいな？」

「ああ、お前たちを信頼しているぞ。俺の体をどうか白き神の願いのために存分に使ってくれ。」

様々な実験を繰り返してきたが、神を使った実験は今回が初めてである。

だから、俺にイソルマンナ、他数人の神々は隠しきれない緊張感を抱えており、レギューの言葉にやっとその緊張感を払うことができ、いよいよ俺たちはメスを持つ。

そして、これからかつてないほどに長い長い手術が始まる。

なのに、強い麻酔薬で眠らされたＮｏ０８７とは違い、レギュー
には麻酔はかけなかった。レギュー自身の希望だ。
神は体を切り刻まれようとも心臓さえ動いていれば死にはしない
が、痛みがないわけじゃない。
俺たちとしては麻酔をかけることを勧めたが、レギューは神であ
る自分が死にゆく姿を見つめていたいと言った。
人間ほどではないにしても、彼だって神という種族を捨てる行為
であるには変わりない。
白き神の命とはいえ、彼にも神という種族に名残惜しい気持ちが
あったのだろう。
そして、それまでに様々な試行錯誤を続けてきた俺たちの研究は、
ついに天使という存在を生み出しすこととなった。

――――それが永遠に許されない罪の始まりだとも知らずに

そして、時は少しだけ進む。
それは神の時代が終わり、天使が東方の楽園（サフィラ・アイリス）を支配して間もない
頃。
「研究は順調かい？ブルー・ナイツ。」
俺はその時も窓のない部屋にいた。
以前は自身で好んでいたはずの場所と似たような環境だが、俺は
今、最悪の気分で幽閉されている。
室内は広く、様々な機械や研究資料はあるが、部屋を囲む壁には
魔力を封じ込める石が使われ、太い格子は神の力をもってしても打
ち破ることはかなわないから、俺は自分でこの牢屋から出ることも
できない。
その格子越しに微笑みながら、万象の天使エヴァンシェッドは一
人佇んでいる。
誰からも愛され、美しいと称賛されるその姿をかつて俺自身も愛

でてきたが、その美しい顔をしながら彼は俺を始め天使を造りだした全ての神を幽閉し、聖櫃に入れられたくなければと研究を強要した。

「君の研究には天使の未来がかかっているんだ。はりきってもらわないと困るなぁ。」

「…『神からの真の解放』か。だが、それを神である俺に頼っていては意味がないのではないのか？」

『神からの真の解放』、天使は神の下僕として誕生し、それから逃れるために白き神以外の神を黒き神と人間の反乱に乗じて、悉く消していった。

だが、三大天使と恐らくこの万象の天使を除く天使は、その全てが聖櫃という存在によって成り立っており、その中の神の命なくしては存在しえない。

故に天使族の上層部の間では、『神からの真の解放』というスローガンのもと、聖櫃に頼らない天使の創造を望んでいるのだ。

そして、そのために白羽の矢が立ったのが、聖櫃を用いない方法で三大天使を作り上げた神の研究員の一人であった俺であり、他数名の神々であった。

神々は研究で必要な場合は一つのところに集められることもあったが、基本的には別々の場所に幽閉されていた。

「何をいまさら…神が天使に懺悔を捧げるのは当然だろう？自分たちのエゴで天使を作り上げたんだ。その責任は最後まで取ってもらわなくては…な。それにこれは天使を作り上げたのと同じように白き神の勅命だ。」

「誰が『あの』白き神を認めるものかっ！」

神の中でたった一人自由なままの白き神。

俺たちの母は神を裏切った。

俺は思い出す。白き神が俺たちに天使を造りだせと命令を下した言葉を…

『命令を下します。知識を持つ神たちよ。貴方達には人間を正しく管理するための方法を見つけてほしいのです。人間を神の支配下に置くために…彼らを私たちの僕とするのです。それが神のため、ひいてはこの楽園のため…頼みましたよ？』

そう言った彼女が人間に何を感じていたかは定かではない。

だが、人間という白き神から生まれなかった種族が誕生したと分かった瞬間に、それを管理する方法を俺たちに探すように命じた。

そして、その最終形態が『天使』という存在だった。

人間の数は多く、その増殖能力は他の種族の比ではない。

魔力を持たず、寿命も短いのに、増え続ける人口と成長し続ける文明…確かにそれを警戒する考えは分からないでもなかったが、当時の人間は神に逆らうようなこともなく、逆に非常に崇めてすらいたというのに、白き神はそれだけではぬるいと判断した。

他の種族たちに対してはその種の起源から白き神は関与しており、万が一にも神に反旗を翻そうなものならば、白き神は一瞬にしてその種族を無に帰すことすらも可能だ。

人間を正しく管理するために、白き神は人間に対してもそれを行うことを可能にする方法を俺たちに探させたのだ。

結果、俺たちは『天使』という神と人間の命を一つに結ぶという方法を選択した。

契約が世界に制約をもたらしている以上、神が一方的に人間の命を握ることは不可能で、神にもそれ相応のリスクが伴う形。

しかし、様々な試行錯誤を繰り返し頭を悩ませ続けてきたが、俺たちは未だに人間を完全に支配したとは言い難い。

『三大天使』については、一人の神について、一人の人間の支配にしか至れなかった。

『天使』については、聖櫃という神の命について多数の人間を支配はできても、その結果、神が死にも等しい状態になっていてはどうしようもない。

まあ、もはや神の時代が終わりを告げた今、その全ては無駄となったといっていいだろうが…そんな投げやりな気持ちが心を支配する。

更に当時の俺は天使たちへの恨みが強くて、天使という存在を生み出した責任や罪悪感などは微塵も感じておらず、むしろ突然降りかかった自分の不幸に理不尽さを只管に感じていた。

――どうして？どうして？俺ばかりがこんな目にあう？俺は神なんだ…神がどうして人間如きの手で牢に繋がれなければならない？

「相変わらず、どうしようもなく愚かな神だな。頭でっかちなばかりで、世の中のことが何も見えていない…まあ、いいや。それよりも今回は研究のために新しい材料を用意してきたよ。」

そう言って俺をひどく見下げたような表情で見て、エヴァンシェッドは後ろを振り返る。

「はなせっ！！はなせ！はなせえええええ！！！！」

途端に扉から天使にひっ捕らえられて、数人の人影が暴れて連れてこられる。

その姿がかつて、俺たちが三大天使を造るために捕縛してきた人間たちとダブった。

「彼らは白き神が最後に生み出した種族・流離人だ。」

「流離人？」

その名にはもちろん聞きおぼえがある。

大地は持たないが、他の種族の動向や各大地に入り込んだ人間たちを監視するために創造した種族だ。

その姿は人間と変わらないが、魔力を有し、寿命も比較的長い。

だが、その直後に天使が急増し、その名を聞くまで俺もその存在を忘れていた。

「実験に天使を使うわけにはいかないからね。人間よりも魔力を有しているという点で天使に近い流離人を、天使に見立てて実験を繰

り返してもらおうと思ってね。」
言っている言葉はあまりに残酷なことのはずなのに、エヴァンシェッドは何か良いことを思いついたかのように囁いた。
「馬鹿にしないでっ！！」
そんなエヴァンシェッドに流離人の一人が叫んだ。
その声が高く若い女の声だったことに俺は気がついて、目を向けた。
叫んだ女は天使に押さえつけられながら、これまでも天使に酷い虐待を受けてきたのだろう。
顔は殴られた後で腫れていたし、髪は乱れ、服装も襤褸切れを纏っていた。
その姿はあまりに悲惨だったが、所詮は流離人。
俺のような神からしてみれば、彼らがどうなろうが些細な存在にすぎない…そんな風に彼らを視線に入れても俺は何の感情も浮かばなかった。
「最低よ！何が天使よ！神よ！！！」
だから、女が何を叫ぼうが喚こうが無駄な事をしているなと思うだけで、俺はただこうして神だというのに天使に研究を強要される自分の不幸を嘆いているだけだった。
だが、聖櫃にいれられて、神の尊厳を踏みにじられ、天使の命だけになり下がることだけは嫌だから、天使の要求を飲むしかなかった。
それが、どれだけ他の神の尊厳を傷つけ、あまりに自分本位な考えだということに気がつかずに。
その時にそれに気が付いていたのは、生きるために精一杯の努力をし続けていた彼女だった。
――――流離人ティア
この時、ずっと力の限り叫び続けていたのが彼女だったことを、

俺は後に知ることとなる。

第１２９話　君こそが僕の罪の証　３

＜ＳＩＤＥアオイ　現在＞

それは一瞬、目を閉じた瞬間に通り抜けていった過去の記憶と、言葉では言い表せない複雑で奇妙なたくさんの感情。

ちらりとティアを見下ろせば、初めて出会ったときと変わらぬ強く憎しみのこもった瞳で彼女は俺を睨みつける。

ただ、違うのは彼女の瞳の色。

あの時は漆黒に彩られていた瞳は、今は融合した紅の神イソルマンナの魔力の影響で血のように赤く染まっている。

その瞳の色を見るたびに、『あんたが私を変えたのだ』…と俺は自分の罪を突き付けられているような気分に陥る。

それは神として天狗になっていたときは、決して感じなかった罪悪感。

今となっては当たり前のそれを、千年前の俺は何も知らなかった。

――――彼女と出会ってから、俺は色々なことを教わった様な気がする

天使によって虐げられてきた流離人が最後に行き着いた人体実験という舞台。

その中でもティアは、いや、ティアだけじゃない流離人の全ては何度も逃亡を図り、失敗を繰り返し、その度に天使により酷い折檻を受けていた。

なのに、懲りずに彼らは諦めることも、絶望することもなく、生きるために、自由を得るために努力を続けた。

俺はそんな無駄なあがきを続ける彼らが滑稽にすら見えて馬鹿にしていた。

だけれど、本当の馬鹿が俺のほうだと教えてくれたのも彼らだっ

た。

そして、ティアはそれを昔助けてくれた悪魔に教わったと言った。

『生きている…それこそが希望だって、ヴォルは私たちに教えてくれた。』

そんな簡単な希望があっていいものかと、死という存在があまりに遠い神であった俺は初めにそれを聞いた時は嘲笑すら浮かべた。

だけれど、長い事情は割愛するが、シェルシドラによって死の淵を経験した俺は、その意味を身をもって実感した。

『生きている』、それは何物にも代えがたい素晴らしいことだ。

何をするにも生きていなければ、生き物は世界に何も残せない。

だって、『死』すら『生きていた』という前提がなければ成り立たない。

『生きていた者が死んだ』その事実が残された者に悲しみや苦しみを与える訳であって、生きていなければ死には、意味も存在もありはしないのだ。

だからこそ、生物は皆、生きることに必死なのだ。それが正しい姿なのだ。

それを理解できて俺は初めて自分が重い罪を重ねてきたことに気が付く。

生きているものを自分のエゴで実験に使い、まっすぐに生きてきた彼らの生を捻じ曲げた。

後悔しても遅いことは分かっていても、後悔せずにはいられなかった。

そして、俺は知っている。天使が俺と同じ過ちを行っていることを…。

人間の命を使って楽園を保ち、自分たちの本当の姿を見ないまま、偽りを本当にするために罪を重ねている。

彼らを変えてしまったのは俺たちの罪だけれど、これ以上の罪を

彼らに犯し続けてほしくはなかった。
エンシッダにシラユリを人質にされていることも、なりそこねた神（ルリーヴァネ）たちに対する罪滅ぼしも、俺が人間に協力している大きな要因ではあるが、俺は天使も救ってやりたかった。
…いや、救うなんて大きなことを俺が言うべきじゃないことは分かっている。
でも、それでも俺は天使に気が付いてほしかった。
俺が過去に気が付けなかったように、全ての種族が『生きている』ことに必死なことを、そして、それがどんなに大切なことかを…。
彼らも昔は知っていたはずの、悲しみと絶望と憎しみで忘れてしまったその感情を呼び戻してほしかった。

――――だから、俺は天使と戦う。俺の罪そのものと

「ブルー・ナイツ…やはり、彼女が悲しもうが貴様は骨の一つまで消滅させておくべきだった。」
『まあ、神を殺すなら、それくらいしないと駄目だよね。』
俺の出現に動揺していたはずのシェルシドラが、さすがというべきか、すぐさま自分を取り戻すと殺気をみなぎらせて剣を構えた。
三大天使のラインディルトもサンタマリアもそれに続く。
「他の天使は下がっておいでなさい。神を相手にできるのは私たちだけ…」
『お前たちは神をその身に宿している神喰い（グリプス）だからね。』
その言葉に光を宿さない盲目の瞳が怒りに揺れた。
「まさか、貴様が出てくるとは…な。娘と隠居生活をしていればいいものを…」
『そうできればいいのだけれど、これ以上君たちが罪を重ねるのを俺は見ているだけではいられなくなった。』
「何を!?神がそんな戯言を!!!」

殺気立つ天使群。

『そうだ。神が天使にこんなことをいう権利はない。だけど、天使が人間を虐げる権利だって本当は何もないはずだ。』

誰かに何かされたから、他の誰かにそれをしてもいい。

そんな権利、誰も持ってはいけないものだ。

どこかでこの悲しい連鎖を止めなくては、世界は永遠に苦しみに続けることになる。

だけれど、こうして戦いが始まってしまった以上、もはや言葉は届くまい。

俺は一端、話を切ると再びラインディルトに視線を向けた。

『ラインディルト…君こそ俺にあんなお人形を作らせて、遊びを続けるのかと思えば、こうも呆気なくエンシッダを裏切るなんてどういうつもりだい？』

ついさっきまで銀月の都（ウィンザード・シエラ）にいたはずの彼が、当たり前のようにティアに剣を突き付けていたのを見た瞬間は自分の目を疑った。

エンシッダにはラインディルトは『あの人形』を自分のものにするために、天使を裏切ったという話で、ヴィ・ヴィスターチャもそれを容認していたから、まさか彼が再び天使側に戻るなど想像もしていなかった。

――エンシッダはこうなることを分かっていたのか？

そこまで仮定して、ラインディルトの為に創った『あの人形』の存在が、急に不気味な存在感で俺の中で警鐘を鳴らし始めた。

ラインディルトの個人的趣味のために造るように命令された『あの人形』。

彼の屈折した愛情表現に眉はしかめたが、そのためではなく、万が一、ラインディルトが千年前の再現のために彼女を必要としていたら？

そう考えた途端にこの少々混乱している現状が、ものすごい勢い

ですっきりと辻褄があっていく。
そして、それが真であることを証明するかのように、ラインディルトが普段は全く動かさない表情をにやりと歪めた。
「アオイ？お人形ってまさか――」
『君も下がっていて。三大天使たちは俺が相手をするよ。君たちは他の天使たちに邪魔をさせないでいて。』
ティアの言葉を遮って、俺は畳みかけるように言った。
声がかなり焦っていたものになる。
気が付いた事実に気が狂いそうだった。
普段の人型とは違い、かなり見下ろさなければティアの表情を窺うことはできない。
俺を見上げるティアの表情はあきらかに不満げであったが、俺の態度に何かを感じ取ったのか了解といったように手をあげた。
なりそこねた神たちも三大天使には引けを取らないほどの魔力を有しているのは、それを創造した俺が分からないわけではなかったが、興奮や力の解放は彼女たちの中の神の存在を大きくする。
現場こそ見てはいないけど、色濃く残るいつもとは違う濃厚な魔力には彼女の中の神が久々に表に出たことを如実に表していた。
あの事実に気が付いた以上、今後の展開が全く見えてこず、今は無駄に彼らに体力を消耗させるべきではないと俺は判断したのだ。
「貴様、一人で俺たち三人を相手にするというのか？」
馬鹿なことを言うなと言うばかりに、シェルシドラが皮肉に笑う。
『そうだよ。確かに現実的に考えれば、神一人で神三人を相手にすることになるからね。無謀と言えば無謀なのかもしれない。だけど、君たちは俺のように神の魔力を真に解放することはできないだろう？』
そうだ。どんなに神をその身に宿そうと、彼らはあくまで天使で人間なのだ。
俺のような姿になれるはずもなく、かくして、それは神の力の真の解放にはつながらない。

千年前は、白き神によって、灰色の魔力によって、思うような力を発揮できないままに天使に滅ぼされた神だが、今回は俺を制約するものは何一つ存在していない。
だからこそ、彼らは本当の神の力をしらないのだ。
全ての生命の根源から生まれた、純度の高い本当の魔力。
その魔力そのものが命である俺たちの、本当の姿を…。

――――バサリバサリ

広げれば己の体の数倍は長い翼。
その翼が纏う羽の全てには血が通い、魔力が宿って、青白く光る。
『さあ、千年前につけられなかった決着をつけよう。』
それを最後に俺は言葉を無くす。
本来、神は獣に近い。
姿だけじゃない、大きすぎる力は本能を目覚めさせて、俺は高く高く咆哮を上げた。
ビリビリとその咆哮に共鳴して空気が痛いほどに震え、天使たちがその大きさに耳を塞ぎ茫然とこちらを見上げているのが窺えた。
だが、天使たちが我に帰るのを待っている余裕はない。
ふわりと僅かに体を浮かすと、俺は天使に向かって羽を思いっきり羽ばたかせて魔力を秘めた羽と突風を彼らにぶつけた。
三大天使はそれを魔力の盾で退けるも、多くの天使がその攻撃に叫びをあげながら倒れてゆく。
ただ、僅かに傷をつけられただけで苦しげに倒れてゆく天使たち。
魔力は様々な色によって属性が分けられている。
灰色の魔力のように他の魔力を取り込むものは異質で、本来は違う色同士の魔力は反発しあい、混じり合うことは決してない。
故に人間のように魔力を持たない生物以外にとって、自分が持つ色以外の魔力が体に入り込むということは、毒に近い有毒性を持つのだ。

有毒性は入り込んだ魔力と自分の持つ魔力の濃さによって差は出るが、神と天使では、勿論神のほうが魔力の濃さは強いわけで、天使たちは傷を付けた羽から体に入り込んだ俺の魔力によって、一時的だが毒に犯されたような症状に陥ったのだ。

「ブルー・ナイツ！！！」

シェルシドラが叫びながら剣を振り上げて襲いかかるのを、翼から発する衝撃波で吹っ飛ばす。

だが、次の瞬間に背中に強い衝撃を受けて、空中で態勢を崩した。

背後を見ればサンタマリアがいつの間にか俺の背後から魔力を放っていたらしい。

体が熱くひりひりとしたが、それに気をとられている暇はない。

サンタマリアは再びその手に魔力を込め始め、そして左右からはシェルシドラとラインディルトが同時に剣を振り上げていた。

彼らが狙うは俺の首元！天使たちは一気に勝負を決めるつもりらしい。

『アオイ！！！』

他の天使たちの相手をしていたティア達が俺の名前を呼ぶ。

――――ザシュッッ！

しかし、彼らが呼んでくれる名前の余韻に浸る暇もなく、続けざまに背中に走る大きな衝撃、そして首元・胸元に突き刺さる魔力を帯びた剣の感触。

「神のくせに他愛もない…」

耳元でラインディルトの声がした。

体の中に入り込んでくる、俺とは違う濃い魔力の気配。

『ギャアアアアア』

鋭い痛みが俺を襲い、体が大きく揺れて、俺はまるで断末魔の叫びのような声で啼いた。

第１３０話　君こそが僕の罪の証　４

――――魔力は本来、何色とも混じることのない純粋な色である

他の魔力を取り込むなど、灰色の魔力という規格外の存在だけで、魔力同士は本来、反発しあい混じり合うということはありえない。

故に魔力の源である血に違う色の魔力が入ったことにより、反発しあう魔力が血管の中で沸騰し体中を熱くする。

そして、その熱さのすさまじさは痛みへと変化する。

痛みは永遠にも似た強烈さで刻みつけられ、俺は痛みのあまりに体を大きく揺らした。

俺の体に足をかけて剣を突き立てていた天使は、その揺れに剣を突き立てたままに俺から離れる。

「俺とラインディルト、三大天使のうち二人の魔力を注ぎ込んだんだ。貴様が真の力を発揮しようが何をしようが終わりだ。」

先ほど俺が天使たちにしたように、違う色の魔力が体内に割り込むということは毒に等しい。

その魔力が強ければ強いほど、量が多ければ多いほど、その有毒性は増す。

剣を通して注ぎ込まれた魔力は、俺が羽でつけた傷よりも遥かに濃く多い量。

魔力を研究する上で様々な実験をしてきたが、神という個体に対して三大天使の魔力という、ある意味、世界最高峰の魔力のぶつかり合いは想定したことがなかった。

ましてや、それが自分の体の中で起こっているなんて…、研究者としてはこんな時には何だが、非常に興味深い実験のような気もしないでもないが、それは体中を駆け巡る痛みがない前提の話だな。

体にまわる強い毒は俺の体の中で拒否反応を起こし、予想していない事象を起こし始めた。

鼻がもげるような腐敗臭とともに、ジューっと何かが焼けるような音がどこからともなく聞こえてくる。

――そこにあるのは爛(ただ)れ腐りゆく、我が体！

まさかな展開に言葉が出なかった。

しかも、その腐敗はすさまじいスピードで浸食している。

ぼたりと落ちる肉片に、滴り落ちる血は変色し、羽は抜け、むき出しになった骨にひびが入る。

腐り崩れ落ちる体に、痛みも苦しみも最高潮に達した。

『ギアアアアッ』

俺の叫びは更に強く、激しいものになる。

「終わりだ、ブルー・ナイツ。この世から神なんか一匹たりともいなくなればいい。神さえいなくなれば、俺たちは天使として生き続けられる。」

なのに、どんな音だって叫びにかき消えるはずなのに、シェルシドラの言葉はどこまでも静かなままに俺の耳に届くんだ。

それは俺の中にある、彼らへの罪悪感ゆえなのか？

神は人間を天使に変えた。

なりそこねた神同様に、彼らの人間としての生を奪い、捻じ曲げた。

さりとて、俺たちは天使を人間に戻すことはできない。

だから、彼らは天使であり続ける…そのために必死だった。

人間を自分たちとは違うものだと切り捨て、そのために同胞すらも騙し、憎むべき相手である俺達すら利用した。

偽りを真実に変えるために、彼らはいくつの罪を重ね、痛みに耐えてきた？そして、同時に俺は思う。

――偽りのまま生き続けて、それは天使たちの幸せなのだろうか？

だが、不意に浮かんだその問いは、痛みのあまりに朦朧とする思考の中では、たちまち消えていく。
左翼が崩れ落ち、空中で態勢を維持できなくなって乾いた大地に堕ちる。
そのまま起き上がる力もなく、乾いた大地に倒れこんだ俺の視界は現実を映さなくなる。
『お父さんっ！』
目の前いっぱいに広がる、愛しい娘シラユリの笑顔。
俺はこのままあの子を置いて、醜く朽ち果てるのか？

――――嫌だ！！！

死ぬことを拒む本能が叫ぶ。
だが、もはや俺の命は風前の灯火。
骨や体だけではなく、内臓までも腐り始めた俺は声すら出せず、息をすることすら苦しい。
だが、それでも俺はまだ生きている。そうだ…生きているんだ。

『マダ、イキタイ？』

そんな俺に誰かが囁く声が聞こえた。
気が付けばシラユリの笑顔は消え、視界には現実でもなく、見たこともない淀んだ世界が広がっていた。
淀んだ世界、様々な色が混じり合い、その美しい色の全てが損なわれ、汚く朽ちた色の世界。
見たこともない気味の悪い空間の中に、小さな影が一つ。
『イキタイナラ、ボクガ、チカラヲ、アゲル』
たどたどしいというよりは、まるで壊れた玩具のような途切れ途切れの声。
シラユリよりも恐らく小さいだろう子供の姿が、すっぽりと黒い

布に覆われて俺に話しかけていた。
「君は誰だ?」
そう声に出して驚いた。
先ほどまでは腐り落ちゆく体で声も出せなかったのに、この空間で俺は人間の姿を取り、傷一つ負ってもいなかった。
『ボクハ、キミノ、ココロ』
布の隙間から見える口元がにっこりと笑みをつくる。
『イキタイト、ノゾム、キミノ、ココロ・ムスメニ、アイタイト、オモウ、キミノ、ココロ・ソシテ・スベテノ、ツミカラ、ノガレタイト、オモウ、キミノ、ココロ』
「!」
『ボクハ・キミノ・ネガイ・キボウ・ヨクボウ』
思ってはならないと思っても、弱い俺が願わずにいられない心を言い当てられて俺はぎくりと心を揺らした。
願い・希望・欲望、言葉にすると様々に意味合いが変わる言葉だが、その全ては心に強く思う存在。
どんな存在にだってある、心の支えであり、そして、強すぎるその思いは時として心を壊す可能性を秘める存在。
『ネエ?モウ、イイデショ?』
その存在そのものだと名乗った子供が無邪気に言う。
『ボクヲ、オモテニ、ダシテ?』
「駄目だ!」
彼の登場にたじろいだ俺だったが、その要望には瞬時に反対した。
「俺は願いなんてもっちゃいけない!罪を償うためだけに生きているんだっ」
『イイジャナイ、スコシクライ・キミハ、コンナニ、キズツイテ、クルシンダ・チョットクライ、ネガッテモ、イインダヨ?』
「っ」
甘い言葉。誰かに言ってほしくてたまらなかった、優しい言葉。
『ダイジョウブ・ボクガ、キミヲ、マモッテアゲル』

誰かに全てを委ねられる、心の安寧がぐらりと俺の決心を揺らした。

『ネエ？ダカラ、ボクト、イッショニ、ナロウ？』

「一緒に？」

差し出された手が俺を誘う。

『ウン・ヒトツニ、ナルンダ・ボクト、ヒトツニ、ナレバ、ダレモ、キミヲ、キズツケナイ・スベテカラ、カイホウサレル』

誰にも傷つけられず、全てから解放される。

願うことすら許されなかった希望が目の前で俺を誘っている。

頑なな俺が弱い俺に屈服した瞬間だった。

結局、俺という人物は千年前と何も変わらない。

とことん自分に甘く、自分が辛さから解放されるのであれば、何を裏切っても、自分のプライドすらかなぐり捨ててしまえるんだ。

俺は僅かに戸惑った後、すぐに子供に手を伸ばした。

「アオイ！！！こんな簡単に死ねると思うんじゃないわよ！」

だが、現実と精神世界の壁を打ち破って飛び込んできた強い強い声に、俺の意識は急速に覚醒へと促された。

「ティア？」

伸ばそうとした手を引っ込めて、俺を呼ぶ彼女の姿を探した。

だが、淀んだ世界の何処にも彼女はいない。

「約束したでしょ！？どんなに辛くても、苦しくても生きるって！私の傍で永遠に罪を償うんだってっ！」

ティアの声は大きく振動して、淀んだ世界を揺らすように響く。

揺れた世界は安定をなくしたように、小刻みに震え始めぐらぐらと崩壊を始めた。

俺は彼女に会いたくて世界を駆けだそうとするが、その俺の腕を強い力が引きとめた。

『ダメ、キミハ、ボクト、イッショニ、ナルンダ』

「放せ！」
咄嗟に小さい子供相手に俺は力いっぱい腕を振り払い、子供はどさりと倒れこみ、すっぽりと被った布がばさりと落ちる。
「っ！」
そして、現れた姿に俺は絶句する。
――ああ、何て醜い生き物だろうっ！
それは人間の形を取ろうとして、失敗した何かだった。
瞳も鼻も口も耳もあるが、それは全て歪な形で、本来あるべきでない場所に配置され、肌は爛れたような色や死体のような色の斑で、髪は針のように硬そうだった。
見たこともないおぞましい生き物に俺は呆然とした。
『ドウダイ、ミニクイダロウ？』
ぎょろりと恐らく黄色い瞳であろう物体が俺を見て笑みの形をつくる。
『コレガ、オマエタチノ、ネガウ、ココロノ、カタチサ・ミニクク、オゾマシイ』
何かを願う心は、求める思いは、これほどまでに醜いものなのか？
『ヒトハ、イツモ、ソノ、ミニクサヲ、ミナイフリヲシテ、ウツクシイモノダケヲ、ミツヅケル』
そうかもしれない。
必死に求めること、願うことは、浅ましく醜いことだが、俺たちはそれとは知られないように、色々な理由を繕って欲望を隠し希望という名にすり替えているのかもしれない。
『ダケド、ソレモ、オワリ・セカイハ、モウスグ、ボクト、イッショニナル』
「え？」
『キミヲ、ソノ、ハジマリニト、オモッタケド、マア、イイヤ』
生き物はそういうと俺を見て、今にも壊れそうな均衡を保つ顔を

嬉しそうに歪めた。
その表情に俺は酷く見覚えがあるような気がして、同時に、酷く不吉な予感を感じた。

『ボクハ、アッチデ、メザメルコトニ、スルヨ』

このままこの生き物を行かせてはいけない。
咄嗟に感じた直観のまま、先ほどは振りほどいた手をつかもうと俺は走った。
だが、ティアの声が響いてから崩壊を始めた淀んだ世界の足場は、俺が一歩踏み出しただけでもろくも崩れ始め、
「うわぁあああっ！」
淀んだ世界の下に広がる底のない暗闇に、真っ逆さまに落ちてゆく。
そんな俺を見下ろして醜い生き物は、骨と皮だけしかない手を大きく振る。
『バイバイ、マタネ』
その言い方に俺は気が付いた。

――――バイバイ、ブルー・ナイツ

間違いない。
アレは『アイツ』だ。
そうだ、どうして気が付かなかった？
淀んだ世界・願いを叶えるという甘い言葉…あの気配は千年前、俺が出会った『アイツ』でしかなかったのに、姿が違うだけで気が付かないなんてっ！
しかし、今になってどうして『アイツ』が俺の中に現れたんだ？
ずっと、俺の中にいたというのであれば、俺と一つになろうとするチャンスはいくらでもあったはずだ。

――まさか、『アイツ』を呼び起こすきっかけがあった？

それは俺が死にそうになったこと？生きたいと願ったこと？それとも、別の何か？

急速に回転する思考はとめどなく膨らんでいく、何しろもし『アイツ』が呼び起こされるきっかけが分かれば、俺の研究は飛躍的に進歩する。

もしかしたら、ティア達を天使すらも救える手段が分かるかもしれないんだ。

だが、時は既に遅し。

堕ち行く暗闇に俺の意識は同化するように、色々もっと考えたいことがあるはずなのに気が遠くなっていった。

第１３１話　君こそが僕の罪の証　５（前書き）

注意：残虐な描写があります。嫌悪感を感じる方はご注意ください。

第１３１話　君こそが僕の罪の証　５

「アオィィィィ！！！」

淀んだ世界が目の前で砕け散り、飛び込んできたのは俺の罪を証であるティアの俺を呼ぶ叫び。

その声に俺の中で何かが生まれた。

それは淀んだ世界で生まれたのか、はたまた、ティアの声により生まれたのか、自分のことであるのに分からない。

ただ、この瞬間、腐り終わるはずだった俺の体で何かが確実に変化したんだ。

『アアアアアア！！！！』

変化する叫び。

それは悲鳴から絶叫へ、苦しみから気合へと、滴る血は蒸発し、禿げ落ちた羽は灰となった。

俺というものを形作る全ては、一度世界から消え去った。

――――ドクン・ドクン

だが、俺の心臓の鼓動は聞こえ続けていた。

心臓すら消えたはずなのに、胸を叩く心臓の気配を精神だけになった俺は感じていたのだ。

体の全てが消え去っても、鼓動はまるでそれだけで生き続けていたように、なり続け俺という生を繋いでいた。

『マダ・イキタイ？』

あの生き物の声が聞こえた。

瞬間に俺の中で生まれた何かが爆発した。

眩い光があたりを支配し、次の瞬間に俺は肉が血が臓器が、俺を先ほどまで形成していた全てが新たに再生するのを感じた。
本来、神の体に死はない。
体がある程度は損なわれても、溢れる魔力ですぐに欠損部分を再生できるから。
しかし、他の色の魔力が体内に注がれ、魔力の源である血が毒となり果てている状態で、自分の体がほとんど一からに近い状態で再生されるとは思いもよらなかった。
経験したことない状況に、想像できない死を覚悟したくらいだ。
だが、その非常事態が結果として、同時にこの現象は長年続けてきた俺の研究を証明することとなった。
「ば…化物が！」
完全に殺したと思った相手があっというまに再生を果たしたことに、シェルシドラが低い声で叫ぶ。
そして、すぐに再び臨戦態勢に入ると、荒れ地に落ちた剣を拾って俺に襲いかかってくる。
それはいつも冷静に戦いに臨む彼にしては、あまりに猪突猛進というか、ものを考えていない戦い方であった。
「シェルシドラ！」
それを制止するようにサンタマリアが名を叫ぶが、シェルシドラは止まらない。
俺は新たに生えた翼をばさりと振り回すと、シェルシドラを弾き飛ばす。
再生した翼は先ほどよりも強度が上がっているようで、いとも簡単にシェルシドラを俺の足元に叩きつけた。
大地に這いつくばる天使の姿に、再生を果たし、体に興奮を覚えたままの俺は、酷く残酷な気持ちを抱く。
「ゥアアアアアッ！！！！」
その気持ちのままにシェルシドラの半身に、巨大化したままの足を振りおろし、彼を踏みつぶす。

小さな彼の体がバリバリと割れてゆく音が、再生した骨を伝わって聞こえた。

「やめてええっ！」

絶叫するシェルシドラの声を聞いて、初めて三大天使以外の天使が俺に向かって刃を向けた。

だが、全ては遅い。

その声に従ってシェルシドラから足をどけ、半分が血に染まった彼を見た。

左半身の半分はもはや人の形を保っておらず、さりとて半分は美しい彼のままそこに存在しており、それは倒錯的な芸術作品のようだと俺は思った。

「ヒューヒュー」

それでも半分のまま彼は生きている。

左半身が潰れていては、心臓すら潰れているだろうに彼は生きている。

それこそが、俺が再生し証明したことの裏付けともなる。

『神の心臓が右側にあって良かったな、シェルシドラ。いや、シェルシドラは死んだか？お前はもうレギューなのか？』

体の半分が潰れているというのに、ぎろりとシェルシドラの右目が俺を睨みつけた。

その人相はシェルシドラのものではなく、間違いなくレギューのものだった。

それが一時的なものなのか、はたまた、永遠なものなかのは、今のところはっきりしない。

だが、一つ確実なものとしているのは、彼の中にある『二つ』の心臓のうち、一つは永遠に失われたということ。

今さっき俺が踏みつぶした彼が本来持っていた人間としての心臓。

そして、もう一つは千年前に、俺が彼に移植した蒼の神レギューの心臓。

神喰い（グリプス）とは、すなわち神の心臓をその身に持つ人間のことだ。

もっとも、その際には人間に魔力を与えるために、人間の血を抜き全てを神の血へと入れ替える作業も伴い、その後も神の血を供給するためだけに初めは心臓を移植したはずだった。

まさか、その心臓移植後に神の意志が、人間に宿るなんて初めは全く考えられていなかった。

だが、手術後にシェルシドラの中には移植した神の人格レギューが確かにいた。

そこから俺はある一つの推論にたどり着いた。

――心臓とは血を巡らせ、命の源であると同時に、魂の宿る場所であるのでは…と

身体的な意味での死がない神にとって、何を持って生きているかという定義は非常に難しいものだ。

息をしていることを『生』と定義づけるのであれば、聖櫃にいる全ての神は生きているということのなる。

はたまた、精神さえ残っていれば『生』とするのであれば、三大天使やなりそこねた神の中に寄生している神は生きているということになる。

どちらも、生きているというには歪としか言いようがない。

その境目について、俺は研究者ながら不思議に思っていた。

しかし、精神などというものは形がなく証明することも難しく、息をしているという『生』の形のほうが証明するに容易かった。

故に神に死は存在しなかった。

神はどんなに傷つけられようと、身体的欠損は補うことができたからだ。

体が消滅しない以上、神に死はない。

また、心臓に魂が宿るというのであれば、心臓すらも再生が可能な神に死は存在しない。

しかし、精神、魂の宿る場所が確定できれば、神の死についても、

また、聖櫃というあの忌まわしき箱についても定義が可能になる。

――――魂、精神の消滅こそが神の死であり。聖櫃、それはすなわち、心臓に宿る魂を屠る場所。神に死を与える箱なのだと…

聖櫃に入って身体機能は正常にもかかわらず、眠り続ける神を俺はずっと不思議に思ってきた。

だが、心臓こそが魂の宿る場所であるというのであれば、その場所に何らかの精神にダメージを与えることができれば、そして、それにより精神が死んでしまえば、残るのは魂の抜けた容れ物としての朽ちない体だけが残る。

…そう考えることができるのではないか？

俺がこの考えに至る前に、聖櫃を造りだした神はそれに気が付いた訳であり、そして、容れ物と化した神を使って神に忌み嫌われた子供（ヴァラ）は人間を神で繋いだ。

それは天使を唆すための一つの手段と思ってきた。だが…

『どうして、こんな手段を使ってまで神と人間は繋がらなくちゃならなかったのかしら？』

以前、ティアにそう言われたことがあった。

俺たちは白き神の命令を通した神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）に従ったにすぎないのだが、今になってその言葉が大きく俺にのしかかる。

どうして？神の命を損なう形になってまで、俺たちに人間の支配する方法を実行させたのだろう？

しかして、その答えを知るすべを今も昔も俺は持たない。

また、その答えを俺が知ることは永遠にできないだろう…しかし、『彼』ならばその答えにたどりつけるかもしれない。

『うるさい。罪だ罪だと、自己嫌悪に陥るのは勝手だ。だが、犯した罪をぐちぐちとこんな所で私に懺悔したところで時間の無駄だ。それは私に言うことじゃないだろ？』

そう言った彼と別れて少ししかたっていないはずなのに、そう言って俺を突き放した彼の言葉が妙に懐かしく響いた。
そして、そう言われたのに、未だに進歩のない自分に僅かに苦笑して、俺は改めて現実に向き直る。
冷静な内の自分と、それとは対照的な妙な興奮と残虐性に支配され続けている自分が、完全に引き裂かれているのを、今更ながらに感じた。
見下ろした先にある半分が真っ赤に染まった三大天使シェルシドラ。
恐らくは魂の宿る場所である心臓をなくしたシェルシドラは死に、彼の体の中に残った右側の心臓とその中に宿るレギューが生き残った。
体はシェルシドラのものでも、恐らくシェルシドラは永遠にこの世界から消えたのだ。
『残念だな、レギュー。いくら心臓だけが残っても、体が人間のものじゃ、俺のように再生はできまい。』
そして、外の俺はそう言って獣の咆哮を上げた。
所詮は天使の体は人間のままであり、先に俺がしたように魔力で体の欠損を補うことはできない。
姿は同じでも、神と人間ではやはり体を形成するものが違い、身体的な死が存在し、心臓を再生できない彼はその精神すらも死に絶えた。
そして、俺がどんなに嫌味を言っても、体の半分を失ったレギューか、はたまたシェルシドラか、どちらと呼んでいいかも分からなくなった彼はそれに答えることはできない。
代わりに泣き叫ぶ天使たちの動揺と悲鳴が大地に轟いた。
「兄さんっ！！！」
「シェルシドラ様ぁ！」
「いやあああっ」

恐らく彼らにはまだシェルシドラがレギューになったことまでは理解できていないことだろう。
彼らに突き付けられて居ているのは、シェルシドラの半分が無くなってしまったということだけ。
だが、それは彼は生きているということは分かっていても、彼が死んだという事実よりも残酷に突き付けられている。
天使の頂点に立つ三大天使の一角が落ちたことにより、動揺が走る天使。
そして、そこに新たなる追い打ちがかかる。
「天使ども！覚悟しろ！！！！」
轟く声とともに、俺の背後から現れた多数の人影。
そこには傷だらけになりながらも、前線に配置されていた天使を打ち破ってきたのだろう神の子の部隊（マイマール）・女神の十字軍（イヴィスタン・ディード）が立ちはだかっていた。
『さあ、全てを終わりにしよう。天使』
天使と人間の最終決戦が、ついに最終局面に達しようとしていた。

第１３１話　君こそが僕の罪の証　５（後書き）

久々に後書を残したいと思います。
この物語を読み続けてくれている奇特な皆様に、最近、また色々な事情から執筆が遅れていることをまずお詫びいたします。せめて年内に完結させたいなと思っていたのですが、今の状態ではそれも難しく…鋭利努力中ではあるのでどうか暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。
また、今回は神の死の定義について触れていますが、これはあくまで私見や物語の設定上で必要な描写です。色々、複雑で難しいテーマであるので、もし、これを読んで気分を害された方がいましたら、この場でお詫び致します。申し訳ありません。
そして、これからの展開についても一言。アオイ視点の話は終了で、これで一応は最終章の三分の一ほどは進んだ形となります。これからは長きにわたり不在だった主人公攫われたヒロが戻ってまいります。彼が好きだという読者の皆さま、期待していてくださいませ。
また、誤字脱字について、色々なところで読者の皆様にご迷惑をおかけしているようで大変申し訳ありません。評価・感想の中だけでなく、メールでも色々アドバイスや指摘を頂き、恐縮するばかりであり、また、大変参考にもなっています。本当にありがとうございます。物語を完成した後は、かならず全面的に修正を加えていきたいと思っていますので、こちらも暖かい目で見守ってください。
それでは、長くなりましたが、最後に読者の皆様にお詫びと感謝を表し失礼します。これからもよろしくお願いします。

第１３２話　悪魔の封印　２－１

――――貴方を愛しています。例えこの愛が世界を滅ぼすのだとしても

【悪魔の封印　2】

突如として暗転した視界と急速な浮遊感。
最近、何度か経験したこの感覚は、間違いなく移動魔法に違いないと私は咄嗟に身構えた。
何せこの後に待ち構えているのは…『ベシャリ』という自分が床に叩きつけられる音と衝撃だ。
だから、その経験を元に私は身構えた訳なのだが…
「？」
いくら待ってもそれはやってこない。
「どうしたヒロ？」
そして、そう声を掛けられて私ははっとして、顔を間近で覗き見るようにしている万象の天使にぎょっとして勢いよく身を引いた。
どうやら、いつもとは違って今回は床に叩きつけられることはなかったらしい。
それなのに身構えしまっていた自分が妙に恥ずかしくて赤面する私に、万象の天使は小首をかしげる。（小奇麗な男はそんな婦女子がするような仕草をしても様になるのが憎らしい）
「い…いや、何でもない。っていうかここ…はあっ！？」
彼の注意を逸らそうと一体何処に移動したのかと聞こうかと周囲を見回した瞬間、自分でもこんな声が出るのかというくらい素っ頓狂な声が出た。
本当は残してきたティア達や神の子（マイマール）たちのことは、この上なく気

がかりだったが、思わず諸々の不安ごとが吹っ飛ぶくらい茫然とした。

そこは何と表現したらいいものか、今まで見たこともなければ、こんな場所があると想像したこともない、あまりにグロテスクな場所だった。

何かの粘膜に覆われている場所は、全体的に赤っぽい…その壁一面に何か血管のようなものが浮き出ていて、そこまで認識することができて、ああ、と納得した。

――ここは何かの体内だ

何かの体内に入るなんて経験したこともなかったが、殺して食べたりするために開いたことのある動物の体内にこの場所はよく似ていた。

更に感じるのは足の裏を通じて伝わってくる脈打つ血管に鼓動から、この場所が生きていることは間違いないと確信した。

「ああ、ここは少し特殊な場所だからな。初めてきた人は大体ヒロみたいに驚くんだ。」

「な、何なんだよ…この場所は？」

ついでにどう考えても『少し特殊な場所』という言葉で片付けられないだろうと心の中でつっこんだ。

「この場所は古い言葉でヴァラウィーダ…世界の胎内という名前だ。名前の通り、ここは正に世界の体の中らしい。」

「世界の体？」

言っている意味が理解できなかった。

世界というのは私が現実に生きている場所で、その多くは不浄（ディス・エ）の大地（ンガッド）という名の荒れ地であったり、何処までも広がる空であったりするはずで、少なくともこんな何かの胎内であるとは思えない。

故にここが世界の胎内だというのであれば、私が生きてきた世界は一体何だというのだ？生き物の体の中ということなのか？

空や大地、その全てが幻とか、そういうオチなのか？
「理解できないのは仕方ない。俺だって世界に体がある理由を知らない。だけど、体があるってわかったところで、俺たちが知らなかっただけで今までと世界の何が変わる訳じゃない。別にいつも通り生きていけばいいだけだろ？」
「ま…まあ」
そうなのか？と言われた言葉には疑問を投げかけざるを得なかったが、あくまで自然とそんな風に言う彼に私は声に出してそれを言えない。
しかし、きっと言葉に出さずとも、私の思いは顔に出ていたのだろう。
万象の天使は一瞬苦笑を滲ませ、それ以上は彼は言葉を続けなかった…いや、続けられなかったとった方がよかったのかもしれない。
彼は『アルモノ』を目にとめると、その表情を酷く強張らせる。
「？」
私も彼のそんな様子に引きつけられるように『ソレ』に視線を向けて目を見開く。

――それは恐らく人間だったものが朽ち果てたモノ

シルエットからそれが人影だというのは理解できた。
それは右手を前に大きく突き出し、こちらに迫りくるような、鬼気迫る勢いで何かを求めているような様子を漂わせていた。
しかし、シルエットは人の形を呈していても、それを形成するのはまるで泥のような黒ずんだ物体で、人だった形は崩れつつあった。
ただ、目や口や鼻の窪み、体のシルエットを形作る曲線などは、崩れ始めていても人間と知ることができるまで形を保ち、むしろ崩れ始めてはいたが、まるで今にも絶叫しそうなほどにリアリティを持っていた。
故に彫刻や造り物とは言い切れない。

まるで生きた人間が長い年月をかけて、すこしづく腐っていったような、形をとどめたままに腐っていった人間。
何となくそんな言葉がぴったりだと思った。
「ヴァオルガ・ニルヴァーナ」
ぽつりと呟かれた音は聞きなれない言葉。
その後にそれを説明するように万象の天使は続けた。
「朽ち果てた白…という意味さ。あれこそが俺たちが生命の源だと崇めている白き神イヌア・ニルヴァーナのなれの果て。」
「へ…あ？白き…神？」
何やら先ほどより驚いてばかりだなと思いつつも、目を白黒させるしかできない自分が情けなかった。
だが、白き神イヌア・ニルヴァーナには少なくとも数週間前は銀月の都（ウィンザード・シエラ）にいたはずで、その後にあんな姿になったということなのか？
「ヒロが知っている白き神は偽物だよ。彼女は元々白き神の侍女だった女神。白き神になりかわらせてあげるかわりに、天使の為の白き神であることを契約させた。」
「そ…そうなのか。」
驚く反面、なるほどと納得する部分があった。
罪人の巡礼地（アークヴェル）で過ごしたのは僅かな時間だったが、その中で感じた（本名は不明なためとりあえず）偽白き神は神の頂点に立つにしては存在感が薄く、天使に対しても酷く自虐的な様子だった。
「白き神があんな風になって、それでも天使の権威として白き神は必要だった。だから、代役を立てたという訳だ。彼女も白き神同様に俺に執着していたから、白き神になりかわって俺を独占できると言ったら簡単に主を裏切ってくれた。」
これをもしそこらの男が言っていたら、なんてナルシストな野郎だと思うところだが、この万象の天使が言うとあくまで自然だった。
それにしても偽白き神が万象の天使に執着しているのは了解していたが、そこまで話を聞くと果たして本物の白き神がどうしてこんな風になったのかが問題となってくる。

何しろ生命の源とされる白き神があれ程までに恐ろしい姿になっていようとは…、生命の気配の欠片もない。
それどころか深い死の気配を強く感じる。それに…

『最果(ロシギュナス)ての渓谷に彼女の目的があるからさ。それを叶えるために彼女は一時的に俺の元にいるにすぎない。彼女も俺も互いを利用しているだけなのさ。』

封印(エルヴァナンド)された異端で偽白き神が人間の元にいる理由を聞いた時に、エンシッダがそう言った言葉を思い出した。
ここに至るまで私も私なりに、千年前のことや自分のことを知ってきたつもりだったが、まだまだ知らせざる真実があり、私の知らないところで蠢く何かが存在している。
その事実に冷たいものが喉を通るような感覚が私を支配するが、ここまできてもはや逃げ出すわけにはいかない。

――人間の未来を守るために私は戦うと決めたのだから

驚愕や混乱に挫けそうになる心をそう思って奮い立たせながら、私はしっかりと世にも恐ろしげな白き神のなれの果てを見据えた。
「お前が見せたいといったのは『アレ』のことなのか?」
私が今考えなければならないのは千年前の知られざる真実なのではなく、天使と人間の戦いの行方だ。
いきなりの展開に万象の天使との会話に流されつつあったのを軌道修正するためにも、私は黒の剣(ローラレライ)を構え、天使から距離をとった。
「『アレ』っていうのは失礼じゃないか。朽ち果てた白(ヴァルオガ・ニルヴァーナ)…いや、あの白き神はヒロが求めている第二の悪魔の封印だぞ?」
「な――――」
第二の悪魔の封印、それは先程この万象の天使が解いた第一の封印悪魔(ヴァーシェル)の槍の先にあった西方(シエストリア)の魔境と東方(サフィラ・アイリス)の楽園を分かつたった一

つの存在。
それさえ破壊できれば人間は天使の支配から解放され、私が必ず壊すと約束したもの。
――それが本物の白き神？
「悪魔は千年前、この場所で白き神を封印すると同時に東方の楽園（サフィラ・アイリス）を封印した。」
「東方の楽園（サフィラ・アイリス）を封印？」
その言葉に違和感を感じた。
「そう世界の果て（レドヴァガンナ）は人間を閉じ込めるためにあるものじゃない。あれは他の大地を守るための封印。東方の楽園（サフィラ・アイリス）こそが封印された存在なのさ。」
何から？という疑問は口にできなかった。
それに聞かずともすぐに万象の天使はその答えを教えてくれた。
「この楽園は白き神という灰色の魔力から、世界を守るために封印された大地なのさ。」

第133話　悪魔の封印　2－2

白き神は灰色の魔力に侵されていた。
その事実は先日聞いたオウェルの話からも理解していた。
白き神は人形（カレド）として無色の神ヨイを蘇らせるために、神に忌み嫌われた子供（ル・オヴァラ）と契約し灰色の魔力に囚われた。
オウェルはその灰色の魔力に侵された白き神を目の当たりにしたと言っていた。
だが、東方の楽園（サフィラ・アイリス）ごと封印されるほどに、その彼女は危険だったのだろうか？
少なくともオウェルの話だけでは、そんな危険性は感じられなかった。
「この話、もっと君は驚くかと思ってたけど、ある程度は千年前の話も知っているんだな。エンシッダが話したのか？」
「まさかあの野郎が親切に私に説明してくれる訳ないだろ？」
それをいうとなるほどといった感じで天使は神妙に頷く。
「私に千年前の話をしてくれたのはオウェルさ。」
しかし、私がそう告げた途端に彼の瞳の色が一瞬だけ変化したように見えた。
「銀色の神か…まだ生きていたのか。」
「知っているのか？」
「え？あ、いや…俺は…それより話を戻そう。」
煮え切らない態度を変に思ったのは確かだったが、大したことではないかと私は気にしないことにした。
大体、何が可笑しいと問われると明確な何かは説明できない。
違いというよりは、以前見たことのある何かと万象の天使がダブったような、強いデ・ジャビュに近い気がした――だが、それが分からない。
「銀色の神なら千年前の全容も凡そも分かっているだろうけど、彼

もまた全ての真実を知っている訳じゃない。ヒロ…君には全てを話そうと思う。」

「どうして、お前は私にそこまで?」

「俺はヒロが欲しいからだ。」

「ほっしいいいい?」

その言葉にずさっと自分でも過剰じゃないかというくらいの勢いで私は後ずさった。

体中に鳥肌が立ち、顔は自分でもわかるくらい血の気が引いた。

「何、変な誤解をしているか分からないけど、別に俺は男を恋人にしようなんて酔狂な趣味はないよ。まあ、誘われたことはあるけど、全部ねじ伏せてきたし。」

「あ、そう…ははっ。」

私の反応をえらく白い目で見られたが（しかも何気に重大発言じゃないか?）、そもそもこの男とは天使の間で男の恋人だという、あまりに情けない称号まで頂いているのだ。

私が過剰反応するのも無理はない。

「じゃあ、どういう意味だよ!」

「さっきも言ったろう?俺はエヴァとヒロを幸せにするという契約を結んでいる。だが、君が人間側にいる限り、それは不可能なことだ。人間と天使は決して相容れない種族だからな。」

元は同じ種族だというのに、それはあまりに悲しく皮肉な運命だ。

「だから契約を守るためには、君が天使側にきてもらう必要がある。」

「冗談じゃない!私に人間を裏切れって言うのかっ!?殺されたって御免だ!!」

――そうだ…それでいい、やはりお前は私だよ、ヒロ

――駄目だっ!これ以上『ヤツ』に深入りするな!

叫んで誰かの声が腹の中から響くのを感じた。

二つの意見、だが、一人の声。
誰かなんて考えなくてもわかる――私の前世だという悪魔・ヴォルツィッタ。
自分の中に誰かがいるという感覚が当たり前になりつつあることを気分悪く感じたが、振り切ることのできない存在を私はいつしか目をつぶってやり過ごすようになっていた。
だが、今回の言葉には彼の存在という嫌悪感にまして、奴が自分と私を同一化しようとするその考え方が嫌だった。
私は誰が何と言おうと『私(ヒロ)』だ。
前世だろうが、転生だろうが私が誰かになることはないし、またその逆もない。
ヴォルツィッタの中にもそんな葛藤があるのか？
同じ意識から聞こえてきた二つの声に私は、嫌悪感とともに不可解さも感じた。
しかし、今は自分の中のその葛藤に構っている暇はない。
「何故？それが君の可愛がっていたエヴァの願いだ。」
それに悪魔はあちらから一方的に意識を私に伝えてきても、私の意識を捕まえ罪人の巡礼地(アークヴェル)の時のように体を乗っ取ろうとする気配は見られない。
だからこそ、私は悪魔に対する拒否感のまま強い気持ちで天使に言葉をぶつけた。
「エヴァの願いは私の幸せだ！私に天使の仲間になれってことじゃないっ」
人間の未来の為に戦うと決めたのに、その私が天使に寝返るなんてありえない話だったし、それを聞かされるだけでも酷く嫌悪感が先だった。
天使の悪行の数々を目の当たりにしてきた。
千年前の天使の不幸や悲劇を知っても、だからって彼らが人間にしてきた非道は許されることじゃないはずだ。
「そういうと思った。だから、全てを話すのさ。」

「何？」
「この話を聞けば君はもう悪魔の封印を解こうなんて思わないはず…いや、それが不可能なことを知る。封印が解けなければ、人間に未来がないことは自ずと分かるはずだからね、俺の言うことも少しは聞く気になるだろう。」
――不可能？
訝しむ私に向かって天使は笑った。
その笑顔は誰が見ても美しいと思うに違いない輝きを放っていたが、どうしてか私には何か暗い闇を纏って見えた。
「第二の悪魔の封印・朽ち果てた白の封印（ヴァルオガ・ニルヴァーナ）を解けば、世界は灰色の魔力で死の世界となり果てる。君はそれでも封印を解くのか？」
突きつけていた剣を手で弾いて天使は私に詰め寄る。
「意味が分からない。灰色の魔力で世界が？何の冗談だ。」
「君も見ただろう？罪人（アークヴェル）の巡礼地で君が起こした灰色の魔力の暴走。あれが世界規模で起きれば世界がどうなるかなんてすぐにわかるじゃないか。」
そう言われてもあの時の記憶は曖昧で、思わず分かるかよと毒づいた私。
「あれ？そうなの？じゃあ、灰色の魔力の性質くらいは知ってるよな？灰色の魔力は全ての魔力を吸収し増大する。そして、魔力とは生命力に近い存在だ。」
それは分かるのでこくりと頷く。
「そこに大量の灰色の魔力が投入されたらどうなるか想像してごらん？灰色の魔力は世界に生きとし生けるものの生命力を吸収し、増大し、最後には世界の全てを覆い尽くすことだって時間の問題さ。」
確かに万象の天使の言い分は理解できた。
「だが、これまで世界は灰色の魔力に覆い尽くされてはいないじゃないか？神の大部分が灰色の魔力に犯されていた千年前の状況を考

えれば、とっくの昔に世界はその状況になっていてもおかしくないだろう?」

「そうさ。千年前はいつそうなってもおかしくない状況だった。だから、東方の楽園（サフィラ・アイリス）は他の大地から隔離されるために封印された。」

「だが、封印したのは悪魔だろ?」

封印ということは外、すなわち万象の天使の言い分から言えば東以外の他の大地から施されたはずのもののはずだ。

しかし、東方の楽園（サフィラ・アイリス）の封印は悪魔が、この大地で施したもののだ。

「悪魔は世界を救うために自分を犠牲にしたのさ。他の大地の王たちに東を封印することを約束し、同時に自分が犠牲になることで東の中の灰色の魔力の全てを道ずれにした。」

「悪魔を処刑したのは天使だろうっ!?」

それも万象の天使の片翼を切り落とした罪で、罪人の処刑台（ディッチ・ア・バリス）で白き神によって処刑を執行されたはずだ。

「その結果、悪魔は全ての力を失った。だから、いとも簡単に処刑された。でなければ、灰色の魔力を唯一支配できたあの悪魔が処刑なんかされるものか。」

だが、それであるならば灰色の魔力を封印するだけで自体は収集するはずだ。

どうして他の大地の王たちは東の封印を悪魔に約束させた?

そして、どうして悪魔はそれを了承した?

「ねえ、どうして悪魔がそんなことをしたかヒロは知りたいだろう?」

心を読んだような囁きにギクリと心臓が嫌な音で鳴った。

いや、話の流れから考えれば、私の思考など万象の天使には手に取るようにわかるのか?

だが、思っていたことを言い当てられただけではない、私の中の第六感ともいうべきものが何かを警告していた。（私の第六感はこ

れでも結構あたるのだが、如何せんいつも役に立つことがない）
「でも、ヒロは俺の言葉を１００％信じはしないだろう？だから、俺は考えたんだ。ヒロが千年前の真実を知るとってもいい方法を…ね。」
ふふと笑いながら万象の天使は酷く楽しげだった。
しかし、私といえば何やら嫌な予感がビンビンしていて、突き付けていた黒の剣（ローラレライ）とともに万象の天使から少しずつ後退を始めた。
「嫌だなぁ。どうして俺から離れていくの？こんなにヒロのことを考えているのに。」
「貴様は絶対、何かおかしいぞ？」
私に対して何らかの執着を見せているのは分かっていたが、それはあくまでエヴァとの契約があればこそだと理解できれば納得がいく程度だった。
だが、ここにきてこの天使の私に対する様子はどう見ても異常だ。
思わず思ったことを口にしたが、万象の天使はきょとんとした表情をした後に、一瞬だけ苦しげな表情を浮かべた。
「だ…て、俺は――」
しかし、それは再び消える。
万象の天使は見たこともないほどに晴れやかな顔に変わると、動揺する私との距離と詰めた。
天使のおかしな様子に気を取られていた私は、一瞬のことに対応が遅れる。
「『僕』の話は今はいいよ。さあ、千年前の記憶を思い出して…貴方の魂に刻みつけられた悪魔の記憶を体験してくるんだ。」
そう小さくつぶやいて、天使は私が想像だにしない行動をとった。
――私の唇が天使の唇で塞がれた…のだ
（ギヤアアアアアア！）
心は絶叫を上げたが、突然のことに動けず私は完全にショートし

た。

だが、妙に体の神経は敏感になっていて、触れる唇の柔らかさと一緒に天使から送られてきた気配にびくりと体が動いた。

（これは…灰色の魔力？）

唇を通して入り込んできた灰色の魔力を感じた途端に、ぐらりと揺らいだ視界と体。

私はこれが夢なら早く覚めてしまいたいと思いながら、意識が急速に混濁していくのを感じた。

そして、気が付いた。

万象の天使にダブる、いや、いまや万象の天使を覆い尽くさんばかりのその正体が…

――――エヴァ？

第１３４話　悪魔の封印　２－３

意識が浮上した時、私はてっきり違う場所に飛ばされると思っていたが、先ほどと同じく不快なほどにグロテスクな場所・世界（ヴァラウィーダ）内であった。

先ほどの衝撃（言葉にするのもおぞましい）から茫然とする思考は復活していなかったが、目の前に万象の天使がいないことで、とりあえずは理性をかき集めることに成功した。（あの天使！あとで絶対にぶん殴る！）

辺りを見回すと忌々しい天使の代わりに人影が二つ、大きいものと小さいものがあることに気がつく。

その姿をきちんと確認して、私は目を見開いた。

「ヴォル！」

子供特有の高く男女の区別が曖昧な声。

その子供の話はオウェルから聞いていた。

恐ろしいほどの美しさは禍々しく、さりとて、子供が心から笑ったとしたら、きっと誰もが幸せになるほど光り輝くことだろう…と。

オウェルはその光り輝く表情は見たことはないといっていたが、私はそれが確かな言葉であったと理解した。

――その子供、灰色の魔力の根源であるという神に忌み嫌われた子供（ヴァラ）

胸を押しつぶすような、強い圧迫感を感じる空気。

子供と直接会ったことはなかったが、彼の気配を何度となく感じてきた私は、それをすぐに直感した。

そして、子供が声をかけた人物には見覚えがある。

『ヴォル』、私の前世であるという悪魔ヴォルツィッタだ。

二人は数メートルの距離を保ちながら睨み合っているというか、

ラーオディルが一歩近づけば悪魔がじりじりと後退して距離を保ち牽制しあっているような状況だった。
私といえばその中間ほどで彼らの視界の邪魔になっているにも関わらず、私を通り越して睨み合う二人の様子に、私という存在はここでは透明人間なのだと理解した。
そんな状況に戸惑いつつも、私はいきなり放り投げられた自体に適応しようと必死に鈍い思考を巡らせた。
『さあ、千年前の記憶を思い出して…貴方の魂に刻みつけられた悪魔の記憶を体験してくるんだ。』
意識が遠のく前に聞いた万象の天使の声が思い出され、なるほど、まさに言葉のままに私の魂が覚えているという千年前の記憶を恐らく私の意識下で再現しているということだろう。
さりとて、普通に自分の記憶を思い出すよりも、リアルすぎる状況に戸惑いと混乱を覚えずにはいられない。
それにこれほどリアルだというのに、これはあくまで記憶であり記録だ。
私はただ目の前でおこることを見続けるしかできず、何にも干渉できないという感覚も妙なものだった。
試しに悪魔に触れようとしたが、まるで私は幽霊のように彼を通り抜けた。
さて、これから何が起こるのか全く分からないし、どこまでの記憶を私は体験させられるのかも分からない。
しかも、いきなり始まった二人の体面に、状況がどういう形になっているのかも分からない。
とりあえず場所が世界の胎内（ヴァラウィーダ）であることから、恐らくオウェルと別れた後、ラーオディルを止めると言って去った悪魔のその後であると推察された。

「久しぶりだね、会いたかったよ。」
悪魔ヴォルツィッタを見て笑う子供の表情は、真実嬉しそうで幸

せそうで、美しく愛らしかった。
誰もがそんな笑顔を向けられて笑顔を返さないわけにはいかないと思うのだが、悪魔は酷く苦々しく顔を顰めた。
「俺はもう会わないと言ったはずだ。ラオ、お前が彼女を殺したことを俺は絶対に許せない。」
そう言って悪魔は黒の剣(ローラレライ)を強く握った。
かつては家族であったという二人の間に何かがあったのは、どうやら確からしい。
「だが、お前が俺にとって大切な存在であったという事実は変わらない。どんなにお前が憎くても憎みきれない気持ちも嘘じゃない。」
「だったら、一緒にいて？一緒にいよう？」
「俺が許せないのは俺だ。彼女を守れなかった俺、お前にあそこまでさせてしまった俺、お前を憎む俺、お前を許したいと思う俺…あの時から俺は俺を許せないまま生きた心地をしたことがない。」
それは酷く苦しそうな声だった。
その声にラーオディルの表情が変わった。
愛らしき子供から一瞬で魔王のように妖しい空気が湧きあがった。
私はそれが彼の罠であることを理解した。
灰色の魔力、あの得体のしれない魔力で子供は悪魔の思考能力を奪おうとしているのだ。
「じゃあ、全部忘れちゃおうよ。そうすればきっと楽になれるよ？」
「それは違う。」
子供から立ち上った濃い灰色の魔力の気配に、さすがその根源だと思ったが、それに何一つ動じない悪魔。
その中には動揺や苦痛の欠片すら感じなれなかった。
灰色の魔力に対してここまで平然としていられる…私とて膨大な魔力に対して苦痛を感じるというのに、同じ魂をもってしてのこの差は一体何なのだろう？
「忘れて楽になれるかもしれないが、彼女のことを忘れるくらいなら、俺は死んだ方が千倍ましだ。」

『彼女』というのは悪魔の恋人だろうか？
その『彼女』のことを悪魔が口にするたびに、ラーオディルの表情が微妙に引きつることが気になった。
悪魔と子供と彼女…この三者の間に一体何があったのだろう？
「そんなにあの女がいいの？アイツはヴォルを裏切っていたんだよ？僕が…僕の方が何倍も貴方のことを想っているのに、どうして？どうして貴方は僕を選んではくれないの？」
「もう、やめるんだ、ラオ。」
子供の言葉は淡々としているが、その内容は激しい。
「ヴォル、どうしても僕と一緒にいられなっていうなら、灰色の魔力を使って僕はヴォルと一つになる。僕の中で永遠に一緒にいるんだ。だけど、貴方はそれを望まないだろう？お願いだから僕の言うとおりにして。」
それは願いというよりも、脅迫である。

――ヒトツニナロウ

それは何処からともなく聞こえてきた、私が嫌悪する囁き。
私はこの時、初めてその言葉をなんの根拠もなく拒否する自分の心を知った。
それは恐らく、千年前から続く私の魂が覚えていた記憶が、悪魔が拒否した言葉だからに違いない。
そして、聞こえてくるその囁きはラーオディルの願いであり、灰色の魔力の残る彼の思念に近いものなのかもしれない。
子供は悪魔が世界から消えてなお、その魂を求め続けているのだ。
だが、それほどまでに求められても悪魔は残酷に子供を突き放す。
「お前がどんなに俺を求めても、例え彼女のことがなかったとしても俺は決してお前が求める俺にはなれない。」
悪魔の言葉に愛らしい顔を鬼の形相に変えて、ラーオディルは自分の身の内から実体化するほどに濃い灰色の魔力を放出させ、脅迫

を実行に移す。
それはまるで触手のように伸び、悪魔に向かっていく。
だが、悪魔はそれにひるむことすらなく、寧ろまるで触手が見えていないように、呆気なくそれに捕えられた。
「ラオ、いいか？人はどんなに誰かを想っても、決してその人と一つにはなれない。人は生まれてから死ぬまで永遠に一人なんだ。でも、だからこそ人は誰かと一緒にいたいと願う。誰かとの繋がりが大切だと思える。だが、力づくでそれをなしたとしても、それは本当の繋がりではない。」
「でも、失うよりマシさ。知っているでしょ？僕はもう二度と一人になるのは嫌なんだ。」
変わらない無表情の中に、焦りが見えた。
揺れる表情は寧ろ追い詰められているのが、悪魔でなく子供の方だと教えていた。
子供は何をそんなに怯えているのだろう？
一人になるのが怖いのか？
悪魔を失うのが怖いのか？
だが、彼の力をもってすれば、悪魔を失うことを回避することは可能に違いない。
力を使ってそれを強要するのが嫌なのか？
ならば、悪魔に対してラーオディルは灰色の魔力を使ってそれをしている。
それをしてでも悪魔を欲しているということなのか？
二人の間に何があったか、ほとんど知らない私は交わされる会話の本当の意味を知るには至らない。
悪魔に伸びた灰色の魔力の触手は、徐々に悪魔の体を締め上げているようで、悪魔は苦しそうに顔を歪める。
「僕はヴォルに初めて出会った時のことを昨日のことのように覚えてる。名前の通り全てから忌み嫌われていた僕を、たった一人慈しんでくれた。だからこそ、僕は今の僕になれた。誰からも好かれる

容姿に全てを超越した力。全部を与えてくれたのはヴォルだ。」
一歩一歩、ラーオディルが悪魔に近づく。
「ヴォル、貴方は僕の全て。僕の世界。その貴方に拒否されたら僕はどうしたらいいの？ねえ、教えてよ？」
無表情に淡々と語っていた子供が、何かに縋るような声で灰色の魔力の上から悪魔に抱きついた。
それはまるで何かに脅える子供のように必死な姿。
だが、悪魔はそれに答えることはなかった。
痛いほどに続く沈黙。
しかして、それがどれくらい続いたか定かではないが、次に再び沈黙を破ったのはラーオディルであった。
「そう…それがヴォルの答えなんだ。」
そこには先程の頼りない子供の姿はなかった。
ただただ冷酷で無常で、オウェルの言葉にあったように全てを支配する、何か禍々しいほどの存在がそこにあった。
悪魔の絶対的な拒否が子供を変えた瞬間を、私は見た。
それまでラーオディルは何を言われても悪魔が自分を見捨てるはずはないと思っていた。
それがラーオディルの力故の根拠なのか、それとも彼と悪魔がこれまで築いてきた関係故の根拠なのかは定かではない。
だが、ここでそれが壊れた。
「なら、僕も答えを出すよ。」
そう子供が言った瞬間に、悪魔を包んでいた灰色の魔力が消えた。
崩れ落ち、噎せて肩で息をする悪魔を見下ろして、ラーオディルは笑った。
その笑みは私が初めて見た、酷く暗い歪んだもので、思わず息をのんだ。
「この世界が僕を拒否するなら、僕は僕を受け入れてくれる新しい世界を創る。でも、新しいものを造る前に古いこの世界を壊さないと。」

それはとても嬉しそうで、今にも歌いだしそうな声だった。
「灰色の魔力を使って世界を壊そうとしても無駄だ。既に東方の楽園（リス）（サフィラ・アイ）は他の大地から隔離されつつある。後は俺が中から封印を完成させるだけだ。」
どうやら、ラーオディルの行動は予想が付いていたらしい。
「まさか、そんな方法で世界が全部壊れるとは思っていないよ。」
だが、ラーオディルはそれをさらりと否定した。
「灰色の魔力で世界を壊しても、それは完全な破壊じゃない。僕は塵一つもこの世界を残すつもりはないんだから。」
「何をするつもりだ？」
そこでそれまで動揺の色一つ見せなかった悪魔の表情が、初めて変化した。

「ねえ、本当にこの世界を造ったのは誰だか知っている？」

悪魔のその表情が楽しくて仕方ないと言ったように、ラーオディルは笑みを一層に深くした。

第１３５話　悪魔の封印　２－４

昔々、どれくらい昔のことかも分からなくなるほど遠い昔、恐ろしい魔物が支配する地獄のような世界に二人の神が降り立った。
二人の神の名前は生命を司る白き神イヌア・ニルヴァーナと、死を司る黒き神ウ・ダイ。
二神はこの地獄のような場所を自分たちの世界にすることを決めると、黒き神はその死の力を使って全ての魔物たちを死の世界へと追いやり、白き神は魔物たちの代わりに神様を１３人と3種の種族を誕生させ、広大なる世界の大地を東西南北の４つに分けてそれぞれの種族を住まわせた。

それがこの世界創造の物語。
世界を創ったのは二人の最高神である白と黒の神。
だが、ラーオディルの言葉を察するにそれは違うということなのか？
謎は深まるばかりだが、悪魔の記憶を見ているにすぎない私は質問すら許されない。
しかし、悪魔が私に代わってという訳ではないが、すぐに同じ問いをラーオディルにしてくれた。
「どういう意味だ？」
「そうやって僕の言葉の意味を分かっているのに、聞き返すのはヴォルのダメなところだよ？分かっているでしょ？嘘ばかりの神たちがついた、一番の嘘。まあ、神の中でもこれをしっているのはイヌアとウ・ダイの二人だけだけれど。この世界は神が創ったものなんかじゃないんだよ。」
大きくなってゆく話についてゆくのがやっとだった。
天使に神…いつの間にかお伽噺のなかだけの登場人物たちが、私の中で当たり前のように存在していたが、更に世界創造という大き

な話題までが登場するとは、何だか聞く前から頭が痛くなった気がした。

「世界を創造したのは異能者と呼ばれる、人間の皮を被った化物。前文明の生き残りだよ。」

ラーオディルは悪魔から背を向けた。

「前文明…昔、この４つの大地ができるまえには別の文明、いや、全く別の世界が存在していたんだ。世界の胎内（ヴァラウィーダ）はその名残。だから、ここだけ全くの異次元でしょ？」

「異次元？その別の世界ってのは、こんな生き物の体内みたいに気味の悪い世界だったのか？」

ぶっ飛んだラーオディルの話についていけてないのは私だけではないらしく、いらいらとしたように悪魔は言葉を吐き捨てた。

「その通り。前の世界は生きていた。世界という名前の生物だった。世界は主であるその生物に支配され、その中で囲われるように生きていた人間たちは、その支配から逃れるために世界という名前の生物を殺しちゃったんだ。それが自分たちの生きることができる世界の終わりだとも知らないで。だから、決して前文明が世界の胎内（ヴァラウィーダ）の様であったという訳じゃなくて、壊れた後の世界の姿ってことだよ。」

生物が世界で、世界が生物？

想像がつかない、実感がわかない。

言葉の意味は理解できても、それが真実だとはどうしても思えなかった。

だが、世界の胎内（ヴァラウィーダ）は真実ここに存在している。

それは何らかの生物の体内であることを、私自身が推測した。

「だけど、人間の皮を被った化け物の異能者たちはその死んだ世界の中でも生きることができた。全ての人間が死んだ後、彼らは自分たちだけの世界を作り出すことにしたんだ。それがこの大地。」

「世界の中に世界がある？それは一体？」

私たちは未だに壊れた生物の中にいるということなのか？

では、この世界は幻？まやかし？

「世界の中に世界…か、それは少し違うかな？確かに世界の胎内（ヴァラウィーダ）は前文明の一部だけれど、４つの大地は別次元にあるんだ。異能者たちは世界を創ったというよりは、別の世界への扉を開けたって感じかな？だけれど、異能者たちは前文明の存在だから、この場所から動くことはできない。世界の胎内（ヴァラウィーダ）は前文明とこの世界を繋ぐたった一つの場所なのさ。」

だから、この場所はこれほどに異質なのか。

前文明がどんな世界だったか興味はないが、こんなグロテスクな閉ざされた世界にはいたくないなとは感じた。

「じゃあ、この先にいるのか？その世界を創った異能者とやらが――まさか、ラオッ！」

疑問を口にしながら悪魔は気がついたように、子供の名を叫んだ。

その表情には焦りと絶望が浮かんでいた。

私もその理由に気がつく。

『灰色の魔力で世界を壊しても、それは完全な破壊じゃない。僕は塵一つもこの世界を残すつもりはないんだから。』

世界を壊すと子供は先ほど告げた。

その意味を私も悪魔も履き違えていたのだ。ラーオディルは灰色の魔力ではなく…

「僕は異能者を壊す。異能者は世界を創りだしただけじゃない。今もこの世界を支える柱。それが欠けた時、世界は僕が言ったように塵一つ残さないで消えるんだ。」

異能者と呼ばれる人種がいかなるものか想像もつかない。

だが、その存在一つで世界がなくなると子供はきっぱりと告げた。

その言葉には嘘があるようにも見えず、さりとてすぐには信じられそうもない。

咄嗟に判断がつかない私に対して、悪魔の方は私にはない判断材

料をもっているのか、ラーオディルの言葉をすぐに信じたらしい。
「そんなことを俺がさせると思うのか？」
低い声、威圧するような空気が悪魔から立ち上る。
灰色の魔力を纏った黒の剣（ローラレライ）からは、魔力で形作られた女性の影がゆらりと現れた。
それを見て鈴を鳴らしたようにラーオディルは笑う。
「もちろん、優しいお人よしのヴォルが簡単に世界を壊させてくれるとは思ってないよ。だけど、僕が貴方にあげた灰色の魔力の力で僕を止められるとでも思っているの？」
確かに非常にごもっともな話である。
その根源であるラーオディルに灰色の魔力が有効とは考えにくい。
「無理だよ。貴方に僕は殺せない、僕が――――」
「ラーオディル！！」
子供が言葉を続けようとした所、高い激しい叫びが遮った。
二人の会話に意識を向けていた私は突如として現れた人物に目を見開いた、そこにいたのは――――
「やあ、イヌア・ニルヴァーナ。ウ・ダイ…それに万象の天使も来てくれたんだね。これで役者は揃ったね。」
その言葉通りの仰々しいほどの面子に驚く。
そして、あれほどに醜い石造となり果てた白き神の真実の姿に息をつめた。
白き神はあの恐ろしいほどの形相とは異なり、透き通るような儚い美しさを持ち、さりとて凛とした強さを秘めた、二つの相反する魅力を兼ね備えたまさに女神さまといった風貌だった。
しかし、万象の天使に黒き神の方は私が知っているままの姿でそこにいた。
千年という年月をまるで感じさせない存在に、私は改めて二人が人間という存在を超越しているのだと実感した。
「やっと、私たちはここまで来ることができたのね？」
「ああ、そうだね。」

呆然として様子でここが何処だか分からない様子の男二人に反して、白き神は嬉しそうに酷く興奮した様子でラーオディルに微笑んだ。

「イヌア！これはどういうことだぁ！？戦いの最中に俺をこんな所に連れてくるとは！！！」

黒き神の相も変わらぬ粗雑な話し方が大きく場所に反響する。

そうだ、千年前の今は天使が人間を追い詰めた最果て（ロシギュナス）の渓谷の戦いの真っ最中のはずだ。

その大将同士である黒き神と白き神に万象の天使が、こんな風に雁首そろえて何を始めようというのだ？

だが、やたらと威勢は良いものの彼はどうやら体の自由を奪われているのか、立ってはいたが体を左右に不自由そうに体を左右に揺らす。

それは万象の天使も同じらしく彼は大きく動こうとはしないが、不自然なほどに直立不動のままだった。

「ああ、ウ・ダイ。もう少しよ、もう少しで私たちの願いが…この先に『世界の理』があるのよ。それがもうすぐ私たちの手に入る。」

その言葉に黒き神と万象の天使の表情が大きく驚きに変化した。

『世界の理』といえば、神よりも前にこの世界に存在し世界の全てを定義している存在のはずだ。

それがこの先にある？

だが、この先にいるのは世界を創造した異能者であるはずで…、いや、世界を創った異能者と、神すらも支配する『世界の理』、この両者に関係性があるのは大いにありうる話だ。

混乱する展開に眉を顰めつつ、それよりも意外に感じたのが、白き神が黒き神に見せたその表情。

直接に二人が対面した様子を見たのは初めてであったが、聞いてきた話から二人は犬猿の仲というか、相容れない存在であるのだと想像していた。

しかし、白き神はにこりと微笑んで彼を見た。

その表情に虚ろな様子も何の含むところも感じられない。
純粋に黒き神に会えた事を喜ぶような、いや、それ以上の気が付いてはいけない何かがその表情には見え隠れしているような気がして、私はぎくりと心を冷やした。
これから何が起ころうとしている？
悪魔と心が同調しているように、同じ魂を宿しながら私と悪魔は同じように困惑した表情と、強い不安を抱えていた。

第136話　悪魔の封印　2－5

さて、これから本当の意味で全てが明らかになろうとしている…
そんな雰囲気が漂う場面であることは言うまでもない。
私もそれを期待した。
知りたいような、知りたくないような、この歪んだ世界の原因がこの目の前に現れるのだと。
だが、ごくりと一つ生唾を飲み込んだと思った瞬間に、ぐにゃりと視界が歪んだ。
「!?」
悪魔の記憶の中の美しい登場人物たちの顔が潰れたかと思ったが、それは次の瞬間に元に戻る。
だが、そこには先までとの様子は違っていた。
人物たちの配置、姿、人数までも変わっていた。
「どうしてぇ!?どうしてなのぉおお!?」
その中でもひと際甲高き声で取り乱した様子でいるのは、変わらずに白き神、その人であった。
しかし、そのことに疑問を抱くよりもまず私が思ったことは…

――――いや、この場合『どうしてぇ!?』は私だろうっ！

誰に聞こえる訳でもないのだが、私は叫ぶ。
それはないだろうと思っても仕方ない。
何しろ全部分かりそうだった場面が急に切り替わったのだ。
現れた場面は再び緊迫している様子だったが、どうにも気が抜けたというか、緊張感から解き放たれた私は、へにゃりと座り込んだ。
しかし、この記憶の登場人物ではない私のことなど、さっさとおいて話は進む。
白き神は泣いていた。

絶叫し、泣き叫び、そして、赤い何かをその胸に抱いていた。
その周りを囲んで万象の天使と悪魔、そしてエンシッダがそこにいた。
「あなたぁっ！」
泣き崩れたまま赤い何かを抱きしめる白き神の腕の中にあるものに私は目を見開く。
それは何やら赤く細い物体。
よくよく目を凝らしてみれば、それは人間によく似た形をしたものだと分かった。
頭も腕も胴も足もある。
だが、酷く干からびた様子のそれは肌は波打つほどにしわしわで、まさに骨と皮だけであった。
肌は赤黒く、髪はまばらにしか生えておらず、目玉は半分飛び出し、耳はとんがり、後頭部が腫れあがったように大きく、細く小さい体に対してあまりにアンバランスである。
苦しそうな表情は人間と同じ要素で構成されていても人間には見えず、血にまみれてらてらと光るその様はあまりにおぞましい。
「あれは…何だ？」
泣き叫ぶ白き神は自分の白い洋服が汚れることも厭わずに、それにしがみつく。
まるで大切な何かが消えていくのを必死で引き留めるかのように、力強く抱きしめながらも、その扱いは酷く優しげだ。
突然に現れた存在とに訳が分からずに混乱する私だったが、ふと耳元に聞こえてきた声にそれを理解することとなる。

『あれこそ、黒き神の本当の姿。』

僅かな吐息とともに聞こえてきた声に、驚きすぎてみっともなく叫んで飛びのいた。
だが、吐息を感じるくらいだ。確かに私に話しかけた存在を感じ

るのに、声の主はあたりを見回しても何処にもいない。
そもそもここは悪魔の記憶の中であり、私はその傍観者にすぎない訳で、私に気が付くものなどいないはずなのだ。
『お前もオウェルの真の姿を見たはずだ。神は人間の姿でほとんどを過ごすが、その真の姿は全く別のものだ。』
言葉の主の居所も正体も分からないままだったが、その言葉にオウェルが封印（エルヴァナンド）された異端で見せた、異形の獣の姿が思い出された。
オウェルも確かにあの姿こそが真実の姿であると言っていた。
だが、それでもオウェルの真の姿にはなるほどこれが神かと言われても、異形であっても漂う神聖な雰囲気や人間が立ち入ることができない威厳が存在した。
しかし、目の前にあるのはどんなに見たってあまりに弱弱しく醜い姿。それが
「黒…き神？」
『神の真の姿とは、すなわちその神の本性。死の象徴である黒き神の本性がアレさ。』
恐ろしく、醜く、そして、同時に哀れさも悲しさも感じるその姿が、死の本性。
『あれは正に死にかけているが、本当はあんな干からびて今にも息絶えそうな姿でもぴんぴんしているんだ。それはそれで気分が悪くなる姿だがな。』
黒き神によほどの恨みでもあるのか、謎の声の主の黒き神に向ける言葉は辛辣だ。
その異形の姿だけでなく、血塗れのままぐったりとした黒き神らしき存在の様子は、確かに瀕死に近い状態のように見え、確か神は不死であるはずだというから、それはいささか奇異に感じられた。
一瞬、底意地の悪い黒き神のことだ、何かの演技かとも思ったが、白き神の様子からしてそれがただの演技とも考えにくい。
では、あれが本当に黒き神だとして、かの神は真実、死にかけているということだろうか？

どうして？一体、誰にあそこまでの傷を与えられたのだろう？
そして、黒き神だと謎の存在に教えてもらわなければ、気が付きもしなかっただろうその事実をどうして私に？
「あんんたは…」
しかし、そうして私が謎の存在に語りかえる前に、甲高い声が場の硬直している空気を切り裂いた。
「許さないっ！私の愛しい人にっ！！1」
ぎらりと血走った目で、誰かに叫ぶでもなく、大声で楚々とした雰囲気のかけらもなく白き神は腹の底から絶叫する。
その言葉にも目を丸くする。
愛しい人…それは白き神にとっての黒き神？
対立しあっていたと思っていたのに、白き神は黒き神を愛していたということなのか？
いや、白き神が愛していたのは万象の天使が生まれ変わる前の魂である無色の神ヨイのはずで…？
「イヌア様！落ち着いてくださいっ！」
「五月蠅い！」
「黒き神は死んだわけではない！」
「黙れ！」
エンシッダが彼女を宥めようとするが、狂気に犯されたような白き神には無駄な言葉であるようだ。
それを悪魔と万象の天使はまるで他人事のように、私と同じように傍観している。
だが、私は気がつく。
白き神から立ち上る強い強い灰色の魔力の匂いに…。
元々灰色の魔力に侵されていたはずの白き神であったが、目に見えるほどの灰色の魔力は感じなかった。
その気配が血まみれの黒き神を強く抱き締めれば、抱きしめるほどに強くなる。
「諦めるんだな。白き神、貴方は何もかもを望みすぎた。」

その白き神に剣を突き付けるのは、悪魔ヴォルツィッタ。
彼は先程までの記憶の中とはどうにも雰囲気が変わっているように感じた。
姿は変わらずとも、白き神を見下ろす瞳の色も、皮肉に歪んだ口元も、彼が纏う魔力の気配すらも、何だかそれまで人間だった彼が全く違う生き物になったように変化している。
私に姿は似ていなくとも、どこか根源のような部分で繋がっていると感じていた部分が全く感じられなくなったのだ。

――――何だ？悪魔に何があった？いや、そもそもあれは悪魔なのか？

「悪魔！貴様は何をした？！ラーオディルは？！異能者は何処に？！」

白き神といえば悪魔が剣を突き付けようとも、黒き神との世界に入り込んで悪魔に視線すらも向けなかったが、それに対していつもどこか超然としているエンシッダが激情に任せたまま悪魔に喰ってかかった。
いつも不遜すぎて誰かに傅く姿など想像もできない彼だが、偽ではなく本物の白き神には忠義な家臣だったのだろう。
そして、彼の言葉もまた私の疑問と同じものであった。
彼の言葉から、どうやら先から一同は異能者に出会った直後の場面であることが推測できる。
そして、エンシッダもまた世界を創造したという異能者とやらに出会ったのだろう。
しかし、今はその存在が消え、更にラーオディルもまた消えた。
それに加えて、白き神は発狂し、黒き神は瀕死の状況、何かを知っていそうな悪魔とこれば、混乱するエンシッダにとって悪魔に喰ってかかるのは当然と言えば当然なのかもしれない。

――――ああ、いや、まだ万象の天使がこの場にいたな

未だ一言も発しない万象の天使の存在を視界には捕えていても注意していなかった私は、ふとそのことに気が付いて混乱する場面で万象の天使がどうしているか視線を向けた。

「？」

しかし、その姿を見て私は首を小さく傾げる。

悪魔の横にいて立つ姿は万象の天使は虚ろな瞳をしていた。

強い意志を秘めたいつも妖しい色を放つ紫の瞳からは生気が消え、何処を見ているか分からないように視線が定まっていない。

更に体に力が入らないのか、凭れかかる様に悪魔に身を寄せ、悪魔もまたそれを退けようともしない。

そして、私はもう一つの事実に気が付く。

万象の天使のその背中は私が初めて出会ったときと同じく、大きく広がる白い翼が片翼しかないのだ。

先までは確かにあった翼の片方が既にないということは、伝説の通りでいけば悪魔が片翼を既に切り落としたということだ。

『そうだ。やっと気が付いたか。お前に見せなかった記憶の中で、＜俺＞はアイツの翼を切り落とした。』

「なるほど、そうだったの…かぁって?!＜俺＞が翼を切り落としたって、あんたは――」

再び発せられた言葉の間にちりばめられたヒントに、私はその人物が誰であるかに気が付く。

そうだ、そもそもここは『ヤツ』の記憶の中なのだ。

同じ魂を共有する故に私は『ヤツ』の記憶を見ることができているが、本来は私が覗くことなどできない、この記憶は『ヤツ』だけの所有物でなくてはならない。

「ヴォルツィッタ。出てきたらどうだ?私が驚いているのが、そんなに楽しいのか?」

低く唸るような声の私に、押し殺していても、からかう色が消えない笑い声がした。

「悪い悪い。別に楽しんでいた訳じゃないさ。記憶の中にも俺がいるからな。同一人物が二人もいたら、ヒロが混乱すると思っただけさ。」

そして、声がどこか反響するようなものから、クリアなものになると同時に想像通り悪魔ヴォルツィッタが現れた。

そして、どうみても私の反応をからかっているとしか思えない嘲りの表情を浮かべたまま、指を一つ鳴らすと私と悪魔を置いたまま続いていた記憶の進行を止めた。

喚くエンシッダ、死にかけの黒き神、発狂した白き神、虚ろな万象の天使、そして、記憶の中のどこか別人のような悪魔。

動きを止めたままの一同は異能者と会う前と後では、その大小に違いにあっても、明らかに何かが違ってきている。

その理由は一体何なのだろう?

「どうして、異能者を私に見せない?」

記憶を止めてみせた悪魔を見た瞬間に、いきなり場面を変えたのが彼だと察した。

それはどうでもいい場面を先送りしたとは思えない。

何らかの悪魔の意図を感じて、私は警戒したまま彼に言った。

「どうせすぐに会うことになる。お前と異能者の感動の対面をより効果的にするためさ。変な勘ぐりはやめろよ。」

悪魔と出会うのはこれで二回目。

実際は心の中で彼を感じる場面は何度かあったが、こうして精神世界であっても実体を感じて対面するのは悪魔に乗っ取られた灰色の花園の時以来だ。

だが、やはり私はあの時の悪魔と、この目の前の悪魔が違うと感じた。

それは記憶の中の悪魔と同じ、私と同じ根っこの部分が悪魔から根こそぎ消えてしまったような喪失感にも似ていた。

だからかもしれないが、私の中の第六感が警戒しろと叫んでいた。

「あんたは万象の天使と繋がっているのか?私をここに送り込んだ

のは奴だ。なのに、あんたが道先案内人のようにこうして出てくる。」

「それは封印が解かれたから。」

「何？」

返ってきた言葉は小さく掠れていて聞き取りにくかったが、私が聞き返したのは聞こえなかったからじゃない。私の問いに対してのそれが答えとなっていなかったら。

「俺は千年前、全てを封印した。世界の胎内（ヴァラヴィーダ）も、白き神も、黒き神も、灰色の魔力も…そして俺の浅ましい罪も。」

――悪魔の罪

かつて出会った時も悪魔は自分の罪を断ち切ってくれと言っていた。

だが、世界を救ったともいえる彼に何の罪があるというのであろう？

「それを永遠に封印するために俺は万象の天使の翼を切り落とし灰色の魔力を使わせないようにし、自らも罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）で魂すらも砕かれて消えるつもりだった。少なくとも、そうすれば二度と俺の封印は解かれないはずだったんだ。」

はき捨てるように言って、悪魔は私を指さす。

「だが、俺の魂は消えていなかった。そして、お前がこの世に生を受けた。最悪だ。お前の誕生と同時に、お前の魂の中で覚醒した俺は嘆いたよ。だが、嘆いていても仕方ないから、ただひたすらに願った。お前がこの場所に近づかないように、俺の封印を解いてしまわないように。」

エンシッダに乞われ悪魔の封印と解くという話になった時、そういえば、酷く自分の中で何かが騒いだような気がしていたが、それはやはり悪魔の意識だったらしい。

「だが、事態は更に最悪のシナリオで進んだ。エンシッダに先を越

されないようにエヴァの封印をお前に解かせたのに、あの性悪のせいで結局エヴァは万象の天使の元に戻った。そして、灰色の魔力を取り戻した万象の天使が封印を解いた。」

「ちょ…ちょっと待て！あんたの話をさっきから聞いていると、まるでエヴァが灰色の魔力だと言っているみたいだっ！」

話の先は聞きたい気がしたが、それよりも気になったので私は慌てて声を上げた。

だが、慌てる私など無視してあっけらかんと悪魔は言い放つ。

「何だ気が付いてなかったのか。そうさ、エヴァ…お前がそう名付けた万象の天使の片翼こそ、ヤツの灰色の魔力。そして、エヴァこそが神に忌み嫌われた子供そのもの。」

ガンと頭を金槌で叩かれたような、強い衝撃が走った。

――ヒロちゃん、僕を忘れないで

忘れられない最後の言葉とともに、数年前エヴァとともに訪れた『呪われた街』での出来事が鮮明に思い出された。

『ああ、やっと貴方に会えた。』

そう言って私に強すぎる力で抱きついてきたエヴァ。

そうだ、あの時のあの表情、あの気配はいつものエヴァとは違っていた。

――あれはラーオディル？

第１３６話　悪魔の封印　２－５（後書き）

最後の『呪われた街』での出来事というのは番外編『異邦の少年亡国の遺産』でのエピソードです。次話で説明を加えたいと思うので読んでいただかなくても大丈夫だと思いますが、気になった方はどうぞ。

第137話　悪魔の封印　2－6

あれは今から1年ほど前くらいの出来事だった。
私たちは『呪われた街』を探す少年カイと出会い、彼のご先祖様の武器であるという黒の杖（ディルヴァ・トゥ・マジス）を求めていた。
今となっては『黒の』という言葉を聞けば、それが黒の武器（カシュケルノ）であると容易に気がつけただろうが、当時の私はその厄介さも分からないままに事件に巻き込まれ、かつて黒き神と共に戦った黒の一族、いや、黒き神と契約を交わした異端の一族の生き残りに出会った。
恐らくカイも私と同じく異端の一族の末裔なのだろうが、彼は何らかの理由で黒の杖（ディルヴァ・トゥ・マジス）を求め、ニールティアーと名乗った異端の一族と私たちは戦うこととなった。
その詳しい説明はとりあえず省くが、最後の最後黒の杖（ディルヴァ・トゥ・マジス）を彼女から奪おうとしたエヴァがニールティアーに殺されかけた瞬間にそれは起こった。
何の力もないはずのエヴァが突如として不死身の異端の一族を消し去り、千年前の彼が知らないことを語り、見せたことのない残虐性を露わにした。
「さようなら、ニールティアー。君は本当に可哀想な人だね。」
消し去ったニールティアーに心のこもっていないそんな言葉を投げつけて、それからまるで人が変わったように笑顔になると私に抱きついてきたのだ。
「エヴァ？」
目の前で何が起こったか分からず、目を白黒させていた私に抱きついてきたエヴァの力は強すぎるくらいで、痛みすら感じた。
「会いたかったよ、ずっと」
そして、その言葉に疑問を感じた。
『会いたかった』？ずっと一緒にいたじゃないか、そう言おうとして見下ろしたエヴァの顔を見てその言葉は出てこなかった。

私を見てうっとりとする表情を浮かべたエヴァにぞっとする悪寒を感じた。
「…だけど、今はまだ駄目だね。もう、アイツが僕に気がついた。」
「アイツ？」
エヴァは私から体を離す。
「もうすぐこの街はなくなっちゃうから。早く逃げて、なるべく遠くに。」
その言葉の通り、その数分後には呪われた街は跡形もなく消えた。
『アイツ』が誰なのかは今でもよく分からない。
でも、私は気が付いた。
壊れた残骸すらなくぽっかりと空間ごと消えた街、それは罪人（アーク）の巡礼地（ヴェル）の末路との符号。
そこに共通するのは暴走した私の灰色の魔力と、エヴァの中で目が覚めた力。それは何だ？

「少しだけでも会えて良かった。千年ぶりでも例え転生しても貴方は貴方だ。」

そして、そう告げたきり、意識を手放し昏々と眠り続けたエヴァが目を覚ましたのは丸一日後。
だが、私はエヴァの様子が明らかに可笑しかったことを、その時のことを忘れている目の覚めたエヴァには告げることができなかった。カイにも黙っているように言い含めた。
私は怖かった。それを言うことで、私の知っているエヴァが消えてしまうことが。
でも、やっと分かった。
あれは神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）だった。
そして、ニールティアーを消し去ったあの力は灰色の魔力だったのだ。

「万象の天使が神に忌み嫌われた子供なのか？」

たどり着いた結論は、悪魔が告げた言葉と同じもので、自分で口にしてもどうにも納得いくものではなかった。

先程までの記憶を見れば万象の天使とラーオディル（ラーオディル・オヴァラ）は同時に存在していたし、そんな様子は微塵も感じられなかった。

だが、悪魔の封印を解いて見せた彼の力は、私と同じく灰色の魔力に深く侵されている証拠。

彼とラーオディルが同一人物だというのであれば、その説明はつく。

「正確にいえば、二人は一人だった。だが、神の傲慢さが、神の罪が、一人を二人にした。一人は全てに愛されるための存在。一人は全てに忌み嫌われるための存在。相反するほどに違う二人に別れたんだ。その答えはこの続きを見れば分かる。」

先ほどしたのと同じように悪魔は指を一つ鳴らすと、止まっていた記憶が再び時を刻みだす。

「貴方はそれ以外ならば全てが望むままなのに…どうして黒き神を愛した？どうして黒き神の愛を受け入れた？神同士の交わりは世界の理で禁じられている。なのにどうして交わった？子供を産んだ？」

記憶の中の悪魔が苦々しげに吐き捨てる。

白き神は狂った表情のまま、どこか何かに陶酔したように彼を見上げる。

「どうして？誰かを愛することに理由がいるというのですか？愛した人が偶然、同じ神であっただけなのにどうしてそれが許されないの？」

愛おしそうに醜い黒き神の顔をさする白き神。

白き神の中の狂気は激しさから穏やかなものへと変わりつつあった。

しかし、穏やかながらもはらむ狂気は不気味ですらあり、背筋に

寒気がはしった。

「ならばどうしてその結果を受け入れなかった？愛する男との間に生まれた子供の醜い部分をどうして切り離したりした？神に忌み嫌われた子供と無色の神ヨイ…貴方は二人をどうするつもりだったのだ？」

その言葉を聞いて理解する。

やはり無色の神など存在しないのだ。

無色ではなく本来持っていた灰の色を取り除かれた神、それが無色の神ヨイ、その記憶はなくとも万象の天使が人形として生まれ変わる前の存在。

本当ならば彼こそが灰色の神と言われるべき存在だった。

禁忌の末に生まれた存在こそが、理に反するべき魔力の根源であったのだ。

そして、神という器から切り離されたラーオディルは人間でありながら、灰色の魔力の根源となった。

二人は一人。

まさか、最高神が世界の理を破る禁忌を犯していたとは思わなかった。

いや、白き神も黒き神もともにそれを破るために灰色の魔力を求めていた。

自分の持っている力だけでは飽き足らず、もっともっと強い力を強い願いを叶えるために求めていた。

だが、その力すらも自分たちが犯した罪の結果だというのか？

ならばどうしてその罪を切り離した。その罪を見捨てたというのであろうか。

「だって禁忌の証を残す訳にはいかないではないですか。だから、子供も罪の部分だけ切り離して捨てました。そうしなければ私の手元に置いておけなかった。まさか、その罪が灰色の魔力になるとも知らずに…でも、もう全ては済んだことではないですか。私もウ・ダイももうあの子にさびしい思いはさせないわ。親子三人、今度こ

そ幸せに――――」
「だってじゃねえ!!!」
悪魔が絶叫する。
その声に怯えた子供のように白き神の表情が強張った。
「捨てられた子供はどうなる？いらない部分だと捨てられて、『忌み嫌われた』と名付けられて…その子供の気持ちを考えたことがあるのか？俺がアイツを拾った時の見ているだけで泣きたくなる、叫びたくなるくらいの絶望をお前は考えたことがあるのか？今からがよくても、あんたがラオを捨てた事実は永遠に消えないんだぞ？」
捨てられた子供を拾ったのが悪魔。
彼はそれを拾って育てた…そういうことなのだろう。
そして、だからこそラーオディルの悪魔への想いは強くなった。
それこそその体が失われ、転生した私にさえ執着するほどに…。
愛情を持って育ててくれた両親がいた私にはそんな生い立ちには無縁であり、ラーオディルの本心のほどをはかり知ることはできない。
だが、想像するだけでそれは彼の心に大きな傷を残したに違いないのだ。

――――それこそ両親の一族である神全てを滅ぼしたいほどの深い憎しみを抱くくらいに

「でも、それは貴方だって同じでしょう？ヴォルツィッタ、貴方もあの子の強い思いに耐えかねてあの子を手放した。あの子の力が引き寄せる絶望を恐れてあの子を捨てた。あの子は神に忌み嫌われた子供（ヴァラ）。全てから見放され、全ての不幸を身にまとう子供。貴方が自分さえ犠牲にしてラーオディル（ラーオディル・オ）を見捨てなければ、こんなことにはならなかったのではない？」
その言葉に悪魔の表情から感情が消えた。
「貴方も所詮は私と同じ。全ては自分のために行動しているにすぎ

ない。あの子のために自分が不幸になることなんてできない！でなければ、どうしてさっき貴方は全てを終わらせようとしなかったでしょうか？貴方は一体何を考えているのですか？…まさかっ！！！」

黒き神を胸に抱き怯えるような仕草で彼女は言葉を続け、それから重要なことに気が付いたと言わんばかりに大声を上げた。

「白き神！？それはどういう意味なのですか？奴は異能者との対面で一体何をしたというのですか？！」

そのただならぬ様子にエンシッダが悪魔と白き神の間に入って、彼女を守る様に立ちはだかる。

「あっ…うう」

しかし、突然に白き神は声を発することを止めた。

それは恐らく彼女の意志とは別のものなのだろう。

まるで溺れた魚のようにパクパクと口を動かし、顔を真っ赤にしいかにも苦しそうだ。

「白き神？どうしたというのですかっ？！」

そして、白き神はたちまちに小さく幼く縮んでしまったかと思えば、気が付けば生まれたての赤子の様な姿となった。

――――オギャアオギャア

広く続く空間にものを語ることもできぬ、ただ生きているだけの赤子の強い泣き声が木霊する。

「きっさまぁ！なっ何を！？」

動揺と怒りに口がまわらないエンシッダ。それとは対照的にひどく感情が見えない悪魔。

「白き神には本来の姿に戻ってもらっただけだ。生を象徴する赤子…それこそが白き神の本当の姿。」

輝くばかりに美しい赤子と今にも老い果てようとする醜き翁。

相反する生と死。しかし、それは繰り返される生き物の営み。

その二つが交わる姿は強く私の心に焼きつき、そして、次の瞬間

に爆発した。
「?!!」
轟音とともに白黒二つの神から強い力が発せられる。
「エンシッダ、教えてやるよ。灰色の魔力、異端の力は神と神の混じり合いにより生まれる。だが、それがどうやって混じり合うのか知っているか?それは神の本性と本性が重なった時さ。だから、神は普段は本性ではなく人型をとって対面するんだ。そうしなければ神と神は瞳を見つめ合うことすらできない。」
本性と本性…とは、正にこの今の状況ではないのか?
嫌な汗が背中を伝ってゆく。
からからに乾いた喉で生唾を飲み込んだ。
「だが、誰かを愛すると皆貪欲になる。相手のことの何一つ知らなくては安心できない。しかも、それが愛する者の本性であれば尚更だ。だから、それが禁じられるとかえって知りたくなる。そして、何十年も前に灰色の魔力という名の、後に二人に別れる赤子が産まれた。そして、彼の兄弟が今誕生した訳さ。」
二人の神の間で巻き起こった力の爆発は、悪魔の言葉通りすぐさま大きな灰色の魔力に形を変えた。
それもただの灰色の魔力ではない。
『キアアアアア』
耳が痛くなるほどの高い泣き声は、白き神の赤子の泣き声とは異質なるもの。
悲しみや怒り、絶望、全ての負の感情がむき出し叫びが空間を支配し、形作られる魔力はまるで人の形をとり、その人型は身もだえながら広い世界(ヴァラヴィーダ)の胎内の中を飛び回る。
醜く腐り落ちたような灰色の魔力のその結晶の姿に私は見覚えがあった。
「朽ち果てた白?(ヴォルガナ・ニルヴァーナ)」
人の形はしていても人になり損ねた腐りかけたその姿は、現実の世界(ヴァラヴィーダ)の胎内の中で見たそれに間違いなかった。

「悪魔！貴様は何がしたい？！灰色の魔力をまた生み出させて世界を破滅させたいとでもいうのか？！！！」

やむことのない悲鳴は激しさを増し、二人の神から生まれる灰色の魔力は尽きることを知らず朽ち果てた白（ヴォルガナ・ニルヴァーナ）は大きく悲惨に成長してゆく。

それを青い顔をして見つめながらがエンシッダは悪魔に怒鳴った。

「まさか、俺はそんな破滅願望は持っていないさ。３人の王と約束したように世界を守るために、これから東方の楽園（サフィラ・アイリス）とともにこの灰色の魔力は全て封印するさ。」

悪魔が何を考えて行動しているのかなどと、もうこの時の私には理解できる範疇をはるかに超えていた。

自分で仕掛けて新しき灰色の魔力を誕生させたのにもかかわらず、今度は自分でそれを封印するという。

何かに気が付いたような白き神、消えたラーオディル、呆然とした万象の天使、死にかけた黒き神、そして、産声を上げた第二の灰色の魔力・朽ち果てた白（ヴォルガナ・ニルヴァーナ）…その理由の全てが欠落した異能者との邂逅にあるに違いない。

悪魔の様子は全てあの時を境に変わっているのだ。

私は記憶の傍観者である悪魔を睨みつけた。

「あんたは一体何がしたかったんだ？」

支離滅裂としか言いようのない悪魔の行動の理由を聞くなら、本人に聞くのが一番手っ取り早い。

「さあ？でも、これで分かっただろう？悪魔の第二の封印を解けば第二の灰色の魔力、それもラーオディルのように意志を持っているかも定かではない、暴走の赤子が解き放たれる。これが世に出れば、間違いなく世界はあっという間に灰色の魔力に喰われ朽ちるだろう。エヴァンシェッドがお前にそれはできないに違いないと告げた理由も理解できただろう？」

万象の天使の意図は理解できた。

そして、この記憶を通して彼の中に感じた違和感もおぼろげなが

らに理解した気がする。
「質問をすり替えるな！私が聞いているのは悪魔！あんたの思惑だっ」
私の中にいる悪魔は実に悪魔らしく笑った。
果たして彼はこんな風に笑う男だったか？
「それは今から分かる。そのためにお前がここにいるのだからな。」
厭らしく笑ったその表情に私は自分がここにいる理由を想い返した。

――――悪魔の封印を解く

だが、それは果たして一体誰のために？
そして、私は再び意識が遠のくのを感じた。

第１３８話　絶望が貴方を殺す　１

私の絶望は貴方の胸を貫くことだろう
貴方が私に与えた絶望は、貴方の愛が引き起こした悲劇
その絶望は貴方の傲慢により生まれ至った愛の結晶
しかし、愛だからと貴方が私にもたらした絶望は許されるのだろうか？
絶望を生みだしたその愛は、いつしか回りまわって貴方を殺すことだろう
それが貴方が殺した私の呪い
私の絶望が貴方を殺す

【絶望が貴方を殺す】

「おかえり、ヒロちゃん」

大人の男が『ちゃん』と呼ばれて喜ぶはずがない。
だが、今の私にそれを突っ込む余裕は存在しなかった。
「お前はエヴァか？それともラーオディルなのか？」
万象の天使の姿をしていようとも、私にはもはや彼が万象の天使であるとは思えなかった。
悪魔の記憶から現実世界に返ってきた私は、目の前で微笑む万象の天使の皮を被った存在を睨みつけた。
記憶の中にどれくらい私はいたのか定かではないが、微妙に体が固まっているような気がする所を考えると存外に長い時間だったのかもしれない。

「僕はエヴァでありラーオディルだよ。エヴァは過去の記憶を持たない僕なんだ。」
「だが、万象の天使はお前ではない。」
「よく分かるね。」
エヴァとラーオディルが同一人物であるということには納得できた。
二人はその表に出す感情の様子は違っても、根本的なところで似ていると感じたからだ。
だが、万象の天使とはそれが感じられなかった。
「僕とエヴァンシェッド、いや、ヨイは元は同じ人間だったけど、あまりに分かれていた時間が長すぎた。体も意識も完全に別に分かれていた僕たちそれぞれの魂はそれぞれに変質をして、今さら同じ体、同じ意識になったところで一つになれるはずがなかったのさ。」
千年…いや二人が別れていたのはもっと長い時間。
それは元は同じとはいえ、二人はあまりに違いすぎたということなのだろう。
「こうして一つに戻っても魂がしっくりこない。溶け込まない魂の中に俺とエヴァンシェッド、二人の意識が混在している感覚。それでも僕とエヴァはほとんど同じと言ってもいい。エヴァはただ昔の記憶がないだけの僕と言うだけのことだから。」
それでも記憶というのは非常に大きい。
魂が同じでも万象の天使がヨイでないのと同じように、やはりエヴァとラーオディルの二人も違うものなのだというのが私の見解だ。
「どうして私にあの記憶を見せた?」
冷静に物事を考えている一方で心臓は未だに早鐘のように鳴り続けている。
「それが必要だと思ったから。貴方は自分がしようとしていることの重要性に気がつくべきなんだ。」
「肝心な場面は見せないでか?あれを見て私が分かったことはただ一つ、封印を解けば世界が終るということと、朽ち果てた白に纏わ

る忌まわしい神の恋話だけだ！」
　万象の天使だかラーオディルだかわからない人物に対して私は吠えた。
　だが、いつものようにあの歪んだ笑みで私を見下すのかと思いきや彼の美しい表情は不可解そうに私を見るのだ。
「？どういうこと？僕は貴方に全てを見せるつもりで貴方の魂に干渉したはずなのに…貴方は異能者との場面は見ていないということ？ヴォルが封印した理由も？」
「悪魔が私に何も見せなかったさ。」
「…ヴォルが？まさかっ！彼にそれほどの力がまだ残っているっていうの？！千年前、彼の魂から砕かれて、それが再構築されてヒロに転生しているはずなんだよ！？ヴォルの意識がそんなに力を持っているなんてありえない！」
　その酷く驚いたような表情に偽りはないように感じたが、彼が驚いている理由が分からない私は眉をひそめるしかない。
　なにしろ悪魔はずっと私の中で膿のようにじくじくと痛みを伴って存在している。

「それはお前の思い込みだよ。ラーオディル。」

　混乱する子供と私の間に現れた新たなる登場人物。それは
「エンシッダ！」
「やあ、久しぶりだねラーオディル。エヴァンシェッド様の意識を完全に掌握したのか…さすが君のヴォルツィッタへの執着は大したもんだ。」
「今さら何しに来たんだっ！お前に出来ることはこれから先何一つない！！」
　何処からともなく現れたエンシッダ、そしてその後ろに人形のように佇むヴィ・ヴィスターチャ。
「だけど、知りたくない？ヴォルツィッタが何処にいるのか？」

「ヴォルはもういない！罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）で魂を粉々にされたんだっ！どんなに僕が望んだって彼が返ってこないことは分かっている。僕を惑わそうとしても無駄だ。」

それを自覚していてもラーオディルは、その面影を求めて私を求めている。

だが…悪魔は確かに私の中に存在している。

魂が壊され再構築された私という存在の中に本来ならば悪魔は存在しないのか？じゃあ、私の感じている悪魔は？

『――――るよ』

疑問に感じた瞬間に何処からか声が聞こえた気がした。

「そう…ラーオディルがそういうならこの話はもうやめよう。だが、俺はヒロに用がある。彼に最後の引き金を引かせるためにね。」

そうしてひたりとエンシッダに見据えられて私は体を震わせた。

この嫌な男とは何度となく対峙してきたし睨みあったこともあった。

だが、こうしてここまでがっしりと視線がかみ合ったことがあっただろうか？

いつも何処か違うところを、遠い先を見ているようなエンシッダが初めて私を見た…そんな気がした。

そして、かみ合った視線の先に彼の濁りきった瞳の色に寒気を覚えた。

「私に何を――――」

「何か変なことをしたら、僕はお前を許さない。殺す！」

そういって万象の天使の姿をしたラーオディルが私とエンシッダの間に立ちはだかる。

その姿はかつてのエヴァと重なるが、少なくとも巨大な力を有さなかったエヴァはこんな物騒なことは言わなかった。

「ヴォルツィッタが存在している以上、ヒロはヴォルツィッタとは

違う。なのにそのヒロをお前が守る理由は何だ?ああ、いっそヒロを消してしまってヴォルツィッタを表に出せばその理由ができるかな?ヴィス…やってくれ。」

　くすくすと楽しげに笑って言いながら、エンシッダはこれまで気配すら消していたヴィ・ヴィスターチャに声をかけた。

　その瞬間にスイッチが入った人形のように彼女はか細くも確かな声で歌いだす。

白き光より堕ちた翼は黒き寝台で眠る
千の夜千の朝の果て
其(そ)を白き光より引き千切りし
黒の血が其(そ)を永き眠りから目覚めさす
目覚めし翼は契約という名の楔を身に刺し
白き光に還るのだ
しかして翼の永い旅は終わを告げ
世界の胎動が全ての始まりを告げる

しかして世界の胎動は汚れた神の目覚め促す
全ての始まりは破滅の階段を転がり落つ
翼の帰還
其(そ)は始りにして終わりを告げるもの
東方の楽園(サフィラ・アイリス)の封印を解くもの

しかして始まりと終わり・再生と破滅を決めるは
目覚めし翼が白き力に刺したる契約という名の楔
世界の全てを握りし鍵
世界は楔の存在に全てを委ね
楔は全ての始りにして終わりなるものと相成(あいな)りなん

　それはかつて聞いたヴィ・ヴィスターチャの未来を予言したとい

う歌。
それを聞いた瞬間に胸が大きく一つなった。
『ああ、やっとここまでこれた』
そして、腹の底から低い声が聞こえた。
「!?」
驚くと同時に体に強い痛みがはしった。
何が起こったか分からないままに、強い痛みに膝をつき倒れこむ。
「どうしたの!?エンシッダ何をした!?」
「俺に何かしたらお前の大切なヴォルの身代わりがどうなってもしらないぞ?」
「くそっ!」
何が急に起こったかも分からず、ラーオディルの私を心配する声が聞こえてくるが、それに答える余裕すらない。
『俺は千年、この時を待っていたんだよヒロ。俺の魂をもった存在が再びこの地を訪れることを。』
その声は間違いなく悪魔ヴォルツィッタ。
だが、彼という存在がここまで私に影響を与えたことなど今まであっただろうか?
先の記憶の中の悪魔が急激に私の中で大きくなり、驚き以上にせりあがる恐怖を感じた。
「で…出てくるなっ!」
私は急激に強くなる悪魔の存在に痛みに耐えながら叫ぶ。
「さすがヒロ。ヴォルツィッタの力が強くなっている今でさえ抑え込む精神力が君にはある。軟弱なエヴァンシェッドと君の違うところがここだよね。だけど、引き金を引いてもらうためには君には退場してもらう他ないんだよ。」
過去の記憶の中で不気味な気配を見せた悪魔。
その悪魔の思惑を知っているらしいエンシッダは、私から悪魔を

引き出そうとしている。

――――ではその悪魔の目的とは何だ？

痛みは遠ざかることもなくその痛みに気が遠くなっても、その後に襲い来る強烈な痛みにまた意識を引き戻される。

その繰り返しに次第に体力も奪われ悪魔に意識を乗っ取られるより先に、私の命が潰えてしまう気がする。

だが、痛みに苦しむ私を前にエンシッダがいつものあの嫌味な笑みで私を見下ろすと手を一つ叩く。

すると空中に大きな鏡の様なものが現れ、苦しむ私の姿が大きく写ったと思った瞬間に鏡の画面が変わり、どこかで見た光景が目の前にうつされた。

「き、黄色の女神？」

そこには永遠に神の子（マイマール）の命となった聖櫃に眠る女神ディルアナが、安らかな表情で映し出されていた。

「さあ、最高のショーを君に見せてあげるよ、ヒロ。」

エンシッダがこれから何をしようとしているかなど、私が知る由もない。

ただたった一つ分かることは、決して私にとってそれが最高ではないということだけであった。

第１３９話　絶望が貴方を殺す　２

「ショー…だと？」

絞り出した声は自分で聞いても酷く掠れていて苦しそうであった。

皮膚の内側から悪魔が突き破ってくるような、自分が限界まで膨張させられている感覚は苦しみと同時に私に恐怖を与えた。

だが、今この状況で自分の恐怖に我を忘れて、エンシッダを無視することなどできるはずがなかった。

「そう。俺が千年前から計画していた最高のショー。神と人間の楽しくて悲しい物語の結末さ。ああ、そのためにはこっちの舞台の様子も見ておかなくっちゃね。」

そう言って指を再び鳴らせば、新たな画面が出現する。それは、

「ティアッ…皆！」

そこには万象の天使に攫われるまでは一緒に戦っていた仲間たちが映し出されていた。

天使となりそこねた神・神の子（マイマール）、それに見たことのない巨大な鳥（リーヴァネル）の化物がいた。

見るに鮮やかな青の羽に覆われた化物は、光の具合でその青の色を様々に変える。

しかし、一見すると美しいその様子からは想像もできない圧倒的な力で化物は天使を踏みつぶし、薙ぎ払ってゆく。

画面越しの映像に現実味を感じられず、ただ呆然とする私にエンシッダが声をかける。

「ヒロ。あの化物がアオイ、いや、蒼の神ブルー・ナイツの本性だよ。」

「…アオイが神？」

「そうさ。人と神を掛け合わせる術を造り出した罪深き神。」

アオイのことを人間だと思い込んでいた私は驚いたが、言われてみれば人間だと言われた覚えもないのかもしれない。

だが、神などいないと思っていた世界で、『貴方は神ですか？』なんて問いかけることなんてあるはずもないのだ。

アオイが意図的かそうでないかは別として、私に告げなかった以上は私がその事実を知る術は存在しなかった。

そもそも神がこんなにほいほいと存在しているこの状況が可笑しいのだ。

「アオイが本性を現している以上、人間側の優勢は固いだろう。いいのかい？」

エンシッダはそう言って、あの笑みを浮かべたままにラーオディルに乗っ取られたままの万象の天使を見やる。

アオイらしき化物が上げた獣の如き咆哮が画面から静寂の世界（ヴァラヴ）の胎内（イーダ）に響き渡った。

その勢いのままアオイは逃げまどう天使に襲いかかり、人間軍はアオイの後に続いて残った天使を仕留めてゆく。

不浄の大地（ディス・エンガッド）という名の戦場に生きてきた私だが、これほど多くの人が血を命を流していく様を見たことがなかったから、その凄惨さにただ呆然とした。

戦いの前に覚悟したはずなのに、やはりこうして目の前に突き付けられると現実味が違った。

そんな私をエンシッダの声が呼び戻す。

「お前が背負いきれないほどの罪を背負ってでも守ると決めた一族たちが危機に瀕している…お前はそれでも戦わないのかい？」

万象の天使が答えられないことを知りつつもエンシッダは彼を挑発するように告げる。

「無駄だよ。エヴァンシェッドは全てを諦めた。自分の中にある僕という脅威に戦う気持ちすら彼はなくした。そもそも自分がいなくなると分かっていたから、エヴァンシェッドは全てを準備してここに至っている。自分がいなくても天使たちが戦えるように彼は全てを整えた。」

それを聞いて暗い喜びをエンシッダは露わにした。

「あはははははっ！そうか！！いい気味だっ。それなのに天使は負けそうだけどね！！！」

弾けたように笑い出すエンシッダの表情は、心底嬉しそうで狂気に満ちる。

「俺からイヌア・ニルヴァーナ様を奪った顔だけの天使風情がっ！ただ、ヨイの魂を持っているという理由だけで、あいつは俺からあの方の心を奪った！初めから気に入らなかったんだ！！…奴がもう二度と出てこなくなったかと思うとすっきりした。この手で葬り去れなかった事は残念だけどねぇ。はははっは！」

誰かが消えたことをこれほど何の罪悪感もなく喜べることを私は酷く信じられない気持で見つめ、その狂気に私は一人置いていかれる。

「ははは――はあ…笑い疲れた。あぁ、ヒロ」

そして、ゆらりと私を振り返るエンシッダの瞳は何かに汚れていた。

「失礼。ちょっと色々個人的感情が爆発してしまったかな？さて、ヒロ…君にとってはいいことだよね？このままアオイが頑張ってくれれば人間たちは間違いなく勝利するだろう。人間は新たな大地に踏み出し、運命を生きることとなる。」

――そうだ。私はそのために戦っている。ここに存在している。

なのに、付きまとうこの不安感は何なのだろう？

エンシッダの言うことを信じることは簡単なことなのに、拭い去れない不安感を私は消すことができない。

だから、必死でその不安を打ち消すために私は言葉を紡ぐ。

「それはお前にとっても良いことだろう？人間軍はお前が作り上げたものだ。」

「本当にそう思っている？」

だが、彼は私の不安を煽る言葉を突き付ける。まるで私の不安こ

そが真実だと言わんばかりに。
「ヒロ、君は意外と頭がいいから分かっているだろう？俺の意地が悪いことも。俺が本当は人間の幸せなんか願っていないことも。そんな俺がわざわざこんな面倒な手段を使って戦いを仕掛けたか…その理由を君はずっと疑問に思ってきたはずだ。」
そうだ。これまで何度だって私はこの男に問いただしてきた。
『お前の目的は何だ？』
だが、一度とてエンシッダはその問いに真実を答えたことはなかった。返ってくるのは嫌なあの笑顔だけ…。
――本当は分かっていた
この男がどんなに人間の為だとか言っても、分かっていたから、私は何一つ信じていないつもりだった。
それでもこの男の思惑がどうであれ、ちっぽけな自分でもできることがあると思ったから、せめて目の前のものだけでも守りたいと思ったから私はここまで来たのだ。戦ったのだ。
だが、心のどこかでは、私はこの男を信じていたのかもしれない。だって、こいつも人間なのだから…本当の意味で人間の為にならないことなどするはずがないと、甘い考えを抱いていたのかもしれない。
だから、私はこれほどにエンシッダから告げられた言葉に愕然としている。信じたくないと願っている。
エンシッダが人間を裏切ることなど…あるはずがないと。
「天使側に味方する気か？」
「まさかっ！俺はいつでもイヌア・ニルヴァーナ様だけの味方さ。彼女を守るためだけに俺はただ存在し動いている。」
「何をする気だ？」

「それを君は見届けるんだ！」
エンシッダは体の動かない私の髪を掴むと、ディルアナの映る画面に私の顔を突きつけた。
場面は私がしばし戦場に目を奪われているうちに状況が変化していた。
そこに映るのはあれほど美しかった。いや、今も美しいままなのにどこか疲れ窶(やつ)れ果てた女の姿。
しかし、その瞳だけは何かに魅入られたように爛々と光っていた。
「――――ハクアリティス」
「そう。彼女こそがこのショーのヒロイン。」
耳元に囁かれるエンシッダの声が毒のようだと感じた。
ディルアナの聖櫃の部屋に佇むハクアリティス。
この状況には見覚えがあった。それもつい最近だ。

『今、出してあげるから。』

そして、その予感が当たっていることを、吐息と共に吐き出された声で知る。
ハクアリティスの目的はディルアナの解放だ。
「やめさせろっ！！！！」
理解した瞬間に叫んでいた。
同時に脳裏に知り合った神の子(マイマール)たちの顔が鮮明に焼き付いて、次に砕け散った。
「嫌だね。」
その言葉に逆上した。
体が動かないとか、痛いとか、苦しいとか、全部関係なかった。
「アイツらが何をしたっていうんだ！？」
叫んで喚いて、私はエンシッダを振り払いたい一心で我武者羅に動いた。
だって、もしハクアリティスがディルアナを解放すれば、聖櫃の

外では生きられない彼女は死ぬ。
そして…ディルアナと命を繋いでいる神の子(マイマール)たちもまたその運命を共にするのだ。
『僕らは絶対に勝たなくちゃならないんだ。勝てないかもしれないなんて、微塵も考えちゃならない。』
この戦いの前にそう言い切ったケルヴェロッカの声が響いた。
あどけない顔に浮かんだその決意を、彼の強さを私は眩しく感じた。
「だから言ったろ？最高のショーだって…クックッ」
「何がショーだ！狂ってるっ、お前がしているのはショーなんかじゃない！現実なんだぞ？！ディルアナを解放すれば神の子(マイマール)は死ぬんだろ？！なのに何でっ？」
『誰かを守りたいのなら、自分が生き残ることを、自分を大切にしないとダメなんだよ！！』
残されるものの苦しみを知り、皆で生きるために辛い戦いを選んだまだまだ子供としか言えない少年。
誰かを傷つけることに傷つかないはずがないのに、戦うことを選んだ。
そして、誰かを守るだけではなく、自分を守るために戦うと言ったケルヴェロッカを私は守りたかった。
彼が守りたいと言った仲間を守りたかった。
結局、私は何かを守りたいとか…何かしらの目的や意義がないと酷く不安定になってしまうのだ。
親を失った心の穴をユイアで埋め、ユイアを失った心の穴をエヴァで埋め、そして、そのエヴァを失った心の穴を私は…。
だが、開いた穴の形も大きさも失った存在の数だけ違うにきまっている。
失った大切な人も、その後に出会った大切な人も、誰一人だって

誰かの代替がきくものではない。
だから、私の心は今だって失った大切な人を忘れられない。
それは翼に願わなくたって、大きさは違ったかもしれないが同じだったはずだ。

『なあ、もうこれ以上のものを失うのは辛いだろ？さあ、俺に全てを明け渡せ、もうヒロが傷つく必要はないんだ』

そんな私に悪魔の甘言が囁かれる。
それはまさに悪魔の誘惑。
目の前に迫る絶望が正に私が私として生きることを放棄させようとしていた。
楽になりたいと、悪魔に全てを任せてしまいたいと思わせようとしていた。だけど…
『小娘、証拠にもなくまた現れたのかっ！』
獣の鳴き声と共に響く強い声が私を引き戻す。
「チッ…堕ちた神が気が付いたか。」
「オウェル」
先日と同じようにディルアナを解放しようとするハクアリティスの前に、灰色の魔力で呪いを振り切り本性を現したオウェルが立ちはだかっていた。

第１４０話　絶望が貴方を殺す　３（前書き）

注意：この話にはとてもネガティブな発言が含まれています。苦手は方は注意してください。

第１４０話　絶望が貴方を殺す　３

オウェルは例えディルアナが永遠に聖櫃の中から目覚めることがなくとも、彼女を守る。

それはきっと二度と自分を見つめてくれる瞳がなくても、生きていてくれる…それが最後の希望だからに違いない。

その最後の希望が脅かされる時、彼は自身が灰色の魔力に蝕(むしば)まれようとも、何ふり構わずそれを奪うものを排除する。

だから、ディルアナの眠る聖櫃を見つめながらうっとりとしているハクアリティスに対して、オウェルは躊躇いなく鋭い爪を振り上げる。

私はその凶刃に倒れるハクアリティスの姿がありありと思い浮かんで咄嗟に目を閉じ、耳を塞ぐことはできないので彼女の断末魔の叫びに身を構えた。

『ギャアアアアアア』

鼓膜が大きく震える叫びは正に断末魔という言葉に相応しいものだったろうが、それはハクアリティスが発したにしてはあまりに低く獣じみたものに感じられた。

私は不思議も思って恐る恐る画面に再び視線を戻す。

「なっ?!オウェル???」

そう。倒れていたのはハクアリティスではなく、神の本性を露わにしたオウェル。

大きな体が床に倒れ、ハクアリティスがそれを悠然とした笑みで見下ろしていた。

『獣如きが汚らわしい。』

そして、そう呟いた彼女の瞳は黄色く光り、その体からは見慣れた色の魔力が溢れていた。

「灰色の魔力!?どうして!!!」

「ハクアリティスは灰色の魔力によって作り出された人形(カレド)。記憶の

ない空っぽの天使ハクアリティスの魂に灰色の魔力を満たして創りだした紛いものだ。灰色の魔力の濃さではハクアリティスの方が上だからね、灰色の魔力を解放させればオウェルが彼女に敵うはずもない。」

――人形（カレド）？

すなわちそれは万象の天使と同じく、死人を灰色の魔力によって蘇らせた存在。

しかし、その魂は死んだ人間のものだが生前の記憶は存在せず、全くの別人と言っても差し支えがない。

「だが、ハクアリティスは万象の天使の妻なのだろう？」

そうだ。初めてであった時、彼女は自分のことを『天使の花嫁』だと告げた。

「生前はね。だが、ハクアリティスは一度死んだ。そして、俺が人形（カレド）として再び命を与えたのさ。天使たちには内緒でね。だけど、記憶を持たないハクアリティスはそれを知らない。彼女は自分のことを本物の万象の天使の妻ハクアリティスだと思っている。自分が一度死んだなんて知らないのさ。そういう教育を施したからね…だけど、別に彼女の誕生は万象の天使が望んだものじゃない。」

今まで感じてきた微妙な違和感が晴れていくのを感じた。

「エヴァンシェッドは人形（カレド）である苦しみを十二分に知っているかね。ハクアリティスを人形（カレド）として蘇らせる力は持っていてもそれを決してしようとはしなかった。」

エヴァンシェッドに執着するハクアリティスに対して、エヴァンシェッドの可笑しいほどに無関心な様子。

そもそもエヴァンシェッドは彼女の存在を知らなかった…いや、知っていたとしてもそれは自分の妻としてではない。自分の妻によく似たエンディミアン…その程度だったという訳だ。

「どうしてハクアリティスを人形（カレド）として蘇らせた？」

エンシッダのことだ聞くだけで胸糞の悪い理由があるに違いない。
「そんな俺ばっかりが悪いみたいに言わないでくれる？もともとはとある人の依頼だったんだよ。君はその人がハクアリティスと一緒にいるところを銀月の都（ウィンザード・シエラ）で見ているだろう？」
咄嗟に思い出されたのはヴィ・ヴィスターチャに嘆き（パシオン）の間へ連れて行かれる途中で見た奇妙な場面。
「偽の白き神…と天使？」
そうだ。あの後、あまりに様々なことがあり頭から抜けてしまっていたが、私は銀月の都（ウィンザード・シエラ）で偽の白き神とハクアリティス、そして見たことのない天使が何やら揉めている場面を盗み見た。
「白き神の名を偽とつけてもあの女の名として語るな。あの偽物はケルシーと言う。」
私が白き神だと信じていた女性が偽物改めケルシーだと知って、エンシッダのケルシーに対する態度に感じていた矛盾もいくらか解消される。
「まあ、それは今はいいとしよう。話を戻すとハクアリティスを蘇らせろと依頼してきたのは、君は彼を直接知らなかったな。大地の天使ラインディルトさ。」
「大地の天使？神と契約せし天使（ファギュラド）が…どうして？」
万象の天使を長として彼に従っている（いや、天使たちも一枚岩ではなかったが）三大天使の一角を担っている天使が、どうしてハクアリティスを蘇らせたりしようとしたのだ？
「大地の天使はハクアリティスを愛していたのか？」
万象の天使は自分の背負う苦しみを愛する人に背負わせたくないから彼女を蘇らせなかった。
しかし、万象の天使と同じ気持ちを持つものが他にもいたら？
万象の天使のそんな様子を寧ろ歯がゆく感じている存在がいるとしたら？
そんな私の推測をエンシッダはせせら笑う。
「君は素直すぎるな。蘇らせるから愛…気持ちは分からなくないが、

君みたいな愚かなほど素直な男には永遠にあのひん曲がりすぎた天使の感情は理解できないのかもしれない。」

素直というのは褒め言葉だと私は思っているが、その前に『愚かなほど』なんて修飾語が付いてしまっては台無しだ。

「どういう意味だ?」

「ラインディルトはハクアリティスを愛してなどいない。反対に憎んでいた。憎んで憎んでどうしようもない感情を抱いていたよ。まあ、強すぎる憎しみはある意味愛情に勝る執着になる時もあるからね。少なくとも並々ならぬ感情を抱いてはいたよ。どうしてだか理由を知りたいかい?」

私は首を振った。

自分の今の境遇だけで嫌というほど振り回されているというのに、これ以上誰かの事情で振り回されたり悩むのはごめんである。(とか言いつつ、いつも気が付くと巻き込まれている気もするが)

だが、そんな私を見てにやりとエンシッダが嫌な笑みを浮かべる。

「じゃあ、教えてあげるよ。」

いやいや、だから聞いてないよ…とは体もろくに動かせない今の私には突っ込むこともできやしない。

「ラインディルトが愛しているのがエヴァンシェッド…だからさ。」

はっとして今はエヴァンシェッドの意識のない彼を見た。

そこには私を人質(?)にされて動けずにいるラーオディルがいる。

ラーオディルは顔を嫌そうに歪めた。

「ふふふ。そんな嫌な顔をするなよ、ラーオディル。君がヴォルツィッタを想っている感情と、ラインディルトがエヴァンシェッドを想う感情にそう差があるとは思えないよ?」

「違う!」

「まあ、どんなに凶悪だろうが親の愛をヴォルツィッタに求めているだけの君とラインディルトの感情を一緒にするのは可哀想か。彼がエヴァンシェッドに求めるのは性的な面も含めているわけだしね。

」

別に誰が誰を愛そうが、とりあえず自分が巻き込まれなければ気にしない。

さて、そういう愛情を大地の天使が万象の天使に向けていたとして、彼の妻であったハクアリティスを憎んでいたというところまでは納得しよう。

しかし、その感情の行き着く先がどうしてハクアリティスを人形（カレド）として蘇らせるところに行き着く？

それも万象の天使の天敵ともいえるエンシッダに協力を求めてまで、それはなされなければならないことなのか？

「ラインディルトの感情がやはりヒロには理解できないだろう？」

例えばハクアリティスを万象の天使のために蘇らせたと仮定する。

でも、ハクアリティスの所在は彼からも万象の天使に恐らくは告げられていないのであれば、それはどう説明すればいい？

そもそも万象の天使はハクアリティスの人形（カレド）として復活は望んでいなかったはずだ。

そして、万象の天使がヨイでないという自覚がある以上、人形（カレド）であるハクアリティスを自分の妻であると認められるはずもない。

もし、本当の意味で大地の天使が万象の天使を愛しているというのであれば、そんな苦悩に万象の天使を突き落とすことをするだろうか？

いや、これは全て私の感情に基づいての推測にすぎず、エンシッダに言わせれば私に大地の天使の感情が理解できるはずがないのか。

「ラインディルトはね、エヴァンシェッドの愛した女性を自分のものにすることで、自分もエヴァンシェッドを愛し愛されている錯覚を手に入れようとしたのさ。エヴァンシェッドを自分のものにできないことを理解していた彼はせめて、彼の一番愛したものを手に入れようとした。そして、貶めようとした。」

全くエンシッダの言っている言葉の意味が理解できなかった。

「その顔は全然理解できてないでしょ？うーん、もっと簡単にいえ

ば…ああ、自分の憧れる人の好きなものを自分も好きになりたい。そうすることで憧れる人に近づけるような、その人と同じ気持ちになれている気がする…そんな感情さ。」

例えばそれが好きな食べ物とかであれば、理解できるような気もする。

でも、私はそれに人間を置き換えることにどうしても拒否感を抱く。

愛した人の愛する人を好きになる…それができることはある意味最大の愛情なのかもしれない。

叶うことのない愛を昇華させるために、愛する人と自分の恋敵である人をも愛する…そうすれば誰も憎まずにいられるかもしれない。

だが、その果てにその人を愛する人から奪ってしまっては誰も救われない。

蘇ったハクアリティスを自分のものにして、大地の天使は満足できたのか？

そうしてハクアリティスもエヴァンシェッドも傷つけることで彼は満足できるのか？

私には決して理解できない感情だと思った。

「ははっ！だから言ったでしょ？ヒロには永遠にラインディルトの行動は理解できないさ。エヴァンシェッドの愛情を得ることが、どんなに努力してもできないと悟った時、さっき言った感情とは別にラインディルトは愛とは別のものでエヴァンシェッドの中に残しかないと思い至ったんだ。」

ハクアリティスを自分のものにして、万象の天使に憎まれようとしたということか？

愛ではなく憎まれることで万象の天使に忘れられないようにした？

「愛しているから大切にしたい幸せにしたい。それは所詮まっすぐに生きてきた綺麗な人間が思うことだけ…誰にも愛されたことのない存在になってみればわかる。自分が暗い汚い、そして御しがたい感情の中で溺れそうになる感覚。その中でたった一つ見つけた光に

愛されないと絶望した瞬間、愛でなくてもいい、憎しみでもいいからその人の強い思いが欲しい。そうして、箍が外れた人間は全てを抑える術を忘れてしまうのさ。誰しもが最低だと思うことでも平然と行ってしまう。それこそ…この俺のように…ね。」

小さく萎んでいく言葉の最後を聞いて私はエンシッダをはっとして見ようとしたが、しばし視界から外れていた銀月の都（ウィンザード・シエラ）を映していた画面を、床に這いつくばる私の前に出現させエンシッダは私の視界から顔を隠した。

そこにはうっとりと夢見がちに微笑むハクアリティスが、逆る灰色の魔力により浮かび上がりディルアナの聖櫃に触れている姿が映し出されていた。

淡い黄色の光が満ちる部屋で、ハクアリティスの瞳の色だけが異様なほどまでに輝く。

『ああ、彼女を解放できればエヴァンシェッド様は私の元に帰ってきてくれるのね。ラインディルトも私を解放してくれると言ってくれた。』

嬉しそうな声色。

そう呟いて笑う彼女は、何処にでもいるただ恋をする普通の少女なのかもしれない。

だが、彼女は知らない。その行動の先にある、あまりに多くの悲しみを、苦しみを、憎しみを。

「そんなのは嘘だけどね。」

エンシッダの酷く楽しそうな声があまりに無常に私の胸を抉る。

彼女は何も知らない。何も知ろうとはしない。

ただ、自分の都合のいい言葉だけを信じ、そう信じるようにエンシッダやラインディルトに唆されているにすぎない。

そうして利用する輩が悪いのはもちろんだが、だからといって決して彼女が許されることはないだろう。

そして、それを止めることができない自分が私は一番許せない！

「やめさせろぉ！！！」

オウェルの登場により静かになっていた私は再び暴れ出した。
「ディルアナには灰色の魔力を纏う神オウェルがいるからね…俺やラインディルトでは本気を出された彼に勝つのは正直難しい。だから、灰色の魔力で彼に勝るハクアリティスにこの大役を任せることにした。」
しかし、私など無視してエンシッダは悠然と言葉を続ける。
「さあ、ハクアリティス！黄色の神ディルアナを解放するんだ。」
そして、その言葉が聞こえているかのようにハクアリティスは聖櫃に触れたまま灰色の魔力を増大させた。

――ギギギィ…

千年もの長きにわたり開くことのない聖櫃がゆっくりと重々しい音とともに開き出す。
『頼むっ！やめてくれぇえええええ！！！！！』
ハクアリティスの灰色の魔力に倒され、縛り付けられたオウェルの絶叫が木霊する。
彼は決して届くはずのない腕を伸ばし聖櫃が開くことを止めようとするが、彼の願いは何一つ届くことはない。
そして、それまで部屋を満たしていた淡いディルアナの魔力の光が、目を開けていられないほどに強い光を放った。

第１４１話　絶望が貴方を殺す　４（前書き）

注意：この話には暴力表現や暴力行動の描写があります。苦手な方は避けてください。

第１４１話　絶望が貴方を殺す　４

もしこれまでの全ての事柄が、エンシッダによる私を絶望させるための計画であるというならば、まさに拍手喝さい大成功としか言いようがない。

足元から這い上がる絶望は私という存在を脆弱で小さなものにして、エンシッダの目論み通り私はもう後少しで悪魔にこの身を明け渡してしまうだろう。

開いてしまった聖櫃からまるで羽が舞い降りるかのように、ゆっくりとした速度で堕ちてゆくディルアナは美しかった。

しかし、その美しさと引き換えにエンシッダによって突きつけられたもう一つの画面を見た瞬間に、私は声にならない叫びを上げた。

それまで天使と戦っていた神の子（マイマール）たちがまるで糸の切れた人形のようにぷっつりと意識を途絶えさせて倒れていく姿は、いっそあまりの不自然さに滑稽なくらいで私は信じたくなくて首を激しく横に振った。

『ケルヴェロッカ！？』

ティアの鋭い悲鳴が耳に届く。

人間軍のほとんどは神の子（マイマール）で形成されていたが、神（リーヴァ）になりそこねた存在（ネル）や人間も戦いには参加している。

その全てが自分の近くにいた神の子（マイマール）の名を呼んだ。

聞き覚えのある名前もあれば、知らない名前もある。

『自分を守ることが、大切な人を守ることになる。』

ケルヴェロッカの言葉が何度も何度も頭の中で繰り返された。

私が忘れた大切な眩しい何かを確かに持っていた少年が、どうして死ななくてはならないのだろう？

「あ――――」

言葉は出ず音だけが私から漏れる。

ティアの混乱した様子に次いで、倒れて動かなくなったケルヴェロッカの姿がズームアップされていく。
主人の異変にケルヴェロッカの子犬が彼を小突くがケルヴェロッカは全く動かない。

――――だって、ケルヴェロッカは死んだ

聖櫃におさまった神は死をもってしか、そこから解放されることはない。
聖櫃の中にいる限り命は永遠に続いていくが、その瞳はそれと同じだけ開くことはない。
終焉のない神にとってまさに死の牢獄…それが聖櫃だ。
神の子(マイマール)たちはその聖櫃におさまった神と命を繋いだ。
すなわち聖櫃の中の神ディルアナさえ死ななければ、彼らが死ぬことは体が消滅しない限りあり得ない。
だが、ディルアナが死ねばその全てが消えてなくなる。
そして、今、聖櫃から解放されたディルアナは死んだ…それはすなわち神の子(マイマール)たちの死を意味することでもある。
それは理解している。理解しているんだ。
なのに…感情がそれを理解したくないと私に告げている！

――――どうして！？神の子(マイマール)が死ななくてはならない？！

私はその湧きあがる激情のままにエンシッダを睨みつけた。
「おお、怖い。だけど、神の子(マイマール)を死に追いやった直接の原因は俺じゃない。ディルアナを解放したのはハクアリティスだよ？」
そう言って笑顔のままエンシッダは床に這いつくばる私の背中に乗せた足に力を込め、更に私の前にもう一度銀月の都(ウィンザード・シエラ)を映す画面を突きつけた。
『さあ、ディルアナ。起きて？貴方の愛する人の所に行きましょう

？』

ハクアリティスが意識のないままに床に静かに降り立ったディルアナの肩をゆする。

そこには神の子（マイマール）たちの死など知らないハクアリティスが、のんきな顔をして目覚めるはずのないディルアナを起こそうとしていた。

もし、ディルアナを解放したのがいっそエンシッダであれば、この絶望よりも深い怒りをぶつけることができたのであろうか？

『あら？』

ディルアナを無理やり起こそうとするが、意識のない人間を例え細い女性でも起き上がらせるのはハクアリティスの力では難しい。

ハクアリティスは起こそうとしたディルアナと共に崩れ倒れる。

『もうっ！何な――――』

自分のしたことの重大性も知らないまま呑気に文句を言おうとしたハクアリティスに対して、その時厳しい声が飛ぶ。

『何をやっているんだ！！！』

初めはオウェルかと思った。

だが、画面の奥にいる彼は床に伏せたまま動かないディルアナを見つめたまま動かないままであった。

「誰だ？」

ヴィスを使って未来を全て見通しているらしいエンシッダすらも、その存在の登場は知らなかったらしい、僅かに眉をひそめてその声の主へと画面を切り替える。

そこには私も見慣れた人物がいた。

いや、それどころかこの面子には既視感すら感じた。

「ア…ラシ」

神の子（マイマール）たちと天使と交戦中だと思っていた彼がそこにいた。

それもこの間この場所にいた時と同じように、クリエスを始め３人の人間の子供がその背中に張り付いている。

「どうして…？」

茫然としながら私はアラシのかつて見たこともないほどに強い絶望と憎しみを秘めた表情を目の当たりにする。

アラシは基本的に乱暴でガサツだが、面倒見がよくその心根は非常に温厚で優しい。

だからこそ、彼はあんな我儘なハクアリティスを好きだと…とそこまで考えを巡らせてはっとする。

そうだ。アラシはハクアリティスが好きだったはずだ。

その感情が変化したかは知らないが、その彼女に対してあれほど強い憎しみを抱いた表情をする彼を慮ると私は酷く胸が痛んだ。

『何を怒っているのアラシ？それよりも貴方もディルアナを起こすのを手伝って頂戴。』

しかし、ハクアリティスはアラシの中の憎しみにも絶望にも気が付かない。

その鈍感さが無邪気さが、ある意味彼女の魅力だったのかもしれない。

だが、この時はその全てが裏目に出る。

『貴方はっ！！自分が何をしたのか理解しているのか？』

『何って？ディルアナを箱から出して上げただけよ？箱から出たいって、愛する人に会いたいっていう彼女の声が聞こえたから。』

それはまるで自分がしたことは正しく親切であると言わんばかりの声音だった。

感情を抑えきれていないアラシは、その声を聞くにつれてブルブルと大きく体を震わせている。

彼の感情は既に沸点を大きく超えている。

後はいつそれが爆発をするかどうかという状況だ。

私は画面越しにアラシが強く手を握り締める様子を見て、咄嗟に声を出す。

「だ…めだ――――」

「やめろっ！アラシ！！！」

私の声をかき消して叫んだのは私を踏みつけたままのエンシッダであった。

そして、彼の声は画面越しでも聞こえているのか、アラシはびくりと体を硬直させて衝動に任せた行動を止めた。

「そうだ。お前は俺に忠誠を誓っているだろう？お前の仲間である人間たちの命と未来を引き換えに、お前は俺に魂を売ったはずだ。ハクアリティスは殺すな。」

『…これが貴方の思い描いた筋書き通りの未来という訳ですか？』

俯いたアラシから発せられた声は理性と感情の狭間で大きく揺れていた。

「だったら、どうする？それでも君は何を犠牲にしても自分の仲間を守ると決めているはずだ。」

『神の子（マイマール）には何の罪もないのにっ！！』

それでもまだ『仲間』＝『守るもの』があるアラシは耐えなくてはならない。

愛しさがある故に憎しみが膨れ上がらんとする存在を目の前に彼は堪えなくてはならないのだ…まあ、もしかするとアラシにとってはそれが幸いなのかもしれない。

例え彼女が許されない罪を犯したとしても、愛する人を手にかけた苦しみは彼を死に等しい絶望へ追い落とすであろうから。

『お父さんっ！！！』

その時、高い声が画面の向こうから突き抜けて聞こえてきた。

「？」

画面を横切る小さな影は、ディルアナがいなくなったことにより淡い光を失った聖櫃の一つに近寄った。

「あれは――」

アラシの後ろにいた一人の少女。

先日出会ったクリエスの友人の一人…名前は忘れたが、彼らは一

様に家族が神の子であったはずだ。
『なあっ！アラシ…一体、何があったんだ？？テレサのお父さんは？』
子供に聖櫃の本当の意味を理解することはできないだろうし、大人たちがそれをしているとは思えない。
それでも空気を読むことに敏感な子供であれば、アラシのただならぬ様子に何かを感じるのであろう。
それにディルアナを失った聖櫃はその維持機能を停止しているからだろう、僅かに残っていた聖櫃の中の神の子たちはいつものように安らかな寝顔ではなく、苦悶の表情のままにぐったりとしている。
『お父さんっ！！！お父さん！！』
どんどんと聖櫃を叩く少女の声に父親は瞳を開くこともない。
『アラシ！！』
少年の叫びにアラシが持つ答えはない。
そして、世界の歴史を夢に見るという少女クリエスだけは、恐らく聖櫃からディルアナが解放されている意味を理解しているのであろう、顔を真っ青にして座り込んでいる。
『おと…おかあ…さんっ！』
あふれる涙は堪えることをしないまま丸い頬を伝う。
『何で？どうしてお父さんとお母さんを殺したの！？』
ハクアリティスに慟哭をぶつけるかの如くクリエスは叫んだ。
その言葉に事態を理解していなかった二人の子供がびくりと体を揺らした。
『何を言っているの？』
『女神様を聖櫃から出したら神の子は皆死んじゃうんだよ！？なのにっ！！！』
ハクアリティスもクリエスの言葉にやっと自分が犯した罪に気が付き始めたらしい。
だが、ハクアリティスにその事態に対応できる術はないであろう。
おろおろとあたりを見回わし、美しい顔に憐憫の表情を浮かべる。

『私はただ…ディルアナが――――』
『そんなこと知らない!!』
うろたえるハクアリティスに聖櫃に縋りついていた少女が声を張り上げた。
『返して!!!お父さんを…私のたった一人のお父さんを返して!貴方がっ!!』
年端もいかない子供にこんな声をこんな表情をさせたくなくて、私は戦っていたはずなのに…そう思うと強く胸が痛む。
『待って…じゃあ、ディルアナを元に戻せばいいんじゃない?ねえ、アラシ…そうでしょ?』
子供たちが捲し立てる中、唯一の味方であろうとアラシに近寄りハクアリティスはその腕をつかむ。
『聖櫃に出た瞬間に神は死ぬ。そして、死んだ存在は誰しもが蘇らない…それが神であろうとも。』
纏わりつくハクアリティスを払いのけて、アラシは無情に現実をハクアリティスに突き付ける。
『そんな…だって、私は知らなかった!ただっ、ディルアナが出たいって言うから!!!私は彼女の願いを聞いただけよ!?』
『でも、あんたが皆を殺したんだろ!!!』
アラシの横にいた少年が涙を流し始めたハクアリティスを一喝した。
その声にハクアリティスは怯え、少年の憎しみに満ちた表情に恐怖に青ざめた。
『あんたが誰だか僕たちは知らない。もしかして、本当に女神様が外に出たいって言ったのかもしれない…でも、あんたは間違いなく僕やテレサやクリエスの家族を殺したんだよ。』
アラシに突き放されて床に崩れ落ちたハクアリティスを見下ろして、少年は瞳には涙をたたえ、嗚咽を堪えながら言葉を続ける。
『僕は絶対にあんたを許さない。』
そして、振り上げられた少年の手に私は鈍く光るものを画面越し

に見つけた。
「な？」
何処からそれが現れたのかも分からない。
だが、その冷たい光を放つ存在はナイフのような刃物にしか見えなくて、私はそれを振り上げる少年とその下で呆然とするハクアリティスを画面越しに見つめるしかできない。

――――ドス…

音として表現しにくい鈍い何かが刺さる音が響いて、赤い血が画面に飛び散るのが目に焼きつく。
そして、それを最後に私の意識は急激に遠のく…いや、遠のくというよりは自分という存在が酷く小さく希薄になっていく感覚。
『さようなら、ヒロ…お前という物語はこれで終わりだ。後は安らかに眠れ。』
最後に聞こえた悪魔の声は、絶望に麻痺した私にとってあまりに心地よかった。
なあ、エヴァ？結局、私は何もできなかったよ。
何処から始まっていたかも分からない絶望や憎悪や悲しみの連鎖を断ち切ることも、それから皆を守ることもできなかった。
皆、ただ幸せになりたいだけなのに、どうしてそれすら許されないんだろうか？
好きな人と一緒にいたい、家族と笑いあいたい、友達と遊びたい…みんなみんな小さな願いなのに、そのために誰しもが大きな代償を払って、その幸せのために他では誰かが大きな絶望を背負っている。
こんな理不尽で悲しくて辛い世界を生きることが私の罪であるなら、本当はこれを続けていかなくてはならないのかも知れない。
だけど、もうそれも――――…

第１４２話　絶望が貴方を殺す　５（前書き）

注意：この話には残酷表現が含まれています。そういったものに嫌悪感を抱かれる方は避けてください。

第１４２話　絶望が貴方を殺す　５

――ドス

鈍い音と同時に手に伝わる重い衝撃とあふれ出た血の温もり。

「あ…」

何が起こったか分からないといった貴方の瞳に映る俺の表情は無表情で、まるで他人のようだった。

「貴方を愛してた。」

絶対に告げることのないと思っていた言葉を囁いて、自分の罪の深さを認識する。

――俺は愛していた人をこの手で殺した

「でも、だから貴方のことが憎いんです…ハクアリティス様」

出会った頃、何の不幸せも持ち合わせていないような笑顔に惹かれた。

そして、そんな彼女が抱える苦しみを取り除いてやりたかった。

例えそれが吐き気がするほどの俺のエゴであっても…

「ど…して？アラ…シ――」

＜ＳＩＤＥ　アラシ＞

人間の未来を決める大切な戦いを前に、たった一人の女の尻を追いかけているなど…俺という人間は普通に考えれば馬鹿としかいいようがないんだと思う。

だけれど、『たった一人の女』、その言葉の前に『愛する』という単語を付けただけで、ちっぽけな俺には世界と天秤にかけるだけの価値が生まれる。

世界、神、天使、人間…戦いはあまりに大きな規模で動いている。だけれど、その一つ一つを構成するのは結局のところ個人の集まりであり、個人の感情によってその戦いの意味は千差万別であっていいはずだと俺は思う。

その意味が正しいか正しくないかは別にして、ヒロの戦い、ケルヴェロッカの戦い、そして、俺の戦い。

俺はその意味に世界よりも、たった一人の女を選んだだけのことなのだ。

そのことに何の後悔はない。

明らかに様子がおかしかったハクアリティス様を変質者一歩手前の状況で監視し、戦いの直後にふらふらと一人で出歩く彼女を追いかけた。

神の子（マイマール）の真実…すなわちアオイが語った事実と、神の眠る棺を開こうとしていたハクアリティス様の後ろ姿。

目の前を走る彼女の後ろ姿に、その先日と同じ様子を見てとった俺は嫌な予感がしていた。

だから、つかず離れずの距離を保ち、彼女が何かしたらすぐに止められるような態勢でいた。

今となっては何を言っても仕方のないことなのだが、あの時、止められるときに止めておけばよかったんだ。

まさか、先日と同じように子供たちが俺の後ろについてきていて、途中で天使の攻撃により崩落した瓦礫に子供たちが巻き込まれようとは思わなかった。

目の前の子供たちを見捨てることもできず、幸いに3人とも大した怪我もなかったのでさして時間はかからなかったが、次の瞬間にはハクアリティス様を見失っていた。

それでも俺には彼女が何処にいるのか見当がついていた。

『アラシ！？』

子供たちを助けると、俺の名を叫んだ子供たちを置いてすぐに駈け出す。

あの場所からここまではそんなに距離がない。

彼女は間違いなくあの場所にいる。そして、あの時と同じことをしようとしている。

『彼女がここから出たがっているの。』

そういって聖櫃に手をかけようとした彼女が目に焼き付いている。

贖罪の街で、たくさんの仲間の命を奪っていた聖櫃。

神の子（マイマール）たちにとっては、自分たちの命を繋ぎ力を与えてくれる聖櫃。

聖櫃には様々な思い入れがあるが、それでも道具に罪はない。

要はそれをどのように扱うかなのだろうが、命を対価に作動する聖櫃を俺はやはり好きになることはできない。

だから、神の子（マイマール）になることはやめた。

しかし、はたと思いなおせば、自分だって聖櫃に似たような道具を持つことに気が付く。

そう考えながら力を持たぬ黒の雷（オルヴァラ）に目を向ける。

力を持たなくとも、両親から受け継いだこの黒の武器（カシュケルノ）を俺は肌身離さず身についていた。

昔は力がないことが嫌で、どうしたらこの力を発揮できるかばかり考えていた。

その真実をヒロから聞いた瞬間にそれをすることを諦めた。

――黒の武器（カシュケルノ）は使用者の大切なものの命を対価にその力を発揮する

ヒロが何を誰を対価にあの力を手に入れたかは俺は知らない。

だけど、何か大切なものを対価に力を手に入れては意味がないん

だ。

だって、俺は大切なものを守るために力がほしいのに、それを失ってまで力を手に入れて…それでその後はどうすればいいんだ？

だから、俺は力がないままでもいいんだ。

ヒロみたいに全てを守れる力がなくても、目の前にいる大切な人たちだけを守れればそれで…なのにどうしてだ？

「何をやっているんだ！！！」

俺はその状況を見た瞬間に叫んでいた。

最悪のシナリオだった。

それを避けたくて、仲間と戦わなくてはならないところを振り切って、俺はハクアリティス様を監視し続けていたというのに、俺は結局彼女を止められなかった。

俺が部屋に入った時には、開かれた聖櫃と解放されてしまった女神、そして嬉しそうなハクアリティス様がそこにいた。

もう、何が何だか分からなくなった。

ハクアリティス様を愛しているからこそ、彼女に罪を犯してほしくなかったはずなのに、最悪のことをしでかした彼女に対して今までに感じたことのないほどの怒りと憎しみを感じた。

彼女が俺の感情を、俺の行動を知るはずをないのだから、こんなことを思うのはお門違いだと分かっていても、俺がこんなにも彼女のこと考えているのに、悉くそれを最悪の形で壊していく彼女に裏切られたと感じてしまう。

どんなに他人のことを思っていても、所詮人間は一人で生きている。

誰かを１００％理解できるはずもないし、誰かの立場になれるはずもない。

自分の立場でしか世界を見れない以上、結局は自分の感情が先行してしまう。

恋愛に関して言えば、それが顕著に現れる。
そして、それが顕著であるからこそ、誰かと衝突したり拒否されたりしたとき大きな傷を造り、そして、結びつき合えば強く強く絆が作られる。
だからこそ、自分の思うようにことが進まなかった時、裏切られたと感じた時に自分というものが大きく揺らいでしまうのだ。
揺らいだ自分と共に襲い来る、大きな無力感。
その無力感は俺から思考や理性といったものの全てを奪い去り、気が付けば俺はオーヴからナイフを奪い取りハクアリティス様を刺していた。
彼女に愛されなかった自分、彼女を守れなかった自分、失われたたくさんの命…俺は自分を失うほどの無力感と許されることのない罪の重さを『再び』感じた。
『再び』？
そう思って何か脳裏に引っかかるものを感じた。

『アラシ…お前は俺と同じ間違いは犯すなよ？』

瞬間に俺は全てを思い出す。
俺に罪を犯すなと言ったのは、俺を育ててくれた父親。
その足元に美しい女が横たわっていた。
それは子供時代に俺は封印した記憶。
本当は俺は知っていた…黒の雷（オルヴァラ）の力を解放するための手段も、そしてその力が解放された瞬間も見たことがあったのだ。
横たわる女は俺の母親…だけど、母親は一度だって俺を見て微笑んでくれたことはなかった。
少女のような無邪気で何も知らなかった母親は、不浄の大地（ディス・エンガッド）で生きるには弱すぎた。
父親と出会い、俺を産み…そして、父親の力無さのために美しい母親は強者に攫われた。

そして、晒された現実の過酷さに母親は壊れてしまったのだ。
父親ともに母親を救いだしたとき、俺は初めて自分の母親に出会ったというのに、彼女は俺を見て酷く怯えた。
いや、俺だけじゃない、父親にも、世界の全てに怯えて泣き叫んだ。
美しく、笑顔が絶えなかったという母親の話を聞き続けていた俺は愕然として呆然とした。
今になって思う。
俺がハクアリティス様に強く惹かれたのは、俺の中で求め続けた母親の面影に彼女を重ねていた部分が大きかったのかもしれない。
だが、俺以上に母親の状態を受け入れがたかったのは、彼女を誰よりも愛していた父親。
父親は何とかして元の母を取り戻そうと必死だったが、それは最後まで叶わなかった。
母親を求めて不浄の大地（ディス・エンガッド）をさすらっていたころより、泣き叫ぶ母を宥める毎日のほうが辛かった。
終わりが見えない現実、誰を責めてもいいかもわからない苦しみ、まだまだ子供だった俺を抱えて、壊れた人形のように泣き怯え続ける母親を支え、父親が次第に心身ともに疲労していく様は子供の俺でも分かった。
どうすれば父親を母親を救えるのか？
小さい頃、俺はそんなことばかり考えていた。
無力な自分が嫌で嫌で仕方なくて、もっと力が欲しいといつだって思っていた。
だけど、そんな日々は突然に終わりを告げた、それも父親が母親を殺し、その後自らの命を絶つという最悪の形で…
俺はどうして忘れていた？
いや、忘れていた訳じゃない…俺は自分で思い出さないようにしていたんだ。
そして、母親を殺した父親の手から立ち上った黒い影が、今目の

前で同じ形を現す。
今なら分かる。
これは黒の魔力、黒の武器（カシュケルノ）に宿る黒き神の力。
それがあの時と同じようにみるみるまに女の姿で現れる。
しかし、それはあくまで黒の魔力が女の姿をしているだけ、表情があるわけではなく、しかし、その顔らしき場所には口が存在して、俺を見つめてその口から声が発せられる。
それもあの時と同じ言葉。
「貴方は大切な人の命と引き換えに何を望むのですか？」
笑いたくなった。
こんな形でハクアリティス様への気持ちを確認するなんて…同情でも勘違いでもない俺は間違いなく彼女を愛していた証明がそこにあった。
彼女を愛していなければ、こうしてこの黒の魔力の女が俺の目の前に現れることもなかったに違いない。

『俺を殺してくれ。』

かつて、父はそう言って黒の魔力に貫かれて死んだ。
最後に俺にあの言葉を残して…。
父は間違っていたんだろう…どんな苦しい状況でも命を絶って全てを終わらせることは決して許されることではない。
俺はそのショックで恐らく記憶の一部を欠落したのだろうし、今だってこんな状況でなければ泣き叫び思い悩んだことだろう。
だけど、俺はその父親よりもきっと更に罪深い。
「力が欲しい。」
躊躇いはない。
愛する者を踏みにじって、俺は力を手に入れる。
大切なものを守るための力を得るために大切なものを失って、そして、俺はもう何も奪われないための力を手に入れるんだ。

「了解しました。異端の一族…黒き神の僕よ。貴方にその対価に見合う力を与えましょう。」

今まで一度として感じることのなかった力が黒の雷（オルヴァラ）から迸り、女の姿をしていた魔力は槍のように鋭く形状を変えると、そのまま俺を貫いた。

体に痛みはない。

しかし、体のもっと奥…自分を形成する魂みたいなものが貫かれたような気がした。

『よお…力がほしければ俺様にその体を寄こせ。』

それが誰の声なのかは定かじゃない。

しかし、俺はその言葉に確かに頷いた。

第１４３話　絶望が貴方を殺す　６（前書き）

注意：この話は非常にネガティブな表現が使われています。苦手な方は避けてください。

第１４３話　絶望が貴方を殺す　６

心の中で黒き神の言葉に頷いた途端、今まで感じたことのない力、そして、自分ではない何かが入っている感じがした。

だが、何も感じなかった。

俺はもはや生きながらに死んでいた。

ハクアリティス様を殺した時、俺は自分の中で一番譲れないものを自分で破壊した。

『誰かを守りたい』はいつしか『大切な人を守りたい』へと変化を遂げ、その『大切な人』はハクアリティス様になっていた。

いや、本当はハクアリティス様でなくても良かったのかもしれない。

ただ、父が母を想ったような『大切な人』が欲しかった。

自分しか明確に感じられない世界で、誰かに何かに執着してみたかっただけかもしれない。

そうすればもう誰かに取り残されることはなく、一人で生きていく辛さに耐えなくてもいいのかと思った。

いや…黒の武器（カシュケルノ）の真の力を引き出すことができたのだから、やはり、ハクアリティス様は俺にとって『大切な人』だったのだ。

だけれど、俺は彼女を自分で殺した。

彼女のしたことが許せなかった…彼女によって死んだ神の子（マイマール）とその家族を見ていられなかった…彼女をそこまで追い詰めたエンシッダ様が許せなかった。

だけど、本当は知っている。

それ以上に俺が目をそむけたいのは、そんな彼女を愛していた、『大切な人』にしていた自分。

そのことに後悔をする自分、彼女を愛していなければこんな思いを自分がすることはなかったと思う自分の醜さに嫌悪した。

だから、俺は俺を殺した。黒き神に体を明け渡してもかまわない

と思った。
なのに、浅ましい俺はまだ生きていたいと心の片隅で思っている。
だから、自分の体の中に入ってきた神を無条件に受け入れない。
俺は自分の中の矛盾の中に存在した。
その矛盾に語りかける神。
『俺の名はウ・ダイ。お前に力を与えてやることができる黒き神だぁ。』
神、それは人間が届くことのない崇高なる存在のはずだ。
しかし、神と名乗った男の声は嫌らしく、汚らしかった。
『黒の武器(カシュケルノ)の契約は果たされた。お前は力を得るために愛する女の命を俺に捧げたぁ。俺はお前に力を与えよう…だが、同時にお前は俺の僕になったことを忘れるな?』
矛盾の中の俺は二つの答えを導き出す。
(黒き神の人形となって生きる屍になるのもいいだろう)
(いやだ。俺はまだ俺として生きていたい)
しかし、俺の矛盾は黒き神には届かず、神は言葉を続けた。
『しかし、僕と支配は同義じゃねえ。お前は俺の命令に従う義務はあるが、だからと言ってそれは絶対じゃない。』
義務はあるが絶対じゃない…それは矛盾している言葉に感じた。
その矛盾に矛盾の中にいる俺は反応する。
『俺は何でも命令を聞くだけの駒がほしい訳じゃねえぇ。同じ目的を果たすための仲間が欲しいのさぁ。』
神の仲間?
『俺は人間だとか神だとか種族には大して興味はねえ。ただ、利用できるかできねえか…だ。俺は神…この世界を支配する義務があるからな。そのためにはこのままじゃ困るのさ。エンシッダとヴォルツィッタの野郎は異能者に干渉をする気だ。それじゃ世界が狂っちまう。俺は狂った世界を支配する趣味はねえ。』
本当ならば分からない単語が並んで意味不明な言葉の羅列のはずだったが、黒の神と俺は今意識を共有している状態なのだと思う。

俺の知らない知識が自然と理解できた。
それでも言葉の意味を理解できても、いまいち黒の神の言葉に反応できないのは、多分、俺がバカで黒き神が言葉の割に賢いということなのだと思う。（要は頭のできの違い）
『俺はお前に力を貸す。女を利用したエンシッダに復讐するもよし、このまま人間たちを救うために天使たちに打って出るもいいだろうお。だが、その前にお前は俺の封印を解こうとする輩を全員殺せ。』
黒き神の封印、白き神と共に封印されし朽ち果てた白。（ヴァルオガ・ニルヴァーナ）
その封印の先には世界の中心と世界を支えし異能者が存在する。
その異能者に誰ひとり触れさせない…それが俺の任務という訳だ。

「了解。」

気が付けば躊躇いもなく頷いていた。
それは決して俺が黒き神の僕に無条件でなったという訳じゃない。
僕であり仲間…黒き神の提案した言葉の矛盾に強烈に惹かれた。
理由など、目的などもういらない。
そして、生きる意味をなくした俺に黒き神の突きつけた新たなる目的は甘く優しい言葉であった。
矛盾の中にいるのも苦痛だった。ハクアリティス様の死を繰り返し思うのも、自分を嫌悪し続けるのもうんざりだ。
何も考えず、黒き神の目的に手を貸す。
そして、更に人間のためにも尽力できる…それは全てに見て見ないふりをするための十二分なほどの大義名分じゃないか！
そうして全てを放棄した俺は矛盾を捨て去ると、すぐに意識を外へと向けた。
目の前には自我を失った時と同じ光景が広がっているはずなのに、もう一度それを見ても何も感じなかった。
「…」
使ったことのない魔力も、黒き神の意識が存在すれば自然と使う

ことも可能である。
ハクアリティスの血で濡れたままの黒の雷（オルヴァラ）に意識を集中させる。
何も感じない麻痺した感覚の中で、魔力が高まる高揚感だけが心地よいと感じられた。
今まで力を出すことのなかった武器が、黒の雷という名のごとく魔力をバチバチと雷のように弾けさせて、俺は瞬間移動の魔法を唱えた。
「アラシッ！！！！」
置いていかける子供たちの悲鳴が聞こえたけれど、今の俺は何も感じられなかった。
ハクアリティス様を殺したことも、天使と人間の戦いのことも、何も感じない。
それが黒の神と契約したことに関係しているのか、それとも俺がしでかした罪のせいなのか分からない。
だけど、今の俺はただ黒の神に言われたことだけを実行しなければという思いと、それを思うことで何もかもを忘れていられると逃げていたに違いない。
全ては他人事だった。
さっきまで生きている以上は、俺が行動する全てが俺の主観であったはずの全てが、まるで何かを見ているかのような感覚。
俺は生きていながら死んだのだ。
生きる意味をなくした時、それを見つけるまで人はある意味死んでいる。
きっと、俺は今その状況なのに違いない。
そして、今の俺はこの先、その代わりとなるものを見つけられるような気がしなかった。
世界の胎（ヴァラウィーダ）は黒の神から与えられた知識以上に、生々しい空気を吸うだけで気分が悪くなるような場所であった。
「アラシ！俺に逆らって人間たちがどうなるか分かって――」

「あんたは俺が逆らわなくても人間たちを見捨てる。」
いや、元々このエンシッダ様にとって人間とはさしたる興味もない存在だったのだと感じてはいた。
俺はそれでも仲間の為にそれに気がつかないふりをしていた。
人の上に立つものとして最悪だ。
「俺はもう何もかもどうでもいいんだ。」
「だから、黒き神の言いなりになる？それは楽でいいだろうが、お前はそれでいいのか？」
いきり立つエンシッダ様を見るのは初めてだったが、それを遮るように静かな声が何もかもに無視を決め込んでいる俺を揺さぶる。
「ヒロ…いや、悪魔ヴォルツィッタか。」
「黒き神はお前が考えているような甘い神じゃない。人間なんか襤褸雑巾のように使い捨てるだけなんだぞ？」
ヒロだったら、この状況で何と言うだろう？
お人よしな彼も同じように利用されている俺を心配する？
いや、多分きっとまずぶん殴られるだろう。

『それでいい。』

黒の武器（カシュケルノ）の契約の真実を聞いた時、臆病者の俺はそれをしたくないと訴えた。
そうした時に見せたヒロの顔は全てを後悔していた。
彼もまた俺のように大切なものを力の為に失ったんだろう。
だが、あいつは俺のように生きることを諦めた様子はなかった。
エヴァのことも人間のことも諦められないまま、一生懸命生きていた。
そんな彼からしたら、俺は最低な野郎でしかない。
『余計なことを考えるなぁ』
湧き出てきた心の乱れが黒き神の言葉一つで、再び凍てついていく。

「あんたがヒロだったら俺を動かせたかもしれないが、俺は黒き神の意識をある程度は共有しているんだ。あんたの目的を知っている以上、俺はあんたの言葉には耳は貸さないさ。」
ヒロの皮を一瞬だけ被っていた悪魔がその表情を変えた。
「ならばアラシ…お前に邪魔はさせない。エンシッダ、奴を殺せ。」
「俺に命令するのか?!」
「黒き神に力を付けさせる前に、封印を解く。お前は時間稼ぎを。」
「ちっ!」

『悪魔に封印を解かせるなぁああ!』

分かっているから興奮するな。
バリバリと右手にためていた魔力を一気に放つ。
「灰色の魔力を使う俺に魔力の攻撃は効かないぞっ!!」
エンシッダ様が戦うところは見たことがない。
しかし、ヒロの実験の中でも見てきたように、全ての魔力を吸収する灰色の魔力というやつは対魔力攻撃に対してはやはり有効だ。
かなり強い力を悪魔に向かって放ったはずだが、それはエンシッダ様の作りだした防御壁によって防がれた。
俺はそれを見て遠距離の攻撃では相手を倒せないと悟ると、すぐさま近距離攻撃に切り替えるべく二人に向かって突っ込む。
エンシッダ様は動きについてはさして早い訳ではないらしく、すぐに間合いを詰められる。
そして、直接電撃の属性を帯びた黒の魔力を相手に叩きこむべくその懐に飛び込んだ。

第１４３話　絶望が貴方を殺す　６（後書き）

久々の更新…色々遅れていて申し訳ありません。暗い話が続いていますが、もう少しでこの鬱ゾーンは脱出できるかと思われます。
次はきっと大したことはないと思われますが戦闘シーン、そして、きっともっと早く更新できるはずです。

第１４４話　絶望が貴方を殺す　７

エンシッダ様の魔法の強さは本物だ。
ある程度の武術に通じているのも知っている。
だが、それはあくまでも『ある程度』であって、一応はレジスタンスの頭を張っている俺から見れば『まだまだ』の域を超えない。
エンシッダ様は突っ込んできた俺に気がついてすぐに防御壁を張ろうとモーションに入るが、俺はそれより早く彼の鳩尾に魔力のこもった拳を叩きこんだ。
バチバチと電撃が弾ける音と、エンシッダ様の体に黒い光が走る。
黒の魔力の属性は『死』と『破壊』であるが、俺程度の魔力では『死』には程遠く細胞の破壊程度に効力は留まる。
「ガッ！」
だから、苦しげなエンシッダ様の呻きが聞こえたが、俺はそれだけで終わることはなく連続して攻撃を続ける。
相手は元は人間とは言え、もう何百年と生き続けている…？と、そこまで考えて俺は初めて違和感を感じた。
エンディミアンとはいえ人間である以上、寿命は普通の人間と同じである。
なのにエンシッダ様は千年も前に封印されている白き神に直接仕えていたのだ。
考えられるのは恐ろしき灰色の魔力の効力ということになるだろうが、だったら、ヒロも不老の存在になったということなのか？
だが、少なくともアオイはそんなこと一言も言っていなかった。
『灰色の魔力じゃねえ。エンシッダは白き神に繋がれた、お前らで言うところの神（マイマール）の子なんだよ。』
そういえば聖櫃を使って大量の人間と契約を交わさずとも、神と人は契約を交わすことができるのだ。
俺が黒き神と黒の武器（カシュケルノ）を通して契約を交わしたように、エンシッ

ダ様は白き神と契約を交わし、彼女に絶対的な服従を誓っているわけだ。
そこまで理解できて俺は更にエンシッダに対する攻撃を強めた。
人間でないならば、この程度の攻撃で簡単に倒れてくれるとは思えない。
そして、どんなに使っても使っても湧いてくる魔力に気分は高揚し、自分の中に湧きあがる黒の魔力による破壊衝動と思われる感情が強くなるのを感じた。
だが、突如として振り上げられ続ける拳がピクリとも動かなくなる。
エンシッダ様は見たこともないくらいみっともない姿で転がり、その彼を守るように俺の拳を止めたのは…
「ヴィス？」
俺の拳と魔力を押しとどめたのは小さく細い少女の手。
俺は目を見開き、ぐっと更に力を込めるがヴィスは全く微動だにしない。
『奴は３人の魔女。異能者・運命の羅針盤の忘れ形見…厄介な奴がしゃしゃり出てきたな。』
黒き神の言葉に彼の意識が流れて、その言葉の意味をワンテンポ遅れて理解する。
東方の楽園（サフィラ・アイリス）に『世界の理』という名の異能者がいるように、西方（シェ）の魔境（ストリア）には『運命の羅針盤』という名の異能者が存在した。
その能力は時を操る力。
未来・現在・過去、その全てを行き来することができ、その流れを変えることができる。
世界の摂理を決める『世界の理』と同等の能力を持つ異能者。
三人の魔女とはその分身。
故にヴィスやマール・ドシャは未来はもちろん本当は過去も現在に起こっている全てをも見通せる能力を持っている。
異能者ほどの力を持ってはいないが、神も他の種族も持たない力

を有する…それが『3人の魔女』。
彼女の戦闘能力までの情報は黒き神も持たぬようだが、黒の魔力を帯びた俺の拳を平然と受け止めていることから人ならざる力を有しているのは間違いないらしい。
「やめて、アラシ」
彼女たちは異能者によって人に似せて造られた存在。
しかし、異能者の力の一部を与えられたに3人の魔女たちはそれと引き換えに、人が持っている何かをそれぞれ一つずつ持たずに生まれ落ちた。
ヴィ・ヴィスターチャが失ったものは『心』。
故に美しい少女は思考できても、感情は持たない。
俺を見る瞳は怒りも悲しみも喜びも映さない。
彼女がどうしてエンシッダにつき従っているかは定かではないが、エンシッダを守りたいという必死さも感じられない。
「どけっ!!」
転がるエンシッダの先でヒロの体を使って悪魔が封印を解こうと、灰色の魔力を体から溢れださせている様子が見えた。
ヴィスと禅問答をしている暇はない。
「どかない。」
だからといって、力づくで彼女を退かせる気がしなかった。
押すこともできなければ、引くこともできない。
非力そうな少女相手に情けないことだが、ヴィスの不思議な力で俺は完全にホールドされていた。
『いなくなったとはいえ異能者の力は強い訳か…アラシ!仕方ねえ…『西の人柱』の名を出せっ』
(『人柱』を?だけど、感情のないヴィスにその手が通用するのか?)
聞いたことのない名のはずだが、黒き神の記憶を共有する俺にはその意味が理解できた。
『いいからぁ!俺の言うことが聞けねえのか!!!』

そう吠えられた瞬間に体に痛みが走り理解する…なるほど、命令に従わなければ痛みに訴えるという訳である。

これが下僕になり下がったということなのかと思いながら、俺は黒き神の言うとおりにする。

「ヴィス、これ以上俺の邪魔をするなら『西の人柱』の命は保証しない。」

その言葉を告げ瞬間に表情は動かなかったが、ぴくりと肩が揺れた。

「俺が今、同化しているのは黒き神だ。黒き神が今いる場所は分かっているだろう?」

「封印された異端(エルヴァナンド)…あの人が眠る場所。でも、あの人を消滅させれば、西方の魔境(シェストリア)がなくなる。」

「そんなことは百も承知だ。だが、世界が滅びるより、西方の魔境(シェストリア)が滅びるだけの方がましだと黒き神は考えるはずだからな。」

「…わかった。」

感情というよりは冷静な思考を巡らせたのだろう。

僅かな沈黙の後にヴィスは俺から手を離した。

「ヴィス!!!」

その返答に怒り狂うエンシッダ様。

「お前は俺の言うことを聞いていればいい!アラシを止めろ!殺せ!!お前ならそれができるはずだ!!」

「エンシッダ」

彼を振り返った彼女の声が悲しそうに聞こえたのは俺の聞き違いだろうか?

「お前は俺の言うことを聞くための人形だ!感情のない、時を見るだけで運命を変えることのできないお前を使ってやれるのも俺だけだ!!!」

悲しい言葉だ。

いや、ヴィスだけじゃない。

エンシッダ様にとっては、白き神以外その全てが使ってやるだけ

の存在なのだろう。
それはとても悲しいことだと思う。
だが、その悲しさが感情のないヴィスにはきっと分からない。
でも、その分からないということがより一層に俺に悲しさを募らせる。
だけど、たった一つ良かったのは、こんなに悲しいだろうと想像がつくのに、今の俺はそれを感じることもないということ。
死んだ心では悲しいだろうと思うのに、心は何一つ痛まない。
もしかしたら、ヴィスもこんな感じなのか？
ならば、彼女も悲しいということは理解しているのかもしれない。
ただ、それを痛いと感じないだけで…。
だから、エンシッダ様に怒鳴られても彼女は俺を再び止めようとしないのかもしれない。
動かないヴィスの横を通り、動かない体でどなり散らすエンシッダ様の横を通り過ぎながら俺はそんなことを思った。
『ヴォルツィッタを止めろぉおおお！！！』
五月蠅い黒き神の声を聞きながら、灰色の魔力を黒の剣（ローラレラ）に集めて今にも第二の悪魔の封印を解かんとするヴォルツィッタに俺は拳を再び振り上げる。
「オリャアアア！」

――――バシィイイインンン

しかし、俺は見事に吹っ飛ばされた。
見えない壁、恐らく灰色の魔力による魔法防御壁に阻まれたのだ。
エンシッダ様に通用した黒の魔力も、灰色の魔力の権化のような悪魔には歯もたたない。
『くっそおおお！だからこそ、俺はヒロと契約を交わそうとしたのにぃ！あの人間の女が邪魔さえしなけりゃあ！！』
ヒロの体さえ今の俺のように支配してしまえば、悪魔に好き勝手

されることは確かになかっただろう。
だが、例えヒロと黒の契約を交わしたとしても、今の俺にようにあの諦めの悪いヒロが易々と黒き神に体を明け渡したとは思えない。俺だって…。
いや、ヒロも今の俺と似たような状況なのか？だから、悪魔に全てを乗っ取られた？
「ああ、もうすぐ会える。ローラレライ。」
灰色の魔力を前になす術のない俺を無視して悪魔は呟いた。
その視線の先には黒の剣（ローラレライ）ではなく、彼から溢れた灰色の魔力によって形作られた女性の形をした魔力。

――――ローラレライ…それは黒の武器（カシュケルノ）の名前

『そして、あの悪魔を突き動かすたったひとりの女の名っ！あの女のためだけに世界は壊れる！』
黒き神の絶叫は実際には鼓膜を揺らすこともないのに、その声は俺の体全体に響いた。

――――アアアアアアアア

灰色の魔力で作り上げられた女が悲鳴のような声を上げ、そして、目の前で何かが弾ける。
目の前で砕け散る景色は欠片となり、きらきらと無数の光となって舞う。
砕け散った景色は悪魔の封印。
白き神と黒き神と共に封印された世界の中心、異能者がいるはずの場所への道が今開こうとしている。
そして、同時に朽ち果てた白（ヴォルナガ・ニルヴァーナ）を纏っていた灰色の殻が破れていくのが見えた。
白と黒の神、不在であった世界の統べるべき神の復活だ。

『こうなったら仕方ねえっ！俺様が直々に悪魔を殺す…アラシィ、お前はその手伝いをしろぉおお。』

悪魔が開いた最後の扉によって世界は大きく変わろうとしていた。

そして、その行き着く先は誰にも分からない。

第１４５話　愛より出でし呪いは死の薫りがした　１

『アイシテイル』

言葉を発するだけなら簡単なことなのかもしれない
その言葉の意味も重さも、声に出すだけでは分からない
だから、きっと人はすれ違う
交わし合う『愛』の意味と重さが違うと、時に人は絶望する
『私は』『俺は』…これだけ貴方を思っているのに、どうして同じ『愛』を返してくれないの？と
だれかを独占したい、自分だけを見ていてほしい
それは小さくも大きな我儘
さりとて『愛』が大きい時、人はそれを思ってしまうのだろう
そして、結果としてその『愛』が永遠に心を縛る『呪い』へと変わることがあると私は知った
その『呪い』はいつしか私の心を蝕み、死の薫りを放つ

「ヒロ、私を忘れないで」

でも、それで私は良かったんだ
私の心が君に呪われたって、それが君の『愛』だというのであれば私はそれを受け入れた
ただ、死ぬその瞬間まで君を感じられれば私に悔いはなかったのに

【愛より出でし呪いは死の薫りがした】

＜ＳＩＤＥ　ヒロ＞

『ヒロ、起きて。』

誰かに呼ばれたような気がして目を開いた瞬間に全てを灰色の塗りつくされた世界が広がっていた。

白も黒も強くなく均等に交わったその色に満たされた世界は重々しく、私に強い不安を抱かせた。

こんな気味の悪い世界には長居したくないな…ぼんやりとそんなことを考える。

そして、次の瞬間に気がつく。

――――ここは封印（エルヴァナンド）された異端…、かつて私が愛する女を失った世界

それなのにどうしてだ？

灰色の世界に現れた人影に私は瞬きをすることを、息をすることを忘れた。

『ヒロ…やっと、会えた。』

「ユ・イア？」

幻でもよかった。

罪人（アークヴェル）の巡礼地でだって、黒き神に騙されたってその姿を見ることができただけで満たされた。

悪夢の中で自分に殺される彼女すら愛おしかった。

彼女を愛していた、いや、私は今でもユイアを愛している。

「ユイア！」

ぼうっとしていた意識が急速に覚醒し、目の前にいるのがユイアであることを確信するとすぐに彼女をかき抱いた。

いつもの悪夢ではその瞬間に彼女は消える。

だが、今回は消えることなく彼女は私の腕の中で確かに存在していた。

『痛いわ、ヒロ。』

「あ…いや、すまないっ。」
いつも消える彼女を留めておきたいと思うばかりに強い力でしがみついたので、実際に彼女が存在しているとその力加減は強すぎたのだろう。
私は彼女がまだいることが不思議でならず、ただ謝ることしかできない。
『何？ぼうっとして。』
ふふと彼女が笑って吐く息が首筋に当たる。
「本当に…ユイア、なのか？」
信じられなくて私は彼女の肩を押しやって、改めてその姿をマジマジと見る。
手に感じる彼女の温かさは幻などではなく、そして、目の前にある彼女の姿もまた5年前に失ったままの彼女がそこにいた。
みすぼらしくとも生命力に溢れたユイアの姿に、私は目の前がぼやけるのを感じた。
『何泣いているの？もうっ！ヒロは本当に変わらないのね…私が死んだ時のまま。』
「！」
その言葉にはっとする。
『分かってる。私は死んだ存在よ。本当ならもうこの世にはいるはずのない人間。だけど、私はずっと貴方の傍にいた。この黒の剣（ローラレライ）の中に。』
「ここが黒の剣（ローラレライ）の中？封印（エルヴァナンド）された異端ではないのか？」
見て感じる限りこの灰色の魔力に満たされた場所は間違いなく封印（エルヴァナンド）され異端（ナンド）に違いない。
『封印（エルヴァナンド）された異端は全ての異端に繋がる場所。黒の武器（カシュケルノ）もまた灰色の魔力を抑えるために造られた異端の一部。だからこそ、封印（エルヴァ）された異端（ナンド）に落とされた貴方を私は助けに来ることができた。』
「落とされた…？そうだ！私はっ！！！」
ユイアの言葉にこれまでの記憶が一気に蘇る。

天使と人間の最後の戦い、グロテスクな世界（ヴァラウィーダ）の胎内、第二の悪魔の封印・朽ちた白（ヴォルガナ・ニルヴァーナ）、そして…

「神の子（マイマール）はっ？アラシは…ハクアリティスは！！」

記憶と共によみがえってくる数々の衝撃に私は気が遠くなった。

『さようなら、ヒロ…お前という物語はこれで終わりだ。後は安らかに眠れ。』

腹の底から聞こえてきた悪魔の声。

『貴方の体は今、悪魔に乗っ取られているわ。そして、悪魔は貴方の精神を完全に殺すために封印された異端（エルヴァナンド）に貴方を落とした。』

私はユイアの言葉の意味をはかりかねた。

『悪魔の魂はどういう訳かヒロに完全に転生することなく、私と同じようにこの灰色の世界に残骸として残ったけれど、だからといってただ封印されただけの黒き神のように現実世界に影響を及ぼすほどの力はなかった。彼はその力をほとんどを貴方へと転生させていたから…だから、黒き神が現実世界で自分の願い叶えるためには魂で繋がっている貴方を利用するしかなかった。そして、絶望で貴方の心を喪失させて弱ったところで貴方の体を乗っ取った。』

黄色の女神ディルアナを聖櫃から出したハクアリティス、結果として死んでいく神の子（マイマール）たち、そして、ハクアリティスを殺したアラシ。

連鎖する苦しみと悲しみの中で私は絶望した。

そして、私はその絶望と起こった悲劇から逃げ出して、悪魔につけ入れられた。

何が…せめて皆を守りたいだっ！

私は自分の弱さに胸をかきむしりたくなった。

『でも、私が間に合ってよかった。貴方があのまま灰色の魔力と一つになってしまっていたらと思うと…私は！』

自分を責める私とは違いユイアの言葉は何かに酷く安心していた。

私はその言葉の意味が分からなくて眉をひそめ、そして、ユイアにばかり目がいってしまっていて周囲の灰色の色がまるで生き物のように一部が蠢いていることに初めて気が付いた。
そして、その蠢く灰色は私とユイアをぐるりと取り囲んでいた。

――ヒトツニナロウ

それに気が付いた途端に聞こえてくる声。
灰色の魔力に彩られたその声は、恐らくその根源である神に忌み嫌われた子供（イル・オヴァラ）の声、そしてエヴァの声。

『僕を忘れないで、ヒロちゃん』

エヴァを思い出した瞬間に胸に痛みが走る。
崩れ落ちる体とともに、私たちを取り囲んでいた蠢く灰色…恐らく強い灰色の魔力がじりじりとにじり寄ってくる。
『ヒロッ！ダメよ』
「ユイア？」
『エヴァのことを思い出してはダメ！彼こそが灰色の魔力の根源であり、今、この世界の支配者。貴方が少しでもエヴァのことを考えれば、エヴァのことを想う貴方の心はあっという間に灰色の魔力に取り込まれてしまうわ。』

――ヒトツニナロウ

耳ではなく脳に直接囁きかけるような声は、今にも泣き出しそうな子供の声で、私はユイアが酷く焦った表情をしているというのに、私は蠢く灰色に全く危機感を抱けなかった。
封印された異端（エルヴァナンド）は悪魔が封印した灰色の魔力。
どこまでも続くこの場所が、その根源である神に忌み嫌われた子（ラーオディル・オヴァラ）

供自体であるという事実はさして驚くことではないだろう。
ずっと、彼は私に『ヒトツニナロウ』と囁き続けてきた。
そして、今、それを叶えるために私を灰色の魔力の一部として取り込もうとしている。だけど、
「どうして私なんだろうな？」
『え？』
「エヴァ…いや、神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）が求めているのは悪魔だろう？生まれ変わりだと言われたところで私と奴は別の人間だというのに、あの子供はどうして悪魔ではなく私を求めるんだろうな？」
私は悪魔じゃないぞ？と意識を持っているのか分からない灰色の魔力に言ってやれば、それまで私を取り込もうと蠢いていたそれがぴたりと動きを止める。
私が逃げる気もないと理解したからか（というか、この状況でどうすればいいのか分からないだけなのだが）、灰色の魔力は私とユイアをすぐ傍で囲んだままの状態になる。
ユイアはその灰色の魔力の様子にほんの少し目を見張った後、私の顔を見て何かを納得したように一つ頷いた。
『貴方はやっぱり変わらない。そんなヒロだからエヴァという子供を通して神（ラーオディル・オヴァラ）に忌み嫌われた子供は貴方を求めた。』
「え？」
『ヒロは優しすぎるから。魂とか転生とか関係なく、きっとエヴァは貴方に惹かれた。貴方ならきっと自分を忘れないはずだって…貴方を苦しめる結果になってもそれを願ってしまった。私と同じように。』
泣きそうな顔で微笑むユイア。
私はこんな顔を見たことがなくて戸惑った。
彼女はいつもだって元気で明るくて…ああ、でもと思いなおす。
『私を忘れないで』

そう言って息と引き取った時の彼女の顔はこれに近かったかもしれない。

それを思いだして私は彼女に縋りつくように再び彼女を抱きしめた。

『ごめんね…ヒロ。』

「何がだ？」

『私も神に忌み嫌われた子供と変わらない。私は最低な手を使って貴方の愛を得ようとした。貴方を永遠に私から逃げられないようにした。貴方の為に死ねば、誰よりも貴方に愛してもらえる…そんな馬鹿なことを考えた。そんなの貴方の為じゃなくて、私のただの我儘だったのに。』

「それは違う！」

私は断言した。

私は彼女が私の為に命を落としたから、彼女を愛した訳じゃない。

「私はユイアを愛していたから、お前の死を受け入れられなかった。忘れられなかったっ！」

『…ありがとう。分かっているの。別にヒロが私のことを想ってくれていなかったなんて、私は思っていない。でも…思うの。私がもしあの時死ななかったら、貴方…今くらい私を愛してくれていた？ううん…分かっている、貴方が私に抱く感情はもうある意味では『愛』とは言えないのかもしれないって、でも、それほどに強い感情を私に持ってくれた？』

何を言っているのか、ユイアの言葉をうまく理解できなかった。

ユイアは泣きそうな顔で笑った。

私はユイアを好きだった。

5年前のあの夜、彼女が好きだったから、ずっと一緒に生きて欲しかったから告白した。

それでは足りなかったのか？

彼女の死によって私の気持ちが変わった？

それが彼女の望む愛の形だった？

確かにユイアが私のために命を落としたとこで私はユイアの死を忘れられなくなった。

それどころか彼女への感情を風化させないように、私は万象の天使の片翼と、いや神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）と契約をした。

でも、ともにずっと生き続けていられれば、ずっと一緒にいれば、もっともっと今私が抱く感情よりも強い愛を二人で育めたんじゃないのか？

そんな私の感情が顔に出ていたのだろう。

ユイアは苦笑して私の頬を慰めるように撫でる。

『ごめんね…今更こんなこと言って困らせて。分かっているの。全てはもう終ってしまったこと。仮定の話は意味のないことよ。ただ、全ては貴方を信じ切れなかった私の愚かさが招いたことなの。そのせいでずっと貴方を苦しめ続けた。貴方はいつだって私を本当に信じてくれていた。愛していてくれたのに…、私が彼女の言葉に耳を傾けてしまった。』

私は首を強く横に振った。

『私が残したのは貴方への呪い…だったのかもしれない。愛じゃなくてもいい、ただ、貴方の心に残りたいと強く願ってしまった。人は誰かと一緒にいても、生まれて死ぬときまで所詮は一人よ。しかも、不浄の大地（ディス・エンガッド）ではあまりにも簡単に人は死ぬ。親も兄弟もいない私にとって恋人としての貴方は世界に私がいる唯一の証。貴方が私を忘れない限り私は貴方の中で生き続けらる。それがとても甘美な響きに私には思えてしまったの。』

これはユイアの告白なのか？

明るく楽しい彼女がこんな薄暗い感情を抱いていたことを私は気が付いてやれなかった。

『でも…私の死に際に見せた貴方の表情、そして、黒の剣（ローラレライ）から感じられた貴方の苦しみ、それを見て感じて私は初めて気がつけたの。私は間違っていたって…あの時、私が選ぶべきだったのは貴方の為に犠牲になることじゃなくて、貴方と共に生きていくための選択だ

ったって。生きるための選択をしたからって、結果がどうなっていたかなんてわからない。でも…きっ・と――』

ユイアの言葉が涙に詰まる。

私の目にも熱いものが集まってくる。

「違うっ！私だって…あの時、君さえ生きていてくればいい。そう思って自分の命を捨てようとしたっ！悪いのはユイアじゃない、君を守れる強さがなかった私だ！！」

『ヒロ…うん、分かってるよ。貴方がそうやって苦しみ続けてきたこと。きっとね、私たちはお互いに間違っていた。間違いは正せないけれど、時はあの時に戻らないけど、でも、こうして私たちはまた会えた。ね？これって奇跡みたいだよね。』

「奇跡？」

『そう。私ずっと貴方に声が届かないこの場所で願っていた。貴方にもう一度会いたいって、私のこの想いを伝えたいって…もし、そんな奇跡が起こせたら…やっと自分を許せるような気がしたの。ううん、許せるじゃない。貴方のことをやっと純粋に愛し続けられる。私に囚われ続けないで貴方に幸せになって生き続けてって心の底から言える。』

泣き笑いのユイアの顔に私も不思議と笑みが浮かんだ。

誰かを愛するがゆえに誰かの為に犠牲になる。

それはとても崇高なようで、とても残酷だ。

私とユイアはその結果、互いに互いを傷つけ苦しみ続けていたのかもしれない。

だけど、こうして再び会えたことで、言葉を交わしたことで、ユイアの言うように決して私の罪が許される訳ではないけれど、自分の心の中で何かが変わったような気がした。

私はこの後、自分がどうなるのかも分からない。

大体、今の状況から言って生きているのか死んでいるのかも曖昧なのかもしれない。

だけど、この後、例え灰色の魔力に取り込まれようが、現実の世

界に戻ろうが、私はもうユイアとずっと一緒だ。
不思議とそんな風に思えた。
契約によって強制されていた心が、新しい形となって私の中で温かく息吹いていくような気がした。
「ありがとう。ユイア…ずっと、君は私を見ていてくれたんだな。私はもう大丈夫だ。今度こそ君が望んでくれたように生きて見せる。君に恥じない生を全うしてみせる。」
そして、私はぎゅっと彼女を抱きしめた。

――――ギイイヤヤアアアア

瞬間に耳を塞ぎたくなるくらい高く強い叫びが響く。
「!?」
驚いて周りを見回せば、私たちを取り囲んでいた灰色の魔力が、沸騰するように泡立ったかと思えば瞬間に立ち消えた。
『貴方と神に忌み嫌われた子供の契約が、貴方と私の＜約束＞に上書きされた。それによって貴方は灰色の魔力の契約から解き放たれた。』
そう言ってユイアは微笑んで私から離れた。
その足元はさっきまでくっきりとしていたはずなのに、透け始めていた。
『もう時間がないみたい。悪魔が貴方の体を乗っ取って黒の剣と再び契約を交わしたみたい。黒の武器は一人としか契約できないから、私の契約は悪魔によって消されたみたいね…契約は強い強制力を持つけれど優先順位はより強い感情と犠牲を払った方になる。私はやっとこの場所から解放されるわ。』
悪魔が黒の剣を使っているということは、第二の封印が破られるのも時間の問題ということなのだろう。
『最後にヒロの伝えたいことがあるの。＜契約＞は誰も信じられない人たちが交わす灰色の魔力による強制された願い。だけど、＜約

束＞は強制力なんてない…互いが互いを信じる心によって成り立つただあり続ける想い。確かに灰色の魔力は全ての魔力よりも強い最強の力よ。でもね、私、この灰色の魔力の中で生き続けて何となく分かったの。』

次第に透けていく部分は大きくなっていく。

きっと、これがユイアを見る最後になるだろう。

不思議と悲しみはない。あるのはほんの少しの寂しさと強い感謝の気持ちだけ。

私は彼女の姿を焼きつけようと、瞬きをしないように努力するがさすがに視界が僅かに滲む。

『全てを拒否し続け、疑い続ける灰色の魔力…それはきっと神（ラーオ）に忌み嫌われた（ディル・オヴアラ）子供の心そのもの。そして、その彼が貴方を傷つけられないのは、多分貴方を信じてみたい、貴方に受け入れられたいと望んでいる心。灰色の魔力に勝てるとしたら、きっとそれは力なんかじゃないのよ。それは――』

彼女の言葉は最後に本当に小さな声で私の耳に僅かに聞こえる程度だった。

私は消えていくユイアが何の心配もないように強く頷いた。

そして、灰色の空間に溶けるようにして消えていくその瞬間まで私はずっと彼女を見続けていた。

第１４６話　愛より出でし呪いは死の薫りがした　２

「――――さて、これから私はどうすればいいんだ？」

ユイアを見送った余韻に少しだけ浸ってから、私はそんな独り言を漏らした。

言葉を発したところで誰も答える者がいないことは分かっているが、正直何の策もないまま、ユイアを安心させるためだけに大見栄を張った私は途方に暮れていたりする。

それでも、心はここ何年かないほどに軽かった。

ユイアに許されたとかではなく、彼女を失ってから自分の心を初めて外に出したことによる解放感とでもいうか…同時に初めて宙ぶらりんになったような戸惑いが私の中に発生した。

とはいうものの、ともかく今は一刻も早く悪魔から体を取り返さなくては、私のこの先の人生さえも危ういだろう。

悪魔の真意も分かっていないが、私の第六感が奴を野放しにしてはいけないと言っている。

しかし、見渡すばかりの濃淡のない灰色の世界は果てしなく歩く気すら起きない…と、そこで私はかつて黒き神によって誘われた罪人（デ・イッチ・ア・ヴァリス）の処刑台でのことを思い出した。

あの時、私は黒き剣（ローラレライ）の気配をたどってユイアの場所を突き止めた。

ならば、今回も同じことが可能ではないだろうか？

黒き剣（ローラレライ）と契約を交わしたという悪魔の居場所もそれで分かるのではなかろうか？

居場所が分かったところで、どうやったら自分の体を取り返せるか見当もつかないが、やってみるしかないだろう。

私は自分を引き締めるために顔を一つパンと叩くと、目を閉じ黒（ロー）の剣（ラレライ）の気配を探るべく意識を集中させた。

するとこの場所がただ灰色の魔力に満たされているだけでなく、

様々な気配が入り乱れていることを私は知ることができた。（5年前はそんなこと気がつきもしなかった）

その気配の全ては灰色の魔力に覆われて何となくでしか感じられず、どんなものなのかも検討がつかない。

だが、果てなどないようなこの灰色の世界の終着点を私は感じることができた。

いや、終着点とはっきりと言うことはできないかもしれない。

ただ、そこは灰色ではなく黒よりも深い闇が凝縮された気配。

闇よりも深い、一度入ってしまったら二度と出ることが叶わなさそうな厄介そうな場所のようだ。

あの先に黒の剣（ローラレライ）がいそうな気配はないし、とりあえず無視するかと意識を他に移そうとした瞬間に、その奥から誰かの意識が私に気がついたようだった。

『はじめまして、世界の楔の資格を持つ『何一つ持たない者』。ゆっくりお話したいところだけれど、今はまだ早いわ。』

そして、そんな声が頭の中に響いたと思ったら、その場所からすぐに意識を弾き飛ばされた。

「いった…」

その弾き飛ばされ方が荒々しく、私は思わず呻く。

誰かの意識に触れた以上、何かを知っているかもしれないと再び同じ闇を探そうとするが、今度はまるで迷宮にもぐりこんだように同じものは見つからない。

仕方ないかと、再び黒き剣（ローラレライ）を探そうとすると、今度はあっさりとそれが見つかる。

薄い気配ながらも慣れ親しんだ気配は間違いようがない。

「よっし！」

私はそれを頼りに、その場所に意識を集中させる。

すっと手を伸ばせば、かつてのように何もない空間にズボリと手

が沈んだかと思うと、体ごと吸い込まれ、上下も左右もない空間からいきなりドサリと地面に倒れこむ。
そして、倒れこんだ私の上から声がかかる。

「ずっと、待っていました。ヒロ」

その声に私ははっとして顔を上げる。
馬鹿みたいに口をあけて見上げた先には、優しげな微笑みを浮かべた女性と、その背後には別次元が広がっていた。
澄んだ空気に包まれた森、鳥のさえずる声、かすかに薫る花の匂い、小川のせせらぎ、きらめく優しい光。
造りものではない、確かに息づいている自然がそこにあった。
そういえば、封印された異端の先には罪人の処刑台(ディッチ・ア・ヴァリス)が広がっていたし、黒き神の言葉によれば封印された異端(エルヴァナンド)は全ての灰色の魔力の満ちた世界に繋がっているということだった。
…ということは、この場所もまたそんな禍々しい場所のはずだが、そんな気配は微塵もない。
そして、その中でまるで女神のように佇む女性は絶世の美女とは違うが、生命力に溢れる眩しい人。
長い亜麻色の髪に緑の瞳、肌は白く、声は女性にしては聊か低いようであったが聞き心地が良かった。

「?」

しかし、明らかに初対面なはずなのに私は彼女にふと何かの面影を見る。
「私の名前はローラレライ。」
「え?」
しかし、その面影は彼女の名を聞いたことで吹っ飛んだ。
それは私と共にずっとあった名前。
声が出ない私に変わり、ローラレライが言葉を続けた。
「ええ、そうです。貴方の黒の武器(カシュケルノ)の名前は私から取られています。

かつて、ヴォルツィッタのために命を捨てた異端の一族…それが私です。」

そうだ、私と黒の武器（カシュケルノ）の間に立ったユイアがこの場に囚われていたというのであれば、形は違えど悪魔の代償である存在もこの場に囚われていて何も不思議はない。

「…生憎だがのんびりと挨拶を交わしている暇は今の私にはない。」

「分かっています。ですが、貴方は自分の体を取り戻したいのでしょう?それには私の手助けが必要だと思いますけど?申し訳ないですが、現状では貴方が自力で体を取り戻すのは不可能だと言わざるをえません。」

ローラレライは全ての状況を知っているらしく、私の痛いところを的確につく。

「その言い分を信じられるとでも?貴方は悪魔の味方だろう?その貴方が悪魔を止めたいと思っている私の手助けをするとは思えない。悪魔が何をしたいか私には分からないが碌なことじゃないと私の第六感が言っている。」

悪魔の真意は分からなくともそれは断言できた。

何よりもラーオディル・オヴァラの見せた過去の中に現れた悪魔の気配は、私を不安にさせるのに十二分であった。

私の体を乗っ取り第二の封印を解放し、そして、悪魔はその先にいる異能者に会うのだろう。

だが、そして悪魔は何を求めるのだろう?

「貴方の第六感は当たっています。ヴォルツィッタの願いはただ一つ…私を蘇らせること。」

私の心の中の問いをまるで見透かしたようなローラレライの声に、今度こそ目を大きく見開いた。

「異能者たる『世界の理』に定められた禁止事項を彼は灰色の魔力によって書き換えるつもりなのです。死者が蘇っても灰色の魔力が

発生しない世界にするために…ですが、『理』の書き換えなど未だかつて行われたことのない未知の行為。」

「なっ!?そんな事が可能なのか?…っていうか、異能者が『世界の理』なのか??」

「あら、そこからお話しないといけないんですか?」

第二の封印の先に東方の楽園（サフィラ・アイリス）の礎である異能者と世界の理があるらしいことは、悪魔の過去の記憶を見たことで理解していたが、その二つが同じものであるとは思っていなかった。

「異能者の名はユーティリエティ。神すらも従わせる力を持つ４人の異能者は世界を定めし４つの人柱でもあるのです。東の『世界の理』は禁忌を定め、西の『運命の羅針盤』は時を管理し、北の『滅びの扉』は全ての死を、南の『生なる樹』は全ての生を司っています。」

そう言われればなるほどだ。

『世界の理』は神すらも従わせる効力を持つのだ。

それがこの世界を創造したという異能者であることに不自然さは感じられない。

だが、『世界の理』というのがどういうものか想像もできないが、少なくとも人ではないと思っていたので、その二つが繋がらなかっただけだ。

そもそも異能者という存在だって、前文明の生き残りというだけで私たちのように人の形をしているものかも定かではないのだ。

「なるほど、異能者が世界の理だということは理解した。だが、その世界を定める存在を書きかえるなんて、そんなことが可能なのか？」

「理論上は可能らしいです。ですが、世界の理は『理』であると同時にこの世界の全てのエネルギー源でもあります。そのバランスが少しでも崩れれば、瞬間にこの東方の楽園（サフィラ・アイリス）は消滅をするでしょう。そして、理の書き換えをすることで、そのバランスを崩す可能性はとても…高い。」

さらりとそんな恐ろしいことを言う。
「悪魔は東方の楽園全てよりも貴方の命を選んだ…訳か。だが、それならどうして千年前にそれをしなかったんだ？」
千年前にも悪魔は異能者に対面しているはずなのに、どうしてそれをしなかったんだろう？
ローラレライの話を聞いてふとそう思ったが、私のその問いはさらりと無視して、代わりに彼女は私に問い返した。
「貴方はヴォルツィッタのしようとしていることが愚かだと思いますか？間違っていると思いますか？」
「その問いに答えないといけないか？ていうか、私の質問には答えてくれないのか？」
「強制はしません。だけど、私は貴方の答えが知りたいのです。」
どうやら、ローラレライはどうあっても私の問いに答える気はないらしい。
私はもう自分の問いは諦めて、ローラレライの強要はしないと言う割にはどう見ても答えないと先に進まないだろう話を進めるべく言葉を紡いだ。
「…気持ちは理解できる。」
人間は誰しも聖人君主ではない。
自分の欲望の為に世界全てを敵に回してもいいと思う瞬間があるはずだ…ただ、本来ならそんな力を人は有していないから、また欲望に勝る理性や大切なものがあるから、普通ならば人はそれを実行しようとしないだけだ。
「もし、世界全てよりも叶えたい願いがあると仮定して…世界、自分に関係のないたくさんの命…それらを犠牲にすることの罪悪感は限りないだろうが、でも世界も他人も自分にとってそれほど大事な存在かと私はきっと私に問うんだろう。そして、結論は分かりきっている。世界が他人が私に何をしてくれるのだ…と。」
一人の人間に世界もその他大勢の人間もあまりに冷たいものだ。
人間に都合のいい神様なんか存在しない、どんな不幸や悲しみや

苦しみを背負おうとも世界は優しくしてくれることなどない。
いや、むしろいつもと変わらない世界が幸せな時よりも、冷たく感じられるのだろう。
「それならば、世界よりもたった一人の大切な人がいればいい…ただそう私は思うかもしれない。」
人間はどんなに聖人君主を気取ったところで、結局は自分が一番大事なのだ。
だって、そうだろう？
他人の為を思い、他人の為に尽力できたとしても、その他人を想う心も、他人を想って行動したことも全ては自分というものが中心になって成り立っているのだ。
だからといって、別に誰かの為を思うことが偽善だと言っている訳じゃない。
そう思う心は尊いし素晴らしいことだ。
その思いがあるからこそ世界は優しさに溢れるのだと思う。
でも、どんな人間だって、きっと自分がかわいくない人間はいなし、自分に優しくできない人間はきっと他人にも優しくできないと思うのだ。
だからこそ…思う。
人は自分の一番大切なものと世界を天秤にかけた時、自分の欲望を捨てられるのか？
そして、その答えは私の中では未だに出ていない。
「貴方は素直な人ね…そうよ…ね？人間は――」
ローラレライもまた私と似たような考えなのだろう。
私の答えに同調するように言葉を続けようとするが、私はそれを遮った。
「だが、私は大切な人を犠牲にすることも、世界を諦めることもしない。」
「え？」
虚をつかれたようにローラレライは目を見張る。

私もついさっきまでなら、ローラレライの言葉を遮ったらしなかったと思う。

「私はユイアに彼女に恥じない生き方をすると誓ったんだ。それは彼女を失った私の自己満足に過ぎないのかもしれない…だけど、私はもう何かを犠牲にする生き方はしたくない。例え結果として犠牲をだすことになったとしても、それを望む自分でいたくない。犠牲に目をそむけるだけではいたくないんだ。」

ユイアを失った事実に向き合ってみて、彼女の死を受け入れた。それが自分のせいだとか、黒き神のせいだとか、そんなことは別として、さっき私は初めてユイアが死んだのだと本当の意味で理解できたのだと思う。

そして、そうした時に私はユイアがエヴァが生きろと言ったから生きるのではなく、彼女たちに恥じない生き方をしなくてはならないと思ったんだ。

彼女たちのせいにして生を生きるのは卑怯だから、私は私の生きる道を歩む。

「だから、私は世界も大切な人も助けたい！それが叶わなくても、そのために足掻きたいんだ！！」

こんな風に強い気持ちでいたことなんてユイアを失ってからなかった。

ローラレライはそんな私を張りついた微笑みを消して、酷くまじめな顔で見返していた。

第147話　愛より出でし呪いは死の薫りがした　3

ローラレライの強い視線に私はたじろぎ、逸らされることのない緑の瞳に宿る感情に私は名を付けることはできなかった。

しかし、何だか私の言ったことを責めているような気がして、私はその瞳から目を逸らせなかった。

何しろ自分で大見栄をきった。

言ったそばからその言葉から逃げるようなことはしたくなかった。

「…」

互いに逸らすことのない瞳の間には火花のようなものが散る。

重く苦しい沈黙…そして、緊迫した空気を打ち破ったのはローラレライの方であった。

彼女は真面目くさった表情を緩めると、小さく微笑みを漏らした。だが、それは先ほどまでの優しさに溢れたものではなく、悲しげな影がよぎる微笑みのように感じられた。

「やはり、貴方はあの人であって、あの人ではないのですね。ヴォルは優しいけれど自分のために足掻けない人でした。それがあの人の強さであり弱さ。そんなヴォルだから私は彼を愛しました。でも、私はきっと貴方を愛せないでしょう。」

別にローラレライに好かれたい訳ではないので後半部分については無視をする。

「どういう意味だ？私が悪魔でないのは当たり前だと思うが、生まれ変わりだからと言って人格まで同じな訳が…」

「そんなことがあるんです。この世界では――詳しくは私も存じ上げませんが、死して新たに転生した魂のその全ては前世と同じ人格を有して生まれ出でくるということです。ただ、前世の記憶を忘れているだけで、だから、もし貴方がヴォルの生まれ変わりだとい

うのであれば、そんなことを言うはずがないのです。魂とはその人の本質です。例え違う人生を歩み、違う経験を積んだとしても根本は変わらない。だから、本来なら貴方がヴォルと全く違う人格としてここに存在することはあり得ないことなのです。でも、貴方は間違いなくヴォルと同じ魂を持ちながら違う人格を有している…それが示すことはただ一つ。あの人は契約してしまったのですね。」

私は全く理解できていないが、ローラレライは全てを分かったように項垂れた。

私は悪魔の生まれ変わり、だが、私と悪魔は全く別の人格だ。

そのことが問題であり、そして、その事象は悪魔は何らかの『契約』を交わしたことにより発生した…それがローラレライにとっては大きな意味を持つ。

「では、私がすることはただ一つです。ヒロ…貴方を現実世界に戻しましょう。」

「本当か?!」

「ええ、それが私の願いのため…強いてはきっと世界のためになる。私は信じます。ですが、貴方の体はもはやヴォルツィッタに完全に掌握されています。その体に貴方を元に戻すことは、一つの体に二つの魂を入れること…それはあまりに危険な行為なのです。下手をすれば二人の魂が混じり合うか、消滅することだって考えられます。それに封印が解かれ灰色の魔力に満ちたあの場所では貴方より、灰色の魔力を支配する彼の力が勝ります。貴方の魂が消えてしまう方が確率としては高いと言わざるをえません。」

今までだって似たような状況であったが、乗っ取られた以上私はもはや自分の体すら自由にできないらしい。

思わず悪態をついた私の頬にローラレライはそっと触った。

その手はやはり彼女が死んでいるのだと自覚させるように、とても血の通った人間とは思えぬほど冷たかった。

「なので方法を変えます。貴方を元の体に戻すのではなく、貴方の魂から新しい体を造り出し現実世界に戻します。」

いや、元々ただの人間だけど…とは言える雰囲気ではなかった。
「乗っ取られた貴方の体は、ヴォルツィッタの魂を元に生まれ出でた普通の人間より灰色の魔力を有するに適した体。ですが、その体はもはやヴォルツィッタが完全に支配しています。そして、彼は貴方の魂から灰色の魔力に侵されている部分を完全に掌握し切り離した。そして、貴方という人格が残る人間としての魂の部分を封印（エルヴ）された異端（アナンド）に封じた。今の貴方という魂は灰色の魔力に侵されていないただの人間の弱い魂。そして、私にできるのはその魂からただの弱い人間の体を作り出すことだけ。」
「魂の切り離し…そんなことができるのか？」
気軽にいってくれるが、魂なんて体よりも気軽に切り取ったりくっつけたりできるものだとは到底思えない。
「普通の魂ならできないでしょうが、恐らくヴォルが交わした契約がそれを可能にしている。ヴォルはもはや魂とは言えないのかもしれません…だからこそ、貴方の中にずっとい続けることができた。」
「さっぱり意味が分からないのだが…」
素直に言ってみると、ローラレライの方もお手上げというように首を横に振った。
「ごめんなさい。私もうまく説明できないみたいです。何となく理解はしているのですが、言葉にするのがとても難しい。」
「なら難しいことはもういい。ともかく、貴方は私を現実世界に戻せるんだな？」
重要なのはそこだ。
だいたい、私の元の体は悪魔に乗っ取られたから、新しい体を魂から造り上げるなんて普通はできるとは思わない。
しかし、ローラレライはその部分については妙に自信を持って頷く。
「私はもはや灰色の魔力だけでこの世にとどまっている人間ですよ？全ての理を無視した灰色の魔力そのものといっても過言ではありません。できることは少ないですが、体という魂の入れ物を造るく

らいなら難しくはないと思います。」
まるで夢物語のような話ではあり、むろん罠の可能性もないわけではないが、今の私は藁をもつかむ気持である。
ローラレライの提案に否と言っている余裕はなかった。
「頼む。」
「ですが、現実に戻ったところで貴方は全ての力を失っているのですよ？悪魔を止める力も、人間を助ける力も、天使を倒す力もない。貴方はただの人間になるのです。」
「そうだな。貴方の言う通りなら灰色の魔力を持たなくなり、黒の武器（ケルノ）も失った私には何の力もないのだろう。だけど、この命がある。それに私は元々ただの人間だよ。」
今まで生きていることが苦しかった。
罪滅ぼしの為に生き続けた。
だけど、今、私は自分の命がとても惜しいと思うのだ。
だからこそ、最後のその瞬間まで精一杯生きていたい。
でも、この灰色の世界の中では私は生きているとは言い難い…辛くても、苦しくても、悲しくても、私は私の現実の世界で生きていたいのだ。
夢の中や自分の殻の中に閉じこもっているんじゃない、現実の中でしか私は現実にありえないのだから。
「…分かりました。貴方を現実に戻しましょう。」
そして、ローラレライは私の頬にあてた両手を自分の顔の方に向けると、額と額を合わせた。
ローラレライから冷たい力が注ぎ込まれる。
目の前にある彼女の顔がだんだんと霞んでいく。
「最後に少しだけ私の戯言に付き合ってくれますか？」
もはやそれに答える意識もないのに、問いかけるローラレライが不思議だった。
そして、それが彼女も分かっているから、私の返事など聞かずに言葉を続ける。

「私はずっと貴方に会いたかった。ヴォルツィッタの魂を持つ貴方ならきっと私を助けてくれると、私を愛して私を幸せにしてくれると…そんな勝手なことをもう千年も思っていました。でも、それは私の勝手な思い込みだった。私はこの現実ではない世界でただ夢を見ていたのかもしれませんね。」

視界から消えていくローラレライの姿とは裏腹に、声はどこまでもはっきりと私の耳に届いた。

「貴方は彼とは違う…それは分かっていたはずなのに。でも、貴方はそれでいい。そして、ありがとうヒロ。貴方は私を救ってくれなかったけれど、私の目を覚まさせてくれました。」

私は何もしていない。

聞こえてくる声にそう答えたかったが、すでに私という実体は消えてしまったように、声を出そうとしても何一つ声は出て気すらしなかった。

「もう遅いかもしれないけれど…私も最後まで足掻いてみせます。もはや黒の武器（カシュケルノ）の一部と化した私でも、私という心が残っている限り、心に従って諦めずに闘ってみせます。大切なヴォルツィッタのために…そして、わたしのためにっ！」

強い声が最後に私に届いた。

そして、私と悪魔に愛される女ローラレライの邂逅は終了した。

交わした言葉は少なくとも、その邂逅がこれから先の運命に大きく左右することになるとは、この時の私は知る由もない。

「う…」

自分の呻く声に意識が急速に戻っていくのを感じた。

閉じられた瞼が妙に重く、ゆっくりと開いた視界には寝起きには少々厳しいグロテスクな世界の胎内（ヴァラヴィーダ）が広がっていた。

封印された異端（エルヴァナンド）といい、世界の胎内（ヴァラヴィーダ）といい、なんとも気の滅入るような場所ばかりだと、私は息を吐く。

体は何となく重い感じがするが、横たわっているらしい体を起こすことは無理なくできた。
そして、自分の意思で動く体というものを認識して、私は改めて自分の体をチェックする。
メイドイン灰色の魔力の体だ。
ローラレライを疑う余地はありまくりである訳で、私はこの体がきちんと人間の形をなしているのか、異常がないのか確かめなければならない。
鏡がある訳ではないので全体像まではつかめないが、腕も足も胴も首もきちんと付いているようだし、ぺたぺたと触ってみると顔も全てのパーツが揃い、視界も聴力も問題ない。
指を動かした感じも、足を上げてみても違和感がない…うん、どうやらちゃんと人間の形をして誕生してくれたらしい自分の新しい体（どうにもその自覚は薄いが）に私は一つ頷く。
そして、有難いことに私はすっぽんぽんではなく、元のものではないが洋服を着ているようだった。
さすが無茶を具体化する灰色の魔力である。
「ヒ・ロ…？」
そんな風に体の点検をしている私の耳に、私の名を呼ぶ声が聞こえた。
そして、その人物と記憶の中のとある人物が重なって驚く。
「アラシッ！！！」
そこにいたのは酷くボロボロになって倒れるアラシの姿であった。

第１４８話　愛より出でし呪いは死の薫りがした　４

「ヒロ！ほんとにお前なの――――イッ」
声を発して私に掴みかからんばかりの勢いであったアラシだが、倒れこんだ体を起こそうとした瞬間に崩れ落ちる。
「大丈夫か？大体、どうしてお前が世界の胎内（こんなところ）に――――」
『いるんだ』と続けようとして、封印された異端（エルヴァナンド）に落とされる前の出来事が脳裏をよぎった。
私の表情の変化に気がついたのだろう。
アラシは大きな体で私を威嚇するように睨みつけて吐き出す。
「分かっているんだろう？俺がしたこと…そうさ！俺がハクアリティス様を殺したっ！！そして、その事実から逃げるために黒き神と契約を交わして、お前が言っていた力を手に入れた…」
何かにあたりつけるようにして吐き出された言葉は、次第に尻つぼみになっていった。
「黒の武器（カシュケルノ）の力を手に入れたのか…ハクアリティスの命でっ。」
「…そうだ。やっとお前が言っていた言葉の意味を本当の意味で俺は理解できたのかもしれないな。でも！他に俺はどうすれば良かった？！ハクアリティス様は神の子（マイマール）を殺したんだぞ？！それを許せって言うのか？？」
何一つ報われない、やりきれない悲劇の連鎖に吐き気がした。
アラシを責めたい気持と同様に、アラシのその姿にかつての自分を重ねた。
だが、私はもう罪悪感だけに縛られないと決めたのだ。
「お前の懺悔を聞いている暇はない。」
「なっ！？」
「そうだろ？お前は私にそれを聞かせて何を言ってもらいたいんだ？慰めの言葉か？励ましか？それとも責めてほしいのか？だがな、何一つお前のやったとこは正当化されないし、お前の罪は償われる

ことはない。一生背負っていくんだ。私もお前も。…自分のやったことと向き合え、犯した罪は永遠に変わることはない。」

アラシは放心したように私を見上げた。

彼がこれから私のように罪を背負ったまま生きる覚悟をするのか、今までの私のように罪から目をそむけ続けるのか、それとも別の道を歩むのか、それは私が決めることではない。

「それよりエンシッダや万象の天使は…悪魔はどこだ?悪魔の封印はどうなったんだ?!」

話を打ち切るべくそう言ってあたりを見回せば、ある物を見つける。

恐らくそれは先ほどまで朽ち果てた白(ヴォルガナ・ニルヴァーナ)であったはずのもの。

「あそこだな。」

石で造られたアーチ、その向こう側に世界の胎内(ヴァラヴィーダ)とは別世界が広がっていた。

「…そうだ。結局、俺や黒き神が抵抗したところで灰色の魔力を統べる悪魔には敵わなかった。奴は第二の封印を解きやがった!!」

「第二の封印を?それを解けば世界が崩壊するほどの灰色の魔力が溢れるという話だったが…そんな気配はないな。」

第二の封印は本性を現した白と黒の神の交わりによって発生した灰色の魔力を封印していたはずだ。

さすれば神に忌み嫌われた子供誕生(ラーオディル・オヴァラ)と同じ程の灰色の魔力があってしかるべきであるはずだが、世界の胎内(ヴァラヴィーダ)は静寂を保っている。

「悪魔が全て吸収していったよ。あいつはもはや人間じゃない!神(ラ)に忌み嫌われた子供同様に灰色の神同然だ。白き神も黒き神も灰色の魔力が全て悪魔に吸収されたからか人間の姿に戻って、悪魔を追って第三の封印のもとにすっ飛んで行った。残ったのは役に立たない駒の俺だけさっ。」

やけくそ気味にそう吐き出すアラシ。

私はそれを一瞥しただけで言葉はかけず、神と悪魔が向かった解かれた第二の封印を見やる。

向かい合ったアーチのその造形は普通ではなく、よく見ればその全てが先ほどまで朽ち果てた白を形作っていたと理解できた。
石造りの両方の柱にはそれぞれ白と黒の神の断末魔の顔がこちらを睨みつけ、それぞれの体がバラバラにアーチに纏わりついているようだった。
「じゃあ、私も行くか。」
「ばっ！お前がどうやって悪魔から独立したかは知らない！だが、今の俺には分かる…お前にはもう何の力もないんだろ？黒の武器も灰色の魔力もさっきまで悪魔が俺に向かって振り下ろしていた！それに向こうには白と黒の神もいる…お前ができることは何一つない！命を大事にしろ！」
そんなことは言われなくても分かっている。
今までの私だったら恐らくそれに頷いていたはずだ。
罪悪感によって生かされた命をそうやって惨めに守り続けていた。
「なあ、それは本当に命を大事にするってことなのか？」
「え？」
私はアーチに向かって足を進め始めた。
「そもそも命を大事にするって何だ？逃げ回ってただ死ななければ命を大事にするってことになるのか？」
もちろん、人間は死んだら終わりだ。
もうそれ以上何をすることもできない。
だけど、ただ死なないように逃げ続けること…それは果たして本当に命を大事にしているってことなのか？
「私は違うと思うんだ。」
それに気がつくのに長い時間がかかった気がする。
「命を大事にするっていうのは、ただ生にしがみつくことじゃない。いや、しがみつくことが悪いんじゃない。そのしがみつき方が重要なんだ。」
「はあ？しがみつき方？」
私の言い方が妙だったからだろう。アラシがシリアスな雰囲気に

そぐわない素っ頓狂な声を出す。
だが、私自体もうまく言葉にできる気がしなかった。
「逃げ回って生き続けるんじゃない。戦って、生きるんだ。」
「ヒロ？」
「戦って負けるかもしれない。ボロボロになって勝敗もつかないかもしれない。結局、敵わなくって逃げ出すかもしれない。いや、そもそも戦っている相手なんかいないのかもしれない。それでも私は戦い続けたい。そして、生き続けたい。立ち向かい続けたいんだ。」
今まで私はある意味逃げ続けていた。
戦うことを避けてきた。
だって、戦って戦って、全てを失ってきたから…、もう何も失いたくなくて戦うことをやめていた。
そして、それを罪悪感という大義名分の前に戦うことから目をそむけてきた。
「人間はどんなに命を大切にしたっていつかは死ぬ。神を見ていればわかる、永遠を約束されていても終わりはいつかやってくる。だったら、その死に、いつかくる終わりに私は誇りを持っていたいんだ。自分の中で納得した人生を歩みたいんだ。中々そんな生き方はできないかもしれない。だが、とりあえずやろうとしなければ何も始まらない。まあ、その結果、神やら悪魔の戦いに首を突っ込んで呆気なく死んでしまうかもしれないがな。」
戦うことが怖くない訳ではないが、それは口にしない。
言葉にしてしまえば、それが現実になると分かっているから。
私はアーチのすぐ前で立ち止まって、最後の決意を口にする。
「でも、絶対に諦めない。東方の楽園（サフィラ・アイリス）も、戦っている人間も…自分の命も！」
アーチの向こうには今は白い光を放っているだけだが、恐らく封印した異能者が、そして第三の悪魔の封印がある。
多分、ここをくぐったらもう後戻りはできない。
ごくりと一つ唾を飲み込む。

力を持とうが持つまいが、私という人間はあまりに弱い存在だ。
この先、どんな展開が待っているかなど、私には想像もつかない。
「じゃあ、行ってくる。」
「ヒロ！！！」
私の名を叫ぶアラシに振り返ることはなく、私はそのまま不気味なアーチをくぐって、白い光に包まれた。

――――ドオォオオンッ

白い光に包まれて目がくらむかと思ったが、そんなことはなく白い空間から急に色彩鮮やかな世界に放り込まれたかと思った瞬間に轟音と衝撃が私を襲った。
「うわあっ！」
何一つ構えていなかった体は無防備に吹っ飛び、私は地面に叩きつけられた。
しこたま背中を打ちつけて、強すぎる衝撃に息をするのを一瞬忘れ、そのまま地面に倒れこんで悶絶する。
幸い地面に尖ったものや石などがなかったため、骨が折れたり流血の気配はないが、痛いものは痛い。
「まったくいきなりこれか…一体何がどうなっているんだ？」
背中を庇いながら立ち上がれば、相対する存在同士が戦いを繰り広げていた。
それはある意味想像通りというか、想像を通り越しているというか…しかして、二人はきっと世界が思っている理由では戦っていない。
それは戦いながら交わされる二人の会話から分かった。
「どうして？！世界の理さえなくなれば私たち一緒になれるのよ？！」
その真実の姿はオウェルの記憶の中で垣間見た、無垢なる白を纏

いし女神イヌア・ニルヴァーナ。
だが、その瞳は禍々しく黄色に光り、無垢とは相対する形相で白き装飾の施された槍と体から灰色の魔力らしきものをを振り回していた。
それを黒で彩られた巨大な剣で交わすのは、相変わらず神とは見紛う汚い神ウ・ダイ。
「一緒になれたところで世界がなくなれば意味がないだろう！イヌアッ、目を覚ませ！！」
白と黒の神。
世界の神話より相対し、交わらないはずの二神。
生と死を司り、その本性すらも交わらない。
世界も、境遇も、理も、全てが二人の交わりを禁じていた。
二人がそのままに相対しあい、憎しみあい、蔑みあえば、全ては丸く収まったのであろう。
だが、二人は愛しあった。求めあった。

――――そして、交りあった

それが全ての悲劇の始まり。
そして、白と黒から生まれ出でた灰色の神に忌み嫌われた子供。
禁じられた交わりから生まれたのは、全てを破壊する存在。
やはり、禁じられた理は破ってはいけなかったのだろうか。
それでもそれを認められない白き神は、世界が壊れても黒き神との交わりを求めている。
だが、黒き神は…
「俺たちには最高神としての責任があるんだぞ！？」
「そんな大義名分を振りかざして、貴方はもう私のことを愛してはいないのでしょ！？貴方は貴方のために全てを捨てた私よりあの女を愛している！！」
何だか雲行きが怪しい。

まるでどこかの修羅場に遭遇したような会話だと思いながら、私はどうやら誰にも気が付かれていなそうなことを幸いに、そのまま木陰に身をひそめる。

正直、やっぱり何の力もないままの私にとって神同士の戦いの中に足を踏み入れれば最後、あっという間にあの世行きなのは目に見えている。

そして、やっと第二の封印の先にある異能者がいるという世界を改めて見回した。

雰囲気は先程までいたローラレライの世界とよく似ている。自然に溢れた緑の世界。

だが、ローラレライの世界が森の中だったのに対して、この場所は明らかに人の手が入った庭園といった雰囲気だ。

開けた庭の所かしこには意味のわからないモニュメントや、手入れされた草木や花が綺麗に植えられている。

私はこんな場所にはトンと縁がなかったはずだが、強いて言うなればかつて天使どもに追いかけられた天近き城（フェデス・ジグロア）の庭園を思わせた。

だが、あの場所の様な開けた空はこの世界に存在せず、見たことのないような赤と黒が混ざったような気を重たくさせる不気味な色が庭園の美しさを損なって空間を埋め尽くしていた。

（さて…異能者とやらは一体どこだ？）

あたりを見回してみるが、神同士が大きな場所をとって戦っているためあたりがよく確認できない。

白き神に心酔しているらしいエンシッダも、神に忌み嫌われた子供（アラ）に乗っ取られた万象の天使も、私の体を支配した悪魔（ラーオディル・オヴ）も近くにいる様子はとりあえずない。

異能者と呼ばれる『世界の理』が皆の目的であるのは確実だ。

私は激しい戦いに巻き込まれないように、気配を消すと物陰に隠れながら異能者を探すことにした。

第１４９話　愛より出でし呪いは死の薫りがした　５

（それにしても私の人生、ここ数カ月で随分大変なことになったもんだ）

始まりはもっと前なのかもしれないが、それでも全てはハクアリティスを助けて天使に喧嘩を売ったあの時から始まったという思いが強い。

天使に拷問され、牢獄に投獄された。

変人科学者に実験体にされそうになり、助かったと持ったら天使の城に連れて行かれた。

三大天使との出会い、エヴァとの別れた。

天使から逃げ出した後は、人間軍の一員として罪人（アークヴェル）の巡礼地で天使と戦い、私は自分が悪魔の生まれ変わりであることを知った。

そして、灰色の魔力を得て、知りたいことも知りたくないことも知らされ、結果、私は戦うためにここにいる。

色々な物を少しずつ得た。

――力・仲間・絆・友情・信頼

だけど、気が付けば何もかも失っている。

力は悪魔に全て奪われ、守りたい者は気が付けば手をすり抜け、心も枯れ果てた。

でも、それでも私はまだ生きて戦いたいと思っている。人生何があるか分からないものである。本当に。

私は地面に這いつくばりながら、呑気にそんな事を考えながら周囲の気配を探っていた。

元々髪を切るという習慣がなかったため長い髪を一つに括っていたが、新しくローラレライが作ったこの体は髪が短くなっていた。

とはいえ、前のより短いというだけで全体的に首くらいまで伸びている黒髪は、地を這いつくばっている私の視界を覆う。
それをうざったく払いながら慎重に進んでいた。
それにしてもどうして髪は短いのだろう？
顔はアラシが気付いたくらいだから前と変わらないようだが、ならば髪も同じでもいい気がする。
そこでハタと一つの考えにたどり着く。
（ひょっとして悪魔と区別するためか？）
乗っ取られた私の体を有する悪魔と全くの姿形が同じであれば、周りが区別できないだろう。
『なるほど！』と正直どうでもいいことに考えを巡らせていると（どうやら腹を決めるともうあたふたと焦ることもなくなるらしい）、新しい気配に気がつく。
そして、漏れ聞こえてくる会話に聞き耳をたてる。
「――世界の理をどうするつもりなの？」
聞こえてきたのは万象の天使（ラーオディル・オヴァラ）…いや、今は神に忌み嫌われた子供の声。
私は気付かれませんようにと祈る様に、そっと木々の間から顔を出して様子をうかがう。
私の視界に一番に目に付いたのは悪魔の背中…というか、これは私の元の体の背中。
見慣れた体格、長い黒髪、その右手には黒の剣（ローラレライ）がしっかりと握られている。
それに加えて圧倒的な魔力の気配。
アラシの言葉ではなかったが、もはや人間の気配ではない。
私の体は悪魔の魂を覚醒させたことにより、私が主人であった時よりも灰色の魔力の気配を更に濃くさせていた。
その悪魔に対峙するのが万象の天使の姿をした神に忌み嫌われた子供（ヴァラ）。
彼は長年追い続けてきた悪魔を前に、万象の天使（ラーオディル・オ
であった時には

見せることのなかった子供のように頼りない顔をしていた。
しかし、その背後に大きな球体のようなものを庇い、しっかりと全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）を構えている。
（あれが世界の理か？）
私はそれをよく見ようと静かに音をたてないように場所を移動する。
球体の大きさは一軒家くらいあろうか？
透明のガラスのようなものでできている球体はその中心を一つの棒で斜めに貫かれ、クルクルとゆっくりと回っている。
球体の表面は透明だが、淡い紫の色で様々な文字が浮かび上がり、その中心には胎児のように丸まった人影を認めた。
異能者…なのだと思う。
だが、微妙に距離があってその存在の詳細はここからでは分からない。
その代わり球体の真下で見慣れた人物がヒステリックに叫んでいるのを発見した。
「どうしてだ?!どうして俺では動かない？異能者よ!!!」
エンシッダ、そしてその横にはヴィスがいた。
エンシッダは緊張感あふれる悪魔と天使の対峙と、まるで違うシーンを演じるように叫び喚き嘆いていた。
「世界の理は灰色の魔力により干渉することができるはずなのに!!どうしてだ？ヴィス！俺では理を変えることができない!!!」
あの常に人を食ったような態度で飄々としているエンシッダの余裕のない様子に、私は面を喰らう。
何がここで起こっていて、どういった経緯でこの場面になっているのか、全然わからなくて私は一人で戸惑っていると、叫ぶエンシッダの横に佇んでいたヴィスがくるりと私の方を見る。
「ヒロがいる。」
（げえっ！）
すぐに木の陰に隠れてそう出てきそうになる声を飲み込んで見せ

たが、エンシッダだけではない悪魔も万象の天使も当然ながら、ヴィスの言葉に私のことに気が付く。
ヴィスは未来を見通す力を持っているのだ。
きっと、私が来ることなどお見通しだったということなのだろう。
これ以上は隠れていても意味がないだろうと、私は観念して木の影から一同に姿を露わにした。
「どうもお揃いで。」
何と言って声をかけるべきか判断しかねて、気の小さな私はとりあえず無難な挨拶をしてみる。
ヴィス以外がまるで幽霊でも見たかのような表情で私を見ていることは、どうにも気詰りで仕方ない。
「魔女!あれは本当にヒロなのか!?」
悪魔が私から目をそむけることなく叫んだ。
(『魔女』?)
女という性別をもつのはここではヴィスだけだ。
想像通りにヴィスが口を開く。
「彼はヒロ。貴方の魂から解放された本当の意味で『世界の楔』になる資格を持つ者。何一つ持たない者。」
『何一つ持たない者』、それは古い言葉で『ヒロ』という私の名を現す言葉。
そして、今の私を現す適切な言葉でもあろう。
だが、『世界の楔』になる資格とは何だ?
『世界の楔』とは何なのだ?それは悪魔のことじゃないのか?
「くそっ!どうしてだ?アイツを野放しにしないために俺はアイツを俺の中に取り込んだって言うのに!!」
ヴィスの言葉に悪態をつく悪魔。
「おい、ヴォル。どういうことだ?!ヒロはお前が完全に掌握したんだろ?どうして、お前の体に抑え込まれているはずのヒロが?!」
私の登場に一人芝居をしているかのようだったエンシッダが急にこちらに加わって叫ぶ。

そして、その言葉に心の中でうんうんと私は頷く。
私も今の状況を説明しろと言われても自信がない。
「エンシッダ、黙れ。あれは間違いなくヒロだ。俺はヒロを俺の魂から切り離し、封印された異端に封印した。だが、誰かがその封印を解き、ヒロの魂にに新しい体を与えた。俺とヒロはもはや完全に別人物という訳だ。誰だ？お前に体を与えのたのは？」
さすが悪魔、動揺していた状況からすぐに的確に分析を完了したようだ。
ゆらゆらと狂気に揺れる瞳に、白き神と違い理性が見える彼はまだ灰色の魔力に支配されてはいないようだ。
「ローラレライだ。」
「何？」
しかし、私はさらに揺さぶるように畳みかけた。
「聞こえているだろう？だから、ローラレライだよ。お前の恋人。その黒の武器の礎となった女。彼女が私に体をくれた。」
途端に自信に満ちた悪魔の顔（いや、顔は私と同じなのか）が崩れた。
「嘘だ！」
「嘘じゃない。」
どうやら、この方法で悪魔を責めるのは有効らしい。
私は何の根拠もないままに会話を続けた。
断言するが、まともに戦えば間違いなく私はあっという間にあの世行きである。（大体、力云々の前に私は現在丸腰だ）
悪魔だけじゃない、ここにいる全ての野郎どもが世界の理に触れないようにすることが、とりあえずの私の目的だ。
世界の理が壊れてしまえば、東方の楽園が消滅する。
捨てゆく世界とはいえど、ここにはまだたくさんの人間がいる。
それに第二の封印が解けたとはいえ、戦っている仲間たちがそのまま易々と西方の魔境に向かっているとも思えない。
ならば、私の役目は東方の楽園を守ること。

だが、私のなけなしの心理作戦は悪魔に対してさほどの威力を発揮しなかったようだ。

揺らいだのは一瞬だけ…悪魔はすぐに灰色の魔力に侵された黄色の瞳を光らせると、私を見てにやりと笑った。

「そうか…ふふはは、ローラレライが！彼女がお前を…だったら、俺がすることはただ一つだ。ヒロ」

そして、私の名を呼んだかと思った瞬間に悪魔は私の視界から消えた。

「？…がぁあっ！！」

そして、次の瞬間に腹に強烈な横からの衝撃が襲う。

何だか分からないまま、衝撃に従って私は吹っ飛んだ。

不意の攻撃というか、私が構えることすらできない早い攻撃に木に激突した衝撃の後、私はそのまま地面に倒れ落ちた。

「げほっ…！」

体中が痛みを訴えた。

だが、その痛みに答える暇はない。

「ヒロ…お前は本当に愚かだ。折角、俺が施した封印から脱し、俺の干渉下にない体を手に入れたというのに、わざわざ自分から死にに来るなんて。分かっているだろう？全ての力は俺が持っているんだ…全ては元々俺の力なのだから。お前は俺が転生するためのより代にすぎない。」

一歩一歩近づいてくる悪魔の纏う魔力の濃さゆえか、彼の周りの空気が揺らいでいるのが見えた。

真っ赤に染まる空の色が、青に、黄色に、緑に、黒に、白に…ありとあらゆる色が混ざり合うように蠢くのが見えた。

私はそれを見て初めてそれまで自分が持っていた灰色の魔力という存在に大きな疑問を抱いた。

黒と白の混じり合った色が灰色だというのであれば、今私が悪魔の周りに見ている魔力は何だ？

全ての色を集約したかのように揺らめく魔力の気配…、自分の内

にあった時には気がつかなかったその不気味さに私は鳥肌が立つのを覚えた。

「さあ…今度こそ息の根を止めてやろう。世界の楔…俺の目的の邪魔となる存在を許してやるほど今の俺は寛容じゃないんでな。ここまで連れてきてくれたことには感謝しているが、ヒロ…お前はこの世界に大きく関わりすぎたんだ。」

本能が強すぎる力に体を震わせているのが分かった。

振り上げられるかつての愛剣・黒の剣（ローラレライ）を咄嗟に転がることで避けて、その後に自分がいた場所が木の根っこごと抉り取られ、まるで蒸発したようになっていることにぞっとする。

せっかく、ここまで来たというのに呆気なく悪魔に殺されてたまるものかと、私は震える体を叱咤して駆けだした。

第１５０話　悪魔の封印　３－１（前書き）

注意：この話には流血・暴力表現が含まれます。嫌悪感を抱かれる方は注意してください。

第１５０話　悪魔の封印　３－１

彼はどこにでもいる人間だった
無数に存在する人間の一人、彼の代わりなど何万何千といた
だが、彼は一人の子供を慈しんだことにより灰色の魔力を手に入れた
やがてその運命は大きく変わり、彼は永遠の命や大きな魔力を手に入れ、何処にでもいる人間ではなくなった
しかし、その代償に彼は何処にでもいる人間が得るはずの幸せを見失う
そして、千年前のあの日、彼は悪魔と呼ばれるようになる
天使の翼を切り落とし、悪魔は全てを封印した
災いも絶望も悲しみも、彼は自分の全てと引き換えに封印した
そして、彼はその時始めて『ある事』に気が付く
だが、全ては封印してしまった後…だから、彼は再び全ての封印を解き放つ
――彼が失った全てを取り戻すために

【悪魔の封印　３】

走れ…そう行動しろと脳から体に命令を下した瞬間に私の視界は反転した。
次いで襲ってくる激痛に声のなき悲鳴を上げた。
何が起こったか分からなくて混乱する中、視界に真っ赤に染まった自分の足が一瞬目に入る。
足を切られた?そう思った瞬間に背中から打ちつけられた。

「がぁっ…！」

そして、ようやく気がつく、下半身を背後から切りつけられた私は勢い余ってくるりと前に一回転をして倒れこんだのだ。

切りつけられたのは熱と痛みから、両太ももであるとすぐに分かった。

後ろから動脈のあたりをバッサリ切られたらしく、すごい勢いで血が抜けていくのが視界でとらえなくても分かった。

「無駄だ。ただの人間のお前は俺から逃げることもできない。」

悪魔の声が上から聞こえた。

私は痛みのあまり立ち上がることのできない体で、何とか腕だけで這いずると、今度は腕を右肩から黒の剣（ローラレライ）で貫かれた。

「イッ！」

そのまま地面に崩れ落ち、例えないような痛みに唸った。

地面に崩れ落ちたと同時に剣が抜けた傷口からは、足から流れるのと同様に多くの血が抜ける。

ベチャベチャと私の周りはあっという間に血だまりができた。

それでもまだ動く左腕で私は這いずろうとする。

――――ヒロ

ふと聞こえてくる淡い声、その先にあるのはたった一つ、世界の理である。

確信はないが世界の理が私を呼んでいる、そんな感覚が倒れこんだ私の中に生まれた。

だが、もはや這いずることしかできない私の背中を悪魔が踏みつける。

「行かせる訳がないだろう。諦めろ。お前はここで何もできずに死ぬんだ。」

踏みつけられる力が強く、肺が潰れるような感覚に息が詰まった。

痛みは切りつけられた場所だけでなく、全ての場所に広がった。

全身が熱くなり、呼吸は浅く、汗が噴き出る。
悪魔の言葉は理解できた。私だってその通りだと理性は答えている。
でも…今の私は理性に従う訳にはいかないのだ。
だから、足を切りつけられようが、腕を貫かれようが、背中を踏みつけられようが、私は左腕をなおも伸ばす。
土に爪を立て、必死に這いずろうと体に力を込める。
そのために血が吹き出ても構わない。
世界の理に達することで私が何をできるかも定かではないが、何かができるはずだと思った。
何かをしたいと、聞こえてくる頭の中で呼ぶ声に強く思った。
理屈じゃない。本能がそうしろと私に命令を下した。
「ヒロちゃん!!もう、やめて、ヴォル!!」
そういってラーオディルが私を庇おうとしたが、悪魔はそれを無情に突き飛ばした。
強い力を持っているはずのラーオディルであるが、悪魔に対してその力を使う気がないのか、それとも悪魔の力が強いのか、その突き飛ばされたままに地面に倒れこむ。
「ラオ…お前は変わらない。力を持っているくせに、どうしてそんなに愚かなんだ?お前は小さなものばかりに今も昔も執着する。」
「僕は繋がりが欲しいだけだ!!」
「安い繋がりだ。俺じゃなければ、ヒロでもいいのか?お前は誰でも優しくされればそれでいいのか?」
世界に忌み嫌われた子供に対してそれはあまりに残酷な言葉であろう。
「なっ…?!」
ラーオディルも絶句したように言葉をなくす。
生き物は生まれた時から死に向かって、たった一人で歩み始める。
誰かと多く関わっていこうとも、ラーオディルが望むように誰かと一つになることはない。

だが、それが嫌だから、皆繋がりを求める。
それが家族とか友達とか仲間とか恋人とか、そういう名のつく繋がり。
その繋がりは私たちに様々なものを与えてくれる。
例えば喜びも悲しみも愛情も怒りも…全ては一人では持ちえない感情だと思う。
誰かがいることで成り立つ感情、誰かがいるからこそ湧き出る想い。
だが、世界に忌み嫌われた子供はそれから隔離された。
誰からも忌み嫌われた子供は、全てから疎まれ避けられた。
故に生きているものが持ちえる感情を彼は知ることはなく、ただそこには一人で生きていかなければならない孤独と絶望が横たわるだけ。
そんな人生、想像するだけでも恐ろしい。
その暗闇だけの人生にたった一つの繋がりを与えたであろう悪魔、その彼をラーオディルがどれほど渇望していたかは、私に対する態度でも想像がつく。
その悪魔に自分でなくてもいいのだろう…などと言われて、果てして子供は一体どんな思いを抱くのであろう？
そして、悪魔はどうして、どんな気持ちでそれを告げたのだろう？
そこまで考えて私はふと、とある推測に辿り着いた。

「なあ、悪魔。お前はどうして千年前に全てを終わらせなかった？」

声は痛みに、そして、辿り着いた推測に戦慄して震えていた。
「何を言い出した？」
その声は私のことを本当に馬鹿にした声だった。
だが、私の想像が正しければ、それは恐らく悪魔にとってもっとも知られたくないこと。そして、この先の世界の運命を大きく変える事実。

「だから、どうして千年前に異能者に干渉してローラレライを蘇らせなかった?あの当時、既にお前は灰色の魔力を持っていたんだろ?」

声を絞り出すだけで苦しく、息は続かない。

だが、私の問いかけにふと踏みつけられていた足の力が弱まるのを感じた。

「わざわざ私に隠れて転生をして、千年も待ち続けることに何の意味があった?」

ユイアやローラレライの話を聞いた時から違和感を感じていた。

そして、罪人(アークヴェル)の巡礼地での悪魔とこの場所で感じる悪魔の違いにも違和感を感じていた。

――ヒロ、ソノ　コタエ　ハ　ワタシ　ガ　シッテイマス

そんな私を後押しするように頭に声が届く。

声の正体はきっと世界の理に違いない。

だが、私の問いに悪魔が一瞬だけ戸惑う気配があったのに、次の瞬間には背中に更に強い圧力が加わることで私は地面に這いつくばざるをえないのだ。

「グッウ」

「黙れ。それを今更、お前が知ってどうする?ただ、この世から消えるだけのお前が知ったところで何の意味がある?」

顔を地面に押し付けられ、顔は見えないが近くに倒れているラーオディルの左手が目に入る。

そこにふと見覚えのあるものが目に入る。

そして、自分の血だまりでべっとりと濡れた掌を確認する。

私は先のことなど何も考えずにラーオディルの左手をはまっている指輪ごととると、しばらく唱えていなかった言葉を口にした。

「誘え(いざな)、足跡(エンダー)の指輪(ケルト)!!」

瞬間に背中の圧迫感が消え何度も感じたことのある浮遊感と、次

に重力に従って再び地面に倒れこむ。
普段なら大したことのない衝撃も、深手を負った現状には強い痛みと苦しみになる。
「大丈夫!?ヒロちゃん!!」
ともに異端の一族の遺産である足跡（エンダーケルト）の指輪の魔法により瞬間移動をしたであろうラーオディルが悶える私に駆け寄る。
彼は私のことを呼び捨てにしていた気がするが、エヴァンシェッドを支配したことによりエヴァとの境目が薄くなっているのかもしれない。
ラーオディルの私を呼ぶ声は、エヴァとよく似ていた。
それにしても咄嗟でもエヴァを通じて万象の天使に足跡（エンダーケルト）の指輪が嵌っていることに気が付けてよかった。
灰色の魔力を失っても、これは私の血に混じる魔力を使用するものだから使えるに違いないとあたりを付けていたが、成功したことに酷く安堵する。

「ヒロォオオ!!」

しかし、ほっとしているのもつかの間、悪魔の叫びがすぐに聞こえてくる。
大体、逃げるために足跡（エンダーケルト）の指輪を使った訳ではなく、あくまで世界の理に近づくための手段として使ったのだ。
その距離は僅かに１００メートルもない、そんな私の行動は悪魔の怒りに油を注いだらしい。
私の名を鬼の形相で叫びながら、悪魔はこちらに向かって突進してくる。
何をどうしていいかも分からないし、そもそも恐らく世界の理に施された悪魔による第三の封印は解かれていないのだろう。
世界の理には灰色の魔力の気配がぐるりと囲んでいる。（魔力を失っても、ずっと自分の身に飼っていた力だ気配くらいは感知でき

た)

――とにもかくにも、とりあえず世界の理に触れてしまえ！

何が起こるか分からないし、人間となった私が触れたところで世界の理は何も答えてくれないかもしれない。

だが、それでも世界の理が私を呼んでいるような、触れさえすれば何かが変わるような、そんな予感が私を支配していた。

だから、何の考えもないまま、ただ状況を打開すべく私は淡い光を放つ球体に手を突っ込んだ。

ビリリと電流のようなものが私の体を走る感覚の先に、何かが捕まえられるような気がして私は更にもっと手を伸ばす。

「ヒロちゃん！！」

エヴァの声。

「ヒロ！！」

悪魔の声。

――やっと会えた…愛しい魂を持つ貴方

そして、私は優しい優しい声を聞いた。

声は千年前の物語を私に紡ぎ、私は自分の推測が正しかったことをここに確信する。

それは愛より生まれし呪い、全て全て…悲しみに満ちた運命。

「どうして？どうして…人はすれ違うんだろう？」

気が付いた時、私の目からは涙があふれていた。

第１５１話　悪魔の封印　３－２

私の網膜には今、二つの世界がダブって見えている。
一つは今、私が生きている世界。
悪魔とラーオディルとエンシッダとヴィスが、涙を流し続ける私を呆気にとられた顔で見ている。
もう一つは、千年前の世界。
全く同じ場所に悪魔とラーオディルがいた。
悪魔は血まみれで黒の剣（ローラレライ）に縋りつき、ラーオディルは片翼を切り落とされて気を失っているようだった。

『さあ、あたしを殺して。』

そして、二つの世界で同じ言葉と姿をする一人の少女。
年の頃は１４，５と言ったところか、黒く長い髪は少女の身長ほどあろう。まっすぐの綺麗な髪と白い肌以外は何も纏っていない。
だが、その神々しいまでに無垢な裸体は、淫猥な想像を一切受け付けない清廉さを持っていた。
少女の名は世界の理・カグヤということを、世界の理に触れた瞬間に理解した。
大きな球体の中に閉じ込められた前文明から生き続ける異能者。
彼女は泣き続ける私と、悄然とした悪魔に笑顔を見せて訴え続ける。
『貴方は世界の楔となる資格を持つ、何一つ持たぬ者。世界の楔は異能者を殺すことができる唯一の存在。彼は運命の羅針盤・アフリラは殺してもあたしのことは殺してくれなかった。だから、あたしはずっと待ってた。私を殺してくれる次の世界の楔を…それが貴方。』
千年前の幻影の中で、世界の理の傍に一人倒れる男の姿が見えた。

千年前のカグヤはその彼にそっと触れると、男の体を消してその手に淡い光を灯した。

『これは世界の楔が持つ魂の烙印。これを得ることができる魂は数百年に一度存在するかどうか…彼はそれを貴方に託した。託された貴方にはあたしを殺す義務があるのよ。』

そのカグヤの手に光る淡い光は、その言葉に一瞬だけ毒々しい赤色の光を放った。

＜ＩＮ　千年前＞

世界の理に触れたことにより、悪魔によって故意に隠された千年前の事実が私の前で繰り広げられる。

悪魔は茫然とした顔のまま、うつろな瞳を少女に向けた。

「君が異能者か…君を殺すことは容易いかもしれないが、そうしたら世界はどうなる？」

疲れた声のまま、血を流し倒れる万象の天使を見やりながら悪魔は呟く。

俯く彼の表情は見えない。

悪魔が天使の翼を切り落とした…その事実だけは嫌になるほど理解していたが、こうしてその直後の状況を見ると、彼らは一体どんなやり取りを経てその結果にたどり着いたのであろう？

少なくとも悪魔は本当に望んで、天使の翼を切り落としたようには見えない。

「貴方は理解しているんでしょ？あたしが死ねば、異能者という、大地を支える魔力の根源がなくなってこの東方の楽園（サフィラ・ファイリス）は消える。でも、それを回避できる方法はあるよ。」

カグヤは無邪気な笑顔で、俯く悪魔を覗き込む。
「あたしと同じ灰色の魔力の根源。ここにあたしの身代わりとなるラーオディルがいる。」
――異能者が灰色の魔力の根源？
「全ての魔力は灰色の魔力から生まれている。要するに灰色っていうのは、全部を混ぜられた混沌の色なの。だけど、それはとても強い力。全てを灰色に塗りかえてしまう力でもある。だから、普段は異能者というあたしたちを通すことで、それを色々な色に分けて世界に魔力を提供しているという訳。」
私は先ほど悪魔から立ち上っていた魔力の気配の意味をやっと理解する。
様々な色に変わる灰色は、やはり全てを孕む存在であったという訳だ。
「白と黒…二つは私たちに一番近い存在。そして、二つが交わることで灰色の魔力が生まれた。それは白と黒の神だけじゃない、他の神でも同じことが言えるの。だから、世界（あたし）の理は神同士の交わりを禁じた。それは灰色の魔力…要するに異能者に近い存在を生み出さないため。」
全ての魔力の根源である灰色の魔力を、色々な色に分ける役割も異能者は請け負っているらしい。
それはすなわち魔力の根源であると同時に、その管理者でもあるという訳だ。
そんな大そうな存在には見えないにっこりと笑う美少女相手に、悪魔はぎらりと目を吊り上げた。
「それならば自分たちで禁じておきながら、どうしてラオが存在している？異能者の力…理や運命を司る君たちなら、あいつという存在そのものを存在させるはずがない！」
その言葉に少女のようなカグヤの表情が、凍りついた女のものに

一瞬で変わった。
「随分と酷い言葉だね。ヴォルツィッタ…、では貴方は神に忌み嫌われた子供の存在自体を否定する訳？あんなに慈しんで育てたというのに、なんとも薄情なもの。まあ、恋人を殺されているのだから、それも仕方ないのかな？」
「俺の質問に答えろ！君たちは何のためにラオを！！」
悪魔はラーオディルが偶然に生まれたものではなく、異能者たちによって造り出されたということに確信を持っているようであった。

「これはあたしだけじゃない、全ての異能者の総意。」

悪魔の確信に異能者カグヤは、何一つ隠す必要もないと言わんばかりに堂々と答えた。
その表情は少女の無垢さも純真さも兼ね備えない、毒々しいまでの妖艶さと近寄りがたい畏怖が備わっていた。
悪魔はその姿に怯えたように表情を歪める。
「もう、嫌になったのよ。初めは自分たちが造りだした世界が楽しかったけれど、もう飽きたの。だから、神に忌み嫌われた子供を造って、異能者の代わりに人柱になってもらうの。そして、わたしは生まれ変わるの。この体を捨て新しい体に転生して今度はもっと楽しい人生を送るのよ。」
ふふふと笑って、カグヤはくるりくるりとスキップをしながら踊る。
さらさらとその動きに沿って踊る黒髪は軽やかで、カグヤは何一つ憂いがないかのように楽しげだ。
異能者という責務から解放される…ただ、それだけが楽しくて仕方ないとでも言わんばかりのその姿に悪魔は呆然としている。
彼女がこれまで背負ってきた苦しみを考えれば仕方ないのかもしれない。
ずっと一人で世界の為にあんな小さな球体に閉じ込められれば、

狂気に取りつかれても致し方ないのかもしれない。
『でも』『だが』…私はそう思う。
この世界はおかしすぎる。
誰かの犠牲の上に成り立つ悲劇と絶望の連鎖…それが世界を形作っている。
『でも』『だが』、悲劇と絶望の連鎖がなければ成り立たない世界は本当の正しいのか？
もっとほかの方法は存在しないのだろうか？

「だから、あたしと取引をしよう？ヴォルツィッタ。」

少女の皮を脱ぎ棄てた女が、悪魔に抱きついた。
甘い息と言葉を耳から毒のように注ぎ込み、細く白い手を蛇のように悪魔の背中に巻きつける。
「貴方は自分の恋人を死に追いやったその子供が憎いのでしょう？ならば、復讐をしましょう。」
カグヤが悪魔の足元で倒れるラーオディルの背中を踏んだ。
白い素足に翼をもがれたことによって滴り落ちる赤い血がべったりとつく。
「死なんて一瞬の苦しみ、それよりただ世界のためだと搾取され続ける異能者という名の人柱にしてしまうことこそが、最高の復讐。異能者のあたしがいうのだもの間違いないわ。そうでしょう？」
「…その復讐を果たすためには、俺が世界の楔となり君を殺すしかないという訳か。」
感情が読み取れない平坦な悪魔の声に、カグヤは明るい笑顔を輝かせる。
「そう！簡単な話でしょ？あたしを殺して、神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）を世界の理に放り込めばそれでお終い。あたしは新しい人生を手に入れることができ、貴方は最高の復讐を遂げることができる。」
抑えられないカグヤの笑い声が世界の中心に響き渡り、彼女は更

に悪魔に甘い言葉を囁き続ける。
「それに神に忌み嫌われた子供が世界の理になれば、彼にローラレライを蘇らせることができるわ。世界の楔である貴方は彼の命を握っているも同然だもの。それを盾にローラレライを殺した彼に、ローラレライを蘇らせ、更に貴方と彼女の幸せな姿を見せつけてやりなさいよ！もう、考えるだけで最高の復讐じゃない！！」
　復讐のことを考えるだけで興奮するカグヤに対して、きょとんとしたように悪魔は彼女を見やっていた。
　それはローラレライを蘇らせようと、狂気にぎらつく瞳をした悪魔とは全くの別人であった。
　彼は静かにぽつりと呟いた。

「俺はラオに復讐を…するのか？」

「ええ。それが貴方の願いでしょう？貴方はそのためにここまで来たんじゃないの？」
「…違う。」
「え？」
　悪魔の声は小さいがはっきりとしていた。
　それに対してカグヤは美しい顔に、まるで狐につままれた様な感情を浮かべた。
「だから、違うと言っている。ラオに復讐…こいつをそれくらい憎めたら楽だったのかもしれない。だけど、俺にはできない！ローラレライのことを許すことはできないけど、こいつは俺の大事な『家族』だ。」
　悪魔に肩を掴まれ引き離され、自分の願いとは逆のことを言い出した悪魔に怒りを露わにしてカグヤはくってかかる。
「愚かな！！貴方は恋人を殺されてなお、この醜く憎い子供を許すの？！」
　足元のラーオディルを小さく蹴とばしながら吐き出すように叫ぶ

カグヤの形相は、まるで鬼の様である。
「許せる訳ないだろ！」
「じゃあっ！」
悪魔の言葉に飛びつくカグヤに、ぎろりと彼は強い視線を向ける。
カグヤはその強さにたじろぐように、体の動きを止めた。
「だが、ラオの人生を醜く、恨まるよう、憎まれるように生み出したのは君たちだろう？俺はこいつのたった一人の家族だ。だから、分かる。ラオは本当に可哀そうな子供だ。ずっと誰かに利用され、虐げられ…俺なんか、ちっぽけな人間しか頼りがいない。俺みたいな人間はこの世に五万といるのに…こいつにとってだけ、俺は誰よりも特別だった。そして、その事実は俺にとっても救いだった。」
悪魔は膝をつき、目を覚ます気配もないラーオディルの顔を撫でた。
その表情はまるで小さな子供を慈しむ親のように、穏やかで優しげである。
「俺たちは何処で何を間違えたんだろうな？」
そこにはただ憎いとか愛しているとか、そんな風にきっちりと分けられない複雑な思いが込められていた。
悪魔はラーオディルのことをちゃんと大切に思っていた。
きっとそれは私がエヴァのことを大切に思っていたのと似ているのではないかと想像がついた。
そんな悪魔の様子にカグヤは作戦を変えたのか、もう一度冷静さを取り戻して彼に言葉をかける。
「そう…じゃあ、貴方はもう二度とローラレライとは会うことはできない。彼女を捨てて、貴方はこれから彼女を殺した子供と生きていくというの？」
悪魔の弱みに付け込んだ卑怯な言葉だ。
だが、悪魔はもはやそんな言葉では揺らがなかった。
彼の中で何かが定まっている。
呆然としていた表情から一変し、彼の瞳には断固たる何かが宿っ

ていた。

「それもできないさ。それは確かだ。ラオを許したいと思う自分をきっと俺は許せない。そして、俺はきっとローラレライを失った悲しみと絶望をいつか忘れてラオを許してしまう。そんなこと彼女に申し訳なくてできる訳がない。」

それは私が翼に願った時と同じ苦しみであった。

そんなどっちつかずとも思われる回答に、カグヤは憤り言い捨てる。

「もういいわ!!!」

怒りに身を任せて叫ぶ。

「貴方ができないというのであれば、もう一度はじめからやり直すまでよ!!世界の楔になりうる魂を見つけ、この場所に連れてくる。時間は永遠にあるんだもん!だから、貴方も神(ラーオディル・オヴァラ)に忌み嫌われた子供ももういらない。あたしの前から消えて!!」

ヒステリックに言い終えて肩で息をするカグヤを、酷く冷静な表情で見上げる悪魔。

「なあ、少し時間をくれないか?」

静かに吐き出されたその言葉がその後千年の世界の運命と、そして、これから私が直面する運命に大きく関わる提案となる。

第１５２話　悪魔の封印　３－３

＜ＩＮ　現在＞

涙が溢れるのを止めるように瞼をぎゅっと閉じ、そして、もう一度きちんと開く。

そこにはさっきまで現在と一緒にあった過去の幻影が消え、カグヤは一人になって私の前で微笑んでいた。

『ねえ、あたしをこの世界から解放して。』

過去の全てを見た私はその微笑みに返すリアクションが見つからない。

微笑み返せばいいのか、頷けばいいのか、怒ればいいのか、泣けばいいのか…過去を知り、現在の状況を把握して、自分がどうするのが一番いいのか分からない。何が正しいのか、何が間違っているのかも分からない。

だから、結局私は湧きあがった感情に従って、差し出されるカグヤに向かって首を横に何度も何度もふる。

「ヒロちゃん？」

恐らくカグヤの姿は他の人間には見えていないのだろう。不思議そうにラーオディルが問いかけてくる。

そして、先ほどまで私を殺そうと迫り来ていた悪魔が、ただ静かに私を見つめていた。

その瞳はまるで私が否定したい過去を肯定するかのようで、

「私は絶対に納得しない！」

私はとっさにそう叫んでいた。

「満身創痍でそんなことが言える立場だとでも思っているのか？」
悪魔はすぐに私にそう返す。
「何の話をしている！？」
私たちの間で交わされる言葉の意味が分からないからエンシッダが焦れたように吠えた。
だが、悪魔はそれを無感情に無視をして、私はそれに答える余裕がない。
悪魔が言うように過去を知ったところで出血多量で死にかけの私に悪魔を止める術などないのだ。
でも、だからといって全てを諦めることをしたくなかった。いや、諦めないと私は誓ったのだ。
「それでも俺に逆らう…お前がそのつもりならば俺がとる行動は一つ。世界の理が定めた運命に逆らうのであればお前に待つのは死だけだ。」
悪魔はそういうとすぐに黒の剣（ローラレライ）を構えて私に突っ込んでくる。
目にもとまらない早さとはこのことだろう。
私は攻撃に備えることすらできないまま悪魔に切り付けられ、再び地面に叩きつけられる。
「がぁっ！」
そして、そのまま地面から起き上がれない。
起き上がりたくても痛みが強く、更に悪魔はもがく私に剣の切っ先を突き付けて私の動きを完全に掌握した。
目の前すぐに迫る銀色に鈍く光る黒の剣（ローラレライ）から、私の血が滴り落ち鉄くさい臭いが漂った。
「まだ死にたくはないだろう？過去を見たというのであれば、自分のなすべきことをしろ。そうれば…」
「嫌だ！！」
大量の血を流したせいだろう。意識は何度も遠のきそうになるが、痛みが私を繋ぎとめる。
声を出すだけでも痛みは増し、息を吸っても吸っても息苦しさが

なくならず、次第にぜいぜいと呼吸が浅くなってくるのを感じた。
悪魔は痛みや苦しみで私が屈服しないことをすぐに悟ったらしい。
「では、死ぬがいい。」
それならばと躊躇いもなく、そういうと私に突き付けていた黒の剣（ローラレライ）を振り上げた。
死を覚悟するのはこの状況ではあまりに簡単なことだ。
私は動かない体に鞭を打って、凶刃から逃れようともがく。
「やめて！！！」
しかし、それを行動に起こす前に悲鳴に似た叫びで私たちの間に割って入った。
その声が聞こえた瞬間、突き付けられていた黒の剣（ローラレライ）が重力に従って地面に落ち、凶悪な悪魔の気配が私から遠のく。
何が起こったのかと揺らぐ視界の先で起こっている事態に目を見開く。
そこにいたのは縄の様なものに巻きつかれ、空中で締め上げられている悪魔。
その縄の様なものの先には、
「もう…やめよう？ヴォル。」
ラーオディルが立っていた。
縄のようなものはどうやら灰色の魔力によって造られたものらしく、強い魔力の気配を感じた。
だが、悪魔はラーオディルに囚われていても、まるで焦る様子がない。
「お前がそれを言うのか、ラオ？お前が『やめろ』と？俺がどんなに懇願しても何一つ聞かなかったお前が？世界を壊してでも俺と一つになりたいと願うお前が？」
悪魔の言葉は確実にラーオディルの心を抉る。
その言葉に大人の顔のラーオディルが、子供の泣き顔のように歪んだ。
世界中の全てを敵にまわしても動じることのない子供が、今、た

った一人の欲した人物によって追い詰められていた。
ラーオディルにとって悪魔とはそれだけの人物なのだと、彼と接したことで私は理解していた。
世界を壊しても手に入れたいと思ったのは悪魔という存在なのか、家族という繋がりなのか…はたまたその両方なのか。
もはや、ラーオディル自身も分からなくなっているのかもしれない。
千年という長い月日が、ただの深く暗い執着へとその姿を変えた。
その執着を悪魔の代わり同じ魂を持つ私で代用しようとして、それが満たされなければ世界の理を怖綿して全てを壊そうとした。
だが、悪魔ヴォルツィッタの完全なる覚醒によって、ラーオディルの描いたシナリオも大きく変わった。
「そうだね…千年前の僕ならヴォルのその感情を寧ろ利用して色々考えたろうね。でも、僕はヒロ…ううん、ヒロちゃんを失いたくないよ。」
そう言って私を見たラーオディルの中にエヴァを感じた。
「俺よりヒロを選ぶのか？」
「違う！僕にとってヴォルもヒロちゃんも選びようがない！！大切なんだよ、二人ともっ！！僕に大切なものをくれた！ずっと、ずっと一緒にいたいと思うくらい！！」
それはラーオディルの言葉であり、エヴァの言葉であった。
灰色の魔力による狂気が、悪魔という衝撃に一瞬だけ消え去ったような、子供のただの言葉の叫び…それは胸が痛くなるほど切ない願い。
だが、事態は更に混乱の一途を辿ろうとしだす。
「だから…もう、終わりにしよう。ヴォル。」
目にいっぱい涙をためてラーオディルは微笑んだ。
『終わり』？

私は胸を塞ぐ重苦し言葉に首を振った。
「やめろ！！」
だが、私の声など聞いていないと言わんばかりに、きれいに悲しく微笑んだままラーオディルは全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）を勢いよく悪魔の胸めがけて突き立てた。
「！！！！」
杖はまるで鋭い剣のようにやすやすと悪魔の体を貫く。
更に悪魔が背に世界の理を接していたために、杖は世界の理も同時に貫いた。
「ああ、これでやっとずっと一緒…だよね？」
恍惚としたラーオディルの表情。
「…」
胸を貫かれ、ぐったりとした様子で俯く悪魔。
「ア…アアアア！？」
止める暇も与えられず、ラーオディルの凶行を止められなかったエンシッダは狂ったように叫んだ。
「やめろおおおお！！！」
そして、私は血が噴き出すのも構わずに腹の底から吠えた。
起き上がらない体を恨み、目の前で起こる事態に何一つできない自分。
こうしてラーオディルはある意味、彼の思い通りに悪魔を手に入れてしまった。
「これからは貴方の魂と一緒にこの世界で永遠の時を過ごす。これで僕はやっと孤独から解き放たれるんだ。」
そうして、灰色の魔力の縄に囚われたまま力尽きた悪魔の頬に手を添えて微笑む。
正気に戻ったかと思われた子供はやはり誰かと一つになりたいという妄執に囚われたままだったということか、はたまた、彼の正気

こそがこの私には妄執としか思えない思考そのものなのか分からない。
だけど、私はやはり『誰かと一つになりたい』とは思えない。
それは『誰か』が『私』になるということであり、『誰か』とは永遠に会えなくなるということ。
『誰か』とは他人であるからこそ、分からない存在であるからこそ、欲しいと願い、分かりたいと思い、不安になり、絶望したりする。
もしそれが『私』になってしまったら、その感情は一体どこに行くのであろう？
『私』という孤独は誰かと一つになれることで本当に解消されるのであろうか？
『私』という孤独があるからこそ、『誰か』と他人同士であっても一緒に入れることが愛おしいのではないのだろうか？
ラーオディルや悪魔からすれば二十数年しか生きていない私のそんな考えなど、とるに足らないことかもしれない。
だが、それでも私にはやはりラーオディルの思いを良しとしてやることができなかった。
そして、それは悪魔もまた同じだったのかもしれない。
彼の考えと私の考えもまた重ならないものだったが、悪魔もまたラーオディルの考えを良しとはしていなかったのだ。

「やっぱり、お前は馬鹿だな。ラオ」

まるで死んだかのように沈黙していた悪魔が、ふと優しく囁いた。
「…ヴォル？」
まさか、悪魔からそんな言葉が返ってくるとは思わなかったラーオディルはきょとんとした表情で涙を止めた。
だが、全てを知る私は叫んだ。
「悪魔！！私は納得しないぞ！ラーオディル！！さっさと悪魔を世

界の理から引き離せっ！！！」
「ど…それって？」
私の言葉に混乱したように表情を揺らすラーオディル。
だが、全ては遅い。
全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）が世界の理に突き立てられたことによって、理を包む悪魔の最後の封印がまるで卵の殻が割れるかのようにひび割れてゆく。
封印の向こうで息づく異能者のすさまじい魔力の気配。
世界から解放されたいと、自分を縛るこの大地に恨みすら抱くカグヤの凶暴な気配が感じられた。
封印は人間から異能者を封じているだけではない、世界に飽きた異能者を留めておくための楔でもあった。

『さあ、これで貴方はあたしを殺さない訳にはいかなくなった。』

全ては千年前から決まっていたとでもいうのだろうか？
『あたしを殺さなくては東方の楽園（サフィラ・アイリス）はラーオディルではなく、封印から解き放たれたあたしの灰色の魔力によって消滅する。そして、あたしを殺した後は新しい人柱を据えなくては大地は成り立たない。その人柱は…』

第１５３話　そして私は楔となる　１（前書き）

【警告】この話には殺人・残酷表現があります。そういった表情が苦手な方、嫌悪される方はご注意ください。また、殺人についてそれを許容するような表現がありますが、現実においては絶対に許される行為ではありません。

第153話　そして私は楔となる　1

貴方は何一つ持っていない
その腕には家族も恋人も友人も抱くことはなく
その胸には喜びや希望、悲しみや憎しみが存在することはない
しかし、かつての貴方はその全てを持っていた
誰よりもその存在の大切さを知り、その感情の意味を知っていた
だけれど、貴方はその全てを手放した

手放して、何一つ持たなくなって…『世界の楔』になった
世界を繋ぐ存在であり、そして、世界を壊す存在になった

【そして私は楔となる】

『――――その人柱は』

カグヤの声はそこで唐突に消えた。
決して彼女が言葉をやめた訳じゃない。
封印の崩壊により溢れだした魔力は、まるで決壊したダムの水のごとく一瞬で全てを飲み込んだ。
私は溢れる魔力に流され、目の前にいた悪魔とラーオディルを見失う。
濃すぎる魔力の中に放り込まれて、肺で息を吸った瞬間にまるで本当に水の中で溺れているような息苦しさを感じた。
やばいと思って口と鼻を手で押さえた。
だが、濁流のように私を飲み込んだ灰色の魔力の勢いに、私はも

やは自分がどこにいるのかも分からない。
ただ、その流れに身をまかせるほかなく、混乱と苦痛の渦に私は飲み込まれる。
かと思えば、また声が鮮明に聞こえてくる。

『いいの？このまま異能者（あたし）という魔力の源が大地に溢れだしたら、全てが壊れてしまうわよ？』

頭に直接響くカグヤの声と、それに呼応するような閉じた瞼の先に眩い光が現れた。
『さあさあこの光を手にして？貴方しかこの最悪の事態を止められる者はいないのよ？何もしないでこのまま魔力に踏み潰されるだけでいいの？それが貴方のユイアへの誓い？生き残る方法があるのにそれを無視するの？』
畳みこまれるように告げられる言葉。混乱と苦痛。絶体絶命の状況。
思考する暇すらなかった。
ただ生き残りたいという本能だけで、閉じられた視界に何故か輝く光に震えながら手を伸ばした。
『そう…それでいいのよ。何一（ヒロ）つ持たない者。』
そして、触れた瞬間に輝く白い光に飲み込まれ、手にした光が次第に形となり長い棒状の物体が現れる。
途端に私の周りから灰色の魔力が遠のき、光に包まれて私の周りだけぽっかりと魔力が満たされない空間となった。
「ゲホゲッ――――イッテェエ！？」
呼吸がままならなかったこともあり、魔力の濁流から解放された瞬間に急激にむせるが、悪魔に負わされた傷がむせたことにより強烈に痛んだ。
特に痛む太ももあたりを触ると、見ているだけで気が遠くなるほどにべったりと赤い血がつく。

それをみて溜息をつきながら、今度は血がついた方ではない手に握られる恐らく『世界の楔』らしき物体に目をやる。
途端に結局手にしてしまった力に、それに下ってしまった自分に酷く腹が立った。
「私はっ…！！」
その感情のままにそれを叩きつけようとするが、たったそれだけの動作に体が痛んで私は崩れ落ちた。
あまりの自分の情けなさと不甲斐なさ、そして無力さに絶望する。
「くそっ！！」
自分の覚悟など自分の命の危機を前にすれば、あっという間に脆くも崩れ去ってしまう。
その現実を目の前に突き付けられた。
そのまま不貞腐れることができればいいのだろうが、私は恐らく『世界の楔』という力を手に入れた。
その力を見極めなければと、崩れ落ちたままに私は自分の視線を右手に握られた物体に向けた。
濃い緑と青を混ぜたような水晶から削りだされた長さにして私の身長半分くらいの棒？
丁寧に削り出されたのであろうそれは先に向かって鋭く尖っていて、そこかしこに丁寧な文様の細工が彫られている。
文様は見慣れない形状で文字なのか絵なのかも定かではない。
握っている部分は滑りにくいように、手になじむようなくぼみも存在する…とまあ、ここまで観察してみたものの、この先に自分が何をすればいいのか分からなくなって頭を抱える。
せめて世界の楔とやらになってしまえば、意識すらも乗っ取られて自分の意志の関係のないところで異能者を殺し世界の理としての義務とやらを全うしてくれれば楽なのに…世界は私に楽な道を選ばせてくれないらしい。
それが逃げだと分かっていても、例えそうなったら後悔と罪の意識で死にたくなると分かっていても、私はどんなに虚勢を張ったと

ころで、覚悟を決めたところでやはり弱いんだ。
自分の命が大切で、自分の大切な人が大切で、何でも自分を中心にして考えてしまうあまりに利己的な弱すぎるちっぽけな男…私はただそれだけでしかない。
だから、こうして力を得て何もわからぬままに放り出されてしまえば、どうしていいか分からなくて不安で不安で仕方なくなる。
大体、力を得たと言っても体はどうやら人間のままだし、溢れくる魔力も感じない、ただ、こうして灰色の魔力からとりあえず身を守ることができるようになっただけというだけだ。
痛みと出血で思考はぼんやりとしたまま、私はとにもかくにもこの魔力の氾濫をどうにかしなくてはならないとあたりを見回した。
美しかったはずの庭園は灰色の魔力の濁流に破壊されつくしている。
まるで竜巻の真っただ中、その中心にいるような感覚。
地面から引き離された木やモニュメントがぐるぐると灰色の魔力の渦の中を回っている。
(白・黒の神やラーオディルたちもこの魔力の渦の中にいるのか?)
目を凝らして見るが回転が速く、私の動体視力ではそれを確認できない。

――ミシミシ

そして、轟々という荒れ狂う魔力とは別に、何かがきしむ音に気が付く。
まさかとは思うがカグヤが言っていた通り、世界の中心からこの灰色の魔力が大地へと溢れだそうとしているのか?
(どうすればいい?私は…どうすれば――あれは?!)
崩れ落ち俯いた視線の先に恐らく間違いなく魔力の中心であろう世界の理が目に入る。
魔力の勢いが強くて正確には確認できないが、あの大きな球体の

影は間違いなく世界の理であろう。
どうやら私は世界の理の真上に浮いているような状態らしい。
カグヤが言うように確かに私ができることと言えば、もはやカグヤの世界の理としての生を終わりにすることくらいらしい。
どんなに足掻いたところで自分にできることと言えば、そんなことなのかと思うと苦しかった。
何も諦めたくなかったのに、絶望の連鎖を止めたくてここに来たというのに…誰かの死という絶望でしか私は世界を救えない。
それにカグヤを殺した後に続く事象にも想像が付く…『次の人柱』、アイツをそれにすることが本当に正しいことなのか？
全ての人がカグヤを殺すことや、誰かを人柱にするということを正しいと認めても、私は絶対にそれを認めなくなかった。
誰かの犠牲の上にしか成り立たない世界、どうしてそれを変えることができないのだろう？
だけど、それを変えられない今、その犠牲を払わなければ私は大地に生きる人々を犠牲にしなくてはいけない。
きっと、それも私にはできないんだ。

『そんな風に苦しむ貴方だから、きっと貴方は世界の楔なんだね。』

再び私に降り注ぐその声に泣きそうになる。
いっそ、誰かが私を操ってくれれば楽なのに…そんな弱い心が再び私を支配する。
だけど、誰もそれを私に許してはくれない。
私の意志で、私の決断で、私の手で、カグヤを殺し、世界を救えと…そういうことなのだと思う。
それを私が納得していないと知っていて尚、カグヤは私にそれを強要する。
（どうして私なんだ？）
そう思って重責から逃れようとする自分に吐き気がする。

『何を迷っているの？貴方は力を自分の手を伸ばして手に入れた。だったら、その力を行使するのが貴方の義務でしょ？』

「違う！私は…」

『別に貴方を責めている訳じゃない。貴方は自分が生きるために最善の手段を選択しただけ。それを責める人は誰もいない。だけど、その手段を選んだ以上、貴方はあたしを殺す義務ができた…それは事実だよ。』

あのまま苦しみの中で死に耐えれば、私はこの選択を迫られずに済んだのだろうか？

でも、私はもう選択してしまった。

選択をする前にはどうやったって戻れはしない。

「だが、それでも私は…もう誰も犠牲にしたくないんだ！！」

誰かが生きるために、何かを犠牲にする。

力を得るために、何かを犠牲にする。

その繰り返しの果てがこの悲劇の連鎖だ。

そんなことはもう嫌だった。

だから、それを絶ち切りたくてここまで来た。

でも、結局、私は異能者カグヤを犠牲にして世界を、自分を救うのか？

『納得できないこと…そんなことは世界に溢れているよ。』

ぽつりとカグヤがそう小さく呟いた。

「え？」

その声に彼女の顔をまじまじと見た。

あどけない少女の顔は、まるで聖母のように暖かく静かで慈愛に満ちていた。

『納得できない理不尽なんて、この世の中には溢れかえっているじゃない。でも、皆それを仕方ないと言って諦めたりして折り合いをつけている。』

私だってそうだった。
生きている中で色々な出来事があって納得できないことだって少なくなかった、でも色々な理由を付けたり諦めたりして乗り越えたふりをして忘れた。
それを忘れたくなくてユイアのことについては、契約を使って自分の罪を永遠のものにした。
『この世の中、確かに仕方ないってことはあると思う。世界を自由にできるあたしだってそう思うんだもん。ただの人間のヒロには私以上にそんなことだらけでしょう?この世の全てに納得するなんて神様だってできないことなんだよ。』
でも、だからこそ人間は足掻くんだと思う。
納得できないことが多くても、一つでも納得できる何かを得たいから…だから、私は今ここにいる。
私のそんな思いを分かっているというようにカグヤは頷いて続ける。
『だから、納得しなくていい。貴方はあたしを殺したこと、あの人を人柱にすること、これから起こる全てのことに、永遠に苦しみ続ければいい。それを強いたあたしを恨んでくれてもいいよ。正しくないと分かっていても貴方は世界を救わなければいけないのだから。』
「な!?」
『それでもこれは必要なことだから。この世界を存続させるために…貴方だって自分のエゴ一つで世界を破滅させたくはないでしょう?』
決断を迫られていた。
躊躇っている時間はない。
カグヤを殺すか、世界を破滅させるか。
全ては私の決断にゆだねられた。
『さあ、世界の楔を握って。そして、あたしをそれで貫いて!!!』
カグヤは言葉で強制しても、決してその力を持って私を従わせよ

うとはしなかった。
私の手で、私の考えで彼女を殺させようとする。

――カグヤを殺す

私の掌の中にある世界の楔を見つめて握り締める。
ゆっくりと痛む体を起して、私の前にふわふわと浮かぶカグヤに向かって楔を構える。

――誰かを何かを犠牲にして、それで本当にいいのか？

構えた腕がふるふると震える。
定まっていた視界がゆらゆら揺れた。
乱れる呼吸、不規則になる心臓、噴き出る汗。
（どうしたらいい？どうしたらいい？どうしたら！！？）
体も心も私は限界まで追い詰められ、ただただ疑問を投げかける言葉だけが頭を駆け巡る。
何が正しいのか考えても答えは出てこない。
（私は私は！！！どうすれば！！！！）
頭の中で絶叫を繰り返す。
『早く！もう、世界の中心がもたない！！！』
混乱しすぎた頭にカグヤの声が響く。
――ミシ…ミシミシミシッ
世界の中心が軋む音が空間を大きく揺らした。

「うわあああああああ！！！！！」

心の絶叫は、腹の底からの絶叫となって私は両手で世界の楔を持ったままカグヤに突進した。
幻であったように頼りなかったはずのカグヤであるが、ズン…と

何かを確かに貫いた衝撃が手から体に伝わる。
「…っく…ひっ」
あまりに多すぎる感情であふれ出る涙が苦しい。
そんな私にふわりと優しい風が撫でるような感覚が通り過ぎる。
『ありがとう、ヒロ。やっとあたしはこれでこの世界から解放された。それでも貴方はきっとあたしを殺した事実に苦しみ続けるんだと思う。あたしはそれ知っていて貴方にその役割を与えた。だから、あたしを恨んでいいんだからね？』
聞こえてくるカグヤの声に首をただただ横に振った。

『うん。貴方はそういう人。でもね…いつか忘れていいよ。』

その言葉にはっとして俯いていた顔を上げた。
だけれど、私の前にカグヤはもうこの世界から異能者として存在しなくなっていた。
「そんなこと言われて…忘れられる訳がっないだろう！！！」
私の吐き出した声にこたえるものは誰もいない。

第１５３話　そして私は楔となる　１（後書き）

どんな状況であり殺人は決して許されることではありません。
だからこそ、この物語では色々な人物が死んではいますが主人公であるヒロには直接的に誰かを殺すという行為をさせてきていませんでした。ですが、あえてヒロに絶対的な絶望を与えるという意味でカグヤを殺すことをヒロ自身の手と決断で行わせました。
ヒロは主人公でありながらこの物語において自分で行動を起こしてきたことが実は少ないのです。色々なことに流されたり巻き込まれたり、その結果に彼が右往左往することは多かったのですが、彼自身の決断や行動は実際にはなされないことや、成立しないことがほとんどでした。これは物語の主人公においてあまりに情けないことではありますが、実際の人生においてそれは当たり前のことだと思うです。特別な境遇ではありますが、それは普通の人間として定義しているヒロの特色でもあります。
今回はその最大の出来事として、ユイアやローラレライの言葉により全てに覚悟をしたはずのヒロに更なる絶望を与えるという出来事を与えました。
あえて物語の中だからこその表現であり、私自身『殺人』というものを軽く考えたり、それを許容するものではありません。本当は異能者というものをカグヤという人間に近い存在として表現することにも悩んだのですが、ヒロへの絶望を深くするという意味であえてカグヤを人間の姿をした存在としました。しかし、こういった表現を見てもし気分を害された方がいましたらこの場で謝罪させていただきます。申し訳ありません。

最後にこの話も本当に長くなり、お付き合いただいている方も長い方もいれば最近この物語を知ってくれた方もいらっしゃるかと思います。お見苦しい物語ではありますが、クライマックスも多分（？）

後少しです。もう少しだけお付き合いいただければ幸いです。

第１５４話　そして私は楔となる　２

気が付けば私は荒れ果てた大地に蹲っていた。
何も考えたくなくて、小さくなって身を屈めむせび泣く。
カグヤが死んだことが悲しいのか、カグヤを殺したことが苦しいのかも分からない。
だが、重苦しい感情に圧迫された心から絞り出された涙が止まることはなかった。

「ヒロ、貴方は世界の運命を大きく変えた。」

降り注ぐ声に感情はなかった。
「異能者を殺す役目は本来貴方が負うべき役目ではなかった。いいえ、貴方という存在そのものがこの世に大した意味を持った存在ではなかった。」
異能者カグヤを失ったことにより嵐は過ぎ去り、物音一つしない静けさの中で声は何処までも淡々と響いていく。
その静けさは大地の礎を失った破滅の音。
「全ては千年前の役者たちで決着をつけられるべき物語だった。貴方は巻き込まれただけ。だけれど、貴方はその役目を彼から受け継いだ。そして、運命は大きく変わった。私が歌う詞も変化した。」
破滅が迫る世界の中心で紡がれる、運命と予言の歌。
涙は気が付けば枯れていた。
聞こえてくる歌に顔を上げて飛び込んでくる視界は鮮やかだった。
灰色の魔力に生命力を吸い取られ、美しく整えられていた庭は見る影もない。
私が倒れこんでいたのは、私が今まで生きてきた不浄（ディス・エンガッド）の大地とよく似た大地。
だが、先程まで美しかった世界を覆っていた灰色の魔力に彩られ

た、薄気味悪い空は消えていた。
そこにあるのは目に痛いほどの、晴れすぎた青の空。
この空が果たして東方の楽園（サフィラ・アイリス）と同じ空なのかは定かではない。
そして、その青の中でヴィ・ヴィスターチャは歌う。

白き光より堕ちた翼は　黒き寝台で眠る
千の夜　千の朝の果て
其（そ）を白き光より　引き千切りし
黒の血が　其を永き眠りから　目覚めさす
目覚めし翼は　契約という名の楔を身に刺し
白き光に還るのだ
しかして　翼の永い旅は終わを告げ
世界の胎動が　全ての始まりを告げる

しかして　世界の胎動は　汚れた神の目覚めを促す
全ての始まりは　破滅の階段を　転がり落つ
翼の帰還
其は　始りにして終わりを　告げるもの
東方の楽園（サフィラ・アイリス）の　封印を解くもの

しかして　始まりと終わり　再生と破滅を　決めるは
目覚めし翼が　白き力に刺したる　契約という名の楔

『いいえ！楔は契約から解き放たれた！！
楔は力ある悪魔から　名のなき人へと姿を変えた！
悪魔は汚れた神と堕ちていく！堕ちていく！』

世界の全てを　握りし鍵

『それは名もなき人間！
異能者の血にまみれた　世界の楔！』

世界は楔の存在に　全てを委ね(ゆだ)
楔は　全ての始りにして終わりなるものと　相成りなん

『悪魔ではない人間に世界の楔は重すぎる！』

ヴィ・ヴィスターチャの声は細く高い。
その歌声によって紡がれる神秘的な予言の狭間で折り重なって響く地の這うような恨みの歌声。
それは世界の破滅を予言する言葉なのか？
「…そうさ。こんなの私には重すぎる。」
歌声に頷いた私に、感情のないヴィ・ヴィスターチャが答えることは何もない。

『人間よ！お前は全てを終わらせるものなのか！』

多分…と心の中で私は答えた。
少なくともこのまま世界の理という人柱が不在のままでは、東方(サフィ)の楽園(ラ・アイリス)は想像もできないが消滅してしまうのだろう。

『人間よ！お前は全ての始まりとなるものなのか！』

静けさの中で響く続く歌声。
その力強い歌声の奥に私を呼ぶ声を聞く。
私はその声のあり所を知っている。
「分かってる。お前を見届けてやるのは私の役目…だよな。」
呼ばれる声に導かれ、続くヴィ・ヴィスターチャの運命と予言の

歌に背を向けて私はふらりと立ち上がる。
血は未だに流れ続け、今の私はまさしくゾンビか魔物のようであろうが、私はそのままふらふらと歩きだした。
私を呼ぶ声に最後に答えるために。

『ああ、人間よ！我らを見捨てたもうな！！！』

＜ＳＩＤＥ　ラーオディル・オヴァラ＞

うっすらと浮上してきた意識が最初に感じ取ったものは、とても心地よい感触。
もう何年もずっと感じてこなかったけど、かつては『僕』にも確かにあった温かくて優しい感触。
次第に確かになってくる意識はそれが僕の髪を撫でる手であることを理解した。

――――ダレ？

瞳を開けた先に僕を覗き込む優しい表情が飛び込んでくる。
「ヴォ…ル……？」
そこには目を閉じても思い描くことができる人の顔があった。
一瞬幻かと思ったけど、僕を撫でる手の感触はそれが現実であることを告げていた。
「大丈夫か？全くお前は昔から本当に無茶ばっかりだな。」
もう何年も見ていない彼の保護下にあった時のようなその表情・声が涙が出るほどうれしくて、でも、ふと何かが僕の頬に落ちてきて、それを触ってみて驚く。
「！？」

べっとりとついた目に痛いほど鮮やかな血の赤。
ヴォルの胸に深々と刺さったままの全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）、そこから滴り落ちるヴォルの血が僕にかかっていたのだ。
そうだ！何もかもが現実だったというのに！！！
その事実を思い出すのと同時に、意識を失う前のことが急速に蘇ってくる。
確か僕はヴォルの胸を貫いて全てを終わらせようとした。
僕のこと、ヴォルのこと、ローラレライのこと、ヒロのこと、白き神・黒き神…それこそあまりに多くの人の想いが複雑に重なり合って、僕はその全てを支配し利用していたはずなのに、気がついてみたら自分もその中に絡みとられて訳が分からなくなっていた。
その結果、僕はあまりに短絡的すぎる手を使って全てを終わらせようとした。
何故だか知らないが、妙に気分が落ち着いている今、先ほどまでの狂気じみた感情が嘘のような気がした。
それはこうしてまるで夢のように、幼かったあの頃のように、ヴォルが僕を見て笑っていてくれるから…彼のこんな表情を見るのはそれこそ千年以上ぶりだと思う。
なのに、それがこんな状況だなんて！！
「ヴォル！！」
だけど、青ざめる僕にヴォルは笑って首を横に振った。
「いいんだ。これで。」
「どうして！？」
叫ぶと同時に体を起して僕は驚く。
先ほどまで不気味な空の色ではあったけど、きれいに整えられていたはずの世界の中心は今はまるで嵐が去った後のように荒れ果てている。
いや、『よう』じゃない。先ほどまで間違いなく嵐がこの世界を襲っていたんだ。
もっとも、気象の嵐じゃなくて灰色の魔力による嵐。

僕は崩れ置いた世界の理、そして、その中身が空っぽであることに気がつく。
「異能者は…？」
「ヒロが殺した。」
その言葉に全てがもうすでに終わった後なのだと悟った。
「じゃあ、ヒロちゃんは…」
「世界の楔になった。お前の想いがどうであれ、それはもう変わらない事実だ。」
僕の中にある、いや、もう僕の一部と言ってもいいだろうエヴァの心が沈むのが分かった。
そもそも僕とエヴァは同じだった。
僕がラーオディルであるという事実を忘れた姿がエヴァなのだ。
エヴァンシェッドとは違い、やはり彼と僕は同じなどだとこうして僕が表に出た時強く感じる。
エヴァンシェッドという意志は未だに出てこようともがいているのを感じるが、エヴァという意識は僕を押しのけようともしていなし、僕もまたそれを退けようとは思わない。
ただ、一緒にあるだけだ。
「お前は聞かないのか？どうしてお前という俺の主が俺の死を願ったというのに、俺が死んでいない事実を可笑しくは思わないのか？」
ヴォルツィッタに魔力を与えて不老不死の存在にしたのは僕だ。
だから、僕が彼の死を願えば彼の命は消える…それが真実のはずだった。
「ううん。もう、そんなこといいよ。ヴォルが何であったって僕にはいい。ヴォルが僕を見てくれている。それだけで僕は…」
言葉は嗚咽で続かない。
そうだ。そうだ…本当はそれだけでよかったんだ。
大きなことなんて望んでなかった。
世界なんていらなかった。

――僕はただ僕を受け入れてくれる人さえいれば良かった

だけど、気がつけば僕はここにいる。

世界を壊すために世界の中心で…僕は何をしようとしていた？

「お前が正気に戻ってくれてうれしいよ。分かっていたさ。お前は本当は優しい子だ。」

僕の姿はもう子供じゃない。

万象の天使の体を乗っ取ったそれは大人のはずだけど、ヴォルにとってはいつまでも子供でいてもよかった。

彼だけだった。僕にとって何処までもただ甘やかされたいと願う相手は…。

「ねえ、これからはずっと一緒だよ…ね？」

「…ああ。お前がそれを望むなら、ずっと一緒にいる。だが、これから俺が行くのはあまり幸せな場所じゃないかもしれないぞ？」

「いいよ…ヴォルがいるなら。ローラレライもいる？」

「…いやか？」

「ううん…僕も本当はきっと彼女のことも好きだよ。ただ、ずっと怖かった。ヴォルのことを取られちゃうみたいで。」

「そうか。」

「でも、もういいんだ。僕はただ一人になりたくなかっただけ。そう分かったから。」

ずっとこんな会話をヴォルとしたかった。

これだけでお互いに分かりあえた気がした。

――ジャリ

二人の世界に物音がしてふと顔を上げるとそこには彼がいた。

「あ。ヒロちゃんだぁ。」

ずっと、盲目と妄執に取りつかれて大切なことを見失っていた中で、エヴァとしてヒロちゃんと過ごした2年間が今の僕を取り戻し

てくれたのだと今なら分かる。
だから、その幸せな気持ちのまま僕は笑って彼の名を呼んだ。
「エヴァ…。」
だけど、彼はとても血塗れの姿で今にも死んでしまいそうな姿でそこに立っていた。
そうだ。ヒロちゃんは異能者を殺して世界の楔となった。
だから、世界の運命という重責を彼は死ぬまで背負うことになり、そして、彼を守ってくれる人は誰もいない。
そうだ。僕(エヴァ)はヒロちゃんをまもりたかったのに…そんな思いでヒロちゃんの方へ手を伸ばそうとしたけど、体に力が入らない。
「ラオ。お前は俺と行くんだろう?」
そして、ヴォルに後ろから抱きしめられ、優しく声をかけられれば力は更に入らなくなる。
「…うん。」
あれ?僕は何をしようとしたんだっけ?
同時に霞みゆく意識は僕に心地よく、眠たくなる瞼は次第に閉じられていく。
「さあ、ヒロに最後に挨拶をしなくちゃな?」
「ヒ…ろお?」
呂律が回らない声。
その名前が誰であったのか、瞬時に思い出せない。
「ああ、お前を愛してくれた人だよ。」

――ボクヲ　アイシテクレタ?

そのことが本当にうれしくて顔が緩んだ。
「わあ…うれしー、あり…が――」
『ありがとう』と最後まで言えた気がしたけれど、あの人にはもしかしたら聞こえなかったかもしれない。
だけど、きっと僕の心は届いているよね?

僕は本当に満ち足りた気持ちで、僕よりも、ヴォルよりも、何よりも大きくて安らげるものの中に溶けていった。

第１５５話　そして私は楔となる　３

＜ＳＩＤＥ　ヒロ＞

がくりと悪魔の腕の中で意識を失った男…その中からラーオディル・オヴァラという存在が消えたことを私は悟った。
子供のあどけなさがなくなり、その表情は意識を失っていても一変したのが分かった。
悪魔の腕に抱かれたままあまりに安らかな表情のまま消え去った子供に、私は追いすがる声すらかけることができなかった。
呆然としながら、カグヤを殺した時に粉々に割れたと思われる世界の理の散らばっていた破片がキラキラと輝きだす。
「？」
何が起こったのだろうとあたりを見回すと、淡い光を放った破片たちはそのまま忽然と姿を消すと、次の瞬間に元通り世界の理として存在していた。
その中心に胎児のように丸まって収まる子供の人影が見える。
新たなる世界の理の誕生であった。
「これで本当にお前にはもう誰もいなくなっちまったな。」
それを茫然と見上げていたが、悪魔のその言葉に意識が現実に戻る。
「黙れ！！」
胸を貫かれたままへらへらと笑う悪魔を見下ろす。
先ほどまで私を鬼気迫る様子で殺そうとしていた人物とは思えない緊張感のなさに、急激な怒りが湧き上がる。
「そうかっかするな。お前、世界の楔だといっても体は人間と大差ないんだ。そのままだと出血多量で死ぬ。」
「お前はっ…！」

勢いのままに無抵抗な悪魔の胸倉をつかんだ瞬間に、悪魔の言うとおりあまりの出血の多さに意識が遠のいてふらりと体が揺れた。
悪魔とてその胸には全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）が刺さったままだというのに、何一つ変わらないままに平然として声を押し殺したように笑う。
「ほらな？だから言わんこっちゃない。…これでどうだ？」
そして、私に胸倉を掴まれたまま悪魔は私を灰色の魔力で包むと、自分で負わせた傷を治す。
灰色の魔力に治癒能力まであるとは知らなかったが、体が途端に軽くなった。
「どういうつもりだ？」
「お前はこれからまだまだ戦う。傷を治すくらいのサービスは必要だろう？」
声は軽いがその顔色は今にも死にそうなほど白い。
私は戦う意志も生きる意志すらもなくしたような悪魔に掴んだ胸倉を乱暴に突き放した。
「いてっ！折角、傷を治してやったんだ。もう少し丁寧に扱ってくれてもいいないか？」
「元々、お前がつけた傷だろうが！」
「ははっ…それもそうだな。」
怒気が削がれて、残ったのはやりきれない現実と自分の不甲斐なさへの悔しさだけ。
「…お前はこれで良かったのか？」
それは果たして悪魔に対する問いかけだったのだろうか？それとも自分自身に対する問いかけだったのだろうか？

悪魔がしたかったこと。
それは彼は私を世界の楔に仕立て上げて、異能者カグヤを殺させること。
それは本来ならば千年前に悪魔の手によってなされてしかるべき事象。

そして、カグヤの代わりに東方の楽園（サフィラ・アイリス）の新たなる人柱となるべく存在したのが神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）。

荒れ果てた世界の中心で、世界の理は新たなる主を得てその淡い光をきらきらと放ちだす。

誰かの犠牲なしに成立しないこの大地で子供は永遠に搾取され続け、この場所で全ての幸せの為に犠牲になり続ける。

結局、事象は悪魔と私と言う実行者の違いがある訳で、カグヤが千年前に提示したとおりに成立した訳だ。

だが、悪魔は別に私に世界の理という厄介事を押し付けるためだけに、千年という年月を待っていた訳じゃない。

「ラオと一緒に永遠に苦しみ続ける道は、お前にとって納得できる結末なのか？」

千年前の悪魔とカグヤの会話が私の中で何度も繰り返される。

『なあ、時間をくれないか？』

その言葉の後、悪魔は信じられないような提案をカグヤと交わした。

「ああ…俺は納得しているよ。この世界を守るためには、もう創造主であることに飽きたカグヤが世界の理であり続けることはあまりに危険だ。彼女がこれ以上世界の理でいたら、きっと大地を消滅させてでもこの場所から飛び出していただろうからな。」

カグヤは確かにそれぐらいもう異能者であることに飽いていた。

彼女の境遇に同情こそすれ、それはあまりに無責任だ。

だが、それは異能者という存在に対する人格の否定になるのかもしれない。

ラーオディルが、エヴァが、あの場所に存在してしまったからこそそう想う。

「だからこそ、確かに実質問題として彼女の代わりの人柱は必要だった。でも、俺にはできなかった。ラオを、一人だけで犠牲にする

なんて俺にはできなかった。あいつが例え世界の全てに憎まれる存在になろうと、俺があいつを許せなくても、ラオは俺の家族だ。あいつを大切に思っていた時間は、心は偽りなんかじゃない。確かに存在してた。」

悪魔の中に存在する矛盾。

ラオを憎みたい気持ちと、大切にしたい気持ち。

どうにも一貫しない彼の行動と感情の原因はそこにあった。

そして、彼は最終的にその結論を出すことはなかった。いや、出そうとしなかったのかもしれない。

子供を人柱にすることは彼への復讐なのか？

彼と一緒に永遠の牢獄に囚われることは彼への愛情なのか？

複雑に絡み合う二人の感情と事情を、他人の私が推し量ることも、それに異議を唱えることもできないだろう。

でも、少なくとも私はこの結末に納得などできそうもなかった。

「だから、一緒に犠牲になるのか？」

吐き出した言葉に悪魔は表情を泣き笑いに歪めた。

「ああ。俺と一緒ならラオの奴も多分大人しくしててくれるだろうし。お前の言葉のおかげでこうしてローラレライも一緒だ。」

悪魔が自分の持つ右手の剣を愛おしそうに撫でた。

封印（エルヴァナンド）された異端で出会ったローラレライの何かを決意したような儚い笑みが浮かんで消えた。

ラオを一人にできないなら、ラオを許せないけど許したいから、一緒に犠牲になろうとする悪魔。

そのためには彼が世界の楔になる訳にはいかなかった。

世界の楔になってしまえば、楔は死ぬまで異能者の監視者でなくてはならないからだ。

だから、悪魔は新たなる世界の楔の存在をカグヤに待つように提案した。

それもただの楔じゃない。

灰色の魔力によって造られた人工的な魂…『私（ヒロ）』だ。

そう、私は元々悪魔とは違う魂だった。予言の歌の『楔』は本来ならば悪魔であった。

悪魔の転生した姿だと、何度言われても違和感が拭えなかった理由はこれだ。

それでも、様々な存在が私を悪魔だと確信していたのは、悪魔の魂そのものが私の魂の中に存在していたから。

千年前、悪魔として罪人の処刑台（ディッチ・ア・ヴァリス）で消滅させられた魂は、私と同様に造られた灰色の魔力による悪魔そっくりのダミーの魂。

そして、悪魔自身は造り出した私の魂を隠れ蓑として、とある異端の一族、要するに私の祖先の中に紛れ込んだ。

そして、千年前からの予言を利用すべく時を待った。

「お前には全部押しつけて悪いとは思ってる。だが、予言通り俺が楔となれば世界は破滅さ。世界を守るためにカグヤを殺し、ラオを世界の理に仕立てた後、俺は間違いなくローラレライを蘇らせる。だが、その後、俺がラオを見捨てられるはずがないんだ。それがあいつに対する愛情なのか、罪悪感からなのかは分からないが、いつか俺はラオを世界の楔から解放する。」

そうすれば世界の理を失って東方の楽園（サフィラ・アイリス）は破滅するしかない。

「それにラオがただただ世界の犠牲になるとも思えないしな。俺を求めて、あいつはそれこそ白き神やらエンシッダを利用し、利用されてこの世界はあっという間にめちゃくちゃになるのが目に見えている。まあ、エンシッダ達はそれを待っていたみたいだがな。」

そうさせないために、悪魔は私を世界の楔として、悪魔の生まれ変わりとして偽った。

私を世界の楔として彼らの意識を集中させておいて、自分は予言を変えるべく、自分の運命を変えるべく私に隠れながら暗躍を続けていたという訳だ。

「この世界は異能者の気持ち次第であっという間に消滅する可能性のある儚い存在だ。異能者だけじゃない、神でも人間でも天使でも……誰かが本気で世界を破滅させようとしたらその引き金は誰でも

引ける。」

それを知らずに平凡でも次の日が来ることを疑わずに過ごしてきた日々が遠い。

「別に俺は世界を守りたいとかそんな大そうなことを考えた訳じゃない。ただ、守りたかった。それはラオであり、ローラレライであり、俺の友達や仲間だった。その全部はもう皆ほとんどいなくなっちまったけど、そいつらがいたこの世界を残しておきたい。それは俺のエゴだ。でもな……多分、この世界中全てが抱くエゴだ。」

それでもこの結末を私は納得したくない。理解したくない。

私がしたかったこと。

家族に生きていて欲しかった。

恋人と一緒に生きたかった。

仲間を友達をエヴァを守りたかった。

誰も犠牲になんてしたくなかった。

……だけど、何一つ私はできなかった。

私は全てを失って『何一つ持たない者』になったんだ。

「私は世界の楔になるために、全部失ってきたのか？」

どんなに足掻いても私は何一つこの手にすることができなかった。手にしても失ってきた。

それは決められていたことなのか？悪魔によって動かされてきたことだったのか？

もしそうなのだとしたら、私はもう一発くらいこいつを殴らないと……いや、怒りよりもやりきれなさの方が強くなるだろう。

全部、全部初めから決まっていたことで、失うために私は人生を生きてきたというのであれば、それに何の意味があろうと言うのか？

『世界の楔』なんて私には何の意味もない。

私は私という人生を生きていたかった。

世界を救うなんて大義よりも、人間としてまっとうな人生を、大切なものと生きていたかった。

だから、否定してほしかった。
私の人生は『世界の楔』のための人生なんかではなく、私としての人生であったと……なのに！
「だから、すまない……そう俺は言うしかない。お前の人生が世界の楔という因子に引き寄せられているという可能性は大き－－－ヒロ！？」
悪魔は言葉を続けながら私を見て驚きの声を上げた。
それはそうかもしれない。
「う…うぐっ、ひぃう～～～っ！」
気が付けば私は恥も外聞もなく涙を流し、嗚咽も我慢していなかった。
「な？えっ…！どうしてそこで泣くんだよ？！」
そう聞かれても私も答えられない。
ただ、いろんな感情がもういっぺんに押し寄せてきて、自分の人生何だったの？状態だと宣告されて、私も自分で自分をコントロールできなくなったのだと思う。
悪魔はそんな私をどう扱っていいのか分からなくて、色々と慰めようとしているらしいが私と言えば涙を止めることができない。
いい年した大人が、世界の存亡をかけた戦いの中にいて、こんなみっともなく子供のように泣き続けるなど馬鹿な話だと思うが、それでも私は泣き続けた。
－－－多分、これが私が人間として最後に流す涙だと頭の片隅で理解しながら

第156話　そして私は楔となる　4

「ぐずっ」
しばし号泣の後、私は意外と速く泣きやんだ。
「ブ――――っ！」
思いっきり鼻をかめば、自分の中で妙にすっきりした感覚だけが残る。
悪魔のというか、元々は私の着ていた服の裾が長かったので、他に代用品もなくその裾で鼻をかませてもらった。
思いっきりそれをなした私の顔を、いくらかひきつった顔で悪魔が見返す。
「……大丈夫かよ？」
私はそれに言葉なく、一つ頷くことで答えた。
「ったく。殴られるくらいは覚悟したが、あんなに泣かれるとは思わなかったぞ。しかも、大の男の涙なんぞ可愛くもなんともないし……でも、まあちょっと安心した。」
悪魔は言いながら私の肩を拳で叩く。
「世界の楔がお前で良かったよ。お前になら世界を任せられる。何処までも人間らしさを失わないお前なら、失うことの苦しみと悲しみを知ってなお生きようとする強さがあるお前なら、世界をいい方向に変えられる。俺はそう信じるさ。」
いやいや、世界を任されるなんて正直勘弁願いたいと言いたかったが、笑う悪魔の顔はあまりに清々しく、私はこの状況に不釣り合いなほどのその表情に毒気を抜かれた。
「じゃ、俺も行くわ。後はお前に任せた！」
そして、そうやってあまりに明るい声で悪魔は世界の理の方に駆けていってしまうと、跡形もなくその姿を消した。
――――カツン

後に残った彼に突き刺さっていた全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）が、音を立てて地面に落ちる。

何というか世界を任されたにしては、それまでの重々しい会話とは打って変わった軽々しい別れ。

私はそれを形作った要因が自分であることは承知していたが、思わず茫然としてしまった。

「あれ？」

思わずそんな呟きがこぼれおちてしまうくらい、それはあまりに呆気なかったのだ。

『あ！そうだ忘れてた！！』

しかし、そんな別れの余韻の中で、悪魔がうっかりと言ったように声だけを私によこす。

私は呆然としていたので驚きすぎて少しだけとび跳ねたが、悪魔はそんな私の様子などお構いなしで言葉を立て続けに畳みかける。

『ラオの方は世界の理になったが、万象の天使の方はラオとは相いれなかったから、多分体の方に残ってるはずだ。』

その言葉にすっかり忘れていた倒れている万象の天使に目をやった。

目を覚ます気配はないが、息をしているらしく胸は浅く上下を続けている。

『そいつにはまだまだ天使を導く役割と責任が残ってる。悪いが、全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）をそいつに返してやっといてくれな！』

と、それが本当の意味で悪魔最後の言葉となった。

「……」

こちらの返事すら聞かない一方的な言葉にやはりしばし茫然として、

「はあああああ」

私はここ最近稀にみる特大の溜息を吐きだした。

そして、溜息を吐きながら見上げた世界の理には、子供の左右で

それを抱きしめる一組の男女の影を確認することができた。
この結末が正しかったのかなんて私には分からないし、やはり納得できない部分は大きい。
それでもあくまでそれは私の考えであり、彼ら3人の想いはきっとまた別なのであろう。
そう思うことで私は少しだけ救われたような気がした。

背中に背負う存在がごそごそと動いて呻くのを感じて、私はそれを振り返った。
「起きたか、万象の天使。」
「――ヒロ!?俺はっ」
「いきなり人の背中で動くな!」
私を確認した途端にがばっと体を起こそうとした天使を怒鳴りつける。
結局、声をかけても叩いても起きなかった天使を私はとりあえず放っておくこともできず、担ぐことにした。
それを下ろすと天使は酷く神妙な顔をして私に問うてきた。
「神に忌み嫌われた子供(ラーオディル・オヴァラ)は?」
ずっと子供に体を乗っ取られ続けていたという自覚はあるらしい、その問いは一連の事象をある程度理解したうえでの問いかけだった。
「世界の理になった。悪魔も一緒だし、当分はこの大地も安泰だろう。」
「俺はどうして?俺は……」
本当に訳が分からないといったその様子に、彼もまた色々なことに巻き込まれ翻弄されてきた人物などだと知る。
「お前と子供は元は同じ魂だとしても、その離れすぎていた時間が長すぎて、はっきり言って同じ魂とはいえなかったってことらしい。私も詳しくは分からないが、悪魔はお前に天使たちの責任をとれって言っていた。」

全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）をそう言って早々に返す。
ラーオディルが抜けて完全な万象の天使を見ると、泥だらけで血だらけでもやはり近寄りがたいほどの美しさである。
白き神が灰色の魔力によって造りだした人工的な命と魂。
同じく魂を灰色の魔力によって形成された私と彼では、よく似た境遇だというのにどうにもこの天使には私との共通点というものが想像し辛く、私は彼が苦手だ。
「……そうか。」
そんな思いはとりあえず置いておいて、天使は私のそんな大雑把すぎる説明で大体のことは理解してくれたらしい。
彼は杖を受け取ると、気持ちをすぐに切り替えたらしい。
「それで他はどうした？」
「他？」
だが、すぐにそう言われて天使に目をやった瞬間、彼の首に何かがからみつくのが見えて私は驚く。
「！？」
そして、それに気がついた次の瞬間には強い力に突き飛ばされる。
「他…だなんて、酷い言い方ではなくて？愛しいヨイ。」
そこには血みどろの女が立っていた。
目は黄金に爛々と輝きながら血走り、長い髪にも白い肌にも血糊がこびりついた、女神と言うよりはまるで暗黒的な儀式の最中の魔女。
「し…白き・神。」
そういえば白・黒の神は互いの譲れない願いの為に戦っていたはずだ。
「嫌だわ。貴方にならば名前で呼ばれても構わないと言ったじゃない。ヨイ。」
万象の天使の背後からまるで蛇がとぐろを巻くような粘着質な感

じで抱きついて、白き神は恐ろしい顔に妖艶な笑顔を張り付けた。
天使の首筋にあてた指には、刃物のように鋭く長い爪が突きつけられる。
その爪から恐らく黒き神の思しき血が滴り落ちている。
「俺はヨイじゃない！」
だが、その凶刃を恐れずに天使は白き神をはねつけてそう叫んだ。
「ヨイ？」
そんな彼に白き神が茫然とその名を呼び、露わになった白き神の更なる恐ろしい姿を私は見ることとなる。
天使が盾になっていてその全貌は見えていなかったが、白き神が着ていたはずのドレスのほとんどは視る姿もなく、白だったそれはどす黒い赤に染まっていた。
更に天使の首筋に突き付けていない方の腕を見て私は驚愕する。
血まみれのそれは明らかに白き神の『腕』ではなかった。
そこには細い女の腕の2倍はあろうかという筋肉質で体毛の濃い腕が、その先は天使に突き付けていた長い爪ではなく、短い武骨な指が5本付いた明らかに男の拳が存在していた。
天使の言葉に茫然として、だらんと下げられた両の腕の長さは明らかに違う。
「どうして？ねえ…なんで貴方もウ・ダイも私の言うことを理解してくれないの？」
魔女の顔が一瞬だけ、頼りなげなあどけない少女の顔になる。
「やっぱり…全部初めからやり直さないと駄目？貴方もウ・ダイも一回リセットして、新しい貴方達に生まれ変わらせないと駄目なの？ああ！！何処！？」
静かだった声は自分で言っていることに興奮してきたのか、次第にヒステリックになっていく。
対ではない二つの腕が激しく揺れて、彼女は男と女の手で自分の顔を覆った。
べったり掌についた血が、顔に更なる恐怖を重ねる。

「世界の理!!!何処!?エンシッダ、早く早く!世界を変える力を私に!!!!!」

ヴィ・ヴィスターチャには先ほど出会った。

彼女と一緒にはいなかったエンシッダは果たして生きているのかも不明だ。

黒き神の気配もここからでは感じない。

こんな状況の白き神に二人の安否を確かめる術はない。

「無駄だ。白き神。」

だから、私は私の口でその事実を告げる。

白き神のあまりに鬼気迫る様子に圧倒されて、体は本能的に震えていた。

それでも私には告げる義務がある。白き神と相対する責任がある。

「ドーイウ・イミ?」

ゆらりとヒステリックな様子が消えて、静かに低く問われた。

ころころと変わる白き神の人格が恐ろしかった。

「世界の理は貴方のためには動かない。異能者は私が殺し、神(ラーオ)に忌み嫌われた子供(ディル・オヴァラ)が世界の理になった。そして、悪魔はその傍らに存在する。貴方が悪魔を餌に子供を利用することは永遠に不可能になった…そういう意味だ。」

彼らはカグヤか、ラーオディルに契約を持ちかけて世界の理を変えるつもりだった。

だが、カグヤは消滅し、ラーオディルが悪魔と言う目的を達成した今、それは決して叶わぬ願い。

「悪魔が?あの子供を許したというの?共に永遠に苦しむ道を選んだ??ローラレライを見捨てたというの?」

「ローラレライも二人と一緒だ。彼らは3人でいることを選んだ。」

その言葉に言葉を失った後、白き神から急速に狂気に満ちた表情が消えた。

だらんとしていた体は背筋が伸び、血みどろの彼女が狂気の魔女から威厳ある女神へとその姿は変化した。

その姿は見た目には恐ろしげな魔女のままだが、畏怖を感じるほどに神々しくて私はたじろいだ。

「なるほど、ではここにはもう私が求めるべき力はないということですね。よくわかりました。ありがとう、何一つ持たない者・新たなる世界の楔。」

口調も表情も気配すらも一変したその姿。

まさか、白き神は多重人格者なのかと疑うほどの身の変わりようだった。

それは意図されておこなわれているのか、それともはや白き神の人格は灰色の魔力によって崩壊されてしまったというのか。

だが、どちらにしても彼女に対する底知れぬ恐怖が私の心臓にひたりと冷気を落とす。

くるりと私たちに興味を失ったかのように白き神は背を向けた。

「どうする気だ？白き神！！」

「世界の理の現在の異能者が使えないというのであれば、新しい異能者を造るだけ。」

「な！？」

背中を向けていた白き神が驚く私を振り返る。

「貴方にはまたすぐに異能者を殺していただかなくてはなりません。そこで大人しくしていてくださいね。」

にっこりと笑ったその瞳には、人格が何度入れ替わろうが耐えることのない深い深い黄色の光が宿ったままであった。

その色は何処までの正気ではなく、間違いなく狂気に囚われた色。

白き神が何をしようとするのか定かではないが、間違いなく世界に新たなる危機が迫っていようことは確かであった。

『お前はまだまだ戦わなくちゃならないからな。』

そういった悪魔の言葉が蘇り、私は苦々しい思いで舌打ちを一つした。

第157話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　1

神の傲慢、天使の復讐、人間の絶望によって歪められた楽園が崩れゆく
音を立てて終焉を迎え、死んだ者たちの屍を乗り越えて、生者たちは新しい世界目指すのだ

新しい世界を始めよう！……そう世界に歓喜の声を上げて
全て壊れてしまえばいいんだ！……そう世界に呪いの言葉を囁いて

さあ、新しき世界に喜びの歌を
さあ、朽ちゆく世界に別れの言葉を

声を上げろ！
その先に何が待っていようと、世界は最果てまでたどり着いたのだ
……もう後戻りはできない

【楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！】

＜時は少し遡り　ＳＥＤＥティア＞

人間と天使の戦いは黄色の女神ディルアナの死、それすなわち神（マ）の子（イマール）の死によってその形勢は果たして分からなくなった。
実際にディルアナの死を現実に見た訳じゃない。
それでも目の前で息すらしていないケルヴェロッカの死体が、それを教えてくれた。

その現実が私を完全に打ちのめした。
遠くで雄叫びを上げ獣のように天使をなぎ倒すアオイを見つめながら、私は小さな犬を抱きしめることしかできない。
「ティア、しっかりしろ！！お前っ、そんな腑抜けになってケルヴェロッカが喜ぶと思うのか！？」
イフリータが戦いの真っ最中で座り込む私を叱咤する。
分かっている。戦わなくちゃならない。戦場では戦わなければ、ただ死ぬだけ。
そんな事、ずっとずっと前から分かっている。だけど、体が動かないの。
「何でこんな苦しいのに、悲しいのに生きていなくちゃならないの？」
ついて出た言葉はどんなつらい時にだって我慢していた絶望の言葉。
それでも出てしまった言葉は私の中でしっくりとなじんだ。
そうだ。どうして苦しいのに、悲しいのに、生きていなくてはいけないの？
死んでしまえば何も感じなくなる。そうすれば解放される。

――――ガンッ！！

そうして完全に暗闇に支配されたと思った瞬間、横っ面に物凄い衝撃が走る。
「っ！？」
訳が分からなくて目を白黒させながら見上げた先にはキシンが、泣きながら怒りの表情で私を見下ろしていた。
普段感情を見せることのない仲間のその表情は、言葉より感情の全てを私に訴えていた。
――――キシンは神の子（マィマール）であった恋人スノウを失った

だけど、彼は戦っている。彼女の新しい世界で生きたいという想いを受け継いで。
死者は何も語ることはない。それを語れるのは生きている者だけ。
そして、その語るべき、なすべき想いは私にだって受け継がれているのだ。

――そう、私はまだ生きている

「……ごめん。」
私は再び剣を握りしめて立ち上がる。
それから少し目を伏せて、肩で息をするキシンをぶん殴った。
まさか殴られるとは思っていなかったキシンは呆気にとられた顔でこちらを見返す。
その彼に思いっきり笑ってやる。
「だからって嫁入り前の女の顔を思いっきりぶん殴っちゃ駄目でしょ？」
「了解。」
キシンの顔にも力なくも苦笑が見えた。
私はそれに頷くと、気持ちを切り替えるべく頬をばちんと叩いた。
「さて！神の子（マイマール）の分まで私たちが一気に片付けるわよ。向こうは万象の天使も蒼穹の天使もいなくて、かなり動揺しているみたいだし――って、何あれ？」
いいながらあたりを見回した所で最果て（ロシギュナス）の渓谷の方角がぐらりと揺らぐのが見えた。
そして、封印越しに見えていた景色が一気に鮮明になり、その瞬間に感じたことのない湿った空気が、ものすごい勢いで私を突き抜けた。
不浄の大地（ディス・エンガッド）の乾燥した風ではない。
それは間違いなく……西方の魔境（シェストリア）の風っ！

「封印が解けた！！！」
誰かがそう叫ぶ。
途端に人間たちの間で歓声が上がる。天使たちの間では動揺が広がる。
一瞬だけそうして戦いの狭間に、確実なる間が生まれた。
――――そう、千年の間閉ざされていた世界の扉が今、開いたのだ！！
その先に私たちはずっと未来があると、平和があると信じて戦ってきた。
だから、その未来を平和を目に焼きつけたくて、私は砕け散った封印の先に目を凝らした。
連なる山とそれにかかる分厚い黒い雲からは瞬く雷と、恐らくやむことのない雨とその雨によって育ち続ける魔境と呼ばれる深い深い熱帯雨林。
西方の魔境（シェストリア）、話にしか聞いてこなかった伝説の大地。
だが、深い渓谷の対岸にゆらゆらと揺れる大きな影が見えた。
「……？」
そして次の瞬間、音と言うよりは空気の塊と言った響きが不浄の大地（ディス・エンガッド）に広がった。
そこにいたのは獣…神の本当の姿に戻ったアオイと同じくらいの獣、鼻と耳が以上に大きく太く長い四つの足でその巨体を支えている。
その獣がずらりと何匹かも数えられないほどに整然と最果て（ロシギュナス）の渓谷の対岸、要するに西方の魔境（シェストリア）側に並んでいるのだ。
「あれは何だ！？」
と、そこでイフリータが叫んだことで私ははっとした。
あまりのことに私は思考が止まっていらしい。
「そんなこと私が知る訳ないでしょ！？」
なんて、あまりに頭の悪い言葉を返すしかできない。

「……どうやら歓迎されているという訳ではないことは確かだな。あれを見ろ。」

がなり合う私とイフリータの間をキシンが冷静に指さした。

目をこらしてキシンの差す方向の先をみれば、巨大な獣の上に完全武装で戦う気満々の様子が窺える人影を発見する。

獣たちは一斉にまるで威嚇のように遠吠えを上げ、その上に存在する人々はその手にある武器を振り上げて雄たけびを上げた。

それはまさしく戦いの狼煙のようで、何が起こったのか分からない私たちは呆然とするしかない。

――――キーン

そんな呆然とするしかない私の耳に、どうにも痛い音が響く。

『あ・ああー只今、マイクのテスト中・テスト中。』

人間も天使も固唾をのむ中、どうにも呑気そうな若い子供のような声が響いた。

『東方の楽園（サフィラ・アイリス）の諸君、こちら西方の魔境（シェストリア）の獣王グレイン・アッダだ。』

それは西方を治める王の名。

人間にも天使にも新たな動揺が走った。

封印が解ければ無論として西や南北などが何らかのアクションがあるものだろうと思っていた。

だが、いくらなんでも早すぎる。それも獣王が出張ってくるなんて出来すぎている。

まるで、世界の果て（レドヴァガンナ）の封印が今日破れると知っていたかのようだ。

「アオイ！！」

私は獣の姿をとりながらも自我のしっかりしているアオイを呼んだ。

「私を獣王の所に連れて行って！」

「ティア！？」

イフリータが驚いたように声を上げた。
「確かめたいことがあるの。イフリータとキシンは動揺した軍をまとめて陣形を立て直していて。封印が解けてもそうは簡単に西にいかせてはもらえないらしいわ。」
こちらに頭を下げたアオイの首のあたりに飛び乗って私は二人に指示を出して、制止を振り切った。
『ティア、どうする気だ？』
「言った通り少し話を聞くだけよ。あんたは獣王と面識はあるの？」
『彼の前の獣王は知っているが、彼とは多分初対面だな。』
「……そう。それにしても入れ替わりの激しい獣王が千年以上変わらないなんて奇跡みたいなもんよね。」
ぐんぐんと近づいてくる巨大な魔物にしか見えないだろうアオイに向かって、獣族たちは様々な攻撃を仕掛けてくるが、手傷を負っていようが神であるアオイにとってそれはさしたる攻撃にはなりえない。
『彼は異能者と契約をした王だからな。』
「それはどういう？」
アオイの呟きに似た言葉に私は眉をひそめたけれど、それを遮るように再び獣王の声がこだました。
『打ち方やめ！！』
その声を発した人物を獣族軍の頭上を旋回するアオイの上から見下ろす。
獣族というものを実際には見たことがなかったが、私が想像したよりも人の割合が大きいみたいだ。
獣王は千年以上その座に君臨し続けるほどの豪傑でありながら、その姿はまるで年若い少年のようだ。
肌は黒く、薄い黄色の髪からは三角の大きな耳が生え、大きな瞳の横には赤い線やら見たことのない文様が顔だけではなく、体などに描かれているようだ。
その細い体を包む服装はさすがたに獣王に相応しい堂々とした感

じだが、それでもこの少年が本当に王なのかと疑いたくなった。
だけど、その真偽を確かめるすべは私にはないのだから、彼を王として対するしかない。
私は大きく息を吸って、獣王グレイン・アッダに向かって声を張り上げた。

第１５８話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　２

獣王の命令でこちらを狙った攻撃がピタリと止まる。
獣族のことは大して知らないけど、戦闘好きの蛮族だという印象は少し違ったみたい。
少なくとも強者の前には命令を聞くということもできるらしい。
（だけど、その強者が『アレ』…とはね）
獣王、その強い響きとは裏腹に私の眼下に存在するのは華奢な少年の姿。
だけど、私を見上げるその瞳にはその名に相応しい強さと自信が滲み出ている。
果たしてあの愛らしい皮の下にどれだけの化物を隠していることか……それを見極めるように私は獣王を睨みつけ、揺さぶりをかける。
「獣王よ！どうしてこうもタイミング良く、ここにいる！？」
張り上げた声で戦いに傷付いた身体が悲鳴を上げるのを感じた。
それでも強大な相手を前にして弱味を見せる訳にはいかない、精々強く見えるようアオイの上でふんぞり返り私は有らん限り尊大に声を張り上げた……つもりだ。
だけど、獣王は私のそんな虚勢を見透かすかの様に薄く笑った。
『神を従えるとは中々の豪傑だ。はじめましてなりそこねた神（リーヴァネル）のお嬢さん。』
一目で私の正体はばれているらしい。
獣王は手にした掌ほどの大きさの機械で声を大きくすることができるらしく、私のように声を張り上げる必要もないようだ。
ますます癪に思って、歯が軋むほどにかみしめた。
『ティア、焦りを顔に出さないで。』
「分かってる。」
私の焦りで獣族と全面戦争なんてことになったら、目も当てられ

ない。

正直、今の疲弊している戦力じゃ、あっという間に全滅する。

新しい大地を前にそれだけは免れなくてはいけない。

さて、どうやって獣族の思惑を見定めるべきかと少しだけ言葉に迷っていると、獣王の方が先に口を開いた。

『まずは質問に答えよう。我々は天使の長、万象の天使エヴァンシェッドから封印が解ける可能性が高いという情報を得てここにいる。』

「！！！」

戦いの序盤でヒロと共に消えた万象の天使が、獣族に情報を流していた？

戦いの最中でそれが出来るとは思えない。

恐らく戦いの前に万象の天使は、獣族とコンタクトを取っていたということだ。

だったら、天使はここまでの展開を既に予想していたということ？

その情報を聞いて獣族は何の目的のために軍を出した？

単に千年も解けなかった封印が解かれるからという警戒から？それとも…私たちを捕まえるため？

揺さぶられているつもりが、獣王の言葉でこっちが一気に揺さぶれている。

その事実に気がついて心の中で舌打ちをするが、それでも思考はまだまだ揺さぶられてまま続いていく。

万象の天使が消えて結構な時間がたっているけど、一緒に消えたヒロはどうしている？

悪魔の第二の封印は解けたけど、第三の封印ってそもそも何を封印しているの？

エンシッダ様は私たちに肝心なことは何一つ教えてはくれなかっ

た。
私たちも目的さえ果たされるのであればと、深く知ろうとしなかった。
そのことが急に怖くなった。

『まあ、とりあえずは最悪の状況にはまだ至っていないみたいだけど……どうやら万象の天使はここにはいないらしいね。』
「天使は獣族と連絡を取ることができたのね。」
東方の楽園(サフィラ・アイリス)が封印されて千年。
その間、全く外界との交流は断絶していると思っていたが、天使たちは別だったらしい。
動揺を知られる訳にはいかない。
とりあえず、そうして取り繕った会話を獣王と続けようと努める。
だけど、獣族が告げた『最悪の状況』という言葉が気になった。
エンシッダ様のことだ……この状況を予測していてもおかしくはない。
私たちにそれを教えていないということは、この状況は何もしなくても打破できるということ?
はたまた、エンシッダ様もこの状況は想像していなかった?
最悪なのは彼が私たちを見捨てているという可能性もない訳じゃない……。
だけど、今はそれを四の五の言っている状況ではない。
ともかく封印は間違いなく解かれたんだから、この先に進むことだけを考えなくては!
「それで?ここまで軍で出張ってきて貴方達は何をするつもりなの?」
『天使たちには本当に感謝している。彼らはこの灰色の魔力によって汚された大地を監視し続けてくれていたのだから。』
獣王は私の質問を見事にスルーした。
それにカチンときたけど、口喧嘩するのもバカバカしくて獣王の

言葉に続く。
「監視？どういう意味よ。」
『白き神の凶行により灰色の魔力の暴走が起きた。それが終焉の宣告（ディルト・ヴェネス）だ。悪魔ヴォルツィッタはそれを他の大地に影響が出ないようにするために東方の楽園（サフィラ・アイリス）を封印した。』
それは知っている。
悪魔は白き神と黒き神をその灰色の暴走ごと東方の楽園（サフィラ・アイリス）を封印した……それが悪魔の第二の封印のはずだ。
『千年という時は偉大だね。灰色の魔力によって大地は不毛のままのようだけど、灰色の魔力による汚染はほとんど感じられない。千年前は封印しきれなかった灰色の魔力のせいで、とてもじゃないけど生物が生きれる環境じゃなかった。』
それも知っている。
終焉の宣告直後の東方の楽園（ディルト・ヴェネス　サフィラ・アイリス）は地獄としか言いようがなかった。
不浄の大地（ディス・エンガッド）が死の大地だと言われているけど、あの頃を思えば今の大地なんて楽園みたいなもの。
残された灰色の魔力は様々な生物を吸収し、私たちはそれから逃げまどうしかなかった。
『幸いに万象の天使には灰色の魔力を制御する能力があったからね、彼に東方の楽園（サフィラ・アイリス）を上げる代わりに、我々他の大地の王は彼に灰色の魔力の封印が解かれぬように監視することを約束させた。』
なるほど、そういうやり取りがあるから天使には他の大地と連絡する伝手があった訳か。
「勝手ね。そのせいで人間たちがどれほどの苦行を千年もの間課せられていたことか…他の種族は関係ないってことなの？」
『我々は自分の大地を守る事で精一杯だ。他の大地のことまでは悪いが知ったことではない。だから、封印が解けるという事態以外はこの大地に干渉してこなかっただろう？』
「では、私たちがこの先に行くことには干渉しないわね？」
胸糞の悪い話だけど、今はそれをどうこう言っている場合でもな

い。
　ありったけの悪意を込めた顔で睨みつけてそう言い捨てたが、やはり話はそう上手くいくものでもないらしい。
『第二の封印が解かれた以上、万象の天使の力がなくては我々も灰色の魔力の脅威に晒されてしまうのでね……とりあえずは天使の味方をせざるを得ないんだよ。』
「まどろっこしいのよ！要は何な訳？」
　アオイが私を諌める言葉をかけるが、そんなもの聞いている余裕はない。
　言葉が汚いのは分かっているけど、私は獣王に剣の切っ先を向けながら叫んだ。
『あははっ！この俺にそんな言葉を吐く者はもう西にはいないから新鮮だなぁ。いいよ、はっきり言おう。我々、獣族は君たち人間を我らの大地に踏み入れさせる訳にはいかないってことさ。』
　愛らしい顔が、妙に好戦的な光を湛えた。
「だったら、初めっからそう言えばいいでしょ！？悪いけど、はいそうですかって黙っているほど、獣族と違って私たちは物分かりが良くないわよ！！」
　叫びながら体の中で魔力を一気に高めた。
『ティア！！様子を見るだけじゃなかったのか！！』
　アオイが彼の首のあたりに捕まっている私を振り落とさんばかりに驚いて体を揺らす。
「仕方ないでしょ？！私とあんたで一気に西方の魔境（シェストリア）への道を切り開くわよ！！」
　そんな彼に一喝して、ともかく獣族の全てを相手にしている場合じゃないので人間が逃げ込める道を造ろうと手薄な場所に切り込もうとした瞬間だった。
――――ゴアアアアッ

「？！」

突如として沸き起こった爆音に目の前の敵のことも忘れて、後ろを振り返った。

その音の原因はすぐに分かった。

「…銀月の都（ウィンザード・シエラ）！？あれは灰色の魔力！！」

人間軍の後方で宙に浮かんでいた空中都市から、まるで噴火した火山のマグマのように灰色の魔力が勢いよく溢れだしているのが目で確認できた。

悪魔の封印は最果て（ロシギュナス）の渓谷の奥にあると聞いていた。

渓谷の間から灰色の魔力が溢れだしてくるというのであれば理解できるが、どうしていきなり銀月の都（ウィンザード・シエラ）から？

『ちっ！最悪の事態が起きたという訳か…だが、その源は違う？なりそこね（リーヴァネル）た神よ！勝負は一時お預けだ。あれをこの大地より外に出す訳にはいかないのでね！！』

私に向かって敵意をむき出しにしていた獣王も突如の事態に目を見張ったが、すぐに自軍に何やら指示を出し始めている。

それは私も同じだ。

「アオイ、すぐに戻って！！あそこにはまだ何百人も非戦闘員がいるわ！！」

『分かっている！！シラユリ！！』

私の言葉の前に既に風を切る様にアオイはスピードを上げる。

そうだ、あそこには彼の愛娘のシラユリとているはずだ。少なくともさっきまでは一番安全だった場所なのだから。

戦いに参加しない女子供や老人は、そのほとんどが銀月の都（ウィンザード・シエラ）にいる。

何が起こっているか全く分からないけど、あの灰色の魔力の勢いはただ事ではない。

私とアオイは目の前の新世界に背を向けて、一気に灰色の魔力が溢れだす銀月の都（ウィンザード・シエラ）へと戻った。

第１５９話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　３

＜そして、最後にヒロへと物語は戻る＞

チク・タク・チク・タク

遠くから少しずつ近づいてくる秒針を動かす歯車の音。
私はそれを少しでも遅らせようと心の中で強く念じる。

――まだ駄目だ。後少し、もう少しだけ待ってくれ

その秒針が刻むのは楽園の終焉。
秒針が最後の時を告げた瞬間になくなってしまうんだ。
全部全部、最初からなかったことにされてしまうように、全て根こそぎ消滅する。
急げ急げ！
やり残したことがある。助けたい人がいる。伝えたい言葉がある。
だから、近づく音から逃げるように、私はただ我武者羅に走るのだ。
その音はいつの間にか時計の秒針ではなく、世界を食べてしまう怪物の雄たけびになっていた。

――怪物の名前はウァブーシュカ……前文明の時代から生き続ける灰色の魔力を食べる姿なき怪物

世界の楔が繋がる存在。
異能者すら制御不能である、世界の終わりを呼ぶ怪物。
ああ、灰色の魔力がこれ以上溢れたら……奴がもうすぐやってく

る。

「っはあ、はっ…があ！」

息が何度も詰まる。そして、足がもつれて倒れこんだ。

それをすぐに立ち上がって、また走り出す。

あらかじめ言っておくが、別に私は意味なく走っている訳じゃない。

ちなみにいつものように逃げ回っている訳でもない。

まあ、何かに追い詰められているという状況は変わらないので、心境的には逃げ回っているのと大して変りないのかもしれない。

『……嫌な予感がする。』

そもそもは万象の天使が去って行った白き神にそう呟いたことが私が走りだした原因だ。

『そんなことは百も承知だ。白き神が何をするつもりか心当たりはないのか？何処に行った？』

『あの人は異能者を新たに造ると言った。ラーオディルの代わりを造るつもりなんだ……そのために禁忌を犯す。例えば神同士を交わらさせる？いや、だけど神はほとんどが聖櫃の中で――』

『まさか！！！』

万象の天使の思考に浸る独り言にはっとした。

頭をよぎる考えたくない状況、そう思ったとたんに走り出してた。

『ヒロ！！』

『白き神が行きそうな場所が一つ思い当たる！私はそこに行く！！』

迷っている余地はなかった。

『……分かった。白き神については君に任せるよ。俺は一緒にはいけないけど。』

『当然だ！！お前は天使について、いや、この東方の楽園（サフィラ・アイリス）全ての責任を負っているんだ。白き神は私がどうにかして見せる。だから、

お前は天使と人間の戦いを終わらせろ。それができないなら、私はお前を許しはしない。』

白き神を任せろとは中々の大口を叩くものだと自分でも思ったが、そう言わなくては自分を奮い立たせることができなかった。

万象の天使を焚きつけることもできないと思った。

『人間を許せというのか？』

案の定、天使はこの状況だというのにそう喰ってかかってくる。

『少なくともう生きている人間に天使を迫害した者はいない。むしろ、天使に迫害された人間しかこの大地にはいないだろうな。』

私たちは睨みあった。

元は同じ人間でも、人間と天使はあまりに長い間分かれすぎた。

それこそまるでラオ―ディルと万象の天使のように…今更相容れることはかなわない。

それでも、分かり合おうとすることはできる。

人間も天使もまだお互いに生きているんだから…その結末はまだ分からなくとも憎しみも悲しみも消えなくても一歩踏み出すことはできる…私はそう信じたい。

この戦いで全部がハッピーエンドで終わる訳がないとは理解していても、悲劇や憎悪の連鎖の終わりの始まり…そのきっかけくらいにはなってほしい。

私はこの時初めて万象の天使の瞳をたじろぐことなく見つめ返した。

『…ならば、俺と契約をしよう、ヒロ。』

返ってきた言葉に私は目を丸くする。

今更何を言い出すのかと憤りを感じたところで、万象の天使に畳みかけられた。

『俺は天使と人間、東方の楽園（サフィラ・アイリス）のためにこれから全てを捧げると約束する。だから、どうか頼む。ヒロ、東方の楽園（サフィラ・アイリス）を救ってくれ。生

きて帰ってきてくれ。』

『寒いぞ…野郎にそんなこと言われても嬉しくない。』

言われた言葉を理解した途端に私は顔を歪めた。

言われるなら美醜は問わなくとも、女性に涙を浮かべて言われたい。

絶対に半笑いを浮かべた男になどには言われてくないセリフだ。

『キスした仲じゃないか。』

『ぶっ飛ばす』

更に思い出したくない事実を突き付けられたが、万象の天使がある種の覚悟を決めた私に冗談めかしてその言葉を言っているのは分かっていたので、仕方なく彼に一つ言葉を残した。

『まあ、いい。なら――』

――ブワッ!!

目の前に迫る生き物のように襲ってくる灰色の魔力を横っ跳び一つで避け、態勢を崩したまま避けても追いかけてくる実体化した魔力を切りつけて霧散させる。

蠢く灰色の魔力はまるで群がる蛇のように、執拗に私を追いかける。

とはいえ私が世界の楔である証、異能者を殺すことが出来る細く繊細な杖は、どんな巨大な灰色の魔力を前にしてもまるで魔力をガラスの破片のようにあっという間に破壊した。

さすが灰色の魔力を消滅させる存在、世界の楔という感じである。

どうして世界の楔にその能力があるのか、世界の楔と言う存在に何処までの力があるのか、説明がなくとも理解できた部分もあるが、分からないことも多い。

ただ、その力を今は分からないまま使うしかない。

――ちなみにこの溢れんばかりの灰色の魔力…私が駆けずり回るこの場所は何処だと思うだろうか？

ここは世界の中心でも、世界の胎内（ヴァラウィーダ）でもない、銀月の都（ウィンザード・シエラ）。

嫌な予感を胸にしたまま、万象の天使に私は魔法で一気にこの場所へと移動させてもらった。

そして、この地に降り立った瞬間にこの暴走する灰色の魔力を目の当たりにした。

予感が的中したことに舌打ちしたい気分だった。

その様は先日の罪人の巡礼地（アークヴェル）の灰色の魔力暴走の比ではない、逃げまどう人間たちが魔力に絡めとられ吸収されていく様子が目に焼きついた。

目に映る魔力は世界の楔によって消し飛ばしたが、消滅させても次の瞬間には元に戻ってしまう。

魔力の根源を止めない限りこの惨事は止められないことは確かであった。

私はただただその場所を、魔力の根源があるだろう場所を目指してひた走る。

灰色の魔力の暴走による被害だけじゃない。

このまま灰色の魔力が暴走を続ければ、アイツがこの場所に気が付いてしまう。いや、既に気が付いている可能性もある。

そうなれば……灰色の魔力の惨事どころではない。

私が世界の楔になって分かったことが一つ。

世界の楔とは、すなわち唯一ウァブーシュカと繋がっている存在。

灰色の魔力、すなわち生命の根源を食べつくすその存在は前文明時代より世界の終わり（ウァブーシュカ）と呼ばれ恐れ続けられていたらしい。

その姿は普通の人間には見ることはできないが、灰色の魔力を持つ存在には空を飛ぶ巨大な怪物が見えることだろう。

鱗に包まれた平っぺたい体、呼吸をするたびに鱗がゆらゆらと揺

れキラキラと様々な輝きを反射させる。
かつて、ウァブーシュカは灰色の魔力の暴走だけではない、魔力を持つ者すべてに反応し気が向くままに生きる者を全て消滅させてきた。
それに意味があるのかないのか、分かる者は誰もいない。
ただ前文明、そのまた前の文明、その前も、その前もきっとウァブーシュカは世界の終わりを下し、そして、その後にまた新しい文明が始まった。
それは長きにわたり天災に近い扱いをされてきた。
だが、前文明においてそれをある程度制御できる存在が誕生した…それが世界の楔だ。
その存在はウァブーシュカと意思の疎通ができ、完全ではないにしてもその行動を管理することができた。
ウァブーシュカによって、多発する天災のような世界食いはそれによって止まった。
そのため前文明は何処までも発展を続け、ついには異能者だけを残し世界を殺す所まで行きつくことができのだ。
だが、世界が死んでもウァブーシュカは死ななかったらしい。
それどころか、異能者の力を感じてこちらの世界にまで怪物は突き進んだ。
世界の楔が存在することで、本能のまま生きる者を食べつくすようなことはなかったが、それでも今回だけじゃない罪人の巡礼地（アークヴェル）でのような灰色の暴走にウァブーシュカは反応する。
ウァブーシュカが本能によって動きだしてしまったら、もう世界の楔の制止など何の意味もなくなる。
灰色の魔力がなくなるまで、その巨大な腹に全てをおさめる。
今回の灰色の魔力の暴走が果てして何処まで広がっているか、私には今確認するすべはないが、それでもここに集結している人間に天使の数を考えれば、あまりに甚大な被害が出ることは避けられない。

それどころかこの灰色の魔力の暴走を止められなければ、魔力は東方の楽園全てを埋め尽くす。

その結果、ウァブーシュカは大地全てを消滅されることだって考えに難しいことじゃない。

更に最悪なことに他の大地への封印を解かれてしまっていのだ。

――下手をすれば、それこそこの世界全てが消滅する……！

第１５９話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　３（後書き）

少しだけティア視点の話を挟み、かくして物語はヒロによって最終ステージへと差しかかりました。（肝心な部分は次回からですが）

今まで何度か言葉としては登場してきた『ウァブーシュカ』、姿は空飛ぶジンベイザメみたいな感じでしょうか？罪人の巡礼地だけでなく、それは番外編でも実は登場しています。

第１６０話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　４

その場所にたどり着いた私が目にしたものは、外界の壮絶な地獄絵図とは無縁で、世界の終焉などまるで感じさせない静寂。
だが、そこに横たわるのは背筋が凍るほどの恐怖・絶望・畏怖…
…なんと名前を付ければいいか分からない。
だけど、普通の人間が足を踏み入れてはいけない、言葉にできない何か。
「あら？来てしまったのですね、ヒロ。」
その中で白き神が私に悠然と声をかける。
そして、彼女は『それ』の傍らに立ち、愛おしそうに『それ』を見つめた。
その表情はまるで幼いわが子を見守る母のようでもあった。
だが、その表情に私はぞっとするような気分を抱きながら問いかける。
「……ここまで予想して準備していたのか？」
『それ』はまさしく世界の終焉を告げるモンスターの咆哮。

――銀の神オウェル

巨大な体はやせ細り、体を覆っていた豊かな毛は抜け落ち、流す涙は血の色をし、咆哮を上げていると言ってもその鳴き声は私の耳に届くか届かないか程に掠れていた。
彼はその影で確認できないが、恐らくディルアナの死体のそばで天を仰いで泣き続けていたのだ。
白き神の横で叫び泣き続けるその声は、悲壮さと猛々しさで私の体と心を震わせる。
そして、その枯れ果てた嘆きはは今や世界の消滅を告げる産声になろうとしていた。

オウェルの口から目から体から灰色の魔力の濃い気配が立ち上るのが、はっきり見えた。

この場所が静かなのはオウェルのせいなのか、白き神の力の為なのか定かではないが、この部屋の外で暴れまくる灰色の魔力の根源がこのオウェルであることは間違いなかった。

「まさか、この手まで利用することになるとは思わなかったけれど。まあ、可能性の一つとしてエンシッダに命令しておいたの。ねえ、オウェル？」

そう囁きかける白き神の言葉は、化物…いや神の本性をむき出しにしたままのオウェルには聞こえていない。

じりじりと白き神との間合いを計るように場所を移動すれば、その傍らには見た子もない小さな小さな人間らしき影が見えた。

「見て、可愛いでしょ？これがディルアナの本性。まるで妖精のようで愛らしい姿……悲しいことにもう二度と目覚めることはないけれどね。」

「相手が死体でも神同士の本性が交わり合えば、禁忌ということか。」

万象の天使が示した可能性を聞いた瞬間に、自分が一度途切れた時の記憶がフラッシュバックした。

アラシによって殺されたハクアリティス。

そして、その引き金は黄色の神ディルアナの聖櫃からの解放…その場にはオウェルがいた。

その後は悪魔に乗っ取られ、この場所がどんな状況になったのか全く分からない。

だが、オウェルが絶命したディルアナを悲しみ、彼女の死体を抱きしめたとしても何の不思議もない。

私だってユイアを失った瞬間、その体を抱きしめずにはいられなかった。

命を亡くし、ただの入れ物になってしまった体だとしても、それは大切な人の亡骸。

その結果、それが禁忌だとしてもそんな事その時に気にしている余裕はない。

オウェルを責める気持ちはない。

彼は禁忌の中心で灰色の魔力の根源を生みだしている自覚すら、恐らくないのだろう。

だが、その感情すら利用しようとする存在がいたとしたら？

白き神の言葉を信じるならば、あの時、ハクアリティスにディルアナを解放させたのは、アラシの凶行を誘発さ私を悪魔に明け渡させるという役割だけではなく、万が一にラーオディルが使えなくなった時のために新たなる異端の神を造り出す……要するにオウェルとディルアナの本性を交わらさせる役割も担っていたということだ。

その結果、例えウァブーシュカが現れることになったとしても、白き神にとっては自分の目的を達成させるために灰色の魔力の根源は必要なのだろうが、

「二人はあんたの子供じゃないのか！？それをこんな形で利用してまで……っ！！！」

やりきれない感情を吐き捨てるように白き神にぶつけた。

神や人間に何処までも利用され続けた黄色の女神ディルアナ。

全てを裏切っても彼女への愛のために嘆き、懺悔をし続けた銀色の神オウェル。

幸せになるべき道を全て失った二人の愛ではあったが、こんな結末を、いや、結末すら利用されることを二人はしたのか？

「……分かっているのです。本当なら私は二人を何処までだって慈しまなくてはいけない。それだけではない。世界のために白き神として全てに正しくなくてくては、全てを愛さなくてはならない。」

ぶつけた感情に返ってきた言葉が思いがけない言葉で私は目を見張る。

「だけれど、では、誰が私を慈しんでくれるのですか？愛してくれるのですか？」

そう私の目を見て問いかける白き神の黄色い瞳は、果たして本当に狂気に侵されていたのだろうか？

私がそれを確かめる前に甲高い子供の声が、両者の間に割って入った。

「ヒロ！！！」

その声の正体に驚く。

「お…お前たち！！」

そこにはアラシとともに、この部屋にいたはずのクーたちがいた。

家族が目の前で消えていき、混乱と恐怖でその様子は完全に無事だとは言い難いだろうが、とりあえず生きていてくれたことに安心する。

だが、次の瞬間にやばいと直感した。

「さて、ヒロ。この子供たちの命が惜しければ、しばらくそこで動かないことね。」

放心した状態であったテレサとその傍で彼女を慰めていただろうオーブを囲い込み、テレサの細い首筋に本来の自分の腕らしき手の先にある長い爪を突き付けた。

テレサには動く気配はなく、オーブもテレサに鋭い爪を突き付けられて動ける様子がない。

たまたま私の方に駆けだそうとしたクーだけが、その様子を振り返った姿勢から泣きそうな顔で私を見つめる。

私はそんな少女に少しだけ笑ってやると、彼女に近づいてそっと彼女を横へ押しやった。

「大丈夫だ。二人は私が必ずたすけてやる。お前は端っこで大人しくしていろ。な？」

その言葉に強張った顔のまま小さく頷いて、おずおずと移動するクー。

オウェル達が近いが、灰色の魔力の脅威もこの部屋ではなさそうだし問題ないだろう。

それを確認して、私は子供二人を人質に取る白き神に改めて向き合った。
恐らく男性の腕であろう太いそれでがっちりと二人の子供をホールドして、細い自分の腕から伸びる長い刃物のような爪を少女に突き付けている白き神。
やっている凶行とは裏腹に、その佇まいと表情は凛として何の暗い雰囲気すら感じさせない。
その様が今は痛々しかった。
だって、さっき私は聞いてしまったのだ。
あの呟きこそが白き神の本当の声だ。だから……
「もう、やめるんだ。」
確証はないが彼女は確かに灰色の魔力に侵されてはいるけれど、本当は正気なのではないだろうか？
私の中でそんな想像がむくむくとわき上がっていた。
だが、私のそんな想像を妖しい笑顔で白き神はさらりとかわす。
「心配しなくても、私の新しい子供が誕生して、貴方がラーオディルを殺してくれたら解放してあげる。」
「その前にウァブーシュカが来るに決まっているだろう！貴方だって世界を壊したくないだろう？！」
「私とウ・ダイの時は大丈夫だった。まだ、大丈夫よ。」
そういう問題ではないと私は大きく首を横に振った。
「これ以上、自分を追い詰めるな！！」
「ふふふ、何を言っているのかしら？」
灰色の魔力に侵された証である黄色に光る瞳を細めて、白き神は微笑む。
その姿を目の当たりにして、さっきまではその狂気に戦慄した。
だけれど、白き神の真実らしき片鱗を少し垣間見ただけで、その印象は一変した。
自分でも何て単純なのだろうと感心してしまうが、些細なことで他人の印象なんて呆気なく変わってしまう時など珍しいことじゃな

い。

しかし、そういう半面、人間の思い込みというやつは根深い。

「貴方は確かに神だ。私も今まで知らなかった。いや、知ろうともしなかった。神と言う存在があまりに偉大で、自分とかかわりがなさ過ぎて神は絶対なのだと思い込んでいたんだ。神は正しくて、力があって、人間を導いてくれる存在で、ただ頼ればいいと願えばさえすれば神が人間を助けるのが当然だって思っていた。」

神を信じていないと言いながら、私は今まで何度神に助けてくれと願ったことだろう？

だからと言って、そうそう都合よく神が私を助けてくれる訳もなく、神なんていないんだとその存在を恨んだ。

人間なんてあまりに傲慢なものだ。

神がどんなものなのかも知らず、ただ自分の都合のいい存在に祀り上げておいて、自分の思い通りにしてくれなければ失望する。

神に力があるのは本当で、世界に対して、生きる者に対して責任があるのだって本当だ。

だが、世界の願いを人間の願いを、全て叶えるほどの力と責任を神が有してるなんて誰が決めた？

その中に神の願いがあったとして、何か問題があるのだろうか？

白き神だけじゃない。私が何人か出会った神、オウェルもアオイもウ・ダイにもそれぞれにきっと願いがあった。

願いに込めた想いがあった……そう思った時に、神と同じ場所に立って話をして戦った時に、私はやっと神に感情があることを知った。

「だけど、違うんだと分かった。神にだって人間の様な感情があるって……他人の心が分からないように、貴方の心は分からない。だけど、感情がある以上、貴方にも弱さがあって当たり前だ。迷いがあっても当たり前だ。」

熱がこもる私の言葉に白き神の表情は動かない。

それでも構わなかった。

戦って勝てるとも分からないし、私に残された時間は限りなく少ない。

その中で白き神を力ではなく、彼女をあるべき姿に戻すことがきっと私の仕事だ。

灰色の魔力は確かに欲望で人を狂わす。

それでも欲望だって感情の一つに違いないのだから、その中で正気を保っている様子を見せる白き神に私は最後の希望を抱いていた。

「だが、人間は誰もそれに気が付かない。ただ、神に願うだけ、神はそれに応えるだけ。応えはきっと様々だったろう。全ての願いに答えた訳でもないだろう。その度に人間たちの失望や恨みは募っただろう。……正直、それが私だったらあっという間にその理不尽さに怒りが爆発していることだろう。自分勝手に今の貴方のように自分の思い通りになる世界を造ろうとしただろう。」

それでも神が人間の思うような完全で絶対な存在だったら、そんな思いに捕らわれることもなかったのかもしれない。

でも、私の世界の神には感情があった。

「千年前まで貴方はそんな思いを抱えて、それでも世界のために自分を殺してきたのだと思う。だけど、貴方にもやがて限界がきた。異能者にしてもそうだ。絶対であることを、完全であることを定められた以上、弱さも迷いも見せられない。だって、貴方は神の中の神。同じ神にも頼ることは許されない。だから、貴方は自分から狂ったんだろう？」

私はこれまで多弁に人に何かを語ったことがあるだろうか？

だけど、この一連の戦いの中で愚かな中でも私は一つ学んだ。

言葉を尽くさなくては、誰に何も伝わらない。

この世界の生き物は生まれて死ぬまで、誰かと完全に一つになることはない。

それは当たり前のことかもしれないが、だが、考えてみた。

私はこれまでの人生の中で、自分が悲しいと思うことは当然誰もが悲しくて、自分が嬉しいと思うことは誰しもが嬉しいという基準

で生きてきた気がする。
それは多くにおいては当てはまることなのかもしれないが、その悲しさや嬉しさは私と誰かは全く同じじゃない。
似ていても違う感情。
この世界に生きる存在が一つ一つ違うように、それが抱く感情は全て違っていて当たり前なのだ。
だから、すれ違う。
他者と同じ感情を抱くことがないから、伝えようとしないと、必死で伝えないとその感情は想いは気が付くと違うものとして誰かに伝わっている。

――そう、言葉・体・想い、全てで伝えないと何一つ私の想いは伝わらない

だから、私はもっともっとと言葉を身振りを想いを、私の全てを重ねる。
「貴方が辿った道は間違っていると思う…でも、貴方は決して灰色の魔力に侵されて間違った訳じゃない。貴方はただ楽になりたかった。生まれ初めて逃げたんだ。私なんて生まれて今まで、何度だって逃げた。なのに、貴方はたった一度逃げただけで、世界が壊れる。貴方の背負うものはあまりに重すぎる。投げ出したい気持ちも分かる。だが、どうか頼む！世界を、貴方を諦めないでくれ！！！」

「……貴方の物差しで測らないで。」

これだけ私という全てをぶつけて、返ってきた言葉は一つ。
だが、返ってきた言葉は確かに白き神の感情であった。

第１６０話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　４（後書き）

後半部分は『ヒロ、独り言を続ける』な話になってしまいました。読みにくい、分かりにくい部分はあったと思います。申し訳ありません。

ですが、ヒロも語っているように彼も白き神を説得するために必死なのです。恐らく彼が一人でこんなに熱く語ることとは最初で最後だと思うので、広い心でお許し頂ければ幸いです。

加えて年内に終わらせたかったのですが、中々進んでいない状況で本当に申し訳ありません。でも、次で色々大きな山を越えるはず！来年の初めにはこの物語を完結できる目途は一応たっているので後少しだけお付き合いくださいませ。

第１６１話　楽園に終焉に歓喜の声を上げろ！　５

私はその時初めて、自分の目の前にいるのが世界を統べる女神なのだと自覚した。

だが、同時に彼女が一人の女性であることも理解した。

「貴方に私の心の何が分かるというのですか？そもそも私たちを造ったのが異能者ならば、どうして同じ間違いを犯したのかしら？自分たちに感情があったから苦しかったはずなのに……感情なんてなければ世界はこんなことにならなかったはず。ねえ、そうは思いませんか？」

それは筋が通る論理であるように感じる。

『だけど』『しかし』と私は思ってしまうのだ。

「そうかもしれない。感情がなければ、少なくともこの事態はなかったと思うよ。だけど、貴方に感情がなかったら、きっと世界はもっと早くに破滅していたようにも私は思う。」

「……何を言っているの？役目を果たすだけの神がいれば、世界は勝手に幸せになったでしょう？」

白き神は私が何を言っているのだというように顔を顰める。

私はそれに応えるべく、次の言葉を紡ごうと息を吸った瞬間だった。

部屋を満たす空気が一瞬で変わる。

尽きることなく溢れ出てくる灰色の魔力が、まるで何事もなかったかのように消えたのだ。

それは灰色の魔力の暴走の終わりを告げるものでない。

私には分かる。それは正に大きな爆発の前の静けさ。

その静けさが静かであればあるほど、後からやってくる爆発は大きいのが直観的に理解できた。

『爆発』とはすなわち新たなる灰色の神の誕生である。

「まずいっ！」

それを理解した後にクーがオウェルの側にいたことを思い出し、私は白き神に背を向けて駆けだす。

白き神の説得に時間をかけすぎたということか、いや、それよりも想像以上に神の誕生が早いということか。

とにもかくにも何が起こるか全く分からない。

「ヒロ？」

私が急に叫んだことで僅かに首をかしげるクー。そのあどけない少女の表情が次の瞬間に灰色の影に隠される。

「クゥー！！！」

オウェルとディルアナを中心にして一瞬で消えたはずの灰色の魔力が一気に吐き出される。

それはまるで強烈な竜巻のように立ち上り、勢いそのままに銀月（ウィンザー）の都（ド・シエラ）の天井を突き破る。

吹き荒れる風は正に嵐。

私はその場に踏ん張るだけで精一杯で先に進むことすらままならない。

「うわああ！！！」

「きゃあっ」

背後から僅かにオウェルとテレサらしき叫び声が聞こえた気がするが、それを振り返る余裕もない。

しかし、その嵐のような勢いも一瞬で立ち消える。

「な…なんなんだ？」

ばらばらと崩れ落ちてくる天井の破片。

見上げれば今の衝撃でこの場所は地下深いところにあったはずだが、天井をぶち抜いた穴からは空が見える。

先程まで灰色の魔力に満ちた世界は太陽すら覆い隠されていたはずだが、まるで何事もなかったかのように綺麗な青空だ。

あたりに溢れかえって人々を苦しめていた灰色の魔力の暴走の気配も消えた。

あるのは暴走していた魔力よりも遥かに強大で凝縮された気配。

「おぎゃあ・おぎゃあ」

それが本当の意味で産声を上げていた。

力尽きたように荒く息をしたまま倒れたオウェルの横で、目の前にはつい数秒前までと同じようにきょとんとした顔のクーが立っている。

少女が無事なことには安心したが、その腕に布に巻かれて抱かれている存在は恐らく赤子の顔をした新たなる神。

「あれ？ヒロ…私は……？？」

クゥも何が何だか分からないのだろう。

夢から覚めたばかりのように眼をぱちぱちと瞬かせた後に、腕の中に突如として現れた重みに目を落とそうとする。

「待て、見るな！！」

頭をよぎる悪魔の記憶の中で何度もフラッシュバックする、恐ろしい目玉の化物。

それは恐らく灰色の神・神に忌み嫌われた子供（ラーオディル・オヴァラ）の本性。

新たなる神と彼が同じ存在でないことは分かっているが、その本性は同じである可能性が非常に大きい。

少なくとも子供が見て愛らしいと感じるものではないはずだと、私はクゥを止めようとしたが既に遅し。

「……」

クゥは腕の中の存在に目を落として固まった。

それを見てともかくクゥから引き離さなければと、一歩踏み出そうとすると私はものすごい勢いで地面に引きずり倒される。

「ワブッ！！」

予想していなかったアクシデントに顔をもろに床にぶつけ、目の前に星が輝く。

「貴方はそのまましばらく床で寝ていなさい。あれは私の赤子です。」

その横をかつかつと白き神がクゥに向かって突き進んでいく。
「待てっ！何だ?！」
無論、それを止めようとする私だが、起き上がろうにも何かに足が引っ張られて起き上がることができない。
後ろを見れば私の足を床から生えた蔦みたいなものが絡め取っている。
無理に引っ張ってみるが、恐らく白き神の魔力によって蔦は構成されているのだろう、力づくではとても外れそうにない。
手の中にある世界の楔を使えば魔力を破壊できるだろうとそれを試そうとすると、思いもよらない歓声が上がった。

「やっと、会えたね！！」

その声に蔦に足を絡めとられたまま再び前を向くと、その異形な姿に恐怖し慄いているだろうクゥの表情は満面の笑み。
白き神もその反応に面を喰らっているのだろう。足がぴたりとクゥの前で止まっている。
しかし、次の瞬間にはものすごい勢いで少女から赤子を包んでいるだろう布をひったくった。
「きゃあっ！！」
だけど、彼女はそれを確認した瞬間に赤子をまるで汚いものでも触ったかのように手から落とす。
その一瞬に布の奥から一対のギョロっとした目が私を射抜く。
それは本当に一瞬のことだが、間違いなく悪魔の記憶の中で見た異形なる存在。
赤子というのは本当にその泣き声と大きさだけで、姿は人間のなりそこないのような醜く歪で正視に堪えない化物。
白き神の反応も分からないでもないが、それよりも驚いたのが白き神がその腕から落とした赤子をクゥが咄嗟にキャッチして大事そうに抱きなおしたことだ。

「何するの危ないじゃない！！……大丈夫？」
クゥには赤子の姿が普通の赤子のように見えているのだろうか？
まるで本当にかわいいものを、大切なものを見るかのようにクゥは赤子を覗きこむとにっこりと笑って見せるのだ。
「クゥ、君はその赤子が何なのか分かっているのか？」
「え？何って……この子は私の大切な人だよ。多分ね。」
呆然とつぶやいた私にクゥは笑って見せて、赤子を強く抱きしめる。きゃきゃっと、赤子が嬉しそうに笑い声を上げる。
「言ったでしょう？私は夢の中で何回も世界の記憶を見るって……その中で私は自分の前世の記憶も見たんだ。その中で私は誰よりも大切な人を見つけたよ。だけど、前世で私たちは離れ離れにならなくちゃいけなくなった。だから、来世では絶対にずーっと一緒にいようって誓い合ったんだ。その相手がこの子だよ。」
その確信はどこからくる？
その想いは異形な姿も、その子供が背負う運命も関係ないというのか？
私にはただクゥが何も知らないまま、灰色の魔力に付け込まれているとしか思えなくて、絡め取られた足を世界の楔を使って解放させると、まだ呆然としたままの白き神を追い抜いてクゥから赤子を奪い取った。
「何するの？！」
非難の声を上げるクゥを無視して赤子を見下ろす。
白き神のように取り落としたりはしないが、覚悟はしていてもその異形な姿は強烈で私は息を飲む。
赤子はクゥから引き離されて驚いているのか、血走った黄色い瞳をぎょろりと私の方に向ける。
その顔は黒色でシワシワの肌に頭は大きく膨らみ、目は飛び出て鼻は削がれ口は左右対象ではなく曲がっている。
布に包まれた体は確認できないが、恐らくその体も異形であろうことは想像に難くない。

だけど、腕の中の重みと発する体温。そして、
「おぎゃあおぎゃあ」
クゥを求めてなく声は普通の赤子と何ら変わりなかった。
でも、私は知っているのだ。
「この子は世界を破滅させる存在だ。」
「だから?!どうするの?」
「……お前はこの子が大切なのか?」
私を必死の形相で見上げるクゥは、その問いに大きく大きく頷いて見せる。
その姿は赤子が何であろうとも関係ないといった風だ。
夢だか前世だか知らないが、あったばかりの赤子に、それもこんな異形な赤子に大した思い入れだと感心する一方で、それは誰しもが持つ簡単でだけどとても難しい想いなのではないかと思う。
世界を破滅させる存在にだって、誰にも気にも止められないちっぽけな存在にだって、生きていて何処かで誰かが一人くらいはその存在を大切に思ってくれる人がいる。
当たり前のことかもしれないが、それを実感できることは幸せなことだ。
だからこそ、人は繋がりを求める。
誰かに大切に思われたいと思うから、誰かと繋がりたい思う。
その繋がりが強ければ強いほど安心できる。
だけど、その繋がりは目に見えないものだから、相手が大切であればある程、自分に自信がなければない程、不安が募る。
だから、その想いと不安が強くなりすぎて『ヒトツニナリタイ』
…ラーオディルはそれを願った。

『ウオオオオオオオ・・・・ン』

新たなる神にラーオディルという存在を重ねて考えに耽っていた私は、その遠吠えにはっとする。

空が覗く開いた天井から恐らく私にしか聞こえない獣の声が聞こえた。
それはウァブーシュカが新たなる異端の神の誕生に気が付いた証拠であった。

第１６２話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　６

「クゥ。私を信じられるか？」

何についてかと私はあえて告げなかった。

白き神の説得は未だ中途半端、新しい灰色の神を誕生させ、ウァブーシュカは今まさにここにやってこようとしている。

正直いって、何もかもが最悪の状況だ。

それでも不思議と私は諦めるという気持ちを抱かない。

それならば、それならばと次の手をすぐに思いついた。……いや、違うな。私はたぶん、何処かでこの最悪の状況を想定していた。

だからこそ、こんなにも静かな気持ちでいられる。

「……信じる？」

だからこそ、クゥの無垢な瞳を見返すことが出来る。

「この君の大切な人を私に預けて欲しい。必ず、君のもとに返すと約束する。みんなを助けるためにはこの赤子が必要なんだ。」

ウァブーシュカは間違いなくこの赤子を目指してこの場所にやってくる。

ウァブーシュカに全てを飲み込まれる前に、この赤子を連れて少しでも人のいる場所から離れなければならない。

「本当？絶対に？」

「ああ。約束するよ。」

クゥも言葉を重ねない私に言葉を要求しない。ただ一つ。

「契約じゃなくて？」

そう尋ねる少女に私は小さく笑ってやる。

「契約じゃなくて約束だ。私を信じられないか？」

「……ううん。信じられるよ。分かった。約束…ね？」

私は世にも恐ろしい姿をした赤子を抱えなおすと、ウァブーシュカを引きつけるべく行動を開始しようとする。

だが、その私の肩を誰かが掴む。
「その赤子は私のものよ！！！」
私の肩を掴んだのは、彼女自身の腕だと思われる細い手。
この世界の誰よりも強い力を有しながら、私を引きとめる力は何処にでもいる女性のものと何一つ大差ない。
私はその手を掴んで、なるべく優しく振りほどく。
「貴方が感情のない神で、役目だけの存在としてあったとして、世界は幸せだったんだろうか？」
「な…に？」
「さっきの話の続きだ。貴方は自分に感情がなければ良かったと言った。だけど、私は思うんだ。貴方に感情があったからこそ、今の世界がある。確かに今世界は最悪の状況に陥っているんどう。だけど、常にそうだった訳じゃない。幸せな時だってあった。少なくとも私はこの世界に生まれて幸せだったと何度かは思った事があったよ。貴方は？一度も幸せだと思ったことはなかっただろうか？」
新しき灰色の神を想うクゥに教えられた。
誰に不幸だと思われる境遇だろうが、誰か一人だけでも想ってくれる人がいる…多分、そんな小さなことで人は簡単に幸せになれる。
要はどんなにつらい状況であろうと、それを信じられるかどうか。
自分を襲う現実を変えるのは難しいけれど、自分の中の心の持ちようを変えるのはそれより簡単なはずだ。
「わ…たしだって…」
「そうだろう？感情のある貴方が守り育てた世界は決して楽園でなかったと思うけど、だけど地獄じゃない。まあ、今はその一歩手前だけれど、それでも今からまた始めればいいんだ。誰しもが幸せを感じられる世界……それは無理なことかもしれない。だけど、変えようと始めなければ何も変わりはしない。」
がらがらと遠くで何かが壊れる音が近づいてくる気配がする。
今は収まったとはいえあれだけ灰色の魔力が暴走していたのだ。
いつ銀月の都（ウィンザード・シエラ）が崩壊してもおかしくない。それに原動力であるオウ

ェルがあの状態だ。
そこにウァブーシュカがとどめをさす前に、ここを離れなければなるまい。私の問いに雷に打たれたように固まった白き神に、私は今度こそ背を向けた。

「私だってっ、その方がいいに決まっている！！！」

それは多分、白き神の本当の声。
「でも、この世界ではそれが不可能なのよ！！！誰かが誰かの為に犠牲にならなければ、何かを得るためには何かを犠牲にしなくてはいけないの！！！世界は生まれる前からそう決まっていた！！！どんなに努力しても私は何も変えられない！」
彼女もこの世界が何かおかしいのは分かっていた。
だけれど、異能者によって造られたこの世界の理は神の頂点に立つ彼女も変えられなかった。だけど、
「だったら、私が世界を変える。」
もう一度、しっかりと白き神を振り向いて視線を合わせた。
「え？」
「いや…私がと言うのはおこがましいな。私が世界を変えられるように、世界に生きる全ての者に語りかけてみる。」
「何を言っているの？そんなの……」
「できないと決めるのは簡単だ。だけど、私だけじゃない、貴方だけじゃない、世界の全てがそう願えば不可能なことではないと私はそう思いたい。この世の中にはどうしても不可能なことがあるかもしれない。だけど、誰かがそれを証明した訳じゃない。徒の人間だった私が世界を左右する存在になるくらいのことが起こる世界なんだ。願えば、信じれば、もしかしたら叶わないかもしれないけど、何かがきっと変わるはずだ。」
私は白き神に向かって一歩近づいて手を伸ばす。
「だから、貴方ももう一人で思いつめるのはやめろ。貴方は気が付

いていないだけで、どんな貴方だろうが想っている人を私は一人知っている。貴方の罪を私は、この世界は許しはしないだろう。だけど、世界に一人だけ貴方を許す者がいる。」

白き神は永遠に犯した罪に苦しむべきだと私は思う。

彼女に同情すべき余地があっても、彼女だけに罪がないとしても、彼女が自分のために世界を犠牲にしようとしたのは間違いなく、彼女のために死んでいった者、不幸になった者も数多存在する。

だから、もし、彼女を殺したいと願う誰かがいたとしても私は止める術も言葉も持たない。実際、止めようと思わないかもしれない。

だけど、彼女を想い、許し、助けようと誰かがいると知っていて、それすらも彼女から奪おうとは思わない。

矛盾している感覚だとは思うが、白き神にそういう誰かがいることに私はどこかでほっとしている。

「ほん…とう？」

だからこそ、まるで夢が覚めたばかりの幼子のように目を丸くしてこちらを見返す白き神に、私はそれを教えてやる。

「ああ、その方法も想いもあまりに歪んでいて、貴方以外はどうなってもいいと思っているけど、それでもそれだってきっと愛なんだよ。間違っていてもそれは感情だ。ほら……」

「イヌア様！！！！」

ばたばたと近づいてくる灰色の魔力の気配には、少し前から気が付いていた。

彼の存在が最後、白き神を目覚めさせるための起爆剤になればと思ったが、その想像に間違いはなかったようだ。

「エンシ・・・ダ？」

「ああ！！！良かった！！！！」

そのまま私や子供たちが見えていないかのようにエンシッダは、白き神に抱きついた。

いつもずる賢く、何を考えているかも分からない彼の様子からは考えられない行動であった。

白き神にしてもそうなのだろう。

目を白黒させて、彼女は茫然とエンシッダに抱きしめられたままだった。

「もっ申し訳ありません!!!私は何という不敬を!!!」

白き神より先に我に返ったエンシッダは、物凄い勢いでそのまま頭を下げる。

「白き神、彼が貴方を本当に思う者。その結果、彼が起こした行動を私は絶対に許すことはできない。貴方が世界に対してした罪も絶対に許せない。だけど、その大本にある感情は決して許されないことではないんだ。それだけは、感情と言うものだけは世界の誰しもに許された、たった一つの存在なのだから。」

「何を言っている?」

急にこの場に現れたエンシッダには何が何だか分からない話なのだろう。

相変わらず私の前では酷く渋い顔をしてこちらを睨みつけてくる。

そう、エンシッダにはずっと白き神だけだった。

二人の間に男女の愛が本当にあるのか、私に分かるものではないがそれは歪みまくった彼にとって多分唯一の温かい感情に違いない。

「だから、今は少しだけお休み白き神よ。」

私は茫然としたままの白き神に向かって世界の楔を突きつけると、その先端から灰色の魔力を吸いだした。

元々、黒き神との戦いでほとんど力を使い果たしていたのだろう。

白き神はそのまま崩れ落ちるように気を失う。

「イヌア様!!!ヒロ、貴様何をした!?」

「ただ、少し気を失ってもらっただけだ。……もう、ウァブーシュカがここに来る。これ以上は話している時間がなかったからな。」

「愚かな!!あの化物が来るというのなら、世界はもう終わりだ!!!オウェルとディルアナから生まれでた灰色の魔力は神に集約さ

れたとはいえ、その名残はそこらじゅうに散らばっているんだ。これで…この人はやっと安らかな眠りに――」

「だから、ウァブーシュカで白き神と心中か？そんなこと私が許すとでも思っているのか？そんなことには私が絶対にさせない。」

彼らの償いが死という形に最後はなろうとも、そんな楽に済まされてなるものか。いや、楽というのではない、彼らは自分が犯した罪の重さを知るべきなのだ。

それを知らずに全てを終わらせるなんて許されるはずがない。

だからこそ、私は最後の賭けに出る。

第１６３話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　７

私の目の前に倒れるのは、瀕死の神獣。
細く干からびたような体から羽は抜け落ち、開かれたままの口から吐き出される息は荒い。
神の生命力がどれほどか私の預かり知る所ではないが、普通の生物だったらこのままのたれ死ぬのが目に見えている。
私はその存在を見下ろして、酷く冷たい声で語りかける。

「おい、オウェル。お前はこのまま死んでいいのか？」

自責の念により千年間、呪いの中で生き続け、灰色の魔力に縛られ続けた銀色の神。
「お前は自分の子供が死んでしまってもいいのか？」
ぴくりと一瞬だけ体が動く。どうやら、完全に意識が飛んでいる訳ではないらしい。
私は腰をおろし、彼の目の前に生まれたばかりの赤子を突きつける。
「どうだ？醜いだろう？お前とディルアナの交わりによって生まれた禁忌の神。だが、お前の子供であることに間違いはない。」
ゆらりと閉じられた瞼が開き、その姿を目にして怯えの色が瞳に浮かんだ。
「これが自分の子供だと信じたくない？だが、残念だな。こいつは間違いなくお前が生み出した存在だ。ここに私を含め、何人も証人がいる。……だから、お前は責任をとらないといけない。このまま楽に死ねると思うなよ？」
私はそれだけいうと立ち上がり、世界の楔をオウェルに向かって突きつけた。
灰色の魔力によって縛られたオウェルを解放すると、彼自身の銀

色の魔力が弱弱しくも鼓動を始める。
　すると生気を失っていた瞳が僅かに意志を持って私を見上げた。
『俺に…何をさせるつもりだ？』
「私と赤子を連れてウァブーシュカから逃げるための足になってもらう。ウァブーシュカを大人しくさせるためには、この場所では何かと都合が悪いからな。」
　ぐらりとよろめきながら、もはや神の威厳など微塵もない体を起こすオウェル。
『何年振りだろうな。これほど意識がはっきりする感覚……灰色の魔力の呪縛をお前が解いてくれたのか。』
「そういうことだ。とはいっても私にできるのはそれだけで、お前の体を回復したりはできない。私ができるのはあくまで灰色の魔力の消滅だけだ。」
『どおりで頭はクリアでも、体は今にも死にそうだ。……だが、その役目は今この場で可能なのは俺だけのようだ。いいだろう。背に乗れ。』
「当然だ。」
『それにしても＜これ＞が俺の子供か。』
　その声には嫌悪感が滲む。
「なら、お前も白き神のように子供を美しい物と醜い物に分けるか？」
　試すように問いかける。
『いや。その赤子は俺の子供かもしれないが、それでも俺の所有物じゃない。俺の一存で在り様を変えることはあまりに傲慢だ。』
「優等生な解答だな。だが、果たしてお前はこの赤子を抱えたまま、永遠にその答えを貫き通せるのかな？」
　それが出来ないから、白き神は赤子を二つに分けた。
『それは……』
「まあいい。それもこれもとりあえず世界の危機を救ってからだ。いくぞ。」

さらりと出た言葉の重さは考えず、私はさっさとオウェルの背によじ登る。
私は確かに世界の楔を受け継いだことで世界を救えるし、神を試すような資格を得たのかもしれない。
だけど、それは本当の私であって私じゃない。
それでも、私は私でなくなってもこれを成し遂げないといけない。
いや、私はそれを成し遂げたい！

オウェルの背に跨り、神獣は灰色の魔力が銀月の都（ウィンザード・シエラ）を貫いた穴を急上昇する。
「ヒロ！！！！！」
私の名を呼ぶ誰かの声は、風を切る強い音に遠くに聞こえた。
ほぼ９０度の角度で駆けあがるオウェルの背に私は赤子を片手に必死でしがみつくほかない。
歯を食いしばり、瞼も風圧で開けられない。
しばし後、風圧は消え去り、体が軽くなる。
銀月の都（ウィンザード・シエラ）を抜け、私は神の背中の上で何処までも続く浮上の大地（ディス・エンガッド）の空と大地を見た。
私が生きてきた死の世界。だが、たくさんの生き物が生きている世界。
何処までも続く青い空と赤い大地の先に、きらきらと輝く光が瞬く……あれは間違いなくウァブーシュカ。
『ど…どこににげ…る？』
少しの飛行で息が上がるオウェル。
オウェルしか頼れる存在がいなかったとはいえ、オウェルの体力がそう長くはもたないのかもしれない。
私はいくつか浮かんだ逃走プランを忙しなく頭の中で組み立てながら、ふと眼下に広がる東西を分かつ大きな大地の裂け目に視線を落とした。

「最果（ロシギュナス）ての渓谷は何処まで続いているんだ？」
ここがそのどのあたりなのか定かではないが、その果ては上空からでも確認できない。
『最果（ロシギュナス）ての渓谷は現実の谷とは違う。東西南北に分かれる４つの大地を空間的に裂いている存在だ。だからこそ、厳密にはその果てというものはない。あるとすれば果てとは、正に世界の果てであり、全ての大地に繋がる世界の中心だけ。』
「世界の中心か……なら、そこに向かって飛んでくれ。」
『言っておくがそこに向かって進んだとしても、世界の中心には辿りつかないぞ。世界の中心は――』
「知っている。ともかく早く！！」
そうやり取りしている間にも、陽光に反射する光が少しずつ大きくなってきている。
オウェルもそれを分かっているからだろう、それ以上の問答はなく翼を大きくはためかせ一気にスピードに乗ってオウェルは飛び立つ。
「オギャ・・・っオギャー！！！」
その勢いに驚いたからか、はたまたやっとクゥ―と引き離されたことに気がついたのか、それまで大人しかった赤子が泣き出す。
その声は赤子のそれより低く、声までも不気味としか言いようがなかったが、更にそ泣き声は灰色の魔力を狩ることを生存意義とされたウァブーシュカに届いたらしい。
それまで悠然と空に浮かんでいるかのような佇まいだったウァブーシュカに、瞬間的に殺気に似たプレッシャーが宿ったのが分かった。

『ウウウウウゥゥゥァアアアアア』

発音として成り立たないウァブーシュカの叫びが、果てしない空を大地を揺らす。

今はまだその巨体が手の平程度の大きさしかないはずなのに、太陽の光に反射する輝きが鋭さ含み、ぎらぎらとした視線を感じた。
振り返るのも恐ろしいほどのプレッシャーに、赤子の泣き声がより一層大きくなる。
その泣き声に呼応するように赤子から灰色の魔力が立ち上る。
（赤子でも神は神か……その魔力を利用させてもらうぞ。）
私は風圧で動くのも億劫な中で、赤子に世界の楔を近づけると灰色の魔力を吸い取り、楔の中にそれが消える前に逃げる方向とは別の方向に魔力を飛ばした。
灰色の神から発生する高濃度の魔力にウァブーシュカは僅かに進行方向を変えて、目の前の魔力に喰いつく。
あの化物の知能がどれほどあるかは私の預かり知らぬ部分ではあったが、どうやら想像通り灰色の魔力を全て消滅させることだけを本能とする獣に近いものらしい。
オウェルがどれほど急いでもそのスピード差は歴然であるように思えたので、これで少しでも時間が稼げればいい。
私は泣き続け魔力を放出し続ける赤子から、次々にあらぬ方向にそれを飛ばしていく。
その度、微妙に進行方向を変えてジグザグに空を進むウァブーシュカ。
オウェルの頑張りもあり、次第に距離が開いてくる。
このままいけば、一気に人気のない所まで行きつける。
そう確信した瞬間だった……急にがくんと体が急降下するのを感じた。
「オウェル？？？」
『す…まな…もう限界・だ』
「なあ！？？？もう少し踏ん張れ！！！」
何の兆候もなくいきなりエネルギー切れしたオウェルに逆上してみせる私だが、オウェルはそのまま力尽きたように大地にめがけて落ちていく。

「うわあああああ！！」

その高度はかなり高く、私はオウェルに振り落とされぬようにしがみつくしかなかった。

第１６４話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　８

『我の中で煩いのは誰だ？』

遠くから何か言われたような気がした。

意識がはっきりしてくるのと同時に、それが声ではなく泣き声にすり替わった。

（ダ・・・レ？）

そんな風に問いかけながら瞼を開けると、世にも恐ろしい赤子の顔のアップが迫る。

「うわっ…」

思わず赤子を放り投げそうになったが、かろうじて思いとどまり、それと同時に記憶が蘇る。

あれだけの高さから落ちたにも関わらず、私はオウェルに最後までしがみつき、彼をクッションにしたことで五体満足でいられたようだ。

体は痛む部分も多いが動けないほどじゃない。

赤子も元気良く泣いていることから、大した外傷等はなさそうだ。

ただ……

「おい、オウェル！！」

私たちのクッションになる形で地面に打ち付けられたオウェルは、呼吸のための上下運動はあるものの完全に沈黙してしまっていた。

その呼吸も今にも消えそうに細い。

手当てしたやりたいところだが、今はそれもできる状況ではない。

混乱と焦りの中でオウェルを見下ろしながら次の逃げる算段を考えようとした時、私に降り注ぐ太陽の光が遮られた。

雲ひとつない空であったはずなのに、そう考えた次の瞬間に胸がひやりと冷える感覚。

「！！！」

恐怖に突き動かされて見上げた空に息をのむ。
「ウァブーシュカ！！！」
どうやらオウェルの墜落により、あっという間に追いつかれたらしい。
私が見上げる空の全てを覆い尽くすほどの巨体は白っぽい硬質なもの、まるで鱗のようなもので覆われている。
巨大な化物はこちらに顔らしき方向をゆっくりと下に向けると、大きく口を開けた。
その中はまるでブラックホールのように何一つ存在しない闇が広がっていた。
ウァブーシュカは大きく息を吸うと、一気に声を吐き出す。
「うわあああああ！！」
何が起こったか分からないまま、ウァブーシュカにとっては吐息だろうが、それが私にとってはすさまじい突風となり、私は一気に吹っ飛ばされて地面に叩きつけられた。
衝撃に目の前に星が弾けて散る。
遠のく意識を必死に掴みとめながら、腕の中の赤子だけは離すものかと抱く腕に力を込めた。
赤子に思い入れがある訳じゃない。
だけど、私はクゥとこの赤子を無事にあの娘に返すと約束したのだから。
衝撃に叩きつけられて立ち直った瞬間に、ウァブーシュカの様子を確認することもなく私は自分の足で駆けだしていた。
走り出した途端に頭をぶつけたのか、ぐらりと体が傾くが、無理やりに態勢を立て直す。
どろりとしたものが頭から流れ出たのを感じた。確認しなくてもそれが血だと分かる。
だが、それを確かめることもなく私は全力疾走した。
ぞわりと私の背中に感じるプレッシャーが凶悪さを増す。
逃げられたことに苛立ちを感じているのか、ウァブーシュカが大

きく一つ吠えた。
（逃げられない！）
遠目で見ていた時には、何かしらこの化物から逃げ出す方法が見つかるに違いないという楽観的な考えがあった。
しかし、ウァブーシュカと言う存在は私が考えているよりも、はるかに規格外だと肌で感じて理解できた。
不浄の大地（ディス・エンガッド）の大地につき立つ岩肌が崩れる音が断続的に響く。
ちらりと背後に視線を送れば、地面に体を埋めて大地を喰らいながら追いかけてくるウァブーシュカが目に入る。
その様は正に悪夢。私の中には恐怖しか存在しなくなった。
それももう私から数百メートルも離れていない。
このままいけば、あっという間に地面と共に私は赤子共々、ウァブーシュカのあのブラックホールの如き体の中に喰われる。
「はあっ…はあ…」
死ぬほどの全力疾走に筋肉と肺が苦痛を訴える。
それでも足を止める訳にはいかなかった。
ただただ恐怖に突き動かされて必死で逃げる逃げる逃げる…ふと、そういえばこんなことが前にもあったと脳裏に過る。

『良かった！怪我はなさそうだね、ヒロちゃん！』

酸素が足りなくて朦朧とする頭にそんな懐かしい声が響く。
そういえば、まだただの何も知らずにエヴァと旅していた時も怪物豚に追いかけられてこんな風に全力疾走で逃げていた。
ただの人間だろうが、世界の楔なんて大層な存在になろうが、私という存在に進歩はないのだと思わず笑みが浮かんだ。いや、苦しすぎて多分表情は笑みにはならず、見苦しい顔になったに違いない。
そう…私はいつだってみっともなく、それでもただ全力で生きているだけの小さな存在。
それが私。それでも私は――

「あっ！！」

飛び散る岩の大きな欠片が私の背中に直撃した。

痛みよりも、その勢いに全力疾走していた私のバランスがぐらりと揺らぎ、そのまま地面に倒れこむ。

赤子が傷つかぬように腕に囲みこみ転んで、転がった私は背中から倒れこんだ。

途端に目の前に広がるウァブーシュカの大きな口。

大きすぎるそれは私の視界いっぱいに広がって、もう口以外には何一つ存在しない。

きらきら光る外側と全く違う口の中は、まるでブラックホールのように真っ暗な闇が広がっていた。

その中に入ったら二度と外に出られない。

それを見た瞬間にそれを確信させる闇。全てを無に帰すための闇。

私はその闇の中に取り込まれることを確信した。

咄嗟に右手に嵌る指輪を赤子の小さな手に握らせて、口の中で呪文を小さくつぶやく。

赤子は血に濡れた指輪を抱いたまま、彼の大切な人の元へ戻り、私はその場にただ一人残った。

「――――これでいい。」

吐き出された独り言と共に、私は次の瞬間深い深い闇の中に溶け込んだ。

『お前は誰だ？』

気がついた時、私は白い空間にいた。

てっきり光一つない闇の中だと思っていた私はほんの少し拍子抜けする。

そう、ここはウァブーシュカの胎内。

『私はヒロ。』
そう言葉を発することはできたが、白い空間の中で私と言う体は存在しなくなっていた。
私は白い空間に溶け込んだまま、体を失い意識だけの存在になっているようだ。
それでも不思議と逃げ回っていた時の恐怖や焦りは湧いてこない。
『我の体の中でどうして個を保つ？我は全てに終わりを告げる者・ウァブーシュカ。我の中では人も神も全ての生物が無になる。』
『私は世界の楔になったことで、元々お前の一部だからじゃないか？』
体は無に帰されても、意識だけが私として残っていることがウァブーシュカには疑問らしい。
ウァブーシュカの胎内に取り込まれたことにより、私はウァブーシュカの意識を強く感じるようになったようだが、それはウァブーシュカも同じらしい。
しかし、それは彼？彼女？にとってはなじみない感覚らしく、彼（とりあえず彼にする）の戸惑いが強く感じられた。
『我とお前は違う。いや、そもそも我という個はどこにも存在しない。我はただ役割を遂げるためだけの存在であり。我という個も、お前という個も我の中には存在しない。そうであるのに、どうして我はお前と対話している？お前は我と対話している？』
『ああ、お前に自分を認識する個は本来なかったんだろう。ただ、灰色の魔力を喰らうだけの存在に個は必要ない。だが、世界の楔と繋がった時、お前は変わったんだよ。私の前の世界の楔、お前の中に誰かが存在した時、お前の中に『個』が生まれた。だからこそ、お前は世界の楔によって制御されるようになった。』
そう。だからこそ私もそれに賭けた。
最終手段だと思っていたけど、最終はこの化物の中に取り込まれてでもウァブーシュカの意識に干渉して、世界の終わりを止める。
うっかり喰われたところで、私と言う存在も消え果て、そもそも

ウァブーシュカという個すら存在しなかったら元も子もないのだが、まあ、こうして私の憶測は当たっていた訳だ。

だが、ウァブーシュカの方はそれで納得いかないらしい。

『我には世界を終わらせるという役割しか存在しない。そして、今はその時、我は誰にも制御されない。』

『我とか個とか…それは全部、相対する相手があって初めて存在する。一人だったら、自分の認識する言葉も、誰かと比較する言葉も必要ないからな。そもそも世界というのは常に相対する・相反する存在があってこそ成立している。生があるから死が存在し、死が存在するから生が存在する。どっちがなくては、どちからが存在する意味はない。死がなくては、生きるということに意味はなく。生という事実がなくては、死は意味をなくす。』

『意味が分からない。』

『分からなくてもいいさ。私が少しずつ教えてやる。』

『お前が？』

その声にはまるで迷い子のような気弱なニュアンスがあった。

どうも結局、私はこういう存在と共にある運命らしい。

それでもいいと思えた。

私がどれほど見苦しく生き恥をさらしながら生きてきたように、この世界全てにはそうやってでも生きていく権利がある。

それは決して誰かが勝手に終わらせるものじゃない。

生きている限り死が常に付きまとい、それは予期せぬ形で訪れることもあるだろう。

人はそれを運命と呼ぶかもしれない。仕方ないと諦めるのかもしれない。

それでも…生きている限り、それはその生者だけのものであり、生者と関係する者たちのものだ。

そして、私も…体がなくなろうが、ウァブーシュカに取り込まれようが、まだ私と言う個がある限り、それは決して生の終わりじゃない。

『ああ。だから、世界を壊すのはもうやめろ。この世界のことお前も知りたいだろう?』

自分でも軽すぎる言葉だと思ったが、内心では必死だった。

一歩間違えばウァブーシュカはこのまま大地を喰らい尽くすつもりなのは、取り込まれてすぐに理解していた。

『……』

『迷っている。それはお前に世界が知りたいという欲求がある証拠。それこそお前に個がある証。さあ、行こう。私にもお前が知っている世界を教えてくれ。私はもっともっと世界のことを知らなくてはならないからな。』

『どうしてだ?』

『世界を変えるためさ。』

そう言い切った自分に迷いはなかった。

異能者によって歪んだ世界、いや、異能者すらも歪められた世界。

この世界の成り立ちは絶対におかしい。

歪んでいても何でも叶えることができるこの世界を楽園だと呼ぶ者がいるかもしれない。

だったら、私はこの楽園に終焉を告げる者になる。

誰もが幸せだと思える世界、誰も犠牲にならない世界、それを造るのは永遠に不可能かもしれない。単なる絵空事なのかもしれない。

それでも願わなければ何も変わらない。想っているだけじゃ変わらない、言葉にするだけじゃ変わらない。

自分のために、仲間のために、世界のために、私は世界を変える。

そのために私はとりあえず『私を変える』ことから始めることにする。

自分のことで精一杯である自分、世界を知ろうとしなかった自分、…自分の嫌いな部分なんてありすぎて困るくらいだ。

とりあえず、そこから始めよう。

私と言う個から世界を変えるなんて、それはあまりに時間がかかることかもしれないけど、それでも自分を変えることを世界の全ての生きる者が始めた時、それはきっと大きなうねりになるに違いない。

第１６５話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　９

――約束しよう。必ずまた会うための約束を

＜ＳＩＤＥ　エヴァンシェッド＞

ヒロと世界の中心で別れた後、東方の楽園（サフィラ・アイリス）に戻った俺が目にしたのは想像よりもはるかに悪い状況だった。

傷ついた天使。泣き叫ぶ人間。その全てが灰色の魔力の暴走に逃げまどい混乱していた。

俺の存在に気がついた天使が何人も助けてくれと泣いて縋り、分かっている助けるからと告げても、彼らは服の裾を放さず、俺から離れようとしない。

それを俺の気配を察知して現れたサンタマリアが有無を言わせない態度で引き離し、その後俺たちを囲むように屈強な天空騎士団（アイッシュグランド）が囲んだ。

「エヴァンシェッド、無事でよかった。」

「状況は？」

サンタマリアが短く尋ねた俺の言葉に表情を歪めた。

「…見ての通り芳しくないわ。」

三大天使のうちサンタマリアとラインディルトはいるが、シェルシドラがいないことが気にかかる。彼の弟もいない。だが、今はその詳細を聞く余裕はない。

「灰色の魔力は俺が何とかする。お前たちは天使と…人間たちの避難を急げ。獣族にも応援を頼め。多分、協力してくれるはずだ。」

その言葉に皆が息をのむ気配が伝わった。

「それは…！」

「今は議論している暇もない！俺を天使の長だと…東方の楽園（サフィラ・アイリス）の主だと認めるのであれば、俺の意に従え！！！」

言い放った言葉はある意味、俺が今まで言えない言葉であった。

俺という存在は全て偽りによって造り上げられた。それに対して気にしないふりをしていても、どこかに罪悪感があったから、自分がこの大地の王であると言いきることに躊躇いがあった。

だが、ヒロが言ったんだ。

『お前は天使について、いや、この東方の楽園（サフィラ・アイリス）全ての責任を負っているんだ。』

だから、人間を守れと言った。その代り、自分は必ず世界を救うとヒロは約束してくれた。

ヒロの言うことを全て真に受けた訳じゃない。それでも彼の言葉に自分の中で何かが変わったことを感じた。

サンタマリアもラインディルトも何か言いたそうな気配があったが、俺の気迫に口を挟みにくかったようだ。沈黙したまま恐らく俺の命令を遂行すべく、一同はその場から散った。

俺は状況を把握すべく、灰色の魔力の気配を探りながらあたりを見回す。

この近辺の魔力はあらかた片づけたが、その気配はまだまだ存在している。

ただ、銀月の都（ウィンザード・シエラ）から湯水のように溢れていた気配はいつの間にか止まっている。

しかし、これまで放出され続けていた灰色の魔力はなくなることはなく、今も天使や人間の持つ魔力を吸収し増幅し続けようとしている。

このままでは源がなくなったとしても、増殖を続ける灰色の魔力はいつかこの世界を覆い尽くすだろう。

それを止めるのが俺のなすべきこと。この状況で少しでも被害を

少なくすることが、俺にしかできないこと。
意を決して俺は少しでも人気がない場所に一人で移動する。
その後、大きく息を吸って全知の杓杖（シェーバ・ミシェ）を大地に突き立てると、自分の中にあるありったけの魔力を放出した。
天を貫く柱のように魔力が立ち上る。
神に忌み嫌われた（ラーオディル・オヴァラ）子供が俺の中から完全にいなくなり、俺の魔力はかなり減った。
それでも他の天使よりも数段強いはずの魔力は、魔力を求め吸収することを本能とする灰色の魔力の格好の標的になることは間違いない。
まるで魔物のように天使や人間を襲っていた灰色の魔力の気配が、一斉に俺に向かってくるのを感じた。
ばらばらになっていた灰色の魔力が俺にだんだんと近づくにつれて、大きくなっていく。
それは気が付けば空を覆うほどの大きな壁、まるで津波のように俺に向かってくる。
覚悟してこの場に臨んではみたが、みっともないことに体が震えるのを感じた。
杖を握る手にも、大地を踏ん張る足に力を込めても震えは止まらない。
笑ってしまう。これで大地の王だといえるだろうか？
そんな俺の脳裏に先程別れたヒロの言葉が蘇る。
『お前が東方の楽園（サフィラ・アイリス）の主だというのならば、お前が全てを守れ。』
ヒロの容赦ない言葉に苦笑が浮かぶ。不思議と震えが小さくなった気がした。
神に忌み嫌われた（ラーオディル・オヴァラ）子供がこの身から完全にいなくなったはずなのに、なぜかヒロに対する慕わしさは消えない。
そのことを不思議だと思う一方で、当然とも思う。要は俺や子供

の魂はどう転がっても、ヒロという個になついてしまうのだ。
まあ、こうなってしまった以上、彼にはこれからも俺のために側にいてもらおう。…そんなことをこの絶体絶命な状況で考える。
どうみてもあれだけの魔力の全てを俺一人で止められるわけがないのは分かっている。
それでも何かしない訳にはいかないのだ。俺の命を賭したとしても、それを絶対だ。だから、逃げ出しそうに震える足に力を込めた…とそこに人の気配がして俺ははっとした。

「よう。お前にだけいい格好はさせないぞ。」

「獣王!!」
そこにいたのは画面越しでしか会話したことはなかったが、西方(シェ)の魔境(ストリア)の王である獣王グレイン・アッダ。
俺の要請に答えてこの戦いに軍を出してくれた人である。
彼はその名には相応しくない愛らしい姿のままで凶悪そうに笑った。
「俺は異能者と契約しているからな。お前ほどではないにしても、灰色の魔力を抑える力はある程度備わっている。協力するぞ。」
「これは私の役割です!!」
「だからってどう見てもお前一人にあの灰色の魔力が抑えられる訳がないだろう?あれの暴走が止められなければ、東方の楽園(サフィラ・アイリス)だけじゃない他の全ての大地も終わりだ。分かっているのか?」
そう言われては返す言葉もない。
押し黙った俺を見て、獣王はふんと俺から目をそらすと迫りくる灰色の魔力を見据えた。
その瞳に恐れは一切存在せず、むしろその表情には不敵な笑みすら浮かぶ。
獣族と言う種族が好戦的なことは知っていたが、この絶体絶命な場面ですらそれを楽しむ気配のある獣王に俺は尊敬を通り越して畏

怖すら感じた。
「まあ、この状況、奇跡でもおこらん限り俺もお前も死んじまうのは目に見えているからな…それに俺たちの死はそのまま大地に生きる者全ての死だ。ならば、それを止める、少しでも遅らせるのが王の役目だ。それが俺たちに世界を残してくれた者たちへの恩返しだ！」
それが誰にしたいしての言葉なのか、俺が知る由もない。
しかし、この獣王の言葉に俺は大地の王としての矜持を感じて奮い立つ。
近づく灰色の魔力の気配に嵐の様な暴風が吹き荒れ、びりびりとした強い力が肌を切り裂く。
杖を持つ手に力を込め、それでも俺はしっかりと目を見開いてその力に立ち向かおうとした…その瞬間だった。

ーーーカッ…！！と目がくらむほどの強い光が俺の視界を奪う。

「！？」
俺も獣王もなんの前兆もない事態に混乱する。
光は強かったが本当に一瞬のことで視界はすぐに戻る。だが、戻った視界に残る世界に俺は呆然とした。
「灰色の魔力が…ない？」
目前まで迫っていたはずの空を覆うほどの大きな魔力が一瞬にしてなくなっている。更にあたりの気配を探ってみるが、灰色の魔力の欠片も感じられない。
何が起こったのか全く分からず混乱していると、俺と同じ状況である獣王が叫んだ。
「おい！あれは？？」
その言葉にはっとして獣王が指さす方を見ると、遠方の空にきらきらと輝く物体が見えた。
それを見てすぐに俺の中で本能が告げる。

「ウァブーシュカ！！」

姿を見たのは初めてだが間違いない。

あれは罪人（アークヴェル）の巡礼地で感じた巨大な気配、灰色の魔力の存在を許さない番人。

だが、先日は灰色の魔力だけではなく、魔力があった世界全てを飲み飲んだ。

「…ウァブーシュカ？世界の破滅を告げる怪物か！！！だが、どういうことだ？あいつは世界の破滅どころか、灰色の魔力を消して世界を救ったぞ？」

そうなのだ。罪人（アークヴェル）の巡礼地の時は容赦なく、灰色の魔力が存在する世界を切り取るかのようにその全てを飲み込んだウァブーシュカのはずだが、今は灰色の魔力だけを消しただけで大地だけじゃない天使も人間も全てが助かっている。

何が起きた？それともこれから何かが起こるのか？

混乱する思考の中で、何故だか頭の中に静かな声がよみがえった。

『約束をしよう。』

「ヒロ？」

予感がした。

それを感じた瞬間に体から力が抜ける。

「おい！！」

獣王が突然座り込んだ俺に駆け寄る。

「ヒロが…」

「ヒロ？ヴォルツィッタの生まれ変わりか？そいつがどうした！？」

咆哮を上げるウァブーシュカはまるで何かに苦しんでいるように空をのたうち回る。

その中に俺はどんな姿になろうとも慕わしさが失われない魂の気

配が確かに存在する。

「ヒロが…ウァブーシュカの中にいる！！！」

彼がどうしてウァブーシュカの中にいるのかも。ウァブーシュカの中にいるのことで、あの怪物にどんな影響を与えているのかも分からない。

ただ、ヒロのおかげできっと世界は救われた…それは確信だった。だけど、その代償に世界はヒロを失った。

「約束したのに！！！」

吐き出した言葉にヒロは多分永遠に応えてはくれない。

『約束？』

世界の中心でそう言ってヒロは頷いた。

『そう…私はもう誰とも契約はしない。契約は絶対だが、何を得るために必ず何かを失わないといけない。失った何かに絶望する人が必ず存在し、それは次第に世界を歪にした。だから、私はもう契約はしないって決めたんだ。契約の力じゃなく、私は自分の力で約束を果たす。』

『ヒロの力？』

『ああ、あんたは私が約束を果たせるか信じられるか？』

契約は絶対だ。

対価を支払う代わりに願った事は必ず叶う。

だが、ヒロの言う約束は違う。約束には絶対はなく、勿論叶うかもしれないし、叶わない可能性だってある。

ヒロが言うとおり、ヒロの力を信じるしかない。

『この世界には要は信じる力が足りないんだと私は思う。信じられ

ないから、契約という絶対を求めたり、誰かと一つになって自分から離れられなくしたりしようとする。そうすれば確かに安心かもしれない…だけど、やっぱりそれはおかしいんだ。』

『でも、信じても裏切られたら？』

『裏切られることもあるだろう。それでも信じる強さを私は求めたい。だから、私はあんたと約束するよ。私は絶対にこの世界を大地を救ってみせる。だから、あんたも約束してくれ、天使だけじゃない。私の分まで人間を助けてくれるって。』

そこまで言われて、否と言えるはずがなかった。

『ああ、あとそれを返してくれ。』

そう言ってヒロが指さしたのは俺の右指にはまる指輪。

見ると何故だか血がべっとりとついていてぎょっとした。

『それはエヴァに貸してやっていたが、本当は私の親の形見なんだ。』

『だが、これは契約の証だからはずれないと思うが。』

この指輪は『ヒロを幸せにして』というエヴァとの契約の証であり、その契約を交わしてから外すことは叶わなかった。

『大丈夫だ。きっと外れるさ。』

半信半疑のまま言われたとおりに指輪に力を込めると、あっさりとそれは外れる。

その事実が意味することを考える前に、ヒロは俺の手から指輪を奪うと自分の指にそれを嵌めた。

『ありがとう。じゃあ、お互い健闘を祈る！』

そう言ってヒロは笑う。

それが俺が見たヒロの初めて笑顔。

そして、俺はそこまで回想してやっと気がつく。

ヒロは世界を救う約束をしてくれたが、生きて帰ってくるとは結局約束をしてくれなかった。

「ヒロォオオオ！！！！！」

名を呼んでも答えてくれないのは分かっている。

それでも灰色の魔力という脅威が消えた空に俺は叫ばずにはいられなかった。

俺の声に反応したのか定かではないが、上空で暴れていたウァブーシュカがこちらに向き直って大きな咆哮を一つ上げる。

声にならない音はあまりに大きく思わず耳を塞ぎ、発せられた息はまるで突風で俺は体が宙に浮いて吹っ飛ばされる。

それを何処にそんな力があるかは定かではないが、俺よりも小さくて細い獣王が掴んで引きとめた。

ウァブーシュカの咆哮はしばし続き、それが止むと怪物はそのまま上空へと飛んでいき、そのまま俺たちが感知できない世界に消えた。

…それが俺が最後に感じたヒロの気配だった。

第１６５話　楽園の終焉に歓喜の声を上げろ！　９（後書き）

やっと更新できました…後はエピローグを残すのみです。

エピローグ　最先の最果て

＜十年後　何処かで誰かたちの日常＞

東方の楽園（サフィラ・アイリス）の封印が解けて１０年という年月が流れた。
その後、不浄の大地（ディス・エンガッド）はその名の通り相変わらず生きるのにも精一杯なほど過酷な世界でしかないが、天使と人間の関係は大きな変化を遂げていた。
相容れた訳じゃない、許し合った訳じゃない。それでも、今はまだ誰かを傷つけるよりも、自分たちが生きるために精一杯だったことが、両者をとりあえずの一定の距離を保っての均衡状態を保たせている。
獣族が間に入ったことも事態の好転につながったのかもしれない。
今もまだ反発しあう小競り合いは続いているが、それでも二つの種族は手を取り合うことはなくても、とりあえず同じ大地で生きる存在としてあることにしたのである。
また、解放されたことにより今まで不通であった他の大地とも関わることとなった。
東西南北、それぞれの大地で十年前の事件は大きな衝撃を持って存在し、あれ以来、姿を見せない白き神に不気味な気配を感じている。
十年という年月間で全ての傷がいえる訳でも、与えられた苦痛が和らぐこともなかったけれど、それでも生き残った者たちは苦しくても痛くても悲しくても生き続けた。
そんな大地で今この時も生死の狭間で叫びを上げる命がある。

「もおおおっ、なんだっていうのよぉぉぉぉぉお！！！！」

娘は全力疾走していた。
その背後には体長１０メートルはあるかと思える巨大な豚が、娘を丸のみにせんとばかりに迫ってきている。
どこかで見たことのある場面。
それはこの世界ではありふれた情景。
それでも何故かとても懐かしいような、切なくなる既視感。
娘が後少しで豚に追いつかれようとする時に、銃声が一つ高く鳴り響く。豚は倒れ、娘はその死体に押しつぶされた。
「ぶぎゃっ」
年頃の娘にあるまじき声を上げた彼女に、人影が近づく。
「大丈夫か、クゥ？」
「これが大丈夫に見える訳？さっさと助けなさいよ、ルード！！！」
娘・クゥ…十年前に銀月の都（ウィンザード・シエラ）にいた少女は、変わらぬ面影を残したままそれでも、あの頃よりも少しだけ大人びた様子で、見下ろす青年に噛みついた。
青年は年の頃ならばクゥと変わらないか、少し年下だろうか？
男性の割には長い黒髪を一つに縛って、長い前髪の奥には切れ長の瞳が涼しげな美青年だ。
ただ、クゥを見下ろす顔はとても意地悪そうである。
「それが人に助けを求める態度か？」
「大体、あんたが怪物豚を刺激したせいで！！！」
「それはお前がどんくさいのが悪いんだろ？俺はさっさと逃げれたのに？」
「なんですって！！！」
豚に潰されたままのクゥと、それを見下ろしたままのルードの一見するとくだらなさすぎる喧嘩は続くかと思われたが、それは新たに現れた声によって止められた。
「二人とも喧嘩はそれくらいにしろ。」

その声に二人は揃って振り返る。

『ヒロ！！！！』

そう呼ばれたのは、十年前にヒロと呼ばれた人間とは似ても似つかない…いやそもそも人間ですらない生き物の姿。

ふよふよと宙に浮くまるで空飛ぶ魚の様な姿で、体長は３０センチほどだが体の全てを輝く鱗のようなもので覆われた姿は十年前に灰色の魔力と共に姿を消したあの怪物とよく似ていた。

二人はそれを戸惑いもなく『ヒロ』と呼んだ。

「ルードはさっさとクゥを助けてやれ。まったく、お前たちはいつまでたっても子供みたいに喧嘩ばかりで私は頭が痛いぞ。それと私の名前はヒロじゃないと何度言ったら理解する？」

鱗の色は光を反射する度に変わり、何色とも言えない色となる。

「もう！ヒロはヒロでしょ？」

クゥがルードに引っ張られながら頬を膨らませる。

「私の名前は『もう』【ヒロ】じゃない。【フィルアルエーネ】だ。」

「その名前が大そうすぎてクゥも俺もヒロって呼んでるんだろ？いいだろ？お前はヒロなんだ。ヒロと呼んで何が悪い。」

助け起こしたクゥを抱き寄せるルード。若い寄り添う二人は似合いの恋人同士だ…まあ、二人はそのあたりまだまだ無自覚だが。

ヒロ改めフィルアルエーネはその様子を目を細めて眩しそうに見守る。

「ヒロ…とは古い言葉で【何一つ持たない者】。両親がくれた名前だ。それは大切な名前だけど、その名前を持つ人間はもうこの世には何処にもいないさ。私は【フィルアルエーネ】…人でも天使でも何者でもない【新しい世界の鍵】だ。」

ヒロと呼ばれた人間はウァブーシュカと一つになり、新しい存在となった。

それは世界を壊すものでも、世界の楔でもない。本当の意味で世界の理から外れたこの世界とは相容れない存在。

それになった彼の、その声には後悔の気配が微塵も感じられない。

若い二人はその様子になんとも言えない表情を浮かべた。

「世界を変えるために…ヒ…フィルアルエーネは人ではなくなったの？世界とは相容れない者になって、それは貴方の幸せなの？辛くない？苦しくない？」

二人に向き合っていたフィルアルエーネはふいと背を向ける。

「…約束をしたからな。世界を変えるって」

ヒロとしての記憶の中で様々な人間が過る。

「さあ、行くぞ。世界を変えるためには私だけじゃダメなんだ。世界の記憶であるクゥと、新しき異能者たるルード…お前たちの力が必要だからな！！」

人間であった記憶を大切に胸にしまいこみながら、フィルアルエーネは不浄の大地（ディス・エンガッド）をひた進む。

「あっ！待ってよ！！！」

「何処に行くんだよ？」

その後に娘と青年は続く。

「十年の間に東方の楽園（サフィラ・アイリス）を汚染していた灰色の魔力は大体浄化できたからな。次は南を目指す。」

ひゅと、宙をまるで水の中にいるように泳ぐ。

「あてのない旅はもう終わりだ。さあ、約束を果たすために世界を変えるぞ！！」

絶望と悲劇の連鎖は未だに断ち切れることなく、それは世界を未だに歪なままにしている。

一匹と二人はそれを変えるためにこれから世界を変える旅に出る。

それはまるでお伽噺の様な淡い幻想なのかもしれない。だが、彼らの前に立ちはだかるのは途方もないほどに辛い旅路であることは

間違いない。
　それでも世界の理から外れた彼らの未来は恐らく誰にも見通すことはできないであろう…そんな物語の第一歩がようやく始まる。

第五部　最先にて最果てなる世界　完

エピローグ　最先の最果て（後書き）

【東方の天使　西方の旅人】これにて完結です。かれこれ3年以上の連載期間の間に様々なことがあり、物語も混乱、作者も混乱…ここまでお付き合い頂いた読者の皆様には本当にご迷惑をおかけしたのではないでしょうか？本当に最後まで読んでいただいた皆様には感謝の言葉以外出てまいりません。ありがとうございました。

長くなるにつれて張り巡らせた伏線は作者の思うように動いてくれなかったり、回収できない部分も多数あったり、色々な方から指摘されている誤字脱字にしても本当に反省しきりです。それでも勢いだけで書き続けた拙すぎる作品ではありますが、こうして一応は最後を迎えることができ作者もほっとしております。これから多分、時間はかかりますが色々と修正を加えていくつもりです。

本当にここまでお付き合い頂いてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3603c/

東方の天使　西方の旅人

2011年5月26日11時03分発行